パッション

New Covenant Publications International. Japanese

版権©2020. 国際新しい契約の出版物。

無断で複写転載することを禁じます。本書のいかなる部分も弊社の許諾なく検索システムへ保存したり、 電子データ、 紙媒体、または録音などの方法で複写・ 転送することを禁じます。

この文書は、国際著作権法によって保護されています。この文書のいかなる部分も、いかなる形式でも複製、配布、翻訳、または送信することはできません。 または、電子的または機械的、コピー、記録、または保存を含む任意の手段 あらゆる情報の保存および検索システム。

式や手段によって。ISBN：359-2-85933-609-1

データカタログ

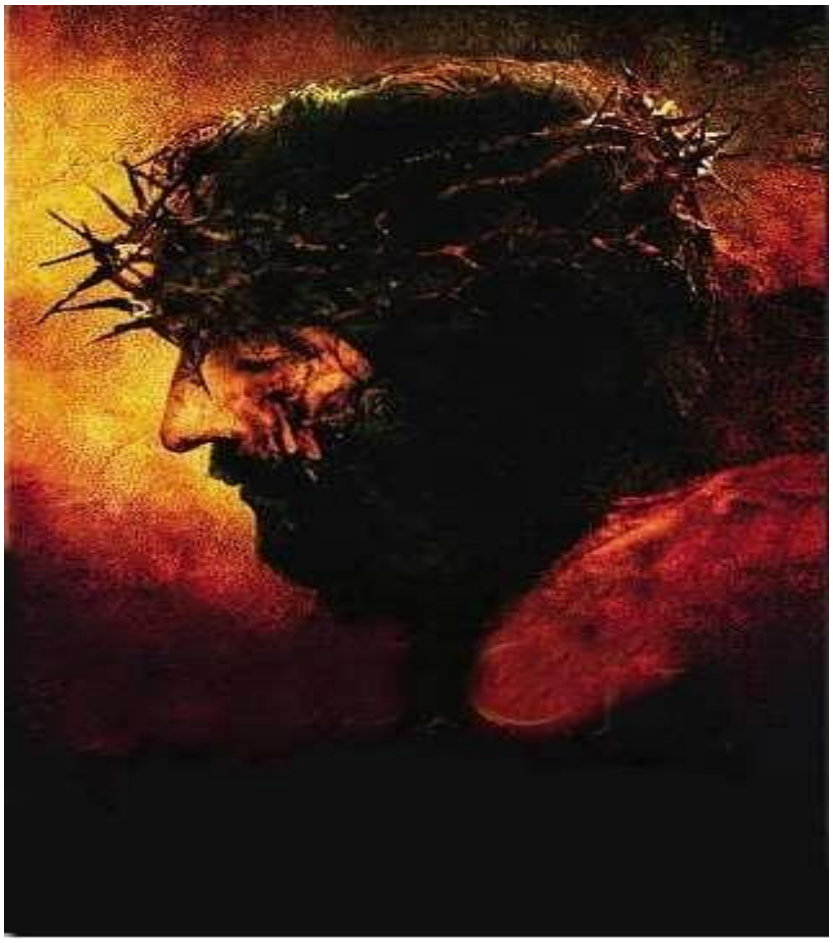
編集とデザイン：国際新しい契約の出版物。

イギリスで印刷。
初版 2020 年 5 月 26 日

New Covenant Publications International 発行
P.O. ボックス 7777-777
デボン、ロンドン、英国 234-543

ウェブサイトをご覧ください：www.newcovenant.co.uk

キリストのパッション



イエスは、堂々たる杉の木のように立って、激しく襲いかかる反対の嵐に耐えておられた頑固な意志や、悪意と狡猾さに満ちた心がイエスを混乱させ、圧倒しようとつとめてもむだだった。イエスは、神のみ子として天来の威厳をもって耐えられた。 ところが今イエスは、激しい嵐に打たれて折れた葦のようであった。 罪の重荷を負ってと超自然的な拷問を受ける ... 十字架につけられる幾百年も前に、... と書いてある 、「まことに、犬はわたしをめぐり、悪を行う者の群れがわたしを囲んで、わたしの手と足を刺し貫いた。わたしは自分の骨をことごとく数えることができる。彼らは目をとめて、わたしを見る。彼らは互にわたしの衣服を分け、わたしの着物をくじ引にする」 イエスが十字架にかかっておられると、敵どもはイエスに向かって怒りをぶちまけた。祭司たち、役人たち、律法学者たちは、群衆と一緒になって、瀕死の救い主を嘲笑した。本書はこう宣言する キリストの尊い愛、限りない生命、熱き情熱。

このページは意図的に空白になっています。

New Covenant Publications

International Inc.

改革ブック、変換された心は

Alt-Heerdt 104, 40549 Düsseldorf, Germany
Tel : +49 211 399 435 234

Email: newcovenantpublicationsintl@gmail.com

謝辞

この本を天の神にささげる

序文

新しい契約出版物国際は、天と地を結合し、愛の律法の永続性を強化する神の計画を読者に再接続します. ロゴ、契約の箱は、キリスト イエスと彼の人々と神の律法の中心性との間の親密さを表しています. 新しい契約とはこうだ - の書にあるとおりです" わたしは、わたしのおきてを彼らの心に刻みつける。そのため彼らは、わたしをあがめたいという気持ちになる。こうして、彼らは文字どおりわたしの民となり、わたしは彼らの神となる。" (エレミヤ書 31:31-33) 確かに、新しい契約は償還を証明し、衰えのない闘争によって生まれ、血によって封印されます.

数え切れないほどの世紀のために、多くは真実を消し去るために計算され、かじり苦悩と不可解な弾圧を耐えてきました.　特に暗黒時代に,この光は非常に四面楚歌と人間の伝統と人気の無知によって隠されていました,世界の住民は知恵を軽蔑し、契約を犯していたの　増殖する悪との妥協の疫病は、多くの人生が不当に犠牲にされ、良心の自由を放棄することを拒否した、放逸な退化と悪魔的な非人道的な惨状を引　それにもかかわらず、失われた知識は、特に改革の時に復活した.

16世紀の改革の時代は、反改革に反映されるように、真実、根本的な変化とその結果としての乱流の瞬間を巻き起こしました. しかし、この巻を通じて、改革者や他の勇敢な開拓者の視点から、この特異な革命の否定できない意義を再発見する. 彼らの説明から、荒廃した戦い、そのような驚異的な抵抗と超自然的な介入の根底にある理由を理解することができます.

私たちのモットー: "改革ブック、変換された心は、"重要な時代とその影響で構成される文学の明確なジャンルを、強調する. それはまた個人的な改革、再生および変形の緊急を共鳴させる. 翻訳の代理店によって結合されたグーテンベルク印刷機として、改革信仰の原則を広め、約500年前に、デジタル化されたプレスとオンラインメディア.

パッション

パッション

目次

第 1 章「神われらと共にいます」 9

第 2 章選民 17

第 3 章「時の満ちるに及んで」 21

第 4 章あなたがたのために救い主が 27

第 5 章献納 32

第 6 章わたしたちはその星を見た 40

第 7 章子供として 47

第 8 章過越のおまいり 54

第 9 章戦いの日々 62

第 10 章　荒野の声 71

第 11 章バプテスマ 82

第 12 章試み 87

第 13 章勝利 98

第 14 章「わたしたちはメシヤ（訳せば、キリスト）にいま出会った」 104

第 15 章婚宴の席で 114

第 16 章神の宮で 124

第 17 章ニコデモ 136

第 18 章「彼は必ず栄える」 146

第 19 章ヤコブの井戸で 151

第 20 章「あなたがたはしるしと奇跡を見ないかぎり」 164

第 21 章ベテスダとサンヒドリン..... 168
第 22 章ヨハネの投獄と死..... 183
第 23 章「神の国は近づいた」..... 196
第 24 章「この人は大工の子ではないか」..... 201
第 25 章海辺での召し..... 209
第 26 章　カペナウムで..... 214
第 27 章「きよめていただけるのですが」..... 224
第 28 章レビ・マタイ..... 235
第 29 章安息日..... 245
第 30 章 12 弟子の任命..... 253
第 31 章山上の垂訓..... 261
第 32 章　百卒長..... 278
第 33 章　わたしの兄弟とは、だれのことか..... 284
第 34 章　「わたしのもとにきなさい」..... 292
第 35 章　「静まれ、黙れ」..... 297
第 36 章　信仰のいやし..... 306
第 37 章　最初の伝道者たち..... 311
第 38 章　さあ、しばらく休みなさい..... 322
第 39 章　「あなたがたの手で食物をやりなさい」..... 328
第 40 章　湖上の一夜..... 336
第 41 章　ガリラヤにおける危機..... 343

第 42 章　言い伝え 358
第 43 章　打破された壁 363
第 44 章　真のしるし 369
第 45 章　十字架の前兆 376
第 46 章　変貌の山 387
第 47 章　奉仕 392
第 48 章　だれがいちばん偉いか 398
第 49 章仮庵かりいおの祭り 411
第 50 章　わなの間で 419
第 51 章　命の光 429
第 52 章　よい羊飼 444
第 53 章　ガリラヤからの最後の旅 452
第 54 章　よいサマリヤ人 463
第 55 章　見られるかたちでなく 471
第 56 章　子供たちを祝福される 476
第 57 章　「あなたに足りないことが 1 つある」 482
第 58 章　「ラザロよ、出てきなさい」 487
第 59 章　祭司たちの陰謀 501
第 60 章　新しいみ国の律法 507
第 61 章　ザアカイ 512
第 62 章　シモンの家での食事 517

第 63 章　「あなたの王がおいでになる」 529
第 64 章　滅ぶべき民 539
第 65 章　ふたたびきよめられた宮 546
第 66 章　論争 560
第 67 章　「パリサイ人たちよ。あなたがたは、わざわいである」 569
第 68 章　外庭で 581
第 69 章　オリブ山上で 588
第 70 章　「わたしの兄弟であるこれらの最も小さい者」 599
第 71 章　しもべの中のしもべ 605
第 72 章　「わたしを記念するため」 615
第 73 章　「あなたがたは心を騒がせないがよい」 625
第 74 章　ゲッセマネ 646
第 75 章　アンナスの前とカヤパの邸で 658
第 76 章　ユダ 675
第 77 章　ピラトの法廷で 683
第 78 章　カルバリー 703
第 79 章　「すべてが終った」 720
第 80 章　ヨセフの墓の中に 727
第 81 章　「主はよみがえられた」 738
第 82 章　「なぜ泣いているのか」 745
第 83 章　エマオへの道 752

第 84 章　「安かれ」..... 758

第 85 章　もう一度海辺で..... 765

第 86 章　行ってすべての国民に教えよ..... 774

第 87 章　「わたしの神またあなたがたの神であられるかたのみもとへ」 787

パッション

第 1 章「神われらと共にいます」

「その名はインマヌエルと呼ばれるであろう。神われらと共にいますという意味である」（マタイ 1：23）。「神の栄光を知る知識」は「イエス・キリストの顔」にみられる（Ⅱコリント 4：6）。永遠の昔から、主イエス・キリストは天父と一つであられた。キリストは、「神のみかたち」、神の偉大さと尊厳のみかたち、「神の栄光のかがやき」であられた。キリストがこの世にこられたのは、この栄光をあらわすためであった。神の愛の光をあらわすために、すなわち「われらと共にいます」神となるために、キリストは、罪のために暗くなったこの地上においでになった。だから、「その名はインマヌエルと呼ばれるであろう」とイエスについて預言された。

イエスは、われわれのうちに住むためにおいでになることによって、人類にも天使にも神を示されるのであった。イエスは神のみことば――きこえるようにされた神の思想であった。キリストは、弟子たちのための祈りの中に、「わたしは彼らにみ名を知らせました。……それは、あなたがわたしを愛して下さったその愛が彼らのうちにあり、またわたしも彼らのうちにおるためであります」と言っておられる（ヨハネ 17：26）。そのみ名は、「あわれみあり、恵みあり、怒ることおそく、いつくしみとまこと」を意味している（出エジプト 34：6）。だがこの啓示は、この地上に生まれた子らにだけ与えられたのではなかった。われわれの小さな世界は、宇宙の教科書である。神のすばらしい恵みの目的、すなわちあがないの愛の奥義は、「御使いたちも、うかがい見たいと願っている」テーマであって、それは永遠にわたって彼らの研究となるであろう（Ⅰペテロ 1：12）。あがなわれた者も、堕落しなかった者も、キリストの十字架に彼らの科学と彼らの歌を見いだすであろう。イエスのみ顔にかがやいている栄光は自己犠牲の愛の栄光であることがわかるであろう。

カルバリーの光に照らしてみて、おのれを捨てる愛の法則が天と地の生命の法則であること、「自分の利益を求め」ない愛はそのみなもとが神の心にあること、柔和で心のへりくだったお方のうちに、だれも近づくことのできない光のうちに住んでおられる神のご品性があらわれていることなどがわかるであろう（Ⅰコリント 13：5）。 この世の初めに、神はす

べての創造のみわざのうちにご自分をあらわされた。天をのべ、地の基をおかれたのはキリストであった。もろもろの世界を空間にかけ、野の花をよそおわれたのはキリストのみ手であった。神は「そのみ力によって、もろもろの山を堅く立たせられる」「海は主のもの、主はこれを作られた」（詩篇 65：6、95：5）。地を美しさでみたし、空中を歌でみたされたのはキリストであった。地と空中と空のすべてのものの上に、キリストは天父の愛のことばをお書きになった。

いまは罪のために神の完全なみわざが傷つけられているが、それでも神の筆跡は残っている。いまでもすべての被造物は、神の完全さについて栄光を告げている。人間の利己心よりほかには、自分だけのために生きているものは何もない。空中を飛ぶ鳥も、地上を動きまわる動物も、すべて何かほかの生命のために奉仕している。どんな森の木の葉もどんな小さな草の葉も、それぞれ奉仕している。どの木もどの植木もどの葉も、人間や動物が生存するのになくてはならない生命の要素を出している。そしてこんどは人間と動物が、木や植木や葉の生命に奉仕するのである。花はかおりを放ち、その美しさをあらわして世の人々の祝福となる。太陽は光を放ってもろもろの世界をよろこぼせる。海はすべての泉のみなもとであるとともにまたすべての土地の水の流れを受け入れるが、それは与えるために受けるのである。海面から立ちのぼる霧は、地から芽が出るように、土地をうるおすために雨となってくだる。

栄光の天使たちは、与えること――堕落してきよくない魂に愛としんぼうつよい見守り　を与えることによろこびを感ずる。天使たちは人々の心に愛をささや　く。彼らはこの暗い世に天の宮廷から光を持って来る。　やさしく忍耐強い奉仕によって、彼らは失われた魂を、彼ら自身が知ることができるよりももっと密接なキリストとの交わりに入らせるために、人の心に働きかける。

しかしこのような比較的小さな描写は別として、われわれは、イエスのうちに神を見るのである。イエスを見るとき、われわれは、与えることがわれらの神の栄光であることがわかる。「わたしは自分からは何もせず」、「生ける父がわたしをつかわされ、また、わたしが父によって生きている」。「わたしは自分の栄光を求めてはいない」。「自分をつかわさ

れた方の栄光を求める」とキリストは言われた（ヨハネ 8：28、6：57、8：50、7：18）。これらのことばの中に、宇宙の生命の法則である大原則が示されている。すべてのものをキリストは神からお受けになったが、彼は与えるためにお受けになったのである。天の宮廷ですべての被造物のために奉仕しておられる時もそうである。愛するみ子を通して、天父の生命はすべてのものに向かって流れ出る。み子を通して、それは賛美と喜びの奉仕のうちに、愛の潮流となって、すべてのものの根源である神へもどって行く。このようにキリストを通して愛の循環が完成され、それは偉大な賦与者であられる神のご品性――生命の法則を象徴している。

この法則が実に天において破られたのである。罪は利己心から起った。蔽（おお）うことをなす天使ルシファーが天の第 1 位を望んだ。彼は天使たちを支配し、彼らを創造主からひき離して、自分に忠誠を誓わせようと試みた。そこで彼は神について悪宣伝し、神にはいばりたいという野心があるのだと言った。彼は自分自身の邪悪な特徴を愛の神におしつけようとした。こうして彼は、天使たちをあざむいた。こうして彼は人類をだました。サタンは彼らに神のみことばを疑わせ、神の恵みを信じさせないようにした。神は正義と恐るべき威光の神であられるので、サタンは、神がゆるすことのないきびしい神であると彼らに考えさせた。こうして彼は人々をひっぱって神への反逆に加わらせ、わざわいの夜がこの世にやってきた。

神を曲解したために、この地上は暗くなった。暗黒の影を照し、世の人々を神に呼びもどすためには、サタンの欺瞞（ぎまん）的な力をうち破らねばならなかった。このことは、暴力によってなすことはできないのであった。暴力の行使は神の統治の原則に反する。神は愛の奉仕だけを望まれる。愛を命令することはできない。暴力や権威によって愛を手に入れることはできない。愛は愛によってのみ目覚めさせられる。神を知れば神を愛するようになる。神のご品性がサタンの品性と対照的に示されねばならない。この働きは全宇宙でただ 1 人のお方だけができた。神の愛の高さと深さとを知っておられるお方だけが、その愛を知らせることがおできになった。世の暗い夜に、義の太陽キリストが「翼には、いやす力をそなえて」昇られねばならない（マラキ 4：2）。

われわれをあがなう計画は、あとで考え出されたもの、すなわちアダムの堕落後に定められた計画ではなかった。それは、「長き世々にわたって、かくされていた奥義」のあらわれであった（ローマ 16：25）。それは永遠の昔から神の統治の根本となってきた原則のあらわれであった。初めから、神とキリストは、サタンの背信と、この反逆者の欺瞞的な力によって人類が堕落することとを知っておられた。神は罪が存在するように定められたのではなく、その存在を予見し、その恐るべき危機に応ずる備えをされたのであった。世に対する神の愛はまことに大きかったので、神は、「み子を信じるものがひとりも滅びないで、永遠の命を得る」ために、そのひとり子を与えることを約束された（ヨハネ 3：16）。

ルシファーは、「わたしは天にのぼり、わたしの王座を高く神の星の上におき……いと高き者のようになろう」と言った（イザヤ 14：13、14）。しかし「キリストは、神のかたちであられたが、神と等しくあることを固守すべき事とは思わず、かえっておのれをむなしうして、しもべのかたちをとり、人間の姿になられた」（ピリピ 2：6、7）。これは自発的な犠牲であった。イエスは天父のそばにとどまることもおできになった。イエスは天の栄光を保ち、天使からあがめられていることもおできになった。だがイエスは、暗黒のうちにある者に光を与え、滅びる者にいのちを与えるために、王権を天父のみ手にかえし、宇宙の王座からおりることを望まれた。

およそ 2000 年前に、「見よ、わたしはまいりました」という神秘的な意味のことばが、天で神のみ座から出るのがきかれた。「あなたは、いけにえやささげ物を望まれないで、わたしのために、からだを備えてくださった。……『神よ、わたしにつき、巻物の書物に書いてあるとおり、見よ、み旨を行うためにまいりました』」（ヘブル 10：5～7）。このことばのうちに、永遠の昔からかくされていたみこころの成就が告げられている。キリストは人の　肉体をとってこの地上においでになろうとしていた。彼は、「わたしのために、からだを備　えてくださった」と言われる（ヘブル　10：5）。もしキリストが世のある前から天父とともに持っておられた栄光のままおいでになったら、われわれはその臨在の光に耐えることがで　きなかった。われわれがその栄光を見て滅びることがないように、キリストの栄光のあらわ

れはおおわれた。キリストの神性は人性によっておおわれ、目に見えない栄光が目に見える人間の姿によっておおわれた。

この大いなるみこころは型と象徴とをとおして予表されていた。キリストがご自分をモーセにあらわされた時の燃えるしばは神をあらわした。神をあらわすためにえらばれた象徴は、見たところ何の美しさもないつまらないやぶだった。ここに無限の神が宿られた。憐れみに富まれる神は、モーセが見ても生きられるように、その栄光をごくつまらない象徴の中におおいかくされた。そのように神は、昼は雲の柱、夜は火の柱の中にあって、イスラエル人と語り、彼らにご自分のみこころを明らかにし、恵みをお与えになった。有限な人間の弱い目で見ることができるように、神の栄光がやわらげられ、その威光がおおわれた。このように、キリストは「わたしたちのいやしいからだ」、「人間の姿に」なってこの世においでになるのであった（ピリピ 3：21、2：7）。キリストは、世の人の目からみれば、慕うべき美しさをもっておられなかった。しかしキリストは、人の肉体をとられた神、天と地の光であった。キリストが、悲嘆にくれ、誘惑されている人間に近づくことができるように、その栄光はおおわれ、その偉大さと威光はかくされた。

神は、イスラエル人について、「彼らにわたしのために聖所を造らせなさい。わたしが彼らのうちに住むためである」とモーセに命じられた（出エジプト 25：8）。そして神は聖所の中に、すなわちご自分の民のまん中にお住みになった。イスラエル人が疲れはてて荒野をさまよい歩いていた間じゅう、神の臨在の象徴は彼らとともにあった。そのように、キリストはわれわれ人間の陣営のまん中にご自分の幕屋をお建てになった。キリストはわれわれのうちに住み、ご自分のきよい品性と生活とをわれわれにあらわすために、人間の天幕のそばにご自分の天幕を張られた。「ことばは肉体となり、わたしたちのうちに宿った。わたしたちはその栄光を見た。それは父のひとり子としての栄光であって、めぐみとまことに満ちていた」（ヨハネ 1：14）。

イエスがわれわれとともに住むためにおいでになったので、われわれは、神がわれわれの試練をよく知り、われわれの悲しみに同情してくださるということがわかる。アダムのむすこ娘はみな創造主が罪人の友であることをさとることができる。なぜなら、救い主の地上

生活にあらわされた恵みの教理の一つ一つに、喜びの約束の一つ一つに、愛の行為の一つ一つに、きよい美しさの一つ一つに、われわれは神がわれらとともにいますことをみとめるからである。 サタンは神の愛の律法を利己主義の律法であると言う。彼はわれわれがその戒めに従うことは不可能だと宣言する。人類の始祖アダムとエバが堕落してあらゆるわざわいが生じたことを、彼は創造主の責任にし、人々に神が罪と苦難と死の張本人であるかのように考えさせる。イエスはこの欺瞞をばくろされるのであった。イエスはわれわれ人間の 1 人として 服従の模範を示されるのであった。このためにイエスはみずから人間の性質をとり、われわれと同じ経験をされた。「イエスは……あらゆる点において兄弟たちと同じようにならねばならなかった」（ヘブル 2：17）。もしわれわれが、イエスの耐えられなかったことを耐えねばならないとしたら、サタンは、この点で、神の力はわれわれにとって十分ではないと言うだろう。そこでイエスは、「すべてのことについて、わたしたちと同じように試練に会われたのである」（ヘブル 4：15）。

イエスはわれわれの会うあらゆる試みに耐えられた。しかも彼はわれわれに自由に与えられていない力をご自分のためにお用いにならなかった。人間としてイエスは試みに会い、神から与えられた力で勝利された。「わが神よ、わたしはみこころを行うことを喜びます。あなたのおきてはわたしの心のうちにあります」と、主は言われる（詩篇 40：8）。イエスが、よい働きをし、サタンに苦しめられているすべての者をいやしながらお歩きになったとき、彼は神の律法の性格と神への奉仕の本質とを人々に明らかにされた。イエスの一生は、われわれもまた神の律法に従うことができることを証明している。

キリストはご自分の人性によって人類に接し、ご自分の神性によって神のみ座をとらえておられた。人の子としてイエスは服従の模範をわれわれに示された。神のみ子としてイエスは服従する力をわれわれに与えてくださる。ホレブ山のやぶの中から「わたしは、有って有る者。……イスラエルの人々にこう言いなさい、『「わたしは有る」というかたが、わたしをあなたがたのところへつかわされました。』」とモーセに語られたのはキリストであった（出エジプト　3：14）。これはイスラエルの救済についての保証であった。だからキリストは、「しもべのかたち」をとっておいでになったとき、ご自分を「わたしは有るという者」

として宣言された。ベツレヘムの子、柔和で心のへりくだった救い主は、「肉において現れ」た神であった。（Ｉテモテ　3：16）。イエスはまたわれわれにこう言われる、「わたしはよい羊飼いである」「わたしは生きたパンである」「わたしは道であり真理であり、命である」「わたしは天においても地においてもいっさいの権威を授けられた」（ヨハネ 10：11、6：51、14：6、マタイ 28：18）。わたしはすべての約束の保証である。わたしは実在する、恐れることはない。「神われらと共にいます」ということばは、われわれが罪から救われることについての保証であり、われわれが天の律法に従う力についての保証である。

身をひくくして人性をとることによって、キリストはサタンの品性と反対の品性をあらわされた。しかし主は屈辱の道をもっと低いところへくだられた。「おのれを低くして、死に至るまで、しかも十字架の死に当るまで従順であられた」（ピリピ 2：8）。大祭司が豪華な祭司服をぬいで、一般の祭司と同じ白い麻の衣を着て式をとり行うように、キリストはしもべのかたちをとり、みずから祭司となり、またみずからいけにえとなって、いけにえをささげられた。「彼はわれわれのとがのために傷つけられ、われわれの不義のために砕かれたのだ。彼はみずからこらしめをうけて、われわれに平安を与え」られた（イザヤ 53：5）。 当然キリストが受けられるべきとり扱いをわれわれが受けられるように、キリストはわれわれが当然受けるべきとり扱いを受けられた。われわれのものではなかったキリストの義によってわれわれが義とさねるように、キリストはご自分のものではなかったわれわれの罪の宣告を受けられた。キリストのものであるいのちをわれわれが受けられるように、キリストはわれわれのものである死を受けられた。「その打たれた傷によって、われわれはいやされたのだ」（イザヤ 53：5）。

キリストは、ご自分の生涯と死によって、罪のために生じた破滅から回復するよりももっと大きなことをなしとげられた。神と人とを永遠にひき離すことがサタンの目的であった。しかしキリストのうちにあるときに、われわれは堕落しなかった場合よりももっと密接に神につながるようになるのである。救い主は、われわれの性質をおとりになることによって、決してたちきれることのないきずなでご自分を人類にむすびつけら　れた。永遠にわたって、キリストはわれわれとつながっておられる。「神はそのひとり子を賜わったほどにこの世を

愛してくださった」（ヨハネ 3：16）。われわれの罪を負い、われわれのいけにえとして死ぬために、神はみ子をお与えになっただけではない。神はみ子を堕落した人類にお与えになったのである。神は不変の平和のはからいを保証するために、ご自分のひとり子を与えて人類家族の 1 人とならせ、永遠に人間の性質をみ子のうちに保たせられた。

これこそ神がご自分のみことばを成就される保証である。「ひとりのみどり子がわれわれのために生れた、ひとりの男の子がわれわれに与えられた。まつりごとはその肩にあり」（イザヤ 9：6）。神はみ子自身のうちに人間の性質をとり入れ、これを一番高い天にまで持ちつづけさせられた。神とともに宇宙のみ座を占めておられるのは「人の子」である。その名を「霊妙なる議士、大能の神、とこしえの父、平和の君」ととなえられるのは「人の子」である（イザヤ 9：6）。「有って有る者」は神と人類の間にあって、両方に手を置いておられる仲保者である。「聖にして、悪もけがれもなく、罪人とは区別され」るお方は、われわれを「兄弟と呼ぶことを恥じ」たまわない（ヘブル 7：26、2：11）。キリストのうちに、天の家族と地の家族が一つに結ばれている。栄光をお受けになったキリストは、われわれの兄弟である。天は人間のうちに宿り、人間は限りない愛の神の胸にいだかれている。

神はご自分の民について、「彼らは冠の玉のように、その地に輝く。そのさいわい、そのうるわしさはいかばかりであろう」と言われる（ゼカリヤ 9：16、17）。あがなわれた者が高められることは、神のいつくしみについて永遠のあかしとなる。神は、「キリスト·イエスにあってわたしたちに賜わった慈愛による神の恵みの絶大な富を、きたるべき世々に示」される。「天上にあるもろもろの支配や権威が、教会を通して、神の多種多様な知恵を知るに至るためであって、わたしたちの主キリスト・イエスにあって実現された神の永遠の目的にそうものである」（エペソ 2：7、3：10、11）。

キリストのあがないの働きによって神の統治の正しいことが証明される。全能者は愛の神として知らされる。サタンの非難は反ばくされ、その性格がばくろされる。反逆はふたたび起ることができない。罪は 2 度とこの宇宙にはいることができない。永遠にわたって、だれも背信の心配がない。愛の自己犠牲によって、天と地の住民は決してきれることのないきずなで創造主に結びつけられる。 あがないの働きは完成される。罪の充満していたところに

神の恵みがもっと充満する。サタンが自分の働き場所として主張していたこの地上そのものも、ただあがなわれるばかりでなく、また高められるのである。罪ののろいのために神の輝かしい創造における一つの汚点となっていたわれわれのこの小さな世界が、神の宇宙のどんな他世界にもまさってあがめられる。神のみ子が人のかたちをとり、栄光の王が生活し、苦難を受け、死なれたこの地上――ここに神が万物を新たにされる時、「神の幕屋が人とともにあり、神が人とともに住み、人は神の民となり、神みずから人とともにいま」すのである（黙示録 2：3）。そして永遠にわたって、あがなわれた者は、神の光の中を歩むとき、言いあらわしようのない神の賜物であられるインマヌエル――神われらと共にいます――につい　て神を賛美するのである。

第 2 章選民

1000 年以上もの間、ユダヤ民族は、救い主の来臨を待っていた。この出来事に彼らの最も輝かしい望みがかけられていた。歌に預言に、神殿の儀式に家庭の祈りに、彼らは救い主のみ名をあがめてきた。それなのに、キリストがおいでになったとき、彼らはキリストを知らなかった。天の愛されたお方は、彼らに は「かわいた土から出る根のよう」であった。彼には「見るべき姿」がなかった。彼らはキリストのうちに慕うべき美しさを見なかった（イザヤ　53：2）。「彼は自分のところにきたのに、自分の民は彼を受けいれなかった」（ヨハネ 1：11）。

しかし神はイスラエルをえらばれたのだった。神は人々の間に、神の律法について、また救い主をさし示している象徴と預言とについて知識を残すために、イスラエルを召されたのだった。神は、イスラエルが世に対して救いの井戸となるように望まれた。アブラハムがその滞在した土地で、ヨセフがエジプトで、ダニエルがバビロンの宮廷でそれぞれ果たした役割を、ヘブル人は諸国民の中で果たすのであった。彼らは人々に神をあらわすのであった。主は、アブラハムを召された時、「わたしはあなたを祝福し、……あなたは祝福の基となるであろう。……地のすべてのやからは、あなたによって祝福される」と言われた（創世 記 12：2、3）。この同じ教えが預言者たちを通してくりかえされた。イスラエルが戦争と捕囚のために荒廃したあとでさえも、「ヤコブの残れる者は多くの民の中にあること……主か らくだる露のごとく、青草の上に降る夕立のようである」との約束が彼らのものであった（ミカ 5：7）。エルサレムの神殿について、主はイザヤを通して「わが家はすべての民の祈りの家ととなえられる」と宣言された（イザヤ 56：7）。

だがイスラエル人は、彼らの望みを世俗的な偉大さにおいた。カナンの地に入った時から、彼らは神の戒めから離れ、異教徒の風習に従った。神が預言者たちを通して彼らに警告を送られてもむだだった。彼らは異教徒からの圧迫というこらしめを受けてもむだだった。改革のたびに、もっと深い背信がそのあとにつづいた。 イスラエルが神に忠実であったら、神は彼らに栄えとほまれとを与えることによって、みこころをなしとげることがおできにな

ったのである。もし彼らが服従の道を歩いたら、神は彼らに「ほまれと良き名と栄えとを与えて、主の造られたすべての国民にまさるものとされ」たのである。「そうすれば地のすべての民は皆あなたが主の名をもって唱えられるのを見てあなたをおそれるであろう」「彼らはこのもろもろの定めをきいて、『この大いなる国民は、まことに知恵あり、知識ある民である』と言うであろう」とモーセは言った（申命記 26：19、28：10、4：6）。しかしイスラエルが不忠実だったために、神のみこころはうちつづく逆境と屈辱とを通してのみ達成されるよりほかなかった。

イスラエルはバビロンに屈服し、異教徒の地に離散させられた。苦悩のうちにあって、多くの者が神の契約への忠誠を新たにした。彼らは柳の木にたてごとをかけて、荒れはてたままになっている聖なる宮のことを嘆き悲しんだが、一方また真理の光が彼らを通して照りわたり、神の知識が諸国民の間にひろがった。異教の犠牲制度は、神がお定めになった制度の悪用であった。異教の儀式を守っているまじめな多くの人々が、神のお定めになった儀式の意味をヘブル人から学び、信仰をもって、あがない主についての約束をとらえた。

流浪のユダヤ人の多くは迫害を受けた。安息日を無視したり異教の祭典を守ったりすることをこばんだために、生命を失った者が少なくなかった。偶像礼拝者たちが怒って真理を滅ぼそうとしたとき注はご自分のしもべを王たちや統治者たちに面会させ、彼らとその民が光を受けるようにされた。最も偉大な君主たちが、ヘブル人の捕虜たちがおがんでいる神の主権を宣言させられたことがたびたびあった。

イスラエル人は、バビロンにとらわれの身となったことによって、きざんだ像の礼拝が効果的になおった。その後何百年もの間、彼らは異教の敵の圧迫に苦しんだために、自分たちの繁栄は神の律法に従うことにかかっていることを固く確信するようになった。しかし民の多くは、愛にうながされて服従したのではなかった。その動機は利己的であった。彼らは国家的な偉大さに到達するための手段として、神に外面的な奉仕をささげた。彼らは世の光とならないで、偶像礼拝の誘惑からのがれるために世から離れた。 モーセを通して与えられた教えの中で、神はイスラエル人が偶像礼拝者とまじわることを制限されたが、この教えはまちがって解釈されていた。それはイスラエル人が異教徒の習慣に従わないようにするため

であった。ところがこの教えは、イスラエル人と他国民との間をへだてる壁をつくりあげるために用いられた。ユダヤ人はエルサレムを彼らの天とみなし、神が異邦人に恵みを示されはしないかと実際に嫉妬（しっと）した。 バビロンから帰ってからは、宗教的な教えに十分な注意が払われた。全国に会堂が建てられ、そこで祭司や律法学者たちが律法を講義した。また学校が設立され、そこは、文学や科学とともに、義の原則教えるところといわれた。だがこうした会堂も学校も堕落したものとなった。捕囚の間に、民の多くは異教的な思想と風習とを受け入れていたので、そうしたものが彼らの宗教的な行事にとり入れられた。多くのことにおいて、彼らは偶像礼拝者たちの習慣に従った。

ユダヤ人は、神から離れるにしたがって、儀式的な行事に教えられている意味を大部分見失った。その儀式はキリストご自身によって制定されたものだった。儀式のどの部分もキリストを象徴していて、生命力と霊的な美しさに満ちていた。ところがユダヤ人はその儀式から霊的生命を失い、そのむなしい形式を固守した。彼らはいけにえと儀式そのものにたよって、そこにさし示されているキリストにたよらなかった。祭司たちとラビたちは、彼らの失っていたものを補うために、彼ら自身の要求を増し加えた。こうして要求が厳格になればなるほど、神の愛のあらわれがますますみられなくなった。彼らは儀式の数が多ければ多いほど、それだけきよい者になれると思っていたが、その心は高慢と偽善に満たされていた。どんなにこまかく面倒な戒めをつくってみても、律法を守ることは不可能だった。神に仕えようと望む者やラビの戒めを守ろうとする者は、重荷の下に苦しんだ。彼らは不安な良心の責めに気持の休まることがなかった。こうしてサタンは民を落胆させ、神のご品性について彼らの観念を低下させ、イスラエルの信仰が軽蔑（けいべつ）されるようになるために働いた。彼は天で反逆した時に主張したこと、すなわち神の要求は不公平で従うことのできないものだという主張を立証しようと望んだ。イスラエルでさえ律法を守っていないと、彼は宣言した。

ユダヤ人はメシヤの来臨を望んでいながら、メシヤの使命について正しい観念を持っていなかった。彼らは罪からのあがないを求めずに、ローマ人から救われることを望んでいた。彼らは、メシヤが征服者としておいでになり、圧制者の権力を破り、イスラエルを世界帝国

の地位に高めてくださるのを待望した。こうして彼らが救い主をこばむ道が備えられた。 キリストがお生れになった時、ユダヤ国民は外国の支配者たちの統治にいらだち、内部の争いに苦しめられていた。ユダヤ人は別の政治形態を維持することをゆるされていた。しかしどんなことによっても、彼らがローマ人の支配下にあるという事実をかくすことも、あるいは彼らを権力の制限に甘んじさせることもできなかった。大祭司の任免権はローマ人の手ににぎられていて、この地位を獲得するためには詐欺、買収、あるいは殺人さえ行われた。こうして祭司職はますます堕落した。それでも祭司たちはなお強大な権力を持ち、彼らはその権力を利己的金銭的な目的のために利用した。民衆は祭司たちの無慈悲な要求のままになり、一方ローマ人からも重い税をかけられた。このような情勢のために、不満がひろがった。民衆の暴動がしきりに起った。貧（どん）欲と暴力、不信と霊的無感覚が国民の生命をむしばんでいた。

ユダヤ人は、ローマ人への憎悪と、国民的また霊的な誇りから、いぜんとして自分たちの礼拝形式を厳格に守っていた。祭司たちは宗教的儀式に細心の注意を払うことによって聖潔の評判を維持しようとした。民は暗黒と圧制のうちにあって、役人たちは権力への野心から、彼らの敵を征服しイスラエルに王国を回復されるお方の来臨を待ちこがれた。彼らは預言を調べたが、霊的な目を持たなかった。こ うして彼らは、キリストの初臨に伴う屈辱をさし示している聖句を見落して、キリスト再臨の栄光についていわれている聖句をまちがって適用した。高慢のために彼らの目はくもったのである。彼らは預言を自分たちの利己的な欲望にしたがって解釈した。

第 3 章「時の満ちるに及んで」

「時の満ちるに及んで、神はみ子を……おつかわしになった。それは、律法の下にあるものをあがない出すため、わたしたちに子たる身分を授けるためであった」（ガラテヤ 4：4、5）。　救い主の来臨はエデンで予告された。アダムとエバが初めてこの約束をきいた時、彼らはそれがすぐに成就されるものと期待した。彼らは最初に生まれたむすこをよろこんで歓　迎し、その子が救い主であるようにと望んだ。しかし約束の成就は遅れた。この約束を最初　に受けた人々はその実現をみないで死んだ。エノクの時代から、この約束は父祖たちと預言　者たちを通してくりかえされ、救い主来臨の望みを生かしつづけたが、それでも救い主はお　いでにならなかった。ダニエルの預言にメシヤ来臨の時期が示されたが、だれもがそのこと　ぼを正しく解釈したわけではなかった。1 世紀また 1 世紀と過ぎて行き、預言者たちの声はやんだ。圧制者の手はイスラエルに重く、多くの者は「日は延び、すべての幻はむなしくな　った」といまにも叫ぶばかりであった（エゼキエル 12：22）。

だが定められた広大な軌道にある星のように、神の目的は急ぐことも遅れることもない。大いなる暗黒とけむるかまどの象徴を通して、神はアブラハムに、イスラエルがエジプトで奴隷生活を送ることを示し、その滞在期間は 400 年であると宣言された。「その後かれらは多くの財産を携えて出てくるでしょう」と神は言われた（創世記 15：14）。このことばに対して、パロが誇りとする帝国は、全力をあげて戦ったがむだだった。神の約束に定められて　いた「その日に、主の全軍はエジプトの国を出た」（出エジプト 12：41）。同じように、天の会議では、キリスト来臨の時が決定されていた。時という大時計がその時間をさし示すと、イエスはベツレヘムにお生まれになった。

「時の満ちるに及んで、神はみ子を……おつかわしになった」（ガラテヤ 4：4）。摂理の神は、この世界に救い主来臨の機が熟するまで、国々の動きと、人間の衝動や影響力の流れとをみちびいておられた。国々は一つの政府の下に統合されていた。一つの国語が広く話され、いたるところで文学の言語としてみとめられていた。離散しているユダヤ人は年ごとの大祭のために全地からエルサレムに集まった。彼らは、その居留地へもどると、メシヤ

の来臨についてのおとずれを世界じゅうにひろめることができた。　そのころ、異教の制度はだんだん人々の信頼を失っていた。人々はきらびやかな外観や作り話に飽きていた。彼らは　心を満たすことのできる宗教を熱望した。真理の光は人々から離れてしまったようにみえた　が、その一方では光を求めている魂や、困惑と悲しみに満たされている魂があった。彼らは、生ける神についての知識、また死のかなたにあるいのちについて保証してくれる何ものかを　飢えかわくように求めていた。

ユダヤ人が神から離れた時、信仰は暗くなり、望みの光はほとんど前途を照らさなくなった。預言者たちのことばは理解されなかった。一般の民衆にとって、死は恐るべき神秘であり、死のかなたは不安と暗黒であった。幾世紀も昔に、預言者エレミヤにきこえた声、「叫び泣く大いなる悲しみの声がラマで聞えた。ラケルはその子らのためになげいた。子らがもはやいないので、慰められることさえ願わなかった」とあるその声は、ベツレヘムの母親たちの泣き叫ぶ声であったばかりでなく、人類の大きな心から出る叫びでもあった（マタイ　2：18）。人々は「死の地、死のかげ」に、慰められることもなくすわっていた（マ　タイ　4：16）。彼らは、救い主がおいでになって、暗黒がはらいのけられ、未来の神秘が明らかにされる時を、あこがれの目をもって待ち望んでいた。　ユダヤ国民以外にも、天来の教師の出現を予告した人々がいた。この人たちは真理を求めていたので、彼らに霊感のみたまがさずけられた。暗くなった空の星のように、このような教師たちが次々と現われていた。彼らの預言のことばは異邦人の世界の幾千の人々の心に望みの火をともしていた。

幾百年も前から、聖書は、当時ローマ帝国のいたるところで広く話されていたギリシャ語に翻訳されていた。ユダヤ人がいたるところにちらばっていたので、異邦人もある程度メシヤの来臨を期待していた。ユダヤ人が異教徒と呼んでいた人々の中には、メシヤについての聖書の預言をイスラエルの教師たちよりももっとよく理解している人たちがいた。彼らの中には、罪からの救済者としてメシヤの来臨を待ち望んでいる人たちがいた。哲学者たちは、ヘブライ制度の奥義の研究に努力した。しかしユダヤ人の偏狭さのために光が伝わるのがさまたげられた。彼らは、自分たちと他国民との間のへだてを維持することに熱心で、象徴的奉仕について彼らがまだ持っていた知識をわけ与えようとしなかった。真の解釈者がおいで

にならねばならない。これらのすべての型に予表されているお方が、それらの型の意義を説明されなければならない。

自然を通し、型と象徴とを通し、また父祖たちと預言者たちとを通して、神は世の人々に語っておられた。教訓は人間のことばで人間に与えられねばならない。契約の使者であられるキリストがお語りにならねばならない。彼の声が彼ご自身の宮できかれねばならない。キリストが、はっきりと明確に理解されることばを語るためにおいでにならねばならない。真理の創始者であられるキリストが、真理を力のないものにしていた人間のことばというもみがらの中から真理をとりわけたまわねばならない。神の統治とあがないの計画の原則が明示されねばならない。旧約の教えが十分に人々の前に示されねばならない。 しかしユダヤ人の中には、信念の固い人々、すなわち神の知識を保存してきたきよい家系の子孫がいた。これらの人々は、父祖たちに与えられた約束の望みについてまだ期待していた。彼らはモーセを通して、「主なる神は、わたしをお立てになったように、あなたがたの兄弟の中から、ひとりの預言者をお立てになるであろう。その預言者があなたがたに語ることには、ことごとく聞きしたがいなさい」と保証されたことばを心に思いめぐらして、その信仰を強めた（使徒行伝 3：22）。また彼らは、神が、「貧しい者に福音を宣べ伝え……心のいためる者をいやし、捕われ人に放免を告げ……主の恵みの年」を告げるお方にあぶらをそそがれるということを読んだ（イザヤ 61：1、2）。彼らは神が「道を地に確立する。海沿いの国々はその教を待ち望」み、異邦人は神の光にきたり、王たちは照りいでる神の光の輝きにくることを読んだ（イザヤ 42：4、60：3）。

ヤコブが死の床にあって、「つえはユダを離れず、立法者のつえはその足の間を離れることなく、シロの来る時までに及ぶであろう」と語ったことばが、彼らの心を望みで満たした（創世記 49：10）。イスラエルの衰えて行く勢力はメシヤの来臨が近づいている証拠だった。ダニエルの預言には、地上のすべての王国ののちにキリストが一つの王国を栄光のうちに統治されることがえがかれていた。そして、「この国は立って永遠にいたるのです」とダニエルは言った（ダニエル 2：44）。キリストの使命の本質を理解している人は少なかった

が、その一方では、イスラエルに王国をたて、救済者として諸国民にのぞまれる偉大な君に対する期待が一般にひろがっていた。

時は満ちていた。人類は罪とがの幾時代を経てますます堕落し、あがない主の来臨が必要であった。サタンは、天と地との間に越えることのできない深いみぞをつくるために働いてきた。彼は人々をだまして大胆に罪を犯させてきた。神の寛容を尽きさせ、人類に対する神の愛を失わせて、神がこの世をサタンの支配するままに見捨てられるようにしようとするのがサタンの目的であった。

サタンは人々から神の知識をしめ出し、人々の注意を神の宮からひき離し、彼自身の王国をうちたてようとしていた。主権をにぎろうとするサタンの戦いはほとんど完全に成功したようにみえていた。なるほど神は各時代にご自分の代理者を持っておられた。異教徒の中にさえ、キリストが人々を罪と堕落の中からひきあげるために働かれるのにそのうつわとなる人々がいた。しかしこれらの人々は、あざけられ、憎まれた。彼らの多くは非業の死をとげた。サタンが世に投げかけていた暗黒の影はますます深くなった。　異教制度を通して、サタンは長年の間人々を神からひき離してきた。だがサタンの勝ちとった大勝利は、イスラエ　ルの信仰を堕落させたことだった。異教徒は自分たちが考え出したものに心をよせ、そして　これをおがむことによって、神についての知識を失い、ますます堕落していた。イスラエル　もこれと同じだった。人は自らのわざによって自分自身を救うことができるという原則が異　教のすべての宗教の根底にあった。この原則がこんどはユダヤ人の宗教の原則となっていた。サタンがこの原則をうえつけたのであった。この原則を信じているところではどこでも、人　は罪に対する防壁がない。

救いのメッセージは人間のうつわを通して人々に伝えられる。だがユダヤ人は、永遠のいのちであるこの真理を独占しようとした。彼らは生きたマナをしまっておいたが、それは腐敗してしまった。彼らが自分たちの中にとじこめておこうとした宗教はつまずきとなった。彼らは神からその栄光を奪い、福音のにせもので世の人々をあざむいた。彼らは世の救いのために神に献身しようとしないで、世を滅ぼすサタンのうつわとなった。　神が真理の土台と柱にするために召された民はサタンの代表者となっていた。彼らは神のご品性について誤っ

た印象を与え、世の人々に神を暴君としてみさせるような行動をとって、サタンの望み通りに働いていた。宮で奉仕している祭司たちでさえ自分たちのとり行っている儀式の意義を見落していた。彼らは、象徴を通してそこに示されているものを見なくなっていた。いけにえの献（ささ）げ物をささげる時に、彼らは芝居の中の役者と同じだった。神ご自身がお定めになった儀式は心を盲目にし、感情をかたくなにする手段とされた。神はこのような方法を通してもうこれ以上人類のためにつくすことがおできにならなかった。制度全体が一掃されねばならない。

罪の欺瞞は絶頂に達していた。人々の魂を堕落させるあらゆる手段が実行されていた。神のみ子は、この世をながめて、苦難と不幸とをごらんになった。キリストは、人間がサタンの残酷な行為の犠牲となっているのを、憐れみをもってごらんになった。堕落し、殺され、失われつつある人々を、キリストは同情の思いをもってごらんになった。彼らのえらんだ支配者は彼らを捕虜としてくびきにつないだ。あざむかれ、途方に暮れながら、彼らは暗い行列をつくって永遠の滅亡――生きる望みのない死、朝のおとずれることのない夜へ向かって歩きつづけていた。悪霊が人間と一体となっていた。神の住居としてつくられた人間の体は悪霊の住居となっていた。人間の感覚、神経、欲望、器官は、超自然の力によって、最もいやしい情欲をほしいままにするために働かされた。悪霊の印そのものが人間の顔におされた。人間の顔は、その身を占領している大勢の悪霊の表情を反映した。世のあがない主がごらんになったのはこのような光景だった。限りなく純潔なお方の目に、それは何という光景だったことだろう。

罪は科学となり、悪徳は宗教の一部分として神聖なものにされていた。反逆は人間の心の奥深くくいこみ、人は天に向かってはげしい敵意をいだいていた。人間は神を離れては向上できないことが宇宙の前に実例として示された。世界をおつくりになったお方によって、生命と力の新しい要素がさずけられねばならなかった。 他世界は、主が立ちあがって地の住民を一掃されるのを見ようと、強い関心をもって見守っていた。もし神がそうなさったら、サタンは、天使たちの忠誠を自分に向けさせようとする計画を実行しようと待ちかまえていた。彼は神の統治の原則ではゆるすという ことが絶対にないと断言していた。もしこの世界

が滅ぼされたら、彼は自分の非難が事実であったと主張しただろう。彼は神を非難し、反逆を他世界にまでひろげようと待ちかまえていた。ところが神は、この世を滅ぼすどころか、かえってこの世を救うためにみ子をつかわされた。神にそむいた世界のいたるところに堕落と反抗がみられたが、その回復の道が備えられた。サタンがまさに勝利しようとするかのようにみえたその危機に、神のみ子が神の恵みという大使の印を帯びてこられた。どの時代にも、どの時間にも、神の愛は堕落した人類に向かってそそがれていた。人間の強情さにもかかわらず、たえず憐れみのしるしが示されていた。こうして時が満ちた時に、神は、救いの計画が達成されるまでさまたげられることも取り去られることもないいやしの恵みを、あふれるばかりに世にそそぐことによって栄えを受けられた。

サタンは、人間のうちにある神のみかたちをいやしいものにすることに成功したと狂喜していた。その時イエスが、人間のうちに創造主のみかたちを回復するためにおいでになったのである。罪のために堕落した品性を新しく形づくることができるのはキリストよりほかにない。主は人間の意思を支配していた悪霊を追い出すためにおいでになった。主はわれわれを塵（ちり）の中から起し、けがれた品性をご自分のきよい品性に型どってつくり直し、ご自身の栄光をもってそれを美しいものとするためにおいでになった。

第 4 章あなたがたのために救い主が

栄光の王キリストはいやしい身となって人性をおとりになった。地上における主の環境はみすぼらしくて、見込みがなかった。外観の威光が人をひきつける対象となることがないように、キリストの栄光はおおわれた。主は外面的な見せびらかしをいっさい避けられた。富や世俗的な栄誉や人間的な偉大さは決して魂を死から救うことができない。イエスは現世的な性質を持った引力によって人々をご自分の側にひきよせることがないようにと意図された。天の真理の美しさだけが、イエスに従おうと思う者をひきつけなければならない。メシヤの性格は長い間預言を通して予告されていたので、キリストは人々が神のみことばのあかしにもとづいてキリストを受け入れるようにお望みになった。 天使たちは、あがないのすばらしい計画に驚嘆した。彼らは人性という衣を着られたみ子を神の民がどのように受け入れるかを見ようとして見守っていた。天使たちは選民の地へやってきた。他の国々では作り話が教えられ、偽りの神々が礼拝されていた。神の栄光があらわされ、預言の光が輝いている国へ天使たちはきた。彼らはエルサレムへ、神のみことばの解説者として任命されている人々のもとへ、神の家に仕えている人々のもとへと、人目につかないでやってきた。すでに祭司のザカリヤには、彼が祭壇の前で奉仕していた時、キリストの来臨が間近に迫っていることが知らされていた。すでに先駆者が生まれ、その使命は、奇跡と預言とによって証明されていた。この先駆者が生まれたという知らせと、彼の使命のすばらしい意義が広く伝えられていた。しかしエルサレムは救い主を迎える備えをしていなかった。

天の使者たちは、神が聖なる真理の光を世に伝えるために召された民の無関心を驚いて見た。ユダヤ国民はキリストがアブラハムの後裔（こうえい）としてダビデの家系からお生まれになることの証人としてとっておかれたのであった。それなのに彼らはキリストの来臨が間近に迫っていることを知らなかった。宮では、朝夕のいけにえによって毎日神の子羊キリストがさし示されていた。しかしそこでさえキリストを迎える備えができていなかった。祭司たちも国民の教師たちも、各時代を通じて最大の事件がまさに起ころうとしていることを知らなかった。彼らは、無意味な祈りをとなえ、人々にみせるために礼拝の儀式をと り行っていたが、富と世俗的なほまれを求めることにばかりあくせくとしていて、メシヤの出現

に対する準備ができていなかった。同じような無関心がイスラエルの国じゅうにみなぎっていた。俗事に没頭している利己的な心は、全天を感動させているよろこびを感ずることができなかった。ほんのわずかな人たちだけが目に見えないお方にお目にかかるのを待ちこがれていた。この人たちのもとへ天の使者が送られた。

天使たちは、ヨセフとマリヤがナザレの家からダビデの町へ旅をしているのにつきそっている。ローマ帝国の広大な領土の民族を登録する法令がガリラヤの山間の住民たちにまで及んだ。昔イスラエル人の捕虜を解放するためにクロスが世界帝国の王位に召されたように、シーザー・オーガスタスは、イエスの母をベツレヘムに行かせることによって、神の御目的を成就する代理者とされる。マリヤはダビデの家系なので、ダビデの子はダビデの町で生まれねばならない。ベツレヘムから「イスラエルを治める者が……出る。その出るのは昔から、いにしえの日からである」と預言者は言った（ミカ 5：2）。しかしこのダビデ王の家系の町で、ヨセフとマリヤはみとめられもしなければ、とうとばれもしない。疲れはてて家もなく、彼らはその晩休むところを求めて、都の門から町の東端まで、せまい通りをむなしく歩きつ くす。満員の宿屋には彼らを泊める部屋がない。彼らはっいに動物を入れてあるそまつな小 屋の中に宿る場所を見いだし、ここで世の救い主がお生まれになる。

人々はそのことを知らないが、天はこの知らせを聞いてよろこびに満たされる。光の世界の天使たちは一層深くやさしい関心をもって地にひきつけられる。全世界はイエスがおいでになることによって輝きを増す。ベッレヘムの丘の上空には無数の天使の群れが集っている。彼らは喜びのおとずれを世に宣伝してもよいとの合図を待っている。もしイスラエルの指導者たちが義務に忠実だったら、イエスの誕生を布告する喜びにあずかることができたのである。しかしいま彼らは無視される。

神は「わたしは、かわいた地に水を注ぎ、干からびた地に流れをそそぎ」、「光は正しい者のために暗黒の中にもあらわれる」と宣言される（イザヤ 44：3、詩篇 112：4）。光を求めている者に、そしてそれをよろこんで受け入れる者に、神のみ座からの輝かしい光が照りかがやくのである。 ダビデがかつて羊の群れをつれて歩いた野で、羊飼たちはまだ夜の見張りをつづけていた。その静かな時間に、彼らは約束の救い主について語り合い、ダビデの

王座に王なるキリストがおいでになるように祈っていた。すると見よ、「主のみ使が現れ、主の栄光が彼らをめぐり照らしたので、彼らは非常に恐れた。み使は言った、『恐れるな。見よ、すべての民に与えられる大きな喜びを、あなたがたに伝える。きょうダビデの町に、あなたがたのために救い主がお生れになった。このかたこそ主なるキリストである』」（ルカ 2：9～11）。

このことばに、栄光の光景が、聞いている羊飼たちの心を満たす。イスラエルに救い主がおいでになったのだ。権力と栄誉と勝利が主の来臨に連想されている。しかし天使は、彼らが貧しさとはずかしめのうちにあられる救い主をみとめるように彼らを準備させねばならない。「あなたがたは、幼な子が布にくるまって飼葉おけの中に寝かしてあるのを見るであろう。それが、あなたがたに与えられるしるしである」と天使は言う（ルカ 2：12）。 天の使者は彼らの恐れを静めた。彼はどうしたらイエスに会えるかを教えた。人間の弱さに対する思いやりから、彼は羊飼たちが天来の輝く光になれるように間をおいた。それから歓喜と栄光はもうかくしきれなかった。平原全体が神の軍勢の輝く光に照らされた。地は静まり、天は低くたれて歌をきいた。

「いと高きところでは、神に栄光があるように、地の上では、み心にかなう人々に平和があるよりに」（ルカ 2：14） ああ、今日、人類家族がその歌をみとめることがで きるよ うに。その時なされた布告、その時うたわれた歌の調べは、世の終りまで高まり、地のはて までひびき渡るのである。義の太陽キリストが、翼にいやしの力をそなえて昇られる時、そ の歌は、大水のひびきのように、「ハレルヤ、全能者にして主なるわれらの神は、王なる支 配者であられる」と声をあげる大群衆によってふたたびうたわれるのである（黙示録 19： 6）。 天使たちが姿を消すにつれて光はうすれ、夜の影がもう 1 度ベツレヘムの丘に落ちた。しかし人間の目がかつて見た最も輝かしい光景は羊飼たちの記憶に残った。「み使たちが彼 らをはなれて天に帰ったとき、羊飼たちは『さあ、ベツレヘムへ行って、主がお知らせ下さ ったその出来事を見てこようではないか』と、互に語り合った。そして急いで行って、マリ ヤとヨセフ、また飼葉おけに寝かしてある幼な子を捜しあてた」（ルカ 2：15、16）。

羊飼たちは、非常によろこんで出かけ、自分たちの見たり聞いたりしたことを告げ知らせた。「人々はみな、羊飼たちが話してくれたことを聞いて、不思議に思った。しかし、マリヤはこれらのことをことごとく心に留めて、思いめぐらしていた。羊飼たちは、見聞きしたことが何もかも自分たちに語られたとおりであったので、神をあがめ、またさんびしながら帰って行った」（ルカ 2：18～20）。 今日、天と地は、羊飼たちが天使たちの歌をきいた時よりも広いへだたりがあるのではない。人類はいまもなお、普通の職業についている普通の人たちが昼間天使たちと会い、ぶどう園と畑で天の使者たちと語った時と同じに、天の関心のまとである。人生の平凡な世渡りをしているわれわれにとって天は非常に近いことがある。天の宮廷からの天使たちは、神が命じられるままに動きまわる人たちの歩みにつきそりであろう。

ベツレヘムの物語はつきない話題である。その中に、深い「神の知恵と知識との富」がかくされている（ローマ 11：33）。天の王座をうまぶねと、敬いしたう天使たちを畜舎の動物たちととりかえられた救い主の犠牲にわれわれは驚くのである。この救い主の前に出ると、人間の誇りと自己満足が責められる。しかもこの犠牲は、救い主の驚くべきへりくだりのは　じまりにすぎなかった。アダムがエデンで罪を知らなかった時でさえ、神のみ子が人の性質　をおとりになることは無限の屈辱に近かった。ところがイエスは人類が 4000 年にわたる罪によって弱くなっていた時に人性をおとりになったのである。アダムのすべての子らと同じ　ように、イエスは遺伝という大法則の作用の結果をお受けになった。そのような結果がどう　いうものであるかは、イエスのこの世の先祖たちの歴史に示されている。主は、われわれの　苦悩と試みにあずかり、罪のない生活の模範をわれわれに示すために、このような遺伝をも　っておいでになったのである。

サタンは天にいた時、神の宮廷におけるキリストの地位のことでキリストを憎んでいた。彼は自分自身がその地位から退けられると、ますますキリストを憎んだ。彼は罪人である人類を救うことを誓われたお方を憎んだ。それでも神は、サタンが主権を主張しているこの世へ、み子イエスが人間の弱さを受けつぐ無力な赤ん坊としておいでになることをお許しにな

った。神はイエスが、すべての人と同じように人生の危険に会い、すべての人間と同じに失敗と永遠の損失をかけて戦われることをお許しになった。

人間の父親の心は自分の子供の上にそそがれる。彼は幼い子供の顔に見入り、人生の危険を思ってふるえる。彼は自分のかわいい子をサタンの力から守り、誘惑と戦いに会わせたくないと熱望する。神は、われわれの幼な子たちのために、人生の道を安全にするために、ご分のひとり子を、もっとはげしい戦いと、もっと恐ろしい危険に会わせるためにお与えになった。ここにこそ愛がある。ああ、もろもろの天よ、驚嘆せよ。ああ、地よ、おどろけ。

第 5 章献納

キリストがお生まれになって 40 日ばかりたつと、ヨセフとマリヤは、イエスを神にささげ、またいけにえをささげるために、イエスをエルサレムにつれて行った。このことはユダヤ人の律法に定めてあるのに従ったもので、キリストは、人間の身代りとして、こまかい点まで律法に従われねばならない。律法に従っているしるしとして、キリストはすでに割礼の式をお受けになっていた。 律法によれば、母親の献げ物として燔祭（はんさい）のために1才の小羊、罪祭のために若い家ばとまたは山ばとをささげるように要求されていた。しかしもし両親が貧しくて小羊をささげることができなければ、1 つがいの山ばともしくは 2 羽の若い家ばとを、1 羽は燔祭のために、1 羽は罪祭のためにささげても受け入れられることが律法に定められていた。

神にささげる献げ物は傷のないものでなければならなかった。こうした献げ物はキリストを表わしていた。このことからイエスご自身が肉体的に欠点のないお方であることが明らかである。キリストは、「きずも、しみもない小羊」であった（Ｉペテロ 1：19）。キリストのお体にはどんな欠点による傷もなく、その肉体は強く健康であった。そしてキリストは一生の間自然の法則に従った生活を送られた。霊的ばかりでなく肉体的にも、キリストは、神の法則に従うことによって神がすべての人間をこのようなものにしたいとご計画になったものの見本であられた。

長子を神にささげることは、最も古い時代から始まっていた。神は天の長子であられるキリストを罪人の救いのために与えると約束された。この賜物（たまもの）を認めるしるしとして、どの家庭においても、長男が神にささげられた。長男は、人々の中におけるキリストの代表者として、祭司職にささげられるのであった。　イスラエルがエジプトから救われた時、長子をささげることがふたたび命じられた。イスラエルの民がエジプト人の奴隷となっ　ていた時、神はモーセに、エジプトの王パロのところへ行ってこう言いなさいと命令された。
「『主はこう仰せられる。イスラエルはわたしの子、わたしの長子である。わたしはあなた

に言う。わたしの子を去らせて、わたしに仕えさせなさい。もし彼を去らせるのを拒むならば、わたしはあなたの子、あなたの長子を殺すであろう』と」（出エジプト 4：22、23）。

モーセはこのことばを伝えたが、高慢な王はこう答えた。「主とはいったい何者か。わたしがその声に聞き従ってイスラエルを去らせなければならないのか。わたしは主を知らない。またイスラエルを去らせはしない」（出エジプト 5：2）。神はご自分の民のためにしるしとふしぎとを通して働き、パロの上に恐るべき刑罰をお送りになった。ついに、滅びをもたらす天使が、エジプト人の中の長子と獣の初子（ういご）を殺すように命じられた。イスラエル人が救われるためには、殺した小羊の血を門口に塗るように命じられた。天使が死の使いにやってきた時、イスラエル人の家々を過ぎ去るように、どの家にも目印がつけられるのであった。

この刑罰をエジプトに送られてから、神はモーセにこう言われる。「イスラエルの人々のうちで、すべてのういご、すなわちすべてはじめに胎を開いたものを、人であれ、獣であれ、みな、わたしのために聖別しなければならない。それはわたしのものである。」「ういごはすべてわたしのものだからである。わたしは、エジプトの国において、すべてのういごを撃ち殺した日に、イスラエルのういごを、人も獣も、ことごとく聖別して、わたしに帰せしめた。彼らはわたしのものとなるであろう。わたしは主である」（出エジプト 13：2、民数記 3：13）。幕屋の奉仕が制定されてからは、神は、聖所で奉仕するために、全イスラエルの長子の代りにレビ族をお選びになった。しかし長子はやはり神のものとみなされ、あがないの金で買いもど されるのであった。

このように、長子をささげる律法は特に意義のあるものとされていた。それは神がイスラエルの民を救済されたふしぎなみわざの記念であると同時に、また神のひとり子イエスによってなしとげられるさらに大いなる救済を予表していた。門口に塗られた血によってイスラエルの長子が救われたように、キリストの血には世の人々を救う力がある。　だからキリストの献納には何という深い意味があったことだろう。だが祭司はそのヴェールの中まで見な　かった。彼はその奥にある神秘を読まなかった。幼子をささげることはよく見られる光景で　あった。来る日も来る日も、祭司は赤ん坊を神にささげるたびにあがないの金を受け取った。

毎日毎日、彼はこのきまりきった日課をくりかえし、両親が金持ちだとか身分が高いなどという何らかのしるしを見ること以外には、親や子供たちにほとんど注意を払わなかった。ヨセフとマリヤは貧しかった。彼らが子供をつれてきた時、祭司たちはそこにガリラヤ人のみなりをして最も粗末な服を着た 1 組の男女を見たにすぎなかった。彼らの様子には人の注意をひくようなものは何もなかった。彼らは貧しい階級の人々のために定められた献げ物しかささげなかった。

祭司は職務通りに式をとり行った。彼は子供を腕に受け取ると、その子を祭壇の前にさし出した。それからまた母親の手にもどして、長子の名簿に「イエス」という名前を書き入れた。赤ん坊を腕にだいていた時、彼はその子が天の大君、栄光の王であるなどとは思いもしなかった。祭司はこの赤ん坊が、モーセによって「主なる神は、わたしをお立てになったように、あなたがたの兄弟の中から、ひとりの預言者をお立てになるであろう。その預言者があなたがたに語ることには、ことごとく聞きしたがいなさい」と書かれていたお方であるとは思いもかけなかった（使徒行伝 3：22）。彼はこの赤ん坊こそモーセがその栄光を見たいと願ったお方であるとは、思いもしなかった。ところが、モーセより偉大なお方がこの祭司の腕にだかれておられたのである。祭司がこの子供の名前を名簿に記入した時、彼はユダヤ人の制度全体の土台であるお方の名前を書き入れていたのだった。その名はユダヤ人の制度を廃止する宣告となるのだった。いけにえと献げ物の制度はだんだん古くなっていたからである。型は本体に、影は実物にほとんど合っていた。

シカイナ（注・贖罪所のエホバの栄光）はすでに聖所からとり去られていたが、栄光はベツレヘムの幼子イエスのうちにおおいかくされ、その前に天使たちは頭をたれるのであった。何も知らないこの幼子は、約束の後裔で、エデンの門の最初の祭壇はこのお方をさしていた。この幼子こそ平和を与えるお方、シロであった。「われはありてある者なり」とモーセにご自身を宣告されたのはこのお方であった。雲と火の柱の中にあってイスラエルをみちびかれたのはこのお方であった。これこそ預言者たちが長い間預言してきたお方であった。彼は万国の民の願望であり、ダビデの祖先でありまた子孫であり、輝くあけの明星であった。イスラエルの名簿に書きこまれ、われわれの兄弟たることを宣告されたこの無力な小さな赤

ん坊の名前こそ、堕落した人類の望みであった。あがないの金を払ってもらったこの子供が、全世界の罪のためにあがないの金を払われるお方であった。彼は、「神の家を治める大いなる祭司」であり、「変らない祭司の務」の長であり、「高き所にいます大能者の右に、座につかれた」仲保者であった（ヘブル 10：21、7：24、1：3）。

霊的な事物は霊的に見わけられる。宮の中で、神のみ子は、ご自分がそのためにおいでになった働きのためにささげられた。祭司はイエスをほかの子供と同じようにみなした。彼は普通と変ったものを何も見たり感じたりしなかったが、み子をこの世にお与えになった神の行為はみとめられた。この機会は、キリストが認められないままに過ぎ去りはしなかった。「そのとき、エルサレムにシメオンという名の人がいた。この人は正しい信仰深い人で、イスラエルの慰められるのを待ち望んでいた。また聖霊が彼に宿っていた。そして主のつかわす救い主に会うまでは死 ぬことはないと、聖霊の示しを受けていた」（ルカ 2：25、26）。 シメオンが宮にはいってくると、彼はそこに長子を祭司の前にさし出している家族を見る。彼らの身なりは貧しさを物語っている。だがシメオンは聖霊のお告げがわかる。彼は神にささげられている幼子が、イスラエルの慰め主、長い間待ちこがれていたお方であるとの印象を強く受ける。驚いた祭司の目には、シメオンが狂喜した人間のように見える。

子供はマリヤの手にかえされていたが、彼はそれを自分の腕に受けとって神にささげる。すると彼の心にかつて経験したことのない歓喜がわき起こる。彼は幼子の救い主を天の方へ高く持ちあげて、「主よ、いまこそ、あなたはみ言葉のとおりにこの僕を安らかに去らせてくださいます。わたしの目が今あなたの救を見たのですから。この救はあなたが万民のまえにお備えになったもので、異邦人を照らす啓示の光、み民イスラエルの栄光であります」と言う（ルカ 2：29～32）。 預言の霊がこの神のしもべの上にくだった。ヨセフとマリヤが彼のことばをあやしみながら立っていると、シメオンは彼らを祝福し、マリヤに向かって、「ごらんなさい、この幼な子は、イスラエルの多くの人を倒れさせたり立ちあがらせたりするために、また反対を受けるしるしとして、定められています。――そしてあなた自身もつるぎで胸を刺し貫かれるでしょう。――それは多くの人の心にある思いが、現れるようになるためです」と言った（ルカ 2：34、35）。 女預言者アンナもはいってきて、キリストにつ

いてシメオンのあかしを確認した。シメオンが語ると、アンナの顔は神の栄光に輝き、彼女は主なるキリストを見ることがゆるされたことに心から感謝のことばを出した。

こうした謙虚な礼拝者たちが預言を研究していたことはむだではなかった。だがイスラエルの役人や祭司として地位を占めていた人たちは、同じように預言のとうといことばを目の前にしながら、主の道に歩まず、その目はいのちの光であられるキリストを見るために開かれていなかった。 今も同じである。宗教界の指導者たち、神の家の礼拝者たちは、全天の注意が集中されている諸事件をみわけることができず、そのような事件が起こったことさえ気がつかない。人は歴史上のキリストを認めるが、生きておられるキリストからは離れ去っている。自己犠牲を呼びかけているみことばの中のキリスト、助けを訴えている貧しい人々や苦しんでいる人々の中におられるキリスト、貧しさと骨折りと恥を伴う義の働きの中におられるキリストは、1800 年前と同じように今もまた容易に人々に受け人れられないのである。

マリヤは、シメオンの深遠な預言を心に思いめぐらした。自分の腕にだかれている子供をながめ、ベツレヘムの羊飼たちが語ったことばを心に思い浮べて、マリヤは感謝の喜びと輝かしい望みに満たされた。シメオンのことばは彼女の心にイザヤが預言したことばを思い起こさせた。「エッサイの株から 1 つの芽が出、その根から 1 つの若枝が生えて実を結び、その上に主の霊がとどまる。これは知恵と悟りの霊深慮と才能の霊、主を知る知識と主を恐れる霊である。……正義はその腰の帯となり、忠信はその身の帯となる」「暗やみの中に歩んでいた民は大いなる光を見た。暗黒の地に住んでいた人々の上に光が照った。……ひとりのみどりごがわれわれのために生れた。ひとりの男の子がわれわれに与えられたまつりごとはその肩にあり、その名は、『霊妙なる議士、大能の神、とこしえの父、平和の君』ととなえられる」（イザヤ 11：1～5、9：2～6）。 しかし、マリヤはキリストの使命を理解しなかった。シメオンは、キリストのことをイスラエルの栄光であるばかりでなく、異邦人を照す光であると預言した。同じように天使たちは救い主の誕生を全人類へのよろこびのおとずれとして告げ知らせた。神はメシヤの働きについてユダヤ人の狭い考え方を直そうとしておられた。神は、人々がキリストをイスラエルの救済者としてばかりでなく、また世のあがない

主として見るように望まれた。だがイエスの母マリヤでさえイ エスの使命を理解するのに長年かからねばならない。

マリヤは、メシヤがダビデの位にあって統治されるのを待ち望んだが、それが苦難のバプテスマによって獲得されなければならないことには気がつかなかった。メシヤがこの世で歩まれる道は平坦（へいたん）な道ではないことが、シメオンを通して明らかにされている。「あなた自身もつるぎで胸を刺し貫かれるでしょう」とマリヤに言われたことばの中に、やさしい憐れみのある神は、イエスの母の苦悩を暗示されたが、彼女はイエスのためにすでにその苦悩を負い始めていた（ルカ 2：35）。 シメオンは、「ごらんなさい。この幼な子は、イスラエルの多くの人々を倒れさせたり立ちあがらせたりするために、また反対を受けるしるしとして、定められています」と言った（ルカ 2：34）。もう 1 度立ちあがりたい者は倒れねばならない。キリストのうちにあって高められるには、その前に岩なるキリストの上に落ちてくだかれねばならない。霊的王国の栄光を知りたければ自我を心の王座から退け、高慢な心がへりくだらねばならない。ユダヤ人は、屈辱を通して到達される栄光を受け入れようとしなかった。したがって、彼らは彼らの救い主を受け入れようとしなかった。彼は、「反対を受けるしるし」であった（ルカ 2：34）。

「多くの人の心にある思いが現れるようになるためです」（ルカ 2：35）。救い主の生涯の光の中には、飼造主から暗黒の君にいたるまで、すべての人の心があらわされている。 サタンは神のことを、利己的で圧制的なお方、すべてを要求されるが、何一つお与えになら ないお方、自分自身の栄誉のために被造物の奉仕を要求されるお方、被造物のために何の犠 牲協わないお方であるなどと言いふらしてきた。だがキリストという賜物が天父のみこころ をあらわしている。それが証拠は、われわれに対する神のみこころが「わざわいを与えよう というのではなく、平安を与えよう」との思いに示される（エレミヤ 29：11）。それは神が罪を憎まれることは死のように強く、罪人に対する神の愛は死よりも強いことを宣言してい る。神は、われわれのあがないを引き受けられたからには、その働きの完成に必要なものは、それがどんなに大事なものであろうと、何一つ惜しまれないのである。われわれの救いに必 要な真理は何一つ与えられないものはなく、どんな恵みの奇跡もおろそかにされず、どんな

天来の方法も用いられないものはない。恵みに恵みが、賜物に賜物が加えられる。神が救おうとしておられる人々のために天の倉庫は全部開かれている。神は宇宙の富を集め、無限な力のみなもとを開いて、それらを全部キリストの手にお与えになり、これは全部人類のためだと言われる。天にも地にもわたしの愛より大きな愛はないことを人々にわからせるためにこれらの賜物を用いなさい。人の最大の幸福は、わたしを愛することにあるのだ。

カルバリーの十字架に、愛と利己心が向かい合って立った。ここにこの両者の最高のあらわれがあった。キリストは慰め、祝福するためだけに生活された。ところがサタンはキリストを死なせることによって神に対する憎悪という悪意をあらわした。サタンは彼の反逆の真の目的が神をみ座から退けることと、神の愛を現わされたキリストを滅ぼすこととにあることを明らかにした。 キリストの一生と死によって人の思いもまた明るみに出た。飼葉おけから十字架にいたるまで、キリストの一生は克己への呼びかけであり、苦難を共にするようにとの呼びかけであった。それは人々の意図をあらわした。イエスは天の真理をもっておいでになったが、聖霊の声をきいていた者はみなキリストにひきつけられた。自我をおがんでいた者はサタンの王国に属した。キリストに対する態度を通してみな自分がどちらの側に立っているかをあらわした。このようにして人はみな自分で自分に宣告をくだすのである。

最後の審判の日に、失われた魂はみな自分が真理をこばんだことがどういうことであったかを悟る。十字架が示されると、罪とがのために心が盲目になっていた者がみな十字架の真の意義を悟る。神秘的な犠牲者イエスのカルバリーの光景を前にして、罪人は有罪の宣告を受ける。あらゆるいつわりの口 実は一掃される。人類の背信はその憎むべき性格のままにあらわされる。人々は自分たちの選択がどんなものであったかを知る。長年の争闘における真理と誤謬（こびゅう）の問題がその時明らかにされる。宇宙のさばきにおいて、神には罪の存在や罪の継続にすこしも責任のないことがわかる。神の律法は罪の幇助（ほうじょ）ではないことが実際に示される。神の統治には欠点がなく、不満の原因はなかった。すべての人の心の思いが明らかにされる時、神の忠実な者たちも反逆した者たちも声をそろえて、

「万民の王よ、あなたの道は正しく、かつ真実であります。主よ、あなたをおそれず、御名

をほめたたえない者が、ありましょうか。……あなたの正しいさばきが、あらわれるに至ったからであります」と宣言する（黙示録 15：3、4）。

第 6 章わたしたちはその星を見た

「イエスがヘロデ王の代に、ユダヤのベツレヘムでお生れになったとき、見よ、東からきた博士たちがエルサレムに着いて言った、『ユダヤ人の王としてお生れになったかたは、どこにおられますか。わたしたちは東の方でその星を見たので、そのかたを拝みにきました』」（マタイ 2：1、2）。 東の博士たちは哲学者であった。彼らは貴族を含む有力な大階級に属し、国民の富と学問の大部分を占めていた。これらの人々の中には民衆の信じやすい心につけこむ者が多かった。しかし自然界における神のしるしを調べ、その高潔さと知恵を尊敬されている人々もいた。イエスのところへやってきた博士たちはこの種類の人たちであった。

神の光はいつも異教の暗黒の中に輝いている。これらの東の博士たちが星空を調べ、星の光る道にかくされている神秘をさぐっていた時、彼らは創造主の栄光を見た。もっとはっきりした知識を求めて、彼らはヘブライの聖書を調べた。彼ら自身の国には、天来の教師が現われることを予告した預言者の書が秘蔵されていた。バラムは一時は神の預言者だったが、魔術士に属していた。聖霊によって彼はイスラエルの繁栄とメシヤの現われを預言したことがあって、その預言が言い伝えによって世紀から世紀へ伝えられていた。しかし旧約聖書の中には、救い主の来臨がもっとはっきり啓示されていた。博士たちは、キリストの来臨が近いことと、全世界が神の栄光についての知識で満たされることを知ってよろこんだ。

ベツレヘムの丘に神の栄光が満ちあふれたその夜、この博士たちは天に一つの神秘な光を見た。その光が消えると、一つの光り輝く星があらわれ、空にとどまった。それは恒星でも遊星でもなかったので、この現象は最も深い興味をそそった。この星は遠くに輝く一群の天使たちだったが、博士たちはそのことを知らなかった。 だが彼らは、その星が自分たちにとって特別な意味があるという感銘を受けた。彼らは祭司たちや哲学者たちの意見をきき、古代の記録の巻物を調べた。バラムの預言には、「ヤコブから 1 つの星が出、イスラエルから 1 本のつえがおこり」とあった（民数記 24：17）。このふしぎな星は約束されたお方の前ぶれとしてつかわされたのではないだろうか。博士たちは天来の真理の光をよろこんで受け

入れていたいまその光は一層明るい光で彼らを照らした。彼らは夢を通して、こんどお生まれになった君をさがしに行くようにとのお告げを受けた。

アブラハムが神の召しを受けて、「その行く所を知らないで」信仰によって出て行ったように（ヘブル 11：8）、またイスラエル人が信仰により雲の柱のあとについて約束の地へ行ったように、この異邦人たちは約束の救い主をみつけるために出かけて行った。東の国には宝がたくさんあったので、博士たちはからてでは出発しなかった。王子たちや身分の高い人た ちに敬意を表わす行為として贈り物をささげるのが習慣だったので、地上の全人類の祝福となってくださるお方にささげる贈り物として、彼らは国にある最高の贈り物をたずさえて行った。星を目当てに行くには夜間に旅をしなければならなかった。だが旅人たちは、さがし求めているお方についての言い伝えや預言のことばをくりかえして時間をまぎらした。休息のために立ちどまるたびに、彼らは預言を調べた。すると、自分たちは神に導かれているのだという確信が強くなった。彼らの前には外面的なしるしとして星があったが、同時にまた聖霊による内面的な証拠が与えられ、それが彼らの心に語り、望みを起こさせるのだった。旅は長かったが、彼らにとって楽しい旅であった。

博士たちは、イスラエルの国に到着し、エルサレムを見おろしながらオリブ山をくだっている。するとその時、見よ、疲れた旅路をずっとみちびいてきた星が宮の上にとまり、しばらくすると、彼らの視界から消える。彼らは、人々がみなメシヤの誕生を口々に語り合ってよろこんでいるにちがいないと確信して、元気な足どりで進んで行く。だが彼らの質問はむだである。聖都に入ると、彼らは宮へ行く。驚いたことに、生まれたばかりの王について知っているらしい者は 1 人もいない。彼らにたずねられて人々の顔にはよろこびの色が浮かないで、むしろ驚きと恐れがみられ、軽蔑さえまじっていないとはいえない。 祭司たちは言い伝えをくりかえしている。彼らは自分たちの宗教と自分自身の敬虔さを称賛するが、その一方ではギリシャ人やローマ人を異教徒として攻撃し、また誰よりも罪人を責める。博士たちは偶像礼拝者ではなく、神の御目には、神の礼拝者であることを自称しているこれらの人たちよりもずっと高い立場にあるが、ユダヤ人からは異教徒としてみられている。神のみこ

とぼの保護者として任命されている人たちの中にあってさえ、博士たちの熱心な質問は共感をよび起こさない。

博士たちの到着はたちまちエルサレムじゅうに言いふらされた。彼らのふしぎな使命は民衆の間にさわぎをひき起こし、それはヘロデ王の宮殿の中にまで伝わった。ずるいエドム人であるヘロデは、競争者があらわれるかもしれないという暗示に感情を刺激された。彼の王位への道は、かぞえきれない殺人の血にそまっていた。異なった人種の由血をひいていたために、彼は統治している人民から憎まれていた。彼の唯一の安全保障はローマのひいきであった。しかしこの新しい君は、ヘロデよりも高い権利を持っておられた。彼はこの王国を継ぐ者としてお生まれになったのである。 ヘロデは、祭司たちがこの旅人たちとはかりごとをめぐらして、民衆の暴動をひき起し、自分を王位から追い出そうとしているのではないかと疑った。しかし彼は、もっとすぐれた巧妙さで彼らのくわだての裏をかいてやろうと決心し、彼らに対する疑惑をかくした。彼は祭司長たちと律法学者たちとを召し集めると、メシヤ生誕の場所について聖書には何と教えられているかとたずねた。

王位を奪った者の口から、しかも旅人たちの願いによってなされたこの質問は、ユダヤの教師たちの誇りを傷つけた。預言の書に対する彼らの無関心な態度はこのねたみ深い暴君を怒らせた。王は彼らがその問題について知っているのをかくそうとしているのだと思った。王はあえて無視できないような権威をもって、彼らの期待している王の生誕地をよく調べて返答するように命じた。「彼らは王に言った、『それはユダヤのベツレヘムです。預言者がこうしるしています、 「ユダの地、ベツレヘムよ、 おまえはユダの君たちの中で、 決して最も小さいものではない。 おまえの中からひとりの君が出て、 わが民イスラエルの牧者となるであろう」』」

そこで、高慢とねたみのために、光に対してとびらがとざされた。羊飼たちと博士たちによって伝えられたうわさがもし信用されたら、祭司たちとラビたちの立場ははなはだおもしろくないものになり、自分たちが神の真理の解説者であるという彼らの主張はくつがえされることになる。この学識のある教師たちは、自分たちが異教徒と呼んでいる人々の前に身を低くして教えを受けようとはしなかった。神が自分たちをみすごして、無知な羊飼たちや

割礼を受けていない異邦人たちにお知らせになるはずがないと、彼らは言った。彼らはヘロデ王やエルサレムじゅうをわきたたせているうわさに軽蔑を示そうと決心した。彼らはそうしたことがほんとうかどうかを確かめるためにベツレヘムに行ってみようとさえしなかった。そしてイエスについての関心を狂信的な騒ぎだと人々に考えさせた。祭司たちとラビたちからキリストが捨てられることはここにはじまった。ここから彼らの高慢と頑迷さとが、救い主に対するかわらない憎しみへと発展していった。神が異邦人に門戸をお開きになっているのに、ユダヤ人の指導者たちは彼ら自身の門戸をとざしていた。

博士たちは彼らだけでエルサレムを出発した。町の門を出ると夜のとばりがおりてきたが、彼らはふたたびあの星をみつけて非常に喜び、ベツレヘムへみちびかれた。博士たちは、イエスのいやしい身分について羊飼たちが受けたような知らせを受けていなかった。長い旅ののちに、彼らはユダヤ人の指導者たちの無関心に失望し、エルサレムを出る時には町へ入ってきた時ほどの確信がなかった。ベツレヘムでは生まれたばかりの王を護衛するために置かれている親衛隊はみられなかった。世の高位高官の人たちは誰もつきそっていなかった。イエスは飼葉おけをゆりかごとしておられた。無教育ないなか者である両親が、イエスの唯一の保護者であった。これがほんとうに、「ヤコブのもろもろの部族をおこし、イスラエルのうちの残った者を帰らせる……もろもろの国びとの光となして、わが救いを地の果にまで いたらせよう」と書かれているお方だろうか（イザヤ 49：6）。

「（彼らは）家にはいって、母マリヤのそばにいる幼な子に会い、ひれ伏して拝」んだ（マタイ 2：11）。イエスのみすぼらしい身なりの下に、彼らは神の臨在をみとめた。彼らはイエスを救い主として愛し、それから「黄金・乳香・没薬（もつやく）」などの贈り物をさし出した（マタイ 2：11）。彼らの信仰は何というりっぱな信仰だったことだろう。のちにローマの百卒長に、「イスラエル人の中にも、これほどの信仰を見たことがない」と言われたことばは、この東の博士たちについても言えたであろう（マタイ 8：10）。 博士たちはイエスに対するヘロデの計略を見破っていなかった。旅の目的を果たすと、彼らはその成功をヘロデに知らせるつもりで、エルサレムへ引き返すしたくをした。ところが彼らは夢の中

でもうヘロデと連絡してはならないという神のお告げを受けた 彼らはエルサレムをさけて、別な道から自分たちの国へ向かって出発した。

同じようにヨセフは、マリヤと子供をつれてエジプトへのがれるようにとの警告を受けた。天使は、「あなたに知らせるまで、そこにとどまっていなさい。ヘロデが幼な子を捜し出して、殺そうとしている」と言った（マタイ 2：13）。ヨセフはすぐにそのことばに従い、もっと安全なところを求めて夜のあいだに旅立った。　博士たちを通して、神はユダヤ国民の注意をみ子の誕生に向けられたのだった。彼らがエルサレムでたずね、民衆の関心がそそら　れ、ヘロデのねたみまでひきおこし、否応なしに祭司たちとラビたちとの注意がよび起され、こうしたことのために人々の心は、メシヤに関する預言と、いま起こったばかりの大事件に　向けられた。　サタンは世から神の光をしめ出すことに力を尽し、救い主を滅ぼすためにあらゆる悪知恵を用いた。しかしまどろむことも眠ることもなさらない神は、いとし子イエスを　見守っておられた。イスラエルのために天からマナをふらせ、飢饉（ききん）の時にエリヤ　を養われた神は、マリヤとみ子イエスのために異教の土地に避難所をお備えになった。また　異教の国の博士たちの贈り物によって、神は、エジプトへの旅と異国における滞在の費用を　お与えになった。博士たちはあがない主を喜び迎えた最初の人々の仲間だった。

彼らの贈り物はイエスの足もとにささげられた最初の贈り物だった。その贈り物によって、彼らは何という尊い奉仕の特権をわがものとしたことだろう。神は愛の心から出た贈り物を喜んで尊び、神への奉仕にそれを最も効果的にお用いになる。心をイエスにささげたなら、われわれもまた贈り物をイエスのもとに持参するであろう。われわれの金も銀も、われわれのどんなに貴重なこの世の財産も、またわれわれの最高の知的霊的才能もみな、われわれを愛し、われわれのためにご自身をお与えになったイエスに惜しみなくささげられるであろう。　エルサレムではヘロデが博士たちの帰りをいらいらしながら待っていた。時がたっても彼らが現われないので、ヘロデは疑いを起こした。ラビたちがメシヤの生誕地を明示したがらなかったことは、彼らが自分の計画を見抜いていて、博士たちがわざと自分を避けた証拠のように思われた。そう思うと彼ははげしい怒りを感じた。計略は失敗したが、力に訴える方法が残っていた。彼はこの王となるべき子供を見せしめにしようと思った。君主を王座

につけようとすればどんな目に会わねばならないかを、この高慢なユダヤ人らに思い知らせねばならない。 2 才以下の子供を全部殺せという命令をもって、ただちに兵士たちがベツレヘムへつかわされた。ダビデの町の静かな家々に、600 年前預言者エレミヤに示された恐怖の光景がみられた。「叫び泣く大いなる悲しみの声がラマで聞えた。ラケルはその子らのためになげいた。子らがもはやいないので、慰められることさえ願わなかった」（マタイ 2:18）。

この災難はユダヤ人が自ら招いたものだった。もし彼らが神の前に忠実に、へりくだって歩んでいたら、神はヘロデ王の怒りを特殊な方法で彼らに害のないものとされたのである。だが彼らは罪のために神から離れ、唯一の守りである聖霊をこばんでいた。彼らは神のみこころに従いたいとの思いをもって聖書を学んでいなかった。彼らは、自分たちがえらい国民になるとか、神は自分たち以外の国民をみな軽んじておられるというふうに解釈されるような預言ばかりをさがしていた。メシヤが王として現われて、敵を征服し、怒りをもって異教徒をふみつけるということが彼らの自慢であった。 こうしてユダヤ人は統治者たちの憎しみを刺激していた。キリストの使命について誤った考えをユダヤ人にいだかせることによって、サタンは救い主の破滅をたくらんでいた。だがその目的はとげられず、破滅はかえってユダ ヤ人自身の頭上にはねかえってきた。

これはヘロデの治世を暗くした最後の残虐行為の一つであった。罪とがのない子供たちを殺害してまもなく、彼自身、だれも避けることのできない運命に屈伏させられた。彼は恐ろしい死に方をした。 ヨセフはまだエジプトにいたが、いま神の天使からイスラエルの国へ帰るように命じられた。イエスがダビデの王位の後継者であることを考えて、ヨセフはベツレヘムに家庭を持ちたいと望んだ。だがアケラオが父に代ってユダヤを治めていることを知って、彼はこの息子（むすこ）がキリストに対する父ヘロデの計略を実行しはすまいかと恐れた。ヘロデの息子たちの中で、アケラオが父親の性格に一番よく似ていた。彼が統治の位を継いだためにすでにエルサレムでは暴動がみられ、ローマの守備兵によって幾千のユダヤ人が殺害されていた。 ふたたびヨセフは安全な場所へみちびかれた。彼は以前の故郷であるナザレにもどり、ここにイエスはおよそ 30 年間お住みになった。「これは預言者たちによっ

て、『彼はナザレ人と呼ばれるであろう』と言われたことが、成就するためである」（マタイ 2：23）。ガリラヤはヘロデの息子の 1 人によって支配されていたが、ここにはユダヤよりももっと多くの外国人がまじって住んでいた。したがって、特にユダヤ人に関係のある問題については比較的関心が薄く、イエスの主張はそれほど権力者たちのねたみをひき起こしそうになかった。 救い主がこの世においでになった時、世はこのような迎え方をした。あがない主であられる幼な子には、休息や安全な場所はないようにみえた。神が人類の救いのために働きをつづけておられる時でさえ、神はいとし子を人間の手にまかせることがおできにならなかった。キリストがこの地上における使命を達成して、救うためにおいでになったその人々の手にかかってなくなられるまで、神は天使たちに命じてイエスにつきそわせ、イエスを守らせられた。

第 7 章子供として

イエスは少年時代と青年時代を小さな山村ですごされた。この地上のどんな場所もキリストがお住みになれば尊い所となるのであった。王の宮殿がイエスを客として迎える特権を持つこともできたであろう。だがイエスは金持ちの家庭や、王宮や、有名な学問の中心地をみすごして、入々にあなどられた片いなかのナザレを故郷とされた。

イエスの少年時代についての短い記録にはすばらしい意味がある。「幼な子は、ますます成長して強くなり、知恵に満ち、そして神の恵みがその上にあった」（ルカ 2：40）。イエスは、天父の愛情にはぐくまれて「ますます知恵が加わり、背たけも伸び、そして神と人から愛された」（ルカ 2：52）。イエスの知能は活発で鋭く、年令以上に思慮と知恵があった。しかしその品性は均整がとれて美しかった。心とからだの能力は、幼年時の法則に調和してだんだんに発達した。 子供としてイエスは、特にやさしい性質をあらわされた。彼はいつでも人に仕えるためによろこんで手をかされた。イエスは何ものにもさまたげられない忍耐力と、決して正直さを犠牲にするようなことのない真実さをあらわされた。主義においては岩のように固かったが、その生活には無我の親切心という美徳があらわれていた。

イエスの母は、深い関心をもってイエスの能力のあらわれを見守り、イエスの品性に完全の刻印を見た彼女は喜んで、このりこうなものわかりのよい頭脳を伸ばそうとした。彼女は、神だけをわが父と呼ぶことのできるこの子供の発達に、天と協力する知恵を、聖霊を通して受けた。

遠い昔の時代から、イスラエルの忠実な人々は、青少年の教育に非常な注意を払ってきた。主は、子供たちに、赤ん坊の時からでさえ、神の恵みと大いなる力について、特に神の律法にあらわされ、またイスフエルの歴史に示されている神の恵みと大いなる力について教えるように命じておられた。 歌と祈りと聖書の教訓が、成長する心に適用されるのであった。神の律法は神のご品性のあらわれであって、その律法の原則を心に受け入れる時に、心と塊には神のみかたちが書き写されるということを、父母たちは子供たちに教えるのであった。

教えの多くは口頭でなされたが、青年たちはヘブル語の書物を読むことも学び、旧約聖書の羊皮紙の巻物を開いて学んだ。

キリストの時代には、青少年の宗教教育のために方法を講じない町や市は、神にのろわれるものとみなされた。しかし教育は形式的になっていた。大部分言い伝えが聖書と入れ代っていた。真の教育は、青少年が「熱心に追い求めて捜しさえすれば、神を見い出せるように」することであった（使徒行伝 17：27）。ところがユダヤ人の教師たちは儀式のことにばかり注意を払った。学ぶ者にとって無価値で、天の上級学校ではみとめられないような材料で頭がいっぱいになった。神のみことばを個人的に受け入れることによって得られる経験は教育制度の中に立場を与えられていなかった。外面的なことのくりかえしにばかり没頭していて、学生たちは神とともに過ごす静かな時間がなかった。彼らは神のみ声が心に語りかけるのをきかなかった。彼らは知識を求めて、知恵のみなもとであられる神から離れた。神への奉仕にどうしてもなくてはならないものがかえりみられなかった。律法の原則はおおいかくされた。すぐれた教育と考えられたものが、真の発達にとって最も大きなさまたげとなった。ラビたちの教育の下にあって、青少年たちの能力は抑制された。彼らの頭は固く、狭くなった。 子供のイエスは会堂の学校で教えを受けられなかった。イエスの母が、イエスの最初の人間教師であった。彼女の口と預言者たちの巻物から、イエスは天の事物について学ばれた。イスラエルのためにご自身がモーセにお語りになったことばを、イエスはこんどは母のひざもとで教えられた。子供から青年へと成長された時も、イエスはラビの学校へは行かれなかった。イエスはこのような学校から得られる教育を必要とされなかった。なぜなら神がイエスの教師であられたからである。

救い主の公生涯の間にたずねられた質問、「この人は学問をしたこともないのに、どうして律法の知識をもっているのだろう」ということばは、イエスが読み書きがおできにならなかったということではなくて、ただラビの教育をお受けにならなかったということである（ヨハネ 7：15）。イエスは、われわれと同じようにして知識を得られたのだから、彼が聖書に精通しておられたということは、少年時代にどんなにまじめに神のみことばを学ばれたかを示している。イエスの前には、神の創造のみわざというすばらしい書庫がくりひろげら

れていた。万物をおつくりになったお方が、ご自分の手で地と海と空とにお書きになった教えを学ばれたのである。この世のきよくない方法から離れて、イエスは自然から多くの科学的な知識を集められた。イエスは植物や動物の生活、また人間の生活を研究された。イエスは幼い時から一つの目的を持っておられた。それは他人を祝福するために生きるということだった。このためにイエスは自然界にその方法をみいだされた。植物の生活と動物の生活を研究されると、そこから方法や手段についての新しい考えが頭にひらめいた。イエスは目に見えるものの中から、神の生きたみことばを示す実例をたえずひき出そうとしておられた。キリストが、公生涯中に、譬（たとえ）をもって真理についての教訓を教えることを好まれたことは、その心が自然の影響力に向かって開かれていたことと、彼が日常生活の環境から霊的な教えを集められたこととを示している。

このように、物事の理由をさとろうとつとめられた時、神のみことばとみわざめ意味がイエスに示された。天使たちがイエスのそばにつきそっていたので、聖なる思想と霊的なまじわりという教養がイエスのものとなった。知性が芽ばえはじめてから、イエスはたえず霊的な恵みと真理の知識に成長しておられた。　どの子供もイエスと同じように知識を得ることができる。われわれがみことばを通して天父をよく知ろうとつとめる時、天使たちがそばに　きて、われわれの知　能が強められ、われわれの品性が高められ、洗練される。われわれはますます救い主に似る者となる。　またわれわれが自然の美しさと雄大さをながめる時、われわれの愛情は神のもとへひきよせられる。みわざを通して無限なる神と接触することによって、心はおそれに満たされるが、魂は活気づけられる。祈りを通して神とまじわることによって　知的道徳的能力が発達し、霊的な事物について思想を養うときに霊的な能力が強められる。

イエスの一生は神と調和した生涯であった。子供の時分には子供のように考え、子供のように語られた。しかしイエスのうちにある神のみかたちを傷つける罪のあとはなかった。それでも彼は試みからまぬかれてはおられなかった。ナザレの住民は悪いことで有名だった。彼らが一般からどんなに低く見さげられていたかは、ナタナエルが、「ナザレから、なんのよい者が出ようか」と質問したことばにあらわれている（ヨハネ　1：46）。イエスはその品性を試みられるような場所におかれた。イエスはご自分の純潔を保つためにたえず警戒して

おられる必要があった。イエスは子供の時にも青年の時にも大人になってからも、われわれの模範となるために、われわれが出会わねばならないあらゆる戦いに会われた。

サタンはナザレの子イエスを征服しようとして根気よく努力した。イエスは幼い時から天使たちに守られておられたが、それでも彼の一生は暗黒の勢力との長い戦いであった。この地上に悪のけがれにそまらない人間がいるということが、暗黒の君サタンにとっては不快であり、困ったことであった。サタンは、イエスをわなにかけるためにあらゆる手段をあますところなく用いた。どんな人間も、救い主が試みとのはげしい戦いのさなかで送られたようなきよい生活を送るように求められることはないであろう。　イエスの両親は貧しくて、毎日の骨折り仕事で生計をたてていた。イエスは貧乏や自制や不自由の味をよく知っておられ　た。この経験がイエスを保護した。イエスの勤勉な生活には、試みを招くようなひまな時間　がなかった。堕落的な交際のために道を開くような無意味な時間がなかった。イエスはでき　るだけ誘惑者に対して戸をとざしておられた。利益も楽しみも、あるいは称賛も非難も、イ　エスを悪い行為にさそうことができなかった。イエスは悪を賢明に見わけて、それに強く抵　抗された。キリストは、この地上においてただ 1 人罪のないお方であった。しかしイエスは およそ 30 年の間、ナザレの悪い住民の中でお暮しになったこの事実は、罪とがのない生活を 送るには、場所や幸運や繁栄次第であると考えている人々にとって一つの譴責である。試み、貧乏、逆境は純潔と堅固な志を発達させるために必要な訓練である。　イエスはいなかの家に住んで、家庭の重荷を負うために、ご自分の責務を忠実に快活に果たされた。イエスは天の　司令官で、天使たちはそのみことばによろこんで従っていたのだったが、いまは自発的なし　もべであり、従順な愛らしい息子であった。イエスは手仕事をおぼえ、自らヨセフといっし　ょに大工の仕事をされた。彼は一般の労働者と同じ粗末な服を着て、小さな町の通りを歩い　て、そのいやしい仕事に邁進された。イエスはご自分の重荷をへらしたり骨折りを軽くした　りするために天来の力をお用いにならなかった。

イエスが子供と青年の時代に働かれた時、その心と体が発達した。イエスは体力を向こうみずに用いないで、どの方面でも一番よい仕事ができるように、体力を健康に保つような方法で働かれた。イエスは道具のとり扱いでさえ不完全であることを好まれなかった。彼は

品性において完全であられたように、職人として完全であられた。イエスは、ご自身の模範を通して、勤勉であることはわれわれの義務であること、われわれの働きは正確に徹底的に 1、なければならないこと、またこのような労働は尊いものであることをお教えになった。手を役立たせることを教え、生活の重荷の自分の分を負うように青年たちを訓練する実際の働きによって、肉体的な力が与えられ、あらゆる能力が発達させられる。人はみな自分自身にとって益となり、また他人に役立つことを何かみつけ出　してしなければならない。神は働くことを祝福としてお命じになったのであって、勤勉に働く者だけが人生の真の栄光と喜びをみ　いだすのである。家庭の中で自分の義務を快活に果たし、父母の重荷を分担する子供や青年　を、神はやさしい愛をもって受け入れてくださる。このような子供たちは、社会の役に立つ　人間として家庭から出て行くのである。

イエスは、地上生涯の間じゅう、熱心にたえずお働きになった。彼は多くのことを期待された。だから多くのことを試みられた。公生涯にお入りになってから、彼は、「わたしたちは、わたしをつかわされたかたのわざを、昼の間にしなければならない。夜が来る。すると、だれも働けなくなる」と言われた（ヨハネ 9：4）。キリストの弟子（でし）であると自称している多くの人々がするように、イエスは、骨折りや責任を避けるようなことをされなかった。多くの人々が弱くて無能であるのは、この訓練を避けようとするからである。彼らには尊い愛すべき性質があるかもしれないが、困難に出会ったり、障害をのりこえたりしなければならないときになると、無気力でほとんど役に立たない。キリストのうちにみられる積極陸と行動力、堅固で強力な品性は、イエスが受けられたのと同じ訓練によってわれわれのうちに発達させられるのである。しかもイエスの受けられた恵みはわれわれのためである。

救い主は、人々の中に暮しておられた間ずつと、貧しい人たちと同じ身分になられた。彼はご自分の経験から、貧しい人たちの心配や苦労をご存じだったので、いやしい労働者たちをみな慰めはげますことがおできになった。イエスの一生の教えをほんとうに理解している者は、階級差をつけたり、お金持が、貧しくてもりっぱな人たちより尊ばれるようなことがあったりしてはならないと考える。 イエスはご自分の労働に快活さと気転とを持ち込まれ

た。家庭生活と職場に聖書の宗教をとり入れ、勘中の仕事の重荷を負いながらなお神の栄光に対して目が澄んでいるためには（マタイ 6：22 参照）、非常な忍耐と霊性とが必要である。この点においてイエスは人々の助けとなられた。彼は天の事物のために時間を費したり考えたりする余裕がないほどこの世の苦労を一杯かかえておられなかった。たびたびイエスは詩篇や天の歌をうたって心の喜びを表明された。ナザレの住民たちはイエスが神への賛美と感謝をささげられる声をたびたびきいた。イエスは歌を通して天と交わられた。仲間の者たちは、働きに疲れて不平を言うと、イエスの口から出る美しい歌の調べに元気づけられるのだった。

イエスの賛美は悪天使を追い払い、香煙のようにその場をかおりで満たすように思われた。きいている者たちの心は、この地上の放浪から天の家郷へとはこばれて行った。　イエスは世の人にとっていやしの恵みの泉であった。ナザレで人目につかず暮しておられた年月の　間、イエスのいのちは同情とやさしさという流れとなって人々にそそがれた。老人たちも、　悲嘆にくれている者たちも、罪の重荷を負っている者たちも、無邪気に喜んで遊んでいる子　供たちも、森の小さな動物たちも、荷物をつけた忍耐強い動物たちも、イエスがいらっしゃ　ればみなもっと幸福になった。権威のことばをもってもろもろの世界をささえられたお方が、身をかがめて、傷ついた小鳥を救っておやりになるのだった。イエスの目にとまらないもの　は何もなく、イエスが奉仕する価値がないと思われるものは何もなかった。

こうしてイエスは、知恵と身のたけが成長されるにつれて、ますます神と人とに愛された。イエスはすべての人に同情することがおできになることを自ら示すことによって、すべての人の心から同情をひき出された。イエスのまわりには望みと勇気の雰囲気がとりまいていたので、彼はどこの家庭においても祝福となられた。イエスはまたたびたび安息日に、会堂で、預言者の書から教訓を読むようにたのまれた。そしてよく知られている聖書のことばから新しい光が輝き出ると、聴衆の心は感動した。　しかしイエスは見せびらかしを避けられた。ナザレに住んでおられた間じゅう、イエスはご自分の奇跡の力を人の前にお示しにならなかった。彼は高い地位　を求めず、何の肩書も持っておられなかった。イエスの静かで単純な生活、またイエスの幼いころについて聖書に何も書かれていないことさえ、大切な教訓を

教えている。子供の生活が静かで単純であればあるほど、すなわち不自然な刺激が少なくて、自然との調和が多ければ多いほど、その生活は肉体と知能の活力ならびに霊的な力にとって一層有利である。

イエスはわれわれの模範である。イエスの公生涯の期間については興味をもって論ずる人が多いが、イエスの幼いころの教訓に注目する人は少ない。しかしイエスが子供や青年たちの模範であったのは、その家庭生活においてであった。救い主は、われわれがいやしい身分であっても、神とともに親しく歩むことができることを教えるために、おそれ多くも自ら貧しい者となられた。イエスは日常の平凡なことにおいて天父を喜ばせ、あがめ、そのみ栄えをあらわすために生活された。イエスの働きは、口々の食物のために骨折って働く職人のいやしい手仕事を神聖にすることから始められた。彼は大工の仕事台で働いておられる時も、群衆のために奇跡を行っておられる時と同じに、神への奉仕をしておられた。キリストがそのいやしい家庭において示された忠実と従順の模範にならう青年はだれでも、天父がイエスについて聖霊を通してお語りになった次のことばを自分のものとすることができる。「わたしの支持するわがしもべ、わたしの喜ぶわが選び人を見よ」（イザヤ 42：1）。

第 8 章過越のおまいり

ユダヤ人の間では、12 才という年令が子供時代と青年との境界線だった。この年令が終ると、ヘブルの少年は律法の子また神の子と呼ばれた。彼は宗教的な教えを受ける特別な機会が与えられ、宗教上の祝祭や儀式に参加することが期待された。イエスが少年時代に過越（すぎこし）の祭りに参加するためにエルサレムにのぼられたのは、この慣例に従ってであった。すべての信心深いイスラエル人と同じように、ヨセフとマリヤは毎年過越に参加するためにエルサレムへのぼった。そこでイエスが定められた年令になられると、彼らはイエスをいっしょにおつれした。

年ごとの祭礼には、過越の祭りと五旬節（ペンテコステ）と仮庵（かりいお）の祭りの 3 つがあって、その時にはイスラエル人の男子はみなエルサレムで神の前に出るように命じられていた。この 3 つの祭礼の中で、過越の祭りにおまいりする人が一番多かった。ユダヤ人が離散していたすべての国々からも多くの者がおまいりした。パレスチナの各地からたいへんな数の参拝者たちがやってきた。ガリラヤからの旅には数日かかるので、旅人たちは交友と安全のため大勢で隊を組んでやってきた。女や老人たちは、けわしい岩だらけの道は牛やろばに乗った。強い男や若者たちは徒歩で旅をした。過越の祭りの時期は 3 月の終わりか 4 月の上旬に当たっていたので、国じゆうが花で輝き、小鳥の歌声が楽しかった。道中ずっとイスラエルの歴史上記念すべき場所があって、父や母たちは、昔神がご自分の民のためになしてくださったいろいろなふしぎを子供たちに語りきかせた彼らは歌と音楽で旅の疲れを忘れた。そしていよいよエルサレムの高い建物が見えてくると、どの人も誇らしい歌声に和した。

「エルサレムよ、われらの足は あなたの門のうちに立っている。 その城壁のうちに平安があり、 もろもろの殿のうちに安全があるように。」 (詩篇 122：2、7) 過越を守ることは、ヘブル国民の誕生とともに始まった。エジプトの奴緑生活の最後の晩、救出のしそしが何もみえなかった時に、神は彼らに、ただちに解 放されるから用意をするようにとお命じになった。神はエジプト人にのぞむ最後の刑罰についてパロに警告し、ヘブル人に、家族を

自分の家に集めるようにと指示された。ヘブル人はほふられた小羊の血を門柱に塗ると、焼いた小羊の肉を酵母のはいっていないパンや苦菜（にがな）といっしょに食べるのであった。「あなたがたは、こうして、それを食べなければならない。すなわち腰を引きからげ、足にくつをはき、手につえを取って、急いでそれを食べなければならない。これは主の過越である」（出エジプト 12：11）。夜中にエジプト人の長子は全部殺された。「そこでパロは夜のうちにモーセとアロンを呼び寄せて言った、『あなたがたとイスラエルの人々は立って、わたしの民の中から出て行くがよい。そしてあなたがたの言うように、行って主に仕えなさい』」（出エジプト 12：31）。ヘブル人は自由な国民としてエジプトから出て行った。神は毎年過越を守るようにお命じになったのだった。「もし、あなたがたの子供たちが『この儀式はどんな意味ですか』と問うならば、あなたがたは言いなさい、『これは主の過越の犠牲である。エジプト人を撃たれたとき、エジプトにいたイスラエルの人々の家を過ぎ越して、われわれの家を救われたのである』」（出エジプト 12：26、27）。こうしてこのふしぎな救済の物語は代々くりかえされるのであった。

キリスト時代の民の大部分にとって、この祭の守りかたは形式的なものに堕落していた。しかし神のみ子キリストには、この祭がどんなにか深い意義をもっていたことだろう。　子供のイエスは初めて宮をごらんになった。彼は白い衣を身にまとった祭司が厳粛な儀式をとり　行っているのをごらんになった。彼はまた、いけにえの祭壇の上の血を流している動物に目　をとめられた。香煙が神の前に立ちのぼる中で、イエスは参拝者と共に頭をたれて祈りをさ　さげられた。彼は過越の儀式の印象的な行事をまのあたりにごらんになった。1 日ごとに、イエスはそれらの意味をだんだんはっきりさとられた。どの行為もご自身の生涯に結びつけら　れているように思われた。新しい衝動がイエスのうちに起りつつあった。だまって一心に、　イエスは大問題を解いておられるようにみえた。ご自分の使命の奥義がだんだん救い主に開　かれた。

こうした光景について瞑想（めいそう）にふけっておられたので、イエスは両親のそばにおられなかった。彼は 1 人になりたいとお思いになった。過越の祭りの行事が終ってもイエスはまだ宮の庭にとどまっておられた。そして参拝者たちがエルサレムを出発した時、イ

エスはあとにお残りになった。 このエルサレムまいりの時に、イエスの両親は彼をイスラエルのえらい教師たちと接触させたいと望んだ。イエスはこまかい点まで神のみことばに従われたが、ラビの儀式や慣例には従われなかった。ヨセフとマリヤはイエスが学問のあるラビたちを敬い、彼らの要求をもっと忠実に心にとめるようになられることを望んだ。しかし宮でのイエスは神から教えられたのだった。イエスはお受けになったものをすぐに与えはじめられた。

当時、宮に接続している一室が、預言者の学校の様式にならって、神学校として用いられていた。ここに指導的なラビたちが生徒たちと集まっているところへ子供のイエスがおいでになった。学問のあるこれらのいかめしい人たちの足もとにすわって、イエスは彼らの教えを聞かれた。知恵を求める者として、イエスは預言について、またメシヤの来臨をさし示すものとして当時起こりつつあった諸事件について、この教師たちに質問された。 イエスはご自身が神の知識を熱望しておられる方であることを示された。イエスの質問は、これまでは つきりしていなかったが、しかし魂の救いにとって不可欠な深遠な真理を暗示していた。イエスの質問はどれも、この学者たちの知恵がどんなに狭くて浅薄なものであるかを示すとともに、彼らの前に天来の教訓を示し、真理について新しい見方をさせた。ラビたちは、メシヤの来臨によってユダヤ国民がすばらしい地位にまで高められると語った。しかしイエスはイザヤの預言を示して、神の小羊の苦難と死とを示している聖句の意味を彼らにおたずねになった。

博士たちはイエスに向き直って質問し、その答えに驚いた。イエスは子供らしい謙遜（けんそん）さをもって、聖書のことばをくりかえし、学者たちがこれまで考えつきもしなかった深い意味をお示しになった。イエスの示された真理の教えに従っていたら、当時の宗教に改革が行われていたであろう。霊的な事柄に対する深い興味が目覚め、イエスが公生涯をお始めになった時には多くの者がイエスを受け入れる備えができていたであろう。 ラビたちは、イエスがラビの学校で教育を受けられたことがないのを知っていた。だが預言についてイエスの理解はラビたちよりもはるかにすぐれていた。ラビたちはこの考え深いガリラヤの少年は非常に有望だと思った。彼らはイエスがイスラエルの教師となられるように、自分

たちの生徒にしたいと希望した。彼らはこのような独創的な頭脳は自分たちが教育すべきだと感じ、イエスの教育を引き受けたいと望んだ。 イエスのことばは、これまで人間の口から出ることばによって動かされたことのない彼らの心を感動させた。神はこれらのイスラエルの指導者たちに光を与えようとして、彼らの心を動かすことのできるただ一つの手段をお用いになった。彼らは高慢だったので、人から教えを受けるなどということは冷笑して受けつけなかったであろう。もしイエスが彼らに教えるような態度をされたら、彼らは軽蔑して耳をかたむけなかったであろう。自分たちはイエスに教えているのだ、すくなくともイエスの聖書についての知識をためしているのだと、彼らはうぬぼれていた。イエスの少年らしいつつしみとしとやかさは彼らの偏見をとり除いた。無意識のうちに彼らの心は神のみことばに向かって開かれ、聖霊が彼らの心に語りかけた。

彼らは、メシヤに関する自分たちの期待が、預言の裏づけのないものであることをみとめないわけにいかなかった。それでもなお彼らは、彼らの野心をよろこばせていた説を捨てようとしなかった。彼らは自分たちが教えるのだと主張していた聖書についてまちがった解釈をしていたことをみとめようとしなかった。この少年は学んだことがないのにどうしてこんな知識があるのだろうと、彼らは口々にたずねた。光は暗黒の中に輝いていた。「そして、やみはこれに勝たなかった」（ヨハネ 1：5）。 そのあいだヨセフとマリヤは非常に当惑し、困っていた。彼らはエルサレムを出る時にすでにイエスの姿を見失っていたが、イエスがあとに残っておられるとは知らなかった。当時ユダヤの国は八口が多く、ガリラヤからの旅の団体は大変な人数であった。彼らがエルサレムの町を出た時はひどい混雑だった。ヨセフとマリヤは、道中、友だちや知人たちと旅をする楽しさに心を奪われていたので、夜になるまでイエスのおられないことに気がつかなかった。さて休みのために立ちどまって、彼らは子供の手伝いがないのに気がついたが、たぶん友だちと一緒にいるのだろうと思って、何の心配も感じなかった。彼らはイエスのことを、若くても絶対的に信頼していた。そして必要な時には、イエスがいつものように彼らが困っているのを予期して手伝われるものと思っていた。だがこんどは心配になってきた。彼らは道つれの人たちの中を捜しまわったが、イエス

はみつからなかった。彼らは、ヘロデがイエスを赤ん坊の時分に殺そうとしたことを思い出して身ぶるいした。彼らの心は暗い予感に満たされた。彼らははげしく自分たちを責めた。

彼らはエルサレムへ引き返して、捜し続けた。その翌日、宮の参拝者の中にまじっていると、ききなれた声が彼らの注意をとらえた。それはまぎれもなくイエスの声だった。まじめで、熱心で、しかも美しいひびきをもったのはイエスの声よりほかになかった。 ラビの学校の中で、彼らはイエスを見つけた。大 都はしたものの、彼らは今までの悲しみと心配とを忘れることができなかった。イエスをそばにつれもどすと、母親は、非難のこもったことばで、「どうしてこんなことをしてくれたのです。ごらんなさい。おとう様もわたしも心配して、あなたを捜していたのです」と言った（ルカ 2：48）。

イエスは、「どうしてお捜しになったのですか。わたしが自分の父の家にいるはずのことを、ご存じなかったのですか」と答えられた。彼らがそのことばをわかりかねるふうだったので、イエスは天の方を指さされた。そのお顔には光があって、彼らは驚嘆した。羅が人性を通して輝いているのであった。宮の中にイエスをみつけ出した時、彼らはイエスとラビたちとの間にかわされていることばをきいて、イエスの質問と答えに驚いた。イエスのことばは決して忘れられない思想を次々と芽ばえさせた。 また彼らに対するイエスの質問には一つの教訓があった。「わたしが自分の父の家にいるはずのことをご存じなかったのですか」とイエスは言われた。イエスはご自分がこの世においてなすためにおいでになったその働きに従事されたが、しかしヨセフとマリヤは彼らの務めをおろそかにしたのだった。神はそのみ子を彼らに委託されたことによって彼らに高い栄誉をお与えになっていた。聖天使たちはイエスの生命を保つためにヨセフのとるべき道を示した。ところが彼らは、一瞬間も忘れるべきではなかったイエスを、まる 1 日見失っていたのである。そうしてこの心配から救われると、彼らは自分自身を責めないで、イエスを非難したのであった。

イエスの両親がイエスを自分自身の子供としてみたのは当然であった。イエスは毎日両親といっしょにおられて、その生活は多くの点でほかの子供たちと同じであったから、両親がイエスを神のみ子として認めることは困難だった。彼らは世のあがない主がおられることによって自分たちに与えられる祝福を認めない恐れがあった。イエスから離れた悲しみと、

イエスのことばにこめられていたやさしい誰責とは、彼らにその責任の神聖さを自覚させるためであった。 母親への答えの中で、イエスは神に対するご自分の関係を理解しておられることを初めて表明された。イエスがお生まれになる前に、天使はマリヤにこう言った、「彼は大いなる者となり、いと高き者の子と、となえられるでしょう。そして、主なる神は彼に父ダビデの王座をお与えになり、彼はとこしえにヤコブの家を支配し、その支配は限りなく続くでしょう」（ルカ 1：32、33）。マリヤはこのことばを心に思いめぐらした。彼女は自分の子供がイスラエルのメシヤになられるお方だと信じてはいたが、メシヤの使命を理解していなかった。いま彼女はイエスのことばを理解できなかったが、イエスがヨセフとの血縁関係を否認し、ご自分が神のみ子であることを宣言なさったことを知った。

イエスは、この世の両親との関係を無視されたのではなかった。彼は両親といっしょにエルサレムから帰って、骨折って働く彼らの生活を手伝われた。イエスはご自分の使命の奥義を自分自身の心にかくし、ご自分の働きを始めるべき定まった時のくるのをおとなしく待たれた。ご自分が神のみ子であることを認めてから 18 年の間、イエスはナザレの家庭につながるご自分のきずなを認め、息子として、兄弟として、友人として、市民として、その義務をつくされた。 宮でご自分の使命が示された時、イエスは群衆に接触することをちゅうちょされた。彼はご自分の一生の奥義を知っている人々といっしょにエルサレムからだまって帰りたいと望まれた。神は、過越の祭りを通して、民を世俗の心づかいから解放し、エジプトからの救出に示された神のくすしいみわざを彼らに思い出させようとしておられた。

神は彼らがこのみわざの中に罪からの救いについての約束を認めるように望まれた。ほふられた小羊の血によってイスラエルの家が守られたように、彼らの魂はキリストの血によって救われるのであった。信仰によってキリストのいのちを自分自身のものとすることによってのみ、彼らはキリストによって救われるのであった。象徴的な儀式は、礼拝者にキリストを個人的な救い主としてさし示す時にのみ価値がある　のであった。神は彼らがキリストの使命について、祈りのうちに研究し瞑想するように望まれた。しかし民衆は、エルサレムを　出ると、旅と社交の興奮に心を奪われて、目に見てきた儀式を忘れてしまうことがあまりに　も多かった。救い主はこうした人たちと道つれになることに心をひかれなかった。 イエスは、

エルサレムからヨセフとマリヤたちとだけいつしょに帰りながら、彼らの心を苦難の救い主に関する預言に向けさせたいとお望みになった。カルバリーで、イエスは母の悲嘆を軽くしようとされた。イエスはいま、彼女のことを考えておられた。マリヤはイエスの最後の苦悶（くもん）を目に見るのであった。そこでイエスは、剣が彼女の魂をさし通した時に彼女がそれに耐えられるように強くするため、彼女にご自分の使命を理解させたいと望まれた。イエスが母から離れ、彼女が悲しみながら 3 日間イエスをさがしたように、イエスが世の罪のためにささげられる時、彼女はもう 1 度 3 日間イエスを失うのである。そしてイエスが墓から出てこられる時、彼女の悲しみはふたたび喜びに変るのである。だがイエスがいま彼女の思いを向けさせようとしておられた聖句を彼女が理解していたら、彼女は、イエスの死についての苦しみにどんなにか強く耐えることができたであろう。

ヨセフとマリヤが瞑想と祈りとによって心を神にそそいでいたら、彼らは自分たちの責任の神聖さを認め、イエスを見失うようなことはなかったであろう。1 日の怠慢によって彼らは救い主を見失った。そして彼を見つけ出すために 3 日も心配しながら捜さねばならなかった。 われわれもこれと同じである。われわれはむだ話や悪口や、祈りを怠ることによって、救い主のこ臨在を 1 日失うかもしれない。すると救い主を見つけ出し、失った平安をとりもどすのに何日間も悲しみながら捜さねばならないかも知れないのである。

人々との交際において、われわれはイエスを忘れたり、イエスがわれわれといっしょにおられないことに気がつかずに時をすごしたりすることのないように注意しなければならない。世俗的な事物に心を奪われて、われわれの永遠のいのちの望みの中心であるイエスを心に思わなくなれば、われわれはイエスと天使たちから離れてしまうのである。救い主にいていただきたいと思わなかったり、救い主のおられないことに気がつかないようなところに、聖天使たちはとどまることができない。クリスチャンと自称している人々の中にしばしば落胆がみられるのはこのためである。 多くの者は宗教的な礼拝に出席し、神のみことばによって生気をとりもどし、慰められる。だが瞑想と目をさまして祈ることとを怠るために、彼らはその祝福を失ってしまい、それを受けた前よりももっと欠乏を感ずる。しばしば彼らは神が自分に対して冷酷であると考える。彼らは過失が自分自身にあるとは考えない。イエスか

ら離れることによって、彼らはイエスの臨在の光をしめ出してしまったのである。 われわれは、キリストの一生について毎日瞑想する時間を持つがよい。イエスの一生の要点を一つ一つとらえ、各場面ことに最後の場面を想像のうちにとらえるべきである。このようにして、われわれのために払われたイエスの大犠牲を心に思いめぐらす時、キリストに対するわれわれの信頼はもっと堅固になり、われわれの愛は目覚めさせられ、われわれはもっと深くキリストの精神を吹きこまれる。もし最後に救われたければ、われわれは十字架のもとで悔い改め、心がくだかれることについて教訓を学ばねばならない。 人々と交わるときに、われわれはお互いに対して祝福となることができる。もしわれわれがキリストのものなら、キリストについて思うことが一番楽しい思いである。われわれはキリストについて語ることを好む。そしてお互いにキリストの愛について語る時、われわれの心は天来の感化によってやわらげられる。キリストの品性の美しさを見つめることによって、われわれは、「栄光から栄光へと、主と同じ姿に変えられていく」のである（Ⅱコリント 3：18）。

第 9 章戦いの日々

ユダヤ人の子供は幼い時からラビの要求にとりかこまれていた。生活のこまかい点まで、一つひとつの行為が厳格な規則によって規定されていた。青少年たちは、会堂の教師たちの下で、伝統的なイスラエル人として当然守るものとされている数え切れないほどの規則によって教育を受けた。しかしイエスはそうした事がらに関係されなかった。イエスは、子供の時からラビの律法にとらわれないで行動された。イエスはいつも旧約聖書を研究され、「主はこう言われる」ということばがいつも彼の口からきかれた。

イスラエルの民の状態がイエスの心にわかり始めると、彼は社会の要求と神のご要求とがたえずぶつかり合っているのをごらんになった。人々はだんだん神のみことばから離れ、自分自身が考え出した説を重んじていた。彼らは何の効力もない伝統的な儀式を守っていた。彼らの奉仕は儀式のくりかえしにすぎなかった。その奉仕を通して教えられるはずの聖なる真理は礼拝者たちにかくされていた。イエスは、彼らが、信仰を伴わない奉仕に平安を見いだしていないのをごらんになった。彼らは、まことをもって神に仕える時に与えられる精神の自由を知らなかった。イエスは神の礼拝についてその意味を教えるためにおいでになっていたので、神の戒めに人間の規則をまぜることを是認なさることができなかった。イエスは学閥のある教師たちの教えや行為を攻撃されなかったが、ご自身の簡素な習慣を非難されると、神のみことばを示してご自分の行為の正しいことを証明された。

イエスは、いつもやさしくおとなしい態度で、ご自分の接触される人々を喜ばせようとされた。イエスが非常にやさしく慎み深かったので、律法学者たちや長老たちは、イエスが彼らの教えにたやすく感化されるだろうと思った。彼らは古代のラビから伝えられてきた格言や言い伝えをイエスが受け入れられるようにすすめたが、イエスはそうしたものの権威が聖書にもとついているかどうかをおたずねになった。イエスは神のみ口から出ていることばならどんなことでも聞き従われたが、人間が考え出したものに従うことはおできにならなかった。イエスは聖書を初めから終りまで知っておられたようで、その真の意味を彼らにお示しになった。ラビたちは子供から教えられることを恥じた。彼らは、聖書を説明するのは自

分たちの役目で、イエスの立場は彼らの解釈を受け入れることにあるのだと主張した。彼らはイエスが自分たちのことばに反対の立場をとられることを怒った。

彼らは、自分たちの言い伝えに聖書上の権威がないことを知っていた。彼らは、イエスが霊的な理解力において、自分たちよりもはるかに進んでおられることをみとめた。だが彼らは、イエスが彼らの命令に従われないので怒った。イエスを説き伏せることができないので、彼らはヨセフとマリヤに会って、イエスの不服従の態度を並べたてた。こうしてイエスは、非難ととがめを受けられた。 ごく幼い時から、イエスはご自分から品性を築き始められ、両親への尊敬と愛もイエスを神のみことばに従うことから離れさせることができなかった。 家庭の習慣とちがった行為をなさるたびに、その理由は「聖書にこう書いてある」というこ とであった。しかしラビたちの圧力はイエスの一生を苦しいものにした。少年時代において さえ彼は沈黙としんぼうつよい忍耐について教訓を学ばれねばならなかった。 ヨセフの息子たちはイエスの兄弟と呼ばれていたが、彼らはラビたちの味方であった。彼らは、言い伝え があたかも神の規則でもあるかのように、これに注意すべきであると言い張った。彼らはま た人の教えを神のみことばよりも尊いものにみなすことさえし、イエスが虚偽と真実との区 別をはっきりと見とおされるのにいらだった。彼らは、イエスが神の律法に厳格に従われる のを頑固（がんこ）だと言って非難した。彼らはイエスがラビたちに答えておられる時に示 された知識と知恵に驚いた。彼らはイエスが博士たちから教育を受けられたことがないこと を知っていた。それなのに、かえってイエスが博士たちを教えておられるのに気づかないわけにゆかなかった。

彼らはイエスの教育が彼ら自身の教育よりも程度の高い型のものであることをみとめた。しかし彼らはイエスがいのちの木、すなわち彼らの知らない知識のみなもとに近づいておられることを認識しなかった。 キリストは排他的でなかったので、この点において、キリストがパリサイ人の厳格な規則からはずれておられることが、特にパリサイ人たちを不快にして いた。イエスは、宗教の領域が日常生活にとってはあまりに神聖すぎるものとして隔離の高 い壁にかこまれているのをごらんになった。この仕切りの壁をイエスはうちこわされた。人 々と接触して、イエスは、あなたの信条は何ですか、あなたはどの教会に属していますかな

どとおたずねにならなかった。彼はだれでも助けの必要な者のために助けの力をお用いになった。イエスはご自分の天来の品性を示すために世捨て人の小屋にこもるようなことをなさらず、熱心に人類のために働かれた。聖書の宗教は肉体の苦行にあるのではないという原則を、イエスはこんこんとお教えになった。イエスは、純潔でけがれのない宗教は一定の時間や特別な場合にだけ限られるものではないことをお教えになった。いつでもどんな場所でも、彼は人々へのやさしい関心をあらわし、まわりに快活な信仰の光を放たれた。こうしたことがすべてパリサイ人たちにとっては譴責（けんせき）であった。それは宗教が利己主義にあるものではないことと、彼らが自分自身の利益に病的なまでに熱中していることは真の信心に全く相反するものであることとを示した。このことがイエスに対する彼らの敵意をひき起こしたので、彼らはイエスを強制的に自分たちの規則に従わせようと試みた。

イエスは苦しんでいる人々をごらんになるたびに彼らを救うために働かれた。イエスはお与えになるお金はほとんどなかったが、ご自分よりも困っているようにみえる人々を救うためにたびたびご自分の食事をぬかれた。イエスの兄弟たちはイエスの感化力が自分たちの勢力のさまたげとなっていると思った。イエスは人の気持を察する能力をもっておられたがそれは彼らのうちのだれも持っていないし、また持とうとも思わないものだった。

彼らがあわれな堕落した人々に荒々しいことばを投げかけると、イエスはその人たちのそばに行って励ましのことばを語られた。イエスは困っている人々に１杯の冷たい水を与え、ご自分の食物を静かに彼らの手におかれるのだった。イエスが彼らの苦しみをやわらげておやりになると、イエスのお教えになった真理はその情け深い行為とむすびつき、人々の記憶にきざみこまれた。　こういうことがすべてイエスの兄弟たちを不快にした。彼らはイエスよりも年上だったので、イエスが彼らのさしずに従うべきだと考えた。彼らはイエスが彼らに　対して優越感を持っておられると言って非難し、また民の教師たち、祭司たち、役人たちよ　りもお高いといって責めた。たびたび彼らはイエスをおどし、脅迫しようとした。だがイエ　スは聖書を道案内として進んで行かれた。

イエスはご自分の兄弟たちを愛し、いつも変らない親切な態度をとられたが、彼らはイエスをねたみ、はっきりした不信と軽蔑とを示した。彼らはイエスの行為を理解することが

できなかった。イエスのうちには全然正反対なものがみえた。イエスは神のみ子であったが同時にまた無力な子供であった。イエスはもろもろの世界の創造者であられたから、地はイエスの所有であった。それなのにイエスの一生の生活にはその 1 歩 1 歩に貧困がついてまわった。イエスは世の誇りや高慢とはまらたく異なった威厳と個性とを備えておられた。イエスは世俗的な偉大さを求めようとされず、どんな低い身分にも満足しておられた。このことがイエスの兄弟たちを怒らせた。彼らはイエスが試練と欠乏の中にあっていつも平静にしておられることについて説明ができなかった。われわれが「彼の貧しさによって富む者となるため」に、イエスはわれわれのために貧しくなられたことを彼らは知らなかった（Ⅱコリント 8：9）。ヨブの友人たちがヨブの屈辱と苦難とを理解できなかったように、彼 らはキリストの使命の奥義を理解できなかった。

イエスは兄弟たちのようではなかったので、彼らから誤解された。イエスの標準は彼らの標準ではなかった。人を見ているうちに彼らは神から離れてしまい、その生活のうちに神の力がなかった。彼らが守っていた宗教の形式は品性を変えることができなかった。彼らは、「はっか、いのんど、クミンなどの薬味の 10 分の 1 を宮に納め」たが、「律法の中でもっと重要な、公平とあわれみと忠実とを見のが」した（マタイ 23：23）。イエスの模範はいつも彼らをいらだたせた。イエスが憎まれたものがこの世にただ一つあった。それは罪だった。イエスはまちがった行為を見るとかならず苦痛を感じられ、それをかくすことがおできにならなかった。見せかけの聖潔によって罪への愛着をおおいかくしている形式主義者たちと、神の栄光をあらわそうとする熱意がいつも心の最高位を占めている人物との間にはまちがう余地がないまでにはっきりした相違があった。イエスの生活が悪を責めたので、彼は家の中でも外でも反対された。イエスの無我と誠実な心は嘲笑（ちょうしょう）的に批評された。イエスの寛容と親切とは臆病（おくびょう）呼ばわりされた。

人の運命にふりかかる苦しみの中で、キリストの味わわれなかったものは一つもない。イエスの生れについて彼を軽蔑しようとする人々がいたので、イエスは子供の時でさえもそうした人々のあざけりの目つきや悪口のささやきに会われねばならなかった。もしイエスが彼らに気短なことばや顔つきで応じたり、あるいは兄弟たちに負けて、たった一つの悪い行

為でもされたら、彼は完全な模範ではなくなったであろう。そうしたらイエスはわれわれのあがないのための計画を実行することがおできにならなかったであろう。イエスが罪について言いわけができることを認められただけでも、サタンは勝利し、この世界は失われたであろう。誘惑者サタンがイエスに罪を犯させるよりに、その生活をできるだけつらいものにしようとして働いたのはこのためである。

だがイエスはどんな試みにも、「聖書にはこう書かれている」という一つの答で応じられた。イエスはご自分の兄弟たちの悪い行為を責めるようなことはめったになさらず、神のみことばを彼らにお語りになった。兄弟たちが何か禁じられた行為をする時、イエスがその仲間にはいるのを拒絶されると、彼らはよくイエスを臆病者だといって責めた。しかしイエスは、「主を恐れることは知恵である、悪を離れることは悟りである」としるされているとお答えになった（ヨブ 28：28）。 イエスの前にいることに平安を感じて、イエスとの交わりを求める者もあったが、多くの者は、イエスのけがれのない生活に責められるので、彼を避けた。若い友だちはイエスに自分たちと同じことをするようにすすめた。イエスは明るく快活なお方だった。彼らはイエスといっしょにいることを喜び、イエスの即座の思いつきを歓迎した。だが彼らはイエスの用心深さにがまんがならず、彼を狭量で固苦しい人間だと言明した。イエスは、「若い人はどうしておのが道を清く保つことができるでしょうか。み言葉にしたがって、それを守るよりほかにありません。……わたしはあなたに向かって罪を犯すことのないように、心のうちにみ言葉をたくわえました」としるされているとお答えになった（詩篇 119：9、11）。

イエスはよく、「なぜあなたはそんなに変っていて、われわれみんなと違っていようと心にきめているのですか」とたずねられた。するとイエスは、「おのが道を全くして、主のおきてに歩む者はさいわいです。主のもろもろのあかしを守り心をつくして主を尋ね求め、また悪を行わず、主の道に歩む者はさいわいです」と書かれていると言われた（詩篇 119：1～3）。 イエスはなぜナザレの若者たちといっしょにばかさわぎをしないのかとたずねられると、「わたしは、もろもろのたからを喜ぶように、あなたのあかしの道を喜びます。わた

しは、あなたのさとしを思い、あなたの道に目をとめます。わたしはあなたの定めを喜び、あなたのみことばを忘れません」と書かれていると言われた（詩篇 119：14～16）。

イエスはご自分の権利を主張されなかった。イエ スは不平を言わずに喜んでなさるので、不必要なまでに過重な働きをさせられることがよくあった。しかしイエスは弱ったり、落胆したりなさらなかった。　彼はこうした困難に超然として、神のみ顔の光のうちにあるかのように生活された。イエスは荒々しいとり扱いを受けても仕返しをされずじっと侮辱に耐えら　れた。　イエスは、どうして自分の兄弟たちからさえこんな意地の悪い仕打ちをされるのですかと何べんもたずねられた。するとイエスは、「わが子よ、わたしの教えを忘れずわたしの　戒めを心にとめよ。そうすれば、これはあなたの日を長くし、命の年を延べ、あなたに平安　を増し加える。いつくしみと、まこととを捨ててはならない。それをあなたの首に結び、心　の碑にしるせ。そうすれば、あなたは神と人との前に恵みと、誉とを得る」と書かれている　と言われた（箴言 3：1～4）。

両親がイエスを宮の中でみつけた時から、イエスの行動は彼らにとって一つの神秘であった。イエスは論争しようとなさらずその模範がたえず教訓となった。イエスは他の人とは違っているようであった。イエスの幸福な時間は自然とともに、また神とともにただ 1 人おられる時であった。そういう特権が与えられる時にはいつでも、イエスは働きの場所から退いて野原にはいって行かれ、緑の谷間で瞑想したり、山腹や森の木蔭で神と交わられた。朝早く、どこか人里離れた静かな場所で、瞑想するか、聖書を調べるか、祈っておられるかするイエスのお姿がよくみられた。こうした静かな時間からイエスは家へもどって、なすべき仕事をふたたびとりあげ、忍耐強い骨折り仕事の模範を示された。

キリストの一生には母への尊敬と愛情とが目立っていた。マリヤは、心の中では自分の生んだ聖なるみ子が長年約束されていたメシヤであることを信じていたが、その信仰をあえて表明しようとはしなかった。イエスの地上生涯の間じゅう、彼女はイエスと苦難を共にした。彼女はイエスが子供時代と青年時代に受けられた試練を、心を痛めながら目撃した。イエスの行為について、正しいとわかっていることを弁護したために彼女自身もつらい、立場に立たされた。彼女は、家庭内の交わりと子供たちに対する母親のやさしい見守りこそ品性

の形成にきわめて重要なものであると考えた。ヨセフの息子と娘たちはそのことを知っていたので、母親の心配に訴えることによって、イエスの行為を自分たちの標準に従って改めようと試みた。

マリヤはたびたびイエスに忠告して、ラビの慣習に従うようにすすめた。だがどんなにイエスを説得しても、神のみわざについて瞑想することと、人間の苦しみやもの言わぬ動物の苦しみさえやわらげようとなさるイエスの習慣とを変えることはできなかった。祭司たちと教師たちがイエスを制御することにマリヤの協力を求めると、彼女はひどく当惑した。しかしイエスがご自分の行為を正当づける聖書のことばをお示しになると、彼女は心に平安が与えられた。　イエスの兄弟たちはイエスが神からつかわされたお方であると信じなかったので、マリヤは時々イエスと兄弟たちの間にあって迷うことがあった。しかしイエスが神のみ　子であるという証拠は十分にあった彼女はイエスが他人の幸福のためにご自分を犠牲になさ　るのを見た。イエスがいらっしゃると家庭の中には一椴ときよい雰囲気（ふんいき）が生じ、イエスの生活は社会の各階級に働くパン種のようであった。イエスは、何の害もけがれも受　けないで、無思慮な人々や粗暴な人々や礼儀知らずな人々の中に、また不正な税吏たちやで　たらめな放蕩（ほうとう）者たちや不義なサマリヤ人たちや異教の兵士たちや荒くれた農夫　たちやその他のいろいろな人間の混じった群衆の中に生活された。疲れはててもなお重荷を　負わねばならない人々をごらんになるたびに、イエスは同情のことばをここで一言あちらで　一言とお語りになった。イエスは彼らの重荷を共に負い、神の愛と憐れみと恵みについて自　然から学ばれた教訓を彼らにくりかえされた。

イエスは、すべての人が自分にはとうといタラントが与えられていると考えるように、そしてそのタラントを正しく用いるならば永遠の富が得られるのだとい うことをお教えになった。彼は生活からすべての虚栄をとり除き、ご自身の模範によって、一刻一刻が永遠の結果を伴っていること、したがってその一刻一刻は宝として大切にし、聖なる目的のために用いなければならないことをお教えになった。イエスはどんな人間も無価値な者としてみすごすようなことをなさらず 1 人ひとりに救いの療法を試みられた。どんな種類の人々の中におられても、イエスはその時と事情にふさわしい教訓をお与えになった。どんなに乱暴な、見

込みのない人でも、責むべき点もなければ、害を与えることもない者となり、神の子たることをはっきりあらわすような品性の持ち主になることができるという保証を示すことによって、イエスは彼らのうちに望みを起こそうとされた。イエスは、サタンの支配下におし流されて、そのわなを破る力のない人たちをしばしばごらんになった。落胆したり、病気だったり、試みられたり、堕落したりなどしているこれらの人々に、イエスは最も憐れみ深いことば――彼らが必要とし、理解のできることばをお語りになるのだった。イエスはまた魂の敵とはげしい戦いをたたかっている者にも出会われた。これらの人々をイエスは耐え忍ぶように励まし、神の天使たちが彼らの側についていて勝利を与えてくれるから、勝てるのだと保証された。このようにイエスから助けられた人々は、ここに自分たちが絶対の信頼をもってよりたのむことのできるお方がおられることを確信した。彼らが同情をもって聞いてくださるイエスの耳に入れた秘密をイエスはほかへもらそうとされなかった。

イエスは魂をいやされるばかりでなく肉体もおいやしになった。彼は気がつくかぎりどんな種類の苦しみにも関心を持って、苦しんでいる１人びとりを救っておやりになった。彼のやさしいことばには苦しみをやわらげる香油があったのである。だれもイエスが奇跡を行　われたと言うことはできなかった。ただ恵み、すなわち愛のいやしの力が病人や困っている　人たちに向かってイエスからそそがれたのだった。このように彼は子供の時からつつしみ深　い態度で人々のためにお働きになった。キリストの公生涯が始まってから、多くの人々が喜　んで彼のことばをきいた理由はここにあった。　だがイエスは、子供の時も、青年時代も、大人になられてからも１人で歩まれた。彼は純潔と忠誠のうちにただ１人でさかぶねを踏まれ、もろもろの民のなかに彼と事を共にする者はなかった。彼は人類の救いのためにおそるべき　重い責任を負われた。人類の主義と目的とに決定的な変化がなければ、みな滅びてしまうこ　とを、イエスはご存じだった。これがイエスの魂の重荷だったが、だれも彼の上におかれて　いるこの重荷を理解できなかった。真剣な目的に燃えて、イエスは、ご自分が人類の光にな　るという一生の計画を実行された。

第 10 章　荒野の声

イスラエルの忠実な人たちは、長い間メシヤの来臨を待望していたが、その人たちの中からキリストの先駆者が起こった。年老いた祭司のザカリヤと妻のエリサベツは「ふたりとも神のみまえに正し」かった（ルカ 1：6）。そして彼らのきよい静かな生活から、当時の邪悪な暗黒のさなかに信仰の光が星のように輝きわたっていた。この敬虔な夫婦に、「主のみまえに先立って行き、その道を備え」る息子についての約束が与えられた（ ルカ 1：76）。 ザカリヤは「ユダヤの山里」に住んでいたが、聖所で 1 週間奉仕をするためにエルサレムにのぼっていた。その奉仕には各組の祭司が年に 2 回当たらねばならないのであった。「さてザカリヤは、その組が当番になり神のみ前に祭司の務をしていたとき、祭司職の慣例にしたがってくじを引いたところ、主の聖所にはいって香をたくことになった」（ルカ 1：8、9）。

ザカリヤは聖所の中の金の香壇の前に立っていた。香煙は、イスラエルの民の祈りとともに神のみ前にのぼっていた。突然彼は聖なるものの臨在を意識した。主のみ使が「香壇の右に立っ」ているのだった（ルカ 1：11）。天使の位置は恩恵を示していたが、ザカリヤはそのことに気がつかなかった。彼は長年の間あがない主の来臨を祈ってきた。いま彼の祈りが答えられようとしていることを告げるために、天から使者が送られたのだった。だが神の恵みが余りに大きすぎて、彼には信じられないように思えた。彼は恐れと自責の念に満たされた。

だが彼はうれしい保証のことばでこうあいさつされた。「『恐れるな、ザカリヤよ、あなたの祈が聞きいれられたのだ。あなたの妻エリサベツは男の子を産むであろう。その子をヨハネと名づけなさい。彼はあなたに喜びと楽しみとをもたらし、多くの人々もその誕生を喜ぶであろう。彼は主のみまえに大いなる者となり、ぶどう酒や強い酒をいっさい飲まず……聖霊に満たされており、そして、イスラエルの多くの子らを、主なる彼らの神に立ち帰らせるであろう。彼はエリヤの霊と力とをもって、みまえに先立って行き、父の心を子に向けさせ、逆らう者に義人の思いを持たせて、整えられた民を主に備えるであろう』。する

とザカリヤは御使に言った、『どうしてそんな事が、わたしにわかるでしょうか。わたしは老人ですし、妻も年をとっています』」（ルカ 1：13～18）。

ザカリヤは年老いたアブラハムに子供が与えられたのは、アブラハムが約束に対して忠実であられる主を信じたからであったことをよく知っている。だが一瞬間この年老いた祭司は人間の弱さに心を向ける。神はその約束されたことをなしとげることがおできになることを、彼は忘れる。この不信仰と、ナザレのおとめマリヤの子供のような美しい信仰との間には何というちがいがあることだろう。マリヤは天使のすばらしい知らせに、「わたしは主のはしためです。お言葉どおりこの身に成りますように」と答えた（ルカ 1：38）。 ザカリヤに息子が生れることによって、アブラハムの子の誕生やマリヤの子の場合と同じように、とうとい霊的な真理、すなわちわれわれが学ぶのに手間どり、また学んでもすぐ忘れがちな真理が教えられるのであった。われわれは自分自身では何もよいことをすることができない。しかしわれわれのできないことが、神の力によって、すなおな信ずる魂のうちになされるのである。約束の子が与えられたのは信仰によってであった。霊的生命が生まれ、われわれが義のわざをすることができるのは信仰によってである。

ザカリヤの質問に、天使は、「わたしは神のみまえに立つガブリエルであって、この喜ばしい知らせをあなたに語り伝えるために、つかわされたものである」と答えた（ルカ 1： 19）。これより 500 年前、ガブリエルはキリストの来臨の時にまで及ぶ預言の期間をダニエルに知らせた。ザカリヤはこの期間が終りに近づいたことを知って心を動かされ、メシヤの 来臨を祈っていた。この預言を伝えたその天使が、いまその成就を告げにやってきたのであ る。 「わたしは神のみまえに立つガブリエルである」という天使のことばは、彼が天の宮廷 において高い栄誉の地位を占めていることを示している。ダニエルにメッセージをたずさえ てきた時、彼は「わたしを助けて、彼らと戦う者は、あなたがたの君ミカエル〔キリスト〕 のほかにはありません」と言った（ダニエル 10：21）。ガブリエルについて、救い主は黙示録の中に、「キリストが、御使をつかわして、僕（しもべ）ヨハネに伝えられたものである」と語っておられる（黙示録 1：1）。その天使ばヨハネに、「わたしは、あなたや、あなたの兄弟である預言者……と、同じ灘間である」と言明した（黙示録 22：9）。神のみ子に次ぐ

栄誉の地位を保っている天使が罪深い人間に神のみこころを解き明かすためにえらばれたとは驚嘆すべき思想である。

ザカリヤは天使のことばに疑いを表明した。そのため彼は天使の語ったことばが実現するまでしやべることができないことになった。「時が来れば成就するわたしの言葉を信じなかったから、あなたは口がき けなくなり、この事の起る日まで、ものが言えなくなる」と、天使は言った（ルカ 1：20）、聖所の奉仕においては、国民一般と国家の罪についてゆるしを祈り、またメシヤの来臨について祈ることが祭司のつとめであった。しかしザカリヤがそのつとめを果そうとした時、彼は一言も口をきくことができなかった。 民を祝福するために出てきたザカリヤは「彼らに合図をするだけで、引きつづき、口がきけないままでいた」（ルカ 1：22）。民衆は長い間待っていて、ザカリヤが神のさばきを受けて倒れたのではないかと心配しはじめていた。だが彼が聖所から出てくると、その顔は神の栄光に輝いていた。「人々は彼が聖所内でまぼろしを見たのだと悟った」（ルカ 1：22）。ザカリヤは自分の見たことと聞いたこととを彼らに伝えた。「それから務の期日が終ったので、家に帰った」（ルカ 1：23）。 約束の子が生れると、「立ちどころにザカリヤのロが開けて舌がゆるみ、語り出して神をほめたたえた。近所の人々はみな恐れをいだき、またユダヤの山里の至るところに、これらの事がことごとく語り伝えられたので、聞く者たちは皆それを、心に留めて『この子は、いったい、どんな者になるだろう』と語り合った」（ルカ 1：64～66）。

これらのことは、ヨハネが道を備えることになっているメシヤの来臨に人々の注意をひくのに役立った。 聖霊がザカリヤの上にのぞんだので、彼は次のような美しいことばで、息子の使命を預言した。 「幼な子よ、あなたは、いと高き者の預言者と呼ばれるであろう。 主のみまえに先立って行き、その道を備え、 罪のゆるしによる救いを、その民に知らせるのであるから。 これはわたしたちの神のあわれみ深いみこころによる。 また、そのあわれみによって、日の光が上からわたしたちに臨み、 暗黒と死の陰とに住む者を照らし、 物事の順序からいえば、ザカリヤの息子は祭司職のために教育されるのが当然だった。しかしラビの学校の訓練は彼をその働きにふさわしくない者にしただろう。神は、聖書の解釈を学ばせるため

に彼を神学の教師たちのもとにお送りにならなかった。神は彼が自然と自然の神から学ぶように、彼を荒野へ召された。

ヨハネが住居としたところは、さびしい地域で、荒れた丘や人の住まない谷間や岩のほら穴などのまん中だった。しかし彼は自ら進んで人生の享楽とぜいたくとを捨ててこのきびしい荒野の訓練を選んだ。彼をとり囲んでいる環境は質素と克己の習慣にとって都合がよかった。うるさい世間にじゃまされないで、彼はここで自然と啓示と神について教訓を学ぶことができた。ザカリヤに言われた天使のことばは、神をおそれる両親から幾度となくヨハネにくりかえされていた二子供の時からヨハネの使命は彼の目の前におかれ、彼はその聖なる責任を引き受けていた。彼にとって荒野の孤独は、疑いと不信と不潔がほとんどすみずみまで行き渡っている社会からのありがたい逃避だった。彼は試みに抵抗する自分の力を信用しなかった。そして深い罪悪感が失われるのを恐れて、罪とのふだんの接触を避けた。

ヨハネは、生れた時からナジル人として神にささげられていたので、その誓願を守って一生の間献身した。彼は、らくだの毛皮の衣を着、皮の帯をしめて、古代の預言者の服装をしていた。彼は荒野の「いなごと野蜜」を食べ、山の清い水を飲んだ。 だがヨハネの生活は、何もしないで、苦行者のように陰気にあるいは利己的に孤立して送られたのではなかった。彼は時々出かけて行っては人々の中にまじった。彼は世の中で起こっていることをいつも興味をもって観察していた。その静かな隠れ家から、彼は諸事件の発展を見守っていた。天来のメッセージをもって人々の心を動かすにはどうしたらよいかを理解できるように、彼は神のみたまに照らされた目をもって人々の性格を研究した。使命の重荷が彼の上にあった。孤独の中にあって、瞑想と祈りとによって、彼は目の前にある一生の働きのために、自分の魂を準備することにつとめた。

荒野にいるとはいっても、彼は試みからまぬかれなかった。彼はできるだけサタンがはいって来ることのできる道をどれもとざしたが、それでもまだ彼は誘惑者から攻撃された。だが彼の霊的な知覚力ははっきりしていた。彼は品性の力と決断力とを発達させていた。だから聖霊の助けによって、彼はサタンの接近を探知してその力に抵抗することができた。 ヨハネにとって荒野は学校であり、聖所であった。ミデアンの山のまん中におかれたモーセの

ように、彼は神のご臨在の中にとじこめられ、神の大能の証拠にとりかこまれた。イスラエルの大指導者モーセのように、静寂な山の荘厳さの中に住みつくことが、ヨハネの運命ではなかった。しかし彼の前にはヨルダンの向こうのモアブの高い山々があって、山を固く立たせて力を帯びさせられた神について語っていた。この荒野の住居における自然の陰気で恐ろしい様相は、イスラエルの状態をまざまざとえがいていた。 実り豊かな神のぶどう園は荒れ果てていた。だが荒野の上には美しく明るい天がかかっていた。嵐をはらんで現れた黒雲には約束の虹（にじ）が弧をえがいていた。そのように、イスラエルの堕落の上にはメシャの統治について約束の栄光が輝いていた。怒りの雲には神の恵みの契約の虹がかかっていた。静かな夜ただ 1 人で、ヨハネは、星のように子孫がふえるというアブラハムに与えられた神の約束を読んだ。モアブの山々を金色に光らせる夜明けの光は「朝の光のように、雲のない朝に、輝きでる太陽のよう」であられるお方について語った（サムエル下 23：4）。また真昼の輝きの中には、「こうして主の栄光があらわれ、人は皆ともにこれを見る」時に主の現れに伴う光輝がみられた（イザヤ 40：5）。

おそれと喜びの気持ちとをもって、ヨハネは預言の巻物の中にメシヤの来臨についての啓示をさがした。これこそ蛇の頭をくだく約束の後裔、王がダビデの王座にあって統治するのをやめる前に現れるシロ―平和を与える者であった。いまその時はきていた。支配者ローマ人がシオン山の宮殿にすわっていた。神の確かなみことばによって、すでにキリストはお生まれになった。 ヨハネは、イザヤがメシヤの栄光を歓喜のうちに描写しているところを昼も夜も研究した。メシヤはエツサイの根から出た一つの若枝、義をもって治め、「公平をもって国のうちの柔和な者のために」さばきをなす王、「暴風雨をのがれる所……疲れた地に ある大きな岩の陰」であった。イスラエルはもはや「捨てられた者」と呼ばれずその地は「荒れた者」と言われず神から「わが喜びは彼女にある」と呼ばれ、地は「配偶ある者」といわれるのであった（イザヤ 11：4、32：2、62：4）。このさびしいさすらい人の心はかがやかしいまぼろしに満たされた。 ヨハネは王の美しさをながめて、自分を忘れた。彼は尊厳な聖潔を見て、自分が無能力で無価値なことを感じた。彼は神を仰ぎ見ていたので、人をおそれることなく、天の使者として出て行く用意ができた。彼は王の王であられる神の前に低

く腰をかがめていたので、地上の君主たちの面前に恐れることなくまっすぐに立つことができた。 ヨハネはメシヤの王国の性質を十分には理解しなかった。彼はイスラエルが国家の敵から救われるのを待望した。しかし王なるキリストが義のうちにおいでになり、イスラエルが聖なる国家として建国されることが彼の望みの大目的であった。自分の誕生の時に与えられた預言、すなわち、 「神は……その聖なる契約（をおぼえて）、…… わたしたちを敵の手から救い出し、 生きている限り、きよく正しく、 みまえに恐れなく仕えさせてくださるのである」 との預言は、このようにして成就されるのであると彼は信じた（ルカ 1：72～75）。

ヨハネはユダヤ国民があざむかれ、自己満足に陥り、罪の中に眠っているのをみた。彼は彼らをもっときよい生活にめざめさせたいと願った。神がヨハネに伝えさせられたメッセージは、国民を惰眠からびっくりして目覚めさせ、自分たちの大きな悪におそれおののかせるためであった。福音の種が足場を得ることができる前に心の土がくだかれねばならない。イエスのいやしを求める前に罪の傷からの危険についてめざめなければならない。 ヨハネはメシヤの来臨をのべ伝え、人々に悔い改めを呼びかけた。罪からのきよめのしるしとして、彼はヨルダン川の流れで人々にバプテスマを施した。このようにして彼は、意味深い実物教訓によって、神の選民であることを自称している人々が罪にけがれていること、また心と生活がきよめられなければメシヤの王国に入ることができないことを宣言した。

君たちもラビたちも、兵卒たちも、取税人たちも、百姓たちも、預言者のことばを聞くためにやってきた。一時は神からの厳粛な警告が彼らを驚かせた。多くの人々が悔い改めにみちびかれ、バプテスマを受けた。あらゆる階級の人々が、バプテスマのヨハネの宣言する王国に入るために、彼の要求に服従した。 多くの律法学者たちとパリサイ人たちがやってきて、罪を告白し、バプテスマを願った彼らは自分たちがほかの人たちよりもすぐれた人間であることをいばり、自分たちの敬虔さについて深い尊敬心を国民にいだかせていた。いま彼らの生活の不義の秘密がばくろされた。しかしヨハネはこれらの人々の多くが罪について真の自覚を持っていないことを、聖霊によって印象づけられた。彼らは日和見（ひよりみ）主義者だった。彼らは預言者の友人となって、きたるべき王から恩恵を得ようと望んだ。そし

てこの人気のある若い教師の手からバプテスマを受けることによって、民に対する自分たちの影響力を強めようと考えた。 ヨハネは、彼らに会うと、「まむしの子らよ、迫ってきている神の怒りから、おまえたちはのがれられると、だれが教えたのか。だから、悔改めにふさわしい実を結べ。自分たちの父にはアブラハムがあるなどと、心の中で思ってもみるな。おまえたちに言っておく、神はこれらの石ころからでも、アブラハムの子を起すことができるのだ」と痛烈に問いかけた（マタイ 3：7～9）。

ユダヤ人はイスラエルに対する永遠の恩恵についての神の約束を誤解していた。「主はこう言われる、すなわち太陽を与えて昼の光とし、月と星とを定めて夜の光とし、海をかき立てて、その波を鳴りとどろかせる者―その名は万軍の主という。主は言われる、『もしこの定めがわたしの前ですたれてしまうなら、イスラエルの子孫もすたって、永久にわたしの前で民であることはできない。』主はこう言われる、『もし上の天を量ることができ、下の地の基を探ることができるなら、そのとき、わたしはイスラエルのすべての子孫をそのもろもろの行いのために捨て去ると主は言われる』」（エレミヤ 31：35～37）。

ユダヤ人は、自分たちがアブラハムの直系の子孫であるということがこの約束を受ける資格であると考えていた。しかし彼らは神が明示された条件を見落していた。この約束をお与えになる前に、神は、「わたしは、わたしの律法を彼らのうちに置き、その心にしるす。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となると主は言われる。……わたしは彼らの不義をゆ るし、もはやその罪を思わない」と仰せになっていた（エレミヤ 31：33、34）、 心に神の律法をしるされる民に、神の恩恵が保証されている。彼らは神と一つである。ところがユダヤ人は神から離れていた。罪のために、彼らは神の刑罰の下に苦しんでいた。彼らが異教国家の支配下にある原因はここにあった。彼らの心は罪とがのために暗くなっていたが、昔神が非常に大きな恩恵をお与えになったので、彼らは自分たちの罪を大目にみていた。彼 らは自分たちが他国民よりもすぐれていて、神の祝福を受ける資格があるとうぬぼれてい た。

こうしたことは、「世の終りに臨んでいるわたしたちに対する訓戒のためである」（Ｉコリント 10：11）。われわれは、どんなにかたびたび神の祝福を誤解し、自分たちのうちに

何か良いところがあるから恵まれるのだとうぬぼれることだろう。神はわれわれのためにしたいとお思いになることをなさることができない。神の賜物は、われわれの自己満足を増長させ、われわれの心を不信と罪の中にかたくなにするために用いられる。　ヨハネは、イスラエルの教師たちの高慢心と利己心と残酷さは、彼らが正しい従順なアブラハムの子らである　よりはむしろまむしの子ら、民にとって致命的なわざわいである証拠だと彼らに宣言した。　彼らは自分たちが異教徒よりもずっとすぐれていると思っていたが、彼らが神から光を受け　ていたことを考えてみる時、彼らはその異教徒よりも悪いのであった。彼らは自分たちが切　り出された岩と掘り出された穴とを勘ていた（イザヤ 51：1 参照）。神はみこころを成鎚れるのに彼らをあてにしておられなかった。神は、アブラハムを異教の民の中から呼び出され　たように、他の人々を神の奉仕に召すこともおできになる。彼らの心はいまは砂漠（さばく） の石のようにいのちのないものにみえるかもしれないが、神のみたまは彼らをめざめさせて　みこころを行わせ、神の約束の成就を受けさせることができるのである。

「斧がすでに木の根もとに置かれている。だから、良い実を結ばない木はことごとく切られて、火の中に投げ込まれるのだ」と預言者は言った（マタイ　3：10）。木の価値は、その名によってではなく、その実によってきまる。もし実が無価値なら、名はその木が滅びるのを救うことができない。ヨハネは、神の前におけるユダヤ人の立場は、彼らの品性と生活とによって決定されるのだと宣言した。口に言うだけでは無価値である。もしユダヤ人の品性と生活が神の律法に一致していなければ、彼らは神の民ではない。 心をさぐるヨハネのことばに、聴衆は罪をさとった。彼らは、やってきて、「それでは、わたしたちは何をすればよいのですか」とたずねた。ヨハネは答えて、「下着を 2 枚もっている者は、持たない者に分けてやりなさい。食物を持っている者も同様にしなさい」と言った（ルカ　3：10、11）。彼はまた取税人たちには不正について、兵卒たちには暴力について警告した。

キリストの王国の民となった者はみな信仰と悔い改めとの証拠を示すであろうと、ヨハネは言った。彼らの生活には親切と正直と忠誠がみられるであろう。彼らは困っている人たちに奉仕し、神に献げ物を持参するであろう。彼らは家のない者を宿らせ、美徳と憐れみの模範を示すであろう。そのように、キリストに従う者たちは、人を生まれ変らせる聖霊の力

の証拠を示すであろう。毎日の生活に神の正義と憐れみと愛がみられるであろう。そうでなければ、彼らは火に投げ入れられるもみがらのようなものである。

「わたしは悔改めのために、水でおまえたちにバプテスマを授けている。しかし、わたしのあとから来る人はわたしよりも力のあるかたで、わたしはそのくつをぬがせてあげる値うちもない。このかたは、聖霊と火とによっておまえたちにバプテスマをお授けになるであろう」とヨハネは言った（マタイ 3：11）。 預言者イザヤは、神が「審判の霊と滅亡の霊とをもって」ご自分の民を不義からきよめられると宣言した。イスラエルに対する神のみこと　ばは、「わたしはまた、わが手をあなたに向け、あなたのかすを灰汁（あく）で溶かすよう　に溶かし去り、あなたの混ざり物をすべて取り除く」であった（イザヤ 4：4、1：　25）。罪にとって、それがどこにみいだされようと、「わたしたちの神は、実に、焼きつくす火であ　る」（ヘブル 12：29）。神のみたまは、その力に服するすべての者のうちにあって、罪を焼きつくす。しかしもし人が罪に執着するなら、その人は罪と一体となる。そのとき罪を滅ぼ　す神の栄光は、当然その人も滅ぼしてしまうのである。ヤコブは、天使と一晩格闘したあと　で、「わたしは顔と顔をあわせて神を見たが、なお生きている」と叫んだ（創世記 32：30）。ヤコブはエサウに対する行為において大きな罪を犯した。だが彼は悔い改めていた。彼の罪　とがはゆるされ、その罪はきよめられた。だから彼は神のご臨在のあらわれに耐えることが　できたのである。しかし人が故意に罪を心に宿していながら神の前に出た時、その人はかな　らず滅ぼされた。キリスト再臨のときに、悪人は主イエスの「口の息をもって」殺され、
「来臨の輝きによって」滅ぼされる（Ⅱテサロニケ 2：8）。神の栄光の光は、義人にはいのちを与えるが、悪人を滅ぼすのである。

バプテスマのヨハネの時代に、キリストは神の品性をあらわすお方として現れようとしておられた。人々はイエスの前に出ると自分の罪が明らかにされるのであった。罪からきよめられたいと願った時にのみ彼らはイエスとのまじわりに入ることができるのであった。心のきよい者だけがイエスの前に立つことができるのであった。 このようにバプテスマのヨハネは、神のメッセージをイスラエルに宣告した。多くの者が彼の教えに注意した。多くの者が、従うために一切を犠牲にした。群衆はここかしこへとこの新しい教師について行き、彼

がメシヤであるかも知れないという望みをいだいている者が少なくなかった。しかしヨハネは、人々が自分に心を向けるのを見ると、あらゆる機会をとらえて彼らの信仰をきたるべきお方に向けようとつとめた。

第 11 章バプテスマ

荒野の預言者とその驚くべき布告についての知らせは、ガリラヤじゅうにひろがった。彼の叫びは、どんな遠い山村の百姓にも、海辺の漁師たちにも伝わり、単純で熱心なこれらの人々の心の中に最も真実な反響がみられた。ナザレでもヨセフのものであった大工の仕事場にこの話がつたえられ、イエスは神の召しを認められた。イエスの時がきていた。毎日の労働から離れて、イエスは母に別れを告げ、ヨルダン川に集まって行く同胞の足跡に従われた。 イエスとバプテスマのヨハネは従兄弟（いとこ）で、2 人は誕生の事情によって密接な関係があった。だが 2 人ともまだ互いに面識はなかった。イエスはガリラヤのナザレで生活され、ヨハネはユダヤの荒野で生活していた。まったく異なった環境の中にあって、彼らは世間から遠ざかって生活し、お互いの連絡はなかった。このことは摂理のうちに定められていた。2 人がお互いの主張を支持するために互いにしめし合わせたと非難される根拠は何もないようにされた

ヨハネは、イエスの誕生をさし示したいろいろな出来事をよく知っていた。彼は、イエスが子供のころエルサレムにおいでになったことや、その時ラビの学校で起こったことをきいていた。彼はイエスの罪のない生活を知り、イエスがメシヤであると信じていたが、イエスがメシヤであることについて、絶対的な確証を持っていたわけではなかった。イエスが長年人目につかずにすごされ、ご自分の使命について特別な証拠をお示しにならなかったことが、彼は本当に約束されたお方だろうかという疑問の根拠となった。しかしバプテスマのヨハネは、神がすべてを明らかにされる時があることを信じ、信仰をもって待った。メシヤがヨハネの手でバプテスマを受けることを求められ、その時彼が神であられる証拠が与えられるということが、ヨハネに示されていた。このようにしてヨハネはメシヤを民の前に示すことができるのであった。

イエスがバプテスマを受けにおいでになった時、ヨハネはイエスのうちにこれまでどんな人にもみたことのない純潔な品性をみとめた。イエスのご臨在の雰囲気そのものが神聖でおそれ多い気持を感じさせた。ヨルダン川のヨハネのまわりに集まってきた多くの人々の中

に、彼は暗い罪悪の話をきき、数知れない罪の重荷におしつけられている魂を見た。しかしこんなに神聖な雰囲気をただよわせている人にはこれまで会ったことがなかった。こうしたことはすべてメシヤについてヨハネに示されていたところと一致していた。しかしヨハネはイエスのたのみに応ずることをちゅうちょした。罪人である自分がどうして罪のないお方にバプテスマを施すことができようか。悔い改める必要のないお方が、不義を告白して洗いきよめる儀式をどうしてお受けになることがあろうか。

イエスがバプテスマをたのまれると、ヨハネはおしとどめて「わたしこそあなたからバプテスマを受けるはずですのに、あなたがわたしのところにおいでになるのですか」と叫んだ（マタイ 3：14）。イエスは、きっぱりとしかしやさしい威厳をもって、「今は受けさせてもらいたい。このように、すべての正しいことを成就するのは、われわれにふさわしいことである」と答えられた（マタイ 3：15）。そこでヨハネは譲歩して、救い主をヨルダン川にみちびき、水の下に沈めた。「イエスはバプテスマを受けるとすぐ、水から上がられた。すると、見よ、天が開け、神の御霊（みたま）がはとのように自分の上に下ってくるのを、ごらんになった」（マタイ 3：16）。

イエスは、ご自分のために、罪の告白としてバプテスマをお受けになったのではなかった。イエスはご自分を罪人と同じにごらんになって、われわれのとるべき手段をとられ、われわれのなすべきわざをされたのであった。バプテスマ後のイエスの苦難と忍耐の一生もまたわれわれの模範であった。 水からあがってこられると、イエスは祈りのために川の岸にひざまずかれた。一つの新しい重要な時代がイエスの前に開かれようとしていた。イエスはいきもっと広い舞台に立って、ご自分の生涯の戦いに入ろうとしておられた。イエスは平和の君であったが、彼がこられたことは宣戦布告のようなものであったにちがいない。イエスが建設するためにおいでになった王国は、ユダヤ人が望んでいた王国とは正反対であった。イスラエルの儀式と制度の基であられたお方が、その敵また破壊者としてみられるようになるのである。シナイ山で律法を布告されたお方が、違反者として宣告されるのである。サタンの力をうち破るためにおいでになったお方が、ベルゼブルと非難されるのである。地上ではだれ 1 人イエスを理解した者がなく、公生涯の間もなお 1 人で歩まれねばならない。イエス

の一生の間、その母と兄弟たちは彼の使命を理解しなかった。弟子たちさえ、イエスを理解しなかった。イエスは、神と一つのお方として、永遠の光のうちに住んでおられたが、地上の生涯は孤独のうちに送られねばならない。

イエスは、われわれと一つになって、われわれの不義と苦悩の重荷を負われねばならない。罪のないお方が罪の屈辱を感じられねばならない。平和を愛されるお方が争いと共に住み、真実が虚偽と、純潔が邪悪と共に住まねばならない。律法を犯したために生じたあらゆる罪、あらゆる不和、あらゆるけがれた欲がイエスの心を苦しめた。 イエスは 1 人で道を歩み、1 人で重荷を負われねばならない。栄光をぬいで、人間の弱さを着られたイエスの上にこの世のあがないがおかれねばならない。イエスはすべてそうしたことを見、また感じられたが、彼の決意は固かった。堕落した人類の救いがイエスの腕にかかっていたので、彼は手をさしのべて大能なる愛の神のみ手をにぎられた。 救い主が魂をそそいで祈られる時、その目は天を見通しておられるようにみえる。罪が人々の心を固くしたことも、彼らがイエスの使命をみとめて救いの賜物を受けることが困難なこともイエスはよくご存じである。彼らの不信にうち勝ち、サタンが彼らをとりこにしている鎖をたち切り、彼らのために破壊者を征服する力を、イエスは天父に懇願される。み子イエスのうちにある人性を神が受け入れられるという証拠を、 イエスはお求めになる。

天使たちはこのような祈りをこれまで聞いたことがなかった。彼らは、愛する指揮官イエスに、保証と慰めのメッセージを伝えたいと熱望する。だがそれはできない。天父がご自身でみ子の祈願に答えられるのである。み座から直接に神の栄光が輝き出る。天が開け、いとも清い光がはとのような形をなして、救い主の頭上にくだる。それは柔和で心のへりくだったお方であるイエスにふさわしい象徴である。 ヨルダン川のおびただしい群衆の中で、ヨハネ以外にはこの天の光景をみとめた者は、ほとんどいなかった。しかし神のご臨在の荘厳さが会衆の上にとどまった。人々はだまってキリストをみつめていた。そのお姿は神のみ座をいつもとりまいている光を浴びていた。上を向かれたイエスのお顔は、これまで人の顔にみられたことのない栄光に輝いた。開かれた天から一つの声がくだって、「これはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である」と言うのがきこえた（マタイ 3：17）。

この確認のことばは、その光景を見た人々のうちに信仰心を起こし、また使命のために救い主を力づけるために与えられたのであった。不義の世の罪がキリストの上におかれたにもかかわらずまた屈辱をしのんでわれわれの堕落した性質をおとりになったにもかかわらず天からの声は、イエスを永遠なる神のみ子と宣言した。 イエスが嘆願者としてひざまずき、涙ながらに天父の是認を懇願しておられるのを見て、ヨハネは深く感動した。神の栄光がイエスをとりかこみ、天からの声がきこえた時、ヨハネは神が約束しておられたしるしをみとめた。自分がバプテスマをさずけたお方が世のあがない主であることを彼は知った。聖霊がヨハネの上に下った。彼は手をさしのべてイエスを指さし、「見よ、世の罪を取り除く神の小羊」と叫んだ（ヨハネ 1：29）。

聴衆の中の誰も、またこのことばを語った彼自身さえ、「神の小羊」というこのことばの重大な意味を認めていなかった。モリア山上で、アブラハムは息子から、「燔祭の小羊はどこにありますか」ときかれた。父は「子よ、神みずから燔祭の小羊を備えてくださるであろう」と答えた（創世記 22：7、8）。そうして、イサクの代りに天から備えられた牡（お）羊に、アブラハムは人類の罪のために死なれるお方の象徴を見た。聖霊はイザヤを通し、例を用いて、救い主のことを、「ほふり場にひかれて行く小羊のように」「主はわれわれすべての者の不義を、彼の上におかれた」と預言した（イザヤ 53：7、6）。しかしイスラエルの民はこの教訓を理解していなかった。彼らの多くは、いけにえの献げ物について、異教徒たちがいけにえについて考えているのとまったく同じように、神をなだめるための献げ物という考え方をしていた。神は、神と人々をやわらがせる賜物が神ご自身の愛から与えられることを彼らに教えたいと望まれた。

ヨルダン川で、イエスに「これはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である」と言われたことばは、全人類を含んでいる（マタイ 3：17）。神はわれわれの代表者としてのイエスに語られた。どんなに罪や欠点をもっていても、われわれは無価値なものとして捨てられることはない。「神は愛するみ子によってわたしたちを受け入れてくださった」（エペソ 1：6・英語訳聖書）。キリストの上にくだった栄光は、われわれに対する神の愛の保証である。それは祈りの力について、すなわち人間の声が神の御耳にとどくことと、われわれの

祈願が天の宮廷に受け入れられることとを告げている。罪によって、地は天から切り離され、天との交わりから遠ざけられた。だがイエスは地をもう 1 度栄光の天と結びつけられた。イエスの愛は人類をとりまき、最高の天に達した。開かれた門から救い主の頭上にさした光が、試みに抵抗するために助けを祈るとき、われわれの上にさすのである。イエスに語られたみ　声が、信じている一人ひとりにむかって「これはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者　である」と言われるのである。

「愛する者たちよ。わたしたちは今や神の子である。しかし、わたしたちがどうなるのか、まだ明らかではない。彼が現れる時、わたしたちは、自分たちが彼 に似るものとなることを知っている。そのまことの御姿を見るからである」（Ｉヨハネ 3：2）。われらのあかない主が道をお開きになったので、どんなに罪深い者も、どんなに困っている者も、またどんなにしいたげられ、あなどられている者も、天父に近づくことができる。だれでもみな、イエスが備えに行かれた住居をわが家とすることができる。「聖なる者、まことなる者、ダビデのかぎを持つ者、開けばだれにも閉じられることがなく、閉じればだれにも開かれることのない者が、次のように言われる。……見よ、わたしは、あなたの前に、だれも閉じることのできない門を開いておいた」（黙示録 3：7、8）。

第 12 章試み

「さて、イエスは聖霊に満ちてヨルダン川から帰り、荒野を……御霊にひきまわされ」た（ルカ 4：1、2）。マルコのことばはもっと意味が深い。「それからすぐに、御霊がイエスを荒野に追いやった。イエスは 40 日のあいだ荒野にいて、サタンの試みにあわれた。そして獣もそこにいたが、御使たちはイエスに仕えていた」「そのあいだ何も食べ」られなかった（マルコ 1：12、13、ルカ 4：2）。 イエスが試みられるために荒野へ導かれた時、彼は神のみたまによって導かれたのであった。イエスはご自分から試みを招かれなかった。イエスが荒野へ行かれたのは、1 人になって、ご自分の使命と働きとを熟考するためであった。断食と祈りとによって、イエスはご自分がたどらねばならない血みどろの道のために、準備されるのであった。しかしサタンは、救い主が荒野へ行かれたことを知って、これこそイエスに近づく最上の時だと思った。

世の重大な形勢は、光の君と暗黒の王国の指導者との争闘にかかっていた。人を罪に誘惑してから、サタンはこの地上を自分のものとして主張し、自らこの世の君と称した。彼は人類の父母を自分の性質に従わせたので、ここに自分の王国を築こうと考えた。彼は、人類が彼を自分たちの君主にえらんだと宣言した。人類を支配することによって、彼はこの世の主権を保った。キリストはサタンの主張が誤りであることを証明するためにおいでになった。人の子として、キリストは神に対する忠誠を保たれるのであった。そのことによって、サタンは人類を完全に支配していないこと、世に対する彼の主張はうそであることが示されるのであった。サタンの権力から救われたいと望む者はみな自由にされるのであった。罪のためにアダムが失った主権は回復されるのであった。

エデンで、蛇に向かって、「わたしは恨みをおく、おまえと女とのあいだに、おまえのすえと女のすえとの間に。彼はおまえのかしらを砕き、おまえは彼のかかとを砕くであろう」と宣告されて以来、サタンは世に対する絶対的な支配力を持つことができないことを知っていた（創世記　3：15）。人類の中には、サタンの主権に抵抗する一つの力が働いているのがみられた。非常な興味をもってサタンは、アダムとその息子たちがささげるいけにえを見守

った。このような儀式の中に、彼は地と天との間の交わりの象徴を認めた。彼はこの交わりをたち切ることにとりかかった。サタンは神の悪口を言い、救い主をさし示している儀式を曲解させた。人類は、自分たちが滅びるのを喜ぶお方として神を恐れるようになった。神の愛をあらわすはずだったいけにえが、神の怒りをなだめるためだけにささげられた。サタンは自分の支配を人々におしつけるために、人々の悪い欲望をかきたてた。書かれた神のみことばが与えられた時、サタンは救い主の来臨についての預言を研究した。サタンは、キリストがこられた時、人々がキリストをこばむように、これらの預言について人々を盲目にするために、各時代にわたって働いた。

イエスがお生れになった時、サタンは彼の主権について反論するために神から任命されたお方がこら れたことを知った。生まれたての王の権威について証言した天使たちのことばに、サタンはふるえた。サタンは、キリストが天父のいとし子として天で占めておられた立場をよく知っていた。神のみ子が人としてこの世においでになったということが、彼の心に驚きと不安とを満たした。彼はこの大きな犠牲の奥義をはかり知ることができなかった。彼の利己的な魂はあざむかれた人類へのこのような愛を理解することができなかった。天の栄光と平和、神との交わりの喜びは、人間にはかすかにしか理解されていなかったが、おおうことをなすケルビムであったルシファーにはよくわかっていた。天を追われてから、サタンは、ほかの者たちを自分と同じように堕落させることによって報復しようと決心していた。人々に天の事物を軽視させ、心を地上のものに向けさせることによって、彼はこのことをするのであった。

天の司令官が人々の魂をご自分の王国に導かれるには妨害がないわけではなかった。彼は、ベッレヘムで赤ん坊だった時から、たえずサタンに攻撃された。神のみかたちは、キリストのうちにはっきりとあらわれていたので、キリストを征服することが、サタンの会議できまった。どんな人間もこの世に生まれて、欺瞞者の力からのがれることはできなかった。悪の同盟勢力はイエスとの戦いに従事し、できるならばイエスにうち勝とうとして、イエスの道に殺到した。 救い主のバプテスマの時、サタンはその目撃者たちの中にいた。サタンは天父の栄光がみ子をおおっているのを見た。彼はエホバのみ声がイエスの神性を証明するの

を聞いた。アダムが罪を犯して以来、人類は神との直接の交わりから断たれ、天と地との交わりはキリストを通して行われていた。しかしいまイエスが「罪の肉の様」をとっておいでになったので、天父は自らお語りになった（ローマ 8：3）。神は、以前にはキリストを通して人類と交わられたが、こんどはキリストのうちにあって人類と交わられた。サタンは、神が罪を憎まれるあまり、天と地が永遠に隔離されるように望んでいた。だがいま神と人との間のつながりが回復されたことが明らかになった。

サタンは自分が征服するか征服されるかのどちらかであることをさとった。戦いの形勢は味方の天使たちにまかせておけないほど重大であった。彼が自ら戦いを指揮しなければならない。背信の全精力が神のみ子に向かって集中された。キリストは地獄のあらゆる武器のまととなられた。 キリストとサタンとのこの戦いを、自分自身の生活に特別な関係がないもののように見ている人が多い。彼らにとってこの戦いは興味がない。だがどの人の心の領分でもこの争闘がくりかえされているのである。人は、悪の隊列から離れて、神の奉仕に加わろうとする時、必ずサタンの攻撃に遭遇する。キリストが抵抗された試みは、われわれが抵抗するには非常に困難にみえる試みである。キリストの品性がわれわれの品性にまさっているだけ余計にキリストに対する試みは強かった。世の罪という恐るべき重さを身に負って、キリストは、食欲について、世への愛着について、知りながら罪を犯すようになる自己表示への愛着について、試みに耐えられた。これらはアダムとエバを敗北させた試みであり、また容易にわれわれをうち負かす試みである。

サタンは、神の律法が不公正で従うことのできないものであるという証拠として、アダムの罪を指摘していた。キリストは、われわれの人性をもって、アダムの失敗をあがなわれるのであった。しかし、アダムが誘惑者から攻撃された時には、彼には罪の影響がすこしもなかった。彼は完全な人間としての力をもっていて、心もからだも活力に満ちていた。彼はエデンの栄光にとりかこまれ、天使たちと毎日交わっていた。イエスがサタンと争うために荒野へ入って行かれた時には、アダムの時のようではなかった。4000 年間にわたって、人類は体力も知力も道徳価値も低下していた。しかもキリストは退歩した人類の弱さを身につけ

られた。こうすることによってのみキリストは人類を堕落の一番深い底から救うことがおできになるのであった。

キリストが試みに負けることは不可能だったのだと主張する人が多い。もしそうなら、キリストはアダム の立場に置かれることはできなかったし、アダムが得られなかった勝利を得ることもおできにならなかったであろう。もしわれわれが何らかの意味でキリストよりもきびしい戦いをたたかわねばならないとしたら、キリストはわれわれを一救うことがおできにならないであろう。だが救い主は、罪の負債ごと人性をおとりになった。彼は試みに負ける可能性のまま人間の性質をおとりになった。キリストが耐えられなかったことで、われわれの耐えねばならないことは何一つない。

エデンのアダム、エバと同じように、キリストにとっても、食欲が最初の大きな試みの基盤であった。堕落がはじまったちょうどその点から、われわれのあがないの働きは始められねばならない。アダムが食欲をほしいままにして堕落したように、キリストは食欲を制することによって勝利なさらねばならない。「40 日 40 夜、断食をし、そののち空腹になられた。すると試みる者がきて言った、『もしあなたが神の子であるなら、これらの石がパンになるように命じてごらんなさい。』イエスは答えて言われた、『「人はパンだけで生きるものではなく、神の口から出る一つ一つの言で生きるものである」と書いてある』」（マタイ 4:2～4）。 アダムの時からキリストの時まで、放縦のために食欲と情欲の力が増大し、ついにはそうした欲がほとんど無制限な支配力を持つまでになっていた。こうして人々は、品性が 低下し、病気にかかり、独力で勝利することは不可能だった。キリストは、人のために最も はげしい試みに耐えて勝利された。彼は、われわれのために、飢えや死よりも強い自制心を 働かせられた。そしてこの最初の勝利の中に、暗黒の勢力とわれわれとのすべての戦いにみ られるいろいろなほかの問題が含まれていた。

イエスが荒野へ入って行かれた時、彼は天父の栄光につつまれた。神との交わりに心を奪われておられたので、イエスは人間の弱さから高められた。しかし栄光が去ると、彼は試みと戦うために残された。試みは刻刻にイエスに迫っていた。イエスの人間としての性質は、彼を待ち受けている戦いにしりごみした。40 日の間、彼は断食し、祈られた。飢えのために

弱くなり、衰え、精神的苦悩のために疲れ、やつれはてて、「彼の顔だちは、そこなわれて人と異なり、その姿は人の子と異なっていた」（イザヤ 52：14）。いまこそサタンの機会であった。いまこそキリストにうち勝てると、サタンは想像した。

救い主の祈りに答えるかのように、天使の姿をした者が天から救い主のもとにやってきた。彼は、キリストの断食が終わったことを宣言するようにと神から任務をさずけられてきたと主張した。アブラハムがイサクをささげようとした時、神が天使を送ってその手をとどめられたように、天父はキリストが自ら進んで血染めの道にはいられたことに満足されて、キリストを救うために天使をおつかわしになったというのが、イエスにもたらされたことばであった。救い主は飢えのために弱り、食物を切望しておられた。その時突然にサタンがイエスを襲ったのである。荒野に点々と横たわって、あたかもパンのようにみえる石を指さして、誘惑者は、「もしあなたが神の子であるなら、これらの石がパンになるように命じてごらんなさい」と言った（マタイ 4：3）。

彼は光の天使をよそおっているが、「もしあなたが神の子であるなら」というこの最初のことばにその本性があらわれている。ここに信用しない気持がほのめかされている。もしイエスがサタンの言う通りのことをされたら、それは疑いの気持を認めたことになる。誘惑者は世の初めに人類をうまく堕落させたのと同じ手段でキリストを倒そうとはかる。エデンの園でサタンは何と巧妙にエバに近づいたことだろう。「園にあるどの木からも取って食べるなと、ほんとうに神が言われたのですか」（創世記 3：1）。ここまでは、誘惑者のことばは本当であった。しかしこのことばを語る彼の調子の中に、神のみことばに対する軽蔑がかくされていた。かくされた否定、神の真実への疑いがあった。サタンは、神がみことば通りにはなさらないだろう、こんな美しい果実を与えないでおくことは人に対する神の愛とあわれみに反することだ という考え方を、エバの心に吹きこもうとした。同じようにいま誘惑者は、彼自身の感情をキリストに吹きこもうとする。「もしあなたが神の子であるなら」。このことばはサタンの心に苦痛を与えた。彼の声の調子には強い懐疑心があらわされている。神がご自分の子をこんな目にあわされるだろうか。神はみ子を食物もなく、友もなく、慰めもないままに野獣といっしょに荒野に放り出したままでおかれるだろうか。神はみ子をこん

な目にあおせるつもりではなかったのだと、サタンはほのめかす。「もしあなたが神の子であるなら」このさし迫った飢えからまぬかれることによって、あなたの力を示しなさい。この石がパンとなるように命じなさい。

「これはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である」との天の声はまだサタンの耳になりひびいている（マタイ 3：17）。しかし彼は、キリストにこのあかしを信じさせまいと決心していた。神のこのみことばは、キリストにとってご自分の聖なる使命についての保証であった。 キリストは 1 人の人間として人々の中に住むためにおいでになったが、キリストが天とのつながりをもっておられることを宣言したのはこのことばであった。キリストにこのことばを疑わせようとするのがサタンの目的だった。もし神に対するキリストの確信を動揺させることができれば、争闘の全体を通じて勝利は自分のものになるということをサタンは知っていた。そうしたら、サタンはイエスにうち勝つことができるのである。サタンは、キリストが落胆と極度の空腹に迫られて、天父への信仰を失い、ご自分のために奇跡を行われるように望んだ。もしキリストがそうされたら、救いの計画はこわれてしまったのである。

サタンと神のみ子が争闘において初めて顔を合わせた時、キリストは天使軍の司令官であった。そして天の反乱の指導者サタンは追い出された。いま 2 人の立場は反対になっているようにみえ、サタンは有利に見える自分の立場を利用しようとする。天の最も有力な天使の 1 人が天から追放されたと、彼は言う。イエスの様子は、神から見放され、人から見捨てられたその堕落天使であることを示しているというのである。もしイエスが神のみ子なら、「これらの石がパンになるように命じてごらんなさい」とのサタンの主張を、奇跡を行うことによって証明することができるだろう（マタイ 4：3）。このような創造力の行為は神性についての決定的な証拠となり、争闘を終わらせるであろうと、誘惑者は主張する。

イエスは心の戦いなしにはこの大欺瞞者のことばをだまってきくことがおできにならなかった。しかし神のみ子はご自分の神性をサタンに証明したり、ご自分の屈辱の理由を説明したりなさらないのであった。反逆者の要求に応じてみても、人類のためにも、あるいは神のみ栄えのためにも、何の益も得られない。もしキリストが敵のそそのかしに応じられたら、

サタンはさらに、あなたが神のみ子であると信じられる証拠を示せと言っただろう。証拠はサタンの心の中にある反逆の力をうち破るのに役立たなかったであろう。だからキリストはご自分の利益のために神の力をお用いにならないのであった、キリストはわれわれが試みに会わねばならないのと同じように試みに会い、信仰と服従の模範を示すために、おいでになったのである。この荒野においても、またその後の地上生活のどんな時にも、キリストはご自分のために奇跡を行われなかった。イエスのすばらしいみわざはみな他人の益のためであった。イエスは初めからサタンを認めておられたが、挑発されて彼と論争するようなことをなさらなかった。天からの声の記憶に力づけられて、キリストは天父の愛に信頼しておられた。彼は試みにかかわり合おうとなさらなかった。 イエスは聖書のみことばをもってサタンに応じられた。「こう書かれている」と、イエスは言われた。試みのたびに、イエスの戦いの武器は神のみことばであった。サタンはキリストに神性の証拠として奇跡を求めた。しかしどんな奇跡よりも力のあるもの、すなわち「主はこう言われる」ということばに対する固い信頼こそ反論のできない証拠であった。キリストがこの立場を持続されるかぎり、誘惑者は勝つことができなかった。

キリストが最もはげしい試みに攻められたのは、最も弱っておられた時であった。こうしてサタンは、勝とうと思った。この方法によって、彼は人類に勝利してきた。体力が衰え、意志力が弱り、信仰が神のうちに安住しなくなった時、正しいことのために長い間勇敢に戦ってきた人々が征服された。モーセはイスラエルの 40 年間の放浪に疲れはてていた。その時、彼の信仰は、一瞬無限の力を手放した。彼はちょうど約束の地の境界で失敗した。エリヤもそうだった。彼はかつてアハブ王の前に恐れるところなく立ち、450　人のバアルの預言者たちを先頭にしたイスラエルの全国民を前にして立った。偽預言者たちが殺され、民が神への　忠誠を宣言したあのカルメル山上の恐ろしい日の後に、エリヤは偶像礼拝者のイゼベルにお　どかされていのちからがら逃げた。このようにサタンは人間の弱味につけこんできた。今後　も彼は同じ方法で働くであろう。雲におおわれ、周囲の事情に困惑し、あるいは貧乏や困苦　に苦しめられている時にはいつでも、サタンは試み、困らせようと待ちかまえている。彼は　われわれの品性の弱点を攻撃する。彼は、神がそのような物事の状態が存在することをおゆ

るしになったことについて、神に対するわれわれの信頼心を動揺させようとする、われわれは神を信頼しないように、神の愛を疑うように誘惑される。サタンは、キリストのところへやってきたように、しばしばわれわれのところへやってきて、われわれの欠点や弱さを目の前に並べたてる。彼は、魂を落胆させ、神に対するわれわれの信頼心を滅ぼそうと望んでいる。そうすれば確実に魂を餌食とすることができるのである。もしわれわれがイエスと同じようにサタンに対するならば、われわれは多くの敗北からまぬかれるのである。敵とかかわり合うことによって、われわれは相手に有利な立場を与えるのである。キリストは誘惑者に、「人はパンだけで生きるものではなく、神の口から出る一つ一つの言で生きるものである」と言われたが、それは、それより 1400 年前にキリストがイスラエルに語られたことばのくりかえしであった（マタイ 4：4）。「あなたの神、主がこの 40 年の間、荒野であなたを導かれた……主はあなたを苦しめ、あなたを飢えさせ、あなたも知らず、あなたの先祖たちも知らなかったマナをもって、あなたを養われた。人はパンだけでは生きず、人は主の口からでるすべてのことばによって生きることをあなたに知らせるためであった」（申命記 8：2、3）。

荒野で食物を得る方法が全くなくなった時、神はご自分の民に天からマナをお送りになった。そしてたえず十分な食物が与えられた。このような食物が与えられたのは、人々が神によりたのみ、神の道を歩むかぎり、神は彼らを見捨てられないということを教えるためであった。救い主は、ご自分がイスラエルにお教えになった教訓をいま実行された。神のみことばによって、助けがヘブルの軍勢に与えられたが、同じみことばによってイエスにも助けが与えられるのであった。イエスは救いがもたらされる神の時を待たれた。彼は神に従って荒野におられたので、サタンのことばに従って食物を得ようとされなかった。宇宙の注視の中で、イエスは神のみこころからすこしでも離れるよりは、どんな目にでも会う方がわざわいでないということを証明された。

「人はパンだけで生きるものではなく、神の口から出る一つ一つの言で生きるものである」（マタイ 4：4）。キリストに従う者にとって、神に仕えることと世俗の事業を進めることとが両立しない場合がしばしばある。おそらく神のあるはっきりした戒めに従えば生活の

手段がたたれるようにみえるであろう。サタンは、その人に良心的な確信を犠牲にしなければならないと信じこませようとするであろう。だがこの世において信頼できる唯一のものは神のみことばである。「まず神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば、これらのものは、すべて添えて与えられるであろう」（マタイ　6：33）。この世においてさえ、天の父なる神のみこころから離れることはわれわれのためにならない。神のみことばの力を知る時、われわれは食物を手に入れたり、自分のいのちを救ったりするためにサタンのそそのかしに従うようなことをしない。われわれの唯一の質問は、神のご命令は何か、神の約束　は何かということである。これがわかれば、われわれはそのご命令に従い、その約束に信頼するのであ る。

サタンとの最後の大争闘において、神に忠実な者は、この世の一切の支持がたたれるのを見る。彼らは地上の権力に従うために神の律法を破ろうとしないので、売ることも買うことも禁じられる。ついには、彼らを殺せとの布告が出される（黙示録 13：11～17 参照）。しかし忠実な者には、「このような人は高い所に住み、堅い岩はそのとりでとなり、そのパンは与えられ、その水は絶えることがない」との約束が与えられている（イザヤ 33：16）。この約束によって神の子らは生きるのである。この地上がききんに荒らされる時、彼らは養われる。「彼らは災の時にも恥をこうむらずききんの日にも飽き足りる」（詩篇 37：19）。預言者ハバククは、その報難の日を予期したが、彼のことばは教会の信仰を表わしている。「いちじくの木は花咲かずぶどうの木は実らずオリブの木の産はむなしくなり、田畑は食物を生ぜずおりには羊が絶え、牛舎には牛がいなくなる。しかし、わたしは主によって楽しみ、わが救の神によって喜ぶ」（ハバクク 3：17、18）。 主の最初の大きな試みから学ぶべきすべての教訓の中で、食欲と情欲との抑制に関係のあるものほど重要なものはない。各時代を　通じて、肉の性質に訴える試みは、人類を腐敗させ堕落させるのに非常に効果的であった。　サタンは、はかり知れない賜物として神が人間にお与えになった知的道徳的能力を滅ぼすた　めに、不節制を通して働く。こうして人間は永遠の価値をもった事物を認識することができ　なくなる。肉欲の放縦を通して、サタンは魂から神のみかたちの面影をすっかり消し去ろう　とする。

キリストの初臨の時存在していた無制限な放縦と、その結果である病気と堕落とは、キリストの再臨前にはなはだしい悪とともにもう 1 度みられる。キリストは、世の状態がノアの洪水（こうずい）前の時代や、ソドム、ゴモラの時代と同じようになると断言しておられる。心の中に思うこと考えることはみないつも悪いことばかりである。われわれはいまその恐るべき時の間近に生きているので、救い主の教訓をしっかり心にきざまねばならない。キリストが耐えられた言いようのない苦悩によってのみ、われわれはでたらめな放縦の悪を評価できるのである。キリストの模範は、食欲と情欲とを神のみこころに従わせることによってのみわれわれは永遠のいのちの望みを持つことができるということを明らかにしている。

自分自身の力では、われわれの堕落した性質のやかましい要求をこばむことができない、この道から、サタンは試みをもってやってくる。キリストは敵が、遺伝的な弱点に乗じ、神に信頼をおいていない人々をいつわりのほのめかしによって、わなにおとし入れるためにどの人のところにもやってくることをご存じであった。そこで主は、人の通らねばならない道を自らお通りになって、われわれが勝利する道をお備えになった。サタンとの戦いにわれわれが不利な立場に立つことは主のみこころではない。主はわれわれが蛇の攻撃におびえたり落胆したりすることを望まれない。「勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝っている」と主は言われる（ヨハネ 16：33）。

食欲の力と戦っている者は試みの荒野における救い主を見なさい。「わたしは、かわく」と叫んで、十字架上に苦しまれたイエスを見なさい（ヨハネ 19：28）。彼はわれわれが耐えることのできるすべてのことに耐えられた。彼の勝利はわれわれのものであるイエスは天父　の知恵と力にたよられた。彼は、「主なる神はわたしを助けられる。それゆえ、わたしは恥　じることがなかった。……わたしは決してはずかしめられないことを知る。……見よ、主な　る神はわたしを助けられる」と断言しておられる。イエスはまたご自身の模範をさし示して、われわれにこう言われる、「あなたがたのうち主を恐れ、そのしもべの声に聞き従い、暗い　中を歩いて光を得なくても、なお主の名を頼み、おのれの神にたよる者はだれか」（イザヤ50：7～10）。

「この世の君が来るからである。だが、彼はわたしに対して、なんの力もない」とイエスは言われた（ヨバネ 14：30）。イエスの中にはサタンの誰弁（きべん） に応ずるものは何もなかった。イエスは罪に同意されなかった。一つの思いにおいてさえ、彼は試みに負けたまわなかった。われわれもそうなれるのである。キリストの人性は神性と結合していた。イエスは聖霊の内住によって戦いに備えられた。しかもイエスはわれわれを神のこ性質にあずかる者とするためにおいでになったのである。われわれが信仰によってキリストにつながっているかぎり、罪はわれらの上に権をとることはできない。神はわれわれが品性の完全に到達できるように、われらの中にある信仰の手を求め、それをみちびいてキリストの神性をしっかり把握（はあく）させてくださるのである。

しかもキリストは、これが達成される方法をわれわれにお示しになった。イエスはサタンとの戦いにどんな手段で勝利されただろうか。神のみことばによってである。みことばによってのみ彼は試みに抵抗することがおできになった。「こう書かれている」とイエスは言われた。「尊く、大いなる約束が、わたしたちに与えられている。それは、あなたがたが、世にある欲のために滅びることを免れ、神の性質にあずかる者となるためである」（Ⅱペテロ 1：4）。

神のみことばの中にある約束はどれもみなわれわれのものである。「神の口から出る一つ一つの言」によってわれわれは生きるのである（マタイ 4：4）。試みに攻撃された時には、周囲を見たり、自己の弱さを見たりしないで、みことばの力を見なさい。その力はすべてあなたのものである。詩篇記者はこう言っている、「わたしはあなたにむかって罪を犯すことのないように、心のうちにみ言葉をたくわえました」「あなたのくちびるの言葉によって、わたしは不法な者の道を避けました」（詩篇 119：11、17：4）。

第 13 章勝利

「それから悪魔は、イエスを聖なる都に連れて行き、宮の頂上に立たせて言った、『もしあなたが神の子であるなら、下へ飛びおりてごらんなさい。 「神はあなたのために御使たちにお命じになると、 あなたの足が石に打ちつけられないように、 彼らはあなたを手でささえるであろう」 と書いてありますから』」（マタイ 4：5、6）。 サタンはいま自分がイエスご自身の立場に立ってイエスに対しているつもりである。ずるい敵は神の口からでたみことばを自分から持ち出す。彼はまだ光の天使の様子をしていて、自分が聖書に通じ、そこに書かれていることの意味を理解していることを明らかにする。前にイエスがご自分の信仰を裏づけるために神のみことばを用いられたように、いま誘惑者サタンは自分の欺瞞を有利にするために神のみことばを用いる。サタンは、これまでイエスの忠誠をためしたにすぎないのだと主張し、いまイエスのしっかりした験をほめる。救い主が神への信頼を示されたので、サタンはイエスがご自分の信仰についてさらにほかの証拠を示されるようにすすめる。

しかしふたたびその試みには、「もしあなたが神の子であるなら」という不信のほのめかしが前置きされている。キリストは、この「もし」に答えるように誘惑されたが、この疑いをほんの少しでも受け入れようとはされなかった。イエスは、サタンに証拠をみせるためにご自分のいのちを危険にさらそうとはされなかった。 サタンが、「あなたのために御使たちにお命じになる」との約束を引用した時、彼は「あなたの歩むすべての道」すなわち神のえらばれるすべての道において、「あなたを守らせられるからである」ということばをはぶいた（マタイ 4：6、詩篇 91：11）。イエスは服従の道からはずれることをこばまれた。イエスは、天父に対する絶対の信頼を表明される一方では、天父がイエスを死から救うために手をお出しにならねばならないような立場に自分からとびこもうとはされなかった。イエスはご自分の救助に神がおいでにならねばならないようなことになって、信頼と服従の模範を人に示すことに失敗するようなことは望まれなかった。

イエスはサタンに、「『主なるあなたの神を試みてはならない』とまた書いてある」と断言された（マタイ 4：7）。このことばは、イスラエルの民が荒野でのどがかわいて、モー

セに水を要求し、「主はわたしたちのうちにおられるかどうか」と叫んだ時に語られたことばである（出エジプト 17：7）。 神はそれまでイスラエル人のためにふしぎな方法で働かれたにもかかわらず、困難な時になると彼らは神を疑い、神が自分たちと共におられる証拠を　要求した。彼らは不信のあまり神を試みようとした。サタンは、これと同じことをするよう　にキリストに強要していた。神はすでにイエスが神のみ子であることを証明された。それな　のにいまたイエスが神のみ子である証拠を求めることは、神のみことばを試みる、すなわ　ち神を試みることになる。また神が約束されなかったものを求めることもこれと同じである。それは明らかな不信であり、事実上神を試みていることになる。われわれは、神がみことば　をなしとげてくださるかどうかをためすために祈願をささげるべきではなく、神がみことば　をなしとげてくださるから、また神がわれわれを愛されるかどうかをためすためではなく、　神がわれわれを愛されるから、祈願をささぐべきである、「信仰がなくては、神に喜ばれる　ことはできない。なぜなら、神に来る者は、神のいますことと、ご自身を求める者に報いて　下さることとを、必ず信じるはずだからである」（ヘブル 11：6）。

だが信仰は決して独断的な信仰と関係がない。真の信仰を持っている者だけが独断的な信仰に対して安全である。なぜなら独断的な信仰はサタンから出た信仰のにせものだからである。信仰は神の約束をわがものとし、従順という実をむすぶ。独断的な信仰もまた約束をわがものにするが、サタンと同じように、これを罪とがの言い訳に使う。信仰があったら、アダムとエバは神の愛に信頼し、神の戒めに従ったのである。ところが独断的な信仰のために、彼らは神の律法を犯し、神の大きな愛によって自分の罪の結果から救われると信じた。憐れみが与えられる条件に従わないで天の神の恵みを要求するのは信仰ではない。真正の信仰は聖書の約束と条件とを土台にしている。

サタンは、不信の念をひき起こすことに失敗した時、われわれを独断的な信仰におちいらせることに成功することがたびたびある。サタンは、われわれが不必要に誘惑の道に身をおくようにさせることができれは、勝利は自分のものであることを知っている。 神は服従の道を歩む都誰でも守って下さ列その道から離れることはあえてサタンの側にはいって 行くことである。そこではわれわれは必ずつまずいてしまうのである。救い主は、「誘惑に陥らな

いように、目をさまして祈っていなさい」とお命じになった（マルコ 14：38）。瞑想と祈りとは、われわれが自分から危険の道にとびこまないようにする。こうしてわれわれは多くの敗北から救われるのである。 しかし試みに攻められても、勇気を失ってはならない。困難な立場におかれると、われわれは神のみたまが導いておられるのだろうかと疑うことがたびたびある。だがサタンの試みを受けるためにイエスを荒野へみちびいたのは神のみたまであった。神がわれわれを試みに会わせられる時、神はわれわれの益のために達成すべきある目的を持っておられる。イエスは神の約束につけあがって自分から試みの中にとびこんだり、あるいは試みがやってきた時落胆してあきらめたりされなかった。われわれもまたそうでなければならない。「神は真実である。あなたがたを耐えられないような試練に会わせることはないばかりか、試練と同時に、それに耐えられるように、のがれる道も備えて下さるのである」。神はこう言われる、「感謝のいけにえを神にささげよ。あなたの誓いをいと高き者に果せ。悩みの日にわたしを呼べ、わたしはあなたを助け、あなたはわたしをあがめるであろう」（Ⅰコリント 10：13、論 50：14、15）。

イエスが第二の試みに勝利されたので、サタンはこんどは本性をあらわす。だが彼はひずめのある足とこうもりの翼をもった恐ろしい怪物として現れない。彼は、堕落しても、力のある天使である。彼は反逆の指導者、この世の神であると名のる。 サタンはイエスを高い山の上につれて行き、あらゆる糊ごつつまれたこの世の王国を、パノラマの光景にしてイエスの前をすぎさらせた。大殿堂のそびえる都会、大理石の宮殿、肥沃（ひよく）な畑、実り豊かなぶどう園を太陽の光が照していた。悪の跡はかくされていた。さきほどまで陰気で荒涼とした景色をごらんになっていたイエスの目は、いまこのくらべるものもな嘆しさと繁栄の光景にそそがれた。

そのとき誘惑者サタンの声がきこえた、「これらの国々の権威と栄華とをみんな、あなたにあげましょう。それらはわたしに任せられていて、だれでも好きな人にあげてよいのですから。それで、もしあなたがわたしの前にひざまずくなら、これを全部あなたのものにしてあげましょう」（ルカ 4：6、7）。 キリストの使命は苦難を通してのみ成就することができるのだった。イエスの前には、悲しみと困難と戦いの人生と屈辱的な死があった。イエス

は全世界の罪を負われねばならない。彼は天父の愛から離れることを忍ばれねばならない。いま誘惑者サタンは、自分が奪った権力を放棄しようと申し出た。キリストは、サタンの主権を承認することによって、ご自分の恐るべき将来からまぬかれることができるのだった。しかしそうすることは大争闘における勝利を放棄することであった。サタンが天で罪を犯したのは、神のみ子より高い位を占めようとしたからだった。いまサタンが勝つようなことがあれば、それは反逆が勝利することになる。

サタンが、この世の王国と栄華は自分の手に渡されているのだから、自分は望むままに誰にでもこれを与えることができるのだと宣言した時、彼の言ったことは一部分しか真実でなく、また彼は自分自身の欺瞞の目的に役立てるためにそれを宣言したのだった。サタンの主権はアダムから横取りしたものであったが、アダムは創造主の代理者だった。アダムの支配は独自の支配ではなかった。地は神のもので、神は万物をみ子におまかせになっていた。アダムはキリストの支配下にあって統治するのであった。アダムが統治権をサタンの手に売り渡した時にも、キリストは依然として正当な王であられた。だから主は、ネブカデネザル王に、「……いと高き者が、人間の国を治めて、自分の意のままにこれを人に与え」と言われた（ダニエル 4：17）。サタンは神のゆるしがある時だけ、その横取りした権威を行使することができる。

誘惑者サタンがこの世の王国と栄華とをキリストに申し出た時、彼は、キリストがこの世の真の王であられることを放棄して、サタンの下で統治権を保たれるようにと申し出ていた。これはユダヤ人が望みを おいていたのと同じ統治権であった。彼らはこの世の王国を望んだ。もしキリストがこういう王国を彼らに与えることに同意されたら、彼らは喜んでキリストを受け入れたのである。だが罪ののろいが、そのあらゆるわざわいとともに、この世の上にあった。キリストは誘惑者サタンに、「サタンよ、退け。『主なるあなたの神を拝し、ただ神にのみ仕えよ』と書いてある」と宣告された（マタイ 4：10）。

天で反逆した者によって、キリストを買収して悪の原則に服従させるために、この世の王国が提供された。しかしキリストは買収されなかった。彼は義の王国を建設するためにおいでになったのであって、ご自分の目的を放棄しようとされなかった。同じ試みをもってサ

タンは人間に近づくが、この場合にはキリストの場合よりも成功する。サタンは人間に、サタンの主権を承認することを条件としてこの世の王国を提供する。サタンは彼らが、正直を犠牲にし、良心を無視し、利己心をほしいままにするように要求する。キリストは彼らにまず神の国と神の義とを求めるように命じられる。しかしサタンは彼らのそばを歩きながらこう言う、「永遠のいのちについてどんなことが事実であろうと、あなたがこの世で成功するには、わたしに仕えなくてはならない。あなたの幸福はわたしの手ににぎられている。わたしはあなたに富、快楽、名誉、幸福を与えることができる。わたしのすすめをききなさい。正直とか自己犠牲などという気まぐれな考えを起さないがよい。わたしがあなたの前に道を備えてあげよう。」こうして多くの者がだまされる。彼らは自我に奉仕する生活に同意する。するとサタンは満足する。サタンは彼らを世俗的な統治権の望みで誘惑する一方では、魂の支配権を手に入れる。しかし彼は自分が与える資格のないもの、まもなく彼からとりあげられるものを提供しているのである。その代りにサタンは、彼らをだまして神の子らの嗣業についての権利書をとりあげる。

サタンは、イエスが神のみ子であるかどうかを疑問にした。彼が即座に退却したことは、イエスが神のみ子であることを否定できなかった証拠である。神性が苦難の人性をとおしてひらめいた。サタンはイエスの命令に抵抗する力がなかった。屈辱と怒りに身をふるわせながら、彼は世のあがない主の前から退かねばならなかった。アダムが完全に失敗したように、キリストは完全に勝利された。

同じように、われわれも誘惑に抵抗し、サタンに離れ去れと強く言うことができる。イエスは、神への服従と信仰とによって勝利を得られた。彼は使徒を通して、われわれにこう言っておられる。「そういうわけだから、神に従いなさい。そして、悪魔に立ちむかいなさい。そうすれば、彼はあなたがたから逃げ去るであろう。神に近づきなさい。そうすれば、神はあなたがたに近づいてくださるであろう」（ヤコブ 4：7、8）。われわれは自分自身を誘惑者サタンの力から救うことはできない。サタンは人類を征服したのである。自分自身の力で立とうとする時、われわれはサタンの策略に陥るであろう。だが「主の名は堅固なやぐ

らのようだ、正しい者はその中に走りこんで救を得る」（箴言 18：10）。どんなに弱い魂も、この大いなるみ名をかくれ家とするとき、サタンはふるえあがってその前から逃げ出す。

敵が離れ去ってから、イエスは力がつきはてて地面に倒れ、そのお顔は死人のようにまっさおになられた。天使たちは、愛する司令官であられるイエスが人類のために逃れの道を備えるために言いようのない苦難を経験されるのをみつめながら、戦いを見守っていた。イエスはわれわれがいつか会わねばならない試みよりもはるかに大きな試みに耐えられた。いま天使たちは死人のように横たわっておられる神のみ子に奉仕した。イエスは食物で力づけられ、天父の愛のみことばと、全天がイエスの勝利に歓喜しているとの保証に慰められた。ふたたび生気をとりもどされると、イエスの大きなみこころは人類への同情となってそそがれ、彼はご自分がお始めになった働きを完成するために出て行かれる。そして敵が征服され、堕落した人類があがなわれるまではお休みにならないのである。

われわれのあがないの価は、あがなわれた者たち か救い主とともに神のみ座の前に立つまではわからない。そこで永遠のみ国の栄光が、歓喜しているわれわれの目の前に突然現われる時、われわれはイエスがわれわれのためにそうしたすべての栄光をお捨てになったことや、また天の宮廷からのさすらい人となられたばかりでなく、われわれのために失敗と永遠の損失という危険をおかしてくださったことなどを思い出すのである。その時われわれは冠をイエスの足下に投げて、「ほふられた小羊こそは、力と、富と、知恵と、勢いと、ほまれと、栄光と、さんびとを受けるにふさわしい」との歌声をあげるのである（黙示録 5：12）。

第 14 章「わたしたちはメシヤ（訳せば、キリスト）にいま出会った」

ヨハネはいまヨルダンの向こうのベタニヤで説教をし、バプテスマを施していた。イスラエル人が渡ってしまうまで、神が川の流れをとめられたのはこの地点から遠くないところだった。ここから少し離れたところにあるエリコのとりでは、天の軍勢によって倒壊させられたのだった。いまこうした事件の記憶が新たによみがえり、バプテスマのヨハネのことばに感動的な興味が加わった。昔こんなにふしぎなみわざをされた神は、ふたたびイスラエルの救済のためにその力をあらわされるのではないだろうか。こうした思いが、毎日ヨルダン川の岸辺にむらがり集まってきた人たちの心をゆり動かしていた。

ヨハネの説教は、宗教当局者たちの注意をひくほど国民の中に深く食いこんでいた。反乱の危険があったために、民衆の集りはみなローマ人から疑いの目でみられ、民衆の暴動を指向するようなことは何でもユダヤ人の役人たちの不安をかきたてた。ヨハ祖、サンヒドリンの権威を認めなかったので、自分の働きに彼らの承認を求めようとしなかった。そして彼は役人も民衆も、パリサイ人もサドカイ人も同じように譴責した。それでも民衆は熱心に彼に従った。彼の働きに対する関心はたえず高まっているようにみえた。ヨハネはサンヒドリンの意見に従わなかったが、サンヒドリンはヨハネが公の教師として彼らの管轄下にあるものとみなした。

サンヒドリンは祭司職や役人の長や国民の教師たちの中からえらばれた議員で構成されていた。通例大祭司が議長であった。その議員たちはみな、老人というほどではないが、年配の人々で、またユダヤ人の宗教と歴史ばかりでなく一般の知識にも精通している学問のある人たちであった。彼らは肉体的な欠陥のない人であり、そして結婚した人、また父親でなければならなかった。それは彼らがほかの人たちよりも人情と思いやりがあったからである。サンヒドリンの会議場は、エルサレムの神殿に付属している部屋であった。ユダヤ人の独立時代には、サンヒドリンは国家の最高裁判所として、宗教上の権威はもちろん世俗一般の事について、権威をもっていた。いまはローマ総督に従属していたが、それでもなおサンヒドリンは宗教上のことばかりでなく、民事上のことがらにも強い影響力を及ぼしていた。 サン

ヒドリンはヨハネの働きについての審問を引き延ばすことができなかった。中には、宮でザカリヤに示された啓示と、息子をメシヤの先駆者としてさし示した父親の預言とを思い起す者もあった。30 年の混乱と移り変りの中に、こうしたことは大部分忘れられていた。ヨハネの伝道についての騒ぎからそうしたことがいま思い出されてきた。

イスラエルにはもう長い間預言者もなく、またいま進行しているような改革もみられなかった。罪の告白を要求されるということは新しい驚くべきことにみえた。指導者たちの多くは、自分自身の生活の秘密をばくろされるのを恐れて、ヨハネの訴えと罪の譴責とを聞きに行こうとしなかった。だが彼の説教はメシヤについて直接の発表であった。メシヤの来臨を含むダニエルの 70 週の預言がほとんど終ったことは よく知られていた。人々はみなその後に期待される国家的な繁栄の時代が来るのを熱心に待っていた。民衆がこのように熱心だったために、サンヒドリンはヨハネの働きを是認するか、否定するかのどちらかに迫られていた。すでに民衆に対する彼らの勢力はだんだん衰えていた。彼らの地位をどうやって維持するかが重大な問題となっていた。何らかの結論に達するだろうというので、彼らはこの新しい教師と協議するために、祭司とレビ人の代表団をヨルダン川に派遣した。

群衆が集まって、ヨハネのことばに耳をかたむけていた時、代表者たちが近づいてきた。民衆を威圧し、預言者から敬意を受けようとの意図の下に、この高慢なラビたちは威厳のある様子でやってきた。ほとんど恐れに近い尊敬の動作をもって、群衆は彼らを通すために道を開いた。豪華な衣服を身につけ、地位と権力を誇るえらい人たちが荒野の預言者の前に立 った。 「あなたはどなたですか」と彼らは聞きただした。 彼らの心中を察したヨハネは、「わたしはキリストではない」と答えた。

「それでは、どなたなのですか、あなたはエリヤですか。」

「いや、そうではない。」

「では、あの預言者ですか。」

「いいえ。」

「あなたはどなたですか。わたしたちをつかわした人々に、答を持って行けるようにしていただきたい。あなた自身をだれだと考えるのですか。」

「わたしは、預言者イザヤが言ったように、『主の道をまっすぐにせよと荒野で呼ばわる者の声』である」　エルサレムからの代表団はヨハネに、「なぜパプテスマを授けるのですか」と聞きただしてその返事を待っていた。すると突然、群衆を見渡したヨハネの目が輝き、その顔が明るくなり、彼の全身全霊が深い感動に動かされた。彼は両手をさしのべて叫んだ、「わたしは水でバプテスマを授けるが、あなたがたの知らないかたが、あなたがたの中に立っておられる。それがわたしのあとにおいでになる方であって、わたしはその人のくつのひもを解く値うちもない」（ヨハ子 1：26、27）。

このことばは、明白で少しのあいまいさもなく、そのままサンヒドリンへ伝えられた。ヨハネのことばは、ほかならぬ長年約束されていたお方にあてはめることができた。メシヤが自分たちの中におられる。驚いた祭司たちと役人たちは、ヨハネの語ったお方をみつけようと思って、まわりを見まわした。だがメシヤは群衆の中にあって見分けがつかなかった。 イエスのバプテスマの時、ヨハネが神の小羊としてイエスを指さした時、新しい光がメシヤの働きを照らした。預言者の心はイザヤの、「彼は……ほふり場にひかれて行く小羊のように」ということばに向けられた（イザヤ 53：7）。その後幾週間にわたって、ヨハネは新しい興味をもって預言と犠牲制度の教えについて研究した。彼は、キリストの働きの二つの面、すなわち苦難のいけにえと勝利する王との両面をはっきり見分けていなかったが、キリストの来臨には祭司たちや民が認めていたよりももっと深い意味があることを知った。荒野から帰ってこられたイエスを群衆の中にみかけた時、ヨハネは、イエスがご自分の真の性格について何かしるしを民にお与えになるものと確信をもって期待した。待ちきれないような思いをもって、ヨハネは救い主がご自分の使命を宣言されるのを聞こうとして待った。だがひとことも語られず、一つのしるしも与えられなかった。イエスは、ご自分についてのヨハネの発表に答えられなかった。イエスはご自分の特別な働きについて外面的な証拠を与えたり、人々の注目をご自分にひきつけるような手段をとったりなさらず、ただヨハネの弟子たちの中にまじっておられた。

次の日、ヨハネは、イエスがおいでになるのを見る。神の栄光の光がこの預言者の上にとどまると、彼は両手をさしのべて宣言する、「見よ、世の罪を取り除く神の小羊。『わたしのあとに来るかたは、わたしよりもすぐれたかたである。わたしよりも先におられたからである』とわたしが言ったのは、この人のことである。わたしはこのかたを知らなかった。しかしこのかたがイスラエルに現れてくださるそのことのために、わたしはきて、水でバプテスマを授けているのである。……わたしは、御霊がはとのように天から下って、彼 の上にとどまるのを見た。わたしはこの人を知らなかった。しかし、水でバプテスマを授けるようにと、わたしをおつかわしになったそのかたが、わたしに言われた、『ある人の上に、御霊が下ってとどまるのを見たら、その人こそは、御霊によってバプテスマを授けるかたである』。わたしはそれを見たので、このかたこそ神の子であると、あかしをしたのである」（ヨハネ 1：29～34）。

これがキリストなのだろうか。おそれと驚きの思いをもって、人々はいま神のみ子と宣言されたお方を見つめた。彼らはヨハネのことばに深く心を動かされていた。彼は神のみ名によって人々に語っていた。彼らはヨハネが彼らの罪を責めるのを毎日きき、彼が天からつかわされたのだという確信は日ごとに強くなっていた。しかしこのバプテスマのヨハネよりも偉大なお方というのは一体だれなのだろう。その服装にも態度にも身分をあわらすようなものは何もなかった。見たところその人は彼らと同じように貧しい人々の着る粗末な衣服をまとったただの人間にすぎなかった。

群衆の中には、キリストのバプテスマの時、天来の栄光を見、神のみ声を聞いた人々がいた。しかしその時から救い主の様子はすっかり変っていた。バプテスマの時にはイエスの顔は天の光に神々しくみえたが、いまは青ざめ、やつれ、衰えておられ、預言者ヨハネしかイエスを認めることができなかった。 しかし人々がイエスを見つめた時、彼らはそこに天来の憐れみと意識的な力とのまじりあったお顔を見た。その目付きにも、その顔付きにも、謙遜が目立っていて、言い表しようのない愛があらわれていた。イエスは霊的感化の雰囲気につつまれておられるようにみえた。イエスの態度はやさしく気取らないものであったが、か

くされていてもかくしきれない力の意識が人々を印象づけた。この人こそ、イスラエルが長年待っていたお方なのだろうか。

イエスは、われわれのあがない主であると同時にわれらの模範となるために、貧乏と屈辱のうちにこられた。もしイエスが王者らしいきらびやかさをもって出現されたのだったら、どうして謙遜をお教えになることができただろう。どうして山上の垂訓にみられるような鋭い真理をお示しになることができただろう。もしイエスが王として人々の中に住むためにこられたのだったら、身分のいやしい者の望みはどこにあっただろう。　しかしながら群衆にとって、ヨハネから小されたお方は、彼らの崇高な期待とはどうしてもむすびつけられないよ　うにみえた。こうして多くの者が失望し、大いに当惑した。

祭司たちとラビたちが非常にききたがっていたことば、すなわちイエスがいまイスラエルに王国を回復されるのだということばは語られなかった。このような王を、彼らは待ち望んでいた。このような王を彼らは受け入れようとしていた。しかし彼らの心に義と平和の王国を築こうとなさるお方を、彼らは受け入れようとしなかった。 次の日、2 人の弟子たちがそばに立っていた時、ヨハネはまたイエスを群衆の中にみいだした。ふたたび預言者の顔は目に見えない神の栄光に照らされ、彼は、「見よ、神の小羊」と叫んだ。このことばは弟子たちの心を感動させた。彼らはそのことばを十分に理解しなかった。ヨハネがイエスのことを「神の小羊」と呼んだその名にどういう意味があるのか、ヨハネ自身も説明したことがなかった。

弟子たちは、ヨハネを残したまま、イエスを求めに行った。2 人の中の 1 人は、シモンの兄弟アンデレだった。もう 1 人は伝道者ヨハネだった。この 2 人がキリストの最初の弟子 だった。おさえきれない衝動にうこかされて、彼らは、イエスと語りたいと熱望しながらも、おそれの思いに沈黙したまま、「この方がメシヤだろうか」という重大な意味をもった思い　にふけりながら、イエスのあとをついて行った。　イエスは弟子たちが自分のあとからついてきていることをご存じだった。彼らはイエスの伝道の初穂だったので、これらの魂がご自分　の恵みに応じた時、この天来の教師の心にはよろこびがわいた。だがイエスは、ふりかえっ

て、「何か願いがあるのか」とおた ずねになっただけだった。イエスは彼らがひき返そうと、あるいは彼らの望みを語ろうと、自由にさせようとお思いになった。

一つの目的だけを彼らは意識していた。一つの存在が彼らの思いを占めた。彼らは、「ラビ（訳して言えば先生）どこにおとまりなのですか」と叫んだ（ヨハネ 1：38）。道ばたでの短い会見では、彼らの熱望しているものは得られないのであった。彼らはイエスとだけになり、その足下にすわり、みことばを聞きたいと望んだ。「イエスは彼らに言われた、『きてごらんなさい。そうしたらわかるだろう』。そこで彼らはついて行って、イエスの泊まっておられる所を見た。そして、その日はイエスのところに泊まった」（ヨハネ 1：39）。 もしヨハネとアンデレが祭司たちや役人たちのように不信な気持をいだいていたら、彼らはイエスの足下に学ぶ者とはならなかったであろう。彼らは批判者としてイエスのところへやってきて、そのみことばを批判したであろう。多くの者はこのようにして最もとうとい機会に対して戸をとざす。しかしこの最初の弟子たちはそうはしなかった。彼らはバプテスマのヨハネの説教のうちにあった聖霊の召しに応じていた。いま彼らは天来の教師のみ声を認めた。彼らにとってイエスのみことばは新鮮さと真理と美しさに満ちていた。天来の光が旧約聖書の教えを照した。真理の多方面のテーマが新しい光の中にはっきりとうつし出された。

魂が天の知恵を受けることができるのは、くだけた心と信仰と愛によってである。愛によって働く信仰は知識の鍵であり、愛する者はみな、「神を知っている」（Ｉヨハネ 4： 7）。 弟子ヨハネは、まじめで深い愛情を持ち、熱烈でしかも瞑想的な人だった。彼はキリストの栄光が、これまで待望するように教えられていたような世俗的なきらびやかさと権力ではなく、「父のひとり子としての栄光であって、めぐみとまことに満ちて」いることを認め始めていた（ヨハネ 1：14）。彼はこの驚くべきテーマについて瞑想にふけった。 アンデレは自分の心を満たした喜びをわけ与えようとつとめた。彼は、兄弟のシモンをさがしに行って、「わたしたちはメシヤ（訳せば、キリスト）にいま出会った」と叫んだ（ヨハネ 1： 41）。シモンは次の招きを待たなかった。彼もまたバプテスマのヨハネの説教をきいていたので、救い主のもとへ急いだ。キリストの目はシモンにとまり、彼の性格と経歴とを読みと

られた。彼の感情的な性質、彼の同情と愛の心、彼の野心と自信、彼がつまずき、悔い改め、働き、そして殉教の死をとげる経歴――救い主はそうしたすべてを読みとって、「あなたはヨハネの子シモンである。あなたをケパ（訳せば、ペテロ）と呼ぶことにする」と言われた（ヨハネ 1：42）。

「その翌日、イエスはガリラヤに行こうとされたが、ピリポに出会って言われた、『わたしに従ってきなさい』」（ヨハネ 1：43）。ピリポはその命令に従い、その場で彼もまたキリストの働き人となった。 ピリポはナタナエルを呼んだ。バプテスマのヨハネがイエスを神の小羊としてさし示した時、ナタナエルも群衆の中にいたのである。ナタナエルはイエスを見た時失望した。苦労と貧乏のしるしのあらわれているこの人がほんとうにメシヤだろうか。それでもナタナエルはイエスをこばむ決心ができなかった。ヨハネのことばが彼の心に確信を生じさせていたからである。 ピリポがナタナエルを呼んだ時、ナタナエルは、ヨハネの宣言とメシヤに関する預言について瞑想するために静かな森にひっこんでいた。もしヨハネによって宣言されたお方が救済者なら、そのことを示していただきたいと彼は祈った。すると聖霊が彼の上にくだり、神はその民を顧み、彼らのために救いの角をお立てになったのだという確信が与えられた（ルカ 1：68、69 参照）。ピリポはこの友人が預言を調べていることを知っていた。そしてナタナエルがいちじくの木の下で祈っていた時、ピリポはそのかくれ場所をみつけた。彼らは木の葉にかくれたこの人目につかない場所でたびたびいっしょに祈ったことがあった。

「わたしたちは、モーセが律法の中にしるしており、預言者たちがしるしていた人……にいま出会った」とのことばは、ナタナエルにとって自分の祈りに対する直接の応答のように思えた。だがピリポの信仰はまだ動揺していた。彼は疑わしそうに、「ヨセフの子、ナザレのイエス」とつけ加えた。ふたたびナタナエルの心に偏見が生じた。彼は、「ナザレから、なんのよいものが出ようか」と叫んだ（ヨハネ 1：45、46）。

ピリポは論争しなかった。彼は「きて見なさい」と言った。「イエスはナタナエルが自分の方に来るのを見て、彼について言われた、『見よ、あの人こそ、ほんとうのイスラエル人である。その心には偽りがない』」。ナタナエルは驚いて、「どうしてわたしをご存じな

のですか」と叫んだ。「イエスは答えて言われた、『ピリポがあなたを呼ぶ前に、わたしはあなたが、いちじくの木の下にいるのを見た』」（ヨハネ 1：46～48）。 それで十分だった。いちじくの木の下でただ 1 人祈っていたナタナエルに証拠を示された聖霊が、こんどはイエ スのみことばを通して彼に語られた。疑いと、いくらか偏見にとらわれながらも、ナタナエ ルは真理を求めるまじめな願いをもってキリストのところにきたのだが、いまその願いがか なえられた。彼の信仰は、彼をイエスのところへ連れていったピリポの信仰にまさった。彼 は答えて、「先生、あなたは神の子です。あなたはイスラエルの王です」と言った（ヨハネ 1：49）。

もしナタナエルがラビの指導を信頼していたら、彼は決してイエスをみいださなかったであろう。彼は自分で見、自分で判断して、弟子となった。今日偏見にとらわれて恵みから遠ざかっている多くの人々の場合も同じである。もし彼らがきて見さえしたら、その結果はどんなに異なったものになるだろう。 人間の権威による指導にたよっているかぎり、だれも救いの知識である真理に到達することができない、ナタナエルのように、われわれは神のみことばを自分で研究し、聖霊の光を求めて祈る必要がある。いちじくの木の下のナタナエルをごらんになったお方は、かくれた祈りの場所にいるわれわれをごらんになる。光の国の天使たちは、へりくだって天の導きを求める者の近くにいる。

ヨハネとアンデレとシモン、またヒリポとナタナエルの召しによって、キリスト教会の基礎が置かれた。バプテスマのヨハネは自分の 2 人の弟 1 乙をキリストに導いた。その中の 1 人アンデレは自分の兄弟を見つけて救い主のもとへ呼んだ。それからピリポが呼ばれ、ピリポはナタナエルをさがしに行った。このような模範は、個人的な努力、すなわち肉親や友人や隣人に直接訴えることの重要さをわれわれに教えねばならない。一生の間、キリストを知っていると告白しながら個人的な努力によってたった 1 人の魂さえ救い主に導いたことのない人たちがいる。彼らは働きの全部を牧師にまかせている。牧師は自分の職責をりっぱに果たすだろうが、しかし神が教会員におまかせになった働きまでできない。

愛に満ちたクリスチャンの心からの奉仕を必要としている人々がたくさんいる。もし普通の男女である隣人たちが個人的な努力をしていたら救われたかもしれない人々がたくさん

滅んでしまった。多くの人々は個人的に語りかけられるのを待っている。われわれの住んでいる家庭の中に、隣近所に、町に、キリストの伝道者としてわれわれのなすべき働きがある。われわれがクリスチャンなら、この働きは楽しみとなるであろう。人は信仰を持つとすぐ、自分がイエスというとうとい友をみいだしたことを他人に知らせたいという願いが心の中に生ずる。人を救いきよめる真理を、心の中にとじこめておくことはできないのである。

神に献身している者はみな、光の通路となる。神は彼らを神の恵みの富を他人に伝える代理人とされる。神はこう約束されている。「わたしは彼らおよびわが山の周囲の所々を祝福し、季節にしたがって雨を降らす。これは祝福の雨となる」（エゼキエル 34：26）。 ピリポはナタナエルに、「きて見なさい」と言った。彼はナタナエルに他人のあかしを信じなさいと言わ ないで、自分でキリストを見なさいと言った。イエスが昇天されたいまは、弟子たちが人々の中にあってキリストの代表者である。だから魂をキリストに導く最も効果的な方法は、キリストの品性をわれわれの日常生活にあらわすことである。他人に及ぼすわれわれの感化は、われわれの言うことばよりはわれわれの人格次第である。人々はわれわれの訴えに抵抗するかもしれない。だが利害を超越した愛の生活は、彼らの否定できない議論である。キリストの柔和が目立っている矛盾のない生活は世における一つの力である。

キリストの教えは心の内部の自信と経験の表現であったが、キリストについて学ぶ者はキリストのような教師となる。神のみことばが、そのみことばによってきよめられた人によって語られる時、それはいのちを与える力を持っていて、聞く人をひきつけ、みことばこそ生きた現実であることを確信させる。人が真理を愛してこれを受け入れる時、それはその人の信念のある態度と声の調子にあらわれる。彼は他の人々がキリストを知ることによって彼と交わることができるように、いのちのみことばについて自分が見、聞き、手でさわったところを知らせる。祭壇の上から取った燃民ている炭にふれた唇から出る彼のあかしは、信ず賭の心にとって真理であり、品性にきよめが行われる。

また他人に光を与えようとつとめる者は自分も祝福される。「これは祝福の雨となる」（エゼキエル 34：26）。「人を潤す者は自分も潤される」（箴言 11：25）。神は、罪人を救うのにわれわれの助けがなくても、目的を達することがおできになったのである。だがわ

れわれがキリストのような品性を発達させるためには、キリストの働きにあずからねばならない。キリストの喜びすなわちキリストの犠牲によってあがなわれた魂を見る喜びに入るためには、われわれは彼らをあがなうキリストの働きにあずからねばならない。 ナタナエルの信仰の最初の言いあらわしは、完全で、まじめで、誠実で、それはイエスの耳に音楽のようにきこえた。すると、「イエスは答えて言われた、『あなたが、いちじくの木の下にいるのを見たと、わたしが言ったので信じるのか。これよりも、もっと大きなことを、あなたは見るであろう』」（ヨハネ 1：50）。救い主は柔和な者によきおとずれを伝え、心のいためる者をいやし、サタンのとりこに自由を宣言されるご自分の働きを、よろこんで待望された。キリストはご自分が人類にもたらされたとうとい祝福を思って、「よくよくあなたがたに言っておく。天が開けて、神の御使たちが人の子の上に上り下りするのを、あなたがたは見るであろう」とつけ加えられた（ヨハネ 1：51）。

ここでキリストは事実上こう言っておられるのである。すなわち、ヨルダン川の岸で天が開けて、みたまがはとのようにわたしの上にくだった。その光景はわたしが神の子である証拠にすぎなかった。もしあなたがたがわたしを神の子として信ずるなら、あなたがたの信仰は活発になるであろう。あなたがたは天が開いて決してとじられないのを見せられるであろう。わたしがあなたがたに天を開いたのである。神の天使たちは、困っている人や苦しんでいる人の祈りをたずさえて天の父のみもとに昇り、祝福と望みと勇気と助けといのちとをたずさえて人の子らのもとにくだっているのであると。

神の天使たちはたえず地から天へ、天から地へかよっている。苦しんでいる者や悩んでいる者たちのためのキリストの奇跡は、天使たちの奉仕を通して神の力によってなされた。あらゆる祝福が神からわれわれのもとにくるのは、キリストを通し、天使たちの奉仕によってである。救い主はご自分に人性をとられることによって、ご自分の利害を堕落したアダムの息子、娘の利害と一致させ、一方またその神性によって神のみ座につながっておられる。こうしてキリストは、人が神と交わり、神が人と交わられる仲介である。

第 15 章婚宴の席で

イエスは、エルサレムのサンヒドリンの前で何か偉大な働きをすることによってその公生涯をお始めにならなかった。ガリラヤの小さな村のある家族的な集まりで、結婚の宴に喜びをまし加えることにイエスの力がそそがれた。こうしてイエスは人々と思いを一つにし、人々の幸福に役立ちたいという願いを示された。イエスは、試みの荒野で、ご自分から苦悩のさかずきをお飲みになった。そして、人々に祝福のさかずきを与え、ご自分の祝福によって人間生活のきずなを聖なるものにするために出ておいでになった。 イエスは、ヨルダン川からガリラヤに帰っておられた。ナザレから遠くない小さな町カナで結婚式があることになっていた。当人たちはヨセフとマリヤの親類であった。イエスはこの家族の集まりをお知りになると、カナに行き、弟子たちといっしょに婚礼に招かれた。

イエスはしばらく別れておられた母上にふたたびお会いになった。マリヤは、イエスのバプテスマの時にヨルダン川であらわされたことについて聞いていた。その知らせはナザレに伝えられ、マリヤの心に長年かくされていた光景を新たに思い起させた。すべてのイスラエル人と同じに、マリヤはバプテスマのヨハネの使命に深く動かされた。彼女はヨハネの誕生の時与えられた預言をよく覚えていた。いまヨハネとイエスとのつながりが彼女の望みを新たに明るくした。しかしイエスが荒野へ去られたというふしぎな知らせがマリヤにも聞こえてきたので、彼女は心配な予感で心が重かった。

マリヤは、ナザレの家で天使のお告げをきいた日から、イエスがメシヤであるという証拠の一つ一つを心にとめていた。イエスの美しい、無我の生活は、イエスが神からつかわされたお方にほかならないことを彼女に確信させた。それでも心に疑いや失望も起ったので、彼女はキリストの栄光があらわされる時を待ち望んでいたのだった。

マリヤは、イエスの誕生の神秘についていっしょに知っていたヨセフと死に別れていた、いま自分の望みや心配を打ち明けることのできる人はだれもいなかった。過ぐる 2 か月の間というものは非常な悲しみだった。マリヤはイエスの同情に慰められていたのに、そのイエスと別れていたのだった、彼女は、「あなた自身もつるぎで胸を刺し貫かれるでしょう」と

言ったシメオンのことばを心に思いめぐらした（ルカ 2：35）。彼女はまたイエスが自分から永久に失われたと思ったあの 3 日間の苦悩を思い起した。そして切実な思いをもって、イエスの帰りを待っていた。

婚宴の席で、マリヤは相かわらずやさしい親孝行な息子であられるイエスに会う。しかしイエスは前のイエスではない。イエスの顔つきは変っている。その顔は荒野における戦いのあとをとどめ、威厳と力の新しい表情がイエスの天来の使命を証拠だてているイエスといっしょに、一団の若い人たちがいて、彼らの目は尊敬をこめてイエスのあとを追い、イエスを先生と呼んでいる。これらの若い人たちは、バプテスマの時やその他のところで見たり聞いたりしたことを、マリヤにくわしく語ってきかせる。彼らは結論として、「わたしたちは、モーセが律法の中にしるしており、預言者たちがしるしていた人、ヨセフの子、ナザレのイエヌにいま出会った」と言明する（ヨハネ 1：45）。 客が集まると、多くの者は何か非常に興味のある話題に心を奪われているようにみえる。抑えられた興奮が一座の人々の間にひろ　がる。人々の小さ尤かたまりが熱心ながら静かな調子でことばをかわし、ふしぎそうな目つ　きがマリヤの息子に向けられる。マリヤはイエスについて弟子たちのあかしを聞いて、長い　間胸にいだいていた望みがむだでなかったことをよろこんでいた。彼女もまた人間である以　上、そのきよい喜びに甘い母親の自然な誇りがまじっていだしても当然であろう。多くの人　々の目がイエスの上にそそがれているのを見ると、彼女は、イエスにご自分　が真に神のとうといみ子であることを一座の人々に証明していただきたいと心に願った。彼女はイエスが彼　らの前で奇跡を行われる機会があればよいと望んだ。

結婚の祝宴は数日間つづけられるのが当時の習慣であった。この時、祝宴がまだ終わらないうちにぶどう酒のたくわえが切れてしまったことがわかった。それがわかると大変な困惑と失望とが生じた。祝宴をぶどう酒なしですませるということは例のないことで、ぶどう酒がないことは接待の行きとどかない証拠に思われるのだった。マリヤは当事者の親類として祝宴のしたくを手伝っていたので、その時イエスに、「ぶどう酒がなくなってしまいました」と語った。このことばは、イエスに彼らの必要を満たしてもらえないでしょうかという

暗示だった。しかしイエスは、「婦人よ、あなたは、わたしと、何の係わりがありますか。わたしの時は、まだきていません」と答えられた（ヨハネ 2：3、4）。

この答は、われわれにはぶっきらぼうに思えるが、冷淡さや無礼な気持をあらわしているのではない。救い主が母親に語りかけられた形式は、東洋の習慣に従ったものであった。それは尊敬心を示したいと望む相手の人に対して用いられた。キリストの地上生活における行為の一つ一つは、彼ご自身がお与えになったところの、「あなたの父と母を敬え」という戒めに一致していた（出エジプト 2：12）。十字架上において、母親に対する最後のやさしい行為として、最も愛する弟子に母親の世話を託された時、イエスにふたたび同じように母親に語りかけられた。婚宴の時でも十字架上でも、声と顔つきと態度にあらわれている愛がイエスのことばの意味を伝えた。

少年時代に宮におまいりして、ご自分の一生の働きの奥義が目の前に示された時、キリストはマリヤに「わたしが自分の父の家にいるはずのことを、ご存じなかったのですか」と言われた（ルカ 2：49）。このことばはイエスの一生と伝道の基調を示していた。すべてのことはイエスの働き、すなわちイエスが成就するためにこの世においでになったあがないの大いなる働きに付随させられた。いまキリストはその教訓をくりかえされた。マリヤはイエスとの親子関係から、自分はイエスに対して特別な要求を持つことができ、またある程度イエスの使命に口を出す権利があると考える危険があった。イエスは、30 年の間、マリヤにとってやさしい従順な息子であって、その愛情は変わらなかった。しかしいまイエスは天父のみわざに着手なさらねばならない。いと高き神のみ子として、またこの世の救い主として、イエスは、どんな地上のきずなによってもご自分の使命の達成をさまたげられたり、ご自分の行為に影響を及ぼされたりするようなことがあってはならない。彼は神のみこころをなすのに自由でなければならない。この教訓はまたわれわれのためでもある。神のご要求は人間の関係というきずなにさえまさるものである。どんな地上の魅力によっても、われわれは神がわれわれに歩むように命じておられる道から足をひき返してはならない。

われわれ堕落した人類のただ一つの望みはキリストのうちにある。マリヤは神の小羊イエスによってのみ救いを見いだすことができた。彼女自身には何のいさおしもなかった。マ

リヤがイエスと親子関係にあるからといって、彼女とイエスとの霊的な関係は他の魂の場合と異なったものにはならない。このことが救い主のみことばの中に示されている。イエスは彼女に対して人の子としての関係と神のみ子としての関係の区別をはっきりつけておられる。ふたりの間の肉親関係は、決してマリヤをイエスと同等の立場におくものではなかった。

「わたしの時は、まだきていません」とのことばは、キリストの地上生活における一つ一つの行為が、永遠の昔から存在していた計画の成就であったという事実をさしている（ヨハネ 2：4）。イエスが地上においでになる前に、その計画はこまかい点まで完全に彼の前に立てられた。しかし、イエスが人々の中に生活された時、彼は 1 歩 1 歩、天父のみこころによって導かれた。イエスは定められた時に行動することをちゅうちょされなかった。同じ服従によって、彼は時がくるまで待たれた。 自分の時はまだきていないのだとマリヤに言われたことによって、イエスはマリヤの語られない思い、すなわちイスラエルの民と同じように彼女の心の中にいだかれていた期待に答えておられた。マリヤはイエスがメシヤとしてご自分をあらわし、イスラエルの王位につかれるのを望んでいた。しかしその時はきていなかった。イエスは、王としてではなく、「悲しみの人で、病を知っていた」人として人間の運命をお受けになっていた（イザヤ 53：3）。

しかしマリヤは、キリストの使命を正しく認識してはいなかったが、イエスを絶対的に信頼していた。この信仰に、イエスはお答えになった。最初の奇跡が行われたのはマリヤの信頼をとうとび、弟子たちの信仰を強めるためであった。弟子たちは不信への多くの大きな試みに出会うのであった。預言によればイエスがメシヤであるということは彼らにとって議論の余地がないまでに明らかであった。彼らは宗教界の指導者たちが自分たちよりもはるかに大きな確信をもってイエスを受け入れるものと期待した。彼らはキリストのふしぎなみわざを、またキリストの使命に対する自分たちの確信を人々の前に宣言したが、祭司やラビたちが示したイエスに対する不信と根強い偏見と敵意に驚き、ひどく失望した。救い主の初期の奇跡は、弟子たちがこの反対に対して強く立つように力づけた。

マリヤはイエスのことばに少しも当惑しないで、食卓に給仕している人々に、「このかたが、あなたがたに言いつけることは、なんでもして下さい」と言った（ヨハネ 2：5）。こ

うして彼女は、キリストのみわざに道を備えるためにできるだけのことをした。 戸口のそばに 6 つの大きな石の水がめがあった。イエスは召使いたちにその水がめに水を満たすように言いつけられた。水はいっぱいになった。次にイエスは、ぶどう酒がいますぐ入り用だというので、「さあ、くんで、料理がしらのところに持って行きなさい」と言われた（ヨハネ 2: 8）。水のいっぱい満たされた水がめからは、水ではなくてぶどう酒が流れ出た。料理がしらも一般の客もぶどう酒がきれたことには気がついていなかった。召使いたちが持ってきたぶどう酒をなめてみて、料理がしらはそれがいままで飲んだこともないほどすばらしいぶどう酒で婚宴の初めに出されたぶどう酒とちがったものであることに気がついた。彼は花婿に向かって、「どんな人でも、初めによいぶどう酒を出して、酔いがまわったころにわるいのを出すものだ。それだのに、あなたはよいぶどう酒を今までとっておかれました」と言った（ヨハネ 2: 10）。

人は最初に一番よいぶどう酒を出し、それから後に悪いぶどう酒を出すが、この世の贈物もこれと同じである。この世が与えるものは、初めは人の目をよろこばせ、感覚を魅惑するかもしれないが、結局は不満足なものである。ぶどう酒はにがくなり、はなやかさは陰気なものとなる。歌と歓楽に始まったものが疲労と不快に終る。しかしイエスの賜物はいつも 新鮮で新しい。イエスが魂にお与えになるごちそうは必ず満足と喜びとを与える。新しい賜 物が与えられるたびに、それを受ける者には主の祝福を感謝し、よろこぶ能力が増し加わる。主は恵みに恵みを加えられる。恵みのたくわえがつきるということがない。キリストのうち に住むならば、あなたがきょうゆたかな賜物を受けることは、あしたはもっとゆたかな賜物 を受ける保証である。ナタナエルに対するイエスのみことばは、信仰の子らに対する神の態 度の原則をあらわしている。主の愛が新しくあらわされるたびに、イエスはそれを受け入れ る人に向かって、あなたは「信じるのか。これよりも、もっと大きなことを、あなたは見る であろう」と宣言される（ヨハネ 1: 50）。

婚宴の席へのキリストの贈物は、一つの象徴であった。水は主の死にあうバプテスマをあらわし、ぶどう酒は世の罪のために流される主の血潮をあらわしていた。水がめを満たす水は人間の手で持ってこられたが、それにいのちを与える効力をさずけることができるのは

キリストのみことばだけである。救い主の死をさし示す儀式も同様である。信仰を通して働くキリストの力によってのみ、それらは魂を養う効力があるのである。　キリストのみことばによって、ふるまいの席に十分な飲み物が備えられた。人の不和を消し去り、魂を新たにし、これを養う主の恵みは同じようにゆたかに用意されている。

イエスは、弟子たちと一緒に出席された最初の祝宴で彼らの救いのためになされる働きを象徴するさかずきを彼らにお与えになった。最後のばんさんにおいて、イエスは「主がこられる時に至るまで」ご自分の死を示す聖なる儀式を制定されたことによって、もう 1 度そのさかずきを彼らにお与えになった（Ⅰコリント 11：26）。「わたしの父の国であなたがたと共に、新しく飲むその日までは、わたしは今後決して、ぶどうの実から造ったものを飲むことをしない」とイエスが言われた時に、主と別れる弟子たちの悲しみは再会の約束によって慰められた（マタイ 26：29）。

キリストが祝宴にお備えになったぶどう酒、またご自分の血の象徴として弟子たちにお与えになったぶどう酒は、純粋のぶどう汁であった。預言者イザヤが、新しいぶどう酒について、「人がぶどうのふさの中に、ぶどうのしるのあるのを見るならば、『それを破るな、その中に祝福があるから』と言う」と言っているのは、このことである（イザヤ 65：8）。　旧約聖書の中で、「酒は人をあざける者とし、濃い酒は人をあばれ者とする、これに 迷わされる者は無知である」と、イスラエルに警告されたのはキリストであった（箴言 20：1）。だからキリストはご自分からこんな飲み物を与えるようなことはなさらなかった。サタ ンは理性をくもらせ、霊的知覚を麻痺（まひ）させるような放縦に人を誘惑するが、キリス　トは下等な性情を征服するように教えておられる。キリストの一生は克己の模範であった。　食欲の力をたちきるために、彼は人間が耐えることのできる最もきびしい試練を、われわれ　のために受けられた。バプテスマのヨハネに、ぶどう酒や濃い酒を飲まないように指示され　たのはキリストであった。同じようにマノアの妻に禁酒を命じられたのもキリストであった。キリストは隣人のロに酒びんをおしつける者の上にわざわいを宣告された。キリストはご自　分の教えに矛盾したことをなさらなかった。主が結婚式の客のために用意された発酵しない

ぶどう汁は衛生的な清涼飲料水であった。その効果は味覚を健康な食欲に調和させるのであった。

祝宴の客たちがぶどう酒の品質について批評し、召使いたちに質問したので、奇跡の事実がわかった。一座の人々はしばらくは驚きのあまり、そのふしぎなわざをされたお方のことを思いつかなかった。だがついにイエスをさがすと、イエスは弟子たちにさえも知られないように、静かに立ち去られたことがわかった。　一座の人々の注意はこんどは弟子たちに向けられた。初めて弟子たちはイエスに対する彼らの信仰を告白する機会があった。彼らは自　分たちがヨルダン川で見たり聞いたりしたことを語った。すると、多くの人たちの心に、神　がご自分の民の救済者を起されたのだという望みの火がともされた。奇跡についての知らせ　はその地方全体にひろがり、エルサレムにまで伝えられた。祭司や長老たちは新たな関心を　もって、キリストの来臨をさし示している預言を調べた。こんな気取らない態度で人々の中　に現われたこの新しい教師の使命を知りたいという熱心な希望が起った。　キリストの伝道はユダヤ人の長老たちの伝道とくらべていちじるしい相違があった。彼らは言い伝えと形式を　尊重するあまり、思想や行動の真の自由をまったく殺してしまっていた。彼らはたえずけが　れを恐れて生活した。「けがれた者」との接触をさけるために、彼らは異邦人ばかりでなく、自国民の大多数の者から遠ざかり、彼らに益を与えようとも、彼らの友情を得ようともしな　かった。たえずこうした問題に気をとられていたので、彼らの心は小さくなり、生活の軌道　は狭くなっていた。彼らの手本によって、民衆のあらゆる階級に独善主義と偏狭心が助長さ　れた。

イエスは人類と全く思いを一つにすることによって改革の働きをお始めになった。彼は神の律法に最高の尊敬を示される一方では、パリサイ人のうわべばかりの敬虔さを責め、人々をしばりつけている無 意味な規則から彼らを解放しようとされた。イエスは、人々を一塚族の子供として一つにするために、社会の異なった階級をへだてている壁を打破しようとしておられた。イエスが婚宴の席に出られたことは、こうしたことを達成するための 1 歩としてくわだてられたのであった。

神はバプテスマのヨハネが祭司やラビたちの影響を受けないように、そして特別な使命のために準備ができるように、彼に荒野に住むようにお命じになった。しかし彼の厳格で孤独な生活は民の手本にはならなかった。ヨハネ自身、聴衆にこれまでの仕事を捨てるようにとは命じなかった。彼は、神が彼らを召された立場において、神に忠誠をつくすことによって悔い改めの証拠を示すようにと命じた。

イエスは、あらゆる種類の放縦を責められたが、しかしその性質は社交的であられた。彼はあらゆる階級の人々のもてなしに応じて、金持ちの家でも貧しい人の家でも、学者の家でも無知な者の家でも訪問し、彼らの思いを日常一般の問題から霊的な永遠の問題へ高めようとされた。彼は酒色を認められず、その行為は世俗的な軽薄の影によってくもらされることがなかった。しかし主は無邪気なたのしみの光景によろこびを感じ、自ら出席なさることによって親睦（しんぼく）の集まりを是認された。ユダヤ人の結婚式は印象的な光景で、その喜びは人の子イエスにとって不快なものではなかった。この婚宴の席につらなることによって、イエスは結婚を天来の制度としてとうとばれた。　旧約聖書にも新約聖書にも、結婚関係はキリストとその民との間に存在するやさしく聖なる結合をあらわすのに用いられている。婚宴の喜びは、キリストがご自分の花嫁を天父の家につれてゆかれ、あがなわれた者とあが　ない主とが、小羊の婚宴の席にすわるその日の喜びをキリストの心に思わせた。キリストは　こう言われる、「花婿が花嫁を喜ぶようにあなたの神はあなたを喜ばれる」。「あなたはも はや『捨てられた者』と言われず…… あなたは『わが喜びは彼女にある』ととなえられ、……主はあなたを喜ばれ」る。「彼はあなたのために喜び楽しみ、その愛によってあな　たを新にし、祭の口のようにあなたのために喜び呼ばわられる」（イザヤ 62：5、4、ゼパニヤ 3：17）。使徒ヨハネは、天の事物についてのまぼろしが与えられた時、こう書いた、「わたしはまた、大群衆の声、多くの水の音、また激しい雷鳴のようなものをきいた。それはこう言った、『ハレルヤ、全能者にして主なるわれらの神は、王なる支配者であられる。わたしたちは喜び楽しみ、神をあがめまつろう。小羊の婚姻の時がきて、花嫁はその用意をしたからである』」。「小羊の婚宴に招かれた者は、さいわいである」1（黙示録 19：6、7、9）。

イエスは一人びとりの魂を、神のみ国への招待を与えられなければならない者としてごらんになったイエスは人々の幸福を願う者として、彼らの中に入って行くことによって、彼らの心をとらえられた、彼は大通りで、個人の家々で、舟の上で、会堂の中で、湖の岸辺で、婚宴の席で、彼らを求められた。彼は人々が日常の働きをしているところで彼らに会い、彼らの俗事に興味を示された。イエスはご自分の教えを家庭に持ち込み、家族をそれぞれの家庭においてイエスのきよいご臨在の感化のもとにおかれた。イエスの個人的な強い同情は人々の心をとらえる助けとなった。イエスは１人で祈るためにたびたび山へ行かれたが、これは活動的な生活において人々のために働く準備であった。このようなひと時を経て、イエス　は、病人をいやし、無知の者に教え、サタンのとりこの鎖をたち切るために出てこられた。

イエスが弟子たちを訓練されたのは個人的な接触とまじわりによってであった。イエスは、ある時は山腹で彼らの中にすわって教え、ある時は海辺で、ある時は彼らといっしょに道を歩きながら、彼らに神の国の奥義を示された。イエスは今日人々がするように説教をなさらなかった。人々の心が天来のことばを受けようとして開かれているところではどこでも、イエスは救いの道の真理をとき明かされた。イエスは弟子たちにこれをしなさい、あれをしなさいと命令なさらず「わたしに従ってきなさい」と言われた（ルカ　9:　59）。彼は民にどう教えるかを弟子たちに見せるために、いなかや町を旅行される時には彼らをおつれになっ　た。イエスは弟子たちと関心を一つにされたので、彼らは働きにおいてイエスと一体となっ　た。

人類と利害を一つにされたキリストの模範は、キリストのみことばをのべつたえる者やキリストの恵みの福音を受け入れた者のすべてが従わねばならない模範である。われわれは社交的な交わりをたちきるのではない。他の人たちから孤立してはならない。あらゆる階級の人々に接するためには、われわれは彼らのいるところで彼らに会わねばならない。彼らの方からわれわれを求めてやってくることはめったにない。講壇からだけでは人々の心は天来の真理に動かされない。もう一つの働きの領分がある。それは目立たないかもしれないが、大いに有望である。それは身分のいやしい人々の家庭に、身分の高い人々の邸宅に、もてなしの食卓に、無邪気な親睦の集まりの中にみいだされる。 キリストの弟子として、われわれ

は、単なる享楽心から世の人々と交わったり、彼らといっしょになって愚かなことをするようなことはしない。こういう交際の結果はただ有害なだけである。われわれのことはやわれわれの行為やわれわれがだまっていることやわれわれがそこにい合わせることなどによって、罪を是認するようなことが決してあってはならない。どこへ行くにも、われわれはイエスをいっしょにおつれし、入々に救い主のとうとさを示すのである。しかし宗教を石の壁の中にかくして保とうとする者は、よいことをするとうとい機会を失う。社交的な関係を通して、キリスト教は世の人々と接触するようになる。天来の光を受けた者はだれでもみな、いのちの光であられるキリストを知らない人々の道を照らすのである。

われわれはみなイエスの証人となるべきである。社交的な能力は、キリストの恵みにきよめられて、魂を救い主にみちびくのに活用されなければならない。われわれは自分自身の利害問題に利己的に没頭しているのではなく、われわれの祝福と特権とを他人にわけ与えようと願っているのだということを、世の人々に見せよう。われわれの宗教はわれわれを非情にしたり苛酷（かこく）にしたりしないということを世の人々にわからせよう。キリストをみいだしたと言っている者はみな、キリストが人々を益するために働かれたように、奉仕しよう。 われわれは、クリスチャンは暗い不幸な人たちだというまちがった印象を世の人々に与えるべきではない。もしわれわれの目がイエスにしっかりそそがれているならば、われわれは憐れみ深い救い主を見、そのみ顔の光をとらえるのである。神のみたまに支配されているところにはどこでも平安が宿る。神に対する落ち着いた、聖なる信頼があるので、そこにはまた喜びがある。

キリストに従う者たちが、人間ではあるけれども神の性質にあずかる者であることを示す時、キリストはお喜びになる。彼らは像ではなく、生きた男女である。彼らの心は神の恵みの露によって生き生きとなり、義の太陽キリストに向かって開き、成長するのである。彼らは自分たちを照らしている光を、キリストの愛に輝いている働きを通して、他人に反射する。

第 16 章神の宮で

「そののち、イエスは、その母、兄弟たち、弟子たちと一緒に、カペナウムに下って、幾日かそこにとどまられた。さて、ユダヤ人の過越の祭が近づいたので、イエスはエルサレムに上られた」（ヨハネ 2：12、13）。 この旅で、イエスは首都エルサレムへ進んで行く人たちの大きな群れの一つに加わられた。イエスはご自分の使命をまだ公に発表しておられなかったので、人知れず群衆の中にまじっておられた。こういう機会には、ヨハネの伝道によって世間の注目をひくようになったメシヤの来臨ということがよく人々の話題 になった。彼らは自分たちの国が偉大な国家になるのだという望みについて燃えるような熱心さで語り合った。イエスはこの望みが裏切られることを知っておられた。なぜなら、それは聖書の誤った解釈に根拠がおかれていたからである。イエスは非常に熱心に預言を説明し、神のみことばのもっと綿密な研究に人々を目覚めさせようとされた。

イスラエルの民はエルサレムで神の礼拝を教えられるのだと、ユダヤ人の指導者たちは教えていた。過越節の週間になると、大勢の人々がパレスチナの全地から、また遠い国々からもやってきて、ここに集まった。宮の庭は雑然とした群衆でいっぱいになった。一つの大いなるいけにえであられるキリストを象徴するものとして献げられるいけにえをたずさえてくることができない人が多かった。そうした人たちのために、動物が宮の外庭で売買された。ここにあらゆる階級の人々が彼らの献げ物を買うために集まった。ここであらゆる外国のお金が聖所の貨幣に両替された。

ユダヤ人はだれでもみな「命をあがなう」ために毎年半シケルを納めなければならなかった。このようにして集められたお金は宮を維持するために用いられた（出エジプト 30：12～16 参照）。 このほかに、多額のお金が任意の献金として持参され、宮の金庫に納められた。外国貨幣はみな聖所のシケルと呼ばれる貨幣に両替しなければならなかった。そしてその貨幣が聖所の奉仕のために受け取られた。金銭の両替は詐欺や強奪の機会となり、老れはだんだん恥ずべき商売となって、祭司たちの収入源となっていた。　商人たちは動物を売るのに法外な値段をつけ、そのもうけを祭司や役人たちにわけた。こうして祭司や役人たちは民の犠

牲において私腹を肥やした。礼拝者たちは、いけにえを献げなければ、彼らの子供たちや地所に神の祝福がくだらないと信じるように教えられていた。こうして動物を高い値段で売りつけることができた。人々は遠くからやってきたのだから、その目的である礼拝行為を果たさないでは家へ帰ろうとしなかったからである。

過越節の時には大変な数のいけにえがささげられたので、宮での商売は非常に盛んだった。従ってそれに伴う混雑は、神の聖なる宮というよりもむしろやかましい家畜市場を思わせた。かん高い取引の声、牛のモーモー鳴く声などが、貨幣のじゃらじゃらいう音や怒って言い争う声にまじってきこえ起その混乱があまりにひどいために、礼拝者たちはさまたげられ、いと高き神に語りかけられることばは宮をおおう騒音にかき消された。ユダヤ人は自分たちの膿さを非常な誇りにしていた。彼らは宮を喜び、宮のことをよく言わないことばを冒漬（ぼうとく）とみなした。彼らはまた宮に関係のある儀式を非常に厳格に行った。しかし金銭欲が彼らの用心深さを圧倒していた。彼らは、自分たちが神ご自身によって定められた儀式の本来の目的からはるかにそれていることにほとんど気がついていなかった。

主がシナイ山上におくだりになった時、その場所は主のこ臨在によってきよめられた。モーセは、山のまわりに境界を設けて、そこをきよめるようにと命じられた。そして「あなたがたは注意して、山に上らずまた、その境界に触れないようにしなさい。山に触れる者は必ず殺されるであろう。手をそれに触れてはならない。触れる者は必ず石で打ち殺されるか、射殺されるであろう。獣でも人でも生きることはできない」という主の警告のことばがきかれた（出エジプト　19：12、13）。このように、神がご臨在をあらわされるところはどこでも、神聖な場所であるという教訓が教えられた。神の宮の境内は神聖なところとみなされる　べきだった。ところがもうけを争うあまり、すべてこりしたことが忘れられていた。

祭司と役人たちは国民に神を代表する者と呼ばれていた。彼らは宮の庭がこのように悪用されているのを改革すべきであった。彼らは民に正直とあわれみの模範を示すべきであった。自分自身の利益を追い求めないで、彼らは礼拝者たちの事情と必要とを考慮レまた必要ないけにえを買うことのできない人々をいつでも助ける用意がなければならなかった。ところが彼らはそうしたことをしなかった。彼らの心 は貧欲に固まっていた。 郵の祭りには、苦

しんでいる者や困っている貧しい人々もやってきた。盲人も足の不自由な人も耳の聞こえない人もきた。寝床にのせてつれてこられる者もあった。貧しいために、主にささげる一番安い献げ物も買えず、自分自身の空腹を満たす食物さえ買うことのできない人たちもたくさんきた。こうした人たちは祭司の言明にひどく当惑した。祭司たちは自分醸さを誇り、民の保護者であると自称した。だ力鞍らは同情や憐れみの心がなかった。貧しい者や病人や死にかけている者が助けを乞うてもむだだった。彼らの苦しみは祭司たちの心に何の同情も呼び起こさなかった。

イエスは宮に入ってこられると、すべての光景をじつとごらんになった。彼は不正な取引をごらんになった。血を流さなければ自分たちの罪はゆるされないと考えて困っている貧しい人たちを彼はごらんになった。彼は、神の宮の外庭がけがれた商売の場所にかわうでいるのをごらんになった。神聖な境内が一つの大きな取引場となっていた。　キリストは、どうにかしなければならないとお考えになった。無数の儀式が、その意味について正しい教えも　なされないままに民に命じられていた。礼拝者たちは、ただ 1 人の完全ないけにえであられるキリストを象徴するものであることも理解しないで彼らのいけにえをささげた。しかも彼　らの中に、みとめられもしなければ、あがめられもしないで、彼らのすべての儀式によって　象徴されているお方が立っておられた。彼は献げ物について指示をお与えになったのだった。彼は献げ物の象徴的価値を理解しておられた。イエスはそうした献げ物がいま悪用され、誤　解されているのをごらんになった 6 霊的な礼拝は急速に影をひそめていた。祭司たちや役人たちと神との間のつながりは何もなかった。キリストの働きは、まったく異なうた礼拝を確　立することであった。

宮の庭の石段に立たれたキリストは、鋭い一べつで、目の前の光景を見抜かれる。預言の目をもって、イエスは未来を、幾年後ばかりでなく幾世紀幾時代後までごらんになる。彼は祭司たちや役人たちが貧しい人々の権利を奪い、彼らに福音が伝えられるのを禁じているのをごらんになる。彼は、神の愛が罪人にかくされ、人々が神の恵みを商品にするのをごらんになる。その光景をごらんになると、怒りと権威と力とがその顔にあらわれる。人々の注意は彼にひきつけられる。けがれた取引をやっていた人たちの目が、イエスの顔にくぎづけ

にされる。彼らは目をそらすことができない。彼らは、この人に自分たちの心の奥底が見抜かれ、かくれた動機が見つけ出されるのを感じる。中には、自分の悪い行為が顔に書かれているのをあの鋭い目にじっと見つめられるかのように、顔をかくそうとする者もある。

騒ぎはおさまった。商売とかけひきの声はやんだ。沈黙は苦痛となる。群衆は畏怖の念に圧倒される。彼らは自分たちの行為を弁明するために神のさばきの前に呼び出されたかのようである。キリストを見あげて、彼らは、人性という衣から神性がひらめいているのを見る。天の君が、最後の日におけるさばき主のように、その時ご自分に伴う栄光にいまはつつまれておられないが、同じように魂を見抜く力をもって立っておられるのである。彼の目は群衆を見渡して、一人一人を見抜かれる。彼の姿は堂々たる威厳をそなえて彼らの中にそびえているように見え、天来の光がそのみ顔を照らしている。イエスが話されると、そのはっきりしたひびきわたる声は――いま祭司たちや役人たちが犯している律法をかつてシナイ山上で宣言されたのと同じ声は――宮の門に反響してきこえる。「これらのものを持って、ここから出て行け。わたしの父の家を商売の家とするな」（ヨハネ 2：16）。 ゆっくり石段をおりながら、イエスは、境内にはいる時に拾われた縄の鞭をふりあげで取引をしている連中に宮の境内から立ち去るように命じられる。これまでにあらわされたことのない激しさと厳格さをもって、イエスは両替屋のテーブルをひっくり返される。貨幣は高い音を立てて、大理石の歩道に落ちる。誰一人彼の権威をあえて問題にしようとしない。誰一人不正なもうけの金を拾い集めようとして立ちどまろ うとしない。イエスは彼らを縄の鞭で打ちはなさらないが、そのただの鞭が彼の手にあると、燃える剣のように恐ろしいものにみえる。宮の役員たちや、投機をしていた祭司たちや、仲買人たちや家畜商人たちは、イエスの目の前にいると心が責められるので、それからまぬかれたい一心で羊や牛といっしょにその場から逃げ出す。

あわてふためきは群衆全体にひろがり、彼らはイエスの神性に圧倒される感じがする。幾百人の青ざめた唇から、恐怖の叫びがもれる。弟子たちでさえふるえあがる。弟子たちは、イエスのふだんのふるまいとはまったく不似合いなことばと行動におそれをなす。彼らは、イエスのことについて、「あなたの家を思う熱心がわたしを食いつくし」と書かれているこ

とばを思い出す（詩篇 69：9）。まもなくそうそうしい群衆は商品といっしょに神の宮から遠くへ追いやられる。宮の庭からけがれた取引が姿を消し、深い静寂と荘厳さが混乱の場面をおおう。主のご臨在は昔シナイ山をきよめたが、いまは主のみ栄えのために建てられた宮をきよいものにした。 宮をきよめることによって、イエスはメシヤとしてのご自分の使命を公表し、その働きにはいられたのであった。神の住居として建てられたこの宮は、イスラエルと世界のために実物教訓となるように計画されていた。輝く聖なるセラフから人間にいたるまで、すべての被造物が創造主の内住される宮となることが、永遠の昔から神の目的であった。罪のために人類は神の宮とならなくなった。人の心は、悪のために暗くなり、けがれたものとなったので、もはや聖なる神の栄光をあらわさなくなった。しかし神のみ子の受肉によって天の神の目的は達成された。神は人類の中にお住みになり、救いの恵みを通して、人の心はふたたび神の宮となる。神はエルサレムの宮が、すべての魂にとって可能な高い運命についてのたえまないあかしとなるように計画された。しかしユダヤ人は彼らが非常な誇りをもって見ていた建物の意義を理解していなかった。彼らは自分自身をみたまの聖なる宮としてささげなかった。けがれた商売のそうそうしさにつつまれていたエルサレムの宮の庭は、肉欲やきよくない思いが入りこんでけがれている心の宮をそのままあらわしていた。宮を世的な売り買いからきよめることによって、イエスは、罪のけがれ、すなわち魂を堕落させる世俗的な望み、利己的な欲望、悪習慣などから心をきよめられるご自分の使命を宣言された。「あなたがたが求める所の主は、たちまちその宮に来る。見よ、あなたがたの喜ぶ契約の使者が来ると、万軍の主が言われる。その来る日には、だれが耐え得よう。そのあらわれる時には、だれが立ち得よう。彼は金をふきわける者の火のようであり、布さらしの灰汁のようである。彼は銀をふきわけて清める者のように座して、レビの子孫を清め、金銀のように彼らを清める」（マラキ 3：1～3）。

「あなたがたは神の宮であって、神の御霊が自分のうちに宿っていることを知らないのか。もし人が、神の宮を破壊するなら、神はその人を滅ぼすであろう。なぜなら、神の宮は聖なるものであり、そして、あなたがたはその宮なのだからである」（Ⅰコリント 3：16、17）。だれも心を占領している悪のかたまりを自力で追い出すことはできない。キリストだ

けが魂の宮をきよめることがおできになる。しかし彼ははいることを強制なさらない。主は昔の宮にお入りになったようには心にお入りにならないで、「見よ、わたしは戸の外に立って、たたいている。だれでもわたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしはその中にはい（る）」と言われる（黙示録 3：20）。主は 1 日だけのためにお入りになるのではない。「わたしは彼らの間に住み、かつ出入りをするであろう。……彼らはわたしの民となるであろう」と言われる（Ⅱコリント 6：16）。「われわれの不義を足で踏みつけられる。あなたはわれわれのもろもろの罪を海の深みに投げ入れ」られる（ミカ 7：19）。主のご臨在は、魂が主の聖なる宮となり、「霊なる神のすまい」となるように、その魂を洗いきよめる（エペソ 2：21、22）。

恐ろしさに圧倒されて祭司たちと役人たちは宮の庭から逃げ出し、彼らの心を見抜く鋭い目からのがれた。彼らは逃げて行く時、宮へやって来る他の人 たちに出会うと、自分たちの見聞きしたことを語り、ひき返すように命じた。キリストは逃げて行く人たちをごらんになって、彼らの恐怖と、彼らが真の礼拝の本質について無知であることをかわいそうにお思いになった。この光景の中に、イエスは、ユダヤ国民全体が邪悪で悔い改めないために、離散させられることが象徴されているのをごらんになった。 ではなぜ祭司たちは宮から逃げ出したのだろうか。なぜ彼らはその場にふみとどまらなかったのだろうか。彼らに行ってしまえと命じたのは、この世の地位も権力もない大工の息子、貧しいガリラヤ人だった。なぜ彼らはイエスに抵抗しなかったのか。なぜ彼らは不正にもうけた金を捨てて、外観はまったくみすぼらしいこの人の命令で逃げ出したのか。

キリストは王の権威をもって語られたので、彼の様子や声の調子には、人々が抵抗する力をゆるさないものがあった。命令のことばで、彼らはかつてこれまでになかったほど、偽善者やどろぼうとしての自分たちの真の立場をみとめた。人性を通して神性がひらめいた時、彼らはキリストの顔つきに怒りをみとめたばかりでなく、彼のみことばの意味をさとった。彼らは永遠のさばき主のみ座の前で、この世と永遠のために宣告をくだされたかのように感じた。その時だけ、彼らはキリストが預言者であることを確信し、多くの者が彼をメシヤと

して信じた。聖霊が彼らの心にキリストに関する預言者のことばをひらめかせた。彼らはこの自覚に従ったであろうか。

彼らは悔い改めようとしなかった。彼らは貧しい者に村してキリストの同情心が呼び起こされたことを知っていた。彼らは民に対する自分たちの態度に搾取の罪があることを知っていた。キリストが彼らの思いを見抜かれたので、彼らはキリストを憎んだ。キリストが公衆の面前で彼らを責められたことが彼らの誇りを傷つけた。そして彼らはキリストの勢力が民の中にひろがって行くのをねたんだ。彼らは、キリストが彼らを追い出された力について、まただれがその力を彼に与えたかについて、彼に挑戦しようと決心した。　ゆっくりと用心深く、しかし心に憎しみをいだいて、彼らは宮へもどってきた。だが彼らのいない間に、何と　いう変化が起こったことだろう。彼らが逃げた時、貧しい人々があとに残った。そしてこの　人たちはいま顔に愛と同情のあらわれているイエスに見入っていた。目に涙をためて、イエ　スはまわりのふるえている人たちに、恐れるには及ばない、わたしはあなたがたを救い、あ　なたがたはわたしをあがめるであろう。そのためにわたしはこの世にきたのだと言われ た。　人々は、主よ、祝福してくださいというさし迫った、同情すべき訴えをもってイエスの 前におしよせた。主の耳は一つ一つの叫びをきかれた。やさしい母親にもまさる憐れみをも　って、主は病気の子供たちの上に身をかがめられた。みんなが手当てをしてもらった。どの　人もみなどんな病気もいやされた。口のきけない者は口を開いて賛美し、盲人は目をあけて　くださったお方の顔を見た。苦しむ者たちの心はよろこぼされた。

祭司たちと宮の役人たちがこのすばらしいわざを目に見た時、彼らの耳にきこえた声は彼らにとって何という思いがけないことだったことだろう。人々は自分たちの受けている苦しみや裏切られた望みや、苦悩の日々や眠られない幾夜について語っていた。望みの最後のともしびが消えたようにみえた時、キリストが彼らをいやされたのだった。重荷はとても重かったが、わたしは助けてくださる方をみつけた。その人は神キリストだ。わたしは一生をキリストの奉仕にささげるとある者は言った。両親は子供たちに、あの方があなたのいのちを救ってくださったのだ。あなたの声をあげてあの方を賛美しなさいと言った。子供たちと若者たち、父親と母親たち、友人たちと見物人たちは、声をあわせて感謝し、賛美した。望

みと喜びが彼らの心を満たした。平安が彼らの心にのぞんだ。彼らは魂と体を回復し、イエスの比類のない愛をどこででも宣伝しながら家へ帰った。

キリストが十字架につけられた時に、このようにいやされた人たちは、やじ馬連中の「十字架につけよ、十字架につけよ」との叫びに加わらなかった。彼ら の同情はイエスの側にあった。彼らはイエスの大いなる同情とふしぎな力を経験したからである。彼らはイエスが救い主であるとわかっていた。イエスが彼らに肉体と魂の健康をお与えになったからである。彼らは使徒たちの説教を聞き、その心に神のみことばが開けたので知恵が与えられた。彼らは神のめぐみの代理者、神の救いのうつわとなった。 宮の庭から逃げた群衆は、しばらくすると少しずつ押し返してきた。彼らは自分たちが陥っていたあわてふためきから幾分立ち直ったが、その顔にはまだ決断のつかない臆病さがあらわれていた。彼らはイエスのみわざを見て驚き、イエスを通してメシヤに関する預言が成就されたことを確信した。宮をけがした罪は、大部分祭司たちにあった。宮の庭が市場になってしまったのは、彼らのとりきめによったのである。人には比較的に罪がなかった。彼らはイエスの天来の権威に印象づけられたが、しかし彼らにとっては祭司たちと役人たちの勢力が絶対であった。彼らはキリストの使命を革新的なものに考え、宮の当局者たちから許可されていたことに干渉する権利がイエスにあるかどうかを問題にした。彼らは商売が邪魔されたので腹を立て、聖霊のさとしをうち消した。

ほかのだれよりも祭司たちと役人たちは、イエスを、エホバにあぶらそそがれたお方として見るべきであった。なぜなら、彼らはイエスの使命について書かれた聖なる巻物を手にしており、宮のきよめが人間の力以上のあらわれであることがわかっていたからである。彼らはイエスをひどく憎んだが、イエスが宮の清潔を回復するために神からつかわされた預言者であるかもしれないとの思いからのがれることができなかった。この恐れから生じた尊敬をもって、彼らはイエスのところへ行き、「こんなことをするからには、どんなしるしをわたしたちに見せてくれますか」とたずねた（ヨハネ 2：18）。 イエスはすでに彼らにしるしを示しておられた。彼らの心に光を照すことによって、またメシヤのなすべきわざを彼らの前で行うことによって、イエスはご自分の本性について確信させる証拠をお与えになってい

た。いま彼らがしるしを求めると、イエスはたとえを用いてお答えになり、彼らの悪意を見抜いておられて、彼らの悪意がどこまで発展するかを知っておられることをお示しになった。「この神殿をこわしたら、わたしは　3　日のうちに、それを起すであろう」と主は言われた（ヨハネ 2：19）。

イエスのこのことばには二重の意味があった。イエスはユダヤ人の神殿と礼拝の破壊のことを言われたばかりでなく、ご自分の死すなわちご自身の肉体の宮の破壊について言われた。すでにユダヤ人たちはイエスの死についてはかりごとをめぐらしていた。祭司たちと役人たちが宮へもどってきた時には、彼らはすでに、イエスを殺すことによって邪魔者をとり除く相談をしていた。それなのにイエスが彼らの意図を目の前に示された時、彼らはイエスの言っておられることがわからなかった。彼らはイエスのことばがエルサレムの神殿についてだけ言われたものと考え、憤慨して叫んだ。「この神殿を建てるのには、46 年もかかっています。それだのに、あなたは 3 日のうちに、それを建てるのですか」（ヨハネ 2：20）。彼らは、イエスに対する彼らの不信が正当なものであったと感じ、イエスを拒否しようとの決心を固めた。

キリストは、ご自分のことばを不信なユダヤ人にも、また当時の弟子たちにさえもわからせるおつもりはなかった。イエスはこのことばが彼の反対者たちに曲解され、ご自分にとって不利になることをご存じだった。裁判の時に、このことばが告発され、カルバリーではこれらのことばが嘲笑となって彼に投げつけられるのであった。だがいまそのことばを説明すれば弟子たちにご自分の苦難を知らせ、彼らがまだ耐えることのできない苦悩を与えることになる。またそのことばを説明すれば、ユダヤ人に彼らの偏見と不信の結果を早まってばくろすることになる。すでに彼らは、イエスが小羊としてほふり場に引かれるまで、彼らが着々とたどる道に入っていたのである。

キリストのこのことばが語られたのは、主を信ずる者のためであった。イエスはこのことばが伝えられ　ることをご存じだった。このことばは、過越節に語られたのだから、幾千の人々の耳に入り、世界の全地に伝えられるであろう。キリストが死からよみがえられてから、

このことばの意味が明らかになるのである。多くの者にとって、それはキリストの神性の決定的な証拠となるのである。

霊的に暗かったために、イエスの弟子たちさえ、主の教訓をさとらないことがたびたびあった。しかしそれらの教訓の多くは、次々に起る事件によって明らかになった。キリストがもはや弟子たちといっしょにおられなくなってから、そのみことばは彼らの心のささえとなった。 「この神殿をこわしたら、わたしは 3 日のうちに、それを起すであろう」との救い主のことばには、エルサレムの宮をさすことばとして、聞いた者たちが認めたよりももっと深い意味があった（ヨハネ 2：19）。キリストは宮の土台であり、いのちであった。宮の儀式は神のみ子の犠牲を象徴していた。祭司職は、キリストの仲保者としての性格と働きをあらわすために設けられていた。いけにえをささげる礼拝の制度全体は、世の人々をあがなわれる救い主の死を予表していた。それらの献げ物が幾時代にわたってさし示してきた大事件が完結されると、その献げ物にはもう何の効力もないのだった。

儀式の制度全体はキリストを象徴していたから、キリストを離れては何の価値もなかった。ユダヤ人がキリストを死に渡すことによって、キリストを決定的に捨てた時、彼らは宮とその奉仕に意義を与えていた一切のものを捨てた。宮の神聖さは失われた。宮は破壊される運命にあった。 その日から、いけにえの献げ物とそれに関係のある奉仕は無意味となった。カインの献げ物と同じように、それは救い主への信仰を表わさなかった。キリストを殺したことによって、ユダヤ人は実質的に宮を滅ぼした。キリストが十字架につけられたとき、宮の内側の幕が上から下までまっ二つに裂けて、最後の大いなるいけにえがささげられ、いけにえをささげる制度が永遠に終りを告げたことを意味した。 「わたしは 3 日のうちに、それを起すであろう」（ヨハネ　2：19）。救い主が死なれたことによって暗黒の勢力は勝利したように見え、彼らはその勝利をよろこんだ。しかしイエスは、割れたヨセフの墓から勝利者　としてあらわれ、「もろもろの支配と権威との武装を解除し、キリストにあって凱旋し、彼　らをその行列に加えて、さらしものとされたのである」（コロサイ　2：15）。キリストは、その死とよみがえりとによって、「人間によらず主によって設けられた真の幕屋」に奉仕す　る者となられた（ヘブル 8：2）。人間がユダヤ人の幕屋を建て、人間がユダヤ人の宮を建て

た。だが地上の聖所の原型である天の聖所は、人間の建築家によって建てられなかった。「見よ、その名を枝という人がある。彼は自分の場所で成長して、主の宮を建てる。すなわち彼は主の宮を建て、王としての光栄を帯び、その位に座して治める」（ゼカリヤ 6：12、13）。

キリストをさし示していたいけにえの儀式は過ぎ去った。しかし人間の目は、世の罪のためのまことのいけにえに向けられた。地上の祭司制度はやんだ。だがわれわれは、新しい契約の奉仕者イエスと「アベルの血よりも力強く語るそそがれた血」とに目をそそぐ。「それによって聖霊は、前方の幕屋が存在している限り、聖所にはいる道はまだ開かれていないことを、明らかに示している。……しかしキリストがすでに現れた祝福の大祭司としてこられたとき、手で造られず、この世界に属さない、さらに大きく完全な幕屋をとおり、……ご自身の血によって、1 度だけ聖所にはいられ、それによって永遠のあがないを全うされたのである」（ヘブル 12：24、9：8～12）。

「そこでまた、彼は、いつも生きていて彼らのためにとりなしておられるので、彼によって神に来る人々を、いつも救うことができるのである」（ヘブル 7：25）。奉仕は地上の宮から天上の宮へ移されても、また聖所とわれらの大祭司は人間の目には見えなくても、弟子たちはそのことによって何の損失もこうむらないのであった。救い主がおられないからといって、まじわりが中断されたり、力が減少したりするようなことは ないのであった。イエスは天の聖所で奉仕しておられる一方では、いまでもみたまによって地上の教会の奉仕者であられる。イエスは人間の目からはとり去られても、「見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである」という別れの約束は成就されている（マタイ 28：20）。イエスは下位の奉仕者たちにご自分の力を委任されているが、その力づけるご臨在は依然としてご自分の教会とともにある。

「わたしたちには……大祭司なる神の子イエスがいますのであるから、わたしたちの告白する信仰をかたく守ろうではないか。この大祭司は、わたしたちの弱さを思いやることのできないようなかたではない。罪は犯されなかったが、すべてのことについて、わたしたちと同じように試練に会われたのである。だから、わたしたちは、あわれみを受け、また、恵

みにあずかって時機を得た助けを受けるために、はばかることなく恵みの御座に近づこうではないか」（ヘブル 4：14～16）。

第 17 章ニコデモ

ニコデモはユダヤ国民の中で高い信任の地位を占めていた。彼は高い教育を受け、並々ならぬ才能を持ち、また国民議会の名誉ある議員であった。他の人たちと同じに、彼もイエスの教えに心を動かされていた。彼は金持ちで、学問があり、尊敬されていたが、ふしぎにこのいやしいナザレ人に心をひかれていた。救い主の口から語られた教訓が、彼に強い印象を与えたので、彼はそうしたすばらしい真理についてもっと学びたいと望んだ。

キリストが宮のきよめに権威を行使されたことから、祭司たちと役人たちの断固とした憎悪心がひき起こされた。彼らはこの未知の人の力を恐れた。名もない一ガリラヤ人のこのような大胆さをゆるしておけなかった。彼らは何とかしてイエスの働きをやめさせようとした。しかし全部の者がこの目的に賛成したわけではなかった。こんなにはっきり神のみたまによって動かされているお方に反対することを恐れた者も何人かあった。彼らは、預言者たちが、イスラエルの指導者たちの罪を責めたために殺されたことを思い起こした。ユダヤ人が異教国民に支配されているのは、神からの譴責を頑固にこばんだ結果であることを彼らは知っていた。イエスに対してはかりごとをめぐらすことによって、祭司たちと役人たちが父祖たちと同じ道をたどり、国民に新たな災難がもたらされることを彼らは恐れた。ニコデモはこうした気持をいだいていた者の 1 人であった。サンヒドリンの会議で、イエスに対してどういう方針をとるかが討議されたとき、ニコデモは慎重さと穏健さとを忠告した。もしイエスがほんとうに神から権威をさずけられているものなら、その警告をこばむことは危険であると彼は説いた。祭司たちはあえてこの勧告を無視することもできず、当分は救い主に対して公然たる手段をとらなかった。

イエスのことばをきいてから、ニコデモはメシヤに関する預言を熱心に研究した。調べれば調べるほど、これこそきたるべきお方であるという確信が強められた。イスラエルの他の多くの人たちといっしょに、彼は宮がけがされていることに非常な困惑を感じていた。イエスが売り買いする人たちを追い出された時、彼はその場の光景を見ていた。彼はそこに天来の力のふしぎなあらわれを見た。彼は救い主が貧しい人々をいたわり、病人をいやしてお

られるのを見た。彼は人々のうれしい顔つきを見、賛美の声を聞いた。そしてナザレのイエスが神からつかわされたお方であることを、彼は疑うことができなかった。

ニコデモはイエスとの面会を非常に望んだが、公然とイエスに会うことをちゅうちょした。ユダヤ人の役人が、まだほとんど名も知られていない一教師に 共鳴していることを公然と表明することは不面目なことだった。イエスをたずねたということがもしサンヒドリンに知られたら、彼らの嘲笑と非難とを招くであろう。彼は、自分が公然とたずねるとほかの者たちがまねをするからという理由を口実にして、ひそかにイエスに面会しようと決心した。特別な調査によって、オリブ山にひっこんでおられる救い主の居所を知ると、彼は町が眠りのうちに静まるまで待ち、それからイエスをたずねて行った。

キリストの前に出ると、ニコデモは妙な気おくれを感じ、それを平静と威厳の様子によっておしかくそうとつとめた。彼は言った、「先生、わたしたちはあなたが神からこられた教師であることを知っています。神がご一緒でないなら、あなたがなさっておられるようなしるしは、だれにもできはしません」（ヨハネ 3：2）。彼は、教師としてのキリストの非凡な才能について、また奇跡を行われるすばらしい力について語ることによって、面会の道ならしをしようと望んだ。彼のことばは信頼心をあらわし、また信頼心を起こさせるように意図されていた。だが実際にはそのことばに不信があらわれていた。彼はイエスをメシヤとして認めず、ただ神からつかわされた教師として認めた。

このあいさつを認めないで、イエスは、相手の心の奥底を読んでおられるかのように、語り手にじっと目をそそがれた。限りない知恵を持っておられるイエスは、ご自分の目の前に真理を求めている 1 人の人間をごらんになった。主はこの来訪の目的をご存じであった。そこで主は、相手の心にすでにめばえている確信を深めようと望んで、まっすぐ中心点にふれ、厳粛に、しかしやさしく言われた、「よくよくあなたに言っておく。だれでも新しく生れなければ、神の国を見ることはできない」（ヨハネ 3：3）。

ニコデモは、主と議論しようと思ってやってきたのであったが、イエスは真理の根本原則をはっきりとお示しになった。主はニコデモにこう言われた、あなたにとって必要なのは、

理論的な知識よりもむしろ霊的な生れ変わりである。あなたは、好奇心を満足させるより、新しい心を持つ必要がある。あなたは天の事物を理解できる前に上からの新しいいのちを受けなくてはならない。この変化が起こって一切のことが新しくなるまでは、わたしの権威やわたしの使命についてわたしと議論しても、その結果は、あなたにとって救いの益とはならないと。

ニコデモは、バプテスマのヨハネが悔い改めとバプテスマについて説き、聖霊をもってバプテスマを授けられるお方を人々にさし示すのを見聞きしていた。彼自身も、ユダヤ人の間に霊性が欠けており、彼らが頑迷さと世俗的野心に大いに支配されていることを感じていた。彼はメシヤが来臨される時、物事の状態がもっとよくなるようにと望んでいた。しかしバプテスマのヨハネの鋭いメッセージは、彼の心のうちに罪の自覚を起こさなかった。彼は厳格なパリサイ人で、自分の善行を誇っていた。彼は、慈善心と、宮の奉仕を維持するために惜しまず献金することとによって世間から尊敬されていたので、神の恵みは確実であると思っていた。彼はみ国が自分の現在の状態では見ることができないほどきよいものであるという思いに驚かされた。

イエスは、新しく生れるという表現をお用いになったが、それはニコデモにとって全然聞きなれないことばではなかった。異教からイスラエルの信仰に改宗した者は、よく生れたばかりの子供にたとえられた。だから彼はキリストのことばを文字通りの意味に受け取るべきではないことを認めていたにちがいない。しかし彼は、イスラエル人として生れたおかげで、自分は必ず神のみ国に入るものと考えていた。彼は自分が変化する必要があると思わなかった。だから救い主のことばに驚いたのである。彼はこのことばがぴったりと自分自身にあてはめられたことにいらだった。パリサイ人としての誇りが真理を求める者としての正直な願いと戦っていた。彼はキリストがイスラエルのつかさとしての彼の立場を尊敬しないで、自分にこんな話し方をされるのをあやしんだ。

驚いて落ち着きを失った彼は、皮肉のこもったことばで、「人は年をとってから生れることが、どうしてできますか」とキリストに答えた（ヨハネ 3：4）。彼は、 他の多くの人々と同じように、鋭い真理が良心に訴えられると、生れながらの人は神のみたまの賜物を受け

入れないということをあらわした。彼のうちには霊的事物に応ずる何ものもない。なぜなら霊的事物は霊的に判断されるからである（Ⅰコリント 2：14 参照）。 しかし救い主は議論に議論をもって応じられなかった。キリストは重々しく静かな威厳をもって片手をあげ、一層　強い保証をもって、「よくよくあなたに言っておく。だれでも、水と霊とから生れなければ、神の国にはいることはできない」と、真理を強調された（ヨハネ 3：5）。ニコデモは、キリストがここに言っておられるのは、水のバプテスマのことと神のみたまによって心が新たに　されることとであることがわかった。彼はバプテスマのヨハネが預言したお方の前に自分が　いることを確信した。

イエスはことばをつづけて、「肉から生れる者は肉であり、霊から生れる者は霊である」と言われた（ヨハネ 3：6）。心は生れながらにして悪く、「だれが汚れたもののうちから清いものを出すことができようか、ひとりもない」のである（ヨブ 14：4）。 どんな人間の発明によっても、罪を犯している魂を救う道をみいだすことはできない。「肉の思いは神に敵　するからである。すなわち、それは神の律法に従わず、否、従い得ないのである。」「悪い　思い、すなわち、殺人、姦淫（かんいん）、不品行、盗み、偽証、誹（そし）りは、心の中　から出てくるのである」（ローマ 8：7、マタイ 15：19）。流れが清くなるには、心の泉がきよめられなければならない。自分で律法を守る行為によって天国に入ろうとする者は不可　能なことを試みているのである。律法的な宗教、敬虔の形だけを持っている者には安全がな　い。クリスチャンの生活は古いものを修正したり改良したりすることではなくて、性質が生　れ変わることである。自我と罪に対する死があり、まったく新しいいのちがある。この変化　は聖霊の効果的な働きによってのみ行われる。

ニコデモはまだ迷っていたので、イエスは風を例にとってその意味をお示しになった。「風は思いのままに吹く。あなたはその音をきくが、それがどこからきて、どこへ行くかは知らない。霊から生れる者もみな、それと同じである」（ヨハネ 3：8）。 風は木々のこずえに音をたて、葉や草花をさらさらと鳴らせるが、目に見えないので、だれも風がどこからきてどこへ行くかを知らない。心に働く聖霊の働きもこれと同じである。それは、風の動きと同じように、説明することができない。人は自分が信仰に入った正確な日時と場所を言った

り、入信の過程における事情を始めから終りまで説明したりすることができないかも知れない。だがそのことは、彼が信仰に入っていないという証拠にはならない。風のように目に見えない力によって、キリストはたえず心に働きかけておられる。すこしずつ、おそらく本人の気がつかないうちに、魂をキリストへひきよせるのに役立つ印象が与えられているのである。こうした印象は、キリストについて瞑想したり、聖書を読んだり、あるいは説教者のことばをきいたりすることによって与えられるかもしれない。そしてみたまがもっと直接に訴える時、突然にその魂はよろこんでイエスに屈服する。多くの人はこれを突然の改心と呼ぶが、それは神のみたまが長い間その人を説得した結果、すなわち長期間にわたる忍耐強い作用の結果である。

風自体は目に見えないが、風によって生ずる結果は見たり感じたりすることができる。同じように、魂に対するみたまの働きは、その救いの力を感じた人のすべての行為にあらわれる。神のみたまが心を占領される時、それは生活を生れ変わらせる。罪の思いはしりぞけられ、悪い行為は放棄され、愛と謙遜と平安が怒りとねたみと争いに入れ代る。よろこびが悲しみに入れ代り、顔には天の光が反映する。だれも重荷を持ちあげる手を見たり、天の宮からくだる光を見る者はない。祝福は、信仰によって魂が神に屈服するときに与えられる。その時、人間の目で見ることのできない力が、神のかたちにかたどって新しい人間を創造する。

限りある人間の頭脳ではあがないの働きを理解することは不可能である。あがないの奥義は、人間の 知識を超越している。それでも、死から生へ移る者は、それが天来の事実であることを認める。われわれは、あがないの発端はこの世において個人的な経験を通して知ることができる。しかしその結果は永遠の時代にまで及んでいるのである。 イエスが語っておられる間に、真理のかすかなひらめきがこのつかさの心にさし込んだ。人の心をやわらげ服従させる聖霊の感化が彼の心を動かした。それでも彼は救い主のみことばを完全に理解しなかった。彼は新生の必要よりも、むしろそれが達成される方法に心を動かされた。彼はあやしみながら、「どうして、そんなことがあり得ましょうか」と言った（ヨハネ 3：9）。 「あなたはイスラエルの教師でありながら、これぐらいのことがわからないのか」とイエスはお

たずねになった（ヨハネ 3：10）。たしかに、民の宗教的な教育をまかされている者が、こんな大切な真理について無知であるべきではない。イエスのみことばはニコデモが真理の率直なことばにいらだたないで、霊的無知のゆえに自分自身についてへりくだった意見を持つべきであるという教訓を含んでいた。しかしイエスは、厳粛な威厳をもってお語りになり、その顔にも声の調子にも熱心な愛があらわれていたので、ニコデモは自分の不面目な立場を認めても腹がたたなかった。

しかしイエスが、地上におけるご自分の使命はこの世の王国を建てることではなくて、霊的王国を建てることだと説明されると、相手は困惑した。それをごらんになって、イエスは、「わたしが地上のことを語っているのに、あなたがたが信じないならば、天上のことを語った場合、どうしてそれを信じるだろうか」とつけ加えられた（ヨハネ 3：12）。もしニコデモが、人の心に働く恵みを例示したキリストの教えを信じることができないならば、天の栄光の王国がどういうものかをどうして理解することができよう。彼は、地上におけるキリストの働きの性質を認識しないならば、天におけるキリストの働きを理解することはできないのである。

イエスが宮から追い出されたユダヤ人は、アブラハムの子であると主張していたが、彼らは、キリストのうちにあらわされている神の栄光に耐えることができなかったので、救い主の前から逃げ出した。こうして彼らは、神の恵みによって宮の聖なる奉仕にあずかるのにふさわしい者ではないことを立証した。彼らは聖潔の外観を保つのに熱心だったが、心の聖潔をなおざりにした。彼らは律法の文字についてやかましかったが、絶えずその精神を破っていた。彼らの大きな必要は、キリストがニコデモに説明された変化すなわち霊的新生であり、罪からのきよめであり、知識と聖潔とを新たにされることであった。 生れ変わりのわざについてイスラエルが盲目であることには言い訳の余地がなかった。聖霊による霊感の下にイザヤは、「われわれはみな汚れた人のようになり、われわれの正しい行いは、ことごとく汚れた衣のようである」と書いた（イザヤ 64：6）。ダビデは、「神よ、わたしのために清い心をつくり、わたしのうちに新しい、正しい霊を与えてください」と祈った（詩篇 51： 10）。またエゼキエルを通して、「わたしは新しい心をあなたがたに与え、新しい霊をあな

たがたの内に授け、あなたがたの肉から、石の心を除いて、肉の心を与える。わたしはまたわが霊をあなたがたのうちに置いて、わが定めに歩ませ、わがおきてを守ってこれを行わせる」との約束が与えられていた（エゼキエル 36：26、27）。

ニコデモはこれらの聖句をくもった心で読んでいた。だが今彼はその意味をさとりはじめた。律法を外面的な生活にあてはめ、どんなに厳格に文字通りこれを守っても、だれも天の王国に入る資格はないということを彼はさとった。人間の目から見れば、彼の生活は正しく尊敬すべきものであった。だがキリストの前に出ると、彼は、自分の心が清潔でなく、自分の生活が聖潔でないことを感じた。

ニコデモはだんだんキリストにひきつけられた。救い主が新生について説明された時、彼はこの変化が自分のうちに行われるようにと切望した。どんな方法によってそれを達成することができるのだろう か。イエスは、口に出されないこの質問に答えて、「ちょうどモーセが荒野でへびを上げたように、人の子もまた上げられなければならない。それは彼を信じる者が、すべて永遠の命を得るためである」と言われた（ヨハネ 3：14、15）。

ここにニコデモのよく知っている根拠があった。上げられた蛇（へび）の象徴によって、彼は救い主の使命をはっきりさとった。イスラエルの民が火の蛇のかみ傷のために死にかけていた時、神はモーセに青銅の蛇を作って会衆のまん中に高くかかげるように命じられた。そして蛇を仰ぎ見る者はみな生きられるという布告が陣営中に伝えられた。人々は、蛇そのものには彼らを助ける力がないことをよく知っていた。それはキリストの象徴だった。滅ぼす蛇の形に作られた像が彼らのいやしのためにあげられたように、「罪の肉の様」につくられたお方が彼らのあがない主となられるのであった（ローマ 8：3）。イスラエル人の多くは、いけにえの儀式そのものに彼らを罪から解放する力があると思っていた。青銅の蛇に価値がなかったように、いけにえの儀式そのものにも価値がないことを彼らに教えようと神は望まれた。それは彼らの心を救い主に向けさせるのであった。傷をいやされるためであろうと、罪をゆるされるためであろうと、彼らは神の賜物キリストへの信仰をあらわす以外に自分では何もできなかった。彼らは仰いで見て、生きるのであった。

蛇にかまれた人たちは、青銅の蛇を仰いで見るのをおくらせることもできた。こんな青銅の象徴に何の効力があるだろうかと疑うこともできた。彼らはまた科学的な説明を要求することもできた。だが何の説明も与えられなかった。彼らはモーセを通して与えられた神のみことばを信じなければならなかった。仰いで見るのをこばむことは、滅びることであった。 論争や議論によっては、魂に光が与えられない。われわれは仰いで見て生きなければならない。ニコデモは教訓を受け入れてそれを持ち帰った。彼は理論について議論するためではなく、魂にいのちを受けるために、新しい方法で聖書を調べた。聖霊の導きに身を委ねた時、彼は天の王国を見はじめた。

あげられた蛇によってニコデモに教えられたのと同じ真理を学ぶ必要のある人が今日も幾千人となくいる。彼らは、神の律法に従うことが神のめぐみを受ける資格であると信じこんでいる。イエスを仰いで見て、イエスがめぐみによってのみ救ってくださることを信じなさいと言われると、彼らは、「どうして、そんなことがあり得ましょうか」と叫ぶのである（ヨハネ 3：9）。 ニコデモのように、われわれも、自ら進んで罪人のかしらと同じ方法でいのちに入らねばならない。キリストより「以外に救はない。わたしたちを救いうる名は、これを別にしては、天下のだれにも与えられていないからである」（使徒行伝 4：12）。信仰を通してわれわれは神のめぐみを受ける。だが信仰はわれわれの救い主ではない。信仰そのものには功績がない。信仰は、キリストをしっかりとらえて、彼の功績すなわち罪からの救いをわがものとする手である、またわれわれは神のみたまの助けなしには悔い改めることさえできない。聖書にはキリストについて、「イスラエルを悔い改めさせてこれに罪のゆるしを与えるために、このイエスを導き手とし救主として、ご自身の右に上げられたのである」といわれている（使徒行伝 5：31）。悔い改めは、罪のゆるしとまったく同じにキリストからくるのである。

では、われわれはどのようにして救われるのだうりか。「ちょうどモーセが荒野でへびを上げたように」人の子イエスもまたあげられた（ヨハネ　3：14）。蛇にだまされ、かまれた者はみなこのイエスを仰ぎ見て生きることができる。「見よ、世の罪を取り除く神の小羊」（ヨハネ 1：29）。十字架から輝いている光は神の愛をあらわしている。神の愛はわれわれ

をみもとにひきよせている。このひきよせる力にさからわなければ、われわれは救い主を十字架につけた罪を悔いて十字架の下に導かれる。その時神のみたまは、信仰を通して魂に新しいいのちを生じさせる。考えること望むことはキリストのみこころに服従させられる。心と思いは、「万物をご自身に従わせ」るためにわれわれのうちに働かれるキリストのみかたちに 新しくつくられる（ピリピ 3：21）。その時神の律法は心と思いにしるされ、われわれはキリストとともに、「わが神よ、わたしはみこころを行うことを喜びます」と言うことができる（詩篇 40：8）。

ニコデモとの会見において、イエスは救いの計画と世に対するご自分の使命をお示しになった。キリストが、天の王国を継ぎたいと望むすべての者の心のうちになされる必要のある働きを、1 歩 1 歩、こんなにくわしく説明されたことは、その後の講話にも 1 度もなかった。キリストは、その公生涯の初めにあたって、サンヒドリンの議員で、最も信じやすい心　を持ち、民の教師として任命されている者に、真理を明らかにされた。しかしイスラエルの　指導者たちは、光を歓迎しなかった。ニコデモは真理を心の中にかくしていたので、3 年の間、表立った結果はみられなかった。

しかしイエスはご自分が種をまかれた土をよく知っておられた。さびしい山の中で、夜たった 1 人の聞き手に語られたことばは失われなかった。しばらくの間ニコデモはキリストを公然と認めはしなかったが、キリストの生活を注視し、その教えを心に思いめぐらした。　サンヒドリンの会議で、彼は、イエスを殺そうとする祭司たちのくわだてに何度も反対した。ついにイエスが十字架に上げられた時、ニコデモは、「ちょうどモーセが荒野でへびを上げ　たように、人の子もまた上げられなければならない。それは彼を信じる者が、すべて永遠の　命を得るためである」といわれたオリブ山での教えを思い出した（ヨハネ　3：14、15）。あのひそかな会見から出た光がカルバリーの十字架を照らし、ニコデモは、イエスが世のあが　ない主であられることを知った。

主の昇天後、弟子たちが迫害のために離散した時、ニコデモは大胆に前面に現われた。彼は、キリストの死とともに消滅するものとユダヤ人たちが予期していた若い教会をささえるために、自分の富を用いた。かつては用心深く、疑っていた彼が、危機に際して、岩のよ

うに固く立ち、弟子たちの信仰をはげまし、福音の働きを前進させる資金を供給した。彼は、かつては彼に尊敬を払っていた人たちからあざけられ、迫害された。彼はこの世の財産には貧しくなったが、イエスとの夜の会見から始まった信仰はゆるがなかった。　ニコデモは、ヨハネにあの会見の話を物語った。そしてヨハネの筆によって、それは幾百万の人々の教えの　ために記録された。そこに教えられている真理は、ユダヤ人のつかさが身分の低いガリラヤ　の教師からいのちの道を学ぶために木影の深い山へやってきたあの厳粛な夜と同じに、今日　もまた重要なのである。

第 18 章「彼は必ず栄える」

国民に対するバプテスマのヨハネの勢力は、一時は役人や祭司やつかさたちの勢力よりも大きかった。もし彼が自分はメシヤであると名のって、ローマに反乱を起こしていたら、祭司たちと民は彼の旗の下に集まったであろう。サタンは、この世の征服者たちの野心をそそるあらゆる報酬をバプテスマのヨハネに強調しようとしていた。しかしヨハネは自分の勢力の証拠を目の前に見ながら、そのすばらしいわいろを断固としてしりぞけた。彼は自分にそそがれる注意を他のお方に向けた。

いま彼は人気の波が自分から去って、救い主に向かっていることを知った。日に日に、彼のまわりの群衆が減って行った。イエスがエルサレムからヨルダン付近の地方においでになると、人々はイエスのことばを聞くために集まった。イエスの弟子たちの数は日に日にふえた。多くの者がバプテスマを受けにやってきた。キリストはご自分ではバプテスマをおさずけにならなかったが、弟子たちがこの儀式を行うのを是認された。こうしてイエスはご自分の先駆者の使命を承認された。しかしヨハネの弟子たちは高ま って行くイエスの人気をねたみの目で見た。彼らはイエスの働きを批判しようと待ちかまえていたが、まもなくその機会を見つけた。バプテスマは魂を罪からきよめるのに役立つかどうかということについて、彼らとユダヤ人との間に疑問が起こった。彼らはイエスのバプテスマはヨハネのバプテスマと本質的にちがっていると主張した。まもなく彼らはバプテスマの時に用いるのに適当なことばの形式について、そしてついにはいったいキリストの弟子たちにはバプテスマをさずける権限があるのかどうかということについて、キリストの弟子たちと論争した。

ヨハネの弟子たちはヨハネのところへ苦情を訴えてきて、「先生、ごらん下さい。ヨルダンの向こうであなたと一緒にいたことがあり、そして、あなたがあかしをしておられたあのかたが、バプテスマを授けており、皆の者が、そのかたのところへ出かけています」と言った（ヨハネ 3：26）。こうしたことばによって、サタンはヨハネを試みた。ヨハネの使命はまさに終わろうとしているように見えたが、彼がキリストの働きをさまたげることはまだ

可能だった。もし彼が自分自身に同情し、自分が取りかえられたことに悲しみか失望を表明したら、彼は不和の種をまき、ねたみを助長し、福音の進歩をひどくさまたげたであろう。

ヨハネは人間に共通の欠点や弱点を生れつき持っていたが、神の愛にふれることによって生れ変わっていた。彼は利己心と野心にけがされていない雰囲気のうちに住み、ねたみという毒気にまったく超越していた。彼は自分の弟子たちの不満に同情を示さないで、自分がメシヤに対してどんな関係にあるかをはっきりわきまえていることと、自分がそのために道を備えてきたお方を歓迎していることとを明らかにした。 彼はこう言った、「人は天から与えられなければ、何ものも受けることはできない。『わたしはキリストではなく、そのかたよりも先につかわされた者である』と言ったことをあかししてくれるのは、あなたがた自身である。花嫁をもつ者は花婿である。花婿の友人は立って彼の声を聞き、その声を聞いて大いに喜ぶ」（ヨハネ 3：27～29）。ヨハネは自分のことを、婚約者たちのために結婚への道を準備する使者の役目をつとめる友人であると言っている。花婿が花嫁を受け取った時に、その友人の役目は果たされる。彼は自分が尽力して縁を結ばせた人々の幸福をよろこぶ。このようにヨハネは、人々をイエスに向けるために召されていたので、救い主の働きの成功を目に見ることは彼のよろこびであった。彼は、「この喜びはわたしに満ち足りている。彼は必ず栄え、わたしは衰える」と言った（ヨハネ 3：29、30）。

ヨハネは、信仰をもってあがない主を見た時、自己否認の高さにまで高められた。彼は人々を自分にひきつけようとしないで、むしろ彼らの思いをだんだん高めて、ついには彼らが神の小羊イエスに目を向けるようにした。彼自身は一つの声、荒野の叫びにすぎなかった。いま彼は、いのちの光であられるお方にすべての人の目が向けられるために、自分はよろこんで沈黙し、世間から忘れられることに甘んじた。 神の使命者としての召しに忠実な人たちは自分にほまれを求めない。自分を愛する思いは、キリストへの愛によってなくなる。とう といい福音のみわざをさまたげるような対抗意識は何もない。彼らは、バプテスマのヨハネの ように、「見よ、世の罪を取り除く神の小羊」とのべつたえることが自分の働きであること をみとめる（ヨハネ 1：29）。彼らはイエスを高め、そしてイエスとともに人間性が高められる。「いと高く、いと上なる者、とこしえに住む者、その名を聖ととなえられる者がこう

言われる、『わたしは高く、聖なる所に住み、また心砕けて、へりくだる者と共に住み、へりくだる者の霊をいかし、砕けたる者の心をいかす』」（イザヤ 57：15）。

おのれをむなしくした預言者ヨハネの魂は、神からの光に満たされていた。救い主のみ栄えのためにあかしした時、彼のことばは、キリストご自身がニコデモとの会見の時に語られたことばとほとんどそっくりであった。ヨハネは、「上から来る者は、すべてのものの上にある。地から出る者は、地に属する者であって、地のことを語る。天から来る者は、すべてのも　のの上にある。……神がおつかわしになったかたは、神の言葉を語る。神は聖霊を限りなく賜うからである」と言った（ヨハネ　3：31、34）。キリストは、「わたしは……わたし自身の考えでするのではなく、わたしをつかわされたかたの、み旨を求めているからであ　る」と言うことがおできになった（ヨハネ 5：30）。「あなたは義を愛し、不法を憎まれた。それゆえに、神、あなたの神は、喜びのあぶらを、あなたの友に注ぐよりも多く、あなたに　注がれた」とキリストに言われている（ヘブル 1：9）。天父は、「聖霊を限りなく賜うからである」（ヨハネ 3：34）。

キリストに従う者たちもこれと同じである。われわれは、よろこんでおのれをむなしくする時にのみ天の光を受けることができる。われわれは、すべての思いをとりこにしてキリストに従わせることに同意しないかぎり、神のご品性を認識することも、信仰によってキリストを受け入れることもできない。これをなす者にはすべて、聖霊が無制限に与えられる。「キリストにこそ、満ちみちているいっさいの神の徳が、かたちをとって宿っており、そしてあなたがたは、キリストにあって、それに満たされているのである」（コロサイ 2：9、10）。

ヨハネの弟子たちは、人々がみなキリストのもとに行っていると告げたが、ヨハネはもっとはっきりした見通しをもって、「だれもそのあかしを受けいれない」と言った（ヨハネ 3：32）。キリストを罪からの救い主として信じようとする者はほとんどなかった。しかし「そのあかしを受けいれる者は、神がまことであることを、たしかに認めたのである。」「み子を信じる者は永遠の命をもつ」（ヨハネ　3：33、36）。キリストのバプテスマとヨハネのバプテスマのどちらが罪からきよめるかということは議論の必要がない。魂にいのちを与える

のはキリストの恵みである。キリストを離れては、バプテスマは、他の儀式と同じように、無価値な形式である。「御子に従わない者は、命にあずかることがない」（ヨハネ 3:36）。 キリストの働きの成功を、バプテスマのヨハネはこのようによろこんで受け取っていたが、その成功は工ルサレムの当局者たちにも伝えられた。祭司たちとラビたちは、人々が会堂を去って荒野へ集まって行くのを見て、ヨハネの勢力をねたんでいた。ところがそれよりももっと大きな力で群衆をひきつけるお方がここにおられるのだった。イスラエルのこれらの指導者たちは、ヨハネのように、「彼は必ず栄え、わたしは衰える」と言いたくなかった（ヨハネ 3：30）。彼らは、民を自分たちから引き離している働きをやめさせるために、新しい決意をもって立ちあがった。 イエスは、彼らがご自分の弟子たちとヨハネの弟子たちとの間にみぞをつくるためには努力を惜しまないことをご存じだった。イエスは、かつてこの世に与えられた最も偉大な預言者の 1 人を吹き倒すような嵐が迫っていることを知っておられた。誤解と不和のあらゆる機会を避けようと望んで、キリストは静かにご自分の働きをやめてガリラヤに退かれた。われわれもまた、真理に忠実である一方では、不和と誤解にいたるかも知れないようなことはすべて避けるようにすべきである。なぜなら、そうしたことが起こるといつでも、その結果は魂が失われることになるからである。われわれは、不和を生ずる恐れのある事情が起った時にはいつでも、イエスとバプテスマのヨハネの模範にならわねばならない。

ヨハネは改革者として先頭に立つように召されていた。そのためにヨハネの弟子たちは、働きの成功が彼の骨折りによってきまるかのように思い、ヨハネが神の働きのうつわにすぎないという事実を見落して、注意を彼に向ける危険があった。しかしヨハネの働きは、キリスト教会の土台を置くのに十分ではなかった。彼が自分の使命を果たした時、彼のあかしでは達成できなかったほかの働きがなされるのであった。彼の弟子たちはこのことを理解していなかった。キリストがおいでになって、この働きに着手された時、彼らはねたみと不満とを感じた。

いまもこれと同じ危険がある。神はある働きをさせるためにある人を召される。そしてその人がその働きをなす能力があるところまで仕事を進めると、主はこんどは他の人を用い

てその働きをさらに進められる。だがヨハネの弟子たちのように、多くの者は、そ　の働きの成功が最初の働き人によってきまるかのように思うのである。注意は神よりも人に向けられ、ねたみが入りこみ、こうして神の働きがさまたげられる。このように不当にほまれを受けた　当人は、自信をいだくように誘惑を受ける。彼は自分が神に依存していることをみとめない。人々は、人間の指導を信頼するように教えられ、こうして彼らは誤りに陥り、神から離れさ　せられる。

神の働きには人間の肖像や刻印はおされない。主は時々、別のうつわを持ってこられるが、その人を通して神のみこころは最もよく成就されるのである。おのれを低くして、バプテスマのヨハネのように、「彼は必ず栄え、わたしは衰える」と心から言うことのできる者はさいわいである（ヨハネ 3：30）。

第 19 章ヤコブの井戸で

ガリラヤへの途中、イエスはサマリヤをお通りになった。イエスがシケムの美しい谷にお着きになったのは正午だった。この谷の入口に、ヤコブの井戸があった。旅にお疲れになったイエスは、弟子たちが食物を買いに行っている間ここに腰をおろして休まれた。　ユダヤ人とサマリヤ人とは互いに激しい敵意を持ち、できるだけお互いの交渉は一切避けていた。　必要な場合にサマリヤ人と取引をすることはラビたちから合法的とみなされていたが、彼ら　との社交的な交際はすべて非難された。ユダヤ人はサマリヤ人から借りることはもちろん、1 切れのパン、1 杯の水でさえもサマリヤ人の親切を受けようとしなかった。弟子たちは、食物を買うのに、ユダヤ人の習慣に従ってふるまい、それ以上深入りしなかった。サマリヤ人に　ものをたのもうとか、あるいは何かの方法で彼らの益になることをしようなどということは、キリストの弟子たちでさえ思い浮ばなかった。

イエスは、井戸端にすわられた時、飢えとかわきのために弱っておられた。朝からの旅は長かった。そしていま真昼の太陽がイエスを照りつけていた。すぐそばにありながら手の届かないつめたい新鮮な水のことを思うと、イエスののどのかわきは一層つのった。綱もなければ水おけもなく、しかも井戸は深かった。イエスは、べ間の身であられたので、だれかが水をくみにくるのを待たれた。

サマリヤの女が近づいてきて、イエスがおられるのを意識しない様子で、水さしに水を満たした。彼女が向きをかえて立ち去ろうとした時、イエスは水を 1 杯もらいたいとたのまれた。東洋人には、こんな願いをしりぞける人はいない。東方では、水は「神の賜物」といわれた。のどのかわいた旅人に 1 杯の水をさし出すことは、神聖な義務と考えられていて、砂漠のアラビヤ人は、その義務を果たすためにはまわり道さえするのであった。ユダヤ人とサマリヤ人との間に憎しみがあるために、この女はイエスに親切を申し出ることができなかった。しかし救い主はこの人の心に入る鍵をみつけようとしておられたので、神の愛から生じる機知をもって、恩恵を提供するのではなくかえってこれを求められた。親切を提供しようとすれば、ことわられたかもしれなかった。だが信頼心は信頼心を呼び起こす。天の王が

この見捨てられた魂のところにおいでになって、彼女の手の奉仕を求められたのである。大洋を作り、大海を支配し、この地上の泉と水路をお開きになったお方が、疲れてヤコブの井戸のところで休み、1 杯の水をもらうためにさえ見知らぬ人の親切にたよられたのである。

女はイエスがユダヤ人であることに気がついた彼女は驚きのあまり、イエスの願いをかなえることを忘れて、その理由を知ろうとした。女は、「あなたはユダヤ人でありながら、どうしてサマリヤの女のわたしに、飲ませてくれとおっしゃるのですか」と言った（ヨハネ 4:9）。イエスは、「もしあなたが神の賜物のことを知り、ま た、『水を飲ませてくれ』と言った者が、だれであるか知っていたならば、あなたの方から願い出て、その人から生ける水　をもらったことであろう」と答えられた（ヨハネ 4：10）。あなたは、足下のこの井戸から1 杯の水をほしいというわたしの小さなたのみをあやしんでいる。もしあなたがわたしにたのんだら、わたしは永遠のいのちという水をあなたに飲ませてあげたのだ。

女はキリストのことばを理解しなかったが、その厳粛な意味を感じた。彼女の軽々しい、ひやかすような態度が変化しはじめた。彼女は、イエスが目の前の井戸のことを言われたのだと思って、「主よ、あなたは、くむ物をお持ちにならずその上、井戸は深いのです。その生ける水を、どこから手に入れるのですか。あなたは、この井戸を下さったわたしたちの父ヤコブよりも、偉いかたなのですか。ヤコブ自身も飲み、その子らも、その家畜も、この井戸から飲んだのですが」と言った（ヨハネ　4：11、12）。彼女は、目の前の人を、歩き疲れたほこりだらけの旅人にしか思わなかった。彼女は、心の中で、イエスを尊敬すべき父祖ヤ　コブとくらべた。彼女の心中には、父祖から与えられたこの井戸にくらべられる井戸はほか　にないという感情が宿っていたが、それは当然なことであった。彼女は父祖たちを回顧し、　メシヤの来臨を待望していた。

ところが父祖たちの望みであったメシヤご自身が彼女のそばにおられるのに、彼女はそのお方を知らなかった。今日、生きている泉のすぐ近くにいながら、いのちの泉を求めて遠いところをさがしている魂がどんなに多いことだろう。「『あなたは心のうちで、だれが天に上るであろうかと言うな』。それは、キリストを引き降ろすことである。また、『だれが底知れぬ所に下るであろうかと言うな』。それは、キリストを死人の中から引き上げること

である。……『言葉はあなたの近くにある。あなたの口にあり、心にある』。……自分の口　で、イエスは主であると告白し、自分の心で、神が死人の中からイエスをよみがえらせたと信じるなら、あなたは救われる」（ローマ 10：6～9）。

イエスはご自分のことについてすぐには答えず厳粛なまじめさで、「この水を飲む者はだれでも、またかわくであろう。しかし、わたしが与える水を飲む者は、いつまでも、かわくことがないばかりか、わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠の命に至る水が、わきあがるであろう」と言われた（ヨハネ 4：13、14）。 この世の泉でかわきをいやそうとする者は、飲んでもすぐにまたかわくだけである。どこでも人々は満足していない。彼らは魂の必要を満たすものを求めている。その足りないところを満たすことのできるお方は 1 人しかない。世の必要、「万国の願うところのもの」はキリストである（ハガイ 2：7・文語訳）。キリストだけがお与えになれる神の恵みこそ、魂をきよめ、清新にし、活気づける生ける水である。

イエスは、1 杯のいのちの水を受けるだけで十分であるという意味のことは言われなかった。キリストの愛を味わう者はたえずもっと求める。だがそれ以外のものは何も求めない。彼には世の富も栄えも楽しみも、魅力がない。彼の心は、『もっとあなたを』とたえず叫び　つづける。魂に必要をお示しになるお方が、その飢えとかわきを満たそうと待っておられる。人間的な手段や人間にたよる時にみな失敗する。水槽はからになり、水たまりはかわく。だ　があがない主は尽きない泉である。飲んでも飲んでも新しい水がいつでもわいている。キリ　ストを内住させている人は、自分のうちに祝福の泉、永遠のいのちに至る水のわきあがる泉　を持っている。この泉から、彼は自分のすべての必要を満たすのに十分な力と恵みとをくむ　ことができる。

イエスが生ける水のことを話されると、女は驚きのまなざしでイエスを見た。イエスは彼女の興味を起こし、ご自分が話された賜物をほしいという気持を目覚めさせられたのだった。彼女は、イエスが言われたのはヤコブの井戸の水のことではないことに気がついた。この井戸の水なら、いつでもくんで飲み、そしてまたのどがかわくからである。そこで彼女は

「主よ、わたしがかわくことがなく、また、ここにくみにこなくて もよいように、その水をわたしにください」と言った（ヨハネ 4：15）。

するとイエスは、突然に話題を変えられた。イエスが与えようと望んでおられる賜物をこの魂が受けることができる前に、彼女は自分の罪と救い主をみとめねばならない。イエスは、「あなたの夫を呼びに行って、ここに連れてきなさい」と言われる。彼女は、「わたしには夫はありません」と答えた。こうして彼女はその方面の質問を一切封じようとした。だが救い主は続けて、「夫がないと言ったのは、もっともだ。あなたには 5 人の夫があったが、今のはあなたの夫ではない。あなたの言葉のとおりである」と言われた（ヨハネ　4：17、18）。

これを聞いた女はふるえた。神秘の手が彼女の経歴のページを開き、永遠にかくしておきたいと望んでいたことを明るみに出そうとしていた。自分の一生の秘密を読みとることができるとは一体このお方はどなただろう。彼女の心には、現在かくされていることがすべて明らかにされる来世すなわち未来のさばきについての考えが浮んだ。その光の中に、良心が目覚めた。 彼女は何もこばむことができなかった。だがこの面白くない問題についてふれるのを一切避けようとした。深い尊敬の念をもって、彼女は、「主よ、わたしはあなたを預言者と見ます」と言った（ヨハネ 4：19）。それから、罪の自覚をうち消そうと望んで、彼女は宗教上の論争になっている問題を持ち出した。もしこの人が預言者なら、この人は長年論議されてきたこの問題について教えることができるにちがいない。

イエスはこの女が話題を自分の好む方向に持って行こうとするのを忍耐強くおゆるしになった。そうしている間に、イエスは彼女の心に真理をもう 1 度うえつける機会を注意深く待たれた。女は「わたしたちの先祖は、この山で礼拝をしたのですが、あなたがたは礼拝すべき場所は、エルサレムにあると言っています」と言った（ヨハネ 4：20）。ちょうど目に見えるところにゲリジム山があった。その神殿は破壊されて、祭壇だけが残っていた。礼拝の場所は、ユダヤ人とサマリヤ人との間の論争のまととなっていた。サマリヤ人の先祖の一部はかつてイスラエルに属していたが、罪のために、主は彼らが偶像礼拝の国民に征服されるのをおゆるしになった。幾世代もの間彼らは偶像礼拝者たちにまじったので、後者の宗教

が彼ら自身の宗教をだんだん堕落させた。なるほど彼らは、自分たちの偶像は宇宙の支配者であられる生ける神を思い出すためのものにすぎないと主張した。だがそれにもかかわらず民はきざんだ像をあがめるようになった。

エズラの時代にエルサレムの神殿が再建された時、サマリヤ人はユダヤ人といっしょに建築にあたりたいと望んだ。この特権は拒否され、サマリヤ人とユダヤ人との間にはげしい憎しみが生じた。サマリヤ人はユダヤ人に対抗してゲリジム山に神殿を建てた。ここで彼らはモーセの儀式に従って礼拝したが、一方また偶像礼拝もまったく捨てきってはいなかった。ところが災難が起こって、神殿は敵に破壊され、彼らはのろわれているようにみえた。それでもなお彼らは礼拝について自分たちの伝統と形式とを固守した。彼らはエルサレムの神殿を神の家としてみとめようとせずまたユダヤ人の宗教が自分たちの宗教にまさっているとみとめようとしなかった。

女に答えてイエスは、「女よ、わたしの言うことを信じなさい。あなたがたが、この山でも、またエルサレムでもない所で、父を礼拝する時が来る。あなたがたは自分の知らないものを拝んでいるが、わたしたちは知っているかたを礼拝している。救いはユダヤ人から来るからである」と言われた（ヨハネ 4：21、22）。イエスはサマリヤ人に対してユダヤ人の偏見を持っておられないことをすでにお示しになった。いま彼はユダヤ人に対するサマリヤ人の偏見をうち破ろうとされた。イエスは、サマリヤ人の信仰が偶像礼拝によって堕落したことを指摘される一方で、あが列いの大真理がユダヤ人に委託され、ユダヤ人の中からメシヤが現われることを言明された。聖書を通して彼らは神のご品性と神の統治の原則とについてはっ きり示されていた。イエスはご自分を、神がご自身についての知識をお与えになったユダヤ人と同類におかれた。

イエスは、聞き手の思いを、形式や儀式の問題、そしてまた論争の問題から高めようと望んで、こう言われた、「しかし、まことの礼拝をする者たちが、霊とまこととをもって父を礼拝する時が来る。そうだ、今きている。父は、このような礼拝をする者たちを求めておられるからである。神は霊であるから、礼拝をする者も、霊とまこととをもって礼拝すべきである」（ヨハネ 4：23、24）。イエスがニコデモに、「だれでも新しく生れなければ、神

の国を見ることはできない」と言われた時に示されたのと同じ真理がここに宣言されている（ヨハネ 3：3）。人は、聖なる山や聖なる宮を求めることによって天とのまじわりに入れるのではない。宗教は外面的な形式や儀式に限定されるのではない。神から出ている宗教だけが神へいたる宗教である。神に正しく仕えるためには、神のみたまによって生まれなければならない。みたまは心をきよめ、思いを新たにし、神を知り愛する新しい能力をわれわれに与える。それは神のすべてのご要求によろこんで従う心をわれわれに与える。これが真の礼拝である。それは聖霊の働きの実である。みたまによって、すべての真実な祈りはことばとなり、このような祈りは神に受け入れられる。魂が神を追い求めるところにはどこでもみたまの働きがあらわれ、神はその魂にご自身をあらわされる。神はこのような礼拝者を求めておられる。神は彼らを受け入れて、ご自分の息子娘にしようと待っておられる。

女はイエスとお話して、そのみことばに感動した。彼女はサマリヤ人の祭司からもユダヤ人からもこんな意見を聞いたことがなかった。過去の生活が目の前にひろげられた時、彼女は自分の大きな必要に気づいていた。彼女は自分の魂がかわいているのを認めた。そのかわきは、スカルの井戸の水では決して満足させることができなかった。これまで接したものの中で、彼女の心をもっと高い必要にこれほどめざめさせたものは何もなかった。イエスは、彼女の生活の秘密を見抜いたことを彼女に自覚させられた。それでも彼女は、イエスが友として自分を憐れみ、愛してくださることを感じた。純潔なイエスの前にいることによって彼女は自分の罪を責められたが、イエスは譴責のことばを言もお語りにならず、ただ魂を新たにすることのできる恵みについて語られた。彼女はイエスがどういうお方であるかについて、いくらか確信を持ちはじめた。このお方が長い間待望されていたメシヤではないだろうかという疑問が心の中に起こった。彼女は、「わたしは、キリストと呼ばれるメシヤがこられることを知っています。その方がこられたならば、わたしたちに、いっさいのことを知らせて下さるでしょう」とイエスに言った。イエスは、「あなたと話をしているこのわたしが、それである」と答えられた（ヨハネ 4：25、26）。

女は、このことばをきくと、心の中に信仰がわき起こった。彼女は天来の教師イエスの口から出たこのすばらしい宣言を受け入れた。 この女はものごとを感知する心を持っていた。

彼女は最もとうとい啓示を受け入れる用意ができていた。それは彼女が聖書に興味を持ち、もっと光を受けられるように聖霊が彼女の心を準備していたからであった。彼女は、「あなたの神、主はあなたのうちから、あなたの同胞のうちから、わたしのようなひとりの預言者をあなたのために起されるであろう。あなたがたは彼に聞き従わなければならない」との旧約の約束を学んでいた（申命記 18：15）。彼女はこの預言をさとりたいと望んだ。光はすでに彼女の心にさし込みはじめていた。いのちの水、すなわちキリストがすべてのかわける魂に与えられる霊的生命は、彼女の心のうちにめばえ始めていた。主のみたまが彼女の上に働いていた。

キリストがこの女にはっきり語られたことばは、自分自身を義とするユダヤ人に向かっては語ることのできなかったことばだった。キリストは、ユダヤ人に向かって語られる時にはずっとひかえ目だった。ユダヤ人に向かっては言われたことのないこと、そして あとで弟子たちに秘密にするように命じられたことが、彼女にうち明けられた。イエスは彼女がこの知識を利用して、ほかの人たちにイエスの恵みをわけ与えることをご存じだった。 弟子たちは、使いから帰ってきた時、主が女と話しておられるのを見て驚いた。主はご自分が望まれた清新な 1 杯の水をまだ飲んでおられず、また弟子たちが持ってきた食物を食べるために話をやめようともされなかった。女が立ち去ると、弟子たちはイエスに食べてくださるようにと願った。彼らはイエスが深い瞑想のうちにあられるかのように、だまって考えこんでおられるのを見た。イエスのお顔は光に輝いていたので、彼らはイエスの天とのまじわりをさまたげることを恐れた。しかし彼らはイエスが疲れて弱っておられることを知っていたので、イエスの肉体上の必要を気づかせる義務があると思った。イエスは彼らのやさしい関心をみとめられたが、「わたしには、あなたがたの知らない食物がある」と言われた（ヨハネ 4：32）。

弟子たちは、だれが主に食物を持ってきたのだろうとあやしんだ。だがイエスは、「わたしの食物というのは、わたしをつかわされたかたのみこころを行い、そのみわざをなし遂げることである」と説明された（ヨハネ　4：34）。イエスは、ご自分のことばによって女の良心がめざめたことをよろこばれた。イエスは、女がいのちの水を飲むのをごらんになって、

ご自身の飢えとかわきが満足させられた。イエスが天を去って、なしとげるためにこられたその使命の達成が救い主の働きを力づけ、人間の必要を超越させた。真理に飢えかわいている魂に奉仕することは、イエスにとって飲んだり食べたりするよりうれしいことだった。それはイエスを慰めるものであり、元気づけるものであった。博愛がイエスの魂のいのちであった。

あがない主は人々に認められることにかわいておられる。主はご自分の血で買われた人々の同情と愛に飢えておられる。主は、言い表しようのない願いをもって、彼らがみもとにきていのちをいただくことを望んでおられる。小さな子供が母親を認めてにっこり笑うのは知恵のめばえを告げている。母親がその表現を注意深く見守っているように、キリストは、魂のうちに霊的な生命が始まった証拠である感謝にみちた愛が表現されるのを見守っておられる。 女はキリストのみことばに聞き入っている時喜びに満たされた。そのすばらしい啓示はほとんど圧倒的であった。彼女は水がめを残して、イエスのことばをほかの人たちに伝えるために町へもどった。イエスはなぜ彼女が立ち去ったかをご存じだった。生ける水を手に入れることが彼女の魂の熱心な願いであった。彼女は井戸へきた用事を忘れ、イエスのかわきをいやしてさしあげるつもりだったことも忘れた。喜びにあふれる心をもって、彼女は自分が受けたとうとい光をほかの人たちに与えるために道を急いだ。

彼女は町の人たちに、「わたしのしたことを何もかも、言いあてた人がいます。さあ、見にきてごらんなさい」と言った。「もしかしたら、この人がキリストかも知れません」。彼女のことばは人々の心を動かした。彼女の顔には新しい表情があらわれ、全体の様子に変化がみられた。彼らはイエスを見たいという興味をそそられた。そこで「人々は町を出て、ぞくぞくとイエスのところへ行った」（ヨハネ 4：29、30）。

イエスは、まだ井戸端にすわっておられる時、緑の若葉に黄金の日光を浴びて目の前にひろがっている麦畑をごらんになった。その光景を弟子たちに指さして見せながら、主はそれを一つの象徴としてお用いになった。「あなたがたは、刈入れ時が来るまでには、まだ 4 か月あると、言っているではないか。しかし、わたしはあなたがたに言う。目をあげて畑を見なさい。はや色づいて刈入れを待っている」（ヨハネ 4：35）。語りながらイエスは、井

戸へやってくる人々の群れに目をとめられた。麦の収穫時までには 4 か月あるが、ここにすでに刈り手を待っている収穫があった。　イエスは言われた、「刈る者は報酬を受けて、永遠の命に至る実を集めている。まく者も刈る者も、共々に喜ぶためである。そこで、『ひとり　がまき、ひとりが刈る』ということわざが、ほんとうのこととなる」（ヨハネ 4：36、37）。ここにキリストは、福音を受け入　れる者が当然神のためにしなければならない聖なる奉仕を指摘しておられる。彼らは神の生ける代表者となるのである。神は彼らの個人的な奉仕を求　められる。われわれはまこうが刈り入れようが、神のために働いているのである。1 人が種をまき、他の者が収穫を集める。そしてまく者も刈る者も賃金をもらい、彼らは共にその働き　の報酬を喜ぶのである。

イエスは弟子たちに、「わたしは、あなたがたをつかわして、あなたがたがそのために労苦しなかったものを刈りとらせた。ほかの人々が労苦し、あなたがたは、彼らの労苦の実にあずかっているのである」と言われた（ヨハネ 4：38）。救い主はここでペンテコステの日の大収穫を予見しておられた。弟子たちはこれを自分たちの努力の結果とみなすべきではなかった。彼らは他の人々の働きに加わっているのであった。アダムが堕落してから後ずっとキリストは人の心の中にまくために、選ばれたしもべたちにみことばの種を託してこられた。そして目に見えない作用、しかも全能の力が、収穫を生じさせるために、無言のうちに効果的に働いてきた。真理の種に活力と栄養とを与えるために、神の恵みという露と雨と日光が与えられてきた。キリストはご自身の血でその種に水をそそごうとしておられた。キリストの弟子たちには神と共に働く者となる特権があった。彼らはキリストと共に働く者であり、また古代の聖人たちの共労者であった。ペンテコステの聖霊の降下によって、1 日に幾千の者が改心するのであった。これがキリストの種まきの結果であり、キリストの働きの収穫であった。

井戸のところで女に話されたことばによって、よい種がまかれたが、何とまあ早く収穫が与えられたことだろう。サマリヤ人はやってきてイエスのみことばを聞き、イエスを信じた。彼らは井戸のところにおられるイエスのまわりにおしよせ、イエスを質問攻めにして、これまではっきりわからなかった多くのことについてイエスの説明を熱心に聞いた。 聞くに

つれて、彼らの疑問が晴れはじめた。彼らはちょうど非常な暗やみの中にあって突然ひとすじの光をさがしあて、ついに真昼に出会った人々のようだった。しかし彼らはこの短い会見に満足しなかった。彼らはもっと聞きたがり、また友人たちにもこのすばらしい教師の話をきかせたがった。人々はイエスを自分たちの町に招き、彼らのところにとどまって下さるようにたのんだ。2 日の間イエスはサマリヤにとどまられたが、さらに多くの人々がイエスを信じた。

パリサイ人はイエスの単純さを軽蔑した。彼らはイエスの奇跡を無視し、イエスが神のみ子であるという証拠を要求した。しかしサマリヤ人はしるしを求めなかった。イエスは、井戸端で女に彼女の生活の秘密をあらわされた以外には、サマリヤ人の中で奇跡を行われなかった。それでも多くの者がイエスを信じた。この新しい喜びの中で、彼らは女に、「わたしたちが信じるのは、もうあなたが話してくれたからではない。自分自身で親しく聞いて、この人こそまことに世の救主であることが、わかったからである」と言った（ヨハネ　4：　42）。 サマリヤ人は、メシヤがユダヤ人の救い主としてばかりでなく、世の救い主としておいでになることを信じた。聖霊は、モーセを通して、イエスを、神からつかわされた預言者　と予告していた。ヤコブを通して民はイエスのもとに集められることが告げられ、またアブ　ラハムを通して、地の諸国民がイエスのうちにあって祝福されるということが告げられてい　た。サマリヤの人々はメシヤに対する彼らの信仰をこうした聖書のみことばに置いた。ユダ　ヤ人が後期の預言者たちを誤って解釈し、キリスト再臨の栄光を初臨にあてはめていたので、サマリヤ人はモーセを通して与えられたもの以外は全部聖書をすてていた。しかし救い主が　そうしたまちがった解釈を一掃されたので、多くの人々が後期の預言と、神のみ国について　のキリストご自身のみことばとを信じた。

イエスはユダヤ人と異邦人との間をへだてている壁をとりこわし、世界に救いを宣べ伝え始めておられた。キリストはユダヤ人であられたが、自由にサマリヤ人とまじわり、ご自分の国民のパリサイ的な習慣を無視された。ユダヤ人の偏見に直面しながら、主はこの軽蔑された民のもてなしを受けられた。主はサ　マリヤ人の屋根の下に眠り、彼らと同じテーブルで食事をし、彼らの手で料理されて食卓に出された食物を食べ、彼らの町の通りで教え、で

きるだけの親切と礼儀をつくして彼らに応対された。　エルサレムの宮は、低い壁によって、外庭が神聖な建物のすべての部分から仕切られていた。この壁に各国語で文字がきざまれて　いて、ユダヤ人以外の者はこの境界内には入ることをゆるさないということが書かれていた。もし異邦人があえて境内の中に入りこむようなことがあれば、彼は宮をけがしたことになり、その罰としていのちをとられるのだった。しかし宮とその儀式の創始者であられるイエスは、人間的な同情というきずなで異邦人をみもとにひきよせ、またユダヤ人のこばんだ救いはイ　エスのとうとい恵みによって彼らにもたらされた。

イエスがサマリヤにとどまられたことは、まだユダヤ人的な頑迷さの影響下にあった弟子たちに祝福となるようにくわだてられたのであった。彼らは、自分自身の国に忠誠であるためにはサマリヤ人に対して敵意をもたねばならないと考えていた。彼らはイエスの行為に驚いた。彼らはイエスの模範に従うことを拒絶することができなかったので、サマリヤにいた 2 日間、イエスに対する忠誠心から、彼らの偏見を抑えていたが、心の中にはやはりうちとけないものがあった。彼らの軽蔑心と憎悪心は憐れみと同情に代えられねばならないことを彼らが学ぶのに時間がかかった。しかし主の昇天後、イエスの教訓は新しい意味をもって彼らの胸によみがえった。聖霊の降下後、彼らはこの軽蔑された他国人に対する救い主の顔つき、ことば、尊敬のこもったやさしい態度を思い浮べた。ペテロはサマリヤに説教に行った時、その働きに主と同じ精神をそそいだ。ヨハネは、エペソとスミルナに招かれた時、シケムの経験を思い出し、天来の教師イエスが彼らの出会わねばならない困難を予見して、ご自分の模範によって助けをお与えになったことに対する感謝の思いに満たされた。

救い主はサマリヤの女にいのちの水を提供された時と同じ働きを今もなおつづけておられる。キリストの弟子と自称する人たちが、社会から見捨てられた人々をさげすみ、いやがるようなことがあるかもしれない。だが生れや国籍による事情も、社会的な身分も、イエスの愛を人の子らから離れさせることはできない。どんなに罪深くあろうと、一人一人の魂に向かって、もしわたしに求めたらいのちの水をあげたのにと、イエスは言われる。

福音の招きは、狭い範囲に限定され、相手が受け入れたらこちらの名誉になるような少数のえらばれた人たちだけに与えられるのではない。福音はすべての人に与えられるのであ

る。真理を受け入れるように心の開かれているところならどこででも、キリストは彼らを教えようとしておられる。主は彼らに天父をあらわし、人の心をお読みになる神に受け入れられる礼拝をお示しになる。こういう人々には、イエスは譬をお用いにならない。イエスは、彼らに向かって、井戸端の女にお語りになったように「あなたと話をしているこのわたしが、それである」と言われる（ヨハネ 4：26）。

イエスがヤコブの井戸のそばに腰をおろして休まれた時、彼はこれまで伝道してほとんど実を結んでいないユダヤからおいでになった。彼は祭司たちとラビたちからしりぞけられ、イエスの弟子であることを告白している人たちでさえイエスの神としての性格を認識していなかった。イエスは疲れ、弱っておられたそれでも彼は、他国人であり、イスラエルの異邦人であり、あきらかに罪のうちに生活している 1 人の女に語りかける機会をのがされなかった。

救い主は会衆が集まるのを待たれなかった。たびたび主はご自分のまわりに集まっているほんの少数の人々に教えはじめられたが、通りかかった人々が 1 人 2 人と立ちどまって聞き入り、ついには群衆がこの天から送られた教師イエスを通して、驚嘆と尊敬の念をもって神のみことばを聞くのだった。キリストの働き人は、少数の聴衆に対しては大きな会衆に対するのと同じ熱心さでしやべることができないと思ってはならない。説教を聞いているのはたった 1 人であるかもしれないが、しかしその影響がどれほど遠大な ものであるかをだれが知ることができよう。救い主がサマリヤの女のために時間を費されたことは、弟子たちにとってさえ小さなことに思われた。しかしイエスは、王や議官や大祭司たちに対するよりももっと熱心に、雄弁に論じられた。イエスがその女にお与えになった教訓は、地のはてにいたるまでくりかえされた。

サマリヤの女は、このお方が救い主であるということがわかるとすぐにほかの人たちをみもとにつれてきた。彼女は、イエスご自身の弟子たちよりも有能な伝道者であることがわかった。弟子たちはサマリヤが有望な伝道地であるというしるしを何も見なかった。彼らの思いは、将来なされる大きな働きに集中されていた。自分たちのすぐまわりに集めるべき収穫があることに彼らは気がついていなかった。ところが彼らの軽蔑していた女によって、町

中の人々が救い主のみことばを聞きにつれてこられた。彼女は光をすぐに自分の国民に伝えた。 この女は、キリストを信じる実際的な信仰の働きを表わしている。真の弟子はみな伝道者として神の国に生まれているのである。生ける水を飲む者はいのちの泉となる。受ける者が与える者となる。魂のうちにあるキリストの恵みは、砂漠の中の泉のようなもので、それはわきあがってすべての人を元気づけ、いまにも死にそうになっている人々にいのちの水を飲みたいと熱望させるのである。

第 20 章「あなたがたはしるしと奇跡を見ないかぎり」

過越節から帰ってきたガリラヤ人たちは、イエスのふしぎなみわざについて知らせを持ってきた。イエスの行動に対するエルサレムの高官たちの意見が決定的となったため、イエスはガリラヤに道を求められた。民の中には宮の悪用と祭司たちの貪欲と尊大さとを嘆く者が多かった。彼らは、役人たちを追つぱらったこの人が、待望の救世主であるようにと望んだ。そしていま彼らの最も輝かしい予想を裏づけるような知らせが伝わった。この預言者が自らメシヤであると宣言したというのだった。 しかしナザレの人たちは、イエスを信じなかった。そのために、イエスはカナへの途中ナザレにおいでにならなかった。救い主は弟子たちに、預言者は自分の故郷ではとうとばれないと言明された。人間は自分の理解できる範囲だけしか人物の評価ができない。世俗的で狭量な心を持った人たちは、キリストの貧しい生れや粗末な衣服や日々の骨折り仕事によってキリストを判断した。彼らは罪のけがれのないキリストの純潔な精神を評価することができなかった。

キリストがカナへ帰られたという知らせは、ガリラヤ中にひろがり、困り苦しんでいる人たちに望みを与えた。カペナウムで、王に仕えている役人である、あるユダヤ人貴族がその知らせに注意をひかれた。この役人の息子が不治と思われる病気にかかっていた。医者たちはその子が死ぬものとあきらめていた。だが父親はイエスのことを耳にした時、イエスの助けを求めようと決心した。子供は非常に衰弱していて、父親が帰って来るまでいのちはもつまいと心配されたが、父親は病状をイエスに訴えねばならないと思った。彼は父親の祈りが大医者イエスの同情をひきおこすようにと望んだ。

カナに着いてみると、群衆がイエスをとりまいていた。心配な気持で、彼は人々をおしわけて救い主の前へ進んだ。しかしそこに、粗末な衣服をまとい、旅のほこりにまみれて疲れた様子の人だけしか見なかった時、彼の信仰は動揺した。果たしてこのお方が自分がお願いしようと思ってやってきたことをなさることができるだろうかと彼は疑った。しかしイエスと面会することができると、彼は自分の用事を話し、救い主に自分の家までいっしょにおいでいただきたいと願った。ところが彼の悲しみはすでにイエスに知 られていた。この役人

が家を出る前から、救い主は彼の苦悩を見ておられたのだった。　しかしイエスは、この父親がイエスに対する信仰について、自分自身の心の中に条件をもっていることもご存じだった。自分の願いがかなえられなければ、彼はイエスをメシヤとして信じないであろう。役人がど　っちつかずの思いに苦しめられながら待っていると、イエスは、「あなたがたは、しるしと　奇跡とを見ない限り、決して信じないだろう」と言われた（ヨハネ 4：48）。

イエスがキリストであるというあらゆる証拠があるにもかかわらずこの嘆願者は、自分の願いがきかれるということを条件にして、イエスを信じようと決心していた。救い主はこの疑いの念のまじった不信を、奇跡やしるしを求めなかったサマリヤ人の単純な信仰と比較された。イエスの神性についての証拠をたえず示しているそのみことばには、サマリヤ人の心を動かし、確信させる力があった。キリストは、神のみことばを託されているご自分の民が、み子を通して彼らに語られる神の声をきかないことを悲しまれた。

しかしこの役人はある程度の信仰を持っていた。なぜなら彼は、あらゆる祝福の中で最もとうといと思えるものをたのみにやってきたからである。イエスはもっと大きな賜物を与えようとしておられた。イエスは子供の病気をなおすばかりでなく、この役人とその家族を救いの祝福にあずからせ、まもなくイエスご自身の働きの場所となろうとしていたカペナウムに光をともそうと望まれた。しかしこの役人は、キリストの恵みを望む前に自分の必要を認めなければならない。この宮廷の役人はユダヤ国民の多くの者を代表していた。彼らは利己的な動機からイエスに関心を持っていた。彼らはイエスの力によって何か特別な利益を受けようと望み、その信仰はこの世の恩恵を受けることにかけられていた。しかし彼らは自分たちの霊的な病気について無知であり、神の恵みの必要に気がつかなかった。　この役人に対する救い主のみことばは、光のひらめきのように、彼の心を明るみに出した。彼はイエスを　求めている自分の動機が利己的であることがわかった。彼は動揺している自分の信仰の本当　の姿を見た。彼は自分の疑いのために息子のいのちが失われるかもしれないことを認めて深　い心配を感じた。彼は自分がいま、人の思いを読むことがおできになり、どんなことでもお　できになるお方の前にいることを知った。苦悩に満ちた嘆願をもって、彼は「主よ、どうぞ、子供が死なないうちにきて下さい」と叫んだ（ヨハネ 4：49）。彼は、ヤコブが天使と格闘

して、「わたしを祝福してくださらないなら、あなたを去らせません」と叫んだ時のように、信仰をもってキリストにすがりついた（創世記 32：26）。

ヤコブのように、彼は勝利した。救い主は、大きな必要を訴えながらすがりつく魂をしりぞけることがおできにならない。イエスは、「お帰りなさい。あなたのむすこは助かるのだ」と言われた（ヨハネ 4：50）。役人はこれまでかつて経験したことのない平安と喜びとをもって救い主の前から立ち去った。彼は息子の病気がなおることを信じたばかりでなく、強い確信をもってキリストを救い主として信頼した。 同じ時刻に、カペナウムの家では、死にかけている子供を見守っていた者たちが、急にふしぎな変化を目に見た。死の影が病人の顔から消えた。熱により紅みを帯びていた顔色は、回復しつつある健康のおだやかな色にかわった。くもっていた目は理性に輝き、衰弱していた体に力がよみがえった。病気の面影は子供のどこにもみられなくなった。火照っていた肉体はやわらかくうるおい、子供は静かな眠りに落ちた。熱は日盛りになくなっていた。家族の者たちは驚き、その喜びは大きかった。

カナはカペナウムからそんなに遠いところではなく、この役人がイエスと面会したあと、その夜には帰り着けるところだった。だが彼は家路を急がなかつた。彼がカペナウムに到着したのは翌朝になってからだった。それは何といううれしい帰宅だったことだろう。イエスに会いに行く時には、彼の心は悲しみで重かった。彼には太陽の光が残酷に思え、小鳥の鳴き声が嘲笑にきこえた。いまは何という気持のち　がいだろう。自然界のすべてが新しい様相を帯びていた。彼は新しい目で見る。早朝の静けさの中を旅していると、自然の万物が自分　といっしょに神を賛美しているようにみえる。彼が自分の家からまだかなり離れたところま　で来ると、しもべたちが迎えに出てきている。彼らは主人がきっと心配しているにちがいな　いから、安心させようと思っている。ところが彼は、しもべたちの知らせをきいても別に驚　きをみせず、彼らにはわからない深い関心をもって、子供の病気はいつからよくなりはじめ　たかとたずねる。彼らは、「きのうの午後 1 時に熱が引きました」と答える（ヨハネ 4： 52）。「あなたのむすこは助かるのだ」との保証を、父親が信仰をもって把握した瞬間に、 神の愛が死にかけていた子供にふれたのだった。

父親は息子に会いに急ぐ。彼は息子を死からよみがえった者のように胸にだきしめ、このふしぎな回復について何度も何度も神に感謝する。この役人はキリストについてもっと知りたいと熱望した。のちにイエスの説教を聞いて、彼と家族の全部が弟子となった。彼らの苦しみはきよめられて家族全体の改宗となった。この奇跡の知らせはひろがった。そしてキリストの多くの偉大な働きがなされたカペナウムで、キリストがご自分で伝道をされる道が備えられた。 カペナウムで役人を祝福されたお方は同じようにわれわれを祝福しようと望んでおられる。だがこの苦悩していた父親のように、われわれはしばしば何かこの世の利益を望んでイエスを求める。そして自分の願いがかなえられたら、イエスの愛に信頼しようとする。救い主はわれわれが求めるよりももっと大きな祝福を与えようと望んでおられる。イエスは、われわれ自身の心の悪と、イエスの恵みの深い必要とを示すために、われわれの願いに対する答えを遅らせられる。イエスはわれわれが、利己的な動機からイエスを求めることをやめるように望んでおられる。自分の無力と大きな必要を告白して、われわれはイエスの愛に自分自身をまったく委ねるのである。

この役人は、信じる前に自分の祈りの成就を目に見たいと望んだ。しかし彼は、彼のたのみがきかれて祝福が与えられたというイエスのみことばを信じなければならなかった。この教訓をわれわれもまた学ばねばならない。われわれは、神がわれわれの願いをきかれるのを見たり感じたりするから、信じるのではない。われわれは、神の約束に信頼するのである。信仰をもって神のみもとに行く時、願いごとはすべて神のみ心にとめられる。神の祝福を求めたら、それを受けることを信じ、そしてそれを受けたことを感謝すべきである。それからわれわれは、最も必要な時にその祝福が実現されることを確信して、自分の義務をつくすのである。こうすることをわれわれが学んだ時、われわれは祈りが答えられることを知る。神はわれわれのために、「その栄光の富にしたがい」「神の力強い活動によって」「はるかに越えて」なしてくださるのである（エペソ 3：16、1：19、3：20）。

第 21 章ベテスダとサンヒドリン

「エルサレムにある羊の門のそぼに、ヘブル語でベテスダと呼ばれる池があった。そこには 5 つの廊があった。その廊の中には、病人、盲人、足の不自由な人、やせ衰えた者などが、大ぜいからだを横たえていた。〔彼らは水の動くのを待っていたのである〕」（ヨハネ 5：2、3）。 ある時期になると、この池の水面が動いた。一般の人たちは、これは超自然の力の結果で、池の水が動いてから、真っ先に水にとび込む者は、だれでも、どんな病気を持って　いても、いやされると信じていた。何百人という病人たちがこの場所へやってきた。しかし　水が動くと、群衆が多いために、人々は、自分より弱い男や女や子供たちを足の下にふみつ　けて、突進した。池に近づくことができない者が多かった。う　まく池にたどりつくことができた者でも、そのふちで死ぬ者が多かった。病人たちを昼の暑さと夜の寒さから守るために、その場所には屋根ができていた。病人の中には夜をこの廊の中で過ごし、むなしい回復の望　みをもって、来る日も来る日も池のふちまではって行く人たちがいた。

イエスはまたエルサレムにきておられた。瞑想と祈りのうちにあられるかのように、イエスは 1 人で歩いて、この池のところべおいでになった。イエスはかわいそうな病人たちが唯一のいやしの機会と考えているものを見守っているのをごらんになった。イエスは、ご自分のいやしの力を働かせて、病人を 1 人残らず完全な体にしてやりたいと熱望された。しかしその日は安息日だった。多くの人々が宮へ礼拝に行くところだったので、そのようないやしの行為がユダヤ人の偏見を刺激し、ご自分の働きが中断されることを、イエスはご存じだった。 しかし救い主は特にかわいそうな 1 人の病人をごらんになった。それは 38 年間も 1 人で動けない障害者だった。彼の病気は大部分自分自身の罪の結果であって、神からの刑罰とみなされていた。友だちもなく 1 人ぼっちで、この病人は、自分が神の恵みからしめだされていると思いながら、悲惨な長い年月を送ってきた。

水が動くころだと思われる時期になると、彼の無力を気の毒に思っている人たちが、彼を廊のところに運んで行ってやるのだった。だがちょうどよい時に、彼を中に入れてくれる人はいなかった。彼は水面が波立っているのを見たが、決して池のふちから先へ進むことが

できなかった。彼より丈夫な人たちが、先に飛びこんでしまうのであった。彼は、われ先にと争う群衆とうまく競争することができなかった。一つの目的に向かっての根気のいる努力と、心配と、たえまない失望とのために、彼の残った力は急速に衰えて行った。

この病人は、むしろの上に横たわって、時々頭をあげては池をみつめていた。その時、やさしい、同情にあふれた顔が彼をのぞきこんで、「なおりたいのか」とのことばが、彼の注意をひいた（ヨハネ 5：6）。望みが彼の心にわき起こった。何とか助けが得られると彼は感じた。だが燃えあがった望みの焔はすぐ消えた。彼はこれまで何べんも池にたどりつこうと試みたことを思い出した。そしてもうこんど水が動くまで生きられる見込みはほとんどないのであった。彼は弱々しく顔をそむけて、「主よ、水か動く時に、わたしを池の中に入れてくれる人がいません。わたしがはいりかけると、ほかの人が先に降りて行くのです」と言った（ヨハネ 5：7）。 イエスは、この病人に、わたしを信じる信仰を働かせなさいとは要求なさらない。主はただ「起きて、あなたの床を取りあげ、そして歩きなさい」と言われる（ヨハネ 5：8）。しかしこの男の信仰はそのことばをしっかりとらえる。どの神経もどの筋肉も新しい生命に躍動し、不自由な四肢に健康な動きがあらわれる。何にもたずねないで、彼はキリストのご命令に自分の意思を従わせる。するとすべての筋肉が彼の意思に応ずる。立ちあがってみて、彼は自分が動ける人間になっていることを知る。

イエスは彼に神の助けについて何の保証もお与えになっていなかった。その男はちょっと考えてみて疑い、1 度のいやしの機会を失ったかも知れなかった、だが彼は、キリストのみことばを信じ、みことば通りに行動することによって力を受けた。 同じ信仰によって、われわれも霊的ないやしを受けられる。罪のために、われわれは神のいのちから切り離された。われらの魂は麻痺している。ちょうどあの身体の不自由な男が 1 人で歩くことができなかったように、われわれも 1 人ではきよい生活を送ることができない。自分の無力を認めている人、また神に一致するような霊的生活をあこがれ求めている人が多い。彼らはそうした生活を求めてむなしい努力をしている。そして絶望のうちに、「わたしは、なんというみじめな人間なのだろう。だれが、この死のからだから、わたしを救ってくれるだろうか」と叫ぶ（ローマ　7：24）。こうした絶望のうちにもがいている人々は、上を見あげるがよい。救い

主は、ご自分の血であが　なわれた者をのぞきこんで、言い表しようのないやさしさと憐れみとをもって、「なおりたいのか」と言われる。主はあなたに、健康と平安のうちに立ちあが　りなさいとお命じになる。いやされたと感じるのを待ってはならない。キリストのみことば　を信じなさい。そうすればみことばは実現する。あなたの意思をキリストの側におきなさい。キリストに仕えようと決心なさい。そうすれば、みことばを行うことによって、あなたは力　を受ける。どんなに悪い習慣であろうと、長い間の放縦によって魂と肉体とをしばりつけて　きた支配的な情欲から、キリストはわれわれを救うことがおできになり、また救おうと望ん　でおられる。彼は「自分の罪過と罪とによって死んでいた者」にいのちをお与えになる（エ　ペソ 2：1）。キリストは、弱さと不幸と罪の鎖につながれているとりこを解放される。

麻痺した体をいやされた男は、かがんで敷物と毛布だけの寝床をとりあげ、喜びを感じながら、もう 1 度からだをまっすぐにのばし、救い主をさがしてあたりをみまわした。だがイエスのお姿は群衆の中に消えていた。男は、イエスにもう 1 度会っても、みわけがつかないのではないかと心配した。彼が神を賛美し、新しく与えられた力を喜びながら、しっかりした自由な足どりで道を急いでいると、数人のパリサイ人に出会ったので、彼はすぐに自分がいやされたことを彼らに語った。彼は、パリサイ人たちが自分の話を冷淡に聞くのを見て驚いた。

パリサイ人たちはまゆをしかめて彼をとどめ、なぜ安息日に寝床を運んでいるのかときいた。彼らは、主の日に荷物を運ぶことは律法にかなわないことだときびしく注意した。男は、喜びのあまり、安息日であることを忘れていた。それでも彼は、神からのこのような力を持っておられるお方の命令に従っていることに、心のとがめを感じなかった。彼は「わたしをなおして下さったかたが、床を取りあげて歩けと、わたしに言われました」と大胆に答えた（ヨハネ 5：11）。彼らはそんなことをしたのはだれだとたずねたが、男は答えることができなかった。この役人たちは、この奇跡を行うことができるお方は 1 人しかないことをよく知っていた。だが彼らは、イエスを、安息日を犯した者として、非難するためには、それがイエスであったという直接の証拠がほしかった。彼らの判断によれば、イエスは、安息

日に病人をいやして、律法を破られたばかりでなく、その男に寝床を運ぶように命ずることによって、安息日の神聖をけがしたというのであった。

ユダヤ人は律法を曲解して、これを束縛のきずなとしていた。彼らの無意味な規則は、他国民の語り草になっていた。特に安息日はあらゆる種類の無意味な制限にとりかこまれていた。安息日は、彼らにとって、喜びの日でもなければ、主の聖日でもなく、とうとぶべき日でもなかった（イザヤ 58：13 参照）。律法学者やパリサイ人たちが、安息日の遵守を耐えがたいほどの重荷にしていた。ユダヤ人は、安息日に火を燃やすことも、ろうそくをつけることもゆるされなかった。その結果、ユダヤ人は、規則に禁じられているために自分にはできない多くの仕事を異邦人にたのんでしてもらった。仕事をすることが罪になるものなら、他人をやとってその仕事をさせることも、自分がしたのと同じに罪になるということを、彼らは考えてもみなかった。彼らは、救いはユダヤ人にだけ限られたものであって、他のすべての人の状態はすでに絶望的なのだから、それ以上悪くなりようがないと考えていた。しかし神は、だれも従うことのできないような戒めをお与えになってはいない。神の律法は、不合理な、利己的な制限を是認しない。

宮の中で、イエスは、いやされた男に出会われた。男は、罪祭の献げ物と同時に、自分の受けた大きな憐れみに対する感謝の献げ物をささげるためにきていた。イエスは、その男を参拝者の中に見つけ出されると、顔をお見せになって、「ごらん、あなたはよくなった。もう罪を犯してはいけない。何かもっと悪いことが、あなたの身に起るかも知れないから」と戒めのことばをお与えになった（ヨハネ 5：14）。いやされた男は、救い主に出会ったことを大喜びした。彼はイエスに対するパリサイ人たちの敵意を知らなかったので、さきに自分に質問したパリサイ人た ちに、これがいやしを行ったお方だと告げた。「そのためユダヤ人たちは、安息日にこのようなことをしたと言って、イエスを責め……イエスを殺そうと計 るようになった」（ヨハネ 5：16、18）。

イエスは、安息日を破ったという告発に答えうために、サンヒドリンの前へ出された。もしユダヤ人がこの時独立していた国民だったら、このような告発は彼を死刑にするという彼らの目的に役立ったであろう。しかしローマの支配下にあったために、そういうことはで

きなかった。ユダヤ人は死刑を課する権利を持っていなかったし、またキリストに対するこの告発は、ローマ人の法廷では重視されなかったであろう。し 1 かしながら、そこには彼らが達成しようと望んでいた他の目的があった。彼らがキリストの働きを妨害しようと努力しているにもかかわらず民衆に対するキリストの勢力は、エルサレムにおいてさえ、彼らの勢力よりもだんだん大きくなっていった。ラビたちのながったらしい大げさな話に興味のない民衆は、キリストの教えにひきつけられた。彼らは、キリストのみことばを理解することができ、彼らの心はあたためられ、慰められた。キリストは、神が刑罰をくだされるさばき主ではなく、やさしい父であられることについて語り、またご自身のうちに反映している神のみかたちをお示しになった。心が傷ついている者にとって、イエスのみことぼは、香油のようであった。みことばと憐れみの行為によって、キリストは古い言い伝えと人間の作った戒めの圧力とをうち破り、尽きることなく満ち満ちている神の愛をお示しになっていた。

キリストについて、最も古い預言の一つに、「つえはユダを離れず、立法者のつえはその足の間を離れることなく、シロの来る時までに及ぶであろう。もろもろの民は彼に従う」としるされている（創世記 49：10）。民はキリストに従おうとしていた。共鳴する民衆の心は、祭司たちの要求する厳格な儀式よりも、愛となさけの教訓を受け入れた。もし祭司たちやラビたちが妨害しなかったら、キリストの教えによって、この世界にはかつてみられなかったような改革が行われたであろう。しかしこれらの指導者たちは、自分たちの権力を維持するために、イエスの勢力を打破しようと決心していた。サンヒドリンでキリストを審問し、彼の教えを公然と非難することは、この目的をとげるのに役立つのである。なぜなら民は、自分たちの宗教上の指導者たちに対して、まだ深い尊敬の念を持っていたからである。ラビたちの要求をあえて非難したり、あるいは彼らが民に課した重荷を軽くしようとする者はだれでも、冒?の罪ばかりでなく、反逆の罪があるものとみなされた。ラビたちは、この点において、キリストについての疑念をひき起こそうと望んだ。彼らは、キリストが、一般に認められている慣習を廃し、そうすることによって、民の間に分裂をひき起こし、ローマ人から完全に征服される道を備えているのだと主張した。

しかし、ラビたちがその実現に熱中しているこうした計画は、サンヒドリンの会議よりもほかの会議で始まったのである。サタンは、荒野でキリストに敗れた後、キリストの伝道に反対し、できればその働きを失敗させようとして、自分の軍勢を結集した。彼は直接個人的に働きかけて達成できなかったところを、戦術によって達成しようと決心した。サタンは、荒野の戦いから退去するとすぐに、自分の軍の天使たちとの会議で、ユダヤ人が救い主を認めないように、彼らの心をもっとくもらせるための計画を練った。サタンは、宗教界においてサタンを代表している人間どもに、この真理の擁護者に対する敵意を吹きこみ、彼らを通　して働こうと計画した。彼は、そうした人たちにキリストを排斥させ、その生活をできるだ　けつらいものにして、キリストがご自分の使命を果たすのに落胆されるようにしようと望ん　だ。こうしてイスラエルの指導者たちは、サタンのうつわとなって、救い主と戦った。　イエスは、律法を「大いなるものとし、かつ光栄あるものとする」ためにおいでになっていた。　彼は律法の尊厳を低くしないで、かえって高められるのであった。聖書に、「彼は衰えず落　胆せずついに道を地に確立する」と言われている（イザヤ　42：21、4）。イエスは、安息日を祝福ではなくてわざわいにしていたやっかいな規則から解放するために、おいでにな　ったのである。

こういう理由から、彼は、ベテスダでいやしの行為をなさるのに安息日をおえらびになったのだった。彼は週の他の日でもその病人をいやすことがおできになったのである。あるいはただ病気をなおすだけにしておいて、寝床を運んで行くことまでお命じにならなくてもよかったのである。しかしそれではイエスのお望みになった機会は与えられないのであった。地上におけるキリストの生涯一つ一つの行為の底には、賢明な目的があった。キリストのなさったことはすべて、それ自体において、またその教えにおいて、重要であった。イエスは、池のそばの病人たちの中から、最も重い病人をえらんで、その者の上にいやしの力を働かせ、そこになされた偉大なわざを公表するために、町の中に寝床を運んで行くようにその男にお命じになった。このことによって、安息日に何をすることが律法にかなっているかということについて質問が起こり、イエスが主の日に関するユダヤ人の束縛を攻撃され、彼らの言い伝えが無効であることを言明される道が開かれるのであった。

イエスは、苦しんでいる者を救う行為は、安息日の律法にかなっていると彼らにお述べになった。それは、苦しんでいる人間に奉仕するためにいつも天と地との間をのぼりくだりしている神の天使たちの働きに一致していた。イエスは、「わたしの父は今に至るまで働いておられる。わたしも働くのである」と言明された（ヨハネ　5：17）。すべての日は神の日で、人類のための神のご計画を実行すべき日である。律法について、もしユダヤ人の解釈が　正しいなら、エホバ神はまちがっておられることになる。神が初めて地の基を置かれてから、神のみわざはすべての生物を生かし、ささえてきた。もしユダヤ人の言う通りなら、みわざ　を見て良しとされ、その完成を記念するために安息日を制定された神は、ご自分の働きをお　しまいにして、やむことのない宇宙の運行をとめたまわねばならないことになる。

神は、太陽が安息日にその職務を遂行するのを禁じ、その温和な光線が地上をあたため、植物を繁茂させるのをとめたまわねばならないだろうか。もろもろの世界は、この聖日の間じゅう静止しなければならないだろうか。神は小川に野や森をうるおさないように命じ、海の波にそのたえまない干満を停止するように命じたまわねばならないだろうか。麦や穀物は生長をやめ、ぶどうの房は紫色に熟するのを延ばさなくてはならないだろうか。木や草花は、安息日につぼみをつけることも花を咲かせることもしてはならないのだろうか。　そうなったら、人は、地の果実と、生活を豊かにしてくれるいろいろな祝福を失うであろう。自然はそ　の変ることのない営みをつづけなければならない。神は一瞬間もみ手を休めるわけにいかな　い。もしそうされたら、人は衰え、死んでしまう。人間にもまた、この日になすべき働きが　ある。生活上の必要に備え、病人を世話し、困っている人々の欠乏を満たさねばならない。　安息日に、苦しみをやわらげることをおこたる者は罪をまぬかれない。神の聖なる休みの日　は、人のためにつくられたもので、憐れみの行為は、安息日の意図に完全に一致している。　神は、ご自分の被造物が安息日でもほかの日でも、苦しみをやわらげられるものなら、1 時間でも苦しむことをお望みにならない。

安息日には、神に対する要求は、ほかの日よりも大きい。この日には、神の民は、いつもの仕事をやめて、瞑想と礼拝に時を過ごすのである。彼らは、安息日にはほかの日よりももっと多くの恵みを神に求める。彼らは神の特別な関心を要求する。彼らは神の最上の祝福

を切望する。神は、安息、日が過ぎるのを待たないで、こうした願いにお答えになる。天の神の働きは決してやむときがない。人間もよいことをするのを休んではならない。安息日は何の活動もしない無益な日として与えられているのではない。律法には、主の休みの日に世俗の仕事をすることを禁じてある。生活費を得るための働きはやめなければならない。世俗的なたのしみや金もうけのための働きをこの日にすることは、律法にかなわない。だが神が創造の働きをおやめになって、安息日に休み、これを祝 福されたように、人間も日常生活の仕事を離れて、この日の聖なる時間をもっぱら健康的な休みや礼拝や聖なる行為に用いるべきである。病人をいやされたキリストの働きは、律法に完全に一致していた。それは安息日をとうとぶことになった。

イエスは、天父がなしておられるのと同じく神聖で、そして同じ性格をもった働きをすることによって、神と等しい権利を主張された。ところがパリサイ人たちはますます怒った。彼らの判断によれば、イエスは律法を破られたばかりでなく、神を「自分の父」と呼ぶことによって、自分を神と等しい者であると言明されたというのである（ヨハネ 5：18）。 ユダヤ国民はみな、神を父と呼んでいたのだから、キリストが神に対して同じ関係にあると言わ れても、そんなに怒る理由はなかった。しかし彼らは、キリストのこの主張が、最高の意味 においてなされたものと判断されると言って、キリストを冒?だと非難した。

このようなキリストの敵どもは、キリストが彼らの良心に感じさせられる真理に議論をもって対抗することができなかった。彼らは自分たちの慣習や言い伝えをひき合いに出すことしかできなかった。だがそうしたものは、イエスが神のみことばと休むことのない自然の営みから引用される議論にくらべた時に、無力で、間の抜けたもののように思えた。光を受けたいという気持がラビたちにあったら、彼らは、イエスが真理を語っておられることをさとったのである。だが彼らは、イエスが安息日について言われた大事な点を避けて、イエスがご自分は神と等しい者だと主張されたといって、彼に対する怒りをあおりたてようとした。役人たちの怒りはとどまるところを知らなかった。祭司たちとラビたちは、民を恐れなかったら、イエスをその場で殺してしまったであろう。しかしイエスに対する民衆の好意的な感情は強かった。多くの者は、自分たちの病気をいやし、悲しみを慰めてくださったイエスに

親しみを感じ、ベテスダでイエスが病人をいやされたことを弁護した。そのため、当分の間指導者たちはやむを得ずその憎しみをおさえなければならなかった。

イエスは冒涜の告発をはねつけられた。あなたがたが非難している働きをなす権威がわたしにあるのは、わたしが神の子であり、性質においても、意思においても、目的においても、神と一つであるからだと、イエスは言われた。創造と摂理におけるすべての神の働きに、わたしは神と協力しているのだ。「子は父のなさることを見てする以外に、自分からは何事もすることができない」（ヨハネ　5：19）。祭司たちとラビたちは、神のみ子がこの世においてなすためにおいでになった働きについて、神のみ子を非難していた。彼らは、罪のため　に神から離れてしまい、高慢な心をもって、神とは無関係に行動していた。彼らは、すべて　のことに自己満足を感じ、彼らの行動をみちびく一層高い知恵の必要を認めなかった。しか　し神のみ子は、天父のみこころに従い、天父の力をあてにされた。キリストは、ご自分をま　ったくむなしくされたので 1 ご自分で計画をおたてにならなかった。主はご自分れわれも、自分の生活が神のみこころのはっきりしたあらわれであるように、神に依存すべきである。

モーセは、神の住居として聖所を建てようとした時、すべてのものを山で示された型に従ってつくるように命じられた。モーセは、神の働きをする熱意に満ちていた。そしてモーセの案を実行するために、最も才能のある、腕のいい人たちが手近にいた。だが彼は、示された型通りのものでなければ、鈴、ざくろ、ふさ、幕、その他聖所のどんな器具も作ってはならなかった。神はモーセを山に呼び、天の事物を彼にお小しになった。主は、モーセが型を見るように、ご自分の栄光をもって彼をおおわれ、その型に従ってすべてのものがつくられた。同じように神は、ご自分の住居にしようと望まれたイスラエルに、神の輝かしい品性の理想をお示しになった。その型は、シナイ山で律法が与えられた時に、彼らに山で示された。その時主は、モーセの前を通りすぎて、「主、主、あわれみあり、恵みあり、怒ることおそく、いつくしみと、まこととの豊かなる神、いつくしみを千代までも施し、悪と、　とがと、罪とをゆるす者」と宣言された（出エジプト 34：6、7）。

イスラエルは自分自身の道をえらんでいた。彼らは型に従って築いていなかった。だが神の内住される真の宮であられるキリストは、ご自分の地上生涯をこまかい点にいたるまで、

神の理想に一致して形づくられた。キリストは、「わが神よ、わたしはみこころを行うことを喜びます。あなたのおきてはわたしの心のうちにあります」と言われた（詩篇 40：8）。同じようにわれわれの品性も、「霊なる神のすまい」として築かれるのである（エペソ 2：22）。われわれは、「示された型どおり」すなわち「あなたがたのために苦しみを受け、御足の跡を踏み従うようにと、模範を残された」キリストにならって「いっさいを作」るのである（ヘブル 8：5、1 ペテロ 2：21）。

キリストのみことばは、われわれが自分自身を、天の神に結びついて離れることのできない者とみなすように教えている。われわれの立場がどんなものであろうと、われわれは、すべてのものの運命をご自身のみ手ににぎっておられる神に依存しているのである。神はわれわれを働きに任命し、その働きに必要な才能や手段をお与えになった。われわれが意志を神に服従させ、神の力と知恵に信頼するかぎり、われわれは安全な道にみちびかれ、神の大いなる計画の中に定められているわれわれの立場を果たすのである。しかし自分自身の知恵と力とをあてにする者は、自分を神からひき離しているのである。彼はキリストと一致して働かないで、神と人との敵であるサタンの目的を果たしているのである。

救い主はつづけて、「父のなさることであればすべて子もそのとおりにするのである。……父が死人を起して命をお与えになるように、子もまた、そのこころにかなう人々に命を与えるであろう」と言われた（ヨハネ 5：19、21）。サドカイ人は、肉体のよみがえりはないと主張した。しかしイエスは、天父の最高のみわざの一つは、死人をよみがえらせることであって、イエスご自身も同じわざをなす力を持っていると彼らに言っておられる。「死んだ人たちが、神の子の声を聞く時が来る。今すでにきている。そして聞く人は生きるであろう」（ヨハネ 5：25）。パリサイ人は、死人のよみがえりを信じた。キリストは、死人にいのちを与える力はいまでさえ彼らの間にあって、彼らはその力のあらわれを見ると断言しておられる。この同じよみがえりの力は、「自分の罪過と罪とによって死んでいた」魂にいのちを与える力である（エペソ 2：1）。イエス・キリストにあるいのちのみたま、すなわち「復活の力」は、人を「罪と死との法則から……解放」する（ピリピ 3：10、ローマ 8：

2）。悪の主権はうち破られ、信仰によって魂は罪から守られる。キリストのみたまに心を開く者は、肉体を墓からよみがえらせるその大いなる力にあずかる者となる。

このいやしいナザレ人は、ご自分のまことの高貴な身分を主張される。彼は人性を超越し、罪と恥のよそおいを捨てて、天使たちにあがめられるお方、神のみ子、宇宙の創造主と一つであられるお方として、ご自身をお示しになる。聞いている者たちは、魅せられたようにじっときいている。誰もキリストのようなことばを語ったり、このようにどうどうたる威厳をもってふるまったりした者はなかった。イエスの話しぶりははっきりしていて、率直で、その中にはキリストの使命と世の人々の義務とがあますところなく宣言されている。「父はだれをもさばかない。さばきのことはすべて、子にゆだねられたからである。それは、すべての人が父を敬うと同様に、子を敬うためである。子を敬わない者は、子をつかわされた父をも敬わない。……それは、父がご自分のうちに生命をお持ちになっていると同様に、子にもまた、自分のうちに生命を持つことをお許しになったからである。そして子は人の子であるから、子にさばきを行う権威をお与えになった」（ヨハネ 5：22、23、26、27）。

祭司たちと役人たちは、自らをキリストのみわざに罪を宣告する裁判官の立場に置いていたが、キリストは、ご自身が彼らのさばき主であり、また全地のさばき主であると宣言された。世はキリストにまかされ、キリストを通して、神からのすべての祝福が堕落した人類に与えられた。キリストは受肉の後と同じように、　受肉の前にもあがない主であられた。罪が生じると同時に、救い主がおられた。彼はすべての者に光といのちをお与えになったので、各人は、与えられた光の量に従ってさばかれる。光をお与えになったお方、最もやさしい懇　願をもって魂を追いかけ、その魂を罪から聖潔へ導こうとされたお方が、魂の助け主である　と同時にまたさばき主である。天で大争闘が始まって以来、サタンは自分の働きを欺瞞によ　って維持してきた。そこでキリストは、サタンの計画をばくろし、その力をうち破るために　働いてこられた。欺瞞者サタンに対抗されたお方、各時代にわたってサタンの手中からとり　こを奪回するために努力してこられたお方、すべての魂にさばきをくだされるお方、それは　キリストである。

また神は、キリストが「人の子であるから、子にさばきを行う権威をお与えになった」（ヨハネ　5：27）。キリストは、人間のあらゆる苦悩と試みとを経験し、人の弱さと罪とを理解されるので、また主はわれわれのためにサタンの試みに抵抗して勝利し、救うためにご　自身の血を流された魂を正しく、やさしくとり扱われるので、このゆえに、人の子イエスは、さばきを行うように任命されているのである。　しかしキリストの使命は、さばきではなくて 救いであった。「神が御子を世につかわされたのは、世をさばくためではなく、御子によっ　て、この世が救われるためである」（ヨハネ　3：17）。そこでイエスは、サンヒドリンの前 で、「わたしの言葉を聞いて、わたしをつかわされたかたを信じる者は、永遠の命を受け、　またさばかれることがなく、死から命に移っているのである」と言明された（ヨハネ　5：　24）。

キリストは、聞いている人たちに、驚くに及ばないと命じておいて、彼らの前に将来の秘密をもっと広い視野からお示しになった。「墓の中にいる者たちがみな神の子の声を聞き、善をおこなった人々は、生命を受けるためによみがえり、悪をおこなった人々は、さばきを受けるためによみがえって、それぞれ出てくる時が来るであろう」とイエスは言われた（ヨハネ 5：28、29）。 未来のいのちについてのこの保証は、イスラェルが長い間待ち望んでいたもので、彼らはメシヤの来臨の時にそれを受けることを望んでいた。墓の暗黒を照すこと　のできる唯一の光が彼らの上に輝いていた。しかし強情は盲目にする。イエスがラビの言い　伝えを破り、彼らの権威を無視されたので、彼らはイエスを信じようとしなかった。 その時、その場所、その機会、会衆の中にひろがっていた緊張感などがみな一つになって、サンヒド　リンの前におけるキリストのみことばを一層印象的にした。国家の最高の宗教当局者たちは、自らイスラエルの回復者を名乗るイエスのいのちをねらっていた。安息日の律法を破ったと　いう告発に答えるために、安息日の主が地上の法廷に訴えられた。イエスが恐れるところな　くご自身の使命を宣言されると、裁判官たちは驚きと怒りをこめてイエスを見た。だがイエ　スのことばに答えることができなかった。彼らはイエスを有罪とすることができなかった。　イエスは、祭司たちとラビたちとがイエスに疑いをかけ、その働きに口を出す権利を拒否さ　れた。彼らは、そのような権威をさずけられていなかった。彼らの主張は高慢心と尊大な心

に根ざしていた。イエスは彼らの告発している罪に服したり、彼らから問いただされたりすることを拒絶された。

イエスは、彼らが文句をつけている行為について、弁解したり、どういう目的でそのようなことをしたかを説明したりなさらず、役人たちに向き直って、被告から告発者になられた。イエスは彼らの無慈悲な心と聖書についての無知とを責められた。彼らは神からつかわされたお方をこばんだのだから、神のみことばをこばんだことになるのだと、イエスは断言された「あなたがたは、聖書の中に永遠の命があると思って調べているが、この聖書は、わたしについてあかしをするものである」（ヨハネ 5：39）。

旧約聖書は、歴史であろうと、律法であろうと、預言であろうと、どのページにも、神のみ子の栄光が輝いている。ユダヤ教の制度全体は、それが神の制度であるかぎり、福音のぎっしりつまった預言であった。　キリストについて、「預言者たちもみな……あかしをしています」と言われている（使徒行伝 10：43）。アダムに与えられた約束から、父祖の家系と律法の制度とを通じて、天の輝かしい光はあがない主の足跡を明らかにした。預言者たちは、未来の事がらが神秘的な行列をなして目の前を通りすぎたときに、ベツレヘムの星、きたる　べきシロを見た。すべてのいけにえにキリストの死が示された。香煙の一筋一筋にキリスト　の義がのぼった。ヨベルのラッパが鳴るたびにキリストのみ名がひびき渡った。至聖所のお　それ多い神秘の中に、キリストの栄光がとどまっていた。

ユダヤ人は聖書を所有していて、みことばを外面的に知ることだけで永遠のいのちが与えられると思っていた。しかしイエスは、「神の御言（みことば）はあなたがたのうちにとどまっていない」と言われた。彼らはみことばの中のキリストをこばんだので、人となられたキリストをこばんだ。「あなたがたは、命を得るためにわたしのもとにこようともしない」とイエスは言われた（ヨハネ 5：38、40）。 ユダヤ人の指導者たちは、メシヤの王国に関する預言者たちの教えを学んでいたが、それは真理を知ろうとする真剣な願いからではなく、彼らの野心的な望みを支持する証拠をさがし出すのが目的だった。キリストが彼らの期待に反する様子でこられた時、彼らは、キリストを受け入れようとしなかった。そして彼らは、自分自身を正当づけるために、キリストが欺瞞者であることを証拠だてようとした。彼らが

この道にひとたび足を踏みいれた時、サタンがキリストに対する彼らの敵対心を強めることは容易だった。キリストの神性の証拠として受けとられるはずのことばが、キリストに不利なように解釈された。こうして彼らは、神の真理を虚偽に変え、救い主が憐れみのみわざを通して彼らに直接語りかけられるたびに、ますます頑強に光に反抗した。

イエスは、「わたしは人からの誉を受けることはしない」と言われた（ヨハネ 5：41）。イエスがお望みになったのは、サンヒドリンの権力でもなければ、サンヒドリンから認められることでもなかった。イエスがサンヒドリンから是認されたとしても、イエスにとっては誉とならなかった。イエスは天の神の誉と権威とをさずかっておられた。イエスがお望みになれば、天使たちがやってきて尊敬をささげ、天父はもう 1 度イエスの神性を証明されたであろう。だがユダヤ人の指導者たち自身のために、また彼らが指導している国民のために、イエスは、彼らがイエスの品性を認め、イエスが彼らに与えるためにおいでになったその祝福を彼らが受けることを望まれた。

「わたしは父の名によってきたのに、あなたがたはわたしを受けいれない。もし、ほかの人が彼自身の名によって来るならば、その人を受けいれるであろう」（ヨハネ 5：43）。イエスは、神のみかたちをそなえ、神のみことばを成就し、神のみ栄えを求め、神の権威によっておいでになった。それでもイエスは、イスラエルの指導者たちから受けいれられなかった。しかしほかの人たちがキリストの品性をよそおいながら、自分自身の意思に基づいて行動し、自分自身の栄えを求めてやってくるなら、彼らは受け入れられるであろう。それはなぜだろうか。自分自身の栄えを求める者は、ほかの人たちのうちにある高慢心に訴えるからである。このような訴えならば、ユダヤ人はこれに応ずることができるのである。偽りの教師は、ユダヤ人の宿望や言い伝えを是認することによって、彼らの誇りにへつらうので、彼らはそうしたにせ教師を受け入れるのである。だがキリストの教えは、彼らの考えに一致しなかった。キリストの教えは、霊的で、自我を犠牲にすることを要求した。そのため彼らは、キリストの教えを受け入れようとしなかった。彼らは、神を親しく知っていなかったので、キリストを通して語られる神のみ声は、彼らにとって見知らぬ人の声であった。

パッション

「もし、あなたがたがモーセを信じたならば、わたしをも信じたであろう。モーセは、わたしについて書いたのである。しかし、モーセの書いたものを信じないならば、どうしてわたしの言葉を信じるだろうか」（ヨハネ　5：46、47）。モーセを通してイスラエルに語られたのはキリストであった。もし彼らが偉大な指　導者モーセを通して語られた神のみ声を聞いていたら、彼らはそれをキリストの教えのうちに認めたのである。もし彼らがモーセを信　じていたら、彼らはモーセが書いたお方を信じたのである。　イエスは、祭司たちとラビたちが、イエスのいのちをとろうと決心していることをご存じだった。それでもイエスは、ご自　分と天父との一致について、またご自分と世との関係について、彼らにはっきり説明された。彼らはイエスに対する自分たちの反対が言いわけの余地のないものであることがわかったが、それでも彼らの激しい憎しみは消えなかった。イエスの伝道には人を心服させる力が伴って　いることを目にした時、彼らは恐怖にとりつかれた。しかし彼らはイエスの訴えに抵抗し、　自らを暗やみの中にとじこめた。

彼らは、イエスの権威をくつがえすことに、またみことばによって自らの罪をさとった多くの人々の尊敬と注意とをイエスからひき離すことに大失敗した。役人たちでさえ、イエスが彼らのとがを良心に感じさせられる時に、深く罪を自覚していた。しかしこのことは、ますます彼らのイエスに対する敵意を増したにすぎなかった。彼らはイエスのいのちをとる決心をしていた。彼らは国中に使者を送って、イエスは詐欺師だと民に警告した。スパイが送られてイエスを見張り、イエスの言われたこと、されたことを報告した。とうとい救い主は、いまやまったく十字架の影に立っておられた。

第 22 章ヨハネの投獄と死

バプテスマのヨハネは、キリストの王国について一番先に告げ知らせたが、彼はまた苦難を受けることにおいても最初であった。荒野の自由な空気と、彼のことばを熱心にきいた大群衆から離れて、彼はいま獄舎の壁の中にとじこめられていた。彼はヘロデ、アンテパスの城の中に囚人となっていた。ヨハネの伝道の大部分は、アンテパスの支配下にあったヨルダンの東の領地でなされてきた。ヘロデ自身ヨハネの説教をきいていた。放蕩な王は悔い改めを促す叫びにふるえあがった。「それはヘロデが、ヨハネは正しくて聖なる人であることを知って、彼を恐れ、彼に保護を加え、またその教を聞いて非常に悩みながらも、なお喜んで聞いていたからである」（マルコ 6：20）。ヨハネはヘロデに対して誠実にふるまい、彼が兄弟の妻ヘロデヤと不義の結婚をしたことを公然と非難した。一時ヘロデは自分の身をしばりつけている情欲の鎖をたち切ろうとかすかな努力をした。しかしヘロデヤは彼を自分の網にますます強くとらえ、ヨハネを投獄するようにそそのかすことによってヨハネに報復した。

ヨハネは活動的な仕事に日を送ってきた人だったので、することもない、陰気な獄舎の生活が彼の心を重くした。何の変化もなく 1 週また 1 週と過ぎて行くにつれて、落胆と疑惑が彼の心にしのびこんだ。彼の弟子たちは彼を捨てなかった。彼らは牢獄（ろうごく）に出入りすることをゆるされていたので、イエスのみわざについて消息をつたえ、人々がイエスのもとにおしかけていることをヨハネに話した。しかし彼らは、もしこの新しい教師がメシヤなら、なぜヨハネの釈放に努力しないのかと質問した。メシヤだったら、自分の忠実な先駆者が自由とおそらく生命まで奪われることをどうしてゆるすことができようか。

こうした質問は効果がないわけではなかった。そうでなければ決して起こらないような疑問がヨハネの前に持ち出された。サタンは、この弟子たちのことばをきき、そのことばが主の使者の魂を傷つけるのを見てよろこんだ。ああ、自分は親しい人の友であると考え、その人への忠誠心をあらわすのに熱心な人たちが、かえってその人の最も危険な敵となる場合がどんなに多いことだろう。どんなにしばしば彼らのことばはその人の信仰を強めないで、

かえって失望落胆させることだろう。 救い主の弟子たちと同じように、バプテスマのヨハネは、キリストの王国の性質を理解していなかった。彼はイエスがダビデの位につかれるものと期待した。ところが、時が過ぎても、救い主が王の権威を主張されないので、ヨハネは困惑し、心配した。ヨハネは、主の前に道が備えられるためには、イザヤの預言が成就しなければならないと民に宣言していた、すなわち、もろもろの山と丘とは低くせられ、高低のある地は平らになり、険しい所は平地とされねばならない（イザヤ 40：4 参照）。彼は人間の誇りと権力という高い所が倒されるのを期待していた。彼はメシヤを、「箕（み）を手に持って、打ち場の麦をふるい分け、麦は倉に納め、からは消えない火で焼き捨てる」お方としてさし示していた（マタイ 3：12）。ヨハネは預言者エリヤの霊と力とをもってイスラエルにあらわれたのであったが、そのエリヤのように彼は、主が火によって答えられる神としてご自身をあらわされるものと期待した。

バプテスマのヨハネは、その使命において、高いところでも低いところでも、恐れるところなく不義を責める者であった。彼はあえてヘロデ王に対面して率直に罪を責めた。彼は自分が任命された働きをなしとげるためには、生命を惜しまなかった。そしていま彼は、ユダ族の獅子（しし）が圧制者の誇りを打ち倒し、貧しい者と泣き悲しむ者とを救われるのを獄屋の中から期待した。だがイエスは、まわりに弟子たちを集めることと、人々をいやしたり人々に教えたりすることに満足しておられるようにみえた。ローマのくびきが毎日イスラエルの上にますます重くのしかかり、またヘロデ王とその邪悪な情婦は好き勝手にふるまい、貧しい者たちと苦しむ者たちとの叫びが天にのぼっているのに、イエスは取税人たちの食卓で食べておられるのだった。

荒野の預言者にとって、こうしたことがみなはかり知ることのできないなぞに見えた。悪魔のささやきが彼の心を苦しめ、非常な不安の影が彼にしのびよる時があった。長い間待ち望んでいた救い主がまだ現われておられないということがあり得るだろうか。すると自分がこれまで叫ばされたメッセージはどういうことなのだろうか。ヨハネは自分の使命の結果にひどく失望していた。彼は神からの使命が、ヨシヤの時代やエズラの時代に律法が読まれた時と同じような効果を生み、悔い改めて神に立ちかえる根強い働きが伴うものと期待して

いた（歴代志下 34 章、ネヘミヤ 8、9 章参照）。この使命の成功のために、彼は一生をささげたのだった。それはむだだったのだろうか。

ヨハネは、彼自身の弟子たちが、彼に対する愛から、イエスについて不信の念をいだいているのを見て、心を痛めた。彼らのために働いたことは何の実も結ばなかったのだろうか。彼がいまこうして働きから切り離されているのは、使命に忠実でなかったためだろうか。もし約束された救い主が現われて、ヨハネが召しに忠実であったことがわかったら、イエスはいま圧制者の権力を倒し、ご自分の先駆者を解放しようとお思いにならないだろうか。　しかしバプテスマのヨハネは、キリストへの信仰を捨てなかった。天から声がきこえ、はとがく　だった思い出、イエスのけがれのない純潔さ、救い主の前に出た時ヨハネにのぞんだ聖霊の　力、聖書の預言のことばのあかし、一すべては、ナザレのイエスが約束のお方であることを　あかししていた。

ヨハネは、自分の疑いや心配について友人たちと議論しようとしなかった。彼は、イエスにメッセージを送って質問しようと決心した。彼は、この役目を弟子たちのうちの 2 人にまかせ、救い主を訪問することによって彼らの信仰が強められ、兄弟たちに確信が与えられ　るようにと望んだ。また彼は、自分のためにキリストが直接に何か言ってくださるようにと　心から望んだ。　弟子たちは、イエスのところへやってきて「『きたるべきかた』はあなたなのですか。それとも、ほかにだれかを待つべきでしょうか」とのことばを伝えた（マタイ 11：3）。

バプテスマのヨハネが、イエスを指さして、「見よ、世の罪を取り除く神の小羊」「それがわたしのあとにおいでになる方であ」ると宣言してから、まだいく　らも日はたっていなかった（ヨハネ　1：29、27）。それなのにいま「『きたるべきかた』はあなたなのですか」とたずねている。それは人間の性質にとって、まことに苦い、失望させられる経験であった。忠実な先駆者ヨハネが、キリストの使命を認識しないなら、利己的な大衆に何を期待できよ　うか。救い主は、弟子たちの質問にすぐにはお答えにならなかった。彼らがイエスの沈黙を あやしみながら立っていると、病気の者や苦しんでいる者たちが、いやしてもらうために、　イエスのところへやってきた。盲人たちは、手さぐりで、群衆をわけて進んできた。あらゆ

る階級の病人たちが、ある者は自分で道を急ぎ、ある者は友だちにかつがれて、熱心にイエスの前へおしかけてきた。偉大な医者イエスのみ声は、聞こえない人の耳をつらぬいた。イエスの一言葉、み手のひとふれが、盲人の目を開いて、昼の光、自然の景色、友人たちの顔、救い主のみ顔が見えた。イエスは、病気がなおるように命じ、熱を追い出された。イエスのみ声が死にかかっている者の耳にとどくと、彼らは、健康と力を与えられて立ち上がった。悪鬼につかれて無能力になっていた者たちが、イエスのみことばに従って、その狂気がなおり、イエスを拝した。イエスは、人々の病気をなおす一方では、彼らにお教えになった。ラビたちから不潔なものとして避けられていた貧しい百姓や労働者たちが、イエスのそばに集まり、イエスは、彼らに永遠のいのちのことばを語られた。

こうしてヨハネの弟子たちが、すべてのことを見たり聞いたりしているうちに、1 日が過ぎて行った。最後にイエスは、彼らをみもとに呼んで、あなたがたが見たままのことを、行ってヨハネに告げなさいと命じ、「わたしにまずかない者は、さいわいである」とつけ加えられた（ルカ 7：23）。イエスの神性の証拠は、悩んでいる人間の必要にそれが適用されることに見られた。イエスの栄光は、彼がわれわれのいやしい身分にまで身をひくくされたことに示された。

弟子たちは、メッセージを伝えたが、それで十分だった。ヨハネは、メシヤについて、「主なる神の霊がわたしに臨んだ。これは主がわたしに油を注いで、貧しい者に福音を宣べ伝えることをゆだね、わたしを 1 つかわして心のいためる者をいやし、捕われ人に放免を告げ、縛られている者に解放を告げ、主の恵みの年とわれわれの神の報復の日とを告げさせ、また、すべての悲しむ者を慰め」と言われている預言を思い浮べた（イザヤ 61：1、2）。キリストのみわざは、彼がメシヤであることを宣言しているばかりでなく、彼の王国がどのような形で建てられるかを示した。エリヤが荒野にいた時、「主の前に大きな強い風が吹き、山を裂き、岩を砕いた。しかし主は風の中におられなかった。風の後に地震があったが、地震の中にも主はおられなかった。地震の後に火があったが、火の中にも主はおられなかった」（列王記上 19：11、12）。その火の後で、神は、「細い声」で預言者にお語りになったが、これと同じ真理がヨハネに示された。イエスは、武力の衝突や王位や王国をくつがえ

したりすることによってではなく、憐れみと自己犠牲の生活を通して人々の心に語ることによって、その働きをされるのだった。

バプテスマのヨハネ自身の克己の生活の原則は、メシヤの王国の原則であった。ヨハネは、そうしたことのすべてが、イスラエルの指導者たちの原則や望みとまったく異なったものであることを知っていた。ヨハネにとって、キリストの神性についての有力な証拠となるものが、彼らには何の証拠にもならないのであった。彼らは約束されていないメシヤを求めていた。救い主の使命は、彼らの憎しみと非難とを招くにすぎないことを、ヨハネは知った。ヨハネは、先駆 1 者として、キリストが自ら最後の 1 滴まで飲みほされなければならないさかずきから飲んでいたにすぎな 1 かった。

救い主が、「わたしにつまずかない者は、さいわいである」と言われたことばは、ヨハネに対するやさしい韻であった（マタイ 11：6）。それはヨハネにとってむだではなかった。いまヨハネは、キリストの使命の性質をもっとはっきりさとったので、生きるにも死ぬにも、愛する働きのために最もよく役立つように、神に献身した。

使者たちが去ったあとで、イエスは、ヨハネについて人々にお語りになった。救い主の心は、いまヘロデの地下牢の中で世にうずもれている忠実な証人への同情となってそそがれた。イエスは、人々が神はヨハネを捨てられたのだとか、ヨハネの信仰は試練の日にくじけたのだというような結論をくだすままにしてはおかれなかった。「あなたがたは、何を見に荒野に出てきたのか。風に揺らぐ葦（あし）であるか」とイエスは言われた（ルカ 7：24）。 ヨルダン川のほとりにはえていて、風のままにゆらぐ脊の高いあしは、バプテスマのヨハネの使命を批判し、非難するラビたちをあらわすのにふさわしかった。彼らは民衆の世論という風であちらこちらへゆれた。彼らはへりくだってバプテスマのヨハネの鋭いことばを受け入れようとはしなかったが、民衆を恐れたので、あえて彼の働きに公然と反対しようとしなかった。しかし神の使者は、こんな臆病な精神ではなかった。キリストのまわりに集まった群衆はヨハネの働きの証人だった。彼らはヨハネが恐れるところなく罪を責めるのを聞いた。自らを義とするパリサイ人にも、祭司のサドカイ人にも、ヘロデ王とその廷臣にも、つかさたちや兵士たちにも、取税人や百姓にも、ヨハネは、同じように率直に語った。

彼は人の称賛や偏見という風に動かされる揺れるあしではなかった。牢獄の中にあっても、神に対する彼の忠誠心と義への熱意は、荒野で神のみことばを説いていた時と同じにかわらなかった。主義に対する彼の忠実さは岩のように固かった。

イエスはつづけて、「では、何を見に出てきたのか。柔らかい着物をまとった人か。きらびやかに着かざって、ぜいたくに暮している人々なら、宮殿にいる」と言われた（ルカ 7:25）。ヨハネは、当時の罪と不節制とを責めるために召しを受けていて、彼の質素な衣服と克己の生活は、その使命の性格に一致していた。はでな衣服とこの世のぜいたくは神のしもべの受けるべき分ではなく、それは「宮殿」に住む人々、すなわちこの世の支配者たちの受けるべき分で、世の権力と富とは彼らに属しているのである。イエスは、ヨハネの着ているものと、祭司たちや役人たちの着ているものとの相違に人々の注意を向けようと望まれた。こうした役人たちは、はでな衣服を着、高価な飾り物を身につけていた。 彼らは、見栄を好み、人々の目をくらませて、もっと高い尊敬を受けようと望んでいた。彼らは、神に承認される心の純潔さを獲得するよりも人間の称賛を受けることに熱心だった。こうして彼らは、神に忠誠を尽くさないで、この世の王国に忠誠を尽くしていることをあらわした。 イエスは言われた、「では、何を見に出てきたのか。預言者か。そうだ、あなたがたに言うが、預言者以上の者である。

『見よ、わたしは使をあなたの先につかわし、あなたの前に、道を整えさせるであろう』

と書いてあるのは、この人のことである。あなたがたに言っておく。女の産んだ者の中で、ヨハネより大きい人物はいない」（ルカ 7：26～28）。ヨハネが生れる前に、天使は、ザカリヤへのお告げの中で、「彼は主のみまえに大いなる者となり」と言った（ルカ 1： 15）。天の神の評価で、大いなるものとは何だろうか。世の人々が大いなるものとみなしているもの、すなわち富や階級や名門や知的な才能自体ではない。もし神を考慮に入れない知的な偉大さに尊敬の価値があるとしたら、われわれの尊敬は、どんな人間もくらべることのできない知力をもっているサタンに当然ささげられる。だが自我に奉仕するために悪用される時、知力は、その才能が大きければ大きいほど、一層大きなわざわいとなる。神がとうと

ばれるのは道徳的価値である。愛と純潔とは、神が最もとうとばれる特性である。ヨハネがサンヒドリンの使者たちの前で、人々の前で、自分の弟子たちの前で、自分自身の誉を求めようとしないで、イエスを約束のお方としてすべての人にさし示した時、彼は、イエスの目に大いなる者となった。キリストの働きにおける彼の無我の喜びは、人間のうちにあらわされた最高級の気 高さをあらわしている。

イエスについてのヨハネのあかしを聞いた人々が、ヨハネの死後、彼についてあかししたことばは、「ヨハネはなんのしるしも行わなかったが、ヨハネがこのかたについて言ったことは、皆ほんとうであった」ということばであった（ヨハネ 10：41）。エリヤのように、天から火を呼びおろしたり、死人をよみがえらせたり、モーセのように、神のみ名によって　権力の杖を使うことは、ヨハネにゆるされなかった。彼は、救い主の来臨のさきぶれであり、その現われに対して備えるように民に呼びかけるためにつかわされた。彼は、その使命を忠　実に果たしたので、彼がイエスについて教えたことを人々が思い出した時に、彼らは、「ヨ　ハネがこのかたについて言ったことは、皆ほんとうであった」と言うことができた（ヨハネ10：41）。主の弟子たちはみな、キリストについて、このようなあかしをたてるために召さ れているのである。

メシヤの先駆者として、ヨハネは、「預言者以上の者」であった（ルカ 7：26）。なぜなら預言者たちは、キリストの来臨を遠くからながめただけであったが、ヨハネはキリストを見、キリストがメシヤであられることについて、天からの証言を聞き、キリストを神からつかわされたお方として、イスラエルに紹介することをゆるされたからである。しかしイエスは、「神の国で最も小さい者も、彼よりは大きい」と言われた（ルカ 7：28）。 預言者ヨハネは、2 つの時代をつなぐ環（わ）であった。神の代表者として、彼は、キリストの時代の律法と預言者の関係を示していた。彼は小さな光で、そのあとには大きな光がつづくのであった。ヨハネが彼の民に光を放つように、彼の心は聖霊に照されていた。しかしイエスの教えと模範から出ている光ほど堕落した人類を明るく照す光は、これまでほかになかったし、またこれからもない。影としての犠牲制度に象徴されているキリストとその使命は、かすかにしか理解されていなかった。ヨハネでさえ、救い主を通して与えられる未来の永遠のいの

ちを十分に理解していなかった。 ヨハネが自分の使命に感じていた喜びは別として、彼の一生は悲しみの一生であった、彼の声は荒野よりほかのところではめったにきかれなかった。彼は孤独な身分であった。彼は自分自身の働きの結果を見ることをゆるされなかった。キリストといっしょにいて、大きな光に伴う神の力のあらわれを見る特権は彼になかった。盲人が見えるようになり、病人がいやされ、死人がよみがえらせられるのを、彼は見なかった。彼は、キリストのすべてのことばを通して光が輝き、預言の約束が栄光に照されるのを見なかった。キリストの大いなるみわざを見、キリストのみことばを聞いた最も小さい弟子でさえ、この意味において、バプテスマのヨハネよりも大きな特権があった。したがってヨハネよりも大きい者といわれているのである。

ヨハネの説教を聞いた多くの群衆によって、彼の評判は国じゅうにひろがっていた。彼の投獄の結果について深い関心がよせられていた。しかし非難すべき点のない彼の生活と、彼に味方する民衆の強い感情から考えて、暴力手段はとられないものと信じられていた。 ヘロデは、ヨハネを神の預言者と信じていたので、彼を自由の身にする意志が十分あった。だが彼は、ヘロデヤを恐れて、その意図を果たすことを遅らせた。 ヘロデヤは、公然たる手段では、ヨハネを殺すことにヘロデの同意を得ることができないことがわかっていたので、策略を用いてその目的を果たそうと決心した。王の誕生日に、国の役人たちと宮廷の貴族たちのために宴会が催されることになっていた。ごちそうを食べ、酒を飲むのであった。ヘロデは、こうして油断し、彼女の意のままに動かされるのであった。

その祝いの日になって、王が貴族たちと飲み食いしていると、ヘロデヤは客への余興として踊りをおどらせるために娘を宴会場にやった。サロメは青春の盛りで、その肉感的な美しさは酒に酔った貴族たちの官能をとりこにした。こうした宴会の席に宮廷の婦人たちが現われるのは習慣ではなかったが、このイスラエルの祭司たちと君たちの娘が、客を楽しませる ために踊った時、へつらいのお世辞がヘロデによせられた。 王は酒のためにもうろうとなっていた。情欲が支配し、理性が失われていた。彼の目には浮かれている客と、ごちそうのテーブルと、きらめく酒と、輝いているあかりと、目の前で踊っている若い娘のいる享楽の広間しか見えなかった。一瞬間向こう見ずな気持になった王は、自分の領地の高官たちの前

でいばれるような見せびらかしを何かやってみたいと思った。彼は、ヘロデヤの娘に向かって、願うものはどんなものでも、たとえ国の半分でもやろうと、誓いをもって約束した。

サロメは何を願ったらよいかをきくために、母親のところへ急いで行った。返事は用意されていた。それはバプテスマのヨハネの首であった。サロメは母親の心が復讐（ふくしゅう）に飢えているのを知らなかったので、この願いをもち出すことをためらった。だがヘロデヤの決心が勝った。若い娘はひき返して、「今すぐに、バプテスマのヨハネの首を盆にのせて、それをいただきとうございます」という恐ろしい願いをだした（マルコ 6：25）。 ヘロデはびっくりし、ろうばいした。飲めや歌えの騒ぎはやみ、歓楽の場は不吉な沈黙に支配された。王は、ヨハネの生命をとることを考えると、恐怖にうたれた。しかし誓いのことばを出した以上、気まぐれや軽率に思われたくなかった。誓いは客のためになされたのだから、もし客の 1 人が約束を果たす必要はないと言ったら、彼は、よろこんで預言者のいのちを助けたであろう。ヘロデは、客たちが囚人のために口をきく機会を与えた。彼らは、ヨハネの　説教を聞くために遠い道を行ったことがあった。そしてヨハネが罪のない人間であり、神の　しもべであることを知っていた。彼らは、少女の要求に肝をつぶしたが、酔っぱらっていた　ので、抗議をさしはさむ者もなかった。天の使者の生命を助けるために声をあげた者はなか　った。この人たちは国家の高い信任の地位を占め、重大な責任を負っていたが、ごちそうと　酒におぼれて、ついには感覚が麻痺していた。彼らは音楽とダンスの目のくらむような光景　に頭がおかしくなり、良心は眠っていた。彼らは沈黙することによって、神の預言者に死の　宣告をくだし、1 人の恥知らずな女の復讐心を満足させた。

ヘロデは、自分の誓いから解放されるのを待ったがむだだった。そこで彼はしぶしぶ預言者の処刑を命じた。すぐにヨハネの首が、王と客の前に持ってこられた。ヘロデに罪の生活を離れるように忠実に警告した唇は永遠にとじられた。人々に悔い改めを呼びかけるその声は 2 度ときかれないのであった。一夜の歓楽は、最も偉大な預言者の 1 人の生命を代価とした。 ああ、正義の守護者であるべき人々の飲酒によって、何の罪もない人間の生命がどんなにしばしば犠牲にされたことだろう。酔わせるさかずきを唇にあてる者は、正気を失わせる酒の力によって犯すかも知れないあらゆる不正に対して責任がある。感覚を麻痺させるこ

とによって、彼は冷静に判断することも、善悪のはっきりした識別力も持つこともできない。彼は、サタンが彼を通して罪のない者をしいたげ、滅ぼすために働く道を開くのである。「酒は人をあざける者とし、濃い酒は人をあばれ者とする、これに迷わされる者は無知である」（箴言　20：1）。こうして「公平はうしろに退けられ、……悪を離れる者はかすめ奪われる」（イザヤ　59：14、15）。同胞の生命の支配権を持っている人々は、飲酒に身をまかせる時に罪に問われる。法律を執行する者はみな法律を守る者でなければならない。彼らは自制のできる人間でなければならない。彼らは活発な知力と高い正義感とを持つために、知的霊的肉体的な能力を完全に統御する必要がある。

バプテスマのヨハネの首がヘロデヤのところへ持ってこられると、彼女は悪魔的な満足をもってそれを受け取った。彼女はこの復讐を喜び、これでヘロデの良心はもう苦しめられないとうぬぼれた。だが彼女の罪からは何の幸福も生じなかった。彼女の悪名は高くなっていみきらわれ、一方ヘロデは、預言者の警告に悩まされた時よりももっとひどい後悔に苦 しめられた。ヨハネの教えの影響は沈黙させられなかった。それは世の終りにいたるまで、各時代にわたってひろがるのであった。

ヘロデの罪は、いつも彼につきまとった。彼は罪を犯した良心の責めからのがれようとたえず努力していた。ヨハネについての彼の確信はゆるがなかった。ヨハネの自己犠牲的な生活と、その厳粛で熱心な訴えと、健全な判断にもとづく勧告とを思い浮べ、そして彼め死のいきさつを思い出すと、ヘロデは心が安まらなかった。国務に従事し、人々から尊敬を受ける時に、彼は笑顔と威厳のある態度とを保っていたが、一方には、わざわいが自分の上にのぞんでいるという心配で、いつも重い不安な心がかくされていた。 ヘロデは、神には何 1つかくすことができないというヨハネのことばに深い感銘を受けていた。神がどこにでも臨在しておられること、宴会場の浮れ騒ぎをごらんになったこと、ヨハネの首を切るようにとの命令を聞かれたこと、ヘロデヤの狂喜と彼女を譴責した者の切られた首に彼女があびせた侮辱をごらんになったことなどを、ヘロデはさとった。ヘロデが預言者ヨハネの口からきいていた多くのことが、いま荒野の説教の時よりもっとはっきり彼の良心に語りかけた。

ヘロデは、キリストのみわざについて聞いた時、非常に心配した。彼は、神がヨハネを死人の中からよみがえらせ、罪を責めるために、もっと大きな力をもってつかわされたのだと思った。彼は、ヨハネが自分と自分の家に罪の宣告をくだすことによって、彼の死刑に復讐するのではないかとたえず心配していた。ヘロデは、神が罪の行為の結果として宣言しておられる通りのものを自ら刈りとっていた。すなわち「その国々の民のうちであなたは安きを得ず、また足の裏を休める所も得られないであろう。主はその所で、あなたの心をおののかせ、目を衰えさせ、精神を打ちしおれさせられるであろう。あなたの命は細い糸にかかっているようになり、夜昼恐れおののいて、その命もおぼつかなく思うであろう。あなたが心にいだく恐れと、目に見るものによって、朝には『ああ夕であればよいのに』と言い、夕には『ああ朝であればよいのに』と言うであろう」と宣告されている（申命記 28：65～67）。罪人自身の思いが彼の告発者であって、やましい良心のとがめという針ほど鋭い痛みはない。それは彼に夜も昼も休みを与えないのである。

多くの人々の心にとって、バプテスマのヨハネの運命は、深い神秘につつまれている。なぜヨハネは牢獄の中で衰弱し、死ぬがままに放っておかれたのかと彼らは質問する。われわれ人間の目では、この暗い摂理の神秘を見通すことはできない。しかしヨハネはキリストと苦難を共にしたにすぎないのだということをおぼえている時、神に対するわれわれの信頼は決して動揺させられることがない。キリストに従う者はみな犠牲の冠をかぶるのである。彼らは、かならず利己的な人々から誤解され、サタンの激しい攻撃のまととなる。サタンの王国は、この自己犠牲の原則を滅ぼすために建てられているのであって、彼はどこでもこの原則があらわされると戦うのである。

ヨハネの子供時代にも、青年時代にも、おとなになってからも、堅固な志操と道徳的な力とが特に目立っていた。「主の道を備えよ。その道筋をまっすぐにせよ」と叫ぶヨハネの声が荒野に聞こえた時、サタンは自分の王国の安全を心配した（マタイ 3：3）。罪の深さが、人々がふるえあがるような調子でばくろされた。サタンの支配下にあった多くの人々に対する彼の権力はうち破られた。サタンは、バプテスマのヨハネを、神に対する完全な献身の生活からひき離そうと根気よく努力したが、失敗だった。サタンはまたイエスにうち勝つこと

にも失敗した。荒野の試みで、サタンは敗北したので、その怒りは大きかった。いま彼は、ヨハネを打つことによってキリストに悲しみを与えようと決心した。彼は、自分が罪にひき入れることのできなかったお方を苦しめようと思ったのである。

イエスはご自分のしもべを救い出すために手をお出しにならなかった。イエスはヨハネが試練に耐えることをご存じだった。救い主は、よろこんでヨハネのもとに行き、ご自分がそこにおられることによって暗い牢獄を明るくしようと思われたことだろう。だが イエスは、ご自分を敵の手に渡して、その使命を危険にさらすようなことをなさらなかった。イエスはよろこんでご自分の忠実なしもべをお救いになりたかった。だが後年牢獄から死へ移らねばならない幾千の人々のために、ヨハネは、殉教のさかずきを飲むのであった。　イエスに従う者たちが、神と人とに捨てられたように見えながら 1 人さびしく獄舎の中で弱りはてたり、 剣やごうもんや火あぶりの刑で殺されたりする時、キリストご自身がその忠実さについてあ　かしされたバプテスマのヨハネが同じ経験を味わったことを思って、彼らの心は、どんなに　かささえられることだろう。　サタンは、神の使者の地上生活を中断することをゆるされた。だがこの滅ぼす者も、「キリストと共に神のうちに隠されている」生命には手をつけること　ができなかった（コロサイ 3：3）。サタンは、キリストに悲しみを与えたことに狂喜したが、ヨハネを征服することに失敗した。死そのものはヨハネを永遠に誘惑の力のとどかないとこ　ろにやってしまったにすぎなかった。この戦いで、サタンは自分自身の性格をばくろしてい　た。宇宙の目の前で、彼は神と人とに対する敵意をはっきりあらわした。

ヨハネに奇跡的な救助は与えられなかったが、彼は捨てられなかった。彼は、いつも天からの天使たちを友とし、天使たちがキリストについての預言と聖書のとうとい約束を彼の目の前に開いた。それが彼の心のささえとなり、それはまたその後の時代の神の民の心のささえとなるのであった。バプテスマのヨハネに、その後につづく者たちと同じように、「見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである」との保証が与えられた（マタイ　28：20）。 もし神の子らが始めから終りを見通すことができ、神の共労者として自分の果たしている栄光ある目的をみとめることができたら、彼らは、神がみちびかれる以　外の道を決して選ばないであろう。天に移されたエノクも、火の車で天へのぼったエリヤも、

ただ 1 人牢獄の中で殺されたバプテスマのヨハネより偉大であったのでもなければ、彼よりとうとばれたのでもない。「あなたがたはキリストのために、ただ彼を信じることだけではなく、彼のために苦しむことをも賜わっている」（ピリピ 1：29）。天が人に与えることのできるすべての賜物の中で、キリストと共にその苦難にあずかることは、最も重い信任であり、最高の栄誉である。

第 23 章「神の国は近づいた」

「イエスはガリラヤに行き、神の福音を宣べ伝えて言われた、『時は満ちた、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信ぜよ』」（マルコ 1：14、15）。 メシヤの来臨は最初にユダヤで発表された。エルサレムの宮で、先駆者の誕生が、祭壇の前で奉仕していたザカリヤに予告された。ベツレヘムの丘の上で、天使たちがイエスの誕生をふれ知らせた。エルサレムへは博士たちがメシヤをさがしにきた。宮の中で、シメオンとアンナが、イエスが神のみ子であることをあかしした。「エルサレムとユダヤ全国」は、バプテスマのヨハネの説教を聞いた。サンヒドリンの代表者たちは、群衆といっしょに、イエスについてのヨハネのあかしを聞いた。ユダヤで、キリストは、最初の弟子たちを受け入れられた。イエスの公生涯の初めの大部分は、ここで送られた。宮のきよめにあらわれた神性のひらめき、いやしの奇跡、その口から出た天来の真理の教え、そうしたことのすべては、ベテスダでのいやしののちに、イエスがサンヒドリンの前で宣言されたこと、すなわちイエスが永遠の神のみ子であることを告げていた。

もしイスラエルの指導者たちが、キリストを受け入れていたら、イエスは、世に福音を伝える使者となる栄誉を彼らにお与えになったのである。神の国と恩恵とを告げ知らせる者となる機会は、最初に彼らに与えられた。しかしイスラエルはおとずれの時を知らなかった。ユダヤ人の指導者たちのねたみと不信は、　公然たる憎悪心へ発展し、民の心はイエスから離れた。　サンヒドリンは、キリストの使命を拒否し、イエスの死刑を決めていた。そこでイエ ス は、エルサレムから、祭司たちから、宮から、宗教界の指導者たちから、また律法によっ　て教育された民から離れて、使命を宣伝するためと、万国の民に福音を伝える者たちを集め　るために、他の階級に向かわれた。キリストの時代に人類の光と生命が、教会当局によって　拒否されたように、それはつづく各時代においても拒否された。キリストがユダヤからしり　ぞかれた歴史は、幾度もくりかえされた。宗教改革者たちが神のみことばを説いた時、彼ら　は、国教会から分離する考えはなかった。しかし宗教界の指導者たちが、光に対して寛容な　態度を示そうとしなかったので、光を持った人たちは、真理にあこがれている他の階級の人　たちをさがさねばならなかった。今日宗教改革者たちに従う者であることを自称している人

々の中には、彼らの精神に生きている者が少ない。神のみ声をもとめて耳をかたむけ、真理がどんな形で示されようと、それを受け入れる用意のできている人は少ない。宗教改革者たちの足跡に従う者たちは、神のみことばのはっきりした教えを宣言するために、愛する教会から離れなければならない場合がたびたびある。また光を求めている人たちは、神に服従するために、この同じ教えによってやむなく父祖たちの教会から離れなければならないことが幾度もある。

ガリラヤの人たちは、エルサレムのラビたちから、無作法で、無教育だといって軽蔑されたが、救い主にとっては、はるかに有望な働き場であった。彼らは、ラビたちよりも熱心で、誠実で、頑迷さに支配されていなかった。彼らの心は、真理を受け入れるのにもっと広く開かれていた。イエスがガリラヤに行かれたのは、世間から離れたり、1 人でいたりするためではなかった。当時この地方は、人口の多い土地で、ユダヤよりもずっと多くの他国人がまざっていた。 イエスが教えたり病人をいやしたりしながらガリラヤを旅行されると、町や村から、群衆がみもとに集まってきた。ユダヤや隣接の地方からさえ多くの人々がやってきた。たびたびイエスは、人々から身をかくされねばならなかった。民の熱心が高まってきたので、ローマ当局に反乱の不安を感じさせないように用心する必要があった。この世界にとって、このような時代はこれまでかつてなかった。天の神が、人々のもとにくだられたのである。イスラエルの救いを長い間待って、飢えかわいていた魂は、いま恵み深い救い主の恩恵のふるまいにあずかった。

キリストの説教の主旨は、「時は満ちた、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信ぜよ」であった（マルコ　1：15）。このように、救い主ご自身によって与えられた福音の使命は、預言に基づいていた。イエスが「時は満ちた」と宣言されたその「時」は、天使ガブリエル　によってダニエルに知らされた期間のことであった。「あなたの民と、あなたの聖なる町に　ついては、70 週が定められています。これはとがを終らせ、罪に終りを告げ、不義をあがない、永遠の義をもたらし、幻と預言者を封じ、いと聖なる者に油を注ぐためです」と天使は　言った（ダニエル 9：24）。預言の 1 日は 1 年を表わしている（民数記 14：34、エゼキエル 4：6 参照）。70 週すなわち 490 日は、490 年を表わす。この期間の起算点が与えられて

いる。「エルサレムを建て直せという命令が出てから、メシヤなるひとりの君が来るまで、7 週と 62 週あることを知り、かつ悟りなさい」つまり 69 週、すなわち 483 年である（ダニエ ル 9：25）。エルサレム再建の命令は、アルタシャスタ・ロンギマナスの布告によって完結されたが、それは紀元前 457 年の秋に発効した（エズラ 6：14、7：1・英訳聖書注、9 参 照）。この時からかぞえて、483 年は、紀元 27 年に当る。預言によれば、この期間は、あぶ らそそがれたお方メシヤに及ぶことになっていた。紀元 27 年に、イエスは、バプテスマの時、聖霊のあぶらを受け、その後すぐに公生涯にお入りになった。その時、「時は満ちた」との　メッセーシが宣伝されたのであった。

それから天使は、「彼は 1 週の間（7 年間）多くの者と、堅く契約を結ぶでしょう」と言った（ダニエル 9：27）。救い主が公生涯にお入りになってから 7 年の間、福音は、特にユダヤ人に伝えられるのであった。すなわち 3 年半はキリストご自身によって、その後は使徒たちによって、福音が伝えられるのであった。「彼はその週の半ばに、犠牲と供え物とを廃するでしょう」（ダニェル 9：27）。紀元 31 年の春、まことのいけにえであられるキリストは、カルバリーでささげられた。その時神殿の幕が真っ二つに裂けて、犠牲制度の神聖さと意義とが失われたことを示した。地上のいけにえと供え物とが廃される時がきたのであった。

1 週—7 年—は紀元 34 年に終った。その時、ユダヤ人は、ステパノを石で打ち殺したことによって福音の拒否を決定的なものにした。迫害されたために国外に離散した弟子たちは、「御言を宣べ伝えながら、めぐり歩いた」（使徒行伝 8：4）。それからまもなく、迫害者サウロが改心して、異邦人への使徒パウロとなった。 キリストの来臨、キリストが聖霊によってあぶらをそそがれること、キリストの死、異邦人に福音が伝えられることなどについて、その時期がはっきり示されていた。こうした預言をさとり、それがイエスの使命の中に成就されているのを認めることは、ユダヤ民族の特権であった。キリストは弟子たちに、預言の研究が重要であることを強調された。イエスは、彼らの時代についてダニエルに与えられた預言にふれ、「読者よ、悟れ」と言われた（マタイ 24：15）。復活後キリストは、「聖書全体にわたり、ご自身についてしるしてある事どもを」弟子たちに説明された（ルカ 24：

1η）。救い主は、すべての預言者たちを通してお語りになっていた。「彼ら……のうちにいますキリストの霊が、キリストの苦難とそれに続く栄光とを、あらかじめあかしした」のであった（Ｉペテロ 1：11）。

ダニエルのところへ神からのみことばをもってきたのは、神のみ子に次ぐ位にある天使ガブリエルであった。愛するヨハネに将来のことを示すために、キリストからつかわされたのも、「彼の天使」ガブリエルであった。そしてこの預言のことばを朗読し、聞き、そこに書かれていることを守る者に、祝福が宣告されている（黙示録 1：3 参照）。 「まことに主なる神はそのしもべである預言者にその隠れた事を示さないでは、何事をもなされない」「隠れた事はわれわれの神、主に属する」が、「表わされたことは長くわれわれとわれわれの子孫に属」するのである（アモス 3：7、申命記 29：29）。神はこれらのことをわれわれにお与えになっており、神の祝福は、預言の書を祈りのうちに、敬虔な思いで研究する者に伴うのである。

キリスト初臨の使命が、キリストの恩恵の王国を宣言したように、キリスト再臨の使命は、キリストの栄光の王国を宣言している。そして第二の使命は、第一の使命と同じに、預言に基づいている。末の世についてダニエルに言われた天使のことばは、終わりの時に理解されるのであった。その時になると、「多くの者は、あちこちと探り調べ、そして知識が増すでしょう」「悪い者は悪い事をおこない、ひとりも悟ることはないが、賢い者は悟るでしょう」と言われている（ダニエル 12：4、10）。救い主は、自ら来臨のしるしをお与えになって、こう言っておられる。「このようにあなたがたも、これらの事が起るのを見たなら、 神の国が近いのだとさとりなさい」「あなたがたが放縦や、泥酔や、世の煩いのために心が 鈍っているうちに、思いがけないとき、その日がわなのようにあなたがたを捕らえることが ないように、よく注意していなさい」「これらの起ろうとしているすべての事からのがれて、人の子の前に立つことができるように、絶えず目をさまして祈っていなさい」（ルカ 21：31、34、36）。

われわれは、これらの聖句に予告されている時期に達した。終わりの時は来、預言者たちのまぼろしは解明され、彼らの厳粛な警告は、主が栄光のうちにこられるのが迫っている

ことを、われわれにさし示している。 ユダヤ人は、神のみことばの解釈とその適用とを誤り、彼らはおとずれの時がわからなかった。キリストと使徒たちとによる伝道の幾年間、――選民にとって恩恵のとうとい最後の幾年間を――彼らは、主の 使者たちを殺す計画のうちにすごした。彼らは、この世の野望に熱中していたので、彼らに霊的王国が提供されてもむだだ　った。同じように今日も、人々の思いは、この世の王国のことに奪われ、彼らは急速に成就　しつつある預言と、すみやかにやってくる神の王国のしるしとについて何の注意も払ってい　ない。「しかし兄弟たちよ。あなたがたは暗やみの中にいないのだから、その日が、盗人のようにあなたがたを不意に襲うことはないであろう。あなたがたはみな光の子であり、昼の　子なのである。わたしたちは、夜の者でもやみの者でもない」（Ｉテサロニケ　5：4、5)： 主の再臨の時日を知ることはできないが、その日が近いことはわかる。「だから、ほかの人　々のように眠っていないで、目をさまして慎んでいよう」（Ｉテサロニケ 5：6)。

第 24 章「この人は大工の子ではないか」

ガリラヤでのキリストの公生涯の明るい日々に、ひとすじの影がさした。ナザレの人々が、キリストをこばんだのである。「この人は大工の子ではないか」と彼らは言った（マタイ　13：55）。 イエスは、子供の時にも青年時代にも、ご自分の兄弟たちといっしょに、ナザレの会堂で礼拝された。公生涯が始まってから、イエスは、ナザレの人々から離れておられたが、彼らは、イエスの身に起こった出来事について知らなかったわけではなかった。イエスがふたたび彼らの中に姿を現された時、彼らの興味と期待とは最高潮に達した。そこにはイエスが幼児の時から知っておられる親しい姿や顔がみられた。そこにはイエスの母や兄弟たちや姉妹たちがいた。イエスが安息日に会堂にはいって行かれて、礼拝者たちの中に座を占められると、すべての人々の目が、彼に向けられた。

その日のきまった礼拝に、長老は、預言者の書を読み、栄光ある統治をもたらし、一切の圧制をとり除いて下さるきたるべきお方を依然として待望するようにと、民にすすめた。長老は、メシヤの来臨が近いという証拠をくりかえして述べ、聴衆を励まそうとつとめた。彼は、キリスト来臨の栄光を説き、キリストがイスラエルを救うために軍の首長としておいでになるという思想を強調した。ラビが会堂に出席している時には、そのラビが説教をすることになっており、またイスラエルの人ならだれでも、預言者の書を朗読してよかった。この安息日に、イエスは礼拝の役割をたのまれた。彼は、「聖書を朗読しようとして立たれた。すると預言者イザヤの書が手渡された」（ルカ　4：16、17）。イエスの読まれた聖句は、メシヤについて言われたことばとして知られているものであった。　「『主の御霊がわたしに宿っている。 貧しい人々に福音を宣べ伝えさせるために、 わたしを聖別してくださったからである。

主はわたしをつかわして、 囚人が解放され、盲人の目が開かれることを告げ 彼らの誇りは傷つけられ、不安が生じた。イエスのみことばは、イスラエル人のためのイエスの働きが、彼らの望んでいたものとはまったく異なったものであることを示した。彼らの行為はあまりに

もきびしく調べられるかも知れなかった。彼らは、外面的な儀式を厳格に守っていたにもかかわらず、はっきりした鋭い目によって吟味されることをしりごみした。

このイエスは何者だと、彼らはたずねた。メシヤの栄光をご自分のものとして主張されたこのお方は、大工の息子で、父親のヨセフといっしょに、大工仕事をしておられた。人々は、イエスが骨折って丘をのぼりくだられたのを見、イエスの兄弟姉妹たちと知り合いであり、イエスの生活と労働とを知っていた。彼らは、イエスが子供から青年へ、青年からおとなへと成長されるのを見てきた。イエスの生活にけがれはなかったが、彼らはイエスが約束のお方であることを信じようとしなかった。

新しい王国についてのイエスの教えと、長老からきいた話とには何という相違があることだろう。イエスは、彼らをローマ人から救い出すことについてはひとことも言われなかった。彼らは、イエスの奇跡について聞き、その力が彼らの利益のために用いられるように望んでいたが、そのような目的に用いられる気配はみられなかった。彼らは、疑いに対してとびらを開いたので、彼らの心をさしあたってやわらげることはますます困難になった。サタンは、盲人の目がその日に開かれたり、とりこになっている魂が自由になったりするようなことはさせないと決心していた。彼は非常な努力をもって、人々を不信の中につないでおくために働いた。彼らは、自分たちに話しかけられたのが救い主であるという確信に動かされていたのに、すでに与えられたしるしを重視しようとしなかった。

しかしイエスは、いま彼らの心の奥底の秘密をばくろすることによって、ご自身の神性の証拠を彼らに示された。「そこで彼らに言われた、『あなたがたは、きっと「医者よ、自分自身をいやせ」ということわざを引いて、カペナウムで行われたと聞いていた事を、あなたの郷里のこの地でもしてくれ、と言うであろう』。それから言われた、『よく言っておく。預言者は、自分の郷里では歓迎されないものである。よく聞いておきなさい。

エリヤの時代に、3 年 6 か月にわたって天が閉じ、イスラエル全土に大ききんがあった際、そこには多くのやもめがいたのに、エリヤはそのうちのだれにもつかわされないで、ただシドンのサレプタにいるひとりのやもめにだけつかわされた。また預言者エリシャの時代

に、イスラエルには多くのハンセン病人がいたのに、そのうちのひとりもきよめられないで、ただシリヤのナアマンだけがきよめられた』」（ルカ 4：23～27）。 預言者たちの生涯の出来事をこのようにのべることによって、イエスは、聴衆の疑問に応じられた。神が特別な働　きのためにお選びになったしもべたちは、心のかたくなな、不信な民のために働くことをゆ　るされなかった。しかし感ずる心と信ずる信仰とを持った者たちは、預言者たちを通しての　神の力の証拠によって特別に恵まれた。エリヤの時代に、イスラエルは神から離れた。彼ら　は、罪から離れず主の使者たちを通して与えられるみたまの警告をこばんだ。こうして彼ら　は、神の祝福が与えられる通路を自らたちきった。主は、イスラエルの家々をみすごして、　選民 に属していない 1 人の婦人のいる異教の地をご自分のしもべの避難所とされた。この女は、受けた光に従い、神がご自分の預言者を通して送られたもっと大きな光に心を開いてい　たために恵まれた。　エリシャの時代に、イスラエルのハンセン病人たちがみすごされたのも同じ理由からであった。しかし異教国の貴族ナアマンは、正義の信念に忠実であって、助け　が非常に必要であることを感じていた。彼は、神の恩恵の賜物を受ける状態にあった。彼は、その病からきよめられたばかりでなく、真の神を知る特権に恵まれた。

神の前におけるわれわれの立場は、われわれが受けた光の量によってきまるのではなくて、われわれが持っているものをどう用いるかによって決まるのである。だからたとえ異教徒であっても、認めることができるかぎり正しいことをえらぶ時、彼らは、大きな光を与えられて、神に仕えると公言しながらその光を軽視し、その日常生活が告白と矛盾しているような人たちよりも、好ましい状態にあるのである。 会堂の聴衆に対するイエスのみことばは、おのれを義とする彼らの思いをうちくだき、彼らが神から離れ、神の民としての資格を失っているという苦々しい事実を、彼らの心にきざみつけた。彼らの真の状態が目の前に示された時、すべてのことばが刀のように切れた。彼らは、イエスが最初彼らのうちに起こされた信仰を、こんどはあざけった。彼らは、貧乏といやしい身分の出であるお方を普通の人間以上のお方として認めようとしなかった。

彼らの不信は、悪意をはらんだ。サタンが彼らを支配した。彼らは怒って、救い主に反対の声をあげた。いやし、回復することを使命としておられるお方から、彼らは離れてしま

った。そしていま彼らは、滅ぼす者であるサタンの特性をあらわした。 イエスが、異邦人に祝福が与えられることについて言われると、聴衆の激しい国民的な誇りが呼びさまされ、イエスのみことばは、騒然たる声にかき消された。この人々は、律法を守っていることを誇っていた。しかしいま彼らの偏見が傷つけられると、彼らは、いまにも殺人を犯そうとした。集会は中止され、人々は、イエスに手をかけて会堂から突き出し、町の外へつれ出した。みな何とかしてイエスを殺そうとしているようにみえた。彼らはイエスをまっさかさまに突き落すつもりで、絶壁のいただきに追いたてた。叫び声とのろいの声が大気を満たした。イエスに石を投げつけている者もあった。そのとき突然イエスの姿が、彼らの中から消えた。会堂の中でイエスのそばにいた天の使者たちは、この狂気した群衆のまん中にあっても、イエスとともにいた。彼らはイエスを敵からおおいかくし、安全な場所へ案内した。

同じように天使たちは、ロトを保護して、ソドムのまん中から無事につれだした。また、同じように天使たちは、山の小さな町で、エリシャを守った。まわりの山々がシリヤ王の軍　馬と戦車と兵士の大軍でいっぱいになった時、エリシャは、近くの山々の斜面が神の軍 勢、――主のしもべをとりまいている火の軍馬と戦車でおおわれているのを見た。 このように、どの時代にも、天使たちは、キリストに忠実に従う人たちの近くにいた。勝利したいと　望むすべての人に対して、おびただしい悪の同盟軍が勢ぞろいするが、キリストは、目に見　えないもの、すなわち神を愛するすべての人を救うためにそのまわりに天の軍勢が陣を張っ　ているのを見させたいとお思いになる。天使たちの守りによって、われわれがどんなに目に　見える危険や目に見えない危険から守られたかということは、永遠の光のうちに神の摂理が　明らかにされる時まで、決してわからない。その時になってわれわれは、天の全家族が地上　の家族に関心をもっていたこと、また神のみ座からの使者たちが、日々われわれの歩みにつ　きそっていたことを知るのである。

イエスが会堂で預言者の書から読まれた時、彼は、メシヤの働きについて描写されている最後のことばをお読みにならなかった。イエスは、「主の恵みの年……を告げさせ」と読まれて、「われわれの神の報復の日」ということばを省略された（イザヤ　61：2）。この預言のあとの部分は、初めの部分と同じに、事実なのである。イエスは沈黙することによって、

この事 実を否定されたのではなかった。この最後のことばは、聴衆がよろこんで強調し、その成就を望んでいることばだった。彼らは、異教徒に刑罰を宣言したが、彼ら自身の不義がほかの人たちの不義よりももっと大きいことを認めていなかった。彼らは、異教徒に憐れみをかけることをこばみがちであったが、その彼ら自身が最も深い憐れみを必要としていた。イエスが会堂で彼らの中にお立ちになったその日は、彼らが天の神の呼びかけを受け入れる機会だった。「神はいつくしみを喜ばれるので、」彼らが罪のために招きつつあった破滅から、彼らをよろこんでお救いになったであろう（ミカ 7：18）。

もう 1 度悔い改めを促さないうちは、イエスは、彼らをあきらめることがおできにならなかった。ガリラヤでの公生涯の終わりごろ、イエスは、子供時代のふるさとをもう 1 度おたずねになった。ガリラヤで拒否されて以来、イエスの説教と奇跡についての評判は、国中にゆきわたっていた。 イエスが人間の力以上のものを持っておられることを、いまはだれも、否定することができなかった。ナザレの人たちは、イエスがよい働きをしながら、また悪魔に押さえつけられている人々をことごとくいやしながら、巡回されたことを知っていた。彼らの周囲には、村中どこの家にも病人のうめき声のない村々があった。イエスがそれらの村々を通りすぎて、病気を全部なおしてくださったからである。イエスの生活の一つ一つの行 為にあらわされた憐れみは、イエスが神からあぶらをそそがれたお方であることを証明し た。

ナザレ人は、もう 1 度イエスのみことばを聞いて、神のみたまに動かされた。しかしいまになってもなお彼らは、自分たちの間で育たれたこの人が、自分たちとはちがったお方であり、自分たちよりもすぐれたお方であることを、認めようとしなかった。イエスが、ご自分は約束のメシヤであると主張しながら、実際にはイスラエルの立場を拒否されたことについて、すなわちイスラエルが異教の男女よりも神の恩恵を受ける価値がないことを示されたことについて、にがにがしい記憶がまだ彼らの心を苦しめていた。だから彼らは、「この人は、この知恵とこれらの力あるわざとを、どこで習ってきたのか」とたずねても、イエスを、神からつかわされたキリストとして受け入れようとはしなかった（マタイ 13：54）。彼らが不信仰だったために、救い主は、彼らの中で多くの奇跡を行うことがおできにならなかった。

イエスの祝福に心を開いていたのは、少数の人々にすぎなかったので、イエスはしぶしぶ立ち去り、ふたたびもどられなかった。

不信の念が 1 度いだかれると、それはいつまでもナザレの人々を支配した。それはまたサンヒドリンと国民とを支配した。祭司たちと民にとって、聖霊の力のあらわれに対する最初の拒否は、破滅のはじまりであった。自分たちの最初の抵抗が正しかったことを証明するために、彼らはその後もずっとキリストのみことばのあら探しをつづけた。彼らがみたまをこばんだことは、カルバリーの十字架からエルサレムの滅亡となり、さらに天の風に吹かれるままに、国民の離散となってその頂点に達した。 ああ、キリストはどんなにかイスラエルに真理のとうとい宝を開いてみせようと熱望されたことだろう。しかし彼らの霊的盲目はひどかったので、キリストの王国についての真理を彼らに示すことは、不可能だった。天の神の真理が彼らに受け入れられるのを待っているのに、彼らは、自分たちの教義と無益な儀式とを固守した。いのちのパンが彼らの手の届くところにあるのに、彼らは、もみがらやいなごまめに金銭を費やした。なぜ彼らは、神のみことばを開いて、自分たちがまちがっていないかどうかを知るために熱心に調べなかったのであろうか。旧約聖書には、キリストの公生涯について、こまかい点まではっきり書かれており、イエスは何度も何度も預言者たちの書から引用して、「この聖句は、あなたがたが耳にしたこの日に成就した」と宣告された（ルカ 4：21）。

もし彼らが正直に聖書を調べ、自分たちの理論を神のみことばに照していたら、イエスは、彼らのかたくなな心にお泣きになる必要はなかったのである。「見よ、おまえたちの家は見捨てられてしまう」と宣言され る必要はなかったのである（ルカ 13：35）。彼らは、イエスがメシヤであられる証拠を知り、また彼らの誇りとしていた都、エルサレムの滅亡というわざわいをまぬかれることができたのである。しかしユダヤ人の心は、道理をわきまえない頑迷さのために小さくなっていた。キリストの教訓は、彼らの品性の欠点をばくろし、悔い改めを要求した。もし彼らがイエスの教えを受け入れるなら、彼らの行為は変化し、彼らの宿望は放棄されなければならない。神からの栄誉を受けるためには、人間の栄誉を犠牲

にしなければならない。もしこの新しいラビのことばに従うなら、当時の偉大な思想家や教師たちの意見と反対にならねばならない。

真理は、キリストの時代に人気がなかった。それはわれわれの時代にも人気がない。サタンが、人を高慢にするような作り話をきかせて、真理をいやがる気持を初めて人間のうちにうえつけて以来、真理はいつも不人気であった。われわれは、今日、神のみことばに根拠をもっていない学説や教理に直面しないであろうか。ユダヤ人がその言い伝えを固守したように、人々は、そうした学説や教理を根強く守っているのである。 ユダヤ人の指導者たちは、霊的な誇りに満たされていた。自分があがめられたいという彼らの願望は、聖所の奉仕にさえあらわれた。彼らは会堂の中の最高の座席を好んだ。彼らは市場であいさつされることを喜び、人々の口から尊称をたてまつられるのを聞いて満足した。真の敬神の念がうすれるにつれて、彼らはますます言い伝えと儀式とを守ることに熱心になった。

彼らの理解力は、利己的な偏見のために暗くなっていたので、彼らは、罪をさとらせるキリストのみことばの力とキリストのけんそんな生活とを調和させることができなかった。真の偉大さは、外面的な見せびらかしを必要としないということを、彼らは理解しなかった。この人の貧しさは、ご自分がメシヤであるという主張とまったく矛盾しているようにみえた。もしこの人が自ら主張される通りのお方だったら、なぜあんなに気取らないのだろうかと、彼らは疑った。もし彼が武力がないことに満足しているのだったら、自分たちの国はどうなるのだろう。長い間期待されていた権力と栄光とによって、諸国民をユダヤ人の都の臣民にすることがどうしてできようか。祭司たちは、イスラエルが全地を統治するようになると教えたではないか。偉大な宗教家たちがまちがうということがあり得るだろうか。

しかしユダヤ人がイエスを拒否したのは、彼の生活に外面的な栄光がみられなかったからだけではなかった。イエスは純潔そのものであり、彼らは不潔であった。イエスは、非のうちようのない正直の模範として人々の中にお住みになった。欠点のないイエスの生活が、彼らの心を光に照した。イエスの正直さによって彼らの不正直がばくろされた。そのために、彼らのうわべだけのむなしい信心が、明るみに出され、不義の憎むべき性質がばくろされた。このような光は歓迎されなかった。 もしキリストが、人々の注意をパリサイ人に向け、彼ら

の学問と信心とを称賛されたら、彼らはイエスをよろこんで歓迎したのである。しかしキリストが、天の王国は全人類に対する恩恵の賜物だと語られた時、彼は、ユダヤ人の容認できない宗教の一面を示しておられた。彼ら自身の模範と教えとは決して神への奉仕を好ましいものとするようなものではなかった。彼らが憎みいやがっている者たちにイエスの注意が向けられているのを見て、彼らの高慢な心は激しい怒りに燃えあがった。「ユダ族のしし」のもとに、イスラエルは全世界の国々に高く抜きん出た地位を占めるのだと彼らは自慢していたにもかかわらずキリストから自分たちの罪を譴責されたり、純潔なキリストの前にいることだけで心のとがめを感じたりするのをがまんするよりは、むしろそうした野心的な望みが裏切られるのをしのぶ方がよいのだった（黙示録 5：5）。

第 25 章海辺での召し

ガリラヤの海に夜が明けようとしていた。弟子たちは、収穫のなかった一晩の骨折り仕事に疲れて、まだ湖の上の漁船にいた。イエスは水ぎわで静かな時間を過ごすためにきておられた。イエスは毎日ご自分のあとについてくる群衆からのがれて、朝早くしばらく休む時間をとりたいと望まれた。しかしまもなく人々が彼のまわりに集まりはじめた。その数はたちまちふえて、イエスは四方から押された。そうしているうちに、弟子たちは陸へあがってきていた。群衆の殺到からのがれるために、イエスはペテロの舟にとび乗られて、岸からすこしひっぱり出すようにと彼に命じられた。これでイエスのお顔はもっとよく見え、みんなに声がきこえるので、イエスは舟から波打ちぎわの群衆にお教えになった。

天使たちは、彼らの光栄ある司令官イエスが漁師の舟にすわられて、波のまにまにあちこちゆられながら、水ぎわまで押しよせてきている群衆に救いのよいおとずれを述べ伝えておられるこの光景をじっと見ていた。天であがめられているお方が、み国の重要な事がらを戸外で一般の民衆に告げ知らせておられるのであった。しかしイエスの働きにとってこれ以上ふさわしい場面はなかった。湖、山々、ひろがっている畑、地にふりそそぐ日光など、すべてはイエスの教訓を例示し、それを彼らの心に印象づけるための材料となった。だからキリストのどんな教訓もむだにはならなかった。イエスの口から出る一言一言が、ある人々にとっては永遠のいのちのことばとなった。

刻一刻と岸辺の群衆は数を増した。つえにすがった老人たち、丘からやってきたがんじょうな百姓たち、湖の骨折り仕事からやってきた漁師たち、商人たちやラビたち、金持ちで教育のある人たち、年よりや若い人たちなどが、病気で苦しんでいる者たちをつれて、この天来の教師のみことばをきくためにおしよせた。預言者たちは、このような光景を予見してこう書いた。 「ゼブルンの地、ナフタリの地、 海に沿う地方、ヨルダンの向こうの地、 異邦人のガリラヤ、 暗黒の中に住んでいる民は大いなる光を見、 死の地、死の陰に住んでいる人々に、光がのぼった」 (マタイ 4：15、16)

預言者ダニエルが神の天使の前に死んだようになって倒れたのは、同じように神の聖潔の前に出た時であった。彼は、「わが顔の輝きは恐ろしく変って、全く力がなくなった」と言った（ダニエル 10：8）。同じようにイザヤも主の栄光を見た時、「わざわいなるかな、わたしは滅びるばかりだ。わたしは汚れたくちびるの者で、汚れたくちびるの民の中に住む者であるのに、わたしの目が万軍の主なる王を見たのだから」と叫んだ（イザヤ 6：5）。欠点と罪をもっている人性が、完全な神性と対照された時、彼は自分がまったく足りない、けがれた者であることを感じた。神の偉大さと尊厳を見ることをゆるされた者はみなこのようであった。

ペテロは「主よ、わたしから離れてください。わたしは罪深い者です」と叫んだが、それでもイエスから離れることができない気持で、その足下にすがりついた。救い主は「恐れることはない、今からあなたは人間をとる漁師になるのだ」とお答えになった（ルカ 5： 10）。イザヤに神からのメッセージが委ねられたのは、彼が神の聖潔と自分自身の無価値とを認めてからであった。ペテロがキリストの働きに召しを受けたのは、彼が自我を放棄し、神の力によりたのむようになってからであった。

この時まで、弟子たちはだれも、イエスの共労者として完全に一致していなかった。彼らはキリストの奇跡の多くを見、キリストの教えをきいていたが、これまでの職業をまったく捨てきっていなかった。バプテスマのヨハネの投獄は全ての弟子たちにとって苦い失望であった。もしこうしたことがヨハネの使命の結果であるならば、宗教界の全ての指導者たちが一つになってイエスに反対する時、彼らは主についてほとんど望みを持つことができないであろう。こういう事情だったので、彼らはしばらくの間魚とりの仕事にもどる方が安心だった。ところがいまイエスは、これまでの生活をすててイエスと利害を共にするようにと彼らを召された。ペテロはすでに召しを受け入れていた。岸辺にお着きになると、イエスはほかの 3 人に「わたしについてきなさい。あなたがたを、人間をとる漁師にしてあげよう」とお命じになった（マタイ 4：19）。すぐに彼らは全てをすててイエスに従った。

彼らに網と漁船をすてるように求める前に、イエスは、神が彼らの必要を満たしてくださるという保証をお与えになった。ペテロの舟を福音の働きのために用いたことは豊かに報

いられた。「彼を呼び求めるすべての人を豊かに恵んで下さる」主は、「与えよ。そうすれば、自分にも与えられるであろう。人々はおし入れ、ゆすり入れ、あふれ出るまでに量をよくして、あなたがたのふところに入れてくれるであろう」と言われた（ローマ 10：12、ルカ 6：38）。このはかりをもって、主は弟子たちの奉仕に報いられた。主の奉仕に払われたすべての犠牲は「神の恵みの絶大な富」にしたがってつぐなわれるのである（エペソ 2：7）。キリストから離れて湖ですごしたあの悲しい夜の 間中、弟子たちは不信仰に苦しめられ、収穫のない骨折り仕事に疲れた。しかしイエスがそばにおられる時に彼らの信仰は燃え、喜びと成功とが与えられた。われわれの場合も同じである。キリストを離れる時、われわれの働きには収穫がなく、不信と不満におちいりがちである。しかしイエスがそばにおられ、イエスのさしずの下に働く時、われわれはイエスの力の証拠を見て喜ぶのである。魂を落胆させるのがサタンの働きであり、信仰と望みを起こさせるのがキリストの働きである。

この奇跡によって弟子たちに与えられたもっと深い教訓は、われわれにとってもまた一つの教訓である。すなわち、みことばによって海から魚を集めることがおできになったお方は、またご自分のしもべたちが「人間をとる漁師」となることができるように、人々の心を感動させ、これをご自分の愛のきずなでみもとにひきよせることがおできになるのである（マタイ 4：19）。 このガリラヤの漁師たちは、いやしい、無学な人たちであった。しかし世の光であられるキリストは、彼らをその選ばれた立場にふさわしい資格のある者となさることが十分おできになった。救い主は教育を軽んじられなかった。なぜなら神の愛に支配され、神の奉仕に献身する時、知的な教養は一つの祝福であるからだ。しかしイエスは当時の賢人たちをみすごされた。それは彼らが自信が強すぎて、悩んでいる人類に同情することができずナザレの人イエスの共労者となることができなかったからである。偏狭な彼らはキリストから教えられることを軽蔑した。主イエスは、主の恵みを伝えるのにさまたげるもののない水路となる人々の協力をお求めになる。神と共に働く者になりたいと思う者がだれでも学ばねばならない第一のことは、自分にたよらないという教訓である。その時彼らはキリストの品性を与えられる用意ができる。これはどんなに科学的な学校の教育によっても得られないものである。それは天来の教師イエスからのみ得られる知恵の実である。

イエスは無学な漁師たちをお選びになったが、それは彼らが当時の言い伝えやまちがった慣習によって教育されていなかったからである。彼らは生れつき才能を持った人たちで、謙遜で教えやすく、キリストがご自分の働きのために教育なさることのできる人たちであった。世の一般の人たちの中には、もしその能力が呼びさまされて活動するならば、世の中の最も尊敬されている人々と同等の立場まで高められるのに、そうした能力を持っていることに気がつかないで、日々の骨折り仕事を根気よくくりかえしている人々がたくさんいる。このような眠っている才能が目覚めるにはじょうずに接せられることが必要である。イエスがご自分の共労者とするために召されたのはこういう人たちであった。こうしてイエスは、彼らにご自分とまじわる特権をお与えになった。世のえらい人たちは決してこのような教師をもたなかった。弟子たちが救い主の訓練を受けた時、彼らはもはや無知でも無教養でもなかった。彼らは頭も品性もイエスのようになり、世の人々は彼らがイエスと共にいた者であることを知った。

教育の最高の働きは知識だけを与えることではなくて、それは心と心、魂と魂とがふれ合うことによって受けられる生きた力をさずけることである。命を生ずることができるのは命だけである。だから神の命に 3 年の間日々接触していた彼らの特権はどんなに大きかったことだろう。この神の命から命を与えるあらゆる衝動が流れ出て世の祝福となったのである。愛された弟子ヨハネはほかのすべての仲間たちにまさって、このすばらしい命の力に屈服し　た。彼はこう言っている。「このいのちが現れたので、この永遠のいのちをわたしたちは見　て、そのあかしをし、かつ、あなたがたに告げ知らせるのである」「わたしたちすべての者　は、その満ち満ちているものの中から受けて、めぐみにめぐみを加えられた」（Ｉヨハネ 1:
2、ヨハネ 1：16）。

主の使徒たちの中には、彼らにとって誇りとなるようなものは何もなかった。彼らの働きの成功はただ神のおかげであったことは明らかであった。この人たちの生涯、彼らの築いた品性、彼らを通して神が 達成された偉大なみわざは、すなおで従順なすべての者に神がどういうことをしてくださるかということについてのあかしである。 キリストを最も多く愛する者は最も多くよいことをする。自我を捨てて、聖霊が心に働かれる余地をつくり、神にま

ったく献身した生涯を送る者の有用さには限りがない。もし人々が、不平を言ったり、途中で弱ったりしないで、必要な訓練に耐えるなら、神は日々に、時々刻々に彼らを教えてくださる。神はご自分の恵みをあらわそうと熱望しておられる。もし神の民が障害をとり除くなら、神は人間という水路を通して救いの水の豊かな流れをそそがれる。もしいやしい身分の人たちを励まして彼らのできるよいことをさせるならば、またもし彼らの上にその熱意をおさえるような抑制の手がおかれないならば、いまキリストの働き人が 1 人しかいないところに 100 人の働き人がいるであろう。

もし人々が神に屈服するならば、神は彼らをそのままに受け入れて、ご自分の奉仕のために彼らを教育される。神のみたまが魂に受け入れられる時、その魂のあらゆる才能が目覚めさせられる。あますところなく神にささげられた心は、聖霊の導きのもとに、調和のとれた発達をとげ 1 神のご要求を理解しこれを果たすように力づけられる。動揺しがちな弱い性格は、力強い、しっかりした性格に変えられる。ふだんの献身によって、イエスと弟子との間に密接な関係が結ばれ、そのクリスチャンは心と品性がキリストのようになる。キリストとつながることによって、彼はもっとはっきりした、もっと広い見解を持つようになる。彼の判断力はますます鋭くなり、その意見は一層つりあいのとれたものとなる。キリストのために役立ちたいと熱望する者は、義の太陽キリストのいのちを与える力によって活気づけられ、神の栄えのために豊かな実を結ぶことができる。

科学や芸術において最高の教育を受けた人々が、世の人々から無学のレッテルをはられているようないやしい身分のクリスチャンからとうとい教訓を学んできた。しかしこれらの無名の弟子たちは、すべての学校の中の最高の学校で教育を受けたのであった。彼らは、「この人の語るように語った者は、これまでにありませんでした」といわれているキリストの足下にすわったのであった（ヨハネ 7：46）。

第 26 章　カペナウムで

イエスは、あちらこちらへ旅行されるあいまにカペナウムに住まわれたので、この町はイエスご自身の町として知られるようになった（マタイ 9：１参照）。この町はガリラヤの海の沿岸にあって、ゲネサレの美しい平野にまたがっているとまではいえないが、その境界の近くにあった。 ガリラヤ湖の深いくぼみは、その岸に沿った平野に南国のようなおだやかな気候をもたらした。キリストの時代には、ここにしゅろの木やオリーブの木が茂っていた。ここにはまた果樹園やぶどう園や緑の野や、はなやかに咲きほこる美しい花々がみられ、それらはすべてがけから吹き出してくる新鮮な水によってうるおされていた。湖の沿岸や、すこし離れて湖をとりまいている丘には、町や村が点々とあった。湖は漁をする舟でいっぱいだった。どこも多忙で活動的な生活がみられた。

カペナウムそのものは救い主の働きの中心地となるのに非常に適していた。この町は、ダマスコからエルサレム、エジプト、地中海へ通じる街道に沿っていたので、旅の往来のはげしいところであった。多くの国々からやってきた人たちはこの町を通り、あるいはあちらこちらへの旅の途中休息のために滞在した。ここでイエスはあらゆる国民とあらゆる階級の人々、貧しくていやしい人々にも、金持ちでえらい人々にもお会いになることができたので、その教訓はほかの国々や多くの家庭に伝えられるのであった。こうして預言の研究が刺激され、人々の注意が救い主に向けられ、イエスの使命が世の人々の前に示される のであった。

サンヒドリンがイエスに反対する決議をしたにもかかわらず民衆はイエスの使命の発展を熱心に待っていた。全天は関心をもって活動していた。天使たちは、人々の心に働きかけ、彼らを救い主にひきよせて、イエスの伝道に道を備えていた。　カペナウムでは、キリストが病気をなおしておやりになった貴族の息子が、キリストの力の証人であった。またこの宮廷　の役人とその家族は、彼らの信仰を喜んであかしした。師であるイエスが自分たちの中にお　られるということがわかると、街中がわきたった。群衆がイエスの前へ集まってきた。安息　日には、会堂が人でいっぱいになり、ついには大勢の人々が入りきれないでひき返さねばな　らなかった。

救い主の話をきいた人々はみな「その言葉に権威があったので、彼らはその教に驚いた。」「それは律法学者たちのようにではなく、権威ある者のように教えられたからである」（ルカ 4：32、マタイ 7：29）律法学者たちと長老たちの教えは、つめたくて形式的で、丸暗記した教えのようであった。彼らにとって神のみことばは生命力がなかった。彼ら自身の　考えと言い伝えとが神のみことばの教えと入れ代っていた。習慣的にくりかえされる儀式を　通して、彼らは律法を説明すると公言したが、しかし彼ら自身の心も聴衆の心も神からの霊　感に動かされていなかった。　イエスは、ユダヤ人の間でいろいろ意見の異なっている問題には関係されなかった。真理を示すことがイエスの働きであった。イエスのみことばは、父祖　たちと預言者たちの教えを豊かな光で照し、聖書人々にとって新しい啓示となった。聴衆は、これまでにかつてなかったほど神のみことばに深い意味をめた。

イエスは人々の困難をよく知っている者として、ら自身の立場に立って人々に応対された。彼は真理を最も率直で単純な方法で示すことによって、れを美しいものとされた。イエスのことばは純潔で洗練されていて、流れる川のように澄んでいた。イスのお声はラビたちの単調な調子にききなれた人ちにとって音楽のようだった。しかし、教えは単純であったが、イエスは権威を持つ者として語られた。この特徴のために、イエスの教えはほかのすべての人たちの教えと対照的だった。ラビたちは、聖書のみことばをある意味に、あるいはそれと正反対の意味にも解釈できるかのように、疑いとためらいとをもって語った。聞く者たちは毎日ますますわからなくなった。しかしイエスは聖書を疑問の余地のない権威のあるものとして教えられた。どんな問題であっても、イエスのみことばに反ばくする余地がないかのように、それは力強く語られた。

しかしイエスは、激しいというよりも熱心だった。イエスは達成すべきはっきりした目的を持っているお方として語られた。イエスは永遠の世界の事実を示しておられた。どのテーマにも神があらわされた。イエスは、人々が地上の事物に心を奪われている状態を打破しようとされた。彼はこの世の事物を、永遠の利害関係に従属するものとして、その正しい関係に置かれた。しかしイエスはこの世の事物の重要さを無視されなかった。イエスは、天と地がつながっているということ、また神の真理を知ることによって、人は日常生活の義務を

一層よく果たすことができるようになることをお教えになった。イエスは天をよく知っているお方として語り、神とご自分との関係を意識しておられたが、同時にまたご自分が人類家族の一人一人とつながっていることをみとめておられた。

イエスのめぐみのみことばは聴衆に向くようにいろいろ変えられた。彼は「疲れた者を言葉をもって助けることを知」っておられた（イザヤ　50：4）。それは人々を最もよくひきつける方法で真理の宝を彼らに伝えることができるように、イエスのくちびるに恵みがそそ　がれていたからであった。彼は、心に偏見をもっている人たちに接して、彼らの注意をとら　えるような実例によって彼らを驚かせる気転をもっておられた。想像力を通してイエスは心　にふれられた。イエスの例話は日常生活の事物からとられた。それは単純な例であったが、　驚くほど深い意味をもっていた。空の鳥、野のゆり、種、羊飼と羊――こうした事 物によってキリストは永遠の真理を例示された。聴衆は、その後いつでもそうした自然界の事物を見　るたびに、イエスのみことばを思い出した。キリストの例話はたえずその教訓をくりかえし　た。　キリストは決して人々にへつらいを言われなかった。彼らの空想と想像とを高慢にする ようなことを語ったり、彼らのじょうずな作り話をほめたりするようなことをされなかった。しかし偏見にとらわれないで深く物事を考える人たちは、イエスの教えを受け入れ、その教　えによって自分たちの知恵がためされることを知った。彼らはどんな単純なことばにも霊的　な真理があらわされているのに驚嘆した。最高の教育を受けた人たちも、イエスのみことば　に魅力を感じ、教育のない人たちもいつも益を受けた。イエスは読み書きのできない人たち　のためにメッセージをもっておられた。イエスはまた異教徒にさえ、彼らのためのメッセー　ジをもっておられることを理解させられた。

イエスのやさしい憐れみはいやしの力を伴って、疲れ悩んでいる心にそそがれた。怒った敵の狂乱の中にあってさえ、主は平和の雰囲気にかこまれておられた。イエスのお顔の美しさ、品性の美しさ、とりわけその顔つきと口調にあらわれている愛は、不信のために心のかたくなになっていないすべての人々をみもとへひきつけた。イエスの顔つきとことばの一つ一つからやさしい同情的な精神が輝き出ていなかったら、イエスはあのように多くの会衆をひきつけられなかったであろう。イエスのみもとにやってきた苦しんでいる人々は、イエ

スが忠実なやさしい友として自分たちと利害を一つにされていることを感じ、イエスの教えられる真理をもっと知りたいと望んだ。天は近くにあった。彼らは、イエスの愛の慰めがたえず自分たちの上にあるように、いつまでもイエスの前にいたいと望んだ。

イエスは聴衆の顔にあらわれる変化を非常に熱心に見守られた。興味と喜びをあらわしている顔はイエスに大きな満足を与えた。真理の矢が魂にささり、利己主義という壁をつらぬき、悔い改めとそしてついには感謝の思いをひき起こす時、救い主は喜ばれた。イエスの目が聴衆の群れを見渡して、その中に以前見えた顔を認められると、そのお顔はよろこびに輝いた。イエスは彼らのうちにご自分の王国の有望な民をごらんになった。真理がはっきりと語られて、それが何か大事な偶像にふれると、イエスは彼らの顔色が冷たく、きびしい顔つきに変るのを認められた。それはその光が歓迎されないことを物語っていた。人々が平和のメッセージを拒否するのをごらんになると、イエスの心はその奥底まで突き刺された。

イエスは、会堂で、ご自分が建設するためにおいでになった王国について、またサタンのとりこを解放されるご自分の使命について語られた。イエスは鋭い恐怖の叫び声にさまたげられた。1 人の狂人が人々の中からとび出してきて、「ああ、ナザレのイエスよ、あなたはわたしたちとなんの係わりがあるので洗わたしたちを滅ぼしにこられたのですか。あなたがどなたであるか、わかっています。神の聖者です」と大声で叫んだ（ルカ 4：34）。 たちまち混乱と恐れが生じた。人々の注意はイエスからそれて、みことばをきかなかった。サタンが自分のとりこを会堂に入れた目的はここにあった。しかしイエスは悪鬼をいましめて、「黙れ、この人から出ていけ」と言われた。「すると悪霊は彼を人なかに投げ倒し、傷は負わせずに、その人から出て行った（ルカ 4：35）。 このあわれな苦しんでいる者は、サタンのために心が暗くなっていたが、救い主の前に出たときに、ひとすじの光がその暗黒をつらぬいた。彼はサタンの支配から自由になりたいという願いにめざめた。だが悪鬼はキリストの力に抵抗した。その男がイエスに助けを求めて訴えようとすると、悪霊が彼の口にことばを入れ、彼は恐怖に苦しみながら叫んだ。悪鬼につかれた男は、自分を自由にしてくださることのできるお方の前に自分がいることをある程度理解した。しかし彼がその偉大なみ手の

とどくところに行こうとすると、ほかの者の意志が彼をひきとめ、ほかの者のことばが彼の口から語られた。サタンの力と、自由を求める彼自身の願いとの間の戦いは激しかった。

試みの荒野でサタンを征服されたお方はふたたび敵と顔をあわされた。悪鬼は自分のとりこに対する支配力を保つために全力をつくした。ここで退いたら、イエスを勝利させることになるだろう。苦しめられているその男は、自分の人間性を破壊した敵との戦いにいのちを失わねばならないかのようにみえた。しかし救い主は権威をもって語り、とりこを解放された。さっきまで悪鬼にとりつかれていた男は驚きあやしむ人々の前に落ちついた自由な人間としてうれしそうに立った。悪鬼さえも救い主の神の力を証拠だてたのであった。 男は自分が救われたことについて神を賛美した。最近まで狂気の炎に燃えていた目は、いま知性に輝き、感謝の涙にあふれた。人々は驚いて口のきけない者のようにだまっていた。口がきけるようになったとたんに、彼らはお互いに叫び合った。「これは、いったい何事か。権威ある新しい教だ。けがれた霊にさえ命じられると、彼らは従うのだ」（マルコ 1：27）。

この男が友人たちの前に恐ろしいみせものになり、自分で自分をもてあましていた苦悩のかくれた原因は、彼自身の生活の中にあった。彼は罪の快楽に魅惑され、人生をすばらしい謝肉祭にしようと考えた。彼は自分が世間の人から恐れられる者となり、家族の恥さらしになろうなどとは夢にも思わなかった。彼は罪のない道楽に時を過ごすことができると思った。しかし 1 度くだり坂になると、彼の足は非常な勢いでくだって行った。不節制と道楽は、彼の性質のとうとい特性を堕落させ、サタンが完全に彼を支配した。

後悔した時はすでに遅かった。失われた人間性をとり戻すためには富も快楽も犠牲にしたいと思った時には、彼は悪魔の手ににぎられていてどうにもならなかった。彼は敵の側に身をおいたので、サタンが彼の才能を全部手に入れた。誘惑者は多くの魅力的なものをみせて彼を誘惑したが、いったんこのあわれな男が自分の手中におちいると、悪魔は容赦なく残酷になり、恐ろしい怒りをもってのぞんだ。悪に負ける者はみなそうなるのである。彼らの若いころの魅力的な快楽の結果は、絶望の暗黒か破滅した魂の狂気である。 荒野でキリストを試み、カペナウムの狂人を支配した同じ悪霊が不信のユダヤ人を支配した。しかし悪霊は、ユダヤ人の前では敬虔さをよそおい、救い主をこばむ動機について彼らをあざむこうとつと

めた。彼らの状態はあの狂人の状態よりも絶望的だった。なぜなら彼らはキリストの必要を感じないために、サタンの力に固くとらえられていたからであった。 キリストが人々の中で個人的に伝道された期間は、暗黒の王国の勢力が最も活動していた時であった。各時代にわたってサタンと悪天使たちは、人間の肉体と精神とを支配して罪と苦難とを生じさせようと努力してきた。そして彼はそうしたすべての悲惨な状態を神のせいにした。イエスは神のご品性を人々にお示しになっていた。彼はサタンの力をうち破り、そのとりこを解放しておられた。天からの新しいいのちと愛と力とが人々の心に働きかけていたので、悪の君は自分の王国の主権を守るために戦いに立ちあがった。サタンは全軍を召集してあらゆるところでキリストと争った。

義と罪との間における最後の大争闘もまた同じである。天から新しいいのちと光と力とがキリストの弟子たちの上にくだる一方で、一つの新しいいのちが地から生じてサタンの働きを活気づける。地上のあらゆる要素は緊張につつまれる。何世紀もの争闘を通して身につけた狡猾（こうかつ）さをもって、悪の君は変装して働く。彼は光の天使の装いをしてあらわれ、多くの人々が「惑わす霊と悪霊の教とに気をとられ」る（Ｉテモテ４：１）。

キリストの時代にはイスラエルの指導者や教師たちはサタンの働きに抵抗するのに無力だった。彼らは悪霊をおさえることのできる唯一の方法をおろそかにしていた。キリストが悪魔を征服されたのは神のみことばによってであった。イスラエルの指導者たちは、神のみことばの解説者であると自称していたが、彼らは自分たちの言い伝えを支持し、人間のつくった慣習を強制するためだけにみことばを研究していた。 彼らは自分たちの解釈によって、神が決して意図されなかった意味をみことばに与えた。彼らの神秘的な解釈は、神が明らか に示しておられることを不明瞭（ふめいりょう）にした。彼らはつまらない専門用語につい て論争し、最も本質的な真理を事実上否定した。こうして不信仰の種が広くまかれた。神の みことばはその力を奪われ、悪霊は思いのままに働いた。歴史はくりかえされている。聖書 を目の前に開いて、その教えをとうとぶと告白しながら、今日多くの宗教家たちは、聖書を 神のみことばとして信じる信仰を破壊している。彼らはみことばを批評するのに忙しく、み ことばにはっきり言われていることよりも自分自身の意見を第一にする。彼らの手によって、

神のみことばは人を生れかわらせる力を失う。不信仰がはびこり、不義が盛んな理由はここにある。

サタンは、聖書に対する信仰をひそかに破壊してしまうと、人々を他の光と力のみなもとにみちびく。こうして彼は巧妙に入りこむ。聖書の明らかな教えと、罪についてさとらせてくださる神の聖霊の力から離れる者は、悪鬼の支配を招いているのである。聖書についての批評と空論とは、古代の異教が近代化されたものである降神術と接神論とが、われらの主イエス・キリストの教会と自称している教会の中にさえ足場を獲得する道を開いた。 福音の教えと並んで、偽りの霊の仲介にすぎない力が働いている。多くの人々はただの好奇心からこうしたものに手を出すが、人間の力以上のものが働いている証拠を見て、だんだんおびきよせられ、ついには自分の意志よりも力の強い意志に支配されるようになる。彼はその神秘的な力からのがれることができない。

魂の防備はうち破られる。彼には罪に対する防壁がない。神のみことばとみたまの抑制がひとたび拒否されると、人はどこまで堕落の深みに落ちるかわからない。秘密な罪や支配的な情欲のために、彼はカペナウムの悪鬼につかれた男と同じように無力なとりことなる。それでもなお彼の状態には望みがないのではない。 われわれが悪魔にうち勝つことができる方法は、キリストが勝たれた方法、すなわちみことばの力によってである。神はわれわれの同意なしには心を支配なさらない。しかし神のみこころを知り、これを行おうと望むとき、次の神の約束はわれらのものである。「また真理を知るであろう。そして真理は、あなたがたに自由を得させるであろう」。「神のみこころを行おうと思う者であれば、だれでも、わたしの語っているこの教が神からのものか、それとも、わたし自身から出たものか、わかるであろう」（ヨハネ 8：32、7：17）。これらの約束を信ずることによって、誰でもみな誤謬のわなと罪の支配から救われるのである。

人はみなどんな力によって支配されようと自由である。キリストのうちに救いをみいだすことができないほどどん底まで堕落した者はなく、またそれほど悪い人間はいない。悪鬼につかれたあの男は、祈りの代りに、サタンのことばしかしゃべることができなかった。それでも彼の心の中にある無言の訴えはきかれた。困っている魂の叫びは、たとえそれがこと

ばにならなくても、決してみすごされることはない。天の神との契約関係にはいることに同意する者は、サタンの力や自分自身の弱い性質のままにうちすてられることはない。彼らは救い主から、「むしろわが力にたよりて我とやわらぎを結べ、われと平和をむすぶべし」と招かれている（イザヤ　27：5・文語訳）。暗黒の悪霊たちはかつて自分たちの支配下にあった魂を求めて戦う。しかし神の天使たちがすぐれた力をもってその魂のために戦うのである。主はこう言われる、「勇士が奪った獲物をどうして取り返すことができようか。暴君がかすめた捕虜をどうして救い出すことができようか。しかし主はこう言われる、『勇士がかすめた捕虜も取り返され、暴君が奪った獲物も救い出される。わたしはあなたと争う者と争い、あなたの子らを救うからである』」（イザヤ 49：24、25）。

会堂の中の会衆がまだ畏敬の念にわれを忘れている間に、イエスはしばらく休むためにペテロの家へ退かれた。だがここにもまた暗い影が落ちていた。ペテロの妻の母親が高い熱のために病床に横たわ っていたのである。イエスは病気を責められた。すると病人は起きあがって主と弟子たちの必要に奉仕した。 キリストのみわざについてのうわさはたちまちカペナウム中にひろがった。ラビたちを恐れたために、人々は安息日に病気をなおしてもらうためにやってこようとはしなかった。だが太陽が地平線にかくれたとたんに大さわぎが始まった。家から、商店から、市場から、町の住民がイエスの泊まっておられるそまつな住居へおしかけた。病人は寝いすにのせてつれてこられた。つえにすがってやってくる者もあれば、友人たちにささえられて力なくよろめきながら、救い主の前に出る者もあった。

何時間にもわたって、人々は出たり入ったりした。なぜなら翌日になればこのいやし主がまだ自分たちの中におられるかどうかだれにもわからなかったからである。カペナウムでこのような日がみられたことはかつてなかった。大気は勝利の声と救いの叫びに満たされた。救い主はご自分がひき起こされた歓喜をお喜びになった。イエスは、ご自分のところにやってきた人々の苦難をごらんになって、同情に心を動かされたが、彼らに健康と幸福を回復しておやりになる力があることを喜ばれた。

イエスは最後の病人がなおるまで働きをやめられなかった。群衆が立ち去り、シモンの家が静けさにつつまれたのは夜おそくになってからだった。長いさわぎの 1 日が過ぎ去って、

イエスは休まれた。しかし町がまだ眠りにつつまれているころ、救い主は「朝はやく、夜の明けるよほど前に、……起きて寂しい所へ出て行き、そこで祈っておられた」（マルコ 1：35）。 こうしてイエスの地上生活の日々が明け暮れた。イエスはたびたび弟子たちにひまをおやりになって自分の家をたずねさせたり、休息させたりされた。だがご自分は、弟子たちがイエスを働きからひき離そうとする努力を静かにおしとどめられた。イエスは無知な人々に教え、病人をなおし、盲人に視力を与え、群衆を養うために、1 日中働かれた。そして夕方や早朝に天父とまじわるために山のかくれ場に行かれた。たびたびイエスは一晩中祈りと瞑想をし、夜明けに、人々の中で働くために帰られた。

朝早く、ペテロと仲間たちがイエスのところにやってきて、カペナウムの人たちがもうイエスに面会したがっていると言った。弟子たちは、キリストに対するこれまでの世間の人たちの態度にひどく失望していた。エルサレムの当局者たちはイエスを殺そうと求めていた。故郷の町の人たちでさえイエスの命をとろうとした。だがカペナウムでは、イエスは人々からよろこんで熱心に歓迎されたので、弟子たちの望みは新たに燃えた。自由を愛するガリラヤの人々の中から新しい王国の支持者が出るかも知れないと思われた。しかし、彼らはイエスが「『わたしは、ほかの町々にも神の国の福音を宣べ伝えねばならない。自分はそのためにつかわされたのである』と言われた」のをきいて驚いた（ルカ 4：43）。

当時力ペナウムにみなぎっていた興奮の中にあって、イエスの使命の目的が見落される恐れがあった。イエスはただふしぎなことをされる人、あるいは肉体の病気をなおされる人として、人々の注意をご自分にひきつけることで満足されなかった。彼は人々を彼らの救い主としてのご自分にひきよせようとしておられた。人々はイエスが王として地上の統治権を確立するためにおいでになったと信じたがったが、イエスは人々の心を世俗的なものからはなれて霊的なものへ向けようと望まれた。単なる世俗的な成功はイエスの働きを邪魔するのであった。 軽はずみな群衆の驚嘆はイエスの心をいらだたせた。イエスの生活には自分を主張するということがすこしもなかった。世間の人たちが地位や富や才能にささげる尊敬は、人の子イエスには無関係だった。人々から忠節をつくされたり、人々の尊敬をあつめたりするために一般に用いられる手段を、イエスは用いられなかった。イエスがお生れになる何世

紀も前に、そのことがイエスについて預言されていた。「彼は叫ぶことなく、声をあげることなく、その声をちまたに聞えさせず、また傷ついた葦を折ることなく、ほのぐらい　灯心を消すことなく、真実をもって道をしめす。彼は衰えず、落胆せず、ついに道を地に確立する」（イザヤ 42：2～4）。

パリサイ人はきちょうめんな儀式主義や、これ見よがしの礼拝と慈善行為などによって、世間からえらい者に見られたいと望んだ。彼らは宗教を討論の主題とすることによって、宗教への熱心さを示した。反対派の間で長時間にわたって大声で論争がつづけられ、学問のある律法学者たちの怒った論争の声が街頭できかれることが珍しくなかった。

イエスの生活は、こうしたすべてのことと著しい対照をなしていた。その生活には、さわがしい論争やこれ見よがしの礼拝や称賛を受けんがための行為はまったく見られなかった。キリストは神のうちにかくされ、神はみ子の品性のうちに啓示されていた。イエスはこの啓示に人々の心を向け、これに彼らの尊敬をささげさせたいと望まれた。 義の太陽キリストは、さんぜんと輝く光を世に放って、その栄光で人々の感覚をくらませるようなことをなさらなかった。「主はあしたの光のように必ず現れいで」と、キリストについて書かれている（ホセア　6：3）。朝の光は静かにやさしく地を照して、暗い影を追いやり、世人を命に目覚めさせる。そのように、義の太陽キリストは「その翼には、いやす力を備えて」のぼられるので　ある（マラキ 4：2）。

第 27 章「きよめていただけるのですが」

東洋で知られているすべての病気の中でハンセン病が一番恐れられていた。この病気は伝染してなおりにくいという特性がある上に、病人に恐ろしい結果を及ぼすので、どんなに勇敢な人でも恐怖に満たされるのであった。ユダヤ人の間では、それは罪を犯した罰とみなされ、そのために「打撃」とか「神の指」などと呼ばれていた。この病気は根深くて、根絶することができず、致命的であるために、罪の象徴とみなされた。ハンセン病にかかった人は、儀式の規則によって、けがれた者と宣告された。彼はすでに死んでしまった者のように、人々が住んでいるところからしめ出された。彼のさわったものはみなけがれた。空気も彼の呼吸によってけがれた。この病気の疑いのある者は、祭司にみてもらい、祭司が調べてみて病気かどうかを決定するのであった。もしハンセン病であると宣告されたら、彼は家族から隔離され、イスラエルの会衆から絶たれ、同じようにこの病気にかかっている者とだけしか交われない運命に定められた。律法の要求は曲げることができなかった。王や役人たちでさえ例外ではなかった。この恐るべき病気に襲われた君主は、王位を捨てて、社会から逃げ出さねばならなかった。

ハンセン病にかかった人は友人や肉親から離れて、自分の病気ののろいを負わねばならない。彼は自分のわざわいを公表し、衣を裂き、警戒の声をあげて、不潔な自分の前から逃げるようにみんなに警告しなければならなかった。人々は、孤独な追放人が悲しい調子で「けがれた者、けがれた者」と叫ぶ声を、一つの合図として恐怖と嫌悪の念をもって聞いた。 キリストが伝道しておられた地方には、このような病人がたくさんいた。イエスの働きのうわさは彼らの耳にもきこえ、かすかな望みの光をともした。しかし預言者エリシャの時代からこのかた、この病気にとりつかれた人がきよめられたという例がなかった、彼らはイエスがまだ誰のためにもされたことのないことを自分たちのためにしてくださるとは期待しなかった。しかしながら、心に信仰の芽ばえはじめた人が 1 人いた。それでもその男は、イエスにどうやって近づいてよいかわからなかった。ほかの人たちとの接触を禁じられているのだから、どうやっていやし主の前に出ることができよう。それにキリストが彼のよりな者をなおして下さるかどうか疑問だった。神の刑

罰のもとに苦しんでいると思われている者を、イエスが身をかがめて認めてくださるだろうか。パリサイ人魚医者たちと同じように、イエスも自分にわざわいを宣告して、人々の出入りするところから離れるように警告されるのではないだろうか。彼はイエスについて聞かされていたことをみな思い浮べてみた。イエスに助けを求めて追い返されたものは 1 人もなかった。このあわれな男は救い主をさがしだそうと決心した。自分は町から隔離されているが、イエスがわき道をとって山道を通られるのに出会うかも知れないし、あるいは町のそとで教えておられるのをみかけるかも知れない。困難は大きかったが、しかしそれだけが彼の唯一の望みであった。 彼は救い主のみもとへ導かれる。イエスは湖のほとりで教えておられ、人々がそのまわりに集まっている。遠くに離れて立ちながら、彼は救い主の口から出ることばをいくつかとらえる。彼はイエスが病人の上に手をおかれるのを見る。足の不自由な人や、目の見えない人や、中風の者や、いろいろな病気で死にかかっている者たちが、健康を与えられて立ちあがり、救いを神に感謝するのが見える。信仰が彼の心の中で強まる。彼は集まっている群衆の方へ 1 歩また 1 歩と近づいて行く。自分が拘束されていることや、人々の安全や、みんなが恐怖の念をもって自分を見ることなど忘れている。彼はいやされるというありがたい望みのことしか考えない。

彼はいまわしいみせものである。病気はびっくりするほど深く食いこみ、そのくさっていく肉体は見るも恐ろしいほどである。彼を見ると、人々は恐れてあとずさりする。人々は彼にふれまいとしてお互いにぶつかり合って逃げる。彼がイエスに近づかないように、とめようとする人々がいるがむだである。彼は彼らを見もしなければ、彼らの言うことを聞きもしない。彼は人々の嫌悪の表情など見向きもしない。彼は神のみ子しか見ない。彼は死にかけている者にいのちを謡る声しか聞かない。イエスのそばまで押しわけて進むと、彼は「主よ、みこころでしたら、きよめていただけるのですが」と叫んで、イエスの足もとに身を投げる。

イエスは「そうしてあげよう、きよくなれ」とお答えになって、彼の上に手をおかれた（マタイ 8：2、3）。 たちまち、この病人に変化があらわれた。彼の肉体は健康になり、神経は鋭敏になり、筋肉がひきしまった。この病気特有のざらざらしたうろこ状の皮膚が消え

て、そのかわりに健康な子供のはだにみられるような、なめらかな赤みがあらわれた。 イエスは彼に、いまなされた働きを誰にも知らせずに、ささげ物を持ってまっすぐ宮に行くようにとお命じになった。このようなささげ物は、祭司たちが病人を診察して、病気がすっかりなおっていると宣告するまでは、受け入れられなかった。祭司たちは、この役目を行うことがどんなにいやでも、診察して病状を決定しなければならなかった。

聖書のみことばには、キリストが彼に沈黙と敏速な行動の必要を非常にせきたてて命じられたことが示されている。「イエスは彼をきびしく戒めて、すぐにそこを去らせ、こう言い聞かせられた、『何も人に話さないように、注意しなさい。ただ行って、自分のからだを祭司に見せ、それから、モーセが命じた物をあなたのきよめのためにささげて、人々に証明しなさい』」（マルコ 1：43、44）。もし祭司たちがその彼のいやしの実情を知ったら、彼らはキリストへの憎しみから不正直な宣告をくだすかも知れなかった。この奇跡についてのうわさが彼らの耳にはいる前に、彼が宮に出頭するようにイエスは望まれた。こうして公平な決定がくだされ、ハンセン病をいやされたこの男はもう 1 度家族や友人たちの間で暮すことをゆるされるのであった。

イエスが彼に沈黙を命じられた時、イエスのお考えにはほかの目的もあった。救い主は敵がいつもイエスの働きを制限したり、人々をイエスから離れさせようとしたりしているのを知っておられた。もし彼のいやしがうわさにのぼったら、この恐ろしい病気にかかっているほかの者たちがイエスのまわりにおしよせ、そのため彼らとの接触によって人々が伝染させられるということを、イエスは知っておられた。ハンセン 病にかかった多くの人は、健康の賜物を自分自身や他人の祝福となるように用いようとしなかった。また彼らをまわりにひきよせると、イエスが儀式の規則に禁じられていることを破っておられるという非難の機会を与えるのであった。こうして福音をのべつたえるイエスの働きが妨害されるのだった。 この出来事は、キリストの警告が正しかったことを証明した。群衆はハンセン病にかかった人がいやされたのを目撃していたので、祭司たちの決定を知りたがった。彼が友人たちのところへもどってくると、大さわぎとなった。イエスの注意があったにもかかわらず彼は自分の病気がなおった事実をもはやかくそうと努力しなかった。実際それはかくしきれるものでは

なかったが、彼はこのできごとを広く公表した。自分を口止めしたのはイエスの遠慮にすぎないと考えて、彼はこの大医者の力を宣伝して歩いた。彼はこうして発表するたびに祭司たちや長老たちがイエスを殺そうという決意をますます固めることを理解していなかった。いやされた男は健康の恵みが非常にとうといものであることを知った。彼は人間としての力を与えられ、家族と社会へ復帰できたことを喜び、自分を完全な体にしてくださった医者であるイエスに栄光を帰さないではいられない気持だった。しかしこの出来事を言いふらした彼の行為は、結果においては救い主の働きをさまたげることになった。そのために、おびただしい群衆がイエスのもとに殺到し、イエスはしばらく働きをおやめにならねばならなかった。

キリストの公生涯における行為の一つ一つには遠大な目的があった。そこには行為自体にあらわれているよりももっと深い意味が含まれていた。この病人のいやしの場合もそうである。イエスはみもとにやってきたすべての者に奉仕される一方では、こなかった人々を祝福したいと心から望まれた。イエスは取税人、異教徒、サマリヤ人などをひきよせられる一方では、偏見と言い伝えの中にとじこめられている祭司たちや教師たちの心に訴えたいと熱望された。彼らの心を動かすためにはどんな方法も試みられないものはなかった。ハンセン病をいやされた男を祭司たちのもとへつかわすことによって、イエスは、一つのあかしを与えて彼らの偏見をとり除くおつもりだった。 キリストの教えは神がモーセを通してお与えになった律法に反すると、パリサイ人たちは主張していた。しかしハンセン病からきよめられた男に律法に従ってささげ物をささげるようにイエスが命じられたことは、この非難が不当であることを証明した。それは、さとろうとする気のあるすべての入にとって、十分な証拠であった。

エルサレムの指導者たちは、キリストを死刑にする口実をさがし出すためにスパイを送り出していた。イエスは人類に対するご自分の愛と、律法に対するご自分の尊敬と、罪と死から救うご自分の力との証拠を彼らに与えてこれに応じられた。こうしてイエスは、彼らについて、「彼らは悪をもってわが善に報い、恨みをもってわが愛に報いるのです」とあかしをたてられた（詩篇 109：5）。「敵を愛し」なさいとの戒めを山でお与えになったイエスは、

自らこの原則を実行し、「悪をもって悪に報いず、悪口をもって悪口に報いずかえって、祝福をもって報い」られた（マタイ 5：44、Ⅰペテロ 3：9）。

このハンセン病にかかった人に追放を宣告した同じ祭司たちが、彼のいやしを証明した。この宣告は、公に発表され、記録されるので、それはいつまでもキリストをあかしするものであった。そしてこのいやされた男が、病気の跡さえないという祭司たち自身の保証によって、イスラエルの会衆の中へ復帰した時、彼自身が恩人であられるイエスの生きた証人となった。彼は喜びにあふれてささげ物をささげ 1 イエスのみ名をあがめた。祭司たちは救い主 の天来の力について確信させられた。真理を知り、光によって益を受けるように、彼らに機　会が与えられた。もししりぞけられたら、その機会は過ぎ去ってふたたび返ってこないので　あった。多くの人々は光をしりぞけた。それでも光が与えられたことはむだではなかつた。　一時何のしるしもみえなかった多くの人々の心が動かされた。救い主の在世中には、その使　命は祭司たちや教師たちの中に愛の反応をすこしも呼び起　こさないようにみえた。しかしキリストの昇天後、「祭司たちも多数、信仰を受けいれるようになった」（使徒行伝 6：7）。

ハンセン病にかかった人をその恐るべき病気からきよめられたキリストの働きは、魂を罪からきよめられるキリストの働きの実例である。イエスのみもとにきた男は、「全身重い皮膚病」であった（ルカ 5：12）。その致命的な病毒は彼の全身にひろがっていた。弟子たちは主が彼にさわられないようにしようとした。この病人にさわるとその人もけがれた者となるからであった。しかしイエスは病人に手をおいても、けがれを受けられなかった。イエスの手がふれたことによって、いのちを与える力がさずけられた。ハンセン病はきよめられた。罪という病もこれと同じである、――それは根強く、致命的で、人間の力できよめることはできない。「その頭はことごとく病み、その心は全く弱りはてている。足のうらから頭まで、完全なところがなく、傷と打ち傷と生傷ばかりだ」（イザヤ 1：5、6）。しかしイエスは、人類の中に住むためにおいでになって、何のけがれもお受けにならない。イエスの前に出ることには罪人にとっていやしの力がある。信仰をもって「主よ、みこころでしたら、きよめていただけるのですが」と言いながらイエスの足もとにひれ伏す者は誰でも、「そうしてあげよう、きよくなれ」との答えを聞くのである（マタイ 8：2、3）。

イエスは、あるいやしの場合には、求められた祝福をすぐにはお与えにならなかった。ところがこのハンセン病にかかった人の場合には、訴えがなされたとたんに祝福が与えられた。この世の祝福を祈り求める時に、われわれの祈りに対する答えは遅れるかも知れない。あるいは神はわれわれの求めるものよりもほかのものをお与えになるかも知れない。 しかし罪からの救いをもとめる時にはそうではない。われわれを罪からきよめて神の子とし、聖なる生活を送ることができるようにしてくださるのが神のみこころである。「キリストは、わたしたちの父なる神の御旨に従い、わたしたちを今の悪の世から救い出そうとして、ご自身をわたしたちの罪のためにささげられたのである」（ガラテヤ 1：4）。「わたしたちが神に対していだいている確信は、こうである。すなわち、わたしたちが何事でも神の御旨に従って願い求めるなら、神はそれを聞きいれて下さるということである」（Ⅰヨハネ 5：14）。「もし、わたしたちが自分の罪を告白するならば、神は真実で正しいかたであるから、その罪をゆるし、すべての不義からわたしたちをきよめて下さる」（Ⅰヨハネ 1：9）。

カペナウムの中風患者のいやしを通して、キリストはもう 1 度この同じ真理をお教えになった。この奇跡が行われたのは、罪をゆるすキリストの力をあらわすためであった。中風　患者のいやしもまたほかのとうとい幾つかの真理を例示している。それは望みと励ましに満　ちており、またあら探しをするパリサイ人と関連していたことから、警告の教訓も含んでい　る。　あのハンセン病にかかった人と同じように、この中風患者の回復の望みはすっかり失われていた。彼の病気は罪の生活の結果であって、その後悔のために苦しみは一層ひどかった。彼は心の苦しみと肉体の苦痛から救われたいと望んで、ずっと前からパリサイ人たちや医者　たちに訴えていた。しかし彼らは彼の病気はなおらないと冷淡に宣告し、彼を神の怒りにま　かせた。パリサイ人は苦悩を神の不快のしるしとみなし、病人や困っている人たちから遠ざ　かっていた。ところが自分たちはきよい者だといばっている当人たちが、実は彼らが罪人呼　ばわりしている苦しむ者たちよりももっと罪が重い場合がしばしばあった。

中風の男はまったく無力であった。そしてどこからも助けを受ける見込みがないことを知って、彼は絶望に沈んでいた。その時彼はイエスのすばらしいみわざについて聞いた。彼は自分と同じに罪深くて無力なほかの人たちがいやされたことを聞いた。ハンセン病さえき

よめられたということだった。そこでこうした話を伝えた友人たちは、イエスのところへ行くのならいやされるかもしれないと信じるように、彼をはげました。しかし彼は自分がどうして病気になったかを思い出すと、望みが消えた。純潔な医者であられるイエスは自分がみ前に出ることをおゆるしにならな いだろうと、彼は恐れた。

しかし彼が熱望したのは肉体的な回復よりもむしろ罪の重荷からの解放だった。もしイエスにお会いすることができて、罪のゆるしと天とのやわらぎの保証が与えられるなら、神のみこころにしたがって死のうが生きようが満足だった。死にかけている男の叫びは、ああ、あの方のみ前に出られますようにということだった。ぐずぐずしている時間はなかった。すでに彼の衰えた肉体には死の徴候が見えはじめていた。彼が友人たちに、寝台にのせてイエスのところにつれて行ってくれるようにたのむと、彼らは喜んでそうすることを引受けた、だが救い主のおられる家の内塁外には人々が密集していて、病人とその友人たちがイエスのそばに近づくことも、あるいはみ声のきこえるところまで行くことさえできなかった。

イエスはペテロの家で教えておられた。いつもの習慣通り、弟子たちはイエスのそば近くにすわっており、「ガリラヤやユダヤの方々の村から、またエルサレムからきたパリサイ人や律法学者たちが、そこにすわっていた」（ルカ　5：17）。この人たちはスパイとしてやってきて、イエスを訴えるとがをみつけようとしていた。この役人たちの外側に、熱心な者、敬虔な者、好奇心のある者、不信心な者など、雑多な群衆がむらがっていた。彼らはいろいろな国籍や、社会のあらゆる階層を代表していた。「主の力が働いて、イエスは人々をいやされた」（ルカ　5：17）。命のみたまは会衆をおおっていたが、パリサイ人と学者たちはその臨在を認めなかった。彼らは必要を感じなかったので、いやしは彼らのためではなかった。イエスは「飢えている者を良いもので飽かせ、富んでいる者を空腹のまま帰らせ」になった（ルカ 1：53）。

中風患者をはこんできた人たちは何度も何度も群衆の中を押しわけて進もうとしたがむだだった。病人は言いようのない苦痛のうちにあたりをみまわした。待ち望んだ助けを目の前にしながら、どうして望みをすてることができよう。病人の思いつきで、友人たちは彼を屋上にはこびあげ、屋根を破ってイエスの足もとに病人をおろした。講話は中断された。救

い主はその悲しげな顔つきをごらんになり、訴える目がじっとご自分にそそがれているのをごらんになった。イエスは事情を理解された。イエスがその困り疑っている魂をみもとにひきよせられたのであった。この中風患者がまだ家にいた時に、救い主は彼の良心に自覚をお与えになった。彼が罪を悔い改め、自分を健康にしてくださるイエスの力を信じた時、救い主のいのちを与える憐れみは、まずその切望する心を祝福した。イエスは、最初のかすかな信仰の光が、イエスを罪人の唯一の助け手として信じる信仰に育って行くのを見守り、それが救い主のみもとに行きたいと努力する度にだんだん強くなって行くのをごらんになっていた。 いま救い主は、苦しむ者の耳に音楽のようにひびくことばで、「子よ、しっかりしなさい。あなたの罪はゆるされたのだ」と言われた（マタイ 9：2）。 絶望の重荷は病人の魂からころがり落ちる。ゆるしの平安が彼の心に宿り、彼の顔の輝きにあらわれる。彼の肉体の苦痛は去り、身も心も一変する。無力の中風患者がいやされ、不義の罪人がゆるされたのだ。

単純な信仰をもって、彼はイエスのみことばを新しいいのちの賜物として受け入れた。彼はもうこれ以上何も願わないで、うれしさのあまりことばもなくただ幸福な沈黙のうちに横たわっていた。天の光は彼の顔にかがやき、人々は畏敬の思いをもってその光景をながめた。 ラビたちはイエスがこの病人をどう処置されるかを見ようと熱心に待っていた。彼らは、この病人から助けを求められた時、望みや同情を与えることを拒絶したことを思い出した。それだけで満足しないで、彼らはこの男が罪のために神からわざわいを受けているのだと宣告した。目の前にこの病人を見た時・そうしたことが彼らの心に新たによみがえった。人々がみなその光景を興味深く見守っているのを見て彼らは人々に対する自分たちの影響力が失われるのではないかと、恐ろしい不安を感じた。　これらの偉い人たちはことばこそかわさなかった　が、お互いに顔を見合わせることによって、人々の感動の波を防ぎとめるために何かしなければならないという同じ思いをお互いの胸から読みとった。イエスは中風患者の罪が　ゆるされたと宣告された。パリサイ人はこのことばをとらえて、それを神への冒?とし、死刑 に値する罪として示すことができると考えついた。彼らは心の中で「この人は、なぜあんな　ことを言うのか。それは神をけがすことだ。神ひとりのほかに、だれが罪をゆるすことがで　きるか」と言った（マルコ 2：7）。

イエスがじっと目をそそがれると、彼らは小さくなってあとずさりした。するとイエスは、「なぜ、あなたがたは心の中で悪いことを考えているのか。あなたの罪はゆるされた、と言うのと、起きて歩け、と言うのと、どちらがたやすいか」と言われた。そして「しかし、人の子は地上で罪をゆるす権威をもっていることが、あなたがたにわかるために」と言われて、中風の者に向かい、「起きよ、床を取りあげて家に帰れ」と言われた（マタイ　9：4～6）。

すると担架にのせられてイエスのところへつれてこられたその男は、若者のようなはずむ力で立ちあがる。いのちを与える血潮が彼の血管に脈打つ。彼の体の器官がどれも急に活動をはじめる。近づいていた死の青白さが消えて、健康の輝きがあらわれる。「すると彼は起きあがり、すぐに床を取りあげて、みんなの前を出て行ったので、一同は大いに驚き、神をあがめて、『こんな事は、まだ 1 度も見たことがない』と言った」（マルコ 2：12）。 ああ、罪のある者と苦しんでいる者とをいやすために身をかがめられた驚くべきキリストの愛。悩んでいる人類の苦難を悲しみ、これをやわらげてくださる神。ああ・このように人の子ら　に示された驚くべき力。だれが救いのメッセージを疑うことができよう。だれが憐れみ深い　救い主のいつくしみを軽んじることができよう。

あの朽ちかけていた肉体に健康を回復するのに要したのは、創造の力以外の何ものでもなかった。地のちりから造られた人間にいのちを宣告した同じ声が、死にかけていた中風患者に命を告げた。しかも肉体に命を与えたのと同じ力が心を新たにしたのであった。創造の時に、「主が仰せられると、そのようになり、命じられると、堅く立った」が、その主が罪ととがのうちに死んだ魂に命を語られたのであった（詩篇 33：9）。肉体のいやしは、心を新たにした力の証拠であった。キリストは中風患者に「人の子は地上で罪をゆるす権威をもっていることが、あなたがたにわかるために」起きて歩めとお命じになった（マルコ 2：　10）。

この中風患者は、キリストのうちに魂と肉体のいやしを見いだした。霊的ないやしに肉体的な回復がつづいた。この教訓をみのがしてはならない。今日肉体の病気にかかりながら、この中風患者のように、「あなたの罪はゆるされた」とのことばをきくのを待ち望んでいる

者が幾千人となくいる。とどまるところを知らず、満たされることのない欲望をもった罪の重荷こそ、彼らの病気の根源である。彼らは魂をいやしてくださるお方のもとに行くまでは安心が得られない。イエスだけがお与えになることのできる平安によって、心に活力が与えられ、肉体に健康が与えられる。 イエスは「悪魔のわざを滅ぼしてしまうため」においでになった（Ｉヨハネ 3：8）。「この言に命があった」。イエスは「わたしがきたのは、羊に命を得させ、豊かに得させるためである」と言われる。イエスは「命を与える霊」である（ヨハネ 1：4、10：10、1 コリント 15：45）。イエスは、この地上において病人をいやし、罪人にゆるしをお告げになった時と同じに、いまもなおいのちを与える力を持っておられる。主は「あなたのすべての不義をゆるし、あなたのすべての病をいや」される（詩篇　103：　3）。

中風患者のいやしが人々に与えた効果は、ちょうど天が開いて天国の栄光があらわされたようなものだった。病気をいやされたこの男が 1 歩ごとに神を賛美し、荷物を羽毛のように軽々とかついで群衆の間を通って行くと、人々はうしろへさがって道をあけ、畏敬の念に　うたれた顔つきで彼をじっと見つめ、「きょうは驚くべきことを見た」とそっとささやき合　った（ルカ 5：26）。 パリサイ人は驚きのあまり口の利けない人のようにだまりこみ、敗北感に圧倒された。彼らは、彼らのねたみを群衆にたきつける機会がここにはないことを知っ　た。彼らが神の怒りにまかせてしまった男のためになされた不思議なわざが、人々に強い印　象を与えたので、ラビたちは一時忘れられてしまった。彼らが神にだけあると言っていた力　をイエスが持っておられることを人々は知った。だがイエスのやさしくて威厳のある態度は、ラビたち自身のこうまんな態度といちじるしい対照をなしていた。彼らは口にこそ出さない　が、自分たちよりもすぐれたお方が目の前におられることを認めて、まごつき、赤面した。　イエスがこの地上で罪をゆるす権威を持っておられるという証拠が強ければ強いほど、彼ら　はますます固く不信のからにとじこもった。彼らは、中風患者がイエスのみことばによって　いやされるのを見たペテロの家から、神のみ子を沈黙させる新しい計略を考え出すために出　て行った。

肉体の病気は、それがどんなに悪質で、根深いものであっても、キリストの力によっていやされた。しかし魂の病気は、光に目をとじた人々をもっと固くとらえていた。ハンセン病や中風は、頑迷さや不信ほど恐ろしくはなかった。 中風をいやされた男の家では、ほんのちょっと前に寝床にのせられたまま静かに家からかつぎ出されて行った彼が、寝床をらくらくとかついで帰ってきた時、大きな喜びがあった。彼らは喜びの涙を浮かべてまわりに集まり、自分の目が信じられないようだった。彼は元気に満ちた 1 人前の男として彼らの前に立った。以前にはいのちがかよっているようには見えなかった彼の両腕が、すぐに彼の意志に従った。ちぢかんで鉛色をしていた彼の肉体が、いまは若々しく赤味をおびていた。彼はしっかりした足どりで自由に歩いた。彼の顔つきの一つ一つには喜びと望みが書かれ、罪と苦難のしるしに代って純潔と平和の表情が見られた。喜びと感謝のことばがその家からのぼって行き、神は、望みのない者に望みを回復し、傷ついた者に力をお与えになったみ子を通して栄光を受けられた。この男とその家族は、イエスのためならいつでも命をささげようと思った。彼らの信仰をくもらせる疑いはなく、彼らの暗い家庭に光をお与えになったイエスへの忠誠心をさまたげる不信はなかった。

第 28 章レビ・マタイ

パレスチナのローマ官吏の中で、取税人ほど憎まれた者はなかった。外国の権力によって税を課せられるということが、自国の独立権が失われたことをユダヤ人に思い出させ、たえず彼らを怒らせた。取税人はローマの圧制の手先であったばかりではなかった。彼らはまた自分自身のために強奪者となり、民を犠牲にして私腹を肥やした。ローマ人の手からこの任命を受けたユダヤ人は、国民の名誉を裏切る者とみなされた。彼は変節者として軽蔑され、社会の最も下等な階層に入れられた。　レビ・マタイはこの階級に属していたが、彼はゲネサレでの 4 人の弟子たちの次に、キリストの奉仕に召された。パリサイ人はマタイをその職業から判断していたが、イエスはこの男のうちに真理を受け入れるために心が開かれているの　をごらんになった。マタイは救い主の教えを聞いていた。罪をさとらせる神のみたまが彼の　罪深さを示した時、彼はキリストの助けを求めたいと熱望した。だが彼は、ラビたちの排他　心になれていたので、この大教師イエスが自分に注目されるだろうとは考えていなかった。

ある日、この取税人が収税所にすわっていると、イエスが近づいてこられるのが見えた。「わたしに従つてきなさい」ということばが自分に向かって語られるのを聞いた時の彼の驚きは大きかった。 マタイは、「いっさいを捨てて立ちあがり、イエスに従ってきた」（ルカ5:27、28）。ちゅうちょもなく、質問もせず金もうけの商売が貧乏と苦労にとり代えられ　るという考えもなかった。イエスといっしょにいるということ、イエスのみことばをきき、　イエスの働きに加われるということだけで彼は十分だった。　これより前に召された弟子たちも同じだった。イエスがペテロとその仲間に「わたしに従ってきなさい」とお命じになった　時、彼らはすぐに舟と網を捨てた。これらの弟子たちの中には、生活の面倒をみなければな　らない友人たちをかかえている者もあった。しかし彼らは救い主の招きを受けた時、ちゅう　ちょして、わたしはどうして生活し家族を養えるでしょうかとたずねなかった。彼らは召し　に従順だった。後になってイエスが、「わたしが財布も袋もくつも持たせずにあなたがたを　つかわしたとき、何かこまったことがあったか」とおたずねになった時、彼らは、「いいえ、何もありませんでした」と答えることができた（ルカ 22：35）。

金持ちだったマタイにも、貧乏だったアンデレとペテロにも、同じ試みが与えられたが、彼らはそれぞれ同じように献身した。成功の瞬間に、すなわち、網が魚でいっぱいになり、これまで通りの生活をつづけたいという気持が最も強かった時に、イエスは、海辺で、弟子たちに福音の働きのために一切を捨てるように求められた。同じように一人一人の魂は、この世の幸福を望む心と、キリストとのまじわりを望む心と、そのどちらが最も強いかを試みられるのである。　原則はいつでもきびしい。全心全霊を働きにうちこみ、「わたしの主キリスト・イエスを知る知識の絶大な価値のゆえに、いっさいのものを損と思」うようでなけれ　ば、だれも神への奉仕に成功することはできない（ピリピ 3：8）。自分のために少しでも取って置く者はキリストの弟子になることはできないし、ましてや共労者となることはできな　い。人々が大いなる救いの真価を知る時、キリストの生活にみられた自己犠牲が彼らの生活　の中にみられる。キリストがどこへみちびかれようとも、彼らはよろこんで従うのである。

マタイがキリストの弟子の 1 人として召されたことから非常な憤慨がひき起こされた。宗教教師が、直弟子の 1 人として取税人をえらぶということは、宗教的社会的国民的な慣例に反していた。パリサイ人は、人々の偏見に訴えることによって、イエスに対する人気の流れを反対の方向に変えようと望んだ。 取税人たちの間に、広く行きわたる興味が起こった。彼らの心は天来の教師イエスへひきつけられた。マタイは弟子にしてもらったことをよろこんで、以前の仲間をイエスにみちびきたいと熱望した。そこで彼は自分の家にふるまいの席を設けて、親戚や友人たちをいっしょに呼んだ。そこには取税人たちばかりでなく、いかがわしい評判の人たちや用心深い隣人たちから排斥されているような人々がたくさんきていた。

もてなしはイエスを主賓としてなされたが、イエスはその心づくしを受け入れるのにちゅうちょされなかった。イエスはこのことがパリサイ党を怒らせ、また民の目にご自分の信用を落すことをよくご存じだった。しかし慣例はイエスの行動を左右することができなかった。イエスにとって外面的な偉さはすこしも重要でなかった。イエスの心に訴えたものはいのちの水にかわき、それを求めている魂であった。 イエスは取税人たちの食卓に主賓としておつきになり、同情心と社交的な親切とによって、ご自分が人間性の尊厳を認めておられる

ことをお示しになった。そこで人々は、イエスの信頼に値する者になりたいと心から願った。彼らのかわいた心に、イエスのみことばは、いのちを与える祝福の力となってのぞんだ。社会からのけ者にされていたこの人たちに、新しい衝動がめざめ、新しい生活の可能性が開かれた。

このような集まりで救い主の教えに深い感銘を受け、キリストが昇天されてからはじめてキリストを認めた者が少なくなかった。聖霊が豊かにそそがれ、1 日に 3000 人が悔い改めた時、その中には、取税人たちの食卓で初めて真理を聞いた人たちが多くまじっていて、彼らのうちのある者は福音の使者となった。 マタイ自身にとっても、ふるまいの席でのイエスの模範はいつも教訓となっていた。軽蔑されていたこの取税人は最も献身的な伝道者の 1 人となり、彼自身の伝道において主のみ足跡に忠実に従った。

ラビたちは、イエスがマタイのふるまいの席に出席されたことを知ると、イエスを非難する機会ととらえた。しかし彼らは、弟子たちを通して働きかけようと望んだ。ラビたちは、弟子たちの偏見をひき起こすことによって、彼らを主からひき離そうと望んだ。弟子たちにはキリストのことを非難し、キリストには弟子たちのことを悪く言って、一番傷つきやすいところにねらいをつけるのがラビたちの手段だった。これは、サタンが天で不満を感じて以来、いつもしてきた方法である。不和と離反をひき起こそうとする者はみな彼の精神に動かされているのである。 ねたみ深いラビたちは、「なぜ、あなたがたの先生は、取税人や罪人などと食事を共にするのか」とたずねた（マタイ 9：11）。イエスは、弟子たちがその非難に答えるのを待たないで、自らお答えになった。「丈夫な人には医者はいらない。いるのは 病人である。『わたしが好むのは、あわれみであって、いけにえではない』とはどういう意 味か、学んできなさい。わたしがきたのは、義人を招くためではなく、罪人を招くためであ る」（マタイ 9：12、13）。パリサイ人たちは、自分たちは霊的に健康であるから、医者の必要はないと主張し、取税人や異邦人を魂の病気で死にかけている者とみなしていた。だか ら、イエスの助けを要している階級へ医者として行かれるのが、イエスの働きではなかった だろうか。

しかしパリサイ人たちは、自分を偉いものに思っていたが、実際には彼らは彼らが軽蔑している人たちよりも悪い状態にあった。取税人たちは彼らよりも頑迷さや自己満足の念がなく、したがって真理の感化に対してもっと心が開かれていた。イエスはラビたちに、「『わたしが好むのは、あわれみであって、いけにえではない』とはどういう意味か、学んできなさい」と言われた（マタイ 9：13）。このようにイエスは、彼らが神のみことばを説明すると主張しながら、その精神については全く無知であることをお示しになった。 パリサイ人たちはその時はだまっていたが、しかし彼らの敵意は一層固くなっただけであった。彼らは次にバプテスマのヨハネの弟子たちをさがし出して、救い主に反対させようと試みた。このパリサイ人たちは、バプテスマのヨハネの使命を信じていなかった、彼らはヨハネの節制生活、彼の単純な習慣、彼の粗末な衣服などを嘲笑的に指さして、彼を狂信者だと断言していた。ヨハネが彼らの偽善を攻撃したので、彼らはヨハネのことばに抵抗し、人々がヨハネに反対するようにあおりたてていた。神のみたまはこのような嘲笑者たちの心に働いて、彼らに罪をさとらせられたが、彼らは神の勧告をしりぞけ、ヨハネは悪鬼につかれていると断言していた。

いまイエスが人々の中にまじって、彼らの食卓で飲み食いされると、彼らはイエスのことを大食家だとか大酒飲みだとか言って攻撃した。二のような攻撃をする彼ら自身こそやましいのであった、神についてまちがった解釈がなされ、サタン自身の特性が神に着せられるように、主の使者たちもこうした悪人たちによって曲解された。 パリサイ人たちは、イエスが暗黒の中にある人々に天の光を与えるために取税人や罪人たちといっしよに食事をしておられるのだということを考慮しようとしなかった。天来の教師のまかれる一つ一つのみことばが生きた種であって、それは発芽して神の栄えのために実を結ぶのだということを、彼らは認めようとしなかった。彼らは光を受け入れまいと決心していた。彼らは、バプテスマのヨハネの使命に反対してきていたのに、イエスに対する反対に彼らの協力を 1 得ようと望んで、いまヨハネの弟子たちの友情を求めようとした。彼らは、イエスが昔からの言い伝えを廃しようとしておられると言った。また彼らはバプテスマのヨハネの厳格な敬虔さと、取税人や罪人といつしょに食事をされたイエスの行動とを比較した。

ヨハネの弟子たちはこの時非常な悲しみのうちにあった。それは彼らがヨハネの伝言をもってイエス に会いに行く前だった。彼らの愛する教師は牢獄の中におり、彼らは悲嘆のうちに日をすごしていた。しかもイエスは、ヨハネを釈放するために、何の努力もされず、むしろヨハネの教えに不信を表明しておられるかのようにさえみえた。もしヨハネが神からつかわされたのなら、なぜイエスとその弟子たちはこんなにまったく異なった道を歩まれるだろう。 ヨハネの弟子たちはキリストの働きをはっきり理解していなかった。パリサイ人たちの非難には何か根拠があるかも知れないと、彼らは思った。彼らはラビたちが規定した規則の多くを守り、律法のわざによって義とされることを望んでさえいた。ユダヤ人は断食を功績の行為として実行し、彼らの中で最も厳格な者は毎週 2 日間断食した。ヨハネの弟子たちが、イエスのもとにやってきて、「わたしたちとパリサイ人たちとが断食をしているのに、あなたの弟子たちは、なぜ断食をしないのですか」とたずねた時、彼らもパリサイ人たちも断食していた（マタイ 9：14）。

イエスは非常にやさしく彼らにお答えになった。イエスは、断食について彼らのまちがった観念をなおそうとはされずご自分の使命について彼らが正しい見方をするようにされただけだった。しかもイエスは、バプテスマのヨハネ自身がイエスについてのあかしに用いたのと同じ譬を使ってこのことを説明された。ヨハネは「花嫁をもつ者は花婿である。花婿の友人は立って彼の声を聞き、その声を聞いて大いに喜ぶ。こうして、この喜びはわたしに満ち足りている」と言った（ヨハネ　3：29）。イエスがこの例をとりあげて「あなたがたは、花婿が一緒にいるのに、婚礼の客に断食をさせることができるであろうか」と言われたとき、ヨハネの弟子たちは彼らの教師のことばを思い出さずにはいられなかった（ルカ 5：34）。

天の大君がご自分の民の中におられた。神の最高の賜物が世に与えられていた。貧しい者に喜びあれ。キリストが彼らをみ国の世継ぎとするためにおいでになったからである。富める者に喜びあれ。キリストは永遠の富を手に入れる方法を彼らにお教えになるからである。無知な者に喜びあれ。キリストは彼らを救いについて賢明な者とされるからである。知識のある者に喜びあれ。キリストは彼らがこれまできわめたところよりももっと深い神秘を明らかにされるからである。世の基がおかれた時からかくされていた真理は、救い主の使命によ

って人々に開かれるのであった。 バプテスマのヨハネは救い主を見て喜んだ。天の大君と共に歩み、共に語る特権にあずかっていた弟子たちには何という大きな喜びの機会があったことだろう。いまは彼らが嘆いたり断食をしたりする時ではなかった。暗黒と死の影にすわっている人々に光を照すために、彼らは心を開いてキリストの栄光を受けねばならない。

キリストのみことばは明るい光景をえがき出したが、その向こうには濃い影が落ちていて、イエスの御目だけがそれを認めていた。「しかし、花婿が奪い去られる日が来る。その日には断食をするであろう」とイエスは言われた（ルカ 5：35）。主が売り渡され、十字架につけられるのを見る時に、弟子たちは嘆き断食するであろう。あの二階の広間で弟子たちに語られた最後のことばの中に、イエスは、「しばらくすればわたしを見なくなる、またしばらくすればわたしに会えるであろう……よくよくあなたがたに言っておく。あなたがたは泣き悲しむが、この世は喜ぶであろう。あなたがたは憂えているが、その憂いは喜びに変るであろう」と言われた（ヨハネ 16：19、20）。 イエスが墓から出ておいでになる時、彼らの悲しみはよろこびに変るのであった。イエスの昇天後そのお姿はみえなくなるが、慰め主を通してイエスはなお彼らとともにおられるので、彼らは悲嘆のうちに時をすごさないのであった。彼らが悲嘆のうちに時をすごすことは、サタンの望むところだった。サタンは、彼らがあざむかれ、失望したという印象を世に与えたいと望んだ。しかし信仰によって、彼らは、イエスが彼らのために奉仕しておられる天の聖所をながめるのであった。彼らはキリストの代表者であられる聖霊に心を開き、そのご臨在の光をよろこぶのであった。しかし誘惑と試練の日がくるのであった。その 時彼らは、この世の支配者たちや暗黒の王国の指導者たちと衝突するのであった。その時キリストは、自ら彼らのそばにおられず、彼らは慰め主を認めなかった。その時こそ彼らが断食することは一層ふさわしいのであった。

パリサイ人は、形式を厳格に守ることによって自分をえらそうにみせようとつとめたが、一方その心はねたみと争いに満ちていた。聖書にこう言われている、「見よ、あなたがたの断食するのは、ただ争いと、いさかいのため、また悪のこぶしをもって人を打つためだ。きょう、あなたがたのなす断食は、その声を上に聞えさせるものではない。このようなものは、わたしの選ぶ断食であろうか。人がおのれを苦しめる日であろうか。そのこうべを葦のよう

に伏せ、荒布と灰とをその下に敷くことであろうか。あなたは、これを断食ととなえ、主に受けいれられる日と、となえるであろうか」（イザヤ 58：4、5）。 真の断食は単なる形式的な行事ではない。神がおえらびになった断食は、「悪のなわをほどき、くびきのひもを解き、しえたげられる者を放ち去らせ、すべてのくびきを折るなどの事……飢えた者にあなたのパンを施し、苦しむ者の願いを満ち足らせる」ことであると聖書に書かれている（イザヤ 58：6、10）。ここにキリストの働きの精神と性格が示されている。キリストの一生は世の救いのためにご自身を犠牲にされることであった。試みの荒野で断食されても、マタイのふるまいの席で取税人たちといっしょに食事をされても、イエスは、失われた者の救いのためにご自身のいのちを与えておられた。ただ嘆き悲しんだり、肉体を痛めつけたり、おびただしい犠牲を払ったりすることなどの中に真の信心の精神があらわされるのではなく、それは神と人とに対する心からの奉仕に自分をささげることに示されるのである。

イエスは、ヨハネの弟子たちへの答をつづけ、譬を用いてこう言われた、「だれも、新しい着物から布切れを切り取って、古い着物につぎを当てるものはない。もしそんなことをしたら、新しい着物を裂くことになるし、新しいのから取った布切れも古いのに合わないであろう」（ルカ　5：36）。バアテスマのヨハネのメッセージを、言い伝えや迷信に織り込んではならなかった。パリサイ人の見せかけとヨハネの信心とをまぜ合わせようとする試みは、両者の不一致をますます明らかにするだけであった。キリストの教えの原則をパリサイ主義　の形式に一致させることもまたできなかった。キリストは、ヨハネの教えによって生じた破　れをふさがれるのではなかった。キリストは古いものと新しいものとの分離をますます明ら　かにされるのであった、イエスはこの事実をさらに次のような例をもって示された「まただ　れも、新しいぶどう酒を古い皮袋に入れはしない。もしそんなことをしたら、新しいぶどう　酒は皮袋をはり裂き、そしてぶどう酒は流れ出るし、皮袋もむだになるであろう」（ルカ 5：　37）。新しい酒を入れる容器として用いられた皮袋は、しばらくすると乾いてもろくなり、　同じ目的のためにはもう役立たなくなった。このよく知られた例を用いて、イエスはユダヤ　人の指導者たちの状態をお示しになった。祭司たち、律法学者たち、役人たちは、型にはま　った儀式と言い伝えにこり固まっていた。彼らの心は、イエスがひからびた皮の酒袋にたと

えられたように、ちぢまっていた。律法的な宗教に満足しているかぎり、彼らが天の生きた真理の保管者となることは不可能だった。彼らは、自分自身の義は十分であると思っていたので、自分たちの宗教に新しい要素がはいりこむことを望まなかった。彼らは、人類に対する神の恵みを彼ら自身と関係のないものとして受け入れることをしなかった彼らはそれを自分たちの善行のせいにして、彼ら自身の功績に結びつけた。愛によって働き、魂をきよめる信仰が、儀式と人の命令から成り立っているパリサイ人の宗教と結合する余地はなかった。イエスの教えを既成宗教と結びつけようと努力してもむだであつた。神の重要な真理は、発酵するぶどう酒のように、パリサイ的言い伝えという古い朽ちた袋を破るのであった。

パリサイ人は、自分たちは賢いから教えを受ける必要はない、義人だから救いの必要はない、高い誉を 受けているからキリストから栄えを受ける必要はないと考えていた。救い主は彼らから離れ、天の使命を受け入れるようなほかの人々をさがされた、イエスは、教育のない漁夫たち、市場の取税人、サマリヤの女、喜んでみことばをきく一般の人々などを新しい酒を入れる新しい袋としてごらんになった。福音の働きにうつわとして用いられる者は、神が彼らに送られる光をよろこんで受け入れる魂である。こういう人々は真理の知識を世に与えるための神の代理者である。もし神の民が、キリストの恵みによって新しい袋となるならば、神はそれに新しいぶどう酒を満たされるのである。 キリストの教えは、新しい酒として表現されているが、それは新しい教理ではなくて、世の初めから教えられていたことを啓示したものであった。しかしパリサイ人たちには、神の真理の本来の意義と美しさとがわからなかった。彼らにとって、キリストの教えはほとんどすべての点において新しく、したがって、それを認識することも、承認することもできなかった。

イエスは、真理を求める心と理解力とを破壊する偽りの教えの力を指摘された。「まただれも、古い酒を飲んでから、新しいのをほしがりはしない。『古いのが良い』と考えているからである」（ルカ 5：39）。父祖たちと預言者たちとを通して世に与えられてきたすべての真理は、キリストのみことばのうちに新しい美しさを放って輝いた。しかし律法学者たちとパリサイ人たちは、とうとい新しい酒を望まなかった。古い言い伝え、慣例、習慣を空にしてしまうまでは、彼らは、頭や心にキリストの教えを入れる余地がなかった。彼らはい

のちのない形式に執着し、生きた真理と神の力から離れた。このことが結局はユダヤ人を滅亡させたが、それはまたわれわれの時代にも多くの魂を滅亡させるであろう。マタイのふるまいの席でキリストから非難されたパリサイ人たちのように、幾千の者が同じあやまちを犯している。多くの者は心にいだいている何かの考えを放棄したり、何か大事な意見を捨てたりするよりは、むしろ光の父から与えられる真理をこばむのである。彼らは自分に信頼し、自分自身の知恵にたよっていて、自分の霊的な貧しさをみとめない。彼らは何かの方法である重要な働きをすることによって救われることを強調する。そしてその働きに自我を織り込む方法がないことを知ると、備えられた救いをこばむのである。　律法的な宗教は決して魂をキリストに導くことができない。なぜならそれは愛のない宗教、キリストのない宗教だから　である。自分を義とする精神に動かされての断食や祈りは、神の御目に憎むべきものである。荘厳な礼拝の集まり、宗教的儀式のくりかえし、外面的な苦行、強制的な犠牲などは、こう　したことを行う人が自分自身を義とし、天国にはいる資格があるとみなしていることを公告　している。しかしそれはまったくの欺瞞である。われわれは自分自身のわざによって救いを　買うことは決してできない。

キリストの時代にそうであったように、今日も同じである。パリサイ人たちは自分の霊的欠乏がわからない。彼らに次のような警告が与えられている、「あなたは、自分は富んでいる、豊かになった、なんの不自由もないと言っているが、実は、あなた自身がみじめな者、あわれむべき者、貧しい者、目の見えない者、裸な者であることに気がついていない。そこで、あなたに勧める。富む者となるために、わたしから火で精錬された金を買い、また、あなたの裸の恥をさらさないため身に着けるように、白い衣を買いなさい。また、見えるようになるため、目にぬる目薬を買いなさい」（黙示録　3：17、18）。信仰と愛は火で練られた金である。しかし多くの者にとって、金は光沢を失い、とうとい宝は失われた。キリストの　義は、彼らにとっては、着たことのない衣、ふれたことのない泉である。彼らに向かってこ　う言われている、「しかし、あなたに対して責むべきことがある。あなたは初めの愛から離　れてしまった。そこで、あなたはどこから落ちたかを思い起し、悔い改めて初めのわざを行

いなさい。もし、そうしないで悔い改めなければ、わたしはあなたのところにきて、あなたの燭台をその場所から取りのけよう」（黙示録 2：4、5）。

「神の受けられるいけにえは砕けた魂です。神よ、あなたは砕けた悔いた心をかろしめられません」（詩篇 51：17）。人は、最高の意味において、イエスを信じる者となることができる前に、自分自身をむなしくしなければならない。自我が放棄される時、主はその人を新しい人間にすることがおできになる。新しい袋は新しいぶどう酒を入れることができる。キリストの愛は新しいいのちをもって信者を生かす、われわれの信仰の創始者でありまた完成者であるおかたを見つめる人のうちに、キリストの品性があらわされるのである。

第 29 章安息日

安息日は創造の時に聖とされた。それは人のために定められたのだから、その起源は「明けの星は相共に歌い、神の子たちはみな喜び呼ばわった」時にあった（ヨブ 38：7）。平和が世界をおおっていた。地が天と調和していたからであった。「神が造ったすべての物を見られたところ、それは、はなはだ良かった」（創世記 1：31）。そこで神は、みわざを完成されたよろこびのうちに休息された。

神は安息日に休息されたので「神はその第 7 日を祝福して、これを聖別された」――すなわちこの日を聖なるご用のためにとりわけられた（創世記 2：3）。神はこの日を休息の日としてアダムにお与えになった。それは創造のみわざの記念で、神の力と愛のしるしとなった。「主はそのくすしきみわざを記念させられた」と聖書に書かれている（詩篇 111：4）。「被造物」は「神の見えない性質、すなわち、神の永遠の力と神性」とを「天地創造このかた」宣言している（ローマ 1：20）。

万物は神のみ子によって造られた。「初めに言があった。言は神と共にあった。……すべてのものは、これによってできた。できたもののうち、一つとしてこれによらないものはなかった」（ヨハネ 1：1～3）。安息、日は創造のみわざの記念であるから、それはキリストの愛と力のしるしである。 安息日はわれわれの思いを自然に向けさせ、われわれを創造主とのまじわりに入らせる。鳥の歌に、木々のささやきに、海の調べに、われわれは日の涼しいころエデンの園でアダムとお語りになった神のみ声をいまもきくことができる。こうしてわれわれは、自然界の中に神の力を見る時、そこに慰めを見いだすのである。なぜなら、万物をおつくりになったみことばは、魂にいのちを語ることばだからである。「『やみの中から光が照りいでよ』と仰せになった神は、判ストの顔に輝く神の栄光の知識を明らかにするために、わたしたちの心を照して下さったのである」（Ⅱコリント 4：6）。

歌を呼び起したのはこの思いであった。―― 「主よ、あなたはみわざをもって わたしを楽しませられました。 わたしはあなたのみ手のわざを喜び歌います。

主よ、あなたのみわざは 安息日はイスラエルのためだけでなく、世界のためであった。それはエデンで人に知らされ、十戒の中の他の戒めと同じに、不滅の義務である。この第 4 条が一部となっている律法について、キリストは、「天地が滅び行くまでは、律法の一点、一画もすたることはな」いと宣言しておられる（マタイ 5：18）。天と地がつづくかぎり、安息日は、創造主の力のしるしとしてつづくのである。そしてエデンがふたたびこの地上に栄える時に、神の聖なる休日は、天下のすべての者によってあがめられるのである。安息日ごとに、輝く新天地の住民は「わが前に来て礼拝する」と主は言われる（イザヤ 66：23）。

ユダヤ人に与えられた制度の中で彼らを周囲の国民から区別するのに安息日ほど役立ったものはなかった。神は、安息日を守ることが神の礼拝者である証拠となるように計画された。それは、彼らが偶像礼拝から離れ、真の神とつながっていることの証拠となるのであった。しかし安息日を聖とするためには、人は自ら聖でなければならない。信仰によって彼らはキリストの義にあずかる者とならねばならない。「安息日を覚えて、これを聖とせよ」との命令がイスラエルに与えられた時、主はまた彼らに、「あなたがたは、わたしに対して聖なる民とならなければならない」と言われた（出エジプト 20：8、22：31）。このようにしてのみ、安息日は、イスラエルを神の礼拝者として区別することができた。

ユダヤ人が神から離れ、信仰によってキリストの義を自分の義としなかった時、安息、日は彼らにとって、その意義が失われた。サタンは自分自身を高め、人々をキリストからひき離そうとつとめていた。そして彼は、安息日がキリストの力のしるしなので、これをゆがめるために働いた。ユダヤ人の指導者たちは、神の休みの日をやっかいな規則づくめにすることによって、サタンの意図を達成した。キリストの時代に、安息日はまったくゆがめられていたので、安息日を守る　ことは、愛に富まれる天父のご品性よりはむしろ利己的でわがままな人間の品性を反映していた。ラビたちは、神が、人の守ることのできない律法をお与え　になっていると事実上言っているのも同然だった。彼らは、人々に、神を暴君としてみさせ、神のご要求通りに安息日を守る時に、人は無情になり残酷になると考えさせた。このような　誤った観念をとり去ることがキリストの働きであった。ラビたちは冷酷な敵意をいだいてキ

リストについてまわったが、キリストは彼らの規則に一致しようとする様子さえお見せにならないで、神の律法に従って安息日を守りながらまっすぐ進まれた。

ある安息日に、救い主は、弟子たちと礼拝の場所から帰りながら、みのった麦畑を通りかかられた。イエスが遅い時間まで働きをつづけられたので、弟子たちは、畑を通りながら麦の穂をつみ、手でもんで、中の穀粒を食べ始めた。ほかの日だったら、この行為について人から何も言われることはなかった。麦畑や果樹園やぶどう園などを通りすぎる人は、食べたいものを自由にとってもよかったからである（申命記 23：24、25 参照）。しかし安息日にそうすることは、安息日をけがす行為とみられた。麦をつむことが一種の収穫であるばか　りでなく、それを手でもむことも一種の脱穀であった。こうして、ラビたちの意見によれば、二重の罪となるのであった。

スパイどもはすぐイエスに、「ごらんなさい、あなたの弟子たちが、安息日にしてはならないことをしています」と文句を言った（マタイ 12：2）。イエスは、ベテスダで、安息日を犯されたとの非難を受けられた時、ご自分が神のみ子であることを主張され、ご自分が　天父と一致して働いておられることを宣言して、ご自分を弁護された。いま弟子たちが攻撃　されたので、イエスは、旧約聖書から神の奉仕にたずさわっている人たちによって安息日に　なされた行為を例として引用し、それを非難者たちにお示しになる。　ユダヤの教師たちは、彼らの聖書の知識について誇っていたが、救い主の答えには、彼らが聖書を知らないことに　ついて、暗黙の譴責があった。イエスは言われた、「あなたがたは、ダビデとその供の者た　ちとが飢えていたとき、ダビデのしたことについて、読んだことがないのか。すなわち、神　の家にはいって、祭司たちのほかだれも食べてはならぬ供えのパンを取って食べ、また供の　者たちにも与えたではないか」。「また彼らに言われた、『安息日は人のためにあるもので、人が安息日のためにあるのではない。それだから、人の子は、安息日にもまた主なのであ る』」。「また、安息日に宮仕えをしている祭司たちは安息日を破っても罪にはならないこ　とを、律法で読んだことがないのか。あなたがたに言っておく。宮よりも大いなる者がここ　にいる」（ルカ 6：3、4、マルコ 2：27、28、マタイ 12：5、6）。

ダビデが、聖なるものとしてとっておかれたパンを食べて空腹を満たしたことが正しかったならば、弟子たちが安息、日の聖なる時間に麦をつんで、彼らの必要を満たしたことは正しかった。また宮の祭司たちは、安息日にはほかの日よりも大きな働きをした。世俗の働きを同じようにすれば罪となるのであるが、祭司の働きは神の奉仕であった。彼らはキリストのあがないの力をさし示す儀式を行っているのであつて、その働きは安息日の目的と一致していた。しかしいま、キリストご自身がおいでになっていた。弟子たちは、キリストの働きをすることによって、神の奉仕にたずさわっていた。そしてこの働きを遂行するのに必要なことを安息日にすることは正しかった。

キリストは、弟子たちにも敵にも、神の奉仕が何よりも第一であることを教えようとお思いになった。この世における神の働きの目的は、人のあがないである。したがって、この働きをなしとげるために安息日にしなければならないことは、安息日の律法と一致している。イエスは次にご自分の議論のしめくくりとして、ご自身のことを、「安息日の主である」――すなわちご自分があらゆる問題、あらゆる律法を超越するお方であることを宣言された。この無限の審判者であられるお方は、弟子たちが犯しているといって非難されたその戒めに照らして、彼らの非難が不当である ことを宣言された。 イエスは反対者たちに譴責を加えただけでこの問題をすまされなかった。イエスは、彼らが盲目になっているために、安息日の目的を誤解しているのだと宣言された。「『わたしが好むのは、あわれみであって、いけにえではない』とはどういう意味か知っていたなら、あなたがたは罪のない者をとがめなかったであろう」と主は言われた（マタイ 12：7）。彼らの熱意のない多くの儀式は、神の真の礼拝者たちの特徴であるまごころとやさしい愛に欠けているところを埋め合わせることができなかった。

ふたたびイエスは、いけにえそのものには何の価値もないという事実をくりかえされた。それは手段であって目的ではない。その目的は人を救い主にみちびくことで、そうすることによって人を神と一致させるのである。神がとうとばれるのは愛の奉仕である。これが欠けている時に、単なる儀式のくりかえしは、神にとって不快なものとなる。安息、日も同じである。安息日は人を神と交わらせるために計画された。しかしあきあきするような儀式に人

の心が奪われた時、安息日の目的はさまたげられた。単にうわべだけの安息日遵守は徒労であった。

またほかの安息日に、イエスは会堂にお入りになって、そこに手のなえた男をごらんになった。パリサイ人は、イエスがどうされるか熱心に見守っていた。救い主は安息日に人をいやせば律法を破る者とみなされることをよくご存じだったが、安息日のまわりにバリケードを築いていた言い伝えの規則という壁を打破するのにちゅうちょされなかった。イエスは、病気の男に立ちあがるようにお命じになり、それから「安息日に善を行うのと悪を行うのと、命を救うのと殺すのと、どちらがよいか」とおたずねになった（マルコ 3：4）。善をなす機会があるのにそれをしないのは、悪をなすことであるというのが、ユダヤ人の格言であった。いのちを救うことを無視するのは殺すことであった。このようにイエスはラビたちの立場に 立って、彼らに応対された。「彼らは黙っていた。イエスは怒りを含んで彼らを見まわし、 その心のかたくなのを嘆いて、その人に『手を伸ばしなさい』と言われた。そこで手を伸 ばすと、その手は元どおりになった」（マルコ 3：4、5）。

イエスは、「安息日に人をいやしても、さしつかえないか」と質問された時、「あなたがたのうちに、1 匹の羊を持っている入があるとして、もしそれが安息日に穴に落ちこんだなら、手をかけて引き上げてやらないだろうか。人は羊よりも、はるかにすぐれているではないか。だから、安息日に良いことをするのは、正しいことである」とお答えになった（マタイ 12：10～12）。 スパイたちは自分たちが困難な立場におちいることを恐れて、群衆の前ではあえてキリストに答えなかった。彼らはイエスが事実をお語りになったことがわかっていた。動物の場合にはほおっておくと所有者の損失になるので、彼らはその動物を救おうと思うのであるが、人間の場合には、言い伝えを犯すよりはむしろその人間を苦しむままにほおっておくのだった。このように、神のみかたちにつくられた人間よりも口のきけない動物に対してずっと深い注意が払われた。このことはすべてのまちがった宗教の働きを例示している。そうした宗教は、神よりも自分を高めたいという人間の欲望から出発しているが、その結果は人間を動物よりも低いところへ堕落させる。神の主権にさからって戦う宗教は、すべて創造の時人のものであった栄光を、またキリストを通して人に回復される栄光を、人間

からだましとるのである。まちがった宗教は人間の貧困、苦難、権利などを気にかけないようにと信者に教える。福音は、キリストの血によって買われた者として人間を高く評価し、人間の必要と苦悩をやさしくかえりみるようにと教える。主は「わたしは人を精金よりも、オフルのこがねよりもとうとくする」と言われる（イザヤ 13：12・英語訳）。

安息日に善をなすのと悪をなすのと、またいのちを救うのと殺すのと、どちらが律法にかなっているかという質問で、イエスがパリサイ人に迫られた時、彼はパリサイ人を彼ら自身の邪悪な目的に直面させられた。彼らは、激しい憎しみをもって、イエスのいのちを ねらっていたが、イエスはいのちを救い、民衆に幸福をもたらしておられた。キリストがされたように、苦しんでいる者を安息日にいやすよりは、彼らが計画していたように安息日に殺す方がよかっただろうか。神の聖なる日にすべての人に対する愛を心にもち、その愛が憐れみの行為となってあらわれるよりは、心の中で殺人をする方が正しかっただろうか。

イエスは手のなえた人をいやすことによって、ユダヤ人の慣習を責め、第 4 条の戒めを、神がお与えになったままの立場におかれた。「安息日に良いことをするのは、正しいことである」とイエスは宣言された（マタイ 12：12）。イエスについて文句をいっている人々が神の聖日をけがしていた時に、イエスは、ユダヤ人の無意味な制限を一掃することによって、 安息日をとうとばれた。 キリストは律法を廃されたと主張する人々は、キリストが安息日を 破り、また弟子たちが同じことをしてもこれを正しいとされたと教える。このようにして彼 らは、あらさがしをしたユダヤ人と事実上同じ立場をとっている。この点において彼らは、「わたしがわたしの父のいましめを守ったので、その愛のうちにおる」と宣言されたキリストご自身のあかしと矛盾している（ヨハネ 15：10）。救い主も弟子たちも安息日の律法を破られたのではなかった。キリストは律法の生きた代表者であられた。キリストは一生の間律法の聖なる戒めを一つも破られなかった。あかしの国民でありながら、イエスを罪に定める機会をねらっていた彼らをごらんになって、イエスは、「あなたがたのうち、だれがわたしに罪があると責めうるのか」と言われたが、これに挑戦できる者はいなかった（ヨハネ 8：46）。

救い主は、父祖たちと預言者たちの語ったことを廃するためにおいでになったのではなかった。なぜなら、これらの代表者たちを通してお語りになったのは、キリストご自身であったからである。神のみことばのすべての真理は、キリストから与えられた。しかしこのようなはかり知ることのできない価値をもった宝石が、まちがった台にはめられていた。そのとうとい光は、誤謬に奉仕させられていた。神はそれらの宝石が誤謬という台からとりはずされて、真理のわくにはめなおされるように望まれた。この働きをなしとげることができるのは、神のみ手だけだった。真理は誤謬とむすびつくことによって、神と人との敵の働きに役立っていた。キリストは真理を、神の栄えをあらわし、人類の救いに役立つような位置におくためにおいでになったのだった。

「安息日は人のためにあるもので、人が安息日のためにあるのではない」とイエスは言われた。神がお定めになった制度は人類のためである。「すべてのことは、あなたがたの益」である。「パウロも、アポロも、ケパも、世界も、生も、死も、現在のものも、将来のものも、ことごとく、あなたがたのものである。そして、あなたがたはキリストのもの、キリストは神のものである」（Ⅱコリント 4：15、1 コリント 3：22、23）。神は安息日の戒めがその一部となっている十戒の律法を祝福として民にお与えになった。「そして主はこのすべ　ての定めを行えと、われわれに命じられた。これはわれわれの神、主を恐れて、われわれが、つねにさいわいであり、また今日のように、主がわれわれを守って命を保たせるためである」とモーセは言った（申命記　6：24）。また詩篇記者を通してイスラエルに次のようなメッセージが与えられた。「喜びをもって主に仕えよ。歌いつつ、そのみ前にきたれ。主こそ神で　あることを知れ。われらを造られたものは主であって、われらは主のものである。われらは　その民その牧の羊である。感謝しつつ、その門に入り、ほめたたえつつ、その大庭に入れ。　主に感謝し、そのみ名をほめまつれ」（詩篇 100：2～4）。「安息日を守って、これを汚さ」ないすべての人について、主は、「わたしはこれをわが聖なる山にこさせ、わが祈の家のう　ちで楽しませる」と宣言しておられる（イザヤ 56：6、7）。

「それだから、人の子は、安息日にもまた主なのである」（マルコ 2：28）。このことばは教えと慰めとに満ちている。安息日は人のためにつくられたのだから、それは主の日で

ある。それはキリストのもので ある。なぜなら「すべてのものは、これによってできた、できたもののうち、1 つとしてこれによらないものはなかった」からである（ヨハネ 1：3）、キリストは万物をおつくりになったのだから、キリストが安息日をつくられた。キリストによって、安息日は創造のみわざの記念として聖別された。安息日は、キリストを創造主またきよめるお方としてさし示す。安息口は、天地の万物をおつくりになって、すべてのものを保っておられるキリストが、教会の首長であられるということ、またキリストの力によってわれわれは神と和解させられるということを宣言している。なぜならキリストは、イスラエルについて語って、「わたしはまた彼らに安息日を与えて、わたしと彼らとの間のしるしとした。これは主なるわたしが彼らを聖別したことを、彼らに知らせるためである」と言われたからである（エゼキエル 20：12）。だから安息日は、われわれを聖としてくださるキリストの力のしるしである。そしてそれは、キリストが聖とされるすべての人に与えられているのである。キリストのきよめの力のしるしとして、安息日は、キリストを通して神のイスラエルの一部となるすべての人に与えられているのである。

主はまたこう言われる、「もし安息日にあなたの足をとどめ、わが聖日にあなたの楽しみをなさず、安息日を喜びの日と呼び、主の聖日を尊ぶべき日ととなえ」るならば、「その時あなたは主によって喜びを得」る（イザヤ 58：13、14）、安息、口をキリストの創造とあがないの力のしるしとして受け入れるすべての人にとって、この日は楽しみとなる。彼らはその中にキリストを見いだし、キリストのうちにあってよろこぶ。安息日は創造のみわざをあがないにおけるキリストの大いなる力の証拠として彼らにさし示す。それはエデンの失われた平和を心に呼びもどすとともに、救い主を通して回復された平和を告げている。こうして自然界の事物の一つ一つは、「すべて重荷を負うて苦労している者は、わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう」とのキリストの招きをくりかえしている（マタイ 11：28）。

第 30 章 12 弟子の任命

「さてイエスは山に登り、みこころにかなった者たちを呼び寄せられたので、彼らはみもとにきた。そこで 12 人をお立てになった。彼らを自分のそばに置くためであり、さらに宣教につかわ」すためであった（マルコ 3：13、14）。 使徒としての務めに 12 人が召され、山上の垂訓が与えられたのは、ガリラヤの海から少し離れた山の中腹の木蔭においてであった。野原や山は、イエスが好んで行かれた場所で、イエスの教えの多くは、宮や会堂の中よりもむしろ青空の下でなされた。イエスについてくる群衆を収容しきれる会堂はなかった。イエスが野や森で教える方がよいとお思いになった理由は、それだけではなかった。イエスは自然の景色がお好きだった。静かなひっこんだ場所は、みなイエスにとって聖なる宮であった。

地上の最初の住民が彼らの聖所として選んだのはエデンの木の下であった。そこでキリストは、人類の父祖と交わられた。楽園から追放された時も、アダムとエバは、やはり野や森の中で礼拝し、キリストは、そこで、彼らに恵みの福音をもってお会いになった。マムレのかしの木の下で、アブラハムと語られたのは、キリストであった。キリストはまた、夕暮れに野で祈るために出てきたイサクと語り、ベテルの丘でヤコブと語り、ミデアンの山でモーセと語り、羊の群れの番をしていた少年ダビデと語られた。15 世紀にわたって、ヘブル人が毎年 1 週間家を離れ、「美しい木……なつめやしの枝と、茂った木の枝と、谷のはこやなぎの枝」などの緑の小枝でつくられた仮小屋に住んだのは、キリストのさしずによってであった（レビ 23：40）。

弟子たちを訓練するにあたって、イエスは都会の混雑から離れて、ご自分が彼らに教えようと望んでおられる克己の教訓にもっとよく調和している静かな野と丘をお選びになった。 またイエスは、その公生涯の間、青空の下のどこか草の茂った山腹や、湖の岸辺に人々を集めるのがお好きだった。ここでイエスは、ご自分の創造のみわざにかこまれて、聴衆の思いを人工的なものから自然界の事物へ向けることがおできになった。自然界の事物の成長と発展の中に、キリストのみ国の原則があらわされていた。人々が目をあげて神の山を見、

神のみ手の不思議なみわざをながめる時に、彼らは、神の真理についてとうとい教訓を学ぶことができた。キリストの教えは、自然界の事物を通して、彼らにくりかえされるのであった。心の中にキリストを宿して野に行く人はみな、これと同じ経験をするのである。彼らは、自分たちが聖なる感化にかこまれているのを感ずる。自然界の事物は、われらの主の譬をとりあげ、また主の勧告をくりかえしている。自然界の中で神と交わることによって、人はその思いが高められ、心が休まるのである。

キリストがこの世を去られた後に、地上におけるキリストの代表者となる教会を組織するのに、いまその第一歩がふみ出されるのであった。弟子たちはぜいたくな聖所を自由に使うことはできなかったが、救い主は、彼らをご自分の好きなかくれ場へつれて行かれたので、その日の経験は、彼らの心の中で山や谷や海の美しさと永遠にむすびついた。　イエスは、弟子たちを証人としてつかわし、イエスについて見聞きしたことを世にのべつたえさせるため　に、彼らを召されたのであった。彼らの任務は、人類がこれまでに受けた任務の中で最も重　要なものであって、ただキリストご自身の任務に次ぐものであった。彼らは、世の救いのた　めに神と共に働く者となるのであった。旧約聖書の中で、12 人の父祖たちがイスラエルの代表者どなっているように、12　人の使徒たちは、福音を伝える教会の代表者となるのであっ た。

救い主は、ご自分が選ばれた人々の性格をご存じだった。彼らの弱点やまちがいはみな、イエスにはっきりわかっていた。イエスは、彼らが経験しなければならない危険や、彼らの上に負わされる責任を知っておられた。だからイエスのお心は、この選ばれた人々の上にそそがれていた。ガリラヤの海に近い山の上で、イエスはただ 1 人、一晩中彼らのために祈られたのに、弟子たちは、山のふもとで眠っていた。夜明けの光がさしてくると、イエスは、　彼らを呼んでこちらにくるようにと招かれた。彼らに伝えなければならない何か重大なこと　があったからである。

これらの弟子たちは、ある期間イエスといっしょに活動的な働きにたずさわった。ヨハネとヤコブ、アンデレとペテロは、ピリポ、ナタナエル、マタイといっしょに、ほかのだれよりも親しく、イエスと交わり、イエスの奇跡を、だれよりも多く見てきた。中でもペテロ

とヤコブとヨハネは、一層イエスと親しい関係にあった。彼らは、ほとんどたえまなくイエスといっしょにいて、その奇跡を見、そのみことばを聞いてきた。特にヨハネは、イエスと親しかったので、イエスから愛される者として目立っている。救い主は、彼らをみな愛されたが、ヨハネが最も感受性の強い心を持っていた。彼はほかの人たちよりも年が若く、ほかのだれよりも子供のようにつつみかくしのない信頼をもって、イエスに心を開いた。このようにヨハネは、イエスに対してだれよりも心をよせていたので、彼を通して、救い主の最も深い霊的な教えが、イエスの民に伝えられた。

使徒たちが分けられているグループの一つの最初に、ピリポの名前がある。彼は、イエスが「わたしについてきなさい」とはっきり命令をお与えになった最初の弟子であった。ピリポは、アンデレとペテロの町であるベツサイダの出身だった。彼は、バプテスマのヨハネの教えを聞き、ヨハネがキリストを神の小羊として宣言するのを聞いた。ピリポは真理のまじめな探求者だったが、信じるのが遅かった。彼はキリストに連なる者になったけれども、彼がナタナエルにキリストのことを知らせたことばには、イエスの神性について完全な確信をもっていなかったことがあらわれている。キリストは、天からの声によって神のみ子 として宣言されたのであったが、ピリポにとっては、彼は「ヨセフの子、ナザレのイエス」であった（ヨハネ 1：45）。また 5000 人に食物が与えられた時、ピリポの信仰の足りなさがあらわれた。イエスが、「どこからパンを買って来て、この人々に食べさせようか」とおたずねになったのは、ピリポをためすためであった。ピリポの答えは不信に傾き、彼は、「200デナリのパンがあっても、めいめいが少しずついただくにも足りますまい」と言った（ヨハネ 6：5、7）。

イエスは悲しまれた。ピリポは、イエスのみわざを見、イエスの力を感じていたにもかかわらず彼には信仰がなかった。ギリシャ人が、イエスについてピリポにたずねた時にも、彼は、救い主を彼らに紹介する機会ととらえずに、アンデレに行って告げた（ヨハネ 12：20～22 参照）。またキリストの十字架を前にした最後の時にも、ピリポのことばは、信仰をくじくようなことばであった。トマスがイエスに、「主よ、どこへおいでになるのか、わたしたちにはわかりません。どうしてその道がわかるでしょう」と言った時、救い主は「わたし

は道であり、真理であり、命である。……もしあなたがたがわたしを知っていたならば、わたしの父をも知ったであろう」とお答えになった。するとピリポの口から、「主よ、わたしたちに父を示して下さい。そうして下されば、わたしたちは満足します」との不信の答が出た（ヨハネ 14：5～8）。3 年間イエスといっしよにいたこの弟子は、このように心がにぶく、信仰が弱かった。

ピリポの不信にくらべてよろこばしいのは、ナタナエルの子供のような信頼であった。彼は非常に熱心な性質の男で、目に見えない実体を信仰によってとらえていた。しかしピリポは、キリストの学校の生徒だったので、天来の教師イエスは、彼の不信と愚かさを忍耐強く忍ばれた。聖霊が弟子たちの上にそそがれた時、ピリポは、天の命令に従って教師となった。彼は、自分が何について語っているかを知っていて、確信をもって教えたので聴衆を心服させた。 イエスが弟子たちを按手礼のために準備しておられた時、召されていないのに仲間に加わりたいと強要した者があった。それはイスカリオテのユダという男で、自らキリストの弟子と名乗っていた。いま彼はやってきて、弟子たちの仲間に入れてもらいたいとたのんだ。彼は非常な熱心さと、見たところ真実な様子で、「先生、あなたがおいでになる所なら、どこへでも従ってまいります」と断言した。イエスは彼をことわることも歓迎することもなさらず「きつねには穴があり、空の鳥には巣がある。しかし、人の子にはまくらする所がない」と悲しいことばを言われただけだった（マタイ 8：19、20）。ユダは、イエスがメシヤであると信じた。そして使徒たちに加わることによって、新しい王国の高い地位を占めようと望んだ。イエス 1 は、ご自分の貧しさを語ることによって、この望みをた 1 ち切ろうと考えられた。

弟子たちは、ぜひユダに仲間の 1 人になってもらいたいと望んだ。ユダは、堂々たる外見をそなえ、鋭い洞察力と実行力とを持った男だったので、弟子たちは、イエスの働きに大きな助けになる人物として、彼をイエスに推薦した。彼らは、イエスがこんなに冷淡にユダに応対されるのを見て驚いた。 弟子たちは、イエスがイスラエルの指導者たちの協力を求めようとされないので、非常に失望していた。こうした有力な人たちの支持を得て、キリストの働きを強化しようとしないのはまちがっていると、彼らは思った。もしイエスがユダを拒

絶されたら、弟子たちは、心の中で、主の知恵を疑ったことだろう。その後のユダの経歴は、神の働きに適する人物かどうかを決定するのに世俗的な考慮を重んじることが、危険であることを弟子たちに示すことになった。弟子たちが熱心に望んだような人々に協力してもらうことは、その働きを最悪の敵の手に売り渡すことになったであろう。

しかしユダは、弟子となった時、キリストの品性の美しさに気がつかなかったわけではなかった。彼は、魂を救い主にひきよせている神の力の感化力を感じた。「いためられた葦を折ることがなく、煙っている燈心を消すこともない」ためにおいでになったイエスは、たった一つの思いでも光に向けられている間は、 この魂を拒絶しようとされなかった（マタイ12：20）。救い主はユダの心をお読みになり、ユダが神の恵みによって救われなければ不義の深みに沈んでしまうことをご存じだった。この男をご自分に結びつけることによって、イエスは、ご自身のわきあふれる無我の愛に日々ふれることのできるところに彼を置かれた。もしユダが心をキリストに向かって開くなら、神の恵みは利己主義という悪鬼を追い出し、たとえユダでも神のみ国の住民となるかもしれない。

もし人々が訓練され、神について学ぶなら、神は彼らを人間的な要素のある品性のままに受け入れて、神のご用のために彼らを養成される。彼らは完全な人間だから選ばれるのではなくて、不完全な人間であるにもかかわらず、真理を知りこれを実行することにより、またキリストの恵みによって、神のみかたちに変えられる者となるために選ばれるのである。 ユダは、ほかの弟子たちと同じように機会が与えられた。彼は、同じとうとい教訓を聞いた。しかしキリストが要求された真理の実行は、ユダの心の思いや目的とくいちがっていたので、彼は、神からの知恵をうけるために、自分の考えを放棄しようとしなかった。

救い主は、ご自分を売り渡す者となるこの男を、どんなにやさしくとり扱われたことだろう。イエスは、ご自分の教えを通して、貪欲な心を根絶する慈善の原則についてこんこんとさとされた。イエスは、ユダの前に貪欲という憎むべき性格をお示しになった。この弟子は自分の性格が描写され、自分の罪が指摘されているのを幾度も認めたが、自分の不義を告白してこれを捨てようとしなかった。彼は自分に満足していたので、誘惑に抵抗しないで、その不正な行為をつづけた。キリストは、彼の目の前にあって生きた模範となり、もし彼が

天来の仲保と奉仕による益を受けるなら、どんな者になり得るかをお示しになったが、どの教訓もどの教訓もユダは無関心に聞き流した。

イエスは、ユダの貪欲を鋭いことばで譴責されないで、開かれた本を読むようにユダの心を読んでおられる証拠を示された時でも、天来の忍耐心をもって、このあやまちを犯している男を忍ばれた。イエスは、彼の前に正しい行為の最高の動機をお示しになった。ユダが天の神の光をしりぞけるなら、彼はもはや弁解の余地がないのである、 ユダは、光の中を歩まないで、自分の欠点を持ちつづけることをえらんだ。悪い欲望、復讐の熱情、暗い不きげんな思いが宿り、ついにはサタンがこの男を全面的に支配した。ユダはキリストの敵の代表者となった。

ユダがイエスと交わるようになった時、彼のうちには、教会にとって祝福となることができたかもしれないとうとい品性の特徴がいくつかあった。もし彼が喜んでキリストのくびきを負っていたら、使徒たちの中の主だった者となったかも知れなかった。だが彼は、自分の欠点が指摘されると、心をかたくなにし、高慢心と反抗心のままに、自分自身の利己的な野望を選び、神が彼にさせようと望まれた働きにふさわしくない者となった。 イエスが弟子たちをご自分の奉仕に召されたとき、彼らは全部ひどい欠点を持っていた。柔和で心のへり くだったお方と最も親密に交わったヨハネでさえ、生れつき柔和で従順な人間ではなかった。彼とその兄弟は、「雷の子」と呼ばれた。彼らがイエスと一緒にいた時に、イエスに対して だれかが軽蔑でも示そうものなら、彼らは憤慨してけんか腰になるのだった。短気、復讐心、批判の精神といったものがすべてこの愛された弟子のうちにあった。彼は高慢で、神の国で は第 1 位の者になりたいという野心をもっていた。しかし 1 日 1 日、自分自身の激しい気性 と対照的に、彼は、イエスの柔和と寛容とを見、謙遜と忍耐についてイエスの教訓を聞いた 彼は天来の感化に向かって心を開き、救い主のみことばをきく者となるばかりでなく、これ を行う者となった。自我はキリストのうちにかくれた。彼はキリストのくびきを負い、キリ ストの重荷を負うことを学んだ。

イエスは弟子たちをしかり、彼らに警告し、また注意された。しかしヨハネとその兄弟たちは、イエスから離れなかった。彼らは、しかられたにもかかわらずイエスをえらんだ。

救い主は、彼らに欠点とまちがい があるからといって、彼らから離れるようなことをなさらなかった。彼らは、終わりまでイエスと試練を共にし、イエスの生活から教訓を学んだ。キリストを見ることによって、彼らの品性が一変した。

使徒たちは習慣も気質もまったくちがっていた。取税人のレビ・マタイと、ローマの権威を徹底的に憎んでいた激しい熱心党のシモンがいたし、気前がよくて直情的なペテロと、卑劣な精神の持ち主ユダがいたし、まごころはあるが内気で心配性のトマスと、心の動きがにぶくて疑い深いピリポ、また野心的で率直なゼベダイの子たちがその兄弟たちとともにいた。この人たちは、いろいろな欠点と、みな先天的後天的な悪への傾向を持ったまま集められた。しかしキリストのうちにあって、またキリストを通して、彼らは、神の家族のうちに住み、信仰において、教理において、精神において一つとなることを学ぶのであった。彼らは、試練も、苦情も、意見の相違もあったが、しかしキリストが彼らの心に住んでおられるかぎり、不和があるはずはなかった。キリストの愛がお互いの愛となり、主の教訓がすべての不和を一致へみちびき、弟子たちは一体となって、ついには一つの心、一つの意見となるのであった。キリストが真の中心であり、彼らはその中心に近づくにしたがって、お互いに接近するのであった。

イエスは、弟子たちへの教えを終えられた時、この小さな一団をまわりに集めて、その中心にひざまずき、ご自分の手を彼らの頭の上におき、彼らを聖なる働きにささげる祈りをささげられた。こうして、主の弟子たちは、福音の働きに任命された。 人々の中にあってキリストを代表する者として、キリストは、全然堕落したことのない天使たちをお選びにならず、救おうとする相手の人間と同じ情を持った人間をお選びになる。キリストは、人性に触れるためにご自分も人性をおとりになった。神性は人性を必要とした。なぜなら、救いを世に伝えるためには、神と燗とが必要だったからである。人性が神と人との間の伝達のチャンネルとなるように、神性は人性を必要とした。キリストのしもべたちと使者たちも同様である。人は、自分のうちに神のみかたちを回復し、神の働きをなすことができるようになるためには、自分以外のそして自分以上の力が必要である。だからといって、人間の力が不要だ

ということにはならない。人性は神の力をとらえ、信仰によって、キリストが心のうちにお住みになる。こうして神との協力によって、人の力は善をなすのに効果的となる。

ガリラヤの漁師をお召しになったイエスは、いまもなお人々をご自分の奉仕に召しておられる。しかもイエスは、最初の弟子たちを通して力をあらわされたのと同じに、われわれを通してよろこんで力をあらわされる。われわれがどんなに不完全で罪深い者であろうと、主はわれわれに、キリストとの共同者、キリストに見習う者となるようにとの招きを提供しておられる。キリストと 1 つになって神のみわざに働くことができるように、神の教えを受けなさいと、主はわれわれを招いておられる。 「しかしわたしたちは、この宝を土の器の中に持っている。その測り知れない力は神のものであって、わたしたちから出たものでないことがあらわれるためである」（Ⅱコリント 4：7）。福音の宣伝が、天使にまかされないで、あやまちの多い人間にまかされた理由はここにある。人間の弱さを通して働く力は神の力であることが明らかである。こうしてわれわれは、われわれと同じように弱いほかの人を助けることのできる力が、われわれを助けることができるということを信じたくなる。自分自身「弱さを身に負うている」者は、「無知な迷っている人々を、思いやることができる」（ヘブル 5：2）。自分自身が危険の中にあったために、彼らは道中の危険と困難をよく知っており、そのために彼らは、同じような危険のうちにあるほかの人々に手をさしのべるために召されているのである。疑いに悩み、弱さに苦しみ、信仰弱く、目に見えない神をとらえることのできない魂がいる。しかし彼らの目に見える友人がキリストの代りに彼らのところにやってきて、彼らのふるえている信仰をキリストに固くつなぐ環とすることができる。

われわれは、キリストを世に紹介するのに、天使た ちと共に働く者となるのである。ほとんどじっとしていられないような熱心さで、天使たちは、われわれの協力を待っている。なぜなら人間が、人間と通信するチャンネルとならねばならないからである。だからわれわれが全心全霊をもってキリストに献身する時、天使たちは、神の愛をあらわすためにわれわれの声を通して語ることができるので喜ぶのである。

第 31 章山上の垂訓

キリストは、ご自分の言葉をきかせるために、弟子たちだけをお集めになったことはめったになかった。主はいのちの道を知っている者だけを聴衆としてお選びにならなかった。無知とまちがいの中にある大衆の心に訴えることがイエスの働きであった。主は真理についての教えを人々のにぶい理解力でわかる範囲でお教えになった。イエスご自身が真理であって、彼は腰に帯をしめ、祝福するためにいつでも手をさし出して立ち、みもとにくるすべての者を、戒めと訴えと励ましのことばをもって、高めようとされた。　山上の垂訓は特に弟子たちに与えられたものであったが、それは群衆の聞いているところで語られた。使徒たちの　按手礼（あんしゅれい）ののち、イエスは彼らと海辺へ行かれた。ここに朝早くから人々が　集まり始めていた。ガリラヤの町々からやって来るいつもの群衆のほかに、ユダヤから、エ　ルサレムからさえ、またペレヤから、デカポリスから、ユダヤの南のイドマヤから、地中海　沿岸のフェニキヤの都市ツロやシドンからも、人々がやってきた。彼らはイエスの「なさっ　ていることを聞いて」「教を聞こうとし、また病気をなおしてもらおうとして」やってきた。そして「力がイエスの内から出て、みんなの者を次々にいや（された）」（マルコ　3：8、ルカ 6：18、19）。

せまい海辺では、イエスのみ言葉を聞こうと望む人たちがみな、そのみ声のとどく範囲に立つ余地もなかったので、イエスは山の中腹まで道を退かれた。おびただしい群衆のために気持ちのよい集合場所になっている平らな場所にこられると、イエスはご自分から草の上にすわられたので、弟子たちも群衆もイエスにならってすわった。 弟子たちの場所は、いつもイエスの隣だった。人々は絶えずイエスのそばに押しよせたが、弟子たちは、イエスの前から押し出されてはならないことを知っていた。彼らはイエスの教えを一言葉も聞きもらさないように、イエスのすぐそばにすわった。彼らは、すべての国すべての時代に知らせる真理を理解しようと、熱心に注意深く耳をかたむけた。

彼らは、いつもとちがった何ものかが期待されるような気がして、今イエスの周りにつめかけた。彼らはみ国がまもなく建設されることを信じていたので、その朝の出来事から、

み国について何か発表がなされようとしているという確信をいだいていた。群衆にもまた期待の感情がみなぎり、熱心な顔が深い興味を物語っていた。人々が緑の丘にすわって天来の教師イエスのみ言葉を待っていると、彼らの心は、将来の栄光についての思いで満たされた。そこには、憎むべきローマ人を支配して、世界の大帝国の富と栄光とを、自分たちの手におさめる日を待望している学者たちとパリサイ人たちがいた。貧しい百姓や漁師たちは、彼らのみじめなあばら家、乏しい食物、苦労の生活、欠乏の心配が、ぜいたくな邸宅と安楽な日々に取り替えられるという保証を聞きたいと望んだ。昼は体にまとい、夜は毛布となっている 1枚のぞまつな外衣のかわりに、彼らは、キリストが彼らの征服者たちの高価な美しい衣服を与えてくださることを望んだ。もうすぐイスラエルが、主の選民として諸国民の前にあ がめられ、エルサレムが世界帝国の首都として高められるのだという誇らしい望みに、すべ ての心が高鳴った。

キリストは世俗的な偉大さへの望みをくじかれた。 山上の垂訓の中で、キリストは、まちがった教育によってなされた働きをもと通りにし、キリストのみ国とご自身の品性につい て、正しい観念を聴衆に与えようとされた。しかし彼は民の間違いを直接に攻撃されなかっ た。イエスは、罪のために世の人々がおちいっている不幸をごらんになったが、その悲惨な 状態をまざまざと彼らの前にえがいてみせるようなことをされなかった。イエスは彼らが知 っていたものよりももっと無限にすぐれた何ものかを彼らにお教えになった。神のみ国につ いての彼らの考え方と戦おうとしないで、イエスはそこへ入る条件を彼らに語り、み国の性 質については彼らが自分で結論をひき出すのにまかされた。イエスのお教えになった真理は、イエスについてきた群衆に劣らずわれわれにとっても重要である。われわれも彼らと同じに 神のみ国の根本的な原則を学ぶ必要がある。

山の上で、キリストが民に語られた最初の言葉は祝福の言葉であった。自分の霊的な貧しさを認めて、あがないの必要を感ずる者はさいわいであるとイエスは言われた。福音は、貧しい人たちにのべつたえられるのである。福音は、霊的に高慢な人たち、すなわち自分は富んでいる、何も必要なものはないと主張する人たちに示されないで、へりくだり、くだけ

た心を持っている人たちに示される。罪を洗いきよめる泉はただ一つしかない。それは心の貧しい者のために開かれている泉である。

高慢な心は、自分の行為によって救いを得ようと努力する。しかし天国に入る権利書と資格はキリストの義のうちにある。自分自身の弱さを自覚し、すべてのうぬぼれを取り去って、自分自身を神の支配にまか世るまでは、主は、その人の回復のために何もすることがおできにならない。自分自身を神にまかせる時に、彼は、神が与えようと待っておられる賜物を受けることができる。必要を感じている魂にはどんなものも与えられないものはない。彼は、「すべての満ちみちた徳」の宿っている神に、何の制限もなく近づくことができる（コロサイ 1：19）。「いと高く、いと上な緒、とこしえに住む者、その名を聖ととなえられる者がこう言われる、『わたしは高く、聖なる所に住み、また心砕けて、へりくだる者と共に住み、へりくだる者の霊をいかし、砕けたる者の心をいかす』」（イザヤ 57：15）。

「悲しんでいる人たちは、さいわいである、彼らは慰められるであろう」（マタイ 5：4）。この言葉によって、キリストは、悲しむこと自体に罪の不義を取りのぞく力があると教えておられるのではない。主は、見せかけやわざとらしい謙遜を承認されない。イエスが言われた悲しむという言葉は、ふさぎこんだり、悲嘆にくれたりすることではない。われわれは罪のために悲しむが、一方では神の子であるという尊い特権を喜ぶのである。

われわれは、自分の悪い行為によって面白くない結果が自分自身にふりかかるために悲しむことがよくある。しかしこれは悔い改めではない。罪について本当に悲しむことは、聖霊の働きの結果である。みたまは、救い主を軽んじ悲しませた心の忘恩を示し、われわれをくだけた心をもって十字架のもとに行かせる。われわれが罪を犯す度に、イエスは新たな傷を受けられる。自分が刺したイエスを仰ぎ見る時、われわれは、イエスに苦悩を与えた罪について悲しむ。このように悲しむことによって、われわれは、罪を放棄するようになるのである。

世俗の人々は、この悲しみを一つの弱さと公言するかもしれない。しかしこれこそ、悔い改めた者をたちきることのできないきずなで限りないお方に結びつける力である。それは、

かたくなな心と罪とがのために失われた恩恵を、神の天使たちが魂にとり戻してくれていることを示す。悔い改めた者の涙は、聖潔という日光に先立つ雨のしずくにすぎない。この悲しみは、魂の中の生きた泉となる喜びの先ぶれである。「わたしの声に聞き従わなかったことを言いあらわせと、主は言われる。」「わたしは怒りの顔をあなたがたに向けない、わたしはいつくしみ深い者である。」「シオンの中の悲しむ者に喜びを与え、灰にかえて冠を与え、悲しみにかえて……さんびの衣を与えさせるためである。こうして、彼らは義のかしの木ととなえられ、 主がその栄光をあらわすために植えられた者ととなえられる」（エレミヤ3：13、12、イザヤ 61：3）。

試練と不幸の中にあって悲しむ人々のためにもまた慰めがある。悲嘆と屈辱のつらさは、罪にふけるよりもましである。神の恵みによって、われわれが自分の欠点にうち勝つことができるように、神は苦しみを通してわれわれの品性のけがれた点を示される。われわれ自身に関する未知の章が目の前に開かれ、神の譴責と勧告とを受け入れるかどうかがテストされる。試練に会った時、いらだったり、不平をいったりすべきでない。反抗したり心配したりして、キリストのみ手から離れてはならない。われわれは、神の前に魂をへりくだらせるのである。ものごとを自分の気に入るような光の中に見たがる者には、主の道はぼんやりとしか見えない。それはわれわれ人間の性質にとっては、暗く、喜びがないように見える。しかし神の道は憐れみの道であり、その終わりは救いである。エリヤが荒野でもう人生はたくさんだと言って、死にたいと祈った時、彼は自分のしていることがわからなかった。憐れみ深い主は、エリヤをその言葉通りには受けとられなかった。エリヤにはまだしなければならない大きな仕事があった。そして彼の仕事が終わった時、彼は荒野で落胆と孤独のうちに死ぬのではなかった。彼は死の塵の中へくだるのではなく、天の戦車に守られて栄光のうちに天のみ座のもとへ上るのであった。

悲しんでいる者に対する神のみ言葉はこうである。「わたしは彼の道を見た。わたしは彼をいやし、また彼を導き、慰めをもって彼に報い、悲しめる者のために、くちびるの実を造ろう」「わたしは彼らの悲しみを喜びにかえ、彼らを慰め、憂いの代りに喜びを与える」（イザヤ 57：18、エレミヤ 31：13）。 「柔和な人たちは、さいわいである」（マタイ 5:

5）。われわれが出会わねばならない困難は、キリストのうちにかくれている柔和によってずっと軽くなる。もしわれわれが、主の謙遜を身につけるなら、われわれは毎日受ける軽蔑や拒絶や迷惑などに超越し、そうしたものが心に暗い影をなげることがなくなる。クリスチャンのうちにある高貴なものについて最高の証拠は自制心である。ののしられたり、ひどい目にあわされたりした時、冷静な、信頼に満ちた精神を持ち続けない者は、神がご自身の完全な品性を彼のうちにあらわされる権利を神から奪うのである。へりくだった心は、キリストに従う者たちに勝利を与える力であり、それは彼らが天の宮とつながっている証拠である。

「主は高くいらせられるが低い者をかえりみられる」（詩篇　138：6）。キリストのへりくだった柔和な精神をあらわす者たちは、神からやさしく見守られている。彼らは、世の　人々からさげすみの目をもって見られるかも知れないが、神の御目には非常に尊いのである。賢明な人、偉大な人、慈善に富んだ人たちだけが、天の宮への旅券を獲得するのではない。　それはまた、熱心で、休まず活動している忙しい働き人だけでもない。そうだ、心の貧しい　者――キリストの内住を熱望し、謙遜な心をもち、神のみこころを行うことを最高の望みと している人こそ、十分に天国に入るのである。彼らは、衣を洗い、小羊の血によって衣を白　くした人たちの仲間に入るのである。「それだから彼らは、神の御座の前におり、昼も夜も　その聖所で神に仕えているのである。御座にいますかたは、彼らの上に幕屋を張って共に住　まわれるであろう」（黙示録 7：15）。

「義に飢えかわいている人たちは、さいわいである」（マタイ　5：6）。自分がどんなに無価値な者であるかを意識する時、心は義に飢えかわくようになるが、この思いは失望させられることがない。心にイエスを入れる余地をつくる者は、イエスの愛を認める。神のご品性のみかたちをそなえたいとあこがれる者はみな満足させられる。聖霊は、イエスを見ている魂を助けのないままにしておかれない。聖霊は判ストの事柄を取り上げて、それを魂に示される。もし目をキリストにそそいでいるなら、みたまの働きは、その魂が神のみかたちに一致するまでやまない。純粋な愛の要素が魂を拡大し、もっと高い教養と天の事物についてのもっと多くの知識を受け入れる余地を 与えるので、その魂は、完全に達するまでは満足

しない。「義に飢えかわいている人たちは、さいわいである、彼らは飽き足りるようになるであろう」（マタイ 5：6）。

憐れみのある人は憐れみを見いだし、心の清い者は神を見る。すべての不純な思いは魂をけがし、道徳観念をそこない、聖霊の印象をかき消してしまう。それは霊的な眼をくもらせるので、人々は神を見ることができない。主は、悔い改める罪人をお赦しになるだろうし、また実際お赦しになるが、しかし赦されても、その魂は損なわれている。霊的な真理をはっきり見わけたいと思う者は、言葉や思いにおける不純さを避けねばならない。　しかしキリストのみ言葉には、肉欲的なけがれがないとか、ユダヤ人が極力避けていた儀式上のけがれが　ないとかいうよりももっと深い意味がある。利己心は、われわれが神を見ることをさまたげ　る。利己的な精神は、神もまたまったく利己的なお方として判断する。この利己的な精神を　放棄しない限り、われわれは愛であられる神を理解することができない。無我の心、へりく　だって信頼する心だけが、神を「あわれみあり、恵みあり、怒ることおそく、いつくしみと、まこととの豊かなる神」として見ることができるのである（出エジプト 34：6）。

「平和をつくり出す人たちは、さいわいである」（マタイ 5：9）。キリストの平和は、真理から生まれる。それは神との調和である。世は神の律法に敵意をいだき、罪人たちは創造主に敵意をいだき、その結果、彼らは互に敵意をいだいている。だが詩篇記者は、「あなたのおきてを愛する者には大いなる平安があり、何ものも彼らをつまずかすことはできません」と断言している（詩篇　119：165）。人間は平和を製造することができない。個人や社会をきよめ、向上させる人間の計画は、人の心をとらえないので、平和を生み出さない。真　の平和をつくり出したり、永続させたりできる唯一の力は、キリストの恵みである。これが　心にうえつけられる時に、それは争いや不和をひき起す悪い欲望を追い出す、「いとすぎは、いばらに代って生え、ミルトスの木は、おどろに代って生える、」こうして人生の砂漠は、「喜びて花咲き、さふらんのように、さかんに花咲」くのである（イザヤ 55：13、35：1、2）。

群衆はこの教えに驚いた。それはパリサイ人の教えや手本とまったく異なっていた。幸福とはこの世の事物を所有することにあって、人間の名声と名誉こそ大いに望ましいもので

あると人々は考えるようになっていた。「ラビ」と呼ばれ、公衆の前に自分の美徳を並べたて、賢明で信仰心のあつい人だとほめそやされることが非常にうれしいのであった。こういうことがこの上ない幸福とみなされていた。ところがイエスは、あのおびただしい群衆の前で、この世の利得と名誉だけがそういう人たちの受ける報いの全部であると宣言された。イエスは、確信をもってお語りになり、その言葉には人々を説得する力があった。人々は沈黙し、ひそかに不安な思いにとらえられた。彼らは疑わしげに顔を見合わせた。もしこの人の教えが事実だったら、自分たちの中のだれが救われるだろう。多くの者は、このすばらしい教師が神のみたまに動かされておられることと、彼が語られた思想は神からのものであることを確信した。

真の幸福とはどういうものであるか、またそれはどのようにして得られるかを説明してから、イエスは、ほかの人たちを義と永遠の命の道へ導くために神から選ばれた教師としての弟子たちの義務をもっと明確にお示しになった。イエスは弟子たちが度々失望と落胆を味わうこと、彼らが断固たる反対に出会うこと、彼らがあざけられ、そのあかしが拒否されることなどをご存知だった。イエスのみ言葉に熱心に耳をかたむけたこのいやしい人たちが、彼らの使命を達成するにあたって、中傷、拷問、投獄、死に出会わねばならないことを、イエスはよく知っておられた。そこで主は言葉を続けてこう言われた。

「義のために迫害されてきた人たちは、さいわいである、天国は彼らのものである。わたしのために人々があなたがたをののしり、また迫害し、あなたがたに対し偽って様々の悪口を言う時には、あなたがたは、さいわいである。喜び、よろこべ、天においてあなた　がたの受ける報いは大きい。あなたがたより前の預言者たちも、同じように追害されたのである」（マタイ 5：10～12）。 世は罪を愛し、義を憎む。これがイエスに対する世の敵意の原因であった。イエスの限りない愛をこばむ者はみなキリスト教を一つの邪魔な要素と考える。キリストの光が、彼らの罪をおおっている暗黒をはらいのけ、改革の必要が明らかにされる。聖霊の感化に服する人は、自己との戦いを始めるが、罪に執着する人は、真理とその代表者たちに向かって戦いをいどむ。

こうして衝突が生じ、キリストに従う者たちは、民を悩ます者として非難される。しかし彼らに世の敵意が向けられるのは、彼らが神と交わっているからである。彼らはキリストへの非難を負っているのである。彼らは聖徒たちが通った道を歩いているのである。彼らは悲しみをもってではなく、喜びをもって、迫害に応ずべきである。激しい試練の一つ一つは、彼らを洗練するための神の手段である。その一つ一つは、彼らを神の共労者として彼らの働きにふさわしい者とする。一つ一つの戦いは、義のための大きな戦いの中にそれぞれの立場を占めていて、それは、彼らの最後の勝利に喜びをまし加える。このことを念頭におく時、彼らの信仰と忍耐の試みは、恐れて避けるよりも、むしろ喜んで受け入れられるであろう。神の僕たちは、世に対する彼らの義務を果たすことを心がけ、神から承認されることに彼らの望みをおいて、人を恐れたり人から好かれたりなどということにかかわりなく、一つ一つの義務を果たすのである。

「あなたがたは、地の塩である」とイエスは言われた（マタイ 5：13）。迫害をのがれるために世からかくれてはならない。神の愛の香りが世を堕落から守る塩となるように、あなたがたは人々の中に住むのである。 聖霊の感化に応ずる心は、神の祝福が流れるチャンネルである。もし神に仕える人々が地から取り去られ、神のみたまが人々の中からひきあげたら、この世は、サタンの支配の結果である荒廃と破壊にまかされるであろう。悪人たちにはわからないが、彼らに与えられるこの世のよいものでさえ、彼らが軽蔑し圧迫する神の民がこの世にいるために与えられるのである。しかしもしクリスチャンが、名前だけのクリスチャンなら、彼らはききめを失った塩のようなものである。彼らは世にあってよいことのために感化力を及ぼさない。彼らは神についてまちがった印象を与えるので、未信者よりも悪いのである。 「あなたがたは、世の光である」（マタイ 5：14）。ユダヤ人は、救いの恩恵を自国民だけに制限しようと考えた。しかしキリストは、救いは日光のようなものであることを彼らに示された。それは全世界のものである。聖書の宗教は、本の中や、教会の壁の内側にとじこめておかれるものではない。それは、自分自身のために時々とり出して、それからまた大事にしまいこんでおくものでもない。それは、日常の生活をきよめ、どんな実務上の取引にも、またわれわれのどんな社交関係にもあらわされるのである。

真の品性は、外部から形づくられて着せられるものではなく、内部から輝き出るものである。もしわれわれが人を義の道にみちびこうと望むなら、義の原則がわれわれ自身の心のうちに宿っていなくてはならない。われわれの信仰告白は、宗教の理論を公言するかもしれないが、真理のことばを示すものは、われわれの実際の敬虔さである。矛盾のない生活、きよい行状、変らない誠実、積極的で情深い精神、敬虔な模範――こうしたものが世に光を伝える手段である。 イエスは、律法のこまかい点までくわしく説明されなかったが、イエスが律法の要求を廃すうためにこられたのだと聴衆に結論させるようなことはされなかった。主は、スパイどもが一言葉一言葉をつかまえて、自分たちの目的に都合のよいようにこじつけようと待ちかまえているのをご存知だった。イエスは、聴衆の多くの者の心のうちにある偏見を知っておられたので、モーセを通して彼らに委託された宗教と制度に対する彼らの信仰を動揺させるようなことは何も言われなかった。道徳律も儀式上の律法も、キリスト ご自身がお与えになったのであった。イエスはご自分の教えに対する人々の信頼を破壊するためにおいでになったのではなかった。ユダヤ人のまわりに築かれている伝統的な資格という壁をイエスが打破しようとされたのは、律法と預言者とを非常に尊ばれたからであった。イエスは律法についてのまちがった解釈を取り除かれたが、その一方では、弟子たちがユダヤ人に委託された重大な真理を放棄するようなことのないように注意深く警戒された。

パリサイ人は、自分たちが律法に服従していることを誇っていた。しかし彼らは、毎日の生活を通して、律法の原則をほとんど知らなかったので、彼らには救い主のみ言葉が異端のように聞こえた。イエスが、真理を下にうずもれさせていたがらくたを取り除かれると、彼らは、イエスが真理そのものを一掃しておられるのだと思った。彼らは、イエスが律法を軽んじておられると、互いにささやき合った。イエスは彼らの心の思いを読んで、こうお答えになった。 「わたしが律法や預言者を廃するためにきた、と思ってはならない。廃するためではなく、成就するためにきたのである」（マタイ 5：17）。ここにイエスはパリサイ人の非難を反ばくしておられる。イエスは律法を破っておられると彼らが非難しているその律法の聖なる要求を擁護することが、イエスの世に対する使命である。もし神の律法が変更したり廃止したりできるものだったら、キリストは、われわれの罪とがの結果を身に負われる

必要はなかった。イエスは、律法と人との関係を説明し、自ら律法に従う生活をすることによって、その戒めを例示するためにおいでになった。 神は、人類を愛されるから、その聖なる戒めをわれわれにお与えになったのである。罪とがの結果からわれわれをかばうために、神は義の原則をお示しになっている。律法は神の思想のあらわれである。キリストのうちにあって受け入れられる時、それはわれわれの思想となる。それはわれわれを生来の欲望や性質の力から高め、また罪にいたる誘惑から高める。神はわれわれが幸福になることを望んでおられる。そこで神は、律法の戒めをお与えになったが、それは、われわれがこれに従うことによって、喜びを感ずるようになるためである。イエスの誕生にあたって天使たちが、

「いと高きところでは、神に栄光があるように、 地の上では、み心にかなう人々に平和があるように」 と歌った時、彼らは、イエスが拡大しそして尊いものとするためにおいでになった律法の原則を宣言していたのであった（ルカ 2：14）。 シナイで律法が布告された時、神は、ご自分の品性の聖なることを人々にお知らせになったが、それは、対照的に彼らが自 分自身の品性の罪深さを認めるためであった。律法は、彼らに罪を自覚させ、彼らに救い主 が必要であることを明らかにするために与えられた。律法は、その原則が聖霊によって心に 適用される時に、この働きをするのであった。律法は今もなおこの働きをするのである。キ リストの一生には律法の原則が明らかにされている。神の聖霊が心にふれるように、またキ リストの光が、罪を洗い清めるキリストの血と人を義とするキリストの義の必要とを人々に 明らかにするように、信仰によってわれわれが義とされるために、律法は今もなおわれわれ をキリストに導く手段である。「主のおきては完全であって、魂を生きかえらせ」る（詩篇19：7）。

「天地が滅び行くまでは、律法の一点、一画もすたることはなく、ことごとく全うされるのである」とイエスは言われた（マタイ 5：18）。天に輝く太陽、あなたの住んでいる大地は、神の律法が永遠不変のものであるという神の証人である。それらが過ぎ去ることがあっても、神の戒めは続くのである。「しかし、律法の一画が落ちるよりは、天地の滅びる方が、もっとたやすい」（ルカ 16：17）。イエスを神の子羊としてさし示していた象徴的な制度は、キリストの死とともに廃されるのであった。だが十戒の戒めは神のみ座と同じに不変

である。　「主のおきては完全」であるから、律法にはずれたことはすべて悪でなければならない。神の戒めに従　わず、人々にもそうするように教える者は、キリストから罪を宣告される。救い主は律法に服従した一生によって、律法の要求を支持された。それは人性のうちに　あっても律法を守ることができることを証明し、律法に従うことによって養われる品性のす　ばらしさを示した。キリストのように律法に従う者はみな同じように、律法が「聖であって、正しく、かつ善なるものである」とを宣言しているのである（ローマ　7：12）。一方、神の戒めを破る者はみな、律法が不正であって従うことのできないものであるというサタンの主　張を支持しているのである。こうして彼らは大敵サタンの欺瞞の後おしをし、神をはずかし　める。彼らは神の律法に最初に反抗した悪者サタンの子らである。もし彼らを天に入れるな　ら、再び不和と反抗の要素が持ちこまれ、宇宙の幸福は危険にさらされるであろう。律法の　ただ一つの原則でも、これを故意に無視する者は、だれも天国に入ることができない。

ラビたちは自分自身の義を天国へのパスポートとみなしたが、イエスは彼らの義を不十分な、価値のないものと断言された。パリサイ人の義は、外面的な儀式と、真理についての理論的な知識にあった。ラビたちは、律法を守る自分自身の努力によって、自分たちが聖潔であると主張した。だが彼らのわざは、義を宗教からひき離していた。彼らは儀式を守ることにはきちょうめんだったが、その生活は不道徳で、堕落していた。彼らのいわゆる義は、決して天国に入ることができなかった。 キリストの時代に人々の心のうちにあった最大の欺瞞は、真理にただ同意することが義であるということだった。真理を理論的に知っているということだけでは魂を救うのに不十分であることが、人間のあらゆる経験を通して証明された。それは義の実を生じない。いわゆる神学的な真理を熱心に重んじることは、生活にあらわされる真正の真理に対する憎しみをしばしば伴う。歴史の最も暗黒な幾章かは、頑迷な宗教家たちの犯した罪の記録を背負っている。パリサイ人はアブラハムの子であることを主張し、神のみ言葉を所有していることを誇った。しかしそうした特典も、彼らを利己主義、悪意、利得への貪欲卑劣な偽善から守らなかった。彼らは、自分たちが世界で最も偉大な宗教家であると思っていたが、彼らのいわゆる正統派的な信仰が、栄光の主を十字架につけさせたのであった。

同じ危険が今も存在している。多くの者は、ある神学上の教義に同意しているからというだけのことで、自分は当然クリスチャンだと思っている。だが彼らは、真理を実生活に持ちこまなかった、彼らは真理を信じてもいなければ、愛してもいなかった。したがって彼らは、真理の清めを通して与えられる力と恩恵とを受けなかった。人は、真理に対する信仰を告白しても、もしその信仰によって、彼らが真実で、親切で、忍耐強く、寛大で、天来の心を持った者となるのでなければ、それは所有者にとって災いであり、また彼らの感化によって、それは世にとっても災いとなる。 キリストがお教えになった義とは、心と生活とを神のみこころのあらわれに一致させることである。罪深い人間は、神への信仰を持ち、神と生きた関係を持続することによってのみ義となることができる。そのとき真の信心によって思想が高められ、生活は高潔なものとなる。その時、宗教の外面的な形式が、クリスチャンの内面的な純潔と一致する。その時、神の奉仕に要求されている儀式は、偽善的なパリサイ人の儀式のような無意味なものとならない。

イエスは、戒めを一つ一つ取り上げて、その要求の深さと広さとを説明される。主は戒めの力を少しでもそぐようなことをなさらずに、その原則がどんなに深遠なものであるかを示し、ユダヤ人の表面的なみせかけの服従が致命的なまちがいであることをばくろされる。邪悪な思いや情欲的な目つきによっても、神の律法は犯されるのだとイエスは宣言される。どんな小さな不正に関係しても、人は、律法を破り、自分自身の道徳的性質を堕落させる。殺人はまず心のうちにある。心に憎しみが入るのを許す時、その人は殺人の道に足をふみ入れているのであって、彼の献げ物は神にきらわれる。

ユダヤ人は復讐の精神を育てた。ローマ人を憎 むあまり、彼らは激しい非難の言葉を口に出し、サタンの特性を発揮して彼を喜ばせた。こうして彼らは、サタンが彼らをひきいれる恐るべき行為のために自らを訓練していた。パリサイ人の信仰生活には、異邦人に信心をすすめるようなものは何もなかった。心のうちで圧制者たちに反抗し、彼らの悪に復讐したいという熱望をいだいてもよいという考えで自らをあざむいてはならないと、イエスは彼らにお命じになった。 キリストに従っている者たちの中にさえ、正当な憤りというものがあるのは事実である。神がけがされたり、神のご用について悪口がいわれたり、何の罪もないも

のが虐待されたりするのを見たり聞いたりすると、正義の憤りが魂を動かす。感じ易い道徳心から生ずるこのような怒りは罪ではない。しかし挑発と思われるようなことをされたら、怒りや恨みをほしいままにしてもかまわないと思う人は、サタンに向かって心を開いているのである。天と調和したければ、魂から冷酷さと憎しみとを追い出さねばならない。

救い主はそれよりも以上のことを要求しておられる。イエスは、「だから、祭壇に供え物をささげようとする場合、兄弟が自分に対して何かうらみをいだいていることを、そこで思い出したなら、その供え物を祭壇の前に残しておき、まず行ってその兄弟と和解し、それから帰ってきて、供え物をささげることにしなさい」と言っておられる（マタイ 5：23、24）。宗教的な奉仕に熱心でありながら、一方では兄弟たちとの間に和解すべき不幸な不和のある人々が少なくない。神は、全力をつくして一致をとり戻すように彼らに要求しておられる。そうするまで神は、彼らの奉仕を受け入れることがおできにならない。この問題についてクリスチャンの義務がはっきり指摘されている。

神は、すべての者に祝福をそそがれる。「天の父は、悪い者の上にも良い者の上にも、太陽をのぼらせ、正しい者にも正しくない者にも、雨を降らして下さるからである」（マタイ 5：45）。神は「恩を知らぬ者にも悪人にも、なさけ深いからである」（ルカ 6：35）。神は、わたしと同じ上うにしなさいとわれわれに言われる。「しかし、わたしはあなたがたに言う。敵を愛し迫害する者のために祈れ。こうして、天にいますあなたがたの父の子となるためである」とイエスは言われた（マタイ 5：44、45）。こうしたことが律法の原則であり、それはまた命の泉である。 神がご自分の子らに望まれる理想は、人間の最高の思いが達することができるよりももっと高い。「それだから、あなたがたの天の父が完全であられる ように、あなたがたも完全な者となりなさい」（マタイ 5：48）。この命令は約束である。あがないの計画には、われわれをサタンの権力から完全にとり戻すことがもくろまれている。キリストは、悔い改めた魂を、いつでも罪から引き離される。主は、悪魔のわざを滅ぼすた めにおいでになったのであって、すべての悔い改めた魂に聖霊を与え、罪を犯さないように 道を備えられた。

一つの悪の行為に対して、誘惑者の力は言いわけにならない。サタンは、キリストに従うことを告白している人たちが、品性の欠陥について言いわけをするのを聞くとこおどりして喜ぶ。罪へいたらせるのはこのような言いわけである。罪を犯すことに言いわけはない。悔い改めて信ずるすべての神の子らは、聖なる気質を持ち、キリストのような生活に入ることができるのである。

クリスチャン品性の理想は、キリストに似ることである。人の子キリストが、その生活において完全であられたように、キリストに従う者も、その生活において完全でなければならない。イエスは、あらゆる点において、兄弟たちと同じようになられた。イエスは、われわれと同じように、肉体をおとりになった。彼は飢え、渇き、お疲れになった。主は、食物によって力づけられ、睡眠によって元気を回復された。イエスは、人と同じ身分でありながら、しかも傷のない神のみ子であられた。イエスは、肉体をとられた神であられた。キリストのご品性がわれわれのものとなるのである。主を信ずる者について、主は、こう言われる、「わたしは彼らの間に住み、かつ出入りをするであろう。そして、わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる であろう」（Ⅱコリント 6：16）。

キリストはヤコブの見たはしご、すなわち足が地面について、てっぺんが天の門、栄光の門口に達しているはしごである。もしこのはしごがたった 1 段でも地についていなかったら、われわれは滅びてしまったのである。だがキリストは、われわれが今いるところで、わ　れわれにとどいてくださる。主は、われわれの性質をおとりになって勝利されたが、それは、われわれがキリストの性質をとることによって勝利するためである。イエスは「罪の肉の様」になられたが、罪のない生涯をおくられた（ロ ー マ 8：3）。今キリストは、神性によって天のみ座につらなっておられるが、一方では人性によってわれわれのもとに達しておられる。　キリストは、わたしを信ずることによって、神のご品性の栄光に到達しなさいとわれわれに　命じられる。だからわれわれは、「天の父が完全であられるように」完全な者となるのであ　る（マタイ 5：48）。

イエスは、すでに、義が何にあるかを示し、神を義の根源としてさし示された。今主は、実際的な義務に目を向けられた。施しにおいても、祈りにおいても、断食においても、人の

注意をひくためや、自分がほめられるために何事もしてはならないと、主は言われた。困っている貧しい者のために、まごころから施しなさい。祈りにおいて、魂を神と交わらせなさい。断食においては、頭をたれ、自我の思いでいっぱいになった心でこれを行ってはならない。パリサイ人の心は、収穫のない不毛の土地で、清い生活という種はそこに繁茂することができない。神に最も喜ばれる奉仕をする者は、自分を余すところなく神に従わせる者である。なぜなら、神との交わりによって、人は、神と共なる働き人となり、人類に神のご品性を示すことができるからである。

誠実な心からなされる奉仕には、大きな報いがある。「隠れた事を見ておられるあなたの父は、報いてくださるであろう」（マタイ 6：4）。キリストの恵みによって生きる生活を通して、品性が形成される。魂には本来の美しさが回復しはじめる。キリストの品性の特質 がわけ与えられ、神のみかたちが光を放ち始める。神と共に歩み、働く男女の顔には、天の 平安があらわれる。彼らは天の雰囲気でかこまれる。このような魂には、神のみ国がはじま ったのである。彼らには、キリストの喜び、すなわち人類の祝福となっているという喜びが ある。彼らには、主のご用に受け入れられるという光栄がある。彼らは、主のみ名によって、主の働きをするように信任されている。

「だれも、ふたりの主人に兼ね仕えることはできない」（マタイ 6：24）。二心をもって神に仕えることはできない。聖書の宗教は、たくさんある感化力の中の一つではなく、こ の感化力は、最高のものとして、ほかのすべてのものに浸透し、それらを支配するのである。それは画布の上のそこここにさっと塗られた色のようなものではなく、ちょうど布地の 1 本 1 本の糸が、あせない深い色に染まるまで、画布がその色の中にひたされるように、生活の全体に浸透するのである。 「だから、あなたの目が澄んでおれば、全身も明るいだろう。しかし、あなたの目が悪ければ、全身も暗いだろう」（マタイ 6：22、23）。純潔と堅固な目的は、神から光を受ける条件である。真理を知りたいと望む者は、その真理によって示されるすべてのことを進んで受け入れねばならない。彼は誤謬と妥協することはできない。真理への忠誠が、中途半端であったり、動揺したりすることは、誤謬の暗黒とサタンの欺瞞とを選ぶことである。

世俗的な方針と、まっすぐな義の原則とは、虹の色のように気づかないほど互いにまざりあうことがない。この両者の間には、永遠の神によって、はっきりした太い線がひかれている。キリストのみかたちは、真昼と真夜中の対照のように、はっきりサタンのかたちと区別される。キリストの生涯に生きる者だけが、キリストの共労者である。もし一つの罪が魂のうちに宿っていたり、一つの悪い行為が生活のうちに保留されていたら、生活全体がけがされる。その人は不義の器となる。 神の奉仕を選んだ者はみな、神の守りに安心していることができる。キリストは、空を飛ぶ鳥と野の花 とを指さして、神のおつくりになったこうしたものを考えてみなさいと、聴衆に言われた。「あなたがたは彼らよりも、はるかにすぐれた者ではないか」と彼は言われた（マタイ 6：26）。神は、どんなものにも、それぞれの身分に応じた尺度で守りをお与えになる。小さな茶色のすずめは、神に見守られている。野の花や、地面に敷物をしいたような草は、それぞれに天父の注意と守りとを受けている。大画家であられる神は、ゆりの花に心を用いて、これにソロモンの栄光をしのぐ美しさをお与えになった。神は、ご自分のみかたちであり栄光である人間に、どんなにかもっと多く心を用いておられることだろう。神はご自分の子らが、ご自分に似た品性をあらわすのを見たいと熱望しておられる。日光が、変化に富んだ優美な色彩を花に与えるように、神は魂にご自身の品性の美しさをお与えになる。

キリストの愛と義と平和のみ国を選び、このみ国の利害を、他のすべての利害にまさるものとする者はみな、天の世界に結合しており、この世の生活に必要な祝福はことごとく彼のものである。われわれは、神の摂理という本、すなわち人生という本の中に、各々1 ページを与えられている。そのページには、われわれの歴史が、細かい点まで書かれていて、頭の髪の毛までかぞえられている。神の子らは神のみこころから忘れられることがないのである。 「だから、あすのことを思いわずらうな」（マタイ 6：34）。われわれは、日々キリストに従うのである。神は明日のための助けをお与えにならない。神は、ご自分の子らが混乱することがないように、彼らに人生行路の方向を全部 1 度にお教えにならない。神は、彼らがおぼえて実行することができる程度にお語りになる。与えられた知恵と力は、現在のさし迫った必要のためである。今日のために「あなたがたのうち、知恵に不足している者があれ

ば、その人は、とがめもせずに惜しみなくすべての人に与える神に、願い求めるがよい。そうすれば、与えられるであろう」（ヤコブ 1：5）。

「人をさばくな。自分がさばかれないためである」（マタイ　7：1）。自分は人よりまさっていると考えて、人をさばく立場に自分を高めてはならない。あなたは、動機を見わけ　ることができないのだから、他人をさばくことはできない。相手を批判することによって、　あなたは自分自身に宣告をくだしているのである。なぜなら、あなたは、兄弟たちを訴える　者すなわちサタンの仲間であることを示しているからである。主は「あなたがたは、はたし　て信仰があるかどうか、自分を反省し、自分を吟味するがよい」と言われる（Ⅱコリント 13：5）。これがわれわれの働きである。「自分をよくわきまえておくならば、わたしたちはさば かれることはないであろう」（Ⅰコリント 11：31）。

よい木はよい実を結ぶ。もし実の味がまずくて無価値なら、その木が悪いのである。同じように、生活の中に結ばれる実は、心の状態とすぐれた品性とを証拠だてる。善行によって救いを買うことはできないが、しかしそれは、愛によって働き、魂を清める信仰の証拠である。永遠の報いは、われわれの功績によってさずけられるのではないが、それでも、キリストの恵みによってなした働きに比例して与えられるのである。　キリストは、このようにみ国の原則を説明し、これを生活の大原則としてお示しになった。この教訓を印象づけるため　に、彼は例話をつけ加えておられる。あなたがたは、わたしの言葉を聞くだけでは十分でな　いと、主は言われる。従うことによって、あなたがたはわたしの言葉を品性の土台としなけ　ればならない。自我は移り変る砂にすぎない。人間の学説や作り話の上に家を築くなら、そ　の家は倒れてしまうであろう。試みの風すなわち試練の嵐によって、それは吹きとばされて　しまうであろう。だがわたしが与えたこれらの原則は持ちこたえる。わたしを受け入れ、わ　たしの言葉の上に築きなさい。　「それで、わたしのこれらの言葉を聞いて行うものを、岩の上に自分の家を建てた賢い人に比べることができよう。雨が降り、洪水が押し寄せ、風が吹　いてその家に打ちつけても、倒れることはない。岩を土台としているからである」（マタイ 7：24、25）。

第 32 章　百卒長

キリストは、息子の病気をなおしておやりになったある役人に「あなたがたは、しるしと奇跡とを見ない限り、決して信じないだろう」と言われた（ヨハネ 4：48）。キリストは、ご自分の国民が、キリストにこのようなメシヤとしての外面的なしるしを要求することを悲しまれた。キリストはこれまで何度も彼らの不信に驚かれた。しかし主は、みもとにやってきた百卒長の信仰に驚かれた。この百卒長は救い主の力を疑わなかった。彼は、奇跡を行うためにキリストに自らきていただきたいと願うことさえしなかった。「ただ、お言葉を下さい。そうすれば僕はなおります」と彼は言った（マタイ 8：8）。 百卒長のしもべは中風にかかって、ほとんど死ぬばかりであった。ローマ人の間では、しもべは市場で売り買いされる　奴隷で、残酷なとり扱いを受けていた。だがこの百卒長は自分のしもべにやさしい愛情をそ　そぎ、彼の回復を心から望んでいた。百卒長は、イエスならしもべの病気をなおして下さる　ことができると信じた。彼はイエスにお会いしたことはなかったが、そのうわさを聞いて信　仰がわき起こった。ユダヤ人の形式主義にもかかわらず、このローマ人は、ユダヤ人の宗教　が自分の宗教よりもまさっていることを確信していた。すでに彼は征服者と征服された民と　をへだてている国民的な偏見と憎悪の壁をうち破っていた。彼は神の奉仕に対する尊敬心を　表明し、神の礼拝者としてのユダヤ人に親切心を示していた。キリストの教えについてうわ　さを聞いた時、彼はその中に魂の必要に答えるものをみいだした。彼のうちにあるすべての　霊的なものが救い主のみ言葉に応じた。しかし彼は、自分はイエスの前に出る価値がないと　感じたので、しもべの病気をいやしていただくようにイエスにお願いしてもらいたいとユダ　ヤ人の長老たちに訴えた。彼らなら大教師イエスの知り合いだから、イエスにお願いするた　めに近づく方法を知っているだろうと、彼は思った。

イエスがカペナウムにはいってこられると、長老たちからつかわされた代表者たちが、イエスにお会いして、百卒長の希望を伝えた。彼らは、「あの人はそうしていただくねうちがございます。わたしたちの国民を愛し、わたしたちのために会堂を建ててくれたのです」と力説した（ルカ 7：4、5）。

イエスはすぐにこの将校の家へお出かけになった。だが群衆におされて、イエスは、ゆっくり進むことしかおできにならなかった。イエスがおいでになるというしらせは、イエスよりも先に伝わって行った。百卒長は、自信がないままに、伝言をもって、「主よ、どうぞ、ご足労くださいませんように。わたしの屋根の下にあなたをお入れする資格は、わたしにはございません」と言わせた（ルカ 7：6）、しかし救い主がなおも道を進んでこられたので、ついに百卒長は、思いきってイエスに近づき、さきの伝言をむすんでこう言った。「それで　すから、自分でお迎えにあがるねうちさえないと思っていたのです」。「ただ、お言葉を下　さい。そうすれば僕はなおります。わたしも権威の下にある者ですが、わたしの下にも兵卒　がいまして、ひとりの者に『行け』と言えば行き、ほかの者に『こい』と言えばきますし、　また、僕に『これをせよ』と言えば、してくれるのです」（ルカ 7：7、マタイ 8：8、9）。わたしがローマの権力を代表し、兵士たちが私の権威を最高のものとして認めているように、あなたは無限なる神の権力を代表しておられ、つくられたものはすべてあなたのみことばに　従っています、あなたが病気に去れとお命じになれば病気はあなたの仰せに従います。あな　たが天の使者たちをお呼びになれば、彼らはいやしの力をさずけます。ただみことばを語っ　てくだされば、それでわたしのしもべはいえるのです。

「イエスはこれを聞いて非常に感心され、ついてきた群衆の方に振り向いて言われた、『あなたがたに言っておくが、これほどの信仰は、イスラエルの中でも見たことがない』」「それからイエスは百卒長に『行 け、あなたの信じたとおりになるように』と言われた。すると、ちょうどその時に、僕はいやされた」（ルカ 7：9、マタイ 8：13）。 百卒長をキリストに推薦したユダヤ人の長者たちは、彼らが福音の精神をまったく持ち合わせていないことをあらわしていた。われわれの大きな必要こそ神の憐れみを求める唯一の資格であるということを、彼らは認めなかった。自分を義とする彼らは、百卒長が「わが国民」に好意を示したからといって、彼を推薦した。しかし百卒長は自分のことを「資格は、わたしにはございません」と言った（マタイ 8：8）。彼の心はキリストの恵みに動かされていた。彼は自分自身の無価値を認めたが、それでも助けを求めることを恐れなかった。彼は自分自身の善をたのみにしなかった。彼の論拠は、彼の大きな必要であった。彼は、信仰によって、キリスト

の真の性格をとらえた。彼はキリストをただ奇跡を行われるお方としてではなく、人類の友人また救い主として信じた。

このように罪人は、だれでもキリストのみもとにくることができる。「わたしたちの行った義のわざによってではなく、ただ神の憐れみによって、再生の洗いを受け」る（テトス 3:5）。サタンが、あなたは罪人だから神の祝福を受けることを望むことはできないと言ったら、キリストは罪人を救うためにこの世においでになったのだと彼に言いなさい。われわれは、自分自身を神に推薦するようなものを何も持っていない。われわれがいつでも訴えることのできる懇願は、われわれがまったく無力な状態にあるので、神の救いの力が必要なのだということである。自己にたよる思いをまったく放棄して、われわれは、カルバリーの十字架を見上げて、こう言うのである。

「わたしは何も価値のあるものを手に持ってきていません。 ただあなたの十字架にすがるのみです。」　ユダヤ人は、子供の時分からメシヤの働きについて教えられていた。父祖と預言者たちが霊感を受けて語ったことばと犠牲制度の象徴的な教えは、彼らのものであった。しかし彼らは、その光を無視してきた。そしていま彼らは、イエスのうちに望ましいものを　何一つ見なかった。ところが異教の中に生れ、ローマ帝国の偶像礼拝の中で教育をうけ、軍　人として訓練され、教育と環境とによって霊的な生活から切り離されているようにみえ、さ　らにまたユダヤ人の頑迷さと、またイスラエル民族に対するローマ人の軽蔑心のゆえに霊的　な生活からしめ出されているようにみえた百卒長―この人が、アブラハムの子らが盲目にな　っていた真理を認めたのだった。彼は、ユダヤ人のメシヤであると主張しておられるお方を、ユダヤ人自身が受け入れるかどうかを見るために待っていようとはしなかった。「すべての　人を照すまことの光」が彼の上に照り輝いた時、彼は、遠くからではあったが、神のみ子の　栄光を認めた（ヨハネ 1：9）。

イエスにとって、これは福音によって異邦人の中になしとげられる働きの前兆であった。イエスは万国から魂が神のみ国に集められるのを、喜びのうちに期待された。主は、ユダヤ人が神の恵みをこばんだ結果を、深い悲しみをもって、彼らにこうえがいておられる。「なお、あなたがたに言うが、多くの人が東から西からきて、天国で、アブラハム、イサク、ヤ

コブと共に宴会の席につくが、この国の子らは外のやみに追い出され、そこで泣き叫んだり、歯がみをしたりするであろう」（マタイ　8：11、12）。ああ、どんなに多くの人々がこれと同じ致命的な絶望に向かって進んでいることだろう。異教の暗黒のうちにある魂が、神の恵　みを受け入れる一方では、キリスト教国において、光を受けながらこれを無視する者がどん　なに多いことだろう。

カペナウムから 20 マイル（約 32 キロ）以上離れたあたりの、広い美しいエズレルの平原を見渡す台地にナインという村があった。イエスは次にそこへ足を向けられた。弟子たちの多くとそのほかの人々が、イエスといっしょだったが、道中いたるところから、人々がイエスの愛と憐れみのことばを求め、いやしてもらうために病人をつれてやってきた。彼らはまたこのよ うにふしぎな力を発揮されるイエスが、イスラエルの王として名乗りをあげられるのを、いつも待ち望んていた。群衆はイエスの足あとにむらがり、喜びと期待に満ちた群衆が、この山村の門へ向かって岩だらけの道をイエスについて行った。 彼らが近づくと、葬式の行列が門から出てくるのかみられる。ゆっくりと悲しい足どりで、行列は埋葬場へ進んで行く。行列の先頭を行く屋根のない棺台の上には死体がのせられ、そのまわりには会葬者たちがいて、彼らの泣きわめく声が大気を満たしている町中の人たちが集まって死人への哀悼と、遺族への同情を表している様子である。

それは同情をそそる光景だった。死人は母親の 1 人息子で、その母親は寡婦だった。この 1 人ぼっちの喪主はこの世のただ 1 人の支えであり慰めであった息子のあとを墓場までつ いて行くところだった。「主はこの婦人を見て深い同情を寄せられ」た（ルカ　7：13）。母親が何も目にはいらないで、イエスのおられることにも気がつかず泣きながら進んで行くと、イエスは、彼女のそば近くにこられて、「泣かないでいなさい」とやさしく言われた。イエ　スは彼女の悲しみをよろこびに変えようとしておられたが、それでもこのようなやさしい同　情のことばをかけないではいられなかった。

イエスは「近寄って棺に手をかけられ」た（ルカ 7：14）。イエスにとっては死人にふれることさえけがれとならなかった。棺をかついでいた人たちが立ちどまり、会葬者たちの泣き声がやんだ。両方の群れは望みのないことを望みながら棺台のまわりに集まった。病気

を追い出し、悪鬼を征服されたお方が目の前におられるのである。死もまた彼の力に屈服するであろうか。　　権威のあるはっきりした声で、みことばが語られる「さあ、起きなさい」（ルカ 7：14）。その声は死人の耳をつらぬく。若者は目をあける。イエスは彼の手をとって起こしておやりになる。若者は自分のそばで泣いていた母親をみつめる。母親と息子は、喜びのあまりしっかりと抱き合っていつまでも離れない。群衆は魔法にでもかけられたように無言のうちにながめている。「人々はみな恐れをいだ」いた（ルカ 7：16）。しばらくの間、彼らは、神の前にいるかのように、だまってうやうやしく立っている。それから彼らは「『大預言者がわたしたちの間に現れた』、また、『神はその民を顧みてくださった』と言って、神をほめたたえた」（ルカ 7：16）。葬式の行列は、凱旋の行列となって、ナインへもどった。「イエスについてのこの話は、ユダヤ全土およびその附近のいたる所にひろまった」（ルカ 7：17）。

ナインの門で、悲しむ母親のそばにお立ちになったイエスは、棺のかたわらで泣き悲しんでいる一人一人を見守っておられる。イエスの心はわれわれの悲しみへの同情で動かされる。愛し、憐れまれたイエスの心は、変ることのないやさしい心である。死人を生きかえらせたイエスのみことばは、それがナインの若者に語られた時と同じに、いまも力がある。イエスは、「わたしは、天においても地においても、いっさいの権威を授けられた」と言われる（マタイ 28：18）、その権威は年月がたつにつれて減ったり、溢れるばかりの恩恵のたえまない活動によって尽きてしまったりするようなものではない。イエスを信ずるすべての者にとって、彼はいまもなお生ける救い主である。

イエスは、息子を母親の手に戻された時、彼女の悲しみをよろこびに変えられた。だがこの若者は、この世の生活に呼びもどされて、その悲しみと苦労と危険に耐え、ふたたび死の権力に渡されたにすぎなかった。しかしイエスは次のような限りない望みのことばをもって、死者を悲しむわれわれの心を慰めてくださる。わたしは、「生きている者である。わたしは死んだことはあるが、見よ、世々限りなく生きている者である。そして、死と黄泉（よみ）とのかぎを持っている」「このように、子たちは血と肉とに共にあずかっているので、イエスもまた同様に、それらをそなえておられる。それは、死の力を持つ者、すなわち悪魔

を、ご自分の死によって滅ぼし、死の恐怖のために一生涯、奴隷となっていた者たちを、解き放ったためである」（黙示録 1：18、ヘブル 2：14、15）。 神のみ子が死人に生きよとお命じになる時、サタンは彼らをつかまえておくことができない。サタンは、キリストの力のみ　ことばを信仰をもって受け入れる魂を 1 人も霊的な死のうちにとらえておくことができない。罪のうちに死んでいるすべての者に向かって、神は、「眠っている者よ、起きなさい。死人　のなかから、立ち上がりなさい」と言われる（エペソ　5：14）。このみことばこそ、永遠の命である。最初の人間に生きよとお命じになった神のみことばが、いまもなおわれわれに命　を与えるように、また「若者よ、さあ、起きなさい」とのキリストのみことばがナインの若　者にいのちを与えたように、「死人のなかから立ちあがりなさい」とのみことばは、これを　受け入れる魂にとっていのちである。「神は、わたしたちをやみの力から救い出して、その　愛する御子の支配下に移して下さった」（コロサイ　1：13）。救いはすべてみことばのうちに提供されている。みことばをうけいれる時に、救いがある。

「もし、イエスを死人の中からよみがえらせたかたの御霊が、あなたがたの内に宿っているなら、キリスト・イエスを死人の中からよみがえらせたかたは、あなたがたの内に宿っている御霊によって、あなたがたの死ぬべきからだをも、生かしてくださるであろう」「すなわち、主ご自身が天使のかしらの声と神のラッパの鳴り響くうちに、合図の声で、天から下ってこられる。その時、キリストにあって死んだ人々が、まず最初によみがえり、それから生き残っているわたしたちが、彼らと共に雲に包まれて引き上げられ、空中で主に会い、こうして、いつも主と共にいるであろう」（ローマ 8：11、1 テサロニケ 4：16、17）。主は、こうした慰めのことばをもって互に慰め合うようにと命じておられる。

第 33 章　わたしの兄弟とは、だれのことか

ヨセフの息子たちは、イエスの働きにすこしも共鳴を示さなかった。イエスの生活と働きについてのうわさが耳に入ると、彼らは驚きとろうばいに満たされた。彼らは、イエスが液どおし祈りに没頭しておられることや、昼は大群衆にとりかこまれて、食事をされる時間さえないことを聞いた。イエスの友人たちは、イエスがたえまない働きのために疲れはててておられると思った。彼らは、パリサイ人に対するイエスの態度をどう説明したらよいかわからなかった。中にはイエスの理性が動揺してきたのではないかと心配する者さえあった。

イエスの兄弟たちはそのことを耳にし、またパリサイ人たちが、イエスはサタンの力によって悪鬼を追い出されたと非難するのも聞いた。彼らはイエスと肉親関係にあるために、自分たちによせられる非難をするどく感じた。彼らは、イエスのみことばとわざによってどんな騒ぎがもちあがっているかを知り、イエスの大胆な声明に驚かされたばかりでなく、イエスが学者たちやパリサイ人たちを公然と非難されることを憤慨した。彼らは、イエスがこのような働きをやめられるように納得させるか、強制しなくてはならないと決心した。そこで彼らは、母親に対するイエスの愛を通して、イエスがもっと用心深くなられるように説得することができるかもしれないと考え、母のマリヤに協力してもらうようにすすめた。 イエスはこれよりすこし前 2 度目のいやしの奇跡を行って、悪鬼につかれた盲人と口の聞けない男をいやされたので、パリサイ人たちは、「彼は、悪霊どものかしらによって悪霊どもを追い出しているのだ」との非難をくりかえしていた（マタイ 9：34）。聖霊の働きをサタンのせいにすることによって、彼らは自分自身を祝福の泉からたちきっているのだと、キリストは、彼らにはっきり言われた。キリストの神性を知らないでイエスご自身のことを悪く言った者はゆるされるかも知れない。なぜなら、聖霊によって、彼らは自分のあやまちを認めて悔い改めにみちびかれるかもしれな いからである。罪がどんなものであろうと、もし魂が悔い改めて信ずるなら、その不義はキリストの血によって洗われる。だが聖霊の働きをこばむ者は、悔い改めと信仰のとどかないところにわが身をおいているのである。神が心に働かれるのは、みたまによってである。人が故意にみたまをこばみ、それをサタンから出たものであると断言する時、彼らは神が彼らと交わることのおできになる道を自らとざすのである。

みたまが最後までこばまれる時、神はもうそれ以上魂のためにつくすことがおできにならない。

イエスがこの警告をお与えになったパリサイ人たちは、キリストを非難しながらも、心の中ではその非難が正当であるとは思っていなかった。高い地位を占めているこれらの人々の中には、救い主に心をひかれていない者は一人もなかった。彼らは、みたまの声がイエスをイスラエルのあぶらそそがれた者として宣告し、キリストの弟子となることを告白するようにすすめるのを自分自身の心の中で聞いていた。キリストの前に出ると、彼らは自らの不潔をみとめ、自分ではつくり出すことのできない義をあこがれた。しかしキリストをこばんでしまってからは、いまさらキリストをメシヤとして受け入れることはあまりに不面目でできなかった。不信の道に足をふみ入れた以上、あやまちを告白することは、彼らの高慢心がゆるさなかった。真理を認めるのを避けるために、彼らは必死の勢いで救い主の教えに反対の議論を試みた。キリストの力と憐れみの証拠は彼らを怒らせた。彼らはイエスが奇跡を行われないようにすることも、イエスの教えを沈黙させることもできなかった。だが彼らはイエスについて偽りを言いふらし、イエスのことばを偽って伝えるためにあらんかぎりの力をつくした。それでもなお罪をさとらせる神のみたまが彼らを追いかけたので、彼らはみたまの力に抵抗するために多くの壁を築かねばならなかった。人の心を感動させるために与えられる最大の力が彼らと争っていたが、彼らは屈服しようとしなかった。

人々の目を見えなくし、心をかたくなにするのは神ではない。神は彼らのあやまちを正し、彼らを安全な道にみちびくために光をお送りになる。目が見えなくなり、心がかたくなになるのは、この光をこばむからである。この過程はゆるやかでほとんど気がつかない場合が多い。光は、神のみことばを通し、神のしもべたちを通し、あるいはみたまの直接の働きによって魂にのぞむ。だが一すじの光が無視されると、霊的知覚力が部分的に麻痺し、次に光があらわされた時、それは前ほどはっきり認められなくなる。こうして暗さが増し、ついには魂に夜がおとずれる。これらのユダヤ人指導者たちがそのとおりだった。彼らはキリストに神の力が伴っていることを自覚させられたが、真理に抵抗するために、聖霊の働きをサ

タンのせいにした。こうすることによって彼らは故意に欺瞞を選んだのである。彼らはサタンに屈服したので、それからはサタンの力に支配された。

聖霊に対する罪についてのキリストの警告と密接な関係があるのは、むなしいことばや悪いことばに対する警告である。ことばは心のうちにあるものを示す。「おおよそ、心からあふれることを、口が語るものである」（マタイ 12：34）。しかしことばは、品性をあらわすだけではない。ことばは品性に作用する力を持っている。人は自分自身のことばに影響さ れる。サタンにそそのかされ、一時の感情にかられて、彼らは、ねたみや悪い臆測などを口 にし、本当に信じてもいないことを口にする。だが口に出したことばは考え方に作用する。 彼らは自分のことばにだまされ、サタンにそそのかされて語ったことを事実として信ずるよ うになる。1 度意見や決心を口に出してしまうと、面目にこだわってそれをひっこめることができないことが多く、あくまで自分が正しいことを証明しようとし、ついには自分が正しい のだと信ずるようになる。疑いのことばを口に出すことは危険である。すなわち天来の光を 疑ったり批判したりすることは危険である。不注意で不敬な批判をする習慣は品性に作用し、不敬と不信の念を助長する。この習慣をほしいままにしていた多くの人々が、危険を意識し ないで続けているうちに、ついには聖霊の働きを批判したりこばんだりするようになった。 イエスは、「あなたは、自分の 言葉によって正しいとされ、また自分の言葉によって罪ありとされるからである」と言われた（マタイ 12：37）。

次にイエスは、みことばに感動し、イエスの言われることをよろこんで聞いていながら、聖霊の内住に身をまかせなかった人々に対する警告をつけ加えられた。魂は抵抗によるばかりか、怠慢によっても滅びる。イエスはこう言われた。「汚れた霊が人から出ると、休み場を求めて水の無い所を歩きまわるが、見つからない。そこで、出てきた元の家に帰ろうと言って帰って見ると、その家はあいていて、そうじがしてある上、飾りつけがしてあった。そこでまた出て行って、自分以上に悪い他の 7 つの霊を一緒に引き連れてきて中にはいり、そこに住み込む。そうすると、その人ののちの状態は初めよりももっと悪くなるのである。よ こしまな今の時代も、このようになるであろう」（マタイ 12：43～45）。

今日と同じように、キリストの時代にも、サタンの支配力が一時たたれたようにみえた人々がたくさんしいた。神の恵みによって、彼らはこれまで自分の魂を支配していた悪霊から解放された。彼らは神の愛をよろこんだ。だが譬にある石地の聞き手のように、彼らは神の愛のうちにとどまっていなかった。彼らは心の中にキリストに住んでいただくように日々自分自身を神にまかせなかった。そこで悪霊が「自分以上に悪い他の 7 つの霊」をつれもどってきた時、彼らは悪の力に全面的に支配された（マタイ 12：45）。 魂がキリストに屈服する時、新しい力が新しい心を占領する。人が自分自身ではなしとげることのできない変化が行われる。それは超自然の働きであって、人の性質に超自然の要素をもたら魂キリストに屈服した魂は、キリストご自身のとりでとなり、キリストはそれをそむいた世の中に保たれる。キリストはその中でご自身の権威よりほかの権威が認められないよりに望まれる。このように天の勢力によって占領された魂はサタンの攻撃に攻め落されることがない。しかしわれわれは、キリストの支配に服していない時に、悪魔に支配される。われわれはこの世の主権を争っている二大勢力のどちらかに必然的に支配されるのである。

暗黒の王国の支配に入るためには、わざわざその国の奉仕を選ぶ必要はない。光の王国と同盟することをおこたりさえすればよいのである。もしわれわれが天の勢力と協力しなければ、サタンは心を占領してそこを永住の地とする。悪に対する唯一の防備は、キリストの義を信じる信仰によって、心のうちにキリストに内住していただくことである。神とのいのちのつながりをもたないかぎり、われわれは、利己主義、放縦、罪への誘惑などのけがれた影響に抵抗することは決してできない。われわれは、多くの悪い習慣をやめ、しばらくの間はサタンとの交わりをたちきっているかも知れない。だが時々刻々に神に献身することによって、神との命のつながりを持っているのでなければ、われわれは打ち負かされてしまう。キリストを個人的に知り、たえずキリストと交わっていなければ、敵の思うままになり、ついには敵の命ずるとおりのことを行うようになる。

「その人ののちの状態は初めよりももっと悪くなるのである。よこしまな今の時代も、このようになるであろう」とイエスは言われた（マタイ 12：45）。恵みの招待を軽んじ、恵みのみたまを侮辱した者ほどかたくなな者はいない。聖霊に対する罪として最も一般的なも

のは、悔い改めをうながす天の招きをどこまでもあなどることである。キリストをこばむ　1歩 1 歩は、救いをこばみ、聖霊に対して罪を犯す 1 歩である。 キリストをこばんだことによって、ユダヤ民族はゆるされない罪を犯した。われわれも、恵みの招きをこばむことによっ　て、同じあやまちを犯すかも知れない。キリストを代表する使者たちのことばを聞くことを　こばみ、かえって魂をキリストから引き離そうとするサタンの代理者たちのことばを聞く時、われわれは命の君を侮辱し、サタンの会堂と天の宇宙の前でキリストをはずかしめているの　である。このようなことをしているかぎり、人は望みもゆるしも見いだすことができずつい　には神とやわらぎたいとの願望をまったく失うのである。

イエスがまだ人々に教えておられると、イエスの母と兄弟たちが外にいて会いたがっているということづけを弟子たちが伝えた。イエスは彼らの心のうちにあるものを知っておられたので、「イエスは知らせてくれた者に答えて言われた、『わたしの母とは、だれのことか。わたしの兄弟とは、だれのことか』。そして、弟子たちの方に手をさし伸べて言われた、『ごらんなさい。ここにわたしの母、わたしの兄弟がいる。天にいますわたしの父のみこころを行う者はだれでも、わたしの兄弟、また姉妹、また母なのである』」（マタイ 12：48～50）。 信仰によってキリストを受け入れる者はみな人間の血肉関係よりももっと密接なきず なによってキリストにむすばれた。キリストが天父と一つであられたように、彼らもキリス　トと一つになるのであった。イエスの母は、イエスのみことばを信じ、これを行う者として、イエスとの間に肉親関係よりももっと近い霊的なつながりをもっていた。イエスの兄弟たち　は、イエスを自分自身の救い主として受け入れないかぎり、兄弟という関係だけでは何の益　も受けないのであった。もし彼らがイエスを天からくだられたお方として信じ、イエスと協　力して神のみわざをなしたのだったら、この地上の肉親関係はどんなにかキリストの支えと　なっていたことだろう。彼らの不信はイエスの地上生涯に暗い影を投げた。それは、イエス　がわれわれのために飲みほされたあの苦悩のさかずきのにがさの一部分であった。

神のみ子は、福音に対する敵意が人の心に燃えあがってきたのを鋭く感じられたが、それを家庭において感ずることは特に苦痛であった。それはイエスご自身の心が親切と愛に満ち、家族の者の間におけるやさしい心づかいを高く評価しておられたからである。イエスの

兄弟たちは、イエスが彼らの考えに譲歩されるように望んだが、そのような行動をとることは、イエスの天来の使命と全然一致しないのであった。彼らは、イエスが自分たちの助言を必要としておられると考えた。彼らは、人間的な見地からイエスを判断し、もしイエスが律法学者たちとパリサイ人たちに受け入れられるようなことだけを語られたら、彼のみことばから引き起される不愉快な論争が避けられると思った。イエスが神の権威を三 1 張し、ラビたちの罪の譴責者として彼らの前に立たれるとは余りに思いあがっていると彼らは思った。彼らは、パリサイ人たちがイエスを訴える機会をねらっていることを知っており、またイエスが彼らにその十分な機会を与えられたと思った。

兄弟たちの短いはかりなわでは、イエスが果たすためにおいでになった使命をはかることができなかった。したがって彼らは、こころみのうちにあられるイエスに同情することができなかった。彼らの下品で、物事のわからないことばは、彼らがイエスの品性を真に認識していないこと、したがって神性が人性にまじりあっていることを認めていないことをあらわした彼らは、イエスが悲しみに満たされておられるのをよくみかけた。だが彼らの精神とことばは、イエスを慰めるどころか、かえってその心を傷つけた。イエスの感じやすい性質は苦しめられ、イエスの動機は誤解され、その働きは理解されなかった。

イエスの兄弟たちは、年月を経てすり切れて古くさくなったパリサイ人の哲学をよく持ち出し、すべての真理を理解し、すべての奥義に通じておられるお方を教えることができるとせんえつにも考えた。彼らは自分たちの理解できないものは勝手に非難した彼らの非難はイエスの急所を刺したので、イエスの魂は疲れ、悩まされた。彼らは神への信仰を告白し、神を擁護しているのだと考えていたが、実は神が肉体をとって彼らの中におられ、しかも彼らはそのお方を知らないのだった。 こうしたことのために、イエスの歩まれる道はいばらの道だった。キリストはご自分の家庭での誤解に非常に心を痛められたので、そうした誤解のないところへ行かれることがイエスにとっては救いだった。イエスがたずねて行くことを好まれた家庭が一つあつたが、それはラザロとマリヤとマルタの家庭だっだこの家庭の信仰と愛の雰囲気の中でイエスの心は休まった。それでも、イエスの天来の使命を理解し、 イエス

が人類のために負っておられる重荷を知ることのできる人はこの地上に 1 人もいなかった。イエスはたびたび 1 人でおられて、天父と交わることだけに心の救いを見いだされた。

キリストのために苦しみを受け、自分の家庭においてさえ誤解と疑惑に耐え忍ばねばならない者は、イエスも同じことに耐えられたのだと思うことによって慰められる。イエスは、彼らに対して憐れみの心を動かされる。イエスは彼らに、イエスを友とし、イエスが経験されたように、天父との交わりのうちに心の休みを見いだすようにと命じられる。　キリストを自分自身の救い主として受け入れる者は、みなし子としてとり残され、1 人で人生の試練に耐えねばならないようなことはない。キリストは彼らを天の家族の一員として受け入れて下さ　る。キリストは、ご自分め父を彼らの父として呼ぶように命じておられる。彼らは神の心に　とって愛する子供たちであり、最もやさしく、いつまでも変らないきずなによって神にむす　ばれているのである。神性が人性よりもすぐれているように、神は、父や母が無力なわれわ　れに対して感じたよりもはるかにまさったやさしさを彼らに対して感じておられる。

イスラエルに与えられた律法の中に、キリストとその民との関係について、美しい例がある。ヘブル人が、貧乏のために世襲財産を手離し、身を奴隷として売らねばならないときには、彼とその相続財産とをあがなう義務は一番近い親族の上に負わされた（レビ 25：25、47～49、ルツ 2：20 参照）。同じように、われわれと、罪によって失われたわれわれの嗣業をあがなう義務が、われわれにとって近親にあたるキリストに負わされた。キリストがわれわれの近親者になられたのは、われわれをあがなうためであった。われわれの主なる救い主は、父母、兄弟、友人あるいは愛人よりも近いのである。主はこう言っておられる。「恐れるな、わたしはあなたをあがなった。わたしはあなたの名を呼んだ、あなたはわたしのものだ。……あなたはわが目に尊く、重んぜられるもの、わたしはあなたを愛するがゆえに、あなたの代りに人を与え、あなたの命の代りに民を与える」（イザヤ 43：1、4）。

キリストはみ座をとりまいている天の住民を愛される。しかし主がわれわれを愛されたその大きな愛は何によって説明することができるだろう。われわれはその愛を理解することができないが、しかし自分自身の経験において、その愛の真実なことを知ることができる。だからもしわれわれがキリストとの近親関係を保っているならば、われわれは主の兄弟姉妹

である人々をどんなにかやさしい気持でみなければならないことだろう。われわれはわれわれと天との関係に要求されているところをすみやかに認めるべきではないだろうか。神の家族の一員となった以上、われわれは天の父とわれわれの肉親の者たちをあがめるべきではないだろうか。

第 34 章　「わたしのもとにきなさい」

「すべて重荷を負うて苦労している者は、わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう」（マタイ　11：28）。 この慰めのことばは、イエスについてきた群衆に語られた。人はただイエスご自身を通してのみ神の知識を受けることができると、救い主は言わ　れた。救い主は弟子たちのことを、天の事物について知識を与えられた者であると言われた。しかし主は、だれも自分は神の愛と守りからしめだされていると感じさせられなかった。重　荷を負って苦労している者はみな主のみもとに行くことができる。　律法学者とラビたちは、宗教上の形式をきちょうめんに守っていたが、ざんげの儀式によっては、決して満たされな　い欠乏を感じていた。取税人や罪人た　ちは、肉欲的なことや世俗的なことに満足しているようなふりをしていても、彼らの心の中には不信と不安があった。イエスは、心に重荷を負っ　て苦しんでいる者たち、すなわち望みを裏切られ、この世の楽しみによって魂のあこがれを　満足させようとしている人々をごらんになって、みなわたしのもとにきて休みなさいと招か　れた。

イエスは、骨折っている人々にやさしくこうお命じになった。「わたしのくびきを負うて、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたの魂に休みが与えられるであろう。わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからである」（マタイ　11：29、30）。 このことばを通して、キリストは人類の一人一人に話しかけておられる。意識しようとしまいと、　人はみな重荷を負って、疲れている。みな重荷におしつぶされているが、それをとり除くこ　とができるのはキリストだけである。われわれが背負っている一番重い重荷は罪の重荷であ　る。もしわれわれがこの重荷を負うままにされていたら、それはわれわれをおしつぶしてし　まうだろう。しかし罪のないお方がわれわれの身代りになられた。「主はわれわれすべての　者の不義を、彼の上におかれた」（イザヤ 53：6）。主はわれわれの不義の重荷を負われた。主はわれわれの疲れた肩から荷物をとられる。主はわれわれに休みを与えられる。また心配　や悲しみの重荷も主は負ってくださる。心配ごとは全部わたしにまかせなさいと主は招いて　おられる。なぜなら主はわれわれのことを心にとめておられるからである。

人類の長兄であられるイエスは、永遠のみ座のそばにおられる。イエスは救い主としてのご自分に顔を向けている一人一人をごらんになる。イエスは、人性の弱点は何か、われわれの足りないところは何か、われわれの誘惑の力はどこにあるかをご自分の経験を通して知っておられる。なぜなら主は、すべての点にわれわれと同じように試みられ、しかも罪を犯されなかったからである。主はおののいている神の子であるあなたを見守っておられる。あなたは試みられるだろうか。主は救いだしてくださる。あなたは弱いだろうか。主は強くしてくださる。あなたは無知だろうか。主は知識を与えてくださる。あなたは傷ついているだろうか。主はいやしてくださる。「主はもろもろの星の数を定め、すべてそれに名を与えられる。」しかも「主は心の打ち砕かれた者をいやし、その傷を包まれる」（詩篇 147：4、3）。「わたしのもとにきなさい」というイエスの招きである。あなたの心配事や試練が何であろうと、主の前に事情をうち明けなさい。あなたの心には忍耐のささえができる。あなたが困惑や困難からぬけ出す道が開かれる。あなたは自分が弱く無力であることを知れば知るほど、イエスの力によってますます強くなる。あなたの重荷が重ければ重いほど、その重荷を負ってくださる方にまかせた時の休みは有難いのである。キリストが提供される休みは条件つきであるが、その条件は明示されている。それはだれでも応ずることのできる条件である。イエスはその休みがどのようにして見いだされるかを告げておられる。

「わたしのくびきを負いなさい」とイエスは言われる。くびきは奉仕の道具である。牛は労働するためにくびきを負わされるが、それは牛が効果的に働くために必要なのである。この実例によって、キリストはわれわれが、命のあるかぎり、奉仕に召されていることをお教えになっている。われわれはキリストと共に働く者となるために、キリストのくびきを身に負うのである。

奉仕にむすびつけるくびきは神の律法である。エデンであらわされ、シナイで布告され、新しい契約のもとに心にしるされる偉大な愛の律法は働く人間を神のみこころにむすびつけるものである。もしわれわれが自分の好むままに歩み、自分の意志の命ずるところへどこへでも行くままに放っておかれるならば、われわれはサタンの隊列にはいりこみ、サタンの特性を持つ者となるであろう。そこで神は、われわれを高い、とうとい、そして向上させるご

自身のみこころにつながれるのである。神は、われわれが忍耐強く、賢明に奉仕の義務を負うように望んでおられる。この奉仕のくびきを、キリストは自ら人性をもって負わ れた。イエスはこう言われた、「わが神よ、わたしはみこころを行うことを喜びます。あなたのおきてはわたしの心のうちにあります」（詩篇 40：8）「わたしが天から下ってきたのは、自分のこころのままを行うためではなく、わたしをつかわされたかたのみこころを行うためである」（ヨハネ 6：38）。神に対する愛、神のみ栄えをあらわそうとする熱心、堕落した人類に対ける愛のゆえに、イエスはこの世においでになって、苦難を受け、死なれたのである。これがイエスの一生を支配した力であった。この原則をとり入れるようにと、イエスはわれわれに命じておられる。

この世の標準に達しようとして、心配の重荷に心を痛めている人が多い。彼らは世の奉仕を選び、世のわずらいを受け入れ、世の習慣をとり入れた。こうして彼らの品性はそこなわれ、人生は疲れはてたものとなる。野心と世俗的な欲望を満足させるために、彼らは良心を傷つけ、悔恨というよけいな重荷まで背負いこむ。たえまない心配のために、生活の力はすりへって行く。主は彼らがこの束縛のくびきを放棄するように望まれる。イエスはわたしのくびきを負いなさいと彼らを招いておられる。「わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからである」と主は言われる（マタイ 11：30）。イエスは彼らに、まず神の国と神の義とを求めなさいと命じられる。そうしたらこの世の生活に必要なものはすべて加えられると、主は約束しておられる。心配は盲目であり、将来をみわけることができない。だがイエスは、始めから終りまで見通される。困難のたびに、イエスはそれをとり除くためにご自分の道を備えられる。天の父なる神は、われわれのために無数の道を備えて下さるが、われわれはそのことを何も知らないのである。神に奉仕しそのみ栄えをあらわすことを最高のものとするというただ一つの原則を受け入れる者は、困った隠題がなくなり、足元にはっきりした道が開かれることに気がつくのである。

「わたしは柔和で心のへりくだった者であるから……わたしに学びなさい」とイエスは言われる（マタイ 11：29）。われわれはキリストから柔和と謙遜を学ぶために、キリストの学校に入るのである。あがないは、魂が天国のために訓練される過程である。この訓練はキ

リストを知ることである。それは暗黒の君の学校で身についた考え方、習慣、行為からの解放である。魂は神への忠誠に反する一切のものから救い出されねばならない。

キリストの心の中は、神との完全な調和に支配されていたので、完全な平安があった。彼は称賛に得意になったり、酷評や失望に落胆したりなどされなかった。最も激しい反対と最も残酷な仕打ちのただ中にあっても、イエスは勇気を失われなかった。しかしキリストに従う者であると自称している人々の中には、不安で心配な心を持っている人が多いが、それは彼らが自分自身を神にまかせきれないからである。彼らは神に完全に屈服しない。それは彼らがこのような屈服に含まれている結果を避けるからである。彼らは、この屈服をしないかぎり平安を見いだすことができない。

不安を生じさせるのは自分を愛する心である。われわれが天から生まれる時に、イエスのうちにあったのと同じ心がわれわれのうちに宿るようになる。それはわれわれを救うために自らいやしい身となられたイエスの心である。その時われわれは、最高の地位を求めなくなる。われわれはイエスの足元にすわってイエスについて学びたいと望むようになる。われわれの働きの価値は、世間にそうそうしい宣伝をしたり、自分自身の力で熱心に活動したりすることにあるのではないということがわかる。　われわれの働きの価値は、聖霊を与えられる度合いに比例する。こうして神に信頼することによって、一層きよい心の品質が与えられ、忍耐のうちにわれわれの魂を保つことができる。

くびきは、牛が荷物をひくのを助けるため、また重荷を軽くするために牛にかけられる。キリストのくびきもこれと同じである。われわれの意志が神のみこころのうちに没入し、他人を祝福するために神の賜物を用いる時、われわれは人生の重荷を軽く感ずる。神の戒めの道を歩む者は、キリストを道つれとし　て歩いているのであって、その心はキリストの愛のうちに休まる。モーセが、「どうか、あなたの道を示し（てください）」と祈った時、主は「わたし自身が一緒に行くであろう。そしてあなたに安息を与えるであろう」と彼に答えられた（出エジプト　33：13、14）。また預言者たちを通して次のメッセージが与えられた。「あなたがたはわかれ道に立って、よく見、いにしえの道につき、良い道がどれかを尋ねて、その道に歩み、そしてあなたがたの魂のために、安息を得よ」（エレミヤ 6：16）。また神

はこう言われる、「どうか、あなたはわたしの戒めに聞き従うように。そうすれば、あなたの平安は川のように、あなたの義は海の波のようにな（る）」（イザヤ 48：18）。

キリストをみことば通りに信じ、自分の魂をキリストの守りに委ね、その生活をキリストの命令に従わせる者には、平安とおだやかさがある。イエスがそのこ臨在によって彼らをよろこぼせてくださる時、この世のどんなものも彼らを悲しませることができない。ただ黙々として従うことに完全な休みがある。「あなたは全き平安をもってこころざしの堅固なものを守られる。彼はあなたに信頼しているからである」と主は言われる（イザヤ 26：3）。われわれの生活は混乱しているようにみえるかも知れない。しかし賢明な巨匠であられる神に自分自身をまかせる時、神はご自身の栄えとなる生活と品性の型をつくり出される。こうしてキリストの栄光すなわちキリストの品性をあらわす人は、神のパラタマスに受け入れられる。新しくされた人類は、白衣を着て神とともに歩むのである。彼らにその価値があるからである。

われわれがイエスを通して休みに入る時、天国はこの地上に始まる。わたしのもとにきて、わたしに学びなさいとのイエスの招きに応じてみもとに行く時、われわれの永遠のいのちが始まる。天国はキリストを通してたえず神に近づくことである。幸福な天国にいればいるほどますます栄光がわれわれに示されるであろう。神について知れば知るほど、われわれの幸福はまし加わるであろう。この世にあってイエスとともに歩む時、われわれはイエスの愛に満たされ、イエスのこ臨在に満足するかもしれない。この世にあってわれわれは、人間の性質の耐えられることをすべて受けるかもしれない。だがこうしたことは来世に比較する時、もののかずではない。そこでは「それだから彼らは、神の御座の前におり、昼も夜もその聖所で神に仕えているのである。御座にいますかたは、彼らの上に幕屋を張って共に住まわれるであろう。彼らは、もはや飢えることがなく、かわくこともない。太陽も炎暑も、彼らを侵すことはない。御座の正面にいます小羊は彼らの牧者となって、いのちの水の泉に導いて下さるであろう。また神は、彼らの目から涙をことごとくぬぐいとって下さるであろう」（黙示録 7：15～17）。

第 35 章　「静まれ、黙れ」

その日は、イエスのこ生涯の中でも出来事の多い 1 だった。ガリラヤの海のほとりで、イエスは最初のたとえ話をされたが、その中で、イエスはよく知られている実例を用いて、み国の性質と、そのみ国がどのようにして建設されるかをもう 1 度人々に説明された。イエスはご自分の働きを種を播く人の働きにたとえ、み国の発展をからし種の成長と粉の中に入れたパン種の効果にたとえられた。麦と毒麦、また魚とりの網のたとえの中で、イエスは義人と悪人の最後の厳粛な隔離を描写された。イエスのお教えになった真理のすぐれたとうとさが、かくされた宝と非常に高価な真珠によって例示され、一方イエスは家の主人のたとえを通して、弟子たちがイエスの代表者としてどのように働くべきかをお教えになった。

1 日中イエスは人々に教え、病人をいやされた。夕暮が迫ってきても、群衆はなおイエ スのまわりにおし　よせた。来る日も来る日も、イエスは食事や休息をされるひまもほとんど ないくらい人々に奉仕された。パリサイ人たちが、悪意のある批評や偽りの宣伝をもって、　たえずイエスにつきまとったことが、イエスの働きを一層きびしく、苦しいものにした。そ　していま 1 日の終りに、イエスは疲れはててしまわれたので、湖を渡って、どこかさびしいところへかくれ場所を求めようと決心された。　ゲネサレの東岸は人の住んでいないところではなく、湖畔のそこここに町があった。それでも西岸にくらべると、そこはさびしい地方で　あった。そこの住民はユダヤ人よりも異教徒が多く、ガリラヤとの往来はほとんどなかった。だからそこは、イエスが求めておられるかくれ場所にふさわしかったので、イエスはいま弟　子たちに、そこへついてくるようにお命じになった。

イエスが群衆を解散させられると、弟子たちはイエスをそのまま舟にのせて、いそいで舟をこぎ出した。だが出かけたのは彼らだけではなかった。岸の近くにはほかにも魚とりの舟があったので、それらの舟は、イエスに会ってみことばを聞きたいとまだ熱望してイエスについて行く人たちでたちまちいっぱいになった。 救い主はおしかけた群衆からやっと解放されると、疲れと空腹のために力がつきはてて舟のともに横たわったまま、すぐに眠ってしまわれた。夜は静かで気持がよく、静けさが湖をおおっていた。しかしにわかに、暗闇が空

一面にひろがり、東岸の山の谷間から風がはげしく吹きおろしてきて、すさまじい嵐が湖をおそった。

太陽はすでに沈み、夜のくらやみが嵐の海にたれこめていた。波はうなり声をあげる風に荒れ狂い、弟子たちの舟に激しくぶつかって、いまにも舟をのみこみそうにみえた。この屈強な漁師たちは、これまで湖で生活し、何度嵐に会っても安全に舟をあやつってきたが、こんどだけは彼らの腕も力も役にたたなかった。彼らは嵐にまきこまれてどうすることもできず舟に水がたまってくるのを見ると望みが失われてしまった。

彼らは自分たちのいのちを救うことに熱中していたので、舟の中にイエスがおられることを忘れていた。いま、自分たちの努力がむなしく、目の前にあるのは死だけであることを知ると、彼らはだれの命令で湖の横断に乗り出したかを思い出した。無力と絶望のはてに、彼らは、「主よ、主よ」と叫んだ。だが濃いくらやみがイエスのお姿を彼らの見えないところにかくしていた。彼らの声は嵐のうなりにのみこまれて、返答がなかった。疑惑と恐怖が彼らをおそった。イエスは自分たちを見捨てられたのだろうか。病気と悪鬼と死をさえ征服されたお方が、いま弟子たちを助けてくださる力がないのだろうか。困りきっている自分たちを気にかけてくださらないのだろうか。

もう 1 度彼らは呼んでみる。だが答えるのは荒れ狂う疾風のうなり声だけである。もはや舟は沈みはじめている。もう少しで、彼らは飢えた波にのみこまれそうになる。　突然一すじのいなづまが暗闇をつらぬいて光る。するとこのさわぎにじゃまされないで横になったま　ま眠っておられるイエスのお姿が彼らの目にうつる。驚きと絶望のうちに、彼らは、「先生、わたしどもがおぼれ死んでも、おかまいにならないのですか」と叫ぶ（マルコ　4：38）。自分たちが危険の中にあって死と戦っているのに、主はよくあんなに安らかに休んでおられる　ものだ。彼らの叫び声がイエスを起こす。いなづまのひらめきがイエスのお姿を照し出すと、そのお顔には天の平安がみられる。彼らはイエスの御目から、無我のやさしい愛を読みとり、心をイエスに向けると、「主よ、お助けください、わたしたちは死にそうです」と叫ぶ（マ　タイ 8：25）。

この叫びをあげてかえりみられない魂はない。弟子たちが最後の努力をかたむけるためにオールをにぎりしめると、イエスが立ちあがられる。イエスが弟子たちのまん中に立たれると、嵐は荒れ狂い、波が彼らの上にくだけ、いなづまがイエスのお顔を照す。イエスは、これまでも幾度か憐れみの行為に使われ大み手をあげて、荒れ狂う海に、「静まれ、黙れ」と言 われる。 暴風はやみ、大波は静まる。黒雲は消え去り、星が輝き出る。舟は静かな海の上に安定する。するとイエスは、弟子たちに向かって悲しげにこうおたずねになる、「なぜ、そんなにこわがるのか。どうして信仰がないのか」（マルコ 4：40）。 弟子たちは一言もなく静まりかえった。ペテロさえ、自分の心を満たした畏敬の思いを口に出そうとはしなかっ た。イエスについて行くために出かけてきた舟は、弟子たちと同じ危険に出会った。それら の舟に乗っていた人たちは恐怖と絶望にとりつかれたが、イエスの命令によって嵐の騒ぎは 静まった。激しい嵐に吹きまくられて舟は一つところにかたまっていたので、舟の上の者は みなその奇跡を見た。静けさがやってくると、恐怖は忘れられた。人々は互に、「このかた はどういう人なのだろう。風も海も従わせるとは」とささやきあった（マタイ 8：27）。 イエスが目をさまして嵐に応じられた時、彼は平安そのものであった。そのことばにも顔つき にも恐怖の跡はみられなかった。イエスの心の中には恐怖がなかったのである。しかしイエ スは、ご自分が大能の力を持っておられることをあてにされなかった。イエスが静かに落ち ついておられたのは、天と地と海の主としてではなかった。イエスはその大能の力をさしお いて、「わたしは、自分からは何事もすることができない」と言われる（ヨハネ 5：30）。彼は天父の力に信頼された。イエスが安心しておられたのは、信仰、すなわち神の愛と守り に対する信仰のゆえであった。鼠を静めたみことばの力は神の力であった。

イエスが信仰によって天父の守りに安んじておられたように、われわれも救い主の守りに安心していることができる。もし弟子たちがイエスに信頼していたら、彼らは平安のうちに守られたのである。彼らは危険な時に恐れたことによって、不信仰をばくろした、自分を救おうと努力しているうちにイエスを忘れたのぐある。彼らが自分にたよることに絶望してイエスに助けを求めた時にはじめて、イエスは彼らに助けを与しることがおできになった。

弟子たちの経験がそのままわれわれの経験である場合がどんなに多いことだろう。誘惑の嵐が迫り、はげしいいなづまがひらめき、波がわれわれの上におおいかぶさる時、われわれは助けてくださることのできるお方がおられることを忘れて、自分 1 人で嵐と戦う。望みが失われていまにも滅びそうになるまでわれわれは自分自身の力にたよる。そしてそれから　イエスのことを思い出寅救ってくださいとイエスに呼び求める時、その叫びは無駄にならな　い。イエスは、われわれの不信と自信を悲しく思って責められるが、必要な助けをお与えに　ならないことは決してない、陸の上でも、海の上でも、心のうちに救い主を持っているなら、恐れる必要はない。救い主に対する生きた信仰によって、人生の海はおだやかになり、主が　最善とごらんになる方法で、われわれは危険から救われるのである。

嵐を静めたこの奇跡には、もう一つの霊的教訓がある。どの人の経験も聖書のみことばの真実を立証している。「悪しき者は波の荒い海のようだ。静まることができない……わが神は言われる、『よこしまな者には平安がない』と」（イザヤ　57：20、21）。罪はわれわれの平安を破壊してしまった。自我を征服しないかぎり平安はない。人間の力では、心の中　の支配的な欲情を制することができない。弟子たちが荒れ狂う嵐を静めることができなかっ　たように、われわれはこの点において、無力である。だがガリラヤの大波に平安を語られた　お方は、どの魂にも平安のことばを語ってこられた。どんなに嵐がはげしくても、イエスに　向かって「主よ、助けてください」との叫びをあげる者には救いがある。魂を神にやわらが　せてくださるイエスの恩恵によって、人間の欲情との戦いは静まり、心はイエスの愛のうち　に休まる。「主があらしを静められると、海の波は穏やかになった。こうして彼らは波の静　まったのを喜び、主は彼らをその望む港へ導かれた」（詩篇 107：29、30）、「このように、わたしたちは、信仰によって義とされたのだから、わたしたちの主イエス・キリストにより、神に対して平和を得ている」。「正義は平和を生じ、正義の結　ぶ実はとこしえの平安と信頼である」（ローマ 5：1、イザヤ 32：17）。

救い主と、その連れの一行が朝早く岸に着くと、昇る太陽の光が平和を祝福するかのように海と陸にふりそそいでいた。だが波うちぎわに足をつけたとたんに、彼らの目は荒れ狂う嵐よりももっと恐ろしい光景にぶつかった。墓場の隠れ場所のあたりから 2 人の狂人が彼

らを八つ裂きにしそうな勢いで飛びかかってきたのである。狂人たちの体のまわりには、つながれていたところから逃げ出すときにたち切った鎖の一部がたれさがっていた。その肉体は裂け、とがった石で自ら切ったところから血が流れていた。長くのびてもつれた髪の毛の下には目がぎらぎら光り、彼らにとりついている悪鬼によって人間のかたちがわからなくされてしまったかのように、人間というよりは野獣のようにみえた。

弟子たちや連れの人たちはおびえて逃げ出した。だが彼らはすぐにイエスがいっしょにお逃げにならなかったのに気がつき、ふりかえってイエスをさがした。イエスは彼らが逃げ出したところに立っておられた。嵐を静め、サタンに出会ってこれを征服されたイエスは、この悪鬼どもの前から逃げ出されなかった。この人たちが歯をくいしばり、口にあわをふいてイエスに近づくと、イエスは波に静まるように合図された手をおあげになった。するとこの人たちはもうそれ以上近よれなかった。彼らは怒って立っていたが、イエスの前では無力だった。

イエスは権威をもって、けがれた霊に、彼らから出るようにお命じになった。イエスのみことばは、この不幸な人たちの暗くなった心をさしつらぬいた。自分たちを苦しめている悪鬼から救ってくださることのできるお方が近くにおられるということを、彼らはおぼろげながらさとった。彼らはイエスをおがもうとして地にひれふした。だがイエスの憐れみを乞おうとして彼らが口を開くと、悪鬼が彼らを通して語り、「いと高き神の子イエスよ、あなたはわたしとなんの係わりがあるのです。神に誓ってお願いします。どうぞ、わたしを苦しめないでください」とはげしく叫んだ（マルコ 5：7）。 イエスは、「なんという名前か」とおたずねになった。すると答は「レギオンと言います。大ぜいなのですから」であった（マルコ 5：9）。悪鬼はこの苦しんでいる人間を伝達の仲介として、イエスに、自分たちを国の外へ追い出さないでいただきたいと願った。そこから遠くない山腹にぶたの大群が飼われていた。悪鬼どもはこのぶたの群れの中へ入らせてもらいたいとたのんだ。イエスはそれをおゆるしになった。するとたちまちぶたの群れは恐慌にとりつかれた。ぶたの群れは気が狂ったようにがけを駆けくだり、水ぎわにとまることができないで、そのまま湖にとびこんで死んでしまった。

そうしているうちに、悪鬼につかれていた人間に驚くべき変化が起こった。彼らの心に光がさし込み、その目は知性に輝いた。長い間サタンのかたちにゆがめられていた彼らの顔つきがにわかにおだやかになり、血にそまった手が静かになった。彼らは喜びの声をあげて、自分たちが救われたことを神に感謝した。

ぶたの群れの番をしていた人たちは、がけの上からこの光景を見ていた。彼らはいそいでこの出来事を雇い主とほかのすべての人たちに知らせようと走った。全住民が驚き恐れて、イエスに会いに集まって来た。この悪鬼につかれていた 2 人の人間は国中の恐怖のまとであった。彼らの居る場所を無事に通り抜けられる者は誰もいなかった。彼らは通りかかる人に　悪鬼のすさまじさでとびかかるのだった。ところがいまこの 2 人が、衣服を身につけ、正気になって、イエスの足下にすわってみことばをきき、健全な心身にして下さったイエスのみ　名をたたえていた。しかしこのふしぎな光景を見た人たちはよろこばなかった。彼らにとっ　てぶたの損失は、サタンのとりこになっていたこの人たちの救いよりも重大に思えた。　この損害がぶたの所有者たちに及ぶがままにされたのは、彼らに対する憐れみからだった。彼ら　は世俗の事に心を奪われ、霊的生活の重大な利害を気にしていなかった。イエスは、彼らが　イエスの恵みを受け入れるように、利己的無関心という魔力をたち切ろうと望まれた。だがこの世の事物の損失に対する残念さと憤慨のために、彼らの目は救い主のあわれみに対して　盲目になった。

超自然の能力があらわされたことから、人々の迷信が起こり、恐怖心が刺激された。この見知らぬ人が自分たちの中にいたら、これ以上どんな災難が起こるかも知れなかった。彼らは経済上の損失を恐れ、イエスにいてもらいたくないと決心した。イエスと一緒に湖を渡ってきた人たちは、前の晩に起こった出来事について、すなわち嵐の中で危険だったことや、風と海が静められたことなどをすっかり話した。だが彼らのことばには効果がなかった。恐怖のうちに、人々はイエスのまわりにむらがり集まってきて、ここから出て行っていただきたいとイエスにたのんだ。そこでイエスは承知されて、すぐ対岸へ向かって舟を出された。

ガダラ人の目の前には、キリストの力と憐れみの生きた証拠があった。彼らは理性をとり戻した人々を見た。だが彼らは、この世の利益が危険にさらされることを恐れたので、目

の前で暗黒の君を征服されたお方を侵入者としてとり扱った。こうして、天の賜物であられるイエスは、彼らの門口から退けられた。われわれは、ガダラ人のように、キリストご自身の前から立ち去る機会はない。だがイエスのみことばに従うことをこばむ者が多い。服従にはこの世の何かの利益を犠牲にすることが含まれているからである。イエスの存在によって金銭上の損失が起こるのを防ぐために、多くの者はキリストの恵みをこばみ、そのみたまを追い出すのである。

だが悪鬼を追い出してもらったこの 2 人の思いはこれとまったくちがっていた。彼らは自分たちを救ってくださったお方について行きたいと望んだ。イエスの前にいると、これまで自分の生活を苦しめ、人間性を破壊してきた悪鬼から安全に守られているのを感じるのだった。イエスが舟に乗ろうとされると、彼らはそばから離れないで、足下にひざまずき、いつでもイエスのみことばがきかれるおそばにおいてくださいと嘆願した。しかしイエスは、家へ帰って、主がどんなにすばらしいことを自分たちのためにして下さったかを語りなさいとお命じになった。 ここに彼らのなすべき働きがあった。それは異教の家庭へ帰って、自分たちがイエスから受けた祝福を語ることであった。救い主と別れることは彼らにとってつらいことだった。異教の同国人と交わることには必ず大きな困難がつきまとうにちがいなかった、また長い間社会から孤立していたために、キリストの指示されたような働きをする資格は彼らにはないように思われた。だがイエスが彼らの義務を指摘されたとたんに、彼らはすぐに従った。彼らは自分の家族や隣人にイエスのことを語っただけでなく、デカポリスのいたるところを歩いて、どこででもキリストの救いの力をのべつたえ、自分たちが悪鬼から解放された模様を語ってきかせた。この働きをすることによって、彼らは、単に自分の利益だけのためにイエスの前にとどまっているよりも、もっと大きな祝福を受けることができた。われわれは救いのよきおとずれをのべつたえる働きをすることによって、救い主の近くにひきよせられるのである。

悪鬼から解放されたこの 2 人はデカポリス地方に福音をのべつたえるためにキリストからつかわされた最初の宣教師となった。彼らがキリストの教えを聞く特権を与えられたのはほんの数分間にすぎなかった。彼らはキリストから一つの説教さえきかされなかった。彼ら

は、毎日キリストといっしょにいた弟子たちのように、人々を教えることはできなかった。だが彼らは、自分自身のうちにイエスがメシヤであるという証拠を持っていた。彼らは知っていることを語ることができた。キリストの力について自分自身が目で見、耳で聞き、心に感じたことを語ることができた。これこそキリストの恵みにふれたことのある人ならだれでもできることである。愛された弟子ヨハネは「初めからあったもの、わたしたちが聞いたもの、目で見たもの、よく見て手でさわったもの、すなわち、いのちの言について――このいのちが現れたので、この永遠のいのちをわたしたちは見て、そのあかしをし、か つ、あなたがたに告げ知らせるのである」と書いた（Ｉヨハネ 1：1、2）。キリストの証人として、われわれは、知っていること、自分が見、聞き、感じたことを語るのである。もし 1 歩 1 歩イエスに従ってきているならば、われわれは、イエスがわれわれをみちびかれた道について何か要点にふれたことを語ることができるのである。イエスの約束を試みて、その約束が真実であったことを語ることができる。キリストの恵みについて知ったことをあかしすることができる。これこそ主が求めておられるあかしであって、このあかしが欠けているために、世の人々は滅びつつあるのである。

ガダラ人はイエスを受け入れなかったが、イエスは彼らを、彼らが自らえらんだ暗黒の中に捨てておかれなかった。イエスにここから立ちのくように命じた時、彼らはイエスのみことばをまだきいていなかった。彼らは自分たちがこばんでいるものについて何も知らなかった。そこでイエスはもう 1 度彼らに光をお送りになったが、それは彼らが聞くことをこばむことのできない者を通してであった。 ぶたを全滅させることによって、人々を救い主から離れさせ、その地方の福音宣伝を妨げようとするのがサタンの目的だった。ところがこの出来事は、他のどんなことによってもなし得られないほど、国中をわき立たせ、注意をキリストに向けさせた。救い主ご自身は立ち去られたが、イエスからいやされた者たちはイエスの力の証人として残った。暗黒の君の仲介をしていた者が光の伝達者、神のみ子の使者となった。人々はそのすばらしい知らせをきいて驚いた。この地方のいたるところに福音の門戸が開かれた。イエスがデカポリスにお帰りになると、人々はみもとに群れ集まった。そして 3

日の間、一つの町の住民だけでなく、周囲のあらゆる地方の幾千の人々が救いのみことばを聞いた。悪鬼の力さえ救い主に制せられ、悪の働きはくつがえされて益となる。

ガダラ人と出会ったことは、弟子たちにとって教訓となった。そこにはサタンが全人類をひきずり込もうとしている堕落の深みと同時に、そのサタンの力から人を解放されるキリストの使命が示されている。悪鬼にとりつかれて墓場を住居とし、激情を制御できず、いまわしい欲望のとりことなっていたこのみじめな人間どもは、人がサタンの支配下にまかされる時にどんなことになるかを示している。サタンの影響は、たえず人々の感覚を混乱させ、心を支配して悪へ向け、暴力と犯罪とをそそのかすことに集中される。サタンは肉体を弱くし、知性をくもらせ、魂を堕落させる。人々が救い主の招待をこばむ時にはいつでも、彼らはサタンに負けているのである。今日、人生の各方面において、家庭で、商売で、また教会の中でさえ、多くの人々がキリストをこばんでいる。

暴力と犯罪が地にひろがり、道徳的暗黒が死のとばりのように人々の住居をおおっているのはこのためである。サタンは見かけのよい誘惑で人々をだんだん悪い方へひつばって行って、ついにはまったく堕落させ、破滅させてしまうのである。サタンの力に対するただ一つの防備はイエスのご臨在のうちにある。人類と天使の前で、サタンは人類の敵であり、人類を滅ぼす者であることがばくろされた。一方キリストは人の友、また人を救うお方であることが示された。キリストのみたまは、品性を高め、性質を高貴にするような一切のものを人のうちに発達させる。それはまた肉体と精神と魂によって神の栄えをあらわすように人を築きあげる。「というのは、神がわたしたちに下さったのは、臆する霊ではなく、力と愛と慎みとの霊なのである」（Ⅱテモテ 1：7）。神は「そのために、わたしたちの福音によりあなたがたを召して、わたしたちの主イエス・キリストの栄光（品性）にあずからせて下さるからである。」また「更に御子のかたちに似たものとしようとして」、われわれを招かれたのである（Ⅱテサロニケ 2：14、ローマ 8：29）。 堕落してサタンの道具となってしまった魂が、今でも、キリストの力によって義の使者として生まれ変わり、「主がどんなに大きなことをしてくださったか、またどんなにあわれんでくださったか」を告げるために神のみ子によってつかわされている（マルコ 5：19）。

第 36 章　信仰のいやし

イエスが、ガダラ人の地から西海岸へもどってこられると、群衆が集まってきてイエスを迎え、喜んでイエスにあいさつした。イエスはしばらく海辺に残って教えたり、いやしたりされてから、取税人たちと一緒に食事をするためにレビ・マタイの家へおいでになった。ここで会堂司（かいどうつかさ）のヤイロがイエスと出会った。　このユダヤ人の長老は非常な苦しみのうちにイエスのみもとにやってくると、その足下に身を投げ出し、「わたしの幼　い娘が死にかかっています 1 どうぞ、その子がなおって助かりますように、おいでになって、手をおいてやってください」と叫んだ（マルコ　5：23）。イエスはすぐこのつかさと一緒にその家へお出かけになった。弟子たちは、これまで何度かイエスの情深い働きを見てきたが、イエスが高慢なラビの嘆願に応じられたのには驚いた。それでも彼らは、主に同行し、また　人々も熱心な、期待に満ちた思いでついて行った。

つかさの家は遠くなかったが、群衆が四方から押し合ったので、イエスは同行者たちとゆっくり進んで行かれた。心配な父親は、遅くなるのががまんできなかった。しかしイエスは、人々をあわれんで、時々立ちどまっては病人の苦しみをやわらげたり、心の悩みを慰めたりされた。 彼らがまだ途中にいた時に、1 人の使者が群衆をおしわけてやってきて、ヤイロに、娘が死んだという知らせを告げ、これ以上主をわずらわせても無益だと言った。そのことばはイエスの耳に入った。するとイエスは、「恐れることはない。ただ信じなさい。娘は助かるのだ」と言われた（ルカ 8：50）。

ヤイロは一層イエスの近くによりそい、一緒に自分の家へ急いだ。家にはすでに雇われた泣き人や笛吹きなどがやってきていて、泣き声や笛の音があたりの空気を満たしていた。群衆がつめかけて騒いでいることが、イエスの気にさわった。イエスは彼らを静めようとして、「なぜ泣き騒いでいるのか。子供は死んだのではない。眠っているだけである」と言われた（マルコ　5：39）。人々はこの外来者のことばに憤慨した。彼らは子供が死んだのを見ていたので、イエスをあざ笑った。イエスはみんなが家から出るようにと要求され、少女の父親と母親、ペテロ、ヤコズ、ヨハネの 3 人の弟子をおつれになって、いっしょに死者のい

る部屋にお入りになった。 イエスは寝床のそばに近づき、ご自分の手に少女の手をおとりになって、彼女の家庭のききなれたことばで、「少女よ、さあ、起きなさい」と静かに言われた（マルコ 5：41）。

その瞬間、意識のない少女の体にかすかな動きが伝わった。生命の鼓動がふたたび始まった。くちびるは微笑んだ。`あたかも眠りからさめたように両眼をぱっちり開くと、少女はかたわらの人たちをふしぎそうにじっとみつめた。少女が起きあがると、両親は彼女を両腕にだきしめて、喜びに泣いた。 つかさの家に行かれる途中、イエスは、群衆の中で 1 人のかわいそうな女に会われた。彼女は 12 年の間病気に苦しめられ、人生が重荷になっている女だった。医者と治療に全財産を使い果たしても、不治を宣告されたにすぎなかった。しかしキ　リストが行われたいやしのことをきいた時、望みがよみがえった。キリストのみもとに行く　ことさえできたら、自分はいやされるのだと彼女は確信した。苦しみ弱りながらも、彼女は、イエスが教えておられる海辺へやってきて、群衆をかきわけて進もうとしたが、むだだった。彼女は、レビ・マタイの家からもう 1 度イエスについて行ったが、やはりイエスのおそばに近づくことができなかった。彼女は絶望しかかっていた、するとその時、群衆をおしわけて、イエスが彼女の近くにやってこりれた。

いつでもすぐ口を出すペテロが、「ごらんのとおり、群衆があなたに押し迫っていますのに、だれがさわったかと、おっしゃるのですか」と言った（マルコ　5：31）。イエスは、「だれかがわたしにさわった。力がわたしから出て行ったのを感じたのだ」と答えられた（ルカ　8：46）。救い主は不注意な群衆が偶然さわったのと、信仰をもってさわったのとを区別することがおできになった。このような信頼を、何にも言わないで、みすごすわけにい　かなかった。イエスは、このいやしい女に喜びの泉となるような慰めのことば――イエスに 従う者にとって世の終わりまで祝福となるようなことばを語りたいとお思いになった。　女の方をごらんになって、イエスは、だれが自分にさわったのか知りたいと強く主張された。か　くしてもむだなことがわかると、彼女はふるえながら前へ出て、イエスの足下にひれ伏した。彼女は、感謝の涙を流して、自分の苦難の物語を告げ、救われた次第を語った。イエスは、「娘よ、あなたの信仰があなたを救ったのです。安心して行きなさい」とやさしく言われた

（ルカ 8：48）。いやしの力をただイエスの衣にさわる行為だけに求める迷信の余地を、イエスはお与えにならなかった。いやしが行われたのは、イエスとの外面的な接触によってではなくて、イエスの天来の力にすがる信仰によってであった。

イエスのまわりにひしめき合って驚いている群衆は、いのちの力を受けられることを認めていなかった。しかし苦しんでいる女が、いやされることを信じてイエスにさわろうと手をさし出した時、彼女はいやしの力を感じた。霊的なことにおいてもこれと同じである。不用意に宗教のことを語ったり、魂のかわきや生きた信仰がなくて祈ったりしても、それは何の役にもたたない。キリストをただ世の救い主として受け入れる口さきだけの信仰では、決して魂をいやすことができない。救いにいたる信仰は、頭だけで真理に同意することではない。全部わかるまでは信仰を働かそうとしない人は、神から祝福を受けることができない、キリストについて信ずるだけでは十分でない。キリストそのものを信じなければならない。われわれを益する信仰は、キリストを自分自身の救い主として信ずる信仰、キリストの功績を自分自身のものとする信仰だけである。信仰を一つの意見として持っている人が多い。人を救う信仰は、キリストを受け入れる者が神との契約関係に入る一つの取引である。真の信仰はいのちである。生きた信仰とは、活力と信頼心とが増し加わり、それによって魂が勝利する力となることを意味する。

イエスは、女をいやされてから、彼女が自分の受けた祝福を感謝するように望まれた。福音によって提供される賜物は、それをこっそり確保したり、ひそかに楽しんだりするためではない。だから主は、神の恵みを告白するようにと、われわれに呼びかけておられる。「『あなたがたはわが証人である』と主は言われる。『わたしは神である』」（イザヤ 43：12、13）。 キリストの忠実さについてわれわれが告白することは、キリストを世にあらわすために天のえらばれた方法である。われわれは、昔の聖人たちを通して知らされた神の恩恵　を告白すべきであるが、しかし最も　効果があるのは、われわれ自身の経験によるあかしである。神の力の働きを自分自身のうちにあらわす時、われわれは、神の証人である。各個人は　それぞれ他人とちがった人生を持っており、また本質的に他人とちがった経験を持っている。神は、われわれの賛美が、それぞれ特有の個性を帯びてみもとにのぼることをお望みになる。

このようなとうとい告白によって神の恵みの栄光を賛美することは、それがクリスチャン生活によって裏づけられる時、抵抗することのできない力をもって魂の救いのために働くのである。

10 人のハンセン病人がいやしを求めてイエスのところへやってきた時、イエスは、彼らに、行って祭司に見せなさいとお命じになった。彼らは途中できよめられたが、イエスを賛美するためにもどってきたのは、その中の 1 人だけだった。ほかの者たちは自分をいやしてくださったお方を忘れて、そのまま行ってしまった。いまでもこれと同じことをしている者がどんなに多いことだろう。主は人類の利益のためにたえず働いておられる。主はいつも恵みを与えて下さる。主は病人をその苦しみの床から起こし、人々を目に見えない危険から救い、天使たちに命じて人々を災難から助け、「暗やみに歩きまわる疫病」、と「真昼に荒す滅び」から守って下さる（詩篇 91：6）。それでも彼らの心は感じない。神は人類をあがなうために天の全財産をお与えになったのに、彼らはその大きな愛を心にとめない。忘恩のために、彼らは神の恵みに心をとざしている。彼らは「荒野に育つ小さい木のように、何も良いことの来るのを見ない」で、その魂は「荒野の、干上がったところに住」んでいる（エレミヤ 17：6）。

神の賜物の一つ一つについて記憶を新たにすることは、われわれ自身のためである、こうして、もっと多くを求め、もっと多くを受けるように、信仰が強められる。他人の信仰と経験についての話を残らず読むよりも、自分自身が神から受ける一番小さな祝福の方がずっと大きな励ましとなる。神の恵みに答える魂は、「潤った園」のようになる。彼は「すみやかにいやされ、」彼の「光は暗きに輝き」主の栄光が彼の上にみられる（イザヤ 58：8～11 参照）。だから主のいつくしみとそのやさしい多くの憐れみとを忘れないようにしよう。イスラエルの民のように、あかしの石を立て、神がわれわれのためにしてくださったことについて、とうとい物語をそれにきざみつけよう。そうしてこの世の旅路において、主がわれわれをどのように扱われたかをふりかえってみて、感謝にみちた心でこう叫ぼう、「わたしに賜わったもろもろの恵みについて、どうして主に報いることができようか。わたしは救の杯

をあげて、主のみ名を呼ぶ。わたしはすべての民の前で、主にわが誓いをつぐなおう」（詩篇116：12～14）。

第 37 章　最初の伝道者たち

使徒たちはイエスの家族であった。イエスが歩いてガリラヤを旅行される時、彼らはイエスについてまわった。彼らは、身にふりかかる苦労と困難を、イエスとともにわけ合った。彼らはイエスの説教をきいた。彼らは神のみ子とともに歩み、そして語った。イエスの日ごとの教えから、彼らは、人類の向上のためにどのように働いたらよいかを学んだ。イエスがまわりに集まったおびただしい群衆に奉仕される時、弟子たちはそばにつきそっていて、イエスの言いつけを行い、その骨折りを軽くしようと努めた。彼らは人々を整理したり、苦しんでいる人たちを救い主のもとにつれてきたり、みんなが気持よくいられるようにしたりなど、いろいろ手伝った。彼らは興味を示している聴衆を見守り、その人たちに聖書を説明し、彼らの霊的な利益のためにいろいろな方法で働いた。彼らはイエスから学んだことを教え、毎日豊かな経験を積んでいた。しかし彼らはまた 1 人で働く経験も必要だった。彼らはまだもっと多くの教訓と大きな忍耐と　思いやりが必要だった。いま、救い主が親しくいっしょにおられて、彼らのまちがいを示し、彼らに助言を与え、彼らのまちがいを直してくださるこ　とができる間に、救い主は、彼らをご自分の代表者として送り出された。

弟子たちは、イエスと一緒にいた時、祭司たちとパリサイ人たちの教えにたびたび悩まされたが、その悩みをイエスのところへ持って行った。イエスは言い伝えと対照的に、聖書の真理を彼らの前に示されたこうしてイエスは、神のみことばに対する彼らの信頼心を深め、ラビたちを恐れる気持や、言い伝えの束縛から、彼らを大いに解放された。弟子たちの訓練において、救い主の生活の模範は、単なる教義上の教えよりもはるかに効果があった。弟子たちがイエスと別れた時、イエスの顔つきや口調やことばの一つ一つが彼らによみがえってきた。福音の反対者たちと衝突した時、彼らは、たびたびイエスのみことばをくりかえし、その効果が人々にあらわれるのを見て、非常に喜んだ。

イエスは、12 人をみもとにお呼びになって、2 人ずつ一緒になって町々や村々をまわるようにお命じになった。誰も 1 人ではつかわされず、兄弟と兄弟、友だちと友だちが組み合わされた。こうして彼らは、互に助け合い、励まし合い、共に助言したり祈ったりして、一

方の力で他方の弱さを補うことができた。同じやり方で、イエスはのちに 70 人をつかわされた。福音の使者たちがこのように組み合わされることが、救い主のみこころであった。今の時代にこの模範にもっと忠実に従うなら、伝道の働きはもっとずっと成功するであろう。 弟子たちのメッセージは、バプテスマのヨハネやキリストご自身のメッセージと同じに、「天国は近づいた」であった。彼らは、ナザレのイエスがメシヤであるかどうかということについて、人々と論争を始めるのではなく、イエスがなさったように慈善の働きを、キリストのみ名によってするのであった。「病人をいやし死人をよみがえらせ、重い皮膚病を患っている人をきよめ、悪霊を追い出せ。ただで受けたのだから、ただで与えるがよい」とイエスは彼らに命じられた（マタイ 10：8）。

イエスは、公生涯の間、説教することよりも病人を治すことに、多くの時間をささげられた。イエスの奇跡は、イエスが滅ぼすためではなく救うためにおいでになったというみことばが事実であることを証明した。イエスの義はその前に行き、主の栄光はそのしんがりとなった（イザヤ 58：8 参照）。どこへ行かれても、イエスの恵みのおとずれが先立った。イエスのお通りになったあとには、イエスから憐れみを受けた人たちが健康を喜び、新しく与えられた力を試みていた。彼らのまわりに集まった群衆は、主のなさったみわざを、彼らの口から聞いた。イエスの声は、多くの人々がきいた最初の声であり、イエスのみ名は、彼らが語った最初のことばであり、イエスのみ顔は、彼らが仰いだ最初の顔であった。どうしてイエスを愛し、イエスを賛美しないでいられようか。イエスが町々や都市を通りすぎられる時、彼は、いのちの流れのように、いたるところにいのちと喜びとをまきちらされた。

イエスに従う者は、イエスが働かれたように働くのである。われわれは、飢えた者に食べさせ、裸の者に着せ、苦しみ悩む者を慰めるのである。われわれは、絶望している者に奉仕し、望みのない者に望みを起こさせるのである。その時われわれにもまた「あなたの義はあなたの前に行き、主の栄光はあなたのしんがりとなる」との約束が成就される（イザヤ 58：8）。無我の奉仕にあらわされるキリストの愛は、悪事を行う者を矯正するのに、剣や裁判所よりも効果がある。剣や裁判所は、法律を犯す者に恐怖を与えるのに必要だが、愛の伝道者はそれ以上のことができる。心は譴責されるとしばしば固くなるが、キリストの愛にふれる

ととける。伝道者は肉体の病気を軽くすることができるばかりでなく、罪という悪疾から魂をきよめてくださることのできる大医師に罪人を導くことができる。神は、ご自分のしもべたちを通して、病人や不幸な人たちや悪霊につかれた人たちに、ご自分のみ声をきかせようと計画しておられる。神は人間といううつわを通して、世の人々が知らなかったような 慰め主になることを望んでおられる。

弟子たちは、最初の伝道旅行では、「イスラエルの家の失われた羊のところ」にだけ行くことになっていた（マタイ　10：6）。もしその時、異邦人やサマリヤ人に福音を説いていたら、彼らはユダヤ人に対する影響力を失ったであろう。彼らはパリサイ人の偏見を引き起　こして、論争にまきこまれ、そのために働きの初めから落胆したであろう。使徒たちでさえ、福音はすべての国々に伝えられるのだということをなかなか理解しなかった。この事実を彼　らが自らつかむことができるまでは、異邦人のために働く準備ができていなかった。もしユ　ダヤ人が福音を受け入れたら、神は彼らを異邦人への使者にしようと考えておられた。そこ　で最初にユダヤ人がメッセージを聞いたのであった。　キリストが働かれた伝道地のいたるところに、自身の必要にめざめて飢えかわくように真理を求めている魂があった。こうしたあ　こがれ求める心に、キリストの愛についての音信を伝える時がきていた。こうしたすべての　人々に、弟子たちは、キリストの代表者として行くのであった。こうして信者たちは、弟子　たちを天から任命された教師として仰ぐようになり、救い主が彼らの間からとり去られた時　に、彼らは教師がないままにとり残されないのであった。

この最初の旅行で、弟子たちは、イエスが前に行って友だちをおつくりになったところにだけ行くのであった。彼らの旅行の準備は、最も簡単なものであった。彼らの心をこの大きな働きからそらしたり、あるいは何かのことで反対を引き起こして今後の働きの門戸をとざしてしまうようなものは、何もゆるされないのであった。彼らは宗教教師の服を着たり、いやしい農夫たちと区別をつけるような服装をしたりしてはならなかった。彼らは会堂に入って人々を公の礼拝に呼び集めてはならなかった。彼らは戸ごと訪問の働きに努力を集中するのであった。もてなしを受けるために家から家を回ったり、不必要なあいさつなどに時間を浪費してはならなかった。しかしどこでも、価値のある人々やキリストご自身をもてなす

かのように心から彼らを歓迎する人々のもてなしは受けてよかった。彼らは、「平安がこの家にあるように」との美しい挨拶で住居に入って行くのであった（ルカ 10：5）。その家庭は、彼らの祈りや、賛美の歌や、家族が集まって聖書を開くことなどによって祝福されるのであった。

これらの弟子たちは、真理の先駆者となって、主の来臨に道を備えるのであった、彼らが伝えなければならないメッセージは、永遠のいのちのことばで、人々の運命は、そのことばを受け入れるかこばむかにかかっていた。このメッセージが厳粛なものであることを弟子たちに印象づけるために、イエスは彼らにこう言われた、「もしあなたがたを迎えもせずまたあなたがたの言葉を聞きもしない八があれば、その家や町を立ち去る時に、足のちりを払い落しなさい。あなたがたによく言っておく。さばきの日には、ソドム、ゴモラの地の方が、その町よりは耐えやすいであろう」（マタイ 10：14、15）。

いま救い主の目は将来を見通される。主は、ご自分の死後弟子たちがイエスのために証人となるもっと広い分野をごらんになる。イエスの預言の目は、ご自分がもう 1 度おいでになるまで、各時代にわたって、ご自分のしもべたちが経験することを、とらえられる。主は、ご自分に従う者たちに、彼らの会わねばならない戦いをお示しになる。主は、その戦いの性　格と規模を明らかにされる。主は、弟子たちが会わねばならない危険と、必要な克己心を彼　らの前に示される。主は、弟子たちが、気づかないうちに敵にとらえられることがないよう　に、前もって結果を検討するように望まれる。彼らの戦いは、血肉との戦いではなく、「も　ろもろの支配と、権威と、やみの世の主権者、また天上にいる悪の霊に対する戦いである」（エベソ　6：12）。彼らは超自然の勢力と戦うのであるが、しかし超自然の助けが保証されている、天のすべての天使たちがこの軍勢の中にいる。また天使たちよりも強いお方がこの隊列の中におられる、主の軍勢の隊長を代表される聖霊が、戦闘を指揮するためにくだってこられる。われわれの弱点は多く、われわれ　の罪と過失は悲しむべきものかもしれない。だが神の恩恵は、悔いた心でこれを求めるすべての人に与えられる。全能者の力は、神に信頼する人に協力するのである。

イエスは「わたしがあなたがたをつかわすのは、羊をおおかみの中に送るようなものである。だから、へびのように賢く、はとのように素直であれ」と言われた（マタイ 10：16）。キリストご自身は、真理のみことばをひとこともかくさずいつでも愛をもってそれをお語りになった。イエスは人々との交わりに、最大の機知と思いやりのある親切な注意とを働かされた。主は、決して不作法だったり、不必要にきびしいことばを出したり、感じやすい魂に不必要な苦痛を与えたりなどされなかった。主は、人間の弱さを非難されなかった。イエスは、偽善、不信、不義を恐れるところなく攻撃されたが、激しい譴責のことばを出される時には、その声に涙があった。道であり真理でありいのちであるイエスを受け入れることをこばんだエルサレム、イエスの愛された都エルサレムのために、イエスはお泣きになった。人々は救い主イエスをこばんだが、イエスはやさしい憐れみと、心を裂く深い悲しみとをもって彼らをごらんになった。どの魂もイエスの御目にはとうとかった。イエスはいつも天来の威厳を備えておられたが、同時にまたこの上なくやさしい思いやりをもって、神の家族の一人一人をかえりみられた。すべての人のうちに、イエスは堕落した魂をごらんになり、その魂を救うことがイエスの使命であった。

キリストのしもべたちは、生れつきの心が命じるままに行動しない。彼らは、挑発されて、自我が頭をもたげ、不似合いなことば、枯れしぼむ草木をうるおす露や小雨のようではないことばをはきちらすことがないように、神と密接に交わる必要がある。こうしたことは、サタンが彼らにさせようと望んでいることである。なぜならそうしたことはサタンの手段だからである。怒っているのは龍である。怒りと非難のうちにあらわされるのはサタンの精神である。神のしもべたちは神の代表者となるのである。神は、彼らが神ご自身のみかたちと刻印とを備えている真理を、天の雰囲気のうちにとり扱うように望んでおられる。彼らが悪にうち勝つ力は、キリストの力である。キリストの栄光が彼らの力である。彼らは、キリストの美しさに目をそそぐ。その時彼らは、天来の機知とやさしさとをもって福音を示すことができる。こうして、腹が立つようなことがあってもやさしさを失わない精神は、どんな力強い議論よりも、真理のためにずっと効果的に語るのである。

真理の敵との戦いにはいった人たちは、人間だけでなく、サタンとその部下にも対抗しなければならない。こうした人々は、「わたしがあなたがたをつかわすのは、小羊をおおかみの中に送るようなものである」との救い主のみことばを覚えているがよい（ルカ 10：3）。彼らは、神の愛のうちに安んじるがよい。そうすれば、個人的にひどい仕打ちを受けても、冷静な精神を保つことができる。主は、彼らに天来のよろいかぶとを着せてくださる。聖霊が心と思いに働くので、彼らの声はおおかみのほえるような調子を帯びない。　弟子たちへの教えを続けて、イエスは「人々に注意しなさい」と言われた（マタイ 10：17）。彼らは、神を知らない人たちを盲目的に信頼して、自分の考えを彼らに打ち明けるようなことをしては　ならなかった。そうすることは、サタンの部下たちを有利にするからであった。人間の考え　出したことは、しばしば神のご計画にさからう。主の宮を建てる者たちは、山で示された型、すなわち天の型に従って建てるのである。神のしもべたちが、聖霊のみちびきのもとにない　人たちの助言にたよる時、神ははずかしめられ、福音は裏切られる。世の知恵は神には愚か　である。これにたよる者は必ずまちがう。

「彼らはあなたがたを衆議所に引き渡し、……またあなたがたは、わたしのために長官たちや王たちの前に引き出されるであろう。それは、彼らと異邦人とに対してあかしをするためである」（マタイ　10：17、18）。迫害は光をひろめる。神のしもべたちは、世のえらい人たちの前にひっぱり出されるが、この人たち　は、こういうことがなければ、福音をきくことは決してないかもしれない。この人たちは、真理を曲解してきた。彼らはキリストの弟子たちの信仰についてまちがった非難をきいてきた。しばしば彼らの信仰の本当の性格を知る唯一の手段は、彼らの信仰を審問するためにつれてこられた人たちのあかしである。審問の際に、彼らは答えねばならず、また裁判する人たちは陳述されるあかしをきかねばならない。神の恵みは、その危急に応ずるために、神のしもべたちに与えられる。「言うべきことは、その時に授けられるからである。語る者は、あなたがたではなく、あなたがたの中にあって語る父の霊である」（マタイ　10：19、20）。神のみたまがご自分のしもべたちの心を照すとき、神の力と尊さを伴った真理が示される。真理をこばむ者は、弟子たちを訴え、圧迫しようとする。しかしたとえ死にいたるまで損害と苦難を受けても、主の民は、天来の模

範であられるキリストの柔和をあらわすのである。このようにして、サタンの部下とキリストの代表者たちの間の相違がみられる。救い主は役人たちや民衆の前で高められるのである。

弟子たちは殉教者の勇気と不屈の精神を、こうした徳が必要となるまでは、与えられなかった。それが必要となった時、救い主の約束は成就した。ペテロとヨハネがサンヒドリンの会議であかしをたてた時、人々は「不思議に思った。そして彼らがイエスと共にいた者であることを認め」た（使徒行伝　4：13）。ステパノについては、こう書かれている、「議会で席についていた人たちは皆、ステパノに目を注いだが、彼の顔は、ちょうど天使の顔のよ　うに見えた。」人々はステパノが、「知恵と御霊とで語っていたので、それに対抗できなか　った」（使徒行伝 6：15、10）。パウロもまた、カイザルの法廷で審問を受けた時のことを、こう書いている。「わたしの第 1 回の弁明の際には、わたしに味方をする者はひとりもなく、みなわたしを捨てて行った。……しかし、わたしが御言を余すところなく宣べ伝えて、すべ　ての異邦人に聞かせるように、主はわたしを助け、力づけて下さった。そして、わたしは、　ししの口から救い出されたのである」（Ⅱテモテ 4：16、17）。

キリストのしもべたちは裁判にかけられた時に陳述することばを前もって準備してきめておくのではなかった。彼らの準備は、日々に神のみことばのとうとい真理をたくわえ、祈りを通して信仰を強めることによってなされるのであった。彼らが裁判に呼び出された時に、聖霊は必要な真理を彼らに思い出させてくださるのであった。　神と、神がおつかわしになったイエス・キリストとを知るために日々熱心に努力する時に、魂には力と能率とが与えられ　る。聖書を熱心に研究することによって得られた知識は、ちょうどよい時にぱっと思い出さ　れる。しかしもしだれでもキリストのみことばを知ることを怠っていたら、またもし彼らが　試みの時にキリストの恵みの力をためしていなかったら、彼らは、聖霊がキリストのみこと　ばを思い出させてくださることを、期待することはできなかった。彼らは日々二心のない愛　情をもって神に仕え、それから神に信頼するのであった。

福音に対する敵意は非常に激しく、この世の最も親しいきずなさえ無視されるのであった。キリストの弟子たちは、自分自身の家族の者から裏切られて死に渡されるのであった。

「また、あなたがたはわたしの名のゆえに、すべての人に憎まれるであろう。しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われる」とイエスはつけ加えられた（マルコ 13：13）。しかしイエスは、不必要に迫害に身をさらさないようにとお命じになった。イエスご自身も、彼のいのちを求める者からのがれるために、ある働き場所を去って他の場所へ行かれたことがたびたびあった。イエスがナザレでこばまれ、ご自分の町の人たちが彼を殺そうとした時、彼はカペナウムに行かれたが、そこでは「その言葉に権威があったので、彼らはその教に驚いた」（ルカ 4：32）。同じように、キリストのしもべたちも、迫害に落胆しないで、魂の救いのためにまだ働くことのできる場所をさがすのであった。

しもべはその主人以上のものではない。天の君イエスはベルゼブルと呼ばれたが、彼の弟子たち同 じょうに曲解されるであろう。しかしどんな危険があろうと、キリストに従う者たちは、自分たちの主義を公言しなくてはならない。彼らは、かくすことをいさぎょしとしない気持がなければならない。彼らは、安全を保証されるまでは真理を告白しないでいるということはできない。彼らは、人々に危険を警告する見張り人として立てられているのである。キリストから受けた真理を、自由に公然と、すべての人に分け与えねばならない。「わたしが暗やみであなたがたに話すことを、明るみで言え。耳にささやかれたことを、屋根の上で言いひろめよ」と、イエスは言われた（マタイ 10：27）。

イエスご自身、決して妥協によって安全をお求めにならなかった。イエスの心は全人類に対する愛であふれていたが、イエスは、彼らの罪を決して甘やかされなかった。イエスは、人々が自分の魂――イエスがご自分の血で買われた魂を滅ぼす道を歩むのを彼らの友としてだまって見ていることがおできにならなかった。イエスは、人が自分自身に忠実であるように、自分のもっと高い永遠の利害に忠実であるように、ほねおられた。キリストのしもべたちは同じ働きに召されているのであって、彼らは、不和を防こうとして、真理を放棄するようなことがないように気をつけねばならない。彼らは「平和に役立つこと……を、追い求め」るのであるが、真の平和は決して主義を妥協させることによって確保することはできない（ローマ 14：19）。だれでも主義に忠実であれば必ず反対が引き起こされる。霊的であるキリスト教は、不麹順の子らによって反対されるであろう。しかしイエスは、弟子たちに、

「からだを殺しても、魂を殺すことのできない者どもを恐れるな」とお命じになった（マタイ 10：28）。神に忠実な者たちは、人間の権力やサタンの敵意を恐れるにおよばない。キリストのうちに彼らの永遠のいのちが確保されているのである。被らのただ一つの恐れは、真理を放棄するようなことはないか、そうすることによって神からの名誉ある信任を裏切るようなことはないかということでなければならない。

人々の心を疑いで満たすことが、サタンの働きである。サタンは、神がきびしくさばかれるおかたであると人々に考えさせる。サタンは人々を誘惑して罪を犯させておいて、自分は悪人だから天父のみもとに行くことはできないとか、天父の憐れみを請うことはできないと、彼らに考えさせる。主はすべてこうしたことをご存知である。イエスは、弟子たちが必要と弱さのうちにある時に、神の同情が彼らにあることを保証しておられる。ため息が出るたびに、苦痛を感じるたびに、魂が悲しみに刺されるたびに、その心のうずきは天父の心に伝わるのである。

聖書には、高く聖なるところにおられる神は、何もしないで、だまってただ 1 人でおられるのではなく、みこころをなそうと待っている千々万々の聖天使たちにとりかこまれてお　られることが示されている。われわれがみわけることのできない方法で、神は、宇宙のどん　な部分とも活発に交わっておられる。しかし、神の関心と全天の関心が集中されているのは、この一粒の世界、救うためにひとり子をお与えになった魂である。神は、しいたげられてい　る者の叫びを聞くために、み座から身をかがめておられる。真心からの祈りの一つ一つに対　して、「わたしはここにいる」と、神はお答えになる。神は苦しんでいる人々やしいたげら　れている人々を起こして下さる。われわれのすべての苦しみに神が苦しんで下さる。誘惑さ　れるたびに、試みられるたびに、神のみ前にある天使が、救い出すために近くにいるのであ　る。

1 羽のすずめでさえも地に落ちるとかならず天父の注意をひく。サタンは神を憎むあまりに、救い主の関心のまとになっているものを何でも憎む。サタンは神のみ手のわざを傷つけようとし、もののいえない被造物さえ滅ぼすことを喜ぶ。神の守りのみ手によってのみ、鳥たちは生きて、その喜びの歌でわれわれを喜ばせることができるのである。しかし神は、

すずめでさえもお忘れにならない。「それだから、恐れることはない。あなたがたは多くのすずめよりも、まさった者である」（マタイ 10：31）。イエスは続けてこう言われる。あなたがたが人々 の前でわたしを告白するように、わたしも神と聖天使たちの前であなたがたを告白しよう。あなたがたは地上にあってわたしの証人、世の人々をいやすためにわたしの恵みが流れて行く水路となるのである。同じようにわたしも、天においてあなたがたを代表する者となる。天父はあなたがたの欠点のある品性をごらんにならないで、わたしの完全を着せられたあなたがたをごらんになる。わたしは天父の祝福をあなたがたに注ぐ仲立ちである。そして、失われた者のためにわたしと犠牲を共にすることによって、わたしを告白する者はだれでも、あがなわれた者の栄光と喜びを共にする者として、わたしはその人を告白しよう。

キリストを告白したい者は、自分のうちにキリストに住んでいただかねばならない。彼は、自分が受けていないものを伝えることはできない。弟子たちは、教理について雄弁に語ることも、キリストご自身のみことばをくりかえすこともできたかもしれなかった。しかしもしキリストのような柔和と愛とをもっていなかったら、彼らは、キリストを告白していることにならなかった。告白はどうであろうと、キリストの精神に反する精神は、キリストをこばんでいるのである。人は、悪口やおろかなおしゃべりや、不真実なことばや不親切なことばなどによって、キリストをこばむかもしれない。人はまた生活の重荷を避けたり、罪の快楽を追い求めたりすることによって、キリストをこばむかもしれない。彼らは世に従ったり、無作法な行為をしたり、自分自身の意見に執着したり、自分自身を義としたり、疑いをいだいたり、とり越し苦労をしたり、暗黒のうちに住んだりすることなどによって、キリストをこばむかもしれない。すべてこうしたやり方によって、彼らはキリストが自分のうちにおられないことを宣言するのである。そこでキリストは、「人の前でわたしを拒む者を、わたしも天にいますわたしの父の前で拒むであろう」と言われる（マタイ 10：33）。

救い主は、福音に対する敵意が克服されるだろうとか、しばらくしたらその反対がやむだろうなどと望んではならないと、弟子たちに命じられた。キリストは、「平和ではなく、つるぎを投げ込むためにきたのである」と言われた（マタイ 10：34）。このように戦いが起

こるのは、福音の影響ではなくて、福音への反対の結果である。あらゆる迫害の中で耐えるのに一番つらいのは、家庭内の不一致、地上の一番親しい友との不和である。しかしイエスは、「わたしよりも父または母を愛する者は、わたしにふさわしくない。わたしよりもむすこや娘を愛する者は、わたしにふさわしくない。また自分の十字架をとってわたしに従ってこない者はわたしにふさわしくない」と宣言しておられる（マタイ 10：37、38）。 キリストのしもべたちの使命は、高いほまれであり、聖なる信任である。「あなたがたを受けいれる者は、わたしを受けいれるのである。わたしを受けいれる者は、わたしをおつかわしになったかたを受けいれるのである」とキリストは言われる（マタイ 10：40）。

キリストのしもべたちに対して神のみ名によってなされる親切な行為は、一つとして認められなかったり、報いられなかったりするものはない。また神は、ご自分の家族のどんなにかよわい者にも、どんなにいやしい者にも、やさしく目をとめておられる。「わたしの弟子であるという名のゆえに、この小さい者のひとりに（すなわち信仰とキリストを知る知識において子供のような人々に）冷たい水 1 杯でも飲ませてくれる者は、よく言っておくが、決してその報いからもれることはない」（マタイ 10：42）。 こうして救い主はその教えを終えられた。選ばれた 12 人は、キリストが行かれたように、「貧しい人々に福音を宣べ伝え……囚人が解放され、盲人の目が開かれることを告げ知らせ、打ちひしがれている者に自 由を得させ、主のめぐみの年を告げ知らせる」ために、キリストのみ名によって出て行った（ルカ 4：18、19）。

第 38 章　さあ、しばらく休みなさい

伝道旅行から帰ってくると、「使徒たちはイエスのもとに集まってきて、自分たちがしたことや教えたことを、みな報告した。するとイエスは彼らに言われた、『さあ、あなたがたは、人を避けて寂しい所へ行って、しばらく休むがよい』。それは、出入りする人が多くて、食事をする暇もなかったからである」（マルコ 6：30、31）。 弟子たちは、イエスのもとへやってきて、すべてのことをイエスに語った。イエスと親密な間柄にあることから、彼らは、うまくいったこと、うまくいかなかったこと、骨折りの結果を見てうれしかったこと、失敗を見て悲しんだこと、自分たちの欠点や弱さなど、どんなことでもイエスに話したい気持になった。彼らは伝道者としての最初の働きにいろいろまちがいを犯した。そうした経験を率直にイエスにお話しした時、イエスは、彼らに教えなくてはならないことがたくさんあることにお気づきになった。イエスはまた、彼らが働きに疲れていて、休息が必要なことをお知りになった。　しかし現在いる場所では、彼らは、必要な静かな生活を送ることができなかった。「それは、出入りする人が多くて、食事をする暇もなかったからである」（マルコ 6：31）。人々は、病気をなおしてもらおうと熱望し、またイエスのみことばをきこうと熱望して、キリストのもとにおしかけた。多くの者がイエスに心をひかれた。彼らには、イエスがあらゆる祝福のみなもとにみえたからである。そのとき、健康の恵みを受けようとしてキリストのまわりにむらがり集まったこれらの人々の中の多くは、イエスを自分の救い主として受け入れた。他の多くの者たちは、その時パリサイ人を恐れて、イエスを告白することをためらったが、彼らも、聖霊が降下したときに悔い改め、怒っている祭司たちと役人たちの前で、イエスを神のみ子として認めた。

だがいまキリストは、弟子たちに言いたいことがたくさんおありになったので、彼らと一緒にいられるように、人目につかないところへ退きたいと望まれた。弟子たちは、働きを通して戦いの試練を経験し、いろいろな形の反対に出会った。それまでは彼らは何でもかんでもキリストに相談していたが、しばらくの間自分たちだけだったので、時々どうしたらよいか判断に困るようなことがあった。彼らは、自分たちの働きに多くの励ましを見いだした。なぜならキリストは、みたまなしには彼らをおつかわしにならなかったし、またキリストを

信じる信仰によって、彼らは多くの奇跡を行ったからであった。だが彼らは、今いのちのパンによって養われる必要があった。彼らは、イエスと交わり、将来の働きのために教えを受けることができるようなどこかひっこんだ場所へ行く必要があった。「するとイエスは彼らに言われた、『さあ、あなたがたは、人を避けて寂しい所へ行って、しばらく休むがよい』」（マルコ 6：31）。キリストは、主の奉仕に働くすべての人に対して、やさしさと憐れみに富んでおられる。キリストは、弟子たちに、神がお求めになるのはいけにえではなく、情深いことであるということを示したいと望まれた。彼らは、人々のための働きに全心全霊を注いでいたので、体力も知力も使い果たしていた。休息することは彼らの義務であった。

弟子たちは、自分たちの働きが成功したので、それを自分の手柄にしたり、高慢な精神をいだいたりして、サタンの誘惑に陥る危険があった。彼らの前には大きな働きがあったが、何よりもまず彼らは、力が自分自身のうちにはなくて、神のうちにあるということを学ばねばならなかった。シナイの荒野におけるモーセ、ユダヤの丘におけるダビデ、あるいはケリテ川のほとりのエリヤのように、弟子たちは、忙しい活動の舞台からしりぞいて、キリストと交わり、自然と交わり、そして自分自身の心と交わる必要があった。

弟子たちが伝道旅行に行っていたるすに、イエスは他の町々や村々をおとずれて、み国の福音をのべ伝えられた。バプテスマのヨハネが死んだという知　らせをイエスがお受けになったのは、ちょうどこのころであった。この出来事は、イエスご自身の歩みがたどりつつあ　った終局を、まざまざとイエスに思わせた。影がイエスの道にだんだん濃くなってきていた。祭司たちとラビたちは、イエスの死を企てる機会をねらい、スパイたちがイエスの後につき　まとい、イエスを滅ぼそうとする陰謀が四方にふえていた。使徒たちがガリラヤのいたると　ころで教えを説いているという知らせがヘロデの耳に入り、彼の注意が、イエスとその働き　に向けられた。彼は、「あれはバプテスマのヨハネだ。死人の中からよみがえったのだ」と　言って、イエスに会いたいという希望を表明した（マタイ　14：2）。ヘロデは、自分を領主の地位から追い出し、ユダヤ国民に対するローマの束縛をたち切るために、ひそかに革命が　進められているのではないかということをしじゅう恐れていた。民衆の間には不満と反乱の　精神がみなぎっていた。ガリラヤでのキリストの公衆伝道が長くつづけられないことは明ら

かであった。苦難の場面が近づいていたので、キリストは、しばらくの間、群衆の混乱から離れたいと望まれた。

悲しい思いのうちに、ヨハネの弟子たちは、首切られたヨハネのからだを運んで行って埋葬した。それから彼らは、「イエスのところに行って報告した」（マタイ 14：12）。この弟子たちは、キリストが民衆をヨハネか弓引き離しておられるようにみえた時、キリストを　ねたんだ。彼らは、キリストがマタイの食卓に取税人たちと一緒にすわられた時、パリサイ　人たちと一緒にキリストを非難した。彼らは、キリストがバプテスマのヨハネを自由の身に　されなかったので、キリストの天来の使命を疑った。しかしいま自分たちの師が死んだので、彼らはその大きな悲しみのうちにあって、慰めと、将来の働きについての指導とを心から求　めてイエスのところへやってきて、イエスと利害を一つにした。彼らもまた救い主と交わる　静かなひと時が必要であった。

湖の北端ベッサイダの近くに、さびしい地方があって、そこはいま春の新鮮な緑が美しく、イエスと弟子たちにとって有難いかくれ場所にみえた。この場所へ向かって、彼らは舟で湖を横切って出かけた。ここでは、街路の交通や都会の雑踏と騒がしさから離れていられるのであった。自然の景色そのものが休息であり、感覚にとって有難い変化だった。ここでなら、怒って妨害する声、すなわち律法学者たちとパリサイ人たちのやりかえしや非難の声を聞かないで、キリストのみことばに耳を傾けろことができた。ここだったら、主との交わりのうちにしばらくのとうとい交わりを楽しむことができた。

キリストの弟子たちがとった休息は、放縦な休息、ではなかった。彼らがひきこもって過ごした時間は、快楽を追い求めることに費されなかった。彼らは、神のみわざについて、またみわざをもっと能率的に進展させる可能性について、共に語り合った。弟子たちはこれまでキリストといっしょにいて、キリストを理解することができた。キリストは、彼らには、たとえをもって語られる必要がなかった。イエスは、弟子たちのあやまちをただし、民衆に接触する正しい方法を明らかにされた。イエスは、天来の真理のとうとい宝をもっと十分に　彼らにお見せになった。彼らは、神の力によって活気づけられ、望みと勇気がわき起こっ　た。イエスは、奇跡を行うことがおできになり、また弟子たちにも奇跡を行う力をさずけて

おられたが、この疲れ果てたしもべたちに、人をさけていなかに行って休むようにお命じになった。収穫は多く働き人が少ないとキリストが言われた時、彼は、弟子たちに休むまもなく働く必要があるとは強調されないで、「だから、収穫の主に願って、その収穫のために働き人を送り出すようにしてもらいなさい」と言われた（マタイ 9：38）。神は、各人の能力に応じて、一人一人をその働きに任命された（エペソ 4：11～13 参照）。神は、ある人々は何の重荷も、魂の苦しみもないのに、少数の人々にだけ重い責任を負わせようとは望まれなかった。

キリストの憐れみのことばは、当時の弟子たちに語られたのと同じに、今日の働き人に向かって語られる疲れはてて弱っている者に向かって、キリストは、「さ あ、あなたがたは、人を避けて、……しばらく休むがよい」と言われる。人々の霊的な必要に奉仕することにおいてさえ、いつも働きの重荷と緊張のうちにあることは賢明ではない。なぜなら、このようにして本人自身の信仰がおろそかになり、心と魂とからだの能力に過重な負担がかかるからである。キリストの弟子たちは克己心を要求され、また犠牲を払わねばならない。しかし熱心の度が過ぎたために、サタンが人間の弱味につけこみ、神の働きが妨害されるようなことがないように注意することもまた必要である。

ラビたちの意見によれば、宗教の本質はいつも忙しく活動していることにあるというのであった。彼らは、人よりもすぐれた自分たちの信仰を示すために、何か外見的な業績にたよった。こうして彼らは自らの魂を神から引き離し、自己満足のうちに自己を築きあげた。同じ危険が今も存在している。人々は、活動が増し、神のためのどんな働きにも成功するようになると、人間的な計画や方法にたよる危険がある。祈りが少なくなり、信仰がうすくなりがちである。弟子たちと同じように、われわれは、神によりたのむことを忘れて、自分の活動を救い主にしようとする危険がある。われわれは、たえずイエスをながめて、働きをなすのはキリストの力であることを認める必要がある。われわれは、失われた者の救いのために熱心に働く一方では、瞑想と祈りと神のみことばの研究に時間をとら拙ばならない。多くの祈りによってなしとげられ、キリストの功績によってきよめられた働きだけが、善に対して力のあるものであったことが最後にわかるであろう。

イエスの一生ほど骨折りと責任で多忙な生活はほかになかった。それなのに、祈っておられるイエスの姿がどんなにかしばしば見受けられたことだろう。彼はどんなに始終神と交わられたことだろう。キリストの地上生涯の歴史には、次のような記録がいくつも見られる。「朝はやく、夜の明けるよほど前に、イエスは起きて寂しい所へ出て行き、そこで祈っておられた」「おびただしい群衆が教えを聞いたり、病気をなおしてもらったりするために、集まってきた。しかしイエスは、寂しい所に退いて祈っておられた」「このころ、イエスは祈るために山へ行き、夜を徹して神に祈られた」（マルコ 1：35、ルカ 5：15、16、6：12）。

他人の幸福のために全的にささげられた生涯において、救い主は、旅の往来と、毎日毎日ご自分についてくる群衆から退くことが必要であることに気がつかれた。ひっこんでだれにも邪魔されないで天父と交わるために、イエスはたえまない活動の生活と人間のいろいろな必要との接触から離れられねばならなかった。イエスは、われわれと同じお方、われわれの必要と弱さを共にされるお方として、全的に神によりたのまれた。そして義務と試練に対して張り切って出て行くために、イエスは、ひそかな祈りの場所で、神の力をお求めになった。罪の世にあって、イエスは、魂の戦いと苦しみに耐えられた。主は、神と交わることによって、ご自分に重くのしかかっている悲しみの重荷をおろすことがおできになった。そこにイエスは、慰めと喜びを見いだされた。 キリストを通して、人類の叫びは限りなく憐れみ深い天父に達した。人としてキリストは、人性と神性とを結合する天来の電流によって、ご自分の人性が充電されるまで、神のみ座に嘆願された。世の人々にいのちを与えるために、イエスは絶え間ない交わりを通して神からいのちを受けられた。イエスの経験がわれわれの経験となるのである。

「さあ、あなたがたは、人を避けて」とイエスはわれわれに命じられる（マルコ 6： 31）。イエスのみことばに留意する時、われわれはもっと強く、もっと役立つ者となる。弟子たちは、イエスを求めて、すべてのことをイエスに語った。するとイエスは、彼らを力づけ、彼らに教えられた。もしきょうわれわれが時間をとってイエスのみもとに行き、われわれの必要をイエスに告げるならば、われわれは失望させられないであろう。主は、われわれ

の右側にいて助けてくださる。われわれは、もっと単純になり、もっとイエスに信頼し、もっとイエスを信用する必要がある。「大能の神、とこしえの父、平和の君」という名のお方、「まつりごと はその肩にあり」といわれているお方は、「霊妙なる議士」である。われわれは、そのお方に知恵を求めるように招かれているのである。彼は「とがめもせずに惜しみなくすべての人に与え」てくださる（イザヤ 9：6、ヤコブ 1：5）。

神の訓練を受けているすべての者のうちには、世とその慣例や習慣に一致しない生活があらわされる。だれでもみな、神のみこころを知るために、個人的な経験をする必要がある。われわれは、神が心に語られるのを個人的にきかねばならない。ほかの声がみな沈黙して、静けさのうちに神の前に待つ時、魂の静寂は神のみ声を一層明らかにする。神は、「静まって、わたしこそ神であることを知れ」とわれわれに命じておられる（詩篇 46：10）。ここにだけ真の休息が見いだされる。これこそ神のために働くすべての者にとって効果的な準備で ある。あわただしい群衆の中にあって、人生の激しい活動の緊張のうちにあって、このよう に活気づけられた魂は、光と平和の雰囲気にとりかこまれる。その生活はかぐわしい香りを 放ち、人々の心に達する神の力をあらわすのである。

第 39 章　「あなたがたの手で食物をやりなさい」

キリストは弟子たちと一緒に人里離れた場所へしりぞかれたが、このめったにない平和と静けさのひと時は、まもなく破られた。弟子たちは、人々に邪魔されないところへひっこんだと思った。だが群衆は、天来の教師イエスの姿がみえなくなったとたんに、「イエスはどこにおられるのか」とたずねた。彼らの中には、キリストが弟子たちといっしょに行かれた方向に気づいていた者たちがいた。イエスと弟子たちに会うために、多くの者は陸づたいに、またある者たちは舟で湖を渡って追いかけた。過越節が近づいていたので、エルサレムに行く途中の巡礼者たちの団体が、イエスを見るために遠近から集まった。人々の数は増し加わって、ついに女子供のほかに 5000 人が集まった。キリストが岸にお着きになる前に、群衆がイエスを待っていた。しかしイエスは、彼らに見られないように上陸して、弟子たち　と一緒に人々を離れてしばらくの時間を過ごされた。山の中腹から、イエスは、動いている　群衆をごらんになった。するとイエスの心は、同情に動かされた。邪魔をされ、休息を奪わ　れても、イエスは短気を起こされなかった。イエスは、人々がぞくぞくとやってくるのをご　らんになった時、彼らの世話をすることがもっと必要であることに気がつかれた。イエスは、「飼う者のない羊のようなその有様を深くあわれ」まれた（マルコ　6：34）。イエスは、かくれ場所を出て、人々に奉仕するのに都合のよい場所をみつけられた。人々は、祭司たちと役人たちからは何の助けも受けなかった。しかしキリストが群衆に救いの道をお教えになった時、いやしを与えるいのちの水がキリストから流れ出た。

人々は神のみ子の口から豊かに流れ出る憐れみのことばに耳をかたむけた。彼らは恵み深いことばを聞いたが、それは単純で、率直で、彼らの魂にとってギレアデの香油のようであった。キリストの聖なるみ手によるいやしによって、死にかけている者にはいのちと喜びが与えられ、病気に苦しんでいる者には安心と健康が与えられた。その日は彼らにとって地上の天国のように思われ、彼らは、もう何時間ものを食べていないことなどまったく念頭になかった。　ついにその日もほとんど過ぎ去った。太陽は西に沈みかけていたが、まだ人々は立ち去りかねていたイエスは、終日、食事も休息もとらずに働かれた。イエスが疲れと空

腹で青い顔をしておられたので弟子たちは働きをやめてくださいとたのんだ。しかしイエスは、まわりにつめかけている群衆から退くことがおできにならなかった。

弟子たちは、ついにイエスのもとにきて、群衆自身のためにも彼らを去らせてくださるようにとすすめた。多くの者は、遠くからきていて、朝から何も食べてい なかった。彼らはまわりの町や村で食物を買うことができるかも知れなかった。しかしイエスは、「あなたが たの手で食物をやりなさい」と言われ、ふり向いてピリポに、「どこからパンを買ってきて、この人々に食べさせようか」とおたずねになった（マルコ 6：37、ヨハネ 6：5）。イエスが こう言われたのは、この弟子の信仰をためすためであった。ピリポは人の波を見わたして、 これほどの群衆の欲求を満足させるだけの食物を準備することは不可能だと思った。彼は、200 デナリのパンを買っても人々にくばるほど十分ではなく、たとえくばってみてもごく僅かずつしかないでしょうと答えた。イエスは、弟子たちの中にどれほどの食物があるかとお たずねになった。するとアンデレが、「ここに、大麦のパン 5 つと、さかな 2 ひきとを持っ ている子供がいます。しかし、こんなに大ぜいの人では、それが何になりましょう」と言っ た（ヨハネ 6：9）。イエスは、それを持ってくるようにお命じになった。それからイエスは、弟子たちに、人々の秩序を保っためと、イエスがしようとしておられることがみんなに見え るように、50 人か 100 人ずつの組にして草の上にすわらせるようにお命じになった。その通 り実行された時、イエスは食物を手にとり、「天を仰いでそれを祝福してさき、弟子たちに わたして群衆に配らせた。みんなの者は食べて満腹した。そして、その余りくずを集めたら、12 かごあった」（ルカ 9：16、17）。

人々に平和と幸福とを手に入れる方法をお教えになったイエスは、彼らの霊的必要と同じに、物質的必要も思いやられた。人々は疲れ、弱っていた。腕に赤ん坊をかかえ、すそにまつわりつく小さな子供をつれた母親たちもいた。多くの者は何時間も立ちつづけていた。彼らはキリストのみことばに熱心な興味をおぼえたので、1 度も腰をおろそうと考えたこともなく、また群衆があまりに多いために、お互いに踏みつける危険もあった。イエスは彼らに休む機会を与えようとお思いになって、すわるようにお命じになった。その場所にはたくさんの草がはえていて、みな気持よく休むことができた。 キリストは真の必要を満たすことの

ほかには決して奇跡を行われなかった。しかも奇跡の一つ一つは、万国の民をいやす葉をもったいのちの木に人々をみちびくような性質のものだった。弟子たちの手によってくばられた質素な食物には、いろいろな教訓の宝が含まれていた。用意されたものは粗末な食事だった。魚と大麦のパンは、ガリラヤ湖のほとりの漁師たちの家族の常食だった。キリストは人々の前にぜいたくな食事を並べることもおできになった。だが食欲を満足させるためだけに用意された食物は、彼らのためになる教訓を与えなかった。キリストは、この教訓を通して、神が人のためにお与えになった自然の食糧が正しく用いられていなかったことを彼らにお教えになった。ゆがめられた食欲を満足させるために作られるぜいたくな食事をしている人たちは、人の住居から遠く離れたところで、キリストから与えられた休みと質素な食事を楽しんだこの人たちのような喜びを味わったことは決してなかった。

もし今日人々が、創世当時のアダムとエバのように、単純な習慣のうちに自然の法則と一致した生活を送るなら、人類家族の必要は豊かに満たされるのである。想像だけの必要は少なくなり、神の方法で働く機会が多くなる。しかし利己心と不自然な食欲をほしいままにすることから、一方では有り余っているのに、一方では足りないために、この世に罪と不幸とが生じた。 イエスは、人々のぜいたくへの欲求を満足させることによって、彼らをひきつけようとはされなかった。興奮した長い 1 日のあとで、疲れと空腹とをおぼえているこの大群衆にとって、質素な食事は、キリストの力の保証であったばかりでなく、また日常の一般的な必要についてもキリストが彼らのためにやさしく心を用いておられることの保証であった。救い主はご自分に従う者たちにこの世のぜいたくを約束されなかった。彼らの食事は、質素であり、また乏しいことさえあるかもしれない。彼らは貧乏な境遇にとじこめられているかも知れない。だがキリストのみことばには、彼らの必要が満たされることが保証されており、 キリストは、彼らに、この世のよいものよりもはるかによいもの、すなわちご自身の臨在といういつまでも続く慰めを約束しておられる。

5000 人に食物をお与えになったことによって、イエスは、自然界のベールを開いて、たえずわれわれの幸福のために働いている力をお示しになる。地の作物の生産に、神は毎日奇跡を行っておられる。自然の働きを通して、あの群衆に食物を与えたのと同じ働きがなし

とげられる。人は土地をたがやし、種をまく。だが種子を発芽させるのは神からのいのちである。「初めに芽、つぎに穂、つぎに穂の中に豊かな実」を生じさせるのは、神の雨と空気と日光である（マルコ 4：28）。地の作物畑から毎日幾百万の人々を養われるのは神である。人は、穀物を管理し、パンを作ることに、神と協力するように求められる。そのために人は、神の働きを見落す。彼らは当然神の聖なるみ名にささげられるべき栄光を神にささげない。神の力の働きが、自然の原因や人間の手段のせいにされる。神の代りに人間があがめられ、神の恵みの賜物は利己的な用途に悪用されて、祝福ではなくわざわいとなる。神はこうしたことをすべて変えようとしておられる。神は、われわれのにぶい感覚がめざめて、神の憐れみ深い親切を認め、神の力のみわざについて神をあがめるように望まれる。神はまた、神の賜物がみこころ通りに、われわれにとって祝福となるように、その賜物を通してわれわれが神を認めるように望まれる。キリストの奇跡が行われたのは、この目的を達成するためであった。

群衆に食べさせたあとに、たくさんの食物が残った。しかし無限の力のみなもとをすべて自由に用いることがおできになるイエスが、「少しでもむだにならないように、パンくずのあまりを集めなさい」と言われた（ヨハネ 6：12）。このことばには、パンをかごに入れることよりももっと深い意味があった。これには二重の教訓があった。何一つむだにしてはならない。われわれは、この世で益となるものは一つものがしてはならない。人類を益するのに役立つものは何一つおろそかにしてはならない。地上の飢えた人々の必要を満たすものは何でも集めなさい。また霊的な事物にも同じ注意を払わねばならない。食べくずのかごが集められた時、人々は家にいる友人たちのことを心に思った。彼らはキリストが祝福されたパンを友人たちに分け与えたいと望んだ。かごの中味はそうした熱心な群衆にくばられて、まわりのすべての地方にはこばれて行った。これと同じように、ごちそうになった者は、魂の飢えを満足させるために、天からくだるパンを他人に与えるのであった。彼らは、神のすばらしい事がらについて学んだことをくりかえすのであった。何一つ失われてはならなかった。彼らの永遠の救いにかかわることばは、一つもむだに地面に落ちてはならなかった。

パンの奇跡は、神によりたのむことについて教訓を教えている。キリストが 5000 人を養われた時、食物は手もとになかった。キリストがお用いになれる手段はないように見えた。キリストは、この荒野に女子供のほか 5000 人と共におられた。イエスがご自分についてくるようにこの大群衆を招かれたのではなかった。彼らは、招かれたり、命じられたりしてき　たのではなかった。しかし群衆が長い時間イエスの教えをきいたあとで、気が遠くなりそう　におなかがすくことを、イエスはわかっておられた。なぜならイエスこ自身も彼らと同じに　食物を必要とされたからである。彼らは家から遠く離れており、夜が迫っていた。彼らの多　くは食物を買う金がなかった。彼らのために荒野で 40 日間断食されたイエスは、彼らを空腹のまま家へ帰そうとは思われなかった。神の摂理がイエスをその立場に置いたのだった。そ　こでイエスは、必要を満たす手段を求めて、天父によりたのまれた。

われわれもまた困難な立場におちいった時には、神によりたのむべきである。われわれは、向こう見ずな行動によって苦境におちいることがないように、人生の一つ一つの行為に、知恵と判断とを働かすべきである。神がお備えになった手段を無視し、神がわれわれにお与えになった才能をまちがったことに用いて、困難にとび込むようなことがあってはならない。キリストの働き人は、絶対的にキリストの教えに　従うべきである。この働きは神の働きである。だから他人の祝福になりたければ、神のご計画に従わねばならない。自我を中心とする　ことはできない。自我が誉を受けることはできない。もしわれわれが自分自身の考えにした　がって計画すれば、主は、われわれをわれわれ自身の誤りの中に放置される。しかし神の指　示にしたがっていて、それでも苦境におちいるようなことがあれば、神は、われわれを救っ　てくださる。われわれは落胆してあきらめてしまわないで、どんな危急の時にも、無限にど　んな手段でもお用いになれる神に助けを求むべきである。われわれは、しばしばきびしい境　遇にとりかこまれることがあるが、そういう時こそ絶対の信頼心をもって神によりたのまね　ばならない。神は、主の道に従おうとして困難におちいっている魂を 1 人ももれなく守ってくださる。

キリストは、預言者を通して、「飢えた者に、あなたのパンを分け与え、さすらえる貧しい者を、あなたの家に入れ、裸の者を見て、これに着せ、……苦しむ者の願いを満ち足ら

せ」よとわれわれにお命じになった（イザヤ 58：7～10）。キリストはまた、「全世界に出て行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えよ」とわれわれにお命じになった（マルコ 16：15）。しかしわれわれは、必要が大きく、われわれの手にある資金が少ないのを見る時、どんなにしばしば気持ちが沈み、信仰がなくなることだろう。アンデレが大麦のパン 5 つと小さな魚 2 匹を見た時のように、われわれは「こんなに大ぜいの人では、それが何になりましょう」と叫ぶ（ヨハネ 6：9）。自分の持っているものを全部ささげたくないのと、他人のために費したり費されたりするのを恐れるために、われわれはしばしばちゅうちょする。しかしイエスは、「あなたがたの手で食物をやりなさい」とわれわれにお命じになった（マ ルコ 6：37）。キリストの命令は約束である。その約束の背後には、海辺で群衆を養われたのと同じ力がある。

飢えた群衆の一時的な必要を満たされたキリストの行為の中に、ご自分のすべての働き人に対するキリストの深い教訓が含まれている。キリストは天父からお受けになった。彼は弟子たちにお与えになった。弟子たちは群衆に与え、人々は互いに与え合った。同じように、キリストにつながっている者はみな、キリストから天の食物である命のパンを受け、それを他人に与えるのである。 イエスは、神にまったく信頼しきって、わずかなパンのたくわえを手にとられた。そしてキリストご自身の家族である弟子たちのために少しの分け前しかなかったが、イエスは彼らに食べるようにとはおっしゃらずに、人々にくばりなさいと命じて弟子たちの手に渡し始められた。食物はイエスの手で何倍にもふえたので、ご自身が命のパンであられるキリストにさし出された弟子たちの手は決してからにならなかった。少しのたくわえが、みんなのために十分であった。人々の欲求が満たされてから、その食べくずが集められ、キリストは弟子たちと天の神から与えられたこのとうとい食物をとられた。

弟子たちは、キリストと民との間の伝達のチャンネルであった。このことは今日のキリストの弟子たちにとって大きな励ましでなければならない。キリストは大中心、すなわちすべての力のみなもとである。キリストの弟子たちは、キリストから補給を受けるのである。どんなに賢明な者でも、どんなに霊的な心を持った者でも、受ける時にのみ与えることができる。彼らは自分自身では魂の必要を何一つ満たすことができない。われわれは、キリスト

から受けるものだけを与えることができる。われわれはまた、他人に与える時にのみ受けることができる。われわれは、たえず与えるときに、たえず受ける。そして多く与えれば与えるほどますます多く受ける。こうしてわれわれは、たえず信じ、頼り、受け、与えることができるのである。

キリストのみ国を建設する働きは、どう見ても進展が遅く、不可能なことがらが前進を妨げているようにみえるけれども、それでもそれは前進するのである。この働きは神からのものであり、神が資金を用意し、また真実で真面目な弟子たちを助手としてつかわされるが、彼らの手にも飢えた大衆に与える食物が満たされるのである。神は、滅びつつある魂にいのちの みことばを与えるために愛をもって働く人々のことをお忘れにならない。これらの魂は、こんどはほかの飢えた魂に与えるために、食物を求めて手をさし出すのである。　神のためのわれわれの働きにおいて、才能や手腕のある人の力量にあまりたよりすぎる危険がある。こ　うしてわれわれは、ただ 1 人の偉大な働き人であられる主を見失うのである。キリストのた めに働く者が、自分自身の責任を認めないことがよくある。彼は、すべての力のみなもとで　あられるキリストによりたのまないで、自分の重荷を団体におしつける危険がある。神の働　きにおいて人間の知恵や数をたよりにするのは大きな間違いである。キリストのための働き　における成功は、数や才能よりもむしろ純粋な目的と熱心によりたのむ信仰の真実な単純さ　にかかっている。個人の責任を負い、個人の義務をとりあげ 1 キリストを知らない人々のために個人的な努力を払わねばならない。あなたの責任をあなたよりももっと豊かな才能をそ　なえていると思われるほかの人におしつけないで、あなたの才能にしたがって働きなさい。

「どこからパンを買ってきて、この人々に食べさせようか」との質問があなたの心に浮ぶ時、あなたの答に不信が反映してはならない（ヨハネ 6：5）。「あなたがたの手で食物をやりなさい」との救い主のご命令を弟子たちがきいた時、彼らの心にはあらゆる困難が浮ん　だ（マルコ　6：37）。食物を買いに村まで出かけるのですかと、彼らは質問した。そのように今も、いのちのパンに欠乏している時、主の民は、彼らに食物を与えるために遠くのだれ　かを呼びにやりましょうかと質問する。しかしキリストは何と言われただろうか。イエスは、「人々をすわらせなさい」と言われ、そこで彼らに食べさせられた（ヨハネ　6：10）。その

ように、あなたが必要を感じている魂にかこまれている時には、キリストがそこにおられると知りなさい。キリストと交わりなさい。あなたの大麦のパンをイエスのもとに持って行きなさい。

われわれの持っている資金はみわざのために十分とは思えないかも知れない。しかし神の満ち足りた力を信じて、信仰をもって前進する時、われわれの前には豊かな資源が開かれる。この働きが神からのものならば、その完成のためには、神が自ら資金を備えてくださる。正直に単純に神によりたのむ者に、神は報いてくださる。少しのものでも、それが天の主への奉仕に賢明に経済的に用いられる時、それは与える行為そのものによって増し加わる。キリストのみ手にある時に、少しの食物の供給は、飢えた群衆が満足するまで、いつまでも減らなかった。もしわれわれが、受けるために信仰の手をさし出して、すべての力のみなもとであられる神のもとへ行くならば、われわれは、どんなに見込みのない事情の中にあっても、われわれの働きは支えられ、他人にいのちのパンを与えることができる。 主はこう言われる、「与えよ。そうすれば、自分にも与えられるであろう」「少ししかまかない者は、少ししか刈り取らず、豊かにまく者は、豊かに刈り取ることになる。……神はあなたがたにあらゆる恵みを豊かに与え、あなたがたを常にすべてのことに満ち足らせ、すべての良いわざに富ませる力のあるかたなのである。

『彼は貧しい人たちに散らして与えた。その義は永遠に続くであろう』 と書いてあるとおりである。種まく人に種と食べるためのパンとを備えて下さる方は、あなたがたにも種を備え、それをふやし、そしてあなたがたの義の実を増して下さるのである。こうして、あなたがたはすべてのことに豊かになって、惜しみなく施し、その施しはわたしたちの手によって行われ、神に感謝するに至るのである」（ルカ 6：38、Ⅱコリント 9：6～11）。

第 40 章　湖上の一夜

春の夕暮のうす明りの中で、人々は草原にすわって、キリストがお備えになった食物を食べた。その日聞いたみことばは、神のみ声として彼らにのぞんだ。彼らが目に見たいやしのわざは、神の力だけしか行うことのできないものだった。しかしパンの奇跡はこの大群衆の一人一人の心をとらえた。全部の者がその恩恵にあずかった。モーセの時代に、神は荒野でイスラエル人をマナで養われたが、その日彼らを養われたのは、モーセが預言していたお方にほかならなかった。5 つの大麦のパンと 2 匹の小さな魚から 5000 人の飢えた人々に食べさせるだけの十分な食物をつくり出すことは、どんな人間の力でもできなかった。そこで彼らは互いに「ほんとうに、この人こそ世にきたるべき預言者である」と言った（ヨハネ 6:14）。

終日この確信は強まって行った。あの最高のみわざこそ、長い間待望していた救世主がわれわれの中におられる証拠である。人々の望みはだんだん高まっていく。この方こそユダヤをこの世の楽園にし、乳と蜜の流れる地にしてくださるお方である。彼はあらゆる望みを満足させてくださることができる。彼は憎むべきローマ人の権力を打破することがおできになる。彼はユダとエルサレムを救うことがおできになる。彼は戦いに傷ついた兵士たちをいやすことがおできになる。彼は全軍に食物を補給することがおできになる。彼は諸国を征服し、イスラエルが長い間求めていた主権を与えることがおできになる。　民衆は熱心のあまりいますぐにもイエスを王位につけようとする。彼らは、イエスがご自分に注意をひきつけた　り、栄誉を求めたりしようと努力されないのを見る。この点イエスは祭司たちや役人たちと　根本的にちがっておられるので、彼らはイエスがダビデの位につく権利を主張されないので　はないかと恐れる。彼らは相談し合って、イエスをむりやりにおし立て、イスラエルの王と　して宣言することに一致する。弟子たちも群衆と一緒になって、ダビデの位が彼らの主の正　当な嗣業であることを宣言しようとする。キリストがこのような栄誉をこばまれるのは、遠　慮のせいだと彼らは言う。民衆に救世主をあがめさせよう。高慢な祭司たちや役人たちにも、神の権威を帯びてこられたイエスを否応なしにあがめさせよう。

彼らは自分たちの目的を実行する手はずを熱心に進める。だがイエスは、この成り行きをごらんになり、彼らには理解できないが、このような運動の結果がどうなるかを理解される。いまでさえ祭司たちと役人たちは、イエスのいのちをねらっている。彼らは、イエスが民衆を彼らから引き離しているといって非難している。イエスを王位につけようとする努力には暴力と反乱がともない、霊的王国のみわざがさまたげられるであろう。すぐにこの運動をとめなければならない。イエスは、弟子たちをお呼びになって、民衆を解散させるためにわたしは残るから、あなたがたは舟に乗ってすぐカペナウムへもどりなさいと命じられる。

キリストの命令がこれほど実行できないことに思えたことはこれまでになかった。弟子たちは、イエスを王位につける民衆の運動を長い間待ち望んできた。彼らは、このような熱心さがみなむだになってしまうという考えに耐えられなかった。過越節を守るために集まってきている群衆は、この新しい預言者を見たがっていた。キリストに従っている者たちにとって、これこそ愛する主のためにイスラエルの王位を確立する絶好の機会に思えた。この新しい野心が燃えあがっている中を、淋しい岸辺にイエス 1 人を残して、自分たちだけで立ち去るのはつらいことだった。彼らはこの手はずに抗議した。だがイエスは、かつてこれまで彼らに対してとられたことのない権威をもって、いま彼らに語られた。彼らは、これ以上反対することが無益であることを知り、だまって海へ向かった。

イエスは、こんどは群衆に解散するようにお命じになる。イエスの態度が断固としているので、彼らは従 わないわけにいかない。賛美と称賛のことばが彼らのくちびるから消える。イエスをつかまえようと前へ進み出た彼らの足はとまり、喜びにあふれ、熱心な表情が彼らの顔つきから消える。この群衆の中には堅固な精神と固い決意の人々がいるが、イエスの堂々たる態度とことば少ない静かな命令によって騒ぎがおさまり、彼らの計画は失敗する。彼らはキリストのうちに地上の一切の権威にまさる権力を認め、文句なく屈服する。

1 人になられると、イエスは「祈るためひそかに山へ登られた」（マタイ 14：23）。何時間もイエスは神に嘆願しつづけられた。その祈りはご自分のためではなく、人々のためであった。主はサタンのために人々の理解力がくもり、判断が誤ることのないように、ご自分の使命の天来の性格を人々に示す力が与えられるように祈られた。救い主は、この地上で

自ら伝道される日がほとんど終わり、しかも彼をあがない主として受け入れる者が少ないことをご存知だった。魂の苦しみと戦いのうちに、主は弟子たちのために祈られた。彼らは苦痛なまでに試みられるのであった。世間一般のまちがった信念にもとつく彼らの宿望は、非常な苦痛に満ちた屈辱的な方法で失望させられるのであった。彼らはキリストがダビデの位にのぼられるどころか、十字架につけられるのを見るのであった。これこそイエスの真の即位となるのだった。だが彼らは、そのことを認めなかったので、その結果、強い試みが彼らにのぞみ、彼らはそれを試みとして認めることが困難となるのだった。聖霊によって心を照され、理解力が増し加えられなければ、弟子たちの信仰は失われるであろう。キリストのみ国についての彼らの観念が大部分現世的な誇張と名誉に限られていることが、イエスにとって苦痛だった。彼らのために、重荷がイエスの心に重くのしかかっていたので、イエスは、苦痛とにがい涙とをもって、嘆願を口に出された。

イエスはすぐに出発するように命じられたが、弟子たちはすぐには陸地を離れなかった。彼らはイエスが自分たちのところへおいでになることを望んで、しばらく待った。しかし夕やみがたちまち迫ってくるのを見て、彼らは「舟に乗って海を渡り、向こう岸のカペナウムに行きかけた」（ヨハネ 6：17）。彼らは不満な気持でイエスを残してきた。 イエスを自分たちの主と認めてから、こんなにいらだった気持はこれまでに感じたことがなかった。彼ら　はイエスを王として宣言することがゆるされなかったので、不平を言った。イエスの命令に　こんなにたやすく従ったことで自分たちを責めた。もっとがんばったら、われわれの目的は　達成されたかも知れないと、彼らは議論した。

彼らの思いと心は、だんだん不信に占められた、名誉欲が彼らを盲目にしていた。彼らは、イエスがパリサイ人から憎まれているのを知っていた。彼らはイエスがあがめられるべきであると考えていたので、そうなるのをぜひ見たかった。偉大な奇跡を行うことがおできになる先生といっしょにいて、しかも欺瞞者としてののしられることはとても耐えられない試みだった。自分たちはいつでもにせ預言者の弟子とみなされるのだろうか。キリストは王としての権威を主張されないのだろうか。これほどの力を持ったお方がなぜご自分の真の性格を示して、われわれの道を苦痛のないものにしてくださらないのだろうか。イエスはなぜ

バプテスマのヨハネを非業の死から救われなかったのだろうか。弟子たちはこのように議論したので、ついには彼ら自身の上に非常な霊的暗黒を招いた。イエスはいったいパリサイ人たちが主張するように詐欺師なのだろうかと、彼らは質問した。

弟子たちは、その日キリストのふしぎなみわざを目に見ていた。天が地におりてきたように思えた。この輝かしく、とうとい日の思い出によって、彼らは信仰と望みに満たされるべきだった。そうしたことについて、心に満ちあふれるままに語り合っていたら、彼らは試みにおちいるようなことはなかったのである。だが彼らは失望に心を奪われていた。「少しでもむだにならないように、パンくずのあまりを集めなさい」と言われたキリストのみことばに注意が払われなかつた（ヨハネ 6：12）。それは弟子たちにとって大きな 祝福の時であったのに、彼らはそのことをまったく忘れていた。彼らは波の立ちさわぐ湖のまん中にいた。彼らの思いもまた荒れて、理性を欠いていたので、主は、彼らの魂を苦しめ、彼らの心を占　領するような何かほかのものをお与えになった。人間が自分で重荷と苦労とをつくり出す時　に、神はたびたびそういうことをなさる。弟子たちは自分で苦労をつくるに及ばなかった。　すでに危険が急速に迫っていた。

激しい嵐がしのびよってきていたのに、彼らはそのために備えができていなかった。その日は申し分のない天気だったので、それは突然な変化だった。疾風に襲われると、彼らは恐れた。彼らは不満も不信もいらだっている気持も忘れた。だれもが舟が沈まないように働いた。ベッサイダから、イエスにお会いすることになっていた地点までは、海上いくらもない距離で、普通の夫候の時なら、その旅には数時間しかかからなかった。だがいま彼らは、目ざす地点からだんだん遠くへ流された。明け方の 4 時になるまで、彼らはほねおって舟をこいだ。それから彼らは疲れ果ててしまってもうだめだとあきらめた。嵐と暗黒の中で、彼ら自身、己の無力さがわかったので、主がいてくださったらと熱望した。 イエスは彼らをお忘れになっていなかった。陸上で見守っておられるイエスは、恐怖にとりつかれたこの人たちが嵐と戦っているのをごらんになっていた。一瞬間も、イエスは、弟子たちを見失っておられなかった。イエスの目は大事な人たちをのせて嵐にもまれている舟を最も深い心配のうちに追っていた。なぜなら、この人たちは世の光となるのだった。母親がやさしい愛情をも

って子供を見守るように、憐れみ深い主は弟子たちを見守っておられた。彼らが自分の心に打ち勝ち、きよくない野心を征服し、謙遜な気持で助けを祈った時、その助けが与えられた。

彼らがもうだめだと思った瞬間、かすかな光の中に彼らの方へ向かって海の上を近づいてくる一つのふしぎな姿が現われる。しかし彼らにはそれがイエスであることがわからない。自分たちを助けにこられたお方を、彼らは敵だと思う。彼らは恐怖に圧倒される。鉄のような筋肉でオールをにぎっていた手が離れる。舟は波のまにまに揺れ、全部の目はあわだつ海の白い波頭の上を歩いてくる人間の光景に釘づけにされる。　彼らはその姿を彼らの滅亡を予告する幻影と考え、恐ろしさのあまり叫び声をあげる。イエスは彼らのそばを通り過ぎられ　るかのように進んで行かれる。すると彼らは、それがイエスであることを認め、大声をあげ　て助けを懇願する。愛する主はふりかえられ、「しっかりするのだ、わたしである。恐れる　ことはない」とのお声が彼らの恐怖を静める（マタイ 14：27）。

彼らがこのすばらしい事実を信ずることができたとたんに、ペテロはうれしさのあまりわれを忘れた。彼はまだ信じられないかのように叫んだ。「『主よ、あなたでしたか。では、わたしに命じて、水の上を渡ってみもとに行かせてください』。イエスは、『おいでなさい』と言われた」（マタイ 14：28、29）。

イエスをみつめながら、ペテロは安全に歩いて行く。だが自己満足のうちに舟の中の仲間たちの方をちらっとふりかえった時、彼の目はイエスからそれる。風は荒れ狂っている。波が高くうねってペテロと主との間にまっすぐやってくると、ペテロは恐れる。一瞬キリストの姿がペテロの視界からかくれると、彼の信仰は失われる。ペテロは沈み始める。しかし大波が死と語っている間に、ペテロは荒れ狂う波から目をあげてイエスを見つめ、「主よ、お助けください」と叫ぶ（マタイ 14：30）。すぐにイエスは、ペテロのさし出した手をつかんで、「信仰の薄い者よ、なぜ疑ったのか」と言われる（マタイ 14：31）。

ペテロは、主の手につかまりながら並んで歩いて、一緒に舟の中に入った。だがペテロはこんどはおとなしくだまっていた。彼は仲間たちに自慢する理由がなかった。不信と高慢

のためにあぶなくいのちを失いかけたからである。イエスから目をそらした時、彼は足場を失い波のまん中に沈んだのだ。 われわれも、苦難におそわれる時、ペテロのようになることがどんなに多いことだろう。われわれは、目を救い主にそそがないで、波をみつめる。われわれ の足はすべり、もりあがった波がわれわれの魂の上を越える。イエスは、ペテロが滅びるために、みもとにこいと命じられたのではなかった。イエスは、ご自分に従うようにわれわれを召しておいて、そのあとでわれわれを捨てるようなことをなさらない。イエスはこう言われる、「恐れるな、わたしはあなたをあがなった。わたしはあなたの名を呼んだ、あなたはわたしのものだ。あなたが水の中を過ぎるとき、わたしはあなたと共におる。川の中を過ぎるとき、水はあなたの上にあふれることがない。あなたが火の中を行くとき、焼かれることもなく、炎もあなたに燃えつくことがない。わたしはあなたの神、主である、イスラエルの聖者、あなたの救主である」（イザヤ 43：1～3）。

イエスは弟子たちの品性をお読みになった。イエスは弟子たちの信仰がどんなにきびしく試みられるかを知っておられた。海上での出来事を通して、イエスは、ペテロに彼自身の弱さを示そうと望まれた。すなわち彼の安全は、たえず神の力にたよっていることにあることを示そうと望まれたのである。試みの嵐のさなかにあって、彼は、まったく自分にたよらずに、救い主によりたのむ時はじめて安全に歩むことができるのであった。ペテロの弱いところは、彼自身が一番強いと考えていたところにあった。彼は、自分の弱さを感じないうちは、キリストによりたのむ必要を認めることができなかった。もし彼が海上でのあの経験を通して、イエスが彼に教えようとされた教訓を学んでいたら、彼は、大きな試練がやってきた時に失敗しなかったであろう。

日ごとに、神は、ご自分の子らをお教えになる。日常生活の環境を通して、神は、ご自分の子らが神の摂理によって彼らに負わされている一層広い舞台での役割を果たすように、彼らを準備しておられる。人生の大危機における勝利か敗北かを決定するのは、毎日の試みの結果である。 たえず神によりたのんでいることを認めない者は、試みに負ける。われわれは、自分の足がしっかり立っていて、決して動かされることがないといまは思うかも知れない。わたしは自分が信じたお方を知っている、何ものも神とそのみことばに対するわたしの

信仰をゆり動かすことはできないと、確信をもって言うかも知れない。だがサタンは、われわれの先天的後天的な性格に乗じ、われわれ自身の必要と欠点とをわれわれの目からおおいかくそうとたくらむ。自分自身の弱さを認め、イエスにしっかり目をそそぐことによってのみ、われわれは、安全に歩むことができるのである。 イエスが舟の中の席につかれたとたんに、風はやみ、「舟は、すぐ、彼らが行こうとしていた地に着いた」（ヨハネ 6：21）。恐怖の夜につづいて夜明けの光がさしてきた。弟子たちと、舟の中にいたほかの者たちは、感謝の思いでイエスの足下にひざまずき、「ほんとうに、あなたは神の子です」と言った（マタイ 14：33）。

第 41 章　ガリラヤにおける危機

キリストは、民衆がイエスを王として宣言することを禁じられた時、ご自分の歴史の転換期がきたことをお知りになった。きょうはキリストを王位につけようと望んでいる群衆が、あしたは彼から離れ去るであろう。彼らの利己的な野心が裏切られた時、彼らの愛情は憎しみに、彼らの賛美はのろいにかわるであろう。しかもこのことを知りながら、キリストは、その危機を避ける手段をとられなかった。初めからキリストは、ご自分に従う者たちにこの世の報酬について望みを与えておられなかった。ご自分の弟子になりたいと望んできた者に向かって、イエスは、「きつねには八があり、空の鳥には巣がある。しかし、人の子にはまくらする所がない」と言われた（マタイ　8：20）。もしキリストと共に世界を支配することができたら、群衆　は、キリストに忠誠をつくしたのである。だがキリストは、このような奉仕をお受けになることができなかった。いまキリストと関係のある者たちの中には、この世　の王国の望みにひきつけられている者が多くいた。こうした人々の夢をさまさねばならない。パンの奇跡のうちにある深い霊的な教えは理解されていなかった。このことを明らかにする　必要があった。しかしこの新しい啓示は同時にまた一層きびしい試みを生じさせるのであっ　た。

パンの奇跡についてのうわさが遠近にひろがると、人々は、イエスを見に翌朝非常に早くベッサイダに集まってきた。彼らは、大変な人数で、海と陸づたいにやってきた。前の晩帰って行った者たちも、イエスが向こう岸に渡られる舟がなかったので、まだそこにおられると思ってまたやってきた。しかしさがしても、イエスはおられなかったので、多くの者はまだイエスをさがし求めながらカペナウムに行った。 とかくするうちに、イエスは 1 日だけ姿をお見せにならなかったあと、ゲネサレに着いておられた。イエスが上陸されたことがわかると、人々は、「その地方をあまねく駆けめぐり、イエスがおられると聞けば、どこへでも病人を床にのせて運びはじめた」（マルコ 6：55）。

しばらくして、イエスは、会堂に行かれたので、ベッサイダからきた人たちは、そこでイエスをみつけ出した。彼らは、弟子たちから、イエスが海をお渡りになった様子をきいた。

嵐がたけり狂ったこと、逆風に向かって何時間もむなしく舟をこいだこと、キリストが海の上を歩いて姿を現わされたこと、そのために恐怖が起こったこと、安心しなさいとのキリストのことば、ペテロの冒険とその結果、突然に嵐が静まって舟が岸に着いたことなどを、彼らは、驚く群衆にありのまま詳しく語ってきかせた。しかし多くの者は、これに満足しないで、イエスのまわりに集まり、「先生、いつ、ここにおいでになったのですか」とたずねた（ヨハネ 6：25）。彼らは、イエスご自身の口から奇跡の話をもっときききたいと望んだのである。

イエスは、彼らの好奇心を満足させられなかった。彼は、「あなたがたがわたしを尋ねてきているのは、しるしを見たためではなく、パンを食べて満腹したからである」と悲しそうに言われた（ヨハネ 6：26）。彼らがイエスを求めたのはりっぱな動機からではなく、パンを食べさせてもらったので、キリストについていることによって、もっとこの世の利益を受けようと望んだからであった。救い主は「朽ちる食物のためではなく、永遠の命に至る朽ちない食物のために働くがよい」とお命じになった（ヨハネ 6：27）。物質的な利益だけを求めてはならない。現世のために備えることだけが主要な努力であってはならない。霊的な食物すなわち永遠のいのちにいたるまで続く知恵を求めなさい。これは神のみ子だけが与えることのできるもので、「父なる神は、人の子にそれをゆだねられたのである」（ヨハネ 6：27）。

ちょっとの間、聴衆の興味が呼び起こされた。彼らは叫んで言った、「神のわざを行うために、わたしたちは何をしたらよいでしょうか」（ヨハネ 6：28）。彼らは、神の気に入るようにたくさんのわずらわしいわざを行ってきたが、もっと大きな功績になるために遵奉すべき新しいことがあったら聞きたいという気になった。彼らの質問は、天国に入る資格を得るためにはわれわれは何をしなければならないか、きたるべきいのちを手に入れるためにはどんな代価を払わねばならないかというのであった。

「イエスは彼らに答えて言われた、『神がつかわされた者を信じることが、神のわざである』」（ヨハネ 6：29）。天国の代価はイエスである。天国への道は、「世の罪を取り除く神の小羊」を信ずる信仰によるのである（ヨハネ 1：29）。 しかし人々は、天来の真理に

ついてのこの宣言を信じようとしなかった。イエスは、メシヤが行うであろうと預言に予告されているわざをされた。ところが人々は、自分たちの利己的な望みによってメシヤのわざとしてえがいていたものを目に見なかった。なるほどキリストは、1 度は大麦のパンで群衆を養われた。しかしモーセの時代には、イスラエルは 40 年間マナで養われたので、これよりも はるかに大きな祝福がメ　シヤに期待された。もしイエスが、自分たちの見たような多くのふ しぎなわざをなさることができるのだったら、なぜご自分の民の全部に健康と力と富とを与　え、われわれを圧制者から解放し、権力と名誉の座に高めてくださることができないのかと、彼らの不満な心に疑問が起こるのだった。イエスが、ご自分は神からつかわされた者だと主　張しながら、しかもイスラエルの王となること塗拒絶されたことは、彼らにははかり知るこ　とのできない一つの神秘であった。イエスの拒絶は誤って解釈された。多くの者は、イエス　ご自身がご自分の使命について、その天来の性格に疑問を持たれたので、当然の権利を主張　しようとされないのだとの結論をくだした。こうして彼らは、心を不信に向かって開き、サ　タンがまいた種は、その種類に従って誤解と背信という実を結んだ。

そこで 1 人のラビが、なかば嘲笑的にこう質問した。「わたしたちが見てあなたを信じるために、どんなしるしを行って下さいますか。どんなことをして下さいますか。わたしたちの先祖は荒野でマナを食べました。それは『天よりのパンを彼らに与えて食べさせた』と書いてあるとおりです」（ヨハネ 6：30、31）。 ユダヤ人はマナを与えてくれた人としてモーセをあがめ、うつわにすぎない彼に賛美をささげて、そのわざをなしとげられたキリストを見落していた。彼らの先祖たちは、モーセに向かってつぶやき、彼の天来の使命を疑い、これを否定した。いま同じ精神で、イスラエルの子らは、自分たちに神のメッセージを伝えておられるお方を拒絶した。

「そこでイエスは彼らに言われた、『よくよく言っておく。天からのパンをあなたがたに与えたのは、モーセではない』」（ヨハネ 6：32）。マナをお与えになったお方が彼らの中に立っておられた。荒野のヘブル人をみちびき、天からのパンで彼らを日々養われたのはキリストご自身であった。この食物は天のまことのパンの型であった。無限に満ち足りた神のみもとから流れ出るいのちを与えるみたまは、まことのマナである。「神のパンは、天か

ら下ってきて、この世に命を与えるものである」と、イエスは言われた（ヨハネ 6： 33）。 聴衆のある者たちは、イエスが言われたのはこの世の食物のことであるとまだ考えて、「主よ、そのパンをいつもわたしたちに下さい」と叫んだ。するとイエスは、「わたしが命のパンである」とはっきり言われた（ヨハネ 6：34、35）。

イエスがお用いになった比喩は、ユダヤ人のよく知っている比喩であった。モーセは、聖霊の感化を受けて、「人はパンだけでは生きず人は主の口から出るすべてのことばによって生きる」と言った（申命記 8：3）。また預言者エレミヤはこう書いた、「わたしはみ言葉を与えられて、それを食べました。み言葉は、わたしに喜びとなり、心の楽しみとなりまし た」（エレミヤ 15：16）。ラビたち自身の間にも、パンを食べるということの霊的な意味は、律法を学び、よいわざを実行することであるという言いならわしがあったそして、メシヤが 来臨されると、イスラエル全体が養われるということがよく言われていた。預言者たちの教 えは、パンの奇跡に含まれている深い霊的な教訓を明らかにした。キリストは、会堂の聴衆 に、この教訓を明らかにしようとしておられた。もし彼らが聖書を理解していたら、彼らは、「わたしが命のパンである」というキリストのみことばをさとったのである（ヨハネ 6： 35）。疲れて、弱り果てた大群衆が、キリストから与えられたパンで養われたのはついきの うのことであった。そのパンから肉体の力と元気とを受けたように、彼らは、キリストから 永遠のいのちにいたる霊的な力を受けられるのであった。「わたしに来る都決して飢えるこ とがなく、わたしを信じる者は決してかわくことがない」とイエスは言われた。しかし主は、「あなたがたはわたしを見たのに信じようとはしない」とつけ加えられた（ヨハネ 6：35、36）。

彼らは、聖霊のあかしと、魂に示される神の啓示とによってキリストを見たのであった。キリストの力について生きた証拠が日々彼らに示されたが、それでも彼らはもっとほかのしるしを求めた。もしほかのしるしが与えられたとしても、彼らはあいかわらず不信のままであっただろう。自分たちが見たり聞いたりし たことによって確信が得られないのなら、彼らにもっと多くのふしぎなわざを示すことはむだだった。不信はいつでも疑問の口実をみつけ、どんな絶対的な証拠も理屈で片づけられてしまうのである。

ふたたびキリストは、かたくなな心に向かって、「わたしに来る者を決して拒みはしない」と訴えられた（ヨハネ　6：37）。信仰をもってキリストを受け入れる者は永遠のいのちを持つと、主は言われた。1 人も失われることはない。パリサイ人とサドカイ人が、来世のいのちについて論争する必要はない。人々は、望みのない悲しみのうちに死者を嘆くには及ば　ない。「わたしの父のみこころは、子を見て信じる者が、ことごとく永遠の命を得ることな　のである。そして、わたしはその人々を終りの日によみがえらせるであろう」（ヨハネ 6：　40）。　しかし民の指導者たちは、感情を害して言った、「これはヨセフの子イエスではないか。わたしたちはその父母を知っているではないか。わたしは天から下ってきたと、どうし　て今いうのか」（ヨハネ　6：42）。彼らは、イエスのいやしい素性を嘲笑的に引き合いに出 して、偏見をあおりたてようと試みた。彼らはガリラヤ人の一労働者としてのイエスの生活　と、貧しくていやしいその家族とを軽蔑的にほのめかした。この無教育な大工の主張には注　意を払う価値がないと、彼らは言った。また彼らは、イエスの生れが神秘的であったために、イエスの親だってあやしいものだとあてこすり、こうしてイエスの生れについての人間的な　境遇をイエスの経歴の汚点として表現した。

イエスはご自分の生れの神秘について説明しようとされなかった。イエスは、海を横断されたことについての質問にいっさいお答えにならなかったように、ご自分が天からおくだりになったことについての質問にも返答されなかった。 イエスはご自分の生涯に目立っている奇跡に注意を求められなかった。イエスはご自分から名声のない者となられ、しもべのかたちをおとりになった。しかしイエスのことばとわざとがその品性をあらわした。心を天来の光に向けて開いている者ならだれでも、イエスを「父のひとり子……めぐみとまことに 満ちてい」るお方として認めるのである（ヨハネ 1：14）。

パリサイ人の偏見には、彼らの質問に表現されているよりも根深いものがあった。それは、彼らの邪悪な心に根をおろしていた。イエスの一つ一つのことばと行為は、彼らの心のうちに敵対意識を引き起こした。それは彼らのいだいている精神が、イエスのうちに共感を呼び起こさなかったからである。

「わたしをつかわされた父が引きよせて下さらなければ、だれもわたしに来ることはできない。わたしは、その人々を終りの日によみがえらせるであろう。預言者の書に「彼らはみな神に教えられるであろう」と書いてある。父から聞いて学んだ者は、みなわたしに来るのである」（ヨハネ　6：44、45）。天父の愛に引きよせられ、それに応ずる者のほかは、だれもキリストのもとにこないであろう。しかし神は、すべての心をみもとに引きよせておら　れるのであって、神から引きよせられるのに反抗する者だけがキリストのみもとにくること　をこばむのである。「彼らはみな神に教えられるであろう」ということばの中に、イエスは、「あなたの子らはみな主に教をうけ、あなたの子らは大いに栄える」というイザヤの預言に言及された（イザヤ 54：13）。ユダヤ人は、この聖句を自分たちにあてはめていた。神が自分たちの教師であるというのが彼らの自慢であった。しかしイエスは、この主張がどんなにむなしいものであるかを示して、「父から聞いて学んだ者は、みなわたしに来るのである」と言われた（ヨハネ 6：45）。彼らは、キリストを通してのみ天父から知識を受けることができるのであった。人間は神の栄光を見ることに耐えられなかった。神から学んだ者はみ子の声をきいていたのであって、彼らはナザレのイエスこそ、自然と啓示とを通して天父を宣言されたお方であることを認めるのであった。

「よくよくあなたがたに言っておく。信じる者には永遠の命がある」（ヨハネ 6：47）。愛されたヨハネは、こうしたことばをきいたが、聖霊は彼を通して教会にこう宣言された。「そのあかしとは、神が永遠のいのちをわたしたちに賜わり、かつ、そのいのちが御子の　うちにあるということである。御子を持つ者はいのちを持ち、神の御子を持たない者はいのちを持っていない」（Ⅰヨハネ 5：11、12）。またイエスは、「わたしはその人々を終りの日によみがえらせるであろう」と言われた（ヨハネ 6：40）。キリストは、われわれがキリストと一つ精神になるために、われわれと一つ肉体になられた。われわれが墓から出てくるのは、この結合によるのである。すなわちキリストの力のあらわれとしてだけでなく、信仰によってキリストのいのちがわれわれのものとなったからである。キリストの真の品性を見、キリストを心に受け入れる者は、永遠のいのちを持つ。キリストがわれわれのうちに住まわ

れるのは、みたまを通してであり、神のみたまが信仰によって心に受け入れられる時、それは永遠のいのちの始まりとなる。

人々は、彼らの先祖が荒野で食べたマナのことをキリストの前に引き合いに出して、その食物が備えられたことが、あたかもイエスの行われた奇跡よりも偉大なことであるかのように言ったが、イエスはご自分が与えるためにおいでになった祝福とくらべる時に、その賜物がどんなに貧弱であったかをお示しになっている。マナはこの世の生存をささえることしかできなかった。それは死がやってくるのをとめることもできなければ、永遠のいのちを保証することもできなかった。しかし天のパンは、魂を養って永遠のいのちに入らせるのであった。イエスはこう言われた、「わたしは命のパンである。あなたがたの先祖は荒野でマナを食べたが、死んでしまった。しかし、天から下ってきたパンを食べる人は、決して死ぬことはない。わたしは天から下ってきた生きたパンである。それを食べる者は、いつまでも生きるであろう」（ヨハネ 6：48～51）。この比喩に、キリストは、いまもう一つをつけ加えられる。死ぬことによってのみ、キリストは、人にいのちを与えることがおできになるのであって、次に続くことばの中に、キリストは、ご自分の死を救いの手段としてさし示しておられる。すなわち、「わたしが与えるパンは、世の命のために与えるわたしの肉である」とイエスは言っておられる（ヨハネ 6：51）。

ユダヤ人は、エルサレムで、ちょうど過越節を祝おうとしていた。それは死の天使が、エジプトの家々を撃った時、イスラエルが救済された夜を記念するものであった。神は、彼らが過越の小羊を神の小羊イエスとして見、この象徴を通して、世の人々のいのちのためにご自分をお与えになったキリストを受け入れるように望まれた。しかしユダヤ人は、象徴だけを重視して、その意義を見失っていた。彼らは主のからだをわきまえなかった。過越節の儀式に象徴されているのと同じ真理が、キリストのみことばのうちに教えられた。しかしそれもまた認められなかった。 そこでラビたちは、立腹して叫んだ、「この人はどうして、自分の肉をわたしたちに与えて食べさせることができようか」（ヨハネ　6：52）。ニコデモが「人は年をとってから生れることが、どうしてできますか」とたずねた時のように、彼らもキリストのみことばを字義通りの意味に解釈したようなふりをした（ヨハネ 3：4）。ある程

度彼らは、イエスの言われた意味がわかっていたのであるが、それを認めようとしなかった。イエスのみことばの意味をとりちがえることによって、彼らはイエスに対する偏見を民衆にうえつけようと望んだのであった。

キリストはご自分の象徴的な表現をやわらげようとされなかった。彼はさらに強いことばで、その真理をくりかえされた、「よくよく言っておく。人の子の肉を食べずまた、その血を飲まなければ、あなたがたの内に命はない。わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者には、永遠の命があり、わたしはその人を終りの日によみがえらせるであろう。わたしの肉はまことの食物、わたしの血はまことの飲み物である。わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者はわたしにおり、わたしもまたその人におる」（ヨハネ 6：53～56）。イエスの肉を食べ、その血を飲むということは、判ストを自分自身の救い主として受け入れ、キリストがわれわれの罪をゆるしてくださることと、彼のうちにあるときわれわれが完全であるということとを信じることである。キリストの愛を見つめ、これについて瞑想し、これを飲むことによって、われわれはキリストの性　質にあずかる者となるのである。肉体にとって食物がなくてはならないように、魂にとって、キリストはなくてはならないものである。食物は、われわれ　がそれを食べて、それがわれわれの生命の一部となるのでなければ、何の役にもたたない。　同様にキリストは、もしわれわれが彼を自分自身の救い主として知るのでなければ、われわ　れにとって何の価値もないのである。理論的な知識はわれわれに何の益も与えない。キリス　トのいのちがわれわれのいのちとなるためには、キリストを食べ、キリストを心に受け入れ　ねばならない。キリストの愛、キリストの恵みを同化しなければならない。

しかしこのような比喩でさえ、信者とキリストとの関係にある特権を表わしてはいない。イエスは、「生ける父がわたしをつかわされ、また、わたしが父によって生きているように、わたしを食べる者もわたしによって生きるであろう」と言われた（ヨハネ　6：57）。神のみ子が天父への信仰によって生きられたように、われわれもキリストへの信仰によって生きる　のである。イエスは、神のみこころにまったく服従されたので、その生涯には天父のみがあ　らわされた。キリストは、すべての点にわれわれと同じように試みをお受けになったが、ご

自分をとりかこむ悪に少しもけがされずに世人の前に立たれた。このように、われわれもまたキリストが勝利されたように勝利するのである。

あなたはキリストに従う者だろうか。そうなら、霊的生活について書かれていることはすべてあなたのために書かれているのであって、それはあなた自身をイエスに結合させることによって達成されるのである。あなたの熱意は衰えつつあるだろうか。あなたの初めの愛は冷たくなっただろうか。キリストがさし出されている愛をもう 1 度受け入れなさい。彼の肉を食べ、彼の血を飲みなさい。そうすればあなたは、天父と一つになり、またみ子と一つになる。 不信なユダヤ人は、救い主のみことばのうちにある字義的な意味よりほかには何もわかろうとしなかった。儀式の律法の中には、血を飲むことが禁じられているので、彼らはこんどはキリストのみことばを神聖をけがすことばとして解釈し、互にそのことについて議論した。弟子たちの中にさえ、「これは、ひどい言葉だ。だれがそんなことを聞いておられようか」という者が多かった（ヨハネ 6：60）。

救い主は彼らに答えて言われた、「このことがあなたがたのつまずきになるのか。それでは、もし人の子が前にいた所に上るのを見たら、どうなるのか。人を生かすものは霊であって、肉はなんの役にも立たない。わたしがあなたがたに話した言葉は霊であり、また命である」（ヨハネ 6：61～63）。 世の人々にいのちを与えるキリストのいのちは、そのみことばのうちにある。イエスが病気をいやし、悪鬼を追い出されたのはそのみことばによってで あった。そのみことばによって、主は海を静め、死人をよみがえらせられた。人々は彼のみ ことばに力があったことをあかしした。キリストは、旧約のすべての預言者たちと教師たち とを通して語られたように、神のみことばをお語りになった。聖書全体はキリストを表わす ものであって、救い主は、ご自分に従う者の信仰をみことばの上に固くすえようと望まれた。キリストの目に見える存在がとり去られた時、みことばが彼らの力のみなもとでなければな らない。主と同じように、彼らも「神の口から出る一つ一つの言で生き」るのであった（マ タイ 4：4）。

われわれの肉体の生命が食物でささえられるように、われわれの霊的生命は、神のみことばによってささえられる。だからどの魂も、神のみことばから自分のためにいのちを受け

るのである。栄養をとるには自分が食べねばならないように、われわれは、自分自身でみことばを受け入れねばならない。われわれは、みことばを他人の頭脳を仲介として受けるだけであってはならない。神のみことばをさとることができるように、聖霊の助けを神に求めながら聖書を注意深く研究しなければならない。1 節をとりあげて、神がわれわれのためにその 1 節の中におかれた思想を確かめる仕事に頭脳を集中しなければならない。われわれは、その思想がわれわれ自身のものとなるまで、それについて考えをめぐらさねばならない。その時われわれは、「主が言われたこと」を知るのである。

イエスの約束と警告の中には、わたしのことが言われている。神は世を愛してその独り子を賜わったが、それは、わたしがみ子を信ずることによって滅びることなく永遠のいのちを得るためである。神のみことばのうちに述べられている経験はわたしの経験となるのである。祈りと約束、教えと警告はわたしのものである。「わたしはキリストと共に十字架につけられた。生きているのは、もはや、わたしではない。キリストが、わたしのうちに生きておられるのである。しかし、わたしがいま肉にあって生きているのは、わたしを愛し、わたしのためにご自身をささげられた神の御子を信じる信仰によって、生きているのである」（ガラテヤ 2：19～20）。このように信仰によって真理の原則を受け入れ、それを同化する時に、それはわれわれの生命の一部となり、生活の原動力となる。神のみことばは魂に受け入れられて、思想を形成し、品性の発達の要素となる。

信仰の目をもってイエスをたえずながめることによって、われわれは強められる。神は、飢えかわいているご自分の民に最もとうとい啓示をお与えになる。彼らはキリストが自分自身の救い主であることを発見する。キリストのみことばを食べる時に、彼らは、それが霊でありいのちであることを知る。みことばは、生れながらの世俗的な性質を滅ぼし、イエス・キリストのうちにある新しいいのちを与える。聖霊は、助け主として魂にくだる。人を生まれ変らせる神の恵みの力によって、神のみかたちが、弟子のうちに再現され、彼は新しい人間となる。愛が憎しみに入れ代り、心は神のみかたちにかたどられる。「神の口から出る一つ一つの言で生きる」というのは、このことである（マタイ 4：4）。これが天からくだるパンを食べることである。

キリストは、ご自身と彼に従う者との間の関係について永遠の聖なる真理を語られた。イエスは、イエスの弟子と称する人々の性格を知っておられ、イエスのみことばは彼らの信仰を試みた。イエスは、彼らがイエスの教えを信じてこれを実行すべきであると宣言された。イエスを受け入れた者はみな、イエスの性質にあずかり、その品性に一致するのであった。このことは彼らの心に宿っている野心を放棄することを意味した。そのためには、イエスに全的に献身することが必要であった。彼らは、自己犠牲的で、柔和で、心のへりくだった者となるように召された。彼らは、いのちの賜物と天の栄光にあずかる者となりたければ、カルバリーの人イエスの歩まれた狭い道を歩まねばならない。

この試みは大きすぎた。力ずくでイエスをおしたてて王としようとした人々の熱意はさめた。会堂におけるこの講話によって自分たちの目は開かれたと、彼らは断言した。いまや彼らは夢からさめた。彼らの考えによれば、イエスのみことばは、彼がメシヤではないということ、また彼と関係があってもこの世の報酬は何も得られないということのはっきりした告白であった。彼らは、キリストの奇跡を行う力を歓迎し、病気と苦しみから解放されることを熱望したが、キリストの自己犠牲的な生活に共鳴しようとしなかった。彼らはイエスの語られた神秘的な霊的王国を好まなかった。キリストを求めた不誠実で利己的な人々は、もはやキリストを望まなかった。もしキリストが、ローマ人からの解放のためにその権力と勢力とをそそがれないのなら、彼らはキリストと関係したくなかった。

イエスは彼らに、「あなたがたの中には信じない者がいる」とはっきり言われて、「それだから、父が与えて下さった者でなければ、わたしに来ることはできないと、言ったのである」とつけ加えられた（ヨハネ 6：64、65）。イエスは、もし彼らが天父に引きつけられないなら、それは彼らの心が聖霊に向かって開かれていないからであるということを彼らが理解するように望まれた。「生れながらの人は、神の御霊の賜物を受けいれない。それは彼には愚かなものだからである。また、御霊によって判断されるべきであるから、彼はそれを理解することができない」（Ⅰコリント 2：14）。魂がイエスの栄光を仰ぎ見るのは、信仰によってである。この栄光は、信仰が聖霊によって魂のりちに燃えあがるまではかくされているのである。

この弟子たちは、自分たちの不信を公然と譴責されたので一層イエスから遠ざかった。彼らは非常に不快だったので、救い主を傷つけてパリサイ人の敵意を満足させようと望んで、イエスに背を向け、軽蔑の色を浮べて立ち去った。彼らは自ら選択して、精神のない形式、実の入っていないからを取った。彼らの決心はその後もかわらなかった。彼らはふたたびイエスとともに歩まなかったからである。 「箕（み）を手に持って、打ち場の麦をふるい分け、麦は倉に納め……るであろう」（マタイ 3：12）。それはふるい分ける一つの時代であった。真理のみことばによって、からは麦から分けられつつあった。彼らは、うぬぼれが強く、独善的で、譴責を受け入れることができずまた世俗への愛着のためにつつましい生活を受け入れることができなかったので、多くの者がイエスから離れた。今日も多くの者が同じことをしている。カペナウムの会堂でこれらの弟子たちが試みられたように、今日も魂が試みられる。真理が心にうえつけられると、彼らは、自分たちの生活が神のみこころに一致していないことをさとる。彼らは自分自身のうちに完全な変化が行われなければならないことを認めるが、自己犠牲的な働きをとりあげたくない。だから彼らは、自分の罪がばくろされると怒るのである。彼らは、弟子たちがイエスを離れ去ったように、「これは、ひどい言葉だ。だれがそんなことを聞いておられようか」とつぶやきながら、気を悪くして行ってしまうのである（ヨハネ 6：60）。

彼らの耳には称賛とお世辞はこころよいが、真理は歓迎されない。彼らはそれを聞くことができない。民衆が従い、大群衆が養われ、勝利の叫びが聞かれると、彼らは、声高らかに賛美する。しかし神のみたまのさぐりによって彼らの罪があらわされ、その罪を離れるように命じられると、彼らは、真理に背を向けてふたたびイエスと共に歩まない。 こうした不満な弟子たちがキリストから離れ去ると、異なった精神が彼らを支配した。彼らは、1 度は非常な興味をもって見ていたイエスに、心をひかれるものを何も見ることができなかった。彼らは、イエスの敵をさがし出した。それは彼らが敵の精神と働きに一致していたからであった。彼らは、イエスのことばを誤解し、彼の宣言を曲解し、彼の動機を攻撃した。彼らは、イエスにとって不利なあらゆる項目を集めることによって、自分たちの行動を正当づけた。

このような偽りのうわさによって、非常な怒りがかきたてられたので、イエスの生命は危険になってきた。

ナザレのイエスが自分はメシヤではないと告白したという知らせがたちまちひろがった。こうして、前の年にユダヤにおいてそうであったように、ガリラヤにおいても民衆の感情の流れはイエスにさからった。イスラエルのために残念なことに、彼らは救い主をこばんだ。なぜなら彼らはこの世の権力を与えてくれるような征服者をあこがれたからである。彼らは永遠のいのちにいたるまで保つ食物でなく、朽ちる食物を望んだ。

イエスは、これまで弟子だった者たちが、人のいのちであり光であるご自分のもとから離れ去って行くのを憐れみの思いをもってごらんになった。ご自分の憐れみが理解されず、その愛が報いられず、いつくしみが軽んじられ、救いがこばまれたという意識が、イエスの心を言い表しようのない悲しみで満たした。イエスが「悲しみの人で、病を知っていた」といわれたのは、このような事情からであった（イザヤ 53：3）。イエスは、ご自分から離れ去って行く人たちをとめようとしないで、12 人弟子に向かって、「あなたがたも去ろうとするのか」と言われた（ヨハネ 6：67）。ペテロが答えて、「主よ、わたしたちは、だれのところに行きましょう」とたずね、「永遠の命の言をもっているのはあなたです。わたしたち は、あなたが神の聖者であることを信じ、また知っています」とつけ加えた（ヨハネ 6：68、69）。「わたしたちは、だれのところに行きましょう」（ヨハネ 6：68）。イスラエルの教 師たちは形式主義のとりこであった。パリサイ人とサドカイ人はしじゅう言い争っていた。 イエスを去ることは、慣例や儀式をやかましくいう連中や自分自身の名誉を求める野心 家たちの仲間に入ることであった。弟子たちは、キリストを受け入れてから、以前のどんな生活 よりも平和と喜びとを感じていた。どうして彼らは、罪人の友イエスをあざけり迫害した人 たちのところへもどって行けようか。彼らは、長い間メシヤを待望してきた。そのメシヤが いまおいでになったのである。彼らは、イエスの前から立ち去って、イエスの生命をねらい、またイエスに従う者となったために彼らを迫害した人たちのところへ行くことはできなかっ た。

「わたしたちは、だれのところに行きましょう」。キリストの教え、また愛といつくしみについてのキリストの教訓から離れて、不信の暗黒、世間の邪悪さの中に入って行くことはできなかった。救い主のふしぎなみわざを目に見た多くの人々が主を捨てて去ったが、ペテロは、「あなたこそキリストです」と弟子たちの信仰を表明した（マルコ　8：29）。自分たちの魂の錨（いかり）であるこのお方を失うことを考えただけで、彼らは恐れと苦痛に満　たされた。救い主なしでは、暗い嵐の海をただようのも同然であった。　イエスのみことばと行いの多くは、限りある人間の心には神秘的に思えるが、そのことばと行いの一つ一つには、われわれをあがなうための働きにおける明確な目的があって、それぞれの結果を生ずるよう　に考慮されていた。もしわれわれがキリストの意図を理解することができるなら、すべての　ことが重要であり、完全であり、そしてキリストの使命と調和していることがわかるのであ　る。

われわれは、いま神のみわざと方法とを理解することはできないが、人に対する神のすべての態度の根底には神の大いなる愛があることを認めることができる。イエスの近くに生活している者は、敬虔の奥義について多くのことをさとる。譴責が与えられ、品性が試みられ、心の意図が明るみに出されるのは、憐れみによるものであることを彼は認める。 イエスが試金石となる真理を示され、そのために多くの弟子たちが離反した時、彼はご自分のことばの結果がどうなるかをご存知であった。しかし主は、達成すべき憐れみの目的をもっておられた。イエスは、試みの時に、愛する弟子たちの一人一人が激しく試みられることを予見しておられた。ゲッセマネのキリストの苦しみ、キリストが売り渡され十字架につけられることは、彼らにとって非常にきびしい試練となるのであった。もし前もって試練が与えられなかったら、ただ利己的な動機から行動していた多くの者たちも弟子たちとの関係を続けたであろう。彼らの主が法廷で有罪の宣告を受けられた時、またかつてイエスを王として歓呼した群衆がイエスをののしり、イエスに悪口を浴びせた時、あるいはまたやじ馬たちが「十字架につけよ」と叫んだ時、一こうして彼らの世俗的な野心が裏切られた時、これらの利己的な連中は、イエスへの忠誠心を捨てることによって、虫のよい望みがこわれてしまったことに悲嘆と失望とを感じていた弟子たちに一層心の重荷となるにがい悲しみを与えたであろ

う。こうした暗黒の時に、イエスから離れ去った連中の手本によって、他の者たちも彼らにひきずられたかも知れなかった。しかしイエスは、ご自分に真に従っている者たちを、ご自分の存在によってまだ強めることがおできになる間に、この危機を招かれたのであった。

憐れみ深いあがない主は、ご自分を待っている運命を十分に知っておられたので、やさしくも弟子たちのために道を平らにし、最大の試練に彼らを備えさせ、最後の試みのために彼らを強められた。

第 42 章　言い伝え

律法学者たちとパリサイ人たちは、過越節の時にイエスに会うことを予期して、イエスにわなをしかけておいた。しかしイエスは、彼らの意図をお知りになって、この集まりに出られなかった。すると「パリサイ 人と、ある律法学者たちとが、.....イエスのもとに集まった」（マルコ 7：1）。イエスが彼らのところへ行かれなかったので、彼らはイエスのところへやってきた。一時は、ガリラヤの人たちがイエスをメシヤとして受け入れ、この地方の祭司政治の権力が打破されるかのようにみえた。12 弟子の使命は、キリストの働きの発展を示し、弟子たちを一層直接にラビたちと衝突させたので、エルサレムの指導者たちの警戒心を新たに引き起こしていた。キリストの公生涯の初めごろ彼らがカペナウムへ送ったスパイたちは、キリストに安息日違反の罪を着せようとしてかえって混乱させられた。だがラビたちは、彼らの目的を達成するのに懸命であった。そこで、キリストの行動を看視し、キリストを告発する理由をみつけ出そうとして、もう 1 度代表団が送られた。

前と同じように、苦情の理由は、イエスが神の律法をわずらわしいものにしている伝統的な戒律を無視されているということだった。これらの戒律は神の律法の遵守を保護するためにつくられたものであるが、実際は律法そのものよりも神聖なものにみなされていた。もしこれがシナイ山で与えられた十戒と両立しない場合には、ラビの戒律に優先権が与えられた。 最も厳重に遵守を励行されたものの一つは、儀式上のきよめを守ることであった。食事の前に守るべき形式を無視することは、憎むべき罪であって、この世においても来世においても罰せられるのであった。そしてこの罪を犯す者を根絶することは、一つの善行とみなされていた。

きよめについての規則は、かぞえきれないほどあった。その全部をおぼえるには一生の年月をかけても足りないくらいであった。ラビの規則を守ろうとする者の生活は、儀式上のけがれとの長い戦いであり、洗いときよめとの果てしないくりかえしであった。人々はつまらない区別と、神が要求されたことのない遵守に心を奪われて、彼らの注意は、神の律法の大原財から離れた。

キリストと弟子たちは、こうした儀式上の洗いを守られなかったので、スパイたちはこのような無視を告発の理由にした。しかし彼らは、キリストを直接に攻撃しないで、キリストのところへやってきて、弟子たちを批判した。群衆のいるところで、彼らは、「あなたの弟子たちは、なぜ昔の人々の言伝えを破るのですか。彼らは食事の時に手を洗っていません」と言った（マタイ 15：2）。 真理のことばが特別な力をもって魂に訴える時にはいつでも、サタンは、手先の者たちを扇動して、あまり重要でない問題について論争を始めさせる。こ うしてサタンは、実際の問題から注意を引き離そうとするのである。よい働きが始められる といつでも、あら探しの名人が形式や規則的なことについて口を出し、大事な実際問題から 人々の心をそらそうとする。神がご自分の民のために特別な方法で働こうとしておられるよ うにみえる時には、魂を滅ぼすことにしか役立たないような論争にさそいこまれてはならな い。われわれにとって最も大事な問題は、わたしは救いの信仰をもって神のみ子を信じてい るだろうか、わたしの生活は神の律法と一致しているだろうかということである。「御子を 信じる者は永遠の命をもつ。御子に従わない者は、命にあずかることがない」「もし、わた したちが彼の戒めを守るならば、それによって彼を知っていることを悟るのである」（ヨハ ネ 3：36、Ｉヨハネ 2：3）。

イエスは、ご自分や弟子たちを弁護しようとされなかった。イエスは、ご自分に向けられた非難については何も言われずに、人間の儀式を固守している人たちの動機となっている精神を示し始められた。イエスは彼らがくりかえし行っていること、また彼らがイエスをさがしにくる前に行ったことを例としてあげられた。 イエスはこう言われた、「あなたがたは、自分たちの言伝えを守るために、よくも神のいましめを捨てたものだ。モーセは言ったではないか、『父と母とを敬え』、また『父または母をののしる者は、必ず死に定められる』と。それだのに、あなたがたは、もし人が父または母にむかって、あなたに差上げるはずの このものはコルバン、すなわち、供え物ですと言えば、それでよいとして、その人は父母に対し て、もう何もしないで済むのだと言っている」（マルコ 7：9～12）。彼らは、第 5 条の戒めを、すこしも重要なものではないかのように捨てたが、昔の人々の言い伝えを励行すること にはすこぶる厳格であった。人が財産を宮にささげることは親を養うよりももっと神聖な義

務である、またどんなに必要が大きかろうと、このように聖別されたものを一部でも父または母に分け与えることは神聖をけがすことであると、彼らは民に教えた。親不孝な子供は、自分の財産に「コルバン」ということばを宣告しさえすればよかった。そうすればその財産は、神にささげられるので、彼はそれを一生の間自分が使用するためにとっておくことができ、彼の死後それは宮の奉仕に用いられるのであった。このように彼は、生きても死んでも、神へのみせかけの献身というおおいの下で、勝手に親をはずかしめ、まただましたのであった。

イエスは、ことばによっても、行為によっても、神に献げ物をする人間の義務を軽くされたのではなかった。10 分の 1 と献げ物について律法のすべての指示をお与えになったのは、キリストであった。イエスは、この世におられた時、貧しい女が持っているだけのものを全部宮の金庫にささげたのをおほめになった。しかし祭司たちとラビたちの神への表面的な熱心さは、自分たちの勢力を拡大しようとする欲望をおおいかくすためのみせかけであった。民は彼らからあざむかれていた。彼らは神が負わせられなかった重荷も背負っていた。キリストの弟子たちでさえ、父祖伝来の偏見とラビの権威によって彼らに負わされているくびきからまったく解放されていたわけではなかった。いまラビの本性をばくろすることによって、イエスは、神に仕えようと心から望んでいるすべての者を言い伝えの束縛から解放しようとされた。

「偽善者たちよ」と、イエスは陰険なスパイたちに向かって言われた、「イザヤがあなたがたについて、こういう適切な預言をしている、『この民は、口さきではわたしを敬うが、その心はわたしから遠く離れている。人間のいましめを教として教え、無意味にわたしを拝んでいる』」（マタイ 15：7～9）。キリストのことばは、パリサイ主義の制度全体に対する非難であった。ラビたちは、自分たちの規則を天の戒めよりも上位におくことによって、自　分自身を神よりも高いところにおいているのだと、イエスは断言された。エルサレムからの　代表者たちは、怒りに満たされた、彼らは、イエスを、シナイ山で与えられた律法の違反者　として告発することができなかった。なぜならイエスは、彼らの言い伝えに反対して律法を

擁護されたからである。イエスが示された律法の大いなる戒めは、人間が考え出した小さな規則とくらべる時に著しい相違がみられた。

イエスは、群衆に、そしてあとからもっとくわしく弟子たちに、けがれは外からくるものではなくて内からくるものであると説明された。純潔と不純とは魂の問題である。人をけがすのは、人間のつくった外面的な儀式を無視することではなくて、悪い行為、悪いことば、悪い思い、神の律法を犯すことなどである。　弟子たちは、偽りの教えをばくろされた時のスパイたちの怒りに気がついた。彼らは、怒った顔を見、なかばつぶやくような不満と報復の　ことばを聞いた弟子たちは、キリストが開かれた本を読むように人の心を読まれる証拠を何　度もお示しになったことを忘れて、キリストにそのみことばの効果を告げた。彼らは、キリ　ストが、怒った役人たちと和解してくださるように望んで、「パリサイ人たちが御言を聞い　てつまずいたことを、ご存じですか」とイエズに言った（マタイ 15：12）。

イエスは、「わたしの天の父がお植えにならなかつたものは、みな抜き取られるであろう」とお答えになった（マタイ　15：13）。ラビたちが高く評価している慣習や言い伝えは、この世のものであって、天からのものではなかった。そうしたものが民に対してどんなに大きな権威をもっていても、神の試みに耐えることはできなかった。神の戒めの代りに人間が考え出したものはどんなものでも、「神はすべてのわざ、ならびにすべての隠れた事を善悪ともにさばかれる」その 日に無価値なことがわかるのである（伝道の書 12：14）。

神の戒めに人間の戒律を代用することはやまなかった。クリスチャンの間にさえ、昔の人々の言い伝えというだけでほかに何の根拠もない制度や慣習がみられる。このような制度は、ただ人間の権威に支えられて、天から指示された制度と入れ代ったのである。人々は自分たちの言い伝えを固守し、自分たちの風習を尊重し、彼らに誤りを示そうとする者に対して憎しみをいだく。今日、神の戒めとイエスを信ずる信仰とに注意を喚起するようにわれわれが命じられる時に、キリストの時代にあらわされたのと同じ敵意がみられる。神の残りの民について、こう書かれている、「龍は、女に対して怒りを発し、女の残りの子ら、すなわち、神の戒めを守り、イエスのあかしを持っている者たちに対して、戦いをいどむために、出て行った」（黙示録 12：17）。

だが「わたしの天の父がお植えにならなかったものは、みな抜き取られるであろう」（マタイ 15：13）。いわゆる教会の父祖たちの権威の代りに、天と地の主であられる永遠の父のみことばを受け入れるようにと、神はわれわれに命じられる。ここにだけ誤りのまじっていない真理がある。ダビデは、「わたしはあなたのあかしを深く思うので、わがすべての師にまさって知恵があります。わたしはあなたのさとしを守るので、老いた者にまさって事をわきまえます」と言った（詩篇 119：99、100）。人間の権威、教会の慣習、昔の人々の言い伝えを受け入れる者はみな、「人間のいましめを教として教え、無意味にわたしを拝んでいる」と言われたキリストのみことばのうちに含まれている警告を心に留めるがよい（マタイ 15：9）。

第 43 章　打破された壁

パリサイ人と対決されたあと、イエスは、カペナウムから退いてガリラヤを横切り、フェニキヤとの境界にある山間地方へ行かれた。西の方を向くと、下の平原には、異教の寺院と、壮麗な宮殿と、商業の市場と、船でいっぱいになった港のあるツロとシドンという古い都市がひろがっているのが見られた。その向こうには地中海の青海原があったが、この海を渡って、福音の使者たちは、世界の大帝国の中心に喜びのおとずれをたずさえて行くのであった。しかしその時はまだきていなかった。イエスの当面の仕事は、弟子たちを使命のために準備することであった。この地方へおいでになることによって、イエスは、ベッサイダで得られなかった静かな生活を見いだそうと望まれた。しかしそれだけがこの旅に出られたイエスの唯一の目的ではなかった。

「すると、そこへ、その地方出のカナンの女が出てきて、『主よ、ダビデの子よ、わたしをあわれんでください。娘が悪霊にとりつかれて苦しんでいます』と言って叫びつづけた」（マタイ 15：22）。この地方の人民は、昔のカナン族の出身であった。彼らは偶像礼拝者で、ユダヤ人から軽蔑され、憎まれていた。いまイエスのところへやってきた女は、そうした階級の人間であった。彼女は異教徒だったので、ユダヤ人が日々受けているような特典から除外されていた。フェニキヤには多くのユダヤ人が住んでいたので、キリストの働きについての知らせはこの地方にも行き渡っていた。人々の中には、キリストのみことばを聞き、そのふしぎなみわざを見た者もあった。この女は、あらゆる種類の病気をなおされるというわさのあるこの預言者のことを聞いていた。キリストの力について聞いた時、彼女の心に望みがわき起こった。母親としての愛情に動かされて、彼女は娘の状態をイエスに訴えようと決心した。彼女は、自分の苦悩をイエスに持って行こうと固く心にきめた。ぜひともイエスにこの子をなおしていただかなくてはならない。彼女はこれまで異教の神々の助けを求めたが、何の安心　も得られなかった。時々彼女は、このユダヤ人の教師がわたしのために何ができるだろうかという考えにさそわれた。しかし、イエスに助けを求めた者は、金持ちであろうと、貧しい人間であろうと、あらゆる種類の病気をいやされるというわさがたっていた。彼女はただ一つの望みを失うまいと決心した。

キリストはこの女の事情をご存知だった。主はこの女がご自分に会いたいと心から願っていることをお知りになって、彼女の道に身を置かれた。彼女を不幸から救うことによって、イエスは、ご自分が教えようと考えておられる教訓について、生きた実例を与えることがおできになるのであった。このためにイエスは、弟子たちをこの地方へ連れてこられたのだった。イエスは、イスラエルの国のすぐ近くの都市や村々に見られる無知に弟子たちが気づくように望まれた。真理を理解するためにあらゆる機会を与えられている民が、周囲の人々の必要については何も知らなかった。暗黒のうちにある魂を助ける努力は何もなされていなかった。ユダヤ人としての誇りによって築かれたへだての壁は、弟子たちが異教の世界に同情するのさえさまたげていた。だがこうした壁は打破されるのであった。

キリストは女の願いにすぐにはお答えにならなかった。イエスは軽蔑されている民族のこの代表者に、ユダヤ人ならこんなふうにしたであろうと思われるような応対の仕方をされた。そうすることによって、イエスは、この女に対するご自分の応接に示される、このような場合のユダヤ人の冷酷で無情な態度と、次に女の願いをきかれたことに示される、このような困っている人々をとり扱われるイエスの憐れみ深い態度に、弟子たちが感銘を受けるように意図されたのであった。

イエスは答えられなかったが、この女は信仰を失わなかった。彼女のことばが耳にはいらなかったかのように、イエスが通り過ぎて行かれると、彼女はイエスについてきて願いつづけた。弟子たちは女のしつこさに困ってしまって、イエスに女を追っぱらってくださいとたのんだ。彼らは、主が女を冷淡にとり扱われるのを見た。そして主もカナン人に対するユダヤ人の偏見をよろこんでおられるのだと思った。しかしこの女が懇願したのは、憐れみ深い救い主に対してであった。イエスは弟子たちのたのみに答えて、「わたしは、イスラエルの家の失われた羊以外の者には、つかわされていない」と言われた（マタイ 15：24）。この答はユダヤ人の偏見に一致しているように見えるが、そこには弟子たちに対する譴責が言外に含まれていた。その譴責は、イエスがたびたび彼らに言われたこと、すなわちイエスはご自分を受け入れるすべての者を救うためにおいでになったのだということを彼らに思い出させるためであったことを、弟子たちはのちになってさとった。

女は、キリストの足下にひれ伏して、ますます熱心に事情を訴え、「主よ、わたしをお助けください」と叫んだ（マタイ 15：25）。イエスは、ユダヤ人の無情な偏見に従って、あいかわらず女のたのみをしりぞけるふうをして、「子供たちのパンを取って小犬に投げてやるのは、よろしくない」と答えられた（マタイ 15：26）。このことは、恵まれている神の民に与えられた祝福を他国民や、イスラエルに国籍のない外国人に気前よく与えることは正当でないといっているのと同じであった。熱心さの足りない嘆願者だったら、この答に落胆してしまったであろう。ところが女は、自分の機会がきたと思った。イエスは表面拒絶しておられるが、女はその底にかくしきれない憐れみを見たのである。女は答えた、「主よ、お言葉どおりです。でも、小犬もその主人の食卓から落ちるパンくずは、いただきます」（マタイ 15：27）。家族の子供たちは、父親の食卓で食べるが、犬たちでさえ食物をもらわないでほうっておかれることはない。犬たちは、十分な食物のある食卓から落ちるパンくずをもらう権利がある。そのように、多くの祝福がイスラエルに与えられている一方には、彼女のためにもまた祝福があるのではないだろうか。彼女は犬としてみられていたが、そうならイエスの豊かな恵みからこぼれるバンくずをもらう犬の資格もあるのではないだろうか。

イエスは律法学者たちとパリサイ人たちがご自分 の生命をねらっていたので、働きの場所から離れられたばかりであった。彼らはつぶやき、不平を言った。彼らは不信とにがにがしさを表明し、自分たちに惜しみなくさし出された救いを拒絶した。ここでイエスは、神のみことばの光に恵まれていない不幸な、軽蔑された種族の 1 人にお会いになるが、彼女はその場でキリストの天来の感化に従い、イエスが彼女のたのみをかなえてくださる能力を持っておられることに絶対の信仰を持っている。彼女は主の食卓から落ちるパンくずを求めている。彼女はもし犬の特権が与えられるなら、喜んで犬としてみられたいというのである。彼女は、その行動に影響するような国民的あるいは宗教的な偏見や誇りなどを持っていないので、イエスがあがない主であり、また願うことは何でもかなえてくださることができるお方であることをすぐに認める。

救い主は満足された。主はご自分に対する彼女の信仰を試みられた。彼女に対する態度によって、イエスは、イスラエルから社会ののけもののようにみなされていたこの女が、も

はや外国人ではなくて、神の家族の子供であることを示された。天父の賜物にあずかることは、子供として彼女の特権である。キリストはいま彼女のたのみを聞き入れ、弟子たちへの教訓をとじられる。同情と愛の顔つきで彼女の方へふり向かれたイエスは、「女よ、あなたの信仰は見あげたものである。あなたの願いどおりになるように」と言われた（マタイ 15：28）。その時から、彼女の娘は健康になった。悪鬼はもう彼女を苦しめなかった。女は救い主を認め、自分の祈りがきかれた喜びのうちに帰って行った。

この旅行の間にイエスが行われた奇跡はこれだけであった。イエスがツロとシドンの境に行かれたのはこの奇跡を行うためであった。イエスは、この苦しんでいる女を救い、同時にご自分がおられなくなった時弟子たちのためになるように、軽蔑されている民の 1 人に対する憐れみのみわざを通して、模範を残そうと望まれたのであった。イエスは、弟子たちが　ユダヤ人的排他心を捨て、自分の民のために働くと同時に、さらにまたほかの民のためにも　働くことに関心を持つように望まれた。　イエスは、長年の間かくされてきた真理の深い奥義を示したいと望まれた。それは、異邦人がユダヤ人と同じ世継ぎであり、「福音によりキリ　スト・イエスにあって、……共に約束にあずかる者となることである」（エペソ　3：6）。弟子たちにはこの真理がなかなかわからなかったので、天来の教師は次々と教訓をお与えにな　った。カペナウムで百卒長の信仰に報いられたことによって、またスカルの住民に福音を説　かれたことによって、イエスはご自分がユダヤ人の偏狭さを持っておられない証拠をすでに　示された。しかしサマリヤ人は神のことをいくらか知っていたし、また百卒長はイスラエル　に親切を示していた。いまイエスは、弟子たちを 1 人の異教徒と接触させられたが、彼らは、この女がその属している民と同じように、イエスの恵みを期待する理由は何もないと思って　いた。イエスはこのような者をどう扱うべきかについて、手本を与えようとお思いになった。弟子たちは、イエスが恵みの賜物をあまりにも惜しげなく施されると思っていた。イエスは、ご自分の愛が民族や国民に限定されるものではないことを示したいと望まれた。

「わたしは、イスラエルの家の失われた羊以外の者には、つかわされていない」と言われた時、イエスは、事実を述べられたのであって、このカナン人の女のための働きにおいて、ご自分の任務を果たしておられた（マタイ 15：24）。この女はイスラエルが救うべきであっ

た失われた羊の 1 匹であった。キリストがしておられたのは、彼らに割り当てられた働きで、しかも彼らがなおざりにしてきた働きであった。　この行為によって、弟子たちの心は、目の前におかれている異邦人のための働きについて、もっと広く開かれた。彼らはユダヤの外側　に有用な広い伝道地を見た。彼らは、より大きな恵みを受けている人たちの知らない悲しみ　に耐えている魂を見た。軽蔑すべき相手として教えられてきた人々の中に、大いなるいやし　主の助けを熱望し、ユダヤ人に豊かに与えられている真理の光を飢えかわくように求めてい　る魂が いた。

のちになって、弟子たちがイエスを世の救い主と宣言したために、ユダヤ人がもっとかたくなに弟子たちから離れた時、またキリストの死によってユダヤ人と異邦人とのへだての壁がうち倒された時、この教訓は、福音の働きが風習や国籍によって制限されないということを示している他の同じような教訓とともに、キリストの代表者たち炉その働きを指導する上に大きな影響を及ぼした。

救い主がフェニキヤを訪れ、そこで奇跡を行われたことにはもっと広い目的があった。この働きがなされたのは、苦しんでいる女のためだけでもなければ、弟子たちや弟子たちの働きを受け入れた人々のためだけでもなかった。それは「あなたがたがイエスは神の子キリストであると信じるためであり、また、そう信じて、イエスの名によって命を得るため」であった（ヨハネ 20：31）。1800 年前に（注・本書の執筆当時からかぞえて）人々とキリストとの間をさまたげていた勢力は今日も働いている。ユダヤ人と異邦人との間のへだての壁を築きあげた精神は、いまも生きている。誇りと偏見のために、異なった階級の人々の間に頑固なへだての壁が築かれてきた。キリストとその使命はまちがって解釈され、一般の人々は、自分たちは事実上福音の働きからしめ出されていると思っている。だがキリストからしめ出されていると彼らに思わせてはならない。人間やサタンが築くことのできる壁で信仰によって突破できないものは一つもない。

フェニキヤの女は、ユダヤ人と異邦人の間につみあげられた壁に信仰をもってぶつかった。落胆させられるようなことに抵抗し、疑いたくなるような様子がみえたにもかかわらず、彼女は救い主の愛に信頼した。キリストは、われわれがこのようにキリストに信頼するよう

に望まれる。救いの祝福はすべての魂のためである。自分自身でえらぶ以外には、どんなものも、人が福音を通しイエス・キリストにあって約束にあずかる者となるのをさまたげることはできない。 神は差別的階級制度を憎まれる。神はこの種のものをすべて無視される。神の御目には、すべての人の魂は同じ価値がある。神は「ひとりの人から、あらゆる民族を造り出して、地の全面に住まわせ、それぞれに時代を区分し、国土の境界を定めて下さったのである。こうして、人々が熱心に追い求めて捜しさえすれば、神を見いだせるようにして下さった。事実、神はわれわれ一人一人から遠く離れておいでになるのではない」（使徒行伝17：26、27）。年令、地位、国籍、宗教上の特権などの区別なく、だれでもみな神のもとにきて生きるように招かれている。「『すべて彼を信じる者は、失望に終ることがない』……ユダヤ人とギリシャ人との差別はない」「もはやユダヤ人もギリシャ人もなく、奴隷も自由人もなく」「富める者と貧しい者とは共に世におる、すべてこれを造られたのは主である」「同一の主が万民の主であって、彼を呼び求めるすべての人を豊かに恵んでくださるからである。なぜなら、『主の御名を呼び求める者は、すべて救われる』とあるからである」（ローマ 10：11、12、ガラテヤ 3：28、箴言 22：2、ローマ 10：12、13）。

第 44 章　真のしるし

「それから、イエスはまたッロの地方を去り、シドンを経てデカポリス地方を通りぬけ、ガリラヤの海辺にこられた」（マルコ 7：31）。 悪霊につかれたガダラ人がいやされたのは、デカポリス地方においてであった。その時ここの人たちは、豚が全滅したのに驚いて、イエスが彼らのところから立ちのかれるように強制した。しかし彼らはイエスがあとに残された使者たちから話を聞き、イエスに会いたいという願いが起こった。この地方にもう瞳イエスがこられると、群衆がイエスのまわりに集まり、耳　が聞えず口のきけない人をみもとにつれてきた。イエスは、こんどはいつもの場合とちがって、ただ一言でその男をなおしておやり　にならなかった。イエスは、彼を群衆の中から連れ出されると、その両耳に指をさしこみ、　その舌にふれ、天を仰いで、真理に向かって開こうとしない耳と、あがない主を告白しよう　としない舌とを思って、ため息をっかれた。「開けよ」ということばに、この男は話すこと　ができるようになり、そして、だれにも言ってはならないとの命令を無視して、自分がいや　された話を言いひろめた。　イエスが山へのぼって行かれると、そこへ群衆が集まり、病人や足の不自由な人を連れてきてイエスの足もとにおいた。イエスは、彼らを全部なおしておや　りになった。すると人々は、異教徒ではあったが、イスラエルの神をほめたたえた。彼らは、 3 日間救い主のまわりにむらがりつづけ、夜は野外に眠り、昼間は熱心につめかけて、キリストのみことばを聞き、そのみわざを見た。3 日の終りには、彼らの食物がなくなった。イエス は、空腹のまま彼らを去らせたくないと思われ、弟子たちを呼んで、人々に食物を与えるよ　うにと言われた。すると弟子たちはふたたび不信をばくろした。ベッサイダで、彼らの手に　あったすこしばかりのものが、キリストによって祝福された時、群衆に食べさせるのに役立　ったのを彼らは見ていた。それなのに彼らは、イエスの力が飢えた群衆のために何倍にもふ　やしてくださることを信じて、持っているだけのものを全部さし出そうとしなかった。その　上、イエスがベッサイダで養われたのはユダヤ人だったが、ここの人たちは異邦人であり、　異教徒であった。弟子たちの心の中にはまだ偏見が強かった。彼らはイエスに、「荒野の中　で、こんなに大ぜいの群衆にじゆうぶん食べさせるほどたくさんのパンを、どこで手に入れ　ましょうか」と答えた（マタイ 15：33）。しかしイエスのことばに従って、彼らはあるだけ

のもの、すなわち 7 つのパンと 2 匹の魚を持ってきた。群衆は食べ、そしてなお 7 つの大きなかごにくずが残った。女や子供たちのほかに 4000 人の男たちが、こうして元気をとりもどし、イエスはこれらの人たちを喜びと感謝の気持をもって帰された。

それからイエスは、弟子たちと舟に乗って湖を渡り、ゲネサレ平野の南端にあるマグダラに行かれた。ツロとシドンの境では、スロ・フェニキヤの女のたよりきった信頼によって、イエスの心は新しい力を回復していた。デカポリスの異教の民は、よろこんでイエスを受け入れた。前にご自分の力を最もめざましくあらわされ、多くの憐れみのみわざをなし、教えを与えられたこのガリラヤに、イエスがもう 1 度上陸された時、そこでイエスが出会われた のは侮辱的な不信であった。パリサイ人の代表団には、祭司派であり、懐疑論者であり、国　民の貴族階級であり、かつ金持ちである尊大なサドカイ人からの代表者たちが加わっていた。この 2 つの分派は互に激しい敵意をいだいていた。サドカイ人は、自分たちの地位と権威とを維持するために、支配当局のごきげんをとっていた。一方パリサイ人は、ローマ人に対す　る民衆の憎悪心を育て、征服者のくびきをたち切ることのできる日を待ち望んでいた。だが　パリサイ人とサドカイ人は、いま一緒になって、キリストに反対した。類は類を求め、悪は、どこにあっても、善人を滅ぼすために、悪と同盟するのである。

いまパリサイ人とサドカイ人は、キリストのところへやってきて、天からのしるしを求めた。ヨシュアの時代に、イスラエルがベテホロンでカナン人と戦うために出て行った時、勝利をおさめるまで太陽が指揮官の命令で静止したことがあった。イスラエルの歴史には同じような多くのふしぎがあらわされた。何かそういったようなしるしがイエスに要求されたのである。しかしユダヤ人にとって必要なのはこうしたしるしではなかった。単に外面的なしるしは、彼らの益とならなかった。彼らにとって必要なのは、知的な啓示ではなくて、霊的な革新であった。「偽善者よ、あなたがたは天地の模様を見分けることを知りながら」――彼らは空を調べて天気を予報することができた――「どうして今の時代を見分けることが　できないのか」と、イエスは言われた（ルカ 12：56）。彼らに罪を自覚させる聖霊の力をもって語られるキリストご自身のことばこそ、神が彼らの救いのためにお与えになったしるしであった。また天から直接のしるしもキリストの使命を証拠だてるために与えられていた。

牧羊者たちへの天使たちの歌、博士たちをみちびいた星、イエスのバプテスマの時に天からくだったはとと声は、イエスをあかしするものであった。

「イエスは、心の中で深く嘆息して言われた、『なぜ、今の時代はしるしを求めるのだろう』」「しかし、ヨナのしるしのほかには、なんのしるしも与えられないであろう」（マルコ 8：12、マタイ 16：4）。ヨナが 3 日 3 晩くじらの腹の中にいたように、キリストも同じ間「地の中」におられるのであった（マタイ 12：40）。そしてヨナの警告がニネベの人たちにとってしるしであったように、キリストの説教は当時の世代にとってしるしであった。しかし世人の受け入れ方には何という相違がみられたことだろう。異教の大都市ニネベの住民は、神からの警告を聞いた時ふるえあがった。王も貴族もへりくだり、身分の高い人も低い人もいっしょに天の神の前に叫び求めたので、神の憐れみが彼らに与えられた。「ニネベの人々が、今の時代の人々と共にさばきの場に立って、彼らを罪に定めるであろう。なぜなら、ニネベの人々はヨナの宣教によって悔い改めたからである。しかし見よ、ヨナにまさる者がここにいる」とキリストは言われた（マタイ 12：41）。

キリストが行われた奇跡の一つ一つは、キリストの神性のしるしであった。イエスは、メシヤについて予告された働きをしておられたが、パリサイ人にとって、こうした憐れみのみわざはまことに不愉快だった。ユダヤ人の指導者たちは、人間の苦しみを冷酷な無関心をもってながめた。多くの場合、キリストがやわらげてくださった苦しみは、こうした指導者たちの利己心と圧迫から生じたものであった。だからキリストの奇跡は、彼らにとらて一つの譴責であった。 ユダヤ人に救い主の働きをこばませたものが、キリストの神としてのご品性についての最高の証拠であった。キリストの奇跡の最大の意義は、それが人類を祝福するためであったということにみられる。キリストが神のみもとからこられたという最高の証拠は、キリストの生活が神のご品性をあらわしていたことである。キリストは神の働きをし、神のみことばを語られた。このような生活こそあらゆる奇跡の中で最高の奇跡である。

今日、真理のことばが示されると、ユダヤ人のように、わたしたちに証拠をみせてください、わたしたちのために奇跡を行ってくださいと叫ぶ者が多い。キリストは、パリサイ人の要求によって奇跡を行われたことはなかった。彼は荒野でサタンのそそのかしに応じて奇

跡を行われなかった。キリストは、われわれが自分自身を弁護したり、不信と高慢の要求を満足させたりするために、われわれに力をお与えにならない、しかし福音が神から出たものであることを示すしるしがないわけではない。われわれがサタンの束縛をたち切ることができるのは、一つの奇跡ではないだろうか。サタンに対する敵意は人の心に自然にあるものではなくて、それは神の恵みによってうえつけられるのである。頑固で、わがままな意志に支配されていた者が自由になり、神が天の使者を通して引きよせられるのに全心全霊をもって応ずる時、一つの奇跡が行われる。強力な欺瞞に陥っていた人が道徳的真理をさとるようになった時もそうである。魂が悔い改めて、神を愛し、神の戒めを守るようになるたびに、「わたしは新しい心をあなたがたに与え、新しい霊をあなたがたの内に授け」るとの神の約束が成就される（エゼキエル 36：26）。

人間の心の変化、すなわち人の品性が一変することは、一つの奇跡であって、それは生きておられる救い主が魂を救うために働いておられる証拠である。キリストのうちにあって矛盾のない生活は、一つの大きな奇跡である。神のみことばが説かれるときにいつもあらわされるしるしは、聖霊が臨在されて、聞く者にそのことばを新生の力として下さることである。これこそ神がご自分のみ子の使命について世人の前に示されるあかしである。イエスにしるしを望んだ人々は、不信のうちに心がかたくなになっていたので、キリストのご品性のうちに神のみかたちを認めなかった。彼らは、キリストの使命が聖書の成就であることを認めようとしなかった。金持ちとラザロのたとえの中で、イエスは、パリサイ人に「もし彼らがモーセと預言者とに耳を傾けないなら、死人の中からよみがえってくる者があっても、彼らはその勧めを聞き入れはしないであろう」と言われた（ルカ 16：31）。天あるいは地において、どんなしるしが与えられても、それは彼らの益とはならないであろう。

イエスは「心の中で深く嘆息して」あら探しをする人々の群れから離れ、弟子たちとふたたび舟に乗られた（マルコ 8：12）。悲しい沈黙のうちに、彼らはもう 1 度湖を渡った。しかし彼らは、さきに出たところへは戻らず 15000 人が養われた場所の近くのベッサイダに舟を向けた。向こう岸に着くと、イエスは、「パリサイ人とサドカイ人とのパン種を、よくよく警戒せよ」と言われた（マタイ 16：6）。ユダヤ人は、モーセの時代以来、過越節の期

間には家の中からパン種を除く習慣があった。こうして彼らはパン種を罪の型とみなすことを教えられていた。しかし弟子たちは、イエスのことばを理解しなかった。彼らはマグダラを急に出発したので、パンを持参することを忘れ、持っていたパンは一つしかなかった。彼らはキリストがこうした事情のことを言われ、パリサイ人やサドカイ人のパンを買わないようにと注意しておられるのだと思った。彼らは信仰と霊的な洞察力に欠けていたので、イエスのみことばをこんなふうに誤解することがよくあった。そこでイエスは、少しの魚とパンとで数千人に食べさせたご自分がこの厳粛な警告の中で一時の食物だけのことを言ったように彼らが考えたことをおしかりになった。パリサイ人とサドカイ人のずるい論議によって、弟子たちの中に不信の種がまかれ、彼らがキリストのみわざを軽んずるようになる危険があったのである。

弟子たちは、天のしるしを求める人々の願いを主がきき入れてくださったらよかったのにと考えたがった。主はしるしを与えることが十分おできになり、またそのようなしるしによって敵は沈黙するであろうと、彼らは信じた。彼らは、あら探しをする連中の偽善をみわけていなかった。　何か月かのちに、「おびただしい群衆が、互に踏み合うほどに群がってきた」時に、イエスは同じ教えをくり返された。「イエスはまず弟子たちに語りはじめられた、『パリサイ人のパン種、すなわち彼らの偽善に気をつけなさい』」（ルカ 12：1）。

パン種が食物の中に入れられると、それは目に見えない働きをして、全部の量をそれ自身の性質に変える。そのようにもし心の中に偽善があるのをそのままにしておくと、それは品性と生活に充満する。いわゆる「コルバン」の習慣によって、宮に献げ物をするという口実の下に、子としての義務を怠ることがおおいかくされていたが、キリストは、すでにこの習慣を攻撃することによって、パリサイ人の偽善についてその目立った例を責められた。学者やパリサイ人は、欺瞞的な原則をしのびこませていた。彼らは、自分たちの教義の真の意図をかくし、あらゆる機会を利用して、聞く人々の心にその教義をたくみに吹きこんだ。このようなまちがった原則は、1 度受け入れられると、食物の中のパン種のように働き、品性にしみこんでこれを変えてしまうのであった。人々がキリストのみことばを受け入れるのを困難にしたのは、この欺瞞的な教えだった。

今日も、神の律法を自分たちの習慣に合うように説明しようとする人たちによって、同じ影響が及ぼされている。このような人たちは、律法を公然と攻撃しないで、律法の原則をひそかに害するような臆測的な理論を口にする。彼らは律法の力を破壊するような説明の仕方をするのである。 パリサイ人の偽善は、利己主義の産物であった。自分自身の栄誉が彼らの人生の目的であった。このために、彼らは、聖書を曲解し、これを悪用するようになり、キリストの使命の目的について盲目になった。キリストの弟子たちでさえ、この陰険な悪を心に宿す危険があった。イエスに従う者たちの仲間に入 りながら、キリストの弟子となるためにいっさいを捨てきっていない者は、パリサイ人の理屈から大きな影響を受けた。彼らはたびたび信仰と不信の間を動揺し、キリストのうちにかくされている知恵の宝をみわけなかった。弟子たちでさえ、外面的にはイエスのためにいっさいを捨てていたが、心の中では自分自身のために大きなことを求めることをやめていなかった。だれが一番えらいかということについて争いを引き起こしたのは、この精神であった。この精神が彼らとキリストとの間に入りこんだために、彼らは、キリストの自己犠牲の使命に共鳴することができずあがないの奥義を理解するのに手間どった。パン種が最後まで働くのを放っておくと腐敗が生じるように、利己主義の精神が心に宿ると、それは魂を堕落させ、滅ぼしてしまうのである。

昔と同じように今日も、主イエスに従う者の中に、この陰険で欺瞞的な罪がどんなに広く見られることだろう。キリストへの奉仕やお互いの間のまじわりが、自分を高めたいとのひそかな欲望のためにどんなにしばしばそこなわれることだろう。自己満足の思いと、人の賛成を願う心が何とすぐに起こりがちだろう。神の戒めの代りに人間の理論と言い伝えに従うようになるのは、自分を愛し、神が定められたよりももっとらくな道を望むからである、「パリサイ人のパン種……に気をつけなさい」とのキリストの警告のみことばは、キリストご自身の弟子たちに語られているのである（ルカ 12：1）。 キリストの宗教は誠実そのものである。神の栄えをあらわそうとする熱心さは、聖霊によってうえつけられる動機であって、この動機をうえつけることができるのはみたまの効果的な働きだけである。利己心と偽善と を追放できるのは神の力だけである。この変化こそキリストが働いておられるしるしである。われわれの受け入れる信仰によって、利己心と見せかけとが滅ぼされる時、またこの信仰に

よってわれわれ自身の栄えではなく神の栄えを求めるようになる時、われわれはその信仰が正しいものであることがわかる。「父よ、み名があがめられますように」というのが、キリストのこ生涯の基調であったが、われわれがキリストに従うとき、それはまたわれわれの一生の基調となるのである（ヨハネ 12：28）。主はわれわれに「彼が歩かれたように」歩くように命じておられる。「もし、わたしたちが彼の戒めを守るならば、それによって彼を知っていることを悟るのである」（Ｉヨハネ 2：6、3）。

第 45 章　十字架の前兆

地上におけるキリストの働きは、急速に終わりに近づいていた。キリストの前には、その足が向けられている光景がはっきりと輪郭をえがいていた。キリストは、すでに人性をおとりになる前から、失われた者を救うためにご自分の歩まねばならない道のりの全体をごらんになっていた。キリストは、王冠と王衣を脱ぎ捨てて王座から下り、人性をもって神性をおおわれる前から、その心をひき裂く悲しみ、ご自分に浴びせられる侮辱、耐えねばならない欠乏の一つ一つを、はっきりごらんになっていた。馬ぶねからカルバリーまでの道は、すべてイエスの目の前にあった。主はご自分にのぞむ苦悩をご存知だった。主はそうしたことのすべてを知りながらなお、「見よ、わたしはまいります。書の巻に、わたしのためにしるされています。わが神よ、わたしはみこころを行うことを喜びます。あなたのおきてはわたしの心のうちにあります」と言われた（詩篇 40：7、8）。

キリストは、ご自分の使命の結果をいつも目の前に見ておられた。イエスの地上生活はほねおりと犠牲に満ちていたが、イエスは、こうしたことがすべてむだな労苦にならないという見通しによって元気づけられた。人々のいのちのためにご自分のいのちを与えることによって、イエスは、世を神への忠誠に導きかえされるのであった。まず血のバプテスマを受けら れねばならなかったが、またその罪なき魂に世の罪が重くのしかかるのであったが、そしてまた言いつくせないほどの苦悩の影が主の上にあったが、それでもなおキリストは「自分の前におかれている喜びのゆえに、恥をもいとわないで十字架を忍」ぶことを望まれた（ヘブル 12：2）。

キリストの伝道の仲間としてえらばれた者たちの目には、キリストの前にある光景がまだかくされていた。しかし彼らがキリストの苦悩を見なければならない時が近づいていた。彼らは、自分たちが愛し信頼しているキリストが敵の手に渡され、カルバリーの十字架につけられるのを目に見なければならない。まもなくキリストは、彼らを目に見えるご自分の存在という慰めなしに世に当面させねばならない。主は、彼らがどんなにはげしい憎しみと不

信によって迫害されるかを知っておられた。そこでイエスは、彼らを試練に対して備えさせようと望まれた。

いまイエスは弟子たちとピリポ・カイザリヤ地方のある町にきておられた。彼らは、ガリラヤの境を越えて、偶像礼拝の盛んな地方へきていた。ここで弟子たちは、ユダヤ教の支配的な影響からしりぞいて、異教の礼拝と一層近く接触させられた。彼らの周囲には世界のどこにも見られるような迷信を形に表わしたものがあった。イエスは、弟子たちがこうしたものを見ることによって、異教徒に対する責任を感ずるように望まれた。この地方に滞在しておられる間、イエスは民に教えることをひかえて、もっと十分に弟子たちのために力をつくそうと努力された。

キリストは、ご自分を待ち受けている苦難について彼らに語ろうとしておられた。しかし主は、まず 1 人離れて、彼らの心がキリストのことばを受け入れる備えができるように祈られた。弟子たちのところへもどってこられると、主は、知らせようと思っておられたことをすぐにはお伝えにならなかった。そうする前に、イエスは、彼らがきたるべき試練に対して力が与えられるように、イエスに対する信仰を告白する機会をお与えになった。「人々は人の子をだれと言っているか」とイエスはおたずねになった（マタイ 16：13）。 残念ながら弟子たちは、イスラエルがメシヤを認めなかったことを承認しないわけにいかなかった。もっともある人々は、イエスの奇跡を見て、イエスはダビデの子であると断言した。ベッサイダで食べさせてもらった群衆は、イエスをイスラエルの王として宣言しようと望んだ。多くの者は、イエスを預言者として受け入れようとした。だが彼らは、イエスをメシヤとして信じなかった。

イエスは、こんどは弟子たち自身に関係のある第二の質問を出された。「それでは、あなたがたはわたしをだれと言うか。」ペテロが答えて言った、「あなたこそ、生ける神の子キリストです」（マタイ 16：15、16）。

ペテロは、はじめからイエスをメシヤと信じていた。バプテスマのヨハネの説教を聞いて罪を悟った他の多くの者たちは、ヨハネが投獄されて死刑に処せられると、ヨハネの使命

について疑いをいだきはじめた。彼らはこんどは、イエスが長い間待ち望んでいたメシヤであるかどうかを疑った。イエスがダビデの位につかれることを熱烈に期待していた弟子たちの多くも、イエスにその気持がないことを認めると、イエスから離れた。だがペテロとその仲間たちは忠誠を変えなかった。救い主にほんとうに従っている者たちの信仰は、きのうは称賛し、きょうは非難するといったような人々の移り変る態度によって、破壊されることはなかった。ペテロは、「あなたこそ、生ける神の子キリストです」と断言した。彼は、主が王として冠をつけられる栄誉を待たないで、屈辱のうちにあられるキリストを受け入れた。

ペテロは 12 人の信仰を表明していた。それでも弟子たちは、まだまだキリストの使命を理解していなかった。祭司たちや役人たちの反対と悪宣伝は弟子たちをキリストから引き　離すことができなかったが、それでも彼らのうちに大きな困惑を生じさせた。彼らは自分た　ちの道がはっきりわからなかった。彼らの子供時代の教育の影響やラビたちの教えや、言い　伝えの力などが依然として真理に対する彼らの考え方をさまたげていた。時々イエスからの　尊い光が彼らを照らしたが、それでも彼らは、しばしば暗がりを手さぐりで進んでいる人々のようであった。しかしこの日、彼らが信仰の大きな試みに直面させられる前に、聖霊は力　をともなって彼らの上にとどまった。しばらくの間彼らの目は、「見えるもの」から離れて、「見えないもの」にそそがれた（Ⅱコリント 4：18）。人性のよそおいの下に、彼らは神のみ子の栄光を認めたのであった。 イエスはペテロに答えて言われた、「バルヨナ・シモン、あなたはさいわいである。あなたにこの事をあらわしたのは、血肉ではなく、天にいますわたしの父である」（マタイ 16：17）。

ペテロが告白した真理は、信者の信仰の土台である。これこそキリストご自身が永遠のいのちであると宣言されたものである。だがこの知識を持っていることは、自己称賛の理由にはならなかった。それがペテロに示されたのは、彼に知恵や徳があったからではなかった。人間は 1 人で神についての知識に到達することはできない。「それは天よりも高い、あなた は何をなしうるか。それは陰府（よみ）よりも深い、あなたは何を知りうるか」（ヨブ 11： 8）。「子たる身分を授ける霊」のみが、神について「目がまだ見ず耳がまだ聞かず人の心に 思い浮びもしなかった」深い事がらをわれわれに示すことができるのである（ローマ 8：15、

1 コリント 2：9）。「そして、それを神は、御霊によってわたしたちに啓示して下さったのである。御霊はすべてのものをきわめ、神の深みまでもきわめるのだからである」（Ｉコリント 2：10）。「主の奥義は主をおそれる者のためにあり」（詩篇 25：14・英語訳）。ペテロがキリストの栄光をみとめたことは、彼が「神に教えられ」た証拠である（ヨハネ 6： 45）。ああ、実に「バルヨナ・シモン、あなたはさいわいである。あなたにこの事をあらわしたのは、血肉ではな」かった（マタイ 16：17）。

イエスはつづけて言われた、「そこで、わたしもあなたに言う。あなたはペテロである。そして、わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てよう。黄泉（よみ）の力もそれに打ち勝つことはない」（マタイ 16：18）。ペテロということばは、石――ころがる石という意味である。ペテロは、その上に教会を建てられる岩ではなかった。よみの門は、ペテロがのろい と誓いとをもって主をこばんだ時に彼に打ち勝った。教会は、よみの門が打ち勝つことので きないお方の上に建てられた。 救い主来臨の何世紀も前に、モーセは、イスラエルの救いの 岩であられるキリストをさし示した。詩篇記者は「わが力の岩」について歌った。イザヤは こう書いている、「主なる神はこう言われる、『見よ、わたしはシオンに一つの石をすえて 基とした。これは試みを経た石、堅くすえた尊い隅の石である』」（申命記 32：4 参照、詩篇 62：7、イザヤ 28：16）。ペテロ自身、霊感を受けて書いた時、この預言をイエスにあてはめて、こう言っている。「あなたがたは、主が恵み深いかたであることを、すでに味わい 知ったはずである。主は、人には捨てられたが、神にとっては選ばれた尊い生ける石である。この主のみもとにきて、あなたがたも、それぞれ生ける石となって、霊の家に築き上げら れ……なさい」（Ｉペテロ 2：3～5）。

「すでにすえられている土台以外のものをすえることは、だれにもできない。そして、この土台はイエス･キリストである」（Ｉコリント 3：11）。「わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てよう」とイエスは言われた（マタイ 16：18）。神と全天使たちの前で、また目に見えないよみの軍勢の前で、キリストは生ける岩の上にご自分の教会を建てられた。その岩はキリストご自身――われわれのために裂かれ傷つけられたキリストご自身のからだであった。この土台の上に建てられた教会に、よみの門は打ち勝つこと炉できない。 キリストが

このことばを語られた時、教会は、何と弱々しくみえたことだろう。信者はほんの一握りしかなく、この人々に向かって悪鬼と悪人の全勢力が向けられるのであった。それでもキリストに従う者たちは恐れないのであった。力の岩なるキリストの上に建てられているので、彼らを打ち倒すことはできなかった。 6000 年の間、信仰はキリストの上に築かれてきた。6000 年の間、サタンの怒りという洪水と嵐がわれらの救いの岩なるキリストを襲った。だがそれは動かされることなく立っている。

ペテロは、教会の信仰の基である真理を表明したので、イエスは、いまペテロに、信者全体の代表としての栄誉をお与えになった。イエスは、「わたしは、あなたに天国のかぎを授けよう。そして、あなたが地上でつなぐことは、天でもつながれ、あなたが地上で解くことは天でも解かれるであろう」と言われた（マタイ　16：19）。「天国のかぎ」はキリストのみことばである。聖書のみことばはすべてキリストのみことばであるから、「天国のかぎ」は聖書を意味している。聖書のことばには天国を開いたり閉じたりする力がある。それは人　々が受け入れられるか拒否されるかする条件を宣告する。こうして神のみことばを説く者た　ちの働きは、「いのちからいのちに至らせるかおり」か「死から死に至らせるかおり」とな　る（Ⅱコリント 2：16）。彼らの使命は、永遠の結果を負わされている使命である。

救い主は、福音の働きを個人的にペテロにおまかせになったのではなかった。のちになって、キリストは、ペテロに言われたことばをくり返して、それを直接教会に適用された。また実質的に同じことが、信者の団体を代表する 12 人に語られた。もしイエスが何か特別な権威を特に 1 人の弟子におさずけになったのだったら、弟子たちの中でだれが一番えらいかということについてしばしば論争されるようなことはなかったであろう。彼らは主のご希望に服従して、主がえらばれた 1 人を尊敬したであろう。キリストは、1 人を彼らの首長として任命することをしないで、「あなたがたは先生と呼ばれてはならない……あなたがたは教師と呼ばれてはならない。あなたがたの教師はただひとり、すなわち、キリストである」と弟子たちに言われた（マタイ 23：8、10）。

「すべての男のかしらはキリストで……ある」（Ⅰコリント 11：3）。神は、「万物をキリストの足の下に従わせ、彼を万物の上にかしらとして教会に与えられた。この教会はキ

リストのからだであって、すべてのものを、すべてのもののうちに満たしているかたが、満ちみちているものに、ほかならない」（エペソ　1：22、23）。教会は、キリストを土台として、その上に建てられている。教会は、キリストをかしらとして、キリストに従うのである。教会は、人にたよったり、人に支配されたりしない。教会の中の信任の地位を占めることに　よって、その人は他の人たちに何を信じさせ、何をさせるかを命令する権威が与えられると　主張する人が多い。神はこの主張を是認されない。救い主は、「あなたがたはみな兄弟」で　あると宣言しておられる（マタイ　23：8）。人はみな試みに会い、誤りを犯しがちである。有限な人間の指導にたよることはできない。信仰の岩は、教会内におけるキリストの生きた　存在である。どんなに弱い者も、キリストにたよることができ、自分は一番強いと思ってい　る者も、キリストを力としないかぎり、一番弱い者であるということがわかる。「おおよそ　人を頼みとし肉なる者を自分の腕とし、その心が主を離れている人は、のろわれる。」「主　は岩であって、そのみわざは全く」「すべて主に寄り頼む者はさいわいである」（エレミヤ17：5、申命記 32：4、詩篇 2：12）。

ペテロが告白したあとで、イエスは、ご自分がキリストであることをだれにも言ってはならないと弟子たちにお命じになった。この命令は、学者とパリサイ人のがんこな反対があったから与えられたのであった。それよりも大きな理由は、民はもちろん弟子たちでさえ、メシヤについてまったく誤った概念をいだいていたので、キリストについて公の発表をしたところで、キリストの性格と働きについて正しい理解を彼らに与えることができなかったからであった。しかし日 1 日とキリストは、ご自身を救い主として彼らに示し、こうして、メシヤとしてのご自分について、正しい概念を彼らに与えようと望まれた。

弟子たちは、キリストがこの世の王として統治されるものと、まだ期待していた。キリストはご自分の計画を長い間かくしてこられたが、いつまでも世に知ら れず貧しいままであられるとは限らないのだ、イエスが王国を建設される時は近づいているのだと、弟子たちは信じていた。祭司たちとラビたちの憎しみは決して克服されないということや、キリストがご自分の国民からこばまれ、欺瞞者として非難され、犯罪人として十字架につけられるなどという考えを、弟子たちは決していだいたことがなかった。しかし暗黒の勢力の時が近づい

ていたので、イエスは弟子たちの前に、その戦いをお示しにならねばならなかった。イエスはその試練を予想して悲しまれた。

これまでイエスは、ご自分の苦難や死に関連したことを彼らに知らせるのをひかえておられた。ニコデモと語られた時、イエスは、「ちょうどモーセが荒野でへびを上げたように、人の子もまた上げられなければならない。それは彼を信じる者が、すべて永遠の命を得るためである」と言われた（ヨハネ　3：14、15）。しかし弟子たちは、これを聞かなかったし、またたとえ聞いたとしても理解しなかったであろう。しかしいま彼らは、イエスといっしょ　にいて、そのみことばを聞き、そのみわざを見てきたので、イエスのいやしい境遇や、祭司　たちや民たちの反対にもかかわらず「あなたこそ、生ける神の子キリストです」とのペテロ　のあかしに加わることができるのである（マタイ 16：16）。いま、将来をおおっているベールを取り除く時がきていた。「この時から、イエス・キリストは、自分が必ずエルサレムに　行き、長老、祭司長、律法学者たちから多くの苦しみを受け、殺され、そして 3 日目によみがえるべきことを、弟子たちに示しはじめられた」（マタイ 16：21）。

弟子たちは、悲しみと驚きとで、ことばもなく聞いた。キリストは、ペテロがイエスを神のみ子として認めたことを承認された。だから、いまイエスのみことばがご自分の苦難と死を示していることは、不可解に思えた。ペテロはだまっていることができなかった。彼は、さし迫った運命からイエスを引き戻そうとするかのように、イエスをつかまえて、「主よ、とんでもないことで魂そんなことがあるはずはございません」と叫んだ（マタイ 16：22）。ペテロは主を愛していた。だがイエスは、ペテロがこのように主を苦難から守りたいという　希望を表明したことを称賛されなかった。ペテロのことばは、大きな試練に直面しておられ　るイエスにとって助けと慰めになるものではなかった。彼のことばは、失われた世に対する　神の恵みの目的に一致するものでもなければ、イエスがご自分の模範を通して教えるために　こられた自己犠牲の教訓に一致するものでもなかった。ペテロは、キリストの働きの中に十　字架を見ることを望まなかった。ペテロのことばから受ける印象は、キリストがご自分に従　う者たちに与えようと望んでおられる印象と正反対のものであった。　そこで救い主は、これまでその口から聞かれたことのないほど激しい譴責のことばを語る気になられた、「サタン

よ、引きさがれ。わたしの邪魔をする者だ。あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている」（マタイ 16：23）。

サタンは、イエスを落胆させて、その使命から引き離そうとしていたが、ペテロは、盲目的な愛情から、その試みを口に出していた。悪の君サタンがその考え方の張本人であった。衝動的な訴えの背後にはサタンのそそのかしがあった。荒野で、サタンは、キリストが屈辱と犠牲の道を捨てるならという条件で、この世の主権をキリストに提供した。いまサタンは、キリストの弟子に同じ試みを仕向けていた。イエスは、ペテロの目を十字架に向けさせようと望まれたが、サタンは、ペテロが十字架を見ないように、その目を地上の栄誉にそそがせようとした。こうしてサタンは、ペテロを通して、もう 1 度イエスに試みをおしつけようとしていた。しかし救い主は見向きもされなかった。イエスの思いはご自分の弟子の上にあっ た。サタンは、この弟子の心が、彼のために受けられるキリストの屈辱のまぼろしに感動さ せられないように、ペテロと主の間に入りこんでいた。キリストのみことばは、ペテロに向 かってではなく、ペテロをあがない主から引き離そうとしていた者に向かって語られたので あつた。「サタンよ、引きさがれ」（マタイ 16：23）。わたしと、まちがっているわたしのしもべとの間にもうこれ 以上入ってはいけない。わたしは、わたしの愛の奥義を彼に示すた めに、ペテロと直接に向かいあいたいのだ。

地上におけるキリストの道が苦悩と屈辱のうちにあるということは、ペテロにとってはつらい教訓であって、彼はそれを学ぶのに時間がかかった。この弟子は苦難の主とまじわることをちゅうちょした。しかし彼は、熱した炉の火の中にあって、その祝福を学ぶのであった。ずっとのちになって、長年の重荷と働きで彼の元気な体がまがった時、彼はこう書いた。「愛する者たちよ。あなたがたを試みるために降りかかって来る火のような試練を、何か思いがけないことが起ったかのように驚きあやしむことなく、むしろ、キリストの苦しみにあずかればあずかるほど、喜ぶがよい。それは、キリストの栄光が現れる際に、よろこびにあふれるためである」（Ｉペテロ 4：12、13）。 イエスは、いま弟子たちに、ご自分の犠牲の生活が彼らの生活のあるべき姿の模範であることを説明された。イエスは、立ち去らないで近くにいた人々を、弟子たちといっしょにそばにお呼びになって、「だれでもわたしについ

てきたいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい」と言われた（マタイ 16：24）。十字架はローマの権力と関連していた。それは最も残酷で屈辱的な形の死の道具であった。最も下等な犯罪人は処刑場まで十字架をかついで行かねばならなかった。十字架を彼らの肩にのせようとすると、彼らはしばしば必死の力で抵抗するが、ついには負けてしまって、この責め道具が彼らにくくりつけられるのであった。しかしイエスは、従う者たちに、十字架を取りあげてわたしのあとからそれをかついでくるようにとお命じになった。弟子たちにはイエスのそのみことばがぼんやりしかわからなかったが、それは最もひどい屈辱に身をまかせること、すなわちキリストのために死にいたるまで従うことを彼らにさし示した。救い主のみことばは、一これ以上完全な自己の屈服を表現することはできなかった。しかしイエスは、彼らのためにこのことをすべて受け入れておられた。われわれが失われている限り、イエスは天を望ましい場所とお考えにならなかった。主は非難と侮辱の生涯を送り、死の恥を受けるために天の宮廷からくだられた。天のはかりつくすことのできない宝に富んでおられたお方が、ご自分の貧しさによってわれわれが富める者となるために、貧しくなられた。われわれは、彼が歩まれた道に従うのである。

キリストがそのために死なれた魂を愛することは、自我を十字架につけることを意味する。神の子である者は、これからは自分自身を世の救いのためにさげられた鎖の一環とみなさねばならない。すなわち、神の憐れみの計画において、自分をキリストと一体とみなし、失われた者をさがし求め、これを救うために、キリストと共に出て行かねばならない。クリスチャンは、自分が神に献身したこと、また自分の品性を通して世にキリストをあらわすのだということをたえず認める。キリストの生活にあらわされた自己犠牲、同情、愛が、神のために働く者の生活に再現される。

「自分の命を救おうと思う者はそれを失い、わたしのため、また福音のために、自分の命を失う者は、それを救うであろう」（マルコ 8：35）。利己主義は死である。身体のどんな器官でも、そのものだけの働きに限るならば、それは生きることができない。心臓は手や頭に血液を送らねばたちまち力を失ってしまう。われわれのいのちの血液と同じように、キリストの愛は、彼の神秘な体（注・教会）の各部に満ちわたっている。われわれは互いにつ

ながっているのであって、分け与えることをこばむ魂は滅びる。「たとい人が全世界をもうけても、自分の命を損したら、なんの得になろうか。また、人はどんな代価を払って、その命を買いもどすことができようか」（マタイ 16：26）。

現在の貧しさと屈辱のかなたに、キリストは、弟子たちに、栄光――それもこの世の王座の光輝ではなくて、神と天の万軍の栄光のうちに来臨されることをさし示された。そして、「その時には、実際のおこないに応じて、それぞれに報いるであろう」と言われた（マタイ16：27）。それから彼らを励ますために、主は「よく聞いておくがよい、人の子が御国の力 をもって来るのを見るまでは、死を味わわない者が、ここに立っている者の中にいる」との 約束をお与えになった（マタイ 16：28）。しかし弟子たちは、イエスのみことばを理解しなかった。その栄光は遠い先のことのように思えた。彼らの目はもっと近い景色――貧乏と屈 辱と苦難の地上生活にそそがれていた。メシヤの王国に対する燃えるような期待を放棄しな ければならないのだろうか。主がダビデの位にあげられるのを見ないのだろうか。キリスト が家もないいやしい放浪者として生き、あなどられ、こばまれ、ついには死に処せられると いうことがあり得るだろうか。彼らは主を愛していたので、悲しみが心に重くのしかかった。疑いもまた彼らの心を苦しめた。神のみ子がそのような残酷な屈辱を受けられるということ が理解できないことに思えたのである。なぜ主はご自分から進んでエルサレムへ行き、ご自 分がそこで受けると言われたような取り扱いを受けようとされるのだろうかと、彼らは疑問 に思った。どうして主はそのような運命に身をまかせて、主が神のみ子であることを明らか にされる前に、われわれが手さぐりで進んでいたときよりももっと深い暗黒のうちにわれわ れを残そうとされるのだろうか。

ピリポ・カイザリヤ地方なら、ヘロデやカヤバの手もキリストにとどかないと、弟子たちは判断した。主にとって、ユダヤ人の憎しみもローマ人の権力も恐れるものではない。パリサイ入から離れたこの場所で働かれたらよい。どうして、ご自分を死に渡される必要があろう。もし死なれるならば、主の王国がよみの力も打ち勝てないほど固く築かれるということはどうなるのか。弟子たちには、それはまったく一つの神秘であった。 彼らはいまでさえ、彼らのすべての望みが打ちくだかれる都へ向かって、ガリラヤの海の沿岸を旅しているのだ

った。彼らはあえてキリストに抗議しようとはしなかったが、声をおとして悲しい調子で、将来がどういうことになるのだろうかと語り合った。いろいろ質問しながらも、彼らは、予測できない何かの事情によって、主を待ち受けているようにみえる運命を避けられるのではないかという思いにしがみついていた。こうして彼らは、6 日もの長い暗い日を、悲しんだり、疑ったり、希望をいだいたり、恐れたりした。

第 46 章　変貌の山

夕暮が近づいてくると、イエスは、弟子たちの中からペテロ、ヤコズヨハネの 3 人をそばにお呼びになり、彼らの先頭に立って野を横切り、けわしい道をのぼって、さびしい山の中腹へと行かれる。救い主と弟子たちは、その日を旅と教えに過ごしたばかりだったので、山登りで彼らの疲労が加わる。キリストは、苦しんでいる多くの人たちの心と体から重荷を取り除き、彼らの弱った肉体に生命の躍動をお与えになった。しかしイエスご自身もまた人性をとっておられたので、山を登ることには弟子たちと同じようにお疲れになる。

沈んでゆく太陽の光はまだ山のいただきのあたりに残り、うすれてゆく光輝が彼らの歩いている道をいうどる。だがその光もまもなく谷間や丘から消えさると、このさびしい旅人たちは夜の暗やみに包まれる。周囲の暗がりは、黒雲が現われてそれがだんだん濃くなって行くような彼らの悲しい生活と調和しているようにみえる。 弟子たちは、キリストがどこへ行かれるのか、また何のために行かれるのか、あえてたずねようとしない。イエスは、山の中で祈りのうちに一晩を送られることがよくあった。そのみ手で山や谷を作られたキリストは、自然の中にあってくつろぎをおぼえ、その静けさを楽しまれる。弟子たちは、キリストが道を進まれるところへついて行く。だが彼らは、みんなが疲れている時に、そしてイエスもまた休まれる必要がある時に、 なぜ主がこのほねのおれる登り道を、自分たちをつれて行かれるのだろうかとあやしむ。

やがてキリストは、もうこれ以上遠くへは行かないと彼らにお告げになる。悲しみの人イエスは、彼らからちょっとわきへ退いて、強い叫びと涙とをもって嘆願をおささげになる。彼は人類のために試練に耐える力を祈り求められる。イエスは自ら全能者のみ手に新たにすがられねばならない。なぜならそうすることによってのみ、主は、将来を考えることがおできになるからである。主はまた暗黒の力の時に弟子たちの信仰が衰えることがないように、彼らの上に思いをよせて、みこころをそそぎ出される。ひざまずかれたイエスのお体に露がひどくおりるが、イエスは気にされない。夜の影が主のまわりに濃くなるが、イエスはその暗さを気にとめられない。こうして時間がだんだん過ぎ去る。初めは弟子たちも、心からの

信仰をもって、イエスと祈りを共にしている。だが彼らは、疲れに負けてしまって、この場の光景に関心を保とうと努力しながらも、眠りにおちいってしまう。イエスは、弟子たちにご自分の苦難について語られた。イエスは、彼らが主と一つになって祈るように、彼らをおつれになった。

いまも主は、彼らのために祈っておられる。救い主は、弟子たちの重い心をごらんになって、彼らの信仰がむだではなかったのだという保証によってその悲しみをやわらげようと望まれた。12 人の弟子たちでさえ、全部の者が、イエスが与えようと望んでおられる啓示を受けることができるとはかぎらない。ゲッセマネの園でのイエスの苦しみを目撃する 3 人だけが、山の上でイエスといっしょにいるようにえらばれた。いまイエスの祈りの主題は、世がある前からイエスが父と共に持っておられた栄光のあらわれが彼らに示されるようにということ、またイエスのみ国が人間の目に示されるようにということ、そしてまた弟子たちがそれを目に見て強められるようにということである。イエスがたしかに神のみ子であって、その恥辱的な死は、あがないの計画の一部であるということを知ることによって、イエスの苦悶の絶頂の時に綾らに慰めが与えられるように、イエスの神性のあらわれを彼らの目に見せてくださるようにと、イエスは祈り求められる。

イエスの祈りは聞かれる。主がへりくだった心で石だらけの地面にひざまずいておられると、突然に天が開け、神の都の黄金の門があけ放たれ、聖なる光の輝きが山の上にくだって、救い主のお体をつつむ。内部の神性が人性をつらぬいて光を放ち、天からくだった栄光と一つになる。ひれ伏した姿勢から起き上って、キリストは、神らしい威厳をもってお立ちになる。魂の苦悩は過ぎ去った。主のお顔はいま「日のように輝き、その衣は光のように白くなった」（マタイ 17：2）。 弟子たちは、目をさまして、山を照しているまばゆい栄光を見る。恐れと驚きのうちに、彼らは光り輝く主のお体をみつめる。ふしぎな光に目がなれてくると、イエスはお 1 人ではないことがわかる。イエスのそばには 2 人の天の人がいて、イエスと親しく話をかわしている。この 2 人は、シナイ山上で神と語ったモーセと、アダムの子らの中ではほかにただ 1 人しか与えられていない高い特権を与えられて死の力を受けなかったエリヤであった。

これより 15 世紀前に、モーセはピスガ山上に立って、約束の地を見渡した。しかしメリバでの罪のために、モーセは、そこに入ることをゆるされなかった。イスラエルの大軍を　父祖の嗣業の地へみちびいて入る喜びは彼に与えられなかった。「どうぞ、わたしにヨルダ　ンを渡って行かせ、その向こう側の良い地、あの良い山地、およびレバノンを見ることので　きるようにしてください」という彼の必死の願いはこばまれた（申命記 3：25）。40 年の間、荒野を放浪していた時の暗黒を照した望みは拒否されねばならなかった。40 年間の苦労と心の重荷のはては荒野の墓であった。だが、「わたしたちが求めまた思うところのいっさいを、はるかに越えてかなえて下さることができるかた」は、その通りに、しもべの祈りにお答え　になった（エペソ　3：20）。モーセは死の主権の下を通ったが墓の中にとどまっていなかった。キリストが自ら彼をいのちによみがえらせてくださったのである。サタン　は、モーセの罪の故に、彼の体を要求したが、救い主キリストは、彼を墓から連れ出された（ユダ　9　参照）。

変貌（へんぼう）の山におけるモーセは、罪と死に対するキリストの勝利の証人であった。彼は、義人のよみがえりの時に墓から出てくる人々を代表していた。エリヤは、死を見ないで天へ移された人だったので、キリストの再臨の時に地上に生存していて、「終りのラッパの響きと共に、またたく間に、一瞬にして変えられ、……この朽ちるものは必ず朽ちないものを着、この死ぬものは必ず死なないものを着る」人々を代表していた（Ⅰコリント 15：51、53）。イエスは、「罪を負うためではなしに 2 度目に現れ」たもうときに見られるお姿と同じように天の光を着ておられた（ヘブル　9：28）。なぜなら、彼は「父の栄光のうちに 聖なる御使たちと共に」こられるからである（マルコ　8：38）。弟子たちに対する救い主の約束はいま果たされた。山の上で、キリストを王とし、モーセをよみがえった聖徒たちの代　表者とし、エリヤを天に移された人たちの代表者として、未来の栄光の王国が縮図で示され　たのであった。

弟子たちはまだその光景を理解していないが、しかし彼らは、柔和で心のへりくだったお方であり、無力な旅人としてあちらこちらを歩きまわられた忍耐強い教師であられるイエスが、天の愛された者たちからあがめられたことをよろこぶ。彼らは、エリヤがメシヤの統

治を宣告するためにやってきて、キリストのみ国がこの地上に建てられようとしているのだと信じる。彼らは恐れと失望の思い出を永遠に追い払いたいと思う。そして神の栄光があらわされたこの場所にとどまりたいと願う。ペテロは、「主よ、わたしたちがここにいるのは、すばらしいことです。もし、おさしつかえなければ、わたしはここに小屋を三つ建てましょう。一つはあなたのために、一つはモーセのために、一つはエリヤのために」と叫ぶ（マタイ　17：4）。弟子たちは、モーセとエリヤが主を保護し、王としてのキリストの権威を確立するためにつかわされたのだと確信する。

しかし、王冠の前に十字架がこなければならない。彼らとイエスとの会談の主題は、キリストが王として即位されることではなくて、主がエルサレムで死をとげられることである。人性の弱さに耐え、人類の悲しみと罪を負って、イエスはただ 1 人で人々の中を歩まれた。きたるべき試練の暗黒がイエスに迫った時、主はご自分を知らない世に孤独な気持でおられ　た。愛する弟子たちでさえ、彼ら自身の疑いと悲しみと野心的な望みに心を奪われて、キリ　ストの使命の奥義を理解していなかった。イエスは天の愛とまじわりのうちに住んでおられ　たが、ご自分が創造された世では孤独であった。いま天は、イエスのもとに使者たちをつか　わした。それは天使たちではなくて、苦難と悲しみに耐え、地上生涯の試練にあたって救い　主に同情することのできる人たちであった。モーセとエリヤは、キリストの共労者であった。彼らは人類の救いを願われるキリストと思いを一つにしていた。モーセは、イスラエルのた　めに、「今もしあなたが、彼らの罪をゆるされますならば――。しかし、もしかなわなけれ ば、どうぞあなたが書きしるされたふみから、わたしの名を消し去ってください」と祈った（出エジプト 32：32）。エリヤは、3 年半の飢饉の間、国民の憎しみとわざわいに耐えた時、孤独な思いを味わった。彼はただ 1 人で、神のためにカルメル山上に立った。彼は苦悩と絶望のうちにただ 1 人で荒野へ逃げた。み座のまわりの天使たちよりもこの人たちがえらばれ、彼らがイエスの苦難の場面について語り、天の同情の確証をもってイエスを慰めるためにやってきたのだった。世の望み、人類の一人一人の救いが、彼らの会見の主題であった。

眠りに負けてしまっていたので、弟子たちは、キリストと天の使者たちとの間に起こったことをほとんど聞かなかった。彼らは、目をさまして祈らなかったので、神が彼らに与え

ようと望まれたもの、すなわちキリストの苦難とそれにつづく栄光についての知識を受けなかった。彼らは、キリストの自己犠牲にあずかることによって彼らのものとなったはずの祝福を失ったこの弟子たちは、信ずる心がにぶく、天が彼らを富ませるために与えようとされた宝の価値がほとんどわか らなかった。 それでも彼らは、大きな光を受けた。彼らは、ユダヤ国民がキリストをこばんだ罪について全天が知っているということを確信した。彼らは、あがない主の鋤きについて、もっとはっきりした見通しを与えられた。彼らは、人間の理解を越えた事物を自分たちの目で見、耳で聞いた。彼らは、「そのご威光の目撃者」で、イエスこそ、父祖と預言者たちがあかししていたメシヤであり、天の宇宙によってメシヤとして認められたお方であることを認めた（Ⅱペテロ 1：16）。

弟子たちが山の上の光景をまだ見つめていると、「輝く雲が彼らをおおい、そして雲の中から声がした、『これはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である。これに聞け』」（マタイ 17：5）。弟子たちが、荒野でイスラエルの部族の先頭を行った雲よりももっと輝く栄光の雲を見、山をゆるがすほどのおそれ多い威厳をもって語られる神のみ声を聞いたとき、彼らは、うたれて地面に倒れた。彼らがひれ伏して顔をおおっていると、イエスが近よってこられて、彼らにさわり、聞きおぼえのあるお声で、彼らの恐怖を払いのけ、「起きなさい、恐れることはない」と言われた（マタイ 17：7）。おそるおそる目をあげてみると、天の栄光はすでに過ぎ去り、モーセとエリヤの姿は消えていた。彼らだけがイエスとともに山の上にいた。

第 47 章　奉仕

山の中で丸一晩が過ぎた。太陽がのぼると、イエスは弟子たちと平地へくだって行かれた。弟子たちは、もの思いにふけり、おそれ多い思いでだまっていた。ペテロでさえ一言もしゃべらなかった。天の光に照され、神のみ子がご自分の栄光をあらわされたあの聖なる場所に彼らはよろこんでいつまでもいたかったが、人々のためにしなければならない働きがあった。彼らはすでにイエスを求めて遠いところや近いところをさがしていた。

山のふもとには大勢の人々が集まっていた。あとに残っていた弟子たちは、イエスがどこへ行かれたかを知っていたので、人々をそこへつれてきた。救い主賊近づいてこられると、3 人の弟子たちに、彼らが目撃したことについてだまっているように命じて、「人の子が死人の中からよみがえるまでは、いま見たことをだれにも話してはならない」と言われた（マタ　イ 17：9）。弟子たちにあらわされた啓示は、彼ら自身の心の中でよく考えるべきものであって、外へ向かって発表すべきものではなかった。それを群衆にしゃべったら、嘲笑やつま　らない驚きをひき起こすだけであろう。9 人の弟子たちでさえ、キリストが死人の中幅よみがえられるまでは、その光景を理解できないのであった。愛された 3 人の弟子たちでさえ、どんなに理解がにぶかったかということは、キリストが目の前に迫っていることについてすっ　かり話されたにもかかわらず、死からよみがえるとはどういうことだろうかと互にたずね合　ったことにあらわれている。それでも彼らは、イエスに説明を求めなかった。将来について　のイエスのみことばは、彼らの心を悲しみで満たした。彼らがそういうことは決して起こら　ないようにと信じたがっていることについて、彼らはもうこれ以上示されることを求めなか　った。

平地にいた人たちは、イエスを見かけると、走ってきてイエスを迎え、尊敬と喜びの表情でイエスにあいさつした。しかしイエスは、彼らが非常に困惑していることを目ざとく見抜かれた。弟子たちも困っているようにみえた。ある出来事が起こって、彼らは激しい失望と屈辱を味わったのだった。 弟子たちが山のふもとで待っていた時、ある父親が、息子を彼らのところにつれてきて、この子を苦しめているものが言えない霊から救って下さいと願っ

た。イエスがガリラヤ一帯に福音を伝えるために 12 弟子を送られた時、彼らは、汚れた霊を制し、これを追い出す権威をさずけられた。彼らが強い信仰を　もって出て行った時、悪霊は彼らのことばに従った。いま彼らは、キリストのみ名によって、苦しみを与えている霊にそ　の被害者から出て行くようにと命じた。だが悪鬼は、新たに力を発揮して彼らをあざけった　にすぎなかった。弟子たちは、敗北の理由を説明することができないで、彼ら自身と主に不　名誉を招いたと思った。しかも群衆の中には、この機会を利用して、弟子たちに恥をかかせ　ようとする律法学者たちがいた。彼らは、弟子たちのまわりにおしよせ、質問を浴びせかけ、弟子たちと主とが欺瞞者であることを証明しようとした。弟子たちもキリスト自身も征服で　きない悪霊がここにいると、ラビたちは勝ち誇ったように断言した。人々は律法学者たちに　味方したい気持になり、軽蔑とあざけりとが群衆の間にみなぎった。

だが突然非難がやんだ。イエスが 3 人の弟子たちと近づいてこられるのが見えたのである。するとたちまち気持を変えた群衆は、向き直って彼らを迎えた。夜の間に天の栄光と交　わった名残が救い主と弟子たちの上にとどまっていた。彼らの顔には、見る者におそれを感　じさせるような光があった。律法学者たちは恐れてうしろへさがったが、人々はイエスを歓　迎した。救い主は、あたかもそこに起こった出来事を全部見ておられたかのように、論争の場へこられると、律法学者たちにじっと目をそそぎ、「あなたがたは彼らと何を論じている　のか」とおたずねになった（マルコ 9：16） だがそれまで大胆で反抗的だった声がいまは沈黙していた。群衆全体が鳴りをひそめた。そこで苦悩している父親は、群衆の中を進み出て、イエスの足下にひれ伏し、自分の心配と失望の次第を物語った。

「先生、ものが言えない霊につかれているわたしのむすこを、こちらに連れて参りました。霊がこのむすこにとりつきますと、どこででも彼を引き倒し……ます。それでお弟子たちに、この霊を追い出してくださるように願いましたが、できませんでした」（マルコ 9：17、18）。 イエスはまわりを見まわして、おそれの念にうたれている群衆と、あら探しをする律法学者たちと、困惑している弟子たちとをごらんになった。イエスは、一人一人の心の中にある不信仰を見抜かれ、悲しみに満ちた声で、「ああ、なんという不信仰な時代であろう。いつまで、わたしはあなたがたと一緒におられようか。いつまで、あなたがたに我慢が

できようか」と叫ばれた。そして困っている父親に、「その子をわたしの所に連れてきなさい」とお命じになった（マルコ 9：19）。

少年が連れてこられ、救い主の目が彼にそそがれると、悪霊は、彼を地面に打ち倒して、苦悶のけいれんを起こさせた。少年は、あわを吹いてころげまわり、この世のものでないような叫び声が大気をふるわせた。 ふたたび生命の君と暗黒の勢力とが戦場で遭遇した、―― キリストは、「福音を宣べ伝え……囚人が解放され……打ちひしがれている者に自由を得さ　せ」る使命を果たすために、サタンは自分の支配下にある被害者をつかまえておくために（ルカ 4：18）。人の目には見えなかったが、光の天使たちと悪天使たちの軍勢がおしよせてきて、この戦いを見守ったちょっとの間、イエスは、悪霊が力を発揮するのをおゆるしになったが、それは目撃者たちがまさに行われようとしている解放を理解するためであった。

群衆は、息、をこらして見守り、父親は胸苦しいまでの望みと心配のうちに見守った。イエスは、「いつごろから、こんなになったのか」とおたずねになった（マルコ　9：21）。父親は、長年の苦しみを物語り、もうそれ以上がまんできないかのように、「できますれば、わたしどもをあわれんでお助けください」と叫んだ。「できますれば」。いまになってもな　お父親は、キリストの力を疑った（マルコ 9：22）。 イエスは答えて、「信ずる者には、どんな事でもできる」と言われる（マルコ　9：23）。キリストの側に力の不足はない。息子がいやされることは父親の信仰次第である。父親は自分の弱さを認めると、あふれる涙とともにキリストの憐れみに身をまかせ、曙じます。不信仰なわたしを、お助けください」と叫 ぶ （マルコ 9：24）。

イエスは苦しんでいる者に向かって、「言うことも聞くこともさせない霊よ、わたしがおまえに命じる。この子から出て行け。2 度と、はいって来るな」と言われる（マルコ 9：25）。少年は叫び声をあげて、苦しみもだえる。悪鬼は、出て行くにあたって、この被害者の生命を引き裂いてしまいそうにみえる。すると少年は、身動きしなくなり、いのちがとだえたかのようにみえる。群衆は、「あの子は死んだ」とささやく。しかしイエスは、少年の手をとって起こし、まったく健康な心と体になった彼を父親に引き渡される。父親と子は救

い主のみ名を賛美する。「人々はみな、神の偉大な力に非常に驚いた」（ルカ 9：43）。一方、律法学者たちは、敗北し、うちしおれ、ふきげんな顔をしながら立ち去った。

「できますれば、わたしどもをあわれんでお助けください」（マルコ 9：22）。どれほど多くの魂が罪の重荷の下にこの祈りをくり返したことだろう。するとすべての者に向かって、憐れみ深い救い主はこうお答えになる、「もしできれば、と言うのか。信ずる者には、どんな事でもできる」（マルコ 9：23）。われわれを天に結びつけ、暗黒の勢力と戦う力をわれわれに与えてくれるのは信仰である。キリストを通して、神は、あらゆる罪の傾向を征服し、あらゆる誘惑に抵抗する手段をお与えになった。しかし、自分は信仰が足りないと思って、キリストから離れたままでいる者が多い。こういう魂は、無力と無価値のままに、憐れみ漆い救い主のいつくしみにすがりなさい。自分を見ないで、キリストを見なさい。この世におられた時に、病人をいやし悪鬼を追い出されたお方は、今日も同じに偉大なあがない主であられる。信仰は神のみことばによって生まれる。だから「わたしに来る者を決して拒みはしない」とのキリストの約束をしっかりつかみなさい（ヨハネ 6：37）。「信じま丸不信仰なわたしを、お助けください」と叫んで、イエスの足下に身を投げなさい（マルコ 9：24）。そうするかぎり、あなたは決して滅びることはない、決して。

短い時間の間に、愛された弟子たちは栄光と屈辱の両極端を目に見た。彼らは、神のみかたちに変えられた人と、サタンのかたちにまで堕落した人間とを見た。彼らは、イエスが天の使者たちと語り、光り輝く栄光の中から出る声によって神のみ子であると宣告された山からくだられて、どんな人間の力でも救うことのできない苦痛の発作に顔をゆがめ、歯をかみならしているあの最も悲惨な、ぞっとするような見もの――気が変になった少年に応対されるのを見た。この偉大なあがない主は、数時間前には、驚きあやしむ弟子たちの前に栄光の姿で立たれたばかりなのに、いまは身をかがめてサタンの被害者をそのころがりまわっている地面から立たせ、心も体も健康にして父親と家庭へもどしておやりになる。 父の栄光の中からおいでになった神が、身をかがめて失われた者を救われる、――このことはあがないについての実物教訓であった。それはまた弟子たちの使命をあらわしていた。キリストのしもべたちの生活は、山の上でイエスといっしょに霊的な光の中にいることにだけ費やされる

のではない。下の平地には彼らの働きがある。サタンのとりこにされた魂が、彼らを自由の身にしてくれる信仰のことばと祈りとを待っているのである。

9 人の弟子たちは、自分たちの失敗というにがい事実についてまだ考えこんでいた。彼らはもう 1 度イエスと自分たちだけになると、「わたしたちは、どうして霊を追い出せなかったのですか」とたずねた（マタイ 17：19）。イエスは彼らに答えて、「あなたがたの信仰が足りないからである。よく言い聞かせておくが、もし、からし種一粒ほどの信仰があるなら、この山にむかって『ここからあそこに移れ』と言えば、移るであろう。このように、あなたがたにできない事は、何もないであろう。しかし、このたぐいは、祈と断食とによらなければ、追い出すことはできない」と言われた（マタイ 17：20、21）。キリストに一層深く共鳴するのをさまたげていた不信仰と、まかされた聖なる働きに対する彼らの不注意な考え方が、暗黒の勢力との戦いに彼らを失敗させたのであった。

ご自分の死をさし示しているキリストのみことばが 悲しみと疑いとを生じさせていた。しかもイエスが山へ行かれるのに 3 人の弟子たちを選んで連れて行かれたことから、9 人の弟子たちのねたみがひき起こされていた。キリストのみことばを瞑想することと祈ることによって信仰を強めようとしないで、彼らは、落胆と個人的な不平に心を奪われていた。このような暗黒の状態にあって、彼らはサタンとの戦いをくわだてたのであった。 このような戦いに成功するためには、彼らはもっと異なった精神で働きにたずさわらねばならない。彼らの信仰は熱烈な祈りと断食、また心のへりくだりによって、強められねばならない。彼らは自分をむなしくして神の霊と力に満たされねばならない。信仰、すなわち神にまったくよりたのみ、神のみわざに全的に献身するようになる信仰をもって、熱心にたゆまず神に嘆願することによってのみ、人は「もろもろの支配と、権威と、やみの世の主権者、また天上にいる悪の霊に対する戦い」において、聖霊の助けを受けることができるのである（エペソ 6：12）。

「もし、からし種一粒ほどの信仰があるなら、この山にむかって『ここからあそこに移れ』と言えば、移るであろう」とイエスは言われた（マタイ 17：20）。からし種の粒は小さなものであるが、その中には最も高い木を生長させるのと同じ神秘な生命の原則が含まれて

いる。からし種が地にまかれると、その小さな芽は神がその栄養としてお与えになったあらゆる要素をとらえてたちまちたくましい生長をはじめる。もしこのような信仰があれば、あなたは神のみことばと、神がお定めになったあらゆる有益な方法をとらえる。こうしてあなたの信仰は強められ、天の力があなたの助けとして与えられる。サタンがあなたの道に積みあげた邪魔物は、永遠の山のように乗り越えることができないようにみえても、それは信仰の要求の前には消えうせてしまう。「あなたがたにできない事は、但もないであろう」（マタイ 17：20）、

第 48 章　だれがいちばん偉いか

イエスは、カペナウムに帰られると、人々をお教えになったあの有名な場所には行かれずに、弟子たちと静かに家へお入りになって、そこを一時の住居とされた。ガリラヤ滞在期間の残りを群衆のために働くよりもむしろ弟子たちを教えることが、イエスの目的であった。 ガリラヤの旅では、キリストは、弟子たちの心を、ご自分の前にある場面のために備えさせようともう 1 度試みられた。イエスは、ご自分がエルサレムにのぼって死刑にされ、ふたたびよみがえられることを彼らに語られた、しかもイエスは、ご自分が敵の手に売り渡されるというふしぎで厳粛な知らせをつけ加えられた。弟子たちはいまでもまだイエスのことばがわかっていなかった。大きな悲しみの影が彼らの上に落ちかかったが、彼らの心には競争意識が宿っていた。彼らは王国ではだれが一番えらい者としてみられるだろうかということを互いに論じた。彼らはこの争いをイエスにかくしておこうと思ったので、いつものようにイエスのそばによりつかないで、うしろかりかりぶら歩いて行った。だからカペナウムにはいった時には、イエスが彼らよりも先に歩いておられた。イエスは、弟子たちの心を見抜かれて、彼らに忠告と教えを与えたいと望まれた。しかしイエスは、彼らの心がイエスのみことばを受け入れるように開かれる静かな時間を待たれた。

彼らが町につくとまもなく、宮の納入金を集める人がペテロのところへやってきて、「あなたがたの先生は宮の納入金を納めないのか」とたずねた（マタイ 17：24）。この納入金というのは、市民税ではなく、宗教上の寄付金であって、ユダヤ人はみな宮を維持するために毎年納めねばならないのだった。納入金を納めるのをこばむことは、宮への不忠誠とみなされ ラビたちの見方では、まことに悲しむべき罪であった。ラビの律法に対する救い主の態度と、言い伝えの擁護者たちに対する彼の明らかな非難とは、イエスが宮の奉仕を放棄しようとしておられるという非難の口実を与えた。いまイエスの敵どもはイエスに疑惑を投げかけるチャンスをつかんだ。彼らは納入金を集める人をやすやすと味方にした。

ペテロは、集金人の質問の中に、宮に対するキリストの忠誠心を問題にするようなほのめかしがあるのを感じた。主の名誉を守ることに熱心なあまり、ペテロはイエスに相談もし

ないで、イエスは納入金を納められるだろうと、いそいで答えた。 しかしペテロは、質問者の意図が一部分しかわかっていなかった。納入金を納めることを免除されているある階級の人々がいた。モーセの時代に、レビ人が聖所の奉仕のために区別された時、彼らは民の中に何の嗣業も与えられなかった。主は、「レビは兄弟たちと一緒には分け前がなく、嗣業もない。……主みずからが彼の嗣業」であると言われた（申命記 10：9）。キリストの時代になっても、祭司とレビ人は、特に宮にささげられた者とみなされ、宮を維持するために毎年の寄付をする必要はなかった。預言者たちもまたこの支払いを免除されていた。イエスに納入金を要求することによって、ラビたちは、イエスがご自分のことを預言者または教師であると言っておられるのを無視して、イエスを一般の人なみに扱おうとしていたのであった。イエスが納入金を納めることをこばまれると、それは宮への不忠誠とみなされ、一方これを納められると、ラビたちがイエスは預言者ではないと言っていたことが正しかったと受けとられる卿あった。

ほんのちょっと前に、ペテロはイエスを神のみ子として認めた。だがいま彼は、主がどういうお方であるかを公表する機会を失った。ペテロが、イエスは納入金を納められるだろうと集金人に答えたことによって、彼は祭司や役人たちが言いふらそうとしているイエスについてのあやまった観念を実質的に承認したのであった。 ペテロが家の中に入って行くと、救い主はいま起こったことにはふれないで、「シモン、あなたはどう思うか。この世の王た ちは税や貢をだれから取るのか。自分の子からか、それとも、ほかの人たちからか」とおた ずねになった（マタイ 17：25）。ペテロは、「ほかの人たちからです」と答えた。するとイエスは「それでは、子は納めなくてもよいわけである」と言われた（マタイ 17：26）。国の民衆は、自分たちの王を維持するために税を課せられるが、王自身の子供たちは免除される。同じように、神の民と称しているイスラエルは、神の奉仕を維持することを要求されていた。だが神のみ子イエスには、このような義務はないのであった。祭司たちとレビ人が、宮との 関係から、納入金を免除されているのなら、イエスにとって、宮は父の家なのであるから、 イエスが納入金を納められる必要はますますなかった。

もしイエスが、抗議もしないで納入金を納められたら、イエスは、彼らの主張が正当であることを実質的に認めたことになり、そのことによってご自分の神性を否定されたことになっただろう。しかしイエスは、要求に応ずることはよいとされたが、彼らの要求の根拠は否定された。納入金を納める方法を講ずるにあたって、イエスはご自分の神性についての証拠をお与えになった。イエスは神と一つであり、したがって王国の単なる臣民として納入金を納められる義務はないことが明らかにされた。　　イエスはペテロにこうお命じになった。「海に行って、つり針をたれなさい。そして最初につれた魚をとって、その口をあけると、銀貨　1　枚が見つかるであろう。それをとり出して、わたしとあなたのために納めなさい」（マタイ 17：27）。

イエスはご自分の神性を人性で包んでおられたが、この奇跡を通してキリストの栄光があらわされた。ダビデを通して、「林のすべての獣はわたしのもの、丘の上の千々の家畜もわたしのものである。わたしは空の鳥をことごとく知っている。野に動くすべてのものはわたしのものである。たといわたしは飢えても、あなたに告げない、世界とその中に満ちるものとはわ セしのものだからである」と宣言されたのはキリストであったことは明らかだった（詩篇 50：10～12）。

イエスは、納入金を納める義務がないことを明らかにされたが、この問題についてユダヤ人と論争を始められなかった。もしそうされたら、彼らはイエスのことばをまちがって解釈し、これをイエスに反対する材料にしただろう。納入金を納めないことによって、彼らを怒らせることがないように、イエスは正当にいえばする必要のないことをされた。この教訓は弟子たちにとって非常に価値のあるものとなるのだった。まもなく宮の奉仕に対する彼らの態度に目立った変化が起ころうとしていた。そこでキリストは、不必要に既定の秩序に反するような立場に立たないようにということをお教えになった。できるだけ彼らは、彼らの信仰をまちがって解釈されるような機会を避けるべきであった。クリスチャンは、真理の原則を一つでも犠牲にしてはならないが、可能な場合にはいつでも、論争を避けるべきである。

ペテロが海へ行って、家の中はキリストと弟子たちだけだった時、イエスは彼らをみもとに呼んで、「あなたがたは途中で何を論じていたのか」とおたずねになった（マルコ 9:33）。イエスの前でこう質問されると、この問題は、途中で言い争っていた時とは全然異なって考えられるのだった。恥ずかしさと自責の思いで、彼らはだまっていた。イエスは、彼らのために死ぬのだということを語っておられたので、彼らの利己的な野心は、イエスの無我の愛にくらべるときに苦痛に感じられるのだった。

イエスは、ご自分が死刑にされてふたたびよみがえられることを弟子たちに語られた時、彼らが自分たちの信仰の大きな試練について語り合うようにさせようとされたのであった。もし彼らに、イエスが彼らに知らせたいと望んでおられることを受け入れる用意ができていたら、彼らは激しい苦悩と絶望を味わわずにすんだのであった。離別と失望の時に、イエスのみことばが慰めを与えたのであった。だがイエスが、ご自分を待ち受けている事がらについてはっきり語られたにもかかわらず、まもなくエルサレムへ行くと言われたことから、王国が建てられようとしているのだという望みがもう 1 度明るくなった。このことから、だれが最高の地位を占めるかということが問題になったのであった。ペテロが海から帰ってくる と、弟子たちは救い主の質問のことをペテロに語り、ついに 1 人が思いきってイエスに、「いったい、天国ではだれがいちばん偉いのですか」とたずねた（マタイ 18：1）。

救い主は弟子たちをまわりに集めて、彼らに言われた、「だれでも一番先になろうと思うならば、一番あとになり、みんなに仕える者とならねばならない」（マルコ 9：35）。このことばの中には、弟子たちがとうてい理解することのできない厳粛さと強い印象があった。彼らはキリストが見通しておられたものを見ることができなかった。彼らはキリストの王国 の性格がわかっていなかったので、この無知が彼らの論争の表面的な原因であった。だが真 の原因はもっと深いところにあった。キリストは、王国の性格を説明することによって、一 時は彼らの争いを静めることがおできになったであろう。しかしそれでは、根本にある原因 にふれていないのであった。彼らが十分に知った後でもなお、何か優先的な問題が起こると、争いは新たにされるかもしれなかった。そうしたら、キリストがいなくなられたあとに、わ ざわいが教会に起こったであろう。最高の地位を争うことは、天の世界に大争闘をひき起こ

してキリストを死ぬために天からくだらせたその同じ精神の働きであった。「黎明（れいめい）の子」ルシファーが、み座をとりまき、神のみ子と密接なきずなでむすばれていたすべての天使にまさる栄光につつまれていた光景が、イエスの前に浮かんだ（イザヤ 14：12）。ルシファーは、「いと高き者のようになろう」と言った（イザヤ 14：14）。自分を高めようとするこの望みから、天の宮に争いが生じ、1 群の天使たちが追われたのであった。もしルシファーが、ほんとうにいと高き神に似る者になろうと望んだのだったら、彼は決して天にお　ける自分の定められた地位を捨てなかったであろう。なぜなら、いと高き神の精神は、無我　の奉仕のうちにあらわされるからである。ルシファーは、神のご品性を望ん だのではなくて、神の権力を望んだのであった、彼は自分のために最高の地位を求めたが、彼の精神に動かさ　れる者はだれでもみなこれと同じことをするのである。こうして離反、不一致、争いは避け　られないものとなる。支配権は最も強い者のほうびとなる。サタンの王国は暴力の王国であ　って、各人は互いに相手を自分自身の昇進の道におけるじゃま物とみなすか、あるいは自分　がもっと高い地位へのぼるための踏み石とみなすのである。

ルシファーは、自分が神と同等になることを「固守すべき事」とみなしたが、高い地位におられたキリストは、「かえって、おのれをむなしうして僕のかたちをとり、人間の姿になられた。その有様は人と異ならずおのれを低くして、死に至るまで、しかも十字架の死に至るまで従順であられた」（ピリピ 2：6～8）。いま、十字架はちょうどキリストの前にあった。ところがキリストご自身の弟子たちは、サタンの王国の原則である利己主義で心が一杯になっているので、主と同じ気持になることもできなければ、あるいは主が彼らのために屈辱を受けられることを話されてもそれを理解することさえできなかった。

イエスはやさしくしかし厳粛に強調しながら、この悪を正そうとされた。イエスは天の王国を支配している原則は何であるか、また天の宮の標準によって評価される時、真の偉大さは何であるかをお示しになった。誇りと権勢欲に動かされている者は自分自身のことしか考えずまた自分が受けた賜物を神にお返しすることよりも、自分が受けるはずの報酬のことしか考えなかった。彼らはサタンの仲間といっしょになったのだから、天の王国に入る余地がないのであった。 栄誉の前に謙遜がある。人の前で高い地位を占めさせるために、天は、

バプテスマのヨハネのように、神の前に低い地位を占めている働き人をお選びになる。最も子供のような弟子が、神のための働きにおいて最も有能な者である。天使たちは、自分がえらくなろうとする者とではなく、魂を救おうとする者と協力することができる。神の助けの必要を最も深く感ずる者が、その助けを嘆願する時、聖霊は、イエスを一目見させて、その魂を力づけ、高めてくださる。彼はキリストとのまじわりから出て行って、罪のうちに滅びつつある人々のために働く。彼は使命のために油をそそがれる。そして学問があって、知的に賢明な人たちの多くが失敗する時に、彼は成功するのである。

しかし人が高慢になって、自分は神の大計画の成功に必要な人間だと思ったら、主は彼らをとり除かれる。そして主が彼らをあてにしておられないことが明らかにされる。彼らが離れたからといって働きがとまってしまうようなことはなく、それはもっと大きな力をもって前進する。 イエスの弟子たちは、キリストの王国の性格について教えられただけでは十分でなかった。彼らにとって必要だったことは、王国の原則と一致するようになる心の変化であった。イエスは小さな子供をお呼びになって、彼らのまん中に立たせ、それからやさしくその子を腕の中にいだき、「心をいれかえて幼な子のようにならなければ、天国にはいることはできないであろう」と言われた（マタイ 18：3）。幼な子の単純さと、私心のなさと、信じきった愛情は、天の神がとうとばれる特性である。これこそ真の偉大さの特徴である。

ふたたびイエスは、ご自分の王国の特徴は世俗的な威厳と見せびらかしではないことを弟子たちに説明された。イエスのみもとでは、こうした区別は忘れられる。金持ちも貧しい者も、学問のある者も無知な者も、社会的な地位や世俗的な優越など心にとめないで融和する。だれでもみな血で買われた魂、あがなって神のみもとへ戻してくださったお方に一様によりたのんでいる者としてまじわるのである。

罪を深く悔い改めたまじめな魂は、神の御目にとうとい。神は、地位によらず、富によらず知的な偉大さによらずただキリストと一つであることによって、人々にご自身の印をおされる。栄光の主は、柔和で心のへりくだった者に満足される。ダビデは、「あなたはその救いの盾をわたしに与え、」またあなたの「へりくだり」（文語訳）は、――人間の品性における一 つの要素として――「わたしを大いなる者とされました」と言った（詩篇 18:

35）。 「だれでも、このような幼な子のひとりを、わたしの名のゆえに受けいれる者は、わたしを受けいれるのである。そして、わたしを受けいれる者は、わたしを受けいれるのではなく、わたしをおつかわしになったかたを受けいれるのである」と、イエスは言われた（マルコ 9：37）。

「主はこう言われる、『天はわが位、地はわが足台である。……しかし、わたしが顧みる人はこれである。すなわち、へりくだって心悔い、わが言葉に恐れおののく者である』」（イザヤ 66：1、2）。 救い主のことばは、弟子たちのうちに自信のない思いを生じさせた。特にだれに答えるようにと命じられなかったが、ヨハネはある一つの出来事において自分の行為が正しかったかどうかをたずねてみる気になった。子供のような心になって、彼はその問題をイエスの前に持ち出した。「先生、わたしたちについてこない者が、あなたの名を使って悪霊を追い出しているのを見ましたが、その人はわたしたちについてこなかったので、やめさせました」（マルコ 9：38）。

ヤコブとヨハネは、この男をとめたのは主の名誉を念頭においたからであると思っていた。しかし彼らは、自分自身の名誉を求めていたのだということがわかり始めた。彼らは、自分たちの過失を認め、「やめさせないがよい。だれでもわたしの名で力あるわざを行いながら、すぐそのあとで、わたしをそしることはできない」とのイエスの譴責を受け入れた（マルコ 9：39）。何かの方法でキリストに親しい態度を示す者はだれもこばんではならなかった。キリストの品性と働きに深く心を動かされ、信仰のうちにキリストに向かって心を開こうとしている人たちが多くいた。そこで弟子たちは、動機を読みとることができないのだから、こうした魂を落胆させないように注意しなければならなかった。イエスが自ら彼らの中におられなくなって、働きが彼らの手にまかされた時、彼らは、狭い、排他的な精神をほしいままにしないで、彼らが主のうちに見たのと同じ広範囲の同情をあらわさねばならない。

人がわれわれ自身の理想や意見に全面的に一致しないからといって、その人が神のために働くことを禁じることは正当ではない。キリストは偉大な教師であられる。われわれはさばいたり、命令したりしないで、おのおのけんそんにイエスの足下にすわり、彼について学

ばねばならない。神が心を開かれた魂はみな、キリストがご自分のゆるしの愛をあらわされるチャンネルである。神の光をかかげている人たちの 1 人を落胆させ、そのことによって神が世に輝かそうと望んでおられる光をさえぎるようなことがないように、われわれはどんなにか気をつけねばならないことだろう。

キリストが引きよせておられる人に対して 1 人の弟子が示した苛酷さと冷淡さは、――すなわち、キリストの名によって奇跡を行っていた人をヨハネが禁止したような行為、――その人の足を敵の道に向けさせ、その魂が失われる結果になるかも知れない。そうするよりも「大きなひきうすを首にかけられて海の深みに沈められる方が、その人の益になる」とイエスは言われた（マタイ 18：6）。そしてさらにイエスはこうつけ加えられた。「もし、あなたの片手が罪を犯させるなら、それを切り捨てなさい。両手がそろったままで地獄の消えない火の中に落ち込むよりは、かたわになって命に入る方がよい。……もし、あなたの片足 が罪を犯させるなら、それを切り捨てなさい。両足がそろったままで地獄に投げ入れられるよりは、片足で命に入る方がよい」（マルコ 9：43、45）。

これ以上強いことばがないほどの強さで、この真剣なことばが語られたのはなぜだろうか。それは、「人の子は、滅びる者を救うために」こられたからである（マタイ 18：11）。キリストの弟子たちは、同胞の魂に対して、天の君が示されたよりも低い関心を示してよいだろうか。どの魂にも無限の価が払われているのである。1 人の魂をキリストから離れさせ、その結果、救い主の愛と屈辱と苦悩とがむだになるとは、何という恐ろしい罪であろう。

「この世は、罪の誘惑があるから、わざわいである。 罪の誘惑は必ず来る」（マタイ 18：7）。世は、サタンにそそのかされて、必ずキリストに従う者たちに反対し、彼らの信仰を破壊しようとする。だがキリストの名を帯びながら、しかもこのようなわざをしている者はわざわいである。主に仕えると口では言いながら、主のご品性についてあやまった印象を与える者たちによって、主ははずかしめられる。そして多くの人々はあざむかれ、まちがった道へみちびかれるのである。 罪にいたらせ、キリストの栄えをけがす習慣や行為は、どんな犠牲を払ってもとり除くがよい。神の栄えをけがすものは、魂を益することはできない。天の祝福は、正義についての永遠の原則を犯している人に伴うことができない。心に宿って

いるたった一つの罪でも、それは品性を堕落させ、他人を誤った方向へみちびくのに十分である。肉体を死から救うためには、足や手を切り落し、あるいは目さええくりぬかねばならないとしたら、魂を死にいたらせる罪をとり除くために、われわれはどんなにかもっと熱心にならねばならないことだろう。

儀式においては、どのいけにえにも塩が加えられた。これは、香をささげるのと同じに、キリストの義だけが奉仕を神に受け入れられるものとすることを意味した。この習慣にふれて、イエスは、「すべての供え物は塩をもて塩つけらる」（マルコ　9：49・元訳）。「あなたがた自身の内に塩を持ちなさい。そして、互に和らぎなさい」と言われた（マルコ　9：　50）。わが身を「神に喜ばれる、生きた、聖なる供え物」としてささげる者は、救いの塩す なわち救い主の義を受け入れねばならない（ローマ　12：1）。その時彼らは、ちょうど塩が 腐敗を防ぐように、「地の塩」となって人々の悪を防止するのである（マタイ　5：13）。しかし、もし塩のききめがなくなったら、すなわち口さきだけの敬虔で、キリストの愛がなか　ったら、そこにはよいことのために何の力もない。その生活は、世の人たちに救いの感化を　及ぼすことができない。わたしの王国を築くためのあなたの精力と能力とは、あなたがわた　しの霊を受け入れることにかかっていると、イエスは言われる。あなたは、生命から生命へ　いたるかおりとなるためにわたしの恵みにあずかる者とならねばならない。そのとき、競争　心もなければ、利己心もなく、また最高の地位を望む心もなくなるのである。そしてあなた　は「自分の益を求めないで、ほかの人の益を求める」愛を持つようになるのである（Ｉコリ　ント 10：24）。

悔い改める罪人に、「世の罪を取り除く神の小羊」に目をそそがせなさい（ヨハネ 1：29）。見ることによって彼は変えられる。彼の不安は喜びにかわり、疑いは望みにかわる。感謝の思いがわきあがる。石の心がくだかれる。愛の潮流が魂に流れこむ。キリストは彼のうちにあってわきあがって永遠のいのちにいたる水の泉となられる。悲しみの人で、病を知っておられたイエスが、失われた者を救うために、軽蔑され、侮辱され、嘲笑され、町から町へ追われながら働かれ、ついに使命を達成されたのを見る時、イエスがゲッセマネで大粒の血の汗を流し、十字架上で苦しみのうちに死なれたのを見る時、――われわれがこうした

ことを見る時に、自分を認めてもらいたいという欲求の叫びは、もはやなくなる。イエスを見上げて、われわれは、自分自身の冷淡さ、無気力、利己心を恥じる。われわれは、主に心から奉仕することができさえすれば、何になってもよいし、あるいは何にもならなくてもよいのである。われわれは、主のためなら、イエスにならって十字架を負い、試練と恥と迫害に耐えることをよろこぶのである。

「わたしたち強い者は、強くない者たちの弱さをになうべきであって、自分だけを喜ばせることをしてはならない」（ローマ 15：1）。どんな魂でも、信仰が弱く、幼い子供のように足がよろめいても、キリストを信じている限り、軽く評価されることはない。われわれに他人よりも有利な点があったら、それが教育であろうと教養であろうと、高潔な品性であろうと、クリスチャンとしての訓練であろうと、宗教経験であろうと、われわれは、われわれよりも恵まれていない人々にそれだけ負債があるのであって、力の及ぶかぎり、そうした人々に奉仕すべきである。もしわれわれが強い者 であったら、弱い者の手をささえねばならない。栄光の天使たちは、天においていつも天父のみ顔を仰いでいるが、神の子供たちに奉仕することをよろこぶ。天使たちは特に、品性に多くの好ましくない傾向があるためにおののいている魂を見守っている。天使は、最も必要とされる場所におり、また自己と最も困難な戦いをたたかい、最も落胆させられるような境遇のうちにある人々といっしょにいる。そしてキリストに真に従う者は、この奉仕において協力するのである。

もしこうした小さな者たちの 1 人が敗北し、あなたに対して悪いことをするならば、その時彼を立ち直らせることがあなたの働きである。先方から和解してくるのを待ってはならない。イエスはこう言われた、「あなたがたはどう思うか。ある人に 100 匹の羊があり、その中の 1 匹が迷い出たとすれば、99 匹を山に残しておいて、その迷い出ている羊を捜しに出かけないであろうか。もしそれを見つけたなら、よく聞きなさい、迷わないでいる 99 匹のためよりも、むしろその 1 匹のために喜ぶであろう。そのように、これらの小さい者のひとりが滅びることは、天にいますあなたがたの父のみこころではない」（マタイ 18：12～14）。

「自分自身も誘惑に陥ることがありはしないかと、反省」しながら、柔和な心をもって、あやまちを犯している人のところへ行き、「彼とふたりだけの所で忠告しなさい」（ガラテヤ 6：1、マタイ 18：15）。彼の過失を他の人たちにばくろして彼に恥をかかせたり、キリストのみ名を称している人の罪や過失を公表してキリストの栄えをけがすようなことがあってはならない。過失を犯している者に事実をはっきり告げなくてはならない場合がしばしばある。彼を改心させるためには、その過失を認めさせねばならない。しかしあなたは批判したり、非難したりしてはならない。魂の傷をとり扱うには、最も神経の行き届いた接触と、こまかい感情とが必要である。カルバリーで苦難を受けられたお方から出ている愛だけがこれに役立つのである。もしうまく行けば、「そのたましいを死から救い出し、かつ、多くの罪をおおう」ことができるということをおぼえて、やさしい憐れみの思いをもって、兄弟と兄弟の間で解決しなさい（ヤコブ 5：20）。

しかしこうした努力さえ役に立たないことがある。そうしたら、「ほかにひとりふたりを、一緒に連れて行きなさい」とイエスは言われた（マタイ 18：16）。これらの人たちの力を合わせれば、最初の人の力では成功しなかったところに、勝利が得られるかも知れない。彼らは問題の当事者ではないので、公平に行動しやすい。この点彼らの忠告は、過失を犯している者にとって一層大きなききめがある。 もしその人が、彼らの言うことをきかなければ、その時はじめて、問題を信者全体の前に持ち出すべきである。教会員は、過失を犯している者が立ち直るように、キリストの代表者として心を合わせて祈り、愛情をもって嘆願しなければならない。聖霊は、しもべたちを通して語り、さまよっている者に神に帰るように訴える。使徒パウロは、聖霊によって語り、「神がわたしたちをとおして勧めをなさるのであるから、.....そこで、キリストに代って願う、神の和解を受けなさい」と言っている（Ⅱコリント 5：20）。この共同の申し入れをこばむ者は、自分とキリストとをつないでいるきずなをたち切り、教会のまじわりから離れたのである。だから、イエスは、「その人を異邦人または取税人同様に扱いなさい」と言われた（マタイ 18：17）。しかし彼を神の慈悲から断たれたものとみなしてはならない。以前の兄弟たちは、彼を軽蔑したり、無視したりしないで、

キリストがご自分の檻（おり）に入れようといまだに努力しておられる失われた羊として、彼をやさしく同情をもってとり扱わねばならない。

過失を犯した者のとり扱いについてのキリストの教えは、モーセを通してイスラエルに与えられた教えをもっと具体的にくりかえしたものである。「あなたは心に兄弟を憎んではならない。あなたの隣人をねんごろにいさめて、彼のゆえに罪を身に負ってはならない」（レビ 19：17）。すなわち過失や罪を犯している人を改心させるようにとキリストがお命じになった義務をおこたる者は、共にその罪にあずかるというの である。阻止できたかも知れない悪については、われわれ自身がその行為に罪があるかのようにわれわれに責任があるのである。

しかしわれわれが悪を示すのは、その悪を行った本人に対してである。われわれは、自分たちの間で、それを論議や批判の材料にしてはならない。それが教会に発表されたあとであっても、われわれはそれを他人にくりかえす自由はない。クリスチャンの非行が知られることは、未信者の世界につまずきを与えるだけである。また、われわれ自身もこうしたことにいつまでもかかわりあっていると害を受けるだけである。なぜなら、見ることによってわれわれも変えられるからである。われわれが 1 人の兄弟のあやまちをなおそうとする時、キリストのみたまはできるだけその兄弟を兄弟たちの批判からさえ守るように、ましてや未信者の世界の非難から兄弟を守るようにわれわれをみちびかれる。われわれ自身あやまちを犯しがちで、キリストの憐れみとゆるしが必要である。われわれがキリストにわれわれをとり扱っていただきたいと望む通りに、われわれもお互いをとり扱うようにと、キリストは命じておられる。

「あなたがたが地上でつなぐことは、天でも皆つながれ、あなたがたが地上で解くことは、天でもみな解かれるであろう」（マタイ 18：18）。あなたがたは天の大使として行動しているのであって、あなたがたの働きの結果は永遠に続くのである。しかしわれわれは、こ の大きな責任を 1 人で負っているのではない。キリストのみことばに真心から従うところにはどこでもキリストが住まれる。キリストは、教会の集会の中におられるだけでなく、どん なに小人数でも、弟子たちがキリストのみ名によって集まるところにおられる。キリストは、

「もしあなたがたのうちのふたりが、どんな願い事についても地上で心を合わせるなら、天にいますわたしの父はそれをかなえて下さるであろう」と言われる（マタイ 18：19）。 イエスは、「天にいますわたしの父」と言われることによって、ご自分が人性によって弟子たちと試練を共にする者として彼らにつながっておられ、また弟子たちの苦難に同情しておられると同時に、神性によって限りない神のみ座につながっておられることを、彼らに気づかせられる。何というすばらしい保証であろう。天使たちは失われた者を救うために人間と同じ心になってほねおっている。こうして、魂をキリストに引きよせるために、天のすべての力が人間の能力と結合させられるのである。

第 49 章仮庵かりいおの祭り

ユダヤ人は 1 年に 3 回、宗教上の目的のためにエルサレムに集まるように要求されていた。雲の柱におおいかくされた中から、イスラエルの目に見えない指導者キリストが、こうした集会について指示をお与えになったのであった。ユダヤ人の捕囚のあいだは、そうした集会を開くことはできなかったが、民が故国に帰った時、こうした記念行事の遵守がもう 1 度始まった。こうした記念祭によって、民が心に神を思い起こすようにというのが神のご計画であった。しかし少数の例外を除いて、祭司や国民の指導者たちは、この目的を見失っていた。こうした国民的な集りを定め、その意義を理解しておられたキリストは、それがゆがめられているのをごらんになった。 仮庵の祭りは 1 年の最後の集会であった。この時に民が神の恵みと憐れみとを反映するようにというのが神のご計画であった。全地は神のみちびきの下にあって、その祝福を受けていた。昼も夜も、神の見守りがつづいた。太陽と雨が地に産物を生じさせた。パレスチナの谷と野から、収穫が集められた。オリーブの実をもいで、貴重な油がびんに貯えられた。なつめやしは収穫を生じた。紫色のぶどうの房は酒ぶねの中で踏まれた。

祭りは 7 日間つづき、その祝いのために、パレスチナの住民は、ほかの国々からやってきた多くの人たちとともに、家を離れてエルサレムへやってきた。遠くから近くから、人々は、手に喜びのしるしをたずさえてやってきた。老人も若者も、金持ちも貧しい者もみな、恵みをもって年の冠とし、その道にあぶらをしたたらせてくださった神への感謝の贈り物として、何か献げ物を持参した（詩篇 65：11 参照）。見た目に美しく、国をあげての喜びをあらわすようなあらゆるものが森から持ってこられて、都は美しい森林のように見えた。

この祭りは、収穫の感謝だけでなく、神が荒野のイスラエル人を守ってくださった記念でもあった。彼らの天幕生活を記念して、イスラエル人は、この祭りの間中緑の木の枝でつくった仮小屋に住んだ。こうした仮小屋が町の通りや、宮の庭や屋上などに造られた。エルサレムの周囲の山や谷にも、こうした木の葉の茂った住居がちらばっていて、人々でにぎやかにみえた。 礼拝者たちは、聖歌と感謝の祈りでこの祭りを祝った。祭りの少し前に、贖罪

（しょくざい）の日があった。この時に、民は罪を告白したのち天とやわらいだことを宣告された。このようにして、祭りを喜び楽しむために道が備えられた。「主に感謝せよ、主は恵みふかく、そのいつくしみはとこしえに絶えることがない」との歌声が誇らしげにわきあがると、あらゆる種類の音楽が、ホサナの叫びにまじって、声をそろえてうたわれるこの歌の伴奏をするのであった（詩篇 106：1）。宮はこの全国的なよろこびの中心であった。ここではいけにえをささげる儀式が盛大に行われた。ここではまたレビ人の合唱隊が聖なる建物の白い大理石の石段の両側に整列して、賛美歌礼拝を指導した。礼拝者たちの群れは、しゅろや、てんにんかの枝を振りながらその調べに和し、合唱をひびかせた。するとその歌の調べにふたたび遠くや近くの歌声が和し、ついにはまわりの山々が、賛美の歌声にひびきわたるのであった。

夜になると、宮とその庭にはともし火があかあかとともった。音楽、打ち振られるしゅろの枝、ホサナの歓声、大群衆の流れ、その人々の上を照しているつりランプの光、祭司たちの盛装、儀式の荘厳さなどが一つになって、その光景は、見る者に深い印象を与えた。しかしこの祭りの中で、最も印象的な儀式で、しかもまた最も大きな喜びを呼び起こしたものは、荒野に滞在していた時の一つの出来事を記念する儀式であった。 初日の夜明けに、祭司たちが銀のラッパで長く鋭い音と、これに応ずるラッパを吹き鳴らすと、仮小屋から人々の歓喜の叫びが、丘を越え谷を渡ってひびき渡り、祭りの日を歓迎した。次に祭司は、ケデロン川の流れから 1 びんの水をくみとってそれを高くかかげ、ラッパの鳴り渡る中を、音楽にあわせてゆっくりと歩調をとり、その間に「エルサレムよ、われらの足はあなたの門のうちに立っている」と詠唱しながら、宮の広い石段をのぼって行った（詩篇 122：2）。

祭司は、その 1 びんの水を、祭司の庭の中央にある祭壇のところへ持って行った。ここには銀の水盤が二つあって、その各々のそばに祭司が立っていた。その 1 びんの水は一方の水盤にそそがれ、もう一つの水盤には 1 びんの酒がそそがれた。両方の水盤の中味は、ケデロン川につながっている管を通って、死海に流れ込むようになっていた。この奉納された水は、神のご命令によって岩からほとばしり出てイスラエルの民のかわきをいやした泉を象徴

していた。すると「主なる神はわが力、わが歌」「あなたがたは喜びをもって、救の井戸から水をくむ」との歓喜の歌がわき起った（イザヤ 12：2、3）。

ヨセフの息子たちは、仮庵の祭りに出る用意をしている時、キリストの様子に祭りに出られる無配がないことに気がついた。彼らは心配しながらイエスを見守っていた。ベテスダで病人をいやされてから、イエスは、国民的な集りに出ておられなかった。エルサレムの指導者たちとの無用なまさつを避けるために、イエスはご自分の働きをガリラヤに限っておられた。イエスが大事な宗教的な集りを無視しておられるようにみえることと、祭司たちとラビたちがイエスに敵意を示していることとが、イエスの周囲の人々や、イ　エスご自身の弟子たちと肉親の者たちにとってさえ、当惑の種であった。イエスは、神の律法に従うことが祝　福であるということをこんこんとお教えになったが、ご自身は神がお定めになった奉仕に無　関心であるようにみえた。取税人やそのほか評判のよくない人たちとまじわったり、ラビの　慣習を無視したり、安息日に関する伝統的な規則を勝手に破ったりなど、すべてのことがイ　エスを宗教界の当局と敵対的な立場に立たせているようにみえ、多くの疑問をひき起こした。イエスの兄弟たちは、イエスが国のえらい、学問のある人たちから遠ざかっておられること　はまちがいだと思った。彼らは、この人たちが正しいにちがいない、そしてイエスがそうし　た人たちと敵対的な立場にあることはまちがいだと思った。しかし彼らは、イエスの欠点の　ない生活を目に見、弟子たちの仲間ではなかったが、そのみわざに深く感動していた。イエ　スがガリラヤで人気のあることが、彼らの野心を満足させていた。彼らは、イエスが自ら主　張される通りのお方であることをパリサイ人たちにわからせるような権力の証拠を示される　ようにとまだ望んでいた。イエスがイスラエルの君、メシヤだとしたらどうだろう。彼らは　誇らしい満足をもってこの考えをいだいていた。

彼らは、このことについて非常に熱心だったので、キリストにエルサレムに行かれるようにとしきりにすすめた。彼らは、「あなたがしておられるわざを弟子たちにも見せるために、ここを去りユダヤに行ってはいかがです。自分を公にあらわそうと思っている人で、隠れて仕事をするものはありません。あなたがこれらのことをするからには、自分をはっきりと世にあらわしなさい」と言った（ヨハネ 7：3、4）。この終わりのことばには疑いと不信

が表わされていた。彼らは、イエスが臆病で弱気であるとみていた。もしイエスが、自分はメシヤであるということを知っておられるのだったら、こんなに妙に引込んでばかりいて活動されないのはなぜだろう。もしほんとうにそんな権力を持っておられるのだったら、なぜ大胆にエルサレムへ行って、ご自分の資格を主張されないのだろう。ガリラヤでうわさになっているようなふしぎなわざをエルサレムで行ったらどうだろう。片いなかにかくれて、無知な百姓や漁師のためにあなたの偉大なわざを行っていないで、首都に姿を現わして、祭司たちと役人たちの支持を受け、国民を結合して新しい王国を建てなさいと彼らは言った。

イエスの兄弟たちは、見せびらかしの野心を持っている人たちの心にしばしばみられる利己的な動機から推論した。この精神は世の人々の支配的な精神であった。彼らは、キリストが、この世の王座を求めないで、ご自分が生命のパンであると宣言されたので、腹を立てた。イエスの多くの弟子たちがイエスを捨てた時、彼らは非常に失望した。彼ら自身もまた、イエスのみわざにあらわされていること、すなわちイエスが神からつかわされたお方であるということを認める重荷からのがれるために、イエスから離れた。 「そこでイエスは彼らに言われた、『わたしの時はまだきていない。しかし、あなたがたの時はいつも備わっている。世はあなたがたを憎み得ないが、わたしを憎んでいる。わたしが世のおこないの悪いことを、あかししているからである。あなたがたこそ祭に行きなさい。わたしはこの祭には行かない。わたしの時はまだ満ちていないから』。彼らにこう言って、イエスはガリラヤにとどまって おられた」（ヨハネ 7：6～9）。イエスの兄弟たちは、イエスの歩まれる道を規定して、権 威のある調子でイエスに語った。イエスは、彼らの非難を投げ返し、彼らを自己犠牲的なイ エスの弟子たちと同類にしないで、世の人々と同類にされた。「世はあなたがたを憎み得な いが、わたしを憎んでいる。わたしが世のおこないの悪いことを、あかししているからであ る」とイエスは言われた（ヨハネ 7：7）。世は、その精神において世と同じである者を憎まない。世はそういう人たちを世のものとして愛するのである。

キリストにとって、世は安楽と自己発展の場所ではなかった。キリストは世の権力とその栄光とをつかむ機会をねらっておられなかった。世はこのようなほうびをキリストに提供しなかった。世は、天父がキリストをおつかわしになった場所であった。イエスは、 世の人

々のいのちのために、あがないの大いなる計画を遂行するために、与えられたのであった。イエスは堕落した人類のためにご自分の働きを完成しようとしておられた。だがイエスは、出しゃばったり、危険の中にとびこんだり、危機を早めたりされないのであった。キリストの働きの中の一つひとつの出来事には、時が定まっていた。イエスは忍耐強く待たれねばならなかった。イエスは、ご自分が世の憎しみを受けることを知っておられた。ご自分の働きの結果、ご自分が死なねばならないこともわかっておられた。しかし早まって、身を危険にさらすことは、天父のみこころではないのであった。

キリストの奇跡のうわさは、エルサレムから、ユダヤ人の離散しているところへはどこへでもひろがっていた。イエスは、何か月ものあいだ祭りに出られなかったが、それでもイエスに対する関心はうすれていなかった。世界の各地から、多くの人々が、イエスを見たいという希望をもって、仮庵の祭りにやってきた。祭りの初めに、多くの者がイエスのことをたずねた。パリサイ人たちと役人たちは、イエスを罪に定める機会をみつけたいと望んで、イエスがこられるのを待った。彼らは心配しながら、「彼はどこにいるか」とたずねたが、だれも知らなかった。すべての人の心は、イエスについての思いで占められていた。祭司たちと役人たちを恐れたために、だれもあえてイエスをメシヤとして承認しようとはしなかったが、いたるところで、イエスについて、静かで熱心な議論が聞かれた。多くの者は、イエスを神からつかわされたお方として弁護したが、一方他の者たちは民衆をあざむく者としてイエスを攻撃した。

とかくするうちに、イエスはこっそりエルサレムに到着しておられた。イエスは、四方から都をめざして進んでいる旅人たちを避けるために、めったに人の通らない道をえらばれたのだった。もしイエスが祭りに行く旅人の隊に加わっておられたら、都に入られる時に人　々の注意がイエスに向けられ、イエスに共鳴する民衆のデモのために、イエスに対する当局　の反対が起こったであろう。イエスが１人で旅をされたのは、そうしたことを避けるためであった。　祭りのなかばに、イエスについての興奮が最高潮に達した時、イエスは群衆の目の 前で、宮の庭に入られた。イエスが祭りに出られなかったので、イエスは祭司たちと役人た　ちの権力を恐れているのだと言われていた。人々はみなイエスが姿を現わされたのに驚いた。

だれもが声をひそめた。自分の生命をねらっている強力な敵の真っ只中におけるイエスの態度の威厳と勇気とを見て、みんなは感嘆した。

この大群衆の注目のまととなって、イエスは誰もかつてしたことがないような演説をされた。彼のことばには、イスラエルの律法と制度、またいけにえの儀式や預言者の教えについて、祭司たちやラビたちよりもはるかにすぐれた知識が示された。彼は形式主義と言い伝えの壁を打ち破られた。来世の光景がイエスの前にくりひろげられたようにみえた。目に見えない神を見たお方として、イエスは地上のこと天上のこと、人間のこと、神のことについて、絶対の権威をもって語られた。イエスのみことばは非常にはっきりしていて、人々の心をなっとくさせた。人々は、カベナウムで驚いたように、ふたたびイエスの教えに驚いた。なぜなら「その言葉に権威があった」からである（ルカ 4：32）。イエスは、いろいろな表現を用いて、ご自分が与えるためにこられた祝福をこばむすべての人々に臨むわざわいについて聴衆に警告された。イエスは、ご自分が神のみもとからこられたというあらゆる証拠を示し、彼らを悔い改めにみちびくためにできるかぎりのあらゆる努力を払われた。もしイエスが、そのような不義の行為を彼らにさせないようにおできになるなら、彼はご自分の国民からこばまれ、殺害されることはないであろう。

みんなは律法と預言についてのイエスの知識こ驚いた。人々は、「この人は学問をしたこともないのに、どうして律法の知識をもっているのだろう」と口々に質問した（ヨハネ 7：15）。ラビの学校で学んだ者でなければだれも宗教教師の資格があるものとみなされなかった。イエスとバプテスマのヨハネは、この教育を受けていなかったので、無学の者といわれて いた。イエスとバプテスマのヨハネの教えを聞いた者たちは、2 人が「学問をしたこともないのに、」聖書の知識があることに驚いた。なるほど彼らは、人からは学ばなかったが、天の神が彼らの教師であって、彼らは神から最高の知恵を受けたのであった。

イエスが宮の庭で語られると、人々はうっとりとなった。イエスに最も激しく反対している者さえ、イエスに害を加える力がないことを感じた。その時は、ほかのすべての利害が忘れられた。　来る日も来る日も、イエスは、最後の「祭の終りの大事な日」まで、人々に教えられた（ヨハネ 7：37）。この日の朝になると、人々は長い期間の祭りに疲れをおぼえた。

その時突然、イエスは、宮の庭にひびき渡るような調子で、声を張りあげて言われた。　「だれでもかわく者は、わたしのところにきて飲むがよい。わたしを信じる者は、聖書に書いて　あるとおり、その腹から生ける水が川となって流れ出るであろう」（ヨハネ　7：37、38）。人々の状態がこの訴えを力強いものとした。彼らは次々とくりひろげられる盛んな儀式とお　祭りの場面に参加し、その目は光と色彩にくらみ、その耳ははなやかな音楽をたのしんだが、この儀式の中には始めから終りまで、精神的な欲求に応ずるものや、不滅なものに対する魂　のかわきを満たしてくれるものは何一つなかった。イエスは、いのちの水の泉にきて飲むよ　うにと彼らを招かれた。それは彼らのうちにあって水の井戸となり、わきあがって永遠のい　のちにいたるのであった。

その朝、祭司は、荒野で岩を打ったことを記念する行事をとりおこなった。その岩は、ご自分の死によって、かわいているすべての者に向かって救いの生ける水を流れさせてくださるキリストの象徴であった。キリストのみことばは生命の水であった。集まった群衆の目の前で、キリストは、生命の水が世に流れ出るように打たれるためにご自分を聖別された。サタンは、キリストを打つことによって、いのちの君を滅ぼそうと思ったが、打たれた岩からは生ける水が流れ出た。イエスがこのように人々に語られた時、彼らの心はふしぎなおそれにうちふるえ、多くの者は、サマリヤの女のように、いまにも「わたしがかわくことがな……いように、その水をわたしに下さい」と叫びそうになった（ヨハネ 4：15）。

イエスは魂の欲求を知っておられた。はなやかさや富や名声は心を満足させることができない。「だれでもかわく者は、わたしのところにきて飲むがよい」（ヨハネ　7：37）。金持ちも貧しい者も、身分の高い者も低い者もみな一様に歓迎される。イエスは、重荷を負った心を助け、悲しむ者を慰め、落胆した者に望みを与えると約束しておられる。イエスのみことばを聞いた者の中には、望みを失って嘆いている者や、ひそかな悲しみを心にいだいている者や、やむことのない心のあこがれを世俗の事物と人々の称賛によって満たそうとしている者が多かった。

だが彼らは、これらのものをすべて手に入れた時、自分のほねおりによって到達したものはかわきをいやすことのできないこわれた水槽にすぎないことを知った。はなやかな歓喜

の光景のさなかに、彼らは不満と悲しみのうちに立っていた。「だれでもかわく者は」というその突然の叫びが、彼らを悲しい思いから呼びさました。そしてそれにつづくことばを聞いた時、彼らの心には新しい望みの火がともった。聖霊は彼らの前に象徴を示されたが、ついに彼らはその中に無限の価をもった救いの賜物が提供されているのに気がついた。　かわいた魂に対するキリストの叫びはいまもなお出されており、それはあの祭りの最後の日に宮で　聞いた人々に対するよりももっと強い力でわれわれに訴えている。泉はすべての人のために　開かれている。疲れ果てた人々に、清新な力を与える永遠の生命の水が提供されている。イ　エスはいまもこう叫んでおられる。「だれでもかわく者は、わたしのところにきて飲むがよ　い」。「かわいている者はここに来るがよい。いのちの水がほしい者は、価なしにそれを受　けるがよい」。「わたしが与える水を飲む者は、いつまでも、かわくことがないばかりか、　わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠の命に至る水が、わきあがるであろう」（ヨハネ 7：37、黙示録 22：17、ヨハネ 4：14）。

第 50 章　わなの間で

祭の時エルサレムにおられた間中、イエスは、スパイたちにっきまとわれた。来る日も来る日も、イエスを沈黙させるために新しい計略が試みられた。祭司たちと役人たちは、イエスをわなにかけようと見張っていた。彼らは、暴力によってイエスを阻止しようと、計画していた。しかもそれだけではなかった。彼らはこのガリラヤ人のラビを民衆の目の前でいやしめてやろうと思った。 イエスが祭に姿を現わされた最初の日に、役人たちがみもとにやってきて、イエスは何の権威によって教えておられるのかと聞きただした。彼らは人々の注意をイエスからそらして、イエスが何の権威で教えておられるのかという問題に向け、そのことからさらに自分たちの貫録と権威に人々の注意を向けようと思ったのであった。

「わたしの教はわたし自身の教ではなく、わたしをつかわされたかたの教である。神のみこころを行おうと思う者であれば、だれでも、わたしの語っているこの教が神からのものか、それとも、わたし自身から出たものか、わかるであろう」と、イエスは言われた（ヨハネ 7：16、17）。あらさがしをするこの連中の質問に対して、イエスは、そのあらさがしに答えないで、魂の救いにとって大事な真理を示すことによって、これに応じられた。真理を感知し、認識することは、頭よりも心の問題であると、イエスは言われた。真理は魂に受け入れられねばならない。それは意思の服従を要求する。もし真理を理性だけで納得することができたら、それを受け入れるのに誇りは邪魔にならないであろう。しかし真理は、心のうちにおける恵みの働きを通して受け入れられるのである。そして、その受け入れは、神のみたまによって示される一切の罪を放棄することにかかっている。

真理を受け入れるように心が開かれ、真理の原則に反する一切の習慣と行為を良心的にやめるのでなければ、人はどんなに真理の知識を得ることのできる恵まれた立場にあっても、それは何にも役にたたない。神のみこころを知り、これを行いたいというまじめな願いをもって神に屈服する人々に、真理は彼らを救う神の力として示される。こういう人々は、神のために語る人と、ただ自分の考えで語る人とを区別することができる。パリサイ人は、彼らの意思を神のみこころの側に置かなかった。彼らは真理を知ろうとつとめないで、これを言

いのがれる何らかの口実をさがそうとしていた。だから彼らはキリストの教えがわからないのだと、キリストは示された。

キリストはいま真の教師と欺瞞者とを区別する方法をお示しになった。「自分から出たことを語る者は、自分の栄光を求めるが、自分をつかわされたかたの栄光を求める者は真実であって、その人の内には偽りがない」（ヨハネ　7：18）。自分自身の栄誉を求める者は、自分の考えで語っているにすぎない。利己的な精神は、その根源を明らかにしている。しか　しキリストは、神の栄えを求めておられた。イエスは神のみことばを語られた。このことが、真理の教師としてイエスの権威の証拠であった。　イエスは、ラビたちの心を読まれたことを示すことによって、ご自分の神性の証拠を彼らに示されたベテスダでのいやしののち、彼ら　はずっと、イエスの死をたくらんできた。こうして彼らは、律法を擁護していると口では言　いながら、老の律法を自ら破っていた。「モーセはあなたがたに律法を与えたではないか。　それだのに、あなたがたのうちには、その律法を行う者がひとりもない。あなたがたは、な　ぜわたしを殺そうと思っているのか」とイエスは言われた（ヨハネ 7：19）。

このことばは、ラビたちがまさにとび込もうとしている破滅の穴を光のひらめきのように、彼らに示した。一瞬、彼らは恐怖に満たされた。彼らは、自分たちが限りない力の神と争っていることを知った。しかし彼らは、警告を受け入れようとしなかった。民衆に対 する勢力を維持するために、彼らは殺害計画をかくしておかねばならない。イエスの質問をそらして、彼らは、「あなたは悪霊に取りつかれている、だれがあなたを殺そうと思っているものか」と叫んだ（ヨハネ 7：20）。彼らは、イエスのふしぎなわざは、悪霊にそそのかされたものだとほのめかした。 このほのめかしに、キリストは注意を払われなかった。イエスはつづいて、ベテスダでのいやしの働きが安息日の律法と一致していること、またユダヤ人自身の律法の解釈によって正当なものであることを示された。「モーセはあなたがたに割礼を命じたので、……あなたがたは安息日にも人に割礼を施している」と、イエスは言われた（ヨハネ 7：22）。律法によれば、どの子も 8 日目に割礼を受けさせねばならない。もしその定められた日が安息日にあたっても、この儀式を行わねばならない。ましてや「安息日に人の全身を丈夫にしてや」ることは律法の精神に一致していなければならない（ヨハネ　7：

23）。そこでイエスは、「うわべで人をさばかないで、正しいさばきをするがよい」と彼らを戒められた（ヨハネ 7：24）。

役人たちは沈黙させられた。すると多くの人々は、「この人は人々が殺そうと思っている者ではないか。見よ、彼は公然と語っているのに、人々はこれに対して何も言わない。役人たちは、この人がキリストであることを、ほんとうに知っているのではなかろうか」と叫んだ（ヨハネ 7：25、26）。

エルサレムに住んでいて、キリストに対する役人たちの陰謀を知らないことはなかった聴衆の中には、抵抗できない力によってキリストにひきつけられている者が多かった。彼らは、イエスが神のみ子であるという確信を強く感じさせられた。だがサタンはすぐに疑いを起こそうとするのであった。メシヤとその来臨について、彼ら自身のまちがった考え方によって、疑いへの道が備えられていた。キリストはベツレヘムにお生まれになるが、しばらくするとその姿が見えなくなり、2 度目に姿を現わされた時には、だれも彼がどこからこられたかを知らないと一般に信じられていた。メシヤは人間から生まれるのではないと主張する人たちが少なくなかった。またメシヤの栄光についての民衆の観念がナザレのイエスにあてはまらなかったので、多くの者は、「わたしたちはこの人がどこからきたのか知っている。しかし、キリストが現れる時には、どこから来るのか知っている者は、ひとりもいない」との暗示に注意を払った（ヨハネ 7：27）。

このように彼らが疑いと信仰の間を動揺していると、イエスは、彼らの思いを取りあげて、こうお答えになった、「あなたがたは、わたしを知っており、また、わたしがどこからきたかも知っている。しかし、わたしは自分からきたのではない。わたしをつかわされたかたは真実であるが、あなたがたは、そのかたを知らない」（ヨハネ 7：28）。彼らは、キリストの生まれがどうあるべきかについて知っていると主張したが、しかしそのことについてまったく無知であった。もし彼らが神のみこころに一致した生活をしていたら、彼らは、神のみ子が彼らにあらわされた時にみ子を知ったであろう。 聴衆は、キリストのみことばを理解しないではいられなかった。それは明らかに何か月も前にイエスがサンヒドリンの議員達の前でご自分を神のみ子と宣言された時の主張のくりかえしであった。役人たちは、その時

イエスの死をたくらんだように、いままたイエスを捕らえようとした。しかし彼らは目に見えない力にさまたげられた。その力は彼らの怒りを制限して、「ここまで来てもよい、越えてはならぬ」と彼らに言った（ヨブ 38：11）。

民衆の中にはイエスを信ずる者が多くいて、彼らは、「キリストがきても、この人が行ったよりも多くのしるしを行うだろうか」と言った（ヨハネ　7：31）。パリサイ人の指導者たちは、事の成り行きを心配して見守っていたが、群衆の中に共鳴の表情を見てとった。彼　らは急いで祭司長たちのところへ行って、イエスを捕らえる計画をたてた。しかし彼らは、　イエスが 1 人でおられる時に捕らえるように手はずをきめた。なぜなら人々の目の前でイエスを捕らえる勇気がなかったからである。ふたたびイエスは、彼らの意図を見抜いておられ　ることを明らかにされた。「今しばらくの間、わたしはあなたがたと一緒にいて、それから、わたしをおつかわしになったかたのみもとに行く。あなたがたはわたしを捜すであろうが、　見つけることはできない。そしてわたしのいる所に、あなたがたは来ることができない」と　イエスは言われた（ヨハネ 7：33、34）。

まもなくイエスは、彼らのあざけりと憎しみのとどかないところへ避難されるであろう。彼は天父のみもとにのぼって、ふたたび天使たちにあがめられるお方となられるであろう。そこへはキリストの殺害者たちは決して行くことができないのである。　ラビたちは冷笑して言った、「わたしたちが見つけることができないというのは、どこへ行こうとしているのだ　ろう。ギリシャ人の中に離散している人たちのところにでも行って、ギリシャ人を教えよう　というのだろうか」（ヨハネ　7：35）。このあらさがしをする連中は、自分たちの嘲笑のことばの中にキリストの使命が表現されていようとは夢にも思わなかった。服従せずに反抗す　る民に、イエスは、終日その手をさしのべておられた。しかしイエスは、彼を求めない者た　ちに見いだされ、彼をたずねない者に、ご自分を現わされるのであった（ローマ　10：20、21 参考）。

イエスが神のみ子であることを確信した多くの者たちが、祭司たちとラビたちの偽りの議論でまちがった方向へ導かれた。これらの教師たちは、メシヤに関する預言、すなわちメシヤは、「シオンの山およびエルサレムで統べ治め、かつその長老たちの前にその栄光をあ

らわされる」また「海から海まで治め、川から地のはてまで治める」という預言をくりかえして、大きな影響を与えていた（イザヤ 24：23、詩篇 72：8）。そして彼らは、ここにえがかれている栄光と、イエスのみすぼらしい外観とを軽蔑的に比較した。預言のことばそのものが、まちがいを是認するように悪用された。もし人々が自分で正直にみことばを研究していたら、彼らはまちがった方向へ導かれなかったのである。イザヤ 61 章には、キリストが実際にされたような働きをされるということが証明されている。53 章には、この世においてキリストがこばまれ、苦難を受けられることが示されており、59 章には祭司たちとラビたちの性格がえがかれている。

神は人々が不信を捨てるように強制されない、彼らの前には光と闇、真理と誤謬がある。どちらを受け入れるかを決定するのは彼ら自身である。人間の心には善と悪とを区別する能力がさずけられている。神は、人々が衝動的に決定しないで、聖句と聖句をくらべ、重要な証拠によって決定するように計画しておられる。もしユダヤ人が偏見を捨てて、書かれている預言をイエスの生活の特徴となっている事実とくらべてみたら、彼らは預言とこのいやしいガリラヤ人の生活と奉仕におけるその成就との間に美しい調和を認めたであろう。　今日も多くの者が、昔のユダヤ人と同じようにだまされている。宗教教師たちは、彼ら自身の理解　と言い伝えの光に照して聖書を読み、人々は、自分で聖書をさぐって真理が何であるかを自　分で判断しようとしない。彼らは、自分の判断を放棄して、自分の魂を指導者たちにまかせ　る。神のみことばを説き、これを教えることは光をゆきわたらせるために神がお定めになっ　た方法の一つである。しかしわれわれは、どんな人の教えも聖書に照して調べてみなければ　ならない。真理を知ってこれに従いたいとの望みをもって聖書を祈りのうちに研究する者は　だれでも、神からの光を受ける。彼は聖書を理解する。「神のみこころを行おうと思う者で　あれば、だれでも、わたしの語っているこの教が……わかるであろう」（ヨハネ 7：17）。

祭の最後の日に、祭司たちと役人たちからつかわされた下役どもは、イエスを捕らえないで帰ってきた。彼らは「なぜ、あの人を連れてこなかったのか」と腹立たしげに問われた。すると彼らは、厳粛な顔をして、「この人の語るように語った者は、これまでにありませんでした」と答えた（ヨハネ 7：45、46）。 彼らの心はかたくなだったが、イエスのみことば

によってやわらげられたのであった。イエスが宮の庭で話しておられる間、彼らはそばをうろついていて、何かイエスに反対するきっかけをつかもうと待ってい　た。しかし聞いているうちに、彼らは自分たちがつかわされた目的を忘れた。彼らはわれを忘れた人間のように立　っていた。キリストは、彼らの魂にご自分をお示しになった。彼らは祭司たちと役人たちが　見ようとしないもの――神性の栄光にあふれている人性を見た。彼らはこの思いに満たされ、イエスのみことばに感動して帰ってきたので、「なぜ、あの人を連れてこなかったのか」と　いう質問に対して、「この人の語るように語った者は、これまでにありませんでした」と答　えることしかできなかった。

祭司たちと役人たちも、初めてイエスの前に出た時、同じように確信したのだった。彼らの心は深く感動し、この人の語るように語った者はこれまでになかったとの思いに迫られた。しかし彼らは、聖霊による確信をおし殺した。いま、彼らは、律法を執行する立場にある者までが、あの憎むべきガリラヤ人の影響を受けたことを怒って、「あなたがたまでが、だまされているのではないか。役人たちやパリサイ人たちの中で、ひとりでも彼を信じた者があっただろうか。律法をわきまえないこの群衆は、のろわれている」と叫んだ（ヨハネ 7:47～49）。

真理のことばが語られると、人々はめったに、「それは本当だろうか」とたずねないで「それはだれから支持されているだろうか」とたずねる。大衆は、それを受け入れる人の数で評価する。「学者や宗教界の指導者たちの中には信じている者があるだろうか」という質問がいまでもきかれる。キリストの時代と同じように、今日も人々は真の信心に対して好意を示さない。彼らはあいかわらず永遠の富をなおざりにして、地上の幸福を熱心に求めている。多数の人たちがそれを受け入れようとしないとか、世のえらい人たちや宗教界の指導者たちさえそれを受け入れないということは、真理に反対する論拠とはならない。ふたたび祭司たちと役人たちはイエスを捕らえる計画をたて始めた。もし彼をこれ以上自由にしておいたら、彼は民衆をこれまで認められていた指導者たちから引き離すであろう。したがってただ一つの安全な道は、ただちに彼を沈黙させることであると彼らは主張した。議論が最高潮に達した時、彼らは突然さまたげられた。ニコデモが、「わたしたちの律法によれば、まず

その人の言い分を聞き、その人のしたことを知った上でなければ、さばくことをしないのではないか」と質問したのである（ヨハネ 7：51）。会議は沈黙に陥った。ニコデモのことばが彼らの良心を打ったのである。弁明をゆるさないで人を罪に定めることはできなかった。高慢な役人たちがだまりこんだまま、あえて正義のために口を開いたニコデモをみつめたのはそうした理由からばかりではなかった。彼らは自分たちの仲間の 1 人がイエスをかばうためにことばを出すほどその品性に深い印象を受けていることに驚き、そしてくやしがった。驚きからわれに返ると、彼らは、ニコデモに鋭い皮肉を浴びせて言った、「あなたもガリラヤ出なのか。よく調べてみなさい、ガリラヤからは預言者が出るものではないことが、わかるだろう」（ヨハネ 7：52）。

だがこの抗議の結果、会議の進行はとまってしまった。役人たちは、彼らの意図を実行して、聴聞なしにイエスを罪に定めることができなかった。一時は敗北して、「人々はおのおの家に帰って行った。イエスはオリブ山に行かれた」（ヨハネ 7：53、8：1）。 都の騒ぎと混乱を離れ、熱心な群衆と不信実なラビたちからのがれて、イエスは静かなオリブ山へ向かわれた。イエスはそこで神とただ 1 人になることがおできになった。しかし朝早く、イエスは宮に引き返し、人々がまわりに集まると、腰をおろして彼らにお教えになった。 イエスの話はすぐにさまたげられた。パリサイ人と律法学者の 1 群が、恐怖におびえた女をひっぱってイエスに近づき、はげしく熱心な声で、この女が第 7 条の戒めを犯したことを責めた。彼らは、女をイエスの前におしやると、イエスに向かって偽善的な敬意を示しながら、「モーセは律法の中で、こういう女を石で打ち殺せと命じましたが、あなたはどう思いますか」と言った（ヨハネ 8：5）。

彼らの敬虔のよそおいの下には、イエスの破滅をたくらむ深い陰謀がかくされていた。彼らは、イエスが どんな決定をくだされるにせよ、彼を非難するチャンスをみつけることができると考え、イエスを罪に定めるのにこの機会をとらえたのであった。もしイエスがこの女を無罪とされたら、モーセの律法を軽んじているという非難を受けられるだろう。もしこの女が死に値すると宣告されたら、イエスは、ローマ人にのみ属している権威を自分がとられたといってローマ人に対して訴えられるであろう。 イエスはしばらくその光景――恥ずか

しさにうちふるえている被害者と人間的な憐れみの情さえないこわい顔つきをした高官たちとをながめておられた。けがれのないイエスの純潔な心はその光景にすくんだ。この問題がどんな目的で自分のところへ持ち込まれたかを、イエスはよくご存知だった。イエスはみ前にいる一人一人の心を読み、その品性と経歴を知っておられた。正義の擁護者を気取っているこれらの人たちは、イエスをわなにかけるために自分たちでこの被害者を罪におとし入れたのだった。イエスは、彼らの質問を聞いた様子をなさらずに、かがみこんで、目をじっと地面にそそぎ、土の上に何か書き始められた。

イエスがぐずぐずして無関心な様子をしておられるのにがまんができなくなって、非難者たちは、そばへ近より、この問題にイエスの注意を促した。だが彼らの視線が、イエスの目の方向にそって、その足下の地面に落ちると、彼らの顔色が変った。そこには、彼らの目の前に、彼ら自身の生活の罪の秘密が書かれていた。見物していた人々は、彼らの表情が急にかわったのを見て、いったい彼らが何を見てそんなに驚き恥じているのかを知ろうと進みよった。　このラビたちは、口では律法を敬うと言っているにもかかわらずこの女を告発するのに律法の条項を無視していた。彼女を告発するのは夫の義務であって、不義の当事者たちは同等に罰を受けるのであった。この告発者たちの処置はまったく権限のないものであった。しかしイエスは、彼らの立場でこれに応じられた。罰として石で打つ場合には、その証人が最初に石を投げねばならないことが律法に明示されていた。そこで、イエスは立ちあがって、陰謀をたくらんでいる長老たちに目をそそぎ、「あなたがたの中で罪のない者が、まずこの女に石を投げつけるがよい」と言われた（ヨハネ 8：7）。そしてまた身をかがめて、地面にものを書きつづけられた。　イエスは、モーセを通して与えられた律法を無視することも、ま たローマの権威を侵害することもされなかった。告発者たちは敗北した。いま聖潔をよそお　った彼らの衣は引きはがされ、彼らは限りない純潔そのものであられるお方の前に、不義と　罪に定められて立っていた。彼らは自分たちの生活のかくれた不義が群衆の前にさらけ出さ　れはしないかとふるえあがった。そして 1 人ずつ、頭をたれ、目を伏せて、被害者を同情深い救い主といっしょに残したまま、こそこそと立ち去った。

イエスは、立ちあがって、女の方を見て言われた、「『女よ、みんなはどこにいるか、あなたを罰する者はなかったのか』。女は言った、『主よ、だれもございません』。イエスは言われた、『わたしもあなたを罰しない。お帰りなさい。今後はもう罪を犯さないように』」（ヨハネ 8：10、11）。

女は、恐怖にふるえながらイエスの前に立っていた。「あなたがたの中で罪のない者が、まずこの女に石を投げつけるがよい」と言われたイエスのことばは、彼女には死刑の宣告のように聞こえた。彼女は目をあげて救い主の顔を見る勇気もなく、だまって自分の運命を待った。彼女は告発者たちが一言もいわずあわてて立ち去るのを見で驚いた。すると「わたしもあなたを罰しない。お帰りなさい。今後はもう罪を犯さないように」との望みのことばが彼女の耳にとびこんできた（ヨハネ　8：11）。女の心はやわらいだ。彼女はイエスの足下に身を投げ、感謝に満ちた愛のあまり、すすり泣きながら、にがい涙とともに自分の罪を告白した。

これは彼女にとって新しい生活、すなわち神の奉仕にささげられる純潔で平和な生活の始まりであった。この堕落した魂を立ち直らせることによって、イエスは、最も苦しい肉体の病気をいやすよりももっと 大きな奇跡を行われた。イエスは、永遠の死にいたる心の病気をなおされたのである。悔い改めたこの女は、キリストの最も忠実な信者の 1 人となった。自己犠牲的な愛と奉仕をもって、彼女は自分をゆるしてくださったイエスの憐れみに報いた。 この女をゆるし、もっとよい生活をするように励ましておやりになったイエスの行為を通して、イエスのご品性は完全な義の美しさに輝いている。イエスは、罪を軽く見たり、不義の意識を弱めたりはされないが、罪に定めようとしないで、救おうとされる。世の人たちは、過失を犯しているこの女を軽蔑し嘲笑することしかしなかった。だがイエスは、慰めと望みのことばを語られる。罪のないお方は、罪人の弱さを憐れみ、彼女に助けの手をさしのべられる。偽善的なパリサイ人は攻撃するが、イエスは、彼女に「お帰りなさい。今後はもう罪を犯さないように」と命じられる（ヨハネ 8：11）。

過失を犯している者たちに目をそむけ、彼らが堕落の道を進むのをとめもしないで放っておくのは、キリストの弟子ではない。自分が先頭に立ってほかの人たちを非難し、律法に

照らして彼らを処断するのに熱心な人々が、自分自身の生活においては相手よりももっと罪深い場合がしばしばある。人間は罪人を憎みながら、一方では罪を愛する。キリストは罪を憎まれるが、罪人を愛される。これがキリストに従うすべての者の精神である。クリスチャンの愛はいつも、人を非難するのに遅く、悔い改めをみとめるのに早く、人をゆるし、励まし、さまよっている者を聖潔の道に歩ませ、彼の足をそこにしっかりとどめるようにするのである。

第 51 章　命の光

「イエスは、また人々に語ってこう言われた、『わたしは世の光である。わたしに従って来る者は、やみのうちを歩くことがなく、命の光をもつであろう』」（ヨハネ 8：12）。 イエスは、このことばを語られた時、仮庵の祭の儀式に特に関係のある宮の庭におられた。この庭の中央には二つの高い台が立っていて、大きなランプがのっていた。夕べのいけにえのあとで、全部のランプに火がともされ、エルサレム中に光を放った。この儀式は、荒野のイスラエルをみちびいた光の柱を記念するものであり、またメシヤの来臨をさし示すものとみなされた。夕方になってランプがともされると、宮の庭は非常な喜びと楽しみの場となった。白髪の人たちも、宮の祭司たちも、民の役人たちも、楽器の音とレビ人の詠唱にあわせて、祭のダンスに加わった。

エルサレムの照明を通して、民は、メシヤが来臨されてイスラエルに光を放たれるという彼らの望みを表明した。しかしイエスにとって、この光景はもっと深い意味があった。宮の輝くランプが彼らのまわりを照したように、霊的な光のみなもとであられるキリストは、世の暗黒を照されるのである。それでもまたこの象徴は不完全であった。キリストがご自分の手で天におかれたあの大いなる光こそ、キリストの使命の栄光をもっと真実にあらわすものであった。 朝であった。太陽はちょうどオリブ山の上にのぼったところで、その光は大理石の宮殿をまぶしく照らし、宮の壁の黄金を輝かしていた。その時イエスは、太陽を指さして、「わたしは世の光である」と言われた（ヨハネ 8：12）。

このことばは、それを聞いた者の 1 人によって、ずっとのちにあの崇高な 1 節となって反響した。「この言に命があった。そしてこの命は人の光であった。光はやみの中に輝いて　いる。そして、やみはこれに勝たなかった。……すべての人を照すまことの光があって、世　にきた」（ヨハネ 1：4、5、9）。またイエスが天にのぼられてからずっとのちに、ペテロも、聖霊のみちびきのもとに書いた時、イエスが用いられた象徴を思い出してこう言っている、
「こうして、預言の言葉は、 わたしたちにいっそう確実なものになった。あなたがたも、夜が明け、明星がのぼって、あなたがたの心の中を照すまで、この預言の言葉を暗やみに輝く

ともしびとして、それに目をとめているがよい」（Ⅱペテロ 1：19）。 神が民にご自身をあらわされる時には、いつも光が神のご臨在の象徴であった。世の初めの創造のみことばによって、光が暗やみに照りいでた。光は、昼は雲の柱に宿り、夜は火の柱となってイスラエルの大軍をみちびいた。光は、シナイ山上で主のまわりにおそるべき威光となって燃えた。光は、幕屋の贖罪所の上にとどまった。光は、ソロモンの神殿の献堂式のときに宮の中に満ちた。光は、天使たちが待ち望んでいた羊飼いたちに救いのおとずれをもたらした時、ベッレヘムの丘の上に輝いた。

神は光である。「わたしは世の光である」とのみことばの中に、キリストは、ご自分が神と一つであられることと、全人類家族に対するご自分の関係とを宣言された。世の初めに「やみの中から光が照りいで」るようにされたのは、キリストであった（Ⅱコリント 4：6）。キリストは、太陽と月と星の光である。キリストは、象徴と型と預言を通してイスラエルを照らした霊的光であった。だがこの光は、ユダヤ国民にだけ与えられたのではなかった。太陽の光線が地のすみずみにまで行きわたるように、義の太陽キリストの光は、一人一人の魂の上に照りいでるのである。 「すべての人を照すまことの光があって、世にきた」（ヨハネ1：9）。世には偉大な教師たち、すぐれた知性を持ち、すばらしい研究をした人たち、その 言論によって思想を刺激し、広い知識の分野を明らかにした人たちがいる。そしてこの人た ちは、人類の指導者また恩人としてあがめられてきた。だが彼らよりも高くぬきん出ておら れるお方がある。「彼を受けいれた者、すなわち、その名を信じた人々には、彼は神の子と なる力を与えたのである。」「神を見た者はまだひとりもいない。ただ父のふところにいる ひとり子なる神だけが、神をあらわしたのである」（ヨハネ 1：12、18）。

われわれは、人類の最も古い記録にまでさかのぼって、世の偉大な教師たちをたどることができる。しかし光なるキリストは、彼らよりも前からおられたのである。太陽系の月や星が太陽の光を反射して輝くように、世の偉大な思想家たちは、彼らの教えが真実であるかぎり、義の太陽キリストの光を反射しているのである。思想のかがやき、知性のひらめきの一つ一つは、世の光なるキリストから出ている。今日、われわれは「高等教育」ということをよく耳にする。真の「高等教育」は「知恵と知識との宝が、いっさい隠されている」キリ

スト、「この言に命があった。そしてこの命は人の光であった」といわれているキリストから授けられる教育である（コロサイ 2：3、ヨハネ 1：4）。「わたしに従って来る者は、やみのうちを歩くことがなく、命の光をもつであろう」とイエスは言われた（ヨハネ 8：12）。

「わたしは世の光である」というみことばによって、イエスはご自分がメシヤであることを宣言された年老いたシメオンは、キリストがその時教えておられた宮の中で、イエスのことを「異邦人を照す啓示の光、み民イスラエルの栄光」であると言った（ルカ 2：32）。シメオンは、このことばによって、どんなイスラエル人もよく知っている一つの預言をイエスに適用していた。聖霊は、預言者イザヤを通してこう宣言された、「あなたがわがしもべとなって、ヤコブのもろもろの部族をおこし、イスラエルのうちの残った者を帰らせることは、いとも軽い事である。わたしはあなたを、もろもろの国びとの光となして、わが救を地の果にまでいたらせよう」（イザヤ 49：6）。この預言はメシヤについて言われたものと一般に理解されていたので、イエスが「わたしは世の光である」と言われた時、人々は、イエスがご自分のことを約束のメシヤであると主張しておられるのだと認めることができた。

パリサイ人や役人たちには、この主張は横柄な出しゃばりに思えた。彼らは、自分たちと同じような人間がこんな主張をするのをゆるしておくことができなかった。彼らは、イエスのことばを無視した様子で、「あなたは、いったい、どういうかたですか」と聞き ただした（ヨハネ 8：25）。彼らは、イエスに自分はキリストであると宣言させたかったのである。イエスの外観とそのわざが民衆の期待とまったくちがっていたので、陰険な敵どもは、イエ スが自分はメシヤであると自ら発表されたら、詐欺師として排撃されるであろうと信じたの であった。

しかし、「あなたは、いったい、どういうかたですか」との彼らの質問に対して、イエスは、「わたしがどういう者であるかは、初めからあなたがたに言っているではないか」とお答えになった（ヨハネ 8：25）。イエスのみことばにあらわれていたことは、そのご品性にもあらわれていた。イエスは、ご自分がお教えになった真理の具体的表現であった。イエスはことばをつづけて言われた、「わたしは自分からは何もせずただ父が教えて下さったま

まを話していたことが、わかってくるであろう。わたしをつかわされたかたは、わたしと一緒におられる。わたしは、いつも神のみこころにかなうことをしているから、わたしをひとり置きざりになさることはない」（ヨハネ 8：28、29）。イエスは、ご自分がメシヤであるとの主張を証明しようとされないで、ご自分が神と一つであることをお示しになった。もし彼らの心が神の愛に向かって開かれていたら、彼らはイエスを受け入れていたであろう。

聴衆の中には、信仰をもってイエスにひきつけられていた者が多かった。彼らに向かって、イエスは言われた、「もしわたしの言葉のうちにとどまっておるなら、あなたがたは、ほんとうにわたしの弟子なのである。また真理を知るであろう。そして真理は、あなたがたに自由を得させるであろう」（ヨハネ 8：31、32）。 このことばがパリサイ人の気にさわった。彼らは、ユダヤ国民が長い間外国の束縛下にあるのを無視して、腹立たしげに叫んだ、「わたしたちはアブラハムの子孫であって、人の奴隷になったことなどは、1 度もない。どうして、あなたがたに自由を得させるであろうと、言われるのか」（ヨハネ 8：33）。悪意の奴隷であり、復讐の思いにこりかたまっているこの人たちの顔をごらんになって、イエスは、悲しげに答えられた、「よくよくあなたがたに言っておく。すべて罪を犯す者は罪の奴隷で ある」（ヨハネ 8：34）。彼らは最悪の種類の束縛下にあった――すなわち悪意に支配されていた。

神に献身しようとしない魂はみな、別の権力の支配下にある。彼は彼自身のものではない。彼は自由を口にするかも知れないが、最もあわれむべき奴隷状態にある。彼の心はサタンの支配下にあるので、真理の美しさを見ることがゆるされない。彼は、自分自身の判断の命令に従っているとうぬぼれているが、実は暗黒の君の意思に従っているのである。キリストは、魂を罪の奴隷の束縛から切り離すためにこられた。「だから、もし子があなたがたに自由を得させるならば、あなたがたは、ほんとうに自由な者となるのである」（ヨハネ 8：36）。「キリスト・イエスにあるいのちの御霊の法則は、」われわれを「罪と死との法則から……解放」するのである（ローマ 8：2）。 あがないの働きに強制はない。外部からの圧力は用いられない。神のみたまの影響下にあって、人はだれに仕えるかを自由に選ぶことができる。魂がキリストに屈服する時に行われる変化の中に、最高の意味の自由がある。罪を追

い出すことは、その魂自身の行為である。なるほどわれわれは、サタンの支配からわが身を解放する力はない。だが罪から解放されたいと望み、非常な必要を感じて、われわれ以外の、そしてわれわれ以上の力を求めて叫ぶ時、魂の能力には聖霊の天来の力が吹きこまれ、その能力は神のみこころを成就することにおいて意思の命令に従うのである。

人間の自由が可能であるただ一つの条件は、キリストと一つになることである。「真理は、あなたがたに自由を得させるであろう」とあるが、キリストがその真理である（ヨハネ 8:32）、罪は、心を弱め、魂の自由を滅ぼすことによってのみ勝利することができる。神に屈服することは、自分自身を回復すること、すなわち人間の真の栄光と威厳とを回復することである。われわれは、神の律法に従うようになったが、それは「自由の律法」である（ヤコブ 2：12）。 パリサイ人は、自分たちはアブラハムの子であると宣言していた。この主張はアブラハムのわざをすることによってのみ立証できるのだと、イエスは彼らにお告げになっ た。

アブラハムの真の子ならば、アブラハムと同じように、神に服従する生活を送るであろう。彼らは、神から与えられた真理を語っておられるお方を殺そうとはしないであろう。ギリストに対して陰謀をくわだてているのだから、ラビたちは、アブラハムのわざをしているとはいえなかった。アブラハムの系図による子孫であるということだけでは、何の価値もなかった。アブラハムと同じ精神を持ち、同じわざをすることにあらわされる霊的関係がないならば、彼らは、アブラハムの子ではなかった。 この原則は、長い間キリスト教界を騒がせた問題、すなわち使徒の継承という問題に同じように重大な関係がある。アブラハムの子孫ということは、名や血統によらず、品性が似ていることで証明された。同じように使徒の継承は、教会の権威を引き継ぐことにあるのではなくて、霊的な関係にあるのである。使徒たちの精神、彼らが教えた信念と真理の教えとを原動力とする生活――これが使徒の継承の真の証拠である。これが人を福音の最初の教師たちの後継者とならせるのである。

イエスは、ユダヤ人がアブラハムの子であることを否定された。「あなたがたは、あなたがたの父のわざを行っている」とイエスは言われた（ヨハネ 8：41）。彼らは嘲笑して、「わたしたちは、不品行の結果うまれた者ではない。わたしたちにはひとりの父がある。そ

れは神である」と答えた（ヨハネ 8：41）。このことばは、イエスの生れについての事情をそれとなく指していて、イエスを信じ始めた人たちのいる前でキリストに打撃を与えるつもりで言われたのであった。イエスは、この卑劣なあてこすりに注意を払わないで、「神があなたがたの父であるならば、あなたがたはわたしを愛するはずである。わたしは神から出た者、また神からきている者であるからだ」と言われた（ヨハネ 8：42）。

彼らのわざは、嘘つきであり殺人者であるサタンとの関係を証拠だてた。そこでイエスは、こう言われた、「あなたがたは自分の父、すなわち、悪魔から出てきた者であって、その父の欲望どおりを行おうと思っている。彼は初めから、人殺しであって、真理に立つ者ではない。彼のうちには真理がないからである。……わたしが真理を語っているので、あなたがたはわたしを信じようとしない」（ヨハネ　8：44、45）。イエスが真理を語られたということ、しかも確信をもって語られたということが、彼がユダヤ人の指導者たちに受け入れられなかった理由であった。自分自身を義人とするこれらの人々を怒らせたのは真理であった。真理は誤謬の欺瞞性をばくろした。真理は、彼らの教えと慣習とを非難したので、歓迎されなかった。彼らは自分たちが誤っていたということをけんそんに告白するよりは、むしろ真理に対して目をつぶっていたかった。彼らは真理を好まなかった。たとえ真理であっても、彼らはそれを望まなかった。

「あなたがたのうち、だれがわたしに罪があると責めうるのか。わたしは真理を語っているのに、なぜあなたがたは、わたしを信じないのか」（ヨハネ 8：46）。3 年の間、イエスの敵どもは、来る日も来る日も、イエスのあとをつけまわして、イエスの品性に何か欠点をみつけようとした。サタンと悪の共謀者たちはイエスを征服しようとねらっていたが、イエスのうちには、彼らに有利な立場を与えるようなものが何もみいだされなかった。悪鬼でさえ、あなたは「神の聖者です」と告白しないではいられなかった（マルコ 1：24）。イエスは、天の目の前で、他世界の目の前で、罪深い人々の目の前で、律法を実行されたイエスは、天使たちと人々と悪鬼たちの前で、「わたしは、いつも神のみこころにかなうことをしている」と語られたが、だれもこれに挑戦するものはなかった。もしこのことばがほかの人の口から語られたのだったら、冒瀆とみなされたであろう（ヨハネ 8：29）。

イエスのうちに何の罪も見いだすことができなかったにもかかわらず、ユダヤ人がイエスを受け入れようとしなかったことは、彼ら自身が神と何のつながりも もっていなかった証拠であった。彼らは、み子のことばのうちに神のみ声を認めなかった。彼らは、自分たちがキリストに審判をくだしていると思っていたが、イエスをこばむことによって、彼らは自分自身に宣告をくだしていたのである。「神からきた者は神の言葉に聞き従うが、あなたがたが聞き従わないのは、神からきた者でないからである」と、イエスは言われた（ヨハネ 8:47）。 この教訓はいつの時代にも真実である。こじつけや、批判が好きで、神のみことばのうちに何か疑問となるようなものをさがしてばかりいる者は、そうすることが思想の自由と鋭い頭脳の証拠であると思っている。彼は、自分が聖書をさばいていると思っているが、事実は自分自身をさばいているのである。彼は、天に始まり永遠に及んでいる真理を理解することができないことをばくろしている。神の義という大いなる山の前にあって、彼の精神はおそれを感じない。彼は棒きれやわらくずをさがすのに忙しく、そのことによって狭い世俗的な性質、すなわち神を理解する能力を急速に失いつつある心をばくろしているのである。心が神の霊感に応じた人は、神についての知識を増すようなものや、品性をきよめ、高めるようなものを求める。花が、明るい光線によって美しい色合いに染まるために太陽に向かって開くように、魂は、天の光がキリストのご品性の恵みによって品性を美しくすることができるように、義の太陽に向かうのである。

イエスは、ユダヤ人の立場とアブラハムの立場との間にいちじるしい相違があることを示し、つづいて言われた、「あなたがたの父アブラハムは、わたしのこの日を見ようとして楽しんでいた。そしてそれを見て喜んだ」（ヨハネ 8：56）。 アブラハムは、約束の救い主を見たいと非常に望んでいた。彼は、自分が死ぬ前にメシヤを見ることができるようにと最も熱心な祈りをささげた。そして彼はキリストを見た。超自然の光が彼に与えられ、彼は、キリストのきよいご品性を認めた。彼はキリストの日を見、そしてよろこんだ。彼は、罪のための天来のいけにえを見せられた。このいけにえについて、彼は、自分の経験を通して実例を与えられていた。「あなたの子、あなたの愛するひとり子イサクを連れて……彼を燔祭としてささげなさい」との命令が彼に与えられた（創世記 22：2）。彼は、いけにえの祭壇

に、約束の息子、――彼の望みの中心であった息子を置いた。それから、神に従うために、ナイフをふりあげて祭壇のわきに待っていると、「わらべを手にかけてはならない。また何も彼にしてはならない。あなたの子、あなたのひとり子をさえ、わたしのために惜しまないので、あなたが神を恐れる者であることをわたしは今知った」という天の声を彼は聞いた（創世記 22：12）。この恐ろしい苦しみがアブラハムに負わされたのは、彼に、キリストの日を見させ、この世に対する神の愛、すなわちこの世を堕落からひきあげるためにひとり子を非常な屈辱的な死に渡されたほどの神の大いなる愛を認めさせるためであった。

アブラハムは、神について、かつて人間に与えられた最高の教訓を学んだ。死ぬ前にキリストを見たいという彼の祈りは答えられた。彼は、キリストを見た。彼は、人間が見ても生きることのできる全部を見たのである。全面的に屈服することによって、彼は自分に与えられたキリストのまぼろしを理解することができた。神は罪人を永遠の滅びから救うためにひとり子をお与えになることによって、人間がなし得るよりももっと大きな、そしてもっとすばらしい犠牲を払おうとしておられるのだということを、彼は示された。

アブラハムの経験は、次の質問に答えるものであった。「わたしは何をもって主のみ前に行き、高き神を拝すべきか。燔祭および当歳の子牛をもってそのみ前に行くべきか。主は数千の雄羊、万流の油を喜ばれるだろうか。わがとがのためにわが長子をささぐべきか。わが魂の罪のためにわが身の子をささぐべきか」（ミカ 6：6、7）。「子よ、神みずから燔祭の小羊を備えてくださるであろう」とのアブラハムのことばと、神がイサクの代りにいけにえを用意されたことを通して、人はだれも自力で罪のあがないをすることができないことが明らかにされた（創世記 22：8）。異教の犠牲制度は全く神に受け入れられない ものであった。父親は息子または娘を罪祭としてささげるべきではなかった。神のみ子だけが世の罪を負うことがおできになるのである。

アブラハムは、自分自身の苦難を通して、救い主の犠牲の使命を見ることができた。だがイスラエルは、彼らの高慢な心にとって面白くないことを理解しようとしなかった。アブラハムにっいて言われたキリストのみことばは、聴衆に何の深い意義も感じさせなかった。パリサイ人たちは、キリストのことばに新しいあげ足とりの理由をみつけただけであった。

彼らは、イエスが狂人であることを証明しようとするかのように、冷笑をもって、「あなたはまだ 50 にもならないのに、アブラハムを見たのか」とやり返した（ヨハネ 8：57）。 イエスは、おごそかな威厳をもって、「よくよくあなたがたに言っておく。アブラハムの生れ　る前からわたしは、いるのである」と答えられた（ヨハネ 8：58）。 たくさんの群衆は、沈黙につつまれた。永遠の存在についての観念を表わすためにモーセに与えられた神のみ名が、このガリラヤのラビによって自分のものとされた。イエスは、ご自分が自力によって存在さ　れるお方、「その出るのは昔から、いにしえの日からである」とイスラエルに約束されたお　方であると宣言された（ミカ 5：2）。

ふたたび祭司たちとラビたちが、イエスは冒瀆者だと叫びたてた。イエスが神と一つであると主張されたために、彼らが騒ぎたててイエスの生命をとろうとしたことが以前にあった。それから数か月後に、彼らは、「あなたを石で殺そうとするのは、よいわざをしたからではなく、神を汚したからである。また、あなたは人間であるのに、自分を神としているからである」とはっきり断言した（ヨハネ 10：33）。イエスが神のみ子であり、また自らそう公言されたために、彼らはイエスを殺すことばかり考えていた。いま人々の中には、祭司たちとラビたちの味方になって、石をとってイエスに投げつけようとする者が多かった。「しかし、イエスは身を隠して、宮から出て行かれた」（ヨハネ 8：59）。

光であられるキリストが暗黒のうちに輝いておられた。しかし「暗黒はこれを悟」らなかった（ヨハネ 1：5･文語訳）。 「イエスが道をとおっておられるとき、生れつきの盲人を見られた。弟子たちはイエスに尋ねて言った、『先生、この人が生れつき盲人なのは、だれが罪を犯したためですか。本人ですか、それともその両親ですか』。イエスは答えられた、『本人が罪を犯したのでもなく、また、その両親が犯したのでもない。ただ神のみわざが、彼の上に現れるためである。』……イエスはそう言って、地につばきをし、そのつばきで、どうをつくり、そのどうを盲人の目に塗って言われた、『シロアム（つかわされた者、の意）の池に行って洗いなさい』。そこで彼は行って洗った。そして見えるようになって、帰って行った」（ヨハネ 9：1～7）。

罪はこの世で罰せられると、ユダヤ人は一般に信じていた。あらゆる苦難は、苦しんでいる本人か、あるいはその両親が何か悪いことをした罰だと考えられていた。なるほどあらゆる苦難は神の律法を犯した結果であるが、この事実は曲解されていた。罪とそのすべての結果の張本人であるサタンは、病気と死は神から出るもの、すなわち罪の故に神が勝手に人に課せられる罰であると人々に考えさせていた。だから何か大きな苦難やわざわいに見舞われた人は、大罪人としてみられるという余計な重荷まで負わされた。 こうしてユダヤ人が、イエスをこばむ道が用意された。「われわれの病を負い、われわれの悲しみをになった」お方が、「打たれ、神にたたかれ、苦しめられたのだ」とユダヤ人からみなされ、彼らはイエスに対して顔をおおった（イザヤ 53：4）。 神はこうしたことを防ぐために教訓をお与えになっていた。ヨブの経歴は、苦難はサタンから与えられ、神が、憐れみの目的をもってそれを支配されるということを示していた。だが、イスラエルは、この教訓がわからなかった。神はヨブの友人たちのあやまちを譴責されたが、ユダヤ人がキリストをこばんだことにその同じあやまちがくりかえされた。

罪と苦難との関係についてのユダヤ人の信念は、キリストの弟子たちのうちにもあった。イエスが、彼らの誤りを正された時、主は、その男の苦難の原因を説明しないで、その結果　をお告げになった。すなわちその苦難の故に神のみわざがあらわされるというのである。「わたしは、この世にいる間は、世の光である」とイエスは言われた（ヨハネ 9：5）。それからイエスは、その盲人の目に泥を塗り、シロアムの池に行って洗わせられた。するとその男の視力が回復した。このようにしてイエスは、弟子たちの質問に実際的な方法でお答えになったが、好奇心から出た質問にはたいていこんな答え方をされた。弟子たちは、だれが罪を犯したとか犯さなかったとかいう質問を議論するのでなく、盲人に視力をお与えになった神の力と恵みを理解するように求められた。どろや、盲人が洗いに行かされた池にいやしの力があったのではなく、その力はキリストのうちにあったことは明らかであった。

パリサイ人たちはそのいやしに驚かないではいられなかった。それでもなお彼らはいままでよりももっと憎しみに満たされた。というのは、この奇跡が安息日に行われたからであった。 その若者の隣人や、彼が盲人であることを前から知っていた人たちは、「この人は、

すわってこじきをしていた者ではないか」と言った（ヨハネ 9：8）。彼らは疑わしげに彼を見た。彼は、目があいたら、顔つきが変って明るくなり、ほかの人のようにみえたからである。人から人へ疑問が伝わった。ある人たちは、「その人だ」と言い、他の人たちは、「あの人に似ているだけだ」と言った。しかしこの大きな祝福を受けた本人が、「わたしがそれだ」と言って、疑問を解決した。そして彼は、イエスについて、また自分がどんな方法でいやされたかについて語った。彼らは、「その人はどこにいるのか」とたずねたが、彼は「知りません」と答えた（ヨハネ 9：9、12）。

そこで彼らは、その男をパリサイ人の会議につれて行った。男はどうやって目が見えるようになったかと、ふたたびたずねられた。「彼は答えた、『あのかたがわたしの目にどうを塗り、わたしがそれを洗い、そして見えるようになりました』。そこで、あるパリサイ人たちが言った、『その人は神からきた人ではない。安息日を守っていないのだから』」（ヨハネ　9：15、16）。パリサイ人たちは、イエスが罪人であって、メシヤではないということを言いたかったのである。彼らは、盲人をいやしたお方が、安息日をつくってそのすべての　義務を知っておられるお方であることを知らなかった。彼らは、安息日を守ることにはふし　ぎなくらい熱心にみえたが、それにもかかわらずその日に殺人を計画していた。だが多くの　者は、この奇跡のことを聞いて非常に心を動かされ、盲人の目をあけたお方がただの人間で　はないことを確信した。イエスは安息日を守られなかったから罪人であるとの非難に対して、彼らは、「罪のある人が、どうしてそのようなしるしを行うことができようか」と言った（ヨハネ 9：16）。

ラビたちは「もう 1 度この盲人に聞いた、『おまえの目をあけてくれたその人を、どう思うか』。『預言者だと思います』と彼は言った」（ヨハネ 9：17）。パリサイ人は、この男は生れつきの盲人ではなかったから目が見えるようになったのだと主張した。彼らはこの男の両親を呼び、たずねて言った、「これが、生れつき盲人であったと、おまえたちの言っているむすこか」（ヨハネ 9：19）。

自分は生れつき盲人であったのに目がみえるようになったのだと断言している当の本人がいるのに、パリサイ人たちは、自分たちの誤りを認めるよりはむしろ自分自身の目で見た

証拠を否定したかった。それほど偏見は根強く、それほどパリサイ人の義はゆがめられていた。

パリサイ人たちにとって一つの望みが残っていた。それはこの男の両親を脅迫することであった。真心をよそおって、彼らは、「それではどうして、いま目が見えるのか」とたずねた（ヨハネ 9：19）。両親はやっかいな問題にまきこまれるのを恐れた。なぜならイエスをキリストと認める者はだれでも「会堂から追い出す」、すなわち 30 日間会堂にはいらせないとい うことが布告されていたからである（ヨハネ 9：22）。この期間中は、違反者の家庭では割礼を施すこともできないし、死者をいたむこともできなかった。だからこの宣告をくだされることは非常なわざわいとみなされていた。もし悔い改めがみられなければ、もっと重い刑罰が加えられた。両親は息子のためになされたすばらしいみわざを通して確信を与えられていたが、それでもこう答えた、「これがわたしどものむすごであること、また生れつき盲人であったことは存じています。しかし、どうしていま見えるようになったのか、それは知りません。また、だれがその目をあけて下さったのかも知りません。あれに聞いて下さい。あれはもうおとなですから、自分のことは自分で話せるでしょう」（ヨハネ 9：20、21）。こうして彼らは責任を全部自分たちから息子へ移した。彼らはあえてキリストを告白しようとしなかった。

パリサイ人たちがおちいっているジレンマ、彼らの質問と偏見、事件の真相に対する彼らの不信などから、群衆、特に一般民衆の目がだんだん開かれてきた。イエスはたびたび人の通っている路上で奇跡を行われ、しかもそのみわざはいつも苦しんでいる者を救う性格のものだった。多くの人々の心にあった疑問は、パリサイ人たちはイエスを詐欺師だと言い張るが、神はそんな人間を通してこのような偉大なみわざをされるだろうかということであった。この論争は両者の間で非常に熱してきていた。 パリサイ人たちは、自分たちが、イエスによってなされたみわざを宣伝していることに気がついた。彼らは奇跡を否定することができなかった。盲人は喜びと感謝に満ちていた。彼は、自然界のすばらしいものを目に見、地と空の美しさを見て喜びに満たされた。彼は、遠慮なく自分の経験を語った。するとまた彼らは、彼をだまらせようとして、「神に栄光を帰するがよい。あの人が罪人であることは、

わたしたちにはわかっている」と言った（ヨハネ 9：24）。あの人がおまえの目を見えるようにしてくれたと 2 度と言うな、おまえの目が見えるようにしてくださったのは神であるというのだった。

盲人は答えて言った、「あのかたが罪人であるかどうか、わたしは知りません、ただ 1 つのことだけ知っています。わたしは目が見えなかったが、今は見えるということです」（ヨハネ 9：25）。 すると彼らは、もう 1 度たずねた、「その人はおまえに何をしたのか。どんなにしておまえの目をあけためか」（ヨハネ 9：26）。彼らは、いろいろなことを言ってこの男を混乱させ、自分はだまされたのだと考えるようにしむけた。サタンと悪天使たちは、パリサイ人のがわにいて、キリストの感化力を打ち消すために彼らの勢力とずるさを人間の理性と結合させた。彼らは、多くの人々の心に強まりつつあった確信をくもらせた。神の天使たちもまたその場にいて、視力を回復してもらった男を力づけた。

パリサイ人たちは、生れつき目が見えない無教育なこの男よりもほかのお方を相手にしなければならないことに気がつかなかった。彼らは、論争している相手のお方を知らなかった。天来の光がこの盲人の魂の奥底にさし込んだ。これらの偽善者たちが彼に信じさせないようにしようとした時、神は、この男の力強く鋭い答によって、彼がわなにおちいるような人間ではないことをお示しになった。「彼は答えた、『そのことはもう話してあげたのに、聞いてくれませんでした。なぜまた聞こうとするのですか。あなたがたも、あの人の弟子になりたいのですか。』そこで彼らは彼をののしって言った、『おまえはあれの弟子だが、わたしたちはモーセの弟子だ。モーセに神が語られたということは知っている。だが、あの人がどこからきた者か、わたしたちは知らぬ』」（ヨハネ 9：27～29）。

主イエスは、この男が経験している苦悩を知っておられ、彼に恵みとことばをお与えになったので、彼はキリストの証人となった。彼がパリサイ人に答えたことばは、質問者たちにとって鋭い譴責であった。彼らは、聖書の解説者、国民の宗教上の指導者であると自称していた。それなのに奇跡を行われるお方が目の前におられても、そのお方の力のみなもとについて、またそのお方の性格と主張について何も知らない と告白した。そこでこの男は言った、「わたしの目をあけて下さったのに、そのかたがどこからきたか、ご存じないとは、不

思議千万です。わたしたちはこのことを知っています。神は罪人の言うことはお聞きいれになりませんが、神を敬い、そのみこころを行う人の言うことは、聞きいれて下さいます。生れつき目が見えなかった者の目をあけた人があるということは、世界が始まって以来、聞いたことがありません。もしあのかたが神からきた人でなかったら、何一つできなかったはずです」（ヨハネ 9：30～33）。

この男は、相手の立場に立って、審問者たちに応じた。彼の議論には答えることができなかった。パリサイ人たちは驚いてしまった。彼らはこの男の鋭い、断固たることばの前にすくんだようになって、だまってしまった。しばらく沈黙がつついた。それから、ふきげんな顔をした祭司たちとラビたちは、この男との接触から汚れでもうつされるかのように、衣をひきよせた。彼らは足のちりを払い、「おまえは全く罪の中に生れていながら、わたしたちを教えようとするのか」とのおどし文句を浴びせた（ヨハネ 9：34）。そして彼らはこの男を破門した。

イエスはこの出来事をお聞きになった。そこでイエスは、そのすぐあとでこの男をみつけて、「あなたは人の子を信じるか」と言われた（ヨハネ 9：35）。 はじめて盲人は、自分を救ってくださった方のお顔を見た。会議の場所では、この男は、両親が困り、当惑しているのを見た。彼は、ラビたちのふきげんな顔を見た。いま彼は、イエスのやさしい、平和な顔つきに目をとめた。すでに彼は、わが身の不利益もかまわずに、イエスが天来の力の代表者であられることを公然と認めていた。そこでいま彼にもっと高い啓示が与えられた。 「あなたは人の子を信じるか」との救い主の質問に、盲人は答えて、「主よ、それはどなたですか。そのかたを信じたいのですが」とたずねた（ヨハネ 9：36）。するとイエスは、「あなたは、もうその人に会っている。今あなたと話しているのが、その人である」と言われた（ヨハネ 9：37）。男は、救い主の足下にひれ伏して主を拝した。彼は肉眼が見えるようになったばかりでなく、さとりの目も開かれたのだった。彼の魂にキリストがあらわされたので、彼は、キリストを神からつかわされたお方として受け入れた。 一群のパリサイ人たちが近くに集まっていたが、彼らをごらんになったイエスの心には、ご自分のことばとみわざの効果にいつもはっきりあらわれる相違が浮んだ。イエスは、「わたしがこの世にきたのは、

さばくためである。すなわち、見えない人たちが見えるようになり、見える人たちが見えないようになるためである」と言われた（ヨハネ 9：39）。キリストは盲人の目を開き、暗黒のうちにある人々に光を与えるためにおいでになった。

彼は、ご自分が世の光であることを宣言しておられたが、いま行われた奇跡は、イエスの使命を証明した。救い主の来臨の時に主を見た人たちは、前の時代の人々が受けたよりも一層深い神のご臨在のあらわれを示された。神についての知識は、もっと完全にあらわされた。しかしこのようにあらわされたことによって、さばきが人々の上にくだっていた。彼らの品性が試みられ、その運命が決定された。 天来の力のあらわれは、この盲人に肉眼の視力と霊的視力とを与えたが、それはまたパリサイ人を一層深い暗黒のうちに残した。聴衆の中のある者たちは、キリストのみことばが自分たちにあてはまると思って、「それではわたしたちも目が見えないのでしょうか」とたずねた（ヨハネ 9：40）。イエスは、「もしあなたがたが盲人であったなら、罪はなかったであろう」と答えられた（ヨハネ 9：41）。もし神が、あなたがたが真理を見ることができないようにされたのだったら、あなたがたの無知に罪はない。しかし今あなたがたは見えると言う。あなたがたは自分は見えると信じて、目の見える唯一の方法をこばんでいる。自分の必要を認めるすべての者のために、キリストは無限の助けをもってこられた。だがパリサイ人たちは、必要を告白しようとしなかった。彼らは、キリストのみもとに行くことをこばんだ。だから彼らは、盲目のままにとり残された。その盲目は、彼ら自 身の罪である。イエスは「あなたがたの罪がある」と言われた（ヨハネ9：41）。

第 52 章　よい羊飼

「わたしはよい羊飼である。よい羊飼は、羊のために命を捨てる。……わたしはよい羊飼であって、わたしの羊を知り、わたしの羊はままた、わたしを知っている。それはちょうど、父がわたしを知っておられ、わたしが父を知っているのと同じである。そして、わたしは羊のために命を捨てるのである」（ヨハネ 10：11、14、15）。 ふたたびイエスは、聴衆のよく知っている事がらについての連想を通して、彼らの心をとらえる道を見いだされた。イエスは、みたまの感化を、つめたい、清新な水にたとえられたことがあった。イエスはまた、ご自分が光であって、自然界にとっても人間にとっても生命とよろこびのみなもとであると言われたことがあった。いまイエスは、美しい田園的な描写をもって、イエスを信ずる者とご自分との関係を表現される。聴衆にとってこれほど見なれた光景はなかったので、キリストのみことばは、この光景を永遠にキリストご自身に結びつけた。弟子たちは、羊の群れを世話している羊飼たちを見ると、救い主の教訓を思い出さないではいられなかった。彼らは、一人一人の忠実な羊飼のうちにキリストを見るのであった。彼らは、たよっている無力な羊の群れの 1 頭 1 頭に、自分自身を見るのであった。

預言者イザヤは、この譬をメシヤの使命にあてはめて、慰めのことばをこう語った。「よきおとずれをシオンに伝える者よ、高い山にのぼれ。よきおとずれをエルサレムに伝える者よ、強く声をあげよ、声をあげて恐れるな。ユダのもろもろの町に言え、『あなたがたの神を見よ』と、……主は牧者のようにその群れを養い、そのかいなに小羊をいだき、そのふところに入れて携えゆき、乳を飲ませているものをやさしく導かれる」（イザヤ 40：9～11）。ダビデは、「主はわたしの牧者であって、わたしには乏しいことがない」と歌った（詩篇 23：1）。

聖霊はまた、エゼキエルを通して、こう言明された、「わたしは彼らの上にひとりの牧者を立てる…彼は彼らを養う。……わたしは、うせたものを尋ね、迷い出たものを引き返し、傷ついた者を包み、弱ったものを強くし……、わたしは彼らと平和の契約を結び……、彼らは重ねて、もろもろの国民にかすめられることなく……彼らは心を安んじて住み、彼らを恐

れさせる者はない」（エゼキエル 34：23、16、25、28）。 キリストは、これらの預言をご自分にあてはめ、ご自身の性格とイスラエルの指導者たちの性格との相違をお示しになった。パリサイ人たちは、キリストの力についてあえてあかしをたてたという理由で、1 人の人間をかこいの中から追い出したばかりであった。彼らはまことの羊飼イエスがご自分のもとにひ　きよせようとしておられた魂を追い出した。このことによって、彼らは、自分たちにまかさ　れている働きについて無知であることと、羊の群れの牧者として信任される価値のないこと　をばくろした。イエスは、いま彼らとまことの羊飼との相違を彼らの目の前に示し、ご自身　を主の羊の群れのまことの番人としてさし示された。しかしイエスは、その前に、別な譬で、ご自分のことを語っておられる。

イエスはこう言われた、「羊の囲いにはいるのに、門からでなく、ほかの所からのりこえて来る者は、盗人であり、強盗である。門からはいる者は、羊の羊飼である」（ヨハネ 10：1、2）。バリサイ人たちはこのことばが彼らを非難して語られたことばであることに気がつかなかった、彼らがその意味を心の中でおしはかっていると、イエスは、はっきり彼らに言われた、「わたしは門である。わたしをとおってはいる者は救われ、また出人りし、牧草にありつくであろう。　盗人が来るのは、盗んだり、殺したり、滅ぼしたりするためにほかならない。わたしがきたのは、羊に命を得させ、豊かに得させるためである」（ヨハネ 10：9、10）。

キリストは神の囲いの門である。大昔から、神の子らはみなこの門を通って入って行った。イエスは、型に示され、象徴に予表され、預言者たちの啓示にあらわされ、弟子たちに与えられた教訓を通してあらわされているが、そのイエスのうちに、また人の子らのためになされた奇跡のうちに、彼らは「世の罪を取り除く神の小羊」を見（ヨハネ 1：29）、また、イエスを通して、主の恵みという囲いの中につれてこられた。多くの人々が現れて、世の信仰の対象としてほかのものを示した。人々は、儀式や制度を作り出し、それによって義とされ、神とやわらいで、神の囲いに入ることを望んでいる。しかしただ一つの門は、キリストである。キリストの代りになるような何かを置いたり、何かほかの道から囲いに入ろうと試みた者は、みな盗人であり、強盗である。

パリサイ人は門から入らなかった。彼らは、キリスト以外の方法で、囲いによじのぼって入ったのであって、真の羊飼の働きを果たしていなかった。祭司たちや役人たち、律法学者たちやパリサイ人たちは、生きた牧草地をだめにし、生命の水のみなもとをけがした。霊感のみことばは、こうした偽りの羊飼をありのままにこうえがいている、「あなたがたは弱った者を強くせず、病んでいる者をいやさず、傷ついた者をつつまず、迷い出た者を引き返らせず、……彼らを手荒く、きびしく治めている」（エゼキエル 34：4）。

どの時代にも、哲学者たちと教師たちは、魂の必要を満足させるための学説を世に示してきた。どの異教国にも、鰍な教師や宗教制度があって、キリスト以外のあがないの方法を提供し、人々の目を天父のみ顔からそらし、人々に祝福しかお与えになったことのない神について、恐怖を人々の心に満たしてきた。彼らの働きの傾向は、創造とあがないによって神ご自身のものであるところのものを、神力ら奪うことである。このような偽りの教師たちは人からもまた盗んでいる。幾百万の人間が偽りの宗教の下にあって、奴隷的な恐れとにぶい無関心という束縛につながれ、この世における望みもよろこびも抱負も奪われて、ただ来世についての重苦しい恐れを抱きながら、荷物を背負わされた動物のように骨おっている。魂を高めることができるのは神の恵みの福音だけである。み子のうちにあらわされている神の愛について瞑想する時、ほかのどんなことによるよりも、心が動かされ、魂の能力が呼び起こされる。キリストは、人間のうちに神のみかたちを再創造するためにおいでになった。人々をキリストから離れさせる者はだれでも彼らを真の向上のみなもとから離れさせているのであって、人生の希望と目的と栄光とを彼らからだましとっているのである、彼は盗人であり、強盗である。

「門からはいる者は、羊の羊飼である」（ヨハネ 10：2）。キリストは門であり、また羊飼である。主は 1 人でお入りになる。キリストが羊の羊飼となられるのはご自身の犠牲を通してである。「門番は彼のために門を開き、羊は彼の声を聞く。そして彼は自分の羊の名をよんで連れ出す。自分の羊をみな出してしまうと、彼は羊の先頭に立って行く。羊はその声を知っているので、彼について行くのである」（ヨハネ 10：3、4）。

すべての動物の中で、羊は最も臆病で無力な動物の一種なので、東方の国では、羊飼はたえまなく、うむことなく、羊の群れを世話する。昔は、今と同じように、城壁をめぐらした町の外側は安全ではなかった。辺境をうろついている部族からの略奪者たちや、岩の間をかくれ場所にしている猛獣などが、羊の群れをあらそうとして待ち伏せていた。羊飼は、いのちがけの責任を自覚して見張った。ヤコブは、ハランの牧草地でラバンの羊の群れを飼ったが、自分自身のしんぼう強い働きを描写して、「昼は暑さに、夜は寒さに悩まされて、眠ることもできませんでした」と言った（創世記 31：40）。少年ダビデが、1 人で、ししと熊に出会い、盗まれた小羊をそのきばから救い出したのは、父の羊の番をしていた時であった。

羊飼が岩だらけの丘を越え、森林や荒れ果てた谷 を通って、羊の群れを草の多い川辺の安全な場所へ連れて行く時、また山の上で、淋しい夜の間、羊を盗賊から守り、病気の羊や弱い羊をやさしく世話しながら番をしている時、彼の生命は羊たちの生命と一体となる。一つの強いやさしいきずなによって、彼は、自分が世話をしているものに結びつけられる。羊の群れがどんなに大きくても、羊飼はどの羊も知っている。どの羊にも名前があって、羊飼が名前を呼ぶと答えるのである。 この世の羊飼が自分の羊を知っているように、天の羊飼イエスは、世界中にちらばっているご自分の羊の群れを知っておられる。「あなたがたはわが羊、わが牧場の羊である。わたしはあなたがたの神であると、主なる神は言われる」。イエスは「わたしはあなたの名を呼んだ、あなたはわたしのものだ」。「わたしは、たなごころにあなたを彫り刻んだ」と言われる（エゼキエル 34：31、イザヤ 43：1、49：16）。

イエスは、われわれを個人的に知っておられ、われわれの弱さを感じて心を動かされる。イエスはわれわれの名前をみな知っておられる。イエスはわれわれの住んでいる家を、またその家に住んでいる一人一人の名前を知っておられる。イエスは、時々、ご自分のしもべたちに、どこそこの町の何という通りのこれこれの家に行ってわたしの羊の 1 匹をさがしなさいと命じられた。 一人一人は、あたかも救い主がその者のためだけに死なれたかのように、よくイエスに知られている。一人一人の悲嘆はイエスの心を動かす。助けを求める叫びはイ エスの耳に達する。イエスはすべての人をみもとに引きよせるためにおいでになった。イエ

スは彼らに、「わたしに従ってきなさい」とお命じになる。するとみたまが彼らの心に働いて、彼らがみもとにくるように引きよせる。多くの者は引きよせられるのをこばむ。イエスはそれがだれであるかをご存知である。イエスはまた、ご自分の呼び声をよろこんで聞いて、羊飼であられるイエスの守りに身をゆだねようとする者をご存知である。「わたしの羊はわたしの声に聞き従う。わたしは彼らを知っており、彼らはわたしについて来る」とイエスは言われる（ヨハネ 10：27）。イエスは、この地上にほかにだれもいないかのように、一人一人を気づかわれる。

「彼は自分の羊の名をよんで連れ出す。……羊はその声を知っているので、彼について行くのである」（ヨハネ 10：3、4）。東方の羊飼は羊を追いたてない。彼は、暴力や恐怖心に訴えないで、自分が先に行って羊たちを呼ぶ。羊たちは、彼の声を知っているので、その呼び声に従う。救い主であられる牧者イエスも、これと同じように、ご自分の羊をとり扱われる。聖書に、「あなたは、その民をモーセとアロンの手によって羊の群れのように導かれた」といわれている（詩篇 77：20）。預言者を通して、イエスは、「わたしは限りなき愛をもってあなたを愛している。それゆえ、わたしは絶えずあなたに真実をつくしてきた」と宣言しておられる（注・英語訳には、「それゆえ、わたしはやさしく親切にあなたを引きよせた」となっている。エレミヤ 31：3）。イエスは、わたしに従いなさいと、だれにも強制されない。「わたしはあわれみの綱、すなわち愛のひもで彼らを導いた」と、イエスは言われる（ホセア 11：4）。

弟子たちがキリストに従うのは、罰を恐れるとか、永遠の報いを望むからではない。彼らは、ベツレヘムの馬ぶねからカルバリーの十字架にいたるまで、この地上における旅路を通じてあらわされた救い主の比類のない愛を見る。そのキリストのお姿が彼らをひきつけ、魂をやわらげ、征服するのである。イエスを仰ぎ見る者の心のうちに愛がめざめる。彼らはみ声を聞き、イエスに従うのである。 羊飼が羊たちの前に行って、自分がまず道中の危険に遭遇するように、イエスもまたご自分の民に対して同じようになさる。「自分の羊をみな出してしまうと、彼は羊の先頭に立って行く」（ヨハネ 10：4）。天への道は、救い主のみ足跡によってきよめられている。道はけわしく荒れているかもしれないが、イエスがその道を

歩まれたのである。イエスの足は、ひどいいばらをふみつけて、われわれがその道を通りやすいようにされた。イエスは、われわれが負うように召されて いるどの重荷もご自分で負われた。

今イエスは、神のみもとにのぼって、神と共に宇宙の王座についておられるが、その慈悲深いご性質をすこしも失ってはおられない。今日も同じように、やさしい同情に満ちたイエスの心は、人類のすべての苦悩に向かって開かれている。刺されたみ手は、世にあるご自分の民をもっと豊かに祝福するために今日もさし出されている。「だから、彼らはいつまでも滅びることがなく、また、彼らをわたしの手から奪い去る者はない」（ヨハネ 10：28）。キリストに献身した魂は、キリストの御目には、全世界よりもとうといのである。救い主は、ひとりがみ国に救われるためであっても、カルバリーの苦悩を経験されたであろう。主は、 ご自分がそのために死なれた魂を決してお捨てにならない。イエスに従う者たちが自分から イエスを離れようとしない限り、イエスは、彼らを固くひきとめておられる。

われわれには、どんな試練の時にも、決してわれわれを裏切られることのない助け主がいる。主は、われわれが誘惑に抵抗し、悪と戦い、ついには重荷と悲しみにおしつぶされてしまうがままに、放っておかれない。いまは、イエスは人間の目からかくされているが、信仰の耳は、イエスのみ声が、「恐れるには及ばない、わたしがあなたといっしょにいるのだ」と言われるのを聞くことができる。「（わたしは）また、生きている者である。わたしは死んだことはあるが、見よ、世々限りなく生きている者である」（黙示録 1：18）。わたしは、あなたの悲しみに耐え、あなたの戦いを経験し、あなたの誘惑に会った。わたしはあなたの涙を知っている。わたしもまた泣いたのである。人間の耳に聞かせられないほどの深い悲しみをわたしは知っている。あなたは、自分がうち捨てられた孤独な人間だと思ってはならない。この地上にはあなたの苦しみを心の琴線に感じてくれる人がなくても、わたしを見、そして生きなさい。「『山は移り、丘は動いても、わがいつくしみはあなたから移ることなく、平安を与えるわが契約は動くことがない』とあなたをあわれまれる主は言われる」（イザヤ54：10）。

羊飼は、自分の羊をどんなに愛しても、やはり自分の息子娘はもっとかわいいのである。イエスは、われわれの羊飼であるばかりでなく、われらの「永遠の父」であられる。だからイエスは、「わたしは……わたしの羊を知り、わたしの羊はまた、わたしを知っている。それはちょうど、父がわたしを知っておられ、わたしが父を知っているのと同じである」と言われる（ヨハネ　10：14、15）。これは何というとうといみことばだろう。天父の愛されるひとり子、神が「わたしの次に立つ人」（ゼカリヤ　13：7）と宣言されたお方、そのお方と永遠の神との間のまじわりをもって、キリストと地上の子らとの交わりを描写されると は。われわれは天父の賜物であり、イエスの働きの報いであるから、イエスはわれわれを愛 されるのである。イエスは、われわれをご自分の子として愛される。読者よ、イエスはあな　たを愛される。天そのものは、イエスよりも偉大なもの、イエスよりもよいものを与えるこ　とができない。だから信頼なさい。　イエスは、にせの羊飼によってまちがった道へ連れて行 かれた全地の魂に思いをよせられた。イエスがご自分の牧場の羊として集めようと熱望され　た人たちが、狼の間にちりぢりになっていた。そこでイエスは、「わたしにはまた、この囲　いにいない他の羊がある。わたしは彼らをも導かねばならない。彼らも、わたしの声に聞き　従うであろう。そして、ついに一つの群れ、ひとりの羊飼となるであろう」と言われた（ヨ　ハネ 10：16）。

「父は、わたしが自分の命を捨てるから、わたしを愛して下さるのである。命を捨てるのは、それを再び得るためである」（ヨハネ 10：17）。すなわち、父はあなたを深く愛されたので、あなたをあがなうために自分の生命をささげたわたしをますます愛してくださるのである。わたしの生命をささげることによって、あなたの負債、あなたの罪とがを引き受けることによって、わたしがあなたの身代りまた保証となったために、わたしは父から愛されているのである。

「命を捨てるのは、それを再び得るためである。だれかが、わたしからそれを取り去るのではない。わ たしが、自分からそれを捨てるのである。わたしには、それを捨てる力があり、またそれを受ける力もある」（ヨハネ 10：17、18）。イエスは、人類家族の一員として死ぬべき身であられたが、一方また、神として世の人々のための生命の泉であられた。イ

エスは死の前進をとどめ、その主権の下に人ることをこばむこともおできになった。だが主は、生命と不死を明るみに出すために、自発的にご自分の生命をお捨てになった。イエスは、人類が永遠に滅びることがないように、ご自分が世の罪を負い、罪ののろいに耐え、ご自分の生命をいけにえとしてささげられた。「まことに彼はわれわれの病を負い、われわれの悲しみをになった……彼はわれわれのとがのために傷つけられ、われわれの不義のために砕かれたのだ。彼はみずから懲らしめをうけて、われわれに平安を与え、その打たれた傷によって、われわれはいやされたのだ。われわれはみな羊のように迷って、おのおの自分の道に向かって行った。主はわれわれすべての者の不義を、彼の上におかれた」（イザヤ　53：4～6）。

第 53 章　ガリラヤからの最後の旅

キリストの公生涯が終わりに近づくと、キリストの働きの方法に変化がみられた。これまでイエスは、騒ぎや宣伝を避けようとしておられた。イエスは、人々からあがめられることをこばみ、イエスを支持する民衆の熱心さが抑えることができないほど燃えあがってくるようにみえると、急いでこの場所からあの場所へと移られた。何度も何度も、イエスは、だれもわたしのことをキリストと宣言してはいけないとお命じになっていた。

仮庵の祭りの時には、イエスは、ひそかに急いでエルサレムへ旅をされた。イエスの兄弟たちが、イエスにメシヤとして公然と名乗り出るようにすすめた時、イエスの答は「わたしの時はまだきていない」であった（ヨハネ 7：6）。イエスは、人目につかずにエルサレムへ進み、先ぶれもなく、群衆からあがめられもしないで都へ入られた。ところがイエスの最後の旅はそうではなかった。イエスは、祭司たちとラビたちの敵意のために、エルサレムをしばらく離れておられた。しかしいまイエスは、エルサレムへもどられるにあたって、遠まわりの道を通って公然と旅をされ、これまで決してされなかったような先ぶれをして出かけられた。イエスは大いなる犠牲の場面へ進んで行かれるのであって、このことに民衆の注意が向けられねばならなかった。

「ちょうどモーセが荒野でへびを上げたように、人の子もまた上げられなければならない」（ヨハネ　3：14）。イスラエルのすべての人々の目が、彼らのいやしのために定められた象徴としてあげられたへびに向けられたように、失われた世に救いをもたらしたいけにえ　であられるキリストに、すべての人の目がそそがれなければならない。 イエスの兄弟たちが、仮庵の祭りの時に、イエスが民の前に公然と名乗り出られるようにとすすめたのは、彼らが　メシヤの働きについてまちがった考えを持ち、イエスの神としての性格に対する信仰が欠け　ていたからであった。いまこれと同じ精神で、弟子たちは、できることならイエスがエルサ　レムに行かれるのをとめたかった。彼らは、エルサレムでご自分の上に落ちかかる運命につ　いて言われたイエスのみことばを思い出し、宗教界の指導者たちの恐ろしい敵意がわかって　いたので、主を説得してそこへ行かれないようにしたかった。

イエスの心にとっては、愛する弟子たちの心配や失望や不信にさからって、道を進まれることは苦しいことであった。エルサレムで弟子たちを待ち受けている苦悩と絶望に向かって彼らを連れて行くことはつらいことであった、そこでサタンは、近くにいて、人の子イエスに誘惑をもって迫ったなぜイエスは死　ぬにきまっているエルサレムにいま行かれるのか。イエスの周囲には生命のパンに飢えている魂がいる。どちらを向いても悩める者たちがイエ　スのいやしのことばを待っている。キリストの恵みの福音をもってなされる働きは始まった　ばかりであった。しかもイエスは壮年の盛りで力に満ちておられた。なぜその恵みのことば　といやしの力のみ手をもって世界の広い野へ出て行かれないのか。なぜ暗黒のうちにある不　幸な幾百万の人々に光と幸福を与える喜びをご自分のものとされないのか。なぜその収穫を、信仰が弱く、さとりがにぶく、行動の遅い泊子たちの手に残されるのか。なぜいま死に直面　し、始めたばかりの働きを残されるのか。荒野でキリストに立ち向かった敵は、いま激しく　巧妙な誘惑をもってイエスを攻撃した。もしイエスが一瞬でも屈服されたら、そしてもしご　自分を救うためにほんの一点でも予定を変更されたら、サタンの力は勝利し、世は滅びたの　である。

しかしイエスは、「エルサレムへ行こうと決意して、その方へ顔をむけられ」た（ルカ9：51）。イエスの生涯のただ一つの法則は、天父のみこころであった。イエスは、少年時代に宮参りをされたとき、マリヤに、「わたしが自分の父の家にいるはずのことを、ご存じなかったのですか」と言われた（ルカ　2：49）。カナで、マリヤがイエスに奇跡の力をあらわしてくださいと希望した時、イエスの答は、「わたしの時は、まだきていません」であった（ヨハネ　2：4）。イエスの兄弟たちがイエスに祭りに行くようにすすめた時にも、彼は同じことばで答えられた。しかし神の大いなるご計画のうちには、イエスが人類の罪のためにご自身をささげられる時が定められていて、その時刻がまさに到来しようとしていた。イエスは、弱ったり、動揺したしようとなさらない。イエスの足はエルサレムに向けられている。そこでは敵どもが彼の生命をとろうと長い間たくらんでいた。いまこそイエスは、ご自分の生命を激ようとされるのである。イエスは、迫害、拒否、拒絶、罪の宣告、死に対して顔をしっかりと向けて進んで行かれた。

イエスは、「自分に先立って使者たちをおつかわしになった。そして彼らがサマリヤ人の村へはいって行き、イエスのために準備をしようとした」（ルカ　9：52）。ところが人々は、イエスがエルサレムへ行かれる途中だというので、イエスを迎えることをこばんだ。彼　らは、イエスがエルサレムに行かれるのは、彼らが激しく憎んでいるユダヤ人をひいきにさ　れている証拠であると解釈した。もしイエスがゲリジム山の神殿を回復して、そこで礼拝す　るためにこられたのだったら、彼らはよろこんでイエスを迎えたのである。しかしイエスは　エルサレムへ行かれるところだったので、彼らは、イエスを親切にもてなそうとしなかった。彼らは、天の最上の賜物を彼らの戸口から追い払っていることに少しも気がついていなかっ　た。イエスは、彼らに近づいて最も豊かな祝福を授けるために、彼らがイエスを受け入れる　ように招き、彼らの手による好意を求められた。イエスは、ご自分に対して示される好意の　一つ一つに、もっととうとい恵みをもって報いられた。しかしサマリヤ人は、偏見と偏狭さ　のためにすべてを失った。

キリストの使者に立ったヤコブとヨハネは、主に対して侮辱が表明されるのをみてひどく当惑した。主ご自身がおいでになることは、サマリヤ人にとって名誉であるのに、主に対してこんな無礼な態度をとったといって、彼らは憤慨した。彼らは、変貌の山でイエスと一緒にいて、イエスが神から栄光を受けられ、モーセとエリヤからあがめられたのを最近見たばかりだった。サマリヤ人が示したこの明らかな侮辱は、明白な罰を受けることなしにはみすごされないであろうと彼らは思った。

ヤコブとヨハネは、キリストのところへきて、サマリヤ人が言っていることを報告し、主のために晩の宿を提供することさえことわられたことをお話した。彼らは、サマリヤ人が主に対して悲しむべき罪を犯したと思い、かつてエリヤが偽預言者たちを殺したカルメル山を遠方に見て、「主は、いかがでしよう。彼らを焼き払ってしまうように、天から火をよび求めましょうか」と言った（ルカ　9：54、注・英訳聖書には「エリヤがしたように」とのことばが入っている）。彼ら　は、イエスがこのことばに悲しい顔をされたのを見て驚いたが、イエスの譴責のことばが耳にひびいてきた時にはもっと驚いてしまった。イエスは「あなたがたは自分の心がどんなものであるかを知らないのである。人の子は、人のいのちを滅ぼす

ためではなく、これを救うためにきたのである」と戒められた（ルカ 9：55・英訳聖書）。そこでイエスは、ほかの村へ行かれた。

キリストを受け入れるように人々に強制することは、キリストの使命の一部ではない。良心を強制するのは、サタンと、サタンの精神に動かされている人々である。悪天使たちと同盟している人たちは、正しいことのために熱心であるようにみせかけながら、実は人々を宗教についての自分たちの考え方に変えてしまうために、同胞に苦しみを与える。しかしキリストは、いつもあわれみを示し、ご自分の愛をあらわすことによっていつも人々の心をとらえようとしておられる。イエスは、一つの魂のうちに競争者がいるのを認めることや、中途半端な奉仕を受けることがおできにならない。主はただ自発的な奉仕、愛に迫られた自発的な心の屈服をお望みになる。われわれの働きを理解しない人たちや、われわれの考えと反対な行動をするような人たちを傷つけたり滅ぼしたりしようとする気持くらい、われわれがサタンの精神を持っていることの決定的な証拠はない。

一人一人の人間は、肉体においても、魂においても、精神においても、神の財産である。キリストはすべての人をあがなうために死なれたのである。宗教的な偏狭さから、人間が救い主の血潮であがなわれた人々を苦しめることぐらい神に忌みきらわれることはない。 「それから、イエスはそこを去って、ユダヤの地方とヨルダンの向こう側へ行かれたが、群衆が また寄り集まったので、いつものように、また教えておられた」（マルコ１0：1）。 キリストの公生涯の終わりの何か月かの大部分は、ユダヤからヨルダンの向こう側にあたる地方の ペレヤで過ごされた。ガリラヤでの初めごろの伝道のように、ここでは、群衆がイエスの足 もとに群がり、イエスの以前の教えの多くがくりかえされた。 イエスは、前に 12 人をつかわされた時のように、「別に 72 人を選び、行こうとしておられたすべての町や村へ、ふたりずつ先におつかわしになった」（ルカ 10：1）。この弟子たちは、しばらくイエスと共にいて、働きのために訓練を受けた。12 人の弟子たちが初めて独り立ちで使命のために送り出された時、ほかの弟子たちはイエスのガリラヤ旅行について行った。こうして彼らは、イエス と親密に交わって、直接に教えを受ける特権を与えられた。いまこの多数の弟子たちもまた 独り立ちで使命のために出て行くことになった。

この 70 人に与えられたさしずは、12 人に与えられたのと同じであった。しかし、異邦人とサマリヤ人の町に行くなと 12 人に言われた命令は、この 70 人には与えられなかった。キリストは、サマリヤ人から拒否されたばかりであったが、彼らに対するイエスの愛は変らなかった。70 人がイエスの名によって出て行った時、彼らは、どこよりもまず、サマリヤの町々をおとずれた。

救い主がご自分でサマリヤに行かれたことや、のちになってよきサマリヤ人をほめられたことや、重い皮膚病を患っていた 10 人の中で 1 人だけキリストにお礼を言いにもどってきたあのサマリヤ人の感謝と喜びなどは弟子たちにとって意味深いものだった。その教訓は、彼らの胸の奥底にきざまれていた。イエスが昇天される直前に弟子たちにお与えになった任務の中に、彼らが最初に福音をのべ伝える場所としてエルサレム、ユダヤとともにサマリヤの名をイエスはおあげになった。イエスの教えは、彼らがこの任務を達成する準備となっていた。主の名によってサマリヤに行った時、彼らは、人々が自分たちを受け入れるばかりになっているのを発見した。サマリヤ人は、キリストの称賛のことばと、自分の国の人たちに対するキリストの憐れみのみわざについてすでに聞いていた。彼らがイエスに無礼な応対をしたにもかかわらず、イエスが彼らに対して愛の思いしかいだいておられ ないことを知って、彼らの心はとらえられた。キリストの昇天後、彼らは、救い主の使者たちを歓迎し、弟子たちは、かつて彼らにとって最もにがにがしい敵であった人々の中からとうとい収穫を集めた。「傷ついた葦を折ることなく、ほのぐらい灯心を消すことなく、真実をもって道をしめす」。「異邦人は彼の名に望みを置くであろう」（イザヤ 42：3、マタイ 12：21）。

70 人をつかわすにあたって、イエスは、12 人に命じられた時と同じように、歓迎されないところには無理に残らないようにとお命じになった。「どの町へはいっても、人々があなたがたを迎えない場合には、大通りに出て行って言いなさい、『わたしたちの足についているこの町のちりも、ぬぐい捨てて行く。しかし、神の国が近づいたことは、承知しているがよい』」とイエスは言われた（ルカ 10：10、11）。彼らは、憤慨の動機から、あるいは体面を傷つけられたからそうするのではなくて、主のことばや使者をこばむことがどんなに

悲しむべきことであるかを示すためにそうするのであった。主のしもべをこばむことは、キリストご自身をこばむことである。

「あなたがたに言っておく。その日には、この町よりもソドムの方が耐えやすいであろう」とイエスはつけ加えられた（ルカ 10：12）。それからイエスの思いは、ご自分の奉仕の多くが費されたガリラヤの町々の上にもどって行った。深い悲しみの口調で、イエスは叫ば れた、「わざわいだ、コラジンよ。わざわいだ、ベッサイダよ。おまえたちの中でなされた 力あるわざが、もしツロとシドンでなされたなら、彼らはとうの昔に、荒布をまとい灰の中 にすわって、悔い改めたであろう。しかし、さばきの日には、ツロとシドンの方がおまえた ちよりも、耐えやすいであろう。ああ、カペナウムよ、おまえは天にまで上げられようとで もいうのか。黄泉にまで落されるであろう」（ルカ 10：13～15）。 ガリラヤの海辺のそうしたにぎやかな町々に、天の最も豊かな祝福が惜し気もなく提供されたのだった。毎日毎日、生命の君はそれらの町々をめぐり歩かれた。預言者と王たちが待ち望んだ神の栄光は、救い 主の足もとに群がった群衆の上に照り輝いた。それなのに彼らは天の賜物イエスをこばんだ のだった。

ラビたちは、自分たちの思慮深さを大げさに示しながら、この新しい教師の理論と慣習は父祖たちの教えに反するものだから、彼の教える新しい教理を信じてはならないと、人々に警告した。人々は、自分で神のみことばをさとろうとしないで、祭司たちとパリサイ人たちの教えることを信用していた。彼らは、神をあがめないで、祭司たちと役人たちをあがめ、彼ら自身の言い伝えを守るために真理をしりぞけた。多くの者が感動し、ほとんど説得されたが、彼らはその確信を実行しようとしなかったので、キリストの側につく者とみなされなかった。サタンは誘惑をしむけ、ついに光はやみのようにみえた。こうして多くの者が、魂の救いとなったはずの真理をこばんだ。

まことの証人イエスは、「見よ、わたしは戸の外に立って、たたいている」と言われる（黙示録 3：20）。神のみことばや、神の使命者たちを通して与えられる警告と譴責と懇願の一つ一つは、心の戸をたたく音である。それは中に入ることを求めておられるイエスのみ声である。ノックを無視するたびに、戸を開く気持がうすれる。聖霊の感動は、きょう無視

されると、明日は今日ほど強くなくなる。心はだんだん感じなくなり、人生の短さについて、また未来の大いなる永遠について、危険な無感覚状態に陥る。さばきの時にわれわれが罪に定められるとすれば、それは、われわれが誤謬の中にいた結果ではなくて、何が真理であるかを学ぶ機会を天から与えられていたにもかかわらず、これを無視した結果である。　使徒たちと同様に、70 人は、彼らの使命の証拠として超自然の能力を授けられていた。働きをなし終えた時、彼らはよろこんで帰ってきて、「主よ、あなたの名によっていたしますと、悪霊　までがわたしたちに服従します」と言った。すると主は、「わたしはサタンが電光のように　天から落ちるのを見た」と答えられた（ルカ 10：17、18）。

過去と未来の光景がイエスの心に示された。イエスは、ルシファーがはじめて天から追い出されたのをごらんになった。イエスはご自身の苦悩の光景を予 見された。その時もろもろの世界の前に、欺瞞者の本性がばくろされるのであった。イエスは「すべてが終った」との叫びを聞かれたが、それは、失われた人類のあがないが永遠に定まり、天が、サタンの扇動する告発、欺瞞、偽装に対して永遠に安全になったことを告げるのであった（ヨハネ 19：30）。 苦悩と恥辱を伴ったカルバリーの十字架のかなたに、イエスは、大いなる最後の日を予見された。その日には、空中の権をとる君が、その反逆によって長い間そこなってきた地上で滅亡に会うのである。イエスは、悪のわざが永遠に終わり、神の平和が天と地に満ちるのをごらんになった。

これからは、キリストに従う者たちは、サタンを征服された敵としてみるのであった。十字架上で、キリストは、彼らのために勝利を獲得されるのであった。その勝利を、彼らが自分自身のものとして受け入れるように、イエスは望まれた。「わたしはあなたがたに、へびやさそりを踏みつけ、敵のあらゆる力に打ち勝つ権威を授けた。だから、あなたがたに害をおよぼす者はまったく無いであろう」とイエスは言われた（ルカ 10：19）。 聖霊の全能の力は、悔い改めた一人一人の魂の防壁である。悔い改めと信仰をもってキリストの保護を求める者が 1 人でも敵の権力下に陥ることを、キリストはおゆるしにならない。救い主は、誘惑と試みを受けている人たちのそばにおられる。イエスといっしょなら、失敗も損失も不可能も敗北もない。われわれは、われわれを強くしてくださるイエスを通してすべてのこと

をなすことができる。誘惑や試みがやってくる時、全部の困難を処理するまで待たないで、あなたの助け手であるイエスを仰ぎなさい。

サタンの力について、あまりにも過大に考えたり、話したりするクリスチャンがいる。彼らは、敵について考え、敵について祈り、敵について語るので、敵は彼らの想像の中にだんだん大きく現われてくる。なるほどサタンは強力な存在である。だがありがたいことに、われわれには、その悪者を天から追い出された力の強い救い主がいる。サタンは、われわれが彼の力を拡大する時によろこぶ。イエスについて語ろうではないか。イエスの力と愛とを拡大しようではないか。 天のみ座をとりまいている約束の虹は、「神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである」という永遠のあかしである（ヨハネ 3：16）。それは神がご自分の民を悪との戦いに放っておかれないということを宇宙にあかししている。それは、み座そのものが続くかぎり、力と保護とをわれわれに保証している。

イエスはつけ加えてこう言われた、「しかし、霊があなたがたに服従することを喜ぶな。むしろ、あなたがたの名が天にしるされていることを喜びなさい」（ルカ 10：20）。あなたがたは力を持っていることをよろこばないで、神に依存していることを見落さないようにし なさい。自己満足に陥り、自分自身の力で働くようなことがないように、むしろ主の精神と 力で働くように注意しなさい。働きに少しでも成功が伴うと、その手柄を自分自身のものに しがちである。自我とうぬぼれで高慢になり、神が「すべてであり、すべてのもののうちに います」という印象をほかの人々の心にうえつけることができない（コロサイ 3：11）。パウロは、「わたしが弱い時にこそ、わたしは強い」と言っている（Ⅱコリント 12：10）。自分の弱さを認めるとき、われわれは、生れつきのものではない力にたよることを学ぶのであ る。神に対するわれわれの変らない責任感くらい心を強くとらえるものはない。キリストの ゆるしの愛を意識することくらい、行為の一番奥底にある動機となるものはない。われわれ は神と接触するのである。その時われわれは、神の聖霊を吹き込まれて、同胞と接触するこ とができるのである。その時あなたは、キリストを通して神とつながり、天の家族の人々と つながるようになったことを喜びなさい。あなたが自分自身よりも高いところをながめてい

る間は、あなたは人間の弱さをたえず意識するであろう。自我の意識が少なければ少ないほど、あなたは救い初すぐれた徳についてますますはつきりと十分に理解するのである。光と力のみなもとに密接 につながればつながるほど、ますます光があなたを照らし、神のために働くために一層大きな力があなたのものとなるのである。あなたが、神と一つ、キリストと一つ、天の全家族と一つであることを喜びなさい。

70　人がキリストのみことばに聞き入っていた時、聖霊は彼らの心に生きた事実を印象づけ、魂の石碑に真理を書きつけていた。群衆が彼らをとりまいていたが、彼らはあたかも神と共にとじこめられているかのようであった。　イエスは、彼らがその時霊感を受けたことをお知りになって、「聖霊によって喜びあふれて言われた、『天地の主なる父よ。あなたを　ほめたたえます。これらの事を知恵のある者や賢い者に隠して、幼な子にあらわしてくださ　いました。父よ、これはまことに、みこころにかなった事でした。すべての事は父からわた　しに任せられています。そして、子がだれであるかは、父のほか知っている者はありません。また父がだれであるかは、子と、父をあらわそうとして子が選んだ者とのほか、だれも知っ　ている者はいません』」（ルカ 10：21、22）。

世の中であがめられている人々、彼らが自慢にしている知恵を持っているいわゆる偉大な賢人たちは、キリストの品性を理解することができなかった。彼らは、外観と、1 人の人間としてのイエスにのぞんだ屈辱を通して、イエスを判断した。しかし漁師や取税人たちには、目に見えないお方を見ることがゆるされた。弟子たちでさえ、イエスが彼らにあらわそうと　望まれたことを全部は理解しなかった。しかしだんだん聖霊の力に屈服した時に、彼らの心　は光に照らされた。彼らは大いなる神が、人性という衣をまとって、自分たちの中におられ　ることを認めた。イエスは、賢くて抜け目のない人々がこの知識を持たないで、それがこれ　らのいやしい人々にあら矛、されたことをよろこばれた。しばしばイエスが旧約聖書を引用　して、それをご自身と、ご自分がなさるあがないの働きに適用された時、彼らはみたまによ　ってめざめさせられ、天の雰囲気にひきあげられた。預言者たちによって語られた霊的真理　を、彼らは、はじめにそれ書いた人たちよりもはっきり理解した。

これからは、彼らは、旧約聖書を、律法学者やパリサイ人の教理としてではなく、またすでに死んでいる賢人の語ったことばとしてではなく、神からの新しい啓示として読むのであった。「この世はそれを見ようともせず、知ろうともしないので、それを受けることができない。あなたがたはそれを知っている。なぜなら、それはあなたがたと共におり、またあなたがたのうちにいる」お方を、彼らは見た（ヨハネ 14：17）。 われわれが真理についてもっと完全な理解を持つことができるただ一つの方法は、キリストのみたまによって、心を感じやすく、やわらげられた状態にしておくことによってである。魂をむなしいことと高慢心からきよめ、それを占領していた一切のものを追い出して、キリストに心の王座についていただかねばならない、人間の科学は限られていて、あがないを理解することができない。あがないの計画は深遠で、哲学はそれを説明することができない。それは依然として、どんな深遠な議論によってもおしはかることのできない神秘である。救いの科学は、説明することができないが、経験によって知ることができる。自分自身の罪深さを認める者だけが、救い主のとうとさをみわけることができるのである。

キリストがガリラヤからエルサレムに向かってゆっくり進んで行かれた時に説かれた教えは、教訓に満ちていた。人々は、熱心にキリストのみことばを聞いた。ガリラヤと同様にペレアでは、人々がユダヤにおけるよりも、ユダヤ人の偏狭さに支配されていなかったので、イエスの教えは、彼らの心に感動を起こした。 キリストの公生涯の終わりのこの何か月間に、キリストの譬話の多くが語られた。祭司たちとラビたちがますます苛酷さを加えながらイエスを追跡したので、イエスは彼らに対する警告を象徴を通して語られた。彼らは、イエスの言われている意味をまちがいなくわかったが、それでもそのみことばの中にイエスを告発する根拠となるものを何一つ見いだすことができなかった。パリサイ人と取税人の譬の中で、「わたしはほかの人たちのよう……でないことを感謝しま す」という独善的な祈りは、「神様、罪人のわたしをおゆるしください」という悔い改めた人の願いといちじるしい対照をなしていた（ルカ 18：11、13）。このようにキリストは、ユダヤ人の偽善を譴責された。またキリストは、実のならないいちじくの木の譬と盛大な晩餐会の譬を通して、悔い改めない国民にふりかかろうとしている運命について予告された。福音のごちそうへの招待を冷笑し

てことわった人々は、「あなたがたに言って置くが、招かれた人で、わたしの晩餐にあずかる者はひとりもないであろう」というイエスの警告のことばを聞いた（ルカ 14：24）。

弟子たちに与えられた教えはとうといものであった。しつこく願ったやもめの譬と、真夜中にパンを求めた友人の譬とは、「求めよ、そうすれば、与えられるであろう。捜せ、そうすれば見いだすであろう。門をたたけ、そうすれば、あけてもらえるであろう」とのイエスのみことばに新しい力を与えた（ルカ 11：9）。「まして神は、日夜叫び求める選民のために、正しいさばきをしてくださらずに長い間そのままにしておかれることがあろうか。あなたがたに言っておくが、神はすみやかにさばいてくださるであろう」とキリストが言われたことを思い出すことによって、彼らの動揺する信仰が強められたことがしばしばあった（ルカ 18：7、8）。 キリストは、失われた羊の美しい譬をくりかえされた。また失われた 1 枚の銀貨と放蕩息子の譬を語られた時、その教訓をもっと深く教えられた。弟子たちは、その時にはこうした教訓の力を十分に認めることができなかった。しかし聖霊降下の後、異邦人が集められ、ユダヤ人がねたんで怒ろのを見た時、彼らは、放蕩息子の教訓を一層よく理 解し、「このむすこが死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったのだか ら」。「喜び祝うのはあたりまえである」とのキリストのみことばの喜びを味わうことがで きた（ルカ 15：24、32）。彼らが主このみ名によって出かけて行き、非難と貧乏と迫害とに直面した時、イエスがこの最後の旅に、「恐れるな、小さい群れよ。御国を下さることは、あなたがたの父のみこころなのである。自分の持ち物を売って、施しなさい。自分のために 古びることのない財布をつくり、盗人も近寄らず。虫も食い破らない天に、尽きることのな い宝をたくわえなさい。あなたがたの宝のある所には、心もあるからである」と語られたそ のご命令をくりかえすことによって、彼らの心は、しばしば強められたのであった（ルカ 12：32～34）。

第 54 章　よいサマリヤ人

よいサマリヤ人の物語を通して、キリストは真の宗教の本質を例示しておられる。真の宗教は、制度や、信条や、儀式にあるのではなくて、それは愛の行為を実行すること、他人に最高の幸福をもたらすこと、真の親切さにあることを、キリストは示しておられる。 キリストが人々に教えておられると、「ある律法学者が現れ、イエスを試みようとして言った、『先生、何をしたら永遠の生命が受けられましょうか』」（ルカ 10：25）。大勢の会衆はかたずをのんでその答えを待った。祭司たちとラビたちは、律法学者にこの質問をさせることによって、キリストをわなにかけようと思ったのであった。しかし救い主は、論争をはじめられなかった。主はこの質問をした当人から答えを求められた。主は、「律法にはなんと書いてあるか。あなたはどう読むか」と言われた（ルカ 10：26）。ユダヤ人は、シナイ山で与えられた律法をイエスが軽視しておられるとまだ非難していた。ところがイエスは、救いについての質問を神の律法を守る問題に向けられたのである。

律法学者は、「『心をつくし、精神をつくし、力をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ』。また、「自分を愛するように、あなたの隣り人を愛せよ」とあります」と言った。イエスは「あなたの答は正しい。そのとおり行いなさい。そうすれば、いの　ちが得られる」と言われた（ルカ 10：27、28）。 この律法学者は、パリサイ人の見解と行為に満足していなかった。彼は、聖書の真の意味を知りたいという願いをもって聖書を学んでき　た。彼はこの問題に重大な関心を持ち、「わたしは何をしたらよいのでしょうか」と真心か　らたずねたのだった。律法の要求についての答えの中で、彼はおびただしい儀式や礼典の規　則を全部無視した。彼はそうしたものに何の価値もおかず、律法の全体と預言者とがかかっ　ている 2 つの大原則を示した。この答えはキリストにほめられ、救い主はこの答えによって、ラビたちに対して有利な立場にたたれた。彼らは、律法の解説者から言い出されたことをキ　リストが承認されたのだから、それを非難することができなかった。

「そのとおり行いなさい。そうすれば、いのちが得られる」とイエスは言われた（ルカ10：28）。キリストは律法を神聖な一体としてお示しになった。そうしてこの教訓を通して、

律法の全体は同じ原則でつらぬかれているので、一つの戒めを守って他の戒めを破るというわけにはいかないことをお教えになった。人の運命は律法の全体に従うことによってきまるのである。神への最高の愛と、人へのわけへだてのない愛は、生活に実行されなければならない原則である。

この律法学者は、自分が律法を破っている者であることに気がついた。彼は、キリストのするどいみことばによって、罪をさとった。彼は、自分が理解していると主張している律法の義を実行していなかった。彼は同胞に対する愛をあらわしていなかった。悔い改めが要求された。しかし彼は悔い改めないで、自分の立場を弁護しようと試みた。彼は、事実を認めるよりも、むしろ戒めを守ることがどんなに困難であるかを示そうとした。こうして彼は、罪の自覚をごまかすと同時に、人々の目に自分が正しいことを証明しようと望んだ。彼は自分で自分の質問に答えることができたのだから、その質問が不必要であることを救い主のみことばは示していた。それでも彼はほかの質問をして、「わたしの隣り人とはだれのことですか」と言った（ルカ 10：29）。

ユダヤ人の間では、この質問は、はてしない議論を引き起こした。彼らは、異邦人とサマリヤ人については問題にしなかった。この人たちは他国人であり、敵であった。すると自分自身の国の人たち、また社会のいろいろな階層の間ではどこに区別をつけたらよいのだろう。祭司たちやラビたちや長老たちは、だれを隣り人とみなしたらよいのだろう。彼らは自分自身をきよめるために儀式のくりかえしに一生を送った。無知で軽率な大衆と接触すればけがれを生じ、そのけがれを取り除くためにはうんざりするような努力が必要であると、彼らは教えた。彼らは「きよくない」者たちを隣り人とみなすべきだろうか。 ふたたびイエスは論争にひき入れられるのを拒否された。イエスはこ自分を罪に定めようと見張っている人たちの偏狭な心を非難されなかった。むしろイエスは、単純な物語によって、すべての人の心を感動させるような天来の愛の流れを聴衆の前にえがき、律法学者から事実について一つの告白を引き出された。

暗やみを追い払う方法は光を入れることである。誤謬をとり扱う最上の方法は真理を示すことである。自己中心の心のみにくさと罪とを明らかに示すのは、神の愛のあらわれであ

る。　イエスはこう言われた、「ある人がエルサレムからエリコに下って行く途中、強盗どもが彼を襲い、その着物をはぎ取り、傷を負わせ、半殺しにしたまま、逃げ去った。するとたまたま、ひとりの祭司がその道を下ってきたが、この人を見ると、向こう側を通って行った。同様に、レビ人もこの場所にさしかかってきたが、彼を見ると向こう側を通って行った」（ルカ　10：30～32）。これは想像の光景ではなく、実際の出来事であって、ここに言われている通りのことが知られていた。向こう側を通った祭司とレビ人が、キリストのみことばをきいている人たちの中にいた。

エルサレムからエリコへ旅をするには、旅人はユダヤの荒野の場所を通らねばならなかった。道は荒れはてた岩の多い谷間へくだっているが、そこは強　盗が出没し、しばしば暴力がふるわれる場所であった。ここてその旅人は襲われて、貴重品を全部奪われ、傷つけられ、半殺しにされたまま道ばたに置いてきぼりにされた。こんな有様で彼が横たわっていると、　祭司がその道をやってきた。しかし祭司は負傷している男の方を一目見ただけだった。次に　レビ人が現われた。そこに起こった出来事を知りたい好奇心から、彼は立ちどまって被害者　を見た。彼は自分がとうしなければならないかを自覚したが、それは愉快な義務ではなかっ　た。彼は、この道をこなければよかった、そしたらこの負傷者を見ないですんだのにと思っ　た。彼はこの事件は自分の関係したことではないと、自分に言いきかせ。

祭司もレビ人もともに聖職にあって、聖書の解説者であると自称していた。彼らは民に対して神を代表する者として特にえらばれた階級であった。彼らは、人類に対する神の大いなる愛を理解させるように、「無知な迷っている人々を、思いやる」はずだった（ヘブル 5：2）。イエスはご自分の働きについて、「主の御霊がわたしに宿っている。貧しい人々に福音を宣べ伝えさせるために、わたしを聖別してくださったからである。主はわたしをつかわして、囚人が解放され、盲人の目が開かれることを告げ知らせ、打ちひしがれている者に自由を得させ」と表現されたが、祭司やレビ人もこれと同じ働きをするために召されていた（ルカ 4：18）。

天使たちは、地上の神の家族が困っているのを見て、その重荷と苦しみを助けるのにいつでも人々と協力しようとする。神は、その摂理によって、祭司とレビ人に、負傷した被害

者が横たわっているところを通らせ、彼が同情と助けを必要としているのを見させようとされた。この人たちの心が人間の苦悩に対する同情に動かされるかどうかをみようと、全人は見守っていた。救い主は、荒野でヘブル人をお教えになったお方であった。主は、雲と火の柱の中から、いま民が祭司たちと教師たちから受けているのとはちがった教訓をお教えになった、律法の情深い条項には、自分の願いや苦しみをことばで言い表すことのできない下等動物のことさえ規定されていた。イスラエルの民のために次のような趣旨のことかモーセに命令されていた、「もし、あなたが敵の牛または、ろばの迷っているのに会う時は、必ずこれを彼の所に連れて行って、帰さなければならない。もしあなたを憎む者のろばが、その荷物の下に倒れ伏しているのを見る時は、これを見捨てて置かないように気をつけ、必ずその人に手を貸して、これを起さなければならない」（出エジプト 23：4、5）。ところがイエスは、強盗に負傷させられたこの男を通して、困っている兄弟の実例をお示しになった。彼ら　の心は、荷物を運ぶ動物に対するよりもずっと同情心に動かされるはずであった。彼らの神　であられる主は、「大いにして力ある恐るべき神にましまし……みなし子とやもめに正しい　さばきを行い、また寄留の他国人を愛」されるということばが、モーセを通して彼らに与え　られていた（申命記　　10：17、18）。だから神は、「あなたがたと共にいる寄留の他国人を、……あなた自身のようにこれを愛さなければならない」と命じられたのである（レビ 19：34）。

ヨブは、「他国人はちまたに宿らず、わたしはわが門を旅びとに開いた」と言った（ヨブ 31：32）。また、人の姿をしたふたりの天使がソドムへやってきた時、ロトは地面にひれ伏して、「わが主よ、どうぞしもべの家に立寄って足を洗い、お泊まりください」と言った（創世記 19：2）。祭司もレビ人もこうした教訓をよく知っていたが、それを実際の生活にとり入れていなかった。国民的な偏狭心という学校で訓練されていたので、彼らは、利己的で、狭量で、排他的であった。彼らは、負傷者を見た時、その人が自国民かどうかわからなかった。彼らはその人がサマリヤ人かも知れないと思って立ち去った。 キリストがこの話をされた時、律法学者は、彼らの偽のうちに、律法の要求に関して自分が教えられたことに反するようなものは何も見いださなかった。しかしこんどは別の光景が示された。

あるサマリヤ人か、旅の途中、この被害者のいるところを通りかかったが、彼はその人を見た時同情し　た。彼はこの見知らない人がユダヤ人であるか、それとも異邦人であるかを問題にしなかった。もしそれがユダヤ人だったら、そして、立場が逆だったら、その男は顔　につばをはきかけ、軽蔑して行ってしまうことを、サマリヤ人はよく知っていた。しかしそ　うだからといって、彼はちゅうちょしなかった。彼はまたこの場所にぐずぐずしていたら、　自分自身暴力を受ける危険があることをかえりみなかった。自分の目の前に困って苦しんで　いる　1 人の人間がいるということが重大であった。彼はその男に着せるために自分の上衣をぬいだ。その傷ついた男をいやし、元気づけるために、彼は、自分の旅行用の油と酒を用い　た。彼は、その男を自分の家畜にのせ、揺れて余計痛むようなことがないように、一様な歩　調でゆっくり歩いて行った。彼は、その男を宿屋に連れて行って、一晩中看護し、やさしく　見守った。朝になって、病人がよくなったので、サマリヤ人は出かけることにした。しかし　そうする前に、彼はその男の世話を宿屋の主人にたのみ、その費用を支払い、またその男の　ためにお金まで預け、それでもまだ満足しないで、もっと入用があった場合の用意までして、主人に、「この人を見てやってください。費用がよけいにかかったら、帰りがけに、わたし　が支払います」と言った（ルカ 10：35）。

物語が終わると、イエスは魂まで見通すような目つきで、律法学者の方をじっとごらんになって、「この 3 人のうち、だれが強盗に襲われた人の隣り人になったと思うか」と言われた（ルカ　10：36）。 律法学者は、それでも、サマリヤ人という名を口にしたくなかったので、「その人に慈悲深い行いをした人です」と答えた。するとイエスは、「あなたも行って同じようにしなさい」と言われた（ルカ　10：37）。 こうして、「わたしの隣り人とはだれのことですか」という質問は永久に答えられた。キリストは、われわれの隣り人とは、われわれ属している教会や信仰の隣人だけではないことをお示しになった。それは人種、皮膚の色、あるいは階級差と何の関係もない。われわれの隣り人は、われわれの助けを要している一人一人である。われわれの隣り人は、敵から傷つけられている魂の一人一人である、われわれの隣り人は、神の財産である人間の一人一人である。

よいサマリヤ人の物語の中で、イエスは、ご自分とご自分の使命について描写された。人はサタンから欺かれ、傷つけられ、奪われ、台無しにされて、滅びるがままにうち捨てられている。だが救い主は、われわれの無力な状態をあわれんでくださった。主は、われわれを救うために、ご自身の栄光を捨てられた。主は、われわれが死ぬばかりになっているのをこらんになって、われわれの身代りとなられた。主は、われわれの傷をいやされた。主はご自身の義の衣でわれわれをおおわれた。主は、われわれのために安全な避難場所を備え、ご自分で費用を払って、われわれのために完全な用意をされた。主は、われわれをあがなうために死なれた。ご自身の模範をさし示して、主は、従う者たちにこう言われる、「これらのことを命じるのは、あなたがたが互に愛し合うためである」。「わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互に愛し合いなさい」（ヨハネ 15：17、13：34）。 律法学者がイエスに質問したことは、「何をしたら……」であった（ルカ 10：25）。するとイエスは、神と人とに対する愛を義の総計として認め、「そのとおり行いなさい。そうすれば、いのちが得られる」と言われた（ルカ 10：28）。

サマリヤ人は、親切な愛の心の命令に従い、そのことによって、律法を行う者であることを示した。キリストは律法学者に、「あなたも行って同じようにしなさい」とお命じになった（ルカ 10：37）。ただ口で言うばかりでなく、行うようにということが、神の子らに期待されている。「『彼におる』と言う者は、彼が歩かれたように、その人自身も歩くべきである」（Ⅰヨハネ 2：6）。 この教訓は、それがイエスの口から出た時におとらないほど今日も、この世にとって必要である。利己主義と冷たい形式主義が愛の火をほとんど消してしまい、品性を香り高いものとする美徳を追い払ってしまった。キリストのみ名を称する多くの者は、クリスチャンはキリストを表わさねばならないという事実を忘 れている。家庭の中において、隣近所において、教会の中において、われわれがどこにいようと、またわれわれの職業が何であろうと、ほかの人の幸福のために実際に自己犠牲を払うのでなければ、われわれは口では何と言おうとも、クリスチャンではない。

キリストは、ご自分の関心を人類の関心と結びつけられた。そして主は、人類を救うために、われわれがキリストと一体となるように求めておられる。「ただで受けたのだから、

ただで与えるがよい」とイエスは言われる（マタイ 10：8）。罪はすべてのわざわいの中で最大のものであるから、われわれは罪人を憐れみ、助けねばならない。まちがいを犯して、恥しさと愚かさを感じている者がたくさんいる。彼らは、励ましのことばに飢えている。彼らは、自分の過失や誤りをながめて、ついにはほとんど絶望に追いやられる。このような魂を無視してはならない。もしわれわれがクリスチャンなら、われわれの助けを最も必要としている人からできるだけ遠く離れて向こう側を通り過ぎるようなことをしないであろう。苦悩のためにあるいは罪のために困りはてている人を見たら、これはわたしに関係のないことだとは決して言わないであろう。

「霊の人であるあなたがたは、柔和な心をもって、その人を正しなさい」（ガラテヤ 6:1）。信仰と祈りによって、敵の力をおし返しなさい。傷ついている人にいやしの香油となるような信仰と勇気のことばを語りなさい。たった一言の親切な励ましのことばで勝利するように力づけられたであろうものを、人生の大きな戦いに弱り果て、落胆してしまった人々がどんなに多いことだろう。われわれは、苦しんでいる魂のそばを通りすぎる時にはかならず、自分自身が神から慰めてもらった慰めをその魂に与えるようにつとめなければならない。

こうしたことはすべて律法の原則、――よいサマリヤ人の物語に例示され、イエスの一生にあらわされている原則の成就にすぎない。イエスのご品性は律法の真の意味をあらわし、隣人を自分自身と同じように愛するということがどういうことであるかを示している。こうして神の民が、どんな人に対しても同情と親切と愛とをあらわす時、彼らはまた天の規則の性格についてあかしをたてているのである。彼らは、「主のおきては完全であって、魂を生きかえらせ」るという事実をあかししているのである（詩篇　19：7）。この愛をあらわさない者は、彼があがめていると告白している律法を破っているのである。なぜなら、われわれ　が兄弟たちに対してあらわす精神は、神に対するわれわれの精神がどんなものであるかを宣　言しているからである。心のうちにある神の愛は、われわれの隣人に対する愛のただ一つの　泉である。「『神を愛している』と言いながら兄弟を憎む者は、偽り者である。現に見てい る兄弟を愛さない者は、目に見えない神を愛することはできない。…… 愛する者たち

よ。……もしわたしたちが互に愛し合うなら、神はわたしたちのうちにいまし、神の愛がわたしたちのうちに全うされるのである」（Ⅰヨハネ 4：20、11、12）。

第 55 章　見られるかたちでなく

一部のパリサイ人たちがイエスのところへやってきて、神の国はいつ来るのかとたずねた。バプテスマのヨハネが、「天国は近づいた」とのメッセージをラッパの音のように国中にひびきわたらせてからもう 3 年以上が過ぎていた（マタイ 3：2）。それなのに、これらのパリサイ人たちは、まだ神の国が建設された徴候を見なかった。ヨハネをこばみ、事ごとに　イエスに反対してきた人たちの多くは、イエスの使命は失敗したのだとほのめかしてい た。イエスは、「神の国は、見られるかたちで来るものではない。また『見よ、ここにある』『あそこにある』などとも言えない。神の国は、実にあなたがたのただ中にあるのだ」とお答えになった（ルカ　17：20、21）。神の国は心にはじまるのだ。神の国が来たこ　とを表示する世俗的な権力の現れをここかしことさがし求めてはならない。

主は、弟子たちの方をふり向いて、「あなたがたは、人の子の日を 1 日でも見たいと願っても見ることができない時が来るであろう」と言われた（ルカ　17：22）。わたしの使命には世俗的なはなやかさが伴っていないので、あなたがたは、わたしの使命の栄光を認めない危険がある。人性におおわれてはいるが、生命であり人の光であるお方があなたがたのうちにおられる現在の特権がどんなに大きなものであるかを、あなたがたは認めていない。いまあなたがたが神のみ子と共に生活し共に語っているこの機会を、あこがれの思いをもってふりかえる日が来るであろう。

利己心と世俗的な思いのために、イエスの弟子たちでさえ、イエスが彼らにあらわそうとしておられる霊的な栄光を理解できなかった。弟子たちが救い主の性格と使命とを十分に理解したのは、キリストが父のみもとへ昇天され、信者たちに聖霊が降下してからであった。彼らはみたまのバプテスマを受けてから、自分たちが栄光の主の前にいたのだということに気がつきはじめた。　キリストの言われたことが思い出されるにつれて、彼らは、心が開かれて預言をさとり、キリストが行われた奇跡を理解したのであった。イエスの一生のふしぎな　ことが彼らの目の前を通りすぎた。すると彼らは、夢からさめた人たちのようであった。「言（ことば）は肉体となり、わたしたちのうちに宿った。わたしたちはその栄光を見た。

それは父のひとり子としての栄光であって、めぐみとまことに満ちていた」ということに彼らは気がついた（ヨハネ 1：14）。キリストは、堕落したアダムのむすこ、むすめらを救うために、実際に神のみもとから罪の世界においでになったのである。弟子たちは、このことをさとった時、自分たちが非常につまらない人間に思えた。破らは、イエスのみことばとみわざを繰り返し繰り返し語るのにあきなかった。彼らは、イエスの教えをこれまでかすかにしか理解していなかったが、それが、いまは新しい啓示となった。聖書は彼らにとって新しい本となった。

弟子たちがキリストについてあかししている預言を調べた時、彼らは、神とまじわり、ご自分がこの地上にお始めになった働きを完結するために天に昇られたお方について学んだ。彼らは、神の力の助けなしにはどんな人間も理解することのできない知識がキリストのうちに宿っているという事実を認めた。王たち、預言者たち、義人たちが予告していたお方の助けが必要だった。彼らは、キリストの性格と働きについての預言の描写を驚きの念をもって繰り返し繰り返し読んだ。彼らは、聖書の預言を、何とかすかにしか理解していなかったことだろう。キリストについてあかししている大真理を納得することが何と遅かったことだろう。キリストが人々の中に住んでおられ時、屈辱のうちにあられるキリストを見て、彼らは、キリストの受肉の神秘、すなわちキリストの二重の性格を理解しなかった。彼らの目はふさがれていたので、彼らは人性のうちにある神性を十分に認めなかった。しかし聖霊の光を受けてから、彼らはキリストにもう 1 度お会いしたい、そしてその足下にすわりたいと、どんなにかあこがれたことだろう。彼らは、キリストのみもとに行って、自分たちの理解できな　い聖句を説明していただきたいとどんなに願ったことだろう。そうしたらどんなに注意深く　彼らはキリストのみことばに耳をかたむけることだろう。「わたしには、あなたがたに言う　べきことがまだ多くあるが、あなたがたは今はそれに堪えられない」と言われた時、キリス　トはどんなおつもりだったのだろう（ヨハネ 16：12）。その全部をどんなにか知りたいことだろう。彼らは、自分たちの信仰が弱く、考え方がまとをはずれていたために、現実を理解　しなかったことを悲しんだ。

人々がキリストを受け入れる備えができるように、キリストの来臨を宣べ伝え、ユダヤ国民と世界の人々の注意をキリストの使命に向けるために、1 人の先駆者が神からつかわされていた。ヨハネが布告したふしぎなお方は 30 年以上にわたって人々の中におられたが、彼らはそのお方が神からっかわされたお方であることを実際に知らなかった。弟子たちは、自分たちの考え方が世の全般的な不信に影響さ れ、理解がくもったことについて後悔につきまとわれた。この暗い世界の光であられるお方は、暗黒の中に輝いておられたが、彼らはその光がどこからきているかをさとらなかった。なぜ自分たちはキリストから譴責されなくてはならないような生活を送ったのだろうと、彼らは自問した。彼らはしばしばキリストの会話をくりかえし、なぜわれわれは世俗的な考慮や祭司たちとラビたちの反対のために頭を混乱させて、モーセよりも偉大なお方がわれわれの中におられることや、ソロモンよりも賢いお方がわれわれを教えておられることをさとらなかったのだろう、われわれの耳は何とにぶく、われわれの理解力は何と弱かったことだろうと言った。

トマスは、ローマの兵士たちから受けられた傷口に指を突っこんでみるまでは信じようとしなかった。ペテロは、屈辱と拒絶を受けられたイエスをこばんだ。このような苦痛の思い出が、はっきりした形で浮んだ。彼らは、イエスといっしょにいたのに、イエスを知りもしなければ、理解もしなかった。しかしいま自分たちの不信仰を認めた時、彼らの心は、こうした事がらに動かされた。 祭司たちと役人たちがいっしょになって、キリストに従う者たちに反対し、彼らを法廷に引っぱり出し、獄に投げ込んだ時、彼らは、「御名のために恥を加えられるに足る者とされたことを喜」んだ（使徒行伝 5：41）。彼らは、人々と天使たちの前で、自分たちがキリストの栄光を認め、一切のものを失ってもキリストに従うことを選んだことを喜んで証言した。

使徒時代と同じように今日も、天来のみたまの光がなければ、人はキリストの栄光を認めることができないことは事実である。真理と神の働きは、世を愛する妥協的なキリスト教によっては理解されない。主に従う者たちは、安楽な道、世俗的な名誉や世俗と一致した道にいない。彼らは苦労と屈辱と非難の道に、また「もろもろの支配と、権威と、やみの世の主権者、また天上にいる悪の霊に対する戦い」の第一線のはるか前方にいる（エペソ 6:

12）。そしていまも、キリストの時代と同じように、彼らは現代の祭司たちとパリサイ人たちによって誤解され、非難され、圧迫されている。

神の国は見えるかたちで現われない。神の恵みの福音は、克己の精神を伴っているので、決して世の精神と一致するはずがない。この両方の原則は互いに相反するものである。「生れながらの人は、神の御霊の賜物を受けいれない。それは彼には愚かなものだからである。また、御霊によって判断されるべきであるから、彼はそれを理解すろことができない」（Ⅰコリント 2：14）。しかし今日、宗教界には、自分たちが信じる通りに、キリストのみ国を、この地上に、現世の支配権をもった国として建設するために働いている人たちが大勢いる。彼らは主イエスを、この世の王国の主権者、世の法廷、軍隊、議会、王宮、市場の主権者にしたいと望むのである、彼らは、主が人間の権威によって施行される法律を通して統治されるのを期待する。キリストがいまみずからこの地上におられないので、彼らは、キリストの代理をつとめ、キリストのみ国の律法を施行しようとする。このような国を建設することは、ユダヤ人がキリストの時代に希望したことである。もしキリストが、現世の主権を確立され、彼らが神の律法とみなしているものを施行され、彼らを神のみこころの解説者とし、神の権威の代理人とされる気があったら、彼らはイエスを受け入れたのである。しかしキリストは、「わたしの国はこの世のものではない」と言われた（ヨハネ 18：36）。主はこの世の王座を受けようとされなかった。

イエスの在世当時の政治は堕落していて、圧制的であった。棄てておけない悪弊――搾取、偏狭、暴虐な残酷さがいたるところに見られた。それでも救い主は、社会改革を試みられなかった。主は国民の悪弊を攻撃したり、国民の敵を非難したりされなかった。主は、権力者たちの権威や行政に干渉されなかった。われわれの模範であられたえ方は、現世の政治から遠ざかっておられた。それは、主が人々の不幸に対して無関心であられたからではなく、これを救う方法がただ人間の外面的な手段にはなかった　からである。効果があるためには、救済策は個人に及び、心を生まれかわらせねばならないのである。

キリストのみ国は、法廷や会議や立法議会などの決定や、世俗的に有力な人たちの後援によってではなく、聖霊の働きを通して、キリストの性質が人間性のうちにうえつけられる

ことによって、建てられるのである。「彼を受けいれた者、すなわち、その名を信じた人々には、彼は神の子となる力を与えたのである。それらの人は、血すじによらず、肉の欲によらず、また、人の欲にもよらず、ただ神によって生れたのである」（ヨハネ 1：12、13）。ここに人類を高めろことのできるただ一つの力がある。そしてこの働きをなしとげるために人間のできることは、神のみことばを教え、実行することである。コリントという町は、人口が多くて、富裕で、言いようもない異教の悪徳にけがれた邪悪な都市であった。使徒パウロがこの町で伝道を始めた時、彼は、「わたしはイエス・キリスト、しかも十字架につけられたキリスト以外のことは、あなたがたの間では何も知るまいと、決心した」と言った（Ⅰコリント 2：2）。のちに彼は、かつて最もいまわしい罪にけがれていた人たちに手紙を書いて、「しかし、あなたがたは、主イエス・キリストの名によって、またわたしたちの神の霊によって、洗われ、きよめられ、義とされたのである」。「わたしは、あなたがたがキリスト・イエスにあって与えられた神の恵みを思って、いつも神に感謝している」と言うことができた（Ⅰコリント 6：11、1：4）。

いまも、キリストの時代と同じように、神の国の働きは、世の支配者たちに認められ、人間の法律によって支持されることをやかましく求める人たちの手にはなくて、受け入れる人々に、「わたしはキリストと共に十字架につけられた。生きているのは、もはや、わたしではない。キリストが、わたしのうちに生きておられるのであろ」とのパウロの経験をさせるような霊的真理を、キリストのみ名によって民に宣言する人たちの手にあるのである（ガラテヤ 2：19、20）。その時彼らは、パウロのように、人々を益するために働くのである。「神がわたしたちをとおして勧めをなさるのであるから、わたしたちはキリストの使者なのである。そこで、キリストに代って願う、神の和解を受けなさい」とパウロは言った（Ⅱコリント 5：20）。

第 56 章　子供たちを祝福される

イエスはいつでも子供を愛されるお方であった。イエスは彼らの子供らしい共感と、うちとけた気取らない愛を受け入れられた。彼らの純潔な口から出る感謝の賛美はイエスの耳には音楽にきこえ、狡猾（こうかつ）で偽善的な人たちと接触して心が重くなられた時、その精神を生きかえらせた。救い主はどこへ行かれても、そのおだやかな顔つきと、やさしく親切な態度によって、子供たちの愛情と信頼とをかち得られた。　ユダヤ人の間では、子供たちをラビのところにつれて行き、手をのせて祝福してもらう習慣があった。ところが救い主　の弟子たちは、主が大事な働きをしておられるので、そんなことに邪魔されてはならないと　思っていた。母親たちが、小さな子供たちをつれてイエスのところへやってくると、弟子た　ちは面白くない顔で彼らをながめた。彼らは、この子供たちがあまり幼いので、イエスのみ　もとにきても益を受けることはないと考え、主は子供たちがそばにくることをお喜びになら　ないと結論した。しかし主がお喜びにならなかったのは弟子たちのことであった。救い主は、子供たちを神のみことばに従って訓練しようとつとめている母親たちの心配と重荷を理解さ　れた。主は彼らの祈りを聞いておられた。主ご自身が彼らをみもとに引きよせられたのであ　った。

1 人の母親が子供をつれてイエスに会いに行くため家を出た。途中彼女は隣の人に自分の用向きを 話した、するとその隣人も自分の子供たちをイエスに祝福していただきたいと願った。こうして数人の母親たちが子供たちをつれて一緒にやってきた。中には幼児の年令をすぎて、少年少女の年ごろの子供たちもいた。母親たちがその願いを封ち明けると、イエスは、その内気な涙ぐましいたのみを、同情をもってお聞きになった。しかし主は、弟子たちが彼らをどう扱うかをごらんになるために待たれた。主は、弟子たちがイエスのために尽したつもりで母親たちを追い払うのをごらんになると、「幼な子らをわたしの所に来るままにしておきなさい。止めてはならない。神の国はこのような者の国てある」と言って、彼らのまちがいを小された（マルコ 10：14）。主は、子供たちをご自分の腕に受けとり、彼らの上に手をおき、彼らが受けにやってきたその祝福をお与えになった。

母親たちは慰められた。彼らはキリストのみことばに力づけられ、祝福されて家へ帰った。彼らは、新しい元気をもって重荷をとりあげ、予供たちのために希望に満ちて働く力が与えられた。今日の母親たちも、同じ信仰をもって主のみことばを受け入れるのである。キリストは、人として人々の中に生活された時とまったく同じに、今日も個人的な救い主である。主は、ユダヤで小さい子らを両腕にいだかれた時とまったく同じに、今日も母親たちを助けてくださるお方である。われわれの家庭の子供たちは、昔の子供たちと同じように、キリストの血潮で買われた者である。

イエスはどの母親の心の重荷もご存知である。貧乏や不自由と戦った母親をお持ちになったイエスは、苦労している母親の一人一人に同情される。カナン人の女の心配を除いてやるために遠い道を行かれたイエスは、今日の母親たちのためにも同じことをしてくださるのである（マタイ 15：22 参照）。ナインのやもめに 1 人息子を返しておやりになったイエス、また十字架上の苦悶のさなかにもご自分の母のことをおぼえておられたイエスは、今日も母親の悲しみに心動かされる。どの悲しみにも、どの必要にも、イエスは、慰めと助けをお与えになるのである。 母親たちは、自分たちの悩みをたずさえてイエスのみもとに行きなさい、彼らは、子供たちを治めるのに助けとなる十分な恵みを見いたすであろう。救い主の足もとに重荷を置きたいと願うすべての母親のために、門は開かれている。「幼な子らをわたしの所に来るままにしておきなさい」と言われたイエスは、母親たちが子供たちをイエスに祝福してもらうためにつれてくるようにといまでも招いておられる（マルコ 10：14）。母親の腕のなかにある赤ん坊てさえも、祈る母親の信仰によって全能者のかけにやとろのである。パ　フテスマのヨハネは、生まれた時から聖霊に満たされていた。もしわれわれが神と美じわろ　生活をしているならば、われわれもまた、神のみた柔かわれわれの子供たちを、生れ落ちた　ときから、形づくってくださることを期待できるのである。

イエスはこ自分のもとにつれてこりれた子供たちのうちに、主の恵みの相続人またキリストのみ国の民となる男女をごらんになったが、その中のある者たちは、キリストのために殉教老となるのであった。イエスは、これらの子供たちがみことばに封を傾け、世才がたけて強情な大人たちよりもはるかにたやすくイエスを救い主として受け入れることをご存知で

あった。イエスはお教えになる時、子供たちの水準にまでくだられた。天の君であられるイエスは、子供たちの質問に答えることや、大切な教訓を彼らの幼稚な理解力に向くようにわかりやすくすることをおろそかにされなかった。イエスは彼らの頭に真理の種をうえつけられたが、それは後年になって身を出し、永遠の生命にいたる実を結ぶのであった。

子供たちは今でも福音の教えを最も素直に受け入れる。彼らの心は天来の感化力に対して開かれ、受けた教訓を固くもちつづける。小さい子供たちは、それぞれの年令にふさわしい経験をもったクリスチャンとなることができる。彼らを霊的な事がらに教育する必要がある。両親は、子供たちかヤリストのご品性に型どって品性を形成するように、あらゆる便宜を彼らに与えねばならない。 父と母は、その子供たちを主の家族の子供として、すなわち天のために教育するように委託れた者と みなすべきである。われわれは鈴供たちに、われわれ自身がキリストから学ぶ教訓を、その若い頭脳が受け入れることができるにしたがって、すこしずつ天の原則の美しさをわからせながら与えねばならない。こうしてクリスチャンの家庭は一つの学校となり、そこではキリストご自身が主任教師となられ、両親が助手として奉仕するのである。

われわれは、子供たちの悔い改めのために働く時、罪の自覚の重要な証拠として激しい感情を期待してはならない。また彼らが悔い改める正確な時を知る必要もない。われわれは、彼らが罪をイエスに告白して、そのゆるしを願い、イエスが自らこの地上におられた時に子供たちを受け入れてくださったように、彼らをゆるし、受け入れてくたさることを信ずるように、彼らに教えねばならない。 子供たちは母を愛するから母に従うのだということを母親が彼らに教える時、彼女は子供たちにクリスチャン生活の最初の教訓を教えているのである。母の愛は子供たちにキリストの愛を代表しているのであって、母親に信頼し従う子供たちは、救い主に信頼し従うことを学んでいるのである。

イエスは、子供たちのお手本であられたが、また父親の模範でもあられた。主は権威をもっている者としてお語りになったので、そのみことばには力があった。しかし無作法で乱暴な者たちとのまじわりには、どんな時にも、一つも不親切なことばや無作法なことばを用いられなかった。心のうちにあるキリストの恵みは、天来の威厳と礼儀正しさについての感

覚を与える。それはどんな苛酷なものもやわらげ、粗野で不親切なものをすべて抑制する。それは父親と母親に、自分たちがとり扱われたいと願うように、子供たちをものわかりのよい者としてとり扱うようにさせる。

両親がたよ、あなたがたか子供たちを教育する時に、神が自然界の中にお与えになった教訓を学びなさい。なでしこやばらやゆりを栽培するとしたら、あなたがたはどうするだろうか。どんなやり方で、枝や葉をあんなに美しく茂らせ、形のよい美しいものに仕立てるかを園芸家にたずねなさい。彼は、手荒な扱い方や無理な手入れは弱い茎を痛めるだけだから、そんな育て方は決してしないと教えてくれるだろう。彼は、こまかい注意を何度も繰り返して育てたのてある。彼は、土をしめらせ、成長する植物を激しい突風や焼けつく太陽から守ったのである。その時神がその植物を茂らせ、美しい花を咲かせてくださったのである。あなたがたの子孔供たちをとり扱う時、園芸家の方法に従いなさい。やさしいとり扱い、愛の奉仕によって、子供たちの品性をキリストのご品性の型にならって形づくるように努力なさい。

神に対する愛と、お互いの間の愛を表現するように奨励なさい。世の中に無情な男女が多い理由は、真の愛情が弱さとみなされ、それが阻止され、おさえつけられてきたからてある、こうした人々のよい面の性質は、子供の時に押さえつけられたのてあって、神の愛の光か彼らのつめたい利己主義を溶かさない限り、彼らの幸福は永遠に失われる。もしわれわれが自分の子供たちにイエスのやさしい精神と、天使たちがわれわれにあらわす同情心とを持ってもらいたければ、子供時代のおおらかな、愛の衝動を育てねばならない。 自然界の中にキリストを見るように子供たちに教えなさい。彼らを戸外の大木の下や、庭につれ出しなさい。そして、創造のあらゆるすばらしいみわさの中で、キリストの愛のあらわれを見ることを彼らに教えなさい。キリストが、すべての生物を支配する法則をお定めになったこと、主がわれわれのための法則をおつくりになったこと、しかもそれらの法則はわれわれの幸福と喜びのためであることを、彼らに教えなさい。長い祈りと退屈な訓戒で彼らを疲れさせるようなことをしないで、自然の実物教訓によって、神の律法に服従することを彼らに教えなさい。

あなたかたか、キリストに従う者として、子供たちから信頼されるようになったら、主がわれわれを愛されたその大きな愛を彼らに教えることはたやすい。救いの真理を明らかにし、子供たちにキリストを個人的な救い主としてさし示す時、天使たちはあなたがたのそばにいる。主は、ベツレヘムの赤ちゃんの尊い物 語に子供たちの興味を向ける力を父親と母親にお与えになる。まことにこのお方こそ世の望みなのである。 イエスが弟子たちに、子供たちがわたしのもとにくるのをとどめるなと言われた時、主は各時代のキリストに従う者たち——教会の役員に、牧師に、助手たちに、すべてのクリスチャンに語りかけておられた。イエスは子供たちをひきよせ、彼らをわたしのところにこさせなさいとお命じになる。それはあたかも、もしあなたがたがじゃまをしなかったら、子供たちはわたしのもとに来るのだと言っておられるかのようである。 キリストに似ないあなたの品性によって、イエスについて誤った印象を与えてはならない。あなたの冷淡さときびしさのために、子供たちをイエスからひき離してはならない。もしあなたが天国にいるなら天国は楽しいところではないと、彼らに思わせてはならない。宗教というものは子供たちの理解できないものであるかのように語ったり、子供たちが幼い時にキリストを受け入れることは期待できないかのようにふるまってはならない。キリストの宗教は陰気な宗教だとか、救い主のみもとに行くためには、人生を楽しいものにするようなものはすべて捨てなくてはならないなどという誤った印象を子供たちに与えてはならない。

聖霊が子供たちの心に働く時、みたまの働きに協力しなさい。救い主が彼らを召しておられるということ、彼らが元気のよい若さにあふれた年ごろに主に献身することぐらいキリストをおよろこばせすることはないということを彼らに教えなさい。 救い主は、ご自身の血で買われた魂を、限りないやさしさをもってごらんになる。彼らは主の愛によって当然主のものである。主は彼らを言うに言われぬ熱望をもってごらんになる。主の心は一番行儀のよい子供ばかりでなく、生れつき好ましくない品性の傾向を持っている者にもそそがれる。子供たちのこうした傾向にどれほど親の責任があるかを理解していない親が多い。彼らは自分が子供たちをそうしたまちがった者にしてしまったのに、そうした 1 先供たちをとり扱う知

恵とやさしさを持っていない。しかしイエスはそうした子供たちを同情をもってごらんになる。イエスは原因から結果をつきとめられる。

クリスチャンの働き人は、こうした子供たちを救い主に引きよせるのに、キリストの代理人となることができる。彼は知恵と機知とによって、彼らを自分の心に結びつけ、彼らに勇気と望みを与え、キリストの恵みによって、彼らの品性が一変し、その結果彼らについて「天国はこのような者の国である」と言われるようにすることができるのである（マダイ 19:14）。

第 57 章　「あなたに足りないことが 1 つある」

「イエスが道に出て行かれると、ひとりの人が走り寄り、みまえにひざまずいて尋ねた、『よき師よ、永遠の生命を受けるために、何をしたらよいでしょうか』」（マルコ 10：17）。 この質問をした若者は役人であった。彼は非常な財産家で、責任のある地位を占めていた。彼は、キリストが、ご自分のもとに連れてこられた子供たちに対してあらわされた愛を知った。キリストがやさしく子供たちを迎えて、その腕にだきあげられるのを見て、彼の心は救い主に対する愛に燃えた。彼はキリストの弟子になりたいという願いを感じた。深く心を動かされた彼は、キリストが道を歩いておられる時、あとを追いかけて行って、その足下にひざまずき、彼の魂にとってまた人類の一人一人にとって重要な質問、「よき師よ、永遠の生命を受けるために、何をしたらよいでしょうか」ということを、真心から熱心にたずねた（マルコ 10：17）。

するとキリストは、「なぜわたしをよき者と言うのか。 神ひとりのほかによい者はいない」と言われた（マルコ 10：18）。イエスは、この役人の真心をためし、彼がどういう風にキリストをよき師とみなしているかをさぐり出してみようと望まれたのであった。彼は自分が話しかけているお方を神のみ子として認めたのだろうか。彼の心の本当の思いはどうなのだろうか。 この役人は、自分自身の義を高く評価していた。彼は自分に何か欠けたところがあるとは本当に思っていなかったが、そうかといって全く満足しているわけでもなかった。彼は自分の持っていないもの、何か足りないものを感じていた。イエスが小さな子供たちを祝福されたように、自分を祝福してくださって、自分の魂の欲求を満たしてくださることがおできになるのではないだろうか。

この質問に答えて、イエスは、もし彼が永遠の生命を得たいなら、神のいましめに従うことが必要であるとお告げになった。そしてイエスは、同胞に対する人の義務をあらわしている幾つかのいましめを引用された。役人の答は肯定的で、「それらのことはみな、小さい時から守っております」。「ほかに何が足りないのでしょう」であった（ルカ 18：21、マタイ 19：20）。 キリストは、あたかもこの若者の生活を見通し、その品性をさぐられるかの

ように、彼の顔を見つめられた。イエスは、彼を愛され、彼の品性を実質的に変えるような平安と恵みと喜びを与えたいと熱望された。イエスは、「あなたに足りないことが一つある。帰って、持っているものをみな売り払って、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に宝を持つようになろう。そして、わたしに従ってきなさい」と言われた（マルコ 10：21）。 キリストはこの若者にひきつけられた。イエスは、この若者が「それらの事はみな、小さい時から守っております」と主張したことばが真心か出たものであることをご存知であ った（マルコ 10：20）。あがない主は、心をささげることと、クリスチャンの慈善が必要であることとを認めさせる識別力を彼のうちに起こしたいと熱望された。イエスは、この若者 のうちにへりくだって悔い改めた心が起こり、彼が神にささぐべき最高の愛を意識し、その 愛の足りないところをキリストの完全によっておおっていただくのを見たいと熱望された。

イエスは、もしこの若い役人が救いの働きにイエスの共労者となるなら、主にとってちょうど必要な助けとなることをお知りになった。もし彼がキリストのみちびきに従うなら、彼は善のために一つの力となるであろう。この役人は、きわだってキリストを代表することができたであろう。なぜなら彼は、もし救い主に結合するなら、人々の間で神の力となることのできる資格を備えていたからである。キリストは、彼の性格をごらんになって、彼を愛された。この役人の心に、キリストに対する愛が目覚めてきた。愛は愛を生むのである。イエスは、彼がご自分の共労者となろのを見たいと望まれた。イエスは、彼をご自分と同じように、神のみかたちをうつす鏡にしたいと熱望された。イエスは、彼のすぐれた品性を啓発し、それを主のご用のためにきよめたいと熱望された。もしこの役人がその時キリストに献身していたら、彼は主のこ臨在の雰囲気のうちに育ったのである。もし彼がそうなることを選択していたら、彼の将来はどんなに異なったものとなったことだろう。

「あなたに足りないことが一つある」。「もしあなたが完全になりたいと思うなら、帰ってあなたの持ち物を売り払い、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に宝を持っようになろう。そして、わたしに従ってきなさい」とイエスは言われた（マルコ 10：21、マタイ 19：21）。キリストはこの役人の心を読まれた。彼にはただ一つ足りないことがあったが、しかしそれは重大な原則であった。彼はその魂のうちに神の愛が必要だった。の足りないと

ころを補わなければ、それは彼にとって致命傷となるのである。彼の性質全てがだめになってしまうのである。甘やかしておくと、利己心がますます強くなるだろう。彼が神の愛を受け入れるためには、自我に対する最高の愛を克服しなければならない。

キリストはこの男を試みられた。イエスはこの男に、 天の宝と世俗的な偉大さのどちらかを選ぶように要求された。もし彼がキリストに従うならば、天の宝が保証された。しかし自我を放棄しなければならない。彼の意思はキリストに支配されねばならない。神の聖潔そのものがこの若い役人に提供された。彼は神の子となり、キリストと共に天の宝を受け継ぐ者となる特権が与えられた。しかし彼は十字架をとりあげて、克己の道をキリストに従わねばならない。 キリストのことばは、この役人にとって、実に、「あなたがたの仕える者を、きょう、選びなさい」との招きであった（ヨシュア 24：15）。選択は彼にまかされた。イエスは彼の改心を熱望しておられた。イエスは、彼の品性の欠点をお示しになり、そしてこの若者がこの問題をおしはかって考えた時、何という深い関心をもってその結果を見守られたことだろう。もし彼がキリストに従うことを決心するなら、彼はどんなことにおいてもキリストのみことばに従わねばならない。彼は自分の野心的な計画を捨てなければならない。何という熱心な思いと魂のかわきをもって、キリストは、この若者が神のみたまの招きに応ずることを望みながら、彼をごらんになったことだろう。

キリストは、この役人がクリスチャン品性を完成できるただ一つの条件を示された。キリストのみことばは、きびしく強要的に思えたが、しかしそれは知恵のことばであった。この役人が救われる唯一の望みは、そのみことばを受け入れ、これに従うことにあった。彼の高い地位と財産が、彼の品性に微妙な悪い影響を及ぼしていた。そうしたものに執着していると、彼の愛情の中から神が押しのけられるであろう。多くても少なくても、神にさし出さないでおくことは、彼の道徳的な力と能力とを低下させるようなものをとどめておくことになるのであった。なぜならこの世の物を大事にしていると、それがどんなにあてにならない無価値なものであっても、それはすっかり心を奪うようなものとなるからである。 役人はキリストのみことばの意味を全部すぐにさとって、悲しく思った。もし彼が提供された賜物の価値を認めたら、彼はすぐにキリストに従う者の 1 人として加わっただろう。彼はユダヤ人

の名誉ある議会の議員だったので、サタンは有望な前途で彼を誘惑していた。彼は天の宝がほしかったが、自分の富によってもたらされるこの世の特典もほしかった。彼はこんな条件があることが残念だった。彼は永遠の生命を望んだが、犠牲は払いたくなかった。永遠の生命の代価は大きすぎるように思えた。そこで彼は、「悲しみながら立ち去った。たくさんの資産を持っていたからである」（マタイ 19：22）。

神の律法を守ってきたという彼の主張は欺瞞であった。彼は、富が彼の偶像であることをあらわした。世俗が彼の愛情の中で首位を占めている間は、彼は神のいましめを守ることができなかった。彼は物をお与えになった神よりも、神がお与えになった物を愛した。キリストはこの若者にご自身との交わりを申し出られた。イエスは、「わたしに従ってきなさい」と言われた。しかしこの役人にとって、救い主は、人々の間における彼自身の名前や、彼の財産ほど大事ではなかった。目に見えない天の宝のために、目に見えるこの世の宝を捨てることはあまりに大きな冒険であった。彼は、永遠の生命の申し出をことわって立ち去り、その後は世俗が彼の礼拝を受けることになった。幾千の人々がキリストと世俗をはかりにかけて、このきびしい試練を味わっている。そして多くの者が世俗をえらぶ。この若い役人と同じように、彼らは、「わたしはこの人をわたしの指導者とすまい」と心のうちに言いながら、救い主から離れて行くのである。

この若者に対するキリストの態度は、一つの実物教訓として示されている。神は、神のしもべの一人一人が従わねばならない行為の法則をわれわれにお与えになった。それは、神の律法への服従であるが、ただ義務的に従うことではなくて、生命へ至る服従であって、品性にあらわされる。神は、神の国の民になりたいと望むすべての人のために、品性についての神ご自身の標準をおたてになった。キリストの共労者となる者、「主よ、わたしの持っているもののすべて、わたしの全人格はあなたのものです」と言う者だけ

が、神の息子娘として認められる。天国を望みながら、しかも定められた条件をみて離れ去ることがどういうことになるかを、人はみな考えてみなければならない。キリストに、「いやです」と言うことが、何を意味するかを考えなさい。この役人は、「いや、わたしはあなたに全部をさしあげられません」と言った。われわれはこれと同じことを言うだろうか。

救い主は、神がわれわれになすようにお与えになった働きをいっしょにしてあげようと申し出ておられる。主は、神がわれわれにお与えになった金銭を、世にみわざを進めるために用いなさいと申し出ておられる。この方法によってのみ、主はわれわれをお救いになることができるのである。

この役人の財産は、彼が忠実な家つかさになるように彼に委託されたのであった。彼はそうした財産を、困っている人々に恵むために分配すべきであった。同様に神は、今も、人に金銭、才能、機会を委託されるが、それは、彼らが神の代理人となって貧しい人々や苦しんでいる人々を助けるためである。委託された賜物を神の望まれる通りに用いる者は、救い主と共に働く者となる。彼は魂をキリストに導く。なぜなら彼はキリストのご品性の代表者であるからである。 この若い役人と同じように、高い信任の地位にあって、大きな財産を持っている人々にとっては、キリストに従うためにすべてを放棄することは犠牲が大きすぎるように思えるかもしれない。しかしこれはキリストの弟子になりたいと望むすべての人の行為の法則である。服従に欠けるものは何も受け入れられない。自我を屈服させることがキリストの教えの本質である。それはしばしば高圧的とも思えるようなことばで示されたり、命じられたりする。なぜなら、心のうちにいだかれる時全人格を破壊するようなものを切り捨てる以外に、人を救う道がないからである。

キリストに従う者たちが主ご自身のものを主にお返しする時、彼らは宝をたくわえているのであって、それは、彼らが、「良い忠実な僕よ、よくやった。……主人と一緒に喜んでくれ」とのみことばをきく時に、彼らに与えられるのである（マタイ 25：23）。「彼は、自分の前におかれている喜びのゆえに、恥をもいとわないで十字架を忍び、神の御座の右に座するに至ったのである」（ヘブル 12：2）。あがなわれた魂、すなわち永遠に救われた魂を見る喜びこそは、「わたしに従ってきなさい」と言われたキリストのみ足跡に従うすべての者にとって報いである。

第 58 章　「ラザロよ、出てきなさい」

キリストの一番しっかりした弟子たちの中にベタニヤのラザロがいた。キリストを信じるラザロの信仰は、初めてお会いした時から強かった。キリストに対する彼の愛は深く、彼は救い主から非常に愛された。このテザロのためにキリストの最高の奇跡が行われた。救い主はご自分の助けを求めるすべての者を祝福された。主は、人類家族のすべての人を愛されるが、しかしある人々に対しては特に目だってやさしいまじわりによって結ばれておられる。イエスの心は、ベタニヤの家族に対して強い愛情のきずなで結ばれていた。そしてこの家族　の 1 人のために、キリストの最もふしぎなみわざがなされたのであった。

イエスはたびたびラザロの家でくつろがれた。救い主にはご自分の家庭がなかった。主は、友人や弟子たちのもてなしを受けられたが、それでもしばしば疲れて人とのまじわりがほしくなられると、怒っているパリサイ人たちの疑いやねたみからのがれて、このなごやかな家族のところへおいでになることを喜ばれた。ここにイエスは、心からの歓迎と、純粋できよい友情を見いだされた。イエスは、ここでは、ご自分のことばが理解され、心にとめられることを知っておられたので、率直に、何の遠慮もなくお話になることができた。

救い主は、静かな家庭と、興味をもってご自分の話 を聞いてくれる人たちを喜はれた。主は人間的なやさしさ、礼儀、愛情を熱望された。主がいつも与えようとしておられる人の教えを受け入れた人たちは非常にめぐまれた。群衆が、ひらけた野原を通って、キリストについて行くと、主は自然界の美しさを彼らに説明された。神のみ手がこの世界を支えていることを彼らが認めるように、主は、彼らのさとりの目を開こうとされた。神の恵みといつくしみに対する感謝の思いを呼ひさますために、主は、聴衆の注意を、善人のためにも悪人のためにも、音もなくおりる露や、静かに降りそそく雨や、輝く日光に向けられた。 主は、それにもまして、神かこ自分の創造された人間をかえりみてくださることを、人々か認めるように望まれた。しかし群衆はなかなか理解しなかった。キリストは、公生涯における披労の多い戦いからの休息をベタニヤの家でとられた。ここで主は、理解のある聞き手に神の書を開かれた。こうして個人的にお会いになっている時に、キリストは、雑多な群衆には語ろう

とされなかったことを、聞き手たちに説明された。彼はご自分の友人たちに譬で語られる必要がなかった。

キリストがすはらしい教訓をお与えになる時、マリヤは敬虔で熱心な聞き手となって、その足下にすわった。ある時、マルタは、食事の支度の苦労に困ったあげく、キリストのみもとへきて、「主よ、妹がわたしだけに接待をさせているのを、なんともお思いになりませんか。わたしの手伝いをするように妹におっしゃってください」と言った（ルカ 10：40）。それは、キリストが初めてベタニヤにこられた時であった。救い主と弟子たちは、エリコから徒歩で、骨の折れる旅をしてこられた。マルタは彼らの疲れをねぎらうことに心をうばわれ、その熱心さのあまり、お客に対する当然の礼儀を忘れた。イエスは、おだやかな、忍耐強いことばで、「マルタよ、マルタよ、あなたは多くのことに心を配って思いわずらっている。しかし、無くてならぬものは多くはない。いや、一つだけである。マリヤはその良い方を選んたのだ。そしてそれは、彼女から取り去ってはならないものである」と言われた（ルカ 10：41、42）。マリヤは、救い主の口から出るとうといみことば、彼女にとっては地上のどんな高価な宝石よりもとうといみことばを心にたくわえていたのだった。

マルタにとって必要な「一つのもの」は、落ちついた、信心深い精神、未来の永遠の生命について知りたいというもっと強い熱望、霊的進歩に必要な徳であった。彼女は、過ぎ去ってしまうものに対する関心よりも、永遠に続くものに対する関心の方か必要だった。イエスは、こ自分の子らに、救いに至ろ知恵を与える知識を得るあらゆる機会をつかむように教えようと望まれる。キリストのみわさには、注意深く、かつ精力的な働き人か必要てある。マルタの女うな人たちか熱心に宗教活動をする広い分野がある。しかし彼らをまずマリヤといっしょに、イエスの足下にすわらせなさい。勤勉と敏速と精力とをキリストの恵みによってきよめなさい。その時、そのような生活は、征服されることのない善の力となるのである。

これまでイエスが休息されていた平和な家庭に不幸か起こった。ラザロが急に病気になったので、彼の姉妹たちは救い主に使いをやって、「主よ、ただ今、あなたが愛しておられる者が病気をしています」と言わせた（ヨハネ 11：3）。彼女たちは、兄弟を襲った病気の

激しさを見たが、キリストかとんな病気でも直すことがおできになることを知っていた。彼女たちはキリストが困りきっている自分たちに同情してくださると信じた。そこで、キリストにすくおいでくださるようにというさし迫った要求をしないで、「あなたが愛しておられる者が病気をしています」という信頼に満ちたことばを申し送っただけであった（ヨハネ 11:3）。姉妹たちは、キリストがすくに伝言に応じて、ペタニヤにお着きになったらすぐ自分たちのところにきてくださるものと思っていた。

姉妹たちは、イエスからのことはを熱心に待った。兄弟に生気があるかぎり、彼女たちは祈りながらイエスのおいでを待った。しかし使いの者は、イエスをお連れしないで帰ってきた。それても彼が、「この病気は死ぬほどのものではない」とのイエスのみこ　とばを伝えたので、姉妹たちは、ラザロが生きるという望みをすてなかった（ヨハネ　11：4）。彼女たちは、ほとんど意識不明の病人にやさしく望みと励ましのことばを語ろうと努めた。ラザロ　が死んだ時、姉妹たちはひどく失望した。しかし彼女たちは、キリストの支えの恵みを感じ、救い主を非難する気持になれなかった。　ラザロが死んだという知らせをキリストがきかれた時、弟子たちは、キリストがその知らせを冷淡に受け取られたように思った。キリストは、　彼らが予想したような悲しみをあらわされなかった。イエスは、彼らを見て、「この病気は　死ぬほどのものてはない。それは神の栄光のため、また、神の子がそれによって栄光を受け　るためのものてある」と言われた（ヨハネ 11：4）。イエスは、2 日間同じ場所にとどまられた。この遅延は弟子たちにとってふしぎであった。イエスがおられたら、あの不幸な家族　がどんなに慰められるだろうと彼らは思った。弟子たちは、ベタニヤの家族に対するイエス　の深い愛情をよく知っていたので、イエスが「あなたが愛しておられる者が病気をしていま　す」という悲しい伝言に応じられなかったことに驚いた。

2 日の間、キリストは、その伝言を心の中から忘れておられるようにみえた。キリストがラザロのことを口にされなかったからである。弟子たちは、イエスの先駆者であるバプテスマのヨハネのことを思った。ふしぎな奇跡を行う力をもっておられるイエスが、どうしてヨハネを獄の中で衰弱して非道な死に方をするがままにしておかれたのだろうと、彼らはふしぎに思ったのだった。そのような力を持っておられるのに、なぜキリストは、ヨハネの生

命を救われなかったのだろう。この質問はパリサイ入たちからもよくたすねられた。パリサイ人たちは、ご自分か神のみ子であるというキリストの主張に対して、答えることのできない議論としてこの質問を出した。救い主は、弟子たちに、試練と損失と迫害について警告しておられた。主は試練のうちに彼らを棄てられるのだろうか。自分たちはキリストの使命をまちがえたのではないだろうかと疑う者たちもいた。そしてみんなが深く思い悩んだ。

2 日待ってから、イエスは弟子たちに、「もう 1 度ユダヤに行こう」と言われた（ヨハネ 11：7）。弟子たちは、もしイエスがユダヤに行かれるのだったのなら、どうして 2 日間待たれたのだろうとふしぎに思った。しかしいま彼らの心を占めているのは、キリストと彼ら自身についての心配であった。彼らは主がたどろうとしておられる道に危険しか見ることができなかった。彼らは、「先生、ユダヤ人らが、さきほともあなたを石で殺そうとしていましたのに、またそこに行かれるのですか」と言った（ヨハネ 11：8）。するとイエスは、「1 日には 12 時間あるではないか」と答えられた（ヨハネ 11：9）、わたしは天父の導きの下にある。わたしが父のみこころを行っているかぎり、わたしの生命は安全である。わたしの 1 日 12 時間はまだ終っていない。わたしは、わたしの日の最後の残りに入った。しかしこの残りがまだある限り、わたしは安全である。

イエスはつづけて言われた、「昼間あるけば、人はっまずくことはない。この世の光を見ているからである」（ヨハネ　11：9）。神のみこころをなす者、神が示された道を歩む者にとって、つまずいて倒れるということはあり得ない。神の導きのみたまの光は、彼の義務　について明らかなさとりを与え、その働きの終りまで彼を正しく導く。「しかし、夜あるけ　ば、つまずく。その人のうちに、光がないからである」（ヨハネ 11：10）。自分自身でえらんだ道、神が召されたのではない道を歩む者は、つまずくであろう。彼にとって、昼は夜に　かわり、どこにいようとも、彼は安全ではない。　「そう言われたが、それからまた、彼らに言われた、『わたしたちの友ラザロが眠っている。わたしは彼を起しに行く』」（ヨハネ 11：11）。「わたしたちの友ラザロが眠っている」。何という感動させられることばだろう。何 という同精に満ちたことばだろう。弟子たちは、エルサレムへ行くことによって主が招こう　としておられる危険に心がうばわれて、ベタニヤの遺族のことをほとんど忘れていた。しか

しキリストはそうではなかった。弟子たちは心を責められた。彼らは、 キリストがもっとすばやく伝言に応じられなかったので、失望していた。彼らは、キリストがラザロとその姉妹たちにやさしい愛情を持っておられると思っていたのに、実際はそうでなかったのだ、そうでなければ主は使いの者といっしょに急いで行かれたはずだと、考えたくなっていた。しかし、「わたしたちの友ラザロが眠っている」ということばは、彼らの心のうちに正しい感情を呼びさました。キリストは悲しんでいる友人たちを忘れてはおられなかったのだと、彼らは確信した。

「すると弟子たちは言った、『主よ、眠っているのでしたら、助かるでしょう』。イエスはラザロが死んだことを言われたのであるが、弟子たちは、眠って休んでいることをさして言われたのだと思った」（ヨハネ 11：12、13）。キリストは、信じる子らにとって死は眠りであると言っておられる。彼らの生命はキリストとともに神のうちにかくれているのであって、最後のラッパが鳴りわたる時まで、死ぬ者はキリストのうちに眠るのである。 「するとイエスは、あからさまに彼らに言われた、『ラザロは死んだのだ。そして、わたしがそこにいあわせなかったことを、あなたがたのために喜ぶ。それは、あなたがたが信じるようになるためである。では、彼のところに行こう』」（ヨハネ 11：14、15）。トマスは、もし主がユダヤに行かれるなら、死が待ちかまえているとしか思えなかった。だが彼は覚悟をきめて、ほかの弟子たちに、「わたしたちも行って、先生と一緒に死のうではないか」と言った（ヨハネ 11：16）。彼は、キリストに対するユダヤ人の憎しみを知っていた。イエスの死をたくらむことが彼らの目的であったが、この目的は成功していなかった。なぜなら、イエスに定められた時の幾分かがまだ残っていたからである。この時の間、イエスは天使たちの守護を受けておられた。そして、ラビたちがイエスを捕らえて死に処することをくわだてているユダヤの地方においてさえ、どんな危害も、イエスにのぞむことはできなかった。

弟子たちは、キリストが、「ラザロは死んだのだ。そして、わたしがそこにいあわせなかったことを……喜ぶ」と言われたことばに驚いた。救い主は、悲しんでいる友人の家庭をわざと避けられたのだろうか。マリヤとマルタと死にかけているラザロがうちすてられたようにみえた。だが彼らは 1 人ぼっちではなかった。キリストはすべての光景をごらんになっ

ていて、ラザロの死後、あとに残された姉妹たちはキリストの恵みによって支えられた。イエスは、彼女たちの兄弟が強敵である死と戦っている時、彼女たちの引き裂かれた心の悲しみを目に見ておられた。主は、「ラザロは死んだのだ」と弟子たちに言われた時、心に激しい苦痛を感じられた。しかしキリストは、ベタニヤの愛する者たちだけのことを考えておられなかった。主は弟子たちを訓練することを考えられねばならなかった。天父の恵みがすべてのべをおおうことができるように、彼らは世に対して天父を代表する者となるのであった。彼らのために、主は、ラザロが死ぬことをおゆるしになった。もし主がラザロを病気から健康へ回復されたら、イエスの神としての性格についての最も絶対的な証拠であるこの奇跡は行われなかったのである。

もしキリストが病室におられたら、サタンはラザロに権力をふるうことができないので、ラザロは死ななかったであろう。生命を与えるお方であるイエスのおられるところでは、死は、ラザロをめがけて矢を放つことができなかったであろう。そこでキリストは離れておられた。主は敵に権力をふるわせておかれたが、それはご自分が敵を征服して撃退されるためであった。キリストは、ラザロが死の支配下にはいることをお許しになった。悲しむ姉妹たちは、兄弟が墓に横たえられるのを見た。彼女たちが兄弟の死に顔を見る時、あがない可三に対する彼女たちの信仰が激しく試みられることを主はご存知であった。しかし主は、姉妹たちの信仰が、いま経験している戦いを通して、ずっと大きな力となって輝き出ることをご存知だった。主は、彼女たちが耐えた苦痛の一つ一つをご自分も経験された。主は手間どられたとはいっても、彼らを愛しておられることに変わりはなかった。主は、　彼女たちのために、ラザロのために、ご自身のために、また弟子たちのために、勝利が得られることをご存　知だった。

「あなたがたのために」「あなたがたが信じるようになるためである」（ヨハネ 11：15）。神の導きのみ手を求めて手をさしのべているすべての者にとって、最も落胆している時が、神の助けが 1 番近い時である。彼らは自分たちの道の一番暗かったところを感謝をもってふりかえるであろう。「主は、信心深い者を試練の中から救い出」される（Ⅱペテロ 2：

9）。誘惑のたびに、試みのたびに、主はそこから彼らを、もっと固い信仰、もっと豊かな経験をもって、導き出される。

ラザロのところに行くのを遅らせることには、まだ主を受け入れていない人々に対するキリストの憐れみの目的があった。ラザロを死人の中からよみがえらせることによって、頑固で不信な民に、ご自分がほんとうに「よみがえりであり、命である」という別な証拠をお与えになるために、キリストは出かけるのを延ばされたのであった（ヨハネ 11：25）。主は、イスラエルの家の迷えるあわれな羊である民について、望みをまったく放棄することを好まれなかった。彼らがかたくなであるために、イエスの心は痛んでいた。憐れみ深い主は、ご自分が救い主であって、生命と不死を明らかにすることのできるただ 1 人のお方であるという証拠をもう 1 度彼らに与えようと意図された。これは祭司たちが誤解することのできない証拠となるのであった。これが、イエスがベタニヤに行くのを遅くされた理由であった。この最高の奇跡であるラザロのよみがえりは、キリストの働きと、神性についてのキリストの主張に、神の印をおすものであった。

ベタニヤへ行かれる途中、イエスは、いつもの習慣通り、病人たちや困っている人たちに奉仕された。町へお着きになると、イエスは、使者を姉妹たちのところへつかわして、到着をお知らせになった。キリストは、すぐに家へお入りにならないで、道ばたの静かな場所に立ちどまっておられた。友人や肉親の者たちが死んだ時にユダヤ人がやるような大げさな外面的な表現はイエスの精神に調和しなかった。主は、やとわれた泣き人たちの泣き叫ぶ声をきかれたので、騒がしい光景の中で姉妹たちに会いたいと思われなかった。会葬者たちの中には、この家族の親戚の人たちがいて、そのある者はエルサレムで高い責任の地位を占めている人たちだった。その中にはキリストの最も激しい反対者たちが何人かいた。キリストは彼らの意図を知っておられたので、すぐには姿をお見せにならなかった。

知らせはそっとマルタに伝えられたので、部屋の中のほかの人たちにはきこえなかった。マリヤは、悲しみに心を奪われていてそのことばが耳に人らなかった。マルタは、すぐ立ちあがると、主を迎えるために出て行ったが、マリヤは、マルタがラザロの葬られているところへ行ったのだろうと考え、泣き声もたてずに悲しみのうちに静かにすわっていた。 マルタ

は、イエスを出迎えるために急いだが、彼女の心は矛盾する感情に波立っていた。マルタは、イエスのお顔の表情に、いつもと変らないやさしさと愛情を読みとった。イエスに対する彼女の信頼は裏切られなかった。しかし彼女は、イエスも愛しておられた自分の愛する兄弟のことを思った。イエスがもっと早くきて下さらなかったために彼女の心にわき起こっている悲しみと、今でも主は自分たちを慰めるために何かをして下さるだろうという望みとで、彼女は、「主よ、もしあなたがここにいて下さったなら、わたしの兄弟は死ななかったでしょう」と言った（ヨハネ 11：21）。この姉妹たちは、泣き人たちのさわぎの中にあって、このことばを何度も何度も繰り返したのだった。

人としてまた神としての同情をもって、イエスは悲しみと心配にやつれたマルタの顔をじっとごらんになった。マルタは過ぎ去ったことをくどくど繰り返したいとは思わなかった。すべては、「主よ、もしあなたがここにいて下さったなら、わたしの兄弟は死ななかったでしょう」との悲痛なことばに表現されていた。しかしイエスの愛のお顔をじっと見ながら、彼女は、「しかし、あなたがどんなことをお願いになっても、神はか　なえて下さることを、わたしは今でも存じています」とっけ加えた（ヨハネ 11：21、22）。 イエスはマルタの信仰を励まして、「あなたの兄弟はよみがえるであろう」と言われた（ヨハネ 11：23）。イエスの答は、その場の変化について望みを起こさせるために言われたのではなかった。主は、　マルタの思いを、彼女の兄弟の現在の回復をこえて、義人のよみがえりに向けられた。主が　そうされたのは、彼女が、ラザロのよみがえりを通して、死んだすべての義人のよみがえり　についての保証と、義人のよみがえりが救い主の力によってなしとげられるという確信とを　みるためであった。

マルタは、「終りの日のよみがえりの時よみがえることは、存じています」と答えた（ヨハネ 11：24）。

イエスはなおマルタの信仰に正しい方向を与えようとして、「わたしはよみがえりであり、命である」と宣言された（ヨハネ 11：25）。キリストのうちには、借りたものでもなければ、ほかから由来したものでもない、本来の生命がある。「御子を持つ者はいのちを持」つ（Ｉヨハネ 5：12）。キリストの神性は、永遠の生命についての信者の確信である。「わ

たしを信じる者は、たとい死んでも生きる。また、生きていて、わたしを信じる者は、いつまでも死なない。あなたはこれを信じるか」とイエスは言われた（ヨハネ 11：25、26）。キリストはここでご自分の再臨の時を予期しておられる。その時、死せる義人は朽ちない者としてよみがえり、生ける義人は死を見ないで天へ移されるのである。キリストがラザロを死人の中からよみがえらせることによって行おうとしておられた奇跡は、死せるすべての義人のよみがえりを代表するのであった。キリストはみことばとみわざによって、ご自分がよみがえりの創始者であることを宣言された。まもなくご自分が十字架上で死のうとしておられたキリストは、よみの征服者として死の鍵をもって立ち、永遠の生命を与える権利と権力とを主張された。

「あなたはこれを信じるか」との救い主のことばに、マルタは、「主よ、信じます。あなたがこの世にきたるべきキリスト、神の御子であると信じております」と答えた（ヨハネ 11：26、27）。彼女は、キリストが語られたみことばの意味を全部理解したわけではなかったが、キリストの神性についての信仰と、キリストがみこころのままにどんなことでも行うことがおできになるという確信とを告白した。 「マルタはこう言ってから、帰って姉妹のマリヤを呼び、『先生がおいでになって、あなたを呼んでおられます』と小声で言った」（ヨハネ 11：28）。マルタはできるだけそっと知らせを伝えた。祭司たちと役人たちが、機会があったらイエスを捕らえようと、待ちかまえていたからである。泣き人たちの泣き声のために、彼女のことばは聞かれなかった。

知らせを聞くと、マリヤは急いで立ちあがり、緊張した顔つきで部屋を出た。彼女が墓に泣きに行ったのだろうと考えて、泣き人たちがあとをついて行った。マリヤは、イエスが待っておられるところへくると、イエスの足下にひざまずき、ふるえる唇で、「主よ、もしあなたがここにいて下さったなら、わたしの兄弟は死ななかったでしょう」と言った（ヨハネ 11：32）。泣き人たちの泣き声は彼女にとって苦痛だった。彼女は、イエスとだけ静かに二言三語りたかったからである。しかし彼女は、そこに居合わせた人たちの心にキリストに対するねたみやしっとが宿っていることを知っていたので、自分の悲しみを充分に表に出すことをひかえた。

「イエスは、彼女が泣き、また、彼女と一緒にきたユダヤ人たちも泣いているのをごらんになり、激しく感動し、また心を騒がせ」られた（ヨハネ 11：33）。主は集まっているみんなの心を読まれた。悲しみの表現として通っていることが、多くの者にとっては見せかけ　にすぎないことを、主はごらんになった。いま偽善的な悲しみを表している人々の中に、偉　大な奇跡を行うお方ばかりでなく、死入の中からよみがえらせられろラザロの死もまもなく　たくらむ人たちがいることをご存知だった。キリストは、彼らのみせかけの悲しみという衣　を引きはがすこともおできになった。しかし主は、その正しい怒りを抑えられた。主は、事　実のままに語ることのおできになることばを、口から 出されなかった。なぜなら、そこには、悲しみのうちに主の足下にひざまずきながら本当に主を信じている愛する者がいたからであ　る。

「彼をどこに置いたのか」とイエスはおたずねになった。「彼らはイエスに言った、『主よ、きて、ごらん下さい』」（ヨハネ 11：34）。彼らはいっしょに墓の方へ進んで行った。それは悲しみに満ちた光景であった。ラザロは大層愛されていたので、その姉妹たちは　心をたち切られるような思いで泣き、一方ラザロの友人だった人たちも、あとに残された姉　妹たちといっしょに涙を流した。人としてのこのような悲嘆を思い、また世の救いセがそば　に立っておられるのに、友人たちが死人についてこんなにも悲しみ苦しんでいるのをごらん　になって、「イエスは涙を流された」（ヨハネ 11：35）。イエスは、神のみ子であられたが、人性をとっておられたので、人の悲しみに心を動かされた。主のやさしい、憐れみに満ちた　心は、苦悩をごらんになることによっていつも同情をよび起こされる。主は泣く者と共に泣　き、喜ぶ者と共に喜ばれるのである。

しかし、イエスが泣かれたのはマリヤとマルタに対する人間的な同情のせいばかりではなかった。イエスの涙には、天が地よりも高いように、人間的な悲しみよりも深い悲しみがあった。キリストは、ラザロを墓から呼び出そうとしておられたのだから、ラザロのために泣かれたのではなかった。主は、いまラザロのために悲しんでいる多くの者が、生命でありよみがえりである主の死をまもなくくわだてるので、泣かれたのであった。しかし不信のユダヤ人に、イエスの涙を正しく解釈することがどうしてできよう。ある者たちは、イエスの

悲しみの原因として、イエスの目の前の外面的な事情しか見ることができないで、そっと「ああ、なんと彼を愛しておられたことか」と言った（ヨハネ 11：36）。またある者たちは、そこに居合わせた人々の胸に不信の種をまこうとして、嘲笑的に、「あの盲人の目をあけたこの人でも、ラザロを死なせないようには、できなかったのか」と言った（ヨハネ 11：37）。ラザロを救う力がキリストにあるのなら、なぜラザロを死なせたのかというのである。

キリストは、預言の目で、パリサイ人とサドカイ人の敵意をごらんになった。主は、彼らがキリストの死をくわだてていることをご存知だった。いま同情しているように見えるこれらの人々の中には、まもなく望みの戸口と神の都の門とを目の前に閉ざしてしまう者がいることを、主は知っておられた。まもなくキリストの屈辱と十字架の光景が起こり、それはエルサレムの滅亡へとつづくのであった。しかもその時には誰 1 人死者のために嘆き悲しむ者はないのであった。エルサレムにのぞもうとしていた報復がキリストの前にはっきりえがかれた。主は、エルサレムがローマの軍団によってかこまれるのをごらんになった。いまラザロのために嘆き悲しんでいる多くの者たちが、エルサレム包囲のうちに死に、彼らの死には何の望みもないことを、キリストは知っておられた。

キリストが泣かれたのは、目の前の光景のせいばかりではなかった。各時代の悲しみの重さがキリストの上にかかっていた。神の律法を犯した恐るべき結果を、主はごらんになった。主は、この世の歴史には、アベルの死をはじめとして、善悪の戦いにたえまがなかったことをごらんになった。幾年も後の世まで見わたされて、主は、人類の運命となる苦難と悲しみ、涙と死をごらんになった。イエスの心は、各時代すべての国の人類家族の苦痛によって刺しつらぬかれた。罪深い人類のわざわいはキリストの魂に重かった。主が人類のすべての苦しみを救いたいと熱望された時、その涙の泉が破れた。

「イエスはまた激しく感動して、墓にはいられた」（ヨハネ 11：38）。ラザロは岩のほら穴の中に寝かされていて、大きな石が入口におかれていた。「石を取りのけなさい」とキリストが言われた（ヨハネ 11：39）。マルタは、主がただ死人を見たいと望まれたのだと考えたので、死体は葬られてから 4 日もたっていてすでに腐りはじめていますと言って、反

対した。ラザロのよみがえりの前にマルタが言ったこのことばは、キリストの反対者たちに欺瞞が行われたのだと言わせる余地を与えなかった。これまでもパリサイ人たちは、

神の力の最もふしぎなあらわれについて、いつわりのことばを言いふらしていた。キリストは、ヤイロの娘をいのちによみがえらせられた時、「子供は死んだのではない。眠っているだけである」と言われた（マルコ 5：39）。彼女はちょっとの間しか病気をしていなくて、死ぬとすぐよみがえらせられたので、パリサイ人たちは、その子が死んだのではない、キリストがご自身言われたように眠っていただけなのだと断言した。彼らは、キリストが病気を直すことがおできにならないこと、またキリストの奇跡はごまかしであるということを明らかにしようと試みたのだった。だがこんどの場合、ラザロが死んでいたということを否定できる者は１人もなかった。

主が働きをしようとされると、サタンはだれかが反対するように働きかける。「石を取りのけなさい」とキリストは言われた。できるだけ、わたしの働きに道を備えなさい。しかしマルタの積極的で野心的な性質が表面にあらわれた。彼女は、腐りかけた体を見せたくなかった。人間の心は、キリストのみことばをなかなか理解できないので、マルタの信仰は、キリストの約束の真の意味を把握していなかった。キリストはマルタを責められたが、そのことばはこの上なくやさしく語られた。「もし信じるなら神の栄光を見るであろうと、あなたに言ったではないか」（ヨハネ 11：40）。なぜあなたはわたしの力について疑うのか。何の理由でわたしの要求に反対するのか。あなたはわたしのことばを持っている。もしあなたが信じるなら、あなたに神の栄光を見させてあげる。自然の不可能は、大能の神の働きを妨げることができない。懐疑と不信は謙遜ではない。キリストのみことばを絶対に信ずることこそ、真の謙遜であり、真に自己を放棄することである。

「石を取りのけなさい」（ヨハネ 11：39）。キリストは、石にそこをどきなさいとお命じになることもできたし、また石もその声に従ったであろう。キリストはご自分のそば近くの天使たちに石を取りのけるように命じることもおできになった。キリストのご命令に、目に見えない手が石を取りのけたであろう。しかしそれは人間の手で取りのけられねばならなかった。こうしてキリストは、人は神と協力することを示そうと望まれた。人の力ででき

ることには、神の力は呼び求められない。神は人の助けなしにはすまされない。神は人を強め、彼が自分に与えられている才能と能力とを用いる時、その人と協力される。 命令に従って、石がとり除かれる。すべてのことが公然とわざわざ行われる。何の欺瞞も行われていないということを見る機会がすべての人に与えられる。岩の墓の中に、ラザロのからだが死のうちに冷たく無言のまま横たわっている。泣き人たちの泣き声が静まる。人々は、驚きと期待の思いで、次に何事が起こるかを見ようと待ちかまえて、墓のまわりに立っている。

静かにキリストは墓の前に立たれる。神聖な厳粛さが、居合わせる一同の上に流れる。キリストは墓の方へ進まれる。「イエスは目を天にむけて言われた、『父よ、わたしの願いをお聞き下さったことを感謝します』」（ヨハネ 11：41）。このすこし前、キリストの反対者たちは、キリストが神のみ子であることを主張されたために、彼に冒瀆の罪があるといって石を取りあげ、キリストに投げつけたことがあった。彼らはキリストがサタンの力によって奇跡を行っておられるといって非難した。しかしここでキリストは、神をご自分の父と呼び、完全な確信をもって、ご自分が神のみ子であることを宣言しておられる。

キリストはご自分がなさったすべてのことにおいて、天父と協力しておられた。キリストはいつもご自分が独力で働かれるのではないということを注意深く明らかにされた。キリストが奇跡を行われたのは信仰と祈りによってであった。キリストは、すべての人がキリストと天父との関係を知るように望まれた。「父よ、わたしの願いをお聞き下さったことを感謝します。あなたがいつでもわたしの願いを聞きいれて下さることを、よく知っています。しかし、こう申しますのは、そばに立っている人々に、あなたがわたしをつかわされたことを、信じさせるためであります」と主は言われた（ヨハネ 11：41、42）。ここで、弟子たちと人々は、 キリストと神との間に存在する関係について、最も確信させられる証拠を与えられるのであった。キリストの主張が欺瞞ではないことが彼らに示されるのであった。

「こう言いながら、大声で『ラザロよ、出てきなさい』と呼ばわれた」（ヨハネ 11：43）。はっきりした、鋭いキリストのみ声が死者の耳をつらぬく。キリストが語られると、神性が人性の中にひらめく。神の栄光に照されたキリストのみ顔に、人々はキリストの力についての確信を見る。どの日もほら穴の入口に釘づけにされる。どの耳も、ほんのかすかな

音でも聞きのがすまいとする。苦痛なまでの非常な関心をもって、どの人もみなキリストの神性がためされるのを待ち受ける。それは神のみ子であるというキリストの主張を実証するか、それとも望みを永遠に消滅させるか、そのどちらかの証拠となるのであった。　静かな墓の中に動く気配がして、死んでいた者が墓の戸口に立つ。彼の動作は、寝かされる時に体に　まかれた布のために妨げられる。するとキリストは、驚いて見ている人たちに、「彼をほど　いてやって、帰らせなさい」と言われる（ヨハネ 11：44）。ふたたび彼らは人間の働き人が神ど協力することを示される。人は人のために働かねばならない。ラザロは自由になり、病　気でやつれ果てて手足のよろめく弱々しい人間としてではなく、人生の盛りにある、力に満　ちたりっぱな人間として人々の前に立つ。彼の目は知性と救い主への愛に輝いている。彼は、賛美のうちに、イエスの足下にひれ伏す。　これを見ていた人たちは、はじめは驚きのあまりことばが出ない。それから言い表しようのない再びと感謝の場面がつづく。姉妹たちは命に　よみがえった兄弟を神の賜物として受けとり、喜びの涙にくれながらとぎれとぎれに救い主　への感謝を言いあらわす。しかし、兄弟姉妹たち友人たちがこの再会を喜びあっている間に、イエスはその場から立ち去られる。彼らが命をお与えになったお方をさがすと、その姿はも　うどこにも見当らなかった。

第 59 章　祭司たちの陰謀

ベタニヤはエルサレムに近かったので、ラザロのよみがえりについての知らせはすぐに都へ伝わった。ユダヤの役人たちは、その奇跡を目撃したスパイたちを通して、たちまちその事実をつかんだ。どんな手をうつべきかを決めるために、すぐにサンヒドリンの会議が召集された。キリストは、ご自分が死とよみを支配しておられることをいま完全に明らかにされた。その偉大な奇跡は、神が人々を救うためにみ子を世に送られたことについて、神から人々に与えられた最高の証拠であった。それは、理性と光に照らされた良心の支配下にあるすべての人の心を納得させるのに十分な神の力の表示であった。ラザロのよみがえりを目撃した多くの者たちは、イエスを信ずるようになった。しかしイエスに対する祭司たちの憎しみはますます強くなった。彼らは、イエスの神性についてのこれより小さな証拠を全部否定していたので、この新しい奇跡は彼らを怒らせたにすぎなかった。死人が、真昼間にしかも大勢の目撃者の前でよみがえったのである。どんな策略によっても、このような証拠を言いのがれることはできなかった。こうした理由のために、祭司たちの敵意はますます執念深いものとなった。彼らはキリストの働きをやめさせようと、これまで以上に固く決心した。

サドカイ人は、キリストに対して好意的ではなかったが、パリサイ人ほどには敵意に満ちていなかった。彼らの憎しみはそれほど激しくはなかった。しかし彼らはこんどはまったく驚いてしまった。彼らは死人のよみがえりを信じていなかった。いわゆる科学を持ち出して、彼らは、死体が生きかえるということは不可能であると説いていた。しかしキリストの口から出 た二言三言によって、彼らの説はくつがえされた。彼らは、聖書についても神の力についても無知であることを示された。彼らは、この奇跡によって人々にうえつけられた印象をうち消すことができないことを知った。よみにうち勝って死人を奪いかえされたお方から、どうして人々を引き離すことができよう。虚偽の報告を言いふらしたが、奇跡を否定することがてきなかったので、彼らは、どうやってその効果をうち消してよいかわからなかった。これまでサドカイ人たちは、キリストを殺す計画を奨励していなかった。しかしラザロの復活後、彼らは、自分たちに対するキリストの大胆な非難をやめさせるには、キリストを殺すしかないと決心した。 パリサイ人は復活を信じていたので、彼らは、この奇跡か自分た

ちの間にメシヤがおられる証拠であるということを認めないわけにはいかなかった。しかし彼らはずっとキリストの働きに反対してきた。キリストが彼らの偽善的なみせかけをあばかれたので、彼らは、最初からキリストを憎んでいた。主は、彼らの道徳的な欠陥をおおいかくしている厳格な慣習という衣を引きはがされた。主がお教えになった純粋な宗教は、彼らの中味のない口先だけの信心を責めた。彼らは、キリストの鋭い譴責に対して報復しようと熱望した。彼らは、キリストを罪に定めるきっかけとなるようなことをキリストに言わせたりさせたりしようとして、挑発を試みた。キリストを石で打とうとしたことが数回あったが、キリストが静かに立ち去られたので、彼らはその姿を見失ったのだった。

キリストが安息日に行われた奇跡はみな、苦しんでいる者を救うためであったが、パリサイ人たちは、キリストを安息日の違反者として罪に定めようとした。彼らは、ヘロデ党をキリスト反対に立ち上がらせようとした。彼らは、キリストが対抗的な主国を建設しようとしていると言いふらして、ヘロデ党の者たちにキリストを殺す方法を相談した。彼らはまた、ローマ人を扇動してキリストに反対させるために、キリストがローマ人の格力をくつがえそうとしていると言いふらした。彼らは、民衆に対するキリストの影響をたち切るために、あらゆる口実を試みた。しかしこれまでのところ、彼らの試みは裏をかかれてしまった。キリストの憐れみのみわざを目に見、その純粋て卵なる教えを耳に聞いた群衆は、そうしたことが、安息日を破ったり、神をけがしたりする人の行為やことはではないことを知っていた。

パリサイ人からつかわされた役人たちでさえ、キリストのみことばに心を動かされて、彼に手をかけることができなかった。絶望のあまり、ユタヤ人はついに、イエスの信仰を告白する者は誰ても会堂から追い出すという布告を出したのだった。 そこで、祭司たち、役人たち、長老たらが相談のために集まった時、彼らは、すぺての人を驚かせるようなふしぎなわざをするキリストを沈黙させなけれはならないということを固く決心していた。パリサイ人とサドカイ人は、これまでにみられなかったほど団結していた。これまで分裂していた彼らか、キリスト反対において一つになった。ニコデモとヨセフは、これまでの会議では、イエスを罪に定めろのをさまたげていた。そのため、彼らはこんどは召集されなかった。会議

には、イエスを信じているほかの有力な人たちも出席していたが、彼らの勢力は敵意に満ちたバリサイ人たちの勢力に対しては何のききめもなかった。

それでも、会議における議員たちの意見がみな一致したわけではなかった。この時のサンヒドリンは、合法的な会議ではなかった。その存在がただ黙認されていたにすぎなかった。議員のある者たちは、キリストを殺すことが賢明であるかどうかを疑った。彼らは、そのことによって民衆の暴動かひき起こされ、そのためローマ人が祭司制度に好意を示さなくなり、まだ自分たちの手にある権力まで取りあけられることになりはしないかと恐れた。サドカイ人はキリストを憎むことにおいては一致していたが、彼らの高い身分をローマ人に取りあけられることを恐れて、慎重に行動しなくてはならないという気持を持っていた。

ネブカデネザルの自慢のことばを聞さ、ベルシャサルの偶像礼拝の酒宴を目撃し、キリストがナザレでご自身をあぶらそそがれた者として宣言された時に そこにおられた証人が、キリストの死を計画するために集まったこの会議に出席しておられた。この証人は、いま役人たちに、彼らのしているわざを印象づけておられた。キリストの一生の出来事が彼らの前に驚くほどはっきり浮かびあがった。彼らは、当時 12 才の子供であったイエスが博学の律法学者たちの前に立って、彼らを驚かせる質問をされた時の宮の光景を思い出した。最近行われたばかりの奇跡は、イエスが神のみ子にほかならないということを証拠だてていた。キリストに関する旧約聖書の真の意味が、彼らの心にひらめいた。役人たちは、当惑し、悩んだあげく、「どうしたらよいか」とたずねた。会議は意見が分かれた。聖霊の印象のもとに、祭司たちと役人たちは、自分たちが神と戦っているという自覚をうち消すことができなかった。

会議が困惑の絶頂に達すると、大祭司カヤパが立ち上がった。カヤパは高慢で、残酷で、威張っていて、偏狭な男だった。彼の一族の中にはサドカイ人がいて、彼らはみせかけの義という衣の下に、高慢、大胆、無謀、満々たる野心と残酷さをかくしていた。カヤパは、その真の意味を知らなかったけれども預言を研究していたので、非常な権威と確信をもって、「あなたがたは、何もわかっていないし、ひとりの人が人民に代って死んで、全国民が滅びないようになるのがわたしたちにとって得だということを、考えてもいない」と語った（ヨ

ハネ　11：49、50）。たとえイエスに罪がなくても、彼を除かねばならないと、大祭司は主張した。彼は、民を自分にひきよせ、役人たちの権威を低下させているのでやっかいな男だ。彼はたった 1 人だ、役人たちの権力を弱めるよりも彼を死なせた方がよい。もし役人に対する民衆の信頼が失われるとしたら国力は滅びるであろう。この奇跡のあと、イエスに従う者　たちが暴動を起こすであろうと、カヤバは主張した。そうしたら、ローマ人かやってきて、　われわれの宮を閉鎖し、われわれの律法を廃止し、一国家としてのわれわれを滅ぼすであろ　うと、彼は言った。国家の生命に比較すれば、このガリラヤ人の生命に何の価値があろう。　もし彼がイスラエルの安全を妨害するなら、彼を除き去ることが神に奉仕する道ではないか。全国民が滅ぼされるより、1 人の人間が滅ぼされる方がよいのだ。

1 人の人間が国民のために死なねばならないということを宣言することによって、カヤパは、ごく限られてはいたが、預言についていくらか知識を持っていることを示した。しか　しヨハネは、この場面の記述にあたって、この頂言をとりあげ、その広くて深い意味を示し　ている。「ただ国民のためだけではなく、また散在している神の子らを一つに集めるために、死ぬことになっている」と、ヨハネは言っている（ヨハネ 11：52）。何と盲目的に、この高慢なカヤパは、救い主の使命を認めたことだろう。

この最もとうとい真理は、カヤパの口で虚偽に変えられた。彼の主張した方針は、異教から借りた一つの原則にもとづいていた。異教徒たちは、1 人の人間が人類のために死ぬべきだというばく然とした意識から、人間をいけにえとしてささげるようになっていた。そこで　カヤパは、不義の国民が罪のうちに存続できるように、イエスの犠牲によって、彼らを罪と　がからではなく、罪とがの中で救おうと提案した。そしてこの理屈によって、彼は、イエス　には死に値するようなものはまだ何もないと言い張るかもしれない人々の抗議を沈黙させる　ことができると考えた。　この会議で、キリストの反対者たちは深い自覚を与えられた。聖霊 は彼らの心に感動を与えた。しかしサタンは、彼らの支配権をにぎろうと努めた。サタンは、彼らがキリストのために味わったにがにがしい気持を思い出させようとした。キリストは、　彼らの義をすこしも尊重されなかった。主はそれよりはるかに大きな義を示されたが、それ　は神の子となることを望むすべての者が持たねばならないものだった。主は、彼らの形式や

儀式を無視し、罪人たちに、恵み深い天父として直接神のみもとへ行って、その願いを訴えるように奨励された。彼らの意見によれば、イエスはこうして祭司職を廃されたというのである。主はラビの学校の神学を認めようとされなかった。主は、祭司たちの悪習慣をばくろし、彼らの影響力に取り返し のつかない損害を与えられた。主は、彼らが儀式的な律法を厳格に励行しているけれども神の律法を無効にしていると宣言して、彼らの金言や言い伝えの効力に損害を与えられた。こうしたすべてのことを、サタンはいま彼らの心に思い出させた。

彼らの権威を維持するためには、イエスを死刑にしなければならないと、サタンは彼らに告げた。この勧告に彼らは従った。自分たちがいま行使している権力を失うかも知れないという事実だけでも、何らかの決定をしなければならない十分な理由であると、彼らは考えた。あえて本心を語ろうとしなかった数名を除いて、サンヒドリンはカヤパのことばを神のことばとして受け入れた。会議は救われ、不一致がやんだ。彼らは都合のよい機会があり次第キリストを死刑にすることに決めた。イエスの神性についての証拠をしりぞけたことによって、これらの祭司たちと役人たちは暗黒の中にとじこめられた。彼らはまったくサタンの支配するがままになり、永遠の滅亡のふちを越えて追いたてられた。それにもかかわらず、彼らはすっかりだまされて、自分自身に満足していた。彼らは、自分自身のことを、国民の救いを求めている愛国者とみなした。

しかしながら、民衆が怒って、イエスに向けられるはずの暴力が彼ら自身の上に向けられるといけないので、サンヒドリンは、イエスに対して過激な手段をとることを恐れた。そのために、会議は、すでに発表した判決の執行を遅らせた。救い主は、祭司たちの陰謀をさとられた。主は、彼らがイエスを除こうとしていることと彼らの目的がまもなく達成されることを知っておられた。しかし危機を早めることはキリストの本分ではなかったので、主は弟子たちをつれて、その地方から退かれた。こうしてイエスは、弟子たちにお与えになった教訓すなわち「一つの町で迫害されたなら、他の町へ逃げなさい」という教えを、自ら手本を示して、ふたたび実行された（マタイ 10：23）。魂の救いのために働く広い分野があった。

主のしもべたちは、主に忠誠をつくすためにやむを得ないかぎり、自らの生命を危険にさらしてはならなかった。

イエスは、いま世のために 3 年間の公生涯を送ってこられた。主の克己と無我の慈善心についての模範は彼らの前にあった。主の純潔と苦難と信仰の生活はだれにでも知られていた。しかしこの 3 年の短い年月は、世の人々があがない主の存在に耐えることのできる限界であった。 主の一生は迫害と侮辱の一生だった。ねたみ深い王によってベツレヘムから追われ、ナザレではご自身の民からこばまれ、エルサレムでは理由もなく死にあたる罪に定められ、イエスは、少数の忠実な弟子たちと、見知らぬ町に一時の避難所を求められた。いつも人間の不幸に心を動かされ、病人をいやし、盲人に視力を回復し、きこえない人の耳をきこえるようにし、口がきけない人がものを言えるようにし、飢えた者に食物を与え、悲しむ者を慰められたお方が、救うために働かれたその民から追われたのである。うねる波の上を歩き、その荒れ狂う波の音を一言で沈黙させられたお方、離れるまぎわにイエスを神のみ子として認めた悪霊を追い出されたお方、死人の眠りを破られたお方、幾千の者を知恵のみことばによって夢中にさせたお方が、偏見と憎しみに心がくらんで、頑固に光をしりぞける人々の心を動かすことがおできにならなかった。

第 60 章　新しいみ国の律法

過越節の時が近づき、イエスはふたたびエルサレムへ向かわれた。イエスの心の中には、天父のみこころと完全に一つであるという平安があったので、主は熱心な足どりで、犠牲の場所へ進んで行かれた。しかし弟子たちは、不可解と疑いと恐れの思いにおそわれた。「イエスが先頭に立って行かれたので、彼らは驚き怪しみ、従う者たちは恐れた」（マルコ 10:32）。ふたたびキリストは、12 人をまわりにお呼びになって、ご自分が裏切られ、苦難を受けられることを、これまでよりも一層はっきり打ち明けられた。イエスは言われた、「『見よ、わたしたちはエルサレムへ上って行くが、人の子について預言者たちがしるしたことは、すべて成就するであろう。人の子は異邦人に引きわたされ、あざけられ、はずかしめを受け、つばきをかけられ、また、むち打たれてから、ついに殺され、そして 3 日目によみがえるであろう』。弟子たちには、これらのことが何一つわからなかった。この言葉が彼らに隠されていたので、イエスの言われた事が理解できなかった」（ルカ 18：31～34）。

自分たちはちょっと前までいたるところで、「天国は近づいた」と宣伝したではないか。多くの者がアブラハム、イサク、ヤコブとともに神の国にすわると、イエスご自身が約束されたではないか。キリストのために何かを捨てた者は誰でもこの世で 100 倍を受け、またみ国の一部を受けると、主は約束されたではないか。主はみ国の高い栄誉の地位――イスラエルの 12 の支族をさばく座につくことについて、特別な約束を 12 人にお与えになったではないか。いまでも主は、ご自分に関して預言者の書に書かれていることはすべて成就すると言われた。その預言者たちは、メシヤの統治の栄光を預言したではないか。こうした考え方に照らしてみる時、裏切り、迫害、死についてのイエスのことばはばく然としていて、はっきりしないように思えた。どんな困難が生じようと、み国はまもなく建てられるのだと、彼らは信じた。

ゼベ列の子ヨハネは、イエスに従った最初の 2 人の弟子の中の 1 人であった。彼とその兄弟ヤコブは、キリストの奉仕にすべてを捨てた最初の人たちのグループに入っていた。彼らはキリストと一緒にいるために家も友だちも喜んで捨てた。彼らはイエスとともに歩み、

ともに語った。彼らは家にひっこんでいる時も、公の集りの中にいる時も、イエスといっしょだった。イエスは、彼らの恐れを静め、彼らを危険から救い、彼らの苦しみをやわらげ、彼らの悲しみを慰め、忍耐とやさしさをもって彼らをお教えになったので、ついに彼らの心はイエスの心に結ばれ、イエスを愛するあまり、み国においてイエスに一番近いところにいたいとあこがれるようになった。機会のあるたびに、ヨハネは救い主の隣に席を占め、ヤコブはできるだけイエスに一番近いところにいたいとあこがれた。

彼らの母親は、キリストに従う者であって、その財産を惜しまずささげてイエスに仕えた。息子たちに対する母親の愛情と野心から、彼女は息子たちのために新しいみ国の最高の地位をほしがった。彼女は息子たちにこのことをイエスにお願いするように促した。　母親と息子たちは、一緒にイエスのところへやってきて、彼らの心にかかっている願いをかなえて　くださるようにたのんだ。「何をしてほしいのか」とイエスはおたずねになった（マタイ 20：21）。 母親は、「わたしのこのふたりのむすこが、あなたの御国で、ひとりはあなたの右に、ひとりは左にすわれるように、お言葉をください」と答えた（マタイ 20：21）。

イエスは、兄弟たちよりも有利な立場を占めたいという彼らの利己心を責めないで、彼らのことをやさしく忍耐される。イエスは彼らの心を読まれ、彼らが深く主を慕っていることをお知りになる。彼らの愛はただの人間的な愛ではない。それは、人間の世俗的な水路によってよごれてはいるが、主ご自身のあがないの愛という泉から湧きあふれたものである。主は責めないで、それを深くし、清められる。イエスは、「あなたがたは、わたしが飲む杯を飲み、わたしが受けるバプテスマを受けることができるか」と言われた。彼らは、さばきと苦難をさし示しているキリストのふしぎなことばを思い浮べたが、それでも確信をもって、「できます」と答える（マルコ　10：38、39）。彼らは、主に起ころうとしているすべてのことをわかち合うことによって、自分たちの忠誠心を証明することができれ　ば、最高の名誉であると考える。

「あなたがたは、わたしが飲む杯を飲み、わたしが受けるバプテスマを受けるであろう」とイエスは言われた（マルコ　10：39）。キリストの前には、王座ではなく、十字架があった。その右と左には、2 人の犯罪者が道連れとなるのであった。ヨハネとヤコブは、主の苦難を分

かち合うのであった。ヤコブは兄弟たちのうちで最初に剣に倒れ、ヨハネは兄弟たちのうちで最後まで生き残って苦労と非難と迫害に耐えるのであった。 イエスは続けて言われた、「しかし、わたしの右、左にすわらせることは、わたしのすることではなく、ただ備えられている人々だけに許されることである」（マルコ 10：40）。神の国では、地位はえこひいきによって得られるのではない。それは功績によって得られるものでも、独断的にさずけられるものでもない。それは品性の結果である。王冠と王座はある状態に到達したことのしるしである。それは主イエス・キリストを通して自我を克服したことのしるしである。

ずっとのちになって、弟子ヨハネがキリストの苦難にあずかることによって主と一致するようになった時、主は、神の国において主の近くにすわることができる条件をヨハネにお示しになった。キリストはこう言われた、「勝利を得る者には、わたしと共にわたしの座につかせよう。それはちょうど、わたしが勝利を得てわたしの父と共にその御座についたのと同様である」。「勝利を得る者を、わたしの神の聖所における柱にしよう。彼は決して 2 度と外へ出ることはない。そして彼の上に、わたしの神の御名と、……わたしの新しい名とを、 書きつけよう」（黙示録　3：21、12）。同じように使徒パウロもこう書いている、「わたしは、すでに自身を犠牲としてささげている。わたしが世を去るべき時はきた。わたしは戦い　をりっぱに戦いぬき、走るべき行程を走りつくし、信仰を守りとおした。今や、義の冠がわ　たしを待っているばかりである。かの日には、公平な審判者である主が、それを授けて下さ　るであろう」（Ⅱテモテ 4：6～8）。

キリストの一番近くに立つ者は、この地上においてキリストの自己犠牲的な愛、すなわち、「高ぶらない、誇らない、……自分の利益を求めない、いらだたない、恨みをいだかない」ところの愛、また主の心を動かしたように、人類を救うために死にいたるまで、すべてを献げ、生き、働き、犠牲を払うように弟子の心を動かすところの愛、――そうした愛の精神を最も深く飲んだ者である（Ⅰコリント 13：4、5）、この精神はパウロの一生にあらわされた。パウロは、「わたしにとっては、生きることはキリストであ」ると言った。なぜなら彼の一生は人々にキリストをあらわしたからである。そして「死ぬことは益である」――キリストにとって益である。死そのものは主の恵みの力をあらわし、魂を主のもとに集めるで

あろう。「生きるにも死ぬにも、わたしの身によってキリストがあがめられる」と彼は言った（ピリピ 1：21、20）。

10 人の弟子たちは、ヤコブとヨハネのたのみについて聞くと、非常に不愉快に思った。み国の最高の地位は、彼らの一人一人がねらっていたものだったので、彼らは、この 2 人の弟子たちが自分たちに 1 歩先んじたようにみえることを怒った。 だれが一番えらいかということについてもう 1 度新たに争いが起こりそうにみえた、その時、イエスは、弟子たちをそばにお呼びになり、憤慨している彼らにこう言われた、「あなたがたの知っているとおり、 異邦人の支配者たちはその民を治め、また偉い人たちは、その民の上に権力をふるっている。あなたがたの間ではそうであってはならない」（マタイ 20：25、26）。

この世の国では、地位は自分を高めることを意味した。民衆は支配階級の利益のために存在していると思われていた。勢力、富、教育は、指導者たちが大衆を自分のために使用するために彼らを支配する手段であった。上層階級が考え、決定し、楽しみ、支配し、下層階級は従い、仕えるのであった。ほかのすべてのこと同様に、宗教も柏かの問題であった。民衆は目上の人から命じられる通りに信じ、実行するものと期待されていた。自分で考え、実行する人間としての人権はまったく認められなかった。 キリストは、これと異なった原則の上にみ国を築いておられた。主は人々を権力の立場にではなく、奉仕の立場に召し、強い者を弱い者の欠点を負うために召された。権力、地位、才能、教育のある人は、それだけほかの人々に仕える一層大きな義務を負わされた。キリストの弟子の中の一番小さな者にさえ、「すべてのことは、あなたがたの益……である」と言われている（Ⅱコリント 4：15）。

人の子がきたのも、仕えられるためではなく、仕えるためであり、また多くの人のあがないとして、自分の命を与えるためである」（マルコ 10：45）。ご自分の弟子たちの間にあって、キリストは、あらゆる意味で、世話人、すなわち重荷を負う人であられた。主は弟子たちと貧乏を共にし、彼らのために克己を実行し、彼らの先に立って、もっと困難な場所を平らにし、まもなくご自身の生命を捨てることによって地上におけるご自分の働きを完成されるのであった。キリストが実行された原則は、ご自分の体である教会の信者を行動させる動機となるのである。救いの計画と土台は愛である。キリストのみ国では、キリストがお与

えになった模範に従い、キリストの羊の群れの牧者として活動する者が最も大いなる者である。

パウロの次のことばは、クリスチャン生活の真の威厳と栄誉を示している。「わたしは、すべての人に対して自由であるが……すべての人の奴隷になった」。「多くの人が救われるために、自分の益ではなく彼らの益を求めている」（Ⅰコリント 9：19、10：33）。 良心の問題において、人を束縛してはならない。だれも他人の心を支配したり、他人の代りに判断　したり、他人の義務を規定したりすべきでない。神は、一人一人に考える自由と、自分自身　の確信に従う自由をお与えになっている。「わたしたちひとりびとりは、神に対して自分の　言いひらきをすべきである」（ローマ 14：12）。自分自身の個性を他人の個性の中に没入させる権利はだれにもない。原則にかかわるすべての問題において、「各自はそれぞれ心の中　で、確信を持っておるべきである」（ローマ　14：5）。キリストの国には、横平な圧制もなければ、強制的なやり方もない。天使たちは、支配したり、尊敬を強要するためではなく、　人類の向上に人々と協力するために、恵みの使者としてこの地上にくるのである。

救い主この教えの原則は、ことばそのものまで、聖なる美しさをもって、愛された弟子ヨハネの記憶にいつまでも残った、晩年にいたろまで、教会に対するヨハネのあかしの趣旨はこうであった、「わたしたちは互に愛し合うべきである。これが、あなたがたの初めから聞いていたおとずれである」。「主は、わたしたちのためにいのちを捨てて下さった。それによって、わたしたちは愛ということを知った。それゆえに、わたしたちもまた、兄弟のためにいのちを捨てるべきである」（Ⅰヨハネ 3：11、16）。 これが初代の教会にみなぎっていた精神であった。聖霊の降下があってから、「信じた者の群れは、心を一つにし思いを一つにして、だれひとりその持ち物を自分のものだと主張する者がなく、……彼らの中に乏し　い者は、ひとりもいなかった」。「使徒たちは主イエスの復活について、非常に力強くあかしをした」（使徒行伝 4：32、34、33）。

第 61 章　ザアカイ

エルサレムへの途中、「イエスはエリコにはいって、その町を通になった」（ルカ 19：1）。ヨルダン川から数マイル離れ、谷の西端平原へひろがっているあたりに、この町は、熱 帯的な緑と繁茂した美しい木立ちにかこまれていた。尽きることのない泉にうるおされるし　ゅろの木とぜいたくな庭園のあるこの町は、エルサレムとこの平原の町との間にはさまって　いる石灰石の丘と荒涼とした山峡とを背景にして、エメラルドのように輝いていた。

多くの隊商が、祭りに行く途中、このエリコを通っ て行った。彼らの到着はいつも祭りの季節であったが、こんどは人々はいつもより深い興味にわきたっていた。最近ラザロをよみがえらせたガリラヤのラビが群衆の中におられるということがわかったのである。祭司たちの陰謀について盛んにうわさがささやかれていたが、群衆はキリストに敬意を表したいと熱望していた。

エリコは、昔、祭司たちのためにとっておかれた町々の一つで、当時たくさんの祭司たちがここに住居を持っていた。しかしこの町にはまた非常に異なった性格の住民が住んでいた。ここは交通の中心地であって、各地からやってきた他国人にまじって、ローマの官吏や軍人たちが見受けられ、一方また関税を徴収するために多くの取税人たちが住んでいた。　「取税人のかしら」ザアカイはユダヤ人で、同国人からきらわれていた。彼の地位と富は人々のいやがる職業の報酬で、この職業は不正と搾取の別名のように考えられていた。しかしこの富める税関役人のザアカイは、それほど冷酷な人間ではなかった。その世俗的で高慢な外観の下には、天来の感化力に動かされやすい心があった。ザアカイは、イエスのことを聞いていた。排斥されている階級の人々に対して親切と礼儀のある態度をとられたお方のうわさが遠く広くひろがっていた。この取税人のかしらの内には、もっとよい人生をあこがれる思いがあった。

エリコからわずか数マイル離れたヨルダン川で、バプテスマのヨハネが福音を説いた時、ザアカイは悔い改めへの呼びかけを聞いた。「きまっているもの以上に取り立ててはいけない」という取税人たちに対する教えは、外面的には無視されたが、それはザアカイの心に深

い感銘を与えていた（ルカ　3：13）。彼は聖書を知っていて、自分の行為がまちがってしることを自覚していた。いま彼は大教師イエスから出たものといわれているこのことばを聞い　て、自分が神の前に罪人であることを感じた。しかし彼がイエスについて聞いていたことが、彼の心に望みの火をともした。悔い改め、すなわち生活の改革は、自分のような者にさえ可　能なのだ。この新しい教師が最も信頼しておられろ弟子たちの 1 人も取税人ではないか。ザアカイは自分の心をとらえたこの自覚にただちに従い、自分が不正を働いた相手の人々の損　害をさっそく償いはじめた。

このように彼がすでに自分の歩みを正しい道へ戻し始めていた時に、イエスがエリコに入ってこられるというううわさが町じゅうに伝わった。ザアカイはイエスに会う決心をした。彼は罪の実がどんなににがいものであるか、また悪の道から引き返そうとする者の歩みがどんなに困難なものであるかを認め始めていた。自分のあやまちを直す努力が誤解され、疑いと不信の目でみられることは耐えきれないことだった。この取税人のかしらは、自分の心に望みをもたらしてくれたことばを語られたイエスのお顔を見たいと熱望した。

町の通りは人々でいっぱいだった。ザアカイは背が低かったので、人々の頭にさえぎられて何も見ることができなかった。だれも彼に道をあけようとしなかった。そこで、この富裕な取税人は、群衆よりすこし先に走って行き、枝のひろがったいちじく桑の木が道におおいかぶさっているところへくると、その木にのぼって枝の間に座を占めた。そこなら、行列が下を通りすぎるのを見渡すことができた。群衆が近づき、通りすぎて行く。ザアカイは目をこらして、お会いしたいと熱望しているお方をみっけようとする。 祭司たちとラビたちのさわがしい声や群衆の歓迎の叫び声をこえて、この取税人のかしらの無言の願いがイエスの心に語りかけた。突然、ちょうどこのいちじく桑の木の下で、一群が立ちどまり、その前後の群衆も動かなくなると、1 人のお方が心の底まで餌み通すような目つきをして上をごらんになる。「ザアカイよ、急いで下りてきなさい。きょう、あなたの家に泊まることにしているから」とのことばを聞くと、木の上の男はほとんど自分の耳を疑う（ルカ 19：5）。

群衆が道をあけると、ザアカイは、夢心地で歩きながら、わが家の方へ道案内をする。しかしラビたちはにがい顔をして、不満とあざけりのうちに、「彼は罪人の家にはいって客

となった」とつぶやく（ルカ 19：7） ザアカイは、自分のような無価値な者に目をとめられたキリストの愛とへりくだりに圧倒され、驚いて口もきけなかった。いまこの新しく見いだした主に対する愛と忠誠心が彼の口を開かせる。彼は自分の告白と悔い改めを公表しようとする。 群衆のいる前で、「ザアカイは立って主に言った、『主よ、わたしは誓って自分の財産の半分を貧民に施します。また、もしだれかから不正な取立てをしていましたら、それを 4 倍にして返します』。イエスは彼に言われた、『きょう、救がこの家にきた。この人もアブラハムの子なのだから』」（ルカ 19：8、9）。

富裕な若い役人がイエスから立ち去った時に、弟子たちは主が、「財産のある者が神の国にはいるのは、なんとむずかしいことであろう」と言われるのを聞いて驚き、互に、「それでは、だれが救われることができるのだろう」と叫んだ（マルコ 10：23、26）。いま彼らは、「人にはできない事も、神にはできる」と言われたキリストのみことばが事実である ことを実際に示された（ルカ 18：27）。彼らは、富裕な人でも、神の恵みによって、神の国 に入ることができることを知った。 ザアカイは、キリストのお顔を見る前に、彼が真に悔い改めた者である証拠となる働きを始めていた。人から非難される前に、彼は自分の罪を告白 していた。彼は聖霊による罪の自覚に従い、古代イスラエルのために、またわれわれのため に書かれたみことばの教えを実行しはじめていた。主は、ずっと昔こう言われた、「あなた の兄弟が落ちぶれ、暮して行けない時は、彼を助け、寄留者または旅びとのようにして、あ なたと共に生きながらえさせなければならない。彼から利子も利息も取ってはならない。あ なたの神を恐れ、あなたの兄弟をあなたと共に生きながらえさせなければならない。あなた 利子を取って彼に金を貸してはならない。また利益をえるために食物を貸してはならない」。
「あなたがたは互に欺いてはならない。あなたの神を恐れなければならない」（レビ 25：35～37、17）。こうしたことばは、キリストが雲の柱におおわれておられた時に、自ら語られたのであったが、キリストの愛に対するザアカイの最初の応答は、貧しく困っている人たちに対して同情を表すことであった。

取税人たちは徒党を組んでいたので、彼らは民衆を圧迫し、お互いに自分たちの詐欺行為を支持し合うことができた。彼らは、搾取するにあたって、ほとんど全国的な慣例となっ

ていたことを実行しているにすぎなかった。彼らを軽蔑していた祭司たちとラビたちさえ、聖なる職務のかげで不正直な行為によって私腹を肥やすような不義を行っていた。しかしザアカイは、聖霊の感化力に身をまかせるとすぐに、正直に反する行為を一切捨てた。 改革を伴わない悔い改めは、真正なものではない。キリストの義は、告白されてもいなければ捨てられてもいない罪をおおう外衣ではない。それは品性を一変し、行為を規制する生活原則である。聖潔とは神のために完全になることである。それは内住する天の原則に対して心と生活をまったく屈服させることである。

クリスチャンは、その実業生活において、主ならこのように事業を経営されるであろうという方法を世にあらわすのである。すべての取引において、彼は神が自分の教師であることを明らかにする。「主に聖なる者」ということが、日記帳にも元帳にも証書にも領収書にも為替手形にも書かれている（出エジプト 28：36）。キリストに従う者であることを告白しながら、不正なやり方で取引をする者は、聖にして正しく、憐れみある神のご品性に反する　まちがったあかしをたてているのである。悔い改めた魂はみな、ザアカイのように、自分の　生活に目立っている不正な習慣を放棄することによって、キリストが心の中に入られたこと　を表明する。この取税人のかしらのように、彼は損害を償うことによって誠実心を証明する。主はこう言われる、「すなわちその悪人が質物を返し、奪った物をもどし、命の定めに歩み、悪を行わないならば、……彼の犯したすべての罪は彼に対して覚えられない。彼は……必ず　生きる」（エゼキエル 33：15、16）。

もしわれわれが商売上の不正な取引で他人に損害を与えたり、商売上のごまかしをやったり、だれかをだましたりしたなら、たとえそれが法律を犯すことではなくても、われわれは、そのまちがいを告白して、力の及ぶかぎり償いをすべきである。われわれは、取ったものを返すばかりでなく、われわれがそれを所有していた間に正しく賢明に用いられたら蓄積されたはずの分まですべて返すのが当然である。 救い主は、ザアカイに、「きょう、救がこの家にきた」と言われた（ルカ　19：9）。ザアカイ自身が祝福されたばかりでなく、彼といっしょに家族の全部が祝福されたのである。キリストは、ザアカイに真理を教えるために、また彼の家族にみ国の事がらを教えるために、彼の家庭に行かれた。彼らはラビたちと礼拝

者たちから軽蔑されて、会堂から閉め出されていた。しかしいま、エリコ中で最も恵まれた家族として、彼らは、自分の家で天来の教師のまわりに集まり、自分たちの力で生命のみことばを聞いた。　魂に救いがのぞむのは、キリストが個人的な救い主として受け入れられる時である。ザアカイはイエスを自分の家庭の一時のお客としてばかりでなく、魂の宮に住むお　方として受け入れた。学者たちとパリサイ人たちはザアカイを罪人として非難し、またキリ　ストがザアカイの客となられたことについてつぶやいたが、主は彼をアブラハムの子として　認められた。なぜなら、「信仰による者こそアブラハムの子である」からである（ガラテヤ 3：7）。

第 62 章　シモンの家での食事

ベタニヤのシモンは、イエスの弟子とみなされていた。彼は、公然とキリストに従う者の仲間に加わった少数のパリサイ人の 1 人であった。シモンはイエスを教師として認め、イエスがメシヤであるようにと望んでいたが、救い主として受け入れてはいなかった。彼の品　性は変えられていなかったし、彼の主義は変化していなかった。　シモンはハンセン病をいやしてもらっていたので、彼がイエスにひかれたのはそのためであった。彼は、感謝の気持を　表したいと望み、キリストの最後のベタニヤ訪問の時に、救い主と弟子たちにごちそうをし　た。このごちそうの席で多くのユダヤ人が一緒になった。そのころ、エルサレムでは人々が　非常に騒いでいた。キリストとその使命は、かつてなかったほどに人々の注意をひいていた。ごちそうにやってきた人たちは、イエスの行動にこまかく注目し、中には悪意のある目で見　ている人たちがいた。

救い主は、過越の祭のわずか 6 日前にベタニヤに着かれ、いつもの習慣通り、ラザロの家で休息しようとしておられた。都へやってきた大勢の旅人たちは、イエスが、エルサレムへの道中にあって、安息日をベタニヤで休まれるという知らせをひろめた。人々の間には非常な熱心さがみられた。ある者たちはイエスに対する共鳴から、またある者たちは死からよみがえらされた者を見たいとの好奇心から、多くの者がベタニヤに集まってきた。

多くの者は、ラザロが死後に見た光景についてふしぎな物語を聞かせてもらえると期待した。彼らはラザロが何も語らないので驚いた。彼はそうしたことについて語ることは何もなかったのである、霊感のことばに、「死者は何事をも知らない、……その愛も、憎しみも、ねたみも、すでに消えうせ」ると宣言されている（伝道の書　9：5、6）。しかしキリストのみわざについては、ラザロはすばらしいあかしをもっていた。彼はこの目的のために死から　よみがえらされたのである。彼は力と確信とをもって、イエスが神のみ子であることを断言　した。

ベタニヤをおとずれた者たちによってエルサレムへ伝えられた報告は、騒ぎを大きくした。人々はイエスを見、イエスのことばを聞きたいと熱望した、ラザロ がエルサレムまでイ

エスについてくるかどうか、またこの預言者が過越の祭の時に王位につかれるかどうかということが世間一般の質問であった。祭司たちと役人たちは、民衆に対する自分たちの勢力が一層弱くなっていくことを知り、イエスに対する彼らの怒りはますます激しくなった。彼らはイエスを自分たちの道から永久に除いてしまう機会を待ちきれなかった。時が過ぎるにつれて、彼らは、結局イエスはエルサレムにこられないのではないかと心配しはじめた。彼らは、これまでもイエスがたびたび彼らの殺害計画の裏をかかれたことを思い出し、こんどもイエスがご自分に対する彼らの目的を見破って、エルサレムにこられないのではないかと恐れた。彼らはその心配をかくしきれず、お互いに、「あなたがたはどう思うか。イエスはこの祭にこないのだろうか」とたずねあった（ヨハネ 11：56）。

祭司とパリサイ人の会議が召集された。ラザロがよみがえってから、人々はキリストに対してとても良い好感をいだいていたので、彼を公然と捕らえることは危険であった。そこで、当局者たちは、キリストをひそかにとらえ、できるだけこっそり裁判をすることに決めた。キリストの有罪が知れ渡ったら、変りやすい世論の波が彼らを有利にしてくれることを、彼らは希望した。こうして彼らは、イエスを殺害することを提案した。しかしラザロが生きているかぎり、祭司たちとラビたちは安心できないことを知っていた。4 日間墓にいて、イエスのみことばによってよみがえらせられた男がいるということで、遅かれ早かれ反応が起こ　るであろう。民衆は、このような奇跡を行うことができたお方の生命をとったことについて、指導者たちに復讐するであろう。そこでサンヒドリンは、ラザロも殺すことに決めた。ねた　みと偏見のとりこになる者たちはそこまで追いこまれるのである。ユダヤの指導者たちの憎　しみと不信が高まり、ついに彼らは、限りない力によって墓から救い出された人間の生命ま　でとろうとするのであった。

この陰謀がエルサレムで進行している間、イエスと弟子たちはシモンのごちそうに招かれておられた。イエスは、いまわしい病気をなおしておやりになったシモンを一方に、死人の中からよみがえらせておやりになったラザロを一方にして、食卓におつきになった。マルタが食卓の給仕をしたが、マリヤはイエスの口から出るひとことばひとことばを熱心にきいていた。イエスが、その憐れみによって、マリヤの罪をゆるし、また愛する兄弟を墓からよ

みがえらせてくださったので、マリヤの心は感謝に満たされていた。彼女は、イエスがご自分の死が近づいていることを語られるのを聞いていたので、深い愛とかなしみのうちに、イエスに尊敬を示したいと熱望していた。彼女は、イエスのお体に油をそそぐために、自分で大きな犠牲を払って、「非常に高価で純粋なナルドの香油が入れてある石膏のつぼ」を買っていた（マルコ 14：3）。しかしいま、多くの者は、イエスが王位につかれるのだと宣言していた。マリヤの悲しみは喜びに変わり、彼女は自分が真先に主に尊敬を示したいと熱望した。香油のつぼを割ると、彼女は、中の油をイエスの頭と足にそそいだ。それから彼女は、泣きながらひざまずいて、その涙でイエスの足をぬらし、長くたれた髪の毛でぬぐった。

マリヤは、人々の目を避けたいと思っていた。彼女の動作は、人々の目にふれないですんだかも知れないが、香油のかおりが部屋に満ちたので居合わせたすべての人たちにその行為が知れた。ユダはこの行為を非常に不愉快に思った。このことについてキリストが言われることばを聞くのを待たないで、彼は、そばの人たちに不満をささやき始め、キリストがこのような浪費をゆるされることを非難した。彼は、不満をひき起こすようなずるい言い方をした。 ユダは弟子たちの会計係であった。彼は弟子たちのわずかな貯えの中からひそかに自分自身のためにひき出して使っていたので、彼らの貯えはだんだん減って、乏しいはした金になってしまっていた。彼は手に入れられるものは全部袋に入れたがった。袋の中の金はしばしば貧しい人たちを助けるために利用された。ユダが必要でないと考えるようなものを 弟子たちが買うと、「どうしてこんな浪費をするのか。どうしてこれだけの値段のお金を、わたしが貧しい人たちのために持っているこの袋に入れないのか」と彼はよく言った。いまマリヤの行為は、ユダを赤面させるほど、彼の利己心といちじるしい対照をなしていた。ユダは、いつもの通り、彼女の献げ物に反対する正しい動機を示そうとした。彼は弟子たちの方を向いてたずねた。「『なぜこの香油を 300 デナリに売って、貧しい人たちに、施さなかったのか』。彼がこう言ったのは、貧しい人たちに対する思いやりがあったからではなく、自分が盗人であり、財布を預かっていて、その中身をごまかしていたからであった」（ヨハネ 12：5、6）。ユダは、貧しい人たちに対して思いやりはなかった。もしマリヤの香油を売って、その収入をユダの手に渡したとしても、貧しい人は何の益も受けなかったのである。

ユダは自分自身の実行的な能力を高く評価していた。彼は、自分が財政家として、仲間の弟子たちよりもずっとすぐれていると思い、彼らにもそう思いこませていた。彼は、弟子たちの信用を得、彼らに対して大きな勢力を持っていた。貧しい人々に対するユダの同情的なことばにだまされ、彼のたくみな暗示によって、彼らは、マリヤの信心を不信の目をもって見た。「なんのためにこんなむだ使をするのか。それを高く売って、貧しい人たちに施すことができたのに」というつぶやきが食卓のまわりにひろがった（マタイ 26：8、9）。

マリヤはこの非難の声をきいた。彼女の心はふるえた。彼女は、姉のマルタが自分の浪費を責めるだろうと恐れた。主もまた自分のことを思慮の足りない女だと思われるだろう。あやまりも、言い訳もしないで、彼女は引きさがろうとした。するとその時、「するままにさせておきなさい。なぜ女を困らせるのか」という主の声がきこえた（マルコ 14：6）。主は、マリヤがまごつき、困っているのをごらんになった。主は、マリヤがこの奉仕の行為を通して、自分の罪のゆるしに対する感謝の気持を表したことをお知りになって、彼女を安心させられた。非難のつぶやきをおさえる声をあげて、主はこう言われた。「わたしによい事をしてくれたのだ。貧しい人たちはいつもあなたがたと一緒にいるから、したいときにはいっでも、よい事をしてやれる。しかし、わたしはあなたがたといつも一緒にいるわけではない。この女はできる限りの事をしたのだ。すなわち、わたしのからだに油を注いで、あらかじめ葬りの用意をしてくれたのである」（マルコ 14：6～8）。

マリヤは、救い主の死体に惜しますふりかけようと思っていたかおり高い献げ物を、主の生きたお体にそそいだのである。葬りの時だったら、そのかおりは墓の中にたちこめるだけであるが、いまそれは、彼女の信仰と愛についての確証とともに主の心を喜ばせた。アリマタヤのヨセフとニコデモは、愛の献げ物を、イエスが生きておられる時にささげなかった。にがい涙とともに、彼らは、主の冷たい、意識のなくなったお体のために高価な香料を持参した。香料を墓に持って行った婦人たちは、主がよみがえられたので、自分たちの用事がむだであったことを知った。しかしマリヤは、救い主が彼女の信心を認めてくださることができる間に、主に愛をそそぐことによって、葬りのために主に油をそそいだのであった。こうして主は、その大いなる試練という暗黒の中を進んで行かれた時に、この行為の思い出、す

なわちあがなわれた者が永遠に主に対してささげる愛の保証をたずさえて行かれたのであった。

死人のために高価な献げ物を持参する人が多い。冷たい、無言のなきがらのそばに立つ時に、彼らは惜しみなく愛のことばを語る。見ることも聞くこともできない者に向かって、やさしさ、感謝、愛情のすべてがそそがれる。疲れ果てた心が最も必要としていた時に耳にきくことができ、心に感ずることができた時にそうしたことばが語られていたら、そのかおりはどれほどとうとかったことだろう。 マリヤは自分の愛の行為の意義を十分に知らなかった。彼女は自分を非難する人たちに答えることができなかった。彼女はイエスに油をそそぐのになぜそんな機会をえらんだのか説明できなかった。聖霊 が彼女のために計画され、彼女はそのささやきに従ったのである。霊感はことさら理由を説明なさらない。目に見えない存在、それが心と魂に語り、心にはたらきかけて行動させる。それだけで正当な理由である。

キリストは、マリヤに彼女の行為の意味をお告げになり、そのことによって、ご自分が受けられたよりも多くのものをマリヤにお与えになった。「この女がわたしのからだにこの香油を注いだのは、わたしの葬りの用意をするためである」とキリストは言われた（マタイ26：12）。香油のつぼが割れて、そのかおりが家中に満ちたように、キリストは死なれて、 そのお体がこわれるのであった。しかし主は墓からよみがえって、その生命のかおりが地を 満たすのであった。キリストは、「あなたがたを愛して下さって、わたしたちのために、ご 自身を、神へのかんばしいかおりのささげ物、また、いけにえとしてささげられたのである」（エペソ 5：2）。「よく聞きなさい。全世界のどこででも、この福音が宣べ伝えられる所では、この女のした事も記念として語られるであろう」（マタイ 26：13）。将来をごらんになって、救い主は、福音について確信をもって語られた。福音は全世界に宣べ伝えられるのであった。そして、福音がひろがるかぎりどこまでも、マリヤの献げ物はそのかおりを放ち、人々の心は彼女の自然に発した行為によって恵まれるのであった。国々は起こり、そして倒れるであろう。君主たちと征服者たちの名前は忘れられるであろう。しかしこの婦人の行為は、聖史のページに永久に残るであろう。世にあるかぎり、あの割られた香油のつぼは、堕落した人類に対する神の豊かな愛の物語を告げるのである。

マリヤの行為は、ユダが意図していた行為といちじるしい対照をなしていた。キリストは、弟子たちの心に批判と悪い考え方の種をまいた者に、どんなにでも鋭い教訓をお与えになることができた。人を非難する者が非難されたとしても当然であった一人一人の心の動機を読み、一人一人の行為を理解される主は、食事の席にいる者たちの前に、ユダの生活の暗いページを開いて見せることもおできになった。裏切り者のことばがむなしいみせかけにすぎないことをばくろすることもおできになった。なぜなら、ユダは、貧しい人たちに同情するどころか、その救済にあてられる金を盗んでいたからである。やもめ、みなし子、雇い人たちに対する彼の圧迫について、憤激をひき起こすこともできた。しかし、もしキリストがユダの仮面をはがれたら、そのことが裏切りの理由として主張されたであろう。そして盗人と非難されても、ユダは、弟子たちからさえ同情を受けたであろう。救い主はユダを責められなかった。そのことによって、主は、彼に裏切りの口実を与えることを避けられた。

しかしイエスがユダをごらんになる目つきは、救い主が彼の偽善を見抜き、彼の卑劣で軽蔑すべき品性を読んでおられることを彼に確信させた。しかもキリストは、きびしい非難を受けたマリヤの行為をほめることによって、ユダを譴責された。これより前にも、救い主はユダを直接に譴責されたことはなかった。いまこの譴責は、ユダの心に激しい苦痛を与えた。彼は報復しようと決心した。夕食の席からまっすぐ大祭司の邸（やしき）へ行くと、そこで会議が召集されていたので、ユダは、イエスを裏切って彼らの手に渡すことを申し出た。

祭司たちは非常に喜んだ。このイスラエルの指導者たちは、金銭も価もなしに、キリストを救い主として受け入れる特権を与えられていた。しかし彼らは、最もやさしく迫る愛の精神で提供されているとうとい賜物を拒絶した。彼らは黄金よりも価値のある救いを受け入れることをこばみ、銀 30 枚で主を買った。 ユダは貪欲をほしいままにしたので、ついには彼の品性のあらゆるよい面がこれに圧倒されてしまった。彼はイエスに香油がささげられたことが気にくわなかった。救い主が地上の君主たちにふさわしいような献げ物を受けられたことで、ユダの心はねたみに燃えた。香油のつぼよりもはるかに安い金額で、彼は主を裏切った。 弟子たちはユダのようではなかった。彼らは救い主を愛した。しかし彼らは、主の高

貴な性格を正し　く評価していなかった。主が自分たちのためにしてくださったことを認めていたら、彼らは、主のためにささげられたものは何一つ浪費ではないことを感じたのである。東方の博士たちは、イエスについてすこししか知らなかったが、当然主にささげられるべき尊敬についてもっと真実な評価を示した。彼らは救い主にとうとい贈り物を持参し、馬ぶねを寝台にしておられた赤ん坊にすぎない主をひれ伏しておがんだ。

キリストは心のこもった親切な行為をとうとばれる。だれかがイエスのために何かをしてさしあげると、主はその行為をした人を天来のていねいさをもって祝福された。主は、子供の手によってつまれ、愛をもってささげられたどんな粗末な花もこばまれなかった。　主は子供たちの贈り物を受け取り、それをささげた者を祝福し、その名を生命の書にしるされた。マリヤはイエスに油をそそいだために、他のマリヤたちと区別して聖書にしるされている。　イエスに対する愛と尊敬の行為は、イエスを神のみ子として信じる信仰の証拠である。聖書　の中には、「聖徒の足を洗い、困っている人を助け、種々の善行に努める」ことを、キリス　トに対する女性の忠誠心の証拠として述べてある（Ｉテモテ 5：10）。

キリストは、マリヤが主のみこころをなそうと熱心に望んだことをよろこばれた。主は、弟子たちが理解しなかった、また理解しようとしなかった純粋な愛という富を受け入れられた。主のためにこの奉仕をしたいというマリヤの願いは、キリストにとってこの世のすべての貴重な香油よりもとうとかった。なぜならこの願いに、世のあがない主に対する感謝があらわされていたからである。彼女にそうするように迫ったのはキリストの愛であった。キリストの品性の比類のない美しさが彼女の魂を満たしたのであった。あの香油は、ささげた者の心の象徴であった。それは天の流れを溢れるまで受け入れた愛が外に向かって表現されたのであった。

マリヤの行為は、キリストに対する弟子たちの愛の表現がキリストによろこばれるということを彼らに示すのに、ちょうど必要な教訓であった。キリストは彼らにとって全部であったが、彼らはまもなく主の存在が取り去られ、主の大いなる愛に対する感謝のしるしを示すことができなくなることに気がつかなかった。天の宮から離れ、人間として一生を送っておられるキリストの孤独は、弟子たちから正しく理解もされなければ、評価もされなかった。

キリストは、弟子たちから当然受けられるべきものを彼らがささげなかったために、しばしば悲しまれた。もし弟子たちが、キリストにつきそっている天使たちの影響を受けていたら、彼らもまた心のうちにある霊的な愛情を十分にあらわすだけの価値のあるささげものはないと思うだろうということを、キリストは知っておられた。

彼らは、イエスのおそばにいた時に心のうちにある愛と感謝の表現としてイエスのためになし得た多くのことについて、その真の意義をのちになって知った。イエスがもはや彼らと一緒におられなくなって、自分たちが実際羊飼のいない羊のようであることを感じた時、彼らは、イエスの心をよろこはせるような心づくしを示すことができたのだったということがわかり始めた。彼らはもうマリヤを非難しないで、自分自身を責めた。ああ、キリストにささげるよりも貧しい人たちに施した方がよいなどと非難したことばを取消すことができたら。彼らは、主のくだかれた体を十字架からおろしながら、激しく心を責められた。

今日のわれわれの世界においても明らかにこのことが不足している。しかしキリストが自分にとってどういうお方であるかを全部理解している人はほとんどいない。もしそれが理解されているなら、マリヤの大きな愛があらわされ、惜しむことなく油がそそがれるであろう。高価な香料もむだ使いとはいわれないだろう。どんなものも、キリストにささげるには高価すぎるとか、キリストのために耐え忍ぶには克己と犠牲が大きすぎるということはないであろう。　「なんのためにこんなむだ使をするのか」と憤慨して言われたことばは、最高の犠牲、すなわち失われた世のためにあがないの供え物としてご自身を献げられることを、あ　りありとキリストに思い出きせた。主は、もうこれ以上おできにならないと言えるほど、人　類　家族に対して恵み深いのであった。キリストという賜物を通して、神は全天をお与えになった。人間的な見地からすれば、このような犠牲は無意味な浪費であった。人間の考えでは、救いの計画全体は憐れみと資産の浪費である。どちらを向いても克己と全心全霊の犠牲が見　られる。人類家族が、キリストのうちにあらわされている限りない愛によって高められ豊か　にされることをこばむのを見て、天使たちが驚くのも無理はない。天使たちが、これは何と　いう大きなむだだろうと叫ぶのももっともである。

しかし失われた世界のあがないは、欠けるところがなく、豊富で、完全なものとなるのであった。キリストの献げ物は非常に豊かで、神が造られたすべての魂にとどくのであった。この大いなる賜物であられるイエスを受け入れたいと望む人の数を越えないように制限することはできなかった。すべての人が救われるとはかぎらないが、あがないの計画は、豊富に用意されていることが全部達成されないからといってむだになるのではない。有りあまるほど十分なければならないのである。　主人役のシモンは、マリヤの贈り物に対するユダの非難に心を動かされ、イエスの行為に驚いた。彼のパリサイ的な誇りは傷つけられた。彼は、お客たちの多くが不信と不快の思いでキリストを見ていることを知った。シモンは心の中で、「もしこの人が預言者であるなら、自分にさわっている女がだれだか、どんな女かわかるはずだ。それは罪の女なのだから」と思った（ルカ 7：39）。 キリストは、シモンのハンセン病をなおすことによって、彼を生けるしかばねから救われたのだった。しかしいまシモンは、救い主が預言者であるかどうかを疑った。この女が近づくのをキリストがゆるされたので、　ゆるすことができないほど大きな罪を持っている者としてこの女を憤然とキリストがはねつ　けられなかったので、またこの女が堕落していることをキリストが認めるような様子をされ　なかったので、シモンは、イエスが預言者でないと考えたかった。イエスはこんなに無遠慮　にふるまっている女について何もご存じないのだ、そうでなければこの女がイエスにさわる　のをおゆるしになるはずがないと、シモンは思った。

しかしシモンがそのように考えたのは、彼が神についてまたキリストについて知らなかったからであった。彼は、神のみ子が神の方法に従って、憐れみ深く、やさしく、いつくしみをもってふるまわれなければならないということに気がっかなかった。シモンの方法は、悔い改めたマリヤの奉仕を無視することであった。彼女がキリストの足に接吻して香油を塗った行為は、シモンの冷酷な心をいらだたせた。キリストがもし預言者ならば、罪人をみわけて、譴責されるだろうと、彼は思った。 この無言の思いに、救い主はこうお答えになった、「『シモン、あなたに言うことがある』……『ある金貸しに金をかりた人がふたりいたが、ひとりは 500 デナリ、もうひとりは 50 デナリを借りていた。ところが、返すことができなかったので、彼はふたり共ゆるしてやった。このふたりのうちで、どちらが彼を多く愛する

だろうか』。シモンが答えて言った、『多くゆるしてもらったほうだと思います』。イエスが言われた、『あなたの判断は正しい』」（ルカ 7：40～43）。

ナタンがダビデに対してそうしたように、キリストは譬のヴェールの下に急所を突くことばをかくされた。キリストは、自分自身に宣告をくだす責任を主人のシモンに負わせられた。シモンは、自分がいま軽蔑している女を罪に陥れたのであった。マリヤはシモンからひどく悪いことをされたのであった。シモンとマリヤは、譬の中の金を借りた 2 人に代表されていた。イエスは、この 2 人が異なった程度の義務を感じなければならないことを教えようとは考えておられなかった。なぜなら 2 人ともそれぞれ決して返すことのできないほどの感謝という負債を負っていたからである。しかしシモンは、自分の方がマリヤよりも正しいと思っていたので、イエスは、彼の不義が実際にどれほど大きいものであるかを彼に認めさせようと望まれた。500 デナリの借金が 50 デナリの借金よりも大きいように、シモンの罪はマリヤの罪よりも大きいということを、イエスは、シモンにお示しになりたかったのである。

シモンはいま自分自身を新しい光の中で見はじめた。彼は、マリヤが預言者以上のお方からどのように見られているかを知った。彼は、キリストが鋭い預言者の目をもって彼女の愛と信心を見抜かれたことを知った。彼は恥ずかしさにおそわれ、自分よりもすぐれたお方の前にいることに気がついた。 「わたしがあなたの家にはいってきた時に、あなたは足を洗う水をくれなかった」と、キリストはことばを続けられた（ルカ 7：44）。しかしマリヤは、悔い改めの涙を流し、愛に迫られてわたしの足を洗い、自分の頭の髪の毛でわたしの足をふ いた。「あなたはわたしに接吻をしてくれなかったが、」あなたが軽蔑しているこの女は、「わたしが家にはいった時から、わたしの足に接吻をしてやまなかった」（ルカ 7：45）。キリストは、シモンが、主に対する愛と、自分のためにしていただいたことについての感謝をあらわす機会があったことを語られた。救い主は、ご自分の子らが愛のことばと行為によって主に対する感謝の思いを示すことを怠る時に悲しまれるということを、率直に、しかし慎み深い礼儀正しさで、弟子たちに言明された。

人の心を見抜かれるイエスは、マリヤの行為の動機を読まれ、またシモンのことばの動機となった精神をごらんになった。「この女を見ないか」と、イエスはシモンに言われた

（ルカ　7：44）。彼女は罪人である。「それであなたに言うが、この女は多く愛したから、その多くの罪はゆるされているのである。少しだけゆるされた者は、少しだけしか愛さない」（ルカ 7：47）。 救い主に対するシモンの冷淡さと怠慢は、彼が自分の受けた恵みを感謝していないことをあらわした。彼は、イエスを自分の家へ招待することによってイエスを尊敬していると思っていた、しかしいま彼は、自分の本当の姿を見た。シモンがお客のイエスを見抜いていると思っていた間に、イエスはシモンの心を読んでおられた。シモンは、自分について言われたキリストの批評が真実であることを知った。彼の宗教はパリサイ主義という衣であった。彼はイエスの憐れみを軽んじていた。彼はイエスを神の代表者として認めていなかった。マリヤがゆるされた罪人であったのに、彼はゆるされていない罪人であった。シモンがマリヤに強要しようとした硬直した正義の法則が、彼を罪に定めた。

シモンは、イエスが自分を客たちの前で公然と非難されなかった親切さに、心を打たれた、シモンは、マリヤに望んだような扱い方をしなかった。彼は、イエスが彼の不義をほかの人たちにはくろすることを望まれないで、この問題の事実を述べろことによって彼の心を自覚させ、憐れみ深い親切さによって彼の心をやわらげようとされたことを知った。公然ときびしく非難されたら、シモンは、心をとざして悔い改めなかったであろうが、忍耐深い教えによって、彼は自分の誤りをさとった。彼は自分が主に対して大きな負債を負っていることを知った。彼の高慢心はへりくだり、彼は悔い改めた。そしてこの高慢なパリサイ人は、けんそんで、自己犠牲的な弟子なった。

マリヤは非常に悪い罪人として見られていたが、キリストは、彼女をそうした生活に追いやった事情をご存じだった。主はマリヤの魂から望みのともし火をすっかり消してしまうこともおできになったのであるが、そうはなさらなかった。マリヤを絶望と滅亡から引きあげたのはイエスであった。彼女の心と思いを支配していた悪魔を責められるイエスのことばを、彼女は 7 回聞いた。彼女は、自分のために天父に祈ってくださるイエスの強い叫びを聞いた。彼女は、イエスのけがれない純潔さのうちにあって罪がどんなに憎むべきものであるかを知り、キリストの力によって勝利したのだった。

マリヤの問題が人間の目には絶望的に見えた時にも、キリストは彼女のうちに善への可能性をごらんになった。キリストは彼女の性格のよい面をごらんになった。あがないの計画によって、人類は大きな可能性をさずけられていたので、こうした可能性がマリヤのうちに実現されるのであった。キリストの恵みを通して、彼女は、神の性質にあずかる者となった。堕落し、心が悪霊の住み家となっていた者が、交わりと 奉仕を通して救い主に近づけられた。イエスの足下にすわって、イエスから学んだのはマリヤであった。イエスの頭に貴重な香油をそそぎ、イエスの足を涙で洗ったのはマリヤであった。マリヤは十字架のそばに立ち、イエスについて墓に行った。マリヤは、イエスの復活ののち 1 番先に墓にいた。よみがえられた救い主のことを 1 番先に言いひろめたのはマリヤであった。

イエスは、一人一人の魂の事情をご存じである。自分は罪深い者だ、とても罪深いとあなたは言うだろう。あるいはそうかも知れない。しかしあなたが悪ければ悪いほど、イエスが必要なのである。主は泣いて悔い改める者を決してしりぞけられない。主は明らかに示すことがおできになることを全部だれにでもお告げになるとは限らない。主は、ふるえている魂に勇気を出しなさいと命じられる。主はゆるしと回復とを求めてみもとに来るすべての者を心よくゆるしてくださる。 キリストは、神の怒りの鉢（はち）をこの世に傾けるように、そして神への憎しみに心が満ちている人々を滅ぼすようにと天使たちに命じることもおできになる。主は宇宙からこの暗い地球を消し去ることもおできになる。しかし主はそうはなさらない。主は、きょう香壇のそばに立って、神の助けを望む者の祈りを神のみ前にささげておられる。

イエスを避け所として求める魂を、主は告発とことばの争いから高めてくださる。だれも、またどんな悪天使も、このような魂を訴えることはできない。キリストはそうした魂をご自身の神また人としての性質に結びつけられる。彼らは、罪を負うてくださるお方のそばにあって、神のみ座から出る光のうちに立つのである。「だれが、神の選ばれた者たちを訴えるのか。神は彼らを義とされるのである。だれが、わたしたちを罪に定めるのか。キリスト・イエスは、死んで、否、よみがえって、神の右に座し、また、わたしたちのためにとりなして下さるのである」（ローマ 8：33、34）。

第 63 章　「あなたの王がおいでになる」

「シオンの娘よ、大いに喜べ、エルサレムの娘よ、呼ばわれ。見よ、あなたの王はあなたの所に来る。彼は義なる者であって勝利を得、柔和であって、ろばに乗る。すなわち、ろばの子である子馬に乗る」（ゼカリヤ 9：9）。 キリストがお生まれになる 500 年前に、預言者ゼカリヤは、イスラエルの王がおいでになることをこのように予告した。いまこの預言が成就されるのである。長い間王としての栄誉をこばんでこられたお方が、いまダビデの王位の約束された後継者として、エルサレムにおいでになるのである。キリストがエルサレムに勝利の入城をされたのは週の第 1 日であった。キリスト見ようとベタニヤに集まった群衆は、キリストが歓迎を受けられるのを見ようと熱望して、いまそのあとに従った過越節を守るために多くの人たちが都へのぼる途中だったので、彼らはイエスについて歩いている群衆に加わった。自然界の万物もよろこんでいるように見えた。木々は緑につつまれ、その花はかぐわしい香りを空中にただよわせた。新しい生命と喜びが人々に生気を与えた。新しい王国の望みがふたたびめばえつつあった。

イエスは、エルサレムに乗り入れるために、ろばと子ろばを引いてくるように、2 人の弟子をおつかわしになった。救い主は、誕生の時には、見知らぬ人たちの好意にたよられた。イエスがおやすみになった馬ぶねは借りた休み場所であった。「丘の上の千々の家畜」はイ　エスのものであるのに（詩篇 50：10）、いま彼は、主としてエルサレムに入城するためにお乗りになる家畜を手に入れるのに見知らぬ人の親切にたよられる。しかしこの用事のために　弟子たちにお与えになったこまかい指示の中にさえ、ふたたびイエス　　の神性があらわされる。 イエスが予告されたように、「主がお入り用なのです」というたのみはすぐに聞かれた（マタイ　21：3）。イエスは、人が乗ったことのない小馬を、ご自分の用にえらばれた。弟子たちは、喜びいさんで、この家畜の上に自分たちの上着をひろげ、それに主をお乗せした。これまでイエスはいつも徒歩で旅行されたので、弟子たちは、主がいまご自分からろばに乗　られることをはじめはふしぎに思った。しかし主がいま首都に人られ、王であることを宣言　し、ご自分の王権を主張されるのだというよろこばしい思いで、彼らの胸は希望に燃えた。

使いに行く途中、彼らはこの輝かしい期待をイエスの友人たちに伝えたので、興奮は遠近にひろがり、人々の期待は最高潮に達した。

キリストは、王の入城について、ユダヤ人の慣例に従っておられた。キリストが乗られた動物はイスラエルの王たちが乗った動物であって、預言には、このようにしてメシヤが王国にこられるということが予告されていた。キリストが小馬にお乗りになるやいなや、勝利の叫びが大気をふるわせた。群衆は、キリストをメシヤ、彼らの王として歓呼した。イエスはいま、以前には決しておゆるしにならなかった敬意をお受けになったので、弟子たちはこのことを、イエスが王位につかれるのを見ることによって自分たちのうれしい望みが実現される証拠として受けとった。群衆は、彼らの解放の時が近づいたことを確信した。彼らは、ローマの軍隊がエルサレムから追われ、イスラエルがもう 1 度独立国家になる時のことを胸にえがいた。誰もが喜び、興奮した。人々は先を争ってキリストに敬意をささげた。彼らは、外面的なはなやかさやきらびやかさを示すことはできなかったが、楽しい心からの礼拝を主　にささげた。彼らは高価な贈物をささげることはできなかったが、主の道に彼らの上着をひ　ろげて敷物とし、葉のしげったオリーブの枝やしゅろの枝を道にまきちらした。彼らは、勝　利の行列を王家の旗でみちびくことはできなかったが、自然界の勝利の象徴であるしゅろの　木のひろがった枝を切りとり、それを高らかにうちふって声高く歓呼し、ホサナと叫んだ。

進んで行くうちに、イエスのおいでを聞いて、行列に加わろうと急いでやってきた人たちで群衆はふえつづけた。見物人がひっきりなしに群衆に加わり、「これはどなただ。この騒ぎはいったい何ごとだ」とたずねた。彼らはみなイエスのことを聞いていて、イエスがエルサレムに行かれるものと期待していた。しかしイエスがこれまでご自分を王位につけようとする努力をいっさいゆるされないどいうことを聞いていたので、これがあのイエスであることを知ってすっかり驚いてしまった。わたしの王国はこの世のものではないと宣言しておられたお方が、いったいどうしてこのようにかわってしまったのかと、彼らはあやしんだ。

彼らの質問は勝利の叫びで沈黙ざせられる。勝利の叫びは、熱心な群衆によって何度も何度もくりかえされる。ずっと向こうにいる人たちも勝利の叫びをあげ、それは周囲の山々や谷にこだまする。するとこんどはエルサレムからやってきた群衆が行列に加わる。過越節

に集まった群衆の中から、幾千の人たちがイエスを歓迎するために出かけてくる。彼らはしゅろの枝をうちふり、聖歌を爆発させてイエスにあいさつする。宮の祭司たちはタベの礼拝を知らせるラッパを吹き鳴らすが、答える者はほとんどない。役人たちは驚いて、「世をあげて彼のあとを追って行ったではないか」とお互いに言う（ヨハネ 12：19）。

イエスは、ご自分の地上生涯において、それまでこのようなデモンストレーションをおゆるしにならなかった。イエスははっきりと結果を予見しておられた。それはイエスを十字架につけることになるのであった。しかしこのように公然とご自身をあがない主として示されることはイエスのみこころであった。イエスは堕落した世に対するご自分の使命の最後の仕上げとなる犠牲に人々の注意を引こうと望まれた。人々は過越節を守るためにエルサレムに集まってきていたが、小羊の本体であられるイエスが、自発的な行為によって、ご自身を供え物として聖別された。これにつづく、すべての時代のキリスト教会は、世の罪の ためのイエスの死を、深い思想と研究の主題にすることが必要であった。

これに関係のある 1 つ 1 つの事実が、疑いの余地がないまでに証明されねばならないのであった。だからいますべての人の目をイエスに向ける必要があった。イエスの大いなる犠　牲に先立っいろいろな出来事は、人々の注意を犠牲そのものにひきつけるようなものでなけ　ればならない。イエスのエルサレム入城に伴うこのようなデモンストレーションのあとで、　すべての人々の目は、イエスの最後の場面への急速な進展を追うのであった。この凱旋式に　関連した出来事はすべての人々の話題になり、どの人の心にもイエスを思わせるのであった。イエスが十字架につけられたのち、多くの人たちが、イエスの裁判と死に関連してこれらの　出来事を思い起こすのであった。彼らは預言を調べるようになり、イエスがメシヤであるこ　とをさとるのであった。そして全地において、この信仰に改宗する者がふえるのであった。

キリストの地上生涯におけるこの 1 つの凱旋的場面において、救い主は、天使たちに護衛され、神のラツパに先導されて現れることもおできになった。しかしそのようなデモンストレーションは、イエスの使命の目的に反し、イエスの一生を支配していた原則に反するものであった。イエスはご自分がお受けになったいやしい身分に忠実であられた。世の人々の生命のためにご自分の生命がささげられるまで、イエスは、人性という重荷をお負いになら

ねばならないのであった。 もしこの喜びの場面が主の苦難と死の前奏曲にすぎないことを知ったなら、弟子たちにとって生涯の最良の日のように思えたこの日は、暗雲にとざされたであろう。主はご自分の避けられない犠牲についてたびたび彼らにお語りになっていたのであるが、彼らは目の前のよろこばし勝利によって主の悲しいことばを忘れ、ダビデの位につかれた主の輝かしい統治を待ち望んだ。

行列にはひっきりなしに新しい人たちが加わり、少数の人たちをのぞいて、これに加わった人々はみなその場の霊感を受けてホサナの叫び声を高め、丘から丘へ、谷から谷へこだまを反響させた。「ダビデの子に、ホサナ。主の御名によってきたる者に、祝福あれ。いと高き所に、ホサナ」と、叫び声はたえまなくあげられた（マタイ 21：9）。 世界はこのような凱旋式をかつて見たことがなかった。それは世の有名な征服者たちの凱旋式のようなもの ではなかった。そこには、こうした場面の呼び物となる王の武勇を記念する捕虜たちの悲嘆 に暮れた行列はなかった、救い室のまわりには、罪人に対する主の愛の働きによる輝かしい 戦勝記念となる人たちがいた。主がサタンの権力から救い出された捕虜たちが、彼らの救い について神を賛美していた。主が視力を同復しておやりになった目の見えない人たちが先頭 に立っていた。主が舌を動くようにしておやりになった口のきけない人たちが一番大きな声 でホサナと叫んだ。主がなおしておやりになった足の不自由な人たちが喜びで足どりも軽く、一番元気よく、しゅろの枝を折って救い主の前でうち振っていた。やもめたちとみなし子た ちが自分たちに対するイエスのいつくしみ深いみわざについて、み名をあがめていた。主が きよめておやりになった重い皮膚病の人たちがそのけがれていない衣を道にひろげ、栄光の 王としてイエスに歓呼した。主のみ声によって死の眠りからよびさまされた人たちがその群 れの中にいた。墓の中で肉体が腐敗していたラザロが、いますばらしい人間としての力を喜 びながら、救い主の乗っておられる動物をみちびいた。

多くのパリサイ人たちが、この光景を見て、ねたみと敵意に燃え、民衆の人気の流れを変えようとした。彼らは、あらゆる権威をもって、人々を沈黙させようと試みた、しかし彼らの訴えとおどかしは熱心さを増したにすぎなかった。彼らはこの大群衆が、数の力で、イエスを王にすることを恐れた。最後の手段として、彼らは群衆を押しわけて救い主のおられ

るところへ近づき、非難と脅迫のことばで、「先生、あなたの弟子たちをおしかり下さい」とイエスに呼びかけた（ルカ 19：39）。彼らは、こんな騒がしいデモンストレーションは不法であり、当局から許可されないだろうと断言した。しかし彼らは、「あなたがたに言うが、もしこの人たちが黙れば、石が叫ぶであろう」というイエスの答えに沈黙させられた（ルカ 19：40）。この勝利の光景は、神ご自身がお定めになったものであった。それは預言者によって予告されていて、人間には神の目的をそらす力はなかった。

もし人間が神のご計画を実行しなかったら、神はいのちのない石に声を与え、石が賛美の叫びをもってみ子を歓呼したであろう。沈黙させられたパリサイ人たちが引きさがると、幾百の人々の声がゼカリヤのことばをとりあげた。「シオンの娘よ、大いに喜べ、エルサレムの娘よ、呼ばわれ。見よ、あなたの主はあなたの所に来る。彼は義なる者であって勝利を得、柔和であって、ろばに乗る。すなわち、ろばの子である子馬に乗る」（ゼカリヤ 9： 9）。 行列が丘のはずれにきて、ちょうど町へ向かってくだろうとした時、イエスが立ちどまられたので、いっしょにいたおおぜいの者たちもみな立ちどまった。彼らの目の前には、いま沈んでいく太陽の光を浴びて輝かしいエルサレムがひろがっていた。みんなの目は宮にひきつけられた。それは堂々たる威厳をそなえて、他のすべてのものの上にそびえ立ち、ただ 1 人の真の生ける神を民に示すかのように天を指さしているようにみえた。宮は長い間ユダヤ国民の誇りであり、栄光であった。ローマ人もまた宮の壮麗さを誇りにした。ローマ人によって任命された王が、ユダヤ人と協力して宮を再建してこれを飾り、ローマ皇帝がささげ物によって宮を富ませた。宮は、その力と富と壮麗さのゆえに世界の驚異の 1 つとなっていた。

西に傾いた太陽が空を色どって輝かせると、そのまばゆい輝きが宮の純白な大理石の壁を照らし、黄金をかぶせた柱をきらめかせた。イエスとそのあとに従っている者たちが立っている山の頂からみると、宮は黄金の尖塔をもった巨大な雪の建物のようにみえた。宮の入口には、最もすぐれた芸術家たちによって製作された金銀のぶどうの木があって、それには緑の葉とたくさんのぶどうの房がついていた。このデザインは、イスラエルを繁栄するぶどうの木として象徴していた。金銀と新鮮な緑とが、すぐれた趣向と精巧な細工と 1 つになっ

ていた。それは、白く輝く柱に優美にまきつき、光るまきひげが柱頭の金の飾りにまつわりついて、夕日の輝きを受け、天から借りた栄光のように光っていた。

イエスはそのながめにじっと目をそそがれ、大群衆はこの突然の美しい光景にうっとりとなって叫び声を静める。すべての人の目が救い主に向けられ、自分たちの感じている感嘆が主の顔付きにも見られることを期待する。ところが彼らは、感嘆ではなくて、悲しみの暗い影を見る。主の目に涙かたまっており、主のお体が嵐の前の木のように前後に揺れ、あたかも傷心の奥底からつきあげてくるような苦悩のうめきが主のふるえる唇からもれるのを見て、彼らは驚き、失望する。これはまた天使たちが見ても何という光景であったことだろう。彼らの愛する主が苦悩の涙をためておられるのである。勝利の叫びをあげ、しゅうの枝をうちふりながら主につき従って栄光の都へ行き、主はいまにも統治されるのだと勝手な望みによろこんでいた群衆にとって、これは何という光景だったことだろう。イエスはラザロの墓で泣かれたが、それは人間の悲しみに対する神の同情であった。しかしこの突然の悲しみは、偉大な勝利の合唱のさなかにおける悲嘆の調べのようであった。すべての人々が敬意をささげている喜びの場面のさなかで、イスラエルの王が涙を流しておられる。それは喜びの無言の涙ではなく、おさえきれない苦悩の涙とうめきであった。群衆は突然暗い気持ちになった。歓呼の叫び声が沈黙した。多くの者が理解のできない悲しみに同情して泣いた。

イエスの涙は、ご自分の苦難を予想されたためではなかった。イエスのすぐ前にはゲッセマネがあって、そこではまもなく非常な暗黒の恐怖が主をおおうのであった。羊の門も見えたが、それは幾世紀もの問いけにえとしてささげられる動物がそこを通って行った門であった。これらのすべてのささげ物は、世の 罪のためのいけにえであられるイエスを本体としてさし示していたが、その大いなる本体であられるイエスのために、まもなくこの門が開かれるのであった。近くにカルバリーがあったが、それは迫りつつあるイエスの苦悶の場所となるのであった。しかし救い主が泣かれ、心の苦しみにうめき声を出されたのは、主がご自分の残酷な死を思い出させるこうしたものをごらんになったからではなかった。イエスの悲しみは決して利己的な悲しみではなかった。

ご自身の苦悩についての思いは、主の高貴な、自己犠牲的な魂をおびやかさなかった。イエスの心を刺し通したのは、エルサレムの光景であった。神のみ子をこばみ、その愛をあざけり、その大いなる奇跡を見ても罪を自覚しようとしないで、主の生命をとろうとしているエルサレムであった。あがない主をこばむ罪のうちにあるエルサレムの現状と、エルサレムが、その傷をいやすことのできるただ 1 人のお方であるイエスを受け入れていたらどうなっていたかということを、イエスはご存じであった。主は、エルサレムを救うためにおいでになったのである。どうしてこの都をあきらめることができよう。 イスラエルは恵まれた民であった。神は彼らの宮をご自分の住居とされた。それは「うるわしく、全地の喜び」であった（詩篇 48：2）。父親が独り子に対するようなキリストの守りとやさしい愛について 1000 年以上の記録がそこにあった。この宮の中で、預言者たちは厳粛な警告を語った。そこでは、燃える香炉が揺れ、香煙が礼拝者の祈りにまじって、神のみもとへのぼって行った。そこでは、キリストの血を象徴して、動物の血が流された。そこでは、エホバが贖罪所の上でご自身の栄光をあらわされた。そこでは、祭司たちが職務をとり行い、長年にわたってきらびやかな象徴と儀式が続けられた。しかしこうしたことのすべては終わらねばならない。

イエスは、これまでたびたび病める者と苦しむ者とを祝福されたそのみ手をあげ滅ぶべき運命に定められた都の方を指さして、とだえがちな悲しい口調で、「もしおまえも、この日に、平和をもたらす道を知ってさえいたら……」と叫ばれた（ルカ　19：42）。救い主は、ここでことばをきり、もしエルサレムが、神が与えようと望まれた助け、すなわち神の愛するみ子を受け入れていたら、どういう状態になっていたかについては何も言われなかった。もしエルサレムが知る特権のあった事柄を知って、天の神が送られた光に心をとめていたら、それは輝かしい繁栄のうちに、国々の女王として、神から与えられた豊かな力をもって続いていたかもしれなかった。武装した兵士たちがエルサレムの門に立つことも、ローマの旗が城壁にひるがえることもなかったであろう。

もしエルサレムが救い主を受け入れていたら、エルサレムのものとなったかもしれない輝かしい運命が、神のみ子の前に浮かんだ。エルサレムは、救い主を通して、その悲しむべき病気をいやされ、束縛から解放されて、地上の偉大な首都として固く立ったかもしれない

ということを、イエスはごらんになった。エルサレムの城壁から平和のはとがすべての国々に飛んで行ったであろう。エルサレムは、世界の栄光の王冠となったであろう。

しかしエルサレムがそうなっていたかもしれない輝かしい光景は、救い主の視界から消える。主は、エルサレムがいまローマのくびきの下にあって、神の不興を招き、神の報いの刑罰を受ける運命にあることに気がつかれる。主は切れた嘆きの糸をとりあげられる。「しかし、それは今おまえの目に隠されている。いつかは、敵が周囲に塁を築き、おまえを取りかこんで、四方から押し迫り、おまえとその内にいる子らとを地に打ち倒し、城内の 1 つの石も他の石の上に残して置かない日が来るであろう。それは、おまえが神のおとずれの時を知らないでいたからである」（ルカ 19：42～44）。

キリストは、エルサレムをその民とともに救うためにおいでになった。しかしパリサイ人の誇り、偽善、ねたみ、敵意が主の目的の達成をさまたげていた。イエスはこの滅ぶべき運命に定められた都をおとずれる恐るべき報復を知っておられた。エルサレムが軍隊にとりかこまれ、包囲された住民が飢えと死に追 いこまれ、母親たちが自分自身の子供たちの死体を食べ、親も子も互いに最後のひと口の食物を奪い合い、激しい飢えの苦しみによって自然の愛情が滅ぼされることをお知りになった。主の救いをこばんだことにあらわれたユダヤ人の頑固さは、侵入軍への降伏をこばむようになることを、イエスはごらんになった。イエスは、ご自分があげられるカルバリーに、十字架が林の木々のようにたくさん立つのをごらんになった。主は、あわれな住民が拷問台や十字架で苦しめられ、美しい場所が荒され、宮が破壊され、その巨大な壁が 1 つの石もほかの石の上に残されず、都は畑のようにたがやされるのをごらんになった。この恐るべき光景をごらんになって、救い主が苦悩のうちに泣かれたのは当然である。

それまでエルサレムは、主の保護の下にある子供であった。やさしい父親がわがままな息子のことを嘆くように、イエスは愛する都について泣かれた。どうしてわたしはあなたをあきらめることができよう。あなたが破壊されるままになるのをどうして見ていられよう。あなたが不義のさかずきを満たすのをそのままにしておかねばならないのか。1 つの魂は、それにくらべればもろもろの世界もとるにたりないものとなるほど価値があるのに、ここに全

国民が滅びようとしている。急速に西に沈む太陽が天から姿を消せば、エルサレムの恵みの日は終わるのであった。行列がオリブ山のはしにたちどまっている間に、エルサレムが悔い改めてもまだ遅すぎないのであった。恵みの天使はその時まさに翼をたたんで、正義と急速にのぞみつつあるさばきに座をゆずるために、黄金の座からおりようとしていた。しかしキリストの大いなる愛の心は、ご自分のなさけをあざけり、その警告を軽んじ、まさに主の血に手を染めようとしていたエルサレムのためにまだ弁護していた。もしエルサレムが悔い改めさえすれば、まだ手おくれではなかった。沈んで行く太陽の最後の光が宮と塔と、尖塔のあたりにまだ消えやらないでいるうちに、誰かよい天使がエルサレムを救い主の愛にみちびいて、滅びの運命を避けさせないであろうか。預言者たちを石で打ち、神のみ子をこばみ、その頑固さのために束縛の足かせに身をしばっている美しくそしてけがれた都。その恵みの日はほとんど暮れかけていた。

しかしふたたび神のみたまはエルサレムに語る。日が暮れる前に、キリストについてもう 1 つのあかしがたてられる。預言に示された過去からの呼び声に応じて、あかしの声があげられる。もしエルサレムがその呼び声をきくならば、もしエルサレムがその都に入ろうとしておられる救い主を受け入れるならば、エルサレムはまだ救われるのである。 イエスが大群衆とともに都へ近づいておられるという知らせがエルサレムの役人たちにとどいた。しかし彼らには神のみ子を歓迎する気持ちはない。彼らは群衆を追い払いたいと望みながら、恐る恐るイエスに会いに出かける、ちょうどオリブ山をくだろうとするところで、行列は役人たちにさえぎられる。彼らはこのさわがしい喜びの理由をたずねる。彼らが、「これは、いったい、どなただろう」とたずねると、弟子たちは霊感に満たされて、その質問に答える。彼らは雄弁な口調で、キリストに関する預言をくりかえす。

アダムはあなたがたに告げるであろう、彼は蛇の頭をくだく女のすえであると。 アブラハムにたずねるならば、彼はあなたがたに告げるであろう、それは「サレムの王メルキゼデク」平和の王であると（創世記 14：18）。 ヤコブは告げるであろう、彼はユダ族のシロであると。 イザヤは告げるであろう、「インマヌエル」「霊妙なる議士、大能の神、とこしえの父、平和の君」であると（イザヤ 7：14、9：6）。 エレミヤは告げるであろう、彼はダビ

デのわかれ、「主はわれわれのの正義」と（エレミヤ 23：6）。 ダニエルは告げるであろう、彼はメシヤであると。 ホセアは告げるであろう、「主こは万軍の神、その名は主である」と（ホセア 12：5）。キリストの弟子であるわれわれは宣言する、これはイエス、メシヤ、いのちの君、世の救い主であると。　　しかも暗黒の勢力の君でさえ、イエスをみとめて言う、「あなたがどなたであるか、わかっています。神の聖者です」と（マルコ 1：24）。

第 64 章　滅ぶべき民

キリストの凱旋的なエルサレム入城は、天使たちの勝ち歌と聖徒たちの喜びのうちにキリストが力と栄光をもって天の雲に乗ってこられるありさまをかすかに予表していた。キリストが祭司たちとパリサイ人たちに、「『主の御名によってきたる者に、祝福あれ』とおまえたちが言う時までは、今後ふたたび、わたしに会うことはないであろう」と言われたことばが、その時成就するのである（マタイ 23：39）。ゼカリヤは、預言のまぼろしの中で、その最後の勝利の日を示された。彼はキリストの初臨の時に主をこばんだ人々の滅びを見た。「彼らはその刺した者を見る時、ひとり子のために嘆くように彼のために嘆き、ういこのために悲しむように、彼のためにいたく悲しむ」（ゼカリヤ 12：10）。キリストは、都をごらんになってこの町のために泣かれた時、この場面を予見された。エルサレムの一時的滅亡のうちに、キリストは、神のみ子の血について罪のあるこの人たちの最後的な滅亡をごらんになった。 弟子たちは、キリストに対するユダヤ人の憎しみを知っていたが、しかしそれがどういうことになるかはまだわかっていなかった。彼らはまだイスラエルの真の状態を理解してもいなければ、エルサレムにのぞもうとしている刑罰についてもわかっていなかった。このことを、キリストは、意味の深い実物教訓によって彼らにお示しになった。

エルサレムに対する最後の訴えはむだであった。祭司たちと役人たちは、「これは、いったい、どなただろう」という質問に対する答として、過去の預言の声が群衆によってくりかえされるのを聞いたが、彼らはそれを神の声として受けなかった。怒りと驚きのうちに、彼らは人々を沈黙させようとした。群衆の中にはローマの役人たちがいたので、キリストの反対者たちは役人たちに向かって、イエスは反乱の指導者であると告発した。反対者たちはキリストが宮を占領し、主としてエルサレムを統治しようとしておられると主張した。

しかしイエスが、自分はこの世の支配権を確立するためにきたのではないと、ふたたび断言された時、イエスの落ちついたお声は、一瞬間、騒々しい群衆をだまらせた。イエスはまもなく天父のもとにのぼられ、イエスを非難する者たちは、主が栄光のうちにふたたびこられるまでもう主を見ることはないのである。その時になって主をみとめても、彼らの救い

はすでに手遅れである。そうしたことばを、イエスは悲しみとふしぎな力をもってお語りになった。ローマ人の役人たちは威圧されて沈黙した。彼らは天来の感化力というものを知らなかったが、これまでかつてなかったほど心を動かされた。イエスの落ち着いた、おごそかな顔から、彼らは愛と慈悲と静かな威厳とを読みとった。彼らは、理解できない同情に心を動かされた。イエスを捕らえるどころか、彼らはむしろイエスに敬意をささげたかった。彼らは、祭司たちと役人たちに向かって、騒ぎをひき起こしたのはあなたたちだと非難した。これらの指導者たちは、敗北してくやしがり、その不満を民衆に向け、怒って互いに議論し合った。

その間にイエスは、気づかれないで、宮へ入って行かれた。そこではすべてが静かであった。オリブ山の騒ぎに人々はみな行ってしまっていたからである。しばらくの間イエスは宮にいて、悲しそうな目つきで宮をながめておられた。それから弟子たちといっしょに退いて、ベタニヤへ帰られた。人々がイエスを王座につけるためにさがし求めた時、イエスはみつからなかった。

1 晩中イエスは祈りのうちに過ごされ、朝になってふたたび宮にこられた。途中、イエスはいちじくの園を通りかかられた。主はおなかがすいておられたので、「葉の茂ったいちじくの木を遠くからごらんになって、その木に何かありはしないかと近寄られたが、葉のほかは何も見当らなかった。いちじくの季節でなかったからである」（マルコ 11：13）。 その時は、ある場所を除けば、いちじくの熟する季節ではなかった。エルサレム周辺の高地では、当然「いちじくの季節でなかった」。しかしイエスがおいでになった果樹園の中では、1本の木がほかのすべての木よりも早いようにみえた。その木はすでに葉におおわれていた。葉が開く前に実がみのるのがいちじくの木の性質である。だから葉の茂ったこの木にはよく熟した実がありそうにみえた。しかしそれは見かけ倒しであった。木の枝を 1 番下からてっぺんの小枝までさがしても、「葉のほかは何も見当らなかった」（マルコ 11：13）。見かけだけたくさんの葉が茂っていたが、それ以外には何もなかった。

キリストは、その木が枯れるようにというのろいのことばを出された。「今から後いつまでも、おまえの実を食べる者がないように」と主は言われた（マルコ 11：14）。次の朝、

救い主が弟子たちともう 1 度都へ行かれる途中、枯れた枝としおれた葉が彼らの注意をひいた。ペテロが、「先生、ごらんなさい。あなたがのろわれたいちじくが枯れています」と言った（マルコ 11：21）。

キリストがいちじくの木をのろわれた行為は、弟子たちを驚かせた。それはキリストの方法やみわざにふさわしくないものに思えた。これまでしばしば彼らは、わたしは世を罪に定めるためではなくわたしを通して世が救われるためにきたのだと、キリストが宣言されるのをきいた。彼らは、「人の子は人の生命を滅ぼすためではなく、これを救うためにきたのである」と言われたキリストのことばを思い出した（ルカ 9：56・英語訳聖書）。これまでキリストのふしぎなみわざは、決して滅ぼすためではなく、回復するためになされた。弟子たちは回復してくださるお方、いやしてくださるお方としてしかキリストを知らなかった。しかしこの行為だけは目立っていた。その目的は何であろうと、彼らはたずねた。

「神はいつくしみを喜ばれ」「主なる神は言われる、わたしは生きている。わたしは悪人の死を喜ばない」（ミカ 7：18、エゼキエル 33：11）。神にとって滅ぼすわざと刑罰の宣言とは、「異なったものである」（イザヤ 28：21）。しかし神が未来の幕を開いて、罪の行為の結果を人々に示されるのは、憐れみと愛によるのである。 いちじくの木がのろわれたのは、実地に示された譬であった。キリストの面前で、見せかけの葉をひらひらさせている実のならないこの木は、ユダヤ国民の象徴であった。救い主は、イスラエル滅亡の原因と必然性を弟子たちにはっきり示したいと望まれた。この目的のために、主はこの木に道徳的性質をさずけ、これを天来の真理の解説者とされた。ユダヤ人はほかのすべての国民とは異なっていて、神への忠誠を公言していた。彼らは神から特別に恵まれ、ほかのどんな民にもまさる義を主張していた。しかし彼らは世俗への愛着と利欲によって堕落していた。彼らは知識を誇ったが、神のご要求については無知であり、偽善に満ちていた。実のならないいちじくの木のように、彼らはみせかけの枝を高くひろげて外観を誇り、目に美しかったが、「葉のほかは何も」生じなかった（マルコ 11：13）。ユダヤ人の宗教は、壮麗な神殿、その聖なる祭壇、帽子をかぶった祭司たちと印象的な儀式があって、外観はまことに美しかったが、謙遜、愛、慈悲に欠けていた。

いちじくの園の木には全部実がなかった、しかし葉のない木は期待をいだかせず 1 したがって失望を与えなかった。このような木によって異邦人が象徴されていた。彼らはユダヤ　人と同じように信心に欠けていた。しかし彼らは神に仕えるとは告白していなかった。彼ら　はみせかけの善を誇っていなかっ　た。彼らは神のみわざと道がわからなかった。彼らにとって、いちじくの実のなる時はまだきていなかった。彼らは、光と望みが与えられる日をまだ　待っていた。ユダヤ人は、彼らよりも大きな祝福を神から受けていたので、そうした賜物の　悪用に責任があった。ユダヤ人が自慢していた特権は彼らの不義を増しただけであった。　イエスは、おなかがすいて、食物をみつけるためにいちじくの木のところへこられたのだった。同様に主は、イスラエル人の中に義の実をみつけようと熱望して、彼らのところにこられた　のであった。主は彼らが世の祝福のために実をむすぶように、惜しげもなく賜物を彼らにお　与えになった。あらゆる機会と特権が彼らに与えられたが、こんどは主が、ご自分の恵みの　働きに、彼らの共鳴と協力とを求められた。主は彼らのうちに自己犠牲、同情、神への熱意、同胞の救いに対する魂の底からの熱意を見たいと望まれた。

もし彼らが神の律法を守っていたら、彼らはキリストと同じ無我の働きをしたのである。しかし神と人とに対する愛は、誇りと自己満足によっておおわれていた。彼らは人に奉仕することをこばんで自らの上に滅びを招いた。彼らは、神が彼らに委託された真理の宝を世に与えなかった。実のなっていないいちじくの木を通して、彼らは自分たちの罪とその刑罰とを読みとることができたはずである。救い主ののろいの下にしおれ、枯れしなびて立ち、根のかわいたこのいちじくの木は、神の恵みが取り去られた時にユダヤ民族がどうなるかを示していた。祝福を与えようとしなかったために、彼らはもはや祝福を受けられないのであった。「イスラエルよ、あなたはあなたを滅ぼした」と主は言われる（ホセア　　13：9・英語訳）。

この警告はどの時代にもあてはまる。キリストがご自分の力でつくられた木をのろわれたこの行為は、すべての教会とすべてのクリスチャンにとって 1 つの警告である。人に奉仕しないならば、だれも神の律法を生活に実行しているとはいえない。ところがキリストの憐れみ深い、無我の生活を実行していない人が多い。自分はりっぱなクリスチャンであると考

えている人々が、神に奉仕することがどんなことであるかをわかっていない。彼らは自分自身をよろこばせるために計画し、学ぶ。彼らは自分自身に関してのみ行動する。時間は自分の利益になる時だけ値うちがある。生活のすべての点において、これが彼らの目的である。人のためではなく、自分自身のために、彼らは奉仕するのである。神は、無我の奉仕を行わねばならない世界に住まわせるために、彼らをつくられた。神は、彼らがあらゆる方法で同胞を助けるように計画された。しかし自我があまりに大きいために、彼らはほかのものは何も見ることができない。彼らは人間と接触していない。このように自我のために生きる者は、すべてがみせかけだけで実のならないいちじくの木と同じである。彼らは礼拝の形式を守っているが、悔い改めもなければ信仰もない。口先では神の律法を敬っているが、服従が欠けている。彼らは口では言うが、行わない。

いちじくの木に対する宣告の中に、キリストは、このようなむなしいみせかけがキリストの御目にどんなに憎むべきものであるかを実際に示しておられる。神に仕えると告白しながら神のみ栄えのために実をむすぼない人間よりは、公然たる罪人の方がまだ罪が軽いということをキリストは宣言しておられる。

キリストのエルサレム訪問の前に語られたいちじくの木の譬は、実のならない木をのろうことによって教えられた教訓と直接に関係があった。譬の中の実のならない木について園丁はこう懇願した、「ことしも、そのままにして置いてください。そのまわりを掘って肥料をやってみますから。それで来年実がなりましたら結構です。もしそれでもだめでしたら、切り倒してください」（ルカ 13：8、9）。実をむすぼない木にもっと手入れを施すことになった。これにあらゆる利点を与えることになった。しかしそれでも実がならなかったら、どんなこともそれを破滅から救うことはできない。 この譬の中には、園丁の働きの結果は予告されなかった。それはキリストがこのことばを語られた人々の態度にかかっていた。彼らは実のならない木によ って象徴されていた。彼らの運命を決定するのは彼ら自身であった。天の神がお与えになることのできるあらゆる利点が彼らに与えられたが、彼らは増し加えられた祝福から益を受けなかった。その結果は、実のならないいちじくの木をのろわれたキリストの行為によって示された。彼らは自分自身の破滅を決定したのであった。

1000 年以上にわたってユダヤ国民は神の恵みを悪用し、神の刑罰を招いた。彼らは神の警告をこばみ、その預濠者たちを殺した。キリストの時代の人々も同じ道に歩むことによって、こうした罪に責任があった。この世代の不義は、その時の恵みと警告をこぼむことにあった、幾世紀にわたってこの国民が作ってきた足かせを、キリストの時代の民は自らの身にむすびつけつつあった。 どの時代にも、光と特権の日、すなわち神と和解する恩恵の時が人々に与えられている、しかしこの恵みには限度がある。何年間人々に訴えても、恵みは軽んじられ、こばまれるかも知れない。しかし恵みが最後の訴えをする時が来る。心はかたくなになって、神のみたまに答えなくなる。すると、人をひきつけるやさしいみ声はもはや罪人の心に訴えなくなり、譴責と警告はやむ。

その日がエルサレムにきていた。イエスは滅ぶべき都のために苦しんで泣かれたが、エルサレムを救うことがおできにならなかった。主はありとあらゆる手段をつくされた。神のみたまの警告をこばむことによって、イスラエルは、唯一の助けの方法をこばんだ。彼らを救うことができる力はほかになかった。 ユダヤ国民は、限りない愛の神の訴えをあざける各時代の人々を象徴していた。キリストがエルサレムについて泣かれた時の涙は、すべての時代の罪のためであった。神の聖霊の譴責と 1 近警告をこばむ者は、イスラエルに宣告された刑罰のうちに、自分自身の罪の宣告を読むことができる。 いまの世代に、不信のユダヤ人と同じ道を歩んでいる者が多い。彼らは神の力のあらわれを目に見た。聖霊は彼らの心に語った。しかし彼らは不信と抵抗をあくまでもやめない。神は彼らに警告と譴責を送られるが、彼らは自分の誤りを告白したがらないで、神の使命と使者をこばむ。彼らの回復のために神が用いられる方法までが、彼らにとってはつまずきの石となる。 神の預言者たちは、かくれた罪を明るみに出すので、背信のイスラエルから憎まれた。頂言者エリヤは、アハブ王の秘密の不義を忠実に責めたので、彼はアハブ王から敵とみなされた。同様に、今日キリストのしもべ、すなわち罪を責める者は、嘲笑と拒絶に出あう。聖書の真理、すなわちキリストの宗教は、道徳的不純という強い風潮にさからって戦う。今日、人々の心の中の偏見は、キリストの時代よりも強い。

キリストは人々の期待を実現されなかった。主の生活は彼らの罪にとって 1 つの譴責であったので、彼らは主をこばんだ。そのようにいまも、神のみことばの真理は人々の習慣や生来の傾向と調和しないので、幾千の人々がその光をこばむ。サタンにそそのかされる人々は神のみことばに疑いを投げかけ、独自の判断を働かせることをえらぶ。彼らは光よりも暗黒をえらぶが、彼らは自分の魂の危険をかけてそうするのである。キリストのみことばのあらさがしをした者たちは、あらさがしのもとをますます多く発見し、ついには真理でありいのちであるお方から離れて行った。今日も同様である。神は、肉の心が神の真理にさからって生じさせる障害の 1 つ 1 つを取り除こうとは言っておられない。暗黒を照らすとうとい光をこばむ者には、神のみことばの神秘は永遠に神秘である。真理は彼らの目からかくされている。彼らは盲目のままに歩むので、目の前にある滅びを知らない。

キリストは、オリブ山の高いところから、世界と各時代を見渡された。彼のみことばは神の恵みの訴えを軽んじるすべての魂にあてはまる。キリストの愛をあざける者よ、主は今日あなたに語られる。平和をもたらす道を知っているべき者は「あなた」である（ルカ 19:42 参照）、キリストはあなたのために涙を流しておられるのに、あなたは自分自身のために流す涙がない。パリサイ人たちを破滅させたあの致命的　な頑固な心はすでにあなたのうちにあらわれている。神の恵みの 1 つ 1 つの証拠、天来の光の一筋一筋は、魂をとかして従わせるか、絶望的な頑迷さを一層固くするかのどちらかである。　キリストは、エルサレムがいつまでも頑固に悔い改めないことを予見された。しかしすべての不義、しりぞけられた憐れみ　のすべての結果は、エルサレム自身の門口にあった。同じ道を歩むすべての魂にとっても同　様である。主はこう宣告しておられる。「イスラエルよ、あなたはあなたを滅ぼす」「地よ、聞け、見よ、わたしはこの民に災をくだす。それは彼らのたくらみの実である。彼らがわた　しの言葉に気をつけず、わたしのおきてを捨てたからである」（ホセア　13：9・英訳、エレミヤ 6：19）。

第 65 章　ふたたびきよめられた宮

キリストは、公生涯の始めに、けがれた商売によって宮をけがしていた者たちを宮から追い出された。そのきびしい、威厳のある態度はずるい商人たちの心に恐怖を与えた。公生涯のおわりに、主はもう 1 度宮にこられて、そこが前と同じようにけがされているのをごらんになった。事態は前よりもひどかった、宮の外庭は広い家畜置場のようであった。動物の鳴き声と貨幣のかん高い音に商人たちの怒った口論の声がまじり、その中に聖職者たちの声がきかれた。宮の当局者たちが自ら売り買いと金銭の両替をやっていた。彼らはまったく利欲に動かされていたので、神の御目にはどろぼうとかわらなかった。

祭司たちと役人たちは、自分たちが果たさねばならない厳粛な任務にすこしも気づいていなかった。過越節と仮庵の祭のたびに、幾千の動物が殺され、その血が祭司たちの手によって祭壇にそそがれた。ユダヤ人は血をささげることに慣れてしまって、動物の血をこのように流さねばならないのは罪のためであるという事実をほとんど忘れていた。彼らは、それが神のいとし子の血を予表するものであって、それは世の人々のいのちのために流されるのだということ、人はいけにえをささげることによって、十字架につけられた救い主に心を向けるのであるということをみとめていなかった。

イエスは、けがれのない犠牲の動物をごらんになって。ユダヤ人がこうした大きな集会を流血と残酷の場としているのをごらんになった。へりくだって罪を悔い改めることをしないで、彼らは、心のこもらない奉仕によって神をあがめることができるかのように、動物のいけにえの数を増していた。祭司たちと役人たちは、利己心と貪欲心のために心がかたくなになっていた。彼らは、神の小羊イエスをさし示している象徴さえ、金もうけの手段としていた。こうして、人々の目の前で、犠牲制度の神聖さは大部分失われていた。イエスの憤激がわき起こった。イエスは、もうすぐ世の罪のために流されるご自分の血が、たえず流されている動物の血と同じように、祭司たちと長老たちからすこしも理解されないことをご存じであった。

こうした習慣に対して、キリストは預言者たちを通して語っておられた。サムエルは、「主はそのみ言葉に聞き従う事を喜ばれるように、燔祭や犠牲を喜ばれるであろうか。見よ、従うことは犠牲にまさり、聞くことは雄羊の脂肪にまさる」と言った（サムエル上 15：22）。またイザヤは、預言のまぼろしの中でユダヤ人の背信を見て、ソドムとゴモラの統治者としての彼らに告げた、「あなたがたソドムのつかさたちよ、主の言葉を聞け。あなたがたゴモラの民よ、われわれの神の教に耳を傾けよ。主は言われる、『あなたがたがささげる多くの犠牲は、わたしになんの益があるか。わたしは雄羊の燔祭と、肥えた獣の脂肪とに飽いている。わたしは雄牛あるいは小羊、あるいは雄やぎの血を喜ばない。あなたがたは、わたしにまみえようとして来るが、だれが、わたしの庭を踏み荒すことを求めたか』」（イザヤ 1： 10～12）。「あなたが たは身を洗って、清くなり、わたしの日の前からあなたがたの悪い行いを除き、悪を行うことをやめ、善を行うことをならい、公平を求め、しえたげる者を戒め、みなしごを正しく守り、寡婦の訴えを弁護せよ」（イザヤ 1：16、17）。

こうした預言を自らお与えになったキリストが、いま最後にもう 1 度この警告をくり返された。預言の成就として、民は、イエスをイスラエルの王として宣言していた。イエスは彼らの敬意を受け、王位を受けられた。王としてイエスは行動されなければならない。主は堕落した祭司制度を改革しようとするご自分の努力がむだであることを知っておられた。それにもかかわらず主の働きはなされねばならない。信じない民に、主天来の使命について証拠を与えねばならない。

ふたたびイエスの鋭い視線がけがされた宮の庭にそそがれた。すべての目がイエスの方へ向けられた。祭司も役人も、パリサイ人も異邦人も、天の王の威厳をもって目の前に立っておられるイエスを驚きとおそれの念をもって見た。神性が人性を通してひらめき、キリストは、これまでかつてあらわされたことのなかった威厳と栄光を帯びられた。主のいちばん近くに立っていた人たちは、できるだけ群衆の方へ遠ざかった。少数の弟子たちのほかには、イエスは 1 人で立っておられた。あらゆる音がしずまった。深い沈黙は耐えがたいように思われた。キリストは、すさまじい嵐のように民をゆすぶる力をもって語られた、「『わたし　の家は、すべての国民の祈の家ととなえられるべきである』と書いてあるではないか。それ

だのに、あなたがたはそれを強盗の巣にしてしまった」（マルコ 11：17）。イエスの声はラッパのように宮じゅうに響きわたった。主のみ顔の不興は焼きつくす火のようにみえた。権威をもって、主は、「これらのものを持って、ここから出て行け」と命じられた（ヨハネ 2：16）。

3 年前に、宮の役人たちは、イエスの命令に逃げ出して恥をかいた。それ以来彼らは、自分たちが恐れを感じたことと、ただ 1 人のいやしい人間に無条件に従ったことをふしぎに思っていた。こんな不面目な屈服をふたたびくりかえしてはならないと彼らは思っていた。ところが彼らは、今度は前よりももっと恐ろしくなり、もっとあわててイエスの命令に従ったのである。イエスの権威を疑う者はだれもいなかった。祭司たちと商人たちは家畜を追い立てながら、イエスの前から逃げ出した。

宮から逃げる途中、彼らは、大医師イエスをたずねながら病人を連れてきた群の人たちに出会った。逃げて行く人たちから話を聞いて、中には引き返す者たちもいた。彼らは、祭司たちと役人たちをひとにらみで目の前から追い払われたほどの力のあるお方に会うのがこわかった。しかし大勢の者たちが彼らの唯一の望みであるイエスのもとに行こうと熱望して、あわただしく逃げて行く群衆の中を押し進んだ。群衆が宮から逃げ出したあとには、まだ多くの者が残っていた。この人たちと新しくやってきた人たちとがいっしょになり、宮の庭はもう 1 度病人や死にかけている人たちでいっぱいになった。そこでもう 1 度イエスはこれらの人々に奉仕された。

しばらくして、祭司たちと役人たちは思いきって宮へもどってきた。あわてふためいた気持ちがすこし落ちついてくると、彼らはイエスが次にどんな行動をとられるかを知りたいという思いにとりつかれた。彼らはきっとイエスがダビデの位につかれるのだと思った。そっと宮へもどってくると、彼らは、男や女や子供たちが神を賛美している声を聞いた。中へはいってみて、彼らは驚くべき光景の前にぼうぜんと立ちすくんだ。彼らは、病人がいやされ、目の見えない人が視力を回復し、聞こえない人が聞こえるようになり、足の不自由な人が喜びにおどりあがっているのを見た。子供たちがまっさきによろこんでいた。イエスが彼らの病気をいやされたのである。主は、彼らを両腕にいだき、彼らの感謝と愛情の接吻をお

受けになった。子供たちの中には、人々に教えておられるイエスの胸によりかかって眠っている者もあった。いま喜びの声をあげて、子供たちは主を賛美した。彼らは前の日のホサナをくりかえし、救い主の前に意気　揚々としゅろの枝をふった。「主のみ名によってはいる者はさいわいである」「見よ、あなたの王はあなたの所に来る。彼は義なる者であって勝利を　得」、「ダビデの子に、ホサナ」と叫ぶ彼らの歓呼に、宮は反響をくりかえした（詩篇 118：26、ゼカリヤ 9：9、マタイ 21：9）。

このようなよろこばしい、遠慮のない声の響きは宮の役人たちにとって不快であった。彼らはこのようなデモンストレーションをやめさせようとしはじめた。そして神の家が子供たちの足と喜びの叫び声にけがされたと人々に言った。自分たちのことばが人々の心を動かさないことを知ると、役人たちは、キリストに訴えて言った、「『あの子たちが何を言っているのか、お聞きですか』。イエスは彼らに言われた、『そうだ、聞いている。あなたがたは「幼な子、乳のみ子たちの口にさんびを備えられた」とあるのを読んだことがないのか』」（マタイ 21：16）。キリストが王として宣言されるということが預言に予告されていたが、このことばは成就しなければならない。イスラエルの祭司たちと役人たちが、キリストの栄光を先触れすることをこばんだので、神は子供たちの心に働いて、彼らをキリストの証人とされた。もし子供たちの声が沈黙させられたら、宮の柱が救い主の賛美をひびかせたであろう。

パリサイ人たちはすっかりまごつき、混乱した。彼らがおどかすことのできないお方が指揮しておられた。イエスは宮の保護者としての立場をとられた。主はこれまでこのように堂々たる権威のある態度をとられたことがなかった。主のことばとわざにこれほど大きな力があったことはこれまでになかった。主はエルサレムのいたるところでふしぎなわざを行われたが、これほど厳粛で印象的な態度をとられたことはなかった。主のふしぎなみわざを目撃した人々の前では、祭司たちと役人たちは、あえて主に公然たる敵意を見せようとしなかった。イエスの答に怒り、まごつきながらも、彼らはその日はそれ以上どうすることもできなかった。

次の朝、サンヒドリンは、イエスに対してとるべき手段についてもう 1 度考慮した。3年前に、彼らは、イエスにメシヤであることの証拠を要求した。その時から、イエスは全国で偉大なわざを行われた。主は病人をいやし、数千人の人たちを奇跡的に養い、波の上を歩き、波立つ海をみことばでしずめられた。主は、人々の心をあたかも開かれた本を読むかのように何度も読まれた。主は悪鬼を追い出し、死人をよみがえらせられた。イエスがメシヤであるという証拠は、役人たちの目の前にあった。そこで彼らは、イエスの権威のしるしを求めないで、イエスから何らかの告白か宣言を引き出し、それによってイエスを罪に定めようと決心した。

イエスが教えておられる宮へ入って行って、彼らはイエスに、「何の権威によって、これらの事をするのですか。だれが、そうする権威を授けたのですか」と質問しはじめた（マタイ 21：23）。彼らは、イエスが自分の権威は神からさずけられたのだと主張されるものと期待した。このような主張をされたら、彼らはそれを否定するつもりであった。しかしイエ　スは、ほかの問題に関連しているようにみえる質問で彼らに応じられた。そしてイエスは、　この質問に彼らが答えたらわたしも答えようと言われた。「ヨハネのバプテスマはどこから　きたのであったか。天からであったか、人からであったか」とイエスは言われた（マタイ 21：25）。

祭司たちは、自分たちがどんな理屈を並べても、のがれることのできないジレンマに陥ったことを知った。もしヨハネのバプテスマは天からだと言えば、彼らの矛盾が明らかになる。ではなぜあなたがたはヨハネを信じなかったのかとキリストは言われるだろう。ヨハネはキリストについて、「見よ、世の罪を取り除く神の小羊」とあかしした（ヨハネ 1：29）。もし祭司たちが、ヨハネのあかしを信じるなら、どうしてキリストがメシヤであることを否定することができよう。もし彼らが本当の信念、すなわちヨハネの使命は人からだと宣言すれば、彼らは怒りの嵐を招くであろう。なぜなら人々はヨハネを預言者と信じていたからである。

熱心な興味をもって、群衆は決定を待った。彼らは、祭司たちがヨハネの使命を受け入れると告白したのを知っていたので、ヨハネが神からつかわされたということを問題なくみ

とめるだろうと期待した。ところがひそひそと相談し合ってから、祭司たちは何にも言わないことにきめた。偽善的に無知をよそおいながら、彼らは、「わたしたちにはわかりません」と言った（マタイ 21：27）。するとキリストは、「わたしも何の権威によってこれらの事をするのか、あなたがたに言うまい」と言われた（マタイ　21：27）。 学者たち、祭司たち、役人たちはみなだまった。彼らは、どうしてよいかわからず、失望し、それ以上キリストに　質問を浴びせる元気もなく、まゆをよせて。立ったままであった。臆病と優柔不断のために、彼らは人々の尊敬を大部分失った。人々はいまそばに立って、これらの高慢な、自らを義と　する入たちが敗北するのを見ておもしろがった。

キリストのこうしたすべての言行は重要であって、その影響は、キリストが十字架につけられ、昇天されてから一層強くみられるのであった。イエスに対する質問の結果を熱心に待った人々のうちの多くは、はじめはこの出来事の多かった 1 日におけるイエスのみことばによってイエスにひかれ、最後にはその弟子になることになった。宮の庭の光景は彼らの心から決して消えなかった。イエスが大祭司と語られた時、2 人の対照はきわだっていた。宮の最高位にあるいばった大祭司は、豪華で高価な衣服を身につけていた。その頭にはきらめくテアラー（宝冠）がのっていた。彼の挙動には威厳があって、その髪の毛と長くなびいているあごひげは老齢のために銀色をしていた。彼の外観は見る者を恐れさせた。

この威風堂々たる人物の前に、天の大君が何の飾りもみえもなく立っておられた。主の衣は旅によごれ、その顔は青くてがまん強い悲しみがあらわれていた。しかしそこには、高慢で自信満々として、恐ろしい様子をしている大祭司と奇妙な対照をなしている尊厳と慈悲が書かれていた。宮の中でイエスのことばと行いを見聞きした者たちの多くは、その時から、イエスが神の預言者であることを、心の中に秘めていた。しかし人々の心がイエスに傾くにつれて、イエスに対する祭司たちの憎しみがました。イエスがご自分の足にしかけられたわなをのがれられた知恵は、イエスの神性についての新しい証拠となったので、彼らの怒りに油がそそがれた。

ラビたちとの論争において、相手に恥をかかせることがキリストの目的ではなかった。主は彼らの苦境を見ることをよろこばれなかった。キリストはたいせっな教訓を教えようと

されたのであった。主は、敵どもが主の前にかけたわなに彼ら自身が落ち込むままにして恥ずかしい思いを彼らにさせられた。ヨハネのバプテスマの性格について彼らが無知を告白したことによって、主は語る機会をつかみ、その機会を利用して彼らの真の状態を示し、これまですでに与えられた多くの警告にさらにもう 1 つを加えられた。 イエスは言われた、「あなたがたはどう思うか。ある人にふたりの子があったが、兄のところに行って言った、『子よ、きょう、ぶどう園へ行って働いてくれ』。すると彼は『おとうさん、参ります』と答えたが、行かなかった。また弟のところにきて同じように言った。彼は「いやです』と答えたが、あとから心を変えて、出かけた。このふたりのうち、どちらが父の望みどおりにしたのか」（マタイ 21：28～31）。

この不意の質問は、聞いている者たちに警戒心を忘れさせた。彼らはこの譬を注意深く聞いていたので、すぐに「あとの者です」と答えた（マタイ 21：31）。イエスは彼らにじっと目をそそいで、きびしくおごそかな調子でこれに応じられた。「よく聞きなさい。取税人や遊女は、あなたがたより先に神の国にはいる。というのは、ヨハネがあなたがたのところにきて、義の道を説いたのに、あなたがたは彼を信じなかった。ところが、取税人や遊女は彼を信じた。あなたがたはそれを見たのに、あとになっても、心をいれ変えて彼を信じようとしなかった」（マタイ 21：31、32）。

祭司たちと役人たちはキリストの質問に対して正しい答をしないわけにいかなかった。こうして主は、弟 の立場を支持する彼らの意見をはっきりさせられた。この息子は、パリサイ人たちから軽べつされ憎まれている取税人たちを代表していた。取税人たちはひどく不道徳であった。彼らは実際神の律法の違反者たちであり、神のご要求に対する頑固な抵抗をその生活に表していた。彼らは感謝することを知らず、けがれていた。主のぶどう園に行って働くように命じられた時、彼らは軽べつしてことわった。しかしヨハネがきて、悔い改めとバプテスマを説いた時、取税人たちは、ヨハネのことばを信じてバプテスマを受けた。

兄の方はユダヤ国民の指導的な人々を代表していた。パリサイ人の中には悔い改めてヨハネのバプテスマを受けた者もあった。しかし指導者たちは、ヨハネが神からつかわされたことをみとめようとしなかった。ヨハネの警告と告発は、彼らを改革するにいたらなかった。

彼らは、「彼からバプテスマを受けないで、自分たちに対する神のみこころを無にした」（ルカ 7：30）。彼らはヨハネのことばを軽べつ的にあしらった。呼ばれた時に、「おとうさん、参ります」と言いながら行かなかった兄のように、祭司たちと役人たちは、口では従いますと言いながら、行為においては従っていなかった。彼らは神を敬っていると大きな口をきき、また神の律法に従っていると主張したが、それは偽りの従順にすぎなかった。取税人たちはパリサイ人から不信心者として非難され、のろわれていた。しかし彼らは、大きな光を与えられていながらその行いが敬神の告白に一致しないで、しかも自らを義としているそうした人たちよりも先にみ国に入ることを、その信仰と行いによって示した。

祭司たちと役人たちは、こうした鋭い真理をがまんしたくなかった。しかしイエスを攻撃する手がかりとなるようなことを何かイエスが言われるだろうと思って、だまっていた。しかし彼らはもっとがまんしなければならなかった。「もう 1 つの譬を聞きなさい。ある所に、ひとりの家の主人がいたが、ぶどう園を造り、かきをめぐらし、その中に酒ぶねの穴を 堀り、やぐらを立て、それを農夫たちに貸して、旅に出かけた。収穫の季節がきたので、そ の分け前を受け取ろうとして、僕たちを農夫のところへ送った。すると、農夫たちは、その 僕たちをつかまえて、ひとりを袋だたきにし、ひとりを殺し、もうひとりを石で打ち殺した。また別に、前よりも多くの僕たちを送ったが、彼らをも同じようにあしらった。しかし、最 後に、わたしの子は敬ってくれるだろうと思って、主人はその子を彼らの所につかわした。 すると農夫たちは、その子を見て互に言った、『あれはあと取りだ。さあ、これを殺して、 その財産を手に入れよう』。そして彼をつかまえて、ぶどう園の外に引き出して殺した、こ のぶどう園の主人が帰ってきたら、この農夫たちをどうするだろうか」（マタイ 21：33～ 40）。

イエスは居合わせたすべての人に語りかけておられた。しかし祭司たちと役人たちが答えた、「悪人どもを、皆殺しにして、季節ごとに収穫を納めるほかの農夫たちに、そのぶどう園を貸し与えるでしょう」（マタイ 21：41）。こう言った人たちは、この譬の適用が最初わかっていなかったが、しかしいま彼らは、自分自身の罪の宣告をくだしたことに気がついた。この譬の中で、家の主人は神を、ぶどう園はユダヤ国民を、かきは彼らの保護となって

いる神の律法をあらわしていた。やぐらは宮の象徴であった。ぶどう園の主人は、その繁栄のために必要ないっさいのことをした。「わたしが、ぶどう畑になした事のほかに、何かなすべきことがあるか」と彼は言っている（イザヤ 5：4）。

このように、イスラエルに対する神のたゆまない守りがあらわされた。そして、農夫たちがぶどう園の収穫のきまった一部を主人に返すべきであったように、神の民はその聖なる特権にふさわしい生活を送ることによって神をあがめるべきであった。しかし、わけ前を受け取るために主人からつかわされたしもべたちを農夫たちが殺してしまったように、ユダヤ人は、神が彼らに悔い改めを呼びかけるためにつかわされた預言者たちを殺してしまった。使者たちは次々に殺された。ここまでは譬の適用に疑問はなかったが、つづく話の中でもその適用はこれにおとらないほど明らかであった。ぶどう園の主人が不従順なしもべ たちに最後につかわし、しかもしもべたちにとらえられて殺された愛する子のうちに、祭司たちと役人たちはイエスとそのさし迫った運命についてはっきりした描写を見たのであった。すでに彼らは天父が最後の訴えとして彼らに送られたお方を殺す計画をたてていた。忘恩的な農夫たちの上に加えられた報復のうちに、キリストを死刑にする者たちの運命がえがかれていた。

憐れみの思いをこめて彼らを見わたしながら、救い主は続けて言われた、「あなたがたは、聖書でまだ読んだことがないのか、『家造りらの捨てた石が隅のかしら石になった。これは主がなされたことで、わたしたちの目には不思議に見える』。それだから、あなたがたに言うが、神の国はあなたがたから取り上げられて、御国にふさわしい実を結ぶような異邦人に与えられるであろう。またその石の上に落ちる者は打ち砕かれ、それがだれかの上に落ちかかるなら、その人はこなみじんにされるであろう」（マタイ 21：42～44）。 この預言をユダヤ人はしばしば会堂でくり返し、それをきたるべきメシヤにあてはめていた。キリストはユダヤ人の制度と救いの計画全体の隅のかしら石であった。この土台石を、ユダヤ人の建築家、すなわちイスラエルの祭司たちと役人たちはいま捨てようとしていた。救い主は、彼らの危険が示されている預言に彼らの注意を呼び起こされた。主は、可能なかぎりあらゆる手段をつくして、彼らがしようとしている行為の性格を明らかにしようとされた。

主のみことばにはほかの目的もあった。「このぶどう園の主人が帰ってきたら、この農夫たちをどうするだろうか」と質問することによって、キリストはパリサイ人たちがあのような答え方をするようにはかられた（マタイ 21：40）。主は彼らが自分自身の上に罪の宣告をくだすようにはかられたのであった。主の警告が彼らのうちに悔い改めを起こさない時に、それは彼らの運命を決定的なものとするのであった。　そこで主は、彼ら自身が自分たちの上に破滅を招いたことをみとめるように望まれた。主は、彼らの国家的な特権が取り去られる　ことに含まれている神の公義を彼らに示すように計画された。この特権の喪失はすでに始ま　っていて、その結果は彼らの宮と都との破滅ばかりでなく、国民の離散となろのであった。

聞いている人たちはこの警告に気づいた。しかし祭司たちと役人たちは、彼ら自身宣告をくだしたにもかかわらず、「あれはあと取りだ。さあ、これを殺」そうと言うことによって、その場面を実現しようとしていた（マタイ 21：38）。彼らは「イエスを捕らえようとしたが、群衆を恐れた」。なぜなら世論がイエスを支持していたからである（マタイ 21： 46）。 捨てられた石についての預言を引用された時、キリストは、イスラエルの歴史に実際に起こったことを語られた。この出来事は最初の宮の建築と関係があった。それは特にキリ　ストの初臨の時代にあてはまり、ユダヤ人に特別な力をもって訴えるはずであったが、同時　にまた、われわれのためにも教訓となっている。ソロモンの神殿が建てられた時、壁と土台　のための巨大な石は全部石切場で用意された。それらの石が建築場へはこんでこられると、　手を加えないでそのまま用いられ、職人たちはその場所にすえつけさえすればよかった。と　ころがここに土台として用いるために、異常に大きく特殊な形をした 1 つの石がはこばれてきた。しかし職人たちはその石の場所をみつけることができないので、これを受け入れよう　としなかった。それが用いられないでじゃまになっているのは、彼らにとって迷惑であった。長い間それは捨てられた石であった。しかし建築家たちが隅のおや石を据える段になると、　この特別な場所を占め、その上にかかる巨大な重みに耐えるのに十分な大きさと力と独特な　形をした石をみつけるために、彼らは長い間さがした。この重要な場所のために選択を誤れ　ば、建物全体の安全がおびやかされるのであった。彼らは、太陽や霜や嵐の作用に耐えるこ　とのできる石をさがし出さねばならなかった。何度かいくつかの石が選ばれたが、巨大な重

さの圧力の下にこなごなにくだけた。またほかのものは大気の突然の変化のテストに耐えられなかった。

しかし最後に、長い間捨てられていたあの石に注意が向けられた。それは空気と太陽と嵐にさらされながら、すこしの割れ目もみせていなかった。建築家たちはこの石を検査した。それはあらゆるテストに合格し、ただ 1 つのテストが残った。もしこの石が激しい圧力のテストに耐えることができたら隅のおや石として受け入れようと、彼らはきめた。テストが行　われた。石は受け入れられ、指定された場所へはこばれ、ぴったりと合った。預言のまぼろ　しの中で、イザヤは、この石がキリストの象徴であることを示された。彼はこう言ってい る、

「あなたがたは、ただ万軍の主を聖として、彼をかしこみ、彼を恐れなければならない。主はイスラエルの 2 つの家には聖所となり、またさまたげの石、つまずきの岩となり、エルサレムの住民には網となり、わなとなる。多くの者はこれにつまずき、かつ倒れ、破られ、　わなにかけられ、捕らえられる」（イザヤ　8：13～15）。イザヤは、預言のまぼろしの中で初臨の時までつれて行かれ、キリストが、ソロモンの神殿における隅のおや石の取り扱いに　象徴されていたような試みとテストに耐えられることを示される。「それゆえ、主なる神は　こう言われる、『見よ、わたしはシオンに 1 つの石をすえて基とした。これは試みを経た石、
堅くすえた尊い隅の石である。「信ずる者はあわてることはない」』」（イザヤ 28：16）。

神は、限りない知恵をもって、隅のおや石をえらび、それをご自分で据えられた。神はそれを「堅くすえた隅の石」と呼ばれた。全世界の人々が彼らの重荷と不幸をその上にのせても、この石はそれらの全部にもちこたえるのである。彼らがその上に築いても絶対に安全である。キリストは「試みを経た石」である。主は、ご自分に信頼する者を決して失望させられない。主はどのテストにも耐えられた。主は、アダムの不義と、その子孫の不義の圧力に耐え、悪の勢力に打ち勝って余りある者となられた。主はすべての悔い改める罪人がのせる重荷に耐えられた。不義の心は、キリストのうちに救いをみいだした。主は「堅くすえた隅の石」である。主によりたのむ者はみな絶対に安全である。

イザヤの預言の中に、キリストのことが「堅くすえた隅の石」とも「つまずきの岩」とも宣言されている。使徒ペテロは、聖霊の感動によって書いた時、キリストがだれにとっては堅くすえられた石であり、だれにとってはつまずきの岩となるかをはっきり示している。 「あなたがたは、主が恵み深いかたであることを、すでに味わい知ったはずである。主は、人には捨てられたが、神にとっては選ばれた尊い生ける石である。この主のみもとにきて、あなたがたも、それぞれ生ける石となって、霊の家に築き上げられ、聖なる祭司となって、イエス・キリストにより、神によろこばれる霊のいけにえを、ささげなさい。聖書にこう書いてある、『見よ、わたしはシオンに、選ばれた尊い石、隅のかしら石を置く。それにより頼む者は、決して、失望に終ることがない』。この石は、より頼んでいるあなたがたには尊いものであるが、不信仰な人々には『家造りらの捨てた石で、隅のかしら石となったもの』、また『つまずきの石、妨げの岩』である。しかし、彼らがつまずくのは、御言に従わないからであって、彼らは、実は、そうなるように定められていたのである」（Ｉペテロ 2:3～8）。

信じる者には、キリストは堅くすえられた隅のかしら石である。これらの人々は、岩なるキリストの上に落ちて砕ける人たちである。ここにキリストへの服従とキリストを信じる信仰があらわされている。岩なるキリストの上に落ちて砕けることは、自らを義とする思いを捨てて、子供のようなへりくだりをもってキリストのみもとに行き、罪とがを悔い改め、キリストのゆるしの愛を信じることである。われわれが隅のかしら石であられるキリストの上に築くのも、信仰と服従によってである。 この生ける石の上に、ユダヤ人も異邦人も同様に築くことができる。それはわれわれがその上に安全に築くことのできる唯一の隅のかしら石である。それはすべての者のために十分な広さがあり、全世界の重さと重荷を支えるのに十分な強さがある。そして、生ける石であられるキリストにつながることによっ て、この隅のかしら石の上に築く者はみな生ける石となるのである。

多くの人々が自分自身の努力によって切られ、磨かれ、美しくされる。しかし彼らは、キリストとつながっていないので、生ける石となることはできない。このつながりがなければ、だれも救われない。われわれのうちにキリストのいのちがないならば、試みの嵐に耐え

ることができない。われわれの永遠の安全は、堅くすえられた隅のかしら石に築くことにかかっている。今日多くの者が試みを経ていない土台の上に築いている。雨が降り、嵐が吹き荒れ、洪水になると、彼らの家は倒れる。なぜなら、それは永遠の岩、隅のかしら石であられるイエス・キリストの上に建てられていないからである。

「彼らがつまずくのは、御言に従わないからであ」る（Ｉペテロ 2：8）。キリストはつまずきの岩である。しかし「家造りらの捨てた石で、隅のかしら石となったもの」である（Ｉペテロ 2：7）。捨てられた石と同じように、キリストは、地上の公生涯において、無視され、侮辱を受けられた。「彼は侮られて人に捨てられ、悲しみの人で……侮られた。われわれも彼を尊ばなかった」（イザヤ 53：3）。しかし主が栄光を受けられる時が近づいていた。死からよみがえることによって、主は「御力をもって神の御子」と宣言されるのであった（ローマ 1：4）。イエスは、再臨の時に、天と地の主としてあらわされるのであった。主をいま十字架につけようとしている人々は、主の偉大さをみとめるのであった。捨てられた石は、宇宙の面前で隅のかしら石となるのであった。

また「それがだれかの上に落ちかかるなら、その人はこなみじんにされるであろう」（マタイ 21：44）。キリストをこばんだ民は、まもなく彼らの都と国が滅ぼされるのを見るのであった。彼らの栄光はうち砕かれ、風の前のちりのように吹き散らされるのであった。 ではいったいユダヤ人を滅ぼしたものは何であったのだろうか。それは、もし彼らがその上に築いていたら彼らの安全となったはずの岩であった。それはあざけられた神の恵み、拒絶された義、軽んじられたいつくしみであった。人々は神に反対したので、彼らの救いとなるはずだったものがすべて滅亡とかわった。神がいのちにいたるように定められたものが死にいたるものとなったことを彼らは知った。

ユダヤ人がキリストを十字架につけたことの中に、エルサレムの滅亡が含まれていた。カルバリーで流された血は、ユダヤ人をこの世ときたるべき世において滅亡へ沈めた重さであった。神の恵みをこぼんだ者に対してさばきがのぞむ大いなる最後の日もこれと同じである。彼らにとってはつまずきの百であるキリストは、その時彼らには復讐の山とみえるので

ある。主のみ顔の輝きは、義人にはいのちであろが、悪人には焼きつくす火となるのである。愛をこばみ、恵みをあなどったために、罪人は滅ぼされるのである。

多くの例をあげ警告をくりかえして、イエスは、ユダヤ人が神のみ子をこばむ結果がどんなものであるかを示された。これらのみことばを通して、キリストはまた、彼をあがない主として受け入れようとしない各時代のすべての人々に語りかけておられた、1 つ 1 つの警告は彼らのためである。けがされた宮、不従順な息子、いつわりの農夫、侮べつ的な建築者などはみな 1 人 1 人の罪人の経験に反映している。罪人は悔い改めないかぎり、そうしたものに予表されていた運命が彼のものとなるのである。

第 66 章　論争

祭司たちと役人たちはキリストの鋭い譴責をだまって聞いた。彼らはキリストの非難に反ばくすることができなかった。そこで彼らは、キリストをわなにかける決心を一層固めたにすぎなかった。この目的をも って、彼らはキリストのところへスパイを送った。すなわち「義人を装うまわし者どもを送って、イエスを総督の支配と権威とに引き渡すため、その言葉じりを捕らえさせようとした」（ルカ 20：20）。彼らはこれまでイエスがしばしば会われたような年とったパリサイ人でなく、熱烈で、熱狂的で、キリストが知っておられないと彼　らの考えた若者たちを送った。この人たちにヘロデ党の人々が何人かっいて行った。それは、裁判の時に、キリストに不利な証言をたてられるように、キリストのことばを聞いておくた　めであった。パリサイ人たちとヘロデ党の人たちとはこれまで激しく敵対していたが、いま　はキリストに対する敵意で 1 つになっていた。

パリサイ人は、ローマ人から税金を取りたてられることにいつもいらだっていた。税金を払うことは神の律法に反すると、彼らは主張した。いま彼らはイエスをわなにかける機会を発見した。スパイたちがイエスのもとにやってきて、あたかも自分たちの義務を知りたいと望んでいるかのように、誠実さをよそおいながら、「先生、わたしたちはあなたが真実なかたで、だれをも、はばかられないことを知っています。あなたは人に分け隔てをなさらないで、真理に基いて神の道を教えてくださいます。ところで、カイザルに税金を納めてよいでしょうか、いけないでしょうか」と言った（マルコ 12：14）。

もし彼らが誠実だったら、「わたしたちはあなたが真実なかたで、だれをも、はばかられないことを知っています」ということばは、すばらしい告白であっただろう。しかしこのことばは、あざむくために語られたのであった。それにもかかわらず彼らのあかしは事実であった。パリサイ人たちはキリストが言われたこと、教えられたことが正しいということを知っていた。だから彼らは、彼ら自身のあかしによってさばかれるのである。

イエスに質問した人たちは、彼らの目的を十分かくしたつもりであったが、イエスは、開かれた本を読むように、彼らの心を読み、彼らの偽善をばくろされた。「なぜわたしをた

めそうとするのか」とイエスは言われた（マルコ 12：15）。こうしてイエスは、彼らのかくれた目的を見抜いておられることを示すことによって、彼らの求めなかったしるしをお与えになった。イエスが、「デナリを持ってきて見せなさい」とつけ加えられた時、彼らはますます困惑した（マルコ 12：15）。彼らがそれを持ってくると、イエスは、「これは、だれの肖像、だれの記号か」と言われた。彼らは「カイザルのです」と答えた（マルコ 12：16）。イエスは、貨幣の記号を指さしながら、「カイザルのものはカイザルに、神のものは神に返しなさい」と言われた（マルコ 12：17）。

スパイたちは、イエスが彼らの質問に対して、よいとか、いけないとか端的に答えられるものと思っていた。もしイエスが、カイザルに税を納めるのは不当だと言われたら、ローマ当局に通報され、反逆を煽動したというので捕らえられるであろう。もしイエスが税を納めるのが正当だと宣言されたら、彼らは、神の律法に反していると言ってイエスを民の前に告発するつもりであった。しかしいま彼らは、どうしてよいかわからないほど敗北したことを感じた。彼らの計画は狂った。彼らの質問がその場で簡単に片づけられてしまったので、もはやそれ以上言うべきことがなかった。

キリストの答は言いのがれではなく、質問に対する率直な答であった。カイザルの名前と肖像がきざまれているローマの貨幣を手に持ちながら、イエスは、彼らがローマの権力下に生活しているのだから、神に対する義務と矛盾しない限り、ローマの求める支持を与えるべきであると宣言された。しかしその国の法律に柔順に従う一方で、いつでも神への忠誠を第一としなければならなかった。 「神のものは神に返しなさい」という救い主のことばは、陰謀をめぐらしているユダヤ人にとってきびしい譴責であった。もし彼らが神に対する義務 を忠実に果たしていたら、彼らは敗北した国民となって外国の権力に服従するようなことに はならなかったのである。ローマの旗がエルサレムにひるがえることも、ローマの衛兵が城 門に立つことも、ローマ総督が城内にいて統治することもなかったのである。ユダヤ国 民は、当時、神から離反した罰金を払っていたのであった。

パリサイ人たちはキリストの答を聞いた時、「驚嘆し、イエスを残して立ち去った」（マタイ 22：22）。イエスは彼らの偽善と独断を責められたが、そうすることによって、彼

は、1 つの大原則、すなわち一国の政府に対する人の義務の限界と神に対する人の義務とをはっきり定めている 1 つの原則を述べられたのであった。多くの人々の心の中で悩みの種であった問題が解決した。それからのちずっと、彼らはその正しい原則に従った。多くの者が満足しないまま立ち去ったけれども、彼らはその問題の根底となっている原則がはっきり示されたことを知って、キリストの深い洞察力に感嘆した。

パリサイ人たちが沈黙したとたんにサドカイ人たちが巧妙な質問をもって進み出た。サドカイ人とパリサイ人は互いに激しく対立していた。パリサイ人は言い伝えを厳格に守る人たちであった。彼らは外面的な儀式に厳格で、手足を洗うことや、断食や、長い祈りを励行し、施しを見せびらかした。しかしキリストは、彼らが人間の戒めを教理として教えることによって、神の律法をむなしくしていると宣言された。彼らは階級としては頑迷であり、偽善的であった。しかし彼らの中には真に敬虔な人たちがいて、その人たちはキリストの教えを受け入れて弟子となった。サドカイ人はパリサイ人の言い伝えを否定していた。彼らは、口では聖書の大部分を信じ、それを行為の原則とみなすと言っていたが、実際には懐疑主義者であり、物質主義者であった。

サドカイ人は天使の存在や死人の復活や、報いと刑罰を伴う来世についての教えを否定した。そうしたすべての点において、彼らはパリサイ人と異なっていた。特に両者の間の論争のまとは復活についてであった。パリサイ人は復活をかたく信じていたが、こうした議論になると、来世の状態について彼らの見解は混乱するのであった。死は不可解な神秘となるのであった。サドカイ人の議論に応ずることができないので、彼らはいつもいらだちを感じた。両者の議論はたいてい怒りの口論に終わり、彼らはこれまでよりも一層遠く離れるのであった。

数においては、サドカイ人はその対抗者よりはるかに劣り、また一般民衆に対する勢力もそれほど強くなかった。しかし彼らの多くは富裕であり、したがって富が与える勢力を持っていた。たいていの祭司たちはサドカイ人の階級に属しており、大祭司もたいてい彼らの中からえらばれた。しかしこのことには、彼らが懐疑的な意見を公表しないということがはっきり規定されていた。パリサイ人が数と人気においてまさっていたために、サドカイ人は

祭司職につく時、外面的にはパリサイ人の教えに譲歩しなければならなかった。しかし彼らがこのような職務につく資格があるということが彼らの誤りに力を与えた。

サドカイ人はイエスの教えを拒否しだ。イエスは 1 つの目的に動かされておられたが、サドカイ人はそれがこのようにあらわれることをみとめようとしなかった。神と来世についてのイエスの教えは、彼らの理論と矛盾した。彼らは神が人間よりもすぐれた唯一の存在であることは信じたが、支配的な摂理と神の先見性は人間から道徳的自由意志を奪い、人間を奴隷の地位に堕落させるものであると論じた。神は人間をおつくりになって、これを上からの力に左右されない独立した者とされたというのが、彼らの信念であった。人間は自由に自分自身の生活を支配し、世の出来事を形成し、自分の運命を自分自身の手ににぎっているのだと、彼らは主張した。彼らは神のみたまが人間の努力すなわち生来の手段を通して働くことを否定した。それでも彼らは、人間は自分の生まれつきの能力を正しく用いることによって、高められ、啓発される、またきびしくはげしい苦行によって生活をきよめることができると主張した。

神についての彼らの考え方によって、彼ら自身の品性が形成された。彼らは神が人間に何の関心も示されないと考えていたが、そのように彼らもお互いに対してすこしの関心も持たなかった。彼らの間には一致というものがほとんどなかった。人間の行為に及ぼす聖霊の働きをみとめようとしないために、彼ら の生活にはみたまの力が欠けていた。ほかのユダヤ人たちと同じように、彼らはアブラハムの子としての家督権を持っていることと、律法の要求を厳格に守っていることを非常に自慢にしていた。しかし彼らは、律法の真の精神とアブラハムの信仰といつくしみに欠けていた。彼らの自然な同情心は狭い範囲に限られていた。彼らは、人はみな生活の慰安と祝福を手に入れることができると信じていた。だから彼らの心は、他人の欠乏や苦しみに動かされなかった。彼らは自分のためだけに生活した。

キリストは、みことばとみわざによって、超自然的な結果を生じる神の力、現在のかなたにある未来の生活、人の子らの父としてたえず彼らの真の利害を見守っていて下さる神についてあかしされた。主は、サドカイ人の利己的な排他心が責められるようないつくしみとあわれみの中に天来の力のわざをあらわされた。主は、神がこの世における人間の幸福のた

めにも永遠の幸福のためにも聖霊によって人の心に働かれることをお教えになった。品性を生まれ変わらせることを人間の力にたよることはまちがっている。それは神のみたまによってのみ行われるのだということを主はお示しになった。

この教えを、サドカイ人は信用しないことに心をきめていた。イエスと論争することによって、彼らは、イエスを罪に定めることはできないまでも、不評判に陥れることができると確信していた。彼らがイエスに質問するために選んだ主題は復活の問題であった。もしイエスが自分たちに同意されたら、パリサイ人をますます怒らせることになる。もし自分たちと意見がちがったら、その教えを嘲笑するつもりであった。　サドカイ人の議論によれば、もし肉体が来世においても現世の時と同じ物質の分子で構成されるとすれば、死からよみがえ　った時、それは肉と血（肉体）をそなえていなくてはならない。そしてこの地上で中断され　た生活を永遠の国において続けるべきであるというのである。その場合、地上の関係が続き、夫と妻は再会し、結婚が行われ、すべてのことが死ぬ前と同じように続けられ、この世の弱　さと欲望が来世においてもそのまま続くと彼らは結論した。

彼らの質問に答えて、イエスは来世の生活の幕を開かれた。「復活の時には、彼らはめとったり、とついだりすることはない。彼らは天にいる御使のようなものである」と主は言われた（マタイ 22：30）。主はサドカイ人の信念がまちがっていることをお示しになった。彼らの前提がまちがっているのであった。「あなたがたがそんな思い違いをしているのは、　聖書も神の力も知らないからではないか」と、主はつけ加えられた（マルコ 12：24）。主は、パリサイ人を非難された時のようにサドカイ人を偽善者呼ばわりしないで、彼らの信念のま　ちがいを示された。　サドカイ人は、すべての人たちの中で自分たちが一番聖書に忠実であるとうぬぼれていた。しかしイエスは、彼らが聖書の真の意味を知っていないということを示　された。聖書の知識は聖霊の光によって心にきざまれねばならない。聖書と神の力について　知らないことが、彼らの信仰の混乱と心の暗さの原因であると、イエスは言明された。彼ら　は神の奥義を彼らの限られた考え方で理解しようと努力していた。キリストは、理解力を広　くそして強くするような聖なる真理に、彼らの心を開くように呼びかけられた。限りある頭　脳で神の奥義をさとることができないために、幾千の人たちが無神論者になる。彼らは神の

摂理のうちにあらわされているふしぎな神の力を説明することができない。そこで彼らは、このような力の証拠をこばみ、それをもっと理解することのできない自然の力のせいにする。われわれをとりまいている神秘を解く唯一の鍵は、それらのすべての中に神の存在と力とをみとめることである。人は神を宇宙の創造者、すべてのことを命令し実行されるお方としてみとめなければならない。彼らは、神のご品性と神の力の神秘についてもっと広い見解を持つ必要がある。

もし死人の復活がなければ、彼らが信じると告白している聖書は何の役にもたたないであろうと、キリストは聴衆に言明された。「また、死人の復活については、神があなたがたに言われた言葉を読んだことがないのか。『わたしはアブラハムの神、イサクの神、 ヤコブの神である』と書いてある。神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神である」と主は言われた（マタイ 22：31、32）。神は無いものを有るかのようにごらんになる。神は始めから終わりをごらんになり、ご自分の働きの結果をあたかもいま完成されているかのようにごらんになる。アダムを始めとして、死んだ最後の聖徒にいたるまで、とうとい死人たちは神のみ子の声を聞き、墓から現れて永遠の生命をうけるのである。神は彼らの神となり、彼らは神の民となる。神とよみがえった聖徒たちとの間には密接で親しい関係がある。神の御目的の中に予期されているこの状態を、神はそれが現在の状態であるかのようにごらんになる。死んだ者は神に生きるのである。

キリストのことばでサドカイ人は沈黙させられた。彼らはキリストに答えることができなかった。キリストを罪に定めるためにすこしでも乗ずることのできるようなことばはひとことも語られなかった。キリストの敵どもは民衆の軽べつ以外に何も得るところがなかった。 しかしながらパリサイ人たちは、イエスを不利におとしいれるために用いることのできることばをイエスに語らせることをあきらめなかった。彼らはある学識のある律法学者を説き伏せて、律法の 10 の戒めの中でどれが最も重要かということをイエスに質問させた。 パリサイ人は、創造主に対する人の義務が示されている最初の 4 つの戒めを、人間同胞に対する人の義務を規定している他の 6 つの戒めよりもはるかに重要なものとしてとうとんでいた。その結果、彼らは実際的な信心に非常に欠けていた。イエスは人々に彼らの大きな欠点を示

し、木はその実によって知られるのだと言明して、よいわざが必要であることを教えられた。そのためイエスは、はじめの 4 っの戒めよりもあとの 6 つの戒めをとうとんでおられるという非難を受けておられた。

律法学者は、「すべてのいましめの中で、どれが第一のものですか」との率直な質問をもってイエスに話をもちかけた（マルコ 12：28）。キリストの答は率直で説得力のあるものであった。「第一のいましめはこれである、『イスラエルよ、聞け。主なるわたしたちの神は、ただひとりの主である。心をつくし、精神をっくし、思いをつくし、力をつくして、主なるあなたの神を愛せよ』」（マルコ 12：29）。第二の戒めも、第一の戒めと同じである、なぜならそれは第一の戒めから出るものだからであると、キリストは言われた。「『自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ』。これより大事ないましめは、ほかにない」。「これらの 2 つのいましめに、律法全体と預言者とが、かかっている」（マルコ 12：31、マタイ 22：40）。

十戒のはじめの 4 つは、「心をつくして主なるあなたの神を愛せよ」という 1 つの人きな戒めに要約される。あとの 6 つは、「自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ」というもう 1 つの戒めに含まれる。これらの戒めは 2 つとも、愛の原則の表現である。第二の戒めを破りながら第一の戒めを守ることはできないし、また第一の戒めを破りながら第二の戒　めを守ることもできない。神が心の王座に正当な座を占められる時に、正当な場所がわれわ　れの隣人に与えられる。われわれは自分自身と同じように神を愛するようになる。こうして　神を最高に愛する時にのみ、隣人を公平に愛することができるのである。　すべての戒めは神と人とに対する愛に要約されるので、1 つの戒めを破ればこの原則を犯すことになる。こうしてキリストは、聴衆に、神の律法は、あるものは非常に重要であるが、あるものはそれほど　重要ではないから無視してもさしつかえないといったような、多くの別々な戒めではないと　いうことをお教えになった。主ははじめの 4 つとあとの 6 つの戒めを聖なる全体として示し、神への愛は神のすべての戒めに従うことによって示されることをお教えになっている。

イエスに質問した律法学者は、律法について博学だったので、イエスのことばに驚いた。彼は、イエスが聖書についてこんなに深く完全な知識を表明されるとは予期していなかった。

彼は聖なる戒めの根底となっている原則についてもっと広い見方をするよう になった。彼は祭司たちと役人たちが集まっている前で、キリストが律法の正しい解釈をくだされたことを正直にみとめてこう言った。 「先生、仰せのとおりです、『神はひとりであって、そのほかに神はない』と言われたのは、ほんとうです。また『心をつくし、知恵をつくし、力をつくして神を愛し、また自分を愛するように隣り人を愛する』ということは、すべての燔祭や犠牲よりも、はるかに大事なことです」（マルコ 12：32、33）。

キリストの賢明な答が律法学者を心服させたのであった。律法学者は、ユダヤ人の宗教が内部の信心にはなくて、外面的な儀式にあることがわかった。彼は単なる儀式的なささげ物や、罪のあがないとして信仰もなく血を流すことが無益であることにいくらか気づいた。神への愛と服従、人に対する無我の関心が、そうしたすべての儀式よりもとうといものに思えた。この男がキリストの議論の正しさをすぐにみとめ、人々の前ではっきりとただちに応答したことは、祭司たちや役人たちとまったく異なった精神をあらわしていた。自分の心の確信を語るために、祭司たちの不興と役人たちのおどかしにあえて直面したこの正直な律法学者に、イエスの心は同情となってそそがれた。「イエスは、彼が適切な答をしたのを見て言われた、『あなたは神の国から遠くない』」（マルコ 12：34）。

この律法学者は、正しい行為は燔祭や犠牲よりも神に受け入れられるということをみとめた点において、神の国に近かった。しかし彼は、キリストの神性をみとめ、イエスを信じる信仰によって義のわざを行う力を受ける必要があった。儀式は、生きた信仰によってキリストとっながっていないかぎり、何の価値もなかった。道徳律でさえ、それが救い主との関連において理解されないかぎり、その目的を達しない。天父の律法には単に権威のある命令よりももっと深い何ものかが含まれているということを、キリストはくりかえし示された。律法には、福音にあらわされているのと同じ原則が具体的にあらわされている。律法は人の義務を指摘し、その不義を示す。人は罪のゆるしと、律法に命じられていることを行う力をキリストに求めなければならない。

キリストが律法学者の質問に答えられた時、パリサイ人たちがイエスのすぐそばに集まっていた。そこでイエスは、彼らに向かって、「あなたがたはキリストをどう思うか。だれ

の子なのか」とおたずねになった（マタイ 22：42）。この質問は、メシヤについて彼らの信念をためすため、すなわち彼らがイエスを単に人間として見ているのか、それとも神の子と　して見ているのかをはっきりさせるためであった。彼らは口をそろえて、「ダビデの子です」と答えた（マタイ 22：42）。これは預言の中でメシヤについていわれた肩書きであった。イエスがその偉大な奇跡によって神性をあらわされた時、また病人をいやし、死人をよみがえ　らせられた時、人々はお互いに、「この方はダビデの子ではないか」とたずねた。スロ・フ　ェニキヤの女や、盲人のバルテマイや、その他の多くの者も、イエスに助けを求めて、「主　よ、ダビデの子よ、わたしをあわれんでください」と叫んだ（マタイ 15：22）。イエスがエルサレムへ乗りこまれる時にも、人々は喜びの叫びをあげて、「ダビデの子に、ホサナ。主　の御名によってきたる者に、祝福あれ」と歓呼した（マタイ　21：9）。宮の中にいた子供たちも、その日、よろこばしい賛美をひびかせた。しかしイエスをダビデの子と呼んだ多くの　者は、イエスの神性をみとめなかった。彼らはダビデのみ子が神のみ子でもあることをさと　らなかった。

ダビデの子であると彼らがのべたことばに答えて、「イエスは言われた、『それではどうして、ダビデが御霊に感じてキリストを主と呼んでいるのか。すなわち「主はわが主に仰せになった、あなたの敵をあなたの足もとに置くときまでは、わたしの右に座していなさい」。このように、ダビデ自身がキリストを主と呼んでいるなら、キリストはどうしてダビデの子であろうか』。イエスにひと言でも答えうる者は、なかったし、その日からもはや、進んでイエスに質問する者も、いなくなった」（マタイ 22：43～46）。

第 67 章　「パリサイ人たちよ。あなたがたは、わざわいである」

キリストが宮で教えられる最後の日であった。エルサレムに集まったおびただしい群衆の全部の注意がイエスに引きつけられていた。人々は宮の庭におしよせて、論争の進行を見守り、イエスの口から出る一言一言に熱心に聞き入った。このような光景はこれまでかつて見られないことであった。この若いガリラヤ人は、この世の栄誉も王のしるしも身につけないで立っておられた。そのまわりを、豪華な服装をした祭司たち、高い地位をあらわす記章のついた服を着た役人たち、しばしば引用する巻物を手に持った律法学者たちがとりかこんでいた。イエスは、王の威厳をそなえて、彼らの前に冷静に立っておられた。天の権威をさずけられたお方として、イエスは、彼の教えをあざけってこばみ、その生命をねらっている反対者たちを、ひるむ気配もなく見渡された。彼らは、これまで大勢でイエスを攻撃したが、イエスを陥れて罪に定めようとする彼らの計略はむだであった。イエスは次から次へと挑戦に応じ、祭司たちパリサイ人たちの暗黒と誤謬と対照的に、純潔な輝かしい真理を示された。イエスは、これらの指導者たちの前に、彼らの真の状態と、彼らがあくまでも悪い行為を改めない場合にかならず伴う報いを示された。警告は忠実に与えられてきた。しかしキリストがなさらねばならないもう 1 つの働きが残っていた。もう 1 つの目的がまだ達成されていなかった。

キリストとその働きに対する民衆の関心は着実に高まってきていた。彼らはキリストの教えに魅力を感じたが、同時にまた非常に困惑した。人々は、祭司たちとラビたちが知識があって信心深くみえるので、彼らを尊敬していた。どんな宗教上の事がらにおいても、民衆は彼らの権威にいつも絶対的に服従していた。それなのに人々は、攻撃されるたびにますます徳と知識が輝き出る教師イエスに、彼らが不信を投げかけようとしているのをいま見た。彼らは祭司たちと長老たちのしかめづらをながめ、そこにろうばいと混乱を見た。彼らは、キリストの教えが明白でわかりやすいにもかかわらず役人たちがイエスを信じようとしないのに驚いた。人々は自分たちがどんな道をとったらよいかわからなかった。彼らは、これまで自分たちがいつもその忠告に従ってきた人たちの行動を、熱心な心配のうちに、見守った。

キリストがお語りになった譬を通して、役人たちに警告することと、よろこんで教えを受ける民衆に教えることとが、キリストの目的であった。しかしもっとはっきり語る必要があった。言い伝えに対する尊敬と、堕落した祭司制度に対する盲目的な信仰によって、人々はとりこにされていた。そのような鎖をキリストはたち切っておしまいにならねばならない。祭司たち、役人たち、パリサイ人たちの性格をもっと十分にばくろしなければならない。「律法学者とパリサイ人とは、モーセの座にすわっている。だから、彼らがあなたがたに言うことは、みな守って実行しなさい。しかし、彼らのすることには、ならうな。彼らは言うだけで、実行しないから」と、イエスは言われた（マタイ 23：2、3）、律法学者とパリサイ人は、自分たちにはモーセと同等の権威がさずけられていると主張した。彼らは自分勝手にモーセに代って、律法の解釈者また民をさばく者となった。このような者として、彼らは民から最高の尊敬と服従を受けることを要求した。イエスは聴衆に、ラビたちが律法に従って教えたことを行うように、しかし彼らの手本にならわないようにと命じられた。彼らは自分たちが教えたことを自ら実行しなかった。

彼らはまた聖書に反した多くのことを教えていた。彼らは「重い荷物をくくって人々の肩にのせるが、それを動かすために、自分では指 1 本も貸そうとはしない」と、イエスは言われた（マタイ 23：4）。パリサイ人は、言い伝えをもとにしてたくさんの規則を強要し、個人の自由を不当に制限した。彼らはまた律法のある部分を、民に遵守をおしつけるような説明をしながら、自分たちはひそかにその遵守を怠り、都合次第で、自分たちはその遵守を免除されているのだと実際に主張した。

彼らはいつも自分たちの信心を見せびらかすように心がけていた。この目的のためにはどんな神聖なものも利用された。神は、ご自分の戒めについて、モーセに「あなたはこれをあなたの手につけてしるしとし、あなたの目の間に置いて覚えとし」なさいと、言われた（申命記 6：8）。このことばには深い意味がある。神のみことばを瞑想し、実行するとき、人は身心ともに高められる。正しく、憐れみのある行為をとおして、手は、印として、神の律法の原則をあらわす。その手はわいろをとらず堕落的なこと欺瞞的なことを何 1 つしない。その手は愛と憐れみのわざに活動的である。目は、とうとい目的に向けられ、澄んでいて、

真実である。顔の表情、もの言う目は、神のみことばを愛しとうとぶ者の欠点のない品性をあかししている。しかしキリスト時代のユダヤ人は、そうしたことをすこしも認識しなかった。モーセに与えられた命令について、人々は、聖書のいましめをからだにつけるようにという命令に解釈した。そこで彼らは、その戒めを羊皮紙の一片に書きつけ、それを目立つように頭と腕首にしばりつけた。しかしそうしたからといって、神の律法が心と思いに一層固くきざみこまれたわけではなかった。そうした羊皮紙は人々の注意をひくために、記章としてからだにつけているにすぎなかった。これをつけていると、信心深く見え、人々から尊敬されると思われていた。イエスはこのむなしい見せかけに一撃を加えられた。

「そのすることは、すべて人に見せるためである。すなわち、彼らは経札を幅広くつくり、その衣のふさを大きくし、また、宴会の上座、会堂の上席を好み、広場であいさつされることや、人々から先生と呼ばれることを好んでいる。しかし、あなたがたは先生と呼ばれてはならない。あなたがたの先生は、ただひとりであって、あなたがたはみな兄弟なのだから。また、地上のだれをも、父と呼んではならない。あなたがたの父はただひとり、すなわち、天にいます父である。また、あなたがたは教師と呼ばれてはならない。あなたがたの教師はただひとり、すなわち、キリストである」（マタイ 23：5～10）。 心は貪欲とねたみに満たされているのに、いつわりの謙遜をみせびらかしながら、たえず地位と権力を求めている利己的な野心を、救い主はこのようにはっきりしたことばでばくろされた。人々が宴会に招かれると、お客はそれぞれの階級にしたがって席をとったが、最も名誉のある席を与えられた人たちがいちばん先にもてなされ、特別な好意を受けた。パリサイ人は、こうした名誉を受けるようにたえずたくらんでいた、この習慣をイエスは責められたのである。

主はまた、ラビとか師とかいう名称をほしがることに示されている虚栄心を責められた。このような名称は人に属するものではなく、キリストに属するものであると、主は言明された。律法の解説者であり施行者である祭司たち、律法学者たち、役人たちはみな兄弟であり、同じ天父の子らであった。自分たちの良心や信仰に対する支配をあらわしているとうとい名称をだれにも与えてはならないということを、イエスは人々に印象づけられた。

もしキリストが今日地上におられて、「師」とか「尊師」とかいうような名称をもった人たちにかこまれておられたら、「あなたがたは教師と呼ばれてはならない。あなたがたの教師はただひとり、すなわちキリストである」とのことばをくりかえされはしないだろうか（マタイ 23：10）。聖書には神について「そのみ名は聖にして、おそれおおい」と宣言されている（詩篇 111：9）。どんな人間にこのような名称がふさわしいだろうか。この名称に示されている知恵と義をあらわしている人がどんなに少ないことだろう。この名称を帯びている者の中には、神のみ名と品性について誤った印象を。与えている者がどんなに多いことだろう。ああ、高位の聖職者の縫い取りされた衣のドには、世俗的な野心と専制と最も卑劣な罪がかくされていることがどんなにしばしばあることだろう。救い主はつづけて言われた。

「そこで、あなたがたのうちでいちばん偉い者は、仕 える人でなければならない。だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるであろう」（マタイ 23：11、12）。真の偉大さは道徳的な価値によってはかられるということを、キリストは、これまで繰り返し繰り返し教えられた。天の評価によれば、品性の偉大さは人類同胞の幸福のために生きること、すなわち愛と憐れみのわざをなすことにある。栄光の王キリストは堕落した人類のしもべであられた。 「偽善な律法学者、パリサイ人たちよ。あなたがたは、わざわいである。あなたがたは、天国を閉ざして人々をはいらせない。自分もはいらないし、はいろうとする人をはいらせもしない」（マタイ 23：13）。聖書を曲解することによって、祭司たちと律法学者たちは、人々の心を盲目にした。そうでなかったら、人々は、キリストのみ国についての知識と真の聖潔になくてはならない内面的なきよい生活を受け入れていたのである。

「偽善な律法学者、パリサイ人たちよ。あなたがたは、わざわいである。あなたがたは、やもめたちの家を食い倒し、見えのために長い祈をする。だから、もっときびしいさばきを受けるに違いない」（マタイ 23：14）。パリサイ人は民の間に大きな勢力を持っていたので、彼らはそのことを利用して、自分たちの利益に役立たせた。彼らは、信心深いやもめたちの信頼を受けると、彼女たちがその財産を宗教上の目的にささげることを義務として教えた。やもめたちの金を自由にすることができるようになると、このずるい策略者たちはそれを自

分たちの利益のために用いた。彼らは、自分たちの不正直をかくすために、人前で長い祈りをささげ、非常に信心ぶった様子をした。この偽善のゆえに、彼らはもっときびしいさばきを受けるとキリストは断言された。

今日も、口先だけで信心ぶったことを言う多くの者に、同じ譴責がくだるのである。彼らの生活は利己心と貪欲にけがれているが、彼らはそれらのすべてを見せかけの信心という衣でおおって、しばらくは人々の目をごまかす。しかし神をだますことはできない。神は心の意図をどれも見抜かれ、各人をその行為にしたがってさばかれる。 キリストは、悪用を容赦なく非難されたが、しかし義務を軽くしないように用心された。主はやもめのささげ物を強要したり、それをまちがったことに用いたりすることを責められた。同時に主は、神の庫にささげ物を持参したやもめをおほめになった。人がささげ物を悪用しても、それをささげた人から神の祝福を取り去ることはできなかった。 イエスは、さいせん箱がおいてある庭にいて、献金を入れにやってくる人たちを見守っておられた。多くの金持ちが多額の金を持参しては、それを見せつけながらささげた。イエスは彼らを悲しげに見ておられたが、その多額な献金については何もほめられなかった。1 人の貧しいやもめが、人に見られるのを恐れるかのように、おずおずと近よってくるのを見られた時、イエスのお顔は、たちまち明るくなった。高慢な金持ちたちが、献金を箱に入れるために、風をきって通り過ぎると、彼女はもう前へ進む勇気もないかのようにしりごみした。それでも彼女は、自分の愛するみわざのために、どんなに小さくても、何かをしたいと熱望した。彼女は手に持っている献金を見た。まわりの人たちの献金にくらべれば、わずかなものであったが、それは彼女の全部であった。機会を見て、彼女は急いで 2 枚のレプタを投げ入れ、いそいで引きかえそうとした。しかしそうしている時に、彼女はイエスの御目にとまり、それは彼女の一上にじっとそそがれていた。

救い主は弟子たちをみもとに呼んで、このやもめの貧しさに注目するようにお命じになった。その時、主のおほめのことばが彼女の耳にきこえた。「よく聞きなさい。あの貧しいやもめは、さいせん箱に投げ入れている人たちの中で、だれよりもたくさん入れたのだ」（マルコ 12：43）。自分の行為が理解され、認められたことを感じ時、彼女の目に喜びの涙

が浮かんだ。多くの者は、そんなわずかな収入は自分自身の用にとっておきなさい、あの食物の満ち足りた祭司たちの手にささげても、庫に持ってこられる多くの 高価なささげ物にまじって見落されてしまうと彼女に忠告しただろう。しかしイエスは、彼女の動機を理解された。彼女は宮の奉仕が神に定められたものであることを信じていたので、それをささえるために全力をつくそうと願った。彼女は自分のできることをした。彼女のこの行為は、各時代を通じて彼女の思い出の記念となり、また永遠にわたって彼女の喜びとなるのであった。彼女はささげ物といっしょに心をささげた。そのささげ物の価値は、貨幣の価値によってではなく、彼女の行為の動機となった神への愛とそのみわざに対する関心によってはかられた。

イエスは、この貧しいやもめについて、彼女が「だれよりもたくさん入れた」と言われた（マルコ 12：43）。金持ちたちは豊富な中からささげ、しかもその多くの者が、人々から見られ、あがめられるためにささげた。彼らは多額の寄付をしても、そのために安楽な生活あるいはぜいたくな生活ができなくなるといりのではなかった。その寄付は、犠牲の必要がなく、価値においてもやもめのレプタと比較することはできなかった。 われわれの行為に性格を与え、これに不名誉もしくは高い道徳的価値の印をおすものは動機である。神は、すべての人の目が見、すべての人の口が称賛する偉大な事がらを、最もとうといものとしてごらんにならない。快活に果たした小さな義務、何の見せびらかしもなく、人間の目には無価値に見えるような小さなささげ物が、神の御目には最高に見えることがしばしばある。信仰と愛の心は、神にとって、最も高価なささげ物よりもとうといのである。この貧しいやもめのしたことは小さなことであったが、彼女はそのために自分の生活費をささげた。彼女は、愛するみわざにあの 2 枚のレプタをささげるために食物を節約した。しかも彼女はそのことを信仰をもって、天父が自分の大きな必要を見のがされないことを信じてやったのである。救い主からおほめのことばをいただいたのは、この無我の精神、子供のような信仰であった。

貧しい人々の中には、神の恩恵と真理に対して神に感謝を示したいと願う人々が大勢いる。彼らは、神のみわざをささえるためにもっと富んでいる兄弟たちと力をあわせたいと熱望する。このような魂をことわってはならない。彼らのレプタを天の銀行に積ませよう。神に対する愛に満たされた心からささげられるならば、見たところとるに足りないようなこれ

らのものが、きよめられたささげ物、はかり知れない価値のあるささげ物となり、神はよろこんでこれを祝福される。

イエスがやもめのことを、彼女は「だれよりもたくさん入れた」と言われた時、そのみことばは、彼女の献金の動機についてばかりでなく、その結果についても事実であった。1 コドラントに当るレプタ 2 枚によって、これらの富裕なユダヤ人の寄付よりもずっと大きな金 額が神の庫に入れられた。このわずかな献金の影響は、川の流れのように、はじめは小さか　ったが、各時代を流れくだるにしたがって、広く深くなった。それは、多くの方法によって、貧しい者の救助と福音の宣伝に役立った。彼女の自己犠牲の模範は各国、各時代の幾千幾万　の人々の心に働きかけた。それは金持ちにも貧しい人にも訴え、彼らの献金は、彼女の献金　額をまし加えた。やもめのレプタは、神の祝福によって大いなる結果を生じるみなもととな　った。神の栄えをあらわしたいとの真心からの願いによってささげられる献金や、なされる　行為はみなこれと同じである。それは全能者の目的につながっている。それが善に及ぼす結　果はだれもはかり知ることができない。

救い主は、律法学者とパリサイ人に対する攻撃をつづけられた。「盲目な案内者たちよ。あなたがたは、わざわいである。あなたがたは言う、『神殿をさして誓うなら、そのままでよいが、神殿の黄金をさして誓うなら、果す責任がある』ど。愚かな盲目の人たちよ黄金と、黄金を神聖にする神殿と、どちらが大事なのか。また、あなたがたは言う、『祭壇をさして誓うなら、そのままでよいが、その上の供え物をさして誓うなら、果す責任がある』と。盲目な人たちよ。供え 物と供え物を神聖にする祭壇とどちらが大事なのか」（マタイ 23：16～19）。祭司たちは神のご要求を自分たちのまちがった狭い標準にしたがって解釈した。彼らは、僭越にもいろいろな罪の軽重についてこまかい区別をつけ、あるものは軽く見過ごし、それほど重大でもない罪を、ゆるすことのできない罪として扱ったりした。彼らは、お金の心付けをもらえば、人々をその誓いから免除してやった。多額の金をもらうと、重大な犯罪を見のがすことさえあった。同時に、これらの祭司たちと役人たちは、他の場合には、ちょっとした違反にもきびしい刑罰を宣告するのであった。

「偽善な律法学者、パリサイ人たちよ。あなたがたは、わざわいである、はっか、いのんど、クミンなどの薬味の 10 分の 1 を宮に納めておりながら、律法の中でもっと重要な、公平とあわれみと忠実とを見のがしている。それもしなければならないが、これも見のがしてはならない」（マタイ 23：23）。こうしたことばで、キリストはふたたび聖なる義務の悪用を非難しておられる。キリストは、義務そのものを廃しておられるのではない。10 分の 1 制度は神によって定められたもので、最古の時代から守られてきた。信仰の父アブラハムは、所有しているすべてのものの 10 分の 1 を納めた。ユダヤの役人たちは、10 分の 1 の義務をみとめたが、そのことは正しかった。しかし彼らは、民がそれぞれの確信にもとついてこの義務を果たすのにまかせなかった。1 つ 1 つの場合について、独断的な規則が定められた。要求があまりにも複雑になったため、それを果たすことは不可能だった。だれもいつ自分が義務を果たしたかわからなかった。神がお与えになった時、この制度は正しく道理にかなっていた。しかし祭司たちとラビたちがそれをうんざりするような重荷にしてしまっていた。

神が命じられることはすべて重要である。キリストは、10 分の 1 を納めることを義務としてみとめられた。しかし主は、そのことがほかの義務を怠ることの言い訳にならないこ とを示された。バリサイ人は非常にきちょうめんに、はっか、いのんど、うん香など畑の薬 草の 10 分の 1 を納めた。これは彼らにとって大した犠牲ではなく、しかもそのために彼らはきちょうめんで高潔であるという評判をとった。 同時に彼らの無用な制限は民の重荷となり、神ご自身がお定めになった聖なる制度に対する尊敬を失わせた。彼らは人々の頭をとるにた りないような区別でいっぱいにし、人々の注意を重要な真理からそらした。律法の中でもっ と重要な公平と憐れみと真実が見のがされた。「それもしなければならないが、これも見の がしてはならない」と、キリストは言われた（マタイ 23：23）。

ほかの律法も同じように、ラビたちによってゆがめられていた。モーセを通して与えられた戒めの中に、けがれたものを食べることが禁じられていた。豚肉、その他ある種の動物の肉を用いることは、血液を不純にし、寿命をちぢめるというので、禁じられていた。しかしパリサイ人は、こうした制度を神が命じられたままにしておかなかった。彼らは是認されていない極端に走った。中でも民は、水を全部こして使うように要求されたが、それはけが

れた動物と同類の微小な虫が水の中に入っているといけないからというのであった。イエスはそうしたつまらない要求を彼らの実際の罪の大きさと比較して、パリサイ人に「盲目な案内者たちよ。あなたがたは、ぶよはこしているが、らくだはのみこんでいる」と言われた（マタイ 23：24）。

「偽善な律法学者、パリサイ人たちよ。あなたがたは、わざわいである。あなたがたは白く塗った墓に似ている。外側は美しく見えるが、内側は死人の骨や、あらゆる不潔なものでいっぱいである」（マタイ 23：27）。白く塗られ、美しく飾られた墓が、その内側に腐敗する死体をかくしているように、祭司たちや役人たちの外面的な聖潔は不義をかくしていた。イエスは続けて言われた。

「偽善な律法学者、バリサイ人たちよ。あなたがたは、わざわいである。あなたがたは預言者の墓を建て、義人の碑を飾り立てて、こう言っている、『もしわたしたちが先祖の時代に生きていたなら、預言者の血を流すことに加わってはいなかっただろう』と。このようにして、あなたがたは預言者を殺した者の子孫で あることを、自分で証明している」（マタイ 23：29～31）。死んだ預言者たちに対する。尊敬を示すために、ユダヤ人は彼らの墓を飾るのに熱心だった。しかし彼らは、預言者たちの教えから益を受けず、その譴責に注意を払わなかった。 キリストの時代には、死人の休み場所に対して迷信的な尊敬心がいだかれ、その場所を飾ることに莫大な額のお金が気前よく使われた。このことは神の御目には偶像礼拝であった。死人に対する過度の尊敬によって、人々は、神を最高に愛しているのではないということ、また自分と同じように隣人を愛しているのではないということを示した。

今日も同じ偶像礼拝が広く行われている。多くの者は、死人のために高価な記念碑をつくるために、やもめ、みなし子、病人、貧しい者をかえりみないという罪を犯している。この目的のために、時間と金銭と労力が惜しげなく使われているのに、生きている者に対する義務――キリストがはっきりお命じになった義務は実行されないでいる。

パリサイ人は預言者たちの墓をたて、その墓所を飾って、もしわれわれが父祖たちの時代に生存していたら、神のしもべたちの血を流すことに加わるようなことはしなかったであ

ろうと、互いに言った。同時に彼らは、神のみ子の生命をとろうと計画しているのであった。このことはわれわれにとって教訓とならねばならない。このことによって、われわれの目は、真理の光にそむく者を欺くサタンの力に対して開かれねばならない。多くの者がパリサイ人と同じことをしている。彼らは信仰のために死んだ人たちを尊敬する。彼らはキリストをこばんだユダヤ人の盲目をふしぎに思う。もしキリストの時代に生存していたら、われわれはよろこんでその教えを受け入れたであろう。われわれは救い主をこばんだ人々の罪にあずかるような者とは決してならなかったであろうと、彼らは断言する。しかし神に従うために、克己と屈辱が要求されると、当の本人たちがその確信を押えつけて、従うことをこばむ。こうして彼らは、キリストが非難されたパリサイ人と同じ精神をあらわすのである。

ユダヤ人は、キリストをこばむことがどんなに恐るべき責任を意味しているかにほとんど気づいていなかった。罪のない血がはじめて流された時、すなわち義人アベルがカインの手に倒れた時から、同じ歴史がくりかえされ、不義が増大してきた。どの時代においても、預言者たちは、神が彼らにお与えになったことばを語り、生命の危険をおかして神のみこころに従いながら、王たちや役人たちや民衆の罪を警告した。 世代をかさねるにしたがって、光と真理をこばむ者たちに対する恐るべき刑罰がつみあげられてきた。キリストの反対者たちは、いま自分自身の頭上にそれを招こうとしていた。祭司たちと役人たちの罪は、前のどの世代の罪よりも大きかった。救い主をこばむことによって、彼らはアベルからキリストにいたるまで、殺されたすべての義人たちの血に対して責任のある者になろうとしていた。彼らは不義のさかずきをあふれるところまでいっぱいにしようとしていた。しかもそれはまもなく正義の報復として彼らの頭上にそそがれるのであった。このことについて、イエスは彼らにこう警告された。

「こうして義人アベルの血から、聖所と祭壇との間であなたがたが殺したバラキヤの子ザカリヤの血に至るまで、地上に流された義人の血の報いが、ことごとくあなたがたに及ぶであろう。よく言っておく。これらのことの報いは、みな今の時代に及ぶであろう」（マタイ 23：35、36）。 イエスのことばを聞いていた学者たちとパリサイ人たちは、そのことばが真実であることを知っていた。彼らはザカリヤが殺された事情を知っていた。ザカリヤが

神からの警告のことばを告げていた時に、背信の王は悪魔のように激怒し、その命令によってこの預言者は殺されたのであった。彼の血は宮の庭石を染め、それを消し去ることはできなかった。それはいつまでも背信のイスラエルに対してあかしをたてていた。宮が立っているかぎり、あの義人の血のしみは、神に報いを求めて叫びつづけるであろう。イエスがこのような恐るべき罪のことを言われると、群衆の中 に恐怖の身ぶるいが伝わった。

これから先のことをお考えになって、イエスは、ユダヤ人の頑迷さと、神のしもべたちに対する彼らの偏狭さは、将来も昔と同じであろうと断言された。「それだから、わたしは、預言者、知者、律法学者たちをあなたがたにつかわすが、そのうちのある者を殺し、また十字架につけ、そのある者を会堂でむち打ち、また町から町へと迫害して行くであろう」（マタイ 23：34）。 信仰と聖霊に満たされた預言者たちと知者たち――ステパノ、ヤコブ、その他の人々が有罪の宣告を受けて殺されるのであった。手を天に挙げ、体のまわりを天来の 光にかこまれて、キリストは、口の前にいる人々に裁判官のように語られた、イエスのお声 は、これまでたびたびやさしく嘆願するような調子にきこえていたが、いまは譴責と罪の宣 告にきこえた。聴衆は身ぶるいした。キリストのことばと顔つきから受けた印象は決して消 え去ることがなかった。

キリストの憤激は、偽善という卑劣な罪に向けられた。人々はそのために自分自身の魂を滅ぼし、人々をあざむき、神をけがしていた。祭司たちと役人たちのもっともらしい欺瞞的な議論の中に、イエスは、サタンの勢力の働きをみわけられた。罪に対するキリストの攻撃はするどかった。しかし主は報復的なことばを語られなかった。主は、暗黒の君に対して聖なる怒りをおぼえられた。しかしかんしゃくを破裂させるようなことをなさらなかった。同様に、神との調和のうちに生きているクリスチャンも、愛といつくしみという美しい特性を備えているが、罪に対しては憤激をおぼえるのである。しかし彼は、自分をそしる者に対して怒りのあまりののしり返すようなことをしない。暗黒の勢力に動かされて虚偽を主張する者に対しても、彼はキリストのうちにあって、冷静と沈着を保つのである。

神のみ子が神殿に、それから聴衆にためらいがちな一べつを投げかけられた時、その顔には天来の憐れみがみられた。心の深い苦悩にとぎれる声とにがい涙のうちに、主は叫ばれ

た、「ああ、エルサレム、エルサレム、預言者たちを殺し、おまえにつかわされた人たちを石で打ち殺す者よ。ちょうど、めんどりが翼の下にそのひなを集めるように、わたしはおまえの子らを幾たび集めようとしたことであろう。それだのに、おまえたちは応じようとしなかった」（マタイ 23：37）。これは別れの苦しみである。キリストの嘆きのうちに、神の心がそそぎ出されている。それは神の長く耐え忍ぶ愛の神秘的な別れである。

パリサイ人もサドカイ人も何も言えなくなってしまった。イエスは弟子たちを呼んで、宮を去るしたくをされた。それは敗北して敵の前から逃げ出さねばならない者としてではなく、働きをなしとげた者としてであった。主は勝利者として、論争から退かれた。 この重大な日にキリストの口から出た真理の宝石は、多くの人々の心にたくわえられた。彼らにとって、新しい思想が生まれ、新しい抱負がめざめ、新しい歴史が始まった。キリストの十字架とよみがえりのあとで、これらの人々は前線に現れて、この働きの偉大さにふさわしい知恵と熱意とをもって神からの任命を達成した。彼らは人々の心に訴えるメッセージを伝え、長年の間幾千の人々の生活をいじけさせていた古い迷信を弱めた。彼らのあかしの前に、人間の理論と哲学はむなしいおとぎ話になった。エルサレムの宮で、驚きとおそれの思いにうたれた群衆に語られた救い主のことばから生じた結果は偉大であった。

しかしイスラエルは、国家として、神から離れた。オリーブの木の自然の枝は折りとられた。宮の内部を見おさめにして、イエスは悲しい調子で言われた、「見よ、おまえたちの家は見捨てられてしまう。わたしは言っておく、『主の御名によってきたる者に、祝福あれ』とおまえたちが言う時までは、今後ふたたび、わたしに会うことはないであろう」（マクイ23：38、39）。これまで主は宮を父の家と呼ばれた。しかしいま神のみ子が宮から離れられ るとともに、神のご臨在は、み栄えのために建てられたこの宮から永久に離れるのであった。これからは宮の儀式は無意味となり、その奉仕は物笑いとなるのであった。

第 68 章　外庭で

「祭で礼拝するために上ってきた人々のうちに、数人のギリシャ人がいた。彼らはガリラヤのベッサイダ出であるピリポのところにきて、『君よ、イエスにお目にかかりたいのですが』と言って頼んだ。ピリポはアンデレのところに行ってそのことを話し、アンデレとピリポは、イエスのもとに行って伝えた」（ヨハネ 12：20～22）。 この時、キリストの働きは残酷な敗北の様子を示していた。キリストは、祭司たちやパリサイ人たちとの論争に勝利されたが、彼らからメシヤとして受け入れられないことは明らかであった。最後的な分離がきていた。弟子たちにはこの問題が絶望的に思えた。しかしキリストはこ自分の働きを完成しようとしておられた。ユダヤ国民ばかりでなく、全世界にとって関係のある大事件がまさに起ころうとしていた。キリストは、世の人々の飢えた叫びを反響している「イエスにお目にかかりたいのですが」という熱心な願いを聞かれると、お顔が明るく輝き、「人の子が栄光を受ける時がきた」と言われた。ギリシャ人たちの願いの中に、主はご自分の大いなる犠牲の結果についての保証をごらんになった。

キリストの生涯の初めに東方から博士たちがやってきたように、キリストの生涯の終わりに、このギリシヤ人たちは救い主をみいだすために西方からやってきた。キリストがお生まれになった時、ユダヤ人は自分たちの野心的な計画に夢中になっていたので、キリストの来臨を知らなかった。異教国のマギたちは、救い主を拝するためにささげ物をたずさえてうまぶねへやってきた。同様に、ギリシャ人たちは、世の諸国諸族諸民を代表してイエスに会いにやってきた。同じように全地の各時代の人々は、救い主の十字架に引きよせられるのである。同じように「多くの人が東から西からきて、天国で、あぶらはむ、イサク、ヤコブと共に宴会の席につく」のである（マタイ 8：11）。

ギリシャ人たちは、キリストがエルサレムに凱旋的な入城をされたことを聞いていた。一部の人たちが、キリストは祭司たちと役人たちを宮から追い出されたということ、またキリストがダビデの位を占め、イスラエルの王として支配されるということを想像して、そのうわさをひろめた。ギリシャ人たちはキリストの使命について真相を知りたがった。「イエ

スにお目にかかりたいのですが」と彼らは言った。彼らの願いはかなえられた。このたのみがイエスに伝えられた時、イエスはユダヤ人以外の者はだれもはいれない宮の内部におられたが、外庭のギリシャ人たちのところへ出てこられて、彼らに自ら面接された。

キリストが栄光を受けられる時がきていた。主は十字架の影に立っておられたが、ギリシャ人たちの問い合わせは、主がまさに払おうとしておられる犠牲によって多くの息子娘たちが神へみちびかれることをイエスに示した。主は、ギリシャ人たちがその時には夢にも思わなかった立場におられる主をまもなく見ることを知っておられた。彼らは、主が強盗殺人のバラバと並んで立たれ、しかも神のみ子よりもバラバがえらばれて釈放されるのを見るのであった。彼らは人々が、祭司たちと役人たちに吹込まれて選択するのを耳にするのであった。「それではキリストといわれるイエスは、どうしたらよいか」という問いに、「彼らはいっせいに『十字架につけよ』と言った」（マタイ 27：22）。人々の罪のためにこのあがないの供え物をすることによって、キリストはご自分のみ国が完成され、それが世界中にひろがることをご存じであった。主は回復者として働かれ、そのみたまは勝利するのであった。一瞬間、主は将来をごらんになって、全地のすみずみまで、「見よ、世の罪を取り除く神の小羊」とのべつたえている声をお聞きになった（ヨハネ 1：29）。この見知らぬ人たちの中に、主は、ユダヤ人と異邦人との間の隔ての壁がとりこわされ、諸国諸族諸民が救いのおとずれを聞く時の大収穫の保証をごらんになった。このこと、すなわち主の望み 成されることについての予想は、「人の子が栄光を受ける時がきた」というみことばに表現されている
（ヨハネ 12：23）。しかし栄光を受けるためにはどのような道を通らねばならないかということが、キリストの頭から決して離れなかった。異邦人がかり集められることは、近づきつつあったキリストの死に続くのであった。主の死によってのみ、世は救われるのであった。

一粒の麦のように、人の子は地に投げられて死に、目に見えないところに葬られねばならなかった。しかし主はふたたび生きられるのであった。 キリストは、弟子たちにわかるように、自然の事物を例にとってご自分の将来をお示しになった。キリストの使命の真の結果はその死によって到達されるのであった。「よくよくあなたがたに言っておく。一粒の麦が地に落ちて死ななければ、それはただ一粒のままである。しかし、もし死んだなら、豊かに

実を結ぶようになる」と主は言われた（ヨハネ 12：24）。麦の粒が地に落ちて死ぬ時に、それは芽生えて実を結ぶ。そのように、キリストの死は、神の国のために実を結ぶのであった。植物界の法則にしたがって、キリストの死の結果は生命であった。

土地をたがやす者は、この実例を始終みえる行為によって、年々穀物の補給を維持しているのである。それはしばらく畑のうねの下にかくれて、主から見守ってもらわねばならない。それから葉が現れ、次に穂が現れ、その穂の中に実がみのる。しかしその穀物が目に見えないところに埋もれ、かくされ、どう見ても失われたようになるまでは、このような発育は行われないのである。

地中に埋もれた種は実を生じ、こんどはその実が播かれる。こうして収穫は増大する。同様に、カルバリーの十字架上におけるキリストの死は、永遠の生命にいたる実を結ぶのである。この犠牲について瞑想することは、その実として永遠の時代にわたって生きる者の輝かしい喜びである。 自分自身の生命を保存する穀物は実を生ずることができない。それは一粒のままである。キリストは、もしその気になられたら、ご自分が死なれなくてもよかったのである。しかし、もし死なれなかったら、キリストは 1 人のままでなければならない。息子娘たちを神につれて行くことはおできにならない。ご自分の生命を放棄することによってのみ、キリストは人類に生命を与えることがおできになる。死ぬために地に落ちることによってのみ、キリストはあの大収穫、すなわち諸国諸族諸民の中から神のみもとにあがなわれた大群衆の種となることがおできになるのである。

キリストはこの真理にすべての人が学ばねばならない自己犠牲の教訓を結びつけておられる。「自分の命を愛する者はそれを失い、この世で自分の命を憎む者は、それを保って永遠の命に至るであろう」（ヨハネ 12：25）。キリストとともに働く者として実を生じさせたい者は、みなまず地に落ちて死なねばならない。生命はこの世の必要といううねの中に投げ込まれねばならない。自己を愛する思い、自己中心の思いは滅びなければならない、自己犠牲の法則は、自己保存の法則である。農夫は穀物を投げ捨てることによってそれを保存する。人間の生命も同様である。与えることは生きることである。保存される生命は神と人との奉

仕に惜し気なく与えられる生命である。キリストのためにこの世の生命を犠牲にする者は永遠にいたる生命としてこれを保つのである。

自分のために費やされる人生は食べてしまった穀物のようなものである。それは消えて無くなり、何の増加もない。人はできるだけ自分のために集めるかもしれない。自分のために生き、考え、計画するかもしれない。しかし彼のいのちは過ぎ去って、何ものも残らない。自分に仕える法則は自分を滅ぼす法則である。　「もしわたしに仕えようとする人があれば、その人はわたしに従って来るがよい。そうすれば、わたしのおる所に、わたしに仕える者もまた、おるであろう。もしわたしに仕えようとする人があれば、その人を父は重んじて下さるであろう」（ヨハネ 12：26）。イエスとともに犠牲の十字架を負うた者はキリストとともにそ　の栄光にあずかる者となる。ご自分の弟子たちがキリストとともに栄光を受けるという こと が、屈辱と苦痛の中にあってキリストの喜びであった。彼らはキリストの自己犠牲の実　である。彼らのうちにキリストご自身の品性と精神が完成されることがキリストにとって報　いであり、永遠にわたる喜びある。彼らは自分たちの骨折りと犠牲の実がほかの人たちの心　と生活にみられる時、キリストのこのよろこびにあずかるのである。彼らはキリストととも　に働く者であって、天父はみ子をあがめられるのと同じに、彼らをあがめられる。

ギリシャ人たちのことばは、異邦人が集められる前兆であったが、イエスの心にその使命の全体を思わせた。あがないの働きが、天で計画された時から、死が迫った今にいたるまで、イエスの前を通り過ぎた。神秘の雲が神のみ子をおおっているようであった。その暗さがイエスの近くにいる人々に感じられた。イエスは物思いにふけっておられた。ついにその沈黙はイエスの悲しみに沈んだ声によって破られた。「今わたしは心が騒いでいる。わたしはなんと言おうか。父よ、この時からわたしをお救い下さい」（ヨハネ 12：27）。事前にキリストはすでににがいさかずきから飲んでおられた。キリストの人性は、ご自分が捨てられ　る時を思って、たじろいでいた。その時には、どう見ても、キリストは神からさえ捨てられ、キリストが神から打たれ、たたかれ、苦しめられるのをすべての者が見るのであった。キリ　ストは、人目にさらされ、極悪の罪人のように取り扱われ、恥ずかしい不名誉な死にあうこ　とをちゅうちょされた。暗黒の勢力との戦いについての予感、人類の罪とがについての恐る

べき重荷の思い、罪のゆえの天父の怒りが、イエスの精神をめいらせ、死の青白さをイエスの顔にひろがらせた。

その時、天父のみこころに対する気高い服従がみられた。「わたしはこのために、この時に至ったのです。父よ、み名があがめられますように」（ヨハネ 12：27）。キリストの死によってのみ、サタンの王国は打ち倒されるのである。そうすることによってのみ、人があ がなわれ、神はあがめられるのである。イエスは苦悩に同意され、犠牲を受け入れられた。 天の大君イエスが罪を負う者として苦難を受けることに同意された。「父よ、み名があがめ られますように」と、イエスは言われた（ヨハネ 12：28）。キリストがこれらのことばを語られると、頭上にただよっていた雲の中から、「わたしはすでに栄光をあらわした。そして、更にそれをあらわすであろう」という応答があった（ヨハネ 12：28）。キリストの全生涯は、かいばおけの時からこのことばが語られた時まで、神の栄光をあらわしていた。そしてきた るべき試練に、神および人としてのキリストの苦難によって、実に天父のみ名があがめられ るのであった。

この声がきこえると、光が雲からさして、あたかも無限な力の神の両腕が火の壁のようにキリストをかこむかのように、キリストをとりまいた。人々は恐れと驚きの念でこの光景を見た。だれもあえて口を開こうとしなかった。だまって息をころしたまま、みんなはイエスを見つめて立っていた。天父のあかしが与えられると、雲は晴れて天に散った。天父とみ子との目に見えるまじわりはその時やんだ。 「すると、そこに立っていた群衆がこれを聞いて、『雷がなったのだ』と言い、ほかの人たちは、『御使が彼に話しかけたのだ』と言った」（ヨハネ 12：29）。しかしたずねてきたギリシャ人たちは、その雲を見、その声をきき、その意味をさとって、実際にキリストをみとめた。彼らには、キリストが神からつかわされたお方としてあらわされた。

公生涯の初めにイエスがバプテスマを受けられた時に、神のみ声がきこえ、それは山上の変貌の時にふたたびきこえた。いま公生涯の終わりに、それはもっと大勢の人々によって、特殊な事情のもとに 3 度聞かれた。イエスはユダヤ人の状態について最も厳粛な事実を語ら れたばかりであった。主は最後の訴えをなし、ユダヤ人の滅亡を宣告されたのだった。いま

神はふたたびみ子の使命に印をおされた。神はイスラエルがこぼんだお方をみとめられた。「この声があったのは、わたしのためではなく、あなたがたのためである」とイエスは言われた（ヨハネ 12：30）。 それはイエスがメシヤであられることについての最高の証拠、すなわちイエスが事実を語られ、神のみ子であられるという天父のしるしであった。

イエスは続けて言われた、「『今はこの世がさばかれる時である。今こそこの世の君は追い出されるであろう。そして、わたしがこの地から上げられる時には、すべての人をわたしのところに引きよせるであろう』。イエスはこう言って、自分がどんな死に方で死のうとしていたかを、お示しになったのである」（ヨハネ 12：31～33）。いまは世界の危機である。もしわたしが人類の罪のためにあがないの供え物となれば、世は明るくなるであろう。人の魂をとらえているサタンの束縛はたちきられるであろう。けがされた神のみかたちは人性のうちに回復され、信じる聖徒たちの家族はついには天国を嗣ぐであろう。

これがキリストの死の結果である。救い主は、目の前に浮かぶ勝利の光景について瞑想にふけられる。主は十字架が、それも残酷で不名誉な十字架が、あらゆる恐怖を伴っているにもかかわらず、栄光に輝いているのをごらんになる。 しかし人類のあがないの働きが十字架によってなしとげられる全部ではない。神の愛が宇宙にあらわされる。この世の君が追い出される。サタンが神に向けた非難が反ばくされる。サタンが天に投げかけた非難は永遠に除かれる。人類はもちろん天使たちもあがない主に引きよせられる。「わたしがこの地から上げられる時には、すべての人をわたしのところに引きよせるであろう」と、イエスは言われた（ヨハネ 12：32）。

キリストがこれらのことばを語られた時、周囲に多くの人々がいたが、その 1 人が言った、「『わたしたちは律法によって、キリストはいつまでも生きておいでになるのだ、と聞 いていました。それだのに、どうして人の子は上げられねばならないと、言われるのですか。その人の子とは、だれのことですか』。そこでイエスは彼らに言われた、『もうしばらくの 間、光はあなたがたと一緒にここにある。光がある間に歩いて、やみに追いつかれないよう にしなさい。やみの中を歩く者は、自分がどこへ行くのかわかっていない。光のある間に、 光の子となるために、光を信じなさい』」（ヨハネ 12：34～36）。「このように多くのし

るしを彼らの前でなさったが、彼らはイエスを信じなかった」（ヨハネ 12：37）。彼らはかつて救い主に「わたしたちが見てあなたを信じるために、どんなしるしを行って下さいますか」とたずねたことがあった（ヨハネ 6：30）。無数のしるしが与えられたが、彼らは目をとじ、その心はかたくなであった。いま天父がご自身で語られ、彼らはそれ以上のしるしを求めることができないのに、それでも彼らは信じようとしなかった。

「しかし、役人たちの中にも、イエスを信じた者が多かったが、パリサイ人をはばかって、告白はしなかった。会堂から追い出されるのを恐れていたのである」（ヨハネ 12：42）。彼らは神の承認よりも人の称賛を好んだ。非難と恥をまぬかれるために彼らはキリストをこばみ、さし出された永遠の生命をこばんだ。それ以来幾世紀の間、これと同じことをしている者がどんなに多いことだろう。「自分の命を愛する者はそれを失い」という救い主の警告のことばは、このようなすべての者にあてはまるのである（ヨハネ 12：25）。イエスは言われた、「わたしを捨てて、わたしの言葉を受けいれない人には、その人をさばくものがある。わたしの語ったその言葉が、終りの日にその人をさばくであろう」（ヨハネ 12：48）。 おとずれの時がわからない人たちは気の毒である。ゆっくりと悲しそうに、キリストは宮の境 内を永久に去られた。

第 69 章　オリブ山上で

「見よ、おまえたちの家は見捨てられてしまう」と祭司たちと役人たちに言われたキリストのことばは、彼らの心に恐怖を生じさせた。彼らは無関心をよそおっていたが、このことばの意味についてたえず疑問が心のうちにわきあがってくるのであった。目に見えない危険が彼らに迫っているように思えた。国民の誇りである壮麗な宮がまもなく廃虚になるということだろうか。弟子たちもまた悪い予感をいだいて、イエスが何かもっとはっきりした説明をされるのを熱心に待った。イエスといっしょに宮から出て行く時、彼らはその強さと美しさにイエスの注意を向けた。宮の石はまじりけのない純白の大理石で、中には信じられないほど巨大なものもあった。壁の一部は、ネブカデネザルの軍隊の包囲にも耐えたものであった。完全な石工技術によって、それはあたかも石切場からそっくり切り出された 1 つのどっしりした石のように見えた。このような偉大な壁がどうしてこわされようかと、弟子たちは理解できなかった。

キリストの注意が宮の壮麗さにひきつけられた時、こばまれたこのお方の無言の思いはどんなであったろう。なるほど主の目の前の景色は美しかったが、主は、悲しみをこめて、わたしには何もかもわかっていると言われた。なるほど建物はすばらしい。あなたがたはこの壁をさして、破壊されそうにみえないと言りが、わたしのことばを聞きなさい。「その石 1つでもくずされずに、そこに他の石の上に残ることもなくなる」日がくるのである（マタイ24：2）。 キリストのことばは多くの人々が聞いているところで語られた。しかしイエスが 1 人になられて、オリブ山にすわっておられると、ペテロ、ヨハネ、ヤコブ、アンアレがみもとにやってきて、「どうぞお話しください。いつ、そんなことが起るのでしょうか。あなたがまたおいでになる時や、世の終りには、どんな前兆がありますか」と言った（マタイ 24：3）。

イエスは弟子たちに答えるにあたって、エルサレムの滅亡とご自分がおいでになろ大いなる日とを別々にとりあげられなかった。主はこの 2 つの出来事をいっしょにまぜて描写された。イエスがご自分のごらんになった通りに未来の諸事件を弟子たちに示されたら、彼ら

はその光景に耐えることができなかったであろう。彼らに対する思いやりから、主は 2 つの大きな危機をまぜて描写し、その意味を弟子たちが自分で学ぶようにされた。主がエルサレムの滅亡のことを言われた時、その預言のことばはエルサレムの滅亡という事件を超えて最後の大火の日にまで及んでいた。その日には、「主はそのおられる所を出て、地に住む者の不義を罰せられる。地はその上に流された血をあらわして、殺された者を、もはやおおうことがない」（イザヤ 26：21）。この話の全体は、ただ弟子たちのためだけでなく、地上歴史の最後の場面に住む者たちのために語られたのであった。

弟子たちの方を向いて、キリストは、「人に惑わされないように気をつけなさい。多くの者がわたしの名を名のって現れ、自分がキリストだと言って、多くの人を惑わすであろう」と言われた（マタイ 24：4、5）。多くのいつわりのメシヤたちが現れて、奇跡を行うと称し、ユダヤ国民の救済の時が来たと宣言する。これらの者は多くの人々をまちがった道へ導くのである。キリストのこのことばは成就した。キリストの死とエルサレム包囲との間に、多くのいつわりのメシヤたちが現れた。しかしこの警告は現代の世に住んでいる者たちのためにも与えられたのである。エルサレムの滅亡に先立って行われたのと同じ欺瞞が、各時代を通じて行われてきたが、それはふたたび行われるであろう。

「また、戦争と戦争のうわさとを聞くであろう。注意していなさい、あわててはいけない。それは起らねばならないが、まだ終りではない」（マタイ 24：6）。エルサレム滅亡の前に、人々は主権を争った。皇帝たちは殺害された。王の近臣と思われている人たちが 殺された。戦争と戦争のうわさがあった。「それは起らねばならないが、まだ（一国家としてユダヤ国家の）終りではない。民は民に、国は国に敵対して立ち上がるであろう。またあちこちに、ききんが起り、また地震があるであろう。しかし、すべてこれらは産みの苦しみの初めである」（マタイ 24：6～8）。

ラビたちがこれらのしるしを見る時、彼らはそれが神の選民を束縛したために諸国にくだる神の刑罰であると宣言するであろうと、キリストは言われた。こうしたしるしはメシヤ来臨のしるしであると、彼らは宣告するであろう。あざむかれてはならない。それらは神の刑罰のはじまりである。人々は自分自身に満足してきた。彼らは悔い改めていやされること

がなかった。彼らが束縛からの解放のしるしと言っているしるしは、彼らの滅亡のしるしである。　「そのとき人々は、あなたがたを苦しみにあわせ、また殺すであろう。またあなたがたは、わたしの名のゆえにすべての民に憎まれるであろう。そのとき、多くの人がつまずき、また互に裏切り、憎み合うであろう」（マタイ　24：9、10）。これらのすべてのことをクリスチャンは経験した。父親と母親は子供たちを裏切った。子供たちは親を裏切った。友人は　友人をサンヒドリンに引き渡した。迫害者たちはステパノ、ヤコブ、その他のクリスチャン　たちを殺すことによってその目的を達成した。

神は、ご自分のしもべたちを通して、ユダヤ人に最後の悔い改めの機会をお与えになった。神の証人たちが捕らえられたり、裁判を受けたり、投獄されたりした時に、神はご自身をあらわされた。それでも裁判官たちは彼らに死刑を宣告した。「この世は彼らの住む所ではなかった」（ヘブル 11：38）。ユダヤ人たちは、彼らを殺したことによって、神のみ子を新たに十字架につけた。同じことがふたたび起るであろう。当局は宗教の自由を制限する法律を作るであろう。彼らは神だけのものである権利を自分たちのものにするであろう。彼らは神のみが支配されるべき良心を自分たちが強制することができると考えるであろう。今でさえそれが始まっている。この働きはおし進められて、ついには越えることのできない限界にまで達するであろう。その時神は、戒めを守る忠誠な民のために手を出されるのである、

迫害が起こるたびに、それを目撃する者たちは、キリストの側に立っかそれとも反対の側に立つかを決定する。不正な宣告を受ける人たちに同情を示す者たちはキリストへの愛着を示しているのである。 ほかの者たちは真理の原則が彼らの習慣をたち切るのでつまずいてしまう。多くの者がつまずき倒れ、かつて擁護していた信仰をすてる。試みの時に自分自身の安全を求めて背信する者たちは、偽りのあかしをたて、兄弟たちを裏切る。キリストは、光をこばむ者たちが異常で冷酷な行動をとってもわれわれが驚かないように、このことについて警告された。

キリストはエルサレムにのぞむ滅亡のしるしを弟子たちに与え、のがれる方法を彼らに語られた。「エルサレムが軍隊に包囲されるのを見たならば、そのときは、その滅亡が近づいたとさとりなさい。そのとき、ユダヤにいる人々は山へ逃げよ。市中にいる者は、そこか

ら出て行くがよい。また、いなかにいる者は市内にはいってはいけない。それは、聖書にしるされたすべての事が実現する刑罰の日であるからだ」（ルカ 21：20～22）。この警告は、40 年のち、すなわちエルサレムの滅亡の時に注意するように与えられたのであった。クリスチャンはこの警告に従ったので、エルサレムの陥落の時には、クリスチャンはひとりも死な　なかった。

「あなたがたの逃げるのが、冬または安息日にならないように祈れ」とキリストは言われた（マタイ 24：20）。安息日をつくられたお方は、それを廃してご自分の十字架につけるようなことをされなかった。安息日はキリストの死によって無効とされなかった。キリスト　が十字架につけられてから 40 年のちにも、それは依然として聖なるものとみなされるのであった。弟子たちは逃げることが安息日に起こらないように、40 年の間祈るのであった。 キリストの話は、エルサレムの滅亡から、この地上歴史の鎖の最後の環であるもっと大きな事件、すな わち神のみ子が威厳と栄光のうちに来臨されることに急速に移って行った。この 2 つの 事件の間に、長い暗黒の世紀、キリストの教会に血と涙と苦悩のみられる幾世紀が、キリス　トの目の前に開かれていた。弟子たちはその時このような光景を見るのに耐えられなかった　ので、イエスは短いことばを述べられただけでこの光景を通り抜けられた。

「その時には、世の初めから現在に至るまで、かつてなく今後もないような大きな患難が起るからである。もしその期間が縮められないなら、救われる者はひとりもないであろう。しかし、選民のためには、その期間が縮められるであろう」（マタイ　24：21、22）。1000 年以上にわたって、かつて世に知られなかったような迫害が、キリストに従う者たちにのぞむのであった。キリストの忠実な証人たちが。幾百万となく殺されるのであった。神がご自分の民を保存するために手をさしのべられなかったら、全部滅びたであろう。「しかし選民のためには、その期間が縮められるであろう」と主は言われた（マタイ 24：22）。

今主は、まちがう余地のないことばをもって、主の再臨についてお語りになり、その来臨に先立つ危険について警告を世にお与えになる。「そのとき、だれかがあなたがたに『見よ、ここにキリストがいる』、また、『あそこにいる』と言っても、それを信じるな。にせキリストたちや、にせ預言者たちが起って、大いなるしるしと奇跡とを行い、できれば、選

民をも惑わそうとするであろう。見よ、あなたがたに前もって言っておく。だから、人々が『見よ、彼は荒野にいる』と言っても、出て行くな。また『見よ、へやの中にいる』と言っても、信じるな。ちょうど、いなずまが東から西にひらめき渡るように、人の子も現れるであろう」（マタイ　24：23～27）。エルサレム滅亡のしるしの　1　つとして、キリストは、「多くのにせ預言者たちが起って、多くの人々を惑わすであろう」と言われた。事実にせ預言者たちが起こって、民をあざむき、多数の者を荒野へ連れて行った。魔術士たちと占い師たちは奇跡を行う力があると言って、民を引きよせ、山の淋しいところへ連れて行った。しかにの預言は、末の世のためにも語られたのである。このしるしは再臨のしるしとして与えられている。今でさえもにせキリストたちやにせ預言者たちが主の弟子たちを迷わすためにしるしやふしぎを見せている。「見よ、彼は荒野にいる」という叫びをわれわれは聞かないだろうか。幾千の人々がキリストをみいだそうと望んで荒野へ行かなかっただろうか。人々が死んだ霊魂とまじわるのだと称している幾千の集会から、「見よ、彼はへやの中にいる」という叫びがいま聞こえないだろうか。

これは降神術が叫んでいる主張である。しかしキリストは何と言っておられるだろうか。「信じるな。ちょうど、いなずまが東から西にひらめき渡るように、人の子も現れるであろう」（マタイ 24：26、27）。

救い主は来臨のしるしをお与えになっている。のみならず、主はこれらの最初のしるしが現れる時を定めておられる。「しかし、その時に起る患難の後、たちまち日は暗くなり、月はその光を放つことをやめ、星は空から落ち、天体は揺り動かされるであろう。そのとき、人の子のしるしが天に現れるであろう。またそのとき、地のすべての民族は嘆き、そして力と大いなる栄光とをもって、人の子が天の雲に乗って来るのを、人々は見るであろう。また、彼は大いなるラッパの音と共に御使たちをつかわして、天のはてからはてに至るまで、四方からその選民を呼び集めるであろう」（マタイ 24：29～31）。

法王による大迫害が終わると、日は暗く月はその光を放つことをやめると、キリストは言明された。次に星が天から落ちるのである。そして主は言われる、「いちじくの木からこの警を学びなさい。その枝が柔らかになり、葉が出るようになると、夏の近いことがわかる。

そのように、すべてこれらのことを見たならば、人の子が戸口まで近づいていると知りなさい」（マタイ 24：32、33）。 キリストはご自分の来臨についてしるしをお与えになった。われわれはキリストが戸口まで近づいておられる時を知ることができると、主は言明してお られる。主はこれらのしるしを見る人々について、「これらの事が、ことごとく起るまでは、この時代は滅びるこ とがない」と言われる（マタイ 24：34）。これらのしるしは、すでに 現れた。いまや主の来臨が迫っていることをわれわれは確実に知っている。「天地は滅びる であろう。しかしわたしの言葉は滅びることがない」と主は言われる（マタイ 24：35）。

キリストは雲に乗って大いなる栄光のうちにこられる。多くの輝く天使たちがキリストにつき従う。主は、死人をよみがえらせ、生ける聖徒たちを栄光から栄光へ変えるためにこられる。主を愛し、その戒めを守った者たちに栄光を与え、彼らをみもとに連れて行くために、宅はおいでになる。主は、彼らを、またご自分の約束をお忘れにならなかった。 家族はふたたび一緒になる。死者を見るとき、神のラッパが鳴りわたる朝のことを思うことができる。その時、「死人は朽ちない者によみがえらされ、わたしたちは変えられるのである」（Ｉコリント 15：52）。もうしばらくすれば、「麗しく飾った王」にお会いするのである（イザヤ 33：17）。もうしばらくすれば、主はわれらの目から涙を全くぬぐいとってくださる。もうしばらくすれば、主はわれらを「その栄光のまえに傷なき者として、喜びのうちに立たせて下さる」（ユダ 24）。だから主は、来臨のしるしをお与えになった時に、「これらの事が起りはじめたら、身を起し頭をもたげなさい。あなたがたの救が近づいているのだから」と言われた（ルカ 21：28）。

しかしキリストは、来臨の日時をお示しにならなかった。主ご自身も再臨の日時を知らせることができないとはっきり弟子たちに言われた。もしこのことを自由に示すことがおできになったら、たえず期待して待つ態度を持ちつづけるように弟子たちに勧める必要はなかったであろう。主の来臨の日時を知っていると主張する人たちがいる。彼らは熱心に将来を描く。しかし主は彼らにそうした立場をとらないようにと警告された。人の子がふたたびおいでになる正確な日時は神の奥義である。 キリストはことばをつづけて、来臨される時の世の状態を指摘される。「人の子の現れるのも、ちょうどノアの時のようであろう。すなわち、

洪水の出る前、ノアが箱舟にはいる日まで、人々は食い、飲み、めとり、とつぎなどしていた。そして洪水が襲ってきて、いっさいのものをさらって行くまで、彼らは気がつかなかった。人の子の現れるのも、そのようであろう」（マタイ 24：37～39）。キリストはここに、この世の千年期、すなわち、すべての人が永遠のために備えをする 1000 年間についての考え方を示してはおられない。人の子がふたたびおいでになる日は、ノアの日と同じようであ ろうと、主は言っておられる。

ノアの時代はどうだっただろうか。「主は人の悪が地にはびこり、すべてその心に思いはかることが、いつも悪いことばかりであるのを見られた」（創世記 6：5）。 洪水前の世界の住民は、エホバから離れ、その聖なるみこころを行うことをこばんだ、彼らは自分自身のきよくない想像とゆがめられた考え方に従った。彼らが滅ぼされたのはその悪のためであった。今日、世は同じ道をたどっている。千年期の栄光についてのうれしがらせるようなしるしはどこにもない。神の律法を犯している者たちは地を悪で満たしている。かけごと、競馬、ばくち、放とう、好色的な行為、抑制のない情欲などのために、世は非常な勢いで暴虐に満たされている。

エルサレムの滅亡の預言の中に、キリストは、「また不法がはびこるので、多くの人の愛が冷えるであろう。しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われる。そしてこの御国の福音は、すべての民に対してあかしをするために、全世界に宣べ伝えられるであろう。そしてそれから最後が来るのである」と言われた（マタイ 24：12～14）。 この預言はふたたび成就するのである。当時はびこっていた不義は今の時代にもそのまま見られる。福音の宣伝について の預言も同様である。エルサレムの陥落前に、パウロは、聖霊に感じて書き、「この福音は、天の下にあるすべての造られたものに対して宣べ伝えられた」と、宣言した（コロサイ 1： 23）。同じように、いま人の子がこられる前に、この永遠の福音は、「あらゆる国民、部族、国語、民族」に宣べ伝えられるのである（黙示録 14：6）。神は「世界をさ ばくためその日を定め」られた（使徒行伝 17：31）。キリストはその日がいつはじまるかをお告げになって いる。主は世のすべての人が悔い改めるとは言われないで、「この御国の福音は、すべての

民に対してあかしをするために、全世界に宣べ伝えられるであろう。そしてそれから最後が来るのである」と言っておられる（マタイ 24：14）。

世に福音を伝えることによって、主の再臨を早めることが、われわれの力でできる。われわれは神の日の到来を待っているだけでなく、これを早めるのである。キリストの教会が命じられた働きを主がお定めになった通りにしていたら、全世界に対する警告はすでに終わって、主イエスは力と大いなる栄光をもってこの地上においでになっていたのである。 キリストは、来臨についてのしるしをお与えになってから、「このようにあなたがたも、これらの事が起るのを見たなら、神の国が近いのだとさとりなさい。……絶えず目をさまして祈っていなさい」と言われた（ルカ 21：31、36）。神はきたるべきさばきについていつも警告をお与えになってきた。自分たちの時代に対する神のみことばを信じ、神の戒めに従って信仰を実践した人たちは、従わない者たちや、信じない者たちの上に落ちかかったさばきをまぬかれた。

「あなたと家族とはみな箱舟にはいりなさい。あなたがこの時代の人々の中で、わたしの前に正しい人であるとわたしは認めたからである」ということばがノアに与えられた（創世記 7：1）。ノアは従い、そして救われた。ロトに、「立ってこの所から出なさい。主がこの町を滅ぼされます」ということばが与えられた（創世記 19：14）。ロトは天の使者たちの守りに身を委ね、そして救われた。そのようにキリストの弟子たちは、エルサレムの滅亡について警告を与えられた。きたるべき滅亡のしるしを見守っていた人たちは都をのがれて、滅亡をまぬかれた。そのように今われわれは、キリストの再臨と世にのぞもうとしている滅亡について警告が与えられている。この警告に注意する者は救われるのである。

キリスト来臨の正確な時はわからないのだから、目をさましているようにと命じられている。「主人が帰ってきたとき、目を覚しているのを見られる僕たちは、さいわいである」（ルカ 12：37）。主の来臨を待ち望んでいる者たちは、何もしないでただ期待して待っているのではない。キリストの来臨を期待することによって、人々は主を恐れ、不義に対する主のさばきを恐れるのである。彼らは主がさし出された憐れみをこばむ大きな罪を自覚するのである。主を待ち望んでいる者たちは真理に従うことによって自らの魂をきよめる。彼らは

油断のない警戒に熱心な働きを結合する。彼らは、主が戸口におられることを知っているので、魂の救いのために天使たちと協力して働くように熱意をよび起こされる。こういう人たちが主の家族に、「時に応じて定めの食事をそなえさせる忠実な思慮深い」しもべたちである（ルカ 12：42）。 彼らはいま特にあてはまる真理を宣べ伝えている。エノク、ノア、アブラハム、モーセがそれぞれの時代のために真理を宣べ伝えたように、キリストのしもべたちは今この世代に対する特別の警告を与えるのである。

ところがキリストはもう 1 つの階級の人々をお示しになった。「もしその僕が、主人の帰りがおそいと心の中で思い、男女の召使たちを打ちたたき、そして食べたり、飲んだりし て酔いはじめるならば、その僕の主人は思いがけない日、気がつかない時に帰って来るであ ろう」（ルカ 12：45、46）。 この悪いしもべは、「主人の帰りがおそい」と心の中で思っている。彼は、キリストがおいでにならないとは言わない。彼は主の再臨という考えを嘲笑 しない。しかし心の中で、またその行為とことばによって、主の来臨が遅いと宣言する。彼 は、ほかの人たちの心から、主はすみやかにこられるという確信を追い出す。彼の影響で、 人々の間に独断的で不注意な遅れが生じる。人々の世俗心とまひ状態がますますひどくなる。世俗的な欲望、堕落した思いが心を占領する。悪いしもべは、酔っぱらいといっしょに飲み 食いし、世の人々といっしょになって快楽を求める。彼は仲間のしもべたちを打ちたたいて、主人に忠実な 者たちを責め、非難する。彼は世俗の人たちにまじる。彼は世俗の人々と同じように罪を犯す。それは恐るべき同化作用である。世俗の人たちといっしょに彼はわなに捕 らえられる。「その僕の主人は思いがけない日、気がつかない時に帰ってきて、彼を厳罰に 処し、偽善者たちと同じ目にあわせるであろう」（マタイ 24：50、51）。

「もし目をさましていないなら、わたしは盗人のように来るであろう。どんな時にあなたのところに来るか、あなたには決してわからない」（黙示録 3：3）。キリストの来臨はにせ教師たちの不意を襲う。彼らは、「平和だ無事だ」と言っている（Ｉテサロニケ 5：3）。エルサレムが陥落する前の祭司たちと教師たちのように、彼らは教会が世俗的な繁栄とほまれを受けることを期待する。彼らは時のしるしをこの事の予表として解釈する。しかし霊感のことばには何と言われているだろうか。 「突如として滅びが彼らをおそって来る」（Ｉテ

サロニケ 5：3）。全地に住んでいるすべての者たちに、この世をわが家としているすべての者たちに、神の日はわなのようにやってくる。それは忍び足の盗人のように彼らにやってくる。

世は放蕩に満ち、邪悪な快楽に満ちて、現世的な安全の中に眠っている。人々は主の来臨をずっとのちのことにしている。彼らは警告をあざ笑う。「すべてのものは天地創造の初めからそのままであって、変ってはいない」「あすも、きょうのようであるだろう、すばらしい日だ」という高慢な誇りが表明される（Ⅱペテロ 3：4、イザヤ 56：12）。もっと大いに楽しもうというのである。しかしキリストは、「見よ、わたしは盗人のように来る」と言われる（黙示録 16：15）。世の人々が嘲笑して、「主の来臨の約束はどうなったのか」とたずねているその時に、しるしは成就しつつある（Ⅱペテロ 3：4）。彼らが「平和だ無事だ」と叫んでいる時に、突然の滅びがのぞみつつある（Ⅰテサロニケ 5：3）。嘲笑する者、すなわち真理をこばむ者が僭越になった時、各方面の金もうけ仕事が原則を無視してくりかえされている時、研究者が聖書以外のあらゆる知識を熱心に求めている時、キリストは盗人のようにこられる。

世のすべてのものが激動している。時のしるしは険悪な兆候を示している。きたるべき事件が影を前方に投げている。神のみたまは地から引き上げつつあり、海と陸に次々と災害が起こっている。嵐、地震、火事、洪水、あらゆる種類の殺人が起こっている。だれが将来を読むことができよう。どこに安全があるだろう。人についても、この世についても保証は何もない。人々は自分の選んだ旗の下に急いで参加している。落ちつかないで彼らは自分たちの指導者たちの動きを待ち、見守っている。主の現れを待ち、見守り、そのために働いている人たちがいる。もう一方の種類の人たちは最初の大背信者の統率下に参加している。避けるべき地獄と獲得すべき天国とがあることを全心全霊から信じている人は少ない。

危機は徐々にわれわれに忍びよっている。太陽は空に輝き、いつもの軌道を通り、天はいまも神の栄光をあらわしている。人々はあいかわらず飲み食い、植え、建て、めとり、とついでいる。商人たちはあいかわらず売り買いしている。人々は最高の地位を争ってお互いにおしのけ合っている。快楽を愛する者たちがあいかわらず劇場や、競馬や、ばくち場にお

しかけている。最高の興奮が行き渡っていうが、恩恵の時は急速に閉じられつつあり、各人の運命が永遠に決定されようとしている。サタンは自分の時が短いことを知っている。サタンは人々が欺かれ、惑わされ、心を占領され、夢中になって、ついには恩恵の日が終わり、恵みの戸が永遠に閉ざされるように、すべての手下を働かせてきた。 オリブ山での主の警告のことばは、幾世紀を経て今日のわれわれに厳粛にひびいてくる。「あなたがたが放縦や、泥酔や、世の煩いのために心が鈍っているうちに、思いがけないとき、その日がわなのようにあなたがたを捕らえることがないように、よく注意していなさい。……これらの起ろうとしているすべての事からのがれて、人の子の前に立つことができるように、絶えず目をさまして祈っていなさい」（ルカ 21：34、36）。

第 70 章　「わたしの兄弟であるこれらの最も小さい者」

「人の子が栄光の中にすべての御使たちを従えて来るとき、彼はその栄光の座につくであろう。そして、すべての国民をその前に集めて……彼らをより分け」るであろう（マタイ25：31）。このようにキリストは、オリブ山で、大いなるさばきの日の光景を、弟子たちに描写された。しかもこの決定は、1 つの点にかかっていると、主は言われた。国民が主の前に集められる時、そこには 2 つの階級しかないのであって、彼らの永遠の運命は、貧しい者や悩める者を通して主のためにつくしたか、それともつくすことを怠ったかによってきまるのである。

その日には、キリストは、ご自分が人々のあがないのために生命をささげて彼らのためにつくされた大いなるみわざを彼らの前にお示しにならない。主は、人々が主のためになした忠実な働きをお示しになる。主はその右手を置かれる人々にこう言われる、「わたしの父に祝福された人たちよ、さあ、世の初めからあなたがたのために用意されている御国を受けつぎなさい。あなたがたは、わたしが空腹のときに食べさせ、かわいていたときに飲ませ、旅人であったときに宿を貸し、裸であったときに着せ、病気のときに見舞い、獄にいたときに尋ねてくれたからである」（マタイ　25：34～36）。しかしキリストからほめられる人たちは、自分がキリストに奉仕していたことを知らない。彼らのとまどった質問に、主はこう答えられる。「わたしの兄弟であるこれらの最も小さい者のひとりにしたのは、すなわち、わたしにしたのである」（マタイ　25：40）。イエスは、弟子たちに、あなたがたはすべての人々に憎まれ、迫害され、苦しめられると言われた。多くの者が家から追われ、貧乏になるだろう。多くの者が病気と欠乏に苦しめられるだろう。多くの者が獄に入れられるだろう。

キリストのために友人や家庭を捨てるすべての者に、主は、この世で百倍を約束された。いま主は兄弟たちに奉仕するすべての者に、特別な祝福を保証された。わたしの名のために苦しみを受けるすべての者のうちにあなたがたはわたしを認めるのであると、イエスは言われた。わたしに奉仕するように、あなたがたは彼らに奉仕すべきである。これがあなたがたがわたしの弟子である証拠である。

天の家族に生まれた者はみな、特別な意味において主の兄弟である。キリストの愛が主の家族を結びつけ、この愛があらわされるところにはどこにでも天の関係があらわされる。「すべて愛する者は、神から生れた者であって、神を知っている」（Ｉヨハネ 4：7）。 さばきの時に、キリストからほめられる者たちは、神学についてはほとんど知っていなかったかも知れないが、彼らはキリストの原則を心に宿していた。天来のみたまの感化を通して、彼らはまわりの人たちの祝福になっていた。異教徒の中にさえ、親切心のある人たちがいる。いのちのみことばを聞かないうちから、彼らは宣教師たちと親しくなり、自分自身の生命の危険をおかしてまで宣教師たちに奉仕した。異教徒の中には、知らないで真の神を礼拝している人たち、すなわち人を通して光を与えられたことのない人たちがいるが、それでも彼らは滅びないのである。彼らは書かれた神の律法については無知であるが、自然を通して語りかける神のみ声を聞き、律法に要求されていることを実行した。彼らのわざは聖霊が彼らの心に触れた証拠であって、彼らは神の子らとして認められる。

諸国民や異教徒の中のへりくだる者たちは、救い主の日から、「わたしの兄弟であるこれらの最も小さい者のひとりにしたのは、すなわち、わたしにしたのである」ということばを聞いて、どんなに驚き、よろこぶことだろう（マタイ 25：40）。限りない愛であられる主の心は、主に従う者たちがその嘉納のことばを聞いて驚きと喜びの思いで見上げるとき、ど んなにか喜ばれることだろう。 しかしキリストの愛は、ある種類の人たちに限られているのではない。主は人類の一人一人と一体になられる。われわれが天の家族の一員となるために、主は地の家族の一員となられた。主は人の子であり、したがってアダムのすべての息子娘に とって兄弟である。主に従う者たちは、滅びつつあるまわりの世の人々と無関係だと思って はならない。彼らは人類という大きな網の一部である。天の神は、彼らを聖徒の兄弟である と同時に、また罪人の兄弟として見ておられる。キリストの愛は、堕落した者、まちがって いる者、罪深い者を包む。堕落した魂をひきあげるためになされたすべての親切な行為、す べての愛の行為は、主に対してなされたものとして受けとられる。

天のみ使いたちは救いを継ぐ者たちに仕えるために送られる。救いを継ぐ者たちがだれであるかは今はわからない。だれが勝利し、光のうちにある聖徒の嗣業にだれがあずかるか

はまだ明らかでない。しかし天のみ使いたちは地の果てから果てまで行きめぐって、悲しんでいる者たちを慰め、危険に陥っている者たちを保護し、人々の心をキリストにみちびいている。1 人としておろそかにされたり、見過ごされたりしない。神は人をかたより見られるお方ではなく、ご自分がっくられたすべての魂を同じように守られる。 困り著しんでいるクリスチャンたちに戸を開く時、あなたは目に見えない天使たちを迎え入れているのである。あなたは天使たちとのまじわりを招いているのである。彼らは喜びと平和のきよい雰囲気をもってくる。彼らが口に賛美をもってやってくるとき、天ではそれに応ずる歌の調べが聞かれる。愛の行為の 1 つ 1 つに天では音楽がかなでられる。天父はそのみ座から、無我の働き人をご自分の最もとうとい宝にかぞえられる。

キリストの左側にいる者たち、すなわち貧しい者や苦しんでいる者を通してキリストをおろそかにした人たちは、自分の罪を意識しない。サタンが彼らを盲目にしたのである。彼らは兄弟たちに対してどうすべきであったかを認めなかった。彼らは自分のことばかり考えていて、他人の必要をかまわなかった。 神は金持ちの人たちが神の筈しんでいる子らを助け慰めるように、彼らに富をお与えになった。ところが彼らは、他人の欠乏に対して無関心であることが多い。彼らは貧しい兄弟たちよりも自分はえらいのだと思っている。彼らは貧しい人の立場になってみない。貧しい人たちの試みや戦いがわからないので、彼らの心から同情が消えてなくなる。高価な住居やすばらしい教会堂の中にいて、富める人たちは貧しい人たちをよせつけない。困っている人たちを恵むために神がお与えになった金銭が、わがままな高慢心と利己心のために費やされる。貧しい人たちは神のやさしい憐れみについて与えられるはずの教訓を毎日奪われている。神は、生活の必需品を与えて楽しく暮せるように十分な備えをされたのである。彼らは生活を窮屈にする貧乏を否応なしに感じさせられて、ねたみ、うらやみ、悪い憶測に満たされるように誘惑されることがしばしばある。自分で欠乏の重荷に耐えたことのない人たちは、しばしば貧しい人たちに侮蔑的な態度をとり、彼らに自分たちは貧民のようにみられているという気持ちを起こさせる。

しかしキリストはすべてそうしたことを見ておられ、飢えかわいていたのはわたしだったのだと言われる。見知らぬ人はわたしだったのだ。病んでいたのはわたしだったのだ。獄

にはいっていたのはわたしだったのだ。あなたがごちそうのいっぱい並んだテーブルについて食べていた時に、わたしはあばらやや人通りのない街路で飢えていた。あなたがぜいたくな家で安楽に暮していた時に、わたしは頭を横たえる場所もなかった。あなたのたんすの中にぜいたくな衣服がいっぱいつまっていた時に、わたしは着るものが何もなかった。あなたが快楽を追い求めていた時に、わたしは獄の中で弱りはてていたのだ。

あなたが飢えている貧しい人たちにほんの少しのパンをしぶしぶ分け与えた時に、また身を切るような寒さから彼らをおおうために薄っぺらな衣服を彼らに与えた時に、あなたはそれを栄光の主に与えていたのだということを知っていただろうか。あなたの人生の間、わたしはそうした苦しむ者の姿をとってあな たのそばにいたのだ。しかしあなたはわたしを求めなかった。あなたはわたしとの交わりに入ろうとしなかった。わたしはあなたを知らない。 キリストが地上で生活された場所をおとずれ、キリストが歩まれた場所を歩き、キリストが好んでお教えになった湖のほとりや、キリストがたびたび目をとめられた丘や谷を眺めることができたら大きな特権だろうと思う人が多い。しかし、イエスの足跡を歩むために、ナザレやカペナウムやベタニヤに行く必要はない。病床のかたわらや、貧しいあばらやや、大都会の雑踏する横町や、人の心が慰めを必要としている場所ならどこにでも、イエスの足跡がみいだされる。イエスが地上におられた時にされた通りのことをすることによって、われわれはイエスの足跡を歩むのである。

誰でもみな何かすることをみつけることができる。「貧しい人たちはいつもあなたがたと共にいる」とイエスは言われた（ヨハネ 12：8）。だからだれでも、自分は主のために働くことのできる場所がないと思うには及ばない。無知と罪の鎖につながれて滅びようとしている幾百千万の魂が、彼らに対するキリストの愛を聞いたことさえないのである。もしわれわれと彼らの立場が入れかわったとしたら、われわれは彼らにどうしてもらいたいと望むだろうか。われわれは自分の力の及ぶ限り、そうしたことをすべて彼らのためにする最も厳粛な義務がある。われわれは。一人人みなキリストの一生の原則によって、さばきの時に立っか倒れるかしなければならないのであるが、その原則とは、「何事でも人々からしてほしいと望むことは、人々にもそのとおりにせよ」である（マタイ 7：12）。

救い主は、悲しみに満ち、試みられている魂を世話することのできる教会を建てるために、ご自分のとうとい生命をお与えになった。信者の群れは、貧しく、無教育で、無名の人たちかも知れない。しかしキリストのうちにある時、彼らは、家庭において、近隣において、教会において、また遠い地方において働くことができ、その結果は永遠と同じように遠大なものとなる。 多くの若い弟子たちが、クリスチャン経験のほんの初歩から 1 歩も前進しないのは、この働きがおろそかにされているからである。イエスから「あなたの罪はゆるされた」と告げられたときに、彼ら自身の心のうちに燃えた火は、困っている人たちを助けることに　よって燃えつづけることができたのである。若い人たちにとって危険の原因となり易い不安　定な精力は、祝福の流れとなって流れ出る水路へとみちびくことができたのである。他人の　ためによいことをする働きによって自我が忘れられるのである。

他人に奉仕する人たちは、大牧者イエスから奉仕される。彼らは白ら生ける水を飲み、そして満足する。彼らは興奮させられる娯楽や、生活上の何らかの変化を熱望しない。興味をひく大きな話題は、滅びようとしている魂をどうやって救うかである。社交的なまじわりは有益であろう。あがない主の愛が人々の心を 1 つに結びつけるのである。 われわれは、神と共に働く者であることを認める時、神の約束について無関心な語りかたをしない。それは　われわれの心のうちに燃え、われわれのくちびるを熱する。無知で、しつけがなく、反逆し　てばかりいる民に奉仕するためにモーセが召された時、神は彼に、「わたし自身が一緒に行　くであろう。そしてあなたに安息を与えるであろう」と約束された（出エジプト 33：14）。神はまた「わたしは必ずあなたと共にいる」と言われた（出エジプト 3：12）。この約束は、苦しみ悩む人たちのためにキリストに代って働くすべての者に対する約束である。

人に対する愛は、神の愛がこの地上にあらわされたものである。栄光の王キリストがわれわれと 1 つになられたのは、この愛を植えつけ、われわれを 1 つの家族の子らにするためであった。「わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互に愛し合いなさい」とのキリストの別れのことばが成就される時、またキリストが世の人々を愛されたようにわれわれも彼らを愛する時、その時われわれにとってキリストの使命は達成されるのである（ヨハネ 15：12）。われわれは天国にふさわしい者となる。なぜならわれわれの心のうちには天国

があるからである。　「死地にひかれゆく者を助け出せ、滅びによろめきゆく者を救え。あなたが、われわれはこれを知らなかったといっても、心をはかる者はそれを悟らないであろう　か。あなたの魂を守る者はそれを知らないであろうか。彼はおのおのの行いにより、人に報　いないであろうか」（箴言　24：11、12）。大いなるさばきの日には、キリストのために働 かなかった人たち、自分のことばかりを考え、自分のことだけのために暮していた人たちは、全地の審判者なる神から悪をなした者たちと同列におかれるであろう。彼らは同じ罪の宣告　を受けるのである。

どの魂にも責任が負わされている。大牧者イエスは、一人一人に、「あなたに賜わった群れ、あなたの麗しい群れはどこにいるのか」と要求される（エレミヤ 13：20）。「主があなたを罰されろときあなたは何と言うであろうか」（エレミヤ 13：21・英訳）。

第 71 章　しもべの中のしもべ

エルサレムの住宅の 2 階座敷で、キリストは弟子たちと食卓についておられた、彼らは過越節を守るために集まったのであった。救い主は、12 人の弟子たちとだけで、この過越の食事を守りたいと望まれた。主はご自分の時がきていることを知っておられた。イエスご自身が真の過越の小羊であって、過越の食事の日にいけにえとしてささげられるのであった。主は怒りのさかずきを飲もうとしておられた。まもなく主は最後の苦難のバプテスマをお受けにならねばならなかった。しかし主にとってまだ静かな数時間が残っていたので、愛する弟子たちのためにその時間をすごされるのであった。 キリストの一生は無我の奉仕の一生であった。「仕えられるためではなく、仕えるため」というのが、主の 1 つ 1 つの行為の教えであった（マタイ 20：28）。しかし弟子たちは、この教えをまだ学んでいなかった。この最後の過越の晩さんの時に、イエスは、実際の例を通してその教えをくりかえされ、それが彼らの頭と心にいつまでも残る印象を与えたのであった。

イエスと弟子たちとの対談は、たいてい静かな喜びの時間となったので、彼らはみなこれを非常に大切にしていた。過越の晩さんは特別に興味のある場面であったが、イエスはこの時心に悩んでおられた。イエスの心は苦しみ、その顔はくもっていた。イエスが 2 階の広間で弟子たちと会われた時、彼らは、何かが主の心に重くのしかかっていることに気がつき、その原因はわからなかったけれども、イエスの悲しみに同情した。　彼らが食卓のまわりに集まると、主は、心を動かされるような悲しい口調で言われた。「『わたしは苦しみを受ける　前に、あなたがたとこの過越の食事をしようと、切に望んでいた。あなたがたに言って置く　が、神の国で過越が成就する時までは、わたしは　2　度と、この過越の食事をすることはな い』、そして杯を取り、感謝して言われた、『これを取って、互に分けて飲め。あなたがた　に言っておくが、今からのち神の国が来るまでは、わたしはぶどうの実から造ったものを、　いっさい飲まない』」（ルカ 22：15～18）。

キリストは、「この世を去って父のみもとに行くべき自分の時がきたことを知り、世にいる自分の者たちを愛して、彼らを最後まで愛し通された」（ヨハネ 13：1）。主は今十字

架の影の中におられ、その心に苦しみ悩んでおられた。主は、ご自分が裏切られる時に捨てられることを知っておられた。主は、犯罪者が受ける最も屈辱的な方法でご自分が死刑にされることをご存じであった、主は、ご自分が救うためにこられた人々の忘恩と残酷さを知っておられた。主はご自分がどんなに大きな犠牲を払わねばならないか、しかもまたそれがどれほど多くの人たちにとってむだであるかをご存じであった。主は、目の前にあるすべてのことを知っておられたのだから、ご自身の屈辱と苦難についての思いに当然圧倒されたかもしれなか った。しかし主は、これまで主ご自身のものとして共にいて、主のはずかしめと悲しみと虐待とが過ぎ去ってからは、世に残されて戦わねばならない 12 人の弟子たちをごらんになった。主はご自身の苦難を思われる時、その思いはいつも弟子たちと関連していた。主はご自分のことをお考えにならなかった。主の心の中では弟子たちについての心配が一番大きいのであった。

弟子たちと一緒のこの最後の夜、イエスには彼らに話したいことがたくさんあった、主が与えたいと願っておられることを受ける備えができていたら、彼らは、胸の張り裂けそうな苦悩や、失望と不信に陥らないですんだのである、しかしイエスは、ご自分が語らねばならないことに弟子たちが耐えることができないことをお知りになった。主が彼らの顔をじっとごらんになった時、警告と慰めのことばは日の中でとまってしまった。沈黙のうちにしばらくの時が過ぎた。イエスは待っておられるようにみえた。弟子たちの心は平静ではなかった。キリストの悲しみによってめざめさせられた同情心とやさしさは消えてしまっているよりにみえた。ご自身の苦難をさし示している主の悲しみに満ちたことばは、ほとんど印象に残っていなかった。彼らがお互いにかわす目つきは嫉妬と争いを物語っていた。

「自分たちの中でだれがいちばん偉いだろうかと言って、争論が彼らの間に、起った」（ルカ 22：24）。キリストの面前で行われたこの争いは主を悲しませ、傷つけた。弟子たちは、キリストがご自分の権力を主張されてダビデの位を占められるのだという好き勝手な考えに執着していた。そしてそれぞれに心の中で依然として王国の最高の地位にあこがれていた。彼らは、自分自身に、またお互いの上に勝手な評価をくだし、兄弟たちを自分よりもりつばな人としてみないで、自分自身をまず最高とした。ヤコブとヨハネがキリストの王座の

右と左にすわりたいと願ったことが、ほかの弟子たちの憤激をひき起こしていた。2 人の兄弟があつかましくも最高の地位を求めたことから、10 人の弟子たちが怒って、離反の恐れがあった。自分たちはまちがって判断されている、自分たちの忠誠心や才能は認められていないのだと彼らは思った。ヤコブとヨハネに対して最も手きびしかったのはユダだった。

弟子たちが晩さんのへやに入って行った時、彼らの心は憤然とした気持ちで一杯だった。ユダはキリストのすぐ左側に割りこんだ。ヨハネは右側にいた。もし最高の位置というものがあるなら、ユダはそれを占めようと決心していたが、その位置はキリストの隣であるように思われた。しかもユダは裏切り者であった。　不和の原因がほかにも起こっていた。食事の時には、しもべが客の足を洗うのが習慣だったので、この場合も足を洗う準備ができていた。足を洗うために水差しもたらいも手ぬぐいも用意されていた。ところがしもべがいなかった　ので、弟∫たちがその役を果たす立場にあった。しかし弟子たちはそれぞれ誇りを傷つけられ たという思いに負けて、誰もしもべの役割を果たすまいと決心していた。みんなは平然とし　た無関心さをよそおい、自分たちがすることがあることに気がつかないふりをしていた。沈　黙することによって、彼らは自分を低くすることをこばんだ。

キリストは、このようにあわれな魂を、サタンが彼らに決定的に勝利することのできないところへどうやってみちびかれるだろう。ただ口先だけで弟子であると言うことが弟子となることではなく、また天国に入ることを保証するものでもないことを、キリストはどうやってお示しになることができるだろう。真の偉大さは愛の奉仕、真の謙遜にあるということを、キリストはどうやってお示しになることができるだろう。

キリストはどのようにして彼らの心に愛を燃やし、また主が彼らに話したいと熱望しておられることをどのようにして彼らにわからせることがおできになるだろう。 弟子たちはお互いに仕えるために動こうとしなかった。イエスは彼らがどうするかを見るためにしばらく待っておられた。それから、天来の教師であられるイエスが、食卓から立ちあがられた。主は動作のじ ゃまになる上着をぬぎ、タオルをとって腰にまかれた。弟子たちは、驚きと興味の念をもって、何事が起こるのかだまって見ていた。主は「それから水をたらいに入れて、弟子たちの足を洗い、腰に巻いた手ぬぐいでふき始められた」（ヨハネ 13：5）。この行為

が弟子たちの目を開いた。彼らの心は激しい恥ずかしさと不面目な思いに満たされた。彼らは無言の譴責を理解し、自分たちの姿をまったく新しい光のうちに見た。

このようにキリストは、弟子たちに対する愛をあらわされた。彼らの利己的な精神をごらんになって、主の心は悲しみに満たされたが、主は彼らの問題について議論されなかった。その代わりに、主は、彼らが決して忘れることのできない模範をお与えになった。弟子たちに対する主の愛は、簡単にさまたげられたり、消えたりしなかった。主は、「父がすべてのものを自分の手にお与えになったこと、また、自分は神から出てきて、神にかえろうとしていることを」わかっておられた（ヨハネ　13：3）。主はご自分の神性を十分に意識しておられた。しかし主は、王冠と王衣をぬいで、しもべの姿をとられたのであった。地上における　主の最後の行為の 1 つは、しもべのしたくをしてしもべの役割を果たされることであった。

過越の前に、ユダは祭司たち、律法学者たちともう 1 度出会って、イエスを彼らの手に引き渡す契約を取りきめていた。それなのに彼は、そのあとで、何の悪いこともしなかった　かのように弟子たちの中にまじって過越の食事を用意する働きに関心を示していた。弟子た　ちはユダの意図について何も知らなかった。彼の秘密を見ぬくことがおできになったのはイ　エスだけだった。しかし主はユダを暴露されなかった。　イエスは彼の魂を求めておられた。主は、滅ぶべき都エルサレムについて泣かれた時にこの都に対して感じられたような重荷を、ユダに対して感じておられた。主は、どうしておまえをあきらめることができようと、心の　中で泣いておられた。この迫る愛の力をユダは感じた。救い主がご自分の手で彼のよごれた　足を洗い、手ぬぐいでふかれた時、ユダの心はいまこの場で自分の罪を告白してしまおうと　いう衝動に何度もかられた。しかし彼はへりくだろうとしなかった。彼は悔い改めに対して　心をかたくなにし、一瞬間おしのけられていたもとの衝動がふたたび彼を支配した。ユダは、今度は、弟子たちの足を洗っておられるキリストの行為につまずいた。イエスがこんなに自　らを低くされるのだったら、とてもイスラエルの王になられることはできないと彼は思った。現世の主国における世俗的栄誉に対するいっさいの希望が失われた。キリストに従うことか　らはやはり何の利益も得られないのだとユダは納得した。ユダは、主がご自分を低くされた　と思ったので、それを見てから、主を否認し、自分はだまされていたのだと告白しようとい

う考えをいっそう固めた。彼は悪魔に占領されていたので、主を裏切ることによって、自分が同意した働きをやりとげようと決心した。

ユダは、食卓にすわる場所をえらぶ時に、一番先にすわろうとしたが、キリストはしもべとして一番先に彼に奉仕された。ユダはヨハネに対して非常ににがにがしい感情をいだいていたが、そのヨハネは一番あとまわしになった。しかしヨハネは、そうされたからといって譴責されたとも、あるいは軽んじられたとも思わなかった。キリストの行為を見た時、弟子たちは非常に心を動かされた。ペテロの番になると、彼は驚いて、「主よ、あなたがわたしの足をお洗いになるのですか」と叫んだ（ヨハネ 13：6）。キリストのへりくだりが、彼の心をうち砕いた。彼はこの奉仕をする者が弟子たちの中に 1 人もいなかったことを思って恥ずかしい思いに満たされた。キリストは、「わたしのしていることは今あなたにはわからないが、あとでわかるようになるだろう」と言われた（ヨハネ 13：7）。ペテロは、神のみ子と信じている主が、しもべの役割を果たしておられるの観るにしのびなかった。彼は全心全霊でこの屈辱感と戦った、キリストがこのためにこられたのであることに彼は気がつかなかった。彼は非常な力をこめて、「わたしの足を決して洗わないで下さい」と叫んだ（ヨハネ 13：8）。

キリストはペテロに向かっておごそかに言われた。「もしわたしがあなたの足を洗わないなら、あなたはわたしとなんの係わりもなくなる」（ヨハネ 13：8）。ペテロがこぼんだ奉仕は、もっと高いきよめの型であった。キリストは心から罪のけがれを洗い落とすためにこられたのであった。キリストに足を洗ってもらうのをこばむことによって、ペテロは低いきよめの中に含まれている高いきよめをこぼんでいるのであった。彼は事実上主をこばんでいるのであった。

われわれのきよめのためにキリストに働いていただくことは、主にとっていやしいことではない。最も真実な謙遜は、われわれのために備えられているどんなことでも感謝の心をもって受け入れ、キリストのために熱心に奉仕をすることである。「もしわたしがあなたの足を洗わないなら、あなたはわたしとなんの係わりもなくなる」とのイエスのことばを聞いて、ペテロは、自分の高慢とわがままに打ち勝った（ヨハネ 13：8）。彼はキリストとなん

の係わりもなくなるという思いに耐えられなかった。それは彼にとって死であった。「シモン・ペテロはイエスに言った、『主よ、では、足だけではなく、どうぞ、手も頭も』。イエスは彼に言われた、『すでにからだを洗った者は、足のほかは洗う必要がない。全身がきれいなのだから』」（ヨハ不 13：9、10）。

このことばには身体のきよめよりももっと深い意味がある。キリストはまだ低いきよめに例示されている高いきよめについて語っておられる。入浴した者は清潔であるが、サンダルをはいた足はすぐによごれるので。また洗わねばならない。そのように、ペテロと兄弟たちは、罪と汚れとをきよめる大いなる泉で洗われていた。キリストは彼らをご自分のものとしてみとめられた。しかし、試みのために彼らは悪に陥っていたので。依然として主のきよめの恩恵が必要だった。イエスが彼らの足のほこりを洗うためにタオルを腰にまかれた時、主はその行為によって、彼らの心から不和、嫉妬、高慢を洗い流したいと望まれた。このことは、彼らのほこりまみれの足を洗うことよりもずっと重大なのであった。その時の彼らの精神では、キリストとまじわる用意のできている者は 1 人もいなかった。謙遜と愛の状態に達するまでは、過越の食事にあずかる用意、すなわちキリストが制定しようとしておられる記念式にあずかる用意ができていないのであった。彼らの心はきよめられねばならない。

高慢心と利己心は不和と憎しみをつくり出すが、イエスは、彼らの足を洗うことによって、そのすべてを洗い流された。気持ちの変化が生じた。イエスは、彼らをごらんになって、「あなたがたはきれいなのだ」と言うことがおできになった（ヨハネ 13：10）、いまや心の一致があり、お互いに対する愛があった。彼らはへりくだり、教えを受け入れる気持ちになっていた。ユダのほかは、一人一人が最高の地位を互いにゆずり合う気持ちになった。いま彼らはおだやかな、感謝の思いをもってキリストのみことばを受け入れることができた。

ペテロとその兄弟たちのように、われわれもまたキリストの血によって洗われたのであるが、悪との接触によってしばしば心の純潔がけがされる。キリストのきよめの恩恵を求めて、みもとに行かねばならない。ペテロは自分のよごれた足が主のみ手にふれることをちゅうちょした。しかし、われわれの罪深い、けがれた心がキリストの心にふれることがどんなに多いことだろう。われわれの悪い性質、虚栄心、高慢な心は、キリストにとってどんなに

悲しむべきものだろう。それでもなおわれわれは、自分のすべての弱さとけがれとを主のみもとに持って行かねばならない。キリストだけがわれわれを洗いきよめてくださることができるのである。われわれは、主のきよめの力によってきよめていただかねば、主とまじわる用意ができていないのである。

イエスは、弟子たちに「あなたがたはきれいなのだ。しかし、みんながそうなのではない」と言われた（ヨハネ 13：10）。主はユダの足を洗われたが、彼の心は主に屈服していなかった。その心はきよめられなかった。ユダは自分自身をキリストに屈服させていなかった。 キリストは弟子たちの足を洗ってから、上着を取り、ふたたび腰をおろして、彼らにこう言われた。「わたしがあなたがたにしたことがわかるか。あなたがたはわたしを教師、また主と呼んでいる。そう言うのは正しい。わたしはそのとおりである。しかし、主であり、また教師であるわたしが、あなたがたの足を洗ったからには、あなたがたもまた、互に足を洗い合うべきである。わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするように、わたしは手本を示したのだ。よくよくあなたがたに言っておく。僕はその主人にまさるものではなく、つかわされた者はつかわした者にまさるものではない」（ヨハネ 13：12～16）。

キリストは、ご自分が弟子たちの足を洗われたけれども、それは主の威厳をすこしもそこなうものではないということを彼らにわからせたいとお思いになった。「あなたがたはわたしを教師、また主と呼んでいる。そう言うのは正しい。わたしはそのとおりである」（ヨハネ 13：13）。主は、無限にすぐれたお方であられたが、この奉仕に恩恵と意義を与えられた。キリストほど高い地位にある者は誰もないのに、主は、身をかがめて最もいやしいつとめをされた。人の生まれつきの心に住みつき、自分自身に仕えることによってますます強くなる利己心のために、主の民が道をまちがえないようにキリストご自身が謙遜の模範を示されたのである。主はこの大きな問題を人の責任にまかせておかれなかった。神と等しいお方であるキリストご自身が、弟子たちに対してしもべとしてふるまわれたほど、主はこの問題を重視された。彼らが最高の地位を争っている間に、すべての人がひざまずく主、栄光の天使も仕えることを名誉としている主が、ご自分を主と呼んでいるこれらの人たちの足を、ひざまずいて洗われた。主はご自分を裏切る者の足を洗われた。

その生活と教訓を通して、キリストは、神にみなもとがある無我の奉仕について完全な実例をお与えになった。神はご自分のために生活されない。世界を創造することによって、また万物をささえることによって、神はたえずほかのもののために奉仕しておられる。「天の父は、悪い者の上にも良い者の上にも、太陽をのぼらせ、正しい者にも正しくない者にも、雨を降らして下さる」（マタイ 5：45）。この奉仕の理想を、神はみ子に託されたのである。イエスが人類のかしらに立つために与えられたのは、奉仕することがどういうことであるかをご自分の模範によって教えるためであった。イエスの一生は奉仕の法則の下にあった。主はすべての人に仕え、すべての人に奉仕された。こうして主は、神の律法を生活し、ご自分の模範によって、われわれが神の律法にどのように従うべきかを示された。

イエスは、この原則を弟子たちのうちに確立しようと幾度も試みられた。ヤコブとヨハネが高い地位を願ったとき、主は、「あなたがたの間で偉くなりたいと思う者は、仕える人と……ならねばならない」と言われた（マタイ　20：26、27）。わたしの主国では優先と優越は許されない。唯一の偉大さは謙遜の偉大さである。唯一の卓越は他人への奉仕に献身することにある。　今、弟子たちの足を洗ってしまわれると、主は、「わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするように、わたしは手本を示したのだ」と言われた（ヨハネ 13：15）。このことばによって、キリストはもてなしの慣習を命じられただけではなかった。旅　のほこりを除くために客の足を洗うことよりももっと深い意味があった。キリストはここに 1 つの宗教的行事を制定しておられたのである。主の行為によって、この謙遜式は、聖別され　た儀式となった。それは、謙遜と奉仕についてのキリストの教訓をいつも心におぼえている　ように、弟子たちによって守られるのであった。

この儀式は、聖さん式のためにキリストがお定めになった準備である。高慢、不和、権力争いが宿っているあいだは、心はキリストとのまじわりにはいることができない。われわれは、キリストの体と血との聖さんを受ける用意ができていない。そこでイエスは、ご自分の謙遜を記念するものを最初に守るようにお定めになったのである。 神の子らがこ儀式にあずかる時、彼らは生命と栄光の主のみことばを思い出さねばならない。「わた しがあなたがたにしたことがわかるか。あなたがたはわたしを教師、また主と呼んでいる。そう言うのは

正しい。わたしはそのとおりである。しかし、主であり、また教師であるわたしが、あなたがたの足を洗ったからには、あなたがたもまた、互に足を洗い合うべきである。わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするように、わたしは手本を示したのだ。よくよくあなたがたに言っておく。僕はその主人にまさるものではなく、つかわされた者はっかわした者にまさるものではない。もしこれらのことがわかっていて、それを行うなら、あなたがたはさいわいである」（ヨハネ 13：12～17）。

人のうちには、自分を兄弟よりも高く評価し、自我のために働き、最高の地位を求める傾向がある。そしてこのことから、しばしば悪い憶測と冷酷な精神が生じる。聖さん式に先立つ洗足式は、こうした誤解を一掃し、人を利己心から引き離し、高慢というたけうまからおろして、兄弟に仕えるへりくだった心を与えるのである。　天の聖なる監視者であられる聖霊は、この式の間、臨在されて、これを魂をさぐる時、罪を自覚する時、罪がゆるされたと　いうありがたい確証の時としてくださる。恵みに満ちておられるキリストはそこにおられて、利己的な水路を流れていた心の思いの流れを変えてくださる。聖霊は、主の模範に従う者た　ちの感受性を鋭くしてくださる。われわれのための救い主の屈辱を思い出す時、思いは思い　とつながり、記憶の鎖、すなわち神の大いなる恵みと地上の友の好意とやさしさの記憶が呼　び起こされる。祝福を忘れ、恵みを悪用し、親切を軽んじたことが心に思い出される。愛と　いうとうとい植物を追い出していた冷酷という根があらわれる。品性の欠点、義務の怠慢、　神への忘恩、兄弟たちに対する冷淡さが思い出される。罪は、神がそれをごらんになる光を　とおして見られる。われわれの思いは自己満足の思いではなくて、きびしく自己を責める思　いと謙遜な思いである。不和を生じさせたあらゆる障害を打破する力が心に与えられる。悪　意と悪口は捨て去られる。罪は告白され、ゆるされる。心をやわらげるキリストの恩恵が魂　に入り、キリストの愛が人びとの心を引きよせて、祝福された一致を生じさせる。

準備の式についての教訓をこのように学ぶ時、もっと高い霊的な生活を望む思いが燃やされる。この望みに天の証人イエスが答えてくださるのである。魂が高められる。われわれは、罪がゆるされたことを意識して聖さんにあずかることができる。キリストの義という日光が心の部屋と魂の宮を満たす。われわれは、「世の罪を取り除く神の小羊」を見るのであ

る（ヨハネ 1：29）。 この儀式の精神を受け入れる者には、それは決してただの儀式とはならない。それは「愛をもって互に仕えなさい」という教訓をいつも教えている（ガラテヤ 5：13）。弟子たちの足を洗うことによって、キリストは、彼らをご自分と共に天の宝という永遠の富を継ぐ者とならせるためなら、どんなにいやしい奉仕でもなさるという証拠をお示しになった。キリストの弟子たちは、同じ儀式を行うことによって、兄弟たちに仕えることを同じように誓うのである。この儀式が正しく守られる時にはいつでも、神の子らは、互いに助け祝福するために聖なる関係に入る。

彼らは一生を無我の奉仕にささげることを誓うのである。しかもそれは、お互いのためだけではない。彼らの働きの分野は主の働きの分野と同じように広いのである。世はわれわれの奉仕を必要としている人々で満ちている。貧しい人たち、無力な人たち、無知な人たちが四方にいる。2 階の広間でキリストと交わった人たちは、キリストと同じように奉仕するために出て行くのである。 すべての者から仕えられるお方であったイエスが、すべての者のし もべとなられるためにこられた。そして主はすべての者にお仕えになったので、またすべて の者から仕えられ、あがめられるのである。だから、主の聖なるご性質にあずかり、魂があ がなわれるのを見る喜びに、主とともにあずかりたい者は、無我の奉仕という主の模範に従 わねばならない。 このことはすべて、「わたしがあなたがたにしたと おりに、あなたがたもするように、わたしは手本を示したのだ」というイエスのことばに含まれていた（ヨハネ 13：15）。これこそ主がこの儀式を定められた目的であった。主はまたこう言っておられる。「もしこれらのことがわかっていて」、すなわち主の教訓の目的がわかっていて、「それを行うなら、あなたがたはさいわいである」と（ヨハネ 13：17）。

第 72 章　「わたしを記念するため」

「主イエスは、渡される夜、パンをとり、感謝してこれをさき、そして言われた、『これはあなたがたのための、わたしのからだである。わたしを記念するためこのように行いなさい』。食事ののち、杯をも同じようにして言われた、『この杯は、わたしの血による新しい契約である。飲むたびに、わたしの記念として、このように行いなさい』。だから、あなたがたは、このパンを食し、この杯を飲むごとに、それによって、主がこられる時に至るまで、主の死を告げ知らせるのである」（Ⅰコリント 11：23～26）。 キリストは、2 つの制度とその二大儀式の転換期に立っておられた。神の傷なき小羊であられるキリストは、罪祭としてご自分をささげようとしておられた。こうしてキリストは、4000 年の間キリストの死をさし示してきた型と儀式の制度に終止符をうたれるであった。弟子たちと過越の食事をされた時、主は、過越節の代りに、主の大いなる犠牲の記念となる式をお定めになった。ユダヤ人の国民的祭典は永久に過ぎ去るのであった。そしてキリストがお定めになった式が、どの国どの時代においても弟子たちによって守られるのであった。

過越節は、イスラエルがエジプトの奴隷状態から救済された記念として定められた。毎年、子供たちがこの儀式の意味をたずねる時に、その歴史をくりかえして聞かせるようにと、神は指示された。こうしてあのふしぎな救済がすべての人たちの心に生きつづけるのであった。聖餐式は、キリストの死の結果達成された大いなる救済を記念するために与えられたのであった。主が力と栄光のうちにふたたびおいでになるまで、この儀式は守られる。それは、われわれのためのキリストの大いなるみわざがわれわれの心のうちに生きっづけるための手段である。

エジプトからの救済の時、イスラエルの民は、腰をからげ、つえを手にとり、旅の用意をして、立ちながら過越の食事を食べた。このような式の守り方は、彼らの状態にふさわしかった。というのは、彼らはまさにエジプトの国から追い出され、苦痛と困難に満ちた荒野の旅を始めようとしていたからである。しかしキリストの時代には事態は変わっていた。彼らはいまよその国から追い出されようとしているのではなく、自分自身の国に住んでいる民

であった。与えられた休息にふさわしく、人々は、当時、食卓によりかかった姿勢で過越の食事をした。食卓のまわりに寝いすが置かれていて、客たちはその上に横になり、左手で体をささえ、右手を自由に使って食事をとった。この姿勢では、客は隣に腰かけている人の胸に頭をもたせかけることができた。そして足が寝いすの外側の端に出ていたので、一座の外側を通る人から足を洗ってもらうことができた。

キリストは、過越の食事が並べられた食卓にまだついておられる。過越の時に用いられる種入れぬパンがその前にある。発酵していない過越のぶどう酒が食卓の上にある。これらの象徴を用いて、キリストは、きずのないご自身の犠牲をお示しになる。罪と死の象徴である発酵によってけがされているものは「きずも、しみもない小羊」を象徴することはできない（Ｉペテロ 1：19）。 「一同が食事をしているとき、イエスはパンを取り、祝福してこれをさき、弟子たちに与えて言われた、『取って食べよ、これはわたしのからだである』。また杯を取り、感謝して彼らに与えて言われた、『みな、この杯から飲め。これは、罪のゆるしを得させるようにと、多くの人のために流すわたしの契約の血である。あなたがたに言っておく。わたしの父の国であなたがたと共に、新しく飲むその日までは、わたしは今後決して、ぶどうの実から造ったものを飲むことをしない』」（マタイ 26：26～29）。

裏切り者のユダがこの聖餐に出席していた。彼は、イエスの裂かれた体と流された血の象徴を、イエスから受け取った。彼は、「わたしを記念するため、このように行いなさい」と言われたことばを聞いた。神の小羊イエスの目の前にすわりながら、この裏切り者は、自分自身の暗い意図について思いをめぐらし、陰うつな復讐の思いを心にいだいていた。 足を洗う時に、キリストは、ユダの性格をわかっておられるということを確信させるような証拠を示された。「みんながきれいなのではない」と主は言われた（ヨハネ 13：11）。このことばは、キリストがユダの秘密の意図を読んでおられるということを、この偽りの弟子に確信させた。いまキリストはもっとはっきり口に出された。弟子たちが食卓にすわっていた時、主は、彼らを見渡して、「あなたがた全部の者について、こう言っているのではない。わたしは自分が選んだ人たちを知っている。しかし、『わたしのパンを食べている者が、わたし

にむかってそのかかとをあげた』とある聖書は成就されなければならない」と言われた（ヨハネ 13：18）。

それでもなお弟子たちは、ユダを疑わなかった。しかし彼らは、キリストが非常に苦しんでおられるようにみえることに気がついた。暗い影、どういうものかはわからないが、何か恐ろしいわざわいの予感が一同をおおった。彼らがだまって食べていると、イエスは、「特にあなたがたに言っておくが、あなたがたのつちのひとりが、わたしを裏切ろうとしている」と言われた（マタイ 26：21）。このことばに、彼らは肝をつぶすほど驚いた。自分たちの中のだれかがこの天来の教師イエスを裏切るなどということは考えられもしなかった。一体何のために、そして誰のために、主を裏切ろうというのか。一体誰の心がそんな計画を思いついたというのか。主の教えをほかの誰にもまさって聞く特権を与えられ、主のすばらしい愛を共に受け、ご自身との密接なまじわりに入れられるほど主から信頼され、愛された 12 人の中の 1 人ではまさかあるまい。

彼らは、主のことばの意味に気がつき、主の言われることがいつも真実であることを思い出した時、恐れと自信のない思いにとりっかれた。 そして、主を裏切るような気持ちが 1 つでも宿ってはいないかと、自分自身の心をさぐり始めた。最も苦痛な思いをもって、彼らは次々に「主よ、まさか、わたしではないでしょう」とたずねた（マタイ 26：22）。しかしユダはだまってすわっていた。心配でたまらないヨハネがついに、「主よ、だれのことですか」とたずねた（ヨハネ 13：25）。するとイエスは答えて言われた。「わたしと一緒に同じ鉢に手を入れている者が、わたしを裏切ろうとしている。たしかに人の子は、自分について書いてあるとおりに去って行く。しかし、人の子を裏切るその人は、わざわいである。その人は生れなかった方が、彼のためによかったであろう」（マタイ 26：23、24）。弟子たちはお互いの顔つきを綿密にさぐって、「主よ、まさか、わたしではないでしょう」とたずねた。そしていま、ユダの沈黙がすべての目を彼に引きっけた。混乱した質問と驚きの表現のさなかに、ユダはヨハネの質問に答えられたイエスのことばを聞いていなかった。しかしいま、弟子たちのせんさくを避けるために、ユダは、彼らと同じように、「先生、まさか、わ

たしではないでしょう」とたずねた。するとイエスはおごそかに、「いや、あなただ」と答えられた（マタイ 26：25）。

自分の意図をばくろされて驚きあわてたユダは、部屋から出て行こうと、急いで立ち上がった、「そこでイエスは彼に言われた、『しようとしていることを、今すぐするがよい』。……ユダは切れの食物を受けると、すぐに出て行った。時は夜であった」（ヨハネ 13：27、30）。キリストから離れて外の暗がりへ出て行った時、この裏切り者にとってそれは夜であった。

この 1 歩がふみ出されるまでは、ユダは悔い改めの可能性を越えてはいなかった。しかし彼が主と仲間の弟子たちの前から立ち去った時、最後の決定がなされ、彼は境界線を越え　た。試みられているこの魂に対するイエスの忍耐深い態度は驚くばかりであった。ユダを救 うためにできることはどんなこともなされた。ユダが主を売り渡すことを 2 度も契約したあとでも、イエスはなお悔い改めの機会を彼にお与えになった。裏切り者の心の中の秘密の意　図を読むことによって、キリストはご自分の神性について確信を与える最後の証拠をユダに　お示しになった。これは偽りの弟子にとって、悔い改めへの最後の呼びかけであった。キリ　ストの神としてまた人としての心からあらんかぎりの訴えがなされた。恵みの波は、かたく　なな高慢心に打ち返されると、心をやわらげる愛というもっと強い潮流となってよせ返した。しかしユダは、自分の不義が発覚したことに驚きあわてたが、ますます決心を固めたにすぎ　なかった。裏切りの行為をやりぬくために、彼は聖餐式から出て行ったのである。

ユダにわざわいを宣告することを通して、キリストはまた、弟子たちに対して恵みの目的をもっておられた。主はこうしてご自身がメシヤであることについて最高の証拠を彼らにお与えになった。「そのことがまだ起らない今のうちに、あなたがたに言っておく。いよいよ事が起ったとき、わたしがそれであることを、あなたがたが信じるためである」と、主は言われた（ヨハネ 13：19）。もしイエスがご自分の身に起ころうとしていることを知らないふりをしてだまっておられたら、弟子たちは、主が天来の見通しを持っておられなかったので、残忍な暴徒たちの手に売り渡されて驚かれたと思うかも知れなかった。1 年前に、イエスは弟子たちにわたしは 12 人を選んだが、1 人は悪魔であると語られた。今ユダに対すること

ばは、主がユダの裏切りを十分承知しておられることをあらわしていたので、それは主の屈辱の時に、キリストに真に従っている者たちの信仰を強めるのであった。そして、ユダが恐ろしい最後をとげた時に、彼らはイエスがこの裏切り者の上に宣告されたわざわいを思い出すのであった。

救い主はまた別な目的を持っておられた。主は、裏切り者とわかっている相手に仕えることをおやめにならなかった。主が足を洗うときに、「みんながきれいなのではない」と言われたことばや、食卓についていた時に、「わたしのパンを食べている者が、わたしにむかってそのかかとをあげた」と宣言されたことばを、弟子たちはわからなかった（ヨハネ 13:11、18）。しかしのちになってその意味がはっきりした時、彼らは、最も悲しむべきあやまちを犯している者に対する神の忍耐と慈悲について深く考えさせられた。　イエスは、ユダをはじめから知っておられたが、彼の足を洗われた。しかもこの裏切り者は、キリストといっ　しょに聖餐にあずかる特権が与えられた。寛容な救い主は、この罪人が、キリストを受け入　れ、悔い改めて罪のけがれからきよめられるように、あらゆるさそいの手をのばされた。こ　の模範はわれわれのためである。ある人が過失と罪を犯していると思われる時、われわれは　その人と絶縁してはならない。心ない離別によって、彼を試みの犠牲にしたり、サタンの陣　地に追いやったりしてはならない。これはキリストの方法ではない。弟子たちがまちがいを　犯しており、欠点があったからこそ、主は彼らの足を洗われたのである。そのことによって、12 人のうち 1 人を除いて全部が悔い改めにみちびかれたのであった。

キリストの模範は聖餐式における排他心を禁じている。公然たる罪がある場合には、その罪人を加えてはならないことは事実である。このことは聖劉こよってはっきり教えられている（Ⅰコリント 5：11 参照）。しかしそれ以外には、だれも宣告をくだすべきではない。神は、このような式にだれを出席させるかを人が口にすることをおゆるしにならなかった。なぜなら。だれが心を読むことができるだろう。毒麦と麦の区別が誰にできるだろう。「だれでもまず自分を吟味し。それからパンを食べ杯を飲むべきである」。なぜなら「ふさわしくないままでパンを食し主の杯を飲む者は、主のからだと血とを犯すのである。……主の

か らだをわきまえないで飲み食いする者は、その飲み食いによって自分にさばきを招くからである」（Ⅰコリント 11：28、27、29）。

信者たちがこの儀式を守るために集まる時、そこには人の目に見えない使者たちが出席しているのである。会衆の中にはユダがいるかも知れない。もしそうなら、暗黒の君からつかわされた使者たちもそこにいる。なぜなら、彼らは聖霊によって支配されることをこばむすべての者につきそっているからである。天のみ使いたちもそこにいる。こうした目に見えない訪問者たちが、このような式にはかならず出席しているのである。心の中では真理と聖潔のしもべではないが、それでも式に加わりたいと望む人たちが、この会衆の中にはいってくるかも知れない。このような人ぴとをこばんではならない。イエスが弟子たちとユダの足を洗われた時に出席していた証人たちが出席している。人間の目以上のものがこの光景をながめたのであった。

キリストは、ご自身の式に印をおすために、聖霊によってそこにおられる。主は、罪を自覚させ、心をやわらげるためにそこにおられる。罪を悔いる表情と思いを、1 つとして主は見のがされない。主は、悔い改めて心のくだける者を待っておられる。その魂を受け入れるために、すべてのことが用意されている。ユダの足を洗われたお方が、一人一人の心から罪のけがれを洗いたいと待ちこがれておられる。

ふさわしくない人が出席しているからといって、聖餐式にあずからないようなことがあってはならない。弟子たちは 1 人残らず公然と参加し、そうすることによって、キリストを自分自身の救い主として受け入れているというあかしをたてるように求められている。キリストがご自分の民に会い、その臨在によって彼らを力づけられるのは、主が自らお定めになったこのような式においてである。ふさわしくない心や手によってこの式がとり行われることさえあるかも知れないが、それでもキリストがそこにおられて、ご自分の民に奉仕されるのである。主に固い信仰をおいてこれにあずかる者はみな大いに祝福される。このような天来の特権の時をおろそかにする者はみな損失をこうむる。このような人たちについては、「みんながきれいなのではない」と言うことがふさわしいのである（ヨハネ 13：11）。

弟子たちといっしょにパンとぶどう酒にあずかることによって、キリストは、ご自分が彼らのあがない主となられることを彼らに契約された。主は彼らと新しい契約をされたが、その契約によって主を受け入れる者はみな神の子となり、キリストと共同の相続人となるのである。この契約によって、天がこの世と来世でお与えになることのできるあらゆる祝福が彼らのものであった。この契約書はキリストの血によって批准されるのであった。そしてこの聖餐式をとり行うことは、堕落した人類という大きな全体の一部分として弟子たち一人一人のために個人的に払われた無限の犠牲をたえず彼らの目の前に示すことになった。

しかし聖餐式は悲しみの時となるのではなかった。これはその目的ではなかった。主の弟子たちは、主の食卓に集まる時、自分の欠点を思い出して、嘆き悲しむのではない。彼らは、過去の信仰経験が向上していようと低下していようと、それに思いを集中するのではない。兄弟たちとの間の不和を思い出すのではない。すべてこうしたことは洗足式に含まれていたのである。自分を吟味することや、罪を告白することや、不和を解消することはすべてもうすんだのである。いまは彼らはキリストと会うために来ているのである。彼らは、十字架の影ではなくて、救いの光の中に立っている。彼らは、義なる太陽キリストの輝かしい光に向かって魂を開くのである。彼らはキリストのとうとい血潮によってきよめられた心をもち、目に見えなくてもキリストの臨在を十分に意識して、「わたしは平安をあなたがたに残して行く。わたしの平安をあなたがたに与える。わたしが与えるのは、世が与えるようなものとは異なる」と言われる主のみことばを聞くのである（ヨハネ 14：27）。

罪を自覚する時に、わたしがあなたのために死んだのだということを思い出しなさいと、主は言われる。わたしと福音のために圧迫され、迫害され、苦しめら　れる時に、わたしがあなたのために生命をささげたほどの大きな愛を思い出しなさい。あなたの義務がきびしく、　つらく思われ、あなたの重荷が負いきれないほど重く感じられる時に、わたしがあなたのた　めに、恥をいとわないで、十字架に耐えたことを思い出しなさい。あなたの心がきびしい試　練にたじろぐ時に、あなたのあがない主が生きてあなたのために執り成しておられることを　思い出しなさい。

聖餐式はキリストの再臨をさし示している。それはこの望みを弟子たちの心に生き生きと保つためであった。キリストの死を記念するために共に集まったときにはいつでも、彼らは、主が「杯を取り、感謝して彼らに与え……、『みな、この杯から飲め。これは、罪のゆるしを得させるようにと、多くの人のために流すわたしの契約の血である。あなたがたに言っておく。わたしの父の国であなたがたと共に、新しく飲むその日までは、わたしは今後決して、ぶどうの実から造ったものを飲むことをしない』」と言われたあの時のことを語り合うのであった（マタイ 26：27～29）。苦難のうちにある時、彼らは主の再臨という望みに慰めを見いだした。「だからあなたがたは、このパンを食し、この杯を飲むごとに、それによって、主がこられる時に至るまで、主の死を告げ知らせるのである」との思いは、彼らにとって口に言い表せないほどとうといのであった（Ⅰコリント 11：26）。

こうしたことは、決して忘れてはならない事柄である。迫る力をもったイエスの愛が、われわれの記憶の中にたえず新たにされなければならない。キリストは、この儀式が、われわれのためにあらわされた神の愛についてわれわれの感覚に語りかけるように、これをお定めになった。キリストによる以外には、われわれの魂と神とを結びつけるものはない。兄弟と兄弟との間の致と愛は、イエスの愛によって固められ、永遠なものとされなければならない。キリストの死より以下のものでは、主の愛をわれわれのために効力のあるものとすることができない。われわれが主の再臨を喜びをもって期待できるのは、キリストが死んでくださったからにほかならない。キリストの犠牲はわれわれの望みの中心である。この上に、われわれの信仰をすえなければならない。

主の屈辱と苦難をさし示しているこの儀式が、あまりにも形式的なものにみなされている。この儀式は 1 つの目的をもって定められたのである。われわれの感覚は、敬神の奥義を把握するために、呼びさまされねばならない。罪を償うために払われたキリストの苦難を今よりもっともっとよく理解することが、すべての者の特権である。「ちょうどモーセが荒野でへびを上げたように、人の子もまた上げられなければならない。それは彼を信じる者が、すべて永遠の命を得るためである」（ヨハネ 3：14、15）。死に臨まれた救い主がかかって

おられるカルバリーの十字架をわれわれは見あげなくてはならない。われわれの永遠の利益は、キリストに対する信仰をわれわれが示すように要求している。

「人の子の肉を食べず、また、その血を飲まなければ、あなたがたの内に命はない。……わたしの肉はまことの食物、わたしの血はまことの飲み物である」と主は言われた（ヨハネ 6：53、55）。 このことは肉体的な面において事実である。この世の生命さえキリストの死のおかげである。われわれの食べるパンは、キリストの裂かれた体をもって買われたものである。われわれの飲む水は、キリストの流された血によって買われたのである。聖徒であろうと罪人であろうと、日ごとの食物を食べる者はだれでも、キリストの体と血によって養われているのである。どのパンにもカルバリーの十字架の印がおされている。どの泉にもカルバリーの十字架が反映している。キリストはご自分の大いなる犠牲をさし示して、こうしたすべてのことをお教えになった。あの 2 階座敷の聖餐式から輝き出ている光は、われわれの日常生活の飲食物を神聖なものとしている。家族の食卓は主の食卓となり、毎度の食事は聖餐となる。

キリストのことばはまたわれわれの霊的な面において一層真実である。主は、「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者には、永遠の命があ」ると宣言しておられる（ヨハネ 6：54）。われわれが聖潔な生 活を送ることができるのは、カルバリーの十字架上でそそぎ出された生命を自分のために受けることによってである。そしてこの生命は、キリストのみことばを信受し、キリストが命じられたことをなすことによって、受けられるのである。こうしてわれわれは、キリストと 1 つになる。「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者はわたしにおり、わたしもまたその人におる。生ける父がわたしをつかわされ、また、わたしが父によって生きているように、わたしを食べる者もわたしによって生きるであろう」（ヨハネ 6：56、57）。この聖句は、特別な意味において、聖餐式にあてはまる。信仰によって主の大いなる犠牲を瞑想する時、魂はキリストの霊的生命に同化する。その魂は聖餐式のたびに霊的な力を受ける。この式は、信者をキリストにむすびつけ、さらに天父とむすびつける生きたつながりとなる。それは、特別な意味において、神とたよっている人間との間のつながりとなる。

キリストの裂かれた体と流された血潮を象徴するパンとぶどう酒をいただく時に、われわれは、想像を通して、あの 2 階座敷の聖餐の場面に加わるのである。われわれは、世の罪を負われたキリストの苦悩によって神聖なものとされたあの園を通って行くような気がする。神に対するわれわれの和解が達成されたあの戦いが目に見える。キリストはわれわれの中に　十字架につけられた姿で示される。　十字架につけられたあがない主をみっめる時に、われわれは、天の大君によって払われた犠牲の大きさと意味とをもっと十分に理解するようになる。救いの計画はわれわれの前に輝き、カルバリーの思いはわれわれの心に生き生きとした聖な　る感情をよびさます。神と小羊への賛美がわれわれの心とくちびるに宿る。なぜならカルバ　リーの光景をいつも生き生きと記憶している魂のうちには、高慢と自己崇拝の思いは栄える　ことができないからである。　救い主の比類のない愛に目をそそぐ人は思いが高められ、心が きよめられ、品性が一変する。彼は出て行って、世の光となり、このふしぎな愛の幾分かを　反映する。キリストの十字架を熟視すればするほど、「わたしたちの主イエス・キリストの　十字架以外に、誇とするものは、断じてあってはならない」と言った使徒パウロのことばが　一層深くわれわれのものとなるのである（ガラテヤ 6：14）。

第 73 章　「あなたがたは心を騒がせないがよい」

天来の愛とこの上なくやさしい同情の思いとをもって弟子たちをみわたしながら、キリストは、「今や人の子は栄光を受けた。神もまた彼によって栄光をお受けになった」と言われた（ヨハネ 13：31）。ユダは 2 階の広間から出て行って、キリストは 11 人の弟子たちとだけおられた。主は彼らとの別離が近づいていることについて語ろうとしておられた。しかしそうする前に、主はご自分の使命の大きな目的をさし示された。主がいつも目の前に見つづけておられたのはこの目的であった。ご自分の屈辱と苦難のすべてを通して天父のみ名の栄光をあらわすことが主の喜びであった。主は弟子たちの思いをまずこのことに向けられる。 それから主は、親しみをこめたことばで「子たちよ」と呼びかけ、「わたしはまだしばらく、あなたがたと一緒にいる。あなたがたはわたしを捜すだろうが、すでにユダヤ人たちに言ったとおり、今あなたがたにも言う、『あなたがたはわたしの行く所に来ることはできない』」と言われた（ヨハネ 13：33）。

弟子たちはこれを聞いてよろこぶことができなかった、恐れが彼らをおそった。彼らは救い主のまわりによりそった。彼らの主、愛する教師であり友人であられるお方、それは彼らにとっていのちよりも。大事なお方であった。このお方に、彼らは困難のたびに助けを、悲しみと失望の時に慰めを求めてきた。いまこのお方が孤独な、たよっている群れである彼らから去 ろうとしておられる。彼らの心は暗い予感に満たされた。

しかし彼らに対する救い主のことばは望みに満ちていた。主は、彼らが敵に攻撃されることも、困難のために落胆している者たちに対してサタンの策略が非常に効果的であることも知っておられた。そこで主は、「見えるもの」から離れて、「見えないもの」を彼らにさし示された（Ⅱコリント 4：18）。主はまた、地上のさすらいから、天の故郷へと彼らの思いを向けられた。 主は言われた、「あなたがたは、心を騒がせないがよい。神を信じ、またわたしを信じなさい。わたしの父の家には、すまいがたくさんある。もしなかったならば、わたしはそう言っておいたであろう。あなたがたのために、場所を用意しに行くのだから。そして、行って、場所の用意ができたならば、またきて、あなたがたをわたしのところに迎

えよう。わたしのおる所にあなたがたもおらせるためである。わたしがどこへ行くのか、その道はあなたがたにわかっている」（ヨハネ 14：1～4）。あなたがたのためにわたしは世に来た。わたしはあなたがたのために働いている。わたしが去っても、わたしはあなたがたの ために熱心に働くのである。わたしは、あなたがたが信じるようにわたし自身をあなたがた にあらわすために世に来た。わたしは、あなたがたのために天父と協力するためにみもとに 行くのである。キリストが去られる目的は、弟子たちが恐れていることとは反対であった。 それは最後の別離を意味しなかった。主はもう 1 度来て、彼らをみもとに受け入れるように、彼らのために場所を用意しようとしておられた。主が彼らのために住居を作っておられる間 に、彼らは天の型にかたどって品性を築くのであった。

それでも弟子たちは当惑していた。いつも疑いに悩まされるトマスは言った、「『主よ、どこへおいでになるのか、わたしたちにはわかりません、どうしてその道がわかるでしょ う』。イエスは彼に言われた、『わたしは道であり、真理であり、命である。だれでもわた しによらないでは、父のみもとに行くことはできない。もしあなたがたがわたしを知ってい たならば、わたしの父をも知ったであろう。しかし、今は父を知っており、またすでに父を 見たのである』」（ヨハネ 14：5～7）。 天への道はたくさんあるのではない、それぞれが自分自身の道を選ぶというわけにいかない。キリストは、「わたしは道であり……だれでも わたしによらないでは、父のみもとに行くことはできない」と言われる（ヨハネ 14：6）。女のすえがへびのかしらを砕くということがエデンで宣告された時に最初の福音が説かれて 以来、キリストは道、真理、生命としてかかげられてきた。

アダムが生存していた時に、またアベルがあがない主の血を象徴する殺された小羊の血を神にささげた時に、キリストは道であった。キリストは父祖たちと預言者たちが救われる道であった。キリストはわれわれが神に近づくことのできる唯一の道である。 「もしあなたがたがわたしを知っていたならば。わたしの父をも知ったであろう。しかし、今は父を知っており、またすでに父を見たのである」と、キリストは言われた（ヨハネ 14：7）。それでもなお弟子たちは理解しなかった。「主よ、わたしたちに父を示して下さい。そうして下されば、わたしたちは満足します」と、ピリポは叫んだ（ヨハネ 14：8）。

ピリポの理解の鈍さにびっくりされたキリストは、苦痛に満ちた驚きで、「ピリポよ、こんなに長くあなたがたと一緒にいるのに、わたしがわかっていないのか」とたずねられた（ヨハネ 14：9）。わたしによって父がなさるみわざのうちにあなたは一体父を見ないのか。わたしは父についてあかしをするためにきたことをあなたは信じないのか。「どうして、わたしたちに父を示してほしいと、言うのか」「わたしを見た者は、父を見たのである」（ヨハネ　14：9）。キリストは人となられた時神でなくなられたのではなかった。ご自分を低くされて人となられたが、神の位はやはりキリストご自身のものであった、キリストだけが人　類に天父をあらわすことがおできになったのであるが、弟子たちはこのあらわれを 3 年以上 にわたって目に 見る特権を与えられていた。

「わたしが父におり、父がわたしにおられることを信じなさい。もしそれが信じられないならば、わざそのものによって信じなさい」（ヨハネ 14：11）。彼らの信仰は、キリストのみわざに示されている証拠におかれる時安全である。それはだれも自分でしたこともなければ、することもできないみわざである。キリストの働きは彼の神性を証拠だてた。キリストを通して、天父があらわされた。 弟子たちが父とみ子との間のこの重大な関係を信じるならば、滅びつつある世を救うためのキリストの苦難と死を見る時、彼らの信仰は失われないのであった。 キリストは彼らをその低い信仰状態から、キリストがどんなお方であるかということ、すなわちキリストが人の肉体をとられた神であるということに彼らが真に気づいた時に受け入れるような経験へみちびこうとしておられた。

主は、彼らの信仰が当然神へみちびかれて行って、そこにいかりをおろすようになるのを見たいと望まれた。まもなく弟子たちの上におそいかかろうとしている試みの嵐に対して、あわれみ深い救い主はどんなに熱心に忍耐強く彼らに準備させようとされたことだろう。主は彼らをご自分と一緒に神のうちにかくれさせたいと望まれた。　キリストがこうしたことばを語っておられると、神の栄光がそのみ顔から輝いたので、そこにいる者たちはみな、みこ　とばを夢中になって聞きながら、聖なるおそれにうたれた。彼らの心は一層はっきりキリス　トの方へ引かれた。そして大きな愛のうちにキリストへ引きつけられるにしたがって、彼ら

は層お互いに引きっけられた。彼らは天が近いことを感じ、自分たちの聞いたことばは天の父から彼らに与えられたメッセージであると感じた。

キリストはことばを続けて、「よくよくあなたがたに言っておく。わたしを信じる者は、またわたしのしているわざをするであろう」と言われた（ヨハネ 14：12）。救い主は、何のためにご自分の神性が人性と結合しているかを弟子たちが理解するように熱望された。キリ　ストは、神の栄光を示し、その回復力によって人が高められるようにこの世にこられた。神　はキリストのうちにあらわされたが、それはキリストを通して神が人々のうちにあらわされ　るためであった。イエスは、人がイエスに対する信仰を通して持つことのできないような特　性をあらわしたり、能力を働かせたりされなかった。キリストの完全な人性は、キリストに　従うすべての者が、キリストと同じように神に服従する時に所有することのできるものであ　る。

「そればかりか、もっと大きいわざをするであろう。わたしが父のみもとに行くからである」（ヨハネ 14：12）。このことによって、キリストは、弟子たちのわざがキリストのみわざよりももっと崇高な性質のものになると言われたのではなく、もっと広い範囲のものになると言われたのである。主は奇跡を行うことだけを言われたのではなく、聖霊の働きのもとに起こるすべてのことを言われたのである。 主の昇天後、弟子たちは、主のみ約束の成就に気がついた。キリストの十字架と復活と昇天の場面は彼らにとって生きた現実であった。彼らは預言が文字通りに成就したことを知った。彼らは聖書を調べ、かつてないほどの信仰と確信をもってその教えを受け入れた。彼らは天来の教師イエスが、かつてご自分について言われた通りのお方であったことを知った。彼らが自分たちの経験について語り、神の愛をあがめた時、人々の心はとけ、やわらげられ、多くの人たちがイエスを信じた。

弟子たちに対する救い主の約束は、世の終わりにいたるまで教会に対する約束である。神は人類をあがなうすばらしい計画がとるに足りない結果しか生じないようには計画されなかった。自分自身ができることをあてにしないで、神が自分のためにまた自分を通してしてくださることをあてにして、働きに出て行く者は、キリストの約束の成就を確実にみとめるのである。「もっと大きいわざをするであろう。わたしが父のみもとに行くからである」と、

主は断言しておられる（ヨハネ 14：12）。 その時にはまだ弟子たちは救い主の無限の方法と能力について知っていなかった、主は彼らに、「今までは、あなたがたはわたしの名によって求めたことはなかった」と言われた（ヨハネ 16：24）。彼らの成功の秘訣は、主のみ名によって力と恵みとを求めることにあることを主は説明された。主は、彼らのために願いをするために父の前に出られるのであった。謙遜な嘆願者の祈りを、主は、その人に代って、ご自身の願いとしてささげられる。真心からの祈りはどれも天に聞かれる。それはなめらかなことばではないかも知れないが、その中に心がこもっている時、イエスが奉仕しておられる聖所へのぼって行き、イエスはそれをぎこちないどもることばが 1 つもなく、ご自身の完全という香で美しくかぐわしいものとして、父にささげてくださるのである。

真心と誠実の道は障害物のない道ではない。しかしわれわれは、あらゆる困難の中に祈りへの呼びかけをみとめるのである。神から受けなかった能力を持っている人はだれもいないのであって、その能力のみなもとはどんなに弱い人のためにも開かれている。「わたしの名によって願うことは、なんでもかなえてあげよう。父が子によって栄光をお受けになるためである。何事でもわたしの名によって願うならば、わたしはそれをかなえてあげよう」とイエスは言われた（ヨハネ 14：13、14）。 「わたしの名によって」祈りなさいと、キリストは弟子たちに言われた。キリストに従う者たちは、キリストのみ名によって神の前に立つのである。彼らのために払われた犠牲の価値によって、彼らは神の御目に価値があるのである。キリストの着せられた義によって、彼らはとうとい者とみなされる。神は神をおそれる者たちを、キリストのためにおゆるしになる。神は彼らのうちに罪人のけがれをごらんにならない。神は彼らのうちに、彼らが信じている神のみ子のみかたちをみとめられるのである。

神の民が自分自身を低く評価するときに神は失望される。神はご自分の選民が、彼らの上に神がおかれた価値にしたがって自らを評価するように望まれる。神が彼らを所望されたのである、そうでなければ、神は彼らをあがなうために、ご自分のみ子をあのように高価な使命におつかわしにはならなかったのである。神は彼らに用があるのであって、彼らが神の

み名の栄えをあらわすために、神に最高の要求をするときに神はよろこばれる。神の約束に対して信仰を持つときに、大きなことを期待できるのである。

しかしキリストのみ名によって祈ることには多くの意味がある。それはわれわれがキリストの品性を受け入れ、キリストの精神をあらわし、キリストのみわざをなすことを意味する。救い主の約束は条件つきで与えられている主は、「もしあなたがたがわたしを愛するならば、わたしのいましめを守るべきである」と主は言われる（ヨハネ 14：15）。主は人を罪のうちにあって救われるのではなく、罪から救われるのである。　そして、主を愛する者たちは、従うことによって彼らの愛を示すのである。　すべての真の服従は心から生れる。キリストにとってはそれは心の働きであった。もしわれわれが承知するなら、キリストはわれわれ　の思いやこころざしと一体となり、われわれの心と思いとを 1 つにしてご自分のみこころに一致させてくださるので、キリストに従う時に、われわれは自分自身の衝動を実行している　にすぎない。意志は洗練され、きよめられて、主のご用をなすことに最高の喜びをみいだす。神を知ることはわれわれの特権であるが、このように神を知るときに、われわれの生活は変　わろことのない服従の生活となる。キリストのご品性の真価を認めることによって、神とま　じわることによって、罪はわれわれにとって憎むべきものとなる。

キリストが人性のうちにあって律法を生活されたように、われわれも、キリストに力を求めてよりすがる時に、それができるのである。しかし自分の義務についての責任を他人におしつけて、彼らがわれわれにすべきことを告げてくれるのを待ってはならない。われわれは人の助言にたよることはできない。主はほかの人にお教えになるのと同じようによろこんでわれわ れの義務をお教えになる。もし信仰をもって主のみもとに行くならば、主はご自分の奥義をわれわれに個人的に語ってくださる。神がエノクにそうされたように、われわれと交わるために近づかれる時に、われわれの心はしばしばうちに燃える。神をよろこばせないようなことは何もしないと決心する者は、自分の問題を神の前に持ち出したあとで、とるべき道を知るであろう。そして彼らは、知恵ばかりでなくまた力を受けるのである。服従と奉仕の力は、キリストが約束されたように彼らにさずけられる。キリストに与えられたものは何であっても、――堕落した人類の必要を満たすためのものは何でも――人類のかしらまた

代表者としてキリストに与えられた、「そして、願い求めるものは、なんでもいただけるのである。それは、わたしたちが神の戒めを守り、みこころにかなうことを行っているからである」（Ⅰヨハネ 3：22）。

キリストは、ご自身をいけにえの供え物としてささげられる前に、ご自分に従う者たちに与える最も重要で完全な賜物をお求めになった。それは無限の恵みの資源を彼らの手のとどくところにもたらす賜物であった。キリストはこう言われた、「わたしは父にお願いしよう。そうすれば、父は別に助け主を送って、いつまでもあなたがたと共におらせて下さるであろう。それは真理の御霊である。この世はそれを見ようともせず知ろうともしないので、それを受けることができない。あなたがたはそれを知っている。なぜなら、それはあなたがたと共におり、またあなたがたのうちにいるからである。わたしはあなたがたを捨てて孤児とはしない、あなたがたのところに帰って来る」（ヨハネ 14：16～18）。

これより前に、みたまは世におられた。あがないの働きの最初から、みたまは人々の心に働きかけておられた。しかしキリストが世におられる間は、弟子たちはほかの助け手を望まなかった。キリストの存在が取り去られてはじめて彼らはみたまの腰を感じるようになり、そのときみたまがこられるのであった。　聖霊はキリストの代表者であるが、人間の個性を備えておられないので、これに拘束されない。キリストは、人性の制約を受けておられたので、どこへでもみずから行かれるわけにいかなかった。だから、キリストが父のみもとに行かれて、地上におけるご自分の後継者として聖霊をお送りになることは彼らの利益であった。そうすれば、場所やキリストとの個人的接触などによる特典はだれにもないのであった。みたまによって、救い主はだれにでも近づかれるのであった。この意味において、主は、天にのぼられなかったとした場合よりも一層近く彼らのそばにおられるのであった。

「わたしを愛する者は、わたしの父に愛されるであろう。わたしもその人を愛し、その人にわたし自身をあらわすであろう」（ヨハネ 14：21）。イエスは弟子たちの将来を見通された。ある者は処刑台に立たされ、ある者は十字架につけられ、ある者は海のさびしい岩の間に島流しにされ、またほかの者たちは迫害と死にあうことを、イエスはご存じであった。主はどの試みにもご自分が一緒におられるという約束をもって弟子たちを励まされた。この

約束は少しも効力を失っていない。 主のために牢獄に横たわり、あるいはさびしい島に追放されている忠実なしもべたちのことを、主は全部知っておられる。主は自らそこにいて彼らを慰められる。真理のために信者が不正な裁判の座に立つ時、キリストは彼のかたわらに立っておられる。彼の上に浴びせられるすべての非難はキリストの上に落ちかかるのである。キリストがその弟子の身代りとなってふたたび有罪の宣告を受けられるのである。人が牢獄の壁の中に閉じこめられる時、キリストはご自分の愛をもって心をよろこばせてくださる。人が主のために死にあう時、キリストは、わたしは「生きている者である。わたしは死んだことはあるが、見よ、世々限りなく生きている者である。そして、死と黄泉とのかぎを持っている」とぼわれる（黙示録 1：18）。わたしのために犠牲となる生命は、永遠の栄光へと生きながらえるのである。

どんな時にも、どんな場所でも、どんな悲しみにも、どんな苦しみにも、前途が暗く将来が困難に見えて 無力と孤独を感じる時にも、信仰の祈りに答えて、助け主が送られる。この世のすべての友から離れるような事情が起こるかもしれない。しかしどんな事情もどんな距離もわれわれを天の助け主から離れさせることはできない。どこにいようとも、どこへ行こうとも、主はいつもわれわれの右にあって、力づけ、助け、ささえ、励まされる。 弟子たちはそれでもキリストのことばの霊的な意味を理解しなかったので、主はもう一度その意味を説明された。みたまによって、わたしはあなたがたにわたし自身をあらわすであろうと、主は言われた（ヨハネ 14：21 参照）。「助け主、すなわち、父がわたしの名によってつかわされる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え」る（ヨハネ 14：26）。もうあなたがたは、理解できないと言わないだろう。もうあなたがたは鏡にうつして見るようにおぼろげに見ることはないであろう。あなたがたは、「すべての聖徒と共に、その広さ、長さ、高さ、深さを理解することができ、また人知をはるかに越えたキリストの愛を知」ることができるであろう（エペソ 3：18、19）。

弟子たちはキリストの生涯とその働きについてあかしをたてるのであった。彼らのことばを通して、キリストは地上のすべての民に語られるのであった。しかしキリストの屈辱と死によって、彼らは大きな試みと失望にあうのであった。この経験ののちに、彼らのことば

が正確なものとなるために、イエスは、助け主が「わたしが話しておいたことを、ことごとく思い起させるであろう」と約束された（ヨハネ 14：26）。

イエスはことばをつづけて言われた、「わたしには、あなたがたに言うべきことがまだ多くあるが、あなたがたは今はそれに堪えられない。けれども真理の御霊が来る時には、あなたがたをあらゆる真理に導いてくれるであろう。それは自分から語るのではなく、その聞くところを語り、きたるべき事をあなたがたに知らせるであろう。御霊はわたしに栄光を得させるであろう。わたしのものを受けて、それをあなたがたに知らせるからである」（ヨハネ 16：12～14）。イエスは弟子たちの前に広大な真理の道をお示しになった。

しかし彼らはキリストの教えを律法学者やパリサイ人の言い伝えや格言と区別することは非常に困難であった。彼らはラビたちの教えを神の声として受け入れるように教育されていたので、それはいまだに彼らの心を支配する力をもち、彼らの意見を形づくっていた。世俗的な考えやこの世の事物がいまだに彼らの思いの中に大きな場所を占めていた。キリストはご自分のみ国の霊的な性質についてたびたび彼らに説明されたが、彼らはそれを理解しなかった。彼らの頭は混乱していた、彼らはキリストが示された聖句の価値を理解しなかった。キリストの教えの多くは彼らにほとんど益を与えていないように思われた。イエスは、彼らがイエスのことばの真の意味をとらえていないことをお知りになった。主は、聖霊がそうしたことばを彼らの心に思い出させてくださるということを、あわれみ深くも約束された。また主は、弟子たちが理解できない多くのことをこれまで言わないでおかれた。そうしたこともみたまによって彼らに教えられるのであった。みたまは彼らが天の事物を理解するように彼らのさとりを開いてくださるのであった。「真理の御霊が来る時には、あなたがたをあらゆる真理に導いてくれるであろう」（ヨハネ 16：13）。

助け主は「真理の御霊」と呼ばれている。助け主の働きは真理を明らかにし、これを守ることである。助け主はまず真理のみたまとして心に住みこりして助け主となられる。真理には慰めと平安があるが、虚偽には真の平安も慰めもない。サタンが人の心を支配する力を手に入れるのは偽りの説や言い伝えを通してである。サタンは人々を偽りの標準へ向けることによって、まちがった品性を形成する。聖霊は、聖書を通して心に語り、真理を心に印象

づける。こうしてみたまは誤りをばくろし、それを魂から追い出される。キリストが選民をご自身に心服させられるのは、真理のみたまが神のみことばを通して働くことによってである。

イエスは、弟子たちに聖霊の任務をくわしく説明された時に、ご自身の心に霊感を与えたよろこびと望み　を彼らに吹きこもうとされた。主はご自分が教会に十分な助けをお与えになったことをよろこばれた。　聖霊は主がご自分の民を高めるために天父に嘆願することがお できになるすべての賜物の中の最高のものであった。みたまは人を生れかわらせる働きをす　るものとして与えられるのであって、これがなければ、キリストの犠牲は何の役にもたたな　かったであろう。悪の力は幾世紀にわたって強められ、人々がこのサタンのとりことして屈　服していることは驚くばかりであった。罪に抵抗してこれに打ち勝つ唯一の道は、制限され　た力ではなく天来の満ち足りた力をもってこられる第三位の神、聖霊の偉大な働きを通して　である。世のあがない主によって達成されたことに効果を与えるのはみたまである。心が清　くされるのはみたまによってである。みたまによって、信者は神の性質にあずかる者となる。すべての先天的後天的な悪の傾向に打ち勝つ天来の力として、またご自身の品性を教会に印　象づける天来の力として、キリストはみたまをお与えになった。

みたまについて、イエスは、「御霊はわたしに栄光を得させるであろう」と言われた（ヨハネ 16：14）。救い主は父の愛を実際に示すことによって父の栄光をあらわすためにこられた。そのようにみたまも、キリストの恵みを世にあらわすことによってキリストの栄光をあらわすのであった。神のみがたちが人間のうちに再現されるのである。神の栄え、キリストの栄光は、神の民の品性の完成に含まれている。　「それ（真理のみたま）がきたら、罪と義とさばきとについて、世の人の目を開くであろう」（ヨハネ　16：8）。みことばを説くことは、聖霊のたえまない臨在と助けがなければ何の効果もない。これが天来の真理の唯一　の効果的な教師である。真理が聖霊に伴われて心に入る時にのみ、それは良心をめざめさせ、あるいは生活を一変させる。人は神のみことばの字句を示すことができ、そのすべての命令　と約束とをよく知っているかもしれない。しかし聖霊によって真理がはっきり頭に入らない　ならば、魂は岩なるキリストの上に落ちてくだけないのである。どんなに教育があっても、

どんなに大きな特典をもっていても、神のみたまの協力がなければ、人は光のうつわとなることができない。 種子が、天の露によって芽を出すのでなければ、福音の種子をまくことには効果がない。新約聖書の 1 巻が書かれる前に、キリストの昇天後 1 つの福音の説教がなされる前に、聖霊が祈っている使徒たちの上にのぞんだのであった。その時彼らの反対者たちのあかしは、「エルサレム中にあなたがたの教を、はんらんさせている」というのであった（使徒行伝 5：28）。

キリストは聖霊の賜物をご自分の教会に約束されたが、その約束は、最初の弟子たちと同じようにまたわれわれのものである。しかしほかのすべての約束と同じように、それは条件つきで与えられている、主の約束を信じ、これをわがものと主張する人は多い。彼らはキリストについて語り、聖霊について語るが、何の益も受けない。彼らは天来の力によってみちびかれ、支配してもらうために魂をあけわたそうとしない。われわれが聖霊を用いることはできない。みたまがわれわれを用いてくださるのである。みたまを通して、神は民のうちに働き、「その願いを起させ、かっ実現に至らせ」てくださるのである（ピリピ　2：13）。しかし多くの者はこれに従おうとしない。彼らは自分で自分を支配したいのである。これが、彼らが天の賜物を受けない理由である。みたまは、へりくだった心で神に仕え、そのみちび　きと恵みを待ち望む者にだけ与えられる。神の力は彼らが求め、受けるのを待っている。

この約束された祝福を信仰によって求める時に、ほかのすべての祝福は次々と与えられる。それはキリストの恵みの富にしたがって与えられるのであって、主はどの魂にもその受け入れる能力にしたがっていつでも与えてくださる。 弟子たちへの談話の中で、イエスは、ご自身の苦難と死を暗示する悲しいことばはすこしも言われなかった。彼らに対するキリストの最後の遺産は、平安という遺産であった。主は言われた、「わたしは平安 をあなたがたに残して行く。わたしの平安をあなたがたに与える。わたしが与えるのは、世が与えるようなものとは異なる。あなたがたは心を騒がせるな、またおじけるな」（ヨハネ 14：27）。 2 階の広間を去られる前に、救い主は弟子たちを促して賛美の歌をうたわれた。主のみ声は、悲嘆の調べではなく、過越節の賛美の楽しい調べにきこえた。 「もろもろの国よ、主をほめたたえよ。 もろもろの民よ、主をたたえまつれ。 われらに賜わるそのいつくしみは大きいか

らである。 主のまことはとこしえに絶えることがない。 ドをほめたたえよ」 (詩篇 117篇)

賛美歌をうたってから、彼らは外へ出て行った。雑踏する通りを進んで行き、町の門を過ぎて、彼らはオリブ山の方へ行った。彼らはそれぞれの思いにふけりながら、ゆっくり進んで行った。山の方へ向かって下り始めた時、イエスは最も悲しい口調で、「今夜、あなたがたは皆わたしにつまずくであろう。『わたしは羊飼を打つ。そして、羊の群れは散らされるであろう』と、書いてあるからである」と言われた（マタイ 26：31）。弟子たちは悲しみと驚きにうたれて耳を傾けた。カペナウムの会堂で、キリストがご自分のことを生命のパンであると言われた時に、多くの者がつまずき、主から離れ去ったことを彼らは思い出した。しかしその時 12 人は不忠実ではなかった。ペテロはその時、兄弟たちに代って語り、キリストに対する忠誠心を表明した。

その時キリストは、「あなたがた 12 人を選んだのは、わたしではなかったか。それだのに、あなたがたのうちのひとりは悪魔である」と言われた（ヨハネ 6：70）。 2 階の広間では、イエスは、12 人の中の 1 人がわたしを裏切り、またペテロがわたしを知らないと言うだろうと言われた。しかしこんどは、主のことばには彼らの全部が含まれていた。

するとペテロが、「たとい、みんなの者がつまずいても、わたしはっまずきません」と激しく抗議の声をあげた（マルコ 14：29）。2 階の広間で彼は「あなたのためには、命も捨てます」と断言したのであった（ヨハネ 13：37）。イエスは、ペテロがその晩救い主を知らないと言うであろうと警告された。いまキリストはその警告をくりかえして、「あなたによ く言っておく。きょう、今夜、にわとりが 2 度鳴く前に、そう言うあなたが、3 度わたしを知らないど言うだろう」と言われた（マルコ 14：30）。しかし「ペテロは力をこめて言った、『たといあなたと一緒に死なねばならなくなっても、あなたを知らないなどとは、決して申しません』。みんなの者もまた、同じようなことを言った」（マルコ 14：31）。自信のあるままに、彼らは、知っておられる主の再度のことばを否定した。彼らは試練に対する備えができていなかった。試みが彼らを襲う時に、彼らは自分自身の弱さをさとるのであった。 イエスは弟子たちとオリブ山のふもとにあるゲッセマネへ行かれる途中であった。そこは人里

離れた場所で、主がたびたび祈りと瞑想のために行かれたところである。救い主は、世に対するご自分の使命について、また弟子たちとご自分との間の霊的な関係について、彼らに説明してこられた。いま主はその教えを例示される。月が明るく輝いて、イエスの前に繁茂したぶどうの木が現れる。主は弟子たちの注意をそのぶどうの木へ向けて、それを 1 つの象徴としてお用いになる。

「わたしはまことのぶどうの木……である」とイエスが言われる（ヨハネ 15：1）。イエスはご自分を象徴されるのに、優美なしゅろの木や高い杉の木やたくましいかしの木を選ばないで、巻きひげのまつわりついたぶどうの木を例にとられる。しゅろの木も杉の木もかしの木も 1 本立ちである。それはささえを必要としない。しかしぶどうの木はたなにからみついて、天の方へのぼって行く。そのように、人性をとられたキリストは神の力にたよられた。「わたしは、自分からは何事もすることができない」とイエスは言明された（ヨハネ 5：30）。 「わたしはまことのぶどうの木……である」（ヨハネ 15：1）。ユダヤ人はいつもぶどうの木を植物の中で最も高貴なもの、また力があり、すぐれていて、実をむすぶすべてのものの型とみなしていた。イスラエルは神が約束の地に植えられたぶどうの木として象徴されていた。ユダヤ人は、自分たちがイスラエルとつながっていることに救いの望みを置いていた。しかしイエスは、わたしがまことのぶどうの木であると言われる。イスラエルとつながっていることによって神の生命にあずかる者、神の約束を継ぐ者となれると思ってはならない。わたしを通してのみ霊的生命が受けられるのだ。

「わたしはまことのぶどうの木、わたしの父は農夫である」（ヨハネ 15：1）。パレスチナの丘に、天の父がこのよいぶどうの木を植えられ、父ご自身が農夫であった。多くの人たちがこのぶどうの木の美しさにひきつけられ、それが天から出たものであることを宣言した。しかしイスラエルの指導者たちには、それはかわいた土から出た根のように見えた。彼らはその木を引き抜いてこれを傷つけ、けがれた足の下にふみつけた。彼らはそれを永久に滅ぼそうと考えた。しかし天の農夫はご自分の木を決して見すごしにされなかった。人々がその木を殺してしまったと考えたあとで、天の農夫はそれを取りあげ、壁の向こう側に移植された。ぶどうの木の幹はもう見られなくなった。それは人々の乱暴な攻撃からかくされた。

しかしまことのぶどうの木の枝は壁をこえてたれさがった。その枝はまことのぶどうの木を代表するのであった。その枝によって、まだまことのぶどうの木につぎ木をすることができた。その枝から実が得られた。それは通りかかる人がもいで収穫となった。

「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である」とキリストは弟子たちに言われた（ヨハネ 15：5）。キリストは弟子たちから引き離されようとしておられたが、彼らとキリストの霊的結合は変らないのであった。枝とぶどうの木とのっながりは、あなたがたとわたしとの間の関係を表していると、キリストは言われた、、若枝が生きたぶどうの木につがれて、せんいはせんいと、木目は木目とっながって、木の幹へと生長するのである。ぶどうの木の生命は枝の生命となる。

そのように、罪とがのうちに死んだも同様の魂は、キリストにつながることによって生命を受けるのであ　る。キリストを自分自身の救い主として信じる信仰によって、この結合がなされる。罪人は自分の弱さをキリストの強さに、自分のむなしさをキリストの充実に、自　分のもろさをキリストの耐久力に結合させる。そのとき彼は、キリストの心を持つのである。キリストの人性はわれわれの人性に触れ、われわれの人性は神性に触れたのである。こうし　て聖霊の働きを通して、人は神の性質にあずかる者となる。彼は愛するみ子のうちに受け入　れられる。

キリストとのこのつながりは、1 度できたら、持続しなければならない。キリストは、「わたしにつながっていなさい。そうすれば、わたしはあなたがたとっながっていよう、枝がぶどうの木につながっていなければ、自分だけでは実を結ぶことができないように、あなたがたもわたしにつながっていなければ実を結ぶことができない」と言われた（ヨハネ 15：4）。これは気まぐれな接触でもなければ、ついたり離れたりする関係でもない。枝は生きたぶどうの木の一部となるのである。根から枝への生命と力と実りの伝達はさまたげられることなく、たえまなく行われる。ぶどうの木から離れると、枝は生きることができない。あなたがたはわたしを離れては生きることができないと、イエスは言われた。あなたがたがわたしから受けた生命は、たえまないまじわりによってのみ持続されるのだ。わたしなしでは、あなたがたは 1 つの罪にうち勝つことも、1 つの試みに抵抗することもできない。

「わたしにつながっていなさい。そうすれば、わたしはあなたがたとっながっていよう」（ヨハネ 15：4）。キリストにつながっているということは、そのみたまをたえず受けること、すなわちキリストの奉仕に無条件に服従する生活である。人と神との間に伝達のチャンネルがたえず開かれていなければならない。ぶどうの枝が生きた木の幹からたえず樹液を吸うように、われわれもイエスにすがりつき、信仰によって主から力と主ご自身の完全な品性を受けるのである。 根は枝を通して小枝の先端にまで栄養を送る。同様にキリストは、霊的な力の流れを信者の一人一人に送られる。魂がキリストにつながっているかぎり、しぼんだり枯れたりする危険はない。ぶどうの木の生命は枝になる香り高い実にあらわれる。「もし人がわたしにつながっており、またわたしがその人とつながっておれば、その人は実を豊かに結ぶようになる。わたしから離れては、あなたがたは何 1 つできないからである」とイエスは言われた（ヨハネ 15：5）。神のみ子を信じる信仰によって生きるとき、みたまの実はわれわれの生活の中に見られ、1 つとして失われることはない。

「わたしの父は農夫である。わたしにつながっている枝で実を結ばないものは、父がすべてこれをとりのぞ」かれる（ヨハネ 15：1、2）。外面的にはぶどうの木につぎ木されていながら、生命のつながりがないかもしれない。すると成長もなければ、実りもない。同じように、信仰によってキリストとほんとうにつながっていないで、表面的な関係しかないかもしれない。信仰の告白によって人は教会に加わるが、その品性と行為は彼らがキリストにつながっているかどうかを示している。もし実をむすばなければ、彼らは偽りの枝である。彼らがキリストから離れていることは、枯れた枝によって表されているのとまったく同じ滅亡を意味する。「人がわたしにつながっていないならば。枝のように外に投げすてられて枯れる。人々はそれをかき集め、火に投げ入れて、焼いてしまうのである」とキリストは言われた（ヨハネ 15：6）。

「実を結ぶものは、もっと豊かに実らせるために。手入れしてこれをきれいになさるのである」（ヨハネ 15：2）。イエスに従ってきた選ばれた 12 人のうち、1 人は枯れた枝としてとりのぞかれようとしており。ほかの者たちは激しい試みという刈り込みのナイフを受けるのであった。イエスは厳粛にやさしく農夫の目的を説明された。刈り込みは苦痛を生ずる

が、ナイフを使われるのは天父である。天父は気まぐれな手や無頓着な心で働かれない、地面をはって行く枝がある。そうした枝は、巻きひげがからみついている地面のささえから切り離さねばならない。それは天へ向かって伸び、神にささえを見いだすのである。生命の流れをぶどうの実から奪ってしまうほど葉が　多ければ、その葉を刈り込まねばならない。繁茂しすぎているのは切り落して、義の太陽のいやしの光線のはいる余地をつくらねばならない。農夫は、もっとみごとな、もっとたくさんの実がなるように、有害な成長を刈り込むのであ　る。

「あなたがたが実を豊かに結（ぶならば）……それによって、わたしの父は栄光をお受けになるであろう」とイエスは言われた（ヨハネ 15：8）。神は、あなたを通して、ご自身の品性の聖潔、慈愛、あわれみをあらわそうと望まれる。しかし救い主は、弟子たちに、実を結ぶために骨折るようにとは命じられない。主はわたしにつながっていなさいと彼らに言われる。「あなたがたがわたしにつながっており、わたしの言葉があなたがたにとどまっているならば、なんでも望むものを求めるがよい。そうすれば、与えられるであろう」と主は言われる（ヨハネ 15：7）。キリストがご自分に従う者たちの中に住まれるのはみことばを通してである。これは、キリストの肉を食べ、その血を飲むことによってあらわされているのと同じ生命のつながりである。キリストのみことばは霊であり生命である。みことばを受けることによって、あなたはぶどうの木であられるキリストの生命を受けるのである。あなたは、「神の口から出る 1 つ 1 つの言で生きるものである」（マタイ 4：4）。あなたのうちにあるキリストの生命は、キリストのうちにあるのと同じ実を生ずる。キリストのうちに生き、キリストに固着し、キリストにささえられ、キリストから栄養分をとる時に、キリストと同じ実を結ぶのである。

弟子たちとのこの最後の集まりにおいて、キリストが彼らのために表明された大きな願いは、キリストが彼らを愛されたように彼らが互いに相愛することであった。いく度もキリストはこのことを語られた。「これらのことを命じるのは、あなたがたが互に愛し合うためである」と、イエスはくりかえして言われた（ヨハネ 15：17）。イエスが 2 階の広間で弟子たちとだけおられた時の最初の命令は、「わたしは、新しいいましめをあなたがたに与える、

互に愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互に愛し合いなさい」であった（ヨハネ 13：34）。弟子たちにとって、このいましめは新しいものであった。彼らは、キリストが彼らを愛されたように互いに愛していなかったからである。新しい考えと動機が彼らを支配しなければならないということ、新しい原則を彼らが実行しなければならないということ、主の生涯と死を通して彼らが愛について新しい観念を受け入れるということを、キリストはお知りになった。

互いに愛し合いなさいという命令は、主の自己犠牲の光に照らしてみる時、新しい意味を持っていた。恵みの全体の働きは、愛と克己と自己犠牲的努力のたえまない 1 つの奉仕である。キリストが地上に滞在しておられた一刻一刻に神の愛はおさえることのできない流れ　となってキリストから流れていた。キリストのみたまを吹き込まれる者はみなキリストが愛　されたように愛するのである。キリストを動かした原則がお互いの間における彼らの態度の　動機となるのである。 この愛は彼らが弟子であることの証拠である。「互に愛し合うならば、それによって、あなたがたがわたしの弟子であることを、すべての者が認めるであろう」と　イエスは言われた（ヨハネ 13：35）。人が強制や利己心によってではなく、愛によってむす ばれる時、彼らは人間の力にまさる力が働いていることを示すのである。この一致がある時、それは神のみかたちが人のうちに回復され、新しい生命の原則がうえつけられた証拠である。それはまた超自然的な悪の力に抵抗するのに神の性質には力があるということ、神の恵みは　生れつきの心に固有の利己心を征服するということを示している。

この愛が教会内であらわされる時、かならずサタンの怒りがひき起こされる。キリストは弟子たちに安楽な道をお示しにならなかった。キリストは言われた、「もしこの世があなたがたを憎むならば、あなたがたよりも先にわたしを憎んだことを、知っておくがよい。もしあなたがたがこの世から出たものであったなら、この世は、あなたがたを自分のものとして愛したであろう。しかし、あなたがたはこの世のものではな い。かえって、わたしがあなたがたをこの世から選び出したのである。だから、この世はあなたがたを憎むのである。わたしがあなたがたに『僕はその主人にまさるものではない』と言ったことを、おぼえていなさい。もし人々がわたしを迫害したなら、あなたがたをも迫害するであろう。また、もし彼

らがわたしの言葉を守っていたなら、あなたがたの言葉をも守るであろう。彼らはわたしの名のゆえに、あなたがたに対してすべてそれらのことをするであろう。それは、わたしをつかわされたかたを彼らが知らないからである」（ヨハネ　15：18～21）。福音は、反対、危険、損害、苦難の中を攻勢的な戦いによって前進するのである。しかしこの働きをする者は、主の足跡に従っているにすぎない。

世のあがない主として、キリストは失敗とみえるようなことにたえず直面された。この世界へのあわれみの使者であられるキリストは、人々を高め、救うためにご自分がなしたいと熱望されたような働きをあまりなさらないようにみえた。サタンの勢力がキリストの道に反対するためにたえず働いていた。しかしキリストは落胆しようとされなかった。 イザヤの預言を通して、主はこう宣言しておられる、「わたしはいたずらに働き、益なく、むなしく力を費した。しかもなお、まことにわが正しきは主と共にあり、わが報いはわが神と共にある。……イスラエルをおのれのもとに集めるために、……（わたしは主の前に尊ばれ、わが神はわが力となられた）」（イザヤ 49：4、5）。次の約束はキリストに与えられているのである。「イスラエルのあがない主、イスラエルの聖者なる主は、人に侮られる者、民に忌みきらわれる者……にむかってこう言われる、……『わたしはあなたを守り、あなたを与えて 民の契約とし、国を興し、荒れすたれた地を嗣業として継がせる。わたしは捕らえられた人に「出よ」と言い、暗きにおる者に「あらわれよ」と言う。……彼らは飢えることがなく、 かわくこともない。また熱い風も、太陽も彼らを撃つことはない。彼らをあわれむ者が彼らを導き、泉のほとりに彼らを導かれるからだ』」（イザヤ 49：7～10）。

イエスは、このことばに信頼し、サダンが優勢になるのをおゆるしにならなかった。キリストの屈辱の最後の歩みが踏み出されようとしていた時に、最も深い悲しみが主の魂をとりかこもうとしていた時に、主は弟子たちに「この世の君が来る……だが、彼はわたしに対して、なんの力もない」「この世の君がさばかれる」「今こそこの世の君は追い出されるであろう」と言われた（ヨハネ 14：30、16：11、12：31）。 預言の目をもって、キリストはご自分の最後の大争闘に起こる場面をたどられた。キリストは、ご自分が「すべてが終った」と叫ばれる時に、全天が勝利することを知っておられた（ヨハネ 19：30）。主の耳は、

天の宮廷における遠くの音楽と勝利の叫びをとらえた。その時サタンの王国では葬式の鐘が鳴らされ、一方キリストのみ名は宇宙の世界から世界へと告げ知らされることを、主はご存じであった。

キリストは、弟子たちが求めたり思ったりすることができるよりももっと多くのことを彼らのためにすることがおできになることをよろこばれた。世界がつくられる前から神のご命令が出されていることをご存じだったので、キリストは、確信をもって語られた。キリストは、真理が、聖霊の全知全能によって武装されて悪との戦いに勝利し、キリストに従う者たちの上に血に染まった旗が高らかにひるがえることを知っておられた。信頼している弟子たちの一生は、キリストの一生と同じようにたえまない勝利の連続となり、それはこの地上では勝利とは見えないが、大いなる来世においてその勝利がみとめられるということを、主は知っておられた。

「これらのことをあなたがたに話したのは、わたしにあって平安を得るためである。あなたがたは、この世ではなやみがある。しかし、勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝っている」（ヨハネ 16：33）。キリストは衰えも、落胆されなか。応キリストに従う者たちはこれと同じ持久力のある信仰をあらわすのである。彼らはキリストが生活されたように生活し、キリストが働かれたように働くのである。なぜなら彼らは、キリストを大いなる監督としてたよっているから である。彼らは勇気、精力、不屈の精神を持たねばならない。不可能にみえることが彼らの道をさまたげても、キリストの恩恵によって彼らは前進するのである。困難を嘆かないで、それを乗り越えるように命じられている。どんなことにも失望することなく、どんなことにも望みを持つのである。キリストは、ご自分の比類のない愛という黄金の鎖で、彼らを神のみ座にむすびつけられた。すべての力のみなもとから発する宇宙の最高の力を彼らに与えることが神の御目的である。彼らは、悪に抵抗する力、この世も、死も、よみも征服することのできない力、キリストが勝利されたように彼らにも勝利させる力を与えられるのである。

キリストは、天の秩序、天の統治制度、天のきよい調和を地上のご自分の教会にあらわすように意図しておられる。このようにして、キリストはご自分の民によって栄光を受けら

れるのである。　彼らを通して義の太陽はくもりのない光輝をもって世を照らすのである。キリストはご自分があがない、買われた所有物である民から、栄光という大きな収入が受けら　れるように、教会に十分な便宜をお与えになった。　キリストは、ご自分の民がキリストご自身の満ち足りた力をあらわすように、彼らに能力と祝福をおさずけになった。キリストの義　をさずけられている教会は、キリストの宝庫であって、そこではキリストのあわれみ。恵み、愛という富が十分にあますところなくあらわされる。キリストは、ご自分の屈辱の報い、ま　たご自分の栄光を補足するものとして、ご自分の民の純潔と完全をごらんになる。キリスト　は、大いなる中心であって、そこからすべての栄光が放射される。

望みに満ちた強いことばをもって救い主はその教えを終えられた。それから、弟子たちのための祈りに魂の重荷をそそぎ出された。目を天に向けて、キリストは、「父よ、時がきました。あなたの子があなたの栄光をあらわすように、子の栄光をあらわして下さい。あなたは、子に賜わったすべての者に、永遠の命を授けさせるため、万民を支配する権威を子にお与えになったのですから。永遠の命とは、唯一の、まことの神でいますあなたと、また、あなたがつかわされたイエス・キリストとを知ることであります」と祈られた（ヨハネ 17:1～3）。

キリストはご自分に与えられたわざをなしとげられた。キリストは地上で神の栄光をあらわされた。主は父のみ名をあらわされた。キリストは、人々の中にご自分の働きを続けて行く者たちをお集めになった。そして主はこう言われた。「わたしは彼らによって栄光を受けました。わたしはもうこの世にはいなくなりますが、彼らはこの世に残っており、わたしはみもとに参ります。聖なる父よ、わたしに賜わった御名によって彼らを守って下さい。それはわたしたちが 1 つであるように、彼らも 1 つになるためであります。……わたしは彼らのためばかりではなく、彼らの言葉を聞いてわたしを信じている人々のためにも、お願いいたします。父よ、それは……みんなの者が　1　つとなるためであります。……わたしが彼らにおり、あなたがわたしにいますのは、彼らが完全に 1 つとなるためであり、また、あなたがわたしをつかわし、わたしを愛されたように、彼らをお愛しになったことを、世が知るためであります」（ヨハネ　17：10、11、20、21、23）。 こうして天来の権威を持っているお

方のことばで、キリストは、ご自分の選ばれた教会を父の腕におまかせになる。聖別された大祭司として、キリストはご自分の民のためにとりなされる。忠実な羊飼いとして、キリストはご自分の群れを大能のかげ、じょうぶで安全なかこいの中にお集めになる。サタンとの最後の戦いがキリストを待っている。主はその戦いに応ずるために出て行かれる。

第 74 章　ゲッセマネ

救い主は弟子たちとつれだって、ゆっくりゲッセマネの園の方へ進んで行かれた。雲のない空には過越の満月が輝いていた。旅人たちが天幕を張った町はひっそりと静まっていた。 イエスは弟子たちと熱心に語り、彼らを教えておられた。しかしゲッセマネに近づかれると、主は妙にだまってしまわれた。イエスは瞑想と祈りのためにこの場所にたびたびこられた。しかし最後の苦悩のこの夜ほど、イエスの心が悲しみに満ちていたことはなかった。地上での一生のあいだ、イエスは神のご臨在の光のうちを歩まれた。サタンの精神を吹き込まれている人たちとの戦いに、イエスは、「わたしをつかわされたかたは、わたしと一緒におられる。わたしは、いつも神のみこころにかなうことをしているから、わたしをひとり置きざりになさることはない」と言うことがおできになった（ヨハネ 8：29）。しかし今イエスは、神のささえの臨在という光からしめ出されているようにみえた。いまイエスは「とがある者と共に数えられた」（イザヤ 53：12）。堕落した人類の罪をイエスがお負いにならねばならない。罪を知らなかったお方の上にわれわれの全部の罪とががおかれねばならない。罪が非常に恐るべきものに見え、イエスの負われねばならない不義の重荷があまりに大きいので、イエスは、そのため天父の愛から永遠にしめ出されるのではないかという恐れにさそわれる。罪とがに対する神の怒りがどんなに恐るべきものであるかを感じて、イエスは、「わたしは悲しみのあまり死ぬほどである」と叫ばれる（マタイ 26：38）。

園に近づくと、弟子たちは、主にあらわれた変化に気がついた。イエスがこんなにひどく悲しみ、だまっておられるのを、彼らはこれまで見たことがなかった。イエスが進んで行かれるにつれて、このふしぎな悲しみは一層深くなった。しかし彼らはその原因について、イエスにあえてたずねようとしなかった。イエスのお体はいまにも倒れるかのように揺れた。 園に着くと、弟子たちは、主が休まれるように、いつものひっこんだ場所を気づかわしそうにさがした。主がいま歩まれる 1 歩 1 歩は、苦しい努力であった。主は、恐るべき重荷の重圧に苦しまれるかのように、声をあげてうめかれた。つきそっている者たちが 2 度イエスのお体をささえたが、そうしなかったら地面に倒れておしまいになったであろう。

園の入口の近くで、イエスは 3 人の弟子たちのほかは全部残して、彼らに、あなたがた自身のために、またわたしのために祈るようにとお命じになった。主はペテロ、ヤコブ、ヨハネといっしょに、人目につかない奥まった場所へ入って行かれた。この 3 人の弟子たちは、キリストのいちばん親密な友であった。彼らは変貌の山でキリストの栄光を目撃し、モーセとエリヤがキリストと語っているのを見、天からの声を聞いた。今キリストは非常な苦しみのうちにあって、この 3 人がそばにいることをお望みになった。このかくれた場所で、彼らはたびたびイエスと夜を明かしたのだった。そのような時には、しばらく目をさまして祈っ　たあとに、彼らは主からすこし離れたところで邪魔されないままによく眠ってしまい、朝に　なってもう 1 度働きに出て行くために、イエスが彼らをおこされたものであった。しかし今主は、彼らに自分といっしょに祈りのうちに夜を明かしてくれるように願われた。それでも　主は、ご自分が耐えられねばならない苦悩を彼らにさえ見せるのにしのびない気持ちになら　れた。主は、「ここに待っていて、目をさましていなさい」と言われた（マルコ 14：34）。

キリストは、彼らからすこし離れたところ――そんなに遠くではなく、彼らが主を見た　りその声を聞いたりできるほどのところ――へ行って、地面にひれふされた。キリストは、罪のためにご自分が天父から隔離されつつあることを感じられた。深淵は広く、暗く、深かったので、キリストの精神はその前でおののいた。この苦悩からのがれるために、キリストは、神としての 力を働かせてはならないのである。人間として、キリストは、人の罪の結果をお受けにならねばならない。人間として、キリストは、罪とがに対する神の怒りに耐えたまわねばならない。 キリストはいま、これまでとちがった態度をとっておられた。主の苦難は、預言者ゼカリヤのことばによって最もよくえがかれている。「万軍の主は言われる、『つるぎよ、立ち。上がってわが牧者を攻めよ。わたしの次に立つ人を攻めよ』」（ゼカリヤ 13：7）。罪深い人間の身代りまた保証人として、キリストは神の正義の下に苦難を受けておられた。主は、正義が何であるかがおわかりになった。これまでキリストは、他人のために執り成すお方であったが、いま主はご自分のために執り成してくれる者がほしいと望まれた。

キリストは、天父とのつながりが切れたと感じられた時、人としてのご自分の性質では、きたるべき暗黒の勢力との戦いに耐えることができないと心配された。試みの荒野では人類の運命がかけられていた。その時キリストは勝利者となられた。いま誘惑者は、最後の恐るべき戦いのためにやってきていた。このために、サタンは、キリストの 3 年の公生涯のあいだ準備してきた。サタンはすべてをかけていた。もしここで失敗すれば、支配への望みは失　われるのである。この世の王国はついにキリストのものとなり、彼自身は敗北して追い出さ　れるのである。しかし、もしキリストに打ち勝っことができれば、地はサタンの王国となり、人類は永遠に彼の権力下におかれるのである。この戦いの結果を目の前にして、キリストの　魂は、神からの隔離という恐れに満たされた。もしキリストが罪の世の保証人となられるな　らば、隔離は永遠のものとなり、キリストは、サタンの王国と一体となり、ふたたび神と　１つになることがおできにならないであろうと、サタンはキリストに告げた。

しかもこの犠牲によって、何の益があるのだろうか。人間の不義と忘恩は何と絶望的にみえることだろう。サタンは、事態の最悪の面をあがない主に強調した。現世的な特権と霊的な特権において、ほかのどんな民よりもまさっていると主張している民があなたをこばんだのだ。特選の民として彼らに与えられた約束の基であり、中心であり、印であるあなたを、彼らは殺そうとしている。あなた自身の弟子の１人は、あなたの教えをきき、教会活動の先頭に立っていたのに、あなたを裏切るだろう。あなたの最も熱心な弟子の１人があなたを知らないと言うだろう。全部の者があなたを見捨てるだろう。こうした思いに、キリストは身　も心も嫌悪をおぼえられた。主が救おうと試みられた人たち、主がこれほど愛された人たち　が、サタンの陰謀に加わるのだということがキリストの魂を刺し通した。戦いは激しかった。その激しさは、キリストの国民の不義、告発者や裏切り者の不義、悪のうちにある世の不義　であった。人の罪がキリストの上に重くのしかかり、罪に対する神の怒りの意識がキリスト　の生命をすりへらしていた。

キリストが、人の魂のために払われる価について思いをめぐらしておられる姿を見なさい。苦悩のあまり、主は、神から遠くへ引き離されまいとするかのように、冷たい大地にすがりつかれる。冷たい夜露がそのひれふしたお体におりるが、主は気にされない。その青ざ

めたくちびるから、「わが父よ、もしできることでしたら、どうか、この杯をわたしから過ぎ去らせてください」とのいたいたしい叫びがもれる。それでもなお主は、「しかし、わたしの思いのままにではなく、みこころのままになさって下さい」とつけ加えられる（マタイ26：39）。

人の心は苦難のうちにあって同情を求める。このような熱望をキリストは全心全霊の奥底まで感じられた。キリストは、悲しみと苦しみの時にしばしば祝福し、慰め、保護しておやりになった者たちから何か慰めのことばを聞きたいと心の底から望んで、魂の最高の苦悩をいだいて、弟子たちのところへこられた。彼らにいつも同情のことばをかけてこられたお方が、いま超人的な苦悩を経験し、弟子たちが主のために、また自分自身のために祈っていることを知りたいと熱望された。罪の邪悪さがどんなに暗くみえたことだろう。ご自分は神の前に罪のないお方のままでいて、人類の不義の結果は彼ら自身に負わせたらよいでは ないかという誘惑が激しかった。弟子たちがこのことを理解し、感謝しているということを知ることさえできたら、キリストは力づけられるのであった。

キリストはいたいたしい努力をもって立ちあがり、連れの者たちを残しておかれた場所へよろめきながらもどってこられた。しかし彼らは「眠っていた」（マタイ 26：40）。彼らが祈っているということがわかったら、主の心は救われたであろう。彼らがサタンの勢力に打ち負かされることがないように神に保護を求めていたら、主は彼らの固い信仰に慰められたであろう。しかし彼らは、「目をさまして祈っていなさい」と何度も言われた警告を心にとめていなかった（マタイ 26：41）。最初彼らは、いつもは冷静で威厳のある主が、理解できないほどの悲しみと戦っておられるのを見て非常に心配した。苦しんでおられる主の強い叫びを聞いて、彼らは祈った。彼らは、主を見捨てる気持ちはなかったが、神に祈りつづけていたら払い落とせたはずのもうろうとしたまひ状態に陥っているようだった。試みに耐えるためには目をさまして熱心に祈ることが必要であるということに、彼らは気がついていなかった。

イエスは、園の方へ足を向けられる直前に、「今夜、あなたがたは皆わたしにつまずくであろう」と弟子たちに言われた（マタイ 26：31）。彼らは牢獄にでも、死にいたるまでも

主と共に行きますと最大限の保証をしていた。そして気の毒にも自信の強いペテロは、「たとい、みんなの者がつまずいても、わたしはつまずきません」とっけ加えた（マルコ 14: 29）。しかし弟子たちは自分自身にたよっていた。彼らはキリストにすすめられたように大 いなる助け主を見ていなかった。だから救い主が彼らの同情と祈りを最も必要とされた時に、彼らは眠っていた。ペテロさえ眠っていた。

イエスの胸によりかかっていた愛する弟子ヨハネも眠っていた。実際、ヨハネは、主に対する愛から目をさましているべきであった。主の最高の悲しみの時に、ヨハネの熱心な祈りが愛する救い主の祈りに加えられるべきであった。あがない主は、弟子たちの信仰が衰えないように、彼らのために夜通し祈られたことが何度もあった。もしイエスが前に 1 度ヤコブとヨハネにたずねられたことのある質問、すなわち「あなたがたは、.....わたしの飲もうとしている杯を飲むことができるか」という質問をいまされるとしたら、彼らはあえて「できます」とは答えなかったであろう（マタイ 20: 22）。

弟子たちはイエスの声で目をさましたが、彼らはそれがイエスであることがほとんどわからなかった。主のお顔は苦悩のために変りはてていた。イエスはペテロに語りかけて、「シモンよ、眠っているのか、ひと時も目をさましていることができなかったのか。誘惑に陥らないように、目をさまして祈っていなさい。心は熱しているが、肉体が弱いのである」と言われた（マルコ 14: 37、38）。弟子たちの弱さにイエスの同情心が目覚めた。主は、ご自分が売りわたされて殺される時に弟子たちにのぞむ試みに彼らが耐えることができないだろうと心配された。主は彼らを責めないで、「誘惑に陥らないように、目をさまして祈っていなさい」と言われた。この大きな苦悩の中にあってもなお主は、彼らの弱さをゆるそうとされた。「心は熱しているが、肉体が弱いのである」と、主は言われた（マタイ 26: 41）。

ふたたび神のみ子は、超人的な苦悩に陥り、気を失いそうに力がつき果てて、よろめきながら前の戦いの場所へ戻って行かれた。主の苦しみは前よりも一層ひどかった。魂の苦悩がイエスにのぞむと、「その汗が血のしたたりのように地に落ちた」（ルカ 22: 44）。いとすぎの木としゅろの木がイエスの苦悩について無言の目撃者であった。暗黒の勢力と 1 人で

戦っておられる創造主のために自然が泣いているかのように、葉の茂った木の枝から重いしずくがイエスの悲しいお姿の上に落ちた。　しばらく前には、イエスは、堂々たる杉の木のように立って、激しく襲いかかる反対の嵐に耐えておられた頑固な意志や、悪意と狡猾さに満　ちた心がイエスを混乱させ、圧倒しようとつとめてもむだだった。イエスは、神のみ子とし　て天来の威厳をもって耐えられた。　ところが今イエスは、激しい嵐に打たれて折れた葦のようであった。イエスは、1 歩　1 歩暗黒の勢力に勝利して、勝利者としてご自分の働きの完成に近づいておられた。すでに栄光を受けたお方として、イエスは神と 1 つであることを主張された。ためらうことのない調子で、イエスは賛美の歌を口から出された。イエスは弟子た　ちに勇気のあるやさしいことばで語られた。しかし今暗黒の勢力の時が来ていた。今イエス　の声は、静かな夜の大気の中で、勝利の調べではなく、人間の苦悩に満ちた調べにきこえた。

「わが父よ、この杯を飲むほかに道がないのでしたら、どうか、みこころが行われますように」との救い主のことばが、眠い弟子たちの耳につたわってきた（マタイ 26：42）。

弟子たちの最初の衝動はみもとに行くことであった。しかしイエスは、そこにとどまって、目をさまし祈っているように命じられた。イエスが彼らのところにこられると、彼らはまだ眠っていた。もう 1 度主は弟子たちとの親しいまじわり、主をほとんど圧倒している暗黒の魔力を払いのけて安心感を与えてくれるような弟子たちのことばを熱望された。しかし弟子たちのまぶたは重かった。「そして、彼らはどうお答えしてよいか、わからなかった」（マルコ 14：40）。主がそばにこられたので彼らは目をさました。彼らは主のみ顔が苦悩のために血の汗にぬれているのを見て、恐怖に満たされた。主の心の苦しみを彼らは理解できなかった。「彼の顔だちは、そこなわれて人と異なり、その姿は人の子と異なっていたからである」（イザヤ 52：14）。

イエスは、引き返して、ふたたび 1 人になられると、大いなる暗黒の恐ろしさに圧倒されて、ぱったりうつぶせになられた。神のみ子の人性はこの試みの時にたじろいだ。主は、こんどは弟子たちの信仰が失われないようにと祈らず、試みられ、苦しんでおられるご自分の魂のために祈られた。 恐るべき瞬間がきていた。それは世の運命を決定する瞬間であった。人類の運命ははかりでゆれていた。キリストは、不義な人類に課せられた杯から飲むことを

いまでも拒否することがおできになった。まだ遅くなかった。主はひたいの血の汗をふいて、人類を罪とがのうちに滅びるままにしておくこともおできになった。罪人にその罪の値を受けさせて、わたしは父のみもとにもどろうと言うこともおできになった。神のみ子は、屈辱と苦悩のにがい杯を飲まれるだろうか。罪なきお方が不義な者を救うために罪の行為の結果を受けられるだろうか。イエスの青ざめたくちびるから、「わが父よ、この杯を飲むほかに道がないのでしたら、どうか、みこころが行われますように」とのことばがふるえながらもれる（マタイ 26：42）。

3 度、イエスはその祈りを口にされた。3 度、人性は最後にして最高の犠牲の前にひるんだ。しかしいま人類の歴史が世のあがない主の前に現れる。律法を犯した者たちは、放っておけば滅びなければならないことを、主はお知りになる。主は人類の無力をさとられる。 主は罪の力をお知りになる。滅びる運命にある世のわざわいと嘆きが主の前に現れる。主は、世のさし迫った運命を見て決心される。ご自分がどんなに犠牲を払ってでも、主は人類を救おうとされる。滅びつつある幾百万の人がイエスを通して永遠の生命を受けられるように、 イエスは血のバプテスマを受け入れられる。主が純潔と幸福と栄光に満ちた天の宮廷を去られたのは、失われた 1 匹の羊、罪とがによって堕落した 1 つの世界を救うためであった。だから主は、ご自分の使命から離れようとなさらない。イエスは、罪を犯した人類のためにあがないの供え物となられるのである。いまイエスの祈りには、「この杯を飲むほかに道がないのでしたら、どうか、みこころが行われますように」と、服従することだけが表明される（マタイ 26：42）。

決心をされると、イエスは、それまでわずかにからだをもたげておられた地面に、いまにも死んでしまわれるかのようにばったり倒れておしまいになった。失神したようになっておられる主の頭をやさしく手でささえ、人の子と異なって見えるほどそこなわれたそのひたいをふいてさしあげるはずの弟子たちはその時 どこにいたのだろう。救い主はただ 1 人でさかぶねを踏まれ、もろもろの民のなかに主と事を共にする者はなかった。 しかし神はみ子と共に苦しまれた。天使たちは救い主の苦悩を見守っていた。彼らは、主がサタンの大軍にとりかこまれ、その人性が身ぶるいするような、ふしぎな恐れに圧倒されるのを見た。天は沈

黙していた。立琴は音をたてなかった。天父が愛するみ子からご自分の光と愛と栄光の輝きをとり去られるのを天使たちが無言の悲しみのうちに驚いて見守っている有様をもし人間が見ることができたら、彼らは罪が神の御目にどんなに恐るべきものであるかをもっとよくさとるであろう。

戦いが終りに近づくにしたがって、他世界の聖者たちと天のみ使たちは熱心な関心をもって見守っていた。サタンと悪天使たち、すなわち背信の大軍が、あがないの働きにおけるこの大危機を熱心に見守った。善と悪の両勢力は、キリストの 3 度くりかえされた祈りにどんな応答が与えられるかを見ようと待った。天使たちはこの聖なる受難者の苦しみをとり除いてさしあげたいと願ったが、そうするわけにいかなかった。神のみ子にとってのがれる道はなかった。すべてのことが危険に瀕し、神秘の杯が受難者の手でふるえているこの恐るべき危機に、天が開け、一条の光が嵐の暗黒のようなこの危機の時を照らし、サタンが落ちたあとの地位を占めて神のそばに立っている大いなる天使が、キリストのかたわらにやってきた。この天使はキリストの手から杯を取り去るために来たのではなく、キリストがそれを飲まれるのを力づけるために、天父の愛の確証をもってやってきたのであった。彼は、神と人であられる嘆願者イエスに力を与えるためにやってきた。彼は開いている天をキリストに指さし、キリストの受難の結果救われる魂について語った。天父がサタンよりも偉大で強力であられるということ、キリストの死の結果はサタンの完全な敗北であること、この世の王国はいと高き神の聖徒たちに与えられることをキリストに保証した。キリストはご自分の魂の苦しみを見て満足されるであろう、なぜなら多数の人類が救われ、しかも永遠に救われるのを見られるからであると、だ使はキリストに語った。

キリストの苦しみはやまなかったが、しかし意気消沈と落胆はなくなった。嵐は決して衰えていなかったが、そのまととなっておられたお方はその激しさに耐える力が与えられた。イエスは冷静に落ちつかれた。血のついたイエスのお顔に天来の平安が宿つた。イエスはどんな人間もかつて耐えなかったことに耐えられたのだった。イエスはすべての人のために死の苦しみを味わわれたからである。　眠っていた弟子たちは救い主をとりまいている光で急に目がさめた。彼らは、ひれふておられる主の上に天使がかがみこんでいるのを見た。彼らは、

その天使が救い主の頭を自分の胸に持ちあげて、天の方を指さしているのを見た。彼らは、その天使が、最も美しい音楽のように、慰めと希望のことばを語っている声を聞いた。弟子たちは変貌の山で見た光景を思い出した。彼らは、宮の中でイエスをとりまいた栄光と、雲の中から語られた神のみ声を思い出した。いまその同じ栄光がふたたびあらわされたので、彼らはもはや主について心配しなかった。主は神の守りのうちにおられ、偉大な天使が主を保護するためにつかわされたのだ。ふたたび弟子たちは、疲れのあまり、うち勝ちがたいふしぎなねむたさに負ける。ふたたびイエスは彼らが眠っているのに気づかれる。

主は彼らを悲しそうにごらんになって、「まだ眠つているのか、休んでいるのか。見よ、時が迫った。人の子は罪人らの手に渡されるのだ」と言われる（マタイ 26：45）。これらのことばを語っておられる時にも、イエスはご自分をさがし求めている暴徒たちの足音を聞い　て、「立て、さあ行こう。見よ、わたしを裏切る者が近づいてきた」と言われた（マタイ 26：46）。 イエスが裏切り者に会うためにふみ出された時、さっきまでの苦しみの跡はすこしもみえなかった。弟子たちより先へ出て行って、主は「だれを捜しているのか」と言われた。　彼らは「ナザレのイエスを」と答えた。イエスは、「わたしが、それである」と応じ られた（ヨハネ 18：4、5）。これらのことばが語られた時、さっきイエスに仕えた天使がイエスと暴徒たちとの間に入った。一条の天来の光が救い主のみ顔を照らし、鳩のような形をしたものがイエスをおおった。この天来の栄光の前に、残忍な暴徒たちは一瞬間も立っていることができなかった。彼らはよろめいてうしろへさがった。祭司たち、長老たち、兵士たちは、それにユダさえも、死人のように地面に倒れた。

天使が退くと、光は消えた。イエスは逃げる機会があったが、冷静に落ち着いてふみとどまっておられた。栄光を受けたお方として、イエスは、いまご自分の足下に無力のままうつぶせに倒れている冷酷な一群の真ん中に立っておられた。弟子たちは、ふしぎな思いとおそれの思いで、だまったままそれを眺めていた。　しかしたちまち場面は変わった。暴徒たちは立ち上がった。ローマの兵士たち、祭司たち、ユダがキリストをとりかこんだ。彼らは自分たちの無力を恥じ、イエスがまた逃げ出されるのではないかと恐れているようだった。あがない主はもう 1 度「だれを捜しているのか」と質問された（ヨハネ 18：7）。彼らは目の

前に立っているお方が神のみ子であるという証拠を見たのに、まだ納得しようとしなかった。「だれを捜しているのか」との問いに、彼らはもう 1 度「ナザレのイエスを」と答えた。すると救い主は、「わたしがそれであると、言ったではないか。わたしを捜しているのなら、　この人たちを去らせてもらいたい」と。弟子たちを指さして言われた（ヨハネ 18：7、8）。イエスは弟子たちの信仰が弱いことを知っておられ、彼らを試みと苦難から守ろうとされた。彼らのために主はご自分を犠牲にする覚悟ができていた。

裏切り者のユダは自分が果たす役割を忘れていなかった。暴徒たちが園に入ってきた時、ユダは先頭に立ち、すぐうしろに祭司長がつづいていた。ユダは、イエスの追跡者たちに合図して、「わたしの接吻する者が、その人だ。その人をつかまえろ」と言っていた（マタイ26：48）。いま彼は、暴徒たちとは関係のない者のようなふりをしている。イエスのすぐそ　ばまでくると、彼は親しい友としてイエスの手をとる。そして「先生、いかがですか」とい　うことばとともに、イエスに接吻をくりかえし、危機にあるイエスに同情しているかのよう　に、泣き出しそうにみえる（マタイ　26：49）。 イエスは彼に「友よ、なんのためにきたのか」と言われた（マタイ 26：50）。そして、「ユダあなたは接吻をもって人の子を裏切るのか」とつけ加えられた時、イエスの声は悲しみにうちふるえた（ルカ 22：48）。この訴えは裏切り者の良心をめざめさせ、そのかたくなな心を動かすべきだった。しかし彼は、名誉、　誠実、人間的なやさしさから見放されていた。彼は心をやわらげる様子も見せないで、大胆　不敵につっ立っていた。わが身をサタンに引き渡したユダは、サタンに抵抗する力をもたな　かった。イエスは裏切り者の接吻をこばまれなかった。

暴徒たちは、たったいま彼らの目の前で栄光を受けられたお方の体にユダがさわったのを見て大胆になった。彼らはいまイエスを捕らえ、これまでたえず恵みのわざをなすために用いられたそのとうとい手をしばろうとしはじめた。 弟子たちは、主が捕らえられるようなことはなさらないと思っていた。なぜなら、暴徒たちを死人のように倒れさせた同じ力で彼らを無力にしておいて、イエスと弟子たちは逃げることができたからである。彼らは愛するお方の手をしばるためにひもが取り出されるのを見て失望し、憤慨した。ペテロは、怒りのあまりすばやく剣を抜き、主を防衛しようとしたが、祭司長のしもべの片耳を切り落とした

だけだった。イエスがそれをごらんになって、ローマの兵士たちに固くおさえられている手をふりほどき、「それだけでやめなさい」と言いながら、負傷した耳に手をつけられると、それはたちまちもとどおりになった（ルカ 22：51）。イエスはそれからペテロに言われた。「あなたの剣をもとの所におさめなさい。剣をとる者はみな、剣で滅びる。それとも、わたしが父に願って、天の使たちを 12 軍団以上も、今つかわしていただくことができないと、あなたは思うのか」（マタイ 26：52、 53）。――弟子たちの一人一人の代わりに一軍団である。ああ、なぜ主はご自分とわれわれを救われないのかと弟子たちは思った。彼らの無言の思いに答えて、主は、「しかし、それでは、こうならねばならないと書いてある聖書の言葉は、どうして成就されようか」「父がわたしに下さった杯は、飲むべきではないか」とつけ加えられた（マタイ 26：54、ヨハネ 18：11）。

ユダヤ人の指導者たちは、お役人の威厳をすてて、イエスの追跡に加わっていた。イエスを捕らえることは重大事だったので、下役人たちにまかせておけなかった。陰険な祭司たちと長老たちは、宮守がしらや暴徒たちといっしょに、ユダのあとについてゲッセマネにきていた。要人たちが、あたかも野獣でも追跡するかのように、あらゆる種類の武器を手にしてわいわい騒いでいる暴徒たちの仲間に入っていたのである。 祭司たちと長老たちの方に向いて、キリストは、その鋭い視線を彼らにそそがれた。キリストが語られたことばを、彼らは生きているかぎり忘れないであろう。そのことばは大能の神からの鋭い矢のようであった。キリストは、威厳をもってこう言われた。あなたがたはどろぼうや強盗に向かうように剣や棒をもってわたしに立ち向かっている。毎日わたしは宮にすわって教えていた。あなたがたはわたしを捕らえる機会があったのに何もしなかった。あなたがたの働きのためには夜が都合がよいのだ、「今はあなたがたの時、また、やみの支配の時である」（ルカ 22：53）。

弟子たちは、イエスが捕らえられ、しばられるままになられるのを見て恐れた。彼らは、イエスがご自分と弟子たちの上にこの屈辱をおゆるしになったことにつまずいた。彼らはイエスの行為を理解できなかった。そしてイエスが暴徒たちに屈服されたことを非難した。憤慨と恐怖のあまり、ペテロはみんな逃げ出そうと言い出した。このさそいに応じて、「弟子たちは皆イエスを見捨てて逃げ去った」（マルコ 14：50）。しかしキリストはこの逃亡を予

告しておられた。「見よ、あなたがたは散らされて、それぞれ自分の家に帰り、わたしをひとりだけ残す時が来ろであろう」と、イエスは言われたのであった（ヨハネ 16：32）。

第 75 章　アンナスの前とカヤパの邸で

ケデロン川を越え、畑とオリーブの森を抜け、寝静まった町を通って、彼らはイエスをせきたてた。時は真夜中過ぎで、やじりながらイエスのあとをついて行く暴徒たちの叫びが静かな空気に鋭く反響した。救い主はしばられて厳重に護衛され、その足どりは重かった。しかしイエスをとらえた者たちは、懸命に急いで、前大祭司アンナスの邸にイエスをつれて行った。 アンナスは現職の祭司一族の長で、その老齢に対する敬意から、大祭司として認められていた。人々は彼の助言を求め、神の声としてそれを実行した。彼がまず第一に、祭司の権力への捕虜としてイエスを見なければならない。彼より経験の浅いカヤパが彼らの意図している目的を達成しそこなうことがないように、彼がこの囚人の審問に立ち会わねばならない。彼の策略、狡猾さ、陰険さがこの機会に利用されねばならない。どんなことがあっても、キリストを有罪に定めねばならないのだ。

キリストは形式上サンヒドリンで裁判されるのであった。しかしアンナスの前で、キリストは予備裁判を受けられた。ローマの法律では、サンヒドリンは死刑の酷を執行することができなかった。サンヒドリンは囚人を取り調べ、判決をくだしてからローマ当局の承認を受けることしかできなかった。したがって、ローマ人から犯罪者としてみなされるようにキリストを告発する必要があった。またユダヤ人の目にもキリストを有罪とみとめさせるような告発をみつけ出 さねばならなかった。祭司たちと役人たちの中には、キリストの教えによって罪を悟った者たちも少なくなかったが、彼らは破門されるのがこわいばかりにキリストを告白しないのだった。祭司たちは、ニコデモが、「わたしたちの律法によれば、まずその人の言い分を聞き、その人のしたことを知った上でなければ、さばくことをしないのではないか」と言った質問をよくおぼえていた（ヨハネ 7：51）。

この質問のためにその時の会議は解散し、彼らの計画は妨げられた。アリマタヤのヨセフとニコデモはいま召集されていなかったが、正しいことのためにはあえて口を出すかもしれないほかの者たちがいた。裁判は、サンヒドリンの議員が致してキリストに反対するように運営されなければならない。祭司たちが主張しようと望んだ告発が 2 つあった。もしイエ

スを、神をけがす者として立証できたら、ユダヤ人によって彼を有罪に定めることができる。もし治安を妨害する者として告発できたら、ローマ人によって彼を有罪に定めることができる。アンナスはこの第二の告発をまず確定しようと試みた。彼は、この囚人が手がかりとなるような材料を何かしゃべってくれるように望みながら、弟子たちとイエスの教理について質問した。アンナスはイエスが新しい王国を建設する目的で秘密結社を組織しようとしているということを証拠だてるような陳述を引き出そうと考えた。そうすれば、祭司たちはイエスを治安妨害者また反乱扇動者としてローマ人に引き渡すことができるのだった。

キリストは、開いた本を読むように、この祭司の意図を読みとられた。イエスは質問者の心の奥底を読まれるかのように、ご自分と弟子たちとの間に何らかの秘密の結合があるとか、ご自分の計画をかくすために彼らを人目につかないようにひそかに集めているなどということを否定された。イエスはご自分の目的や教えについて何の秘密もなかった。「わたしはこの世に対して公然と語ってきた。すべてのユダヤ人が集まる会堂や宮で、いつも教えていた。何事も隠れて語ったことはない」とイエスはお答えになった（ヨハネ 18：2）。

救い主はご自分の働きの方法と告発者たちのやり方とを対照された。何か月もの間、彼らはイエスを追いまわしてわなにかけ、秘密裁判に引き出そうと努力していた。そこでは公平な手段によっては達成できないところを偽証によって達成できるかも知れないのであった。いま彼らはその日的を実行しつつあった。真夜中に暴徒たちを使ってイエスを逮捕したり、有罪が確定しないうちからあざけったり侮辱したり、あるいは責めたりなどということが彼らのやり方であって、そうしたことはイエスの方法ではなかった。彼らの行動は法律に違反していた。彼ら自身の法律には、だれでも有罪を立証されるまでは罪のない者として取り扱われねばならないことが明示されていた。彼ら自身の法律によれば、祭司たちは有罪であった。

質問者に向かって、イエスは「なぜ、わたしに尋ねるのか」と言われた（ヨハネ 18： 21）。祭司たちと役人たちは、イエスの動静を監視して、その一言一句を報告させるために スパイを送ったではないか。このスパイたちは、人々が集まるたびにやってきて、イエスの 言行についていちいち情報を祭司たちに伝えたではないか。「わたしが彼らに語ったことは、

それを聞いた人々に尋ねるがよい。わたしの言ったことは、彼らが知っているのだから」とイエスは答えられた（ヨハネ 18：21）。

アンナスはこの決定的な答に沈黙させられた。彼は、かくしておきたいと思っている自分の行動についてイエスから何か言われることを恐れて、この時にはそれ以上何もイエスに言わなかった。役人の 1 人は、アンナスが沈黙させられたのを見て怒りに満ち、イエスの顔を打って、「大祭司にむかって、そのような答をするのか」と言った（ヨハネ 18：22）。 キリストは冷静に答えて、「もしわたしが何か悪いことを言ったのなら、その悪い理由を言いなさい。しかし、正しいことを言ったのなら、なぜわたしを打つのか」と言われた（ヨハネ 18：23）。イエスは報復的な激しいことばを出されなかった。その冷静な答は、挑発されることのない潔白で忍耐強くやさしい心から出たのであった。

キリストは乱暴と侮辱に鋭く心を痛められた。ご自分が創られた人間、しかも無限の犠牲を払おうとしておられる相手の人間の手で、キリストはあらゆる侮辱を受けられた。キリストの苦しみは、ご自分の聖潔の完全さと罪に対する憎しみに比例していた。悪鬼のようにふるまう人たちによって裁判されることはキリストにとってたえまない苦痛であった。サタンの支配下にある人間どもにとりかこまれていることは、キリストにとって心の底から不快な思いであった。神の権力をひらめかせさえすれば、一瞬間にこの残酷な迫害者たちを打ち倒すことができることを、キリストは知っておられた。それだけに裁判は一層耐えがたいものであった。 ユダヤ人は外面的なしるしをもって現れるメシヤを待ち望んでいた。彼らは、キリストが、ちょっとした威圧的な意思だけで人々の思想の流れを変え、いやおうなしにご 自分の主権を認めさせられるものと期待した。このように彼らは、キリストが権力を保持し、彼らの野心的な望みを満足させられるものと信じた。だからキリストが侮辱的な仕打ちを受 けられた時、神性を発揮するようにとの強い試みがイエスにのぞんだ。ひと言葉で、あるい はひと目で、キリストは、ご自分が王たちと役人たち、あるいは祭司たちと宮にまさるおか たであることを、迫害者たちに告白させることがおできになるのである。しかしご自分がえ らばれたその立場を 1 人の人間として守ることがキリストの困難な仕事であった。

天のみ使いたちは愛する主に対するあらゆる行為を目撃した。彼らはキリストを救いたいと熱望した。神の下にある時、天使たちはどんな力でももっている。ある時には、キリストの命令に従って、一晩でアッシリヤ軍の 18 万 5 千人を殺した。天使たちは、キリストの裁判のはずかしい光景を見た時、神の敵どもを全滅させることによってその憤りを表明することも容易にできたのである。しかし彼らはそうするように命令されなかった。敵どもを死の運命に追いやることもおできになったお方が、彼らの残酷さに耐えられた。天父を愛しておられるために、また罪を負う者になることを世の初めに契約されたために、キリストは、救うためにおいでになった相手の人たちの粗暴な仕打ちを不平も言わずに忍ばれた。人々がキリストにあびせることができるかぎりのあらゆる嘲笑と悪口を人性のままで耐え忍ぶことがキリストの使命の一部であった。人類のただ 1 つの望みは、キリストが人々の手と心から受けられるすべてのことに服従されることにあった。

キリストは、訴える者たちに乗ずるすきを与えるようなことは何も言われなかった。それなのにキリストは有罪のしるしとしてしばられた。しかしながら見せかけの公正がなければならなかった。法的な裁判の形式をとる必要があった。当局はこの裁判を急ごうと決心した。彼らはイエスが民衆から尊敬されていることを知っていたので、イエスの逮捕が世間のうわさになると救助が試みられるだろうと恐れた。 それにまた、もし裁判と処刑を一緒にやってしまわないと、過越の祭のために 1 週間遅れるのであった。そうなると彼らの計画が挫折するかも知れなかった。イエスを有罪に定めるために、彼らは、主として、暴徒たち、その多くはエルサレムのやじ馬連中のわめき叫ぶ声をあてにした。もし 1 週間遅れるようなことがあると、興奮は下火になり、反動が起こりそうであった。民衆の中の善良な人たちがキリストのために立ち上がり、多くの人たちが進んでキリストを弁護する証言をたて、キリストのされた偉大な働きを明らかにするであろう。そうなれば、サンヒドリンに対する民衆の怒りが引き起こされるであろう。彼らのやり方が非難され、イエスは釈放されて、多くの人々から新たな尊敬を受けるであろう。そこで祭司たちと役人たちは、自分たちの意図を知られないうちに、イエスをローマ人の手に引き渡そうと決心した。

しかしまず第一に、罪名をみつけ出さねばならなかった。彼らはまだ何の手がかりももっていなかった。アンナスは、イエスをカヤパのところへ連れて行くように命じた。カヤパはサドカイ人に属していたが、そのある者たちはいまやイエスの最も危険な敵となっていた。カヤパ自身、性格的に迫力こそ足りなかっ　たが、アンナスと同じように残忍で、無情で、破廉恥であった。彼はイエスを滅ぼすためなら手段をえらばなかった。時は早朝で、まだ暗か　った。たいまつとあかりをつけて、武器をもった一団が、囚人をつれて大祭司の邸へやって　きた。そこで、サンヒドリンの議員たちが集まってくるまでの間、アンナスとカヤパはふた　たびイエスに質問したが、効果はなかった。　法廷の広間に会議が召集されると、カヤパが議長として席を占めた。そのどちらの側にも裁判官とこの裁判に特別の関心をもっている人た　ちが座を占めた。大祭司の座の下の壇にローマの兵士たちが配置された。イエスは、大祭司　の席の足ドに立たれた。そのイエスに全部の者の視線がそそがれた。興奮は強烈であった。　この群衆の中にあって、イエスだけが冷静でおだやかであった、イエスをとりまいている空　気までが聖なる感化に満ちているように思えた。

カヤパはイエスを競争相手と考えていた。人々が救い主のことばを熱心に聞き、イエスの教えを受け入れそうなのが、大祭司の激しいねたみをひき起こしていた。しかしいまカヤパは、この囚人を見て、その高貴で威厳のある態度に感心させられた。この人は神と同じおかたであるという確信がひらめいた。だが次の瞬間、彼はその思いを嘲笑のうちに打ち消した。たちまち彼の声は、イエスにその偉大な奇跡をみんなの前で行うようにと要求する侮蔑的でおうへいな調子となってひびき渡った。しかし彼の声は救い主の耳にはあたかも聞こえないようであった。人々は、アンナスとカヤパの興奮した、悪意のある態度と、冷静で威厳のあるイエスの態度とをくらべた。かたくなな群衆の心にさえ、神々しい雰囲気をもったこの人を犯罪者として有罪にすべきだろうかという疑問が浮かんだ。

カヤパは、そうした空気が生まれてくるのをみとめると、裁判を急いだ。イエスの反対者たちは非常に困り切っていた。彼らはイエスを有罪に定めようとやっきになったが、どうやってこの目的を達してよいかわからなかった。会議の議員たちは、リサイ人とサドカイ人に分かれていた。彼らの間にはにがにがしい敵意と論争があった。彼らは、口論を恐れて、

ある論争点にはあえてふれようとしなかった。イエスが二言三言言われたら、彼らの間の偏見が刺激され、そのことによって、彼らの怒りをご自身からそらすことがおできになるのだった。カヤパはそのことを知っていたので、論争を引き起こすようなことを避けたいと望んだ。キリストが祭司たちと律法学者たちを公然と非難されたことや、キリストが彼らを偽善者また人殺しと呼ばれたことなどを証明する証人はたくさんいた。しかしそうした証言をいま持ち出すことは得策ではなかった。サドカイ人がパリサイ人との激しい論争中に同じことばをパリサイ人に対して使ったことがあった。またこのような証言は、ローマ人にとってはたいしたことではなかった。というのは彼ら自身パリサイ人の見せかけを不快に思っていたからである。イエスがユダヤ人の言い伝えを無視し、彼らの制度の多くについて不敬なことを言われたという証拠はたくさんあった。しかし言い伝えについても、パリサイ人とサドカイ人は激しい議論をたたかわせていた。そしてこの証拠もローマ人にとってはすこしも重要ではなかった。キリストの反対者たちは、安息日の遵守についてあえてキリストを訴えようとしなかった。その問題を調べることによって、キリストの働きの性格が明らかにされることを恐れたからであった。もしキリストのいやしの奇跡が明るみに出ると、祭司たちの目的そのものがくつがえされるのであった。

イエスが反乱を扇動し、別な政府を作ろうとされたと訴えるために買収された人たちが、偽りの証人となった。しかし彼らの証言は漠然としていて、矛盾だらけであった。取り調べが進むうちに、彼らは自分たちの陳述の偽りを立証した。 キリストは公生涯の初め頃、「この神殿をこわしたら、わたしは 3 日のうちに、それを起すであろう」と斉われた（ヨハネ 2：19）、イエスは預言の比喩的なことばを用いて、ご自身の死とよみがえりをこのように預言 されたのであった。「イエスは自分のからだである神殿のことを言われたのである」（ヨハ ネ 2：21）。ユダヤ人はこのことばを、エルサレムの神殿に ついて言われたものとして、文字通りの意味に受けとった。キリストが言われたすべてのことの中で、イエスを不利な立場 に陥れるために用いることのできるものは、このことば以外にないことを祭司たちは知った。彼らはこのことばを偽って陳述することによって、有利な立場を獲得しようと望んだ。ロー マ人は神殿の再建と装飾に従事したので、この宮を非常に誇りにしていた。神殿に対して少

しでも軽蔑を表明したら、かならずローマ人の憤激が引き起こされるだろう。ここに、ローマ人とユダヤ人、パリサイ人とサドカイ人の一致点が見いだされた。神殿に対してはだれでもみな非常な崇敬の念をいだいていたからである。この点について 2 人の証人がみつかったが、彼らの証言は、ほかの証人たちのように矛盾していなかった。イエスを訴えるように買収されたこの 2 人のうちの 1 人が言った、「この人は、わたしは神の宮を打ちこわし、3 日の後に建てることができる、と言いました」（マタイ 26：61）。このように、キリストのことばは偽って伝えられた。

もしキリストが話されたとおりに正確にこのことばが報告されたら、たとえサンヒドリンでもキリストを有罪にするわけにはいかなかっただろう。もしイエスが、ユダヤ人が主張するようなただの人間だったら、キリストの宣言は、不合理で高慢な精神を表しているだけで、神を冒瀆する罪とまでは解釈されなかっただろう。偽りの証人たちがまちがった陳述をしても、キリストのことばには、ローマ人から死刑に値する犯罪とみなされるようなものは何も含まれていなかった。　イエスは忍耐強く、矛盾する証言を聞かれた。イエスは自己弁護のことばを一言も出されなかった。イエスを訴える者たちは、とうとう話がもつれ、混乱し、逆上した。裁判はすこしも進行しなかった。そして彼らの計略は失敗しそうにみえた。カヤ　パは必死だった、最後に 1 つの手段が残っていた。キリストが自分自身に有罪の宣告をくだ すように仕向けなければならない。大祭司は裁判官の席から立ち上がったが、その顔は怒り　にゆがみ、その声と態度には、もし彼にその権利があったら目の前の囚人を打ち倒すだろう　ということがはっきり表れていた。「何も答えないのか。これらの人々があなたに対して不　利な証言を申し立てているが、どうなのか」と彼は叫んだ（マタイ 26：62）。

イエスは沈黙を守られた。「彼はしえたげられ、苦しめられたけれども、口を開かなかった、ほふり場にひかれて行く小羊のように、また毛を切る者の前に黙っている羊のように、口を開かなかった」（イザヤ 53：7）。 ついにカヤパは、右手を天に向かってあげ、厳粛な宣誓の形式で、イエスに問いかけた。「あなたは神の子キリストなのかどうか、生ける神に誓ってわれわれに答えよ」（マタイ　26：63）。 この訴えに対して、キリストはだまっていられなかった。沈黙すべき時があるとともに、語るべき時があった。イエスは直接問いかけ

られるまでは日を開かれなかった。いま答えることによってご自分の死が確定することをイエスは承知しておられた。しかしいま国民から最高の権威を認められた者によって、いと高き神のみ名のもとに、訴えがなされたのである。キリストは法に対して正しい尊重心を示さないようなことはされなかった。それよりも、ご自身と天父との関係が問題にされたのである。イエスはご自分の性格と使命をはっきり宣言されなければならない。イエスは弟子たちに、「人の前でわたしを受けいれる者を。わたしもまた、天にいますわたしの父の前で受けいれるであろう」と言われたことがあった（マタイ 10：32）。いまイエスは、ご自身の模範によって、この教えをくりかえされた。

イエスが、「あなたの言うとおりである」と答えられた時、だれもがみな耳をそばだてて、目をイエスのお顔にじっとそそいだ。そしてイエスが、「しかし、わたしは言っておく。あなたがたは、間もなく、人の子が力ある者の右に座し、天の雲に乗って来るのを見るであろう」とつけ加えられた時、その青ざめ顔を天の光が照らしたようにみえた（マタイ 26： 64）。

一瞬間、キリストの人としての姿に神性がひらめいた。大祭司は救い主の射るような
11 艮光の前にたじろ いだ。イエスの表情は彼のかくれた意図を見抜き、彼の心に焼きっくように思われた。迫害された神のみ子の鋭い眼光を彼はその後死ぬまで忘れなかった。 「あなたがたは、間もなく、人の子が力ある者の右に座し、天の雲に乗って来るのを見るであろう」とイエスは言われた（マタイ 26：64）。このことばの中に、キリストはその時起こっている場面と反対の場面をお示しになった。生命と栄光の主なるキリストが神の右に座しておられ るというのである。キリストは全地のさばき主となられ、その決定についてもはや訴えるこ とはできないのである。その時すべての秘密の事柄が神のみ顔の光の中に示され、各人の行 為に従ってすべての人に判決が宣告されるのである。

キリストのことばは大祭司を驚かせた。死人のよみがえりがあって、その時すべての者が神のさばきの座に立ち、それぞれの行為にしたがって報いを受けるという思いは、カヤパにとって恐怖すべき思いであった。将来、自分の行為にしたがって宣告を受けるということを、彼は信じたくなかった。最後のさばきの光景が彼の心の中をパノラマのように通りすぎ

た。一瞬間彼は、墓が永遠にかくしておきたいと望んでいるいろいろな秘密とともに死人を手離す恐るべき光景を見た。一瞬、彼は、自分が永遠のさばき主の前に立っていて、すべてのことをごらんになる神の御目が自分の魂を見抜き、死人と共に葬ってしまったと思っていた秘密が明るみに出されているような気がした。

その光景は祭司の視界から消えた。キリストのことばはサドカイ人である彼の神経にさわった。カヤバは、よみがえりとさばきと来世についての教えを否定していた。彼はこんどは悪魔のような狂暴さで怒った。目の前に捕らえられているこの男はわたしの番大事な教理を攻撃しようというのか。彼は、人々が彼のよそおった恐怖心を見こるとができるように、自分の衣を裂いて、単刀直入にこの囚人を冒瀆の罪に定めるようにと要求した。「彼は神を汚した。どうしてこれ以上、証人の必要があろう。あなたがたは今このけがし言を聞いた。あなたがたの意見はどうか」と、彼は言った（マタイ　26：65、66）。そこで彼らはみなイエスを有罪と断定した。

罪の自覚が怒りとまじって、カヤパはこのような行動に出たのであった。彼はキリストのことばを信じることに激しい怒りを覚え、真理の深い自覚のもとに自分の心を裂いてイエスがメシヤであることを告白しようとしないで、断固たる抵抗のうちに祭司の衣を裂いた。この行為には深い意味があった。カヤパはその意味にすこしも気づいていなかった。裁判官たちに影響を及ぼしてキリストを有罪に定めるためになされたこの行為によって、大祭司は自分自身を罪に定めた。神の律法によって、彼は祭司職の資格を失った、彼は自分自身に死刑の宣告をくだしたのであった。 大祭司は衣を裂くべきではなかった。レビ記の律法によると、これは死の宣告をもって禁止されていた。どんな事情があっても、どんな場合にも、祭司は衣を裂いてはならなかった。ユダヤ人の間では、友人が死ぬと衣を裂くのが慣習となっていたが、しかし祭司はこの慣習を守るべきではなかった。このことについて、キリストはモーセにはっきりした命令をお与えになっていた（レビ 10：6 参照）。

祭司の着ているものはすべて完全で傷のないものでなければならなかった。この美しい祭司服によって、大いなる本体であられるイエス・キリストのご品性が象徴されていた。衣服でも態度でも、ことばでも精神でも、神は完全なものしか受け入れることがおできになら

ない。神は聖なるお方であるから、その栄光と完全さが地上の奉仕に表されねばならない。天の奉仕の聖潔は完全なものしか正しく代表することはできない。有限な人間は、悔い改めた、けんそんな精神を表明することによって自分自身の心を裂くことができる。これを神は認めてくださる。しかし祭司の衣を裂いてはならなかった。祭司の衣を裂くことは天の事物の象徴を傷っけるからであった。破れた衣のままあえて祭司の務めに出て来て、聖所の奉仕にたずさわる大祭司は、自分自身を神から切り離し た者とみなされた。衣を裂くことによって、彼は代表的な人物となることを自らたち切ったのである。彼はもはや職務を行う祭司として神から認められなかった。カヤパが示したようなこうした行為は、人間の激情、人間の不完全さを示した。

衣を裂くことによって、カヤパは神の律法を無効にし、人間の言い伝えに従った。人間の作った律法には、神が冒瀆された場合、祭司はその罪の恐ろしさに衣を裂いても罪とされないことが定められていた。こうして神の律法は、人間の律法によって無効にされた。 大祭司の一挙一動は人々から関心をもって見守られていた。そこでカヤパは、効果をあげるために、自分の敬慶さを示したいと思ったのである。しかしキリストを訴えるためにもくろまれたこの行為によって、カヤパは、神が、「わたしの名が彼のうちにある」と言われたお方をののしっていた（出エジプト 23：21）。カヤパ自身が神を冒瀆していたのである。神からの断罪の下にありながら、彼はキリストの上に神の冒瀆者としての宣告をくだした。

カヤパが衣を裂いた時、彼の行為は、ユダヤ国民が 1 つの民としてそののち神に対して占めるべき立場について意義をもっていた。かつては神に祝福された民が彼ら自身を神から隔離し、エホバに否認される民に急変しつつあった。キリストが十字架上で、「すべてが終った」と叫ばれ、神殿の幕が真二つに裂けた時、聖なる監視者であられる神は、ユダヤ人が彼らのすべての型の原型であり、彼らのすべての影の本体であられるキリストを拒否したことを宣言された。イスラエルは神から離縁されたのである。カヤパが、天の大祭司キリストの代表者であると主張していることを示している祭司服をその時裂いたのは当然であった。その祭司服は彼にとっても民にとってももはや何の意味もなくなったからである。大祭司カ

ヤパが自分自身のためにまた国民のために、恐ろしさのあまりその衣を裂いたのは当然であった。

サンヒドリンはイエスを死刑に値する者と宣告した。しかし夜間に囚人を審問することはユダヤ人の律法に反していた。法律上の有罪は、昼間正式に会議を開く以外には宣告をくだすことができなかった。それにもかかわらず救い主はいま罪の宣告を受けた犯罪人としてとり扱われ、最もいやしく、下等な人間どもの虐待の手に引き渡された。大祭司の邸は中庭をかこんでいて、そこに兵士たちや群衆が集まっていた。この庭を通ってイエスは、番兵の詰所へ連れて行かれたが、神のみ子であるというイエスの主張に四方から嘲笑が浴びせられた。「力ある者の右に座し、天の雲に乗ってくる」と言われたイエスのおことばが、ひやかし半分にくりかえされた（マルコ 14：62）。番兵の詰所で正式な裁判を待っておられる間、イエスは保護されなかった。無知な群衆は、イエスが会議の席で残酷にとり扱われたのを見ていたので、彼らも、それにならって、悪魔的な性質の要素を思う存分に発揮した。キリストの気高さと神々しい態度そのものが彼らを狂気にかりたてた。キリストの柔和、純潔、堂々たる忍耐は、彼らのうちにサタンから生ずる憎悪心を満たした。慈悲と正義はふみつけられた。神のみ子イエスの場合ほど非人間的なやり方で扱われた犯罪人はなかった。

しかしもっと鋭い苦悩がイエスの心を裂いた。どんな敵の手もこれより深い苦痛を伴う打撃を与えることはできなかった。カヤパの前で嘲笑的な取り調べを受けておられる時に、イエスはご自身の弟子の 1 人から否認されていたのであった。 園で主を見捨ててから、弟子たちの中の 2 人が、イエスを引き立てて行く群衆のあとから、間隔をおいてついて行った。この弟子たちはペテロとヨハネであった。祭司たちは、ヨハネがイエスの有名な弟子であることを知っていたので、彼が先生の屈辱を目撃したらこんな人を神のみ子として信じていたことを馬鹿らしく思うようになるだろうと希望して、法廷の中へ入れてくれた。ヨハネがペテロのために話をつけてくれたので、ペテロもまた中に入ることができた。

中庭では火を燃やしていた。ちょうど夜明け前で、夜の一番寒い時刻だったからである。一団の人々が火のまわりに集まっていたので、ペテロは無遠慮　に彼らの中に加わった。彼はイエスの弟子であることに気づかれたくなかった。何気なく群衆の中にまじっていることに

よって、彼は、自分がイエスを法廷に引き連れてきた人々の仲間だと思われるように望んだ。 しかし焔の光がペテロの顔を照らすと、戸口のところにいた女がさぐるような目つきで彼を見た。彼女はペテロがヨハネといっしょにはいってきたのを見ていた。女はペテロの顔に落胆の色をみとめ、彼がイエスの弟子であるかも知れないと思った。この女はカヤパの家族の召使いの 1 人で、知りたがりやであった。彼女はペテロに、「あなたも、あの人の弟子のひとりではありませんか」と言った（ヨハネ 18：17）。ペテロはびっくりして、まごついた。居合わせた人々の目がたちまちペテロに釘づけにされた。ペテロは女の言っていることがわからないようなふりをした。しかし女はあくまでもこの男はイエスといっしょにいたとまわりの人たちに言った。ペテロは返事をしないわけにいかないような気がしたので、怒って、「そんな人は知らない」と言った（マタイ 26：72）。これが最初の拒否であった。するとすぐににわとりが鳴いた。ああ、ペテロよ、こんなにたちまち主を恥じるとは。こんなにたちまち主をこばむとは。

弟子のヨハネは、法廷にはいって行ったが、自分がイエスの弟子であることをかくそうとしなかった。彼は。主をののしっている粗暴な連中の中にまじらなかった。彼は正体をかくして嫌疑を受けるようなことをしなかったので、あやしまれなかった。彼は暴徒の目のとどかない片隅に行ったが、しかしできるだけイエスの近くにいた。そこで彼は主の裁判に起こったすべてのことを見たり聞いたりできた。 ペテロは自分の正体を知られないようにくふうしていた。彼は無関心な風をよそおって、敵の陣地に身を置いたので、たちまち誘惑のとりこになった。もし主のために戦うように召されたのだったら、彼は勇敢な戦士だっただろう。しかし嘲笑の指が自分に向けられた時、彼は臆病者であることをばくろした。主のために活動的に戦うことにはしりごみしないのに、嘲笑に負けて信仰を否定する人が多い。避けねばならないものとまじわることによって、彼らは自分自身を誘惑の道に置く。彼らは誘惑するように敵を招いて、ほかの事情のもとでは決して罪を犯さないようなことを、言ったりしたりする。今日、苦難や非難を恐れて信仰を偽装するキリストの弟子は、法廷におけるペテロの場合のように、主をこばむのである。

ペテロは主の裁判に何の関心もないように見せかけようとしたが、主の受けられる残酷なあざけりを聞き、虐待を見ると、心は悲しみにかきむしられるようだった。それにもまして彼が驚き怒ったことは、イエスがこのような仕打ちに身をまかせることによってご自身と弟子たちをはずかしめられることだった。自分の本心をかくすために、彼は、イエスの迫害者たちの時ならぬじょうだんにつとめて加わろうとした。しかし彼の様子は不自然だった。彼は行為によってうそをついていた。彼は、無関心にしゃべろうとつとめていたが、主の上に浴びせられる悪口に憤慨の表情をおさえることができなかった。 ふたたびペテロに注意が向けられ、彼はもう 1 度イエスの弟子であるととがめられた。するとペテロは、こんどは誓って、「その人のことは何も知らない」と断言した（マタイ 26：74）。それでも、もう 1 度機会が彼に与えられた。1 時間が過ぎた頃、大祭司のしもべの 1 人で、ペテロに耳を切られた男の近親の者が、「あなたが園であの人と一緒にいるのを、わたしは見たではないか」とたずねた。そして「確かにあなたも彼らの仲間だ。言葉づかいであなたのことがわかる」と言った（ヨハネ 18：26、マタイ 26：73）。

これを聞いてペテロは急に怒った。イエスの弟子たちはきれいなことばを使うことで有名だった。質問者たちを完全にあざむいて、自分の偽りの正体を正当化するために、ペテロはこんどはきたないことばで主を知らないと誓った。するともう 1 度にわとりが鳴いた。するとペテロはそれを聞いて、「にわとりが 2 度鳴く前に、そう言うあなたが、3 度わたしを知らないと言うだろう」と言われたイエスのことばを思い出した（マルコ 14：30）。 この下等な誓いのことばを出したペテロの舌の根がまだかわかないうちに、そしてにわとりのかん高い鳴き声がまだ彼の耳にひびいていた時に、救い主はしかめつらの裁判官たちの前からふり向いてこのあわれな弟子をまともにごらんになった。同時にペテロの目は主にひきつけられた。そのやさしい顔つきのうちにペテロは深い憐れみと悲しみとを読んだが、怒りのかげはなかった。

青ざめた苦難の顔、ふるえる唇、あわれみとゆるしの顔つき、――そうした光景がペテ　ロの心を矢のように刺し通した。良心がめざめ、記憶がよみがえった。ほんの 2、3 時間前に自分は主といっしょに獄までも死までも行きますと言った約束が思い出された。救い主が 2

階座敷で、彼がその夜主を 3 回こばむであろうと言われた時の悲しみを彼は思い出した。ペテロはイエスを知らないと断言したばかりだったが、いま激しい悲しみのうちに、主が自分をこんなにもよく知っておられ、こんなにも正確に自分の心と、自分自身も知らなかった虚偽を読み取っておられたことに気がっいた。 思い出が潮のように彼を襲った。まちがいを犯している弟子たちに対する救い主のやさしいいつくしみ、その親切と寛容、そのやさしさと忍耐——何もかもが思い出された。彼は、「シモン、シモン、見よ、サタンはあなたがたを麦のようにふるいにかけることを願って許された。しかし、わたしはあなたの信仰がなくならないように、あなたのために祈った」との注意を思い起こした（ルカ 22：31、32）。彼は自分自身の忘恩、虚偽、偽証を恐怖の思いでふりかえった。もう 1 度主を見た時、彼はそこに神聖をけがす手が主の顔を打つためにふりあげられるのを見た。それ以上その場にいられなくなって、彼は、断腸の思いで法廷を走り出た。

ペテロは、孤独と暗黒のうちに道を急いだが、どこへ行くのかわからず、またどこへ行こうとかまわなかった。ついに彼は自分がゲッセマネにいることに気がついた。2、3 時間前の光景が彼の心にまざまざとよみがえった。血の汗にまみれ、苦悩にけいれんしていた主の苦難のお顔が彼の前に浮かびあがった。彼は主がただ 1 人で祈りのうちに泣き苦しんでおられた時、一方ではその試練の時間に主といっしょに苦しむべき者たちが眠っていたことを、激しい後悔とともに思い出した。そして「誘惑に陥らないように、目をさまして祈っていなさい」と詫われた主の厳粛な命令を思い出した（マタイ 26：41）。彼はもう 1 度法廷の場面を目撃した。救い主の屈辱と悲嘆に自分が最も重い負担を加えたことを知ることは、血の出る思いのする彼の心にとって非常な苦痛であった。イエスが苦悶のうちに天父に魂をそそぎ出されたその場所にうつぶせに倒れて、ペテロは死んでしまいたいと思った。

イエスが日をさまして祈りなさいと命じられたのに眠っていた時、ペテロはこの大きな罪に対して道を備えていた。弟∫たちはみな、あの危機の時に眠ったことによって、大きな損失をこうむった。キリストは、彼らが経験しなければならない激しい試練をご存じだった。試練に対する彼らの備えができないように、サタンが彼らの感覚を麻痺させようと働くのをイエスは知っておられた。そこでイエスは彼らに警告をお与えになったのである。園にいた

時間に、目をさまして祈っていたら、ペテロは自分自身の弱い力にたよるがままに放ってはおかれなかったであろう。彼は主をこばむようなことをしなかったであろう。弟子たちがキリストの苦悶に共に目をさましていたら、彼らは十字架上のイエスの苦難を仰ぎ見る備えができていたであろう。彼らはキリストの圧倒的な苦悶の性格をある程度理解したであろう。彼らはご自分の苦難と死とよみがえりを予告しておられたイエスのみことばを思い出すことができたであろう。最も苦しい時の暗やみのさなかにいくらか希望の光がその暗黒を照らし、彼らの信仰をささえたであろう。

夜が明けるとすぐに、サンヒドリンはもう 1 度召集され、イエスはもう 1 度会議室へ連れて行かれた。イエスはご自分が神のみ子であることを宣言されたので、彼らはそのことばからイエスに対する告発を引き出した。しかし彼らは、そのことについてイエスを罪 に定めることができなかった。彼らの多くはその夜の会議に出席していなかったので、イエスのことばを聞かなかったからである。ローマ人の法廷では、そうしたことばが死刑に値するとはまったくみなされないことを、彼らは知っていた。しかしもしイエスの口から直接そうしたことばをもう 1 度みなが聞くことができるなら、彼らの目的は達せられるであろう。イエスがメシヤであることを主張されたら、それを治安妨害する政治上の主張と解釈できるであろう。

そこで彼らは言った。「あなたがキリストなら、そう言ってもらいたい」（ルカ 22：67）。しかしキリストはだまっておられた。彼らはイエスに質問を集中しつづけた。ついに悲哀のこもった調子で、イエスはお答えになった。「わたしが言っても、あなたがたは信じないだろう。また、わたしがたずねても、答えないだろう」（ルカ 22：67、68）。しかし彼らに口実の余地を与えないために、イエスは、「人の子は今からのち、全能の神の右に座するであろう」と厳粛な警告をつけ加えられた（ルカ 22：69）。 彼らは口をそろえて、「では、あなたは神の子なのか」とたずねた。イエスは彼らに、「あなたがたの言うとおりである」と言われた。すると彼らは、「これ以上、なんの証拠がいるか。われわれは直接彼の口から聞いたのだから」と叫んだ（ルカ 22：70、71）。

このようにして、イエスはユダヤ当局者たちから 3 度目の有罪の宣告を受けて死なれることになった。いま必要なことは、ローマ人がこの有罪の宣告を裁可して、イエスを自分たちの手に引き渡してくれることだけだと、彼らは考えた。 それから侮辱と嘲笑の 3 度目の光景が見られたが。それは無知な暴徒たちから受けられたものより一層激しかった。それは祭司たちと役人たちのいる前で、しかも彼らの承知のトに行われた。同情や人情味は、彼らの心からまったく失われていた。彼らの議論が無力でイエスの声を沈黙させられなくても、各時代において異端者たちを沈黙させるために用いられてきたほかの武器、すなわち苦難と暴力と死があった。

裁判官たちがイエスの有罪を宣告すると、人々は悪魔的な狂暴さにとりっかれた。怒号する声は野獣がほえるのに似ていた、群衆は、有罪だ、死刑だと叫びながら、イエスをめがけて突進した。ローマの兵士たちが手を出さなかったら、イエスはカルバリーの十字架に釘づけられるまで生きられなかったであろう。ローマ当局が一卜渉し、武力によって暴徒の暴力を抑えなかったら、イエスは裁判官たちの日の前で八つ裂きにされたであろう。

異教の人たちは、まだ何も有罪の証拠のない人がこのように残虐な取り扱いを受けるのを見て怒った。ローマ人の役人たちは、ユダヤ人がイエスに有罪を宣告したことは、ローマの権力の侵害であり、また本人の証言だけによって死刑に処することはユダヤ人の律法にも反していると宣言した。この干渉は裁判の進行を一時的にゆるめたが、しかしユダヤ人の指導者たちは同情と恥に対して一様に無感覚になっていた。 祭司たちと役人たちは、職務上の威厳を忘れて、口ぎたないことばで神のみ子をののしった。彼らはイエスの生まれをあざけった。彼らは、自らをメシヤと宣言したイエスの僭越さは最も不名誉な死に値すると宣言した。最も堕落した人たちが救い主に対する不当な侮辱に加わった。1 枚の古い衣がイエスの頭にすっぽりかぶせられると、迫害者たちは、イエスの顔を打って、「キリストよ、言いあててみよ、打ったのはだれか」と言った（マタイ 26：68）。衣が取りのけられると、1 人のあわれな恥知らずがイエスの顔につばを吐きかけた。 神の天使たちは、愛する主に対する侮辱の顔つき、ことば、行為を 1 つももらさず忠実に記録した。嘲笑したあげく、冷静な、青ざ

めたキリストの顔につばを吐きかけた卑劣な人たちは、いつか太陽よりも明るく輝く栄光のうちにそのみ顔を見るのである。

第 76 章　ユダ

ユダの歴史には、神からとうとばれたかもしれない人生が不幸な結末を告げたことが示されている。もしユダが、エルサレムへの最後の旅に出る前に死んでいたら、彼は 12 弟子の 1 人としてふさわしい人物とみられ、非常に惜しまれただろう。彼の経歴の終りにあらわされたような特性がなかったなら、各世紀を通じて彼につきまとう嫌悪は存在しなかったであろう。しかし彼の性格が世に公表されたことには 1 つの目的があった。それは彼と同じように聖なる委託を裏切るすべての者に対する警告となるのであった。 過越節のちょっと前に、ユダはイエスを祭司たちの手に売り渡す契約を新たにした。その時、救い主が瞑想と祈りのためによく行かれる場所で主を捕らえる手はずがきめられた。シモンの家での食事の時から、ユダは自分が遂行しようと契約していた行為について反省する機会があったが、彼の意図は変わらなかった。彼は、奴隷の値段の銀 30 枚で、栄光の主を恥辱と死に売り渡した。

ユダは生れっき金銭欲が強かったが、しかしかならずしもこのような行為をするほど堕落しきっていたわけではなかった。貧欲という悪い精神を育てたので、ついにはそれが彼の生活の支配力となっていた。富に対する愛着は、キリストに対する愛よりも比重が大きかった。1 つの悪徳のとりことなることによって、彼はサタンに身をまかせ、どこまでも罪の深みに落ちこんで行ったのであった。

ユダが弟子たちに加わったのは、多くの人々がキリストに従っている時であった。救い主の教えは、会堂や海辺や山上で語られる主のことばにうっとりと聞き入っている彼らの心を動かした。ユダは病人や障害のある人や盲人たちが町々や都市からイエスのもとに群がり集まってくるのを見た。彼は、瀕死の病人がイエスの足下に置かれるのを見た。彼は、救い主が病人をいやし、悪鬼を追い出し、死人をよみがえらせられた偉大なみわざを目に見た。彼は、自らキリストの力の証拠を感じた。

彼は、キリストの教えがこれまで聞いたどんな教えよりもすぐれていることに気づいた。彼は、この大教師を愛し、いっしょにいたいと望んだ。彼は、品性と生活を変えたいという願いを感じ、イエスと関係することによってこのような経験をもちたいと望んだ。救い主は

ユダを拒否されなかった。主は彼を 12 人の中にお入れになった。主はユダが伝道者としての働きをするものと信頼された。主は、病人をいやし悪鬼を追い出す力をユダにおさずけになった。しかしユダはキリストにまったく従いきるところまで行かなかった。彼は世俗的な野心や金銭欲を放棄しなかった。キリストに仕える立場を受け入れながら、一方では天来の型にはまろうとしなかった。彼は自分自身の判断と意見を持っていてもよいと考え、批判と非難の精神を育てた。

ユダは弟子たちから非常に尊敬され、彼らに対して大きな影響力を持っていた。彼自身も自分の資格を高く評価し、兄弟たちが判断力においても能力においても自分よりずっと劣っているとみなしていた。この人たちは機会を見てそのチャンスを利用することのできない人たちだと、彼は考えた。見通しのきかないこんな人たちを指導者にしていたら教会は決して繁栄しないだろうと、考えた。ペテロは、衝動的で、前後の考えなく行動する人間だった。ヨハネは、キリストの口から出る真理を大事にしているが、ユダから見れば金のやりくりはへただった。マタイは、自分の受けた訓練から万事に正確でなければならないことを教えられていたので、正直という点に非常にやかましかった。そしてユダからみれば、彼はたえずキリストのみことばを瞑想し、それに心を奪われていたので、抜け目なく先のことまで考えなくてはならない事業をまかせることはできなかった。このようにユダは弟子たちを全部かぞえあげてみて、もし事務的な才能のある自分がいなかったら、教会はしばしば困難と混乱に陥るだろうとうぬぼれた。ユダは自分がだれに もだまされない有能な人間であると考えた。彼は自分こそみわざにとって誉れとなるべき人間であると自己評価し、いつもそのように言いふらしていた。

ユダは自分自身の品性の弱さに盲目だったので、キリストは、ユダが自分の欠点に気づいて直す機会のある立場に彼を置かれた。弟子たちの会計係として、彼はこの小さな群れの必要に備え、また貧しい人々が困っているのを助ける立場に召された。過越の部屋でイエスがユダに、「しようとしていることを、今すぐするがよい」と言われた時、弟子たちは、イエスが食事に必要なものを買うように命じられたか、あるいは貧しい人々に何かやるように命じられたものと思った（ヨハネ 13：27）。ほかの人たちに仕えることによって、ユダは無

我の精神を養うことができたのだった。しかしユダは、毎日キリストの教訓を聞き、その無我の生活を目に見ながら、貪欲な性質をほしいままにしていた。彼の手に渡されるわずかな金銭がたえず誘惑となった。キリストのためにすこしばかり奉仕したり、宗教的な目的のために時間をささげたりすると、彼はしばしばそのとぼしい資金の中から自分自身に支払った。彼自身の目には、そうした口実が自分の行為の言いわけになった。だが神の御目には、彼は泥棒であった。

キリストが、わたしの王国はこの世の王国ではないとしばしばくりかえされたことばがユダをつまずかせた。彼は、キリストが働かれると思われる分野をきめていた。彼はバプテスマのヨハネが牢獄から救われるように計画した。しかし見よ、ヨハネは、首を切られてしまった。そしてイエスは、王権を主張することも、ヨハネの死に復讐することもなさらずに、弟子たちと田舎にひきこもられた。ユダはもっと攻勢的な戦いを望んだ。もしイエスが弟子たちの計画の実行を引きとめられなければ、働きはもっとうまくいくだろうと彼は考えた。彼はユダヤ人の指導者たちの間に高まる敵意をみとめ、彼らがキリストに天のしるしを求めた時、その挑戦撫視されたのを見た。彼の心は不信に向かって開かれていたので、敵は疑問と反逆の思いを吹きこんだ。なぜイエスはがっかりするようなことばかり言われるのだろう。なぜご自分や弟子たちが裁判や迫害を受けることを予告されるのだろう。

新しい王国で高い地位につけるという見込みから、ユダはキリストのみわざを支持するようになったのだ。彼の望みは裏切られるのだろうか。ユダは、イエスが神のみ子でないとは断定していなかった。しかし彼は疑い、キリストの偉大なみわざについて何か説明をみいだそうと求めていた。 救い主ご自身の教えにもかかわらず、ユダは、キリストがエルサレムで王として統治されるという考えをたえず表明していた。5 千人が養われた時、彼は、このことを実現させようとした。その時ユダは、空腹の群衆に食物をくばるのを手伝った。彼は、自分にも人のためになることをする力があることを知る機会が与えられた。彼は、神への奉仕にかならず伴う満足感を味わった。彼は、群衆の中から病人や苦しんでいる人たちをキリストのもとに連れて行くのを手伝った。彼は、救い主のいやしの力を通して、人々の心にどんなにか安心とよろこびが与えられるのを見た。彼は、キリストの方法を理解できるはずだ

った。しかし彼は自分自身の利己的な欲望によって盲目になっていた。ユダは、パンの奇跡によってひき起こされた興奮をまっさきに利用した。キリストを無理やりにおしたてて王にしようとする計画に乗り出したのは彼だった。彼の望みは大きく、その失望は激しかった。

キリストが会堂で生命のパンについて話されたことがユダの歴史における転機であった。「人の子の肉を食べず、また、その血を飲まなければ、あなたがたの内に命はない」ということばを、彼は聞いた（ヨハネ 6：53）。彼はキリストが世俗的な幸福よりも霊的な幸福を提供しておられることを知った。彼は自分に先見の明があると思っていたので、イエスが栄誉を受けられることもなく、また弟子たちに高い地位をお与えになることもないということがわかったと思った。彼は離れることができないほど密接にイエスに結びつくことはすまいと決心した。彼は見張っていようと思った。そしてその通り見張っていた。 その時から、彼は、弟子たちを混乱させるような疑惑を表明した。彼は議論と人をまよわせる意見とを持ち込み、学者たちやパリサイ人たちがキリストの主張に反対してとなえる議論をくりかえした。

大小の心配や苦労、福音の進展にとっての困難や妨害とみえるものなどはすべて福音が真実なものではない証拠であるとユダは解釈した。彼はキリストが述べておられる真理とは何の関係もない聖句をよく持ち出した。こうした聖句は、前後関係を抜きにされると、弟子たちを困惑させ、たえず彼らを襲っている落胆を増し加えた。しかもこうしたことはすべて、自分を良心的にみせるようなやり方でなされた。そして弟子たちが大教師イエスのみことばを確認する証拠をさがしていると、ユダは彼らを気がっかないうちにほかの道へ連れ込むのだった。こうして彼は、宗教的でしかも賢明そうに見える方法で、物事をイエスがお与えになったのとはちがった光に照らして見せ、イエスが意図されなかった意味をそのみことばにつけ加えていた。彼の言うことはこの世の立身出世に対する野心的な欲望をたえずかきたて、こうして弟子たちを彼らが考慮すべきであった重大な事がらから離れさせていた。彼らの中でだれが最高の地位につけられるかということについての争いは、たいていユダがひき起こしたものであった。

イエスが富める若い役人に、弟子としての条件を示された時、ユダはよろこばなかった。彼はイエスがまちがいを犯されたと考えた。この役人のような人たちを信者の仲間に加えることができたら、どんなにかキリストのみわざの助けになるだろうと、彼は考えた。もし自分が助言者として受け入れられさえしたら、この小さな教会の利益になるような多くの計画を提案できるのだがと、彼は考えた。自分の原則や方法は、キリストのそれよりいくらか異なっているだろうが、しかしそうしたことでは、自分の方がキリストより賢明なのだと、彼は思った。　キリストが弟子たちに言われたすべてのことの中には、ユダが心の中で同意できないものがあった。彼の感化によって不満というパン種が急速に作用していた。弟子たちは　すべてこうしたことの真因が分らなかった。しかしイエスは、サタンが自分の特性をユダに　伝え、こうして、ほかの弟子たちに感化を及ぼす道が開かれっっあることを見ておられた、　そのことをイエスは、ご自分が裏切られる 1 年前に断言された。「あなたがた 12 人を選んだのは、わたしではなかったか。それだのに、あなたがたのうちのひとりは悪魔である」と、　イエスは言われた（ヨハネ 6：70）。

しかしユダは公然と反対もしなければ、救い主の教えを問題にする様子もなかった。シモンの家で食事をした時まで、彼は不平を外にもらさなかった。マリヤが救い主の足に油をそそいだ時、ユダはその貪欲な性質をあらわした。イエスから譴責されて、彼の精神はにがい恨みに変わったようであった。傷つけられた誇りと、復讐心とが壁を打ち倒し、長い間ほしいままにしていた貧欲が彼を支配した。このことはまた罪をいつまでももてあそんでいる人間の経験となる。堕落の要素に抵抗し、これに打ち勝たないならば、それは、サタンの誘惑に応じ、その魂はサタンの思いのままにとりことなるのである。　しかしユダはまだまったくかたくなになりきってはいなかった。救い主を売り渡すことを 2 回約束したあとでも、悔い改める機会があった。過越の晩餐の時に、イエスは反逆者の意図をばくろすることによつてご自分の神性を証明された。イエスは、弟子たちにお仕えになった時に、やさしくユダもその中に加えられた。しかし最後の愛の訴えは無視された。その時ユダの問題は決定した。そしてイエスが洗っておやりになった足は、裏切り者の仕事へと出て行ったのである。

もしイエスが十字架につけられるものなら、その事件はかならず起こるのだと、ユダは推論した。救い主を売り渡す自分自身の行為は結果を変えないであろう。もしイエスが死なれないのなら、自分の行為はイエスがご自分を救われるのを促進するにすぎないだろう。いずれにしても、自分は、裏切り行為によつていくらかもうかるのだ。彼は、主を裏切ることによってりこうな取引をしたと計算した。　しかしながらユダは、キリストが捕らえられろことを承知されるとは信じなかった。裏切ることによって、キリストに思い知らせることが彼　の目的だった。今後キリストが、正当な尊敬をもって彼を取り扱うように注意されるように、ユダは自分の役割を果たすつもりだった。　しかしユダは、自分がキリストを死に渡しているとは知らなかった。救い主が讐によって教えられた時、律法学者たちとパリサイ人たちはそ　のきわだった例話を何度われを忘れて聞いたことだろう。何度彼らは自分自身に不利な宣告　をくだしたことだろう。彼らの心に事実が思い知らされると、彼らは怒りに満たされ、石を　拾ってイエスに投げつけようとしたことが何度あったことだろう。しかしイエスは何度も何　度もお逃げになった。これほど何回もわなをのがれられたのだから、とても捕らえられるが　ままにはされまいとユダは思った。

ユダはためしてみようと決心した。もしイエスが本当にメシヤなら、イエスに多くのことをしてもらった民衆はイエスのもとに集合して、イエスを王として宣言するだろう。そうすれば、現在もやもやしている多くの人々の心が永久に決着するだろう。王をダビデの位につけた功績は自分のものとなるだろう。そしてこの行為によって自分は新しい王国でキリストに次ぐ最高の位を獲得するであろう。　この偽りの弟子はイエスを売り渡す役割を演じた。ゲツセマネの園で、ユダが暴徒のかしらたちに、「わたしの接吻する者が、その人だ。その人をつかまえろ」と言った時、彼は、キリストが彼らの手から逃げられるものと信じきっていた（マタイ 26：48）。そうしたら、もし彼らがユダを責めたら、だからしっかりつかまえなさいと言ったではないかと彼は言うことができるだろう。

ユダはキリストを捕らえる人たちが、ユダのことばどおりに、キリストを固くしばるのを目に見た。彼は救い主が連れて行かれるままになられるのを見て驚いた。彼は心配して、園からユダヤ人の役人たちが裁判するところへイエスについて行った。彼は、イエスが彼ら

の前に神のみ子として現れ、彼らの計略や権力をうちくだいて、反対者たちを驚かされるだろうと、その一挙一動を見守った。しかし時々刻々過ぎても、イエスがあらゆる悪口を浴びせられるがままになっておられるのを見て、この裏切り者は、主を死に売り渡してしまったという恐怖に襲われた。　裁判が終りに近づくと、ユダは罪を犯した良心の苛責に耐えられなくなった。突然しゃがれ声が法廷にひびき渡り、すべての人々の心に恐怖の戦懐を与えた。ああ、カヤパよ、その人に罪はありません。助けてやってください。　その時、背の高いユダの姿が、びっくりした人々の中を突進して行くのが見られた。彼の顔は青ざめ、やつれ果て、そのひたいには大粒の汗が吹き出していた。彼は裁判長の席に走りよると、主を売り渡した　代価である銀 30 枚を大祭司の前に投げた。そして、カヤパの衣を力いっぱいにつかみながら、イエスは死に値するようなことは何もしなかったのだと断言して、その釈放を嘆願した。カ　ヤパは怒ってユダを払いのけたが、混乱してしまって何と言ってよいかわからなかった。祭　司たちの不信行為がばくろされた。彼らがこの弟子を買収して主を裏切らせたことが明らか　となった。

「わたしは罪のない人の血を売るようなことをして、罪を犯しました」とユダはまた叫んだ。大祭司は落ちっきを取り戻しながら、あざけりの色を浮かべて、「それは、われわれの知ったことか。自分で始末するがよい」と答えた（マタイ　27：4）。祭司たちは進んでユダを自分たちの道具にした。しかし彼らはユダの卑劣さをあざけった。ユダが彼らに向かって告白した時、彼らははねつけた。　ユダは、こんどはイエスの足下に身を投げて、イエスが神のみ子であることを告白し、どうかご自分を救ってくださるようにと嘆願した。救い主はご自分を裏切った者を責められなかった。主はユダが悔い改めていないことを知っておられた。彼の告白は不義の魂に迫られ、自分の罪についての自覚とさばきを恐れる思いから出たものであった。彼は自分が罪のな　い神のみ子を売り渡し、イスラエルの聖者をこばんだことについて、心の底からの深い悲しみを感じていなかった。しかしイエスは、非難のことばを出されなかった。主は、あわれみをもってユダをごらんになり、この時のためにわたしは世にきたのだと言われた。

驚きのささやきが集まっている人々の中に起こった。彼らは、自分を裏切った者に対するキリストの寛容さを驚きの思いをもって見た。この人はただの人間ではないという確信がもう 1 度わき起こった。だがもし彼が神のみ子なら、どうして束縛からのがれて、告発者たちに勝利されないのだろうと、彼らは疑った。 ユダは自分の嘆願がむだなことを知ると、もうだめだ、もうだめだと叫びながら法廷から走り出た。彼はイエスが十字架につけられるのを見ながら生きてはいられない気がした。そして絶望のあまり、出て行って自ら首をつって死んだ。 その同じ日の遅くに、ピラトの法廷からカルバリーへの途中、イエスを十字架の処刑場へ引っ張って行く邪悪な群衆の喚声と嘲笑がとだえた。人目につかない寂しい場所を通り過ぎた時、彼らは枯れた木の根もとにユダの死体を見たのである。それは目をそむけたくなるような光景であった。ユダが木につるして首をつったひもは、からだの重みで切れていた。彼のからだは落ちて無惨につぶれ、犬どもがいまそれをむさぼり食べていた。彼の遺体はすぐ目に見えないところに埋められた。群衆の間にはあざけりが少なくなり、多くの青ざめた顔が内心の思いをあらわしていた。イエスの血について罪を犯した人たちの上に、すでに報いがおとずれているようにみえた。

第 77 章　ピラトの法廷で

ローマ人総督ピラトの法廷に、キリストは、囚人として拘束されて立たれる。イエスのまわりには警備の兵士たちが立ち、法廷は見物人でたちまちいっぱいになる。入口のすぐ外側には、サンヒドリンの裁判官たち、祭司たち、役人たち、長老たち、それにやじ馬連中がいる。 イエスを有罪に定めてから、サンヒドリンの会議は、その判決の確認と執行をピラトに願い出ていた。しかしこれらのユダヤ人当局者たちは、ローマ人の法廷にはいろうとしなかった。彼らの儀式の律法によれば、そうすることによって彼らはけがれ、したがって過越の食事に加わることができないのであった。盲目的な彼らは、自分たちの心が殺人的な憎悪によってけがされていることに気づかなかった。キリストが真の過越の小羊であられるということ、そしてそのおかたをすてたからにはこの大いなる食事は彼らにとって何の意味もなさなくなっているということが、彼らにはわからなかった。

救い主が法廷に連れてこられると、ピラトは好意的な目で主を見なかった。このローマ人総督はあわただしく寝室から呼び出されたので、できるだけ早く仕事を片づけようと決心していた。彼はこの囚人を行政長官らしいきびしさでとり扱うつもりでいた。できるだけきびしい表情を浮かべながら、彼は、休息中の自分がこんなに朝早くから呼び出されるとはいったいどんな種類の男を調べなくてはならないのだろうと思って向き直った。彼は、これが　ユダヤ人当局者たちが裁判と処刑を急いでもらいたがっている人間にちがいないとわかっ　た。ピラトはイエスを護衛している人たちを見、それからさぐるような目つきをじっとイエ スにそそいだ。彼はこれまであらゆる種類の犯罪人をとり扱わねばならなかった。しかしこ　んなに善良で気高い様子をした人間が彼の前に引き出されたことはかつてなかった。　彼はイエスの顔に何の罪の影も、恐れの表情も、大胆不敵さもみられなかった。彼は、その顔つき　に犯罪人の特徴ではなく、天の特性があらわれている　おだやかで、威厳のある態度の人を見た。キリストの様子はピラトに好ましい印象を与えた。ピラトの性質のよい一面が目覚めた。彼はこれまでイエスとその働きについて聞いていた。彼の妻は、このガリラヤの預言者がふ　しぎなわざを行って、病人をいやしたり死人をよみがえらせたりしたことなどをいくらか彼　に話したことがあった。いまそのことが夢のようにピラトの心によみがえってきた。彼は 2、

3 の方面から聞いたうわさを思い出した。彼はこの囚人に対する告発をユダヤ人自身にやらせようと決心した。

この男はだれか、あなたがたは何のためにこの男をつれてきたのか、この男に何の罪があると言うのか、とピラトは言った。ユダヤ人たちは当惑した。彼らはキリストに対する告発を証拠だてることができないことがわかっているので、公開の尋問を望まなかった。彼らは、この男がナザレのイエスという詐欺師であると答えた。 ふたたびピラトはたずねた、「あなたがたは、この人に対してどんな訴えを起すのか」（ヨハネ 18：29）。祭司たちはこの質問に答えないで、彼らのいらだちをあらわしていることばで、「もしこの人が悪事をは　たらかなかったなら、あなたに引き渡すようなことはしなかったでしょう」と言った（ヨハ　ネ 18：30）。サンヒドリンを構成している人たち、すなわち国の最高の地位にある人たちが、死刑に値すると考えられる人間をあなたのところへつれてくる時、その訴えについてどうし　てたずねる必要があろうか。彼らは、自分たちの重要性についての認識をピラトに印象づけ、それによって多くの予備尋問を経ないで、彼らの依頼に応じさせようと望んだ。彼らは自分　たちの宣告を裁可してもらいたいと熱心に望んだ。キリストのふしぎなみわざを目撃した人　たちが、いま彼らが並べたてているつくりごととは異なった話をすることができるというこ　とを彼らは知っていたからである。

祭司たちは、気が弱くて考えのぐらぐらするピラトを通して、彼らの計画を問題なく実行できると考えた。これより前、ピラトは、死刑に値しないと彼らにわかっているような人たちに死刑を宣告して、その死刑命令書に軽率に署名していた。彼の目には、囚人の生命などたいしたことではなかった。その囚人が無罪であるかそれとも有罪であるかは、何も特別重要なことではなかった。祭司たちは、ピラトがキリストの言い分を聞かないで、いまイエスに死刑を言い渡すように望んだ。このことを彼らは、彼らの国の大祭にあたっての 1 つの恩典として求めた。　しかしこの囚人のうちには、そうすることをピラトにちゅうちょさせる何ものかがあった。彼はあえてそうしなかった。ビラトは祭司たちの意図を見抜いた。彼は、死んでから 4 日もたった男ラザロをイエスがよみがえらせたのはそんなに前のことではなか

ったことを思い出した。そこで彼は、有罪の判決に署名する前に、イエスに対する告発が何であるか、そしてそれは証明できるかどうかを知ろうと決心した。

もしあなたがたの判決が十分であるならば、なぜこの囚人をわたしのところへ連れてきたのだと、彼は言った。「あなたがたは彼を引き取って、自分たちの律法でさばくがよい」（ヨハネ 18：31）。こう迫られると、祭司たちは、イエスにすでに判決をくだしたが、その有罪の宣告を有効にするにはピラトの宣告が必要なのだと言った。あなたがたはどんな宣告をくだしたのだと、ピラトはたずねた。死刑の宣告です、しかし「わたしたちには、人を死刑にする権限がありません」と彼らは答えた（ヨハネ 18：31）。彼らは、キリストの有罪についてピラトが彼らのことばを信じてその宣告を執行してくれるようにとたのんだ。その結果については、自分たちが責任を負うというのだった。

ピラトは正しい、あるいは良心的な裁判官ではなかった。しかし道徳的な力は弱かったが、彼はこの願いを許可することをことわった。彼は、イエスに対する告発の理由が述べられないかぎり、有罪の宣告をくだそうとしなかった。 祭司たちは苦境に陥った。彼らは自分たちの偽善をいちばん奥深いところへ隠さねばならないことを知っていた。キリストが宗教上の理由で捕らえられたことをみせてはならなかった。これを理由として持ち出したら、彼らの訴えはピラトに何のききめもない であろう。イエスが一般の法律に反したことを行っているようにみせねばならない。そうしたらイエスを政治犯として処罰できるであろう。ローマ人の統治に対する騒動や反乱がしじゅうユダヤ人の間に起こっていた。ローマ人は、こうした反乱をきびしく取りしまり、暴動になりそうなことはどんなことでも弾圧するようにたえず警戒していた。

これよりほんの 2、3 日前、パリサイ人たちは、「カイザルに貢を納めてよいでしょうか、いけないでしょうか」とたずねてキリストをわなにかけようとした。しかしキリストは彼らの偽善をばくろされた。居合わせたローマ人たちは、「カイザルのものはカイザルに……返しなさい」とのイエスの返事に、陰謀家たちが完全に失敗し、ろうばいするのを見たのだった（ルカ 20：22～25）。 そこで祭司たちは、こんどは、自分たちの頭でつくりあげたことを、キリストが教えられたかのようにみせかけようと思った。彼らは、苦しまぎれ

に、偽りの証人たちを助けに呼び、「訴え出て言った、『わたしたちは、この人が国民を惑わし、貢をカイザルに納めることを禁じ、また自分こそ王なるキリストだと、となえているところを目撃しました』」（ルカ 23：2）。ここに 3 つの点について告発がなされたが、そのどれも根拠のないものだった。祭司たちはそのことを知っていたが、目的をとげることができさえすれば、偽証することをいとわないのだった。

ピラトは、彼らの意図を見抜いた。彼は、この囚人が政府に対して陰謀をくわだてたということを信じなかった。イエスの柔和なへりくだった様子はこの告発にまったく不似合いだった。ユダヤ人の高官たちの邪魔になっているこの罪なき人間を滅ぼすために根深い陰謀がめぐらされているということを、ピラトは確信した。イエスに向かって彼はたずねた。「あなたがユダヤ人の王であるか」。救い主は、「そのとおりである」とお答えになった（マルコ 15：2）。こう言われた時、イエスの顔つきはあたかも太陽の光線に照らされているかのように輝いた。 イエスの答を聞くと、カヤパやいっしょにいた人々は、イエスがその告発された罪を認めたことをピラトが証言するように求めた。騒々しい叫び声をあげて、祭司たち、律法学者たち、役人たちは、イエスに死刑の宣告をくだすようにと要求した。その叫び声にやじ馬たちが加わって、喚声は耳もつぶれるばかりであった。ピラトは困惑した。イエスが告発者たちに何の返事もされないのを見て、ピラトはイエスに言った。「何も答えないのか。見よ、あなたに対してあんなにまで次々に訴えているではないか」（マルコ 15：4）。それでもイエスは、何もお答えにならなかった。

法廷の全部の人たちの面前で、キリストは、ピラトのうしろに立って、そののののしり声を聞かれた。しかしご自分に対してどんなに偽りの告発がなされても、主は一言もお答えにならなかった。その態度の全体はイエスが無罪を意識しておられることを示していた。イエスはご自分のまわりに打ちつける荒々しい波に動かされることなく立っておられた。それはあたかも怒りの大波が、荒れ狂う大洋の波のようにだんだん高くもりあがってイエスのまわりに砕けるが、イエスにはとどかないようなものだった。主はだまって立っておられたが、しかしその沈黙は雄弁であった。それは人の内面から外面を照らしている光のようであった。

ピラトはイエスの態度に驚いた。この人は自分のいのちを救いたくないので裁判の進行を無視しているのだろうかと、彼は心の中で問うてみた。報復もしないで侮辱と嘲りに耐えておられるイエスを見て、この人にはあのわめいている祭司たちのような不義や不正があるはずがないとピラトは感じた。イエスから真実を引き出し、群衆の騒ぎからのがれたいと望んで、ピラトは、イエスをかたわらに引きよせ、もう 1 度「あなたは、ユダヤ人の王であるか」とたずねた（ヨハネ 18：33）。 イエスはこの質問に直接お答えにならなかった。イエスは、聖霊がピラトと争っているのを知っておられたので、彼が自分の確信を認める機会をお与えになった。「あなたがそう言うのは、自分の考えからか、それともほかの人々が、わたしのことをあなたにそ う言ったのか」とイエスはおたずねになった（ヨハネ 18：34）。

すなわち、ピラトにそのような質問をさせたのは、祭司たちの訴えなのか、それともキリストから光を受けたいという望みなのかというのであった。ピラトはキリストの言われた意味を理解した。しかし彼の胸中に誇りがあたまをもたげた。彼は自分のうちにわきあがった確信を認めようとしなかった。そして、「わたしはユダヤ人なのか。あなたの同族や祭司長たちが、あなたをわたしに引き渡したのだ。あなたは、いったい、何をしたのか」と言った（ヨハネ　18：35）。 ピラトの貴重な機会は過ぎ去った。それでもイエスは、彼にもっと光を与えないではおかれなかった。イエスはピラトの質問に直接お答えにはならなかったが、ご自分の使命をはっきり述べられた。イエスは、ご自分がこの世の王位を求めているのでは　ないことを、ピラトに理解させられた。　イエスは言われた、「『わたしの国はこの世のものではない。もしわたしの国がこの世のものであれば、わたしに従っている者たちは、わたし　をユダヤ人に渡さないように戦ったであろう。しかし事実、わたしの国はこの世のものでは　ない』。そこでピラトはイエスに言った、『それでは、あなたは王なのだな』。イエスは答　えられた、『あなたの言うとおり、わたしは王である。わたしは真理についてあかしをする　ために生れ、また、そのためにこの世にきたのである。だれでも真理につく者は、わたしの　声に耳を傾ける』」（ヨハネ 18：36、37）。

キリストは、ご自分のことばそのものが、それを受け入れる気持ちのある者にとっては神秘を解く鍵であることを肯定された。みことばはそれ自体にすばらしい力があって、これ

がキリストの真理のみ国を発展させる秘訣であった。イエスは、ピラトが真理を受け入れてそれを自分のものにすることによってのみ彼の堕落した性質はつくり直されるのだということを理解するように望まれた。 ピラトは真理を知りたいと願った。彼の心は混乱していた。彼は熱心に救い主のことばをとらえ、彼の心は、それが本当に何であるか、またどのようにしたらそれを自分のものにすることができるかを知りたいとの熱望に動かされた。「真理とは何か」とピラトはたずねた。

しかし彼は返事を待たなかった。外部の騒ぎが彼の関心を当面の問題に引きもどした。祭司たちが今すぐ判決をくだすようにわめきたてていたからである。ピラトはユダヤ人たちのところへ出て行くと、力をこめて、「わたしには、この人になんの罪も見いだせない」と宣言した（ヨハネ 18：38）。

異教の裁判官のこのことばは、救い主を訴えているイスラエルの役人たちの不誠実と虚偽に対する痛烈な譴責であった。祭司たちと長老たちがピラトのことばを聞いた時、彼らの失望と怒りはとどまるところを知らなかった。彼らは長い間陰謀をめぐらしてこの機会を待っていたのだ。イエスが釈放されそうな形勢をみると、彼らはいまにもイエスを八つ裂きにしそうな様子をみせた。彼らは大声でピラトを攻撃し、ローマ政府から譴責されるぞと言っておどした。彼らは、ピラトがイエスの有罪をこばんだことを非難し、イエスはカイザルに反対して立ちあがった人間なのだと断言した。 怒った人々が口々にイエスの扇動的な感化は全国に知れ渡っていると断言するのがこんどは聞かれた。祭司たちは、「彼は、ガリラヤからはじめてこの所まで、ユダヤ全国にわたって教え、民衆を煽動しているのです」と言った（ルカ 23：5）。

ピラトは、この時、イエスを有罪に定めようとは思っていなかった。ユダヤ人が憎悪と偏見からイエスを訴えたことが彼にはわかっていた。彼は自分の義務が何であるかを知っていた。正義はキリストを直ちに釈放することを要求した。しかしピラトは民衆の悪意を恐れた。イエスを彼らの手に渡すことをこばめば、騒動がもちあがるであろう。彼はそのような騒ぎにまきこまれることを恐れた。ピラトは、キリストがガリラヤの出身だと聞くと、その地方の領主ヘロデがちょうどエルサレムにきていたので、キリストを彼のもとに送ることに

きめた。この手順によって、ピラトは、裁 判の責任を自分からヘロデへ移そうと思った。彼はまたこのことを、自分とヘロデとの昔のけんかを和解するよい機会だと考えた。そして実際その通りになったのであった。この 2 人の行政長官は救い主の裁判をめぐって親しくなった。

ピラトがイエスをふたたび兵士たちに引き渡したので、イエスは、嘲笑と侮辱の中をヘロデの法廷へ追いたてられた。「ヘロデはイエスを見て非常に喜んだ」。彼はまだ救い主に会ったことがなかったが、「かねてイエスのことを聞いていたので、会って見たいと長いあいだ思っていたし、またイエスが何か奇跡を行うのを見たいと望んでいたからである」（ルカ 23：8）。このヘロデは、バプテスマのヨハネの血で手をけがしたヘロデである。ヘロデは、初めてイエスのことを聞いた時、恐怖におそわれて、「わたしが首を切ったあのヨハネがよみがえったのだ」「それで、あのような力が彼のうちに働いているのだ」と言った（マルコ 6：16、マタイ 14：2）。それでもヘロデはイエスに会いたいと望んだ。いまこの預言者のいのちを救う機会がきたのだ。そこで王は、血にまみれた首を大皿にのせて持ってこられたあの記憶を永久に心の中から追い払いたいと望んだ。彼はまた自分の好奇心を満足させたいと望み、キリストはもし釈放される見込みがあればたのまれることを何でもされるだろうと思った。

祭司たちと長老たちの大群がキリストについてヘロデのところへやってきていた。そして救い主が中へ入れられると、これらの高官たちはみな興奮してしゃべりながら、キリストに対する訴えをのべたてた。しかしヘロデは彼らの訴えにほとんど注意を払わなかった。彼は、キリストのなわをとくように命令し、同時にキリストの反対者たちが彼を手荒に取り扱っていることを非難した。世のあがない主の平静なお顔を同情をもって見入った彼がそこに読みとったものは知恵と純潔だけであった。ピラトと同様にヘロデもまた、キリストが悪意とねたみから訴えられているということを確信した。

ヘロデがキリストに多くのことばで質問したが、その間ずっと救い主は深い沈黙をつづけられたすると、王の命令によって、よぼよぼの障害者たちが呼ばれ、キリストは奇跡を行なってその主張を証明するように命令された。人々はあなたが病人をいやすことができると

言っている。　広くひろがっているあなたの評判がうそでないことをわたしは見たいのだと、ヘロデは言った。イエスはお答えにならなかったのでヘロデはなおも言い張った。もしあな　たが他人のために奇跡を行うことができるのなら、いまそれを自分自身のために行いなさい、そうしたらあなたのためになるだろうと。ふたたび彼は、うわさに聞く力があなたにあると　いう証拠を示せと命令した。しかしイエスは見聞きしていない人のようであった。神のみ子　は人の性質をおとりになった。彼は同様な事情のもとで人がしなければならないようになさ　らねばならない。だからイエスは、人が同様な立場に置かれたときに耐え忍ばねばならない　苦痛と恥辱から自分がまぬかれるために奇跡を行おうとされなかった。

ヘロデは、もしキリストが目の前で何か奇跡を行われるなら、釈放しようと約束した。キリストを訴えた人たちはキリストの力で偉大なわざが行われたのを彼ら自身の目で見ていた。彼らは、キリストが墓に死人を解放するように命令されるのを聞いた。彼らは、その声に従って死人が出てくるのを見た。彼らはいまキリストが奇跡を行われはしないかと恐怖におそわれた。何よりも彼らが恐れたのは、キリストの力のあらわれであった。このような力のあらわれは、彼らの計画にとって致命的な打撃となり、おそらく彼らの生命さえ危いかも知れないのだった。ふたたび祭司たちと役人たちが、非常に心配しながら、キリストに対する訴えを主張した。彼らは声を張りあげて、彼は反逆者だ、彼は冒瀆者だ、彼は悪鬼の王ベルゼブルから与えられた力で奇跡を行うのだと断言した。人々が日々にいろいろなことを叫んだために、法廷は混乱の場となった。

ヘロデの良心は、ヘロデヤからバプテスマのヨハネの首を求められて恐ろしさに身ぶるいした時ほどい　まは敏感ではなくなっていた、しばらくの間彼は自分の恐ろしい行為に鋭い後悔の痛みを感じていた。しかし彼の道徳的観念はその放縦な生活のためにますます堕落した。いま彼の心は、ヨハネが自分を責めたから彼に刑罰をくだしたのだと自慢できるほどまでにかたくなになっていた。そしていま彼は、自分はイエスを釈放することも罪に定めることもできる権力を持っているのだと何度も宣言して、イエスをおどした。しかしイエスの様子には、一言でも聞かれたような証拠はみられなかった。　ヘロデはこの沈黙にいらだった。それは彼の権威に対してまったく無関心を示しているようにみえた。虚栄心の強い、尊大な

王にとって、このように無視されることは公然と譴責されるよりも不愉快だった。ふたたび彼は腹立たしげにイエスをおどかしたが、あいかわらずイエスは平静にだまっておられた。

この世におけるキリストの使命は、いたずらな好奇心を満足させることではなかった。主は、心の傷ついた者をいやすためにこられた。罪に悩む魂の傷をいやすために何かことばを語るのであったら、主はだまってはおられなかったであろう。しかしイエスは、真理をけがれた足で踏みつけることしかしないような者たちに対しては、何も言われることがなかった。 キリストは、このかたくなな王の耳を刺し通すようなことばを、ヘロデに言うこともおできになった。イエスは、ヘロデの前に彼の生活のあらゆる不義と彼にのぞもうとしている破滅の恐怖を示すことによって、彼を恐怖でふるえあがらせることもおできになった。しかしキリストの沈黙は、主がお与えになることのできた最もきびしい譴責であった。ヘロデは最も偉大な預言者によって彼に語られた真理をこばんだので、もうほかのメッセージは受けられないのであった。天の大君には彼のために語られることばがなかった。人類の苦悩に対していつも開かれていた耳は、ヘロデの命令を聞く余地はなかった。悔い改めた罪人の上にいつもそそがれていた憐れみとゆるしを語るイエスの愛の目は、ヘロデに向けられる様子がなかった。最も感動的な真理を語り、この上なくやさしい願いをこめて最も罪深い者と最も堕落した者に訴えられた唇は、救い主の必要を感じない高慢な王に対してはとざされていた。

ヘロデの顔は激怒で赤くなった。群衆の方を向くと、彼は、怒ってイエスは詐欺師だと非難した。それからキリストに彼は言った。もしあなたが主張通りの証拠を示さないならば、わたしはあなたを兵士たちと民衆の手に引き渡そう。彼らはあなたに語らせることができるかも知れない。もしあなたが詐欺師なら彼らの手にかかって死ぬのがあなたには一番ふさわしいのだ。もしまたあなたが神の子なら奇跡を行なって自分自身を救いなさいと。 このことばが語られたとたんに、人々はわっとキリストめがけて押しよせた。野獣のように、群衆は その餌食に突進した。イエスはあちらこちらへ引きずられ、ヘロデもやじ馬に加わって神の み子をはずかしめようとした。ローマの兵士たちが間にはいって、狂気の群衆を押し返さな かったら、救い主は八つ裂きにされてしまわれたであろう。

「ヘロデはその兵卒どもと一緒になって、イエスを侮辱したり嘲弄したりしたあげく、はなやかな着物を着せ……た」（ルカ 23：11）。ローマの兵士たちもこの虐待に加わった。これらの邪悪な、堕落した兵卒たちが、ヘロデとユダヤ人の高官たちに勢いづけられて、挑発できる限りのことが救い主に対してなされた。それでもイエスの天来の忍耐は変わらなかった。 キリストの迫害者たちは、彼ら自身の品性でキリストの品性をおしはかろうとした。彼らはキリストが彼らと同じような悪い人間であるように言いふらしていた。しかし現在のあらゆる外観の奥に別な光景、すなわち彼らがいつかはあらゆる栄光のうちに見る光景が現れた。キリストの前でうちふるえた者もあった。粗暴な群衆がからかいながらキリストの前に頭をさげていた時、同じ意図で進み出た者の中には、恐れて無言のまま引き返す者たちがいた。ヘロデは罪を自覚した。あわれみの光の最後の光線が、罪に固まった彼の心を照らしていた。この人はただの人 間ではないと、彼は感じた。人性を通して神性がひらめいていたからであった。キリストが嘲る者たちや姦通者たちや殺人者たちにとりかこまれておられたその時、ヘロデは、み座についておられる神を見ているような気がした。

ヘロデはかたくなではあったが、キリストの有罪を裁可しようとはしなかった。彼はこの恐るべき責任からまぬかれたいと望んで、イエスをローマ人の法廷に送りかえした。 ピラトは失望し、非常に不愉快に思った。ユダヤ人たちが囚人をつれて戻ってくると、彼はいらいらして、いったいわたしにどうしてもらいたいのだとたずねた。わたしはすでにイエスをとり調べたが、彼には何の罪もみいだされなかったではないかとピラトは彼らに注意した。 おまえたちはイエスについて苦情を訴えてきたが、その告発を 1 つも証明できなかったではないかと、彼は言った。ガリラヤの領主であり、おまえたちの同国人であるヘロデにイエスを送ったが、彼もまたイエスのうちに死刑に相当するものを何 1 つみいだすことができなかったのだ。「だから、彼をむち打ってから、ゆるしてやることにしよう」と、ピラトは言った（ルカ 23：16）。

ここでピラトは彼の弱さをあらわした。彼はイエスの無罪を宣言しておきながら、訴える者たちをなだめるためにイエスがむち打たれることに賛成した。彼は暴徒たちと妥協するために、正義と原則を犠牲にするのであった。このために彼は不利な立場に陥った。群衆は、

彼の優柔不断につけこんで、囚人の生命を要求してますますわめいた。もし最初にピラトが断固とした態度をとって、無罪とわかった人間に有罪を宣告することを拒否したら、彼は、彼を一生しばりつけた悔恨と罪とがの致命的な鎖をたち切ることができたであろう。もし彼が正義についての自分の確信を実行していたら、ユダヤ人がつけあがって彼に命令するようなことはなかったであろう。キリストは死刑にされたであろうが、それでもその罪がピラトに着せられることはなかったであろう。しかしピラトは 1 歩 1 歩自分の良心を犯した。彼は、正義と公平をもって裁判することを言いのがれたので、いまや祭司たちと役人たちの手に陥ってほとんど無力になっている自分に気がついた。動揺と優柔不断が彼の破滅となった。

それでもなおピラトは盲目的に行動することをゆるされなかった。神からのメッセージが、彼の犯そうとしている行為について警告した。キリストの祈りに答えて、ピラトの妻のもとに天からみ使いがおとずれ、夢の中で、彼女は救い主を見、共に語ったのであった。ピラトの妻はユダヤ人ではなかったが、夢の中でイエスを見た時、イエスの性格や使命に疑いをもたなかった。彼女はイエスが神の君であろことを知った。彼女は、イエスが法廷でさばかれるのを見た。彼女はその手が犯罪人の手のように固くしばられるのを見た。彼女はヘロデと兵卒たちが恐ろしい働きをしているのを見た。また祭司たちと役人たちがねたみと悪意に満ちて、気狂いのように訴えるのを聞いた。「わたしたちには律法があります。その律法によれば、彼は……死罪に当る者です」ということばを彼女は聞いた（ヨハネ 19：7）。彼女は、ピラトが「彼にはなんの罪も見いだせない」と言ってから、イエスをむち打ちのために引き渡すのを見た（ヨハネ 19：6）。彼女はピラトが有罪の宣告をくだすのを聞き、キリストを殺人者たちに引き渡すのを見た。彼女はカルバリーに十字架がたてられるのを見た。彼女は地が暗黒につつまれるのを見、「すべてが終った」という神秘的な叫びを聞いた。さらに彼女の目はもう 1 つの光景を見た。彼女はキリストが大いなる白い雲に乗り、一方地は空間に揺れ動き、キリストを殺した者たちがその栄光の前から逃げ出すのを見た。恐怖の叫び声をあげて目をさますと、彼女は、すぐピラトにあてて警告のことばを書いた。

ピラトがどうしたらよいかためらっていると、1 人の使者が群衆をおしわけて進んで来て、彼の妻からの手紙を手渡した。それにはこう書かれていた。 「あの義人には関係しない

でください。わたしはきょう夢で、あの人のためにさんざん苦しみましたから」（マタイ 27:19）。 ピラトの顔は真っ青になった、彼は自分自身の矛盾する感情に困惑した。しかし彼がぐずぐずしている間に、祭司たちと役人たちは、さらに一層民衆の心をあおりたてていた。　ピラトは決断を迫られた。彼はキリストの釈放に役立つかも知れない 1 つの慣例を今思いついた。この祭の時に、民衆に選ばせて囚人を誰か 1 人釈放するのが慣例となっていた。この習慣は異教の発明によるもので、その中には正義の影すらなかったが、ユダヤ人はこの習慣を非常に重んじていた。この時、ローマ当局は、死刑の宣告を受けたバラバという囚人を留置していた。この男は自分がメシヤであると主張していた。彼は、これまでと異なった秩序をうちたて、世直しをする権限をもっていると主張した。悪魔的な欺隔のもとに、彼は窃盗や強盗によって手に入れることができる物は何でも自分のものだと主張した。彼はサタンの媒介によってふしぎなわざを行い、民衆の中から信者を獲得し、ローマ政府反対を扇動していた。宗教的な熱心さという仮面のもとに、彼は反逆と残酷なことしか考えない強情で命知らずな悪人だった。この男と、罪のない救い主とのどちらかを選ばせることによって、ピラトは、人々のうちに正義感をめざめさせようと考えた。

彼は民衆が祭司たちや役人たちに反対して、イエスに同情するようにしたいと望んだ。そこで群衆の方へ向いて、非常な熱心さで、「おまえたちは、だれをゆるしてほしいのか。バラバか、それとも、キリストといわれるイエスか」と言った（マタイ　27：17）。 野獣がほえるように、「バラバをゆるしてくれ」という群衆の答えがあがった。「バラバ、バラバ」という叫び声がますます高まって行った。自分の質問の意味が人々にわからなかったのだろ　うと思って、ピラトは「おまえたちはユダヤ人の王をゆるしてもらいたいのか」とたずねた（マルコ　15：9）。しかし彼らはふたたび大声で叫んで言った。「その人を殺せ。バラバをゆるしてくれ」（ルカ　23：18）。「それではキリストといわれるイエスは、どうしたらよいか」と、ビラトはたずねた（マタイ　27：22）。大波のように動いている群衆はふたたび悪鬼のようにほえた。悪鬼そのものが、人間の姿をとって群衆の中にいたのだから、「十字架につけよ」という答えよりほかに何を期待することができよう。

ピラトは困惑した。彼はこんなことになろうとは考えていなかった。彼は罪のない人間をこの上ない不名誉で残酷な死に引き渡すことをちゅうちょした。わめき声がやむと、ピラトは人々に向かって言った。「では、この人は、いったい、どんな悪事をしたのか」（ルカ 23：22）。しかし事態はもう議論の段階を過ぎていた。彼らが求めたのはキリストの無罪の証拠ではなくて、キリストの有罪の宣告であった。 それでもピラトはイエスを救おうと努力した。「ピラトは 3 度目に彼らにむかって言った、『では、この人は、いったい、どんな悪事をしたのか。彼には死に当る罪は全くみとめられなかった。だから、むち打ってから彼をゆるしてやることにしよう』」（ルカ 23：22）。イエスの釈放を口にしたことが人々を 10 倍もの狂乱に駆りたてた。彼らは「十字架につけよ、十字架につけよ」と叫んだ。ピラトの優柔不断が生んだ嵐はますます高まっていった。

イエスは、疲労で弱り、からだじゅう傷ついたまま、捕らえられて、群衆の見ている前でむち打たれた。「兵士たちはイエスを、邸宅、すなわち総督官邸の内に連れて行き、全部隊を呼び集めた。そしてイエスに紫の衣を着せ、いばらの冠を編んでかぶらせ、『ユダヤ人の王、ばんざい』と言って敬礼をしはじめた。また……つばきをかけ、ひざまずいて拝んだりした」（マルコ 15：16）。時々悪者がイエスの手に持たせてあった葦の棒を引ったくり、それでイエスのひたいの上の冠をたたいていばらを頭につきさしたので、血がイエスのお顔とひげをつたわってしたたり落ちた。 ああ天よ、驚嘆せよ、ああ地よ、驚け。迫害する者たちと迫害されるお方とを見よ。狂気した群衆が世の救い主をとりかこんでいる。嘲りと冷笑が冒瀆のきたないことばに入りまじる。冷酷なやじ馬たちがイエスのいやしい生れと貧しい生活を口にする。神の み子であるというイエスの主張がからかわれ、俗悪な冗談と侮辱的な冷笑が口から口へ伝わる。

残酷な暴徒たちに救い主を虐待させたのはサタンであった。できればイエスのうちに復讐心を起こさせるか、あるいはイエスがご自分の釈放のために奇跡を行われるようにしむけることによって、救いの計画を破壊することがサタンの目的であった。イエスの人間生活に 1 つでも欠点があれば、あるいはイエスの人性が恐るべき試練に 1 度でも耐えられなかったら、神の小羊は不完全な供え物となり、人類のあがないは失敗したのである。しかし、命令しさ

えすれば天の万軍をご自分の助けに呼ぶことがおできになるお方が、天の威光をひらめかせることによって暴徒たちを恐怖のうちに目の前から追い払うことができたお方が、最も下等な侮辱と暴行とをどこまでも平静に受けられたのであった。

キリストの反対者たちは神性の証拠として奇跡を要求した。彼らは、彼らが求めたどんな証拠よりも大きな証拠を与えられた。キリストの迫害者たちがその残酷さのために人間以下になりさがってサタンに似た者となったように、イエスはその柔和と忍耐によって人間以上に高められ、神とひとしいお方であることを証明された。イエスの屈辱はイエスが高められることの保証であった。イエスの傷ついたこめかみから顔とひげを伝わって流れた苦悩の血のしたたりは、イエスがわれらの大祭司として「喜びのあぶら」をそそがれることの保証であった（ヘブル 1：9）。 救い主をどんなに虐待してもその口から一言のつぶやきも出させることができなかったことを知った時、サタンは激しく怒った。イエスは、人の性質をとっておられたが、神のような堅固さによってささえられ、どの点においても、天父のみこころから離れたまわなかった。

ピラトがイエスをむち打ちと嘲りに引き渡した時、彼は群衆の同情心を起こそうと考えた。彼は、人々がこのことを十分な刑罰だと決定するように望んだ。祭司たちの敵意もそれで満足させられるだろうと、彼は考えた。しかしユダヤ人たちは、鋭い目で、無罪を宣告された人間をこのように罰することの弱点を見抜いた。彼らは、ピラトが囚人のいのちを助けようとしていることがわかっていたので、イエスを釈放してはならないと決心していた。われわれをよろこばせ満足させるために、ピラトは彼をむち打たせたのだ、もし事態を決定的な結果にまで追い込めば、確実に目的を達することができると、彼らは考えた ピラトはいま、バラバを法廷に連れてくるように呼びにやった。それから彼は、2 人の囚人を並べて、救い主の方を指さしながら、重々しい嘆願の口調で、「見よ、この人だ」「わたしはこの人をあな　たがたの前に引き出すが、それはこの人になんの罪も見いだせないことを、あなたがたに知　ってもらうためである」と言った（ヨハネ 19：5、4）。

神のみ子は、あざけりの衣といばらの冠をつけて立っておられた。腰まで衣をはがされたその背中には、残酷なむちの跡が尾を引いていて、そこから血がとめどなく流れていた。

イエスのお顔は血に染み、疲労と苦痛の跡があらわれていた。しかし、この時ほどイエスのお顔が美しく見えたことはなかった、救い主の顔つきは、反対者たちの前にあって醜くならなかった。お顔のつくりの 1 つ 1 つがやさしさと忍従と残酷な敵に対する最もやさしい同情とをあらわしていた。イエスの態度には臆病な弱さがなく、寛容の力と威厳があった。イエスのかたわらの囚人はこれとはいちじるしく対照的であった。バラバの顔つきのどの線も、彼がまさしく手に負えない悪党であることを物語っていた。その対照は見る者の一人一人に語りかけた。見物人の中には泣いている人たちもいた。イエスをながめて、彼らの心は同情でいっぱいになった。祭司たちと役人たちさえ、イエスがご自分の主張された通りのお方であることを自覚した。

キリストをとりかこんでいたローマの兵士たちの全部が無慈悲だったわけではない。ある者たちは、イエスが犯罪人か危険な人物である形跡が 1 つでもあらわれているかどうか熱心にその顔を見守った。時々彼らはふり返ってバラバに軽蔑の視線を投げた。彼を腹の底まで見抜くのには深い洞察力はいらなか った。ふたたび彼らはさばきにかけられているお方に向き直るのであった。彼らは、この聖なる受難者を深い同情の思いをもってながめた。キリストの無言の服従は、彼らがこのお方をキリストとして認めるまで、あるいはこのお方をこばんで自分自身の運命を決定するまで、決して消し去ることのできない光景を彼らの心に焼きつけた。 ピラトは、救い主が不平も言わずに忍耐しておられるのを見て驚きの念に満たされた。彼は、ユダヤ人たちが、バラバとくらべて、この人を見れば、心を動かされて同情するだろうと信じて疑わなかった。しかし彼は、世の光として祭司たちの暗黒と誤りを明らかにされたキリストに対する彼らの熱狂的な憎しみがわからなかった。彼らは、暴徒たちを気違いじみた激情へ駆りたて、ふたたび祭司たち、役人たち、民衆が、「十字架につけよ、十字架につけよ」と恐ろしい叫び声をあげた。ついにピラトは、彼らの道理をわきまえない残酷さにすっかり忍耐心を失いながら、絶望的な叫びをあげて言った。「あなたがたが、この人を引き取って十字架につけるがよい。わたしは、彼にはなんの罪も見いだせない」（ヨハネ 19：6）。

このローマ人総督は、残酷な場面を見なれていたが、有罪を宣告されてむち打たれ、額と裂けた背中から血を流しながらもなお王座にある王のような態度を保っているこの受難の囚人に対する同情に心を動かされた。しかし祭司たちは、「わたしたちには律法があります。その律法によれば、彼は自分を神の子としたのだから、死罪に当る者です」と言明した（ヨハネ 19：7）。 ピラトははっとした。彼は、キリストとその使命について正しい観念を持っていなかったが、神について、また人間よりもまさった存在について漠然とした信仰を持っ ていた。前に 1 度彼の心を通りすぎた 1 つの思いが、いまもっとはっきりした形をとって現れた。嘲りの紫の衣を着、いばらの冠をかぶって目の前に立っているのは神ではないだろう かと彼は疑った。

もう 1 度ピラトは法廷に入って行って、「あなたは、もともと、どこからきたのか」とイエスに言った（ヨハネ 19：9）。しかしイエスは返事をされなかった。救い主はすでにピラトに十分語り、真理の証人としてのご自分の使命について説明されたのだった。ピラトはその光を無視したのだった。彼は原則と権威を暴徒たちの要求に屈服させることによって、裁判官という高い職務をけがしたのだ。イエスは彼のためにそれ以上の光をお与えにならなかった。イエスの沈黙にいらだって、ピラトは横柄に言った。「何も答えないのか。わたしには、あなたを許す権威があり、また十字架につける権威があることを、知らないのか」（ヨハネ 19：10）。

イエスは答えて言われた、「あなたは、上から賜わるのでなければ、わたしに対してなんの権威もない。だから、わたしをあなたに引き渡した者の罪は、もっと大きい」（ヨハネ 19：11）。 このように、憐れみ深い救い主は、激しい苦難と悲しみの最中にも、イエスを十字架につけるために引き渡したローマ人総督の行為をできるだけゆるしておやりになった。これはいつまでも世にも伝えられるべき何というとうとい光景だったことだろう。それは全地のさばき主であられるキリストの品性に何というとうとい光を放ったことだろう。 「わたしをあなたに引き渡した者の罪は、もっと大きい」とイエスは言われた。キリストは、大祭司としてユダヤ国民を代表しているカヤパのことを言われたのである。彼らはローマ当局を支配している原則を知っていた。彼らはキリストをあかししている預言について、またキリ

ストご自身の教えと奇跡について光を与えられていた。　ユダヤ人の裁判官たちは、彼らが死刑を宣告したお方の神性についてまちがう余地のない証拠を与えられていた。そこで彼らは、彼らの光にしたがってさばかれるのであった。　最も大きい罪と最も重い責任は、国民の中で最高の地位を占めている人たち、卑劣にも自ら裏切りつつあった聖なる信任の受託者たちに　あった。ピラトもヘロデもローマの兵士たちも、イエスについては比較的に無知だった。彼　らは、イエスを虐待することに　よって祭司たちと役人たちをよろこはせようと思った。彼らは、ユダヤ国民が豊かに受けたような光を与えられていなかった。もし兵士たちに光が与え　られていたら、彼らはあんなにも残酷にキリストをとり扱うようなことはしなかったであろ　う。

ふたたびピラトは、救い主を釈放するようにと提案した。「しかしユダヤ人たちが叫んで言った、『もしこの人を許したなら、あなたはカイザルの味方ではありません』」（ヨハネ 19：12）。このように、これらの偽善者たちはカイザルの権威を熱心に支持しているようなふりをした。ローマ人による統治に反対する者たちの中で、ユダヤ人は最も激しかった。彼らは、安全な時には、彼ら自身の国の規則と宗教上の規則を最も圧制的に励行したが、何か残虐な目的を達成しようと望む時には、カイザルの権力を称賛した。キリストの破滅を達成するために、彼らは自分たちが憎んでいる外国の法律に対する忠誠を口にするのだった。

「自分を王とするものはすべて、カイザルにそむく者です」と彼らは言い続けた（ヨハネ 19：12）。これはピラトの急所をついていた。彼はローマ政府から疑いの目で見られていたので、こんなうわさをたてられたら身の破滅になることを知っていた。もしユダヤ人を妨害すれば、その怒りが自分に向けられることを彼は知っていた。彼らは復讐をとげるためには、手段をえらばないであろう。現にピラトの目の前に、彼らが理由もなく憎悪している人間の生命をどこまでもねらっている 1 つの例があるのだ。 それからピラトは、裁判官席にすわり、ふたたびイエスを人々に示して、「見よ、これがあなたがたの王だ」と言った（ヨハネ 19：14）。するとふたたび「殺せ、殺せ、彼を十字架につけよ」という狂気じみた叫びがあがった。ピラトは遠近に聞こえるような声で、「あなたがたの王を、わたしが十字架につ

けるのか」とたずねた。しかし、不敬虔で冒瀆的な口から、「わたしたちには、カイザル以外に王はありません」ということばが出てきた（ヨハネ 19：15）。

こうして異教の統治者を選ぶことによって、ユダヤ国民は神権政治から離れた。彼らは自分たちの王として神をこばんだ。これからは彼らに救済主はないのだった。彼らにはカイザルのほかに王がなかった。民をここまで引っぱってきたのは祭司たちと教師たちであった。このために、彼らは、その後に起こった恐るべき結果に責任があった。国民の罪、国民の破滅は、宗教界の指導者たちに原因があった。　「ピラトは手のつけようがなく、かえって暴動になりそうなのを見て、水を取り、群衆の前で手を洗って言った、『この人の血について、わたしには責任がない。おまえたちが自分で始末をするがよい』」（マタイ 27：24）。恐れと自責の念で、ピラトは救い主を見た。上向きのおびただしい顔の波の中で、イエスのお顔　だけが平和であった。イエスの頭のあたりにはやわらかな光が輝いているようにみえた。ピ　ラトは、心の中で、この人は神だと言った。ピラトは、群衆の方をふり向いて断言した。わ　たしは彼の血に責任がない。おまえたちがこの人を引き取って十字架につけるがよい。だが　祭司たちと役人たちよ、よく聞け、彼は正しい人間だぞ。今日のこのしわざについては、彼　が自分の父と主張している神が、わたしではなくおまえたちをさばかれるように。次にピラ　トは、イエスに言った。この行為についてわたしをゆるしていただきたい、わたしはあなた　を救うことができない。そして彼は、ふたたびイエスをむち打ったのち、十字架につけるた　めに引きわたした。

ピラトはイエスを救いたいと望んだ。しかしそうすれば自分の地位と名誉を保つことができないことを彼は知った。この世の権力を失うより、彼は罪のない人間を犠牲にする方を選んだ。　同様に、損失と苦難とをまぬかれるために原則を犠牲にする者がどんなに多いことだろう。良心と義務は 1 つの方向をさし示し、利己心はほかの方向をさし示す。潮流はまちがった方向へ強く流れるので悪と妥協する者は不義という深い闇へ押し流される。ピラトは暴徒たちの要求に屈服した。彼は自分の地位を危険にさらすよりも、イエスを十字架につけるために、引きわたした。しかし彼の用心にもかかわら　ず彼の恐れていたことがのちになって彼の身に起こった。彼は名誉をはぎとられてその高い地位から追われ、キリストの十字架

ののちまもなく、悔恨と傷つけられた誇りに苦しみながら、自らのいのちをたった。このように、罪と妥協する者はみな悲哀と破滅だけしか得られないであろう。「人が見て自ら正しいとする道でも、その終りはっいに死に至る道となるものがある」（箴言 14：12）。

ピラトが、自分はキリストの血について責任がないと宣言した時、カヤパは挑戦的に「その血の責任は、われわれとわれわれの子孫の上にかかってもよい」と答えた（マタイ 27：25）。この恐ろしいことばは祭司たちと役人たちにとりあげられ、それは群衆によって人間とは思えないような絶叫となって反響した。全群衆は答えて言った。「その血の責任は、われわれとわれわれの子孫の上にかかってもよい」。　イスラエルの民は彼らの選択をした。イエスを指さして、彼らは「その人ではなく、バラバを」と言った（ヨハネ 18：40）。強盗であり殺人者であったバラバは、サタンの代表者であった。キリストは神の代表者であった。　キリストがしりぞけられ、バラバが選ばれた。彼らはバラバをもらうことになった。この選　択をするに当って、彼らは、始めからうそつきで人殺しだった彼を受け入れたのである。サ　タンが彼らの指導者であった。国民として彼らはサタンの命令を実行するのであった。サタ　ンのわざを、彼らはするのであった。サタンの統治に彼らは服しなければならない。キリス　トの代わりにバラバを選んだ民は、時の続くかぎりバラバの残酷さを感じるのであった。

うたれた神の小羊をながめながら、ユダヤ人たちは、「その血の責任は、われわれとわれわれの子孫の上にかかってもよい」と叫んだ（マタイ 27：25）。その恐るべき叫びは、神のみ座にのぼって行った。彼らが自らの上にくだしたその宣告は、天に記録された。その祈　りは聞かれた。神のみ子の血は、永遠ののろいとなって、彼らの子らとそのまた子らの上に　あった。 それは、恐ろしくもエルサレムの滅亡に実現された。それは、恐ろしくも 1800 年間にわたってユダヤ国民の状態にあらわされてきた。すなわち彼らは、ぶどうの木から切り　離された枝、集められて焼かれる枯れた、実をむすばない枝であった。世界中どこの国でも、幾世紀にわたって、彼らは、罪とがのうちに死んだ。

その祈りは、恐ろしくも大いなるさばきの日に成就するのである。キリストが、やじ馬どもにかこまれた囚人としてではなく、ふたたびこの地上にこられる時、人々は彼を見るのである。その時彼らは、イエスを天の王として見るのである。キリストはご自身の栄光と、

天父の栄光と、聖天使たちの栄光のうちに、こられる。勝ち誇った美しい神の子ら、千々万々の天使たちが、比類のない美しさと栄光とをもって、キリストの道中につき従うのである。その時キリストは、栄光の王座におすわりになり、その前に万国の民を集められる。その時すべての目はキリストを見るが、キリストを刺した者たちもまた見るのである。いばらの冠の代わりに、キリストは、栄光の冠――冠の中の冠をつけておられる。あの古い紫の王衣の代わりに、キリストは、「どんな布さらしでも、それほどに白くすることはできない」ほどの真白い衣を着ておられる（マルコ 9：3）。「その着物にも、そのももにも、『王の王、主の主』という名がしるされている」（黙示録 19：16）。キリストをあざけり、打ちたたいた人たちもそこにいる。祭司たちと役人たちは、ふたたびあの法廷の光景を見る。あらゆる出　来事が、火の文字で書かれているかのように、彼らの前に現れる。「その血の責任はわれわ　れとわれわれの子孫の上にかかってもよい」と祈った人たちは、この時、その祈りの答を受　けるのである。その時全世界は、知り、そして理解する。

彼らは、あわれな、弱々しい、有限な人間である自分たちが誰と戦い、何と戦ってきたかに気がつくのである。恐ろしい苦悩と恐怖のうちに、彼らは山と岩とに向かって叫ぶであろう。「さあ、われわれをおおって、御座にいますかたの御顔と小羊の怒りとから、かくまってくれ、、御怒りの大いなる日が、すでにきたのだ。だれが、その前に立つことができようか」（黙示録 6：16、17）。

第 78 章　カルバリー

「されこうべと呼ばれている所に着くと、人々はそこでイエスを十字架につけ……た」（ルカ 23：33）。 「イエスもまた、ご自分の血で民をきよめるために、門の外で苦難を受けられたのである」（ヘブル 13：12）。神の律法を犯したために、アダムとエバはエデンから追放された。キリストはわれわれの身代りとして、エルサレムの境界の外で苦難を受けられるのであった。主は門の外で死なれたが、そこは重罪人たちと殺人者たちが処刑されるところであった。「キリストは、わたしたちのためにのろいとなって、わたしたちを律法ののろいからあがない出して下さった」ということばには深い意味がある（ガラテヤ 3：13）。

おびただしい群衆が法廷からカルバリーまでイエスのあとについて行った。イエスの有罪についての知らせがエルサレム中にひろまり、あらゆる階級と地位の人々が処刑場へむらがり集まった。祭司たちと役人たちは、もしキリスト自身を自分たちの手に引き渡してもらえば、その弟子たちは苦しめないと約束していたので、弟子たちも信者たちも、エルサレムの町や周囲の地方からやって来て、救い主のあとをついて行く群衆に加わった。 イエスがピラトの邸の門を通り過ぎられると、バラバのために用意されていた十字架が、イエスの傷ついて血の流れる肩にのせられた。バラバの仲間が 2 人イエスと同時に処刑されることになっていて、彼らの上にも十字架が背負わされた。苦しみ弱りはてた状態にある救い主には、その荷は重すぎた。弟子たちと一緒に過越の食事をとられてから、イエスは食べることも飲むこともされなかった。イエスは、ゲッセマネの園で、サタンの勢力との戦いに苦しまれた。主は裏切られた苦悩に耐え、弟子たちがご自分を見捨てて逃げるのをごらんになった。

主は、アンナスのところへ、それからカヤパのところへ、そしてピラトのところへと連れて行かれた。主は、ピラトのところからヘロデのもとへ送られ、またピラトのところへ送りかえされた。侮辱に新たな侮辱を、嘲笑に嘲笑を加えられ、むち打ちによって 2 度苦しめられ、一晩中、人間の魂を極度に試みるような性質の場面が次々に続いたのであった。キリストは失敗されなかった。主は神の栄えとなるのに役立つことばよりほか語られなかった。恥知らずな裁判の茶番劇の間中ずっと、イエスはしっかりした威厳のある態度を保たれた。

しかし 2 度目のむち打ちのあと、十字架が主に背負わされると、人性はもはや耐えられなかった。主はその重荷の下に、気を失って倒れてしまわれた。

救い主についてきた群衆は、イエスの弱々しい、よろめく足どりを見たが、何の憐れみも示さなかった。彼らは、イエスが重い十字架を運ぶことができないといって、あざけりのののしった。ふたたび軍荷はイエスの上におかれたが、ふたたびイエスは気を失って地面に倒れてしまわれた。迫害者たちは、これ以上イエスが重荷を運ぶことができないことを知った。彼らは、この屈辱的な荷を運んでくれる者をさがすのに困惑した。ユダヤ人自身がそうするわけにいかなかった。けがれると過越節を守ることができなくなるのであった。イエスのあとについてきたやじ馬連中さえ、恥を忍んで自分が十字架を運ぼうという者は 1 人もいなかった。

この時、いなかからやって来たクレネ人のシモンという他国人が群衆に行き会う。彼は群衆の口汚いののしりの声を耳にする。いかにも軽蔑したように、ユダヤ人の王さまのお通りだぞということばがくりかえされるのが聞こえる。彼はその場の光景に驚いて立ちどまる。シモンが同情した顔つきをしていると、人々は彼をつかまえて、その肩に十字架をのせ る。　シモンはイエスのことを聞いていた。彼の息子たちは救い主の信者であったが、彼自身は弟子ではなかった。カルバリーまで十字架をかついで行ったことは、シモンにとって恵み　であった。彼はその後いつ　もこの摂理を感謝した。彼はこの経験から自ら進んでキリストの十字架を背負い、その重荷によろこんで耐えるようになった。

有罪の宣告を受けておられないイエスのあとについて行って、その残酷な死を見とどけようとする群衆の中にかなりたくさんの女たちがいる。彼女たちの注意はイエスにそそがれる。その中のある者たちは、以前イエスに会ったことがある。ある者たちは、病人や苦しんでいる人たちをイエスのもとに連れて行ったことがある。ある者たちは自分自身いやしてもらったことがある。その時に起こった出来事について物語が述べられる。彼女たちは、イエスのために自分たちの心が動かされ、いまにも張りさけそうなのに、イエスに対する群衆の憎しみを見てふしぎに思う。しかし狂気した群衆の行為と祭司たち役人たちの怒ったことば

にもかかわらずこれらの女たちは、同情心を表す。イエスが十字架のドに気を失って倒れられると、彼女たちは悲しみのあまり泣き出す。

これがキリストの注意を引いたただ 1 つのことだった。キリストは、世の罪を負って苦難に満ちておられたが、悲しみの表現に対して無関心ではなかった。主は、やさしい憐れみ　をもって、この女たちをごらんになった。彼女たちはイエスの信者ではなかった。イエスは、彼女たちが、神からつかわされたお方としてイエスのために嘆いているのではなく、人間的　な同情心に動かされたのであることを知っておられた。イエスは、彼女たちの同情心を軽蔑　されなかった。それは、イエスの心に、彼女たちに対する一層深い同情心を呼び起こした。　イエスは、「エルサレムの娘たちよ、わたしのために泣くな。むしろ、あなたがた自身のた　め、また自分の子供たちのために泣くがよい」と言われた（ルカ 23：28）。キリストは、目の前の光景から、エルサレム滅亡の時を予見された。その恐るべき場面において、いまキリ　ストのために泣いている者たちの多くが子供たちと共に滅びるのであった。

イエスの思いは、エルサレムの陥落からさらにもっと大きなさばきへ移って行った。悔い改めない都の滅亡のうちに、イエスは、世界に臨むべき最後の滅亡の象徴をごらんになった。「そのとき、人々は山にむかって、われわれの上に倒れかかれと言い、また丘にむかって、われわれにおおいかぶされと言い出すであろう。もし、生木でさえもそうされるなら、枯木はどうされることであろう」と、イエスは言われた（ルカ 23：30、31）。生木によって、イエスは罪なきあがない主であるご自身を象徴された。神は、罪とがに対する怒りを、ご自分の愛するみ子の上にそそがれた。イエスは人類の罪のために十字架にかかられるのであった。ましてや、罪を犯しつづけた罪人はどんな苦難を受けねばならないことだろう。悔い改めない者、信じない者はすべて、ことばに言い表せない悲しみと不幸を知るのであった。

カルバリーまで救い主について行った群衆の中には、イエスがエルサレムに凱旋的な人城をされた時に歓喜のホサナを叫び、しゅろの葉をうちふってそのあとに従った者たちがたくさんいた。しかし、みんながそうしているからというのでその時宅を声高らかに賛美した者たちの中に、いま「十字架につけよ、十字架につけよ」との叫びを張りあげている者たち

が少なくなかった。キリストがエルサレムに乗りこんで行かれた時、弟子たちの望みは頂点にまで高まった。彼らはイエスと関係があることを非常な名誉に思い、主の近くによりそっていた。いま、イエスが屈辱のうちにあられると、彼らは遠く離れてついて行った。彼らは悲しみに満たされ、失望のあまり気力を失っていた。イエスが「今夜、あなたがたは皆わたしにつまずくであろう。『わたしは羊飼を打つ。そして、羊の群れは散らされるであろう』と、書いてあるからである」と言われたことばが何とよく実証されたことだろう（マタイ 26:31）。

処刑場に着くと、囚人たちは、拷問道具にしばりつけられた。2 人のどろぼうたちは、彼らを十字架につける人たちの手の中であばれた。しかしイエスは、抵抗されなかった。イエスの母は、愛する弟子ヨハネにささえられて、カルバリーまで息子のあとについてきていた。彼女は、イエスが十字架の重荷の下に気を失われるのを見ると、イエスの傷ついた頭の下 にささえの手をさしのべたい、かつては自分の胸にいだかれたあのひたいを洗ってあげたいと心に願った。しかし彼女は、この悲しい特権をゆるされなかった。弟子たちと同じように、彼女は、イエスが力をあらわして、反対者たちの手からご自身を救い出されるだろうという望みをまだいだいていた。

しかしいま目の前に起こりつつある場面をイエスが予告された時に言われたことばを思い出すと、彼女の心はふたたび沈んでしまうのであった。どろぼうたちが十字架にしばりつけられると、彼女は、不安な思いに苦しめられながら、見ていた。死人を生きかえらせたお方が、十字架にかけられるがままになられるだろうか。神のみ子がこんなにも残酷な殺されかたをされるがままになられるのだろうか。イエスがメシヤであるという信仰をあきらめなければならないのだろうか。苦悩のうちにあられるイエスにお仕えする特権さえないままに、イエスの屈辱と悲しみを見なければならないのだろうか。彼女はイエスの両手が十字架の上にひろげられるのを見た。金づちとくぎが持ってこられ、先のとがったくぎがやわらかい肉に打ち込まれると、悲しみに打ちひしがれた弟子たちは、失神しそうなイエスの母のからだをかかえてこの残酷な場面から連れ出した。

救い主は一言も不平をもらされなかった。そのお顔はあいかわらず平静で落ちついていたが、大粒の汗がそのひたいにたまった。イエスのお顔から死の露をふいてさしあげる同情の手も、人間としてのイエスの心をささえる同情と変わらない忠誠のことばもなかった。兵士たちが彼らの恐ろしい仕事をしていた時に、イエスは、「父よ、彼らをおゆるしください。彼らは何をしているのか、わからずにいるのです」と、敵のために祈られた（ルカ 23：34）。イエスの思いは、ご自身の苦難から迫害者たちの罪と、彼らにのぞむであろう恐るべき報いへ移った。イエスをこんなにも残酷に扱っている兵士たちに対して、何ののろいのことばも出されなかった。目的の達成に満足気な祭司たちと役人たちに何の復讐も求められなかった。キリストは、彼らの無知と罪をあわれまれた。イエスは、「彼らは何をしているのか、わからずにいるのです」と、彼らのゆるしを嘆願されただけであった（ルカ 23：34）。

彼らは、罪深い人類を永遠の滅亡から救うためにこられたお方を苦しめているのだということを知っていたら、悔恨と恐怖の思いにとりつかれたであろう。しかし、知らなかったということは彼らの罪を帳消しにしなかった。イエスを救い主として知り、受け入れることは彼らの特権だったのである。　彼らのうちのある者たちは、まだ自分の罪をみとめ、悔い改め、改心するであろう。ある者たちは悔い改めないで、彼らのためのキリストの祈りが答え　られることを不可能にするであろう。それでも、神の御目的は、同じに達成されつつあった。イエスは天父の前で、人類の助け主となられる権利を獲得しようとしておられた。

敵のために祈られたキリストの祈りは世界を包含していた。それは、世の始めから時の終わりまで、かつて生存し、これからも生存するすべての罪人を含んでいた。すべての者の上に神のみ子を十字架につけた罪がおかれている。すべての者にゆるしが豊かにさし出されている。望む者は誰でも、神とやわらぎ、永遠の生命を継ぐことができるのである。 イエスが十字架にくぎづけられると、がんじょうな男たちがそれをもちあげ、そのために用意された場所に乱暴に落とし込んだ。これは神のみ子に最も激しい苦痛をひき起こした。ピラトはその時ヘブル語とギリシャ語とラテン語で罪状書きを書いて、それを十字架上のイエスの頭の上部につけさせた、それには「ユダヤ人の王、ナザレのイエス」と書かれていた（ヨハネ 19：19）。この罪状書きはユダヤ人を怒らせた。ピラトの法廷で、彼らは「彼を十字架につ

けよ。……わたしたちには、カイザル以外に王はありません」と叫んだ（ヨハネ　19：15）。カイザル以外のを認める者はだれでも反逆者であると彼らは断言した。ピラトは彼らが表明　した意見を書きあらわしたのである。イエスがユダヤ人の王であるということ以外に何の罪　状も書かれなかった。この罪状は　ローマの権力に対するユダヤ人の忠誠を事実上認めるものであった。それは、イスラエルの王たることを自称する者はだれでも、死刑に値するものと　彼らから判断されることを宣言していた。祭司たちはやり過ぎたのだ。彼らがキリストの死　をたくらんでいた時、カヤパは 1 人の人が国民を救うために死ぬのはよいことだと断言した。いま彼らの偽善がばくろされた。キリストを滅ぼすために、彼らは自分たちの国の存在さえ　犠牲にしようとしていた。

祭司たちは、自分たちのやったことを見て、ピラトに罪状書きを書き直してくれるようにたのんだ。「『ユダヤ人の王』と書かずに、『この人はユダヤ人の王と自称していた』と書いてほしい」と彼らは言った（ヨハネ 19：21）。しかしピラトは自分のこれまでの弱さに腹が立っていたので、ねたみ深くてこうかつな祭司たちと役人たちを完全に軽蔑した。彼は、「わたしが書いたことは、書いたままにしておけ」と冷淡に答えた（ヨハネ 19：22）。　ピラトよりも、あるいはユダヤ人よりも高い権力が、その罪状書きをイエスの頭上にかけるように命じたのだった。神の摂理によって、それは思いをめざめさせ、聖書を調べさせるのであった。キリストが十字架につけられた場所は都に近かった。そのころ、全地から幾千の人々がエルサレムにきていたので、ナザレのイエスをメシヤと宣言している罪状書きは人々の注目のまとになるのだった。それは神がみちびかれた手によって書かれた生きた真理であった。　十字架上のキリストの苦難によって、預言が成就した。十字架につけられる幾百年も前に、救い主はご自分が受けられる取り扱いを預言された。主はこう言われた、「まことに、犬はわたしをめぐり、悪を行う者の群れがわたしを囲んで、わたしの手と足を刺し貫いた。わたしは自分の骨をことごとく数えることができる。彼らは目をとめて、わたしを見る。彼らは互にわたしの衣服を分け、わたしの着物をくじ引にする」（詩篇　22：16～18）。イエスの衣服についての預言は、十字架につけられたお方の味方の側もしくは敵の側の助言や干渉なしに実行された。イエスを十字架につけた兵士たちに、イエスの衣服が与えられた。キ

リストは、彼らが仲間のあいだで衣服を分け合うときの言い争いを聞かれた。その下着は縫い日なしに 1 つに織ったものであったので、彼らは、「それを裂かないで、だれのものになるか、くじを引こう」と言った（ヨハネ 19：24）。

別な預言の中に、救い主は、こう宣言された。「そしりがわたしの心を砕いたので、わたしは望みを失いました。わたしは同情する者を求めたけれども、ひとりもなく、慰める者を求めたけれども、ひとりも見ませんでした。彼らはわたしの食物に毒を入れ、わたしのかわいた時に酢を飲ませました」（詩篇 69：20、21）。 十字架につけられて死ぬ者には、その苦痛感をなくすために麻痺薬を与えることが許されていた。これがイエスにさしだされたのであるが、イエスはなめてみてそれをこばまれた。イエスはご自分の頭をくもらせるようなものは何 1 つ受けようとされなかった。イエスの信仰は固く神にすがっていなければならない。それがイエスの唯一の力であった。感覚を麻痺させることは、サタンの乗ずるすきを与えるのであった。

イエスが十字架にかかっておられると、敵どもはイエスに向かって怒りをぶちまけた。祭司たち、役人たち、律法学者たちは、群衆と一緒になって、瀕死の救い主を嘲笑した。バプテスマの時と、変貌の時に、キリストをご自分のみ子として宣言される神のみ声が聞かれた。またキリストが売り渡される直前に、天父は自らお語りになって、キリストの神性を証明された。しかしいま天からの声は沈黙していた。キリストのために語られるあかしのことばは聞かれなかった。キリストはただ 1 人で悪人たちの虐待と嘲笑を受けられた。

彼らは、「もし彼が神のキリスト、選ばれた者であるなら」「十字架からおりてきて自分を救え」と言った（ルカ 23：35、マルコ 15：30）。試みの荒野で、サタンは、「もしあなたが神の子であるなら、これらの石がパンになるように命じてごらんなさい。……も しあなたが神の子であるなら、下へ飛びおりてごらんなさい」と宣言したのだった（マタイ 4：3、6）。 ところでサタンは、部下の天使たちと、人間の姿をとって、十字架のところにきていた。悪魔と悪天使たちは、祭司たちや役人たちと協力していた。民の教師たちが無知な群衆 を扇動し、多くの者たちがまだ見たことのなかったお方に死刑を宣告するように、そしてつ いにはイエスに不利なあかしをたてないではいられないようにしたのだった。祭司たち、役

人たち、パリサイ人たちと頑迷なやじ馬たちは悪魔的な狂気のうちにこの陰謀に加わっていた。宗教界の指導者たちがサタンや悪天使たちと 1 つになっていた。彼らはサタンの命令を実行していたのである。

イエスは、瀕死の苦しみのうちにありながら、祭司たちが、「他人を救ったが、自分自身を救うことができない。イスラエルの王キリスト、いま十字架からおりてみるがよい。それを見たら信じよう」と宣言していることばをのこらず聞かれた（マルコ 15：31、32）。キリストは十字架からおりることもおできになったのである。しかし罪人が神からのゆるしと恵みについて望みをもつことができるのは、イエスがご自分を救おうとされなかったからである。 預言の解説者と自称していた人たちは、この時彼らが語ると神の霊感が預言されていたとおりのことばを、救い主をあざけることばの中にくりかえしていた。しかし彼らは、盲目だったので、自分たちが預言を成就していることがわからなかった。「彼は神にたよっているが、神のおぼしめしがあれば、今、救ってもらうがよい。自分は神の子だと言っていたのだから」とのことばを、嘲笑的に語った人たちは、そのあかしがその後各時代にわたってなりひびくとはすこしも思っていなかった（マタイ 27：43）。しかし、あざけりのうちに語られたのではあったが、それらのことばによって、人々はこれまでになかったほどに聖書を探究するようになった。賢い者たちは、聞き、さぐり、深く考え、そして祈った。聖句と聖句をくらべて、キリストの使命の意味がわかるまでは決して満足しない人たちがいた。キリストが十字架にかかられた時ほど、イエスが広く一般に知られたことはなかった。十字架の光景を見、キリストのことばを聞いた多くの人々の心に真理の光がさしこんでいた。

十字架上で苦しんでおられるイエスにかすかな慰めの光が 1 すじさしてきた。それは悔い改めたどろぼうの祈りであった。イエスといっしょに十字架につけられた男たちは 2 人とも、最初イエスをののしっていた。1 人は、苦しみのあまりますます絶望的な反抗を示すばかりであった。しかしもう 1 人の仲間はそうではなかった。この男は常習犯ではなかった。彼は悪い仲間たちにさそわれて道をふみはずしたのであったが、十字架のそばに立って救い主をののしっていろ人たちの多くよりも罪が軽かった。彼はかつてイエスを見、イエスのこと

ばを聞き、その教えによって自覚させられたが、祭司たちと役人たちのためにイエスから離れてしまった。

彼は、罪の自覚をおしころそうとして、ますます罪の深みにとびこみ、ついに捕らえられて犯罪者としてさばかれ、十字架の死を宣告されたのであった、法廷でも、カルバリーへの途中でも、彼はイエスといっしよだった。彼はピラトが、「この人になんの罪も見いだせない」と断言するのを聞いた（ヨハネ　19：4）。彼はイエスの神々しい態度に目をとめ、イエスが迫害者たちをあわれんでゆるされるのを見た。十字架上で、彼は多くのえらい宗教家　たちが、侮辱的なことばを浴びせ、主イエスをあざけるのを見る。彼は揺れる頭を見る。彼　は仲間のどろぼうが、「あなたはキリストではないか。それなら、自分を救い、またわれわ　れも救ってみよ」と非難することばを聞く（ルカ 23：39）。通りかかった人々の中で、多くの人がイエスを弁護するのを、彼は耳にする。彼らがイエスのことばをくりかえし、イエス　のみわざについて語るのを、彼は聞く。これがキリストだという自覚が彼の心によみがえる。仲間のどろぼうに向かって、彼は、「おまえは同じ刑を受けていながら、神を恐れないのか」と言う（ルカ 23：40）。瀕死のどろぼうたちは、もはや人間を恐れる気持ちは何もない。しかしその中の 1 人は、恐るべき神がおられることと、彼をおののかせる 将来があることについて深い自覚が起こる。しかもいま、罪にけがれたままに彼の一生の経歴がとじられようと　している。彼はうめきながら言う。「お互いは自分のやった事のむくいを受けているのだか　ら、こうなったのは当然だ。しかし、このかたは何も悪いことをしたのではない」（ルカ 23：41）。

もう問題はない。疑いもなければ、罪のとがめもない。有罪を宣告された時、このどろぼうは絶望し、自暴自棄になった。しかしいま、ふしぎな、やさしい思いがわきあがってくる。彼は、イエスが病人をいやし、罪をゆるされたことなど、イエスについて聞いたことをみな心に思い起こす。彼は、イエスを信じて泣きながらついてきた人たちのことばを聞いた。彼は、救い主の頭上の罪状書きを見て読んだ。彼は、通りかかりの人たちが、ある者は悲しみにふるえる唇で、ある者はやじとあざけりをもってその罪状書きを読むのを聞いた。

聖霊は彼の心を照らし、すこしずつ証拠の鎖がつながる。打たれ、あざけられ、十字架にかけられているイエスのうちに、彼は、世の罪をとり除く神の小羊を見る。死にかけている無力な魂が、瀕死の救い主に身をまかせると、彼の声には苦悩の中に望みがまじる。「イエスよ、あなたが御国の権威をもっておいでになる時には、わたしを思い出してください」と、彼は叫ぶ（ルカ 23：42）。 すぐに応答があった。その調子はやわらかく、音楽のようで、そのことばは愛と憐れみと力に満ちていた。きょう、よく言っておくが、あなたはわたしと一緒にパラダイスにいるであろう。

長い幾時間かの苦悩のあいだ、ののしりとあざけりがイエスの耳にひびいてきた。イエスが十字架にかかられてもまだ、やじとのろいの声がみもとに舞いあがってくる。待ちこがれる思いで、イエスは、弟子たちから何か信仰のことばを聞きたいと耳をすまされた。しかしイエスがお聞きになったのは、「わたしたちは、イスラエルを救うのはこの人であろうと、望みをかけていました」という悲しげなことばだけであった（ルカ 24：21）。だから、この死にかかったどうぼうが口にした信仰と愛のことばは、救い主にとってどんなにうれしかっ たことだろう。有力なユダヤ人たちがイエスをこぼみ、弟子たちさえイエスの神性を疑って いるのに、このかわいそうなどろぼうは、永遠の門口に立って、イエスを主と呼んでいる。 イエスが奇跡を行われた時や、墓からよみがえられたあとでは、多くの人たちがよろこんで イエスを主と呼んだ。しかし十字架上で死にのぞんでおられるイエスを主と認めたのは、最 後のまぎわに救われたこの悔い改めたどろぼうだけであった。

見物人たちは、このどろぼうがイエスを主と呼んだ時そのことばを聞いた。悔い改めた人間の語調が彼らの注意をひいた。十字架の下でキリストの衣服を争い、下着をとるのにくじを引いていた者たちは、動きをとめて耳をすました。彼らの怒った口調がやんだ。息をころして彼らはキリストを見あげ、その瀕死の唇から出る答を待った。 イエスが約束のことばを語られた時、十字架をおおっているようにみえた暗雲をつらぬいて明るい新鮮な光がさした。神に受け入れられたという完全な平安が悔い改めたどろぼうにのぞんだ。キリストは屈辱のうちにあってあがめられた。ほかのすべての者の目には征服されたお方に見えたイエスが征服者であった。主は罪を負うお方として認められた。人々はイエスの人としての肉体に

力を行使するだろう。彼らはいばらの冠でその聖なるこめかみを刺すだろう。彼らはイエスからその衣服をはぎとり、それを分配するのに争うだろう。しかし彼らは、イエスから罪をゆるす権利を奪うことはできない。死にのぞんで、イエスは、ご自身の神性と、天父の栄光についてあかしをたてられる。「主の手が短くて、救い得ないのではない。その耳が鈍くて聞き得ないのでもない」（イザヤ 59：1）。彼によって神に来る人々を、いつも救うことがイエスの王権である（ヘブル 7：25 参照）。

わたしはきょうあなたに告げる、あなたはわたしといっしょにパラダイスにいるであろう。キリストはどろぼうがその日にキリストと一緒にパラダイスにはいることを約束されなかった。キリストご自身その日にパ　ラタマスに行かれなかった。主は墓に眠って、よみがえられた朝、「わたしは、まだ父のみもとに上っていない」と言われた（ヨハネ 20：17）。しかし十字架につけられた日、すなわち敗北と暗黒にみえたその日に、この約束が与えられた。「きょう」、犯罪人として十字架上で死にのぞんでおられるが、キリストはこのかわいそうな罪人に、「あなたはわたしといっしょにパラダイスにいるであろう」と保証される。

イエスと一緒に十字架につけられたどろぼうたちは、「イエスをまん中にして、……両側に」つけられた（ヨハネ 19：18）。これは祭司たちと役人たちの指図であった。どろぼうたちの間のキリストの位置は、彼が 3 人の中で最も重い罪人であることを示すのであった。このようにして、彼は「とがある者と共に数えられた」との聖句が成就した（イザヤ 53： 12）。しかし祭司たちは自分たちの行為の意味が十分にわからなかった。イエスがどろぼうたちと一緒に十字架につけられて「まん中に」おかれたように、キリストの十字架は、罪のうちにある世のまん中に置かれた。そして、悔い改めたどろぼうに語られたゆるしのことばは、地の果てまで照らす光をともした。

心と体に最も激しい苦痛を受けながら、人のことしか思わず、悔い改めた魂が信ずるように励まされたイエスの限りない愛を、天使たちは驚嘆して見守った。屈辱のうちにあって、イエスは、預言者としてエルサレムの娘たちに語りかけ、祭司また助け主として殺人者たちのためのゆるしを天父に嘆願し、愛情深い救い主として悔い改めたどろぼうの罪をゆるされた。 イエスが周囲の群衆を見まわされた時、1 つの姿が彼の注意をひいた。十字架の足下に、

イエスの母が、弟子のヨハネにささえられて立っていた。彼女は息子のそばから離れていることに耐えられなかった。そこでヨハネが、イエスの臨終が近いことを知って、彼女をもう 1 度十字架のところへ連れてきたのだった。臨終の際にも、キリストは母をお忘れにならなかった。悲しみにうちひしがれた母の顔をじっとごらんになってから、その目をヨハネに移し、母に「婦人よ、ごらんなさい。これはあなたの子です」と言って、次にヨハネに「ごらんなさい。これはあなたの母です」と言われた（ヨハネ　19：26、27）。ヨハネはキリストのことばを理解し、その責任を引き受けた。彼はすぐにマリヤを自分の家へ連れて行き、その時　から彼女をやさしく世話した。ああ、何と憐れみ深く、やさしい救い主だろう。肉体の苦痛　と精神の苦悩の最中に、母のために思いやりの深い心づかいを示されるとは。イエスは母を　安楽にするお金がなかった。しかしヨハネはイエスを大事なお方に思っていたので、イエス　は、ご自分の母をこのヨハネにとうとい遺産としてお与えになった。こうしてイエスは、母　のために最も必要なものをお備えになった。それは彼女がイエスを愛するがゆえに彼女を愛　する者のやさしい同情であった。こうしてヨハネは、聖なる責任として彼女を引き受けるこ　とによって、大きな祝福を受けていた。彼女は、ヨハネの愛する主をいつも思い出させてく　れる存在であった。

キリストの子としての愛の完全な模範がくもりのない輝きをもって長い年月の霧の中から光を放っている。イエスは 30 年近くの間、毎日の労働によって家庭の重荷を負う助けをされた。そしていま、最後の苦悩のうちにあっても、イエスは、悲しんでいるやもめの母のために道を備えることをお忘れにならない。この同じ精神が主の弟子の一人一人にみられるであろう。キリストに従う者たちは、親を敬い、養うことを彼らの宗教の一部と考えるであろう。父と母は、キリストの愛の宿っている心を持った子からかならず思いやりのある世話とやさしい同情とを受けるであろう。　さて栄光の主は、人類のあがないとしていま死なれるのであった。そのとうとい生命をささげるに当たって、キリストは勝利の喜びによってささえられなかった。すべてが重苦しく陰うつであった。キリストに重くのしかかっていたのは死の恐怖ではなかった。言い表しようのないキリストの苦悩をひき起こしたのは十字架の苦痛と恥辱ではなかった。キリストは受難者たちの君であった。しかし、主の苦難は、罪の害毒

についての意識、すなわち人間は罪と親しむこと によってその無法さに対して盲目になったことを知られたからであった。罪が深く人の心にくいこみ、その力をたちきろうとする者が少ないのをキリストはごらんになった。キリストは、神からの助けがなければ人間は滅びなければならないことを知り、多くの者が十分な助けを目の前にしながら滅びて行くのをごらんになった。

われわれの身代りまた保証人としてキリストの上にわれわれ全部の者の不義がおかれた。律法による有罪の宣告からわれわれをあがなわんがために、キリストは、罪人にかぞえられた。アダムの子孫一人一人の不義がキリストの心に重くのしかかった。罪に対する神の怒り、不義に対する神の不興の恐るべきあらわれが、み子の魂を非常な驚きと恐れで満たした。一生の間、キリストは、天父の憐れみとゆるしの愛についてのよい知らせを堕落した世に宣伝してこられた。罪人のかしらの救いがキリストのテーマであった。 しかしいま、自ら負っておられる不義の恐るべき重さで、キリストは、天父のやわらぎのみ顔を見ることがおできに ならない。この最高の苦悩の時に神のみ顔が見えなくなったために、救い主の心は、人には とうていわからない悲しみに刺し通された。この苦悩は、肉体的な苦痛などほとんど感じら れないほど大きかった。

サタンは激しい試みでイエスの心を苦しめた。救い主は墓の入口から奥を見通すことがおできにならなかった。キリストが征服者として墓から出てこられることや、犠牲が天父に受け入れられることについて望みは与えられなかった。キリストは、罪が神にとって不快なものであるため、ご自分と神との間が永久に隔離されるのではないかと心配された。キリストは、不義の人類のためにあわれみのとりなしがやんだ時に罪人が感じる苦悩を感じられた。キリストが飲まれたさかずきをこんなにもにがいものとし、神のみ子を悲しませたのは、人類の身代りとしてキリストに神の怒りをもたらしている罪についての観念であった。

天使たちは救い主の絶望的な苦悩を驚きの念をもって見た。天の万軍はこの恐るべき光景に顔をおおった。あなどられて死んでいかれる創造主に非情の自然界さえ同情を表した。太陽はその恐るべき光景を見るのをこばんだ。太陽の豊かな、明るい光線が真昼の地上を照らしていたが、突然にその光がかき消されたようにみえた。葬式の黒布のように、真の暗や

みが十字架を包んだ。「地上の全面が暗くなって、3 時に及んだ」（マタイ 27：45）。月も星もない真夜中のようなこの深い暗やみは、日蝕のせいでもなければ、ほかの自然現象のせいでもなかった。それは後世の人々の信仰を一層固めるために神がお与えになった超自然のあかしであった。 この深い暗やみのうちに神のこ臨在がかくされた。神は暗やみを幕屋とし、その栄光を人間の目からかくされる。神と聖天使たちは、十字架のそばにおられた、天父はみ子と共におられた。しかし神のこ臨在はあらわされなかった。もし神の栄光が雲からひらめきわたったら、見ている人間はみな滅ぼされたであろう。

しかもキリストは、この恐るべき時に、天父のこ臨在によって慰めを受けられないのであった。主は 1 人で酒ぶねを踏まれ、もろもろの民のなかには彼と事を共にする者がなかった（イザヤ 63：3 参照）。 神は、み子の人間としての最後の苦悩を、深いやみのなかにおお いかくされた。苦難のうちにあるキリストを見た者はみな、キリストの神性を確信していた。そのお顔は、1 度見た人は、決して忘れなかった。カインの顔が殺人者としての彼の罪悪を表していたように、キリストのお顔は、潔白、平静、慈愛――神のみかたちを表した。しかし キリストを訴えた者たちは、天のしるしに注意しようとしなかった。長時間にわたる苦悩の　間中、キリストは、嘲笑する群衆の視線を浴びておられたが、いま彼は憐れみ深くも神のマ　ントにかくされた。　死の沈黙がカルバリーにおそってきたように思えた。十字架のまわりに集まっていた群衆は言いようのない恐怖にとらえられた。のろいとののしりは、なかば言い　かけたことばのままやんだ。男も女も子供　たちも地にひれふした。あざやかないなずまが時々雲からひらめいて、十字架とそこにつけられているあがない主を照らした。祭司たち、役　人たち、律法学者たち、死刑執行人たち、群衆はみな自分たちの報いの時がきたと思った。　しばらくすると、ある人たちはイエスがいま十字架からおりてこられるだろうとささやいた。ある人たちは胸をうち、恐怖のあまり泣きながら、道を手さぐりで都の方へ引き返そうとし　た。

3 時になって、暗やみは人々のまわりから晴れたが、まだ救い主をつつんでいた。それは主の心に重くのしかかっている苦悩と恐怖の象徴であった。誰の目も十字架をつつんでいる暗黒を見通すことができず、だれも苦しんでおられるキリストの魂をおおっている一層深

い暗黒を見通すことはできなかった。十字架にかかっておられるイエスをめがけて怒りのいなずまが投げつけられるようにみえた。その時「イエスは大声で『エロイ、エロイ、ラマ、サバクタニ』と叫ばれた。それは『わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか』という意味である」（マルコ 15：34）

そとの暗やみが救い主のまわりに集まると、多くの声が叫んで言った、天の報いが彼に向けられたのだ、彼は神のみ子であると称したので、神の怒りのいなずまが彼をめがけて投げつけられたのだと。イエスを信じていた多くの者たちは、イエスの絶望的な叫びを聞いた。彼らから望みが消えた。もし神がイエスを捨てられたのだったら、イエスに従っている者たちは何に信頼することができよう。　キリストの重苦しい心から暗やみが晴れると、肉体的な苦痛の意識がよみがえり、主は「わたしは、かわく」と言われた（ヨハネ 19：28）。ローマの兵士の 1 人が、かわいた唇を見て同情し、ヒソプの茎につけた海綿を酢のうつわに浸して、それをイエスにさし出した。しかし祭司たちはイエスの苦悩をあざけった。暗やみが地をお　おった時彼らは恐怖に満たされたが、その恐怖がしずまると、イエスが逃げはされないかと　いう恐れがふたたび起こった。「エロイ、エロイ、ラマ、サバクタニ」というイエスのこと　ばを彼らはまちがって解釈した。にがにがしい軽蔑と嘲笑とをもって、彼らは「あれはエリ　ヤを呼んでいるのだ」と言った（マタイ 27：47）。イエスの苦難をやわらげる最後の機会を彼らはこぼんだ。「待て、エリヤが彼を救いに来るかどうか、見ていよう」と彼らは言った（マタイ 27：49）。

けがれのない神のみ子は、その肉体はむち打ちで裂け、しばしば祝福のうちにさし出されたその手は横木に釘づけられ、愛の奉仕に疲れを知らなかったその足は木にうちつけられ、王の頭はいばらの冠で刺され、ふるえる唇は苦悩の叫びにかたどられて、十字架にかかっておられた、しかもイエスがしのばれたすべてのことは――その頭と手と足から流れた血のしたたり、その肉体を苦しめた苦痛、天父のみ顔がかくされた時にその魂を満たした言いよう　のない苦悩――人類の子らの一人一人に向かって、神のみ子がこの不義の重荷を負うのを承　諾されるのはあなたのためであり、死の支配をたちきって、パラダイスの門を開かれるのは　あなたのためであると語っている。

荒れ狂う波をしずめて、泡立つ大波の上をあるかれたお方、悪鬼をふるえあがらせ、病気を追い出されたお方、目の見えない人の目を開き、死人をいのちによみがえらせたお方が、いけにえとしてご自分を十字架上にささげられる、しかもそれはあなたを愛されるからである。罪を負うお方であるイエスが、神の正義の怒りをしのび、あなたのために罪そのものとなられる。　沈黙のうちに、目撃者たちは、この恐るべき光景の結末を見守った。太陽が輝き出たが、十字架はまだ暗黒につつまれていた。祭司たちと役人たちはエルサレムの方を見た。すると見よ、濃い雲が都とユダヤの平原のあたりにかたまっていた。義の太陽、世の光であ　られるキリストは、かつてはめぐまれた都エルサレムから、その光をひきあげておられた。　神の怒りのすさまじいいなずまがこの滅ぶべき都に向けられた。

突然十字架のまわりの暗黒が晴れ、天地にひびきわたるようなはっきりしたラッパの調子で、イエスは 「すべてが終った」「父よ、わたしの霊をみ手にゆだねます」と叫ばれた（ヨハネ 19：30、ルカ 23：46）。ひとすじの光が十字架をとりまき、救い主のお顔は太陽のような栄光に輝いた。それから主は頭を胸にたれて、息をひきとられた。 恐ろしい暗黒のさなかに、神に見すてられたようにみえる中にあって、キリストは人間の苦悩のさかずきを最後の 1 滴まで飲みほされた。その恐るべき時に、主は、ご自分が天父に受け入れられたことについて、これまで与えられていた証拠によりたのまれた。イエスは天父の性格をよく知っておられた。イエスは天父の正義、あわれみ、大きな愛をわかっておられた。父に従うことがイエスの喜びであったが、信仰によってイエスは父に信頼された。こうして、服従のうちにご自分をまったく神にまかせられた時に、天父の恩恵が失われたという意識はなくなった。信仰によってキリストは勝利者となられた。

このような光景は、この地上でみられたことがなかった。群衆は麻痺したように、息をころして救い主をみつめた。ふたたび暗黒が地をおおい、重々しいかみなりのようなにぶい音が聞こえた。 すると激しい地震が起こった。人々はかたまりになって揺れた。激しい混乱と胆をつぶすような驚きがつづいて生じた。まわりの山で岩が真二つに割れ、音をたてて平原へなだれ落ちた。墓が口を開き、死人がその墓所から投げ出された。天地がこなみじんになるように思えた。祭司たち、役人たち、兵士たち、執行人たち、人々は、恐怖で声も出ず

地面にうつ伏せに倒れた。 「すべてが終った」との大声がキリストの口から出た時、祭司たちは宮で務めを行っていた。夕べのいけにえをささげる時間であった。キリストを象徴する小羊が、殺されるために連れてこられていた。深い意味のある美しい衣を着た祭司が、ちょうどアブラハムが息子を殺そうとした時のように、ナイフをふりあげていた。人々は熱心にじっと見つめていた、しかし地が揺れ動く。主ご自身が近づかれるからである。引き裂ける音をたてて宮の内部の幕が上から下まで目に見えない手で裂かれ、かつては神のご臨在に満たされていた場所が群衆の目の前に開かれる。この場所にシカイナがとどまっていたのだ。ここで神は贖罪所の上のあたりに栄光を現されたのだ。宮のこの部屋とほかの部分とを仕切っている幕は、大祭司のほかはだれもあけたことはなかった。大祭司は、民の罪のあがないをなすために、1 年に 1 度この中に入って行った。ところが見よ、その幕が真二つに裂けている。地上の聖所の至聖所はもはや神聖なものではない。

すべてが恐怖であり、混乱である。祭司はまさにいけにえを殺そうとしている。しかしそのナイフは感覚を失った手から落ち、小羊は逃げ去る。神のみ子の死によって、型が本体に合ったのである。大いなるいけにえがささげられたのである。至聖所への道が開かれている。新しい、生きた道がすべての人のために備えられる。罪を悲しむ人間は、もはや大祭司が出てくるのを待つ必要はない。これからは救い主がもろもろの天の天において祭司また助け主として務めを行われるのである。あたかも生きた声が礼拝者たちに向かって、罪のためのいけにえと献げ物はもう全部終ったと語られたかのようであった。 「神よ、わたしにつき、巻物の書物に書いてあるとおり、見よ、御旨を行うためにまいりました」とのみことばにしたがって、神のみ子がこられたのである（ヘブル 10：7）。キリストは、「ご自身の血によって、1 度だけ聖所にはいられ、それによって永遠のあがないを全うされたのである」（ヘブル 9：12）。

第 79 章　「すべてが終った」

イエスは、ご自分がするためにおいでになった働きをなしとげ、臨終の息の下から「すべてが終った」と叫ばれた時にはじめて息を引きとられた（ヨハネ 19：30）。戦いは勝利であった。イエスの右手とそ の聖なる腕が勝利をもたらしたのであった。征服者として、イエスは、その旗を永遠の高地にうちたてられた。天使たちの間に喜びがなかっただろうか。全天は救い主の勝利に凱歌をあげた。サタンは敗北し、彼の王国が失われたことを知った。 天使たちと他世界の住民たちにとって、「すべてが終った」という叫びは深い意味があった。大いなるあがないの働きがなしとげられたのは、われわれのためばかりでなく、また彼らのためでもあった。彼らは、われわれと共に、キリストの勝利の結果を分かち合うのである。

キリストが死なれてはじめて、サタンの性格が天使たちや他世界の住民たちにはっきりわかった。大背信者は欺備の衣を着ていたので、聖者たちでさえ彼の原則を理解していなかった。彼らは、サタンの反逆の性質をはっきりわかっていなかった。 神に反逆したのはすばらしい力と栄光を持った者であった。ルシファーについて、主は、「あなたは知恵に満ち、美のきわみである完全な印である」と言っておられる（エゼキエル 28：12）。ルシファーはおおうことをなす天使であった。彼は神のこ臨在の光の中に立っていた。彼はすべての被造物の中で最高の者であって、神の意図が宇宙に知らされるときにはいちばん先に彼に知らされた。罪を犯してから、彼のあざむく力はますます欺隔的になり、彼が天父とともに高い地位を保っていたためにその正体をばくろすることがますます困難となった。

神は、人が小石を地面に投げるようにたやすくサタンとその同調者たちを滅ぼすこともおできになった。しかし神はそうなさらなかった。反逆を暴力によって征服してはならなかった。 強制的な力はサタンの統治だけにみられるものである。主の原則はこのような種類のものではなかった。主の権威は、恩恵、憐れみ、愛の上におかれている。このような原則を示すことが用いるべき手段である。神の統治は道徳的であり、真実と愛が有力な力となるのである。

物事を安全という永遠の基礎の上におくことが神の御目的だったので、天の会議では、サタンがその統治制度の基礎となっている原則を発揮する時間を与えるべきだということが決定された。サタンは自分の原則が神の原則よりもすぐれていると主張していた。そこでサタンの原則が天の宇宙に知れ渡るように、それを発揮させる時間が与えられた。 サタンが人類に罪を犯させたので、あがないの計画が実施された。4000 年の間、キリストは人類を高めるために働かれたが、サタンは人類を堕落させ、滅ぼすために働いていた。天の宇宙はそれをすべて目に見たのであった。 イエスがこの世にこられると、サタンの力はイエスに向けられた。イエスが赤ん坊としてベツレヘムにお生れになった時から、横領者サタンはイエスを滅ぼすために働いた。サタンは、イエスが完全な子供、欠点のないおとな、聖なる公生涯、きずのないいけにえとなられないように、あらゆる手段をつくした。しかし彼は敗北した。彼はイエスに罪を犯させることができなかった。彼はイエスを落胆させたり、イエスをこの地上でなすためにおいでになった働きから追い出すことができなかった。荒野からカルバリーまで、サタンの怒りの嵐がイエスを襲ったが、嵐が容赦なく吹きつけるほど神のみ子は一層固く天父のみ手にすがって、血に染まった道を進んで行かれた。イエスを圧迫し、うち倒そうとするサタンのあらゆる努力は、イエスの傷もないご品性を一層純潔な光に照らしただけであった。

全天と他世界は、争闘の証人であった。彼らはどんなに熱心な興味をもって戦いの終りの場面を見守ったことだろう。彼らは、救い主がゲッセマネの園にはいって行かれ、その魂が大いなる暗黒の恐怖にうなだれるのを見た。「わが父よ、もしできることでしたらどうか、この杯をわたしから過ぎ去らせてください」とのイエスの苦痛の叫びを、彼らは聞いた（マタイ　26：39）。 天父のご臨在がかくされた時、彼らは、イエスが死との最後の大きな戦いにまさるはげしい悲しみに満たされるのを見た。イエスの毛あなからは血の汗が　吹き出して地面にしたたり落ちた。救いを求める祈りが、イエスの口から 3 度しぼり出された。天はその光景を見ていることができなくて、慰めの使者が神のみ子のもとへつかわされた。　天は、キリストが十字架にかかり、傷ついたそのこめかみから血が流れ、血の色をした汗がそのひ　たいにたまるのを、悲しみと驚きの思いをもってながめた。十字架をたてるために穴をあけ

られた岩の上に、イエスの手と足から血が 1 滴また 1 滴と落ちた。釘をうたれた傷は、体の重みに手がひきずられるために大きな口をあけた。イエスの魂が、世の罪の重荷の下にあえぐたびに、その苦しい呼吸は早く、重くなった。恐ろしい苦難のさなかに、「父よ、彼らをおゆるしください。彼らは何をしているのか、わからずにいるのです」とのキリストの祈りがささげられた時、全天は驚嘆の思いに満たされた（ルカ 23：34）。しかもそこには、神のみかたちにつくられた人間たちが、神のひとり子のいのちをうちくだくために加わっているのであった。天の宇宙にとって、それは何という光景だったことだろう。

暗黒の支配と権威である悪天使たちは十字架のまわりに集まって、人々の心に不信という恐ろしい影を投げかけた。主がこれらの天使たちをみ座の前に立っ者として創造された時、彼らは美しく、栄光に輝いていた。彼らの美しさと聖潔は、その高い地位にふさわしかった。彼らは神の知恵に富み、天の美しい装いをまとっていた。彼らはエホバに仕える者であった。しかし誰の目にも、これらの堕落した天使たちが、かつては天の宮廷で奉仕した輝かしいセラピムであったとは見えない。

サタンの軍勢は悪人たちと組んで、キリストが罪人のかしらであると人々に信じさせ、キリストを憎悪のまとにしようとした。十字架にかかられたキリストをあざけった者たちは、最初の大反逆者の精神を吹きこまれていた。サタンは彼らに下品でいまわしいことばをつめこんだ。彼は人々に嘲笑を吹きこんだ。しかしこうしたことをどんなにやってみても、彼は何にも得るところがなかった。 もしキリストのうちに 1 つの罪でも見いだされたら、またキリストが恐るべき拷問をのがれるために一点でもサタンに屈服されたら、神と人類との敵は　勝利したのである。キリストは頭をたれてなくなられたが、信仰と神への服従を固く保たれ　た。「その時わたしは、大きな声が天でこう言うのを聞いた、『今や、われらの神の救と力　と国と、神のキリストの権威とは、現れた。われらの兄弟らを訴える者、夜昼われらの神の　みまえで彼らを訴える者は、投げ落された』」（黙示録 12：10）。

サタンは自分の仮面が引きはがされたことを知った。彼の統治は堕落していない天使たちと天の宇宙の前に公開された。彼は殺人者の正体を現した。神のみ子の血を流すことによって、彼は天の住民の同情をまったく失ってしまった。それからのち彼の働きは制限された。

どんな態度を装おうと、彼はもはや天使たちが天の宮廷から出てくるのを待ち伏せて、キリストの兄弟たちが暗黒の衣と罪のけがれを着ていると彼らに訴えることができなくなった。サタンと天の世界との間の同情という最後のつながりがたちきられた。 しかしサタンは、その時まだ滅ぼされなかった。天使たちは、その時になってもまだ、大争闘に含まれて いることをみな理解しているわけではなかった。問題となっている原則をもっとはっきり示す必要があった。人のために、サタンの存在を続けさせねばならなかった。天使はもちろん人も、光の君と暗黒の君との相違を見なければならない。人は自分の仕えるべきものを選ばねばならない。

大争闘の始めに、サタンは、神の律法は従うことのできないものである、義と憐れみは両立しない、もし律法を破ったら罪人がゆるされることは不可能だと宣言した。すべての罪は罰を受けねばならない、もし神が罪の罰を免除されるなら、神は真実と義の神ではないと、サタンは主張した。人類が神の律法を破り、神のみこころに反抗した時、サタンは狂喜した。律法は従うことのできないものだということがわかった、人類はゆるしを得ることはできないのだと、サタンは断言した。サタンは、自分が反逆したあと、天から追放されたので、人類も永久に神の恩恵からしめ出されるべきであると要求した。神は義であるなら、罪人にあわれみを示すことはできないはずだと、彼は言い張った。 しかし、人は、たとえ罪人であっても、サタンの立場とは異なっていた。天におけるルシファーは神の栄光という光のうちに あって罪を犯したのである。彼には、ほかのどんな被造物に対するよりも神の愛の現れが与 えられていた。神のご品性を理解し、神の恵みがわかっていながら、サタンは、自分自身の 利己的で勝手な意思に従うことを選んだ。この選択は決定的なものであった。彼を救うため に神がおできになることはもうなかった。一方、人はだまされたのであった。人の心は、サ タンの誰弁によって暗くなったのだった。人は、神の愛の高さと深さを知らなかった。神の 愛を知る時に、人には望みがあった。神のご品性を見ることによって、人は神のみもとにひ きもどされるかもしれなかった。

イエスを通して、神の憐れみが人類にあらわされた。だが憐れみは義を無視しない。律法は、神のご品性の特質をあらわしているので、その一点一画も、堕落した状態にある人間

に合うように変えることはできない。神は律法を変更しないで、人のあがないのためにキリストを通して犠牲を払われた。「神はキリストにおいて世をご自分に和解させ」られた（Ⅱコリント 5：19）。 律法は義すなわち正しい生活、完全な品性を要求する。しかし人はそれを与えることができない。彼は神の聖なる律法の要求に応ずることができない。けれどもキリストは、人としてこの地上においでになって、聖なる一生を送り、完全な品性を発達させられた。これらのものを、キリストは受け入れる人には誰にでも無料の贈り物として提供される。キリストの一生は人の一生の代わりとなる。こうして人は、神の寛容によって、過去の罪をゆるされるのである。のみならずキリストは、人のうちに神の属性をうえつけてくださる。キリストは人の品性を神のご品性にかたどって、霊的な力と美しさを備えたりっぱな織物としてくださる。こうして律法の義そのものが、キリストを信ずる者のうちに成就されるのである。「神みずからが義となり、さらに、イエスを信じる者を義とされるのである」（ローマ 3：26）。

神の愛は、憐れみのうちにばかりでなく義のうちにもあらわされた。義は神のみ座の基礎であり、神の愛の実である。憐れみを真実と義から引き離そうとするのがサタンの意図であった。彼は神の律法の義が平和の敵であることを証明しようと努力した。しかしキリストは、神のご計画のうちにあってこの両者は離すことができないほど密接に結合しており、一方がなければ他方は存在し得ないことを示しておられる。「いつくしみと、まこととは共に会い、義と平和とは互に口づけ」する（詩篇 85：10）。

キリストは、ご自分の一生と死によって、神の義はその憐れみを滅ぼすものではなく、罪がゆるされ、律法が正しく完全に従うことのできるものであることを証明された。サタンの非難の誤りは明らかにされた。神はご自分の愛についてまちがうことのない証拠を人類にお与えになった。 するとこんどは別な欺瞞が持ち出されることになった。サタンは、憐れみが義を滅ぼし、キリストの死が 天父の律法を廃止したと宣言した。しかしもし律法を変えたり、廃止したりすることが可能であったら、キリストは死なれる必要がなかったのである。律法を廃することは、罪とがを不滅なものにし、世をサタンの支配下におくことになる。イエスが十字架上にあげられたのは、律法が不変であったからであり、律法の戒めに従うこと

以外に人が救われる道はなかったからである。それなのに、キリストが律法を確立された手段そのものを、サタンは律法を廃するものであると言った。この点について、キリストとサタンとの間の大争闘における最後の戦いが起こるのである。

神ご自身のみ声によって語られた律法には欠点がある、いくつかのある箇条は廃止されたのだというのが、サタンがいま持ち出している主張である。これはサタンが世にもちこむ最後の大欺瞞である。彼は律法の全体を攻撃する必要はないのである。もし人々に 1 つの戒めを無視させることができるならば、彼の目的は達成されるのである。「なぜなら、律法をことごとく守ったとしても、その 1 つの点にでも落ち度があれば、全体を犯したことになるからである」（ヤコブ 2：10）。1 つの戒めを破ることに同意することによって、人はサタンの権力下にはいるのである。神の律法を人間の律法ととり代えることによって、サタンは世を支配しようとねらっている。この働きは預言の中に予告されている。サタンを代表している大きな背信的な権力について、こう宣言されている。「彼は、いと高き者に敵して言葉を出し、かつ、いと高き者の聖徒を悩ます。彼はまた時と律法とを変えようと望む。聖徒は……彼の手にわたされる」（ダニエル 7：25）

人々は神の律法に対抗するためにかならず人間の律法を定めるであろう。彼らはほかの人々の良心を強制しようとし、人間の律法を励行しようとする熱心のあまり、同胞を迫害するであろう。

神の律法に対する戦いは、天に始まったが、それは世の終りまで続くであろう。どの人もみな試みられる。全世界の人々が、従うか従わないかの問題を決定しなければならない。すべての人が、神の律法か人の律法かをえらばせられるのである。この点で区別の線が引かれる。2 種類の人たちしかいないのである。どの人の品性も完全に明らかにされる。そして彼らはみな、忠誠の側をえらんだかそれとも反逆の側をえらんだかを示すのである。

それから終りが来る。神はご自分の律法の正しさを立証し、その民を救われる。サタンと、サタンに加わった者たちはみな断たれるのである。罪と罪人は、根も枝も滅びる（マラキ 4：1 参照）。サタンは根であり、サタンに従う者たちは枝である。そのとき次のことばが

悪の君に実現するのである。「あなたは自分を神のように賢いと思っているゆえ、……守護のケルブはあなたを火の石の間から追い出した。……あなたは恐るべき終りを遂げ、永遠にうせはてる」。その時「悪しき者はただしばらくで、うせ去る。あなたは彼の所をつぶさに尋ねても彼はいない」「彼らは……かつてなかったようになる」（エゼキエル 28：6、16、19、詩篇 37：10、オバデヤ 16）。

これは神の側における専制的な権力行為ではない。神の憐れみをこばむ人たちは、自分がまいたものを刈り取るのである。神は生命の泉である。しかし罪に仕えることをえらぶ時、その人は神から離れ、したがって生命から自分自身を断つのである。彼は「神のいのちから遠く離れ」る（エペソ 4：18）。キリストは「すべてわたしを憎む者は死を愛する者である」と言われる（箴言　8：36）。神は、彼らがその本性をあらわし、その原則を示すように、しばらくその存在をおゆるしになる。それがなしとげられると、彼らは自分自身の選択の結果　を受けるのである。サタンとサタンに加わっている者たちはみな、反逆の生活によって、神　と調和しない立場に身をおくので、神の存在は彼らにとって焼きつくす火となる。愛であら　れる神の栄光は彼らを滅ぼすであろう。

大争闘の始めには、天使たちはこのことを理解していなかった。もしその時に、サタンと悪天使たちが彼らの罪の十分な結果を刈り取るがままに放っておかれたら、彼らは滅びたのである。しかし彼らの滅びが罪の当然の結果であることは天の住民に明らかに　ならなかったであろう。神の憐れみについての疑いが悪い種のように彼らの心に残り、それは罪とわざわいという致命的な実を生じたであろう。　しかし大争闘が終る時にはそうではない。その時には、あがないの計画が完結し、神のご品性がすべての知的被造物に明らかにされる。神の律法の戒めは完全にして不変なものであることがわかる。その時、罪はその本性を現し、サタンはその正体をばくろしている。その時、罪の根絶は、神のみこころを行うことを喜び、心に律法をしるされている人々の宇宙の前で、神の愛を立証し、神の栄えを確立するのである。　だから、天使たちは、救い主の十字架をながめて喜ぶことができたはずである。なぜなら、彼らはその時全部はわからなかったけれども、罪とサクンの滅びが永久に確実となり、人類のあがないが保証され、宇宙が永遠に安全になることを知っていたからである。キリス

トご自身、カルバリーの上でささげられた犠牲の結果を十分に理解しておられた。キリストが十字架上で、「すべてが終った」と叫ばれた時、彼はそうしたことのすべてを予見しておられたのであった。

第 80 章　ヨセフの墓の中に

ついに、イエスは休まれた。屈辱と拷問の長い日が終った。夕日の最後の光線が安息日の到来を告げた時、神のみ子は、ヨセフの墓の静けさの中に横たわっておられた。ご自分の働きを完成し、沈黙のうちに手を組んで、イエスは、安息日の聖なる時間を休まれた。　世の始めに、天父とみ子は、創造の働きののちに安息日を休まれた。「天と地と、その万象とが　完成した」時、創造主は天のすべての住民とその輝かしい光景をながめて喜ばれた（創世記 2：1）。「かの時には明けの星は相共に歌い、神の子たちはみな喜び呼ばわった」のであった（ヨブ　38：7）。今イエスは、あがないの働きを休まれた。この地上でイエスを愛した人々の間には悲しみがあったが、天には喜びがあった。天の住民たちの目には、未来の約束が輝かしくうつった。回復された被造物、あがなわれた人類は、罪を征服してしまったので、もう決して堕落することがないのである。神と天使たちは、キリストの完成された働きから生じるこの結果をごらんになった。キリストが休まれた日は永遠にこの光景に結ばれている。なぜなら、「そのみわざは全く」、「すべて神がなさる事は永遠に変ることがな」いからである（申命記　32：4、伝道の書　3：14）。「神が聖なる預言者たちの口をとおして、昔から預言しておられた万物更新の時」になっても、創造の安息日、すなわちイエスがヨセフの墓で休まれたこの日は、やはり休息と喜びの日となるのである（使徒行伝　3：21）。救われた諸国の民が「安息日ごとに」よろこびの礼拝をもって神と小羊を拝する時、天と地は声を合わせて賛美するのである（イザヤ 66：23）。

十字架の日の最後の場面で、預言の成就について新たな証拠が与えられ、キリストの神性について新しいあかしがたてられた。十字架のまわりの暗黒が晴れ、救い主の臨終の叫びが発せられた時、すぐに別な声が、「まことに、この人は神の子であった」というのが聞かれた（マタイ　27：54）。 このことばはささやくような調子で言われたのではなかった。みんなの目は、どこからこのことばが聞こえてきたのかを見ようとしてふりかえった。誰がしゃべったのだろう。それはローマの軍人、百卒長であった。救い主のとうとい忍耐、主が勝　利の叫びを口にされると同時に突然に死なれたことが、この異邦人を感動させたのであった。十字架にかかっている傷つき破れた肉体に、百卒長は神のみ子の姿をみとめた。彼は信仰を

告白しないではいられなかった。こうして、あがない主がご自分の魂の苦しみの結果をみられるという証拠がまた与えられた。キリストが死なれたその日に、お互いにまったく異なった立場の 3 人、すなわちローマの警備兵を指揮していた者と、救い主の十字架をかついだ者と、キリストのかたわらで十字架上に死んだ者とが信仰を宣言したのであった。

夜が近づくと、この世ならぬ静けさがカルバリーをおおった。群衆は散り、多くの者が朝とはまったくちがった気持ちでエルサレムへ帰って行った。多くの者が十字架の処刑に集まったのは好奇心からであって、キリストに対する憎しみからではなかった。それでも彼らは、祭司たちの非難を信じていて、キリストを悪人とみなしていた。異常な興奮のうちに彼らは暴徒たちといっしょにキリストをののしった。しかし地が暗黒に包まれると、彼らは自分の良心にとがめられ、大変な悪事を犯したという思いに責められた。あの恐るべき暗黒のさなかにあって、からかいやあざけりの笑い声は聞かれなかった。そして暗黒が晴れると、彼らは厳粛な沈黙のうちに家路についた。彼らは、祭司たちの非難がうそであって、イエスは詐欺師ではないと確信した。それから数週間たって、ペアロがペンテコステの日に説教した時、彼らはキリストへの改心者となった幾千の人々の中に加わった。

しかしユダヤ人の指導者たちは、そうした出来事を目撃しても変わらなかった。イエスに対する彼らの憎しみは減らなかった。祭司たちと役人たちの心をまだおおっていた暗黒は、キリストが十字架につけられた時に地をおおった暗黒よりも深かった。　キリストの誕生の時に、星はキリストを知っていて、キリストの寝ておられるうまぶねに博士たちをみちびいた。天使の軍勢はキリストを知っていて、ベツレヘムの丘の上でキリストをたたえて歌った。海　はキリストの声を知っていて、その命令に従った。病気と死はキリストの権威をみとめて、　そのとりこをキリストに引き渡した。太陽はキリストを知っていて、その臨終の苦しみを見　て光の顔をおおった。岩はキリストを知っていて、その叫びに身ぶるいしてばらばらにくだ　けた。自然界はキリストを知っていて、その神性についてあかしをたてた。しかしイスラエ　ルの祭司たちと役人たちは神のみ子を知らなかった。

それでも祭司たちと役人たちは安心しなかった。彼らはキリストを死刑にする計画を実行した。だが期待していたような勝利感は味わえなかった。勝利に見えた時にさえ、こんど

は何が起こるだろうかという疑いに苦しめられた。彼らは、「すべてが終った」「父よ、わたしの霊をみ手にゆだねます」との叫びを聞いた（ヨハネ 19：30、ルカ 23：46）。彼らは岩が裂けるのを見、大きな地震を感じたので、心が落ちつかず、不安であった。

彼らは、キリストが生きておられた時には、民衆に対するキリストの勢力をねたんだが、死なれてもまだキリストをねたんでいた。彼らは、生きておられたキリストを恐れていたよりも死なれたキリストをもっと恐れた。彼らはキリストの十字架にともなう出来事に民衆の注意がこれ以上向けられるのを恐れた。彼らはその日の働きの結果を恐れた。どんなことがあっても安息日の間中キリストの体を十字架上に残しておきたくなかった。安息日はもう近づいていた。体が十字架上にさがったままにしておくことは安息、日の神聖を犯すことになるのであった。そこで有力なユダヤ人たちは、そのことを口実にして、犠牲者たちの死を早め、太陽が沈まないうちにその体を片づけさせてもらいたいと、ピラトに願い出た。

ピラトも彼らと同じく、イエスの体を十字架上に残したくなかった。ピラトの承諾が得られると、死を早めるために 2 人のどろぼうの足が折られたが、イエスはすでに死んでおられることがわかった。 粗暴な兵士たちは、キリストについて見たり聞いたりしたことで心を和らげられていたので、キリストの足を折ることをひかえた。こうして、神の小羊がささげられたことによって、過越節の律法が成就された。「これを少しでも朝まで残しておいてはならない。またその骨は 1 本でも折ってはならない。過越の祭のすべての定めにしたがってこれを行わなければならない」（民数記 9：12）。

祭司たちと役人たちはキリストが死なれたことを知って驚いた。十字架による死は長引くのであった。いつ息がたえたかを決定するのは困難であっ た。誰でも十字架につけられて6時間以内に死ぬということは例のないことであった。祭司たちはイエスの死を確かめたいと思った。そこで彼らに言われて、1 人の兵士が救い主の脇腹にやりを突きさした。するとその傷口から、血と水がおびただしいはっきりした二筋となって流れた。目撃者たちの全部がそれをみとめたが、ヨハネはこの出来事をはっきり述べてこう言っている。「ひとりの兵卒がやりでそのわきを突きさすと、すぐ血と水とが流れ出た。それを見た者があかしをした。そして、そのあかしは真実である。その人は、自分が真実を語っていることを知っている。そ

れは、あなたがたも信ずるようになるためである。これらのことが起ったのは、『その骨はくだかれないであろう』との聖書の言葉が、成就するためである。また聖書のほかのところに、『彼らは自分が刺し通した者を見るであろう』とある」（ヨハネ 19：34～37）。

キリストの復活後、祭司たちと役人たちは、キリストは十字架上で死なれたのではなく、失神されただけであとから息を吹き返されたのだといううわさをまきちらした。もう 1 つのうわさは、墓におかれたのは骨と肉のある本当の肉体ではなくて、肉体に見せかけたものであったという主張であった。ローマの兵士たちの行為は、これらの虚偽を証明している。彼らはイエスがすでに死んでおられたので、その足を折らなかった。祭司たちを満足させるために彼らはイエスの脇腹を突き刺した。もし生命がまだたえていなかったら、イエスはその傷で即死されたであろう。 しかしイエスの死の原因はやりで突かれたことでもなければ、十字架の苦痛でもなかった。死の瞬間にイエスが「大声」で叫ばれたことと、その脇腹から血と水が流れ出たことは、イエスが心臓の破裂でなくなられたことを物語っていた（マタイ 27：50、ルカ 23：46）。イエスの心臓は精神的な苦悩のために破裂したのである。彼は世の罪によって殺されたのであった。

キリストの死とともに弟子たちの望みは滅びた。彼らはキリストのとじられたまぶたとうなだれた頭、血のからみついた髪の毛、刺し通された手と足を見た時、その苦痛は言い表しようがなかった。最後まで、彼らは、イエスが死なれるとは信じていなかった。彼らはイエスが本当に死なれるとは信じることができなかった。悲しみに圧倒されてしまって、彼らは、この光景を予告されたイエスのみことばを思い出さなかった。イエスの言われたことがいまは何 1 つ彼らの慰めにならなかった。彼らは、十字架と、血を流しておられる犠牲者しか見なかった。前途は絶望で暗くみえた。イエスに対する彼らの信仰は滅びた、しかし彼らは、今ほど主を愛したことはなかった。今ほどイエスの価値、イエスにいていただく必要を感じたことはなかった。 死んでおられても、キリストのお体は弟子たちにとって非常に大切だった。彼らはイエスを手厚く葬りたいと願ったが、どうしたらそれを実現できるかわからなかった。ローマ政府に対する反逆というのがイエスに対する有罪の宣告であって、この罪科のために処刑された者は、このような犯罪人のために特に設けられている埋葬場に引き渡

されるのだった。弟子のヨハネは、ガリラヤの女たちと十字架のそばに残っていた。彼らは、主のお体が冷酷な兵士たちの手で扱われ、不名誉な墓に葬られるままにしておくことができなかった。そうかといって、それを防止することもできなかった。彼らはユダヤ当局の好意にすがることも、ピラトに便宜をはかってもらうこともできなかった。

この危急に、アリマタヤのヨセフとニコデモが弟子たちの助けに現れた。この人たちは2人ともサンヒドリンの議員でピラトを知っていた。2人とも富裕で勢力のある人たちだった。彼らはイエスのお体をりっぱに埋葬しようと決心していた。　ヨセフは大胆にピラトのところへ行って、イエスの体を引き渡してもらいたいとたのんだ。初めてピラトは、イエスが本当　に死なれたことを知った。十字架の処刑に伴ういろいろな出来事についてつじつまの合わな　い知らせが彼の耳にはいっていたが、キリストの死の真相はわざと彼にかくしてあった。ビ　ラトは、キリストの体について弟子たちからだまされないようにと祭司たちや役人たちから 注意を受けていた。ヨセフのたのみを聞くと、ピラトはさっそく十字架の責任を持っていた　百卒長を迎えにやり、はっきりイエスの死を知った。彼はまた百卒長からカルバリーの模様　を聞き出し、ヨセフの証言を確認した。

ヨセフの願いは許された。ヨハネが主の埋葬について心配していると、ヨセフがキリストの体についてのピラトの命令をもって帰ってきた。またニコデモは、キリストのお体の防腐処置のために、「没薬と沈香とをまぜたものを 100 斤ほど持ってきた」（ヨハネ 19: 39）。エルサレム中のどんなえらい人でも、死んでこれほどの尊敬を受けることはできなかったであろう。弟子たちは、こうした富裕な役人たちが、主の埋葬に自分たちと同じように関心をもっているのを見て驚いた。　ヨセフもニコデモも、救い主の在世中には、公然と主を受け入れなかった。もしそのようなことをすれば、サンヒドリンから除名されることがわかっていた。彼らは会議のときに自分たちの勢力によってイエスを守ろうと望んでいたのだった。しばらくはそれがうまくいっているようにみえた。しかし陰険な祭司たちは、キリストに対する彼らの好意をみて、その計画を妨害した。彼らがいないところで、イエスは有罪を宣告され、十字架につけるために引き渡された。キリストがなくなられたからには、彼らはもうキリストへの愛着をかくさなかった。弟子たちがキリストに従う者であることを公然と

示すことを恐れたときに、ヨセフとニコデモは大胆に彼らを助けにやってきた。このような富裕で高貴な身分の人たちの助けがこの時非常に必要だった。彼らは、死なれた主のために、貧しい弟子たちができないことをすることができた。それに彼らの富と勢力は、祭司たちと役人たちの悪意から彼らを守るのに非常に役立った。

ていねいに、うやうやしく、彼らは、自分たちの手でイエスのお体を十字架からおろした。傷つき破れた主のお体を見た時、同情の涙が走り落ちた。ヨセフは、岩に堀られた新しい墓を持っていた。これは自分のためにとっておいたものであったが、カルバリーの近くにあったので、いま彼はその墓をイエスのために準備した。主のお体は、ニコデモが持ってきた香料といっしょに念入りに亜麻布でまかれ、あがない主は墓にはこばれた。そこで 3 人の弟子たちは、傷ついた主の足をまっすぐにのばし、破れたその両手を息のたえた胸の上に組み合わせた。ガリラヤの女たちがやってきて、愛する師のなきがらの処置に手落ちがないように気をくばった。それから彼らは、重い石が墓の入口にころがされて、救い主が休まれたままにおいておかれるのを見た。女たちは最後まで十字架の下に残り、最後までキリストの墓に残った。たそがれの影が濃くなってきても、マグダラのマリヤとほかのマリヤたちは、主の休まれた場所のあたりを立ち去りかねて、愛するお方の運命に悲しみの涙を流した。「そして帰って、……それからおきてに従って安息日を休んだ」（ルカ 23：56）。

それは、悲しみの弟子たちにとって、また祭司たち、役人たち、律法学者たち、民にとって、忘れることのできない安息日であった。備え日の夕暮れの太陽が沈むと、ラッパが吹き鳴らされて安息日が始まったことを告げた。過越節はキリストをさし示しているのであるが、当のキリストが悪人どもの手で殺され、ヨセブの墓に横たわっておられるのに、それはこれまでの何百年と同じように守られた。安息日に、宮の庭は礼拝者でいっぱいだった。ゴルゴタから帰ってきた大祭司は、美しい祭司服をつけて、そこにいた。白い帽子をつけて祭司たちは活発に彼らの務めを行った。しかしそこにいた人々の中には、牛や小羊の血が罪のためにささげられても、心が休まらない人たちがいた。

彼らは、型が本体に合い、世の罪のために無限の犠牲がささげられたことに気がついていなかった。彼らは儀式を行うことにもはや価値がないことを知っていなかった。しかしこ

の儀式がこんなちぐはぐな気持ちで見られたことはなかった。ラッパと楽器と歌手たちの声に、いつものように高くはっきりしていた。しかしどれにも奇妙な感じがみなぎっていた。そこ　に起こったふしぎな出来事についてだれもが口々にたずねた。これまで至聖所は人々が入りこまないように神聖に守護されていた。ところが今それは誰の目にもまる見えであった。純粋な亜麻で作られ、金色、赤、紫の美しいししゅうの施された厚いつつれにしきの幕がてっぺんから下まで裂けていた。エホバが大祭司とお会いになって、その栄光を伝えられた場所、神の聖なる謁見室がだれの目にもむき出しにされていた。それはもはや主によってみとめられた場所ではなかった。祭司たちは暗い予感を味わいながら祭壇の前で奉仕した。至聖所の聖なる神秘がむき出しになったことが、彼らの心にきたるべきわざわいについての恐れを満たした。

多くの人々の心はカルバリーの光景によってひき起こされた思いに忙しかった。十字架の処刑から復活までの間、その時自分たちが祝っていた祭の意味を十分に知ろうとして、あるいはイエスが主張された通りのお方ではないという証拠をみつけようとして、多くの油断のない目がたえず預言を調べていた。またほかの人たちは後悔の思いをもって、イエスが真のメシヤであるという証拠を調べていた。異なった目的を頭にもって調べてはいたが、どの人も同じ事実を確信した。すなわちそれは、過ぐる数日間の出来事を通して預言が成就したということ、また十字架につけられたお方は世のあがない主であるということであった。その時儀式に加わっていた多くの者は決してふたたび過越の儀式にあずからなかった。多くの者が、祭司たちでさえ、イエスの真の性格をさとった。彼らが預言を調べたことはむだではなく、キリストの復活後、彼らはイエスを神のみ子として認めた。

ニコデモは、イエスが十字架にあげられるのを見た時、オリブ山で夜語られたイエスのみことばを思い出した。「ちょうどモーセが荒野でへびを上げたように、人の子もまた上げられなければならない。それは彼を信じる者が、すべて永遠の命を得るためである」（ヨハネ 3：14、15）。キリストが墓に横たわっておられたその安息日に、ニコデモは反省の機会があった。今もっとはっきりした 1 つの光が彼の思いを照らし、イエスが彼に語られたことばはもはや神秘的ではなかった。彼は、救い主の在世中に主と結合しなかったことによって

多くのものを失ったことを感じた。いま彼はカルバリーの出来事を思い起こした。殺人者たちのためのキリストの祈りと、死にかけているどろぼうの嘆願に対するキリストの答が、学識のあるこの議員の心に語りかけた。ふたたび彼は苦悶のうちにあられる救い主を見あげた。ふたたび彼は、勝利者のことばのように語られたあの「すべてが終った」という最後の叫びを聞いた。ふたたび彼は揺れる大地と、暗くなった空と、裂けた幕と、ふるえる岩を見、彼の信仰は永久に定まった。弟子たちの望みを滅ぼしたその出来事が、ヨセフとニコデモにイ　エスの神性を確信させた。彼らの恐れは、固い、ゆるがない信仰の勇気によって征服され　た。

キリストは、墓に横たわっておられる今ほど群衆の注意をひかれたことはなかった。いつもの習慣通り、人々は病人や苦しんでいる者たちを宮の庭に連れてきて、「ナザレのイエスはどうなさったのか」とたずねた。多くの者が、病人をいやし死人をよみがえらせられたイエスをみつけ出そうと遠くからやってきていた。医者のキリストに会わせてくれとの叫びがいたるところで聞かれた。祭司たちはこの機会をのがさず、重いひふ病の徴候があると思われる人たちを検査した。多くの人たちが、自分の夫、妻あるいは子供らが思いひふ病と断定され、家庭の保護と友人たちの見守りから離れて、「汚れた者、汚れた者」との悲しい叫び声で知らない人を避ける運命を宣告されるのを聞かねばならなかった。ハンセン病人にいやしのみ手でさわることを決してこばまれたことのなかったナザレのイエスのやさしい手はその胸の上に組み合わされていた。

ハンセン病人の嘆願に、「そうしてあげよう、きよくなれ」との慰めのことばをもって答えられたくちびるは今とざされていた（マタイ 8：3）。多くの人たちが、祭司長たちと役人たちに同情と救いを求めたがむなしかった。彼らは生きておられるキリストにもう 1 度きていただこうと決心しているようだった。根気よく 熱心に、彼らはキリストを求めた。彼らは引き返そうとしなかったが、結局宮の庭から追い払われた。死にかけている病人たちをつれて中へ入れてくれと要求する群衆をおし返すために、どの門にも兵士たちが配置された。 救い主にいやしていただこうとやってきた病人たちは失望の底に沈んだ。街路は悲嘆の声に満ちた。イエスのいやしのみ手にふれていただくことができなくて、病人は死にかけて

いた。医者たちに見てもらってもだめだった。ヨセフの墓に横たわっておられるイエスのような手腕はなかった。

苦しんでいる者たちの悲嘆の叫び声は、大いなる光がこの世から消えたことを多くの人々の心に確信させた。キリストがおられなければ、この世は暗やみであった。「十字架につけよ、彼を十字架につけよ」との叫び声をあげた多くの人々が、今やわざわいが彼らの上にふりかかったことに気づき、キリストがまだ生きておられたら、「われらにイエスを与えよ」と叫んだであろう。　イエスが祭司たちから死刑にされたことがわかると、人々はイエスの死についてたずねた。イエスの裁判の詳細はできるだけ内密にされていた。しかしイエスが墓　におられる間に、その名は幾千の人々の口にのぼり、イエスが不正な裁判を受けられたこと　や、祭司たちと役人たちの非人間ぶりについて、うわさがいたるところにひろまった。祭司　たちと役人たちは、知識人たちから、メシヤに関する旧約の預言について説明を求められた。答えをうそで固めようとしているうちに、彼らは正気ではない人間のようになった。彼らは　キリストの苦難と死をさし示している預言を、説明できなかった。こうして多くの質問者た　ちは、聖書が成就されたことを確信した。　祭司たちが快感を予期していた復讐はすでに彼らにとってにがいものとなった。彼らは人々の激しい非難に当面していることを知った。イエ　スに反対するように圧力をかけられた人たちが、自分たちの恥ずべき行為に今やにがにがし　い思いを味わっていることを彼らは知った。これらの祭司たちはイエスが詐欺師であると信　じようとしたのだった。しかしそれはむだだった。彼らのうちのある人たちはラザロの墓の　そばに立ち、死人がいのちによみがえらされるのを見たのだった。彼らはイエスが自ら死か　らよみがえって、ふたたび彼らの前に現れるのではないかとの恐れにうちふるえた。彼らは　イエスがわたしには自分のいのちを捨てる力があり、またそれを受ける力があると宣言され　るのを聞いたことがあった（ヨハネ 10：18 参照）。

彼らはイエスが、「この神殿をこわしたら、わたしは 3 日のうちに、それを起すであろう」と言われたのをおぼえていた（ヨハネ　2：19）。ユダは、イエスがエルサレムへの最後の旅の道中で、弟子たちに次のように言われたことばを彼らに語ったことがあった。「見よ、わたしたちはエルサレムへ上って行くが、人の子は祭司長、律法学者たちの手に渡されるで

あろう。彼らは彼に死刑を宣告し、そして彼をあざけり、むち打ち、十字架につけさせるために、異邦人に引きわたすであろう。そして彼は 3 日目によみがえるであろう」（マタイ 20:18、19）。このことばを聞いた時、彼らは嘲笑した。しかしいま彼らは、キリストの予告がここまで実現したことを思い出した。あの人は 3 日目によみがえると言ったが、それが実現しないとはだれも言いきれない。彼らは、そうした思いを払いのけたいと思ったが、払いの　けることができなかった。彼らの父、悪魔と同じように、彼らは信じておののいた。

いま狂気のような興奮がすぎ去ってみると、キリストの面影が彼らの心に浮かびあがってくるのだった。彼らはキリストが、ひと言のつぶやきもなく彼らの嘲笑と虐待に耐えながら、平静に文句も言わず敵の前に立っておられるのを見た。イエスの裁判と十字架のすべての出来事が、彼は神のみ子であるという圧倒的な確信を伴って彼らにもどってきた。彼らはイエスがいまにも彼らの前に現れて、訴えられた者が訴える者となり、有罪を宣告された者が有罪を宣告する者となり、殺された者が殺人者たちの死刑を法に照らして要求されるのではないかと恐れた。

その安息日、彼らはじっとしていることができなかった。彼らは、けがれを恐れて異邦人のしきいをま　たこうとはしなかったが、キリストの体について相談した。彼らが十字架につけたキリストを、死と墓がとどめていなくてはならない。「祭司長、パリサイ人たちは、　ピラトのもとに集まって言った、『長官、あの偽り者がまだ生きていたとき、「3 日の後に自分はよみがえる」と言ったのを、思い出しました。ですから、3 日目まで墓の番をするように、さしずをして下さい。そうしないと、弟子たちがきて彼を盗み出し、「イエスは死人の中か　ら、よみがえった」と、民衆に言いふらすかも知れません。そうなると、みんなが前よりも、もっとひどくだまされることになりましょう』。ピラトは彼らに言った、『番人がいるから、行ってできる限り、番をさせるがよい』」（マタイ　27：62～65）。 祭司たちは、墓場を守るように指示を与えた、入口の前に大きな石がおかれていた。彼らはこの石の上にひもを張　り渡して両端を岩に固定し、ローマの印で封印した。封印を破らなければその石を動かすこ　とができなかった。それから墓をこじあけられないように、周囲に百人の番兵が配置された。祭司たちは、キリストの体を、その置かれたところにおいておくためにあらゆる手を尽くし

た。キリストは、永遠に墓の中にとどめておかれるかのように、厳重にそこに封印されていた。

このように、弱い人間たちは相談し、計画した。殺人者たちは、自分たちの努力のむなしさに気がつかなかった。しかし、彼らの行為によって神があがめられた。キリストの復活を予防するためにとられた手段そのものが、キリストの復活の証拠について最も有力な議論である。墓の周囲におかれた番兵の数が多ければ多いほど、キリストがよみがえられたというあかしは一層強力になる。キリストの死の何百年も前に、聖霊は詩篇記者を通してこう宣言された。「なにゆえ、もろもろの国びとは騒ぎたち、もろもろの民はむなしい事をたくらむのか。地のもろもろの王は立ち構え、もろもろのつかさはともに、はかり、主とその油そそがれた者とに逆らって言う……天に座する者は笑い、主は彼らをあざけられるであろう」（詩篇 2：1～4）。生命の主を墓の中にとじこめておくには、ローマの番兵もローマの軍隊も無力であった。キリストがとき放たれる時が迫っていた。

第 81 章　「主はよみがえられた」

週の初めの日の夜がゆっくりと過ぎて行った。夜明け前のいちばん暗い時間がきていた。キリストはまだ囚人としてそのせまい墓の中におられた。大きな石はもとの場所にあって、ローマの封印は破れていなかった。ローマ人の番兵たちが見張りをつづけていた。そこにはまた、目に見えない見張りたちもいた。悪天使の軍勢がそのあたりに集まっていた。もしできることなら、暗黒の君は、その背信の軍勢をもって神のみ子のとじこめられた墓を永久に封印したであろう。しかし、天の軍勢が墓所をかこんだ。力のすぐれた天使たちが墓を守り、生命の君を迎えようと待っていた、

「すると、大きな地震が起った。それは主の使が天から下っ」たのであった（マタイ 28：2）。神の武具をまとって、この天使は、天の宮廷を出発した。神の栄光の輝かしい光が彼の前にあって、その行く手を照らした。 「その姿はいなずまのように輝き、その衣は雪のように真白であった。見張りをしていた人たちは、恐ろしさの余り震えあがって、死人のようになった」（マタイ 28：3、4）。 さあ、祭司たちと役人たちよ、あなたがたの防備力はどこにあるのか。人の力を決して恐れたことのなかった勇敢な兵士たちが、いまは剣ややりもなしにとらえられた捕虜のようである。彼らが見あげる顔は人間の戦士の顔ではない。それは主の軍勢の中の一番強い戦士の顔である。この使者は、サダンが落ちたあとの地位を占めている者であるそれはベ ツレヘムの丘でキリストの誕生を宣告した者である。彼が近づいて地が震動し、暗黒の軍勢が逃げ去り、彼が石をころがし去ると、天が地におりてくるようにみえる。兵士たちは、彼がその石をあたかも小石のようにとりのぞくのを見、彼が、神のみ子よ、姿を現してください、父があなたを呼んでおられますと叫ぶのを聞く。

彼らはイエスがよみから現れて、開かれた墓のあたりで、「わたしはよみがえりであり、命である」と宣言されるのを聞く（ヨハネ 11：25）。イエスが威光と栄光のうちに姿を現されると、天使の万軍は、あがない主をあがめて、その前に低く頭をたれ、賛美の歌でイエス　を迎える。　キリストがいのちを捨てられた時刻が地震によって示されたが、勝利のうちにいのちをおとりになった瞬間がもう 1 度地震によってあかしされた。死とよみを征服されたキ

リストは、地の震動と、いなずまのひらめきと雷のとどろきの中を勝利者の歩調で墓から出てこられた。イエスがふたたびこの地上にこられる時、彼は「地ばかりでなく天をも震わ」れるのである。「地は酔いどれのようによろめき、仮小屋のよりにゆり動く」「もろもろの天は巻物のように巻かれ」「天体は焼けてくずれ、地とその上に造り出されたものも、みな焼きつくされるであろう」「しかし主はその民の避け所、イスラエルの人々のとりでである」（ヘブル 12：26、イザヤ 24：20、34：4、Ⅱペテロ 3：10、ヨエル 3：16）。

イエスが死なれた時に、兵士たちは、真昼に地が暗黒につつまれたのを見た。しかし、よみがえりの時に彼らは天使たちの輝きが夜を照らすのを見、天の住民が大きな喜びと勝利のうちに、あなたはサタンと暗黒の勢力を征服されました、あなたは死を勝利のりちに呑まれましたと歌うのを聞いた。　キリストは栄化されて墓から姿を現され、ローマ人の番兵たちは彼を見た。彼らはつい先日、自分たちがあざけり、嘲笑したお方の顔に目をこらした。この栄化されたお方のうちに、彼らが法廷で見た囚人、いばらの冠を編んでかぶせた人を見た。これが、残酷なむち打ちで体を傷つけられて、ピラトとヘロデの前に無抵抗のまま立っていた人であった。これが、十字架につけられ、満足しきった祭司たちと役人たちから軽蔑したようすで、彼は、「他人を救ったが、自分自身を救うことができない」と言われた人であった（マタイ 27：42）。これがヨセフの新しい墓に横たえられたお方であった。天の布告は、このとりこを解放した。彼の墓に山また山を積みあげたとしても、イエスが出てこられるの　をとめることはできなかった。

天使たちと栄化された救い主を見ると、ローマ人の番兵たちは、気を失って死人のようになった。天の余光が視界からかくれると、彼らは起きあがり、ふるえる手足をできるだけ早く動かしながら園の門の方へ進んで行った。酒に酔ったもののようによろめきながら、彼らは都へ急ぎ、出会う人たちにふしぎな知らせを告げた。彼らは、ピラトのところへ向かっていたが、彼らの知らせはすでにユダヤ当局に伝えられていたので、祭司長たちと役人たちが彼らをまず自分たちの前につれてくるように迎えを出した。兵士たちは異様な姿を現した。彼らは、恐怖にふるえ、顔色を失って、キリストの復活を証言した。兵士たちは、自分が見たとおりのことをのこらず語った。事実以外のことを考えたり話したりする時間はなかった。

彼らは、苦痛に満ちた口調で、十字架につけられたのは神のみ子でした、わたしたちは天使がイエスを天の大君、栄光の王として宣言するのを聞いたのですと言った。

祭司たちの顔は死人のようであった。カヤパがしゃべろうとした。彼の唇は動いたが声にならなかった。兵士たちが会議室から出ようとすると、1 つの声が彼らをとどめた。カヤパがやっと口をきいたのだ。待て、待てと彼は言った。おまえたちの見たことを誰にも言ってはならないぞ。 それから、いつわりの知らせが兵士たちにさずけられた。「『弟子たちが夜中にきて、われわれの寝ている間に彼を盗んだ』と言え」と祭司たちは言った（マタイ 28:13）。ここで彼らは自ら策略につまずいた。兵士たちは、自分たちが眠っている間に弟子たちが イエスの体を盗んだと、どうして言うことができよう。もし、眠っていたらどうしてそれがわかろうか。そして、もし弟子たちがキリストの体を盗んだという証拠があったのだったら、祭司たちはまっさきに弟子たちの罪を鳴らしたのではないだろうか。あるいはまた、番兵たちが墓で眠ったのだったら、祭司たちはまっさきにこの番兵たちをピラトに訴えたのではないだろうか。

兵士たちは、勤務中に眠ったという告発を受けることを思っただけで身ぶるいした。これは死刑の罰に相当する犯罪だった。いつわりの証言をして民をあざむき、自分たちの生命を危険にさらしてよいものだろうか。彼らは不寝番までやって、疲れる見張りをしたではないか。たとえ金のためではあっても、偽証をするなら、裁判で自分たちの立場はないではないか。 祭司たちは、自分たちの恐れている証言を沈黙させるために、ピラトだってわれわれ同様こんなうわさが言いふらされるのを好まないのだと言って、番兵たちの身の安全を保証することを約束した。ローマ人の兵上たちは、金のために正直をユダヤ人に売った。彼らは事実についてまことに驚くべき知らせを背負って祭司たちの前に入ってきたが、祭司たちが彼らのために作ってやったいつわりのうわさを舌にのせ、金を背負って出て行った。

こうしているうちにも、キリスト復活のうわさはピラトに伝わっていた。ピラトはキリストを死刑に引き渡した責任があったが、比較的に無関心だった。彼は不本意ながらキリストに有罪の宣告をくだし、気の毒には思っていたが、いままで本当に良心の責めを感じていなかった。彼はいま恐怖のあまり家にとじこもって、だれにも会うまいと心にきめた。しか

し祭司たちが彼の前にやってきて、彼らがつくりあげた話を語り、番兵たちの義務怠慢をみのがしてもらいたいと主張した。ピラトはこれを承諾する前に、自ら個人的に番兵に質問した。彼らは、身の安全をおそれて、何事もかくそうとしなかったので、ピラトは彼らから出来事の一部始終について報告を聞き出した。そして、この問題をそれ以上追求しなかったが、その時から彼に平安はなかった。

イエスが墓の中に横たえられた時、サタンは勝ち誇った。彼は救い主がふたたびよみがえられないようにとさえ望んだ。彼は主の体を要求し、墓のまわりに番兵を配置し、キリストをとりことしてとじこめておこうとした。彼は、悪天使たちが天の使者の接近とともに逃げ出した時、激しく怒った。彼は、キリストが勝利のうちに姿を現された時、自分の王国が終わり、自分はついに死なねばならないことを知った。 祭司たちは、キリストを死刑にしたことによって、自らサタンの道具となった。今彼らは完全にサタンの権力下にあった。彼らはわなにかかり、キリストとの戦いを続ける以外にそのわなからのがれる道がなかった。キリストがよみがえられたとの知らせを聞いた時、彼らは民衆の怒りを恐れた。彼らは、彼ら自身の生命が危険であると思った。

彼らにとって唯一の望みは、キリストがよみがえられたことを否定することによって、彼が詐欺師であることを証明することだった、彼らは兵士たちを買収し、ピラトを沈黙させた。彼らはいつわりのうわさを遠近にひろめた。しかし沈黙させることのできない証人たちがいた。多くの人々が、キリストのよみがえりについて兵士たちのあかしを聞いていた。またある死者たちはキリストと共によみがえって、多くの人々に現れ、キリストがよみがえられたことを告げた。よみがえったこれらの人たちを見、そのあかしを聞いた人々について、うわさが祭司たちの耳に入ってきた。祭司たちと役人たちは、通りを歩いていても、自分の家にひっこんでいても、キリストにばったり出会うのではないかとしじゅう恐れていた。自分たちにとって安全策がないことを彼らは感じた。神のみ子を防ぐには、かんぬきもとめ金もたよりにならなかった。法廷で彼らが「その血の責任は、われわれとわれわれの子孫の上にかかってもよい」と叫んだ時の、あの恐ろしい場面が昼も夜も彼らの前にあった（マタイ

27：25）。その場面の記憶は決して彼らの心から消えないであろう。彼らのまくらもとに平和な眠りはもう決してないであろう。

キリストの墓で、父があなたを呼んでおられますと いう強い天使の声が聞かれた時、救い主は、ご自身のうちにある生命によってよみから出てこられた。「わたしが……命を捨て　るのは、それを再び得るためである。……わたしには、それを捨てる力があり、またそれを　受ける力もある」と言われたキリストのことばが事実であったことが今証明された（ヨハネ10：17、18）。キリストが祭司たちと役人たちに、「この神殿をこわしたら、わたしは 3 日のうちに、それを起すであろう」と語られた預言が今成就した（ヨハネ 2：19）。　（封印を）裂かれたヨセフの墓を超えて、キリストは勝利のうちに、「わたしはよみがえりであり、命　である」と宣言された。このことばを言うことができるのは神のみである。すべての被造物　は神のみこころと力によって生きている。彼らは神に依存してその生命を受ける。最高のセ　ラフから最もいやしい生物にいたるまで、すべてのものは生命のみなもとである神から力を　補充されるのである。

神と 1 つであられるお方だけが、わたしはいのちを捨てる力があり、またそれを受ける力があると言うことがおできになった。キリストはその神性のうちに死の縄目をたちきる力　を持っておられた。　キリストは眠った者の初穂として死人の中からよみがえられた。彼は揺祭のたばの本体であって、そのよみがえりは揺祭のたばが主の前にささげられる日に起こっ　た。1000 年以上の間、この象徴的な儀式が行われてきた。収穫の畑から、熟した穀物の初穂が集められ、人々が過越節のためにエルサレムに行った時、その初穂のたばは主の前に感謝　のささげ物としてふられた。これがささげられるまでは、作物にかまを入れ、それを集めて　たばにしてはならなかった。神にささげられたたばは収穫を象徴していた。そのように、初　穂なるキリストは、神の王国に集められる霊的大収穫の象徴であった。キリストのよみがえ　りはすべての死せる義人のよみがえりの型であり保証である。「わたしたちが信じているよ　うに、イエスが死んで復活されたからには、同様に神はイエスにあって眠っている人々をも、イエスと一緒に導き出してドさるであろう」（Ｉテサロニケ 4：14）。

キリストは、よみがえられた時、多くのとりこをよみからおつれになった。キリストがなくなられる時の地震で墓が口を開き、キリストがよみがえられると、彼らはキリストといっしょに出てきた。彼らは神と共に働いた者、生命を犠牲にして真理のためにあかしをたてた者たちであった。いま彼らは、彼らを死人の中からよみがえらせてくださったキリストの証人となるのであった。 キリストは、その公生涯の間に、死人をいのちによみがえらせられた。彼はナインのやもめの子と、会堂司の娘とラザロをよみがえらせられた。しかし、彼らは不死を着せられなかった。彼らはよみがえってからも、やはり死ぬべき体であった。しかし、キリストの復活のときによみから出て来た者たちは永遠の生命によみがえったのであった。彼らは、死とよみに対するキリストの勝利を記念する者として、キリストと共に昇天した。この人たちはもはやサタンのとりこではない、わたしが彼らをあがなったのだとキリストは言われた。彼らがわたしのいるところに共にいて、決して死を見たり、悲しみを経験することがないように、わたしは彼らをわたしの力の初穂として、よみからつれ出したのだ。

これらの人たちは都へ行って、多くの人に現れ、キリストが死人の中からよみがえられ、われわれはキリストと共によみがえったのだと宣言した。こうしてよみがえりについての聖なる事実が不滅のものとなった。よみがえった聖徒たちは、「あなたの死者は生き、彼らのなきがらは起きる」ということばが事実であることをあかしした（イザヤ 26：19）。彼らのよみがえりは、「ちりに伏す者よ、さめて喜びうたえ。あなたの露は光の露であって、それ　を亡霊の国の上に降らされるからである」という預言の成就についての 1 つの例であった（イザヤ 26：19）。 信じる者にとって、キリストはよみがえりであり、命である。罪のために失われた命は、われらの救い主をとおして回復される。なぜなら、キリストはご自身のうちに命をもっておられて、みこころのままに人をよみがえらせられるからである。主は不死を与える権 利を受けておられる。キリストは人性のうちにあってお捨てになった命を、ふたたびとりあげて人類にお与えになる。キリストはこう言われた、「わたしがきたのは、羊に命を得させ、豊かに得させるためである」「わたしが与える水を飲む者は、いつまでも、かわくことがないばかりか、わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠の命に至る水が、わきあがるであろう」「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者には、永遠の命が

あり、わたしはその人を終りの日によみがえらせるであろう」（ヨハネ 10：10、4：14、6：54）。

信じる者には、死は小事にすぎない。キリストは、それをたいしたことではないかのように語っておられる。「もし人がわたしの言葉を守るならば、その人はいつまでも死を見ることがないであろう。……わたしの言葉を守る者はいつまでも死を味わうことがないであろう」（ヨハネ 8：51、52）。クリスチャンにとって死は眠り、一瞬の沈黙と暗黒にすぎない。生命はキリストと共に神のうちにかくされ、「キリストが現れる時には、あなたがたも、キリストと共に栄光のうちに現れるであろう」（コロサイ 3：4）。 キリストが十字架から「すべてが終った」と叫ばれた声は死者の中にも聞こえた。その声は纂の壁をつらぬいて、眠っ ている者たちに起きよと呼びかけた。キリストの声が天から聞こえる時もこれと同じであ る。 その声は墓所をつらぬき、墓を開き、キリストのうちにある死人は起きあがるのである。救い主のよみがえりの時には少数の墓が開いたが、再臨の時にはすべての死せるとうとい人 々がキリストの声を聞いて、輝かしい永遠の生命に入るのである。キリストを死人の中から よみがえらせたのと同じ力が、教会をよみがえらせ、これに「すべての支配、権威、権力、 権勢……また、この世ばかりでなくきたるべき世においても唱えられる、あらゆる名」にま さ っ て 、 キ リ ス ト と 共 に 栄 光 を さ ず け る の で あ る （ エ ペ ソ 1： 21 ） 。

第 82 章　「なぜ泣いているのか」

キリストの十字架のそばに立った女たちは、安息日の時間が過ぎ去るのを見守りながら待った。週の初めの日の朝早く、女たちは救い主のお体に塗る高価な香料を持って、墓へやってきた。彼女たちはイエスが死人の中からよみがえられるとは思っていなかった。望みの太陽は沈み、夜が彼女たちの心をおおっていた。女たちは歩きながらキリストの恵みのみわざと慰めのみことばを語り合った。しかし、「わたしは再びあなたがたと会うであろう」と言われたキリストのみことばをおぼえていなかった（ヨハネ 16：22）。その時すでに起こっていたことを何も知らないで、女たちは、「だれが、わたしたちのために、墓の入口から石をころがしてくれるのでしょうか」と言いながら、園へ近づいた（マルコ 16：3）。彼女たちは石をとりのけることができないことを知っていたが、それでも道を進んで行った。すると見よ、昇る太陽の光とちがった栄光で急に天が明るくなった。地がゆれた女たちは大きな石がとりのけてあるのを見た。墓はからっぽであった。

女たちはみな同じ方向から墓へやってきたのではなかった。マグダラのマリヤは一番先にその場に着いた。彼女は石がとりのけられているのを見ると、弟子たちに知らせるために急いで立ち去った。そのうちにほかの女たちがやってきた。光が墓のあたりに輝いていたが、イエスのお体はそこになかった。女たちがそのあたりでうろうろしていると、突然彼女たちはそこにいるのが自分たちだけではないことがわかった。輝く衣を着た若者が墓のそばに腰をおろしていた。それは石をころがした天使であった、彼は、イエスの友だちを驚かさないように、人間の姿をとっていた。しかし彼のまわりには、まだ天の栄光の光　が輝いていたので、女たちは恐れた。彼女たちは向きを変えて逃げようとしたが、天使のことばが彼女たち　の足をとどめた。

「恐れることはない。あなたがたが十字架におかかりになったイエスを捜していることは、わたしにわかっているが、もうここにはおられない。かねて言われたとおりに、よみがえられたのである。さあ、イエスが納められていた場所をごらんなさい。そして、急いで行って、弟子たちにこう伝えなさい、『イエスは死人の中からよみがえられた』」（マタイ 28：

5～7）。もう 1 度女たちは墓の中をのぞきこみ、ふたたびすばらしい知らせを聞く。人間の姿をしたほかの天使がそこにいて、「あなたがたは、なぜ生きた方を死人の中にたずねているのか。そのかたは、ここにはおられない。よみがえられたのだ。まだガリラヤにおられたとき、あなたがたにお話しになったことを思い出しなさい。すなわち、人の子は必ず罪人らの手に渡され、十字架につけられ、そして 3 日目によみがえる、と仰せられたではないか」と言う（ルカ 24：5～7）。

主はよみがえられた、主はよみがえられたのだ。女たちはそのことばを何度も何度もくりかえす。香料を塗る必要はもうないのだ。救い主は死んでおられるのではなく、生きておられるのだ。イエスがご自分の死について語られた時、ふたたびよみがえると言われたことを、女たちは思い出す。今日は世界にとって何という日だろう。「そこで女たちは恐れながらも大喜びで、急いで墓を立ち去り、弟子たちに知らせるために走って行った」（マタイ 28：8）。

マリヤはよい知らせを聞いていなかった。彼女はペテロとヨハネのところへ行って、「だれかが、主を墓から取り去りました。どこへ置いたのか、わかりません」と悲しいことばを伝えた（ヨハネ 20：2）。弟子たちは墓へ急いで行って、マリヤが言ったとおりであることを知った。彼らは覆いと布切れを見たが、主はおられなかった。しかしここにさえ主がよみがえられた証拠があった。亜麻布は無頓着に放り出してはなくて、念入りにたたまれ、それぞれの場所におかれていた。ヨハネは「これを見て信じた」（ヨハネ 20：8）。彼は、キリストは死人の中からよみがえられねばならないという聖句をまだ理解しなかった。しかしいま彼は、ご自分のよみがえりを預言された救い主のことばを思い出した。 亜麻布をこのように念入りに置いたのはキリストご自身であった。強い天使が墓へやってくると、それまで仲間の天使と主のお体を守っていたほかの天使が加わった。天からきた天使が石をころがしてどけると、もう 1 人の天使が墓に入って、イエスのお体に巻かれていた布をほどいた。しかし、それをたたんでその場に置いたのは救い主のみ手であった。星も原子もみちびかれるイエスの御目には、重要でないものは何もなかった。秩序と完全が主のすべてのみわざに見られた。

マリヤは、ヨハネとペテロについて墓へ行った。2 人がエルサレムへ帰っても、マリヤは残った。からっぽの墓をのぞきこむと、悲しみが彼女の心を満たした。のぞきこんでいると、2 人の天使が、1 人はイエスの横たわっておられた場所のあたまのあたりに、もう 1 人は足のあたりにいるのが見えた。彼らはマリヤに「女よ、なぜ泣いているのか」と言った。「だれかが、わたしの主を取り去りました。そして、どこに置いたのか、わからないのです」と彼女は答えた（ヨハネ 20：13）。

マリヤは、イエスのお体がどうなったのか教えてくれる人を見つけなければならないと考えて、天使たちからも離れた。するともう 1 つの声が彼女に、「女よ、なぜ泣いているのか。だれを捜しているのか」と話しかけた（ヨハネ 20：15）。涙にくもった目で、マリヤは人の姿を見たが、園の番人だと思って、「もしあなたが、あのかたを移したのでしたら、ど こへ置いたのか、どうぞ、おっしゃって下さい。わたしがそのかたを引き取ります」と言っ た（ヨハネ 20：15）。もし、この富める人の墓が、イエスにとってあまりにりっぱすぎる埋葬所と考えられるなら、わたしがイエスのために場所を提供しよう。キリストご自身の声に よってからになった墓、すなわち、ラザロが横たわっていた墓があった。そこを主の埋葬所 としたらどうだろう。 十字架につけられた主のとうといお体をお世話できるなら、悲しみのうちにある自分にとって大きな慰めになると彼女は思った。しかし今イエスは、そのなつか しいお声で、「マリヤよ」と、彼女に言われた。今マリヤは自分に話しかけているのが見知 らない人ではないことがわかり、ふり向いて、生きておられるキリストを目のあたりに見た。彼女は、喜びのあまり、イエスが十字架につけられたことを忘れた。

イエスの足をかきいだこうとするかのように、マリヤはイエスにかけよって、「ラボニ」と言った。しかしイエスは手をあげて、わたしを引きとめてはいけない、「わたしは、まだ父のみもとに上っていないのだから。ただ、わたしの兄弟たちの所に行って、『わたしは、わたしの父またあなたがたの父であって、わたしの神またあなたがたの神であられるかたのみもとへ上って行く』と、彼らに伝えなさい」と言われた（ヨハネ 20：17）。そこでマリヤはその喜ばしい知らせをもって弟子たちのもとへ急いだ。 イエスは、ご自分の犠牲が天父によって受け入れられたとの確証が与えられるまではご自分の民から尊敬を受けようとされな

かった。イエスは天の宮廷へのぼり、その血によってすべての人が永遠の生命を得られるように、イエスが人類のために払われたあがないは充分であったとの保証を神ご自身から聞かれた。天父はキリストとの間の契約、すなわち悔い改めて従う者たちを受け入れ、み子を愛されるように、彼らを愛されるという契約を批准された。キリストはそのみわざを完結して、「わたしは人を精金よりも、オフルのこがねよりも少なくする。（英訳・とうといものとする）」との誓いを果たされるのであった（イザヤ 13：12）。天と地の一切の権力はいのちの君に与えられたので、イエスは、ご自分の権力と栄光を分け与えるために、罪の世にある弟子たちのもとへお帰りになった。

救い主が神のみ前にあって、教会のための賜物を受けておられる時に、弟子たちは、イエスのからっぽの墓のことを思って嘆き悲しんでいた。全天にとって喜びの日であったその日は、弟子たちにとっては不安と混乱と困惑の日であった。女たちの証言こ対する彼らの不信は、彼らの信仰が衰えていたことの証拠である。キリスト復活の知らせは、彼らが予期していたこととちがっていたので、彼らはそれを信じることができなかった。話がうますぎてほんとうではあるまいと彼らは考えた。サドカイ人の教えや、彼らのいわゆる科学的理論をあまりに聞かされていたので、彼らが心に受けたよみがえりについての印象はぼんやりしていた。 死人の中からよみがえるということがどういうことかほとんどわかっていなかった。彼らはこの大きな問題を理解することができなかった。

天使たちは女たちに、「今から弟子たちとヘテロとの所へ行って、こう伝えなさい。イエスはあなたがたより先にガリラヤへ行かれる。かねて、あなたがたに言われたとおり、そこでお会いできるであろう」と言った（マルコ 16：7）。この天使たちは、キリストの地上生涯のあいだ、ずっと守護天使としてキリストと共にいたのであった。彼らは、キリストの裁判と十字架の処刑を目撃したのだった。彼らは弟子たちへのキリストのことばを聞いたのだった。このことは、弟子たちに対する天使たちのことばからわかるのであって、弟子たちはそのことを確信すべきだったのである。このようなことばは、よみがえられた主の使者たちしか語ることのできないものだった。

「弟子たちとペテロとの所へ行ってこう伝えなさい」と天使たちは言った（マルコ 16：7）。キリストがなくなられてから、ペテロは後悔にうちひしがれていた。主をこぼんだ彼の 恥ずべき行為と救い主の愛と苦悩のまなざしが、たえず彼につきまとった。弟子たち全部の　中で、彼が最もきびしい苦しみを味わったのだった。その彼に、彼の悔い改めが受け入れら　れ、彼の罪がゆるされたという保証が与えられている。彼の名前が呼ばれているのであ る。「弟子たちとペテロとの所へ行って、こう伝えなさい。イエスはあなたがたより先にガ リラヤへ行かれる。……そこでお会いできるであろう、と」（マルコ　16：7）。弟子たちの全部がイエスを捨てたのに、ふたたびイエスにお会いするようにとの呼びかけに彼らの全部　が含まれている。イエスは彼らをお捨てにならなかった。マグダラのマリヤが、主にお会い　したことを彼らに告げた時、彼女はガリラヤで会うようにとの召しを伝えた。しかもこの伝　言は　3 度彼らに伝えられたのである。イエスは天父のもとにのぼられたあとで、ほかの女たちに現れて「『平安あれ』と言われたので、彼らは近寄りイエスのみ足をいだいて拝した。　そのとき、イエスは彼らに言われた、『恐れることはない。行って兄弟たちに、ガリラヤに　行け、そこでわたしに会えるであろう、と告げなさい』」（マタイ 28：9、10）。

キリストの復活後、地上における主の最初の働きは、弟子たちに対する変わらない愛とやさしい思いやりを彼らに確信させることであった。イエスは、ご自分が彼らの生ける救い主であるということ、墓の束縛をたちきられたということ、もはや死という敵の手にとらわれないということについて、彼らに証拠を示すため、また彼らの愛する教師として共におられたときと変わらない愛の心を持っておられることをあらわすために、何度も何度も彼らに現れたもうた。イエスは彼らを愛のきずなで、いっそう固くむすぼうと望まれた。行って兄弟たちに、ガリラヤでわたしに会うように告げなさいと、主は言われた。

このようなはっきりした約束を聞いた時、弟子たちは、ご自分のよみがえりについて彼らに予告されたキリストのことばについて考え始めた。しかしそれでもなお彼らは喜ばなかった。彼らは疑いと困惑を捨て去ることができなかった。女たちが主を見たと断言したときでさえ、弟子たちは信じようとしなかった。彼らはそれを、女たちの幻影だと思った。 困難に困難が加わりつつあるように思えた。週の 6 日目に、彼らは主が死なれるのを見た。翌週

の第 1 日に、彼らは主のお体がなくなったことを知り、民衆をあざむくためにそれを盗み去ったのだという罪をきせられた。彼らを不利な立場におとしいれつつあるいつわりの印象をたえず打ち消すのに彼らは絶望した。彼らは祭司たちの敵意と民衆の怒りを恐れた。彼らは困ったときにはいつも助けてくださったイエスがいてくださったらと心から願った。

「わたしたちは、イスラエルを救うのはこの人であろうと、望みをかけていました」ということばを、彼らはしばしばくりかえした（ルカ 24：21）。さびしい、悲観した気持ちで、彼らは、「もし、生木でさえもそうされるなら、枯木はどうされることであろう」と言われたキリストのことばを思い出した（ルカ 23：31）。彼らは 2 階の部屋に集まり、愛する師の運命がいつ自分たちの運命となるかも知れないことを思って、戸口を固くとざした。

ところがその間中、ずっと彼らは、救い主がよみがえられたことを知って喜んでいられたはずである、園では、イエスがそば近くにおられた時、マリヤは泣いていた。彼女の目は涙にくもっていたので、イエスがわからなかった。また、弟子たちの心は悲しみでいっぱいだったので、彼らは天使たちのことばも、キリストご自身のことばも信じなかった。 いまでもこれらの弟子たちと同じことをしている者がどんなに多いことだろう。「だれかが、わたしの主を取り去りました。そして、どこに置いたのか、わからないのです」というマリヤの絶望的な叫びをくりかえす者がどんなに多いことだろう（ヨハネ 20：13）。どんなに多くの人々に、「女よ、なぜ泣いているのか。だれを捜しているのか」という救い主のことばが語られることだろう（ヨハネ 20：15）。イエスは彼らのそば近くにおられるのに、彼らのくもった目にはイエスがわからないのである。イエスは彼らに話しかけられるが、彼らは理解しないのである。

ああ、うなだれた頭をあげ、目を開いてイエスを見、耳にイエスの声を聞くことができるように。「急いで行って、弟子たちにこう伝えなさい、『イエスは……よみがえられた』」（マタイ 28：7）。大きな石でとざされ、ローマの封印をされたヨセフの新しい墓を見るなと彼らに告げなさい。キリストはそこにおられない。からっぽの墓を見るな。望みなく、助けなき者のように嘆くな。イエスは生きておられ、彼が生きておられ るがゆえにわれわれも生きるのである。感謝の心で、聖なる火にふれたくちびるで、キリストはよみがえられたと

喜ばしい歌をひびかせなさい。主は生きてわれらのとりなしをしてくださる。この望みをとらえなさい。そうすれば、それはたしかな、あてになる錨のようにわれらの魂をつなぎとめるであろう。信じなさい、そうすればあなたは神の栄光を見るであろう。

第 83 章　エマオへの道

主が復活された日の午後遅く、2 人の弟子たちが、エルサレムから 8 マイルはなれたエマオという小さな町へ向かっていた。この弟子たちは、キリストの働きに目だった立場を占めたことはなかったが、キリストの熱心な信者であった、彼らは過越節を守るために都へきたのであったが、最近起こった出来事にひどく困惑していた。彼らは、キリストのお体が墓からはこび去られたというその朝の知らせを聞き、また天使たちを見、イエスに会った女たちの報告も聞いていた。いま彼らは、瞑想と祈りのために家へ帰るところだった。彼らは裁判と十字架の処刑の場面について語り合いながら、悲しい気持ちで夕暮れの道をたどっていた。こんなにまったく落胆したことはなかった。望みもなく信仰もなく、彼らは十字架の影の中を歩いていた。

道をまだあまり遠くまで進まないうちに、1 人の見知らぬ人がいっしょになった。しかし彼らは憂うつと失望に心を奪われていたので、その人をはっきり観察しなかった。彼らは　心の中の思いをうちあけながら、話をつづけていた。彼らは、キリストがお与えになった教　訓について議論していたが、それは理解できないように思えるのだった。彼らが、起こった　出来事について話していると、イエスは彼らを慰めたいと熱望された。イエスは、彼らの悲　しみをごらんになっていた。あんな屈辱を受けたこの人が果たしてキリストだろうかという　思いを彼らの心に起こさせる矛盾と困惑に満ちた考え方を、イエスは理解された。彼らは悲　しみをおさえることができないで、泣いた。イエスは、彼らの心が愛によって主につながっ　ていることをお知りになり、彼らの涙をふいて、喜びに満たされるようにしたいと望まれた。しかし主は、まず第一に、決して忘れることのできない教訓を彼らにお与えにならねばなら　ない。

「イエスは彼らに言われた、『歩きながら互に語り合っているその話は、なんのことなのか』彼らは悲しそうな顔をして立ちどまった。そのひとりのクレオパという者が、答えて言った、『あなたはエルサレムに泊まっていながら、あなただけが、この都でこのごろ起ったことをご存じないのですか』」（ルカ 24：17、18）。彼らは、主について自分たちの失

望をイエスに語った。「あのかたは、神とすべての民衆との前で、わざにも言葉にも力ある預言者でしたが、祭司長たちや役人たちが、死刑に処するために引き渡し、十字架につけたのです」と彼らは言った（ルカ 24：19、20）。失望に痛む心と、ふるえる唇で、彼らはつけ加えて言った、「わたしたちは、イスラエルを救うのはこの人であろうと、望みをかけていました。しかもその上に、この事が起ってから、きょうが 3 日目なのです」（ルカ 24：21）。

ふしぎなことに、この弟子たちは、キリストのことばを思い出して、キリストが予告された通りのことが起こったのだということに気がっかなかった。彼らはキリストがうちあけられた話のあとの部分、すなわち 3 日目にキリストがよみがえられるということが、はじめの部分と同じように成就するということに気がつかなかった。これは彼らが覚えていなければならなかった部分であった。祭司たちと役人たちはこのことを忘れていなかった。「あくる日は準備の日の翌日であったが、その日に、祭司長、パリサイ人たちは、ピラトのもとに集まって言った、『長官、あの偽り者が

まだ生きていたとき、「3　日の後に自分はよみがえる」と言ったのを、思い出しました』」（マタイ 27：62、63）。しかしこの弟子たちは、そうしたことばをおぼえていなかった。 「そこでイエスが言われた、『ああ、愚かで心のにぶいため、預言者たちが説いたすべての事を信じられない者たちよ。キリストは必ずこれらの苦難を受けて、その栄光に入るはずではなかったのか』」（ルカ 24：25、26）。2 人は、自分たちの心の奥底を見通して、このように熱心に、やさしく、しかも同情と望みにあふれた話し方をするとは、いったいこの見知らぬ人はだれだろうとあやしんだ。キリストが売り渡されて以来、初めて彼らは心に望みがわいてきた。たびたび彼らは道連れの人を熱心に見つめて、そのことばをキリストがお語りになりそうなことばだと思った。彼らは驚きに満たされ、その心臓はよろこばしい期待に脈うち始めた。

キリストは、聖書の歴史のアルファであるモーセの書から始めて、聖書全体を通じて、ご自身に関する事柄を解説された。もしキリストが最初にご自分を彼らにお知らせになったら、彼らの心は満足してしまったであろう。喜びのあまり、彼らはもう何も求めなかったで

あろう。彼らは、旧約の型と預言を通して、キリストについてたてられているあかしを理解する必要があった。これらのものの上に彼らの信仰が築かれねばならない。キリストは、彼らをさとらせるのに奇跡を行われず、聖書を説明することがその最初の働きであった。彼らは、キリストの死を彼らのすべての望みの消滅とみなしていた。ところがイエスは、ご自分の死こそ、彼らの信仰の最も強力な証拠であることを預言者の書からお示しになった。

この弟子たちを教えるにあたって、イエスは、ご自分の使命の証拠として旧約聖書の重要性を示された。クリスチャンと称する人々の多くは、旧約聖書はもう役にたたないと主張して、いまでは旧約聖書を捨てている。しかし、キリストはそういうことを教えておられない。キリストは旧約聖書を非常に尊重されて、ある時こう言われたことがある。「もし彼らがモーセと預言者とに耳を傾けないなら、死人の中からよみがえってくる者があっても、彼らはその勧めを聞き入れはしないであろう」（ルカ 16：31）。 アダムの時代から世の終わりにいたるまで、父祖たちと預言者たちを通して語られるのは、キリストのみ声である。救い主は、新約聖書と同じようにはっきり旧約聖書の中にあらわされている。キリストの生涯と新約聖書の教えをはっきりと美しく浮き出させるのは、預言時代から出ている光である。キリストの奇跡は、その神性の証拠である。しかし、イエスが世のあがない主であるというもっと強力な証拠は、旧約の預言を新約の歴史に照らしあわせることの中に見いだされる。 預言から論じて、キリストは弟子たちにご自分が人としてどういうお方であるべきかについて正しい概念をお与えになった。人々の希望通りに王位と王権をとられるメシヤを、彼らが期待していたことから誤解が生じていた。それは、最高の地位から最低の地位までキリストがおくだりになったことについての正しい見解と矛盾するのであった。

キリストは、弟子たちの考え方がこまかい点にいたるまで純粋であり、また真実であるように望まれた。彼らは、キリストに割りあてられた苦難のさかずきについて、できるだけ深く理解しなければならない。彼らがまだ理解できない恐るべき戦いは、世の基がおかれる前からたてられた契約の成就であることをキリストは示された。律法を犯す者は、誰でも罪をつづけるかぎり死なねばならないように、キリストは死なれなければならない。このことはすべて起こらねばならないのであるが、それは、敗北のうちに終わるのではなくて、栄光

と永遠の勝利のうちに終わるのであった。世を罪から救うために、あらゆる努力をつくさねばならないと、イエスは彼らに語られた。イエスに従う者たちは、熱心な辛抱強い努力をもって、イエスが生活されたように生活し、イエスが働かれたように働かねばならない。

このように、キリストは弟子たちに説き聞かせて、彼らが聖書を理解するようにその心を開かれた。弟 子たちは疲れていたが、話はおとろえなかった。いのちと保証の言葉が救い主の口から語られた。しかし、それでも彼らの目はふさがれていた。イエスがエルサレムの滅亡のことを話されると、彼らは滅ぶべき都を泣きながらながめた。しかし、彼らはまだ旅の道連れが誰であるかをあやしまなかった。キリストは、ご自分のことを別人のように言っておられたので、彼らは話題のぬしであるお方が自分たちのそばを歩いておられるとは思わなかった。彼らは、この人は大祭に出かけていま家へ帰る途中の人だと思った。イエスは、彼らと同じように、ごつごつした石の上を注意深く歩き、時々いっしょに立ちどまってはしばらく休息された。こうして彼らは山道を進んで行ったが、まもなく神の右に座を占めて、「わたしは、天においても地においても、いっさいの権威を授けられた」と言うことのできるお方が彼らのそばを歩いておられるのであった（マタイ 28：18）。

道を歩いている間に、太陽は沈み、旅人たちがいこいの場所に到着する前に、畑で働いている人たちは仕事をやめていた。弟子たちが家にはいろうとすると、その見知らぬ人は旅を続けるようにみえた。 しかし、弟子たちは彼に心をひかれていた。彼らの魂は、この人からもっと多くのことを聞きたいとあこがれた。そこで彼らは、「わたしたちと一緒にお泊まり下さい」と言った（ルカ 24：29）。彼は、その招待を受けそうにみえなかったので、彼らはしいて引きとめ、「もう夕暮になっており、日もはや傾いています」とすすめた。キリストは、その願いをきき入れて、「彼らと共に泊まるために、家にはいられた」（ルカ 24： 29）。

もし、弟子たちがしいて招待しなかったら、彼らは、旅の道連れがよみがえられた主であることを知らなかったであろう。キリストは誰にも交際を強制されない。彼は、ご自分を必要とする者と交際される。彼はどんな貧しい家にも喜んでお入りになり、どんないやしい心も励まされる。しかし、もし人が無関心で、天のお客のことを考えなかったり、いっしょ

にいていただきたいと願ったりしなければ、イエスは通り過ぎておしまいになる。こうして、多くの者が大きな損失をこうむるのである。キリストが、途中いっしょに歩いておられたのに、弟子たちがイエスに気がつかなかったように、彼らもまた、キリストに気がつかないのである。　簡単な夕食のパンがすぐに用意される、それは、食卓の正面に席をとったお客の前におかれる。すると彼は、食物を祝福するために手をさし出される。弟子たちは驚きのあま　り、あとずさりする。道連れの人は、主がいつもされていたのとちょうど同じように手をさ　し出している。もう 1 度よく見ると、見よ、その手には釘のあとが見える。2 人は同時に、 主イエスだ、死からよみがえられたのだと叫ぶ。

彼らは立ち上がって主の足下にひれふし、主を拝する。しかし、主のお姿は目の前から消えてしまった。彼らは、最近までおからだを墓に横たえておられたお方が席を占めておられたあたりを見て、互いに言う、「道々お話しになったとき、また聖書を説き明してくださったとき、お互の心が内に燃えたではないか」（ルカ　24：32）。 しかし、彼らはこのすばらしい知らせを伝えなくてはならないと思うと、すわって語っていることができない。彼らの疲れと空腹はどこかへいってしまった。彼らは、食事に手もつけないで、喜びのあまり、すぐにもう 1 度さっきやってきた道を出かけ、都の弟子たちにこの知らせを伝えるために急ぐ。道は安全でないところもあったが、彼らは、つるつるする岩にすべりながら、けわしい場所を越えて行く。彼らは、自分たちといっしょに道を歩かれたお方の保護があることを見もしなければ、知りもしない。旅のつえを手にして、彼らはもっと早くもっと早くと願いながら道を急ぐ。彼らは道を見失ってはまた発見する。時には走りながら、時にはつまずきながら、彼らは目に見えない道連れであるイエスに途中ずっとそば近くにつきそわれながら、前進する。

夜は暗いが、義の太陽が彼らを照らしている、彼らの心は喜びにおどる。彼らは新しい世界にいるような気がする。キリストは生きておられる救い主で ある。彼らは、もはやキリストが死んでおられるといって嘆かない。キリストはよみがえられたのだと、彼らは何度も何度もくりかえす。この知らせを、彼らは悲しんでいる者たちに伝えるのだ。彼らは、エマオへの道中のふしぎな話を弟子たちに語らねばならない。彼らは、途中で誰と一緒になった

かを語らねばならない。彼らは、世に与えられた最高のメッセージ、今も永遠までも、人類家族の望みがかかっているうれしいおとずれをたずさえているのだ。

第 84 章　「安かれ」

エルサレムに着くと、2 人の弟子は東門から入って行く。この門は、祭りの時には夜も開いているのである。家々は暗くひっそりしているが、2 人の旅人はのぼる月の光をたよりに狭い通りを進んで行く。彼らは、イエスがなくなられる前の最後の一晩を過ごされた 2 階の広間に行く。ここに兄弟たちがいることを彼らは知っているのである。時刻は遅かったが、　彼らは、主のお体がどうなったかはっきりわかるまでは弟子たちが寝ないことを知っている。部屋のとびらは、固くとざされている。案内を求めて戸をたたくが、応答はない。すべてが　静まりかえっている。そこで彼らは名前を名のる。とびらが注意深く開かれ、彼らははいっ　て行く。その時目に見えないもう 1 人のお方が彼らといっしょにお入りになる。するととびらはふたたび固く閉ざされて、スパイを防ぐ。

旅人たちは、みんなが驚いて興奮しているのに気がつく。部屋の中の人々がいっせいに感謝と賛美の声をあげて、「主は、ほんとうによみがえって、シモンに現れなさった」と言う（ルカ 24：34）。すると 2 人の旅人は、道を急いだためにあえぎながら、イエスが自分たちに現れたもうたふしぎな話を語る。彼らがちょうど語り終わり、ある者たちが事実にしてはうますぎるから信じられないと言っていると、見よ、もう 1 人のお方が彼らの前に立たれる。どの目もその見知らないお方にくぎづけにされる。案内を求めて戸口をたたいた者はなかった。足音もきこえなかった。弟子たちはびっくりして、何事かとあやしむ。その時、彼らはほかならぬ主の声を聞く。「安かれ」ということばが、はっきりと明らかに主の口から語られる。「彼らは恐れ驚いて、霊を見ているのだと思った。そこでイエスが言われた、『なぜおじ惑っているのか。どうして心に疑いを起すのか。わたしの手や足を見なさい。まさしくわたしなのだ。さわって見なさい。霊には肉や骨はないが、あなたがたが見るとおり、わたしにはあるのだ』。〔こう言って、手と足とをお見せになった〕」（ルカ 24：37～40）。

彼らは、残酷な釘で傷つけられたその手と足を見た。彼らは、かって聞いた声にほかならない主の声を認めた。「彼らは喜びのあまり、まだ信じられないで不思議に思っていると、

イエスが『ここに何か食物があるか』と言われた。彼らが焼いた魚の 1 きれをさしあげると、イエスはそれを取って、みんなの前で食べられた」「弟子たちは主を見て喜んだ」（ルカ 24:41、42、ヨハネ　20：20）。信仰と喜びが不信にとって代わり、ことばでは言いあらわしようのない思いをもって、彼らはよみがえられた救い主をみとめた。

イエスの誕生の時、天使が「地の上では、み心にかなう人々に平和があるように」と布告した（ルカ　2：14）。そしていま、救い主はよみがえられてからはじめて弟子たちに現れたもうたとき、「安かれ」という祝福のことばで彼らに話しかけられた。イエスは、疑いと　恐れに悩んでいる魂にいつでも平安を語られる。主は、われわれが心の戸を開いて、「わた　したちと一緒にお泊まり下さい」と言うのを待っておられる（ルカ 24：29）。主は言われる、「見よ、わたしは戸の外に立って、たたいている。だれでもわたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしはその中にはいって彼と 食を共にし、彼もまたわたしと食を共にするであろう」（黙示録 3：20）。

イエスのよみがえりは、主にあって眠るすべての人の最後のよみがえりの型であった。よみがえられた救い主の顔つき、態度、ことばはみな弟子たちのよく知っているものであった。イエスが死人の中からよみがえられたように、イエスにあって眠る者はふたたびよみがえるのである。弟子たちがイエスを知っていたように、われわれは友人たちがわかるのである。彼らは、この世では不能だったり、病気だったり、みにくかったりしたかもしれないが、完全な健康と均整のとれた肉体をもってよみがえる。しかし、その栄化された体にあっても、彼らの正体は完全に保存される。「その時には、わたしが完全に知られているように、完全に知るであろう」（Ｉコリント 13：12）。われわれはイエスのお顔から輝き出る光によって輝く、愛する者たちの顔かたちを認めるのである。

イエスは弟子たちにお会いになった時、なくなられる前に語られたことば、すなわち、「モーセの律法と預言書と詩篇とに、わたしについて書いてあることは、必ずことごとく成就する」と言われたことばを彼らに思い出させられた（ルカ 24：44）。「そこでイエスは、聖書を悟らせるために彼らの心を開いて言われた、『こう、しるしてある。キリストは苦しみを受けて、3 日目に死人の中からよみがえる。そして、その名によって罪のゆるしを得させ

る悔改めが、エルサレムからはじまって、もろもろの国民に宣べ伝えられる。あなたがたは、これらの事の証人である』」（ルカ 24：45～48）。 弟子たちは、自分たちの働きの性質と範囲を理解しはじめた。彼らは、キリストが彼らにゆだねられたすばらしい真理を世にのべ 伝えるのであった。キリストの一生の出来事、キリストの死とよみがえり、それらの出来事 をさし示している預言、神の律法の神聖さ、救いの計画の奥義、罪のゆるしのためのイエス の力――こうしたすべてのことについて、彼らは証人であって、それらを世に知らせるので あった。彼らは、悔い改めと救い主の力を通して与えられる平安と救いの福音をのべ伝える のであった。

「そう言って、彼らに息を吹きかけて仰せになった、『聖霊を受けよ。あなたがたが許す罪は、だれの罪でも許され、あなたがたが許さずにおく罪は、そのまま残るであろう』」（ヨハネ 20：22）。聖霊は、まだ十分にあらわされていなかった。キリストがまだ栄光をお受けになっていなかったからである。もっと豊かな聖霊の降下は、キリストの昇天後まで起こらなかった。聖霊を受けるまでは、弟子たちは世に福音をのべ伝える任務を果たすことができないのであった。しかし、いま特別な目的のために聖霊が与えられた。弟子たちが教会に関連した正式の義務を果たすことができる前に、キリストはご自分の霊を彼らに吹きかけられた。キリストは、非常に神聖な責任を彼らに委託しようとしておられたので、聖霊なしにはこの働きは達成されないということを彼らに印象づけようと望まれた。

聖霊は、魂の中の霊的生命の呼吸である、みたまを与えることはキリストのいのちを与えることである。それは、受ける者にキリストの属性を吹き込む。このように神から教えられる人たち、心のうちにみたまの働いている人たち、その生活にキリストのような生活をあらわす人たちだけが、教会を代表する者として立ち、教会に代わってその任務を行うのである。 「あなたがたが許す罪は、だれの罪でも許され、あなたがたが許さずにおく罪は、そのまま残るであろう」とキリストは言われた（ヨハネ 20：23）。キリストはここで、他人をさばく自由をお与えになっているのではない。山上の垂訓で、イエスはこのことを禁じられた。それは神の大権である。しかし、組織された教会に、キリストは、教会員個人に対する責任 を負わせておられる。罪におちいる人たちに対して、教会は警告し、教え、できるなら回復

する義務がある。「あくまでも寛容な心でよく教えて、責め、戒め、勧めなさい」と主は言われる（Ⅱテモテ 4：2）。まちがった行為に対して正しい態度をとりなさい。危険のうちにある一人一人の魂に警告なさい。自分をごまかしているのをそのままにしておいてはならない。罪を罪 と呼びなさい。うそをつくこと、安息日を破ること、盗むこと、偶像をおがむこと、そのほかあらゆる悪について神が言っておられることを告げなさい。「このようなことを行う者は、神の国をつぐことがない」（ガラテヤ 5：21）。もし彼らがあくまで罪を離れないならば、あなたがたが神のみことばによって宣告したさばきは、天で彼らの上にくだるのである。罪を犯すことをえらぶことによって、彼らはキリストを否認するのである。教会は、彼らの行為を承認しないということを示さねばならない。さもなければ、教会自身が主をはずかしめることになる。教会は、神が罪について言っておられることを言わねばならない。教会は、神が指示しておられるとおりに罪を処理しなければならない。そうする時に教会の行動は天で批准される。教会の権威をあなどる者はキリストご自身の権威をあなどるのである。

しかし、この問題には明るい一面がある。「あなたがたが許す罪は、だれの罪でも許され」る（ヨハネ 20：23）。この考え方を第一にしよう。まちがいを犯している人々のために働く時に、どの目もキリストに向けさせよう。牧者は、主の牧場の群れにやさしい心づかいを持とう。まちがいを犯している人たちに救い主のゆるしと憐れみについて語ろう。罪人が悔い改めるように、そしてゆるすことがおできになるキリストを信ずるように励まそう。「もし、わたしたちが自分の罪を告白するならば、神は真実で正しいかたであるから、その罪をゆるし、すべての不義からわたしたちをきよめて下さる」ということを、神のみことばの権威にもとづいて宣言しよう（Ⅰヨハネ 1：9）。神は、「再びわれわれをあわれみ、われわれの不義を足で踏みつけられる。あなたはわれわれのもろもろの罪を海の深みに投げ入れ」られるとの保証が、悔い改める者にはだれにでも与えられている（ミカ 7：19）。

教会は、罪人の悔い改めを感謝の心をもって受け入れよう。悔い改める者を不信の暗黒からみちびき出して、信仰と義の光へ入れよう。彼のふるえる手をイエスの愛に置こう。このようなゆるしは天において批准される。 この意味においてのみ、教会は罪人をゆるす権威

がある。罪のゆるしはキリストの功績によってのみ得られる。誰にも、また人間のどんな団体にも、魂を不義からゆるす権威は与えられていない。キリストは、弟子たちに、万国へ行ってキリストの名により罪のゆるしを説くようにお命じになった。しかし、彼ら自身には 1 つの罪のけがれさえとり除く力は与えられていなかった。イエスの名だけが、「わたしたちを救いうる名」で、「これを別にしては、天下のだれにも与えられていない」のである（使徒行伝 4：12）。 イエスが初めて弟子たちに 2 階の広間で会われた時、トマスはいっしょにいなかった。トマスはほかの人たちのうわさを聞き、イエスがよみがえられたという十分な証拠を示されたが、憂うつと不信が彼の心を満たしていた。弟子たちがよみがえられた救い主のふしぎな出現について語るのを聞くと、彼はますます深い絶望に沈んだ。

もしイエスが実際に死人の中からよみがえられたとしても、字義通りの地上の王国についてもう望みはあり得ないのだった。また、主が自分を除いてほかのすべての弟子たちにあらわれたもうたと考えることは、彼の虚栄心を傷つけた。彼は信じないことを決心した。そして、1 週の間中自分のみじめさを思いつづけた。それは、兄弟たちの望みと信仰とは対照的に一層暗くみえた。 その間彼は、「わたしは、その手に釘あとを見、わたしの指をその釘あとにさし入れ、また、わたしの手をそのわきにさし入れてみなければ、決して信じない」とくりかえし断言した（ヨハネ 20：25）。彼は、兄弟たちの目で見ようとも、彼らのあかしにもとついた信仰を働かせようともしなかった。彼は熱烈に主を愛していたが、彼の心と思いはねたみと不信に占領されていた。

幾人かの弟子たちは、いまあのなつかしい 2 階の広間を一時の住居とし、夜になるとトマス以外の全部がそこに集まった。ある晩、トマスはほかの弟子たちに会おうと決心した。彼は、信じていないにもかかわらず、あのよい知らせがほんとうであるようにという かすかな望みをいだいていた。弟子たちは夕食をしながら、キリストが預言を通して彼らにお与えになった証拠について語った。「戸はみな閉ざされていたが、イエスがはいってこられ、中に立って『安かれ』と言われた」（ヨハネ 20：26）。

イエスはトマスをふりかえって、「あなたの指をここにつけて、わたしの手を見なさい。手をのばしてわたしのわきにさし入れてみなさい。信じない者にならないで、信じる者にな

りなさい」と言われた（ヨハネ 20：27）。このことばは、イエスがトマスの思いとことばを知っておられる証拠であった。この疑い深い弟子は、仲間のだれも 1 週間イエスに会っていないことを知っていた。彼らが自分の不信を主に告げたはずがない。彼は、目の前のお方が主であることに気づいた。彼はそれ以上の証拠を望まなかった。彼の心は喜びでおどった。彼はイエスの足下に身を投げて、「わが主よ、わが神よ」と叫んだ（ヨハネ 20：28）。 イエスは、彼が主を認めたことを受け入れられたが、やさしく彼の不信を譴責された。「あなたはわたしを見たので信じたのか。見ないで信ずる者は、さいわいである」（ヨハネ 20： 29）。もしトマスが兄弟たちのあかしを聞いて信ずる気持ちがあったら、彼の信仰はもっとキリストに喜ばれたのであった。もし世の人々が、いまトマスの例に従うなら、信じて救いにいたる人はいないだろう。キリストを受け入れる者はみな、ほかの人々のあかしによらねばならないからである。

疑いにおちいっている多くの人は、もし、トマスが仲間から与えられたような証拠を自分たちにも与えられるなら、自分たちは信ずるのだがと言いわけをする。彼らは、その証拠が与えられているだけでなく、もっと多くが与えられていることをみとめない。トマスのように、疑いの原因が全部のぞかれるのを待っている人々の多くは、その願いが決して実現されないであろう。彼らの不信はだんだん固まってしまうのである。暗い面を見たり、つぶやいたり、不平を言ったりするように自分自身を教育する人たちは、自分のやっていることがわからないのである。彼らは、疑いの種をまいているのであって、疑いの収穫をかりとることになる。こうして多くの人たちは、信仰と確信が最も必要な時に、望むことも信じることもできない無力な自分に気がつくのである。

トマスのとり扱いにおいて、イエスは弟子たちに 1 つの教訓をお与えになった。イエスの模範は、信仰が弱くて、疑いをはっきり示す人々をどのように扱わねばならないかを教えている。イエスはトマスをしかりつけて、おさえつけてしまったり、彼と議論したりなどなさらなかった。イエスは疑う者にご自身をお示しになった。トマスは、不当にも自分の信仰の条件を規定したが、イエスは、その寛大な愛と思いやりによって、すべての障壁を打破された。不信は、議論によってはめったに征服されない。それはむしろ、自己を固く守り、新

しいささえと口実を見いだす。しかしイエスが、十字架につけられた救い主として、その愛と憐れみのうちにあらわされる時、かつては固かった多くの口から、「わが主よ、わが神よ」とのトマスの告白が聞かれるであろう。

第 85 章　もう一度海辺で

イエスは弟子たちにガリラヤで会う約束をされた。そこで過越の週が終わるとすぐ、彼らはそこへ足を向けた。もし祭の間エルサレムにいなかったら、彼らは不誠意や異端として解釈されたであろう。そこで彼らは祭が終わるまで残っていた。しかし祭が終わると、彼らは救い主に会うために指示されたとおりに喜んで故郷へ向かった。 7 人の弟子たちが一緒だった。彼らはいやしい漁夫の身なりをしていた。彼らは世俗的な財産にはとぼしかったが、真理を知り、これを実行することに富 んでいた。そのために彼らは、天の神の目には、教師として最高であった。彼らは、預言者の学校の生徒だったことはなかったが、世に知られるかぎり最高の教育者によって 3 年間教えられていた。キリストの教えによって、彼らは高められ、賢明になり、洗練されて、人々を真理の知識に導く器となっていた。

キリストは、公生涯の時間の多くをガリラヤの海辺ですごされた。弟子たちが人々から邪魔されないような場所に集まると、彼らは、イエスとその偉大なみわざを思い出させるものにかこまれていることに気がついた。この海の上で、彼らの心が恐怖に満たされ、激しい嵐が彼らを破滅に追いやろうとした時、イエスが波の上を歩いて彼らの救助にこられたのだった。ここで嵐がイエスのみことばによって静められたのだった。すこしの小さなパンと魚で 1 万人以上の人々が養われた海辺は目のとどくところにあった。多くの奇跡の舞台となったカペナウムは遠くなかった。あたりの風景をながめていると、弟子たちの心は救い主のことばと行為でいっぱいになった。

気持ちのよい夜だった。するとペテロは、舟で魚とりに出ていくことにまだ以前の愛着を多分に持っていて、海へ出て行って網をうとうと提案した。この計画に彼らはすぐに加わった。彼らは食物と衣類が必要だった。うまくいけば一晩の魚獲によってこの必要が満たされるのであった。そこで彼らは舟にのって出かけたが、何もとれなかった。 一晩中働いたが効果はなかった。退屈な時間の間中、彼らはそこにおられない主のことを語り合い、海辺でのイエスの伝道で目に見たふしぎな出来事を思い起こした。彼らは自分たちの将来についてたずね合い、前途を悲観する気持ちが高まった。

その間中ずっと、イエスは、ただ 1 人岸辺で彼らのあとを目でおっておられたが、その姿は彼らの目に見えなかった。ついに夜が明けた。舟は岸からすこししか離れていなかった　ので、弟子たちは見知らない人が波打ち際に立っているのをみとめた。するとその人は近づ　いてきて、「子たちよ、何か食べるものがあるか」と言った。「彼らは『ありません』と答　えた。すると、イエスは彼らに言われた、『舟の右の方に網をおろして見なさい。そうすれ　ば、何かとれるだろう』。彼らは網をおろすと、魚が多くとれたので、それを引き上げるこ　とができなかった」（ヨハネ　21：5、6）。 ヨハネは、その見知らない人が誰であるかわかって、ペテロに「あれは主だ」と叫んだ。ペテロはすっかり喜んで元気になり、じっとして　いられなくなって、水の中にとびこんで行き、すぐに主のそばに立った。ほかの弟子たちは、魚のはいった網をひきながら、舟にのったままやってきた。「彼らが陸に上って見ると、炭　火がおこしてあって、その上に魚がのせてあり、またそこにパンがあった」（ヨハネ　21：　9）。

彼らはあまり驚いたので、その火と食物をどこから持ってこられたのかたずねなかった。「イエスは彼らに言われた、『今とった魚を少し持ってきなさい』」（ヨハネ 21：10）。ペテロはさっき手離した網のところへ走って行って、兄弟たちがそれを岸へ引きあげるのを手　伝った。働きが終わり、川意ができると、イエスは弟子たちに食事に来るように命じられた。イエスは食物をさき、それを彼らにわけられたが、7 人の者たちはみなそれがイエスであることを知って認めた。山の上で 5000 人を養われた奇跡が今彼らの、心によみがえってきた。しかしふしぎなおそれに満たされて、彼らは、黙ったまま救い主をみつめた。

イエスがわたしに従ってきなさいと彼らに言われた時の海辺の光景がまざまざと思い出された。彼らは、イエスの命令で、深いところへこぎ出して、網をおろしたら、網が破けそうになるほど網にいっぱいたくさんの魚がとれたことを思い出した。その時イエスは、魚とりの舟を捨てるようにと言われ、彼らに人をすなどる者としようと約束されたのだった。イエスがふたたび奇跡を行われたのは、その時の場面を思い出させ、その印象を深いものとするためだった。イエスの行為は、弟子たちの任命の更新であった。それは、主が死なれても、彼らがイエスから指定された働きをなす義務は軽減されていないということを示した。主と

の直接のまじわりはなくなり、また以前の職業による生計の道はなくなるのであったが、よみがえられた 救い主はなお彼らのことを心にかけてくださるのであった。そして彼らが主の働きをしているかぎり、主は彼らの必要に備えてくださるのであった。またイエスが彼らに網を舟の右側におろすように命じられたことには目的があった。右側には、イエスが岸に立っておられた。それは信仰の側であった。もし彼らがイエスとつながって働くなら、すなわちイエスの神としての力が彼らの人間的努力と結合する時、彼らはかならず成功するのであった。

キリストはもう 1 つ教訓をお与えにならねばならなかったが、それは特にペテロに関してであった。ペテロが主をこばんだことは、彼が以前に告白した忠誠心と恥ずかしい対照をなしていた。彼は主を恥ずかしめ、兄弟たちの不信を招いた。彼らはペテロが彼らの間で以前のような立場を占めることはゆるされないと考え、また彼自身も信頼を裏切ったものと思っていた。使徒としての働きにふたたび召される前に、彼は、兄弟たち全部の前で悔い改めの証拠を示さねばならない。そうしなければ悔い改めたとはいっても、彼の罪は、キリストの牧師としての彼の感化力を失わせたかもしれない。救い主は、ペテロが兄弟たちの信頼をとりもどし、彼が福音の上に招いた非難をできるだけとりのぞく機会を彼にお与えになった。

ここに、キリストに従うすべての者に対する教訓がある。福音は悪と妥協しない。それは罪をみのがすことができない。ひそかな罪はひそかに神に告白すべきである。しかし公然の罪には公然の告白が必要である。

弟子たちの罪に対する非難はキリストにあびせられる。それはサタンを勝利させ、動揺する魂をつまずかせる。悔い改めの証拠を示すことによって、この弟子は、力のおよぶかぎり、この非難をとりのぞくのである。　キリストが海辺で弟子たちといっしょに食事をしておられる時、救い主は、「ヨハネの子シモンよ、あなたはこの人たちが愛する以上に、わたし　を愛するか」とペテロに言われた（ヨハネ 21：15）。この人たちとは兄弟たちのことである。ペテロはかつて、「たとい、みんなの者があなたにつまずいても、わたしは決してつまずき　ません」と断言したことがあった（マタイ 26：33）。しかしこんどは、彼はもっと真実に自

分自身を評価していた。ペテロは、「主よ、そうです。わたしがあなたを愛することは、あなたがご存じです」と言った（ヨハネ 21：15）。わたしの愛は兄弟たちの愛よりも大きいのですという誇大な保証はない。彼は自分の献身について自分自身意見を表明しない。心のすべての動機を読まれるお方に、彼は、「わたしがあなたを愛することは、あなたがご存じです」と言って、彼の真心について判断してくださるようにお願いする。するとイエスは、「わたしの小羊を養いなさい」と命じられる（ヨハネ 21：15）。

ふたたびイエスは、ペテロに質問して、前のことばをくりかえされる。「ヨハネの子シモンよ、わたしを愛するか」（ヨハネ 21：16）。こんどはイエスは、ペテロが兄弟たちよりもイエスを愛するかどうかをおたずねにならなかった。2 度目の答えも初めと同じに、誇張した保証はなく、「主よ、そうです。わたしがあなたを愛することは、あなたがご存じです」　であった。イエスは「わたしの羊を飼いなさい」と彼に言われた（ヨハネ 21：16）。もう 1 度イエスは、「ヨハネの子シモンよ、わたしを愛するか」と試みの質問をされた。ペテロは　悲しんだ。彼はイエスが自分の愛を疑っておられると思った。主が自分を信頼されない理由　があることを知っていたので、彼は、心をいためて、「主よ、あなたはすべてをご存じです。わたしがあなたを愛していることは、おわかりになっています」と答えた。するともう 1 度イエスは、「わたしの羊を養いなさい」と言われた（ヨハネ 21：17）。

3 度ペテロは公然と主を知らないと言った、そこでイエスは 3 度ペテロから愛と忠誠心の保証を引き出し、その鋭い質問を、ちょうどさかとげのある矢のように、彼の傷ついた心　につきつけられた。弟子たちの集まっている前で、イエスは、ペテロの悔い改めの深さを明　らかにし、かつては威張っていた弟子がどんなに徹底的にへりくだった者になったかをお示　しになった。　ペテロは、生まれつき出しゃばりで衝動的だったので、サタンは彼を倒すためにそうした特性につけこんだ。ペテロがつまずく直前に、イエスは、「サタンはあなたがた　を麦のようにふるいにかけることを願って許された。しかし、わたしはあなたの信仰がなく　ならないように、あなたのために祈った。それで、あなたが立ち直ったときには、兄弟たち　を力づけてやりなさい」と彼に言われたのであった（ルカ　22：31、32）。その時が今きていた。そしてペテロの生まれ変わりは明らかだった。主が、綿密な、試みの質問をされても、

出すぎた、自己満足の答えは 1 つも出てこなかった。そしてそのけんそんと悔い改めのゆえに、ペテロは、群れの牧者として行動する前に、これまでになかったほどよい準備ができた。

ペテロを伝道に復帰させるとすぐにキリストが彼にまかされた最初の働きは、小羊を飼うことであった。これはペテロにとってほとんど経験のない働きだった。それには非常な注意とやさしさ、また非常な忍耐と辛抱が必要だった。それは、信仰の若い人たちに奉仕し、無知な人たちに教え、彼らの前に聖書を開き、彼らをキリストの奉仕に役立つように教育する働きであった。これまでペテロはそのような働きをするのにふさわしくなかったし、またその重要さを理解してもいなかった。しかしこれこそイエスがいまペテロを召された働きだった。この働きのために、彼自身の苦難と悔い改めの経験が準備となっていた。 ペテロはつまずく前には、いつも瞬間的な衝動から不用意にしゃべっていた。彼は自分自身について、あるいは自分が言わねばならないことについてはっきりした自覚をもたないうちに、いつもすぐ人を矯正したり、自分の思っていることを口に出したりした。

しかし悔い改めたペテロはまったくかわった。彼の以前の激しさは残っていたが、キリストの恵みがその熱心さを調節した。彼はもう激越でもなければ、自己を過信することも威張ることもなく、冷静で、落ち着いていて、教えを受け入れた。その時彼はキリストの羊の群ればかりでなく小羊も飼うことができた。 ペテロに対するキリストの態度は本人にとっても、兄弟たちにとっても教訓となった。それは、罪を犯した者に忍耐と同情とゆるしの愛をもって対するようにということを彼らに教えた。ペテロは主を知らないと言ったけれども、彼をがまんされたイエスの愛は決してゆるがなかった。キリストの牧者は、自分の手に世話をまかされた羊と小羊にこれとちょうど同じ愛を感じなければならない。ペテロは、自分自身の弱さと失敗を忘れないで、キリストが彼を扱われたようにやさしく羊の群れを扱うのであった。

キリストがペテロにされた質問には深い意味があった。キリストは、弟子であることと奉仕とについてたった 1 つの条件を述べられた。「わたしを愛するか」と、主は言われた。これが必要欠くことのできない資格である。ペテロがほかのあらゆる資格をそなえていても、

キリストの愛がなければ、彼は主の羊の群れを飼う忠実な牧者となることはできない。知識、慈悲心、雄弁、感謝、熱意はすべてよい働きの助けとなる。しかしイエスの愛が心のうちになければ、キリスト教の牧師の働きは失敗である。　イエスは、ペテロにだけ知らせておきたいと望まれたことがあったので、ペテロと 2 人だけで歩かれた。イエスは死なれる前、ペテロに、「あなたはわたしの行くところに、今はついて来ることはできない。しかし、あとに　なってから、ついて来ることになろう」と言われた。するとペテロは、「主よ、なぜ今あな　たについて行くことができないのですか。あなたのためには、命も捨てます」と言った（ヨ　ハネ　13：36、37）。こう言った時、彼は、キリストの足がどんなに高いところ、どんなに 深いところへ進んで行かれるのかすこしも知っていなかった。

ペテロは試練がやってきた時失敗したが、ふたたびキリストに対する彼の愛を証明する機会を与えられることになった。ペテロが最後の信仰の試練のために力づけられるように、救い主は、彼の将来をお示しになった。有用な人生を送って、老齢が体力に影響を及ぼしはじめた時、ペテロはほんとうに主のあとに従うのであった。「イエスは彼に言われた、『……あなたが若かった時には、自分で帯をしめて、思い のままに歩きまわっていた。しかし年をとってからは、自分の手をのばすことになろう。そして、ほかの人があなたに帯を結びつけ、行きたくない所へ連れて行くであろう』。これは、ペテロがどんな死に方で、神の栄光をあらわすかを示すためにお話しになったのである」（ヨハネ 21：18、19）。 このようにイエスは、ペテロがどんな死に方をするかをお知らせになった。イエスはペテロが十字架上で手をひろげることまで予告された。そしてふたたびイエスは、この弟子に、「わたしに従ってきなさい」と言われた（ヨハネ 21：19）。ベテロはこのように示されたことによって落胆しなかった。彼は主のためにどんな死でも喜んで受けたいと思った。

いま多くの人々がそうであるように、ペテロはそれまで肉体をとられたキリストしか知らなかった、しかしいまはもうこのような限られた見方はしなかった。彼は、人性をとられたキリストと交わっていた時のような見方はもうしなかった。彼はイエスを 1 人の人、天からっかわされた教師として愛していたが、今はイエスを神として愛した。彼は、キリストが自分にとって何ものにもかえがたいお方であるという教訓を学んできた。いま彼は、主の犠

牲の使命にあずかる用意ができた。ついに十字架の前につれてこられた時、彼は、自分からたのんで、さかさまにはりつけられた。彼は主と同じ方法で苦難を受けることはあまりに名誉すぎると考えたのであった。

ペテロにとって、「わたしに従ってきなさい」ということばは教訓に満ちていた（ヨハネ 21：19）。この教訓は、彼の死についてばかりでなく、彼の人生の 1 歩 1 歩について与えられた。それまでペテロは自分勝手に行動する傾向があった。彼は、神の計画を実行するために待とうとしないで、自分が神の働きのために計画しようとした。 しかし、主よりも先に突進しても、何も得るところがなかった。イエスは彼に、「わたしに従ってきなさい」と命じられる。わたしより先に走ってはならない。そうしたら、あなたは 1 人でサタンの軍勢に対抗しなくてもよいのだ。わたしをあなたより先に行かせなさい。そうしたら、あなたは敵にうち負かされることがないであろう。

ペテロがイエスのそばを歩いていると、彼はヨハネがついてくるのに気がついた。するとこんどはヨハネの将来について知りたいという願いが起こったので、彼は、「主よ、この人はどうなのですか」とイエスに言った。「イエスは彼に言われた、『たとい、わたしの来る時まで彼が生き残っていることを、わたしが望んだとしても、あなたにはなんの係わりがあるか。あなたは、わたしに従ってきなさい』」（ヨハネ 21：21、22）。ペテロが知った方がよいことはみな主が彼に明らかにしてくださるということを彼は考えろべきであった。他人にわりあてられた働きについて余計な心配をしないで、キリストに従うことが各人の義務である。ヨハネについて、「たとい、わたしの来る時まで彼が生き残っていることを、わたしが望んだとしても」と言われたことによって、イエスは、この弟子が主の再臨まで生きるという保証をお与えになったのではなかった（ヨハネ 21：22）。イエスはご自身の最高権力を主張され、そしてたといそうなるように望まれたとしてもそれは何もペテロの働きに影響を与えるものではないということを言われたにすぎなかった。ヨハネとペテロの将来は主のみ手にあった。イエスに従順に従うことが 2 人に要求される義務であった。

今日ペテロのような人がなんと多いことだろう。彼らは、人のことに関心を持ち、自分自身の義務をおろそかにする危険があるのに、他人の義務を知りたがる。キリストをながめ、

キリストに従うことがわれわれのわざである。他人の生活にまちがいが、他人の品性に欠点が見えるであろう。人性は弱さを負っている。しかしキリストのうちには完全さがある。キリストを仰ぎ見ることによって、生まれ変わった者となるであろう。 ヨハネは非常に長生きした。彼はエルサレムの滅亡と、広大な神殿の破壊を目に見たが、それは世界の最後の滅亡を象徴していた。ヨハネは最後の日まで、親しく主に従った。教会に対するヨハネのあかしの主旨は、「愛する者たちよ。わたしたちは互に愛 し合おうではないか」「愛のうちにいる者は、神におり、神も彼にいます」ということであった（Ｉヨハネ 4：7、16）。

ペテロは使徒の任務に復帰させられたが、キリストから栄誉と権威を受けたことは、彼が兄弟たちよりも優越した地位を与えられたことを意味しなかった。「主よ、この人はどうなのですか」とのペテロの問いに答えて、主が、「あなたにはなんの係わりがあるか。あなたは、わたしに従ってきなさい」と言われた時に、キリストはこの点をはっきり示された（ヨハネ 21：21、22）。ペテロは教会のかしらとしての栄誉を与えられたのではなかった。ペテロの背信をゆるし、羊の群れを養うことを委ねられることによってキリストが彼に示された恵みと、ペテロ自身が忠実にキリストに従ったことによって、彼は兄弟たちの信頼をかち得た。彼は教会の中で大きな影響力を持っていた。しかしペテロは、ガリラヤの海辺でキリストから教えられた教訓を一生の間忘れなかった。聖霊によって彼は教会にあててこう書いた、「そこで、あなたがたのうちの長老たちに勧める。わたしも、長老のひとりで、キリストの苦難についての証人であり、また、やがて現れようとする栄光にあずかる者である。あなたがたにゆだねられている神の羊の群れを牧しなさい。しいられてするのではなく、神に従って自ら進んでなし、恥ずべき利得のためではなく、本心から、それをしなさい。また、ゆだねられた者たちの上に権力をふるうことをしないで、むしろ、群れの模範となるべきである。そうすれば、大牧者が現れる時には、しぼむことのない栄光の冠を受けるであろう」（Ｉペテロ 5：1～4）。

第 86 章　行ってすべての国民に教えよ

天のみ座からほんの 1 歩のところに立って、キリストは、弟子たちに任命をお与えになった。「わたしは、天においても地においても、いっさいの権威を授けられた」とキリスト　は言われた。「それゆえにあなたがたは行って、すべての国民を……教えよ」「全世界に出　て行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えよ」（マタイ 28：18～20、マルコ 16：15）。このことばは、弟子たちがその意義を把握するように、何度も何度もくりかえされた。天の光は、身分の高い者にも低い者にも、富める者にも貧しい者にも、地のすべての住民の　上に、明るい強い光線となって輝くのであった。弟子たちは世を救う働きにあがない主と共　に働く者となるのであった。

この任命は、キリストが 12 人の弟子たちと 2 階の広間で会合された時に与えられたのであったが、今はもっと多数の者に与えられることになった。ガリラヤの山での集まりに、呼び集められるかぎりすべての信者が集められた。この集まりについては、キリストご自身が、なくなられる前に、時と場所を指定しておかれた。墓場の天使は、ガリラヤで会うというキリストの約束を弟子たちに思い出させた。この約束は、過越節の週の間エルサレムに集まっていた信者たちにくりかえされ、彼らを通して、キリストの死を嘆き悲しんでいた多くのさびしい人たちの耳にはいった。すべての人たちが熱烈な関心をもってこの会見を待望した。ねたみ深いユダヤ人の疑いを避けるために、彼らは、回り道をして四方から集会の場所へやってきた。キリストについて自分たちが聞いた知らせを熱心に語り合いながら、彼らはふしぎな思いをもってやってきた。

定められた時間になると、およそ 500 人の信者たちが山の上にいくつかの小さなかたまりになって集まり、キリストがよみがえられてからお会いした人たちから聞けるだけのこと　を聞こうと熱心に待った。弟子たちはこの群れからあの群れへと歩きまわって、自分たちが　イエスについて見たり聞いたりしたことを語り、またイエスが自分たちにそうされたように、聖書から説き聞かせた。

トマスは自分が不信仰だった話を物語り、彼の疑いが一掃されたことを語った。突然イエスが彼らの間に立たれた。どこから、どうやってこられたのか誰にもわからなかった。集まっていた人々の多くは、これまでイエスにお会いしたことがなかったが、その手と足に十字架につけられた傷跡を見た。イエスのお顔は神のみ顔のようだったので、彼らはイエスを見て、おがんだ。 しかしある人たちは疑った。いつでもそういう人はいるものである。信仰を働かせるのに困難を感じる人たちがいて、彼らは自分自身を疑問の側に置く。こういう人たちは不信のために多くのものを失うのである。

復活後イエスが多くの信者たちと会見されたのはこの時だけであった。イエスは彼らのところへおいでになって語り、「わたしは天においても地においても、いっさいの権威を授けられた」と言われた（マタイ 28：18）。弟子たちはすでにイエスが語られる前におがんでいたが、死にとじられていたくちびるから出るイエスのことばには特別な力があって彼らを感動させた。イエスは今やよみがえられた救い主であった。彼らの多くは、イエスが力をあらわして病人たちをいやし、サタンの力を支配されるのを見たのであった。彼らは、イエスがエルサレムに王国を建てられる権力を、すべての反対をおさえる力を、また自然界を支配する力を持っておられると信じた。イエスは荒れ狂う波を静め、泡立つ波の上を歩き、死人を命によみがえらせられた。今主は「いっさいの権威」がご自分に与えられたと宣言された。イエスのことばは、聞く者の心をこの地上の一時的なものから天上の永遠なるものへ向けた。彼らはキリストの威厳と栄光について最高の概念にまで高められた。

山の上でのキリストのことばは、人類のためのキリストの犠牲が十分にして完全であるということを告げていた。あがないの条件は果たされた。イエスがそのためにこの世にこられた働きは達成された。イエスは、天使たちと支配と権威からあがめられるために神のみ座のもとへ行かれる途中であった。イエスは仲保者としての働きにお入りになったのだった。無限の権威を帯びて、キリストは、弟子たちに任命をお与えになった。 「それゆえに、あなたがたは行って、すべての国民を弟子として、父と子と聖霊との名によって、彼らにバプテスマを施し、あなたがたに命じておいたいっさいのことを守るように教えよ。見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである」（マタイ 28：19、20）。

ユダヤ国民は聖なる真理の保管者とされたが、パリサイ主義のために全人類の中で最も排他的で最も頑迷な者となった。祭司たちと役人たちについてのすべて、すなわちその衣服、風習、儀式、言い伝えは、彼らを世の光とするのにふさわしくなかった。彼らは自分自身すなわちユダヤ国民を世界とみなした。しかしキリストは、階級制度や国の差別をまったく含まない信仰と礼拝、すなわちすべての民族、すべての国民、すべての階級の人々に適応する信仰をのべ伝えるために弟子たちを任命されたのである。　弟子たちと別れる前に、キリストはみ国の性質をはっきり述べられた。主は、み国について、前に弟子たちにお語りになった　ことを思い起こさせられた。この世に現世的な王国ではなくて、霊的王国を建てることがご　自分の目的であると、主は宣言された、キリストは、ダビデの位につかれた地上の王として　統治されるのではなかった。ふたたびイエスは、彼らに聖書を開いて、ご自分が経験された　すべてのことは天においてご自身と天父との協議によって定められたものであることを示さ　れた。すべてのことは聖霊の感動を受けた人々によって預言されていた。イエスは言われた。わたしがメシヤとして受け入れられないことについてあなたがたに打ち明けたことが何もか　も起こったのだ。わたしが耐えねばならない屈辱、わたしが死なねばならない死についてわ　たしが言ったことはすべて実証された。3 日目にわたしはふたたびよみがえった。聖善をもっ と熱心に調べなさい。そうすればこれらのすべてのことの中にわたしに関する詳細な預言が　成就したことがわかるであろう。

キリストは、弟子たちの手に残された働きをエルサレムから始めるように委任された、エルサレムは、人類のためのキリストの驚くべきへりくだりの場面であった。ここで彼は苦難を受け、捨てられ、罪に定められた。ユダヤの国はイエスの誕生の地であった。ここでイエスは、人性という衣を着て、人々と共に歩まれたが、彼が人々の中におられた時、どんなに天が地に近づいたかをみとめた者はほとんどなかった。エルサレムで、弟子たちの働きが開始されねばならない。　キリストがエルサレムで苦難を受けられ、骨折って働かれてもみとめられなかったことを考えて、弟子たちはもっと有望な伝道地をキリストにお願いできたかもしれなかったが、彼らはそのような願いをしなかった。キリストが真理の種をまかれた土地を弟子たちはたがやすのであった。種は芽を出して豊かな収穫を生ずるであろう。その働

きにおいて、弟子たちは、ユダヤ人のねたみと憎しみから迫害にあわねばならないであろう。しかし主はこれに耐えられたのであるから、彼らはそれから逃げ出すべきではなかった。憐れみの最初の提供は、救い主の殺害者たちに向けられねばならない。

またエルサレムには、これまでひそかにイエスを信じていた人々、祭司たちと役人たちにだまされていた人々がたくさんいた。この人たちにも福音が示されるのであった。彼らに悔い改めが呼びかけられるのであった。キリストを通してのみ罪のゆるしが得られるというすばらしい真理が明らかにされるのであった。過ぐる数週間の感動的な事件のためにエルサレムじゅうがわきたっている時、福音の宣伝は最も深い印象を与えるであろう。 しかしこの働きはエルサレムにとどまるのではなかった。それは地の果てまでひろがるのであった。キリストは弟子たちに言われた。あなたがたはわたしが世のために送った自己犠牲の生活を口に見た。あなたがたはイスラエルのためのわたしの努力を目に見た。彼らはいのちを受けるためにわたしのもとにこようとせず、また祭司たちと役人たちはわたしに対して好き勝手なことをし、聖書に預言されていたとおりにわたしを捨てたが、それでも彼らは神のみ子を受け入れる機会がもう 1 度あるのだ。わたしのもとにきて罪を告白する者をみなわたしが受け入れることをあなたがたは見てきた。わたしに来る者をわたしは決してこばみはしない。望む者はだれでも、神とやわらぎ、永遠の生命を受ける。

弟子たちよ、あなたがたにわたしはこの憐れみのメッセージを委ねる。それはまずイスラエルに与えられ、次に諸国、諸国語、諸民族に与えられるのである。それはユダヤ人にも異邦人にも与えられるのである。信じる者はすべて 1 つの教会に集められるのである。 聖霊の賜物を通して、弟子たちは驚くべき力を受けるのであった。彼らのあかしはしるしとふしぎなわざによって確認されるのであった。使徒たちばかりでなく、そのメッセージを受け入れた者たちによって、奇跡が行われるのであった。イエスはこう言われた、「信じる者には、このようなしるしが伴う。すなわち、彼らはわたしの名で悪霊を追い出し、新しい言葉を語り、へびをつかむであろう。また、毒を飲んでも、決して害を受けない。病人に手をおけば、いやされる」（マルコ 16：17、18）。

当時毒殺がしばしば行われた。無法な人々は、自分の野心のさまたげとなる人間をこの方法で除くことをちゅうちょしなかった。イエスは弟子たちの生命がこのような危険にさらされることを知っておられた。多くの人々は、イエスの証人たちを殺すことを神への奉仕だと思うだろう。そこでイエスは彼らをこの危険から守ることを約束された。 弟子たちは、イエスが「民の中のあらゆる病気、あらゆるわずらいをおいやしになった」のと同じ力を持つのであった（マタイ 4：23）。キリストの名によって肉体の病気をいやすことによって、彼らの魂をいやしてくださるキリストの力をあかしするのであった（マタイ 9：6 参照）。そこでいま新しい賜物が約束された。弟子たちは、他の国民にも福音を説くことになるので、他の国語を話す力を受けるのであった。使徒たちとその仲間は無学な人たちだったが、ペンテコステの 日に聖霊の降下を受けることによって、彼らのことばは、自国語であろうと外国語であろうと、語句においてもアクセントにおいても純粋で、単純で、正確なものとなった。 こうしてキリストは、弟子たちに任務をお与えになった。働きの遂行にイエスは十分な道を備え、その成功の責任をご自身が負われた。

彼らがイエスのことばに従い、イエスにつながって働くかぎり、失敗することはないのであった。すべての国民に行きなさいと、イエスは彼らにお命じになった。人の住むかぎりどんな地球の果てまで行っても、わたしがそこにいることを知りなさい。信仰と確信をもって働きなさい。わたしがあなたがたを捨てる時は決してないのだから。 救い主が弟子たちにお与えになった任務には信者の全部が含まれていた。これには世の終わりにいたるまですべてのキリスト信者が含まれている。救霊の働きが牧師だけに負わされていると考えるのは重大な誤りである。天の霊感を受けた者はすべて福音をのべ伝える責任が負わされる。キリストの生命を受ける者はみな同胞の救いのために働くように任命される。教会はこの働きのために設立されているのであって、聖なる誓約によって教会に加わる者はみなそのことによってキリストと共に働く者となることを誓ったのである。

「御霊も花嫁も共に言った、『きたりませ』。また、聞く者も『きたりませ』と言いなさい。かわいている者はここに来るがよい。いのちの水がほしい者は、価なしにそれを受けるがよい」（黙示録 22：17）。聞く者はだれでもこの招きをくりかえすのである。この世に

おける職業がなんであろうと、第一の関心事は魂をキリストに導くことでなければならない。会衆に話すことはできないかもしれないが、個人のために働くことができる。自分が主から受けた教えを個人個人に伝えることができる。伝道は説教だけではない。病気と苦しみのうちにある人々をやわらげ、困っている人々を助け、落胆している人々や信仰の弱い人々に慰めのことばを語る者は伝道しているのである。近いところにも遠いところにも、罪の意識にうちひしがれた魂がいる。人間を堕落させるのは困難や骨折り仕事や貧乏ではない。不義が、悪をなすことが人を堕落させるのである。それが不安と不満を生じさせるのである。キリストはご自分のしもべたちが、罪に悩む魂のために奉仕するように望まれる。

弟子たちは自分たちのいるところから働きを始めるのであった。最も困難で、最も見込みのない働き場をみすごしてはならなかった。 同じように、キリストの働き人の一人一人は、自分のいるところから働きを始めるのである、われわれ自身の家族の中には、同情にかわき、生命のパンに飢えた魂がいるかもしれない。キリストのために教育すべき子供たちがいるかもしれない。われわれ自身の門口に異邦人がいる。いちばん近くにある働きを忠実にしよう。それから、われわれの努力を神のみ手がみちびかれるままに遠くへひろげよう。多くの人々の働きは環境に制限されているようにみえるかもしれない。しかしどこであろうと忠実に、勤勉に働くならば、それは地の隅々にまで知られるのである。地上におけるキリストの働きはせまい場所に限られているようにみえたが、全地からやってきた多くの人々がキリストのメッセージを聞いた。神はしばしば最も単純な方法を用いて最大の結果をなしとげられる。神の働きのどの部分も、車輪の内部の輪のように、ほかの部分と互いに依存し合い、一致して働くことが神のご計画である。どんないやしい働き人も、聖霊に動かされて目に見えない弦をかきならす時に、その振動する音は地の果てまでひびき、永遠の時代にわたってメロディーをかなでるのである。

しかし、全世界に出て行けとの命令をみすごしてはならない（マルコ 16：15 参照）。われわれの目をかなたの国々に向けるようにと訴えられている。キリストはへだての壁すなわち国籍というへだての偏見を打破し、全人類家族への愛を教えておられる。主は、人間の利己心が定めたせまい社会から人々を高められる。主は、地域的な境界線と人間のつくった

社会的な差別を廃止される。キリストは隣人と他人、　友人と敵の区別をされない。困っている魂をみな兄弟とみなし、世界を働き場とみなすようにと、主は教えておられる。救い主は、行って、すべての国民に教えよと言われた時、またこう言われた、「信じる者には、このよ　うなしるしが伴う。すなわち、彼らはわたしの名で悪霊を追い出し、新しい言葉を語り、へ　びをつかむであろう。また、毒を飲んでも、決して害を受けない。病人に手をおけば、いや　される」（マルコ　16：17、18）。この約束は、任命と同じように遠大なものである。全部の賜物が信者の一人一人に与えられるというのではない。　「御霊は思いのままに、それらを各自に分け与えられるのである」（Ｉコリント 12：11）。しかしみたまの賜物は、主の働きのためその必要に応じて、どの信者にも約束されている。この約束は使徒たちの時代と同様　に今日も固く、信頼に値するものである。「信じる者には、このようなしるしが伴う」（マ　ルコ　16：17）。これは神の子らの特権であって、信仰の証拠としてもつことのできるすべてのことを把握すべきである。

「彼らは……病人に手をおけば、いやされる」（マルコ　16：18）。この世界はいわば巨大な病棟であるが、キリストは病人をいやし、サタンのとりこに救いを告げるためにこられた。イエスご自身は健康で元気だった。イエスはご自分の生命を、病人や、苦しんでいる者や、悪鬼にとりつかれている者にわけ与えられた。主は、いやしの力を受けるためにやってくる者を 1 人も追いかえされなかった。主は助けを懇願する者たちが自分で病気を招いたことをご存じだった。それでもイエスは彼らをいやすことをこばまれなかった。これらのあわれな魂にキリストのいやしの力が及ぼされる時に、彼らは罪を自覚し、多くの者が、肉体の病気はもちろん、霊的な病気もいやされた。福音には今も同じ力があるのだから、今日同じ結果が見られないはずがない。 キリストは苦しんでいる一人一人の魂の不幸をお感じになる。悪霊が人間の肉体を破滅させる時に、そのわざわいをお感じになる。高熱に生命の流れが焼きつくされる時に、イエスはその若悩をお感じになる。そして主はご自分がこの地上におられた時と同じように、今も喜んで病人をいやされる。キリストのしもべたちはキリストの代表者であって、キリストの働きのうつわである。主は彼らを通していやしの力を働かそうと望まれる。

救い主のいやしの方法には弟子たちにとって教訓があった。ある時、主は盲人の目にどうを塗って、「シロアム……の池に行って洗いなさい」とお命じになった。「そこで彼は行って洗った。そして見えるようになって、帰って行った」（ヨハネ 9：7）。 病気は、大医師イエスの力だけでなおすことができるのであるが、それでもキリストは単純な自然の力をお　用いになった。キリストは薬物療法に賛成なさらなかったが、単純な白然療法を是認され た。　苦しみをいやしてもらった多くの人々に、キリストは、「もう罪を犯してはいけない。 何かもっと悪いことが、あなたの身に起るかも知れないから」と言われた（ヨハネ 5：14）。こうしてイエスは病気が神の定められた自然と霊的な法則を犯した結果であることを教えら　れた。人が創造主の計画に調和した生活を送りさえすれば、この世の大きな不幸は存在しな　いであろう。

キリストは、古代イスラエルの指導者また教師であられたが、健康は神の律法に従った報いであると、彼らにお教えになった。パレスチナで病人たちをいやされた大医師イエスは、古代イスラエルの民に雲の柱から語って、彼らのしなければならないことと神が彼らのためになされることについてお告げになった。「あなたが、もしあなたの神、主の声に良く聞き従い、その目に正しいと見られることを行い、その戒めに耳を傾け、すべての定めを守るならば、わたしは、かつてエジプト人に下した病を 1 つもあなたに下さないであろう。わたしは主であって、あなたをいやすものである」と、主は言われた（出エジプト 15：26）。キリストは、彼らの生活習慣についてはっきりした教えをイスラエルに与え、「主はまたすべて　の病をあなたか ら取り去ら……れるであろう」と保証された（申命記　7：15）。彼らが条件を果たした時に、この約束は立証された。「その部族のうちに、ひとりの倒れる者もなかっ　た」（詩篇 105：37）。

この教訓はわれわれのためである。健康を保ちたければだれでも守らねばならない条件がある。誰でもみなこれらの条件がなんであるかを知らねばならない。主は、自然の法則であっても霊的な法則であっても、主の律法について人が無知であることをお喜びにならない。われわれは、霊的な面ばかりでなく、肉体的な面においても、健康を回復するために神と共に働く者となるのである。 そこでわれわれは、どのように健康を維持し、回復するかについ

て人々に教えねばならない。病気の人たちのためには、神が自然のうちにお備えになった療法を用い、健康を回復することがおできになるただ 1 人のお方である神を彼らに指し示さねばならない。病人や悩める者たちを信仰の腕によってキリストにつれて行くことがわれわれの働きである。彼らが大医師イエスを信じるように教えねばならない。イエスの約束をとらえて、主の力のあらわれを祈らねばならない。福音の本質は回復であって、救い主は、われわれが病人や望みなき者や苦しんでいる者たちにイエスの力にすがるようにすすめることを望んでおられる。

キリストのすべてのいやしのわざには愛の力があった。信仰によってその愛にあずかることによってのみキリストのみわざの器となることができるのである。もしキリストとの聖なるつながりをおろそかにするなら、生命を与える力の流れが豊かな流れとなってわれわれから人々にながれることができない。人々の不信仰のために、救い主ご自身でも多くの大いなるみわざをなすことがおできにならなかったところがあった。同じように、いまも不信仰が教会を聖なる助け手であるイエスから引き離している。教会は永遠の現実をしっかりととらえていない。教会に信仰が欠けているために神は失望され、神の栄光が失われている。

キリストが共にいてくださると教会に約束されているのは、そのみわざをなすことによってである。行ってすべての国民に教えなさい、「見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである」と、キリストは言われた（マタイ 28：20）。キリストのくびきを負うことが、キリストの力を受ける第一の条件である。教会の生命そのものは、教会が主の任命を忠実に果たすことにかかっている。この働きをおろそかにすれば、そこにはかならず霊的な弱さと衰えが生じる。人々のための活動的な働きがないところでは愛は衰え、信仰は弱くなる。 キリストは、福音の働きにおいて、牧師たちが教会の教育者になるように望んでおられる。彼らは、失われた者をたずね求めて救う方法を教会員に教えるのである。しかし彼らはこの働きをしているだろうか。 悲しいことに、いまにも消えそうな教会内の命の火花をかきたてるのにどれほど多くの者が骨折らねばならないことだろう。失われた羊をさがし求めていなくてはならないはずの者から病める小羊のように世話をしてもらわなくては

ならない教会がどんなに多いことだろう。しかもその間に、幾百万の人々が、キリストを知らずに滅びつつあるのである。

神の愛は人類のためにはかり知ることのできないほど深く動かされたのに、これほど大きな愛を受けている者たちに表面的な感謝しかないのを見て、天使たちは驚く。天使たちは、神の愛に対する人々の浅薄な認識に驚き、天は、魂に対する人々の無関心さに憤慨している。そのことについてキリストがどう思っておられるか知りたいだろうか。父母は、自分の子供が寒さと雪の中に行き暮れているのに、それを救えたはずの人たちからみすごしにされ、死ぬがままにほうっておかれたことを知ったらどう思うだろうか。彼らはひどく悲しみ、狂気のように憤慨しないだうりか。彼らはその涙のように熱く、その愛のようにはげしい怒りをもって、そうした殺人者たちを攻撃しないであろうか。一人一人の人間の苦難は神の子の苦難であって、滅びつつある同胞に助けの手をさし出さない人々は神の正義の怒りをひき起こすのである。　これが小羊イエスの怒りである。キリストとのまじわりを公言しながら、同胞の必要に無関心だった人たちに向かって、キリストは、大いなるさばきの日に、「あなたが　たがどこからきた人なのか、わたしは知らない。悪事を働く者どもよ、みんな行ってしまえ」と宣告されるであろう（ルカ 13：27）。

弟子たちにお与えになった任務の中に、キリストは、彼らの働きのあらましを述べられたばかりでなく、彼らのメッセージもお与えになった。「あなたがたに命じておいたいっさいのことを守るように教えよ」とキリストは言われた（マタイ 28：20）。弟子たちはキリストがお教えになったことを教えるのであった。キリストがご自身の日を通してばかりでなく、旧約のすべての預言者たちと教師たちを通して語られたことがここに含まれている。人間の　教えは除外されている。　言い伝えや、人間の理論や結論、あるいは教会の律法がはいる余地 はない。教会の権威によって定められたおきては、この任務の中に含まれていない。キリス　トのしもべたちは、そうしたものを教えるのではなかった。キリストご自身のことばと行為　についての記録とともに、「律法と預言者」が世に与えるように弟子たちに委託された宝で　ある。キリストのみ名は、彼らの合いことばであり、彼らを世人と区別する記章であり、彼　らの一致のきずなであり、彼らの行動の権威であり、彼らの成功のみなもとである。キリス

トのみ国では、キリストのみ名がきざまれていないものはどんなものでも認められないのである。

福音を、生命のない理論としてではなくて、生活を変える生きた力として示さねばならない。神は、ご自分の恩恵を受ける者たちをその力の証人にならせようと望んでおられる。神のみこころを痛めるような生活を送っていた人たちでも神は快く受け入れてくださる。彼らが悔い改める時に、神は、ご自分の聖なるみたまをさずけ、彼らを高い責任の地位に置き、神の限りない憐れみをのべ伝えるために彼らを不忠実な者たちの陣営につかわされる。神の恵みによって人はキリストのような品性を持つことができ、神の大いなる愛の保証を喜ぶことができるということについて、神はご自分のしもべたちがあかしをたてるよう望まれる。人類が神のむすこ、むすめとしてその聖なる特権を回復し、復帰するまで神は満足すること　がおできにならないということについて、われわれにあかしをたてさせたいと神は望まれ　る。キリストのうちには、牧者のやさしさ、親の愛情、憐れみ深い救い主の比類のない恵み がある。キリストは、最も魅力のあることばで祝福をお与えになる。主はそうした祝福を宣　言されるだけでは満足されない。主は、それらの祝福を、自分のものにしたいという願いを　起こさせるように、最も魅力的な方法で提供される。キリストのしもべたちも同じように、　言いあらわしようのない賜物であるキリストの栄光の富を紹介するのである。教理の単なる　くりかえしでは何 1 つできない時に、キリストのすばらしい愛は心をとかし、これを従えるのである。

「あなたがたの神は言われる、『慰めよ、わが民を慰めよ』」「よきおとずれをシオンに伝える者よ、高い山にのぼれ。よきおとずれをエルサレムに伝える者よ、強く声をあげよ、声をあげて恐れるな。ユダのもろもろの町に言え、『あなたがたの神を見よ』と。……主は　牧者のようにその群れを養い、そのかいなに小羊をいだき、そのふところに入れて携え ゆ……かれる」（イザヤ　　40：1、9～11）。「万人にぬきんで……はなはだ美しい」おかた について人々に告げ知らせなさい（雅歌　5：10、16）。ことばだけではそれを語ることができない。それを品性に反映し、生活にあらわそう。キリストは弟子たち一人一人のうちにご　自分が再現されるのを待っておられる。神は一人一人を「御子のかたちに似たものとしよう

として、あらかじめ定めて下さった」（ローマ 8：29）。一人一人を通して、キリストの寛容と愛、聖潔、柔和、憐れみ、まことが世にあらわされるのである。

最初の弟子たちは出て行ってみことばをのべ伝えた。彼らはその生活にキリストをあらわした。そこで主は彼らと共に働き、「御言に伴うしるしをもって、その確かなことをお示しになった」（マルコ 16：20）。これらの弟子たちは働きのために備えをした。ペン テコステの日の前に、彼らは共に集まって、すべての不和をすて去った。彼らは 1 つになった。彼らは祝福が与えられるとのキリストの約束を信じ、信仰をもって祈った。彼らは自分たちのためだけに祝福を求めなかった。彼らは魂の救いのために重荷を負った。福音を地の果てまで伝えることになったので、彼らは、キリストの約束された力がさずけられるように求めた、その時聖霊がそそがれ、1 日に幾千の人々が悔い改めた。 今もこれと同じである。人間の空論ではなく、神のみことばをのべ伝えよう。クリスチャンは不和をとり除き、失われた者を救うために神に献身しよう。信仰をもって祝福を求めるときに、それは与えられるのである。使徒時代の聖霊の降下は「秋の雨」であったが、その結果はすばらしかった。しかし「春の雨」はもっと豊かなものとなるであろう（ヨエル 2：23 参照）。

心と体と魂を神にささげる者は誰でも体力と知力の新しい賜物をたえず受けるであろう。天の尽きることのない補給は彼らの思いのままに与えられる。キリストは彼らにご自身の霊の息吹、すなわちご自身の命をお与えになる。聖霊は心と思いに働くためにその最高の能力をそそがれる。神の恵みは彼らの能力を幾倍にも大きくし、神の性質のあらゆる完全さが救霊の働きにおいて彼らの助けとして与えられる。キリストとの協力によって、彼らはキリストのうちにあって完全であり、人間的な弱さのうちにあっても全能者の行為をなすことができる。 救い主は、全世界の人々に恩恵をあらわし、ご自身の品性を印象づけようと熱望される。世界はキリストが買われた所有物であって、主は人々を自由にし、純潔にし、聖にしようと望まれる。サタンはこの目的を妨害しようとして働くが、世の人々のために流された血によって、神と小羊に栄光をもたらす勝利がなしとげられるのである。キリストは、勝利が完全になるまでは満足されない。「彼は自分の魂の苦しみにより光を見て満足」されるのである（イザヤ 53：11）。地のすべての国民は、キリストの恩恵の福音を聞くであろう。全部

の者がキリストの恩恵を受け入れるわけではないが、「子々、孫々、主に仕え、人々は主のことをきたるべき代まで語り伝え」るのである（詩篇 22：30）。「国と主権と全天下の国々の権威とは、いと高き者の聖徒たる民に与えられ」「水が海をおおっているように、主を知る知識が地に満ちる」（ダニエル 7：27、イザヤ 11：9）。「こうして、人々は西の方から主の名を恐れ、日の出る方からその栄光を恐れる」（イザヤ 59：19）。「よきおとずれを伝え、平和を告げ、よきおとずれを伝え、救を告げ、シオンにむかって『あなたの神は王となられた』と言う者の足は山の上にあって、なんと麗しいことだろう。……荒れすたれた所よ、声を放って共に歌え。主はその民を慰め、……主はその聖なるかいなを、もろもろの国びとの前にあらわされた。地のすべての果は、われわれの神の救いを見る」（イザヤ 52：7～10）。

第 87 章　「わたしの神またあなたがたの神であられるかたのみもとへ」

キリストが天父のみ座へのぼられる時がきた。天来の勝利者として、イエスは勝利の記念品をたずさえて天の宮廷へ帰ろうとしておられた。イエスは、なくなられる前に、「わたしは、わたしにさせるためにお授けになったわざをなし遂げ……ました」と天父に言明された（ヨハネ 17：4）。よみがえって栄光を受けられたお体の主を弟子たちが親しく知ることができるように、イエスは、よみがえられたのちしばらく地上にとどまられた。いまイエスは別れを告げようとしておられた。主はご自分が生ける救い主であるという事実を証明された。弟子たちはもうイエスを墓とむすびつけて考える必要はなかった。彼らはイエス を天の宇宙の前で栄光を受けられたお方として考えることができた。

イエスは、昇天の場所として、在世中そのご臨在によって幾度もきよいところとされた場所をえらばれた。このような栄光を受けることになったのは、ダビデの都のあった場所シオンの山でもなければ、神殿のあった場所モリヤの山でもなかった。そこでは、キリストがあざけられ、捨てられたのであった。そこでは、もっと強い愛の潮流となってもどって行くあわれみの波が、岩のようにかたくなな心によって打ち返されたのであった。そこからイエスは、心に重荷を負い、疲れはててオリブ山へ休みに行かれたのだった。聖なるシカイナは、最初の神殿を離れる時に、えらばれた都を捨てるのをいやがるかのように東の山にとどまった。同じようにキリストは、燃える思いをもってエルサレムを見わたしながらオリブ山に立たれた。山の森や谷はイエスの祈りと涙できよめられたのだった。そのけわしい坂はイエスを王として宣言した群集の勝利の叫びをこだましたのだった。その下り坂にあるベタニヤにはイエスがよく行かれたラザロの家があった。山のふもとのゲッセマネの園で、主はただ 1 人祈り、苦しまれたのだった。

この山から、イエスは天へのぼろうとしておられた。ふたたびイエスがこられる時、その足はこの山のいただきをふまれるであろう。悲しみの人としてではなく、輝かしい勝利の王として、イエスはオリブ山に立たれるであろう。その時ユダヤ人のハレルヤと異邦人のホサナとが入りまじり、あがなわれた人々の声が、大いなる軍勢のように、「すべての者の主

なるキリストに王冠を」との歓呼となって高まるであろう。 いまイエスは 11 人の弟子たちとこの山の方へ向かって行かれた。彼らがエルサレムの門を通りぬけると、多くの人々が、数週間前に役人たちによって有罪を宣告され、十字架につけられた人にひきいられたこの小さな一団をふしぎな目つきで見た。弟子たちはこれが主との最後の面会になるとは知らなかった。イエスは、彼らと語り、前にお教えになったことをくりかえすことに時間をついやされた。彼らがゲッセマネに近づくと、イエスは、あの非常な苦悩の夜お与えになった教訓を彼らに思い出させるために、立ちどまられた。もう 1 度イエスは、教会とご自分と天父との結合を象徴されたことのあるぶどうの木をごらんになった。ふたたびイエスは、その時お示しになった真理をくりかえされた。イエスの周囲のあらゆるものが、報いられなかったイエスの愛を思い出させた。イエスのお心にとってあれほど親しかった弟子たちさえ、イエスの屈辱の時に、彼を責め捨てたのだった。

キリストはこの世に 33 年間とどまられた。主はこの世のあざけり、侮辱、嘲笑に耐えられた。主は捨てられ、十字架につけられた。いま栄光のみ座にのぼろうとされる時、――ご自分が救うためにおいでになった民の恩知らずをかえりみて――イエスは、彼らに対する同情と愛を引っこめておしまいになるのではないだろうか。イエスが高く評価され、罪なき天使たちがその命令を実行しようと待っている王国に、イエスの愛情が集中されるのではないだろうか。そうではない。イエスが地上に残される愛する者たちへの約束は、「わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいる」である（マタイ 28：20）。 オリブ山にお着きになると、イエスは先頭に立って山の頂上を越え、ベタニヤの近所へ行かれた。ここでイエスは立ちどまられたので、弟子たちはそのまわりに集まった。イエスがやさしく彼らを見わたされると、そのお顔から光線が輝き出ているように見えた。イエスは彼らの欠点や失敗を責められなかった。彼らの耳に聞こえた主の唇からの最後のことばは、最も深いやさしさに溢れたことばであった。祝福のうちに、そしてあたかも主の守りを保証するかのように、両手をひろげて、イエスはゆっくり彼らを離れて上昇され、地上のどんな引力よりも強い力によって天の方へ引きあげられた。イエスが上の方へのぼって行かれると、畏敬の念にうたれた弟子たちは、昇天される主の最後の面影を目をこらして見つめた。栄光の雲がイエスを

彼らの目からかくした。そして雲のような天使たちの戦車がイエスを受けると、「見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのであ る」ということばが弟子たちのもとに返ってきた（マタイ 28：20）。同時に天使の合唱隊から最高の美しさと喜びに満ちた音楽の調べがただよってきた。

弟子たちがまだ上の方を見つめていると、すばらしい音楽のようなひびきをもった声が彼らに語りかけた。ふり向くとそこには人のかたちをした 2 人の天使の姿が見られた。天使は弟子たちに、「ガリラヤの人たちよ、なぜ天を仰いで立っているのか。あなたがたを離れ て天に上げられたこのイエスは、天に上って行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになるであろう」と言った（使徒行伝 1：11）。 この天使たちは、イエスを天の家へ送りとどけるために光り輝く雲の中に待っていた天使の群れの中の者であった。天使の 群れの中で最も高い地位にあるこの 2 人の天使たちは、キリストの復活の時に墓にやってきた天使たちであり、またこの地上におけるキリストの一生のあいだつきそっていた天使たち であった。全天は、罪ののろいに傷つけられたこの世におけるキリストの滞在が終わるのを 非常な期待をもって待っていた。いまや天の宇宙が王なるイエスを受け入れる時がきたのだ った。

この 2 人の天使たちはイエスを歓迎する群れに加わりたいと願わなかっただろうか。しかしイエスがあとに残された人々に対する同情と愛から、彼らは慰めを与えるために待った。「御使たちはすべて仕える霊であって、救を受け継ぐべき人々に奉仕するため、つかわされたものではないか」（ヘブル 1：14）。 キリストは人の姿をして天へのぼられた。弟子たちは雲がイエスを受けるのを目に見た。彼らと共にあゆみ、語り、祈られたお方、彼らと共に パンをさかれたお方、湖の上で彼らの舟にいっしょにおられたお方、その日彼らと共にオリ ブ山の登り道を苦労されたお方、その同じイエスが天父と同じみ座につくためにいま行って おしまいになったのである。ところが天使たちは、天にのぼられるのを弟子たちが見たその お方が、のぼって行かれたのと同じにふたたびこられることを保証したのであった。「彼は、雲に乗ってこられる。すべての人の目……は、彼を仰ぎ見るであろう」「主ご自身が天使の かしらの声と神のラッパの鳴り響くうちに、合図の声で、天から下ってこられる。その時、

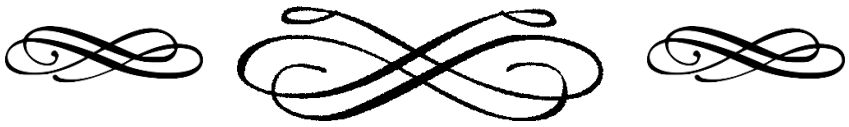
キリストにあって死んだ人々が、まず最初によみがえり」「人の子が栄光の中にすべての御使たちを従えて来るとき、彼はその栄光の座につくであろう」（黙示録 1：7、Ｉテサロニケ 4：16、マタイ 25：31）。こうして弟子たちに対する主ご自身の約束、「行って、場所の用意ができたならば、またきて、あなたがたをわたしのところに迎えよう。わたしのおる所にあなたがたもおらせるためである」とのみことばが成就するのである（ヨハネ 14：3）。主がふたたびこられるとの望みに弟子たちが喜んだのも当然であった。

弟子たちがエルサレムへ帰ると、人々は驚いて彼らを見た。キリストの裁判と十字架のあと、彼らは、落胆し恥じているだろうと思われていた。反対者たちは彼らの顔に悲しみと敗北の表情が見られるものと予期していた。ところが予想に反して、喜びと勝利だけがみられた。彼らの顔はこの世のものではない幸福に輝いていた。彼らは望みが裏切られたことを嘆かないで、神への賛美と感謝に満たされていた。彼らは大喜びで、キリストの復活と昇天についてのすばらしい話を語ったが、そのあかしは多くの人々に信じられた。　弟子たちは将来についてもはやなんの不安もなかった。イエスが天におられ、イエスの思いはいまも彼ら　と共にあることがわかっていた。彼らは神のみ座に友なるイエスがおられることを知り、イ　エスのみ名によって熱心に天父に願いごとをささげた。彼らは厳粛な畏敬の念をもって祈り、「あなたがたが父に求めるものはなんでも、わたしの名によって下さるであろう。今までは、あなたがたはわたしの名によって求めたことはなかった。求めなさい、そうすれば、与えられるであろう。そして、あなたがたの喜びが満ちあふれるであろう」との約束をくりかえした（ヨハネ　16：23、24）。彼らは、「キリスト・イエスは、死んで、否、よみがえって、神の右に座し、また、わたしたちのためにとりなして下さるのである」とのすばらしい論証　をもって、信仰の手をますます高くさしのべた（ローマ 8：34）。こうして、ペンテコステの時には、キリストが約束されたとおりに、助け主の臨在によってあふれるばかりの喜びが　与えられたのであった。

全天は救い主を天の宮廷に歓迎しようと待っていた。キリストは、のぼって行かれる時先頭に立たれ、主の復活の時に解放された多くのとりこが続いた。天の軍勢は、賛美と歓呼の叫びと天の歌をもって、喜びの行列につきそった。 彼らが神の都に近づくと、護衛の天使

たちが呼びかける。――「門よ、こうべをあげよ。とこしえの戸よ、あがれ。 栄光の王がはいられる」。 すると待っていた見張りの天使たちが再びの声をあげて応じる。――

「栄光の王とはだれか」。 彼らがこう言うのは、王がだれかを知っていないからではなく、称賛と賛美の答えを聞きたいからである。――「強く勇ましい主、戦いに勇ましい主である。 門よ、こうべをあげよ。とこしえの戸よ、あがれ。 栄光の王がはいられる」。

勝利の歌は天使たちのたてごとの調べとまじり、ついに天は喜びと賛美に満ちあふれているようにみえる。愛は勝利したのだ。失われたものはみいだされたのだ。「御座にいますかたと小羊とに、さんびと、ほまれと、栄光と、権力とが、世々限りなくあるように」とのべつたえる高らかな歌声が天にひびきわたる（黙示録 5：13）。 この天の喜びの光景から、「わたしは、わたしの父またあなたがたの父であって、わたしの神またあなたがたの神であられるかたのみもとへ上って行く」とのキリストご自身のすばらしいみことばの反響が地上のわれわれのもとに返ってくる（ヨハネ 20：17）。天の家族と地の家族は 1 つである。われわれのために主はのぼり、われわれのために主は生きておられる。「そこでまた、彼は、いつも生きていて彼らのためにとりなしておられるので、彼によって神に来る人々を、いつも救うことができるのである」（ヘブル 7：25）。

終わりを見越して